千葉市餅ヶ崎遺跡

－千葉市動物公園第Ⅰ期工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 －

2019

千 葉 市 教 育 委 員 会
千葉市埋蔵文化財調査センター

千葉市餅ヶ崎遺跡

－千葉市動物公園第Ⅰ期工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 －

2019

千 葉 市 教 育 委 員 会
千葉市埋蔵文化財調査センター

主な縄文土器

巻頭図版２

J-41-6

J-71-1

石棒・丸石

動物型突起

緑釉輪花椀

黒曜石　D-310 剥片類

例　言

１　本書は千葉市若葉区源町 280 他に所在する餅ヶ崎遺跡の発掘調査報告書である。

２　発掘調査は、千葉市が実施した千葉市動物公園の整備に伴い、千葉市教育委員会・財団法人千葉市文化財調査協会が実施した。本書には第１期工事に伴う昭和 50 年度から昭和 59 年度調査と、第３期工事に伴う平成６年度調査の成果を所収した。なお、第２期工事に伴う昭和 60 年度調査の成果については、昭和 63 年３月に報告書を刊行済みである。

３　整理作業は、千葉市公共事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の一貫として、平成 19 年度から財団法人千葉市文化財調査協会が実施し、千葉市埋蔵文化財調査センターが引き継いで実施した。担当者や事業内容については第１章第１節２に記載した。

５　本書の執筆は第２章と第６章１を尾崎沙羅、そのほかを西野雅人が行い、編集は西野雅人と武田芳雅が行った。ただし、遺物の分類・執筆に当たり以下の方々から御指導を得た。

第３章第１節～第３節・第５節（７）　加納実氏・小澤政彦氏（千葉県教育委員会）

第３章第５節（１）　峰村篤氏（松戸市教育委員会）

第３章第５節（８）（９）　菅谷通保（千葉市教育委員会）

６　動物骨の同定・分析にあたっては服部智至氏・小川慶一郎氏（千葉県教育振興財団）、旧石器と縄文石器については橋本勝雄氏（千葉県教育振興財団）、弥生時代から古代の土器については小林嵩氏（公益財団法人千葉市教育振興財団）、中・近世土器類については小高春雄氏（大多喜町教育委員会）より御指導いただいた。

７　出土資料及び調査記録等は千葉市埋蔵文化財調査センターで保管・管理する。

８　発掘調査から報告書刊行に至るまでに以下の諸機関・諸氏より御指導・御協力を賜った。

千葉県教育庁文化財課、千葉市公園建設課、國學院大學、明治大学、千葉大学、国立歴史民俗博物館、市原市教育委員会、小川慶一郎、小澤政彦、小高春雄、加納実、川端結花、小林嵩、田中英世、新田浩三、橋本勝雄、服部智至、峰村篤、山岡磨由子

凡　例

1　遺構番号は調査時の番号を変更しており、遺構索引表（第 1 表）に新旧番号の対照関係を示した。

2　遺構番号の先頭の記号は以下を示す。

　J：縄文時代住居跡、H：古代住居跡、D：土坑、F：炉穴、M：溝

3　掲載遺物及び動物遺体の基礎データは付表 2 ～ 5 とし DVD ディスクに収めた。付表 1 は掲載遺物全点の索引である。また、表 1 ～ 13、図版の写真データも併せて収録した。

4　遺跡及び報告書関連文献は第 1 章の末にまとめて掲載した。

5　遺構図の方位は座標北であり、標高は海抜高で表示した。

6　図の縮尺は各図に示した。遺物写真の縮尺は、旧石器が 2/3、他は不同である。

7　遺構・遺物実測図における網掛けは以下によるほか、適宜図上に凡例を示した。

本文目次

巻頭図版
例言
凡例
目次
第１章　餅ヶ崎遺跡の概要…… 1
　第１節　事業の概要…… 1
　　１　発掘調査の経緯…… 1
　　２　事業の経過と内容…… 1
　　３　調査と整理の方法…… 6
　第２節　遺跡の概要…… 7
　　１　遺跡の位置…… 7
　　２　周辺の地理と歴史的環境…… 7
　　３　調査成果の概要…… 11
第２章　旧石器時代…… 29
　第１節 概要 …… 29
　　１　調査区の設定…… 29
　　２　文化層…… 29
　第２節　文化層…… 30
　　１　第１文化層…… 30
　　２　第２文化層…… 30
　　３　第３文化層…… 38
　　４　第４文化層…… 52
　　５　第５文化層…… 57
　第３節　単独出土石器 (第 48・49 図・図版 10) …… 61
第３章　縄文時代…… 65
　第１節　住居跡…… 65
　第２節　埋設土器…… 231
　第３節　土坑…… 233
　　１　概要…… 233
　　２　陥し穴…… 233
　　３　土坑…… 246
　第４節　炉穴…… 324
　第５節　遺構外出土土器…… 330
　第６節　土器以外の遺物…… 355
　　１　土製品…… 355
　　２　石器・石製品…… 358
　　３　貝製品…… 374

第４章　弥生時代以降…… 379
第１節　弥生時代…… 379
第２節　古代…… 379
1　住居跡 …… 379
2　他の遺構…… 424
3　遺構外出土土器と土器以外の遺物…… 424
第３節　中・近世…… 431
1　概要…… 431
2　遺構…… 431
3　出土遺物…… 438
第５章　貝層と動物遺体…… 446
1　概要…… 446
2　貝層とサンプル…… 446
3　分析の方法…… 446
4　貝類…… 448
5　魚類・哺乳類…… 451
第６章　まとめ…… 453
1　旧石器時代…… 453
2　縄文時代…… 454
3　古代以降…… 462
写真図版
報告書抄録

挿図目次

第１図　遺跡範囲・現況…… 3
第２図　年度別調査区…… 4
第３図　確認トレンチ…… 5
第４図　基本土層図…… 7
第５図　周辺地形図…… 9
第６図　周辺遺跡分布図……10
第７図　調査全体図……15
第８図　遺構分布索引図……19
第９図　遺構分布 (1) ……20
第 10 図　遺構分布 (2) ……21
第 11 図　遺構分布 (3) ……22
第 12 図　遺構分布 (4) ……23
第 13 図　遺構分布 (5) ……24
第 14 図　遺構分布 (6) ……25
第 15 図　遺構分布 (7) ……26
第 16 図　遺構分布 (8) ……27
第 17 図　遺構分布 (9) ……28
第 18 図　餅ヶ崎遺跡旧石器ブロック位置図 ……31
第 19 図　第１文化層第１ブロック……32
第 20 図　第１文化層第２ブロック (1) ……33
第 21 図　第１文化層第２ブロック (2) ……33
第 22 図　第２文化層第３ブロック (1) ……35
第 23 図　第２文化層第３ブロツク (2) ……36
第 24 図　第２文化層第３ブロック (3) ……37
第 25 図　第２文化層第４ブロック……38
第 26 図　南西部石器集中部 石器ブロック分布図……39
第 27 図　第３文化層第５ブロック (1) ……40
第 28 図　第３文化層第５ブロック (2) ……41
第 29 図　第３文化層第６ブロック (1) ……42
第 30 図　第３文化層第６ブロック (2) ……43
第 31 図　第３文化層第７ブロック……45
第 32 図　第３文化層第８ブロック (1) ……46
第 33 図　第３文化層第８ブロック (2) ……47
第 34 図　第３文化層第９ブロック (1) ……48
第 35 図　第３文化層第９ブロック (2) ……49
第 36 図　第３文化層第９ブロック (3) ……50
第 37 図　第３文化層第 10 ブロック ……51
第 38 図　第４文化層石器ブロック分布図……53
第 39 図　第４文化層第 11 ブロック (1) ……54
第 40 図　第４文化層第 11 ブロック (2) ……55
第 41 図　第４文化層第 12 ブロック (1) ……56
第 42 図　第４文化層第 12 ブロック (2) ……57
第 43 図　第４文化層第 12 ブロック (3) ……58
第 44 図　第４文化層第 12 ブロック (4) ……59

第 45 図　第 4 文化層第 12 ブロック (5) ……60
第 46 図　第 5 文化層第 13 ブロック (1) ……61
第 47 図　第 5 文化層第 13 ブロック (2) ……62
第 48 図　単独出土石器 (1) ……63
第 49 図　単独出土石器 (2) ……64
第 50 図　J -1・J -2(1) ……66
第 51 図　J -2(2)・J -3(1) ……69
第 52 図　J -2(3) ……70
第 53 図　J -2(4)・J -3(2) ……71
第 54 図　J -3(3) ……73
第 55 図　J -4(1)・J -5(1) ……75
第 56 図　J -4(2)・J -5(2) ……76
第 57 図　J -6(1) ……78
第 58 図　J -6(2) ……79
第 59 図　J -7(1) ……80
第 60 図　J -7(2) ……81
第 61 図　J -7(3) ……82
第 62 図　J -7(4)・J -8(1) ……83
第 63 図　J -8(2)・J -9(1) ……85
第 64 図　J -8(3)・J -9(2) ……86
第 65 図　J -9(3)・J -10(1)……88
第 66 図　J -10(2)・J -11(1) ……89
第 67 図　J -10(3) ……90
第 68 図　J -11(2) ……91
第 69 図　J -12(1) ……93
第 70 図　J -12(2) ……94
第 71 図　J -12(3) ……95
第 72 図　J -12(4) ……96
第 73 図　J -12(5) ……97
第 74 図　J -12(6) ……98
第 75 図　J -12(7) ……99
第 76 図　J -12(8) …… 100
第 77 図　J -13(1)・J -14(1) …… 101
第 78 図　J -13(2)・J -14(2) …… 102
第 79 図　J -15(1)・J -16(1) …… 104
第 80 図　J -15(2)・J -16(2) …… 105
第 81 図　J -17(1)・J -18(1) …… 106
第 82 図　J -17(2) …… 107
第 83 図　J -18(2) …… 108
第 84 図　J -18(3) …… 109
第 85 図　J -18(4) …… 110
第 86 図　J -18(5) …… 111
第 87 図　J -19(1)・J -20(1) …… 113
第 88 図　J -19(2)・J -20(2) …… 114
第 89 図　J -21・J -23・J -26(1)…… 115
第 90 図　J -22 …… 117
第 91 図　J -24(1)・J -25(1)・J -27(1) …… 118
第 92 図　J -24(2)・J -25(2)・J -26(2) …… 119
第 93 図　J -27(2) …… 120
第 94 図　J -28(1)・J -30(1) …… 122
第 95 図　J -28(2)・J -29(1)・J -30(2) …… 123
第 96 図　J -29(2)・J -31(1) …… 124
第 97 図　J -31(2) …… 125
第 98 図　J -32(1) …… 126
第 99 図　J -32(2) …… 128
第 100 図　J -32(3) …… 129
第 101 図　J -32(4)・J -34(1) …… 130
第 102 図　J -33・J -35(1)…… 132
第 103 図　J -34(2) …… 133
第 104 図　J -34(3)・J -35(2) …… 134
第 105 図　J -36(1)・J -37(1) …… 135
第 106 図　J -36(2) …… 137
第 107 図　J -36(3)・J -37(2) …… 138
第 108 図　J -37(3) …… 139
第 109 図　J -38(1)・J -39(1) …… 140
第 110 図　J -38(2) …… 142
第 111 図　J -38(3) …… 143
第 112 図　J -38(4) …… 144
第 113 図　J -38(5)・J -39(2) …… 145
第 114 図　J -40(1)・J -42(1) …… 147
第 115 図　J -39(3)・J -40(2) …… 148
第 116 図　J -41(1) …… 149
第 117 図　J -41(2) …… 150
第 118 図　J -41(3)・J -42(2) …… 151
第 119 図　J -43(1) …… 152
第 120 図　J -42(3)・J -43(2) …… 153
第 121 図　J -43(3) …… 154
第 122 図　J -44(1)・J -45(1) …… 156
第 123 図　J -44(2) …… 157
第 124 図　J -44(3) …… 158
第 125 図　J -46(1)・J -47(1) …… 159
第 126 図　J -46(2)・J -47(2) …… 160
第 127 図　J -45(2)・J -46(3) …… 162
第 128 図　J -46(4)・J -46.47・J -47(3) …… 163
第 129 図　J -48(1)・J -49(1)・J 50-(1)・J -51(1)
…… 165
第 130 図　J -48(2)・J -49(2)・J 50-(2)・J -51(2)
…… 166
第 131 図　J -48(3) …… 168
第 132 図　J -49(3) …… 169
第 133 図　J -50(3)・J -51(3) …… 170
第 134 図　J -52(1)・J -53(1) …… 172
第 135 図　J -52(2) …… 173
第 136 図　J -52(3)・J -53(2) …… 174
第 137 図　J -54(1) …… 175
第 138 図　J -54(2) …… 176
第 139 図　J -54(3) …… 177
第 140 図　J -55(1) …… 179
第 141 図　J -55(2) …… 181
第 142 図　J -56(1)・J -57(1) …… 182
第 143 図　J -55(3)・J -56(2)・J -57(2)・J -58(1)183
第 144 図　J -58(2)・J -61(1) …… 185
第 145 図　J -59(1)・J -60(1) …… 186
第 146 図　J -59(2)・J -60(2) …… 187
第 147 図　J -59(3) …… 188
第 148 図　J -59.60・J -60(3) …… 189
第 149 図　J -62(1)・J -63(1)・J -64(1)…… 191
第 150 図　J -63(2)・J -64(2) …… 192
第 151 図　J -61(2)・J -62(2) …… 193
第 152 図　J -62(3)・J -63(3) …… 194
第 153 図　J -65(1)・J -66(1) …… 196
第 154 図　J -64(3)・J -65(2) …… 197

第 155 図　J -65(3)・J -66(2) …… 198
第 156 図　J -66(3)・J -67(1) …… 200
第 157 図　J -67(2)・J -68(1) …… 201
第 158 図　J -68(2) …… 202
第 159 図　J -69(1)・J -70(1) …… 203
第 160 図　J -69(2) …… 204
第 161 図　J -69(3)・J -70(2)・J -71(1)…… 205
第 162 図　J -71(2)・J -72(1) …… 206
第 163 図　J -72(2)・J -73(1)…… 208
第 164 図　J -72(3)・J -73(2) …… 209
第 165 図　J -73(3)・J -74(1) …… 210
第 166 図　J -74(2) …… 211
第 167 図　J -74(3)・J -75(1) …… 212
第 168 図　J -75(2)・J -76(1) …… 213
第 169 図　J -75(3)・J -76(2)・J -77(1)…… 214
第 170 図　J -75(4)・J -75.76(1)・J -77(2) …… 215
第 171 図　J -78(1)・J -79(1) …… 217
第 172 図　J -78(2)・J -79(2) …… 218
第 173 図　J -79(3) …… 219
第 174 図　J -79(4) …… 220
第 175 図　J -80(1)・J -83(1) …… 222
第 176 図　J -81(1)・J -82(1) …… 223
第 177 図　J -80(2)・J -81(2)・J -81.82・J -83(2)
…… 224
第 178 図　J -84(1) …… 226
第 179 図　J -84(2) …… 227
第 180 図　J -84(3) …… 228
第 181 図　J -85(1) …… 229
第 182 図　J -85(2) …… 230
第 183 図　埋設土器 (1)…… 231
第 184 図　埋設土器 (2)…… 232
第 185 図　陥し穴分布図 …… 241
第 186 図　陥し穴 (1)…… 242
第 187 図　陥し穴 (2)…… 243
第 188 図　陥し穴 (3)…… 244
第 189 図　陥し穴 (4)…… 245
第 190 図　陥し穴 (5)…… 246
第 191 図　陥し穴出土遺物 …… 247
第 192 図　土坑分布図 …… 250
第 193 図　土坑 (1)D-5 ～ …… 251
第 194 図　土坑 (2)D-34 ～ …… 252
第 195 図　土坑 (3)D-36・D-47 貝層…… 253
第 196 図　土坑 (4)D-60 ～ …… 254
第 197 図　土坑 (5)D-76・D-79.80 遺物分布 …… 255
第 198 図　土坑 (6) 土器 D-23 ～…… 256
第 199 図　土坑 (7) 土器 D-61 ～…… 257
第 200 図　土坑 (8) 土器 D-76 ～…… 258
第 201 図　土坑 (9)D-83 ～ …… 259
第 202 図　土坑 (10)D-88・D-89 貝層・遺物分布 … 261
第 203 図　土坑 (11) 土器 D-79 ～ …… 262
第 204 図　土坑 (12) 土器 D-89 ～ …… 263
第 205 図　土坑 (13)D-108 ～ …… 264
第 206 図　土坑 (14)D-121 貝層 …… 265
第 207 図　土坑 (15)D-141 ～ …… 266
第 208 図　土坑 (16)D-169 ～ …… 267
第 209 図　土坑 (17) 土器 D-104 ～ …… 268
第 210 図　土坑 (18) 土器 D-179 ～ …… 269
第 211 図　土坑 (19) 土器 D-182 ～ …… 271
第 212 図　土坑 (20)D-195 ～ …… 272
第 213 図　土坑 (21)D-190・D-206・D-215
貝層・遺物分布 …… 273
第 214 図　土坑 (22) 土器 D-197 ～ …… 274
第 215 図　土坑 (23)D-216 ～ …… 276
第 216 図　土坑 (24)D-237 ～ …… 278
第 217 図　土坑 (25) 土器 D-235 ～ …… 279
第 218 図　土坑 (26)D-257 ～ …… 281
第 219 図　土坑 (27) 土器 D-250 ～ …… 282
第 220 図　土坑 (28) 土器 D-271 ～ …… 283
第 221 図　土坑 (29)D-277 ～ …… 284
第 222 図　土坑 (30)D-271・D-291・D-292.293・D-299
貝層・遺物分布 …… 285
第 223 図　土坑 (31) 土器 D-277 …… 286
第 224 図　土坑 (32) 土器 D-278 ～ …… 287
第 225 図　土坑 (33) 土器 D-293 …… 288
第 226 図　土坑 (34)D-298 ～ …… 290
第 227 図　土坑 (35)D-319 ～ …… 291
第 228 図　土坑 (36)D-308・D-310・D-340・D-433
貝層・遺物分布 …… 292
第 229 図　土坑 (37) 土器 D-295 ～ …… 294
第 230 図　土坑 (38) 土器 D-330 ～ …… 295
第 231 図　土坑 (39) 土器 D-340(1) …… 296
第 232 図　土坑 (40) 土器 D-340(2) …… 297
第 233 図　土坑 (41)D-342 ～ …… 298
第 234 図　土坑 (42)D-351・D-361.362・D-365
貝層・遺物分布 …… 300
第 235 図　土坑 (43) 土器 D-346 ～ …… 301
第 236 図　土坑 (44) 土器 D-357 ～ …… 303
第 237 図　土坑 (45)D-365 ～ …… 304
第 238 図　土坑 (46) 土器 D-366 ～ …… 305
第 239 図　土坑 (47) 土器 D-373 ～ …… 307
第 240 図　土坑 (48) 土器 D-380(1) …… 308
第 241 図　土坑 (49) 土器 D-380(2) ～ …… 309
第 242 図　土坑 (50)D-389 ～ …… 310
第 243 図　土坑 (51)D-380・D-383・D-386
貝層・遺物分布 …… 311
第 244 図　土坑 (52)D-389・D-393 貝層…… 313
第 245 図　土坑 (53)D-395 貝層 …… 314
第 246 図　土坑 (54)D-404 ～ …… 315
第 247 図　土坑 (55)D-414・D-418・D-422
貝層・遺物分布 …… 316
第 248 図　土坑 (56) 土器 D-386 ～ …… 317
第 249 図　土坑 (57) 土器 D-396 ～ …… 318
第 250 図　土坑 (58) 土器 D-418 …… 320
第 251 図　土坑 (59) 土器 D-422(1) …… 321
第 252 図　土坑 (60)D-426 ～ …… 322
第 253 図　土坑 (61) 土器 D-422(2) ～ …… 323
第 254 図　炉穴分布図 …… 325
第 255 図　炉穴 (1)…… 326
第 256 図　炉穴 (2)…… 327
第 257 図　炉穴 (3) …… 328
第 258 図　炉穴 (4) …… 329

第 259 図　炉穴出土遺物 …… 330
第 260 図　遺構外土器 (1) 第 1 群 …… 335
第 261 図　遺構外土器 (2) 第 1 群 …… 336
第 262 図　遺構外土器 (3) 第 1 群 …… 337
第 263 図　遺構外土器 (4) 第 1 群 …… 338
第 264 図　遺構外土器 (5) 第 1 群 …… 339
第 265 図　遺構外土器 (6) 第 1 群 …… 340
第 266 図　遺構外土器 (7) 第 1 群 …… 341
第 267 図　遺構外土器 (8) 第 1 群 …… 342
第 268 図　遺構外土器 (9) 第 1 群 …… 343
第 269 図　遺構外土器 (10) 第 1 群 …… 344
第 270 図　遺構外土器 (11) 第 2 群～第 6 群 …… 345
第 271 図　遺構外土器 (12) 第 7 群 …… 347
第 272 図　遺構外土器 (13) 第 7 群 …… 348
第 273 図　遺構外土器 (14) 第 8 群・第 9 群 …… 349
第 274 図　遺構外土器 (15) 第 9 群 …… 350
第 275 図　遺構外土器 (16) 第 9 群 …… 351
第 276 図　遺構外土器 (17) 第 9 群 …… 352
第 277 図　遺構外土器 (18) 第 9 群 …… 353
第 278 図　土製品 (1) …… 356
第 279 図　土製品 (2) …… 357
第 280 図　土製品 (3) …… 359
第 281 図　磨製石斧 (1) …… 361
第 282 図　磨製石斧 (2) …… 362
第 283 図　打製石斧 (1) …… 363
第 284 図　打製石斧 (2) …… 364
第 285 図　打製石斧 (3) …… 365
第 286 図　磨石類 (1) …… 366
第 287 図　磨石類 (2) …… 368
第 288 図　砥石 …… 369
第 289 図　石皿・台石 (1) …… 370
第 290 図　石皿・台石 (2) …… 371
第 291 図　石鏃 …… 372
第 292 図　他の剥片石器 …… 373
第 293 図　軽石製品 (1) …… 375
第 294 図　軽石製品 (2) …… 376
第 295 図　玉 …… 376
第 296 図　石棒 (1) …… 377
第 297 図　石棒 (2) …… 378
第 298 図　貝製品 …… 378
第 299 図　弥生土時代遺構外出土土器 …… 379
第 300 図　古代遺構分布図 …… 381
第 301 図　H-1・H-2 …… 383
第 302 図　H-3 …… 384
第 303 図　住居出土土器　H-1 ～ H-4 …… 385
第 304 図　H-4・H-5 …… 386
第 305 図　H-6・H-7 …… 387
第 306 図　H-8 …… 388
第 307 図　住居出土土器　H-4 ～ H-8 …… 389
第 308 図　H-9・H-10 …… 390
第 309 図　住居出土土器　H-8・H-9 …… 391
第 310 図　住居出土土器　H-9 ～ H-12 …… 392
第 311 図　H-11 …… 393
第 312 図　H-12 …… 394
第 313 図　H-13 …… 395
第 314 図　住居出土土器　H-12・H-13 …… 396
第 315 図　住居出土土器　H-13・H-14 …… 397
第 316 図　H-14 …… 398
第 317 図　H-15 …… 399
第 318 図　H-16 …… 400
第 319 図　H-17 …… 401
第 320 図　H-18・H-19 …… 402
第 321 図　住居出土土器　H-15 ～ H-19 …… 403
第 322 図　H-20(1) …… 405
第 323 図　H-20(2) …… 406
第 324 図　H-20(3) …… 407
第 325 図　H-21 …… 407
第 326 図　H-22 …… 408
第 327 図　H-23 …… 409
第 328 図　H-24 …… 410
第 329 図　住居出土土器　H-20 ～ H-24 …… 411
第 330 図　住居出土土器　H-24 ～ H-27 …… 412
第 331 図　H-25 …… 413
第 332 図　H-26 …… 414
第 333 図　H-27 …… 415
第 334 図　H-28 …… 416
第 335 図　H-29 …… 417
第 336 図　H-30 …… 418
第 337 図　住居出土土器　H-27 ～ H-30 …… 419
第 338 図　H-31(1) …… 420
第 339 図　H-31(2) …… 421
第 340 図　H-32 …… 422
第 341 図　H-33 …… 423
第 342 図　古代土坑 …… 425
第 343 図　方形周溝状遺構 …… 426
第 344 図　遺構外出土古代土器 (1) …… 427
第 345 図　遺構外出土古代土器 (2) …… 428
第 346 図　鉄製品 (1) …… 429
第 347 図　鉄製品 (2)・土製品 …… 430
第 348 図　中・近世遺構分布図 …… 433
第 349 図　中・近世溝 (1) …… 434
第 350 図　中・近世溝 (2) …… 435
第 351 図　中・近世溝 (3) …… 436
第 352 図　中・近世土坑 (1) …… 437
第 353 図　中・近世土坑 (2) …… 438
第 354 図　中・近世土器 (1) …… 439
第 355 図　中・近世土器 (2) …… 439
第 356 図　中・近世土器 (3) …… 440
第 357 図　中・近世石器 (1) …… 441
第 358 図　中・近世石器 (2) …… 442
第 359 図　中・近世石器 (3) …… 443
第 360 図　銭貨 (1) …… 444
第 361 図　銭貨 (2) …… 445
第 362 図　遺構内貝層分布図 …… 449
第 363 図　縄文時代中・後期分布図 …… 455
第 364 図　加曽利ＥⅠ・ＥⅡ式期の集落分布 …… 458
第 365 図　集落分布の変化 …… 459
第 366 図　貝類組成の比較 …… 463
第 367 図　貝類計測値の比較 …… 464

表目次

第１表　遺構索引…… 16
第２表　縄文時代住居跡 …… 67
第３表　縄文時代土坑…… 234
第４表　炉穴 …… 324
第５表　剥片石器の集中例 …… 373
第６表　古代住居跡 …… 380
第７表　古代土坑・方形周溝状遺構 …… 380
第８表　中近世遺構 …… 432
第９表　貝層一覧 …… 447
第 10 表　貝サンプル一覧 …… 450
第 11 表　貝類種名一覧 …… 450
第 12 表　貝種組成 …… 451
第 13 表　貝類計測値分布 …… 452

写真図版目次

巻頭図版１　縄文土器集合写真
　Ｊ -41・Ｊ -71 出土土器
巻頭図版２　石棒・鳥頭突起・D-310 剥片類・
　緑釉輪花椀
図版１　空中写真（１）
図版２　空中写真（２）
図版３　空中写真（３）
図版４　空中写真（４）
図版５　空中写真（５）・調査風景（１）
図版６　調査風景（２）
図版７　旧石器（１）
図版８　旧石器（２）
図版９　旧石器（３）
図版 10　旧石器（４）
図版 11　縄文時代住居跡（１）　Ｊ - ２～
図版 12　縄文時代住居跡（２）　Ｊ - ６～
図版 13　縄文時代住居跡（３）　Ｊ -10 ～
図版 14　縄文時代住居跡（４）　Ｊ -14 ～
図版 15　縄文時代住居跡（５）　Ｊ -19 ～
図版 16　縄文時代住居跡（６）　Ｊ -31 ～
図版 17　縄文時代住居跡（７）　Ｊ -38 ～
図版 18　縄文時代住居跡（８）　Ｊ -43 ～
図版 19　縄文時代住居跡（９）　Ｊ -50 ～
図版 20　縄文時代住居跡（10）　Ｊ -56 ～
図版 21　縄文時代住居跡（11）　Ｊ -62 ～
図版 22　縄文時代住居跡（12）　Ｊ -72 ～
図版 23　縄文時代住居跡（13）　Ｊ -79 ～
図版 24　縄文時代埋設土器・陥し穴
図版 25　縄文時代土坑（１）　D-30 ～
図版 26　縄文時代土坑（２）　D-91 ～
図版 27　縄文時代土坑（３）　D-190 ～
図版 28　縄文時代土坑（４）　D-269 ～
図版 29　縄文時代土坑（５）　D-308 ～
図版 30　縄文時代土坑（６）　D-361 ～
図版 31　縄文時代土坑（７）　D-393 ～
図版 32　炉穴（１）
図版 33　炉穴（２）
図版 34　奈良・平安時代住居跡（１）　H- １～
図版 35　奈良・平安時代住居跡（２）　H- ８～
図版 36　奈良・平安時代住居跡（３）　H-14 ～
図版 37　奈良・平安時代住居跡（４）　H-22 ～
図版 38　奈良・平安時代住居跡（５）　H-28 ～
図版 39　中・近世溝
図版 40　中・近世土坑
図版 41　住居跡出土縄文土器（１）
図版 42　住居跡出土縄文土器（２）
図版 43　住居跡出土縄文土器（３）
図版 44　住居跡出土縄文土器（４）
図版 45　住居跡出土縄文土器（５）
図版 46　住居跡出土縄文土器（６）
図版 47　住居跡出土縄文土器（７）・埋設土器・
　土坑出土縄文土器（１）
図版 48　土坑出土縄文土器（２）
図版 49　遺構外出土縄文土器（１）
図版 50　遺構外出土縄文土器（２）
図版 51　遺構外出土縄文土器（３）
図版 52　土製品
図版 53　石器・石製品（１）
図版 54　石器・石製品（２）
図版 55　石器・石製品（３）
図版 56　石器・石製品（４）
図版 57　石器・石製品（５）
図版 58　弥生土器・古代出土土器（１）
図版 59　古代出土土器（２）
図版 60　古代出土土器（３）
図版 61　古代出土土器（４）
図版 62　古代土器　土坑・古代土器
　遺構外・古代　墨書赤外線・古代　土製品
図版 63　掲載資料・未掲載（１）
図版 64　未掲載（２）・砥石・銭貨

第１章　餅ヶ崎遺跡の概要

第１節　事業の概要

１　発掘調査の経緯

昭和 45（1970）年、千葉市議会に動物園設置要望が提出され、昭和 47（1972）年に計画予定地として餅ヶ崎遺跡の所在する千葉市源町の一画が選定された。これを受け、千葉市教育委員会社会教育課（当時）は２か年で詳細分布調査を実施した。事業地のうち台地上全域が埋蔵文化財包蔵地であった。事業主体の農政緑化部公園課（当時）と取扱いや工法等について協議を行った結果、施工に際して保護層が確保できる「家畜の原種ゾーン」と「小動物ゾーン」（第１図）の一部を現状保存とし、それ以外は記録保存の措置を講ずることとなった。発掘調査は、対象面積 140,000㎡の第１期工事分について、昭和 50（1975）年度から昭和 59（1984）年度に実施した。本調査面積は 67,000㎡である。第２期工事分（北東部草原ゾーン）の 6,130㎡は昭和 60（1985）年度に本調査を実施し、すでに報告書が刊行されている。また、平成６（1994）年度には第１期・第２期工事の範囲外の 1,500㎡の確認調査を実施し、確認調査のみで終了した。

造成工事は、昭和 54 年の都市計画事業認可を受け、発掘調査と並行して実施され、昭和 60 年４月に千葉市動物公園として一次開園した。昭和 63 年３月には千葉都市モノレールが開通、最寄り駅となる動物公園駅が開業し、同年４月に全体が開園した。その後、平成３年には遊園地が併設され、公園面積 339,722㎡の造成工事が終了した（図版２下・第１図）。モノレールと遊園地は低地の包蔵地外に建設されたものである。レッサーパンダの「風太」やハシビロコウ、フクロテナガザルなど話題も多く、年間入場者数は 676,899 人（平成 28 年度）と多くの人に親しまれている。いっぽうで老朽化した施設も多く近年リスタート構想の一貫としてライオン舎等の新築工事が行われた。旧「家畜の原種ゾーン」の保存協議範囲について再度試掘をしたところ、遺構・遺物とも検出されなかったことから慎重工事（調査不要）の扱いとした。残りの保存措置範囲も遺構分布のきわめて希薄な部分であり、餅ヶ崎遺跡はほぼ全面を調査したといえる。

２　事業の経過と内容

各年度における調査の内容は以下のとおりである。第２図に既報告分も含めた年度ごとの調査区を示した。第３図には確認調査トレンチの位置を示した。全体として 9.2ha の本調査を実施している。

（１）詳細分布調査

昭和 47（1972）・48（1973）年度

事業地全体を含む包蔵地の範囲を確認するため現地踏査を実施した。縄文土器や土師器等が台地上の広範囲に散布していることが確認され、当初は散布の濃い部分に５つの遺跡名を付けた。後年の確認調査によって遺構・遺物の分布はさらに広がりをもち、連続していることから、台地上のほぼ全面を餅ヶ崎遺跡として括っている。

（２）第１期工事に伴う発掘調査

調査主体は、昭和 50 年度から 59 年度にかけては千葉市教育委員会、60 年度は財団法人千葉市文化財調査協会である。まず昭和 50・53 年度に確認調査を行い、調査と工事の工程を協議した。昭和 54 年度には対象面積 140,000㎡の確認調査を終え（第３図）、本調査は昭和 54 年度から 60 年度まで継続的に実施した。工事は 54 年度に遺跡範囲外の谷部分から着手、本調査区域については調査が終了した部分か

ら随時実施された。

昭和 50（1975）年度　遺跡限界確認調査 250㎡

期間　昭和 51 年 1 月 26 日～ 2 月 10 日

担当　武田宗久

昭和 53（1978）年度　確認調査 2,000㎡（図版 5）

期間　昭和 53 年 8 月 2 日～ 10 月 31 日

担当　山本勇・矢沢良光

昭和 54（1979）年度　確認調査 4,000㎡ /20,000㎡、本調査 3,000㎡

期間　①昭和 54 年 7 月 2 日～ 11 月 30 日（確認調査・第 3 図）

②昭和 54 年 12 月 3 日～昭和 55 年 3 月 31 日

担当　山本勇・青沼道文・佐藤順一・川端弘士

昭和 55（1980）年度　本調査 8,000㎡（図版 5）

期間　昭和 55 年 4 月 7 日～昭和 56 年 3 月 31 日

担当　青沼道文・佐藤順一・川端弘士

昭和 56（1981）年度　本調査 9,000㎡（図版 5 ・ 6）

期間　昭和 56 年 4 月 1 日～ 9 月 30 日

担当　山本勇・青沼道文・村田六郎太・佐藤順一・飛田正美

昭和 57（1982）年度（図版 3 ・ 4 ・ 6）

期間　①昭和 57 年 4 月 1 日～昭和 57 年 9 月 30 日　確認調査 500/3,500㎡

②昭和 57 年 4 月 1 日～昭和 57 年 9 月 30 日　本調査 15,500㎡

③昭和 57 年 10 月 1 日～昭和 58 年 3 月 31 日　本調査 3,400㎡

④昭和 57 年 4 月 1 日～昭和 58 年 3 月 31 日　本調査 18,000㎡

担当　山本勇・村田六郎太・佐藤順一・飛田正美

昭和 58（1983）年度　本調査 26,000㎡（図版 6）

期間　昭和 58 年 4 月 1 日～昭和 59 年 3 月 31 日

担当　青沼道文・佐藤順一・湖口淳一・飛田正美

昭和 59（1984）年度　本調査 9,890㎡（図版 6）

期間　昭和 59 年 4 月 1 日～ 12 月 31 日

担当　飛田正美

（3）第 2 期工事に伴う発掘調査

調査主体は財団法人千葉市文化財調査協会である。

昭和 60（1985）年度　本調査 6,130㎡

期間　昭和 61 年 1 月 6 日～ 3 月 3 日

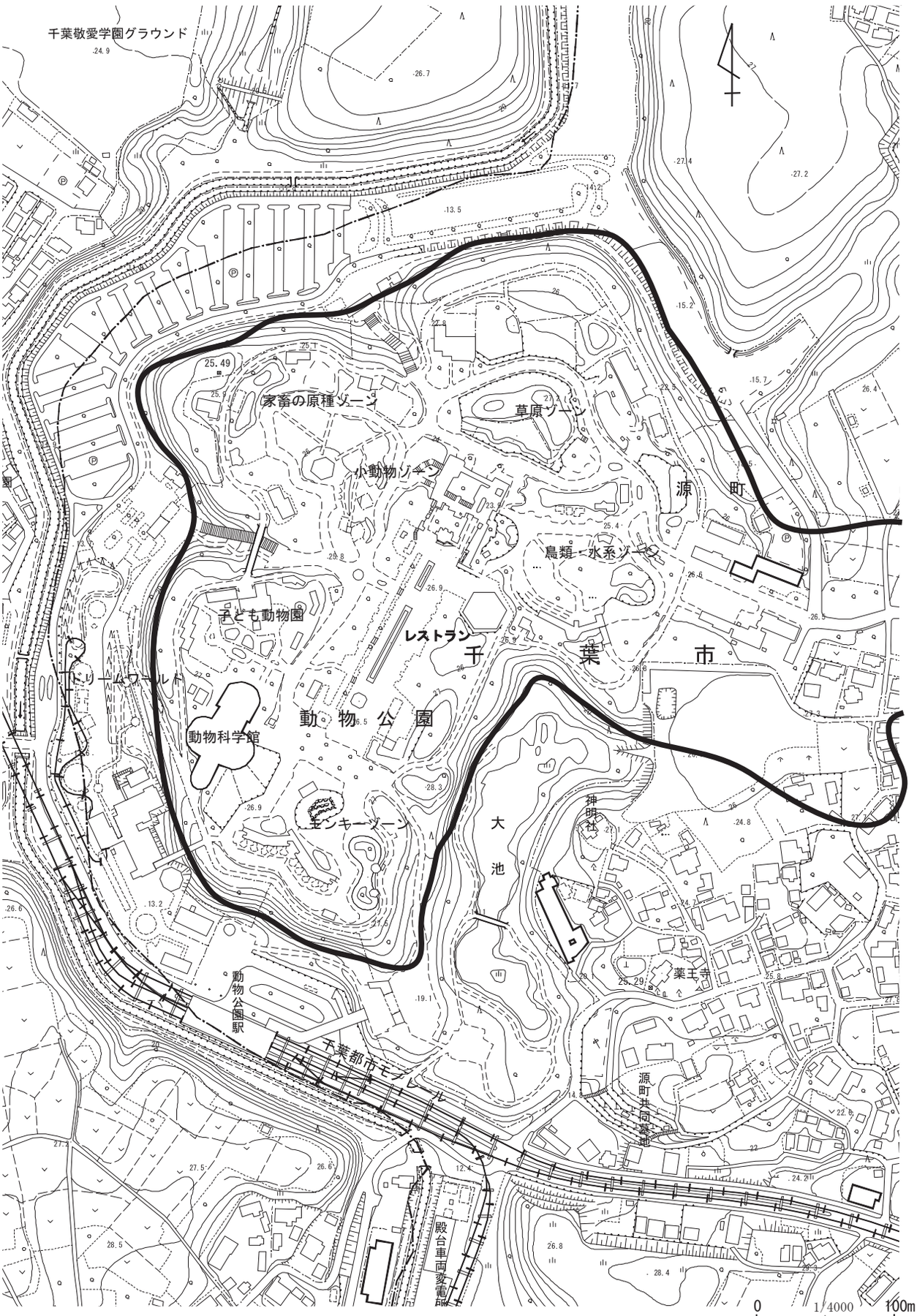
担当　湖口淳一・簗瀬裕一

（4）第 3 期工事に伴う発掘調査

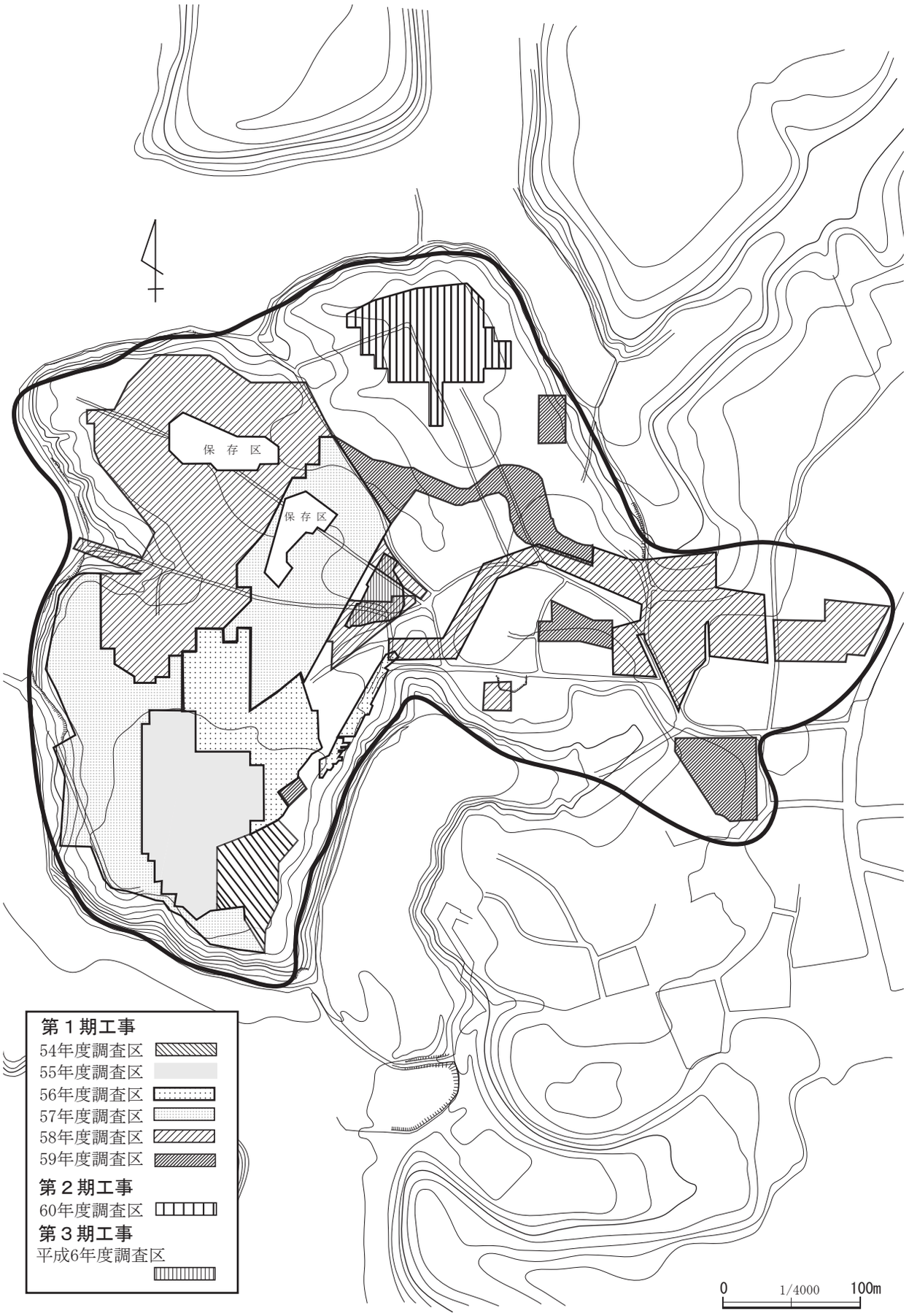
第 1 期・第 2 期工事の対象範囲外の 1,500㎡（第 1 図のレストラン南西部）について確認調査を実施。確認調査のみで終了した。

平成 6（1994）年度　確認調査 133㎡ /1,500㎡

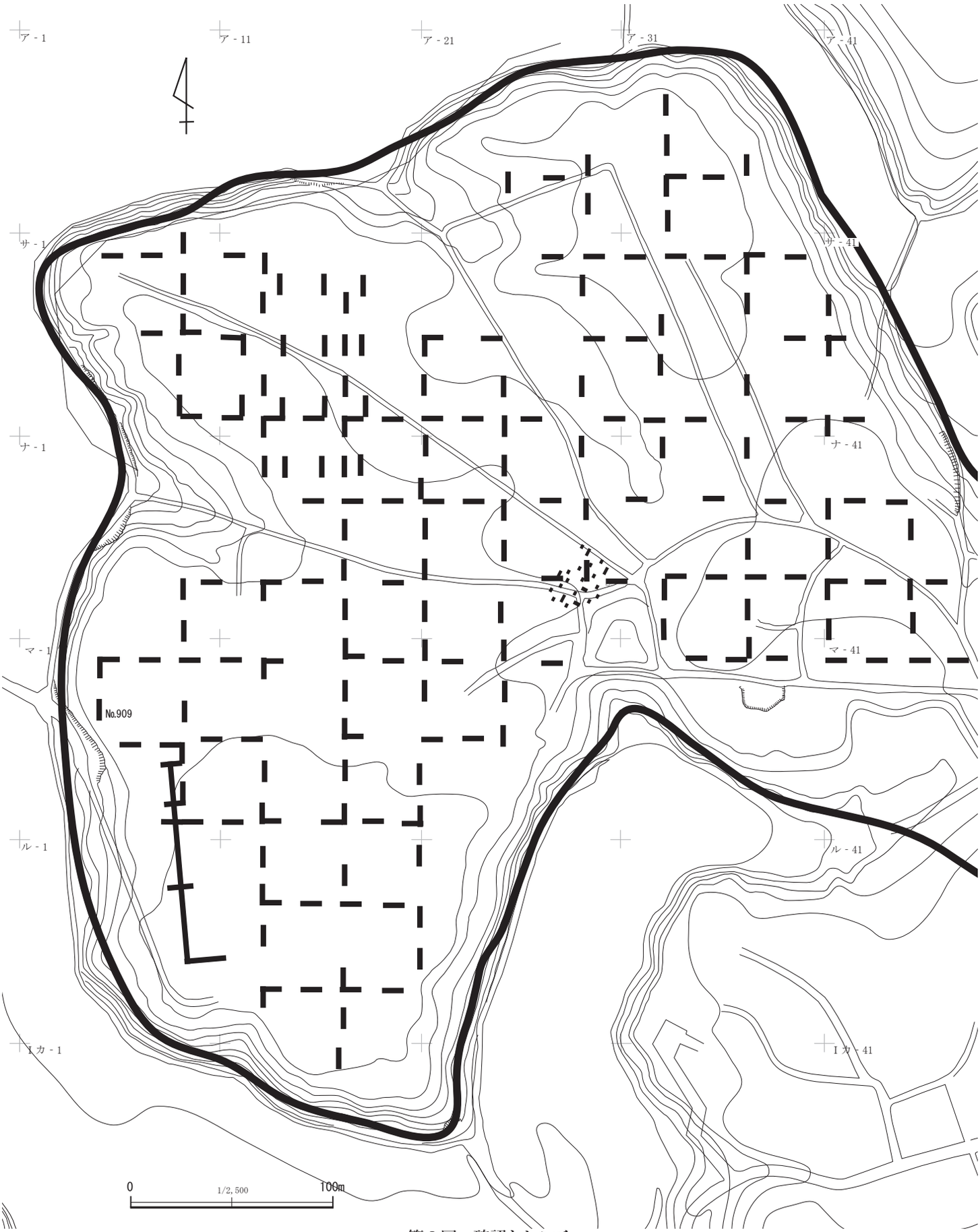
期間　平成 7 年 3 月 1 日～ 3 月 9 日


千葉敬愛学園グラウンド
家畜の原種ゾーン
草原ゾーン
小動物ゾーン
鳥類・水系ゾーン
源町
千葉市
子ども動物園
レストラン
ドリームワールド
動物公園
動物科学館
モンキーゾーン
大池
神明社
薬王寺
動物公園駅
千葉都市モノレール
源町共同墓地
殿台車両変電所
0
1/4000
100m

第1図　遺跡範囲・現況


保 存 区
保 存 区
第１期工事
54年度調査区
55年度調査区
56年度調査区
57年度調査区
58年度調査区
59年度調査区
第２期工事
60年度調査区
第３期工事
平成6年度調査区
0
1/4000
100m

第２図　年度別調査区


ア - 1
ア - 11
ア - 21
ア - 31
ア - 41
サ - 1
サ - 41
ナ - 1
ナ - 41
マ - 1
マ - 41
№909
ル - 1
ル - 41
Ｉカ - 1
Ｉカ - 41
0
1/2,500
100m

第３図　確認トレンチ

担当　青沼道文・小澤清男

（5）第2期工事分の整理作業（既報告）

昭和 63（1988）年度

基礎整理～報告書刊行（田中・簗瀬他 1988）

期間　昭和 63 年 1 月 11 日～ 2 月 29 日

担当　村田六郎太・田中英世・簗瀬裕一

（6）第1期・第3期工事分の整理作業

事業主体は千葉市教育委員会（～ 59 年度）、財団法人千葉市文化財調査協会（昭和 60 年度～平成 23 年度）、千葉市埋蔵文化財調査センター（平成 24 年度～）。

昭和 57（1982）年度～昭和 60（1985）年度

水洗・注記、記録整理（発掘調査と並行）

期間　昭和 57 年 4 月 1 日～昭和 60 年 3 月 31 日

担当　青沼道文・村田六郎太・佐藤順一・湖口淳一・飛田正美

平成 19（2007）年度～平成 28（2016）年度

分類から挿図作成一部（他事業と並行）

期間　平成 19 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日

担当　湖口淳一・菊池健一・田中英世・簗瀬裕一

平成 29（2017）年度

実測・トレース～挿図・図版作成一部、原稿執筆

期間　平成 29 年 4 月 1 日～平成 31 年 3 月 31 日

担当　西野雅人・尾崎沙羅

平成 30（2018）年度

編集・報告書刊行・収納用整理

担当　西野雅人・香川一歩

3　調査と整理の方法

（1）調査区の設定

昭和 53 年度の確認調査で 40 m方眼のグリッドを設定した。本調査に着手した昭和 54 年度以降は従来の 40 m方眼を 10 m方眼に区分し、東から西へ１・２・・、北から南ア・イ・・ヲ・Ｉア・Ｉイ・・と呼称した。また本調査を実施した部分は 10 m方眼をさらに 4 つに細分しａ～ｄとした（第 7 図）。

（2）基本層序（第4図）

餅ヶ崎遺跡の発掘調査は当時の分層基準に従って行われており、残された層位情報は現在の分層基準とは異なっている。現在一般的とされている層序との厳密な対比は難しいが、層序に関する記載や写真などから概ね以下のように判断した。なお、括弧内の数字は当時の層序である。

Ⅰ層（Ⅰ）　表土層　褐色でしまりなく、粘性やや有り。

Ⅱａ層（Ⅱ）　明褐色土　褐色土混じる。しまり、粘性ともにあり。

Ⅱｂ層（Ⅲ）　暗～明褐土　明褐色の斑紋有り、しまり、粘性あり。

Ⅱｃ層（Ⅳ）　軟質暗黄褐色土　ソフトロームへの漸移層。縄文時代早期の遺物包含層。上層から下層へ褐色→灰褐色→黄褐色に移り変わる。

Ⅲ層（Ⅴ）　黄褐色軟質ローム層　ソフトローム層。粘土質でしまり有り。

Ⅳ～Ⅴ層（Ⅵ）　黄褐色硬質ローム層　ハードロームへの漸移層。クラックが発達し、やや暗い 色調である。

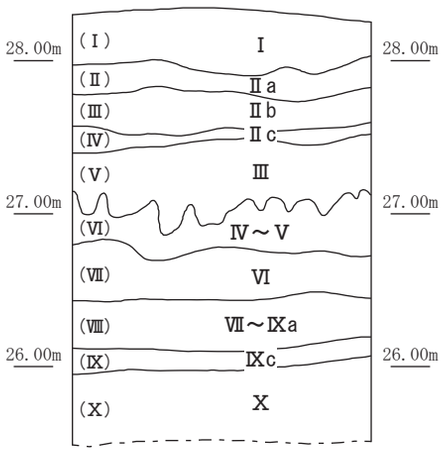
Ⅵ層（Ⅶ）　黄褐色硬質ローム層　ハードローム層。明るい色調で、鉱物の粒子が混入する（オレンジ スコリア、黒灰緑の粒子多い）。厚く記録されている地点もあり、上下の層を含んでいる可能性がある。

Ⅶ～Ⅸａ層（Ⅷ）　暗黄褐色ローム層　非常に硬い粘土で鉱物斑多い。地点により上下２枚に区分される。上部に「BB」もしくは「BB Ⅰ」の記載があるものの、全体が暗色であることや上下層との関係から第２黒色帯と考えられる。

Ⅸｃ層（Ⅸ）　暗褐色ローム層　BB Ⅱと記されており、第２黒色帯と考えられる。

Ⅹ層（Ⅹ）　黄褐色ローム層　立川ローム最下層。非常に硬く、水分が多い。

Ⅺ層（Ⅺ）　褐色ローム層　やや青みを帯びた粘性のローム。武蔵野ローム最上層。



第４図　基本土層図

（３）整理作業の方法

現地では、検出した遺構にグリッド別・種別に番号を振り当てている。整理作業の時点では、縄文時代の住居跡はＪ、古代の住居跡はＨ、土坑はＤ、炉穴はＦ、溝はＭを先頭につけて遺構種ごとに番号を振り直しており、新旧番号の対照表を第１表に示した。なお、平成 29 年から遺構や出土土器の事実記載、遺構の時期の検討を実施した際、人為的な掘り込みと判断できる情報のないものは欠番とした。整理期間は 14 年に及んでおり、実測図の表現等の不揃いに対して充分対応できなかった部分がある。方法の詳細は第３章第１節の各項に示す。

第２節　遺跡の概要

１　遺跡の位置

千葉市は東京湾東岸の千葉県中西部に位置し、東京都心から東へ約 40㎞、空の玄関口である成田空港から南西へ約 30㎞の距離にある。餅ヶ崎遺跡は千葉市若葉区源町 280 他に所在し、千葉市の中心市街地の東方、JR 千葉駅から北北東へ 3.6㎞、JR 都賀駅から北西へ 2.3㎞の距離にある（第６図）。遺跡内の旧字名は、南西部が餅ヶ崎、北西･北東部が朝ぢう、南東部が殿内海道である。現在は千葉市動物公園となっており、千葉都市モノレール動物公園駅の至近にある。みつわ台・あやめ台・千草台などの広大な住宅地に囲まれたなかで、千葉県総合スポーツセンターと並ぶ広域の公園・緑地帯となっている。

２　周辺の地理と歴史的環境

千葉市の地形は、東京湾沿いに帯状に広がる低地帯と、その東側に広がる台地に大きく二分される。この内、台地部分は下総台地の中央付近にあたり、標高は西端の約 20 ｍ～東端の約 100 ｍ近くまで、緩

やかに傾斜しつつもきわめて平坦である。台地は、東京湾に注ぐ花見川・都川・村田川、印旛沼に注ぐ鹿島川の水系の谷によって樹枝状に刻まれている。市の中央を流下する都川は市内最大の流域面積をもつ河川であり、緑区高田町に源を発し、坂月川、仁戸名川、葭川などの支川を合流して東京湾に注いでいる。

餅ヶ崎遺跡は都川の支流である葭川の本谷谷奥に面した標高約 30 m、面積 140,000㎡の広大な台地上に立地する。愛生町周辺に水源をもつ葭川本谷は南流約 4 km で谷口に至り、源町北部に水源をもつ支流（殿台支谷）と合流し、さらに東側の支流（廿五里支谷）と合流する（第 5 図）。台地の側から見ると、葭川本谷と廿五里支谷に挟まれた旧寺山村の台地が、殿山支谷によって東西に二分されており、餅ヶ崎遺跡は西寺山支台から西側に張り出す形になっている。

餅ヶ崎遺跡（１）周辺には数多くの遺跡が存在する（第 6 図）。まず、縄文時代の遺跡では、同じ台地上に愛生遺跡（２）・すすき山遺跡（５）・海老遺跡（13）等の中期後葉の集落が集中し、殿台貝塚（９）等の後・晩期の貝塚も存在する。谷を挟んだ西側の台地上には後・晩期の園生貝塚（30）が存在する。廿五里支谷に面した台地上には中・後期の東寺山貝塚（12）、稲毛台東遺跡（13 の北東。東寺山南貝塚）、廿五里北貝塚（16）・廿五里遺跡（17・廿五里南貝塚を含む）などが点在する。

弥生時代では、餅ヶ崎遺跡の南側に位置する南屋敷遺跡（６）で前期の再葬墓群が、東側の台地では戸張作古墳群（14）で環濠を伴う集落が検出されている。古墳時代では東寺山古墳群がある。戸張作・海老・浅間・蓮台場の 4 支群に前方後円墳 1 基・円墳 20 基以上が集中しており、戸張作古墳群（14）・石神古墳群（15）等で調査が行われている。石神２号墓では割竹形木棺内から石枕２個をはじめ、多数の鉄製品・立花・製模造品・玉類が出土している。集落では海老遺跡（13）・稲毛台遺跡（13 の北。いなぎだい）・戸張作古墳群（14）・石神古墳群（15）、西前原遺跡（17 の西）などがある。周辺には廿五里城・原城・浅間館・殿台城・萩台館・南屋敷館・源館等の中世城館跡も多い。当遺跡に関連して調査成果があるのは南屋敷遺跡（６）と廿五里城跡（17 の一部）である。南屋敷遺跡では土塁と堀で区画され、３か所の門や掘立柱建物跡、地下式坑、井戸を伴う遺構群が見つかっており、16 世紀代に存在した村落の領主層の屋敷とされている（簗瀬 1998・2001）。廿五里城跡は平山城式の城館である。土塁・郭・腰郭のほかに塚や、墓地（人骨 23 個体）、板碑群などを検出している（山口・古内他 1986・笹生 1998）。注目すべき資料として、浄土三部経の一つである無量寿経・巻上の一節が墨書された土師質の坏を挙げることができる。当地域から出土した至宝であり、改めて紹介しておきたい。底面には種子が書かれ、体部に２文字ずつ書かれているのは、法蔵比丘（菩薩）が如来となるにあたり一切衆生を救うためにたてた四十八願のうちの第十八願である。その大意は、信心を起こし浄土に生まれようとして十回でも念仏する者が往生しなければ、私は如来とはなりません（必ず願いをかなえよう）というものである。四十八願中の眼目として重視され、願文の解釈が各宗派の教学の根本的立場を示すものとなるなど、浄土信仰の拠りどころとなった（中村他 1990）。種子は欠損により不明確だが、バン（金剛界大日如来）の可能性があるとされており、少なくともキリーク（阿弥陀如来）ではないことは何らかの意味をもつのであろう。土器は火葬骨の入った土師器甕を転用した骨臓器の近くから出土しており、その蓋として利用されたとみられる。浄土信仰のかたちを明示するものとして、全国でも例を見ない重要な資料といえるであろう。

遺跡の所在する源町は、中世の千葉荘寺山郷に由来をもつ。中山法華経寺所蔵「天台肝要文」の紙背文書には「寺山郷百姓橘重光」が「名主寺山殿」の非法を千葉氏に訴えた記事が見える。餅ヶ崎遺跡から出土した中・近世遺物は、千葉氏の「御領」であった中世寺山郷と、江戸時代の西寺山村に関連するものであろう。その後、当地は 1889 年には都賀村大字西寺山となり、1937 年に千葉市西寺山、1938 年に千葉市源町という変遷をたどった。現在の町名は葭川支流の水源地が存在することに由来する。この地に中・

第５図　周辺地形図

1:25,000（千葉西部・千葉東部）

1	餅ヶ崎遺跡	2	愛生遺跡	3	愛生東遺跡	4	切間道遺跡	5	すすき山遺跡
6	南屋敷遺跡	7	殿山掘込遺跡	8	高津辺田遺跡	9	殿台貝塚	10	小満遺跡
11	堀込遺跡	12	東寺山貝塚	13	海老遺跡	14	戸張作古墳群	15	石神古墳群
16	廿五里北貝塚	17	廿五里遺跡	18	根崎遺跡	19	原町山王遺跡	20	谷津頭遺跡
21	原遺跡	22	台畑遺跡	23	高品第２遺跡	24	東田遺跡	25	高品城址
26	草刈場貝塚	27	荒屋敷貝塚	28	五味ノ木遺跡	29	駒形遺跡	30	園生貝塚

第６図　周辺遺跡分布図

近世の城館や村落が発達したのは、生実と佐倉を結ぶ交通の要所であったためと考えられる。周辺の小字には、遺跡内の「殿内海道」をはじめ、「浜海道」「宮海道」などの交通に関わる遺称も存在する。第５図のように、餅ヶ崎遺跡の付近は街道からやや離れた広い台地であり、集落や道に接した生産地として利用されてきたものと推察される。

３　調査成果の概要

（１）地形区分と遺構・遺物分布

遺構分布図を第７図～第 17 図に示した。第７図は全体図、第９図～第 17 図は区割り図であり、第８図が索引となっている。当遺跡の所在する台地は基部に当たる部分から北・北西・南西の３方向に張り出した形をしている。既報告等では第Ⅰ～第Ⅳ地点という名称で説明しているが、本書においては以下の名称を用いる。

南西部：もっとも広い台地であり全面に縄文時代中期後葉から後期初頭の遺構群が分布する。

北西部：台地先端部で、縄文早期後葉と中・後期の土器が出土したが遺構は検出されなかった。

北　部:第２期工事調査区にあたる。旧石器時代ブロックと縄文早期後葉の住居跡･炉穴を調査している。

東　部:旧字「殿内海道」の台地上にあたり､中･近世の遺構･遺物の多くはこの部分から見つかっている。

（２）遺構と出土遺物の概要

餅ヶ崎遺跡は、発掘が行われた当時から縄文中期末・後期初頭の大規模集落として知られ、重要性が指摘されてきた。柄鏡形住居跡の存在と出土土器は論文で取上げられ（横田 1983)、加曽利Ｅ式末の標準的な資料として土器が紹介されている（渡辺 2007)。称名寺式土器の優品２点は一般書にも掲載され（玉田 2007)。千葉県史においてはこの時期の代表的な遺跡として発掘成果の概要が示された（青沼 2000)。また、第１期工事調査区の概報（青沼 1980）と、第２期工事調査区の報告書が刊行されている（田中・簗瀬他 1988)。調査の成果を一般に公開する機会もあった（簗瀬 2013、尾崎 2018)。

本書で扱う第１期工事調査区の主な調査成果を列挙する。旧石器時代は５枚の文化層から石器ブロック 13 か所を検出し、1,024 点の石器が出土した。既報告分３か所を加えると石器ブロックは 16 か所となる。縄文早期後葉は炉穴 25 群 37 基である。既報告分の住居跡２軒・炉穴５群９基、土坑３基を加えると炉穴は 30 群 46 基となる。細別時期不明の陥し穴は 26 基で、既報告の５基を加えると 28 基となる。

遺構・遺物の中心は縄文中期後葉～後期前葉であり、住居跡 85 軒・小竪穴 110 基・土坑 185 基などを検出した。加曽利ＥⅣ式～称名寺式期の住居跡が 55 軒と中心を占める。また、住居跡 11 軒、小竪穴 32、土坑 10 基、ピット３基の計 56 か所で遺構内貝層を形成していた。本書で加曽利ＥⅤ式とした土器は、多くの住居跡で称名寺式土器と共伴しており、編年的な位置づけをめぐって調査当時から注目されていた。今日では類例も増えたが、これだけまとまった資料はなく、県内でも有数の良好な資料となるであろう。石鏃製作関連資料、石棒も豊富である。遺構外出土遺物も加曽利ＥⅣ式から称名寺式期土器が大半を占めるが、そのほかでは早期前葉・撚糸文系土器がまとまっている。後期中葉・加曽利 B2 式～ B3 式土器も比較的多く出土している。

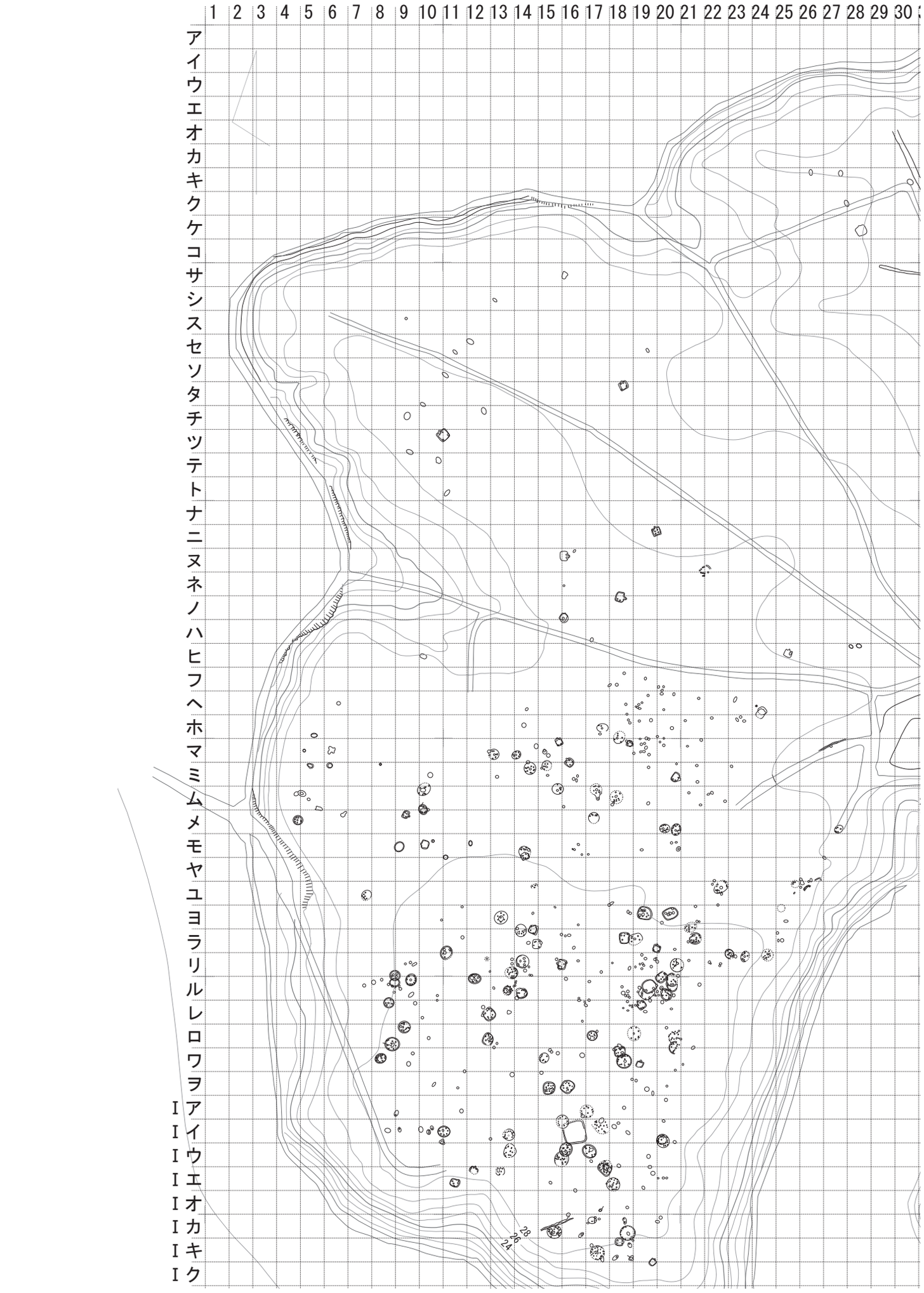
弥生時代から古墳時代は、遺構外から弥生中期後葉・後期、古墳時代中期・後期の土器が少量出土しているのみである。奈良時代は方形周溝状遺構１基を検出したほか、少量の土器が出土している。集落から離れた場所に墓が造られたのであろう。集落が形成されるのは平安時代で、住居跡 33 軒、土坑２基を検出している。広い台地上に分散的に分布し重複もごく少ない。土器以外の出土遺物は少ないが、鉄製農工具 14 点・鉄鏃８点・鉄滓２点、管状土錘４点がある。

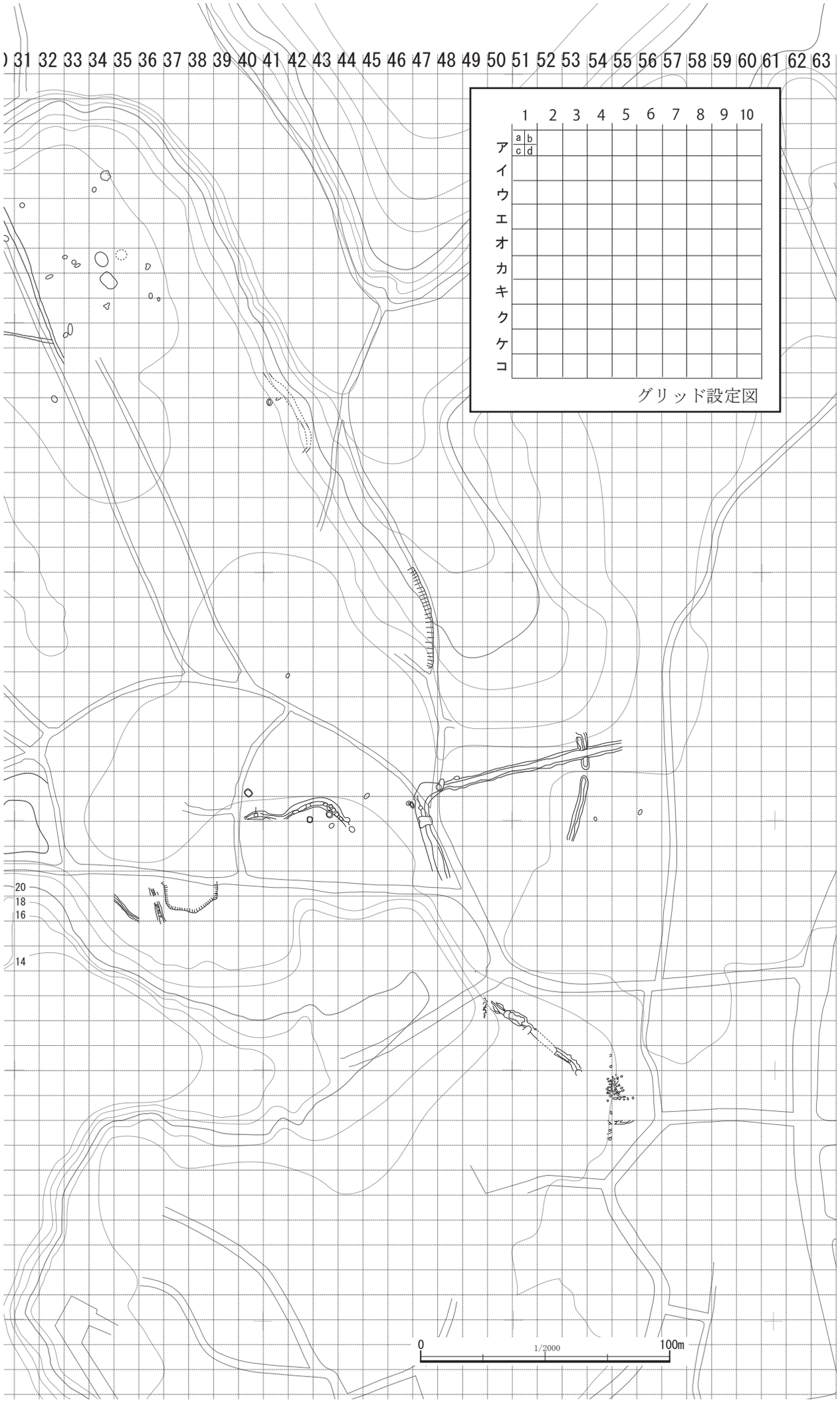
中・近世では、調査区東部の旧字「殿内海道」の台地上遺構・遺物が見つかっている。竪穴遺構1基・地下式坑3基・土坑9基・溝7条を検出した。15世紀末～16世紀初めの陶器やこのころに持ち込まれた蓋然性の高い渡来銭が比較的まとまっており、中世寺山郷に関わるものとみられる。近世・17世紀中頃～後半の資料や幕末ころの土器類もあり、これは近世・西寺山村となる時期のものである。

遺跡及び報告書関連文献

青沼道文 1980『千葉市源町餅ヶ崎遺跡発掘調査予報』千葉市教育委員会
青沼道文 2000「餅ヶ崎遺跡」『千葉県の歴史　資料編　考古1（旧石器・縄文時代）』千葉県
植月学 2004「貝層サンプルの分析」『千葉市平和公園遺跡群Ⅱ　うならすず遺跡』千葉市教育委員会
小倉和重 2006『吉見稲荷山遺跡（第7次・8次）－コスモ石油ガソリンスタンド建設予定地内埋蔵文化財調査－』印旛郡市文化財センター
大野康夫 1989『佐倉市南志津地区埋蔵文化財発掘調査報告書』千葉県文化財センター
新田浩三他 2002『袖ケ浦市台山遺跡』千葉県文化財センター
小倉淳一 1996「東京湾東岸地域の宮ノ台式土器」史館27、史館同人
尾崎沙羅 2018「千葉市動物公園の旧石器時代人」『平成29年度千葉市遺跡発表会発表要旨』千葉市教育委員会
加納実 1994「加曽利ＥⅢ・Ⅳ式土器の系統分析」貝塚博物館紀要21、千葉市立加曽利貝塚博物館
加納実 1995「下総台地における加曽利ＥⅢ式期の諸問題－集落の成立に関する予察を中心に－」研究紀要16、千葉県文化財センター
加納実 2000「集合的居住の崩壊と再編成－縄文中・後期集落への接近方法－」先史考古学論集9
菊池健一 1998『千葉市戸張作遺跡Ⅰ』千葉市文化財調査協会
菊池健一 1999『千葉市戸張作遺跡Ⅱ』千葉市文化財調査協会
倉内郁子・島立桂・落合章雄 2013『西八千代北部地区埋蔵文化財調査報告書3－八千代市八王子台遺跡－』千葉県教育振興財団
小玉秀成 2002「涌井遺跡の桜井式土器－桜井式土器の南下と阿玉台北式および周辺型式の設定－」玉里村立史料館報7、玉里村立史料館
小林嵩 2015「下総の弥生時代後期土器編年」『千葉大学文学部考古学研究室　考古学論攷Ⅱ－柳澤清一先生退職とともに－』六一書房
斉木勝他 1977『千葉市中野僧御堂遺跡―千葉東金道路建設に伴う埋蔵文化財調査報告Ⅰ―』千葉県文化財センター
笹生衛 1998「廿五里城跡」『千葉県の歴史　資料編中世1（考古資料）』千葉県
島田和高他 1996『土気南遺跡群Ⅴ　南河原坂第3遺跡』千葉市文化財調査協会
島立桂・新田浩三・渡辺修一「下総台地における立川ローム層の層序区分－平成2・3年度職員研修会から－」研究連絡誌35、千葉県文化財センター
諏訪間順・野口淳・島立桂 2010「四　関東地方南部」旧石器時代、pp.381-437、青木書店
田中英世・簗瀬裕一他 1988『千葉市餅ヶ崎遺跡　昭和60年度発掘調査報告書』千葉市文化財調査協会
田中英世・中山貴正 2003『千葉市平和公園遺跡群Ⅰ　多部田貝塚　貝殻塚遺跡　ムグリ遺跡』千葉市教育委員会
田中英世・古谷渉 2004『千葉市平和公園遺跡群Ⅱ　うならすず遺跡』千葉市教育委員会

田中英世・簗瀬裕一他 1988『千葉市餅ヶ崎遺跡　昭和 60 年度発掘調査報告書』千葉市文化財調査協会
玉田芳英 2007『日本の美術 498（縄文土器　後期)』
田村隆他 1989「大林遺跡」『佐倉市南志津埋蔵文化財調査報告書 1　佐倉市御塚山・大林・西野・芋窪遺跡』千葉県文化財センター
田村隆他 1996『市原市武士遺跡 1 ―福増浄水場埋蔵文化財調査報告書―　第 1 分冊』千葉県文化財センター
田村隆 2000「木苅峠遺跡再訪―房総半島小型石槍の変遷―」千葉県史研究 8、pp.84-113、千葉県
田村隆 2006「関東地方の地域編年」『旧石器時代の地域編年』pp.8-60、同成社
千葉市史編纂委員会 1976『千葉市史・資料篇－原始・古代・中世－』
長原亘 2006「踏形遺跡」埋蔵文化財調査センター年報 18、千葉市教育振興財団
中村信博 1998「溝型陥し穴研究序説」栃木県考古学会誌 19
中村元他 1990『浄土三部経（上)』岩波文庫
永塚俊司 2004『新東京国際空港埋蔵文化財調査報告書ＸＸ　十余三稲荷峰遺跡（空港 No.67 遺跡)』千葉県文化財センター
西野雅人 1999「縄文中期の大型貝塚と生産活動－千葉市有吉貝塚の分析結果－」『研究紀要 19』千葉県文化財センター
西野雅人 2005a「東京湾東岸の大型貝塚を支えた生産・居住様式」『地域と文化の考古学 1 』明治大学文学部考古学研究室
西野雅人 2005 b「縄文時代の通年定住型集落を支えた食－植物食の発達と貝・小魚の通年利用－」研究紀要 24、千葉県文化財センター
西野雅人 2008「縄文中期拠点集落の消滅と小規模集落」千葉縄文研究 2
西野雅人・米倉貴之他 2017『史跡加曽利貝塚総括報告書』千葉市教育委員会
新田浩三 2017「千葉県における礫群の推移」古代文化 69-3、pp.382-391、古代学協会
古内茂 2012『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書ＸＸⅥ　印西市角田台遺跡（旧石器・縄文時代編)』千葉県教育振興財団
矢田美知子・飯田茂雄・大谷薫他 2005「八重門田遺跡」『袖ケ浦椎の森工業団地内埋蔵文化財調査報告書』君津郡市文化財センター
簗瀬裕一 1998「南屋敷遺跡」『千葉県の歴史　資料編中世 1 （考古資料)』千葉県
簗瀬裕一 2013「若葉区餅ヶ崎遺跡」『平成 24 年度千葉市遺跡発表会要旨』千葉市埋蔵文化財調査センター
簗瀬裕一 2001『千葉市源町遺跡群－高津辺田遺跡・南屋敷遺跡－』千葉市文化財調査協会
山口典子・古内茂他 1986『千葉都市モノレール関係埋蔵文化財発掘調査報告書　五味ノ木遺跡・殿山堀込遺跡・廿五里城跡・根崎遺跡・京願台遺跡・柳沢遺跡』千葉県文化財センター
山岡磨由子 2011『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書ＸＸⅢ　印西市泉北側第 3 遺跡（下層)』千葉県教育振興財団
横田正美 1983「柄鏡形住居址とその遺物について」貝塚博物館紀要９、千葉市立加曽利貝塚博物館
渡辺新 2007「千葉市餅ヶ崎遺跡」千葉縄文研究　別冊Ⅰ　千葉における中期編年基礎資料　土器集成Ⅰ


1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30
ア イ ウ エ オ カ キ ク ケ コ サ シ ス セ ソ タ チ ツ テ ト ナ ニ ヌ ネ ノ ハ ヒ フ ヘ ホ マ ミ ム メ モ ヤ ユ ヨ ラ リ ル レ ロ ワ ヲ ア イ ウ エ オ カ キ ク
I I I I I I I I I I
28
26
24


) 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10
a b
c d
ア
イ
ウ
エ
オ
カ
キ
ク
ケ
コ
グリッド設定図
20
18
16
14
0
1/2000
100m

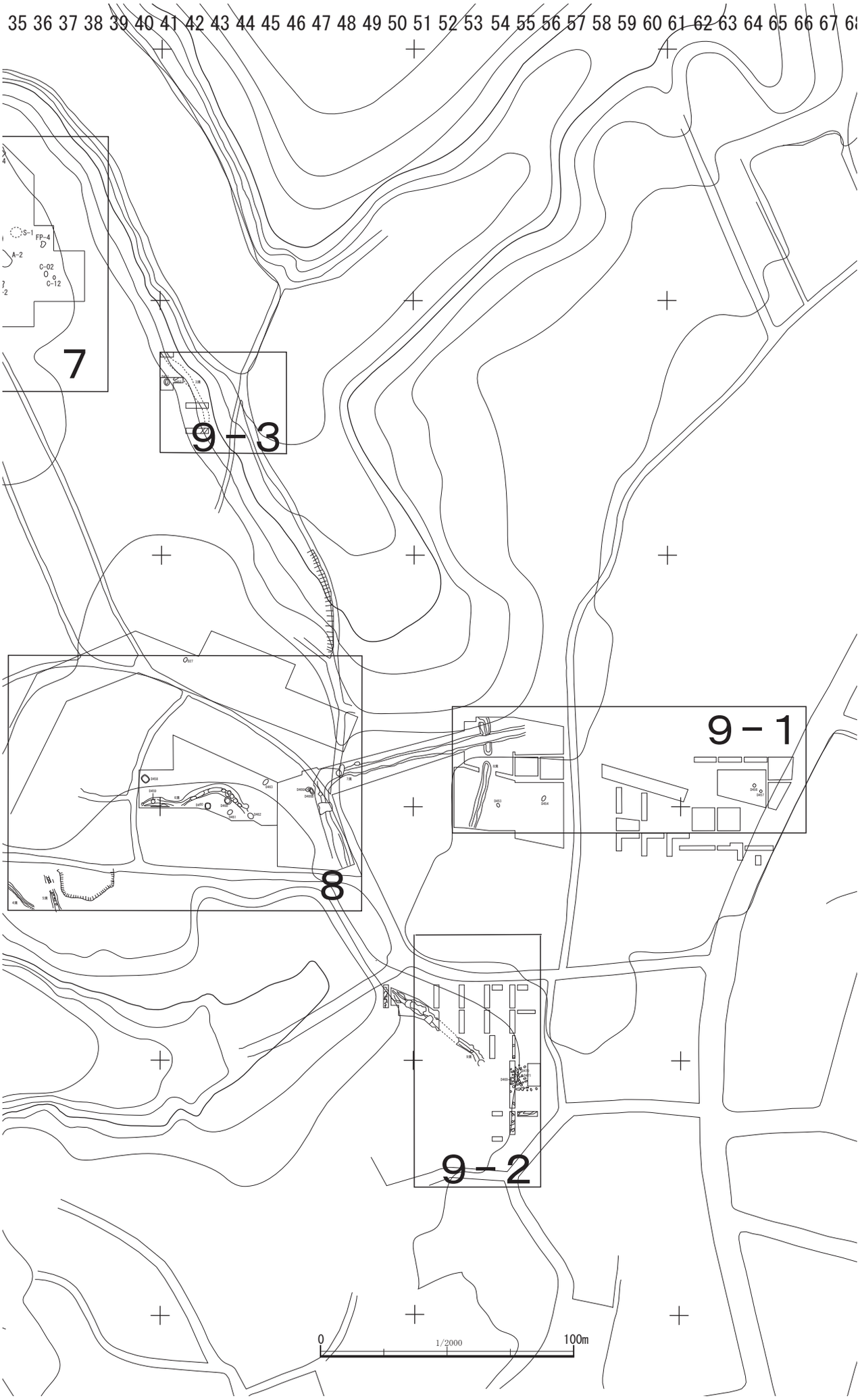
第７図　調査全体図

第 1 表　遺構索引

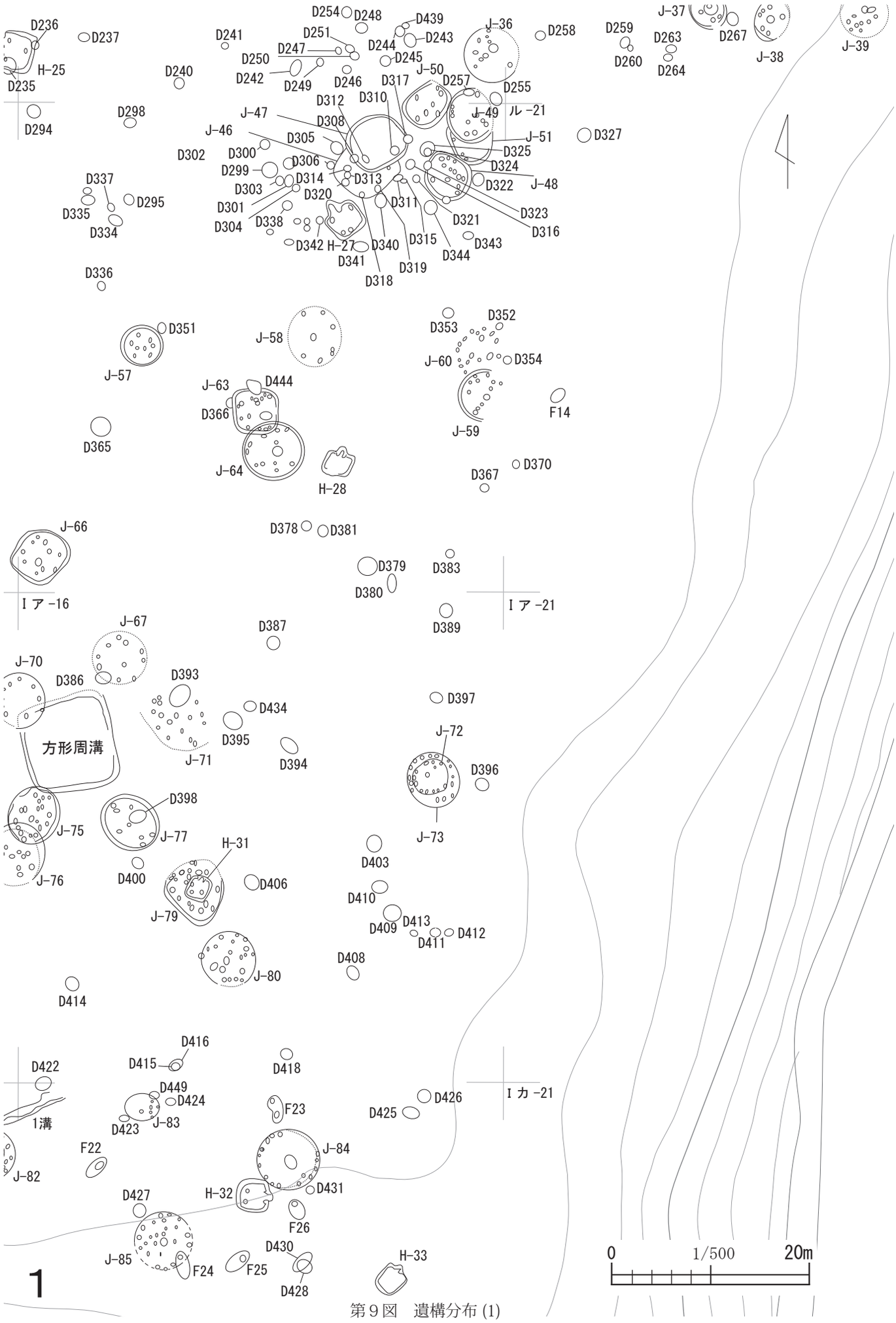
No.	遺構No	時代	種別 1	種別 2
J-01	ネ-23-1 号住	縄文	住居跡	―
J-02	ハ-16-2 号住	縄文	住居跡	―
J-03	ホ-17-1 号住	縄文	住居跡	―
J-04	マ-13-1 号住	縄文	住居跡	―
J-05	マ-14-1 号住	縄文	住居跡	―
J-06	マ-18-2 号住	縄文	住居跡	―
J-07	ミ-14-1 号住	縄文	住居跡	―
J-08	ミ-15-1 号住	縄文	住居跡	―
J-09	ム-10-1 号住	縄文	住居跡	―
J-10	ム-10-2 号住	縄文	住居跡	―
J-11	ム-15-1 号住	縄文	住居跡	―
J-12	ム-17-1 号住	縄文	住居跡	―
J-13	ム-18-1 号住	縄文	住居跡	―
J-14	メ-04-1 号住	縄文	住居跡	―
J-15	メ-17-1 号住	縄文	住居跡	―
J-16	メ-20-1 号住	縄文	住居跡	―
J-17	メ-20-2 号住	縄文	住居跡	―
J-18	モ-09-1 号住	縄文	住居跡	―
J-19	モ-14-2 号住	縄文	住居跡	―
J-20	モ-27-1 号住	縄文	住居跡	―
J-21	ユ-07-1 号住	縄文	住居跡	―
J-22	ユ-22-1 号住	縄文	住居跡	―
J-23	ユ-25-1 号住	縄文	住居跡	―
J-24	ユ-26-1 号住	縄文	住居跡	―
J-25	ヨ-13-1 号住	縄文	住居跡	―
J-26	ヨ-19-1 号住	縄文	住居跡	―
J-27	ヨ-20-1 号住	縄文	住居跡	―
J-28	ヨ-21-1 号住	縄文	住居跡	―
J-29	ヨ-24-1 号住	縄文	住居跡	―
J-30	ラ-14-4 号住	縄文	住居跡	―
J-31	ラ-19-2 号住	縄文	住居跡	―
J-32	ラ-21-1 号住	縄文	住居跡	―
J-33	リ-11-1 号住	縄文	住居跡	―
J-34A	リ-11-1 号住	縄文	住居跡	―
J-34B	リ-13-1 号住	縄文	住居跡	―
J-35	リ-14-1 号住	縄文	住居跡	―
J-36	リ-20-1 号住	縄文	住居跡	―
J-37	リ-22-1 号住	縄文	住居跡	―
J-38	リ-23-1 号住	縄文	住居跡	―
J-39	リ-24-1 号住	縄文	住居跡	―
J-40	ル-09-1 号住	縄文	住居跡	―
J-41	ル-09-2 号住	縄文	住居跡	―
J-42	ル-09-3 号住	縄文	住居跡	―
J-43	ル-12-1 号住	縄文	住居跡	―
J-44	ル-13-1 号住	縄文	住居跡	―
J-45	ル-14-2 号住	縄文	住居跡	―
J-46	ル-19-1 号住	縄文	住居跡	―
J-47	ル-19-2 号住	縄文	住居跡	―
J-48	ル-20-1 号住	縄文	住居跡	―
J-49	ル-20-2 号住	縄文	住居跡	―
J-50	ル-20-3 号住	縄文	住居跡	―
J-51	ル-20-4 号住	縄文	住居跡	―
J-52	レ-08-1 号住	縄文	住居跡	―
J-53	レ-12-1 号住	縄文	住居跡	―
J-54	ロ-08-1 号住	縄文	住居跡	―
J-55	ロ-09-1 号住	縄文	住居跡	―
J-56	ロ-12-1 号住	縄文	住居跡	―
J-57	ロ-17-1 号住	縄文	住居跡	―
J-58	ロ-19-1 号住	縄文	住居跡	―
J-59	ロ-20-1 号住	縄文	住居跡	―
J-60	ロ-20-2 号住	縄文	住居跡	―
J-61	ワ-08-1 号住	縄文	住居跡	―
J-62	ワ-15-1 号住	縄文	住居跡	―
J-63	ワ-18-1 号住	縄文	住居跡	―
J-64	ワ-18-2 号住	縄文	住居跡	―
J-65	ヲ-15-1 号住	縄文	住居跡	―
J-66	ヲ-16-1 号住	縄文	住居跡	―
J-67	Ⅰア-17-1 号住	縄文	住居跡	―
J-68	Ⅰイ-11-1 号住	縄文	住居跡	―
J-69	Ⅰイ-13-1 号住	縄文	住居跡	―
J-70	Ⅰイ-16-1 号住	縄文	住居跡	―
J-71	Ⅰイ-17-1 号住	縄文	住居跡	―
J-72	Ⅰイ-20-1 号住	縄文	住居跡	―
J-73	Ⅰイ-20-2 号住	縄文	住居跡	―
J-74	Ⅰウ-13-1 号住	縄文	住居跡	―
J-75	Ⅰウ-16-1 号住	縄文	住居跡	―
J-76	Ⅰウ-16-2 号住	縄文	住居跡	―
J-77	Ⅰウ-17-1 号住	縄文	住居跡	―
J-78	Ⅰエ-13-1 号住	縄文	住居跡	―
J-79	Ⅰエ-17-2 号住	縄文	住居跡	―
J-80	Ⅰエ-18-1 号住	縄文	住居跡	―
J-81	Ⅰカ-15-1 号住	縄文	住居跡	―
J-82	Ⅰカ-15-2 号住	縄文	住居跡	―
J-83	Ⅰカ-17-1 号住	縄文	住居跡	―
J-84	Ⅰカ-18-1 号住	縄文	住居跡	―
J-85	Ⅰキ-17-1 号住	縄文	住居跡	―
埋設土器 1	―	縄文	埋設土器	―
埋設土器 2	―	縄文	埋設土器	―
埋設土器 3	―	縄文	埋設土器	―
埋設土器 4	―	縄文	埋設土器	―
埋設土器 5	―	縄文	埋設土器	―
D-003	サ-16-1 土坑	縄文	陥し穴	楕円型
D-004	シ-13-1 土坑	縄文	陥し穴	楕円型
D-006	セ-11-1 土坑	縄文	陥し穴	楕円型
D-007	セ-12-1 土坑	縄文	陥し穴	楕円型
D-008	セ-19-1 土坑	縄文	陥し穴	楕円型
D-009	ソ-11-1 土坑	縄文	陥し穴	楕円型
D-011	タ-10-1 土坑	縄文	陥し穴	楕円型
D-013	チ-12-1 土坑	縄文	陥し穴	楕円型
D-014	ツ-9-1 土坑	縄文	陥し穴	楕円型
D-016	テ-10-1 土坑	縄文	陥し穴	楕円型
D-028	ヒ-10-1 土坑	縄文	陥し穴	楕円型
D-033	フ-18-3 土坑	縄文	陥し穴	楕円型
D-050	ヘ-20-3 土坑	縄文	陥し穴	溝型
D-056	ホ-5-1 土坑	縄文	陥し穴	楕円型
D-097	ミ-5-1 土坑	縄文	陥し穴	楕円型
D-119	ム-10-1 土坑	縄文	陥し穴	楕円型
D-134	モ-12-1 土坑	縄文	陥し穴	楕円型
D-151	ヤ-27-1 土坑	縄文	陥し穴	楕円型
D-345	ロ-8-1 土坑	縄文	陥し穴	楕円型
D-372	ヲ-10-1 土坑	縄文	陥し穴	楕円型
D-416	Ⅰオ-17-2 土坑	縄文	陥し穴	楕円型
D-430	Ⅰキ-18-3 土坑	縄文	陥し穴	楕円型
D-432	ノ-17-1 土坑	縄文	陥し穴	楕円型
D-436	ム-5-3 土坑	縄文	陥し穴	楕円型
D-451	セ-41-1 土坑	縄文	陥し穴	楕円型
D-452	セ-41-2 土坑	縄文	陥し穴	溝型
D-005	ス-10-1 土坑	縄文	土坑	土坑
D-015	テ-9-1 土坑	縄文	土坑	土坑
D-017	ト-11-1 土坑	縄文	土坑	土坑
D-022	ヌ-16-1 土坑	縄文	土坑	土坑
D-023	ネ-16-1 土坑	縄文	土坑	ピット
D-027	ノ-41-2 土坑	縄文	土坑	土坑
D-029	ヒ-28-1 土坑	縄文	土坑	土坑
D-030	ヒ-28-2 土坑	縄文	土坑	土坑
D-031	フ-18-1 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-032	フ-18-2 土坑	縄文	土坑	土坑
D-034	フ-19-1 土坑	縄文	土坑	土坑
D-035	フ-20-1 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-036	フ-20-2 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-037	フ-20-3 土坑	縄文	土坑	ピット
D-039	ヘ-14-1 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-040	ヘ-18-1 土坑	縄文	土坑	土坑
D-041	ヘ-18-2 土坑	縄文	土坑	ピット
D-042	ヘ-19-1 土坑	縄文	土坑	土坑
D-043	ヘ-19-2 土坑	縄文	土坑	土坑
D-044	ヘ-19-3 土坑	縄文	土坑	土坑
D-045	ヘ-19-4 土坑	縄文	土坑	土坑
D-046	ヘ-19-5 土坑	縄文	土坑	土坑
D-047	ヘ-19-6 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-048	ヘ-20-1 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-049	ヘ-20-2 土坑	縄文	土坑	土坑
D-051	ヘ-21-1 土坑	縄文	土坑	土坑
D-053	ヘ-23-1 土坑	縄文	土坑	土坑
D-054	ヘ-24-1 土坑	縄文	土坑	ピット
D-058	ホ-14-1 土坑	縄文	土坑	土坑
D-060	ホ-17-1 土坑	縄文	土坑	土坑
D-061	ホ-18-1 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-062	ホ-18-2 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-064	ホ-19-1 土坑	縄文	土坑	土坑
D-065	ホ-19-2 土坑	縄文	土坑	土坑
D-067	ホ-20-2 土坑	縄文	土坑	土坑
D-068	ホ-20-3 土坑	縄文	土坑	土坑
D-069	ホ-20-4 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-070	ホ-21-1 土坑	縄文	土坑	ピット
D-071	ホ-22-1 土坑	縄文	土坑	土坑
D-072	ホ-23-1 土坑	縄文	土坑	土坑
D-073	ホ-23-2 土坑	縄文	土坑	土坑
D-074	ホ-23-3 土坑	縄文	土坑	土坑
D-075	マ-5-1 土坑	縄文	土坑	土坑
D-076	マ-14-1 土坑	縄文	土坑	土坑
D-077	マ-14-2 土坑	縄文	土坑	土坑
D-078	マ-15-1 土坑	縄文	土坑	土坑
D-079	マ-15-2 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-080	マ-15-3 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-081	マ-19-1 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-082	マ-19-2 土坑	縄文	土坑	土坑
D-083	マ-19-3 土坑	縄文	土坑	土坑
D-084	マ-19-4 土坑	縄文	土坑	土坑
D-085	マ-19-5 土坑	縄文	土坑	土坑
D-086	マ-19-6 土坑	縄文	土坑	土坑
D-087	マ-19-7 土坑	縄文	土坑	ピット
D-088	マ-19-8 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-089	マ-19-9 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-090	マ-20-1 土坑	縄文	土坑	ピット
D-091	マ-20-2 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-092	マ-21-1 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-093	マ-21-2 土坑	縄文	土坑	土坑
D-096	マ-27-2 土坑	縄文	土坑	土坑
D-098	ミ-6-1 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-099	ミ-8-1 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-101	ミ-13-1 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-102	ミ-15-1 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-103	ミ-15-2 土坑	縄文	土坑	ピット
D-104	ミ-16-1 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-105	マ-16-2 土坑	縄文	土坑	土坑
D-106	ミ-16-3 土坑	縄文	土坑	土坑
D-108	ミ-19-2 土坑	縄文	土坑	土坑
D-109	ミ-20-1 土坑	縄文	土坑	土坑
D-112	ミ-21-1 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-113	ミ-21-2 土坑	縄文	土坑	土坑
D-116	ミ-23-1 土坑	縄文	土坑	土坑
D-118	ム-5-2 土坑	縄文	土坑	土坑
D-121	ム-16-1 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-122	ム-17-1 土坑	縄文	土坑	土坑
D-123	ム-18-1 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-124	ム-19-1 土坑	縄文	土坑	土坑
D-125	ム-21-1 土坑	縄文	土坑	土坑
D-126	ム-21-2 土坑	縄文	土坑	土坑
D-127	ム-22-1 土坑	縄文	土坑	土坑
D-128	ム-22-2 土坑	縄文	土坑	土坑
D-129	ム-22-3 土坑	縄文	土坑	土坑
D-130	メ-10-1 土坑	縄文	土坑	土坑
D-133	モ-10-1 土坑	縄文	土坑	土坑
D-136	モ-14-1 土坑	縄文	土坑	土坑
D-137	モ-16-1 土坑	縄文	土坑	ピット
D-138	モ-16-2 土坑	縄文	土坑	ピット
D-139	モ-16-3 土坑	縄文	土坑	土坑
D-140	モ-16-4 土坑	縄文	土坑	ピット
D-141	モ-17-1 土坑	縄文	土坑	土坑
D-142	モ-19-1 土坑	縄文	土坑	土坑
D-143	モ-20-1 土坑	縄文	土坑	土坑
D-144	モ-20-2 土坑	縄文	土坑	土坑
D-145	モ-20-3 土坑	縄文	土坑	土坑
D-146	ヤ-11-1 土坑	縄文	土坑	土坑
D-150	ヤ-22-1 土坑	縄文	土坑	土坑
D-154	ユ-22-1 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-156	ユ-22-3 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-157	ユ-22-4 土坑	縄文	土坑	土坑
D-159	ヨ-10-1 土坑	縄文	土坑	土坑
D-160	ヨ-11-1 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-161	ヨ-13-1 土坑	縄文	土坑	土坑
D-163	ヨ-14-1 土坑	縄文	土坑	土坑
D-164	ヨ-15-1 土坑	縄文	土坑	ピット
D-168	ヨ-16-2 土坑	縄文	土坑	土坑
D-169	ヨ-18-1 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-174	ヨ-18-6 土坑	縄文	土坑	土坑
D-175	ヨ-18-7 土坑	縄文	土坑	土坑
D-177	ヨ-19-1 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-178	ヨ-19-2 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-179	ヨ-20-1 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-180	ヨ-20-2 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-181	ヨ-20-3 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-182	ヨ-20-4 土坑	縄文	土坑	土坑
D-183	ヨ-20-5 土坑	縄文	土坑	土坑
D-184	ヨ-20-6 土坑	縄文	土坑	土坑
D-185	ヨ-20-7 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-187	ヨ-20-9 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-188	ヨ-21-1 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-190	ヨ-22-1 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-191	ラ-11-1 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-192	ラ-11-2 土坑	縄文	土坑	土坑
D-193	ラ-11-3 土坑	縄文	土坑	土坑
D-194	ラ-14-2 土坑	縄文	土坑	土坑
D-195	ラ-14-3 土坑	縄文	土坑	土坑
D-196	ラ-14-4 土坑	縄文	土坑	ピット
D-197	ラ-16-1 土坑	縄文	土坑	土坑
D-198	ラ-16-2 土坑	縄文	土坑	土坑
D-199	ラ-16-3 土坑	縄文	土坑	土坑
D-203	ラ-15-4 土坑	縄文	土坑	土坑
D-204	ラ-20-1 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-206	ラ-21-1 土坑	縄文	土坑	土坑
D-207	ヨ-21-2 土坑	縄文	土坑	土坑
D-208	ヨ-21-3 土坑	縄文	土坑	土坑
D-209	ラ-25-1 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-210	ラ-25-2 土坑	縄文	土坑	土坑
D-211	ラ-25-3 土坑	縄文	土坑	ピット
D-213	リ-9-1 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-214	リ-9-2 土坑	縄文	土坑	土坑
D-215	リ-11-1 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-216	リ-12-1 土坑	縄文	土坑	土坑
D-218	リ-12-3 土坑	縄文	土坑	土坑
D-219	リ-13-3 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-220	リ-13-4 土坑	縄文	土坑	小竪穴

No.	旧No.	時代	種別1	種別2
D-221	リ-14-2 土坑	縄文	土坑	土坑
D-223	リ-14-4 土坑	縄文	土坑	土坑
D-224	リ-14-5 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-226	リ-14-7 土坑	縄文	土坑	土坑
D-227	リ-14-8 土坑	縄文	土坑	土坑
D-228	リ-14-9 土坑	縄文	土坑	土坑
D-229	リ-14-10 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-230	リ-14-11 土坑	縄文	土坑	ピット
D-231	リ-14-12 土坑	縄文	土坑	土坑
D-232	リ-14-13 土坑	縄文	土坑	土坑
D-234	リ-15-1 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-235	リ-16-1 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-236	リ-16-2 土坑	縄文	土坑	土坑
D-237	リ-16-3 土坑	縄文	土坑	土坑
D-240	リ-17-1 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-241	リ-18-1 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-242	リ-18-2 土坑	縄文	土坑	土坑
D-243	リ-19-1 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-244	リ-19-2 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-245	リ-19-3 土坑	縄文	土坑	土坑
D-246	リ-19-4 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-247	リ-19-5 土坑	縄文	土坑	土坑
D-248	リ-19-6 土坑	縄文	土坑	土坑
D-249	リ-19-8 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-250	リ-19-9 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-251	リ-19-10 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-254	リ-19-13 土坑	縄文	土坑	土坑
D-255	リ-20-1 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-257	リ-20-3 土坑	縄文	土坑	土坑
D-258	リ-21-1 土坑	縄文	土坑	土坑
D-259	リ-22-1 土坑	縄文	土坑	土坑
D-260	リ-22-2 土坑	縄文	土坑	土坑
D-263	リ-22-5 土坑	縄文	土坑	土坑
D-264	リ-22-6 土坑	縄文	土坑	土坑
D-267	リ-23-3 土坑	縄文	土坑	土坑
D-268	リ-23-4 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-269	ル-7-1 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-270	ル-8-1 土坑	縄文	土坑	土坑
D-271	ル-8-3 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-272	ル-8-4 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-273	ル-8-5 土坑	縄文	土坑	土坑
D-274	ル-8-6 土坑	縄文	土坑	土坑
D-275	ル-8-7 土坑	縄文	土坑	土坑
D-276	ル-9-1 土坑	縄文	土坑	土坑
D-277	ル-9-2 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-278	ル-9-4 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-279	ル-9-5 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-280	ル-9-6 土坑	縄文	土坑	土坑
D-281	ル-9-7 土坑	縄文	土坑	土坑
D-282	ル-9-8 土坑	縄文	土坑	土坑
D-283	ル-10-1 土坑	縄文	土坑	土坑
D-284	ル-12-2 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-285	ル-12-3 土坑	縄文	土坑	土坑
D-286	ル-12-4 土坑	縄文	土坑	土坑
D-287	ル-12-5 土坑	縄文	土坑	ピット
D-288	ル-13-2 土坑	縄文	土坑	土坑
D-289	ル-14-1 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-290	ル-14-2 土坑	縄文	土坑	土坑
D-291	ル-14-3 土坑	縄文	土坑	土坑
D-292	ル-14-4 土坑	縄文	土坑	ピット
D-293	ル-14-5 土坑	縄文	土坑	ピット
D-294	ル-16-1 土坑	縄文	土坑	土坑
D-295	ル-17-1 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-298	ル-17-4 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-299	ル-18-1 土坑	縄文	土坑	土坑
D-300	ル-18-2 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-301	ル-18-3 土坑	縄文	土坑	土坑
D-302	ル-18-4 土坑	縄文	土坑	土坑
D-303	ル-18-5 土坑	縄文	土坑	土坑
D-304	ル-18-6 土坑	縄文	土坑	ピット
D-305	ル-19-1 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-306	ル-19-2 土坑	縄文	土坑	土坑
D-308	ル-19-4 土坑	縄文	土坑	土坑
D-310	ル-19-6 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-311	ル-19-7 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-312	ル-19-8 土坑	縄文	土坑	土坑
D-313	ル-19-9 土坑	縄文	土坑	土坑
D-314	ル-19-10 土坑	縄文	土坑	土坑
D-315	ル-19-11 土坑	縄文	土坑	ピット
D-316	ル-19-12 土坑	縄文	土坑	土坑
D-317	ル-19-13 土坑	縄文	土坑	土坑
D-318	ル-19-14 土坑	縄文	土坑	土坑
D-319	ル-19-15 土坑	縄文	土坑	土坑
D-320	ル-19-16 土坑	縄文	土坑	土坑
D-321	ル-20-1 土坑	縄文	土坑	土坑
D-322	ル-20-2 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-323	ル-20-3 土坑	縄文	土坑	土坑
D-324	ル-20-4 土坑	縄文	土坑	土坑
D-325	ル-20-5 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-327	ル-21-1 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-329	ル-7-1 土坑	縄文	土坑	土坑
D-330	レ-10-1 土坑	縄文	土坑	土坑
D-331	レ-10-2 土坑	縄文	土坑	土坑
D-332	レ-12-1 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-333	レ-13-1 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-334	レ-16-1 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-335	レ-16-2 土坑	縄文	土坑	土坑
D-336	レ-16-3 土坑	縄文	土坑	土坑
D-337	レ-16-4 土坑	縄文	土坑	土坑
D-338	レ-18-2 土坑	縄文	土坑	土坑
D-340	レ-19-1 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-341	レ-19-2 土坑	縄文	土坑	土坑
D-342	レ-19-3 土坑	縄文	土坑	土坑
D-343	レ-20-1 土坑	縄文	土坑	土坑
D-344	レ-20-2 土坑	縄文	土坑	土坑
D-346	ロ-9-2 土坑	縄文	土坑	ピット
D-347	ロ-10-1 土坑	縄文	土坑	土坑
D-349	ロ-13-2 土坑	縄文	土坑	ピット
D-350	ロ-13-3 土坑	縄文	土坑	土坑
D-351	ロ-17-1 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-352	ロ-20-1 土坑	縄文	土坑	ピット
D-353	ロ-20-2 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-354	ロ-20-3 土坑	縄文	土坑	土坑
D-355	ワ-9-1 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-356	ワ-9-2 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-357	ワ-15-1 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-358	ワ-15-2 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-361	ワ-15-5 土坑	縄文	土坑	土坑
D-362	ワ-15-6 土坑	縄文	土坑	土坑
D-365	ワ-16-1 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-366	ワ-18-1 土坑	縄文	土坑	土坑
D-367	ワ-20-1 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-370	ワ-21-3 土坑	縄文	土坑	土坑
D-373	ヲ-11-1 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-374	ヲ-11-2 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-375	ヲ-13-1 土坑	縄文	土坑	土坑
D-378	ヲ-18-1 土坑	縄文	土坑	ピット
D-379	ヲ-19-1 土坑	縄文	土坑	土坑
D-380	ヲ-19-2 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-381	ヲ-19-3 土坑	縄文	土坑	ピット
D-383	ヲ-20-1 土坑	縄文	土坑	土坑
D-385	Ⅰア-11-1 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-386	Ⅰア-16-1 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-387	Ⅰア-18-1 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-389	Ⅰア-20-1 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-390	Ⅰイ-10-4 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-391	Ⅰイ-12-1 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-393	Ⅰイ-17-1 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-394	Ⅰイ-18-1 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-395	Ⅰイ-18-2 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-396	Ⅰイ-20-1 土坑	縄文	土坑	土坑
D-397	Ⅰイ-20-2 土坑	縄文	土坑	土坑
D-398	Ⅰウ-17-1 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-400	Ⅰウ-17-3 土坑	縄文	土坑	土坑
D-403	Ⅰウ-19-1 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-404	Ⅰエ-13-1 土坑	縄文	土坑	土坑
D-405	Ⅰエ-15-1 土坑	縄文	土坑	土坑
D-406	Ⅰエ-18-1 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-408	Ⅰエ-19-1 土坑	縄文	土坑	土坑
D-409	Ⅰエ-19-2 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-410	Ⅰエ-19-3 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-411	Ⅰエ-20-1 土坑	縄文	土坑	土坑
D-412	Ⅰエ-20-2 土坑	縄文	土坑	土坑
D-413	Ⅰエ-20-3 土坑	縄文	土坑	土坑
D-414	Ⅰオ-16-1 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-415	Ⅰオ-17-1 土坑	縄文	土坑	土坑
D-418	Ⅰオ-18-1 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-422	Ⅰカ-16-1 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-423	Ⅰカ-17-1 土坑	縄文	土坑	土坑
D-424	Ⅰカ-17-3 土坑	縄文	土坑	土坑
D-425	Ⅰカ-19-1 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-426	Ⅰカ-20-1 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-427	Ⅰキ-17-1 土坑	縄文	土坑	小竪穴
D-428	Ⅰキ-18-1 土坑	縄文	土坑	土坑
D-431	Ⅰキ-18-4 土坑	縄文	土坑	土坑
D-433	ヲ-21-4 土坑	縄文	土坑	土坑
D-434	Ⅰイ-18-3 土坑	縄文	土坑	土坑
D-435	マ-18-1 土坑	縄文	土坑	土坑
D-439	リ-19-7 土坑	縄文	土坑	土坑
D-444	ワ-18-2 土坑	縄文	土坑	土坑
D-449	Ⅰカ-17-2 土坑	縄文	土坑	ピット
D-456	ホ-64-2 土坑	縄文	土坑	土坑
D-457	ホ-64-1 土坑	縄文	土坑	土坑
D-463	ヘ-46-1 土坑	縄文	土坑	土坑
F-01	ヘ-06-1 号炉穴	縄文	炉穴	－
F-02	マ-06-1 号炉穴	縄文	炉穴	－
F-03	ム-04-1 号炉穴	縄文	炉穴	－
F-04	ム-05-1 号炉穴	縄文	炉穴	－
F-05	メ-06-1 号炉穴	縄文	炉穴	－
F-06	ヤ-26-1 号炉穴	縄文	炉穴	－
F-07	ヤ-26-2 号炉穴	縄文	炉穴	－
F-08	ユ-25-1 号炉穴	縄文	炉穴	－
F-09	ユ-26-1 号炉穴	縄文	炉穴	－
F-10	ユ-26-2 号炉穴	縄文	炉穴	－
F-11	ユ-26-3 号炉穴	縄文	炉穴	－
F-12	ヨ-25-1 号炉穴	縄文	炉穴	－
F-13	リ-09-1 号炉穴	縄文	炉穴	－
F-14	ワ-21-1 号炉穴	縄文	炉穴	－
F-15	Ⅰア-09-1 号炉穴	縄文	炉穴	－
F-16	Ⅰイ-08-1 号炉穴	縄文	炉穴	－
F-17	Ⅰイ-09-1 号炉穴	縄文	炉穴	－
F-18	Ⅰイ-10-1 号炉穴	縄文	炉穴	－
F-19	Ⅰイ-10-2 号炉穴	縄文	炉穴	－
F-20	Ⅰイ-10-3 号炉穴	縄文	炉穴	－
F-21	Ⅰイ-10-4 号炉穴	縄文	炉穴	－
F-22	Ⅰカ-16-1 号炉穴	縄文	炉穴	－
F-23	Ⅰカ-18-1 号炉穴	縄文	炉穴	－
F-24	Ⅰキ-17-1 号炉穴	縄文	炉穴	－
F-25	Ⅰキ-18-1 号炉穴	縄文	炉穴	－
F-26	Ⅰキ-18-2 号炉穴	縄文	炉穴	－
H-01	タ-18-1 号住	古代	住居跡	－
H-02	タ-18-2 号住	古代	住居跡	－
H-03	ツ-10-1 号住	古代	住居跡	－
H-04	ニ-20-1 号住	古代	住居跡	－
H-05	ヌ-16-1 号住	古代	住居跡	－
H-06	ノ-18-1 号住	古代	住居跡	－
H-07	ハ-16-1 号住	古代	住居跡	－
H-08	ヒ-25-1 号住	古代	住居跡	－
H-09	ヘ-24-1 号住	古代	住居跡	－
H-10	ヘ-24-2 号住	古代	住居跡	－
H-11	マ-15-1 号住	古代	住居跡	－
H-12	マ-18-1 号住	古代	住居跡	－
H-13	ミ-16-1 号住	古代	住居跡	－
H-14	ミ-20-1 号住	古代	住居跡	－
H-15	メ-09-1 号住	古代	住居跡	－
H-16	モ-10-1 号住	古代	住居跡	－
H-17	モ-14-1 号住	古代	住居跡	－
H-18	ヤ-26-1 号住	古代	住居跡	－
H-19	ユ-15-1 号住	古代	住居跡	－
H-20	ラ-14-1 号住	古代	住居跡	－
H-21	ラ-14-2 号住	古代	住居跡	－
H-22	ラ-14-3 号住	古代	住居跡	－
H-23	ラ-18-1 号住	古代	住居跡	－
H-24	ラ-19-1 号住	古代	住居跡	－
H-25	リ-15-1 号住	古代	住居跡	－
H-26	ル-14-1 号住	古代	住居跡	－
H-27	レ-19-1 号住	古代	住居跡	－
H-28	ワ-19-1 号住	古代	住居跡	－
H-29	Ⅰエ-11-1 号住	古代	住居跡	－
H-30	Ⅰエ-12-1 号住	古代	住居跡	－
H-31	Ⅰエ-17-1 号住	古代	住居跡	－
H-32	Ⅰキ-18-1 号住	古代	住居跡	－
H-33	Ⅰク-19-1 号住	古代	住居跡	－
D-100	ミ-10-1 土坑	古代	土坑	土坑
D-117	ム-5-1 土坑	古代	土坑	土坑
1号周溝	Ⅰイ-16 号周溝	古代	方形周溝	
M-1	Ⅰカ-15・16 溝	中近世	溝	－
M-2	マ-26・27 溝	中近世	溝	－
M-3	ス-41 ～タ-42 溝	中近世	溝	－
M-4	ム-35 ～モ-35 溝	中近世	溝	－
M-5	ム-36 ～モ-36 溝	中近世	溝	－
M-6	ホ-40 ～マ-44 溝	中近世	溝	－
M-7	ヒ-53 ～ム-48 溝	中近世	溝	－
M-8	ヘ-53 ～マ-53 溝	中近世	溝	－
M-9	ヨ-50 ～ル-53 溝	中近世	溝	－
D-453	ホ-54-1 土坑	中近世	土坑	土坑
D-454	ホ-56-1 土坑	中近世	土坑	土坑
D-458	ヘ-40-1 土坑	中近世	土坑	竪穴遺構
D-459	ホ-40-1 土坑	中近世	土坑	土坑
D-460	ホ-42-1 土坑	中近世	土坑	土坑
D-461	マ-43-1 土坑	中近世	土坑	土坑
D-462	マ-44-1 土坑	中近世	土坑	土坑
D-466A	ホ-46-1 土坑	中近世	土坑	土坑
D-466B	ホ-46-1 土坑	中近世	土坑	土坑
D-468	ホ-43-4.5 土坑	中近世	土坑	土坑
D-469	ル-54-1 土坑	中近世	土坑	地下式坑
D-470	ル-55-1 土坑	中近世	土坑	地下式坑
D-471	ル-55-2 土坑	中近世	土坑	地下式坑

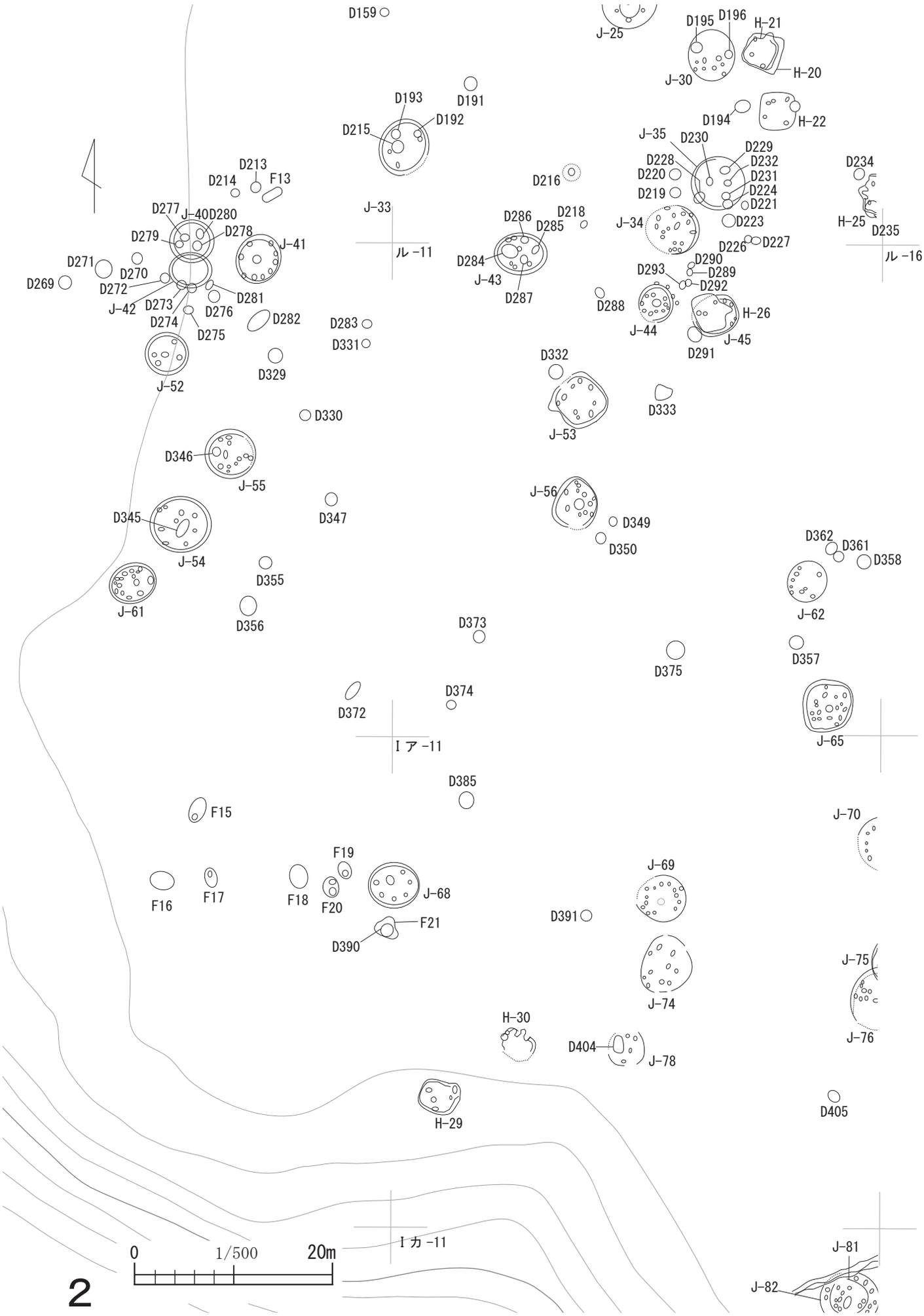
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 3
ア イ ウ エ オ カ キ ク ケ コ サ シ ス セ ソ タ チ ツ テ ト ナ ニ ヌ ネ ノ ハ ヒ フ ヘ ホ マ ミ ム メ モ ヤ ユ ヨ ラ リ ル レ ロ ワ ヲ ア イ ウ エ オ カ キ ク ケ
1
2
3
4
5
6
H-1
H-2
H-3
H-4
H-5
H-6
H-7
H-8
H-9
H-10
H-11
H-12
H-13
H-14
H-15
H-16
H-17
H-18
H-19
H-20
H-21
H-22
H-23
H-24
H-25
H-26
H-27
H-28
H-29
H-30
H-31
H-32
H-33
J1
J-2
J-3
J-4
J-5
J-6
J-7
J-8
J-9
J-10
J-11
J-12
J-13
J-14
J-15
J-16
J-17
J-18
J-19
J-20
J-21
J-22
J-23
J-24
J-25
J-26
J-27
J-28
J-29
J-30
J-31
J-32
J-33
J-34
J-35
J-36
J-37
J-38
J-39
J-40
J-41
J-42
J-43
J-44
J-45
J-46
J-47
J-48
J-49
J-50
J-51
J-52
J-53
J-54
J-55
J-56
J-57
J-58
J-59
J-60
J-61
J-62
J-63
J-64
J-65
J-66
J-67
J-68
J-69
J-70
J-71
J-72
J-73
J-74
J-75
J-76
J-77
J-78
J-79
J-80
J-81
J-82
J-83
J-84
J-85
C-01
C-03
C-04
C-05
C-06
C-07
C-08
C-09
C-10
C-11
A-1
A-3
A-4
M-1
M-2
FP-2
FP-3
FP-5
FP-10
方形周溝


35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68
7
9－3
8
9－1
9－2
0
1/2000
100m

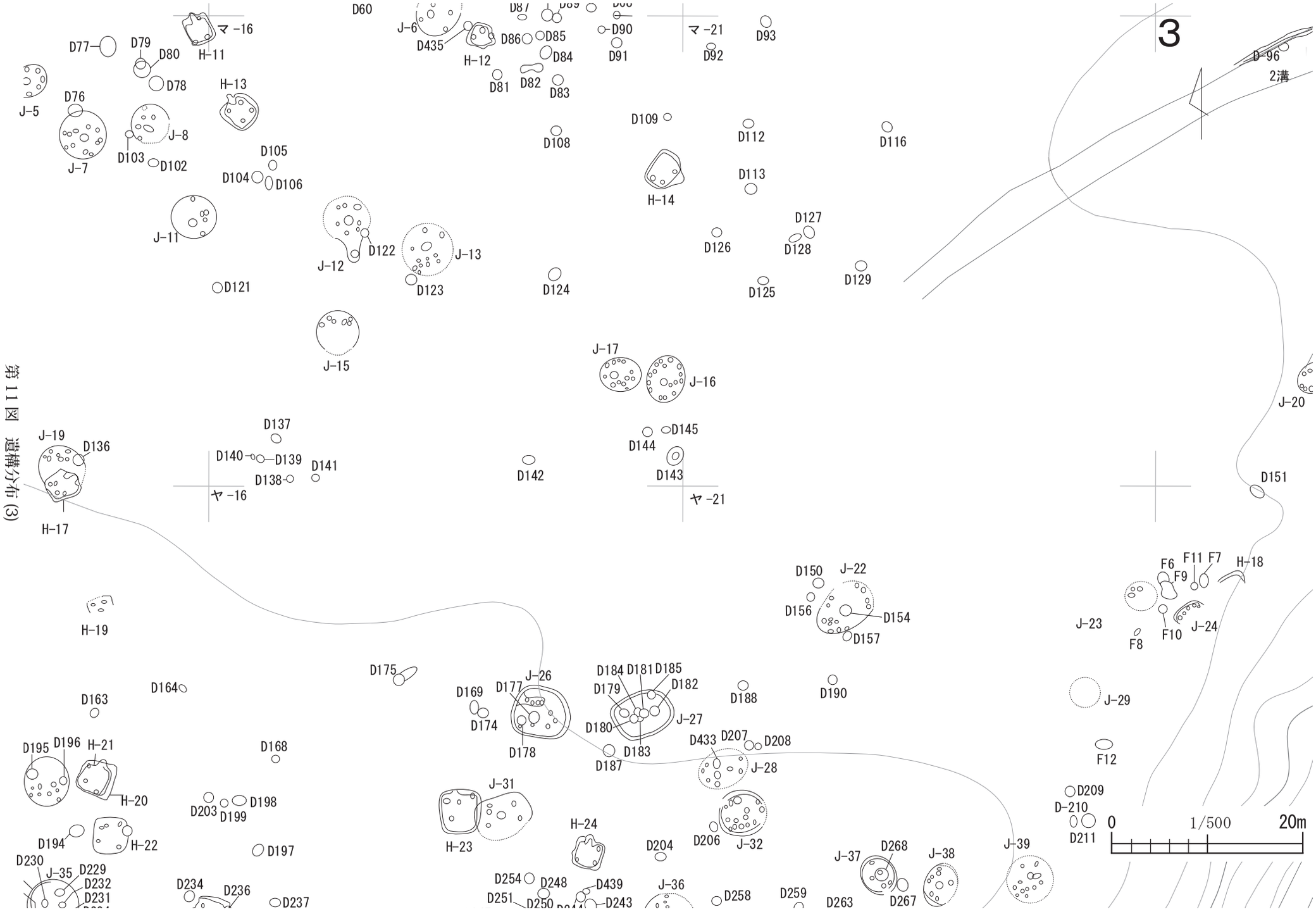
第８図　遺構分布索引図


D236
D237
H-25
D235
D294
D298
D240
D241
D254
D248
D439
D251
D243
D247
D244
D250
D245
D242
D249
D246
D317
J-50
D257
D255
D312
D310
J-47
D308
J-49
ル -21
J-46
D305
J-51
D327
D302
D300
D325
D306
D324
D299
D314
D313
D322
J-48
D337
D303
D320
D311
D323
D295
D301
D321
D335
D338
D316
D304
D334
D342
H-27
D340
D315
D343
D341
D344
D319
D318
D336
D351
J-58
D353
D352
J-57
J-60
D354
J-63
D444
D366
F14
J-59
D365
J-64
H-28
D370
D367
J-66
D378
D381
D379
D383
D380
I ア -16
I ア -21
D389
J-67
D387
J-70
D386
D393
D397
D434
方形周溝
D395
J-72
J-71
D394
D396
D398
J-75
J-77
J-73
H-31
D403
J-76
D400
D406
D410
J-79
D409
D413
D411
D412
D408
J-80
D414
D416
D415
D418
D422
D449
D424
D426
I カ -21
1溝
D423
J-83
F23
D425
F22
J-84
J-82
D427
H-32
D431
F26
D430
J-85
F24
F25
H-33
D428
1
0
1/500
20m

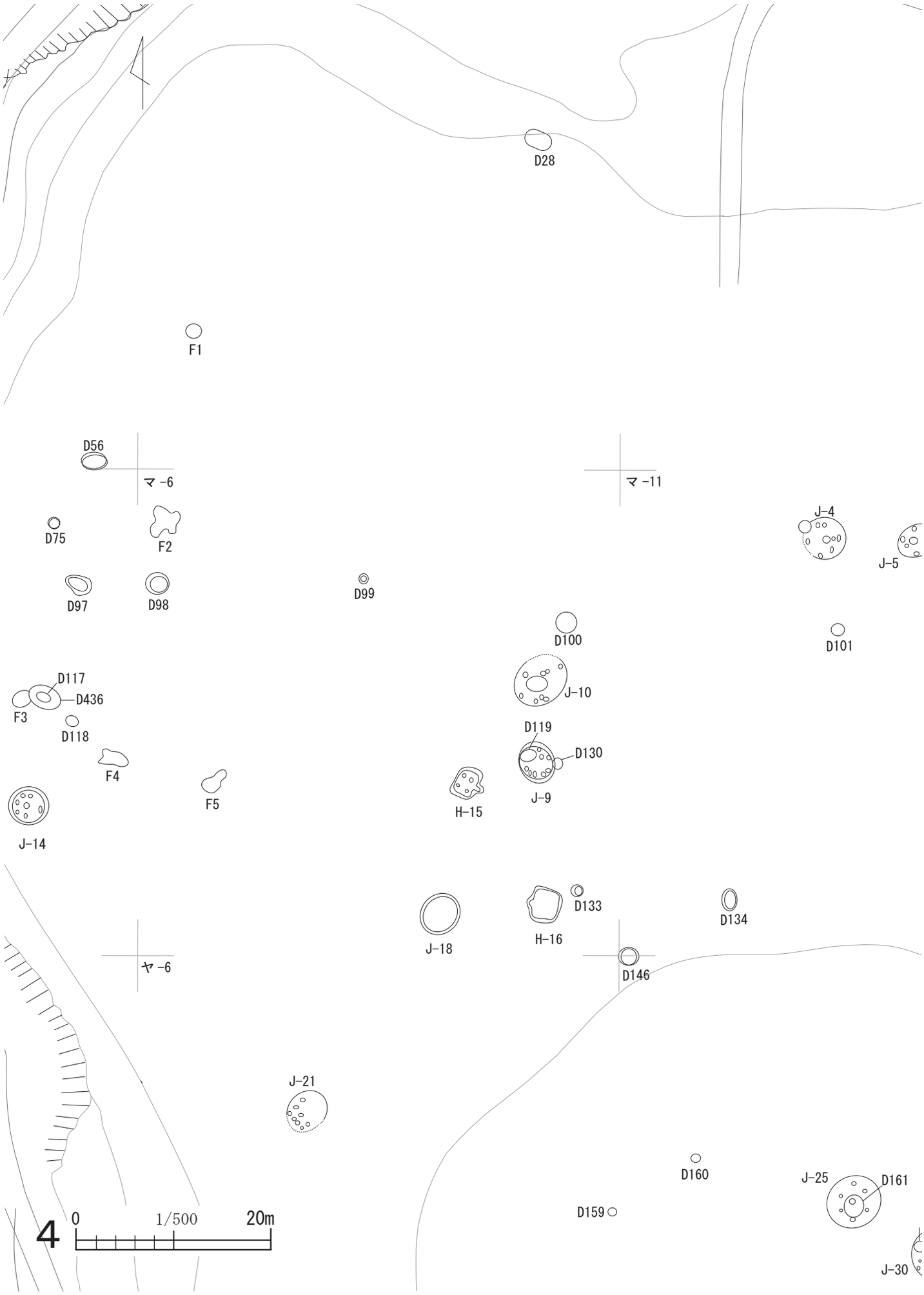
第９図　遺構分布 (1)


D159
J-25
D195
D196
H-21
J-30
H-20
D193
D191
D192
D215
D194
H-22
J-35
D230
D229
D228
D232
D220
D231
D219
D224
D221
D213
D214
F13
D216
D234
D277
J-40
D280
J-33
D286
D218
D285
J-34
D223
H-25
D235
D279
D278
J-41
ル-11
D226
D227
ル-16
D271
D270
D284
D290
D293
D289
D269
D272
J-43
D292
D287
D288
J-42
D273
D276
D281
H-26
D274
D282
D283
J-44
D275
J-45
D331
D291
D332
D329
J-52
D333
D330
J-53
D346
J-55
J-56
D345
D347
D349
D350
D362
D361
D358
J-54
D355
J-62
J-61
D356
D373
D375
D357
D374
D372
J-65
Iア-11
D385
F15
J-70
F19
J-69
F16
F17
F18
F20
J-68
D391
F21
D390
J-75
J-74
H-30
J-76
D404
J-78
D405
H-29
Iカ-11
0
1/500
20m
J-81
J-82
2

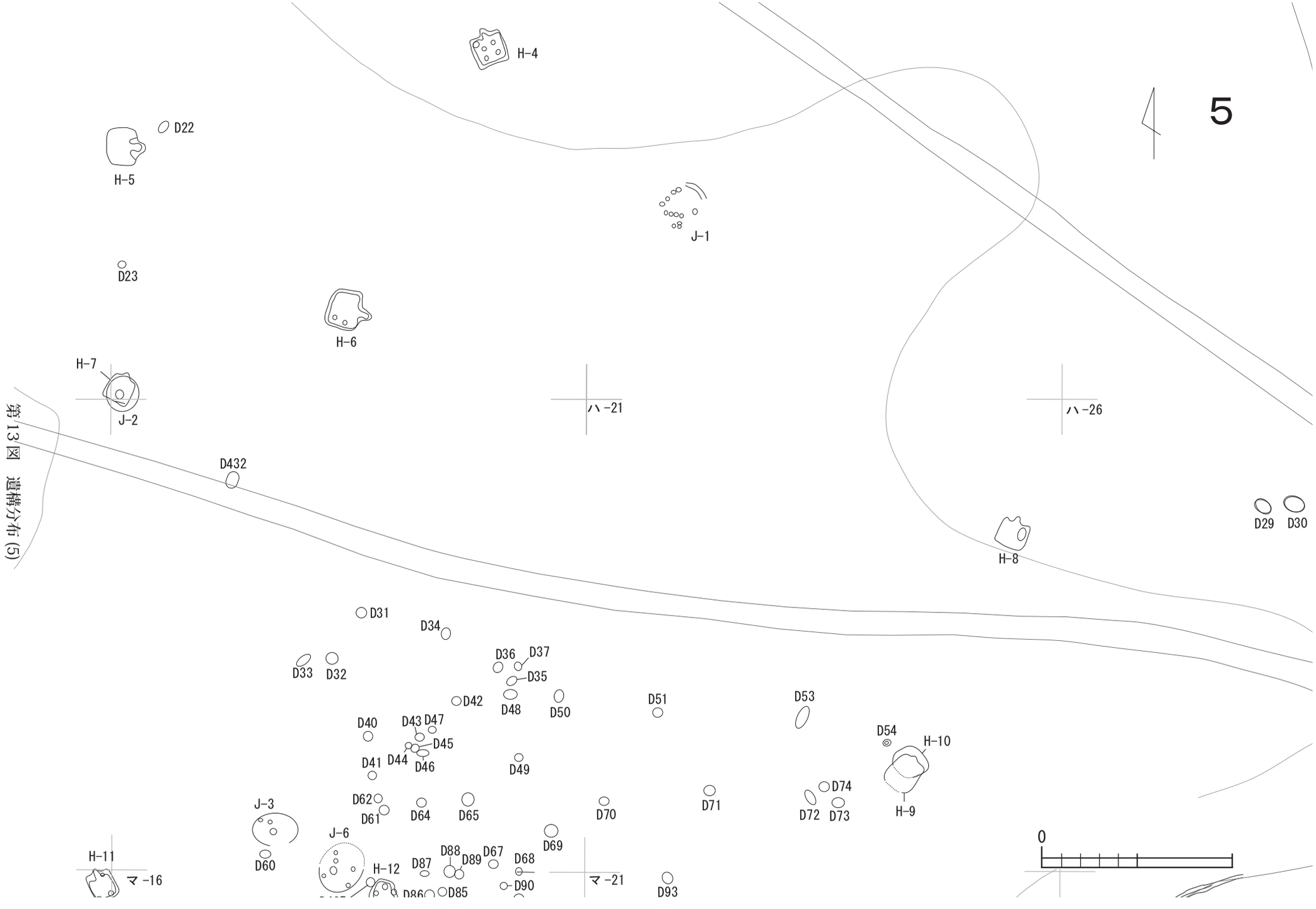
第 10 図　遺構分布 (2)


3
2溝
D-96
マ-16
マ-21
ヤ-16
ヤ-21
D60
D77
D79
D80
D78
H-11
H-12
H-13
H-14
J-5
J-6
J-7
J-8
J-11
J-12
J-13
J-15
J-16
J-17
J-19
J-20
J-22
J-23
J-24
J-26
J-27
J-28
J-29
J-31
J-32
J-35
J-36
J-37
J-38
J-39
H-17
H-18
H-19
H-20
H-21
H-22
H-23
H-24
D435
D81
D82
D83
D84
D85
D86
D87
D90
D91
D92
D93
D103
D102
D104
D105
D106
D108
D109
D112
D113
D116
D121
D122
D123
D124
D125
D126
D127
D128
D129
D136
D137
D138
D139
D140
D141
D142
D143
D144
D145
D150
D151
D154
D156
D157
D163
D164
D168
D169
D174
D175
D177
D178
D179
D180
D181
D182
D183
D184
D185
D187
D188
D190
D194
D195
D196
D197
D198
D199
D203
D204
D206
D207
D208
D209
D210
D211
D229
D230
D231
D232
D234
D236
D237
D248
D250
D251
D254
D258
D259
D263
D267
D268
D433
D439
F6
F7
F8
F9
F10
F11
F12
0
1/500
20m

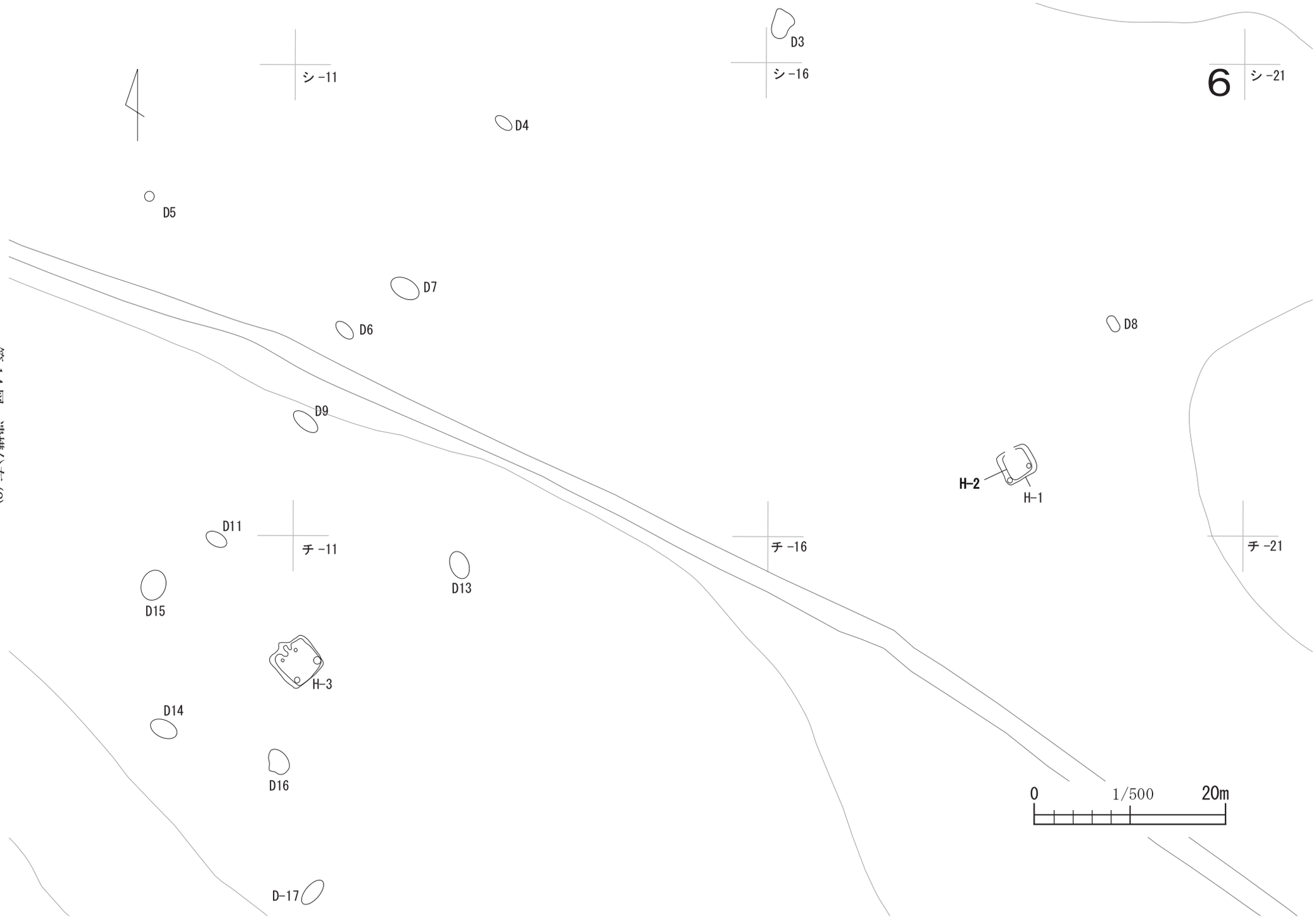
第11図　遺構分布(3)


D28
F1
D56
マ-6
マ-11
D75
F2
D97
D98
D99
D100
D101
J-4
J-5
D117
D436
F3
D118
F4
F5
J-10
D119
D130
J-9
H-15
J-14
J-18
D133
H-16
D134
D146
ヤ-6
J-21
D160
D159
J-25
D161
J-30
4
0
1/500
20m

第 12 図　遺構分布 (4)


5
H-4
D22
H-5
J-1
D23
H-6
H-7
J-2
ハ-21
ハ-26
D432
D29
D30
H-8
D31
D34
D33
D32
D36
D37
D35
D42
D48
D50
D51
D53
D40
D43
D47
D45
D41
D44
D46
D49
D54
H-10
H-9
D74
D72
D73
D62
D61
D64
D65
D70
D71
J-3
D60
J-6
D69
H-11
マ-16
D88
D89
D67
D68
D87
H-12
D90
D86
D85
マ-21
D93
0

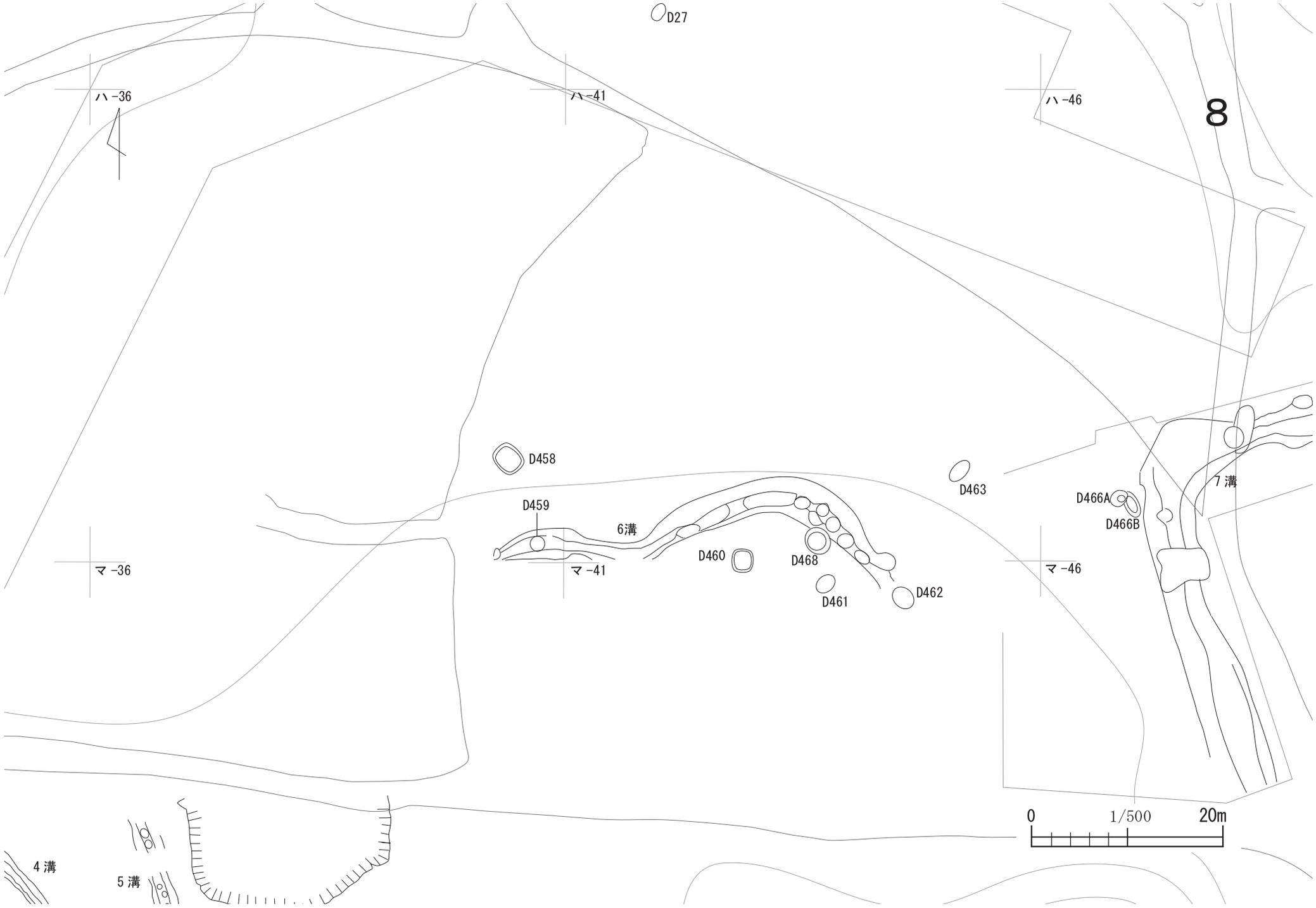
第13図　遺構分布(5)


D3
シ-16
6
シ-21
シ-11
D4
D5
D7
D6
D8
D9
H-2
H-1
D11
チ-11
チ-16
チ-21
D13
D15
H-3
D14
D16
D-17
0
1/500
20m

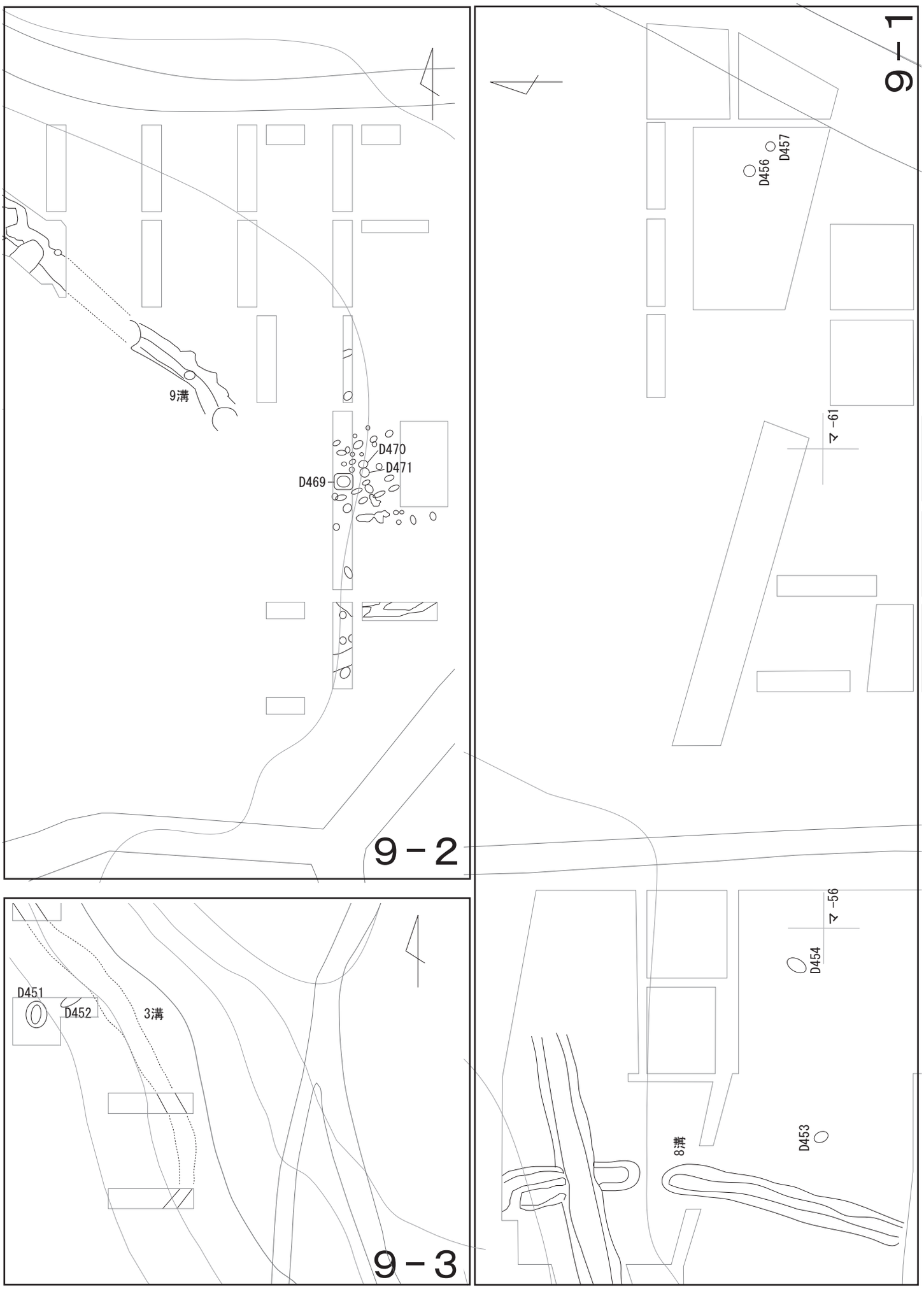
第14図　遺構分布(6)

A-4
C-01
カ -31
C-11
カ -36
7
C-04
C-08
C-09
A-1
S-1
FP-5
C-06
FP-4
C-10
M-2
FP-3
C-03
A-2
A-3
C-02
C-12
FP-2
サ -31
FP-1
M-1
サ -36
C-05
C-07
0
1/500
20m

第15図　遺構分布(7)


D27
ハ-36
ハ-41
ハ-46
8
D458
D459
6溝
D460
D468
D461
D462
D463
D466A
D466B
7溝
マ-36
マ-41
マ-46
4溝
5溝
0
1/500
20m

第16図　遺構分布(8)


9-1
D456
D457
マ-61
マ-56
D454
D453
8溝
9-2
9溝
D470
D471
D469
9-3
D451
D452
3溝
0
1/500
20m

第 17 図　遺構分布 (9)

第２章　旧石器時代

第１節 概要

旧石器時代に関する遺物は、遺跡の南西部を中心に分布する (第 18 図)。Ⅸｃ層上部からⅢ層より５つの文化層が確認され、総点数 1,024 点の石器が出土した。ブロック出土石器の器種の内訳は、ナイフ形石器６点、尖頭器１点、細石刃２点、彫器２点、掻器７点、打面再生剥片５点、稜付剥片２点、二次加工のある剥片 22 点、微細剥離痕のある剥片 26 点、剥片 474 点、砕片 243 点、細石刃核１点、石核 34 点、敲石１点、礫 174 点、礫片４点である。単独出土石器の内訳は、ナイフ形石器３点、尖頭器６点、有舌尖頭器４点、二次加工のある剥片１点、楔形石器１点、剥片４点、局部磨製石斧１点である。

平面分布は、遺跡の南西部と、南西部と東部の境界部分のおおきく二つに分かれる。南西部と東部の境界部分には第 11 ブロックと第 12 ブロックが位置し、大池により浸食された谷頭の台地上に位置している。南西部には第１ブロック～第 10 ブロック、第 13 ブロックが存在する。なかでも、第５ブロック～第 10 ブロック、第 13 ブロックの石器ブロックは集中して分布する (南西部石器集中部 (第 26 図))。なお、第２期工事調査区 (遺跡北部) の調査報告書において、３つの旧石器時代の石器ブロックが報告されている (田中・簗瀬他 1988)。

１　調査区の設定

第１章で述べたように、10m の方眼グリッドが設定され、第 11 ブロックおよび第 12 ブロックにおいては方眼が４つに細分されａ～ｄと呼称されている (第３図)。一方で、南西部の第１ブロック～第 10 ブロック・第 13 ブロックに関しては、10 m方眼が東西５つ南北５つに細分され、一辺２m のグリッドが合計 25 形成されている。そして、北側より、東から西へ１・２・３・・と呼称されている。

２　文化層

石器の出土標高から理解される垂直分布などから文化層を設定した。本来であれば、写真などから出土層位等を詳細に検証し文化層を決定すべきであるが、情報が限られており困難を極めた。そのため、標高の数値とセクション図に依拠し、文化層を設定した。

第１文化層：第１ブロック、第２ブロックで構成される。Ⅸｃ層上部からⅦ層を中心に石器が分布する。

第２文化層：第３ブロック、第４ブロックで構成される。Ⅶ層上部からⅥ層を中心に分布する。

第３文化層：第５ブロック～第 10 ブロックで構成される。おもにⅤ層からⅣ層を中心に分布する。

第４文化層：第 11 ブロック、第 12 ブロックで構成される。Ⅳ層上部からⅢ層を中心に分布する。

第５文化層：第 13 ブロックで構成される。詳細な層位は不明であるが、Ⅲ層のあたりに分布すると考えられる。

このほかに、Ⅸｃ層の下面から出土した局部磨製石斧と、Ⅲ層から出土した有舌尖頭器などを単独出土資料として扱った。

なお、器種分類における「砕片」は最大長が 10mm 未満の石器を、「剥片」は最大長が 10mm 以上の石器を示す。

第２節　文化層

１　第１文化層

第１ブロックと第２ブロックが存在する。Ⅸｃ層上部からⅦ層より遺物が出土した。各ブロックとも遺跡の南西部に位置し、ブロック間の接合は認められない。

第１ブロック　(第 19 図・図版８)

出土状況　Ｉウ -12-11 グリッドに南北約４m、東西約７m の範囲に散漫に分布している。出土点数は６点である。器種内訳は、ナイフ形石器１点、二次加工のある剥片１点、剥片４点である。石材は、黒曜石３点、安山岩１点、チャート１点、碧玉 (赤玉)1 点である。石器の垂直分布が記されたセクション図が確認されたので掲載した。Ⅸｃ層上部からⅦ層に遺物が分布している。

出土遺物　１はナイフ形石器である。石材は青灰色のチャートである。器体左側縁上部、および右側縁中央部、裏面の基部に調整が加えられている。素材剥片の打面には打面調整が認められる。２は黒曜石製の二次加工のある剥片である。黒曜石には白い球顆がみられる。主剥離面の下部などに二次加工がみられ、また打面は平坦な自然面である。３は碧玉 (赤玉) 製の剥片である。打面は自然面であり、また器体末端は折損している。４は器体左部が折損している剥片である。白い夾雑物が含まれる黒曜石を素材としている。器体背面の右半分は平坦な自然面に覆われている。

第２ブロック (第 20・21 図)

出土状況　ヲ -20-25 グリッドを中心に南北約６m、東西約２m の範囲に石器が分布している。石器の出土標高は 26.687m ～ 27.108m で、標高差は 0.421m である。

遺物の垂直分布が記された二つのセクション図が確認できたので掲載した。第 20 図下部のセクション図では、Ⅶ層とⅨａ層 (当時の層序ではⅧ層) が二層に分けられており、上層に「BB Ⅰ」と書かれている。一方で、Ⅸｃ層には BB Ⅱと記載されている。また、①の層には「暗褐色土中に炭化物を大量に含む。しまりはよく、粘性あり」と記載されている。第 20 図上部のセクション図には「BB」と「BB Ⅱ」のみが記載されていたため、これらをもとに層位を予測した。その結果、Ⅸａ層からⅦ層に石器が分布することが推測された。

出土点数は 31 点で、器種の内訳は二次加工のある剥片１点、剥片 24 点、砕片１点、石核２点、礫３点である。石材は玉髄が 19 点、チャート６点、黒曜石１点、安山岩１点、不明４点である。透明度の高い黄色～琥珀色の玉髄が特徴的である。

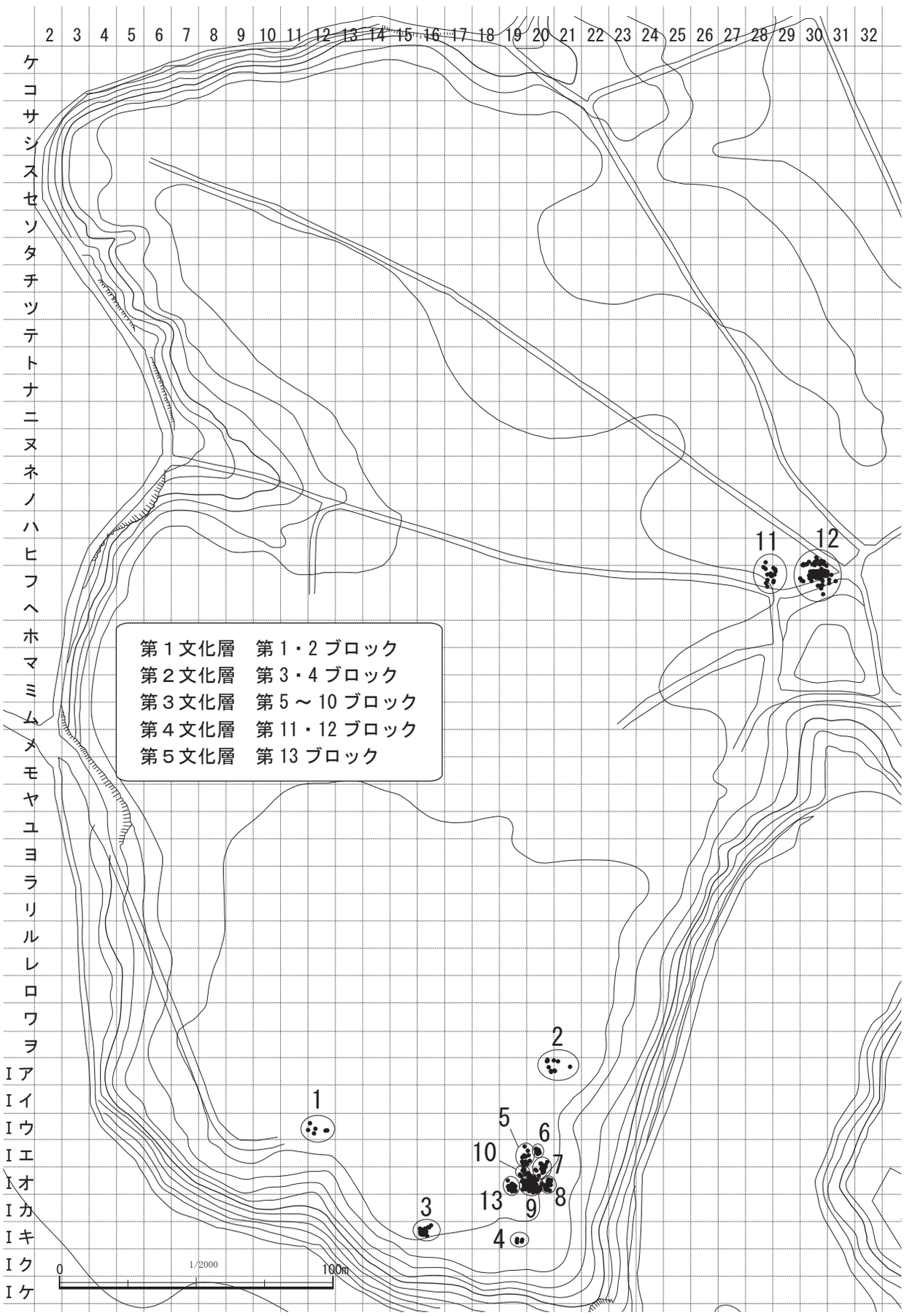
出土遺物　１は玉髄製の剥片である。平滑な自然面を打面とする。２は接合資料である。チャートを素材とした石核に剥片が接合した。上面を打面として剥片剥離が行われ、サイコロ状を呈する。

２　第２文化層

第２文化層は、第３ブロックと第４ブロックで構成される。Ⅶ層からⅥ層に石器が分布する。両ブロックの距離は約 25m であり、ブロック間の接合関係は認められない。また、石材などの特徴も異なることから、両ブロックの関連性は低いと考えられる。

第３ブロック (第 22 ～ 24 図・図版８)

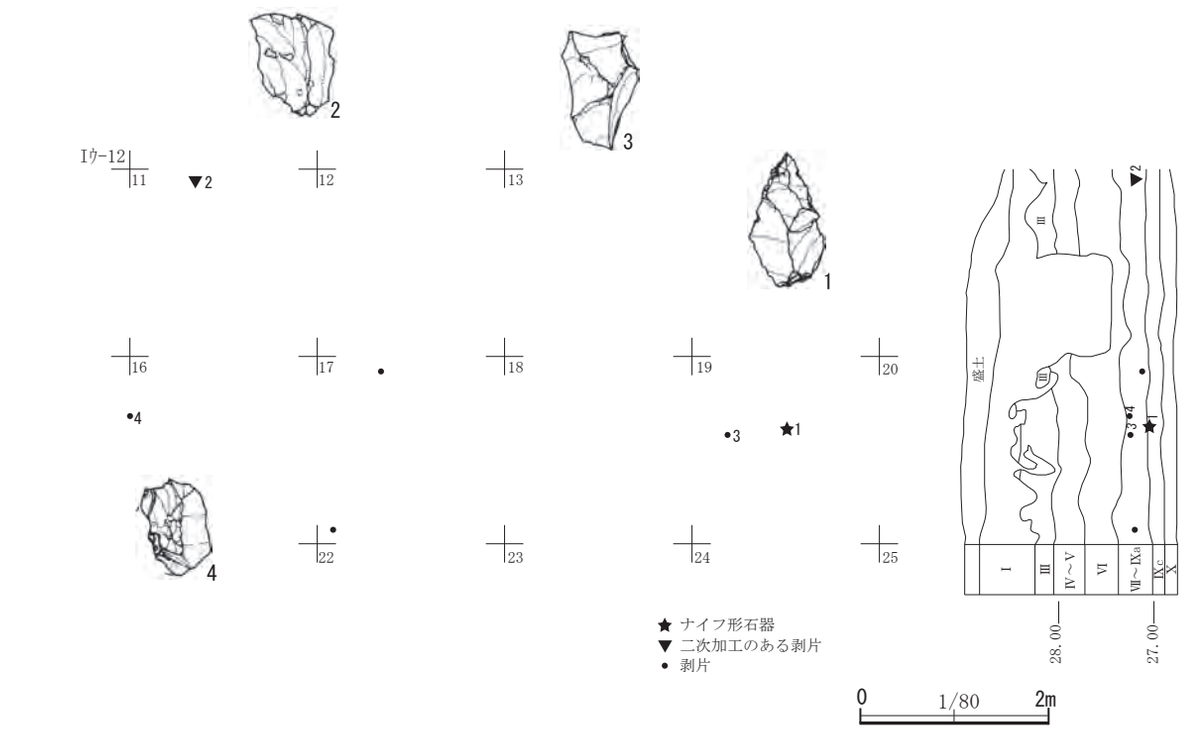
出土状況　第３ブロックは遺跡の南端部に位置する。Ｉキ -16- ７グリッドを中心に南北約６m、東西約４m に石器が分布している。石器の出土標高は 25.978m ～ 27.009m で、標高差は 1.031m である。遺物はⅦ層上部からⅥ層を中心に分布している。出土点数は 263 点で、器種の内訳は二次加工のある剥

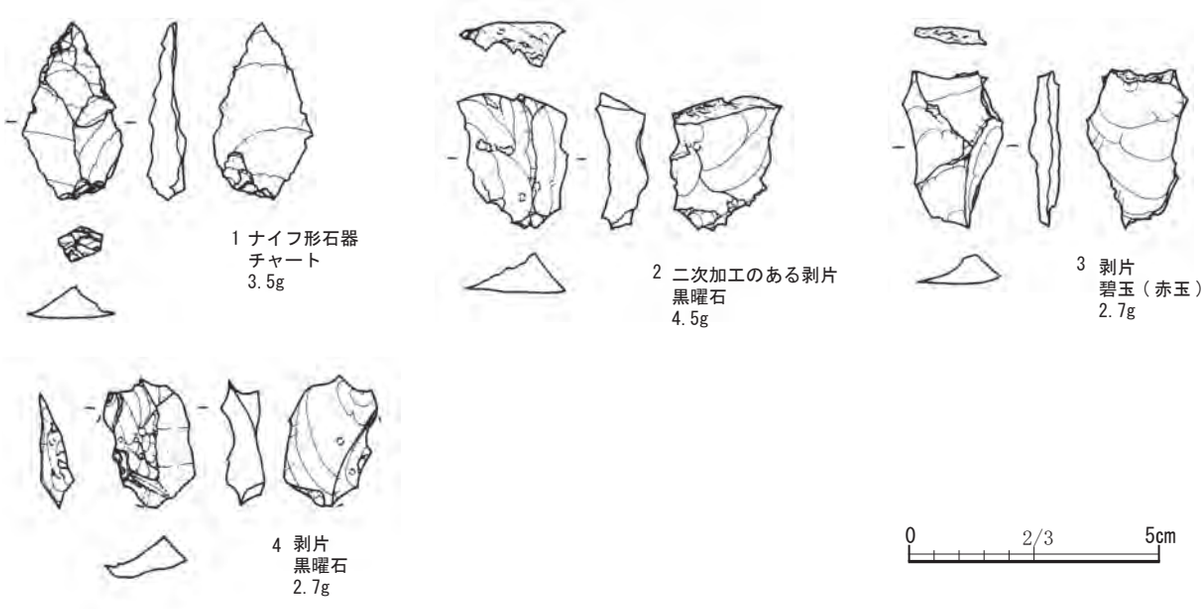


第 18 図　餅ヶ崎遺跡旧石器ブロック位置図

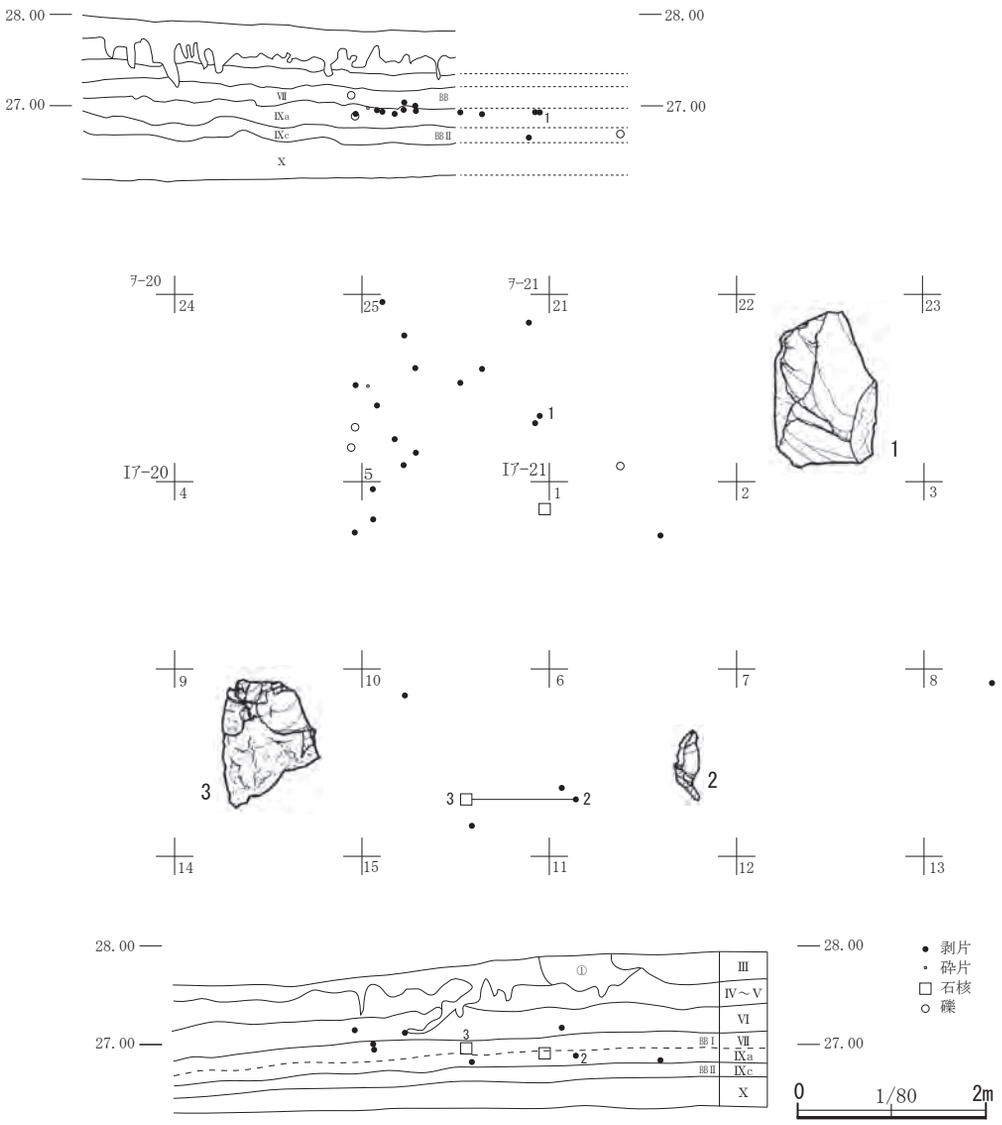
片 1 点、微細剥離痕のある剥片 2 点、打面再生剥片 2 点、石核 8 点、剥片 149 点、砕片 91 点、礫 10 点である。石材はガラス質黒色安山岩が 222 点と 8 割以上を占める。同石材の石核が複数出土しており、円礫状の自然面が残存しているものが多くみられる。

出土遺物　1 は打面再生剥片であり、頭部調整が顕著に施されている。右側面には円礫状の自然面が確認できる。2 ～ 8 はガラス質黒色安山岩製の剥片である。2 は背面に円礫状の自然面の残し、単剥離打面を有する。Ⅰキ -16-6 グリッドの撹乱層から出土した剥片と剥離面が接合する (後述)。3 は複剥離打面を有する。4 は上部と下部が欠損しており、また背面左側縁の上部の剥離面はガジリである。5 は背面に

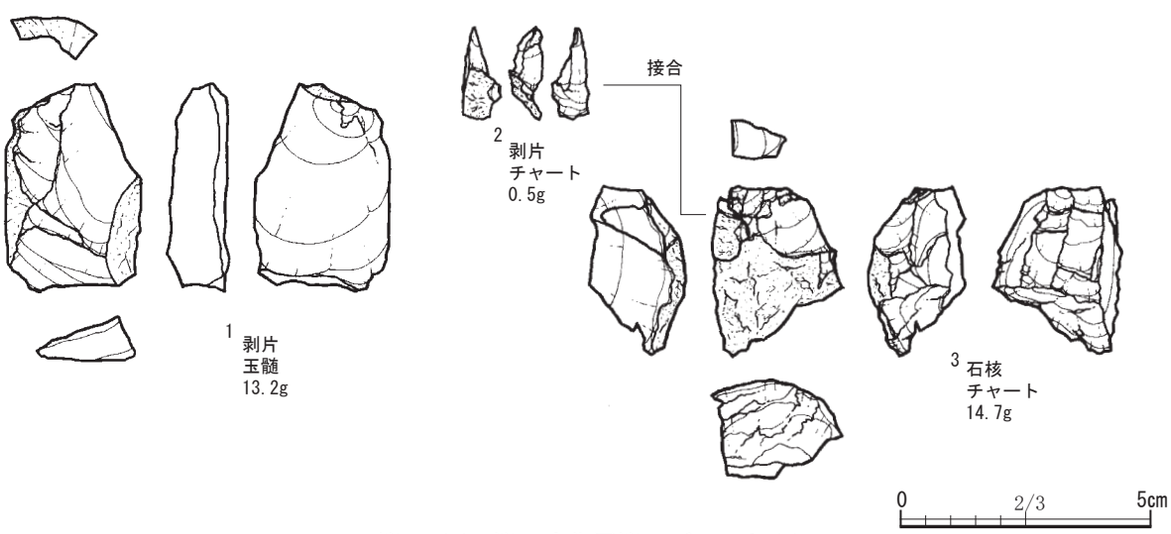




第 19 図　第 1 文化層第 1 ブロック



第 20 図　第 1 文化層第 2 ブロック (1)



第 21 図　第 1 文化層第 2 ブロック (2)

円礫状の自然面が残り、下部が折損している剥片である。打面は複剥離打面である。６も円礫状の自然面がみられる。打面は、リングの形状から、主剥離面側、つまり石核の作業面と反対側からの加撃により形成されたと理解される。７は２点が接合している資料であり、上部がⅦ層から、下部が撹乱層から出土した。頭部調整が施されており、また接合部より下部が主剥離面側に内湾している。８は背面にある剥離面が剥離されたのち、90 度打面が転位されている。打面調整および頭部調整ともにあまり顕著ではない。９は嶺岡産珪質頁岩を石材とする剥片である。自然面を打面とし、背面にも大きく自然面が残存している。10 ～ 15 は石核である。10 は黒曜石、14 は嶺岡産珪質頁岩、そして他の資料はすべてガラス質黒色安山岩を母岩とする。10 は黒曜石を素材とする石核である。裏面は風化が著しかったため古い剥離面と判断したものの、人為的に形成された剥離面が何らかの理由で風化が進んだ可能性も存在する。この裏面を打面として剥片が剥離されている。黒曜石には直径 5mm 程度の球顆が多く含まれる。11 は表面右側より剥離が施されたのち、90 度打面が転位され、剥片剥離が実施されている。12 は裏面において左側から剥片剥離が行われたのち、反対側の右側から剥離が実施される。そして打面を 90 度展開し、表面における剥片剥離が行われると考えられる。打面調整および頭部調整が施されている。なお、図示できなかったが裏面左側から形成された剥離面は、図版写真８の剥片 (18) の主剥離面と接合する。剥片（18）には、12 の石核と同様に顕著な頭部調整が認められる。13 は正面の小口面とその左右の面が作業面である。打面調整が顕著に認められ、また背面調整も確認できる。裏面側には自然面が残存していることから、作業面がある程度固定され作業が進行した可能性も考えられる。14 は嶺岡産珪質頁岩製の石核で、裏面は大きく自然面で覆われている。器体上面を打面とした剥片剥離が行われたのち、自然面を打面として 180 度反対側から剥片が剥離される。15 は円礫状の自然面が大きく残り、その反対側の面から剥片剥離が行われている。打面調整および頭部調整が施されている。打面の転位等は認められず、13 と同様に、作業面がある程度固定され作業が進行したと理解できる。16 と 17 は接合資料であり、石材はすべてガラス質黒色安山岩である。16 は剥片が２点接合した資料である。打面転位等はみられない。17 も剥片が２点接合した。剥片 (2) が剥離されたのち、節理面を打面として左側の小形の剥片が剥離されたと考えられる。

第４ブロック (第 25 図)

出土状況　第４ブロックは、第３ブロックより約 40m 東方に位置する。Ⅰキ -19-19 グリッドを中心に、南北約 1m、東西約 2m に石器が分布している。遺物の出土標高は 25.558m ～ 26.052m で、標高差は 0.494m である。

石器の垂直分布が記された層序図が確認されたので掲載した。遺物はⅦ層からⅤ層にかけて分布する。Ⅸｃ層に「BB」とあり、他地点の層位状況からこれは BB Ⅱを指す可能性が高い。また、層中の①～④には以下のとおり記載されていた。

①やや黒色がかった土、粘性弱い

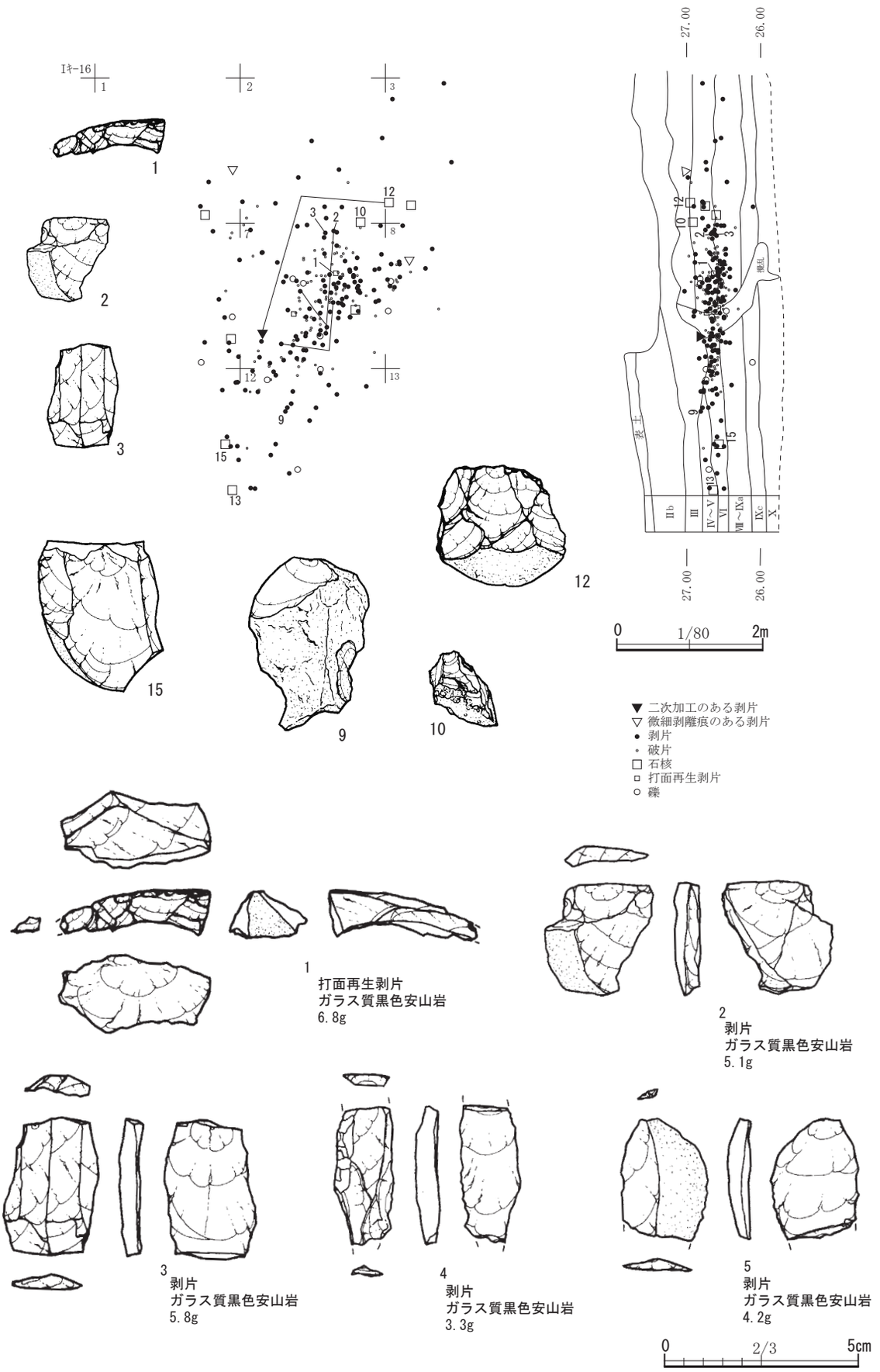
②やや明るい茶色の土、粘性非常に弱い

③褐色土に近い土、粘性、しまりやや有り

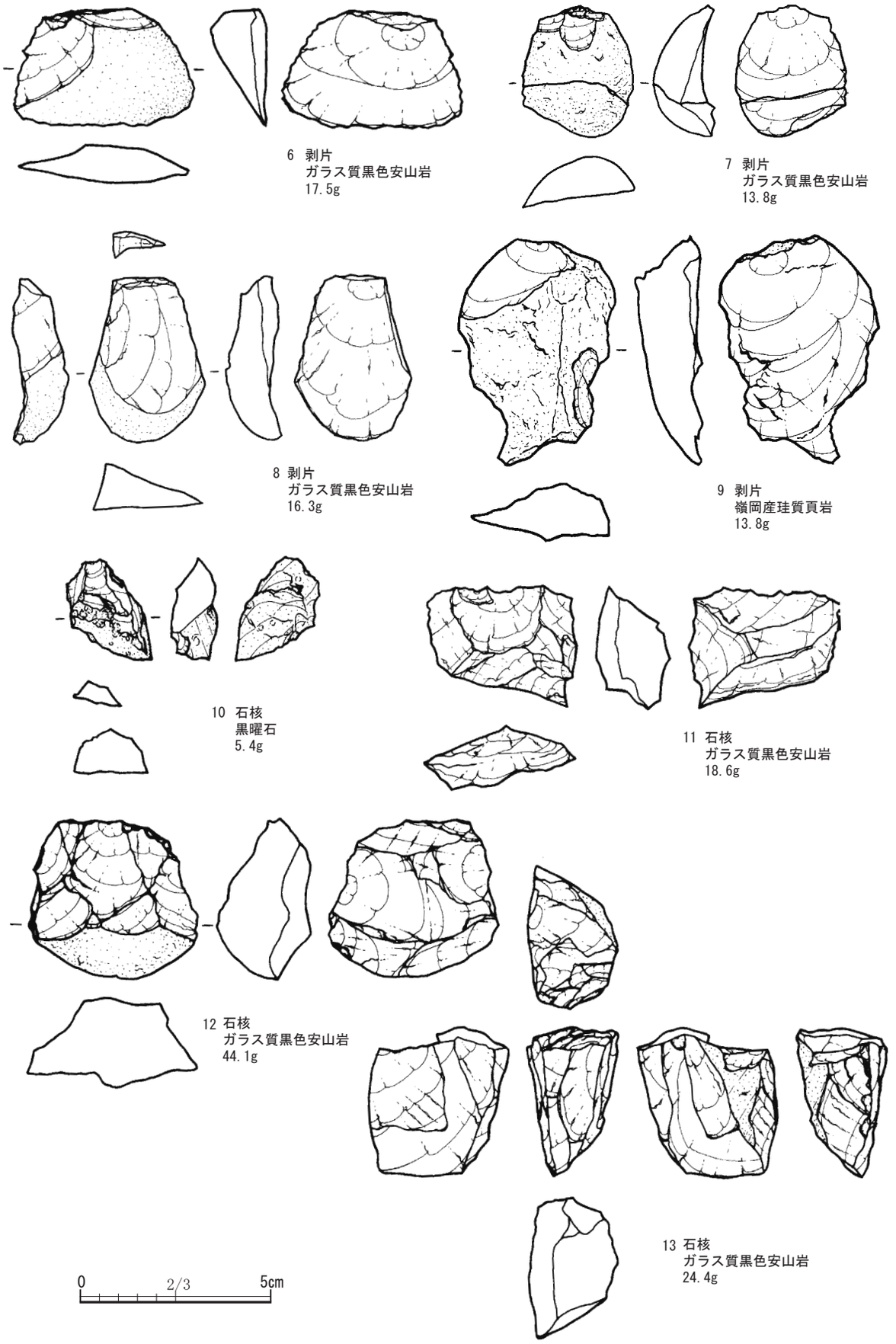
④濃褐色土、直径５～６mm のこげ茶色の粘土粒を多く含み炭化物多し

出土点数は５点である。器種の内訳は剥片３点、石核２点である。石材は黒曜石２点、玉髄２点、ガラス質黒色安山岩１点である。接合資料は認められない。

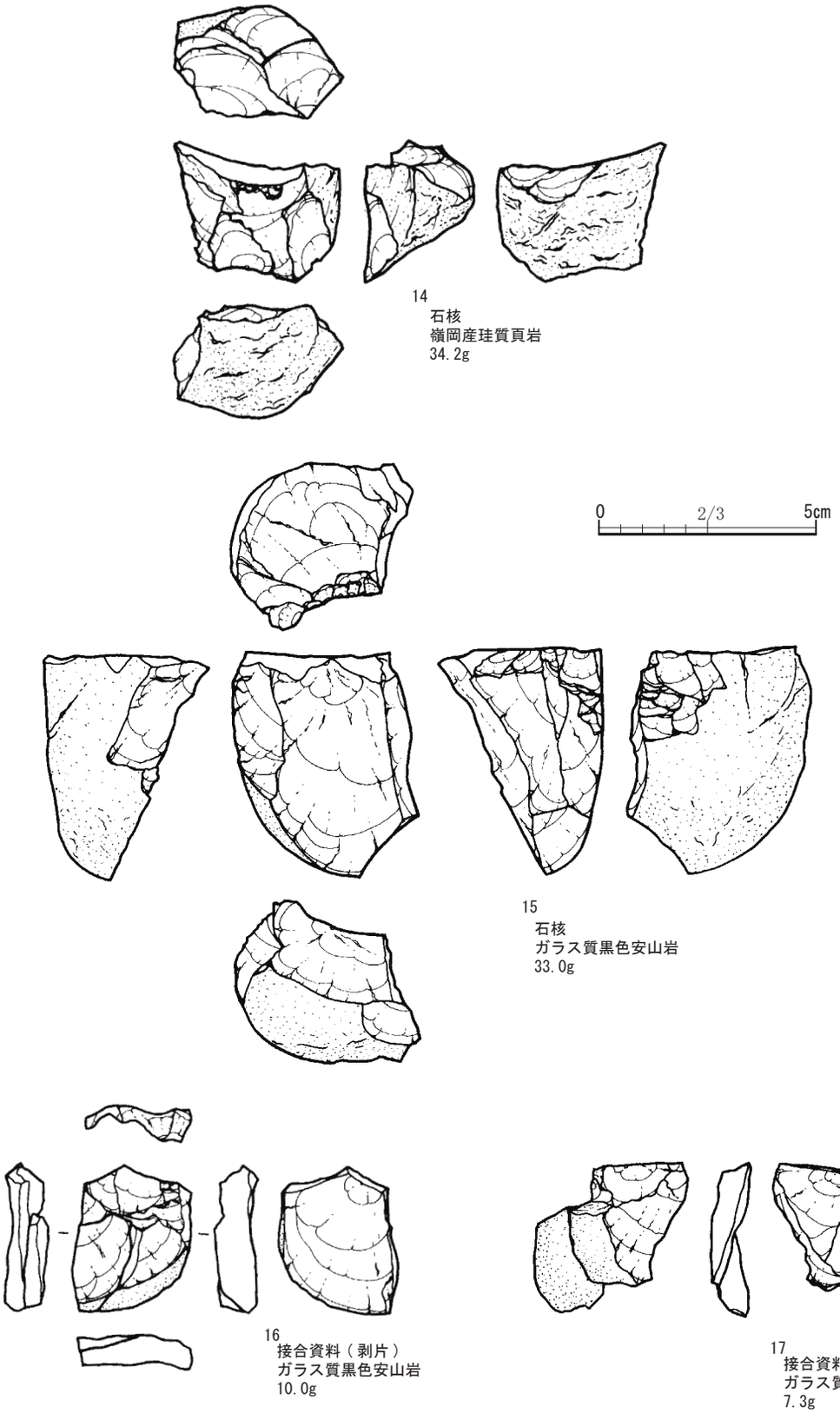
出土遺物　１、２ともに小さい球顆が混入する黒曜石を原石とした石核である。１は表面、裏面に古い剥離面が確認される。２も古い剥離面、および平滑な自然面が残される。表面の剥離面を打面として、裏面に剥片剥離が行われている。



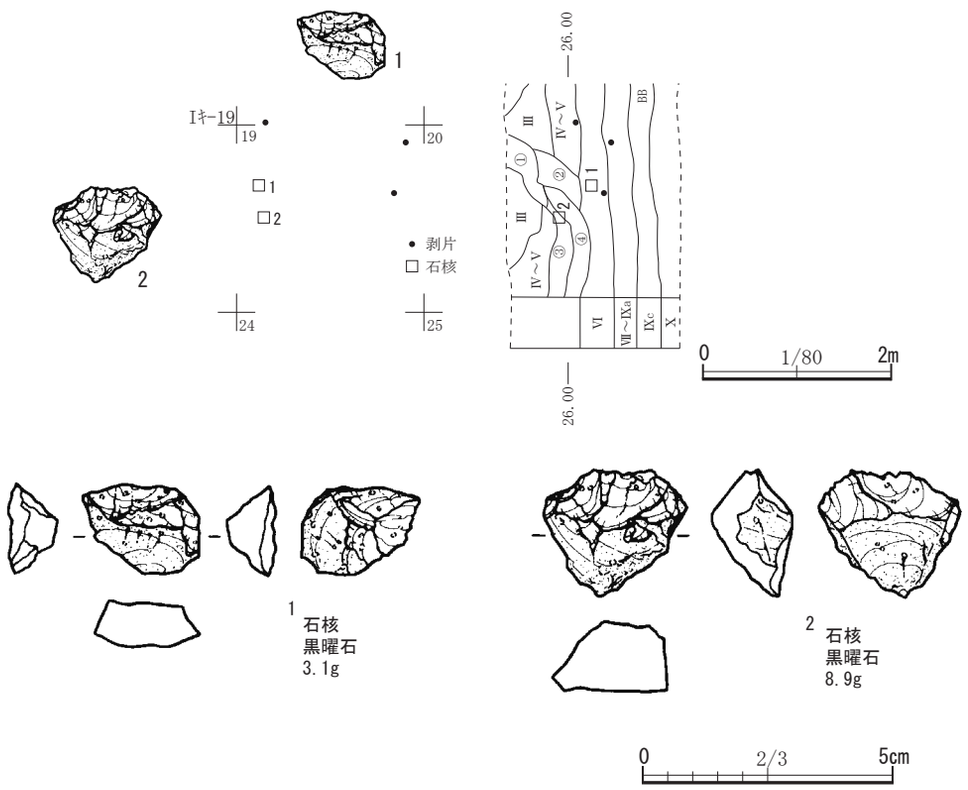
第 22 図　第 2 文化層第 3 ブロック (1)



第 23 図　第 2 文化層第 3 ブロック (2)



第 24 図　第 2 文化層第 3 ブロック (3)



第 25 図　第 2 文化層第 4 ブロック

3　第 3 文化層

第 3 文化層は、第 5 ブロック～第 10 ブロックで構成される。本文化層の石器ブロックは、遺跡南西部において南北約 16m、東西約 12m の範囲に石器ブロック集中部を形成している (第 26 図)。石器の垂直分布はⅥ層上部からⅣ層に認められる。一部、第 8 ブロックと第 9 ブロックなどにブロック間の石器接合が認められる。

第 5 ブロック (第 27・28 図・図版 8)

出土状況　第 5 ブロックは、石器ブロック集中部の北部に位置する (第 26 図)。Ⅰエ -19-25 グリッドを中心に南北約 4 m、東西約 2 m に石器が分布している。Ⅰエ -19-19 グリッドからⅠエ -20-17 グリッドの北面で計測されたセクション図に遺物の標高を落とした。その結果、Ⅵ層からⅣ層に垂直分布がみられた。

出土点数は 17 点で、二次加工のある剥片 1 点、剥片 9 点、石核 1 点、礫 6 点が確認された。石材は硬質頁岩 5 点、ホルンフェルス 4 点、チャート 3 点、黒曜石 2 点、ガラス質黒色安山岩 2 点、嶺岡産珪質頁岩 1 点である。

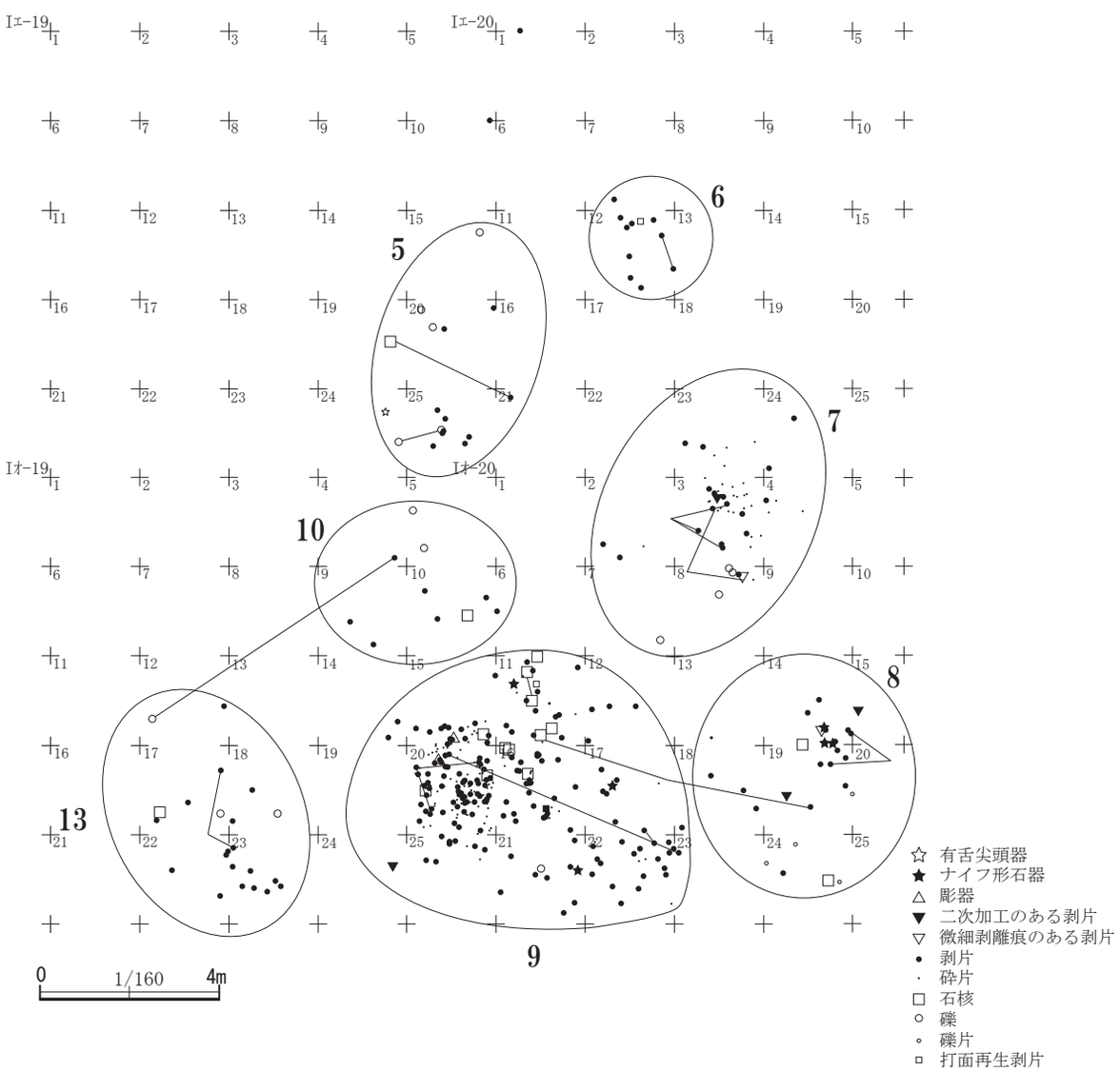
出土遺物　1 は上部が欠損している二次加工のある剥片である。透明度のある黒曜石を素材としており、主剥離面の下部に二次加工がみられる。2 はホルンフェルスを素材とした剥片である。打面は複剥離打面で、背面右上部には打面調整も認められる。器体右半分には平滑な円礫面が残存している。3、4、9 は硬質頁岩製で、同一母岩と考えられる。4 は器体右半分が欠損している剥片である。打点が残存していないため不明であるが、縦長剥片であった可能性も考えられる。器体下部には円礫状の自然面が残存している。また、器体背面の左下部には先行剥離面を打面とした加工が認められるが、これと主剥離面との切り

合い関係は不明瞭である。５は嶺岡産珪質頁岩製の剥片である。打面部分が折損しており、打点は認められない。右側面を打面として、背面に一部加工が施されている。９は硬質頁岩を石材とした稜柱形の石核である。打面調整は限定的だが、頭部調整は施されている。裏面に残る自然面は４に残存する自然面と同様の形状である。９に３の剥片が接合したものが 10 である。３の打面は９の打面と同じ高さであり、打面調整があまり顕著でないことが分かる。

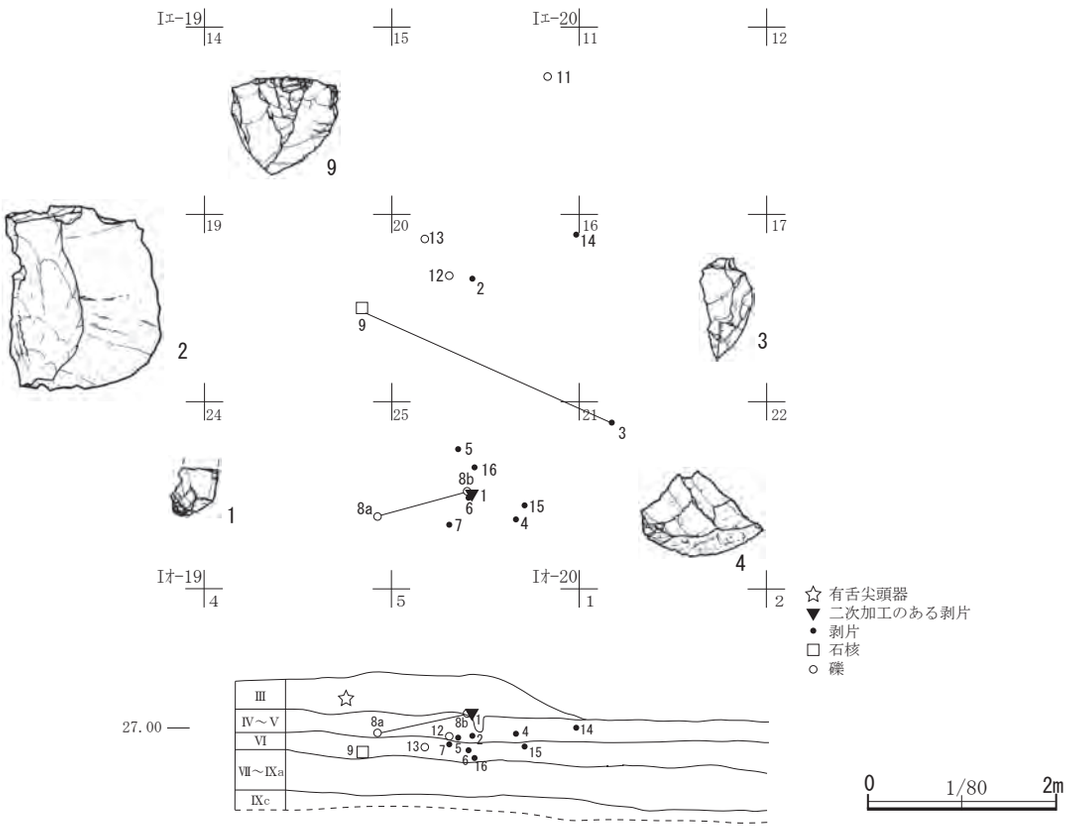
第６ブロック（第 29・30 図・図版８）

出土状況　南西部における石器ブロック集中部の北部に存在する（第 26 図）。Ⅰエ -20-12 グリッドを中心に、南北約２m、東西約２m に石器が分布している。石器の出土標高は 26.660m ～ 27.044m で、標高差は 0.384m である。Ⅰエ -20-16 グリッド北面の層序図に遺物の標高を照らし合わせたところ、Ⅵ層～Ⅳ層にかけて石器が分布すると分かった。

出土点数は 12 点で、器種の内訳は打面再生剥片１点、剥片 11 点である。石材は硬質質頁岩５点、玉髄７点と、二種類の岩石で構成されている点が特徴的である。



第 26 図　南西部石器集中部 石器ブロック分布図

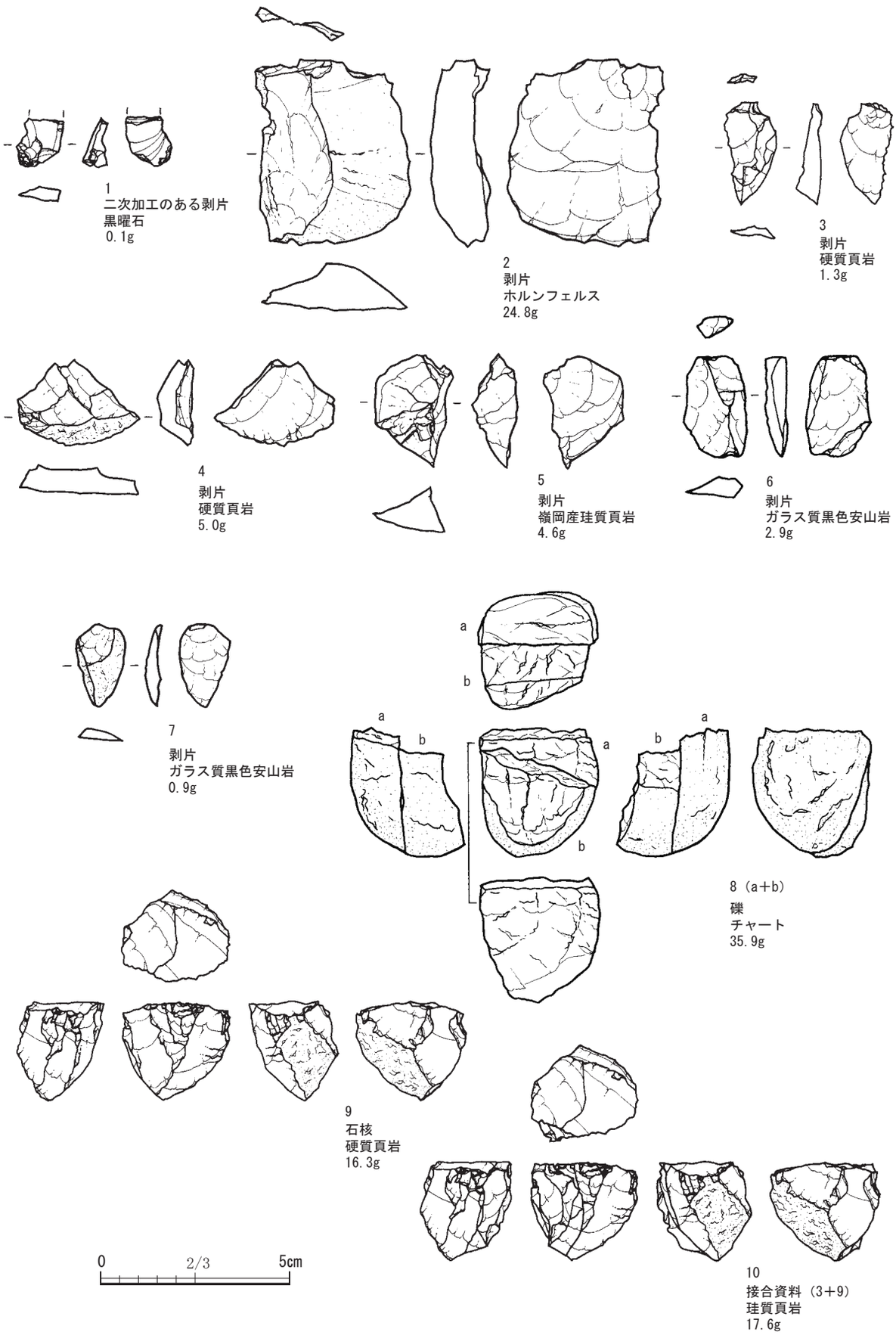


第 27 図　第 3 文化層第 5 ブロック (1)

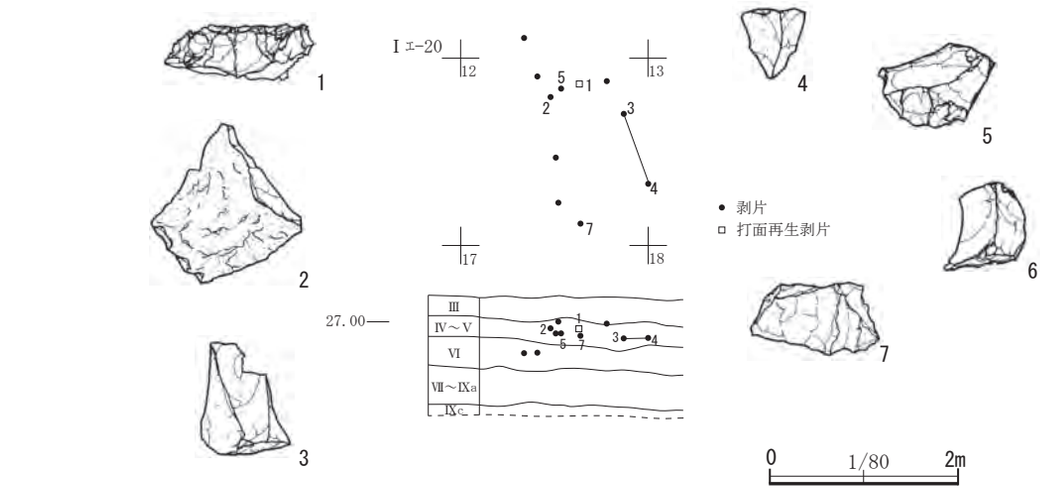
出土遺物　1 は玉髄を素材とする打面再生剥片である。頭部調整が顕著であることが理解できる。玉髄は全体が薄い黄色で端部が琥珀色を呈する。 2 は硬質頁岩製の剥片で、打面は単剥離打面である。器体背面は円礫状の自然面に覆われている。 3 と 4 は接合し、10 となる。 4 は自然面を打面としている。 3 との接合状態 (10) を観察すると、打点が 180 度転位していることが理解される。 5 は 6 と接合する (11)。ともに円礫状の自然面を打面とし、打面転位は確認できない。本ブロックの硬質頁岩、すなわち 2 ～ 6 は色調や石質、自然面の形状等から同一母岩である可能性が高い。また、玉髄 1 、 8 、 9 も同様の理由から同一母岩の可能性が考えられる。

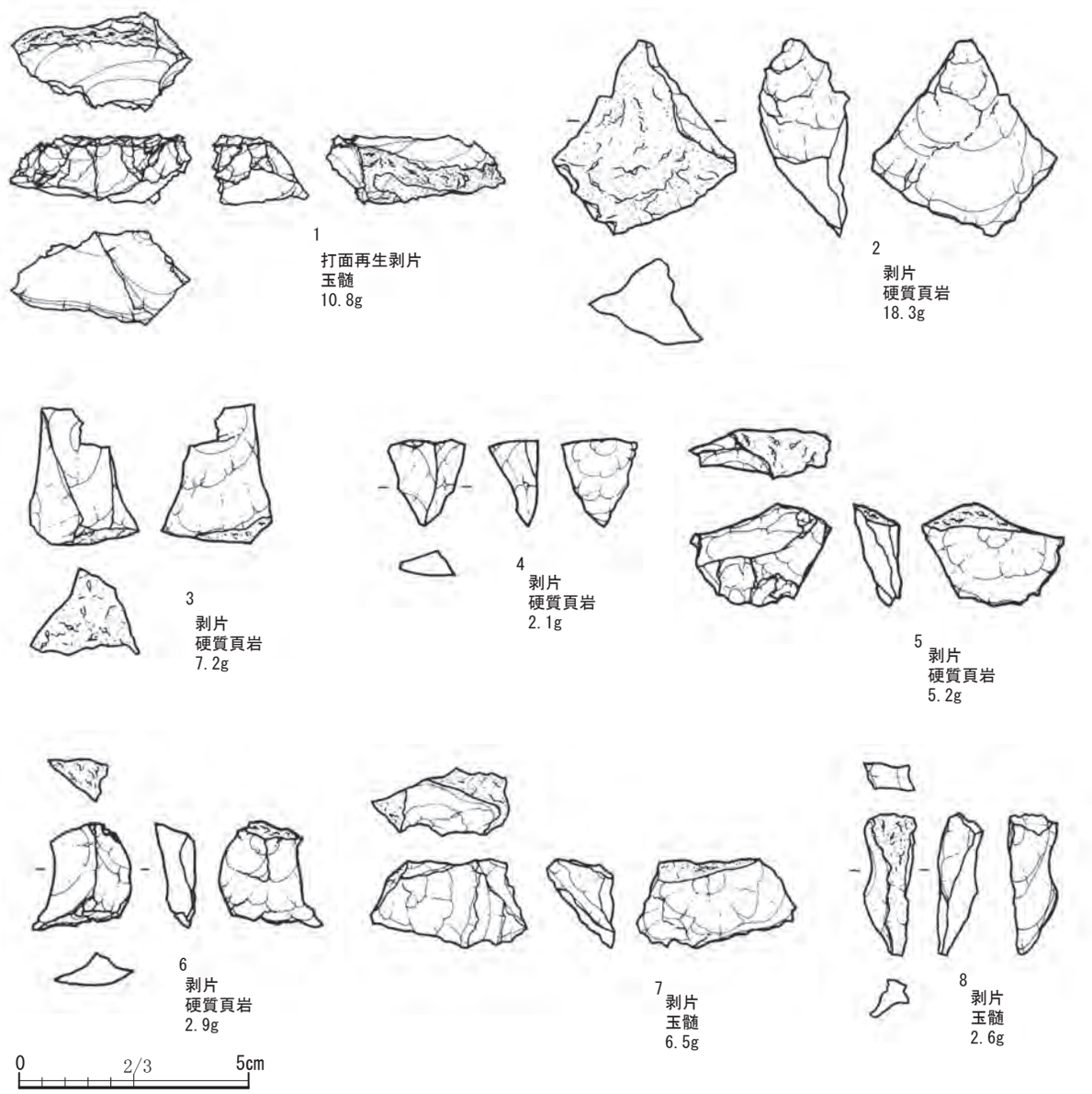
第 7 ブロック (第 31 図・図版 9)

出土状況　第 7 ブロックは、南西部の石器ブロック集中部における I オ -20-3 グリッドを中心に南北約 4 m、東西約 4 m に分布している。層序に関する図が確認されなかったため、石器の出土標高から垂直分布図を作成した。その結果、明らかに二つの異なる標高が認められた。すなわち、24.813m から 25.009m に分布する一群と、26.433m から 27.003m に分布する一群である。前者は I エ -20-23 から I エ -20-24 に石器が分布しているのに対し、後者は I オ -20-3、 I オ -20-4、 I オ -20-8 を中心に分布する。そして後者の出土レベルを第 6 ブロックや第 9 ブロック等のセクション図と照らし合わせてみたところ、X 層よりはるか下位に遺物が分布していることとなった。本来であればこれらを異なる文化層として扱う必要があるものの、その垂直分布に検討の余地が存在するため、今回は文化層を区分しなかった。上位に存在する一群を正しい標高と仮定すると、Ⅳ層～Ⅴ層に石器が分布すると考えられる。また、平面分布上の灰色の網掛け部分は炭化物の集中地点とされている。炭化物の標高は 24.861m 前後で、石器のレベル



第 28 図　第 3 文化層第 5 ブロック (2)





第 29 図　第 3 文化層第 6 ブロック (1)

と差異はない。

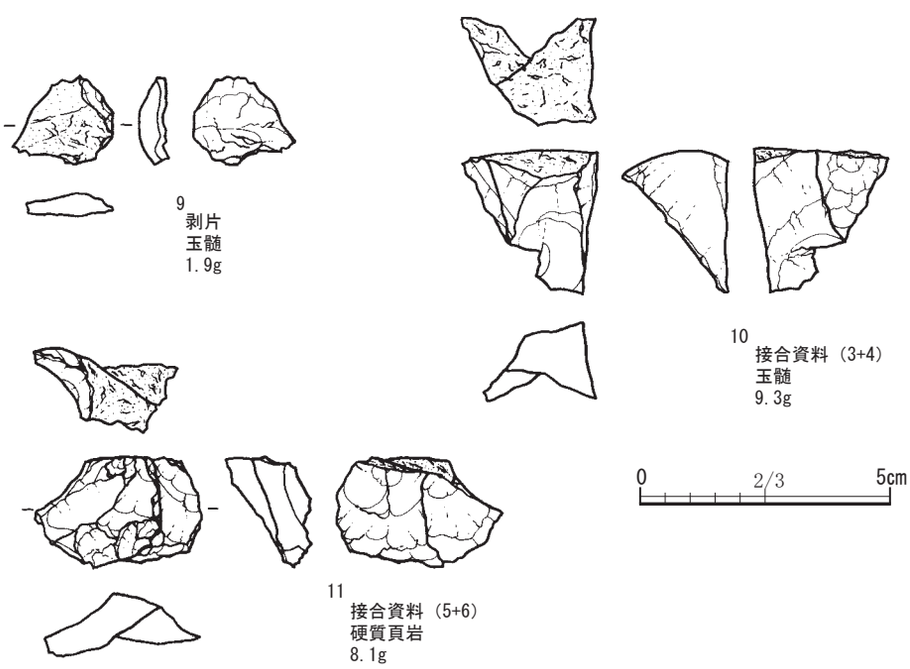
出土点数は 60 点で、器種の内訳は二次加工のある剥片 1 点、微細剥離痕のある剥片 3 点、剥片 18 点、砕片 34 点、礫 4 点である。石材は黒曜石が 55 点と、全体の 9 割以上を大多数を占める。また、10mm 未満の黒曜石製の砕片が特徴的に認められる。

出土遺物　1 は黒曜石製の微細剥離痕のある剥片である。夾雑物の少ない黒曜石を素材としており、器体裏面上部に微細な剥離が確認される。また、打面は単剥離打面で、打面調整等は認められない。 4 は黒曜石製の剥片である。黒曜石はやや灰色がかっており、球顆等の夾雑物が多く含まれている。器体右部が折損しているため、打点は残存していない。また、下面左部に一部平坦な自然面がみられる。 5 は器体左部が折損している剥片である。 4 と同様に、灰色がかった球顆等の多く含まれる黒曜石を素材としている。主剥離面のバルブはやや発達している。 3 、 6 、 7 は接合する (9)。接合状況 (9) を観察すると、剥離は同一方向から行われていることが分かる。また、接合資料の器体左側面は同一の面である。

第８ブロック (第 32・33 図・図版 9)

出土状況　第 8 ブロックは、南西部石器ブロック集中部の北東部に存在する (第 26 図)。 Ⅰオ -20-14 グリッドからⅠオ -20-19 グリッドを中心に南北約 4 m、東西約 4 m に石器が分布している。標高は 25.945m ～ 26.808m で、標高差は 0.863m である。セクション図は残されていないものの、周辺の石器ブロックと比較して出土層位はⅣ層～Ⅴ層と推測した。また第 33 図 - 8 は第 9 ブロックの石核 (第 36 図 -25) と接合する。

出土点数は 30 点で、ナイフ形石器 3 点、二次加工のある剥片 2 点、微細剥離痕のある剥片 1 点、剥片 15 点、砕片 1 点、石核 2 点、礫・礫片 6 点である。



第 30 図　第 3 文化層第 6 ブロック (2)

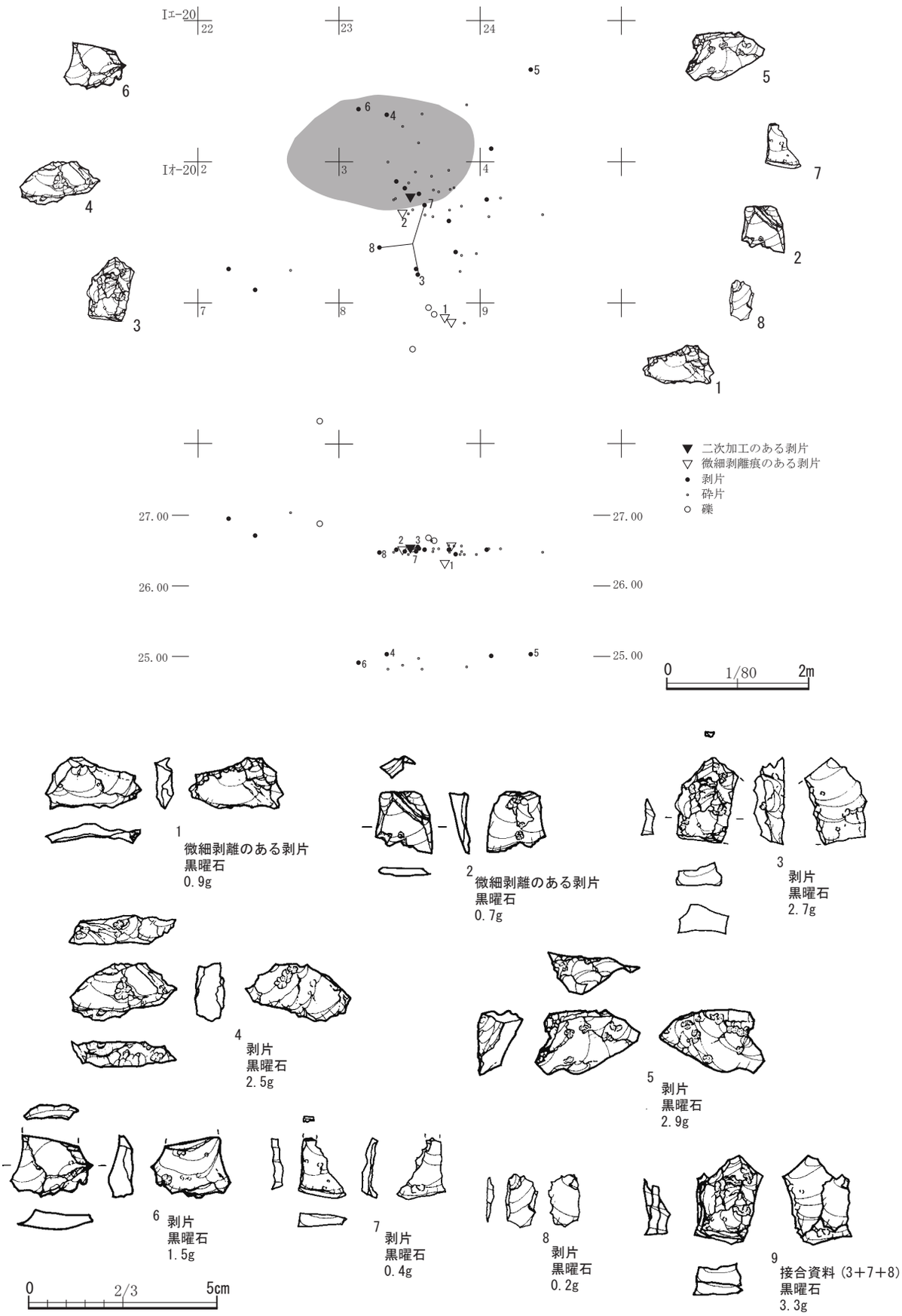
出土遺物　1 ～ 3 は黒曜石製のナイフ形石器である。 1 は基部両側縁に急斜度な剥離が施されている。素材剥片の末端を刃部としている。器体右側縁下部の調整は、素材剥片の頭部調整の可能性も考えられる。黒曜石には球顆が多く含まれる。 2 も縦長剥片の末端が刃部側に設定されている二側縁加工のナイフ形石器である。 3 は素材剥片を横位に用いている。左側縁の基部側に急斜度な加工が施され、また下面には平滑な自然面がみられる。 4 は器体の左側面、および下面に急斜度な剥離が施されており、ナイフ形石器の未成品の可能性が考えられる。白い球顆が含まれる黒曜石を素材としている。 5 は 10 と接合する (11)。細かな球顆が含まれる黒曜石を素材とした剥片であり、器体の背面は平滑な自然面に覆われている。点打面を有し、頭部調整が認められる。 7 は灰色の線が入る黒曜石を素材とした剥片である。複剥離打面を有するが、打面調整や頭部調整はあまりみられない。 9 は黒曜石を素材とする石核である。黒曜石には灰色の線がはいり、球顆が含まれる。最終剥離面は、右側面上部の剥離面と考えられ、器体裏面の上部には細かな加工が施されている。

第９ブロック (第 34 ～ 36 図・図版９)

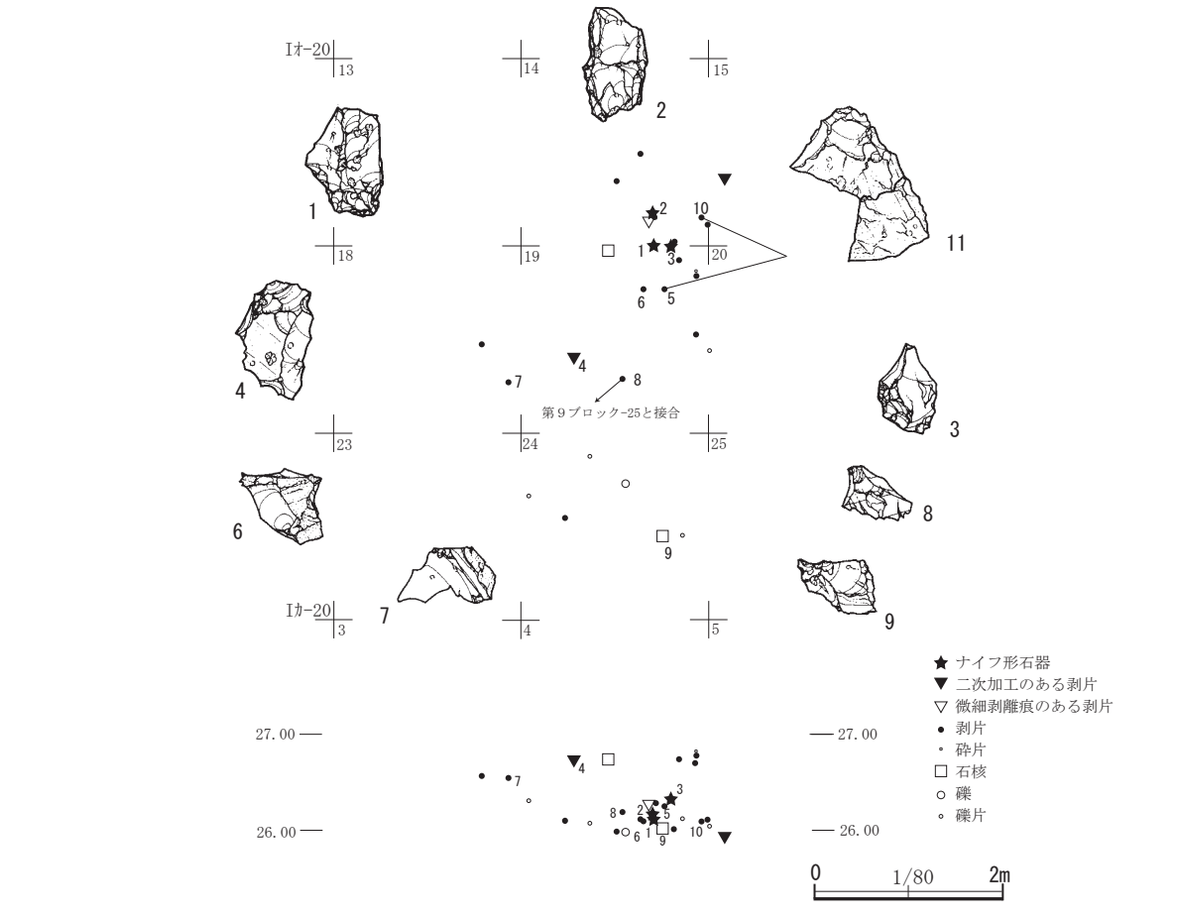
出土状況　第９ブロックは、南西部の石器集中部の南部に位置する (第 26 図)。Ｉオ -19-20 からＩオ -20-22 グリッドを中心に南北約６m、東西約６m に石器が分布しており、とくにＩオ -19-20 グリッドに遺物が集中している。標高は 25.978m ～ 27.052m で、その差は 1.074m である。Ｉオ -19-19 からＩオ -20-19 のラインで記録された層序図に石器の出土標高を落とした。その結果、Ⅵ層上部からⅤ層に遺物が分布し、とくにⅣ～Ⅴ層に遺物が集中することが分かった。

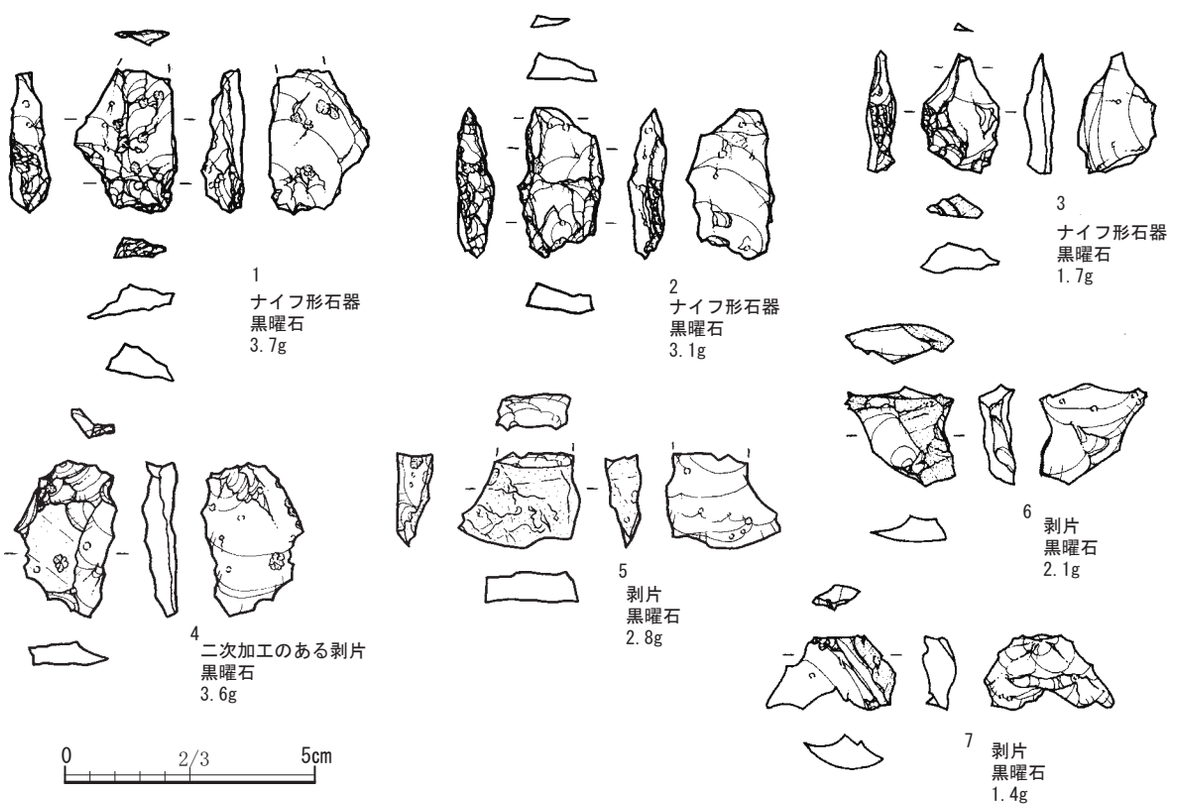
出土点数は 300 点で、器種の内訳はナイフ形石器２点、彫器２点、掻器１点、打面再生剥片１点、二次加工のある剥片 11 点、微細剥離痕のある剥片４点、稜付剥片１点、剥片 160 点、砕片 104 点、石核 11 点､礫３点である。石材は黒曜石が 292 点と９割以上を占める。また､第 36 図 -25 の石核は第８ブロックの剥片 (８) と接合する。

出土遺物　1 は黒曜石製のナイフ形石器である。素材剥片を横位に用い、基部に加工が施されている。素材剥片は末端部を残して折損しているが、器体左側縁に調整が認められることから、折損したのちに加工が施されたと予測される。 2 、 3 は黒曜石製の彫器である。 2 は右側縁部に刃部が作出されており、また主剥離面の右側縁に調整が加えられている。 3 は器体上部と左部が折損している。刃部は右側面に形成されたと考えられるものの、一方で折損面の可能性があることを付記しておく。彫刃面作出のための調整等は認められない。 4 は打面再生剥片である。打面調整および頭部調整が顕著に施されている。 5 ～ 9 は二次加工のある剥片である。 5 は点打面を有し、また背面の右側縁などに二次加工が存在する。器体左側面の二つの剥離面は先行剥離面である。 6 は器体右側縁に二次加工が確認される。素材剥片は楔形石器の可能性がある。 7 は自然面打面を有し、背面の左右両側縁に二次加工が施されている。 8 は主剥離面の上部に加工が認められる。15 と 22 と剥離面が接合する (後述)。 9 は背面の右側縁上部に二次加工が確認される。頭部調整が施され、また複剥離打面を有する。10 ～ 12 は微細剥離痕のある剥片である。10 は背面左側縁を中心に微細な剥離がみられる。11 は背面右側縁の下部に微細剥離が確認できる。打面は単剥離打面であり、器体は主剥剥離面側にやや内湾している。12 は背面および主剥離面の下縁を中心に微細な剥離がみられる。13 ～ 23 は剥片である。13 は自然面打面を有し、また 16 と接合する (後述)。16 は背面下部に平滑な自然面がみられる。17 も自然面を打面とする。バルバスカーが比較的発達しており、また下端がヒンジフラクチャー状になっている。18 は背面が古い剥離面で構成されている。21 はガラス質黒色安山岩を原石とする剥片である。背面には円礫上の自然面が認められる。上部が欠損しているため打面等の形状は不明である。24 ～ 28 は黒曜石を素材とする石核である。24 は裏面に自然面がおおきく

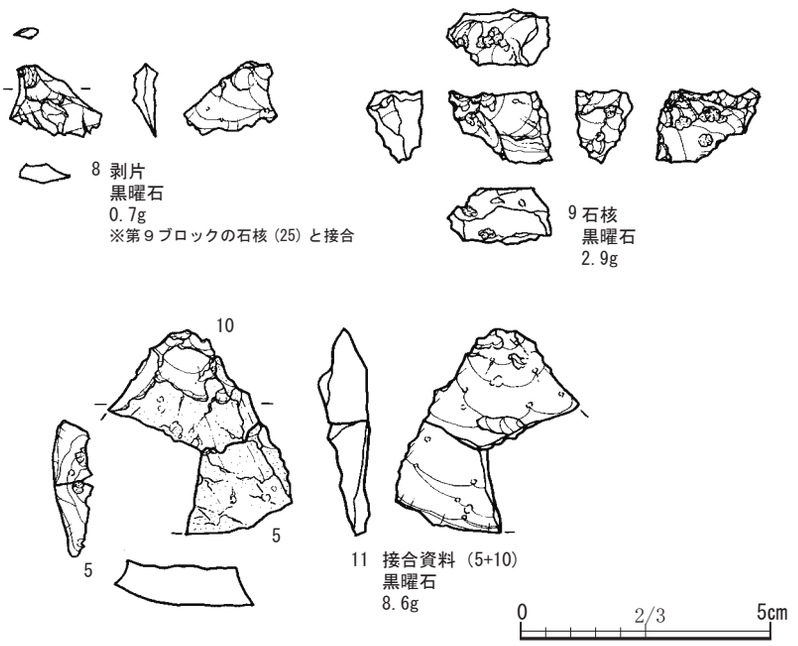


第 31 図　第 3 文化層第 7 ブロック





第 32 図　第 3 文化層第 8 ブロック (1)



第 33 図　第 3 文化層第 8 ブロック (2)

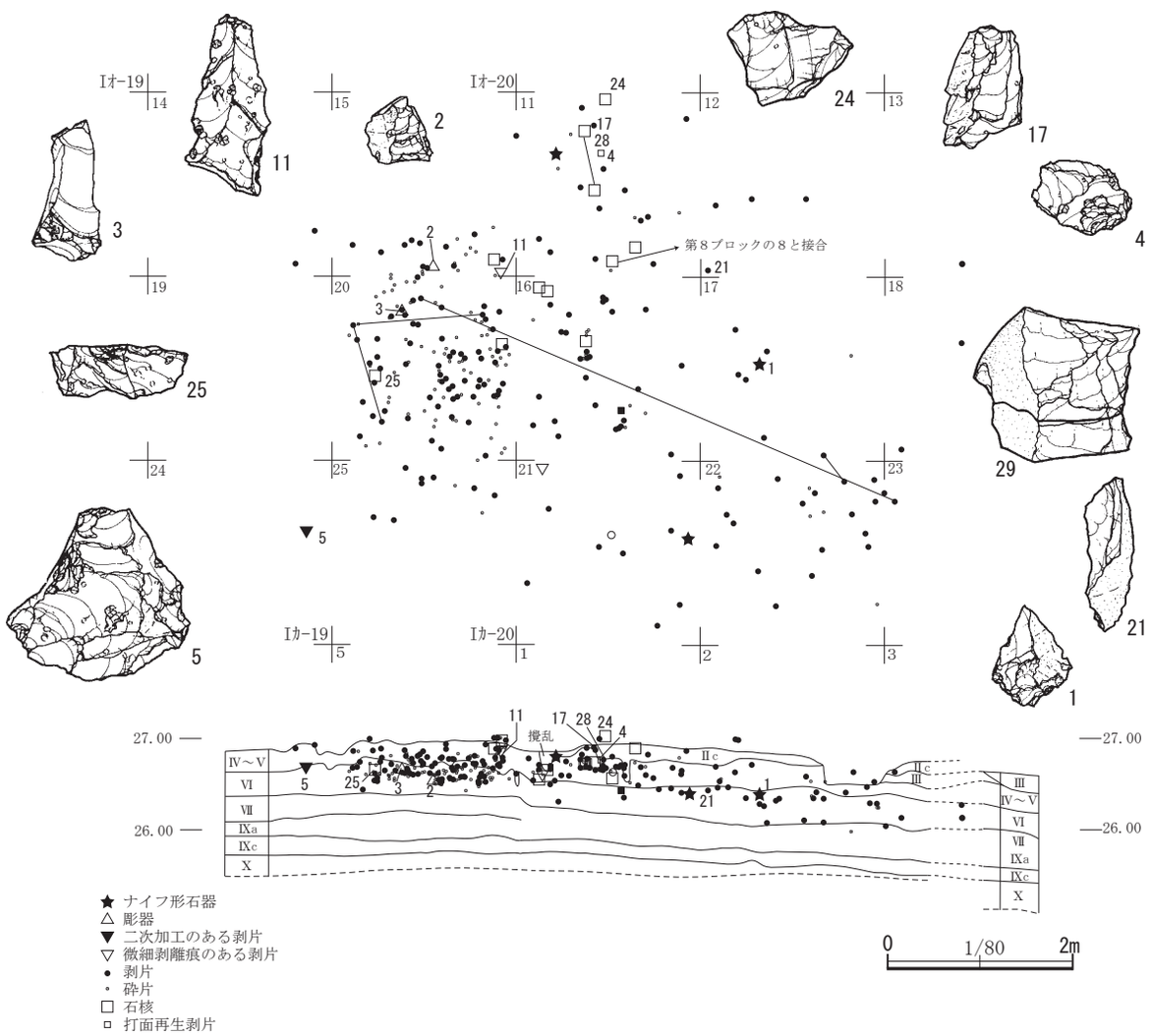
残り、それを打面として剥片が剥離されている。25 は剥片を素材とし、器体下面から右側面を中心に剥片が剥離されている。表面の中央にみられる剥離面は自然面を打面としている。また、背面の右端部の剥離面は、第 8 ブロックの剥片 (8) と接合する。26 は上面と裏面に自然面が残る石核である。平滑な自然面を打面としている。表面右部の剥離面の方向から、打面が転位されたと考えられる。27 も自然面を打面として剥片が剥離されたのち、打面を 180 度転位されている。最終剥離面は裏面の下部にみられる剥離面となる。29 はホルンフェルスを原石とする石核である。180 度打面が転位されている。30 は黒曜石の剥片が 3 点接合した資料である (8 ＋ 15 ＋ 22)。表面の左半分に存在する剥離面はポジティブ面と考えられることから、剥片素材の石核の可能性もある。右側縁の自然面を打面として剥片が剥離されたのち、打面を約 90 度かえて 15 と 22 が剥離されたと理解される。31 では黒曜石製の剥片が 2 点接合した (13 ＋ 16)。16 の上部が折損しているため打面の形状等は不明である。打面転位等は認められない。

第 10 ブロック (第 37 図)

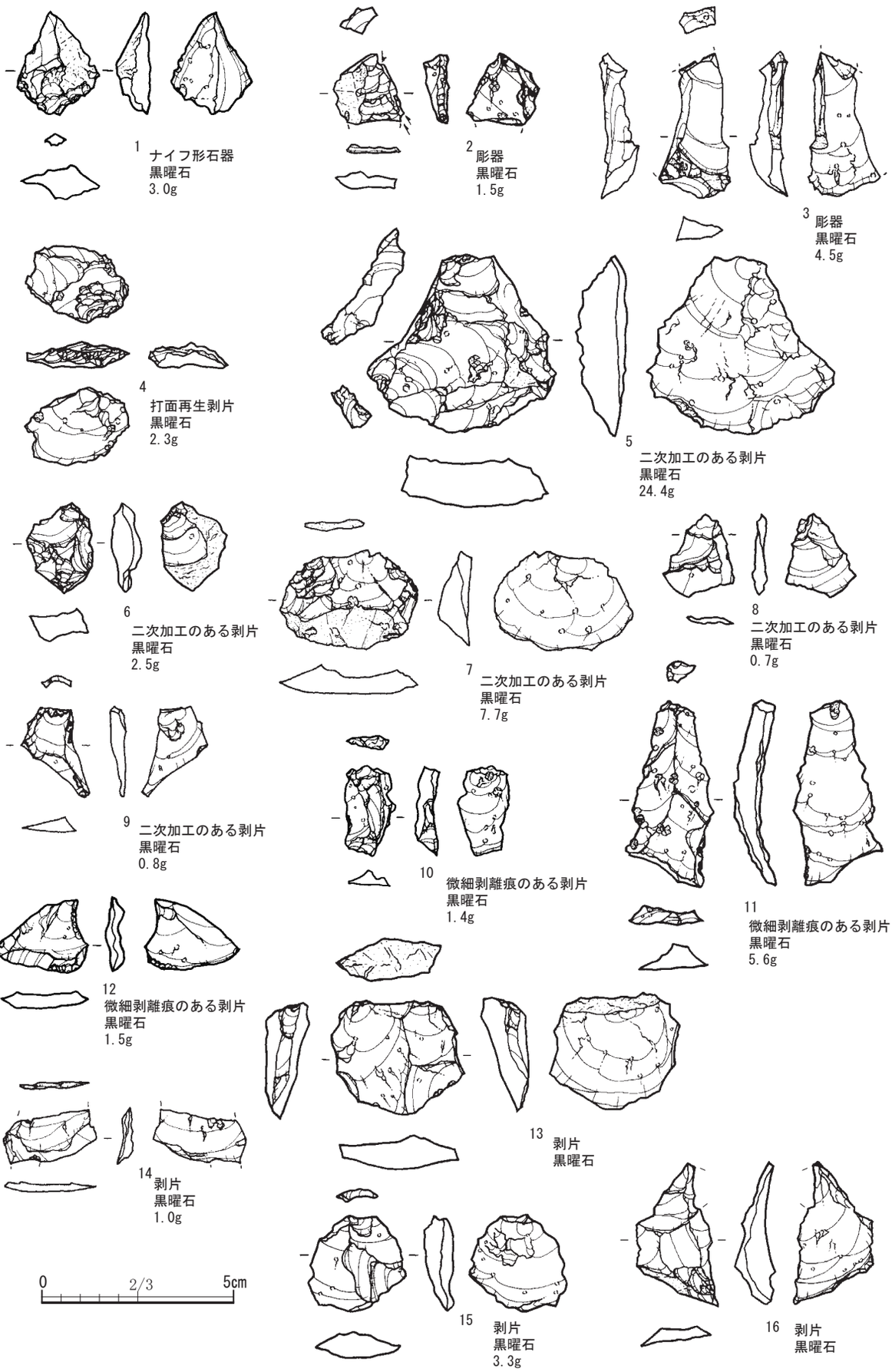
出土状況　第 10 ブロックは、南西部石器集中部の西部に位置する (第 26 図)。Ⅰオ -19-9 からⅠオ -19-10 グリッドを中心に南北約 4 m、東西約 4 m に石器が分布している。Ⅰオ -20-6 グリッドからⅠオ -20-11 グリッドの西面のセクション図に遺物の標高を掲載した。その結果、Ⅰオ -19-4・5 グリッドから出土した遺物 (北部) と、Ⅰオ -19-9・10・Ⅰオ -20-6 グリッドから出土した遺物 (南部) に若干の標高

差が認められた。そして、剥片 (第 37 図 -1) が第 13 ブロックの礫 (第 47 図 - 8) と接合すること、また石材を含めた石器の特徴から、北部の一群は第 13 ブロックと関連し、一方で南部の一群は第９ブロックと関連すると推測される。前者の層位の詳細は不明であるものの、後者はⅣ～Ⅴ層に遺物が分布する。出土点数は 11 点で、器種の内訳は８点、石核１点、礫２点である。

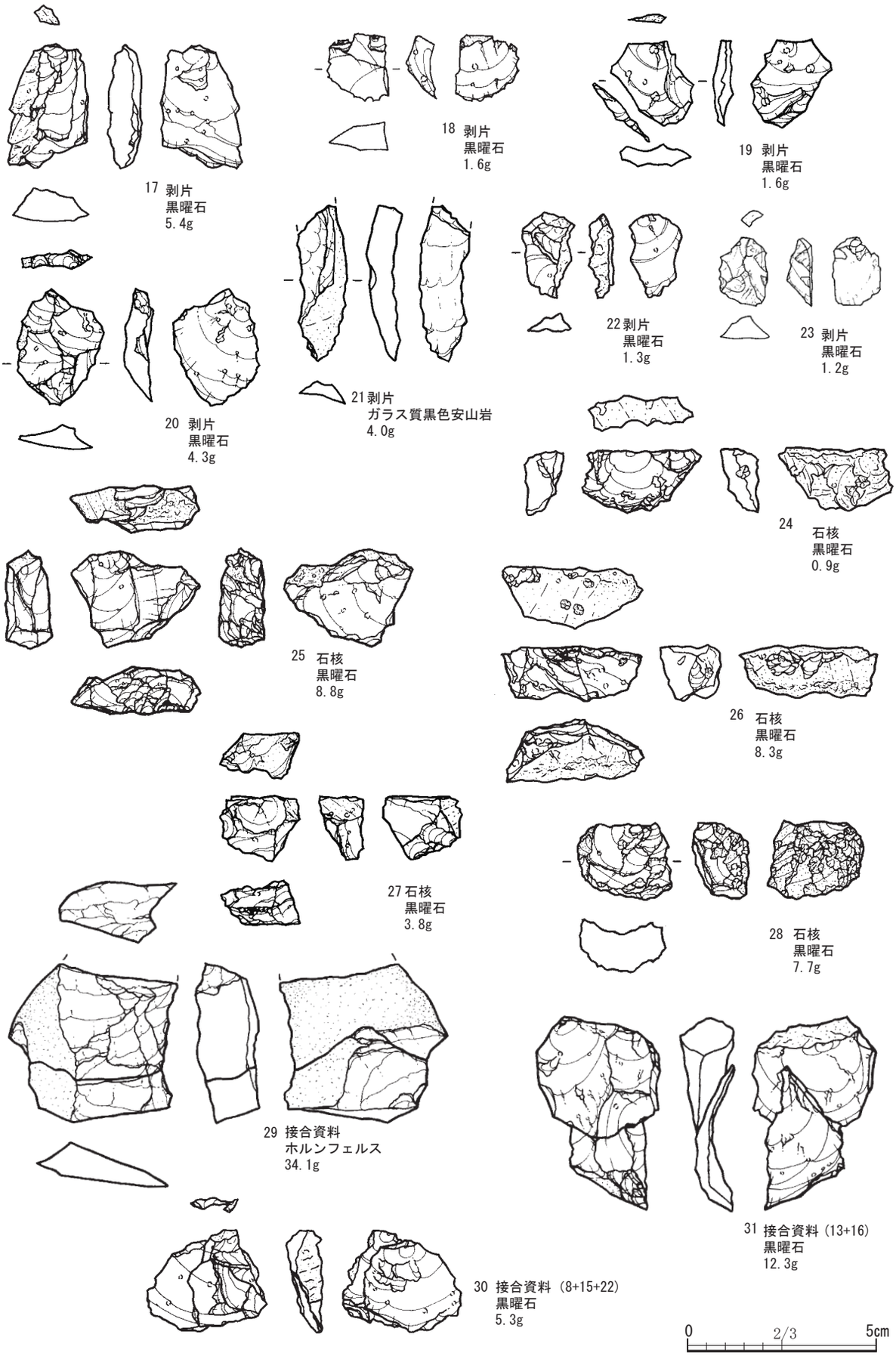
出土遺物　１は剥片である。第 13 ブロックから出土した礫と接合する。打点が認められ、礫面を打面としていることが分かる。２は流紋岩を素材とした礫器である。下部に一部傷がみられるものの、敲打痕であるかは不確定である。３はチャートを石材とした剥片である。打面は平滑な自然面である。４と５は黒曜石製の剥片である。５には平滑な自然面がみられる。



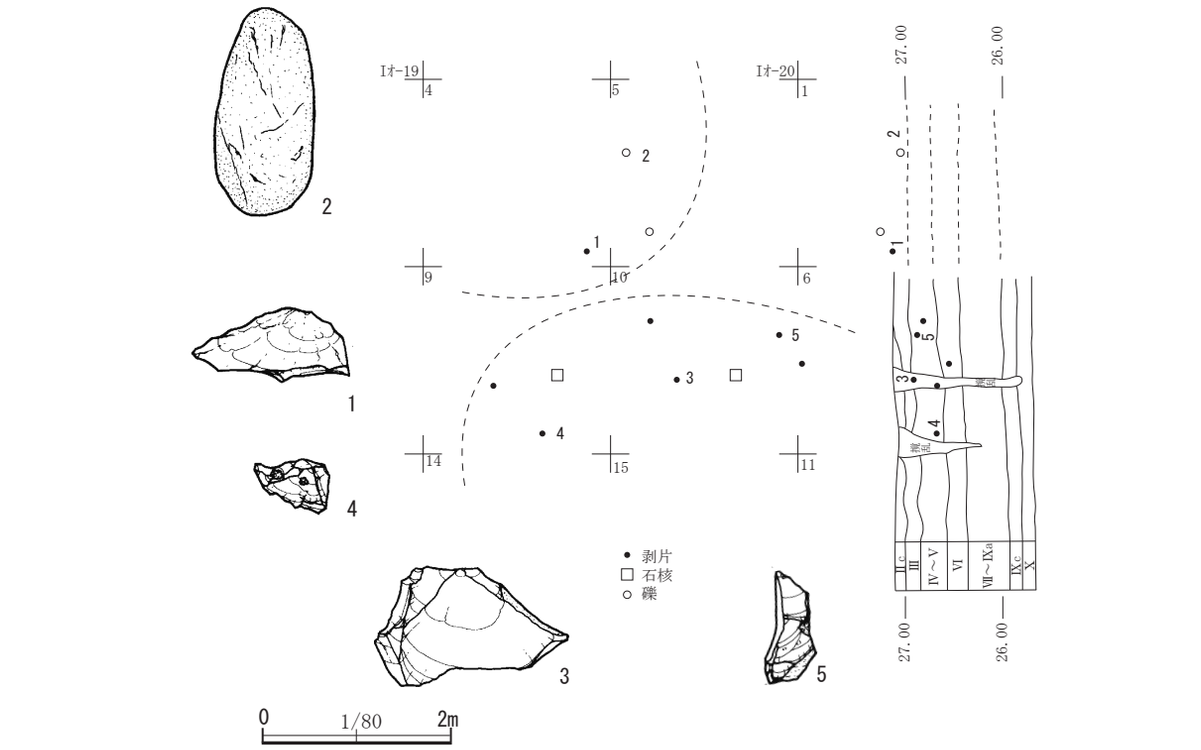
第 34 図　第３文化層第９ブロック（１）

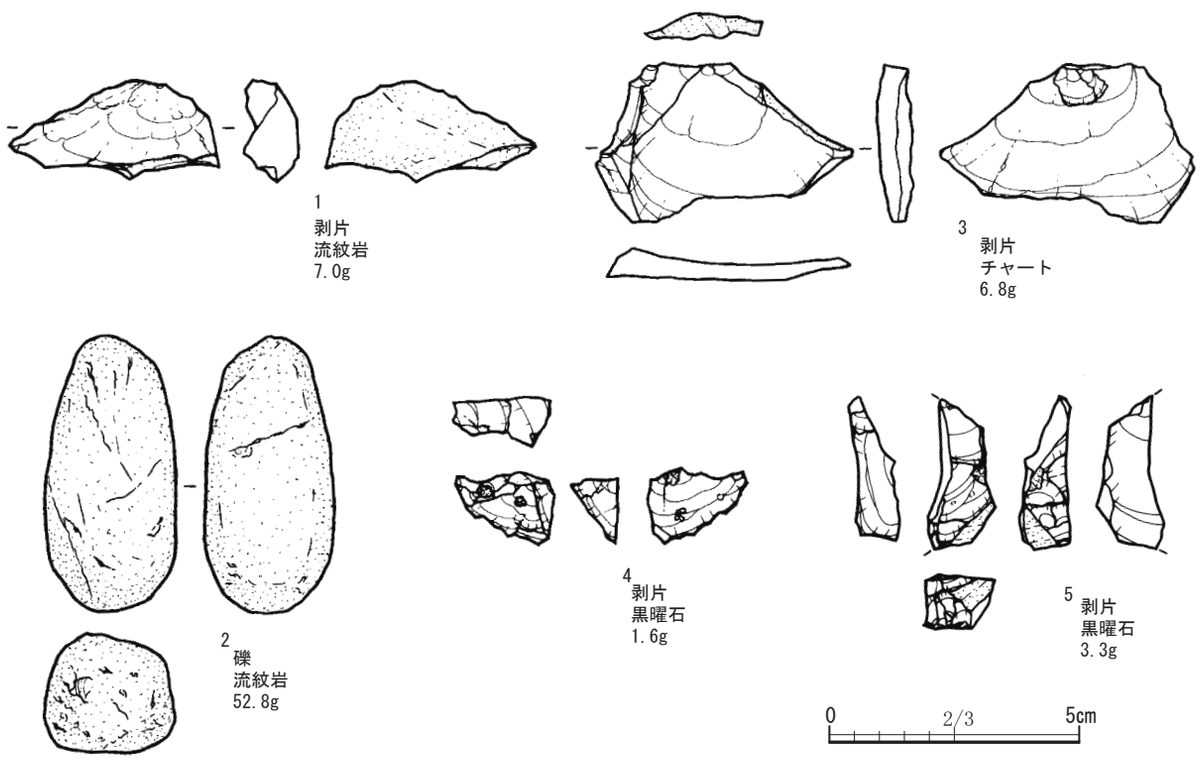


第 35 図　第 3 文化層第 9 ブロック (2)



第 36 図　第 3 文化層第 9 ブロック (3)





第 37 図　第 3 文化層第 10 ブロック

4　第 4 文化層

第 4 文化層は、第 11 ブロックと第 12 ブロックで構成され、南西部と東部の境界部に位置する（第 18 図）。Ⅳ層上部～Ⅲ層に石器分布が認められる。各ブロックの距離は約 10m で、一部に接合関係が存在する（第 38 図）。また、嶺岡産珪質頁岩が多量に出土している点や、厚みのある掻器を特徴とする点などが共通する。

第 11 ブロック (第 39・40 図・図版 9)

出土状況　フ -28-b の東部を中心に、南北約 4 m、東西約 2 m に石器が分布している。出土石器の標高は 24.437m ～ 24.825 mであり、差は 0.388 mである。セクション図に垂直分布を落とせなかったものの、標高や接合関係等から後述する第 2 ブロックと同様の文化層と判断した。出土点数は 18 点で、器種の内訳は掻器 2 点、二次加工のある剥片 3 点、微細剥離痕のある剥片 4 点、稜付剥片 1 点、剥片 4 点、石核 2 点、礫 2 点である。このうち、微細剥離痕のある剥片 1 点は表面採取、稜付剥片 1 点は撹乱層からの出土である。他のブロックと比較してツールの割合が多い。また、石材は礫を除くとすべて嶺岡産珪質頁岩である。剥片 (第 39 図 - 3) が、本ブロックの東に位置する第 12 ブロックと接合している。

出土遺物　18 点中 15 点を図示した。1 と 2 は掻器である。両石器とも厚みがあり、刃部は半円形である。1 は全周にわたり急斜度な加工が施されている。素材の縦長剥片はバルバスカーが発達している。側縁には一部自然面が残存されたり、また剥離面の凹凸がみられる一方で、刃部には微細な剥離が加えられ入念に加工が施されている。断面は四角形状である。 2 は背面に自然面が大きく残されている。 1 の主剥離面には調整がみられないのに対し、 2 は素材主剥離面の上部を中心に加工が認められるが、これは 2 の器体上部の厚みを薄くするために施された可能性が考えられる。また、 1 と同様に半円状の刃部には微細な剥離が加えられるなど、入念な調整が認められる。 3 は器体右側縁に二次加工がみられる。本ブロックで折損面が接合し、そして第 2 ブロックから出土した掻器と剥離面が接合した。 4 は下部に二次加工が施されている。二次加工のある剥片としたが、削器と分類可能かもしれない。器体左側面は先行剥離面で構成されており、厚みが存在する。また、頭部調整もみられる。 5 は自然面の打面を有する微細剥離痕のある剥片である。下縁に微細な剥離が認められる。 6 は器体右側縁下半部に微細な剥離がみられる剥片である。複剥離打面を有する。 7 は打面が自然面で構成される微細剥離痕のある剥片である。器体下端部を中心に、全周に微細な剥離が確認される。頭部調整が施されており、またバルブが発達している。 8 は下部が欠損している剥片である。背面の剥離面の形状から 180 度の打面転位が認められる。 9 は背面左半分が平滑な自然面に覆われており、頭部の稜上には調整が施されている。10、11 は下端が欠損した剥片である。10 の背面左下は、古い剥離面で覆われている。11 には頭部調整がみられる。12、13 は石核である。12 は単剥離打面から剥片が剥離されており、背面には自然面が残存している。13 は残存する自然面の形状から、厚さ 1 cm 前後の板状の原石を素材としたと考えられる。同一の打面より、表裏で剥片が剥離されている。14 は撹乱層から検出された稜付剥片である。上端が欠損しているため、打面形状は不明である。また、ヒンジフラクチャーが確認される。15 は表面採集された微細剥離痕のある剥片である。左右両側縁に微細な剥離が認められるものの、ガジリの可能性も存在する。先行剥離面の形状から、90 度の打面転位も考えられる。

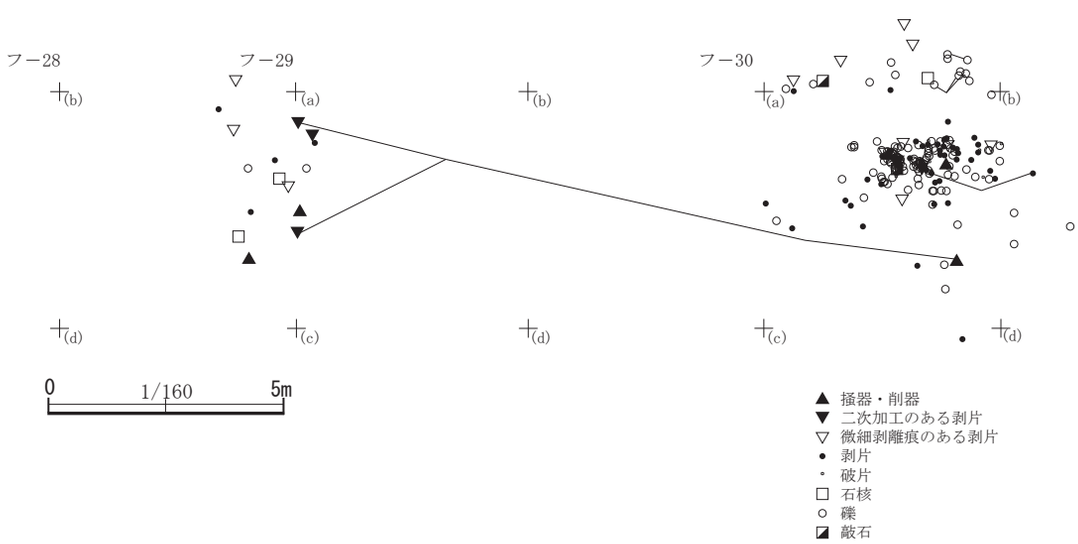
第 12 ブロック (第 41 ～ 45 図・図版 10)

出土状況　第 12 ブロックは、第 11 ブロックの約 10m 東方に位置する（第 38 図）。フ -30-a グリッドを中心に南北約 5m、東西約 5m に石器が分布している。セクション図に記された垂直分布から、Ⅳ層上部からⅢ層に分布すると考えられる。セクション図のⅢ層には「ソフト」と記載されており、また

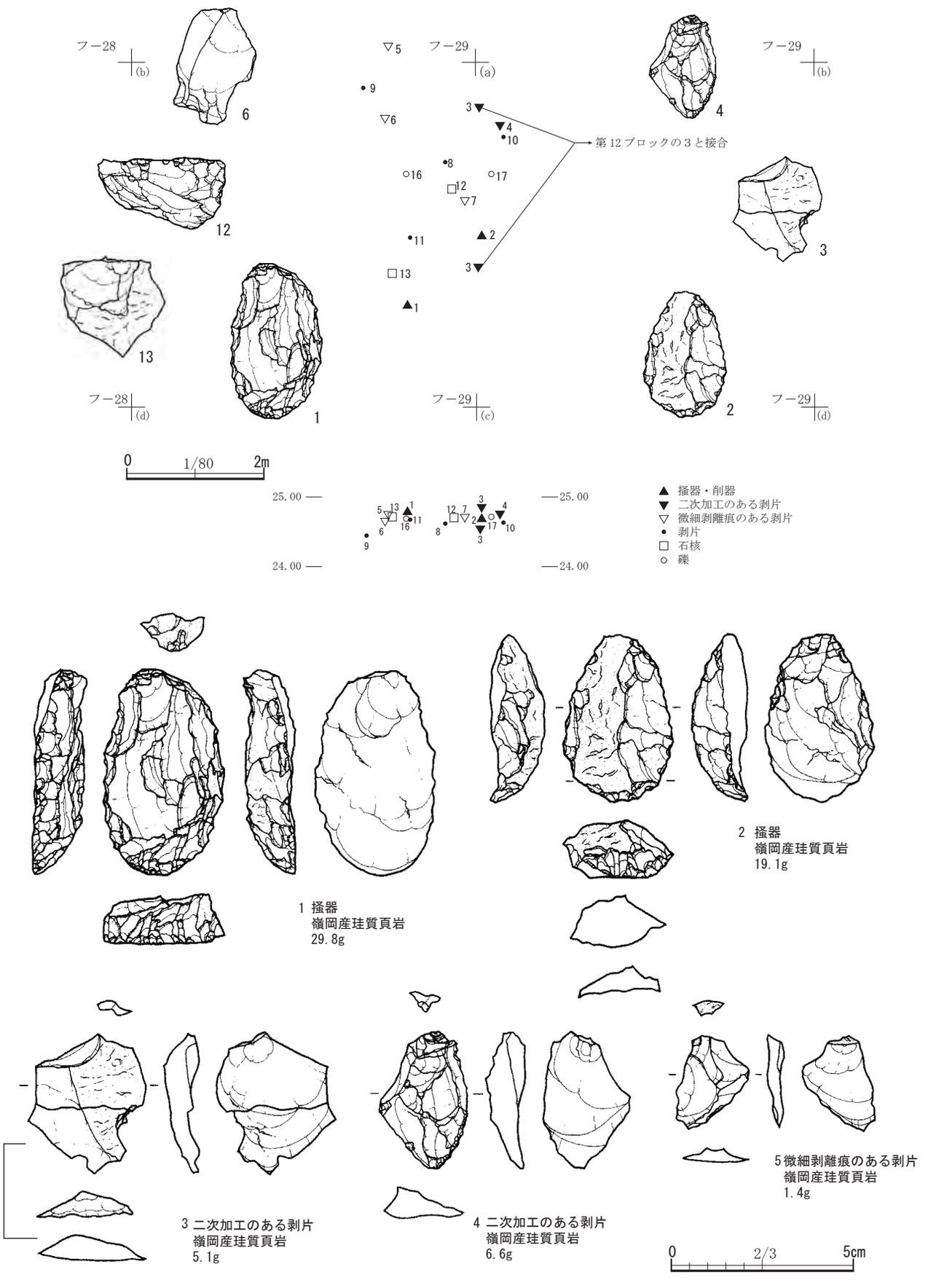
Ⅲ -a：暗褐色土。暗褐色土が斑紋状に混入。ローム粒を多く含み、粘性有り、しまり強い。
Ⅲ -b：暗褐色土。a に近似しているが、ほんのわずかに黄色味が強い。
とも記載されている。

出土点数は 224 点である。器種の内訳は掻器 4 点、二次加工のある剥片 2 点、微細剥離痕のある剥片 12 点、打面再生剥片 1 点、剥片 51 点、砕片 11 点、石核 3 点、敲石 1 点、礫 139 点である。また、撹乱から尖頭器が 1 点検出されている。石材は、ツールに関しては嶺岡産珪質頁岩が大部分を占める。また、本ブロックからは礫の多量の出土が認められる。割れている個体が多くみられ、また赤く変色していることから、被熱した可能性が存在する。平面分布および層状分布における礫の分布はその他の石器と差異はない。

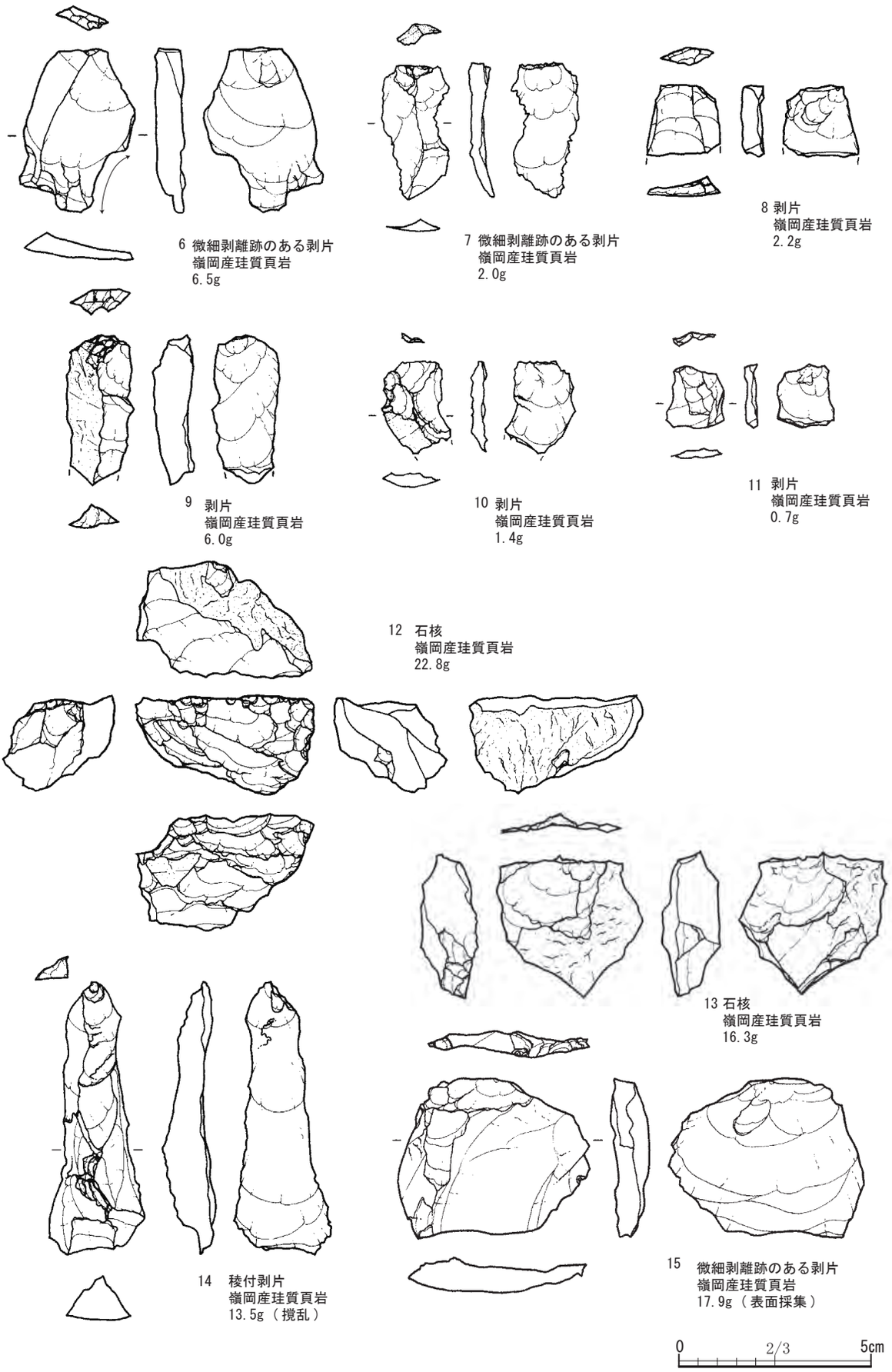
出土遺物　1 ～ 4 は掻器である。とくに 1 ～ 3 は厚みがあり、半円形の刃部もふくめて第 11 ブロックの掻器と類似性が認められる。 1 は一部に自然面が残存する掻器である。刃部の末端部には微細な剥離が施されており、また素材の主剥離面の左上部には自然面をはぎ取るように剥離が実施されている。素材剥片の打点等はみられない。 2 は下部から両側縁にかけて微細な加工が施されている。縦長剥片を素材としており、打面と考えられる面が部分的に確認できる。主剥離面に調整は加えられていない。 3 はとくに刃部に厚みが存在する掻器である。第 11 ブロックの剥片と接合する (後述)。表面左側には自然面が残存しており、調整は加えられていない。刃部には顕著に調整が施されているのに対し、側縁は部分的な剥離のみ認められ、この点は 2 と異なる。 4 は上端が欠損した掻器である。表面の左側の面が素材の主剥離面である。裏面（素材剥片の背面）から表面（主剥離面）の方向に、急斜度な加工が施されている。 5 は器体右側縁に調整のみられる剥片である。打面は単剥離打面で、頭部調整が顕著に施されている。 6 ～ 17 は微細剥離痕のある剥片である。 6 は下端にヒンジフラクチャーがみられる。主剥離面の左側縁に微細な剥離痕が存在する。また、背面上部には稜状調整が加えられている。 7 は主剥離面の下縁部に微細な剥離が存在する。単剥離打面を有し、頭部調整が認められる。 8 は下縁部に若干微細な剥離がみられる。背面中央の剥離面が、21 と接合する (後述)。 9 も下縁部に微細な剥離が確認される。11 も下縁部を中心に微細な剥離が存在する。また、背面の左側の剥離面はポジティブ面の可能性が考えられる。12 は上部が欠損している。下縁部に微細な剥離が認められる。13 は背面左上部に平滑な自然面が残存しており、器



第 38 図　第 4 文化層石器ブロック分布図

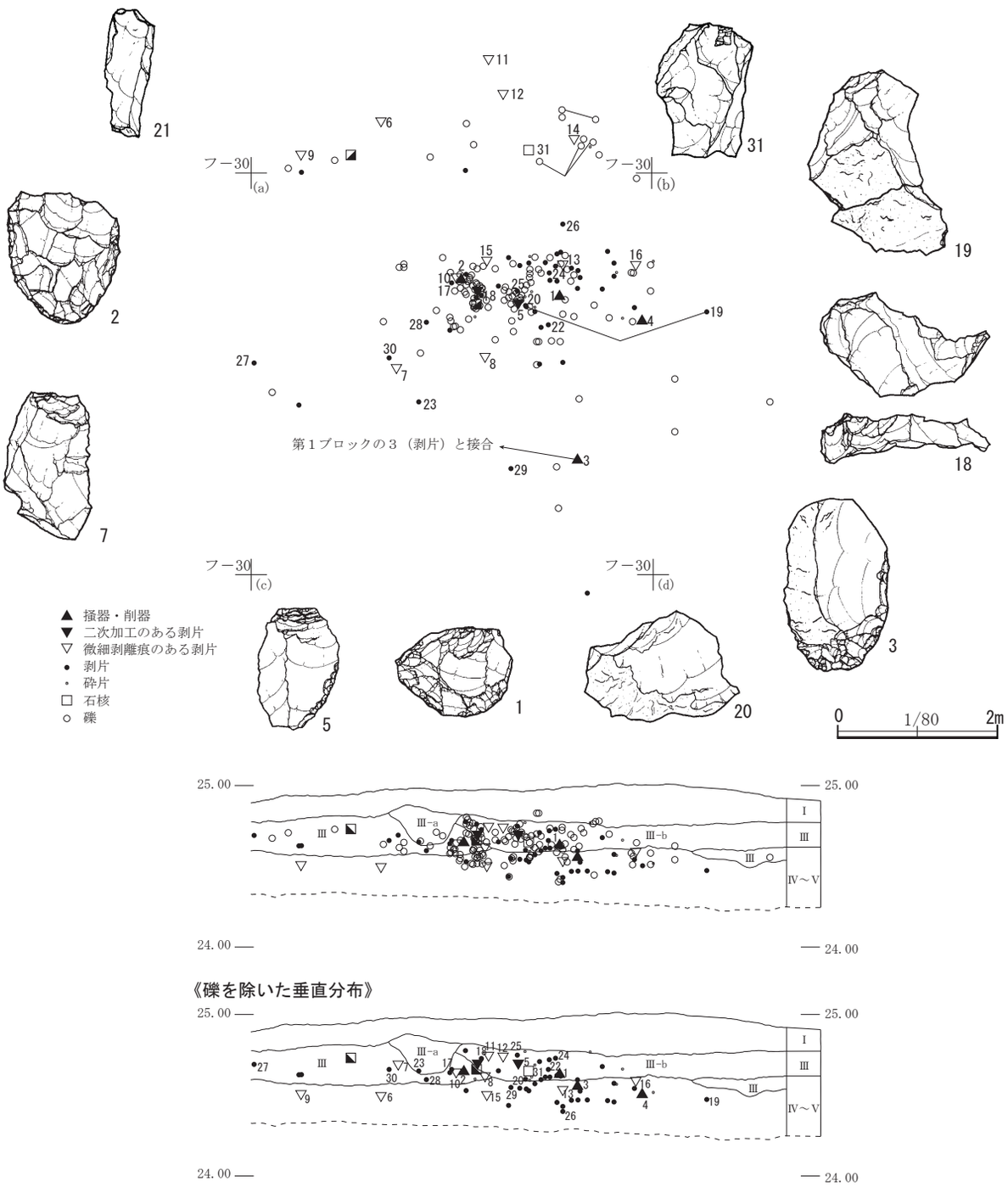


第 39 図　第 4 文化層第 11 ブロック (1)



第 40 図　第 4 文化層第 11 ブロック (2)

体右側縁に微細な剥離が確認できる。14 も器体右側縁に微細な剥離がみられる。単剥離打面を有し、頭部調整が施されている。17 は背面に自然面と古い剥離面が大きく残存している。器体左側縁に微細な剥離が若干みられる。18 は打面再生剥片である。一部に自然面が残存しており、打面調整および頭部調整が加えられている。主剥離面の剥離方向から、打面再生は作業面側からの加撃により行われたと考えられる。19 ～ 30 は剥片である。19 はフ -30 の撹乱層から出土した剥片 (上部) と、フ -30 のⅥ層から出土した剥片 (下部) が接合した個体である。背面に大きく自然面が残っている。接合の状態から左側縁の中央の加工は折損後に施されたと考えられる。主剥離面が 20 と接合した (後述)。21 はフ -30-a の撹乱層から出土し、8 と接合する。22 はバルブが発達した剥片である。24 は左半分が折損した剥片である。打



第 41 図　第 4 文化層第 12 ブロック (1)

点がわずかに残存しており、また単剥離打面と頭部調整が確認される。背面には大きく自然面が残されている。25 は背面右半分に自然面がみられる剥片で、頭部調整が施されている。27 は黒色安山岩製の剥片であり、頭部調整が認められる。30、31 は石核である。30 は硬質頁岩製の石核で、裏面を打面として剥片が剥離されており、表面には自然面がみられる。31 は嶺岡産珪質頁岩製である。裏面がポジティブ面であることから剥片素材の可能性も考えられる。下面を打面として剥片が剥離されたのち、打面が 180 度転位されたと理解できる。32 はフ -30 の撹乱層から出土したため、詳細な出土位置等は不明である。比較的透明度の高い黒曜石を素材とした尖頭器と考えらえる。下部が欠損し、右側縁は微細な剥離も加えられ入念に整形されている。33 ～ 35 は接合資料である。33 は剥片 2 点の接合資料である (19 ＋ 20)。打面の転位等は認められない。34 は第 11 ブロックの剥片 (3) と本ブロックの掻器 (3) の接合資料である。剥片を剥離した後、打面を 180 度転位し、やや斜めの方向から掻器の素材剥片を剥離したと考えられる。両石器とも、幅 2 ～ 3 mm 程度の打面が残っている。35 は剥片が 2 点接合した資料である (8 ＋ 21)。両石器の打面の高さに差がみられることから、21 を剥離したのち打面調整を施し、 8 を剥離したと理解できる。

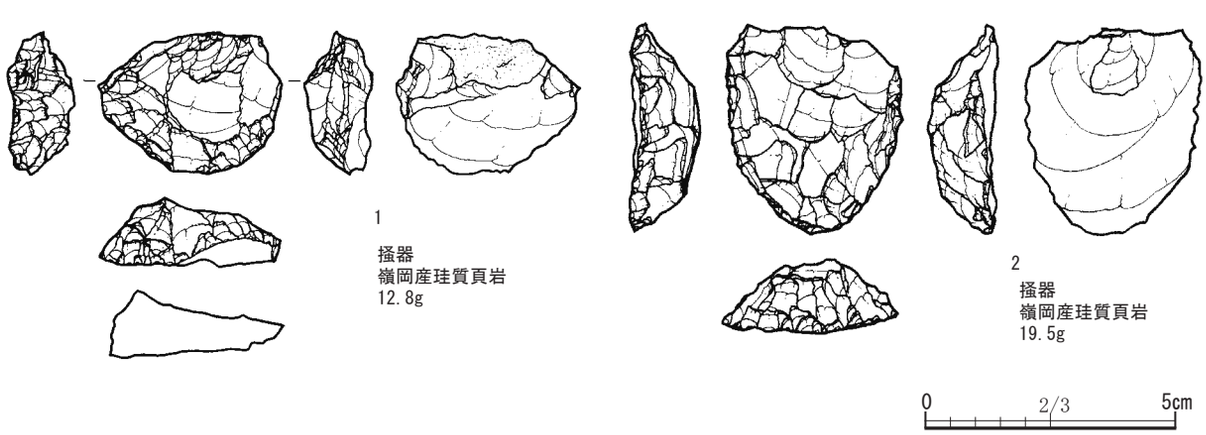
5　第 5 文化層

第 5 文化層には第 13 ブロックが該当し、南西部の石器集中部の西側に位置する。セクション図が確認できなかったため詳細な出土層位は不明であるが、石器の出土標高や特徴などから文化層を判断した。

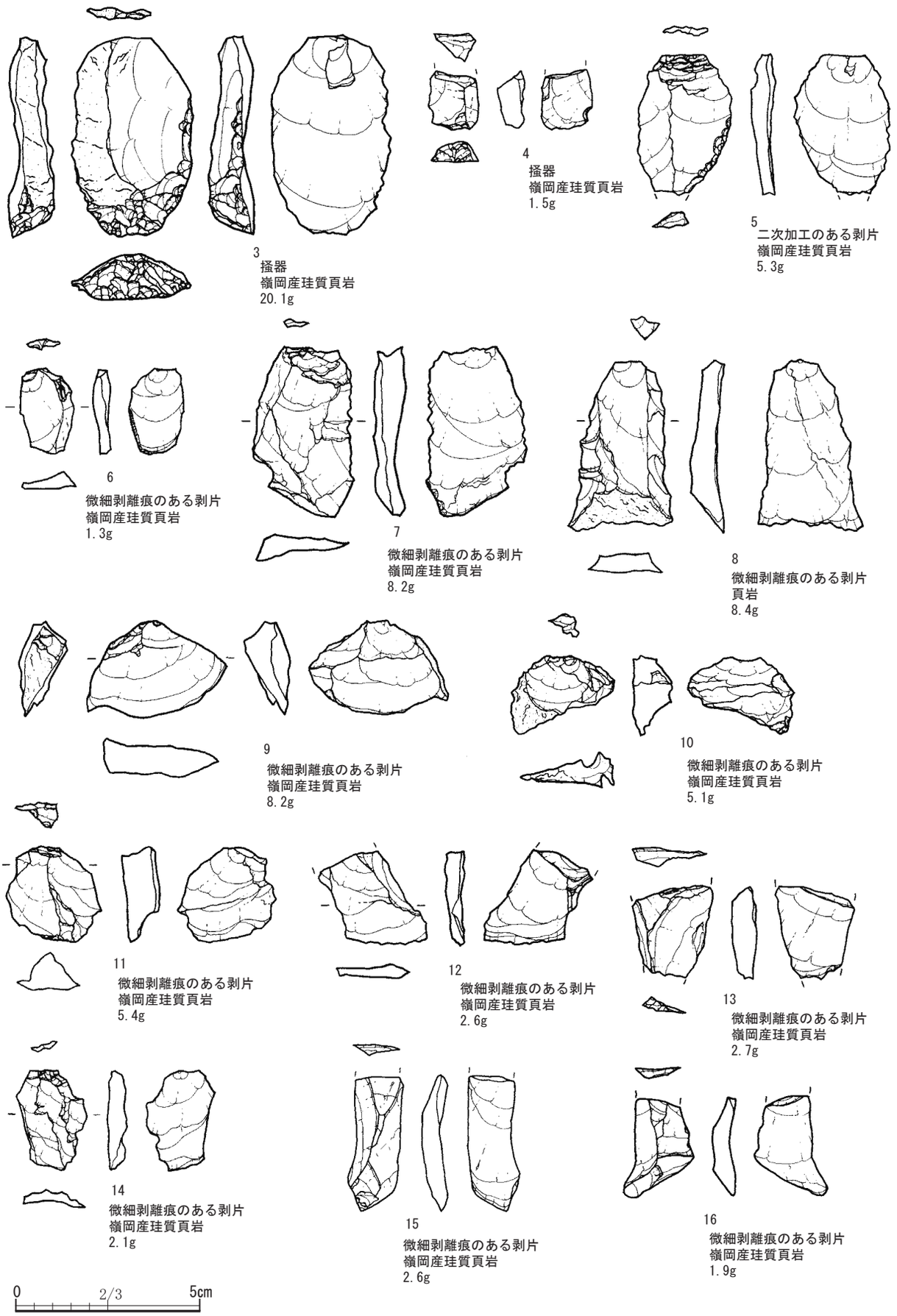
第 13 ブロック (第 46・47 図・図版 10)

出土状況　遺跡南西部の石器集中部西側に位置する (第 26 図)。Ⅰオ -19-22・23 グリッドを中心に、南北約 4m、東西約 4m に石器が分布している。標高は 26.900m ～ 27.390m で、標高差は 0.478m である。セクション図に落とすことはできなかったが、遺物の標高は全ブロックのなかで最も高いことが分かった。出土点数は 27 点で、器種の内訳は細石刃 2 点、剥片 18 点、砕片 1 点、細石刃核 1 点、石核 2 点、礫 3 点である。ガラス質黒色安山岩の剥片同士の接合が 1 点確認できた。また、Ⅰオ -19-12 より出土した礫が第 10 ブロックの剥片 (1) と接合する。

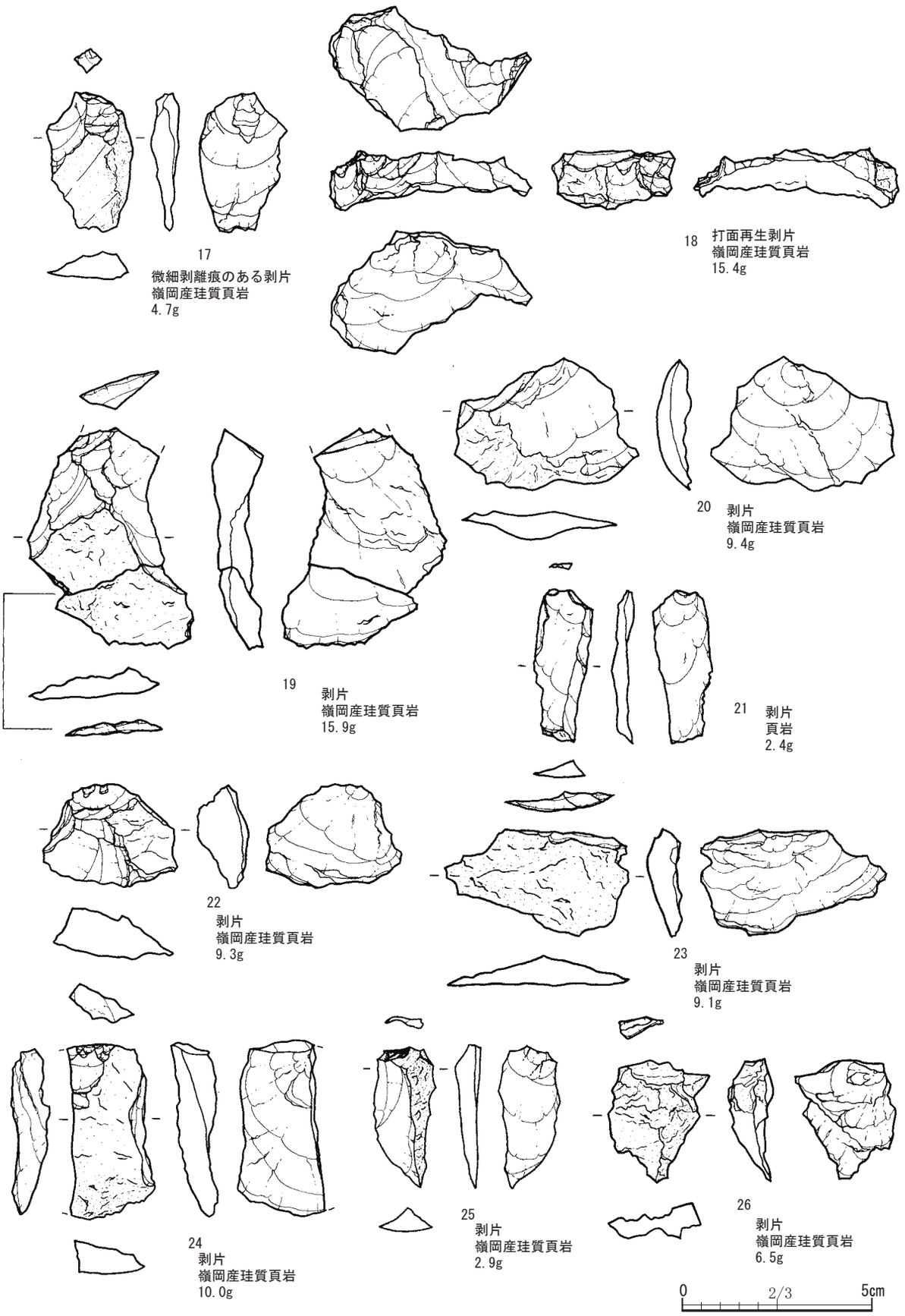
出土遺物　1 と 2 は黒曜石製の細石刃である。 1 は下端が、 2 は上下両端が折損している。 2 の両側縁の一部には微細な剥離がみられる。いずれの黒曜石も球顆等の夾雑物はほとんど認められない。 3 は砂岩製の剥片である。打面は円礫状の自然面であり、一方で下面は平滑な自然面で構成されている。 4 と 5 はガラス質黒色安山岩を石材とする剥片である。いずれも背面には円礫の自然面がおおきく残存する。図示することはできなかったが、 5 は主剥離面が他の剥片の打面 (写真図版 10-3) と接合した。 6 は頁岩製の



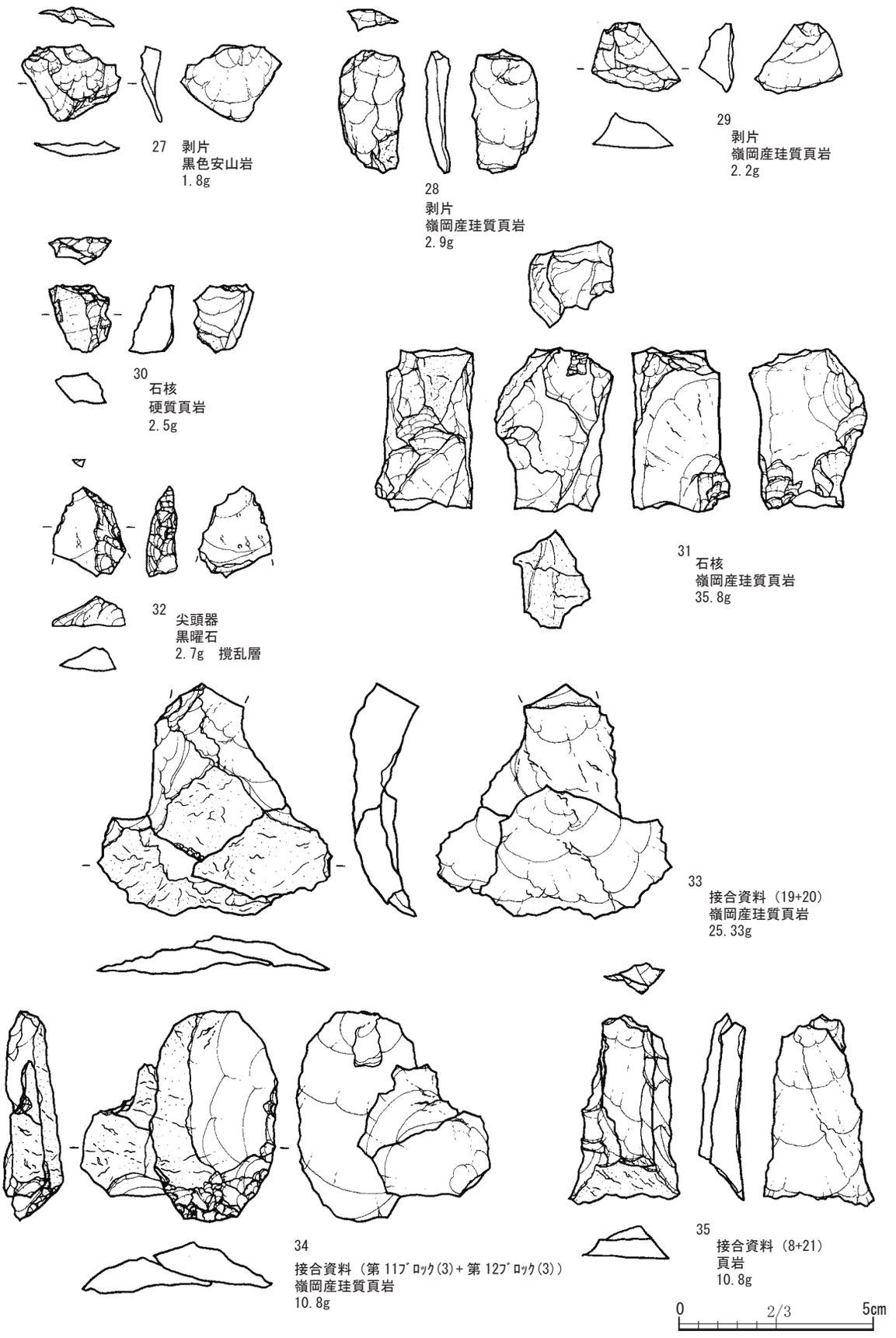
第 42 図　第 4 文化層第 12 ブロック (2)



第 43 図　第 4 文化層第 12 ブロック (3)

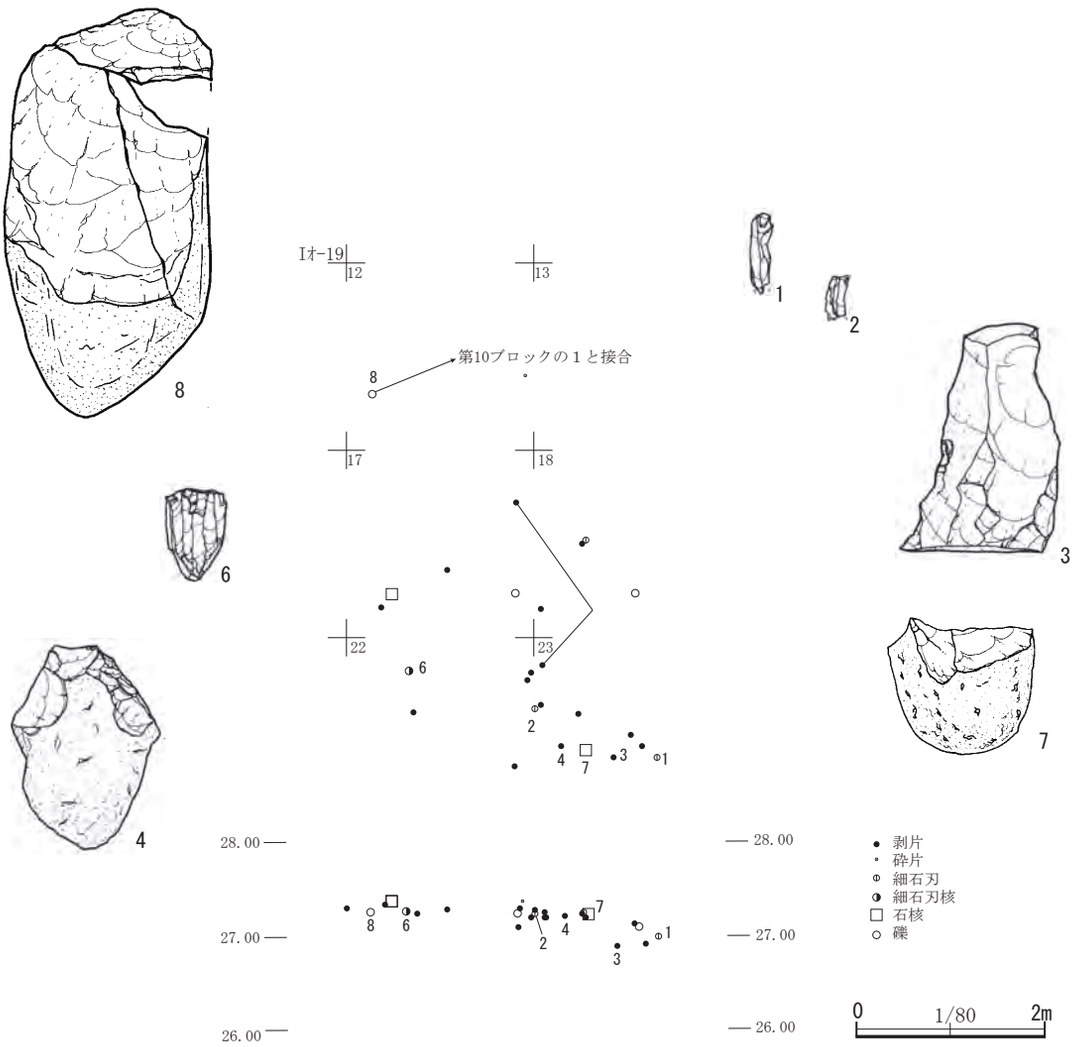


第 44 図　第 4 文化層第 12 ブロック (4)



第45図　第4文化層第12ブロック(5)

細石刃核である。稜柱形を呈し、背面には平滑な円礫状の自然面が認められる。細石刃が数本剥離されているものの、同様の石材の細石刃は検出されていない。７はガラス質黒色安山岩の石核である。４や５と同様に、円礫状の自然面に覆われている。８は礫であり、第 10 ブロックの剥片 (1) と接合した。顕著な敲打痕等は認められない。

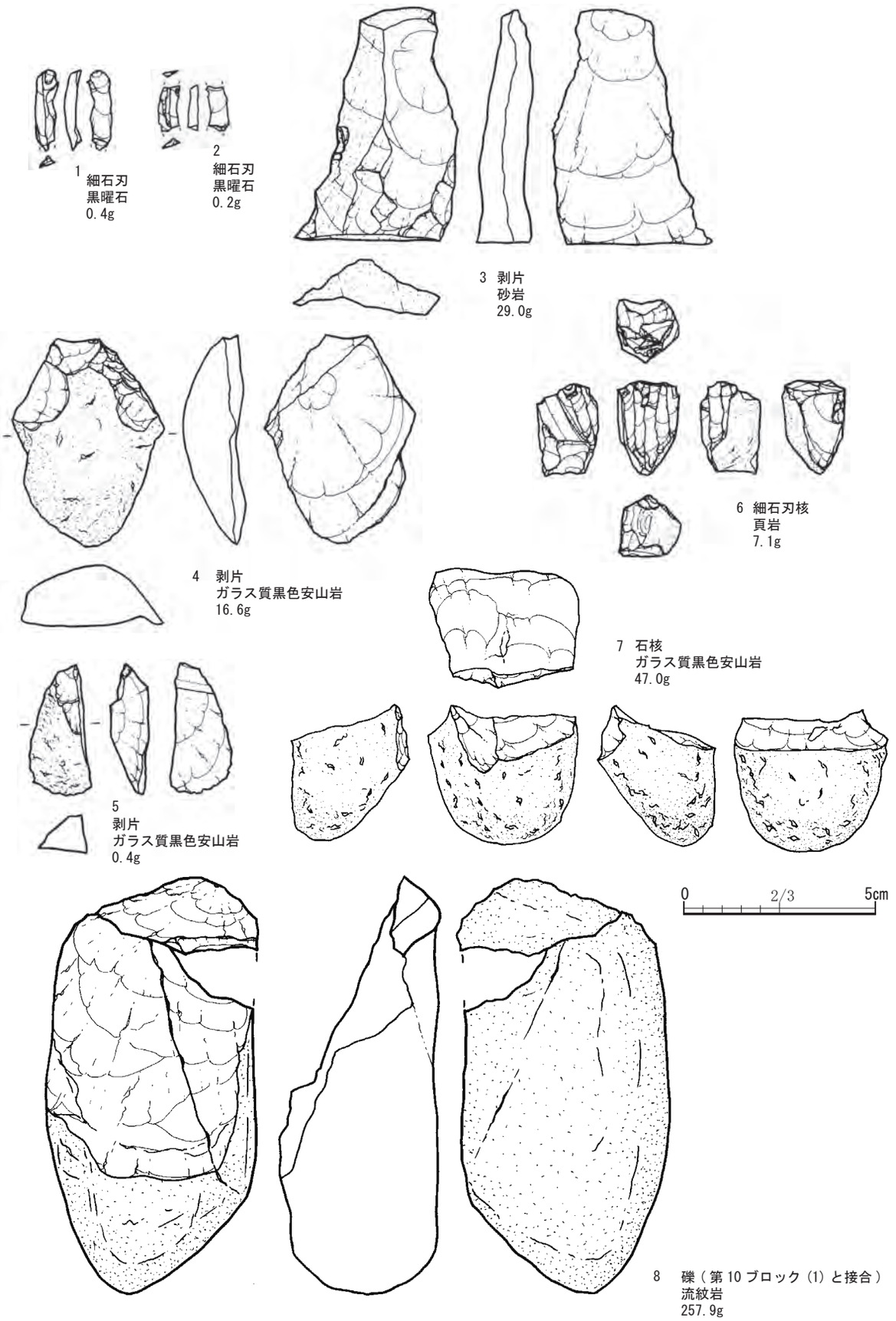


第 46 図　第 5 文化層第 13 ブロック (1)

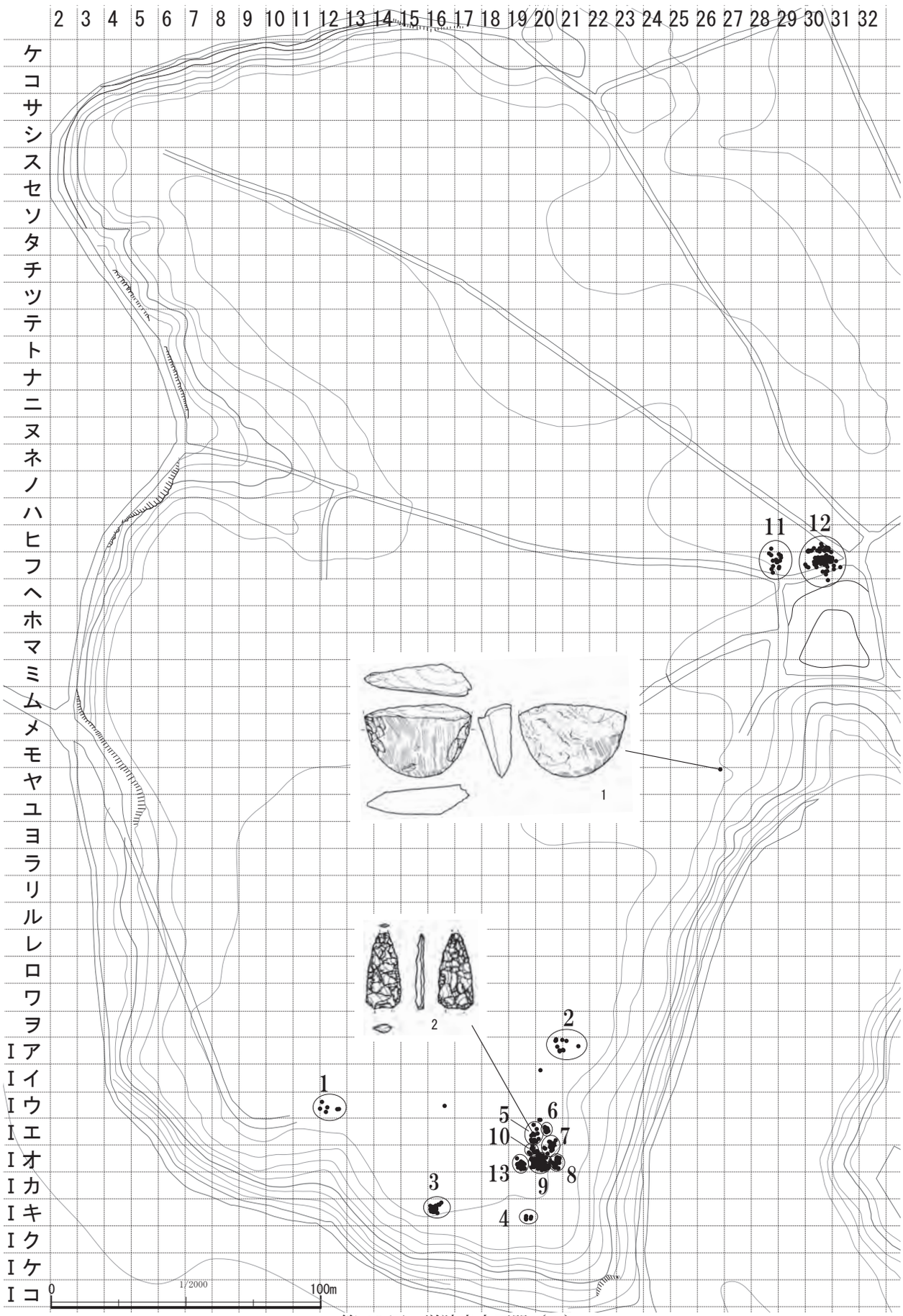
第３節　単独出土石器 (第 48・49 図・図版 10)

出土状況　ブロック外から単独で出土した石器は 20 点である。そのうち、有舌尖頭器１点、局部磨製石斧１点、剥片１点は出土層位等の情報が残されている。また、ナイフ形石器２点、尖頭器９点、有舌尖頭器２点、楔形石器１点、剥片３点が縄文時代以降の遺構、撹乱層、表土などから出土している。

出土石器　３点を図示した。１はヤ -26 グリッドから出土した局部磨製石斧である。石材はホルンフェルスで上部は折損している。表面および裏面の一部が研磨されている。とくに表面は前面にわたって研磨されており、光沢がみられる。研磨は垂直方向を中心に行われている。また左右側縁からは平坦な剥離が施されている。出土層位に関する図面が残されており、それによるとⅨｃ層とⅩ層の間、Ⅸｃ層の直下より出土していることが理解される (第 49 図)。Ⅸｃ層には「BB」という記載がみられ、また局部磨製石



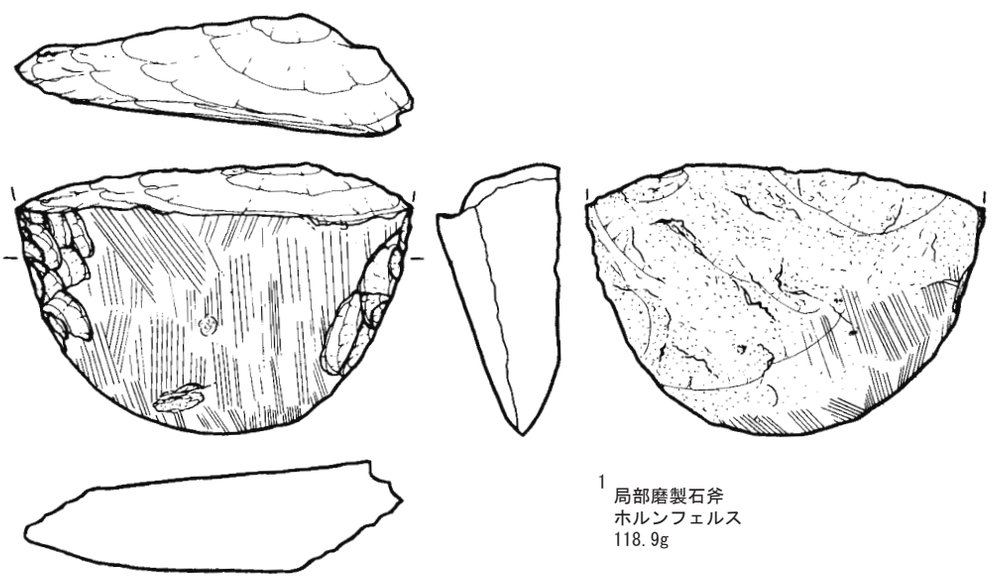
第47図　第5文化層第13ブロック(2)

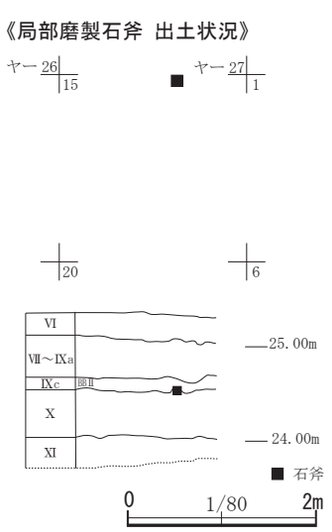


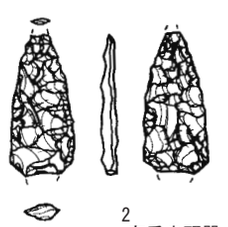
第 48 図　単独出土石器（1）

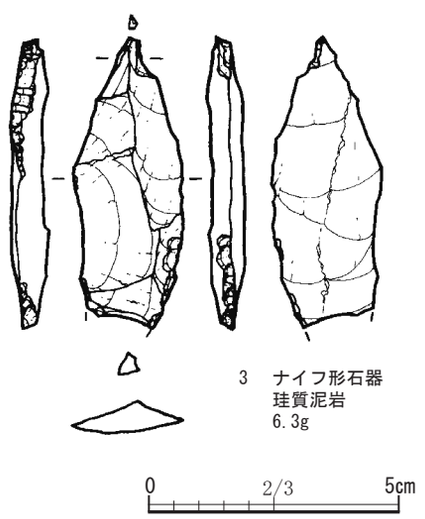
斧と一緒に保管してあったタグには「BB Ⅱ出土」と記されていることから、第２黒色帯 (Ⅸｃ層) の下部より出土したと考えられる。

２は有舌尖頭器で、第５ブロック (Ⅰエ -19-24) のⅢ層から出土した (第 26 図)。石材は透明度の高い黒曜石であり、また先端部と基部は折損している。縁辺には非常に細かい加工が施されており、両側縁は直線的である。３は珪質泥岩製のナイフ形石器である。出土層位等は不明である。下端と先端部が折損している。器体の左側縁上部と右側縁下部に急斜度な加工が施されており、また素材背面の先端部には平滑な自然面が一部残存しているため断面が台形状を呈する。









第 49 図　単独出土石器（２）

第３章　縄文時代

第１節　住居跡

今回の第１期工区の発掘調査では、竪穴住居跡を 85 軒検出している (第２表)。時期別には中期中葉 (加曽利ＥⅠ・Ⅱ式) ９軒、中期後葉 (加曽利ＥⅢ・Ⅳ式)27 軒、中期後葉～後期初頭 11 軒、後期初頭 (称名寺Ⅰ・Ⅱ)20 軒、後期初頭～後期前葉４軒、後期前葉 (堀之内式期) ４軒、後期後葉１軒である。なお、既報告の第２期工区では、早期後葉・茅山上層式期１軒が検出されている。

住居跡出土土器については、接合作業の際に住居跡のあるグリッドの確認面上や表土の土器を一緒に広げて接合関係を検討した。本来、竪穴からの出土が明確でなく接合しなかった土器は遺構外扱いとすべきだが、混ざったままの状態で版組まで実施されていたため、整理作業の終盤に帰属を再検討した (第１章第１節３(３)。グリッド取り上げ資料のうち、住居跡の所在する位置と全く異なる遺物は除外した。それ以外については、掘り込みの有無と注記№をもとに以下のように区分して挿図番号を提示した。遺構の時期判断の決め手となる炉材・炉の内部出土土器等にも抽出されていないものが多かったが、未掲載土器の見直しや点数の把握はできなかった。

住居跡出土としたのは、①注記№から遺構出土と判断できるもの、②遺物出土分布図を作成して遺構内と判断できるものである。確認面上出土としたのは、③グリッド取上げのうち、遺構内のグリッドに収まり、確認面上の包含層出土のものである。表土取上げのもの (①～③に接合個体・同一個体がないもの) は除外した。

この節では住居跡と遺物出土状況、出土土器の事実記載と、土器以外の出土遺物の概要記載を行い、土器以外の詳細は遺構外の資料も含めて第６節に記載する。土器の属性表は付表 3-1 に示す。遺構出土・遺構外出土を合わせた住居跡出土遺物の掲載点数は土器 2,375 点、土製品 134 点、石器・石製品 1,353 点である。なお、記載の最初に示したものは調査時点の旧遺構名であり、検出グリッドも表している。

J- 1 (第 50 図)

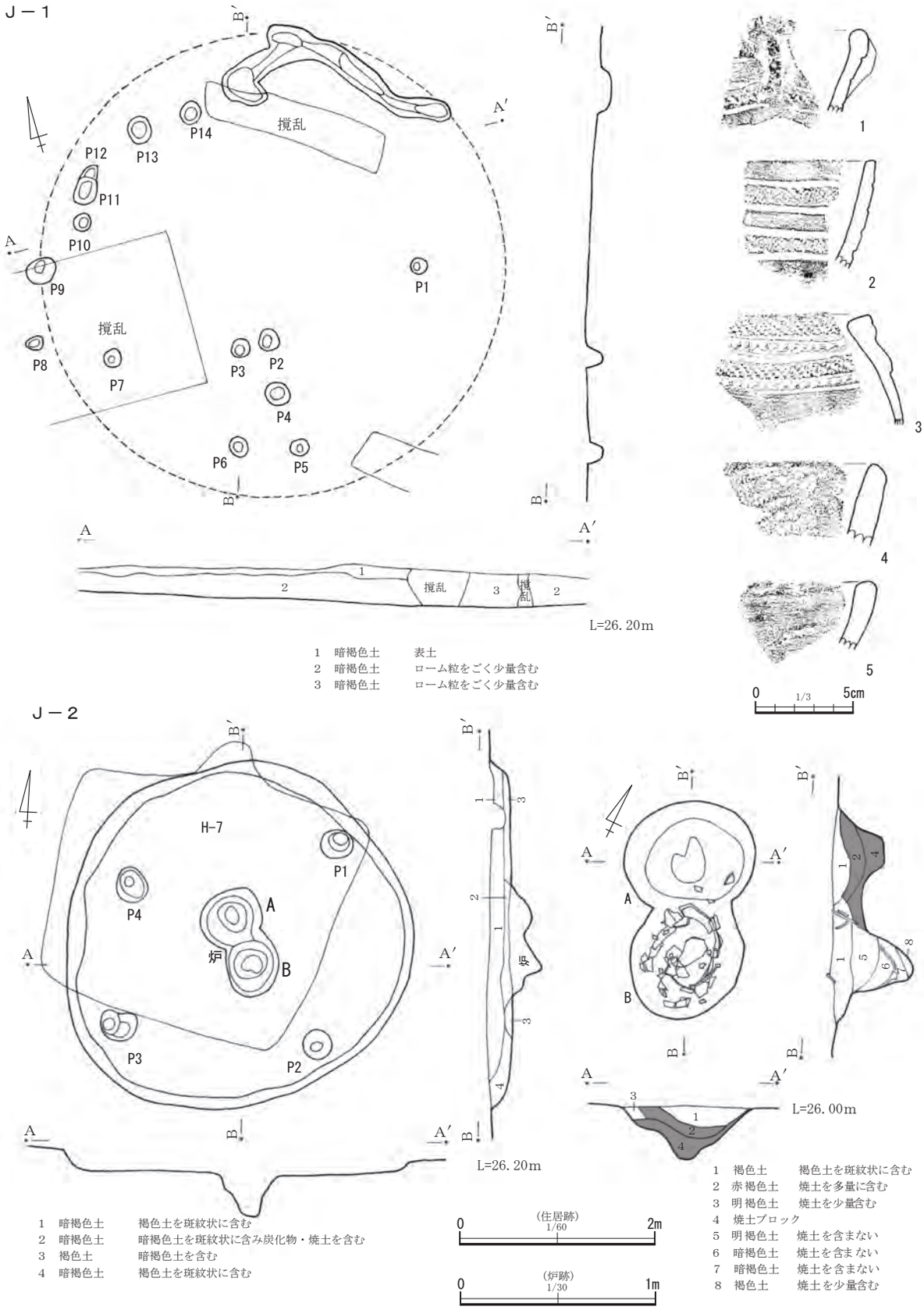
旧ネ -23- １住。掘り込みを有さない。ごく浅いピットの並びと壁溝の可能性のある溝から住居跡の存在を推定したが、明確な遺構とはいえない。住居跡出土土器は１～５である。

１・３は安行１式である。１は口縁から隆線を懸垂させ、隆線脇から区画するように横方向に沈線が引かれる。沈線間には縄文が横方向に施される。３は口縁直下から２本の隆線が貼付けられ区画される。隆線脇には沈線と刺突列が施される。隆線上には縄文が認められる。２は加曽利 B1 式である。４・５は後期後葉に伴うものであろう。４は口縁部破片で、口唇部の一部に爪形状の刻みと、胴部に原体不明の縄文が認められる。

住居跡の時期は後期後葉・安行１式期と考えられる。土器以外では剥片類１点 (付表 3-5) が出土している。

J- 2 (第 50 ～ 53 図・図版 11・41・44)

旧ハ -16- ２住。径 3.6 ｍの円形を呈し、0.2 ｍの掘り込みを有する。H - 7 (古代住居跡) に切られている。径 0.2 ｍ・深さ 0.3 ～ 0.4 ｍの柱穴４本 (P1 ～ 4) は主柱穴であろう。中央には炉の掘り込みが二つあり、南側のＢ炉には２個体の深鉢 (１・２) が炉体ないし炉囲いとして使われている。この土器は北側のＡ炉の焼土を切り込んでいるので、Ｂ炉が新しい。壁面は焼けていたが覆土には焼土を含まない。土器１は上半部の破片が炉囲いとして使われているほか、覆土からも１点出土した。２は炉内に底部から胴下半部がやや斜めに埋設されたものとみられ、そのほかの破片は炉内と覆土中の広範囲から出土している。炉体土器の上部が壊されたものであろうか。炉Ａの内部から出土した土器片２点は未掲載である。住居跡出土土

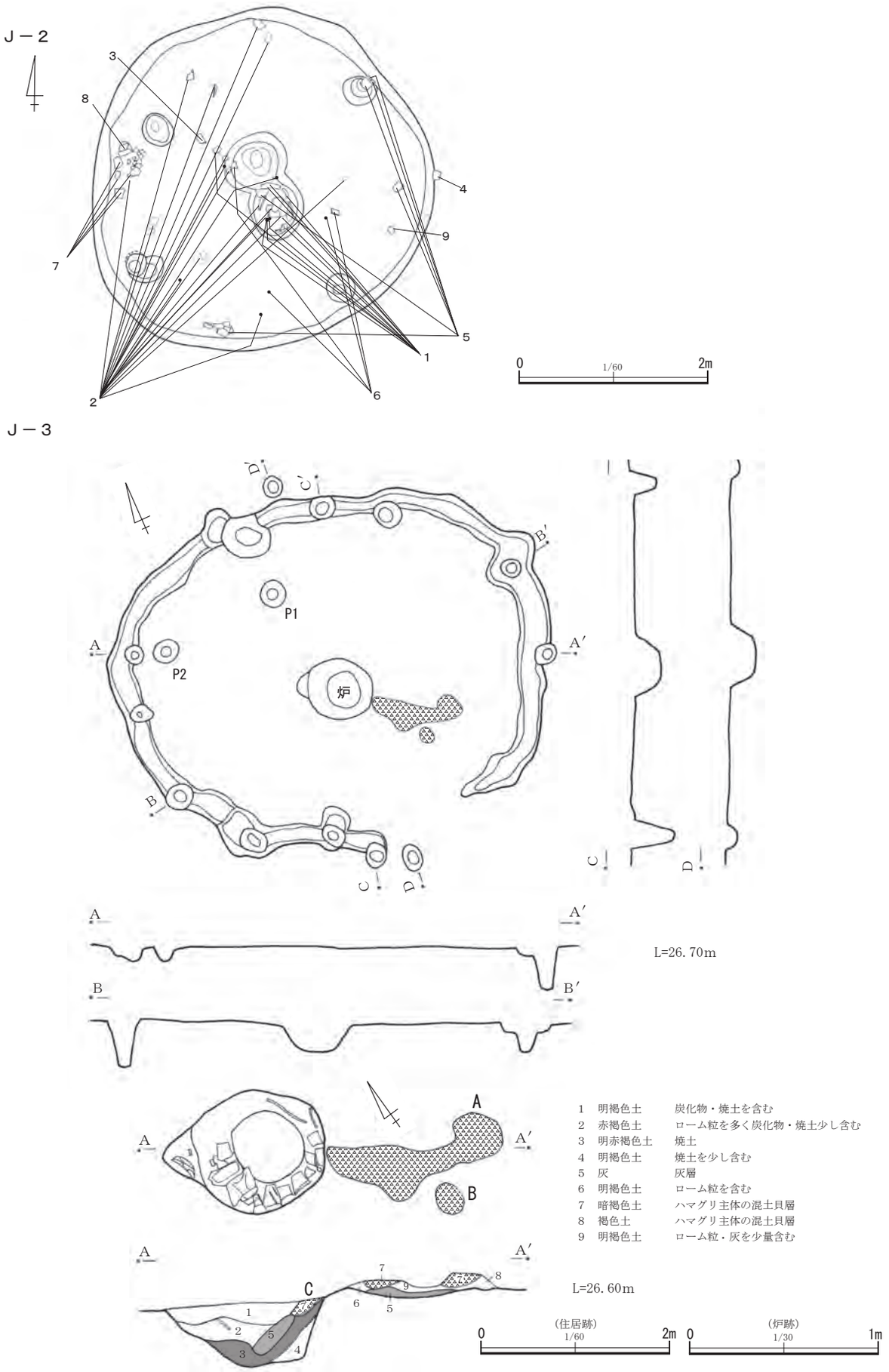

J－1
撹乱
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
P12
P13
P14
L=26.20m
1 暗褐色土 表土
2 暗褐色土 ローム粒をごく少量含む
3 暗褐色土 ローム粒をごく少量含む
0 1/3 5cm
J－2
H-7
炉
P1
P2
P3
P4
L=26.20m
L=26.00m
1 暗褐色土 褐色土を斑紋状に含む
2 暗褐色土 暗褐色土を斑紋状に含み炭化物・焼土を含む
3 褐色土 暗褐色土を含む
4 暗褐色土 褐色土を斑紋状に含む
(住居跡) 1/60 0 2m
(炉跡) 1/30 0 1m
1 褐色土 褐色土を斑紋状に含む
2 赤褐色土 焼土を多量に含む
3 明褐色土 焼土を少量含む
4 焼土ブロック
5 明褐色土 焼土を含まない
6 暗褐色土 焼土を含まない
7 暗褐色土 焼土を含まない
8 褐色土 焼土を少量含む

第50図 J-1・J-2(1)

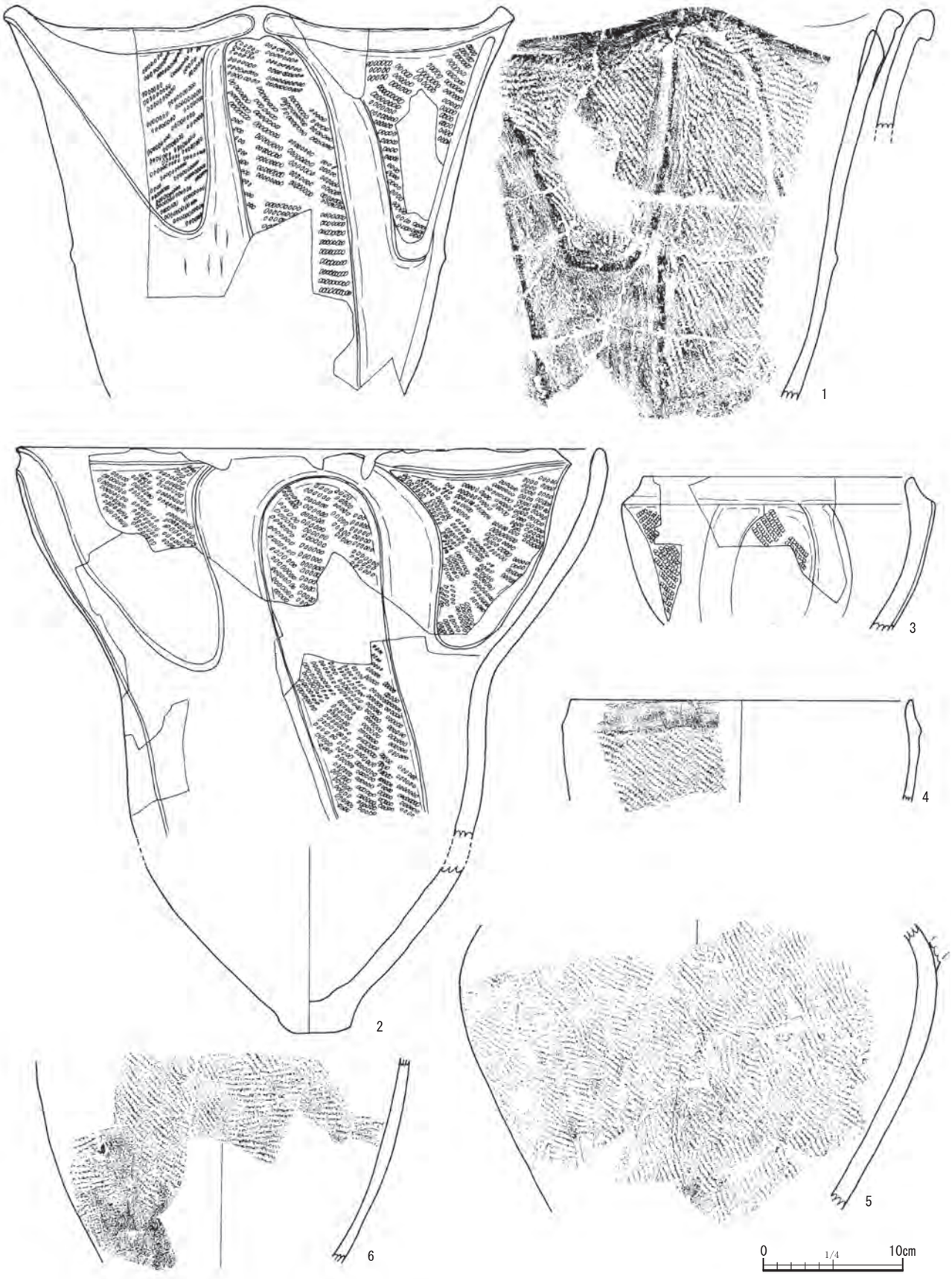
第２表　縄文時代住居跡

No.	旧住No.	時期	位置	形状	炉内土器	埋設土器	貝層	時期決定根拠	重複	長軸	短軸	壁高	備考
J-01	ネ-23-1住	安行1	ネ-23	－	－			覆土中出土土器		－	－	－	住居跡？
J-02	ハ-16-2住	加曽利ＥⅤ	ハ-16	円	炉体or囲			土器片囲炉の土器及び炉体土器	H-7	3.6	3.6	0.2	Ｂ炉が新
J-03	ホ-17-1住	加曽利ＥⅣ	ホ-17	楕円	土器片囲		○	土器片囲炉の土器及び炉体土器		4.7	3.7	0.0	
J-04	マ-13-1住	加曽利ＥⅡ	マ-13	円	炉体			炉体土器		4.3	4.2	0.1	
J-05	マ-14-1住	加曽利ＥⅡまたはⅣ	マ-14	円				覆土中出土土器		3.8	3.5	0.1	
J-06	マ-18-2住	加曽利ＥⅣ	マ-18	楕円				覆土中出土土器		5.0	4.5	0.1	
J-07	ミ-14-1住	加曽利ＥⅤ	ミ-14	楕円			○	覆土中出土土器	H-7	5.1	4.5	0.3	
J-08	ミ-15-1住	加曽利ＥⅣ～Ⅴ	ミ-15	楕円				覆土中出土土器		4.5	3.6	？	
J-09	ム-10-1住	加曽利ＥⅣ	ム-10	楕円				床面出土土器	D-119	4.5	3.7	0.2	石鏃製作残滓出土
J-10	ム-10-2住	加曽利ＥⅣ	ム-10	楕円			○	覆土中出土土器		5.5	4.7	0.3	石鏃製作残滓出土
J-11	ム-15-1住	加曽利ＥⅡ	ム-15	円	炉体・囲			炉内出土土器		4.6	4.4	0.2	
J-12	ム-17-1住	加曽利ＥⅤ	ム-17	柄鏡		2		埋設土器		6.9	4.8	0.3	柄鏡形。石鏃製作残滓出土
J-13	ム-18-1住	加曽利ＥⅣ	ム-18	－		1		埋設土器		－	－	0.0	出入口施設あり
J-14	メ-4-1住	加曽利ＥⅣ	メ-4-	円			○	覆土中出土土器		3.7	3.6	0.3	
J-15	メ-17-1住	加曽利ＥⅡ	メ-17	楕円				覆土中出土土器		4.4	3.9	0.2	
J-16	メ-20-1住	加曽利ＥⅣ	メ-20	楕円	囲			覆土中出土土器		4.9	3.6	0.2	
J-17	メ-20-2住	加曽利ＥⅣ～Ⅴ	メ-20	楕円				覆土中出土土器		3.9	3.5	0.1	
J-18	モ-09-1住	加曽利ＥⅣ	モ-09	円	炉体			炉内出土土器		4.1	4.1	0.3	炉体の下に土器を敷き詰める。石鏃製作残滓出土
J-19	モ-14-2住	加曽利ＥⅡ	モ-14	楕円				炉付近出土土器	H-17・D-136	5.2	4.8	0.1	
J-20	モ-27-1住	加曽利ＥⅠ	モ-27	不整楕円				覆土中出土土器		3.5	3.1	0.2	炉なし、住居跡？
J-21	ユ-07-1住	不明	ユ-07	楕円				遺物なし		4.4	3.4	0.2	
J-22	ユ-22-1住	加曽利Ｅ？	ユ-22	楕円				覆土中出土土器	D-154より新。D-157	6.6	4.8	0.0	
J-23	ユ-25-1住	不明	ユ-25	－				遺物なし		－	－	0.1	
J-24	ユ-26-1住	中期後半？	ユ-26	方				覆土中出土土器		3.1	3.1	0.2	炉なし、住居跡？
J-25	ヨ-13-1住	加曽利ＥⅢ	ヨ-13	円				覆土中出土土器	D-161より新	5.8	5.5	0.3	
J-26	ヨ-19-1住	称名寺Ⅰ	ヨ-19	楕円				覆土中出土土器	D-177・178より旧	6.1	5.6	0.2	
J-27	ヨ-20-1住	称名寺Ⅰ	ヨ-20	楕円				覆土中出土土器	D-179～185	6.0	4.2	0.0	
J-28	ヨ-21-1住	加曽利Ｅ終末	ヨ-21	円？				覆土中出土土器	D-433	－	－	0.0	
J-29	ヨ-24-1住	加曽利ＥⅤ	ヨ-24	円？				覆土中出土土器					
J-30	ラ-14-4住	加曽利ＥⅣ	ラ-14	楕円				覆土中出土土器	D-195・196	5.4	4.7	0.3	
J-31	ラ-19-2住	称名寺Ⅰ	ラ-19	楕円				覆土中出土土器		5.8	4.5	？	
J-32	ラ-21-1住	加曽利ＥⅣ	ラ-21	楕円		1		埋設土器内出土土器		5.6	4.8	？	
J-33	リ-11-1住	不明	リ-11	楕円				確実な出土遺物なし	D-192・193・215	6.0	5.0	0.0	
J-34	リ-13-1住	加曽利ＥⅡ	リ-13	円	土器炉体			土器片囲炉の土器及び炉体土器	建替え？	5.0	4.6	0.3	Ａ・Ｂの建替え有無明確でない
J-35	リ-14-1住	加曽利Ｅ後半	リ-14	円				覆土中出土土器	D-224・229～232より旧	5.5	5.0	0.2	
J-36	リ-20-1住	加曽利ＥⅤ？	リ-20	円				覆土中出土土器		5.8	5.0	0.2	
J-37	リ-22-1住	加曽利ＥⅣ～Ⅴ	リ-22	不整円				覆土中出土土器	D-268より新	4.1	3.5	0.2	
J-38	リ-23-1住	加曽利ＥⅣ	リ-23	楕円			○	覆土中出土土器		4.1	4.0	0.3	石鏃製作残滓出土
J-39	リ-24-1住	加曽利ＥⅣ～Ⅴ	リ-24	不整円？	土器片囲			覆土中出土土器					
J-40	ル-09-1住	称名寺Ⅰ	ル-09	円				ピット内出土土器	J-42・D-277～280より旧	4.6	4.6	0.3	土器片錘15
J-41	ル-09-2住	称名寺Ⅰ	ル-09	円		1		埋設土器		4.8	4.4	0.3	
J-42	ル-09-3住	加曽利ＥⅤ	ル-09	円				覆土中出土土器	J-40より新。D-273・274・281より旧	4.1	4.0	0.3	
J-43	ル-12-1住	加曽利ＥⅡ	ル-12	円		1		炉体土器	D-284～287より旧	4.7	4.2	0.2	土器片埋設、土器は11個体以上

No.	旧住No	時期	位置	形状	炉内土器	埋設土器	貝層	時期決定根拠	重複	長軸	短軸	壁高	備考
J-44	ル-13-1住	加曽利ＥⅠ	ル-13	楕円				覆土中出土土器		3.6	3.3	0.2	
J-45	ル-14-2住	加曽利ＥⅡ？	ル-14	円				覆土中出土土器	H-26・D-291より旧	5.7	5.7	0.2	
J-46	ル-19-1住	称名寺Ⅰ	ル-19	楕円			○	覆土中出土土器	J-47・D-308・309～314・318・319・439	6.4	5.8	0.1	J-47より新。石鏃製作残滓出土
J-47	ル-19-2住	加曽利ＥⅣ？	ル-19	楕円			○	覆土中出土土器	J-46・D-310・312・317	6.0	5.9	0.1	J-46より旧
J-48	ル-20-1住	加曽利ＥⅣ～Ⅴ	ル-20	円		1		覆土中出土土器	J-51より旧。D-322	4.9	4.8	0.2	石鏃製作残滓出土
J-49	ル-20-2住	加曽利ＥⅢ？	ル-20	楕円				覆土中出土土器	J-51より旧。D-255・257	5.8	4.8	0.2	貝層はJ-51に帰属
J-50	ル-20-3住	加曽利ＥⅤ	ル-20	楕円			○	覆土中出土土器	J-49・51	5.0	4.0	0.0	
J-51	ル-20-4住	称名寺Ⅰ	ル-20	楕円			○	覆土中出土土器	J-48・49より新	5.1	4.6	0.2	
J-52	レ-08-1住	加曽利ＥⅤ	レ-08	円				覆土中出土土器		4.3	4.0		
J-53	レ-12-1住	加曽利ＥⅣ～Ⅴ	レ-12	円				覆土中出土土器		5.6	5.4		
J-54	ロ-08-1住	加曽利ＥⅣ	ロ-08	円			○	覆土中出土土器	D-345より旧	5.5	5.5	0.3	D-345陥し穴に貝層・土器が流れ込む
J-55	ロ-09-1住	加曽利ＥⅣ～Ⅴ	ロ-09	円		1		覆土中出土土器	D-346	4.9	4.5	0.2	石鏃製作残滓出土
J-56	ロ-12-1住	中期	ロ-12	楕円				覆土中出土土器		4.9	4.3	0.0	
J-57	ロ-17-1住	加曽利ＥⅣ～Ⅴ	ロ-17	円				覆土中出土土器		4.3		0.4	
J-58	ロ-19-1住	不明	ロ-19	楕円？				遺物僅少					
J-59	ロ-20-1住	加曽利ＥⅢ	ロ-20	円				覆土中出土土器	J-60	5.4	4.0	0.2	
J-60	ロ-20-2住	加曽利ＥⅣ	ロ-20	？		1	○	埋設土器	J-59				
J-61	ワ-08-1住	加曽利ＥⅤ	ワ-08	不整円	炉体			炉体土器		4.6	4.0	0.4	
J-62	ワ-15-1住	加曽利ＥⅤ	ワ-15	円				覆土中出土土器		4.2	3.9	0.3	
J-63	ワ-18-1住	加曽利ＥⅤ	ワ-18	不整円		1		埋設土器	J-64より新。D-366・444	5.9	4.7	0.3	
J-64	ワ-18-2住	称名寺Ⅰ	ワ-18	円				覆土中出土土器	J-63より旧	6.2	6.0	0.3	
J-65	ヲ-15-1住	加曽利ＥⅣ	ヲ-15	不整円				覆土中出土土器		5.4	5.0	0.3	
J-66	ヲ-16-1住	加曽利ＥⅢ	ヲ-16	円				覆土中出土土器		5.8	5.5	0.2	
J-67	Ⅰア-17-1住	不明	Ⅰア-17	円？				遺物僅少					
J-68	Ⅰイ-11-1住	加曽利ＥⅣ～Ⅴ	Ⅰイ-11	楕円				覆土中出土土器		5.3	4.6	0.4	
J-69	Ⅰイ-13-1住	加曽利ＥⅣ	Ⅰイ-13	円				覆土中出土土器		5.0	4.7	0.2	
J-70	Ⅰイ-16-1住	加曽利ＥⅣ～Ⅴ	Ⅰイ-16	ほぼ円				覆土中出土土器	1号方形周溝	5.5	5.1	0.2	
J-71	Ⅰイ-17-1住	称名寺Ⅱ	Ⅰイ-17	－		1		埋設土器	D-393				
J-72	Ⅰイ-20-1住	堀之内	Ⅰイ-20	円				J73住を切る	J-73より新	3.5	3.3	0.0	
J-73	Ⅰイ-20-2住	堀之内1	Ⅰイ-20	楕円				覆土中出土土器	J-72より旧	5.7	4.7	0.2	J-72貼床面下で検出
J-74	Ⅰウ-13-1住	加曽利ＥⅣ	Ⅰウ-13	楕円				覆土中出土土器		5.4	5.0	0.1	
J-75	Ⅰウ-16-1住	加曽利ＥⅣ～Ⅴ	Ⅰウ-16	楕円				覆土中出土土器	J-76より新。方形周溝	5.8	4.8	0.1	
J-76	Ⅰウ-16-2住	加曽利ＥⅣ？	Ⅰウ-16	楕円				J75住に切られる	J-75より旧	6.0	5.4	0.1	J-72貼床面下で壁溝検出
J-77	Ⅰウ-17-1住	称名寺Ⅱ～堀之内1	Ⅰウ-17	楕円				覆土中出土土器	D-398	6.2	5.0	0.2	
J-78	Ⅰエ-13-1住	加曽利ＥⅣ	Ⅰエ-13	不整円				覆土中出土土器	D-404	3.9	3.8	0.2	
J-79	Ⅰエ-17-2住	加曽利ＥⅣ	Ⅰエ-17	不整楕円		1		埋設土器	H-31	6.4	5.2	0.4	
J-80	Ⅰエ-18-1住	称名寺Ⅱ～堀之内1	Ⅰエ-18	不整楕円				覆土中出土土器		5.5	5.6	0.6	
J-81	Ⅰカ-15-1住	称名寺Ⅱ～堀之内1	Ⅰカ-15	不整円				覆土中出土土器	J-82より新	4.0	3.6	0.3	
J-82	Ⅰカ-15-2住	称名寺Ⅱ～堀之内1	Ⅰカ-15	不整楕円				明確に伴う出土遺物なし	J-81より旧	5.8	5.1	0.3	
J-83	Ⅰカ-17-1住	称名寺Ⅱ～堀之内1	Ⅰカ-17	不整楕円				覆土中出土土器	D-423・449	3.5	2.5	0.5	住居跡？
J-84	Ⅰカ-18-1住	堀之内1	Ⅰカ-18	不整楕円	炉体抜取？			覆土中出土土器		6.4	6.0	0.3	
J-85	Ⅰキ-17-1住	堀之内1	Ⅰキ-17	円？	土器片囲			覆土中出土土器		5.8	5.7	0.2	
85軒					貝層形成		11軒						


Ｊ－２
Ｊ－３
P1
P2
炉
L=26.70m
L=26.60m
1 明褐色土 炭化物・焼土を含む
2 赤褐色土 ローム粒を多く炭化物・焼土少し含む
3 明赤褐色土 焼土
4 明褐色土 焼土を少し含む
5 灰 灰層
6 明褐色土 ローム粒を含む
7 暗褐色土 ハマグリ主体の混土貝層
8 褐色土 ハマグリ主体の混土貝層
9 明褐色土 ローム粒・灰を少量含む
(住居跡) 1/60
(炉跡) 1/30

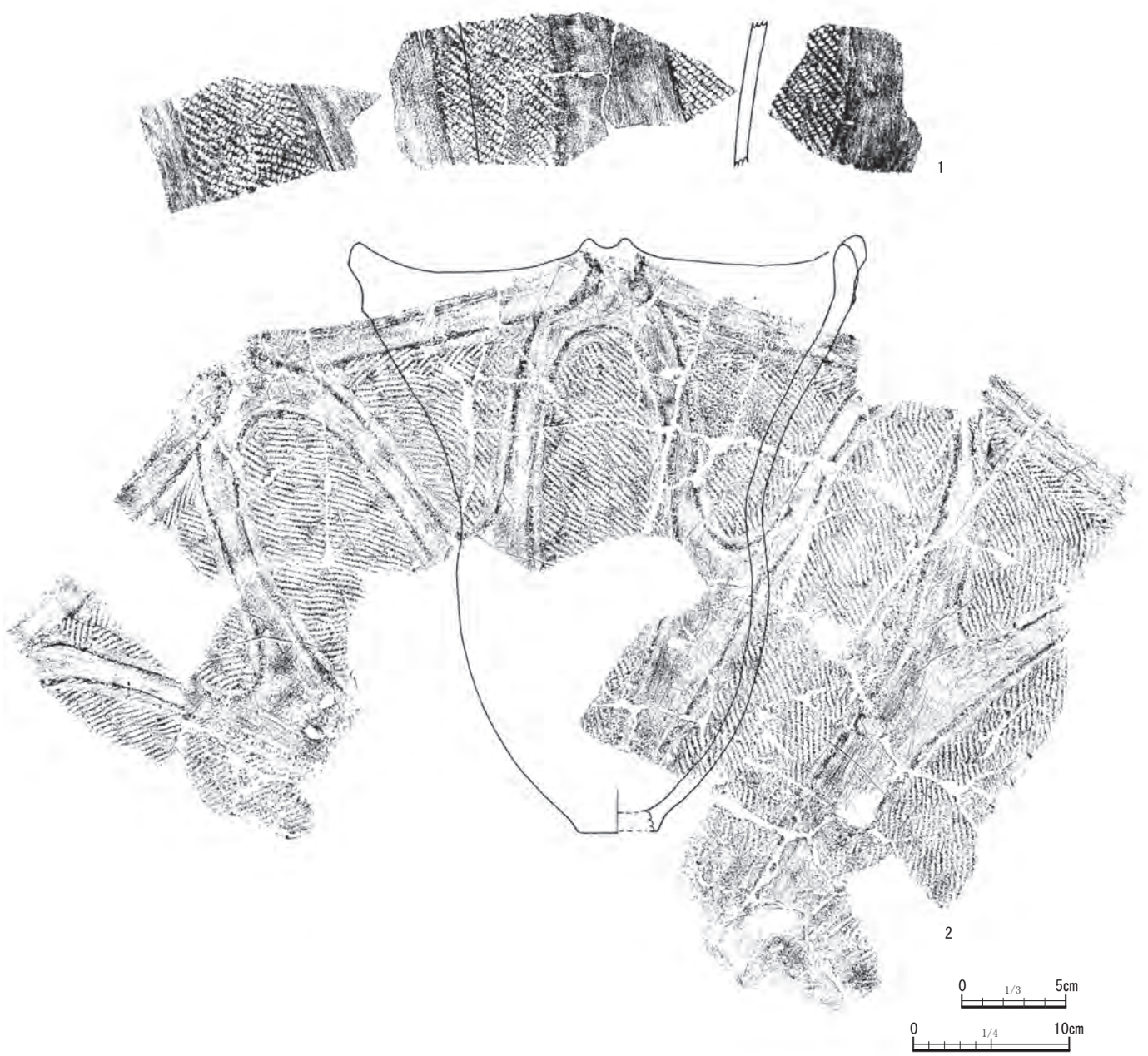
第51図　Ｊ-2（2）・Ｊ-3（3）



第 52 図　J -2(3)

Ｊ－２

Ｊ－３



第 53 図　Ｊ -2(4)・Ｊ -3(2)

器は１～９であり、広範囲にばらついて出土している。

１～８は加曽利Ｅ式終末の土器である。このうち１～３は加曽利ＥⅤ式と考えられるが、それ以外は明確な細別型式の認定は出来ない。１は胴部にほとんどくびれを持たず、直線的に立ち上がる器形で、口縁部はやや外反する。胴部文様の逆Ｕ字状の区画は、胴下部から口縁部の区画に向かって貫入し、貫入する部分に波頂部と突起が対応するように施されている。隆線脇は一部ナデられて調整されているが、隆線上に縄文が施されている部分も多い。文様構成の一部に乱れが生じている(拓本部分を参照)。２・３も１とほぼ同様の文様構成を持つ土器で、隆線上にも縄文が認められる。２は底部の径が小さくやや上げ底状である。逆Ｕ字状区画がやや斜めになるなど、文様構成に乱れが生じている。３は胴部の逆Ｕ字状区画が、口縁部区画に貫入した部分は突起状になる。５は鉢形土器と考えられ、上部に１か所突起状になる部分があり、橋状把手が欠損したものと推測される。６は１か所に隆線脇の調整と考えられる沈線が認められる。７・８は底部及び底部付近の破片で、いずれも調整に伴う縦方向の擦痕が認められる。９はミニチュア土器である。

住居跡の時期は加曽利ＥⅤ式期と考えられる。土器以外では磨石類１点(第287図73)、石皿・台石１点(第290図19)、軽石製品１点(付表３-３-４)が出土している。

J-３(第51・53・54図・図版11・41)

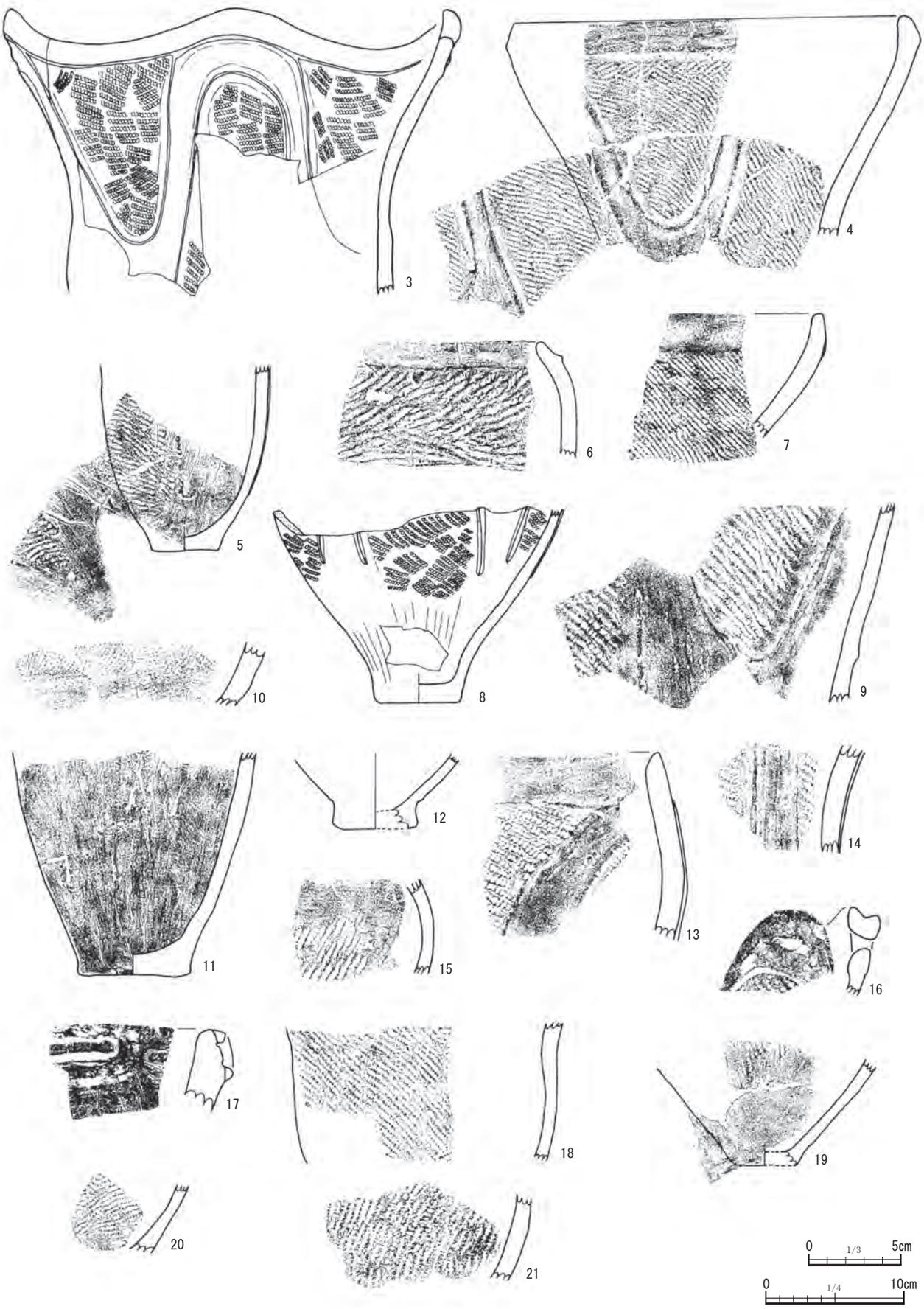
旧-17-１住。掘り込みを有さないが、壁溝と壁柱穴によって4.7×3.7ｍの楕円形のプランが明らかである。壁溝が途切れる南側に出入口が付設されていたとみられる。竪穴の北側のP1・P2は径0.3ｍ・深さ0.1ｍのごく浅いものである。中央に円形の掘り込みと土器片囲をもつ炉が存在する。土器片囲は約2/3遺存し少なくとも８個体分の土器片が使われている。炉の内部から南東側の床面の灰層上にかけて３か所の貝層を形成している。Ａ～Ｃは一連の廃棄に伴うものとみられ、もっとも大きいＡは100cm×30cm､厚さ35cmである。現地の観察によればハマグリ主体であったという。住居跡出土土器は２・４・５・６・８・11・12・14～16・19・21である。このうち、４・６・19・21は炉囲いの素材である。確認面上出土は３・７・９・10・13・17・18・20である。

１～15・18・19は加曽利Ｅ式終末の土器と考えられる。２～４は加曽利ＥⅣ式である。２・３は胴部文様に微隆線で「対向Ｕ字文」が施される。胴下部からの逆Ｕ字区画は、波頂部に対応するように配置されている。微隆線脇は丁寧にナデられて調整される。１・５～９は微隆線と縄文が認められる。１・５～７は隆線上にも縄文が施されるが、８・９は隆線脇にナデが認められる。10は微隆線ではなく器面の屈曲部分で区画されるものである。11･12は底部がやや出っ張る器形で、縦方向のケズリが認められる。13・14は加曽利ＥⅤ式の可能性がある。口縁部は内弯が緩く、微隆線と縄文が施され、微隆線上にも縄文が認められる。19は無節Ｒが施される。16は称名寺Ⅰ式である。突起部分の破片で、口唇にはナデによる沈線が認められる。また貫通する孔が施され、直下には沈線による区画とLRの単節縄文が認められる。17は堀之内１式の口縁部破片である。

住居跡の時期は加曽利ＥⅣ式期と考えられる。土器以外では磨石類１点(110)、剥片類３点が出土している。

J-４(第55・56図・図版11・41)

旧マ-13-１住。4.3×4.2ｍの円形を呈し、0.1ｍの掘り込みを有する。柱穴は８本検出しており、P1・P3・P6・P7の４本が深く主柱穴と思われる。炉は中央やや北東寄りにあり、キャリパー形深鉢の胴上半部(１)の中に､胴下半部(２)を入れ子状にして炉体としている。外側の１は強く焼成を受けている。内側の２は二次焼成を受けた痕跡は見られず、覆土には多量の炭化物が混じっていた。住居跡出土土器



第 54 図　J -3(3)

は１～４・８であり、８は炉内から出土している。確認面上出土は５～７である。

１・２はいずれも加曽利ＥⅡ式である。１は口縁から胴部にかけて縄文と沈線による懸垂文が施される。沈線間は地文が磨消される。２はキャリパー形の深鉢で胴部のみの遺存である。縄文と沈線による懸垂文が５か所に施される。３～５は加曽利ＥⅡ式である。３は縄文と沈線による懸垂文が引かれる。沈線間は磨消されない。６・７は加曽利Ｅ式終末の口縁部破片で、微隆線と縄文で文様が施される。６は隆線脇が丁寧にナデられるが、７はナデによる調整がされない。８は中期中葉末から後葉初頭にかけての土器で、中峠０地点型深鉢である。口縁部に隆線による区画と集合沈線が認められる。

住居跡の時期は加曽利ＥⅡ式期と考えられる。土器以外では土偶１点(第278図１)、土器片円板１点(第278図５)、土器片錘３点(第279図１～３)、石皿・台石１点(付表３-３-65)、剥片類１点(３-５-77)が出土している。土器片錘２点と土偶は炉南側の床面から出土しているが、土偶は後期土偶とみられ当遺構に伴うものではない。

J-５(第55・56図・図版11)

旧マ-14-１住。3.8×3.5ｍの円形を呈し、0.1ｍの掘り込みを有する。竪穴の南西部で硬化した床面を検出した。深さ0.3～0.4ｍの３本(P4・P5・P7)の他、４本の浅いピットが炉を中心に廻る。炉は中央のやや北西寄りにあり、焼土の堆積がある。住居跡出土土器は１～４・６である。確認面上出土は５である。

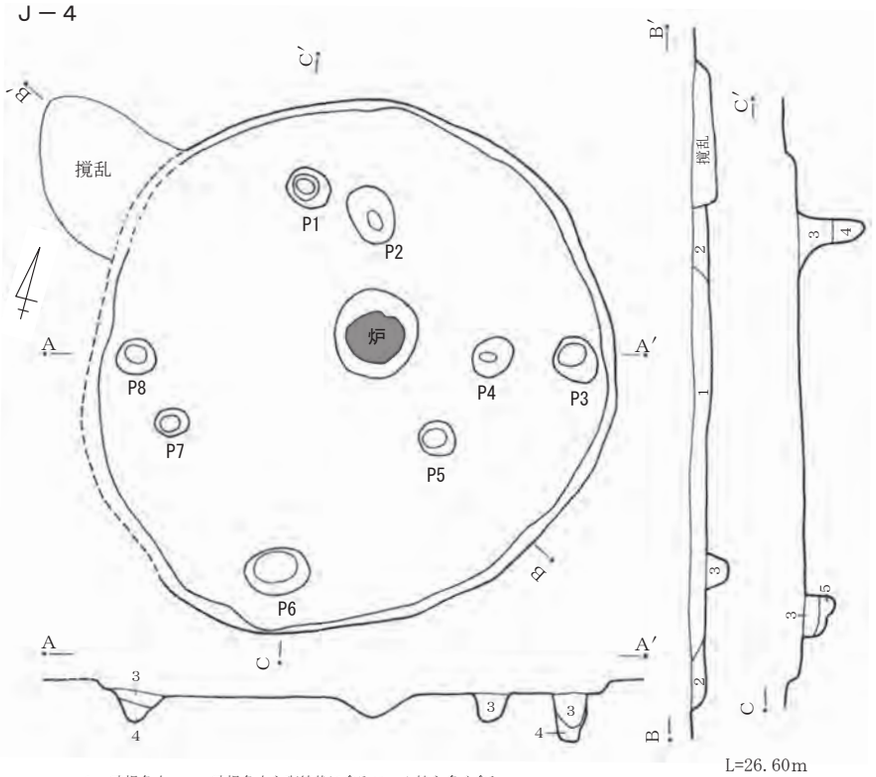
１は加曽利ＥⅠ式の土器である。器形はキャリパー形と考えられ、背割隆線と縄文で文様が施される。口縁部の一部は突起状に張り出し、突起部分では沈線による渦巻文が認められる。２は中期中葉末から後葉初頭の土器である。口唇部には平坦面が認められ、口縁直下は無文で断面三角形の隆線が横方向に貼り付けられる。３は加曽利Ｅ式後半のものと考えられる。口唇部は平坦で、胴部には縄文のみが認められる。４～６は加曽利Ｅ終末のものである。４は目の細かい縄文が施される。５はキャリパー形で、口縁が内弯する。口縁部に微隆線で区画され、無文帯を持ち、胴部には縄文が認められる。６は微隆線と縄文が認められる。微隆線脇には縄文施文後にナデが認められない。住居跡の時期は加曽利ＥⅡまたはⅣ式期か。

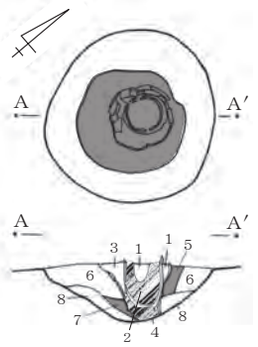
J-６(第57・58図・図版11・12)

旧マ-18-２住。約５ｍ×4.5ｍの楕円形を呈し、一部で0.1ｍの掘り込みを有する。柱穴６本が記録されている。炉は想定したプランの南側に偏り、底面に燃焼面を形成する。P2～P4のほぼ中心にあたる。想定が北に伸びすぎている可能性がある。炉内からの遺物の出土はなかった。住居跡出土土器は１・３・５・７・11・18である。確認面上出土は２・４～６・８～10・12～17・19～23である。

１～18は加曽利Ｅ式終末の土器である。１は加曽利ＥⅤ式の可能性がある。口縁部がやや外反する器形で、口縁直下は微隆線で区画され、無文帯を持つ。微隆線脇はナデられない。２は微隆線と縄文が施される。微隆線脇は丁寧にナデられる。３は底部がやや出っ張る器形で、縄文のみが認められる。４は小形の土器で、薄手である。沈線と縄文で「対向Ｕ字文」が施される。５は波状口縁で波頂部は突起状になる。口縁部は微隆線で区画され、胴部には微隆線と縄文による「逆Ｕ字状」の文様が認められる。微隆線脇は丁寧にナデられる。６は口縁部が微隆線で区画され、胴部には縄文と「逆Ｕ字状文」が施される。微隆線脇は丁寧にナデられる。７～９は微隆線と縄文が認められる。微隆線脇はいずれも丁寧にナデられる。加曽利ＥⅣ式と考えられる。10～13は口縁部破片で、微隆線による区画と無文帯をもつ。10は沈線と縄文で「逆Ｕ字状文」が施される。11・12は胴部に縄文のみが施され、微隆線上にも縄文が認められる。13は口縁部を区画する微隆線脇に列点が施される。微隆線上にも縄文が認められる。15・16は鉢形土器である。15は口縁部に幅広い無文帯をもち、胴部には微隆線と縄文が認められる。縄文は微隆線上に

Ｊ－４

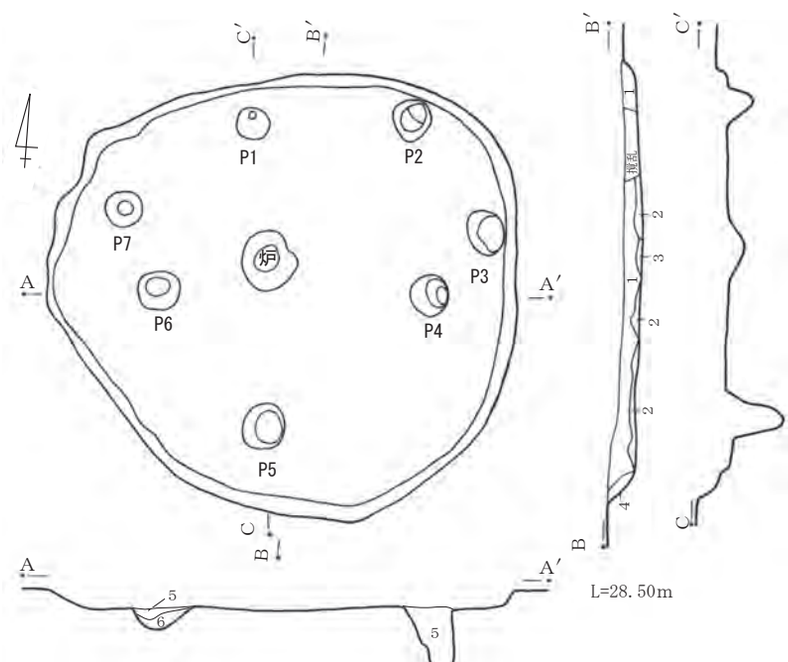


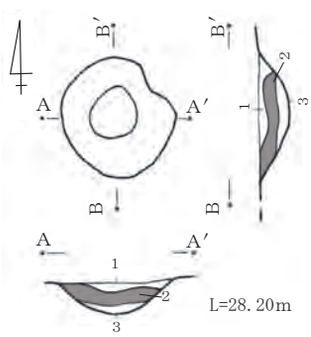


1　暗褐色土　　焼土・ローム粒を少し含む
2　黒褐色土　　大量の炭化物を含む
3　暗褐色土　　焼土を少し含む
4　暗褐色土　　ローム粒・炭化物を多く含む
5　赤褐色土　　焼土を多く含む
6　褐色土　　焼土を少し含む
7　褐色土　　焼土を多く含む
8　褐色土　　暗褐色土・焼土を少し含む

1　暗褐色土　　暗褐色土を斑紋状に含みローム粒を多く含む
2　暗褐色土　　褐色土を多く炭化物を少し含む
3　褐色土　　暗褐色土と明褐色土を斑紋状に含む
4　暗黄褐色土　　ローム粒を多く含む
5　褐色土　　暗褐色土を少し含む

Ｊ－５



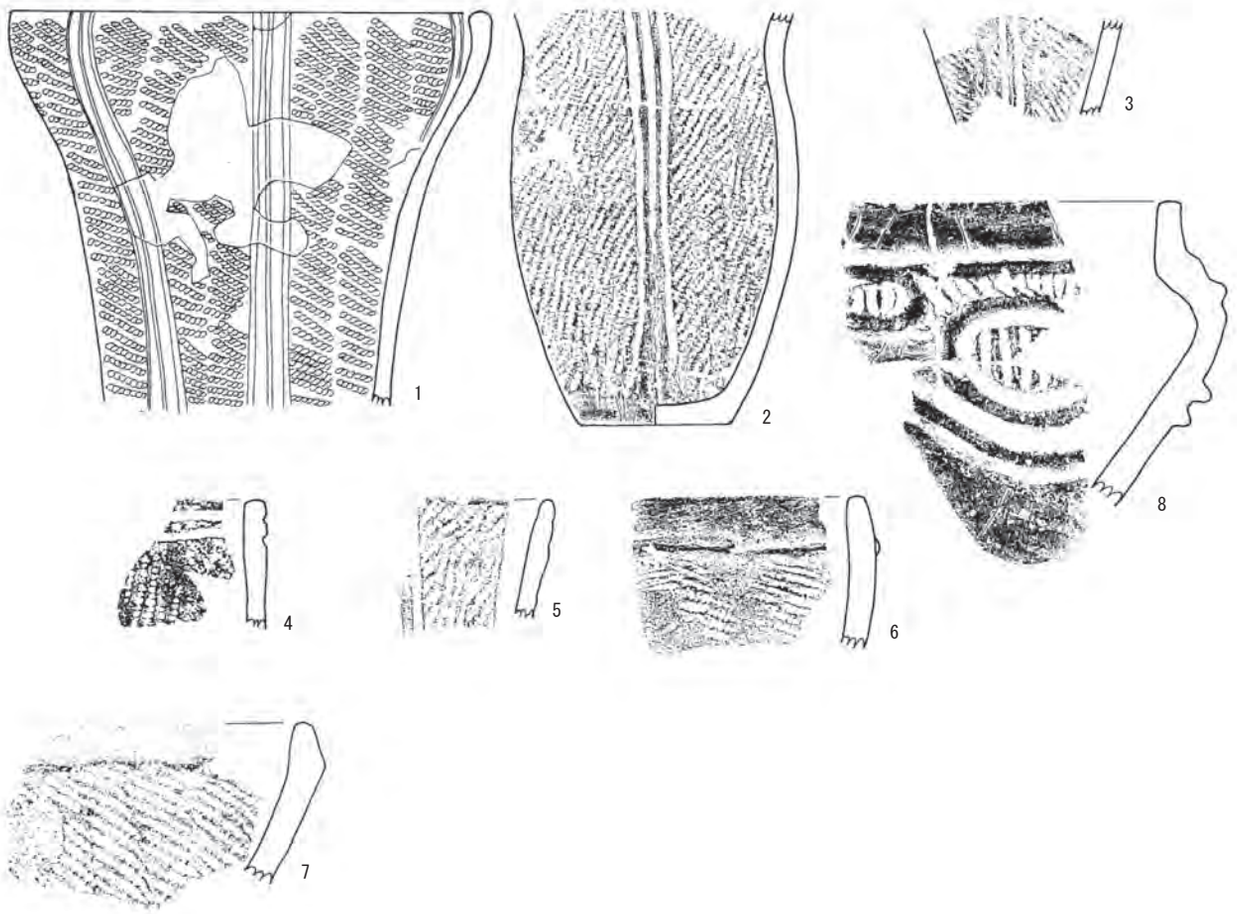


1　暗褐色土　　焼土を少し含む
2　暗褐色土　　焼土を多く含む
3　暗褐色土　　焼土をわずかに含む

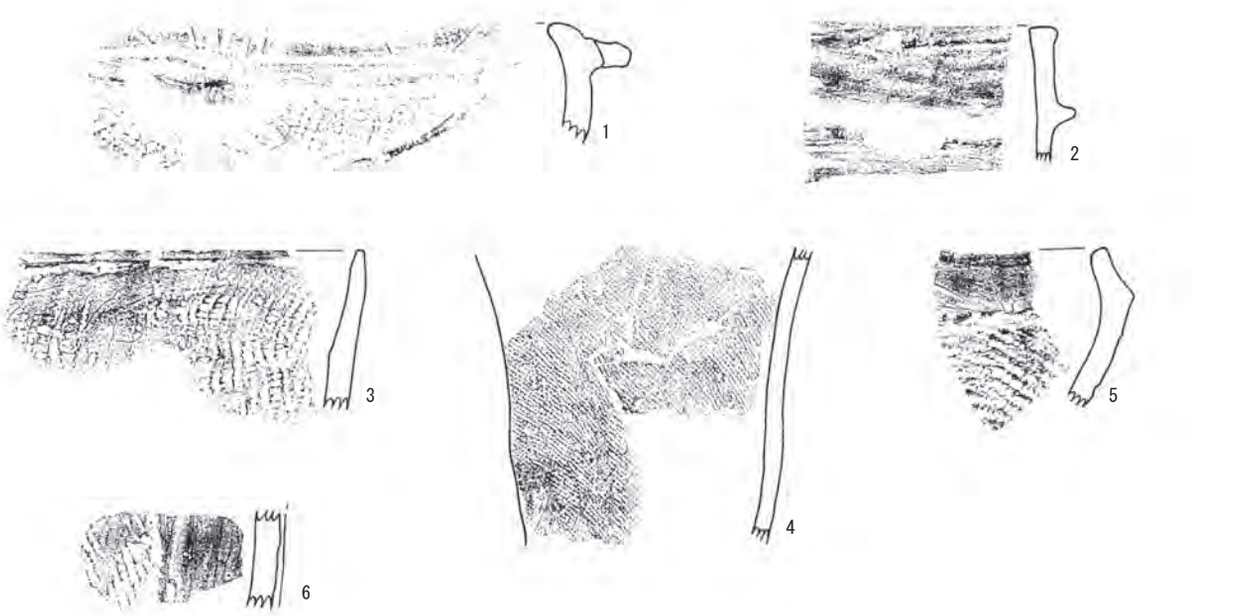
1　極暗褐色土　　褐色土を斑紋状に含み焼土・炭化物をわずかに含む
2　暗褐色土　　焼土・炭化物をわずかに含む
3　暗赤褐色土　　焼土を多く含む
4　暗褐色土　　褐色土を斑文状に含む
5　暗褐色土　　褐色土を斑文状に多く含む
6　褐色土　　暗褐色土をわずかに含む

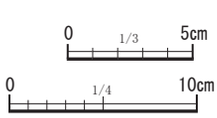
第 55 図　Ｊ -4(1)・Ｊ -5(1)

Ｊ－４



Ｊ－５





第 56 図　Ｊ -4(2)・Ｊ -5(2)

も認められる。16 は鉢形土器の橋状把手である。17 は横位の微隆線と縄文が認められることから、口縁部付近の破片と考えられる。18 は胴部破片で縄文のみが認められる。

19 ～ 22 は称名寺Ⅰ式である。19 ～ 21 は称名寺式第 1 段階の土器であるが、いずれも沈線による内面突出は認められない。19 は口唇部に突起が貼り付けられ、太く深い沈線で文様が構成される。20 は太く深い沈線と縄文による帯縄文で枠状の文様が施される。21 は沈線と目の細かい縄文が認められるが、帯縄文の構成が不完全なものである。22 は称名寺Ⅰ式 (第２段階) のものか。口縁部は内削ぎ状となり、太い沈線と縄文による帯縄文で文様が構成される。波頂部は、内面にも文様が施される。23 は特徴的な縄文と器壁が薄いことから加曽利Ｂ式と考えられる。

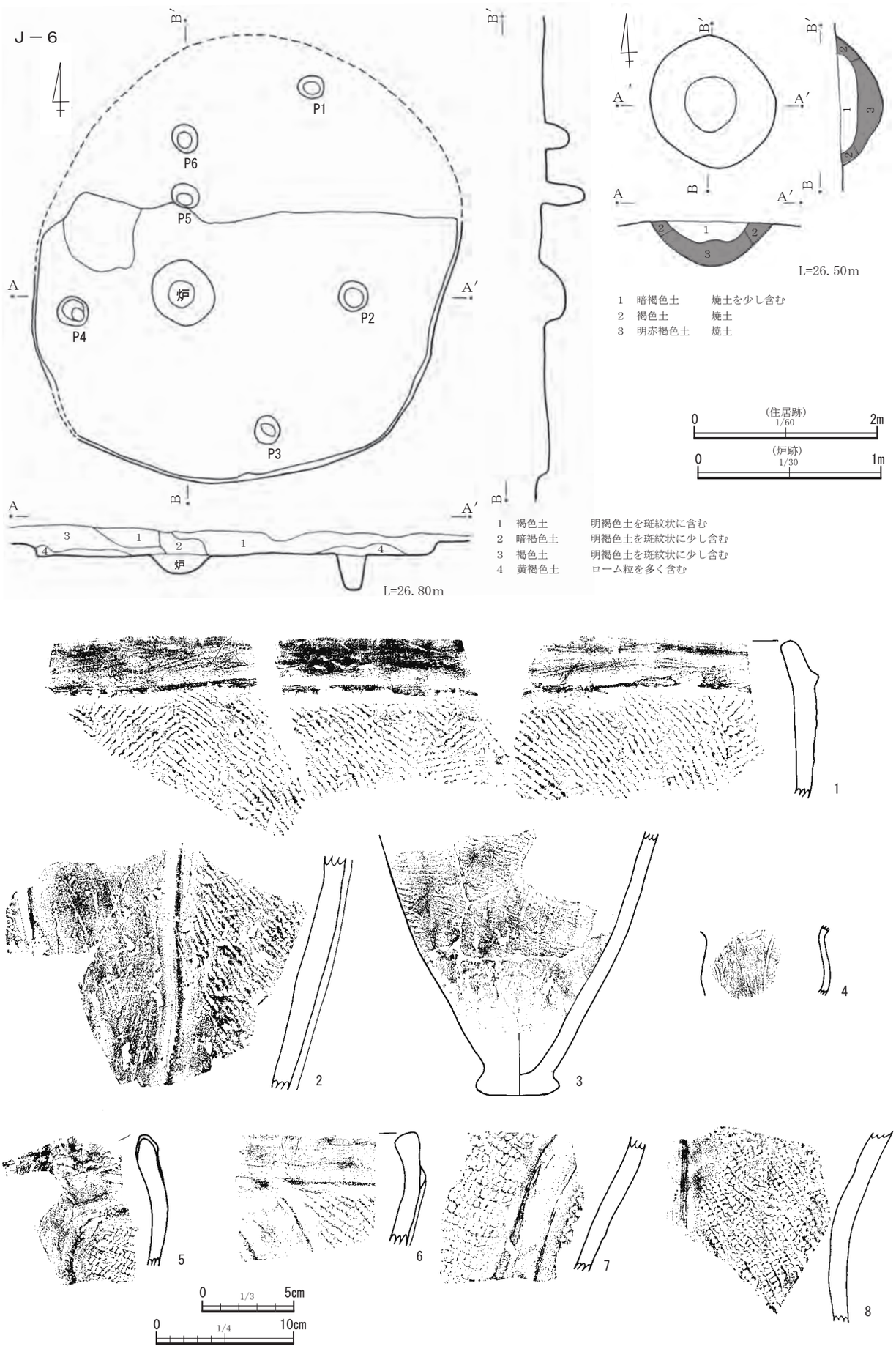
住居跡の時期は加曽利ＥⅣ式期と考えられる。土器以外ではミニチュア土器 1 点 (第 278 図 1)、石皿・台石 3 点 (第 289 図 1 ・ 13・第 290 図 20)、軽石製品 1 点 (付表 3 - 3 - 9)、石鏃 1 点 (第 291 図 32)、剥片類２点が出土している。石皿 1 は接合して完形となる２片が、破面が向かい合わずに並んで出土している。意識的に置かれた可能性がある。

J- 7 (第 59 ～ 62 図・図版 12・41)

旧ミ -14- 1 住。5.1 × 4.5 ｍの楕円形を呈し、0.3 ｍの掘り込みを有する。H-7(古代住居跡) と重複する。柱穴は深さ 0.5 ～ 0.9 ｍの 4 本 (P2・P5・P7・P9) を含めて 12 本を検出している。炉は中心にあり、二つの窪みをもつが底面の燃焼面はつながっている。竪穴の広範囲に貝層を形成していた。最大のＡは 150cm × 130cm、厚さ 35cm、Ｂも同程度あり、Ｃ・Ｄは小さな貝層、Ｅ～Ｉはごく小さな貝層である。Ｂは２つの貝層が重なったものであり、B1 の上に B2 が乗っている。全部で 11 か所となる。このうち、ＡとＢ 1 は壁際の検出面付近から床面に向かって傾斜堆積し (第 59 図Ｂ断面貝層の端にかかっているためこの様子はわからない)、B1 は P2 内に落ち込んでいる。B2・Ｅは中央に近い部分の覆土上層、Ｃは検出面より高い部分に水平堆積する。その他の貝層は概ね覆土上層である。壁際下部に土層が形成されてから竪穴が埋まりきるまでの間に何度も廃棄が繰り返された様相である。現地の観察によれば主体となる貝種もイボキサゴ、ハマグリ、アサリの変化があり、マガキや破砕貝が多い部分もあったようである。

住居跡出土遺物は 1 ～ 16・18・19・22 ～ 24・26 である。出土位置が確認できるものをみると、覆土上層主体であり、貝層中や炉内出土はない。覆土下部出土は 1 ・ 7 ・12・26 である。確認面上出土は 17・20・21・25 である。平面的な分布を見ると、壁から離れた南西半分に弧状に集中している。壁際に土が堆積した後にまとめて廃棄された様相を呈している。

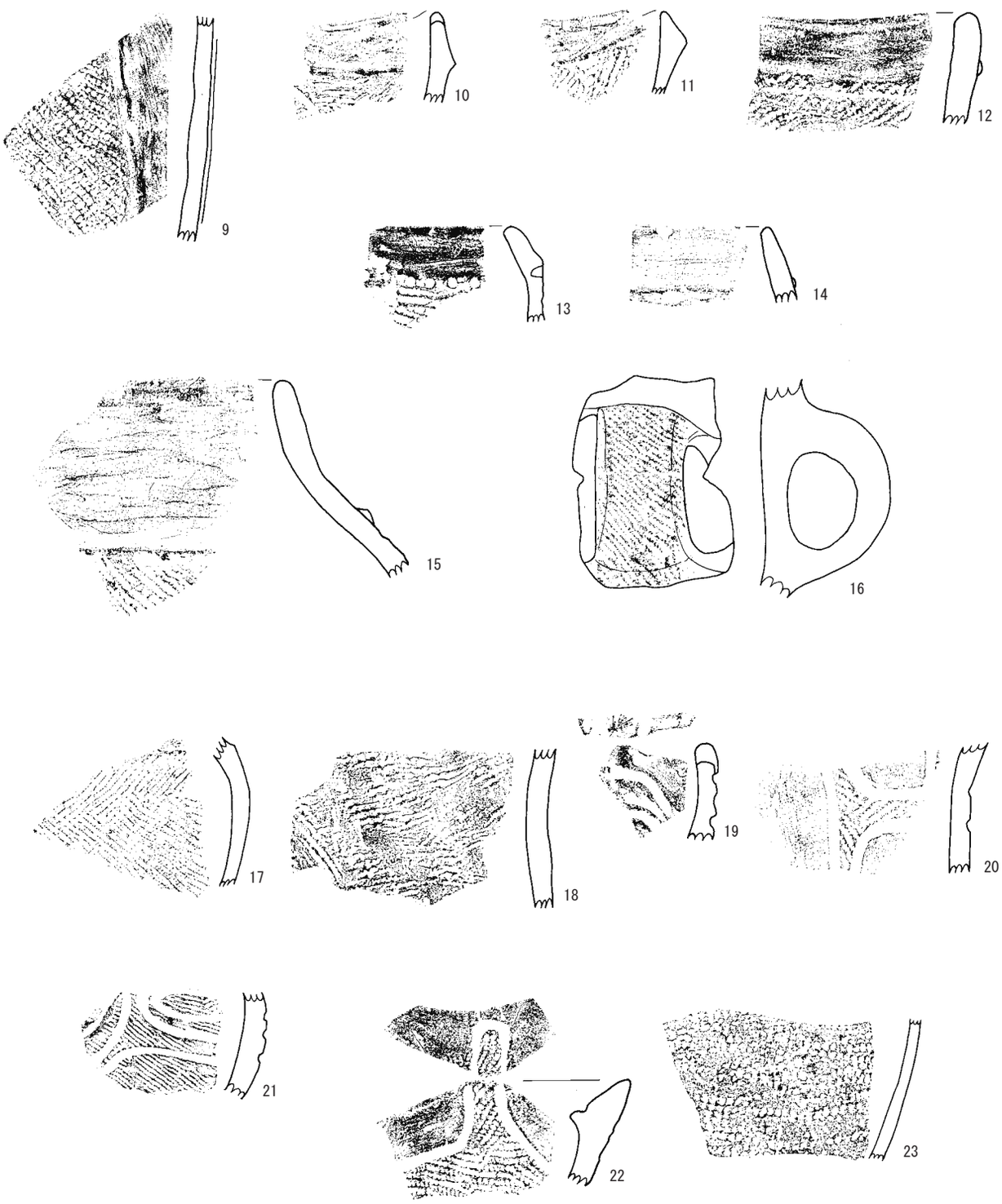
1 は加曽利ＥⅢ式期の鉢形土器と考えられる。口縁直下に広い無文部を持ち、胴部に微隆線と縄文で文様が施される。微隆線脇はナデにより調整されるが、一部ナデられていない部分が認められる。微隆線直下から櫛歯状工具による条線が引かれる。２～６は加曽利ＥⅢ式である。２は微隆線による区画と区画内に縄文がまばらに施される。微隆線脇は丁寧にナデられて調整される。３～５は口縁直下に指ナデによる区画と、胴部に太く浅い沈線と縄文で文様が施される。６は細い沈線で、口縁部が区画され胴部には同様の沈線と縄文で文様が施される。７～ 16 は加曽利Ｅ式終末の土器である。７は､加曽利ＥⅤ式か｡キャリパー形で、口唇部に平坦面を持つ。口縁部は細い沈線で区画され、胴部には縄文のみが認められる。口縁部が微隆線で区画され、胴部は縄文のみが施される。縄文は微隆線上にも認められる。被熱のため器面全体が脆くなっている。９はくびれが弱く立ち上がる器形で、器面全体に縄文が施される。10 ～ 12 は胴部に櫛歯状工具による条線が引かれる。13 は加曽利Ｅ式終末期の瓢形土器で器壁は非常に薄い。微隆線と縄文で文様が施され、微隆線脇はナデられる。縦方向の橋状把手が付される。14 は加曽利ＥⅤ式の可能性がある。口縁部は内弯せず立ち上がる器形で、口縁部は微隆線で区画され、胴部は微隆線と縄文で


J－6
P1
P2
P3
P4
P5
P6
炉
A
A′
B
B′
L=26.80m
L=26.50m
1 暗褐色土 焼土を少し含む
2 褐色土 焼土
3 明赤褐色土 焼土
1 褐色土 明褐色土を斑紋状に含む
2 暗褐色土 明褐色土を斑紋状に少し含む
3 褐色土 明褐色土を斑紋状に少し含む
4 黄褐色土 ローム粒を多く含む
(住居跡) 1/60 0 2m
(炉跡) 1/30 0 1m
0 1/3 5cm
0 1/4 10cm

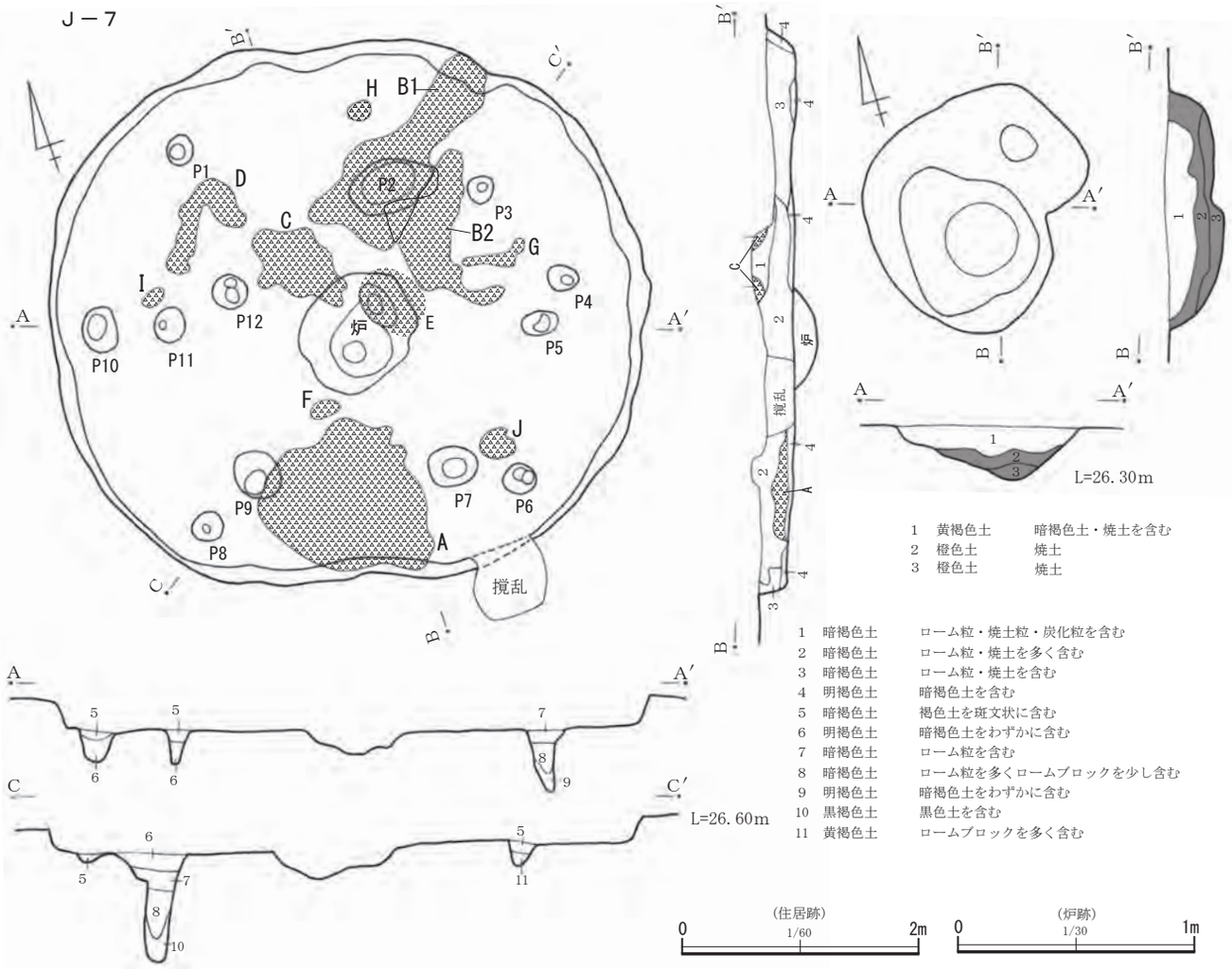
第57図　J -6(1)

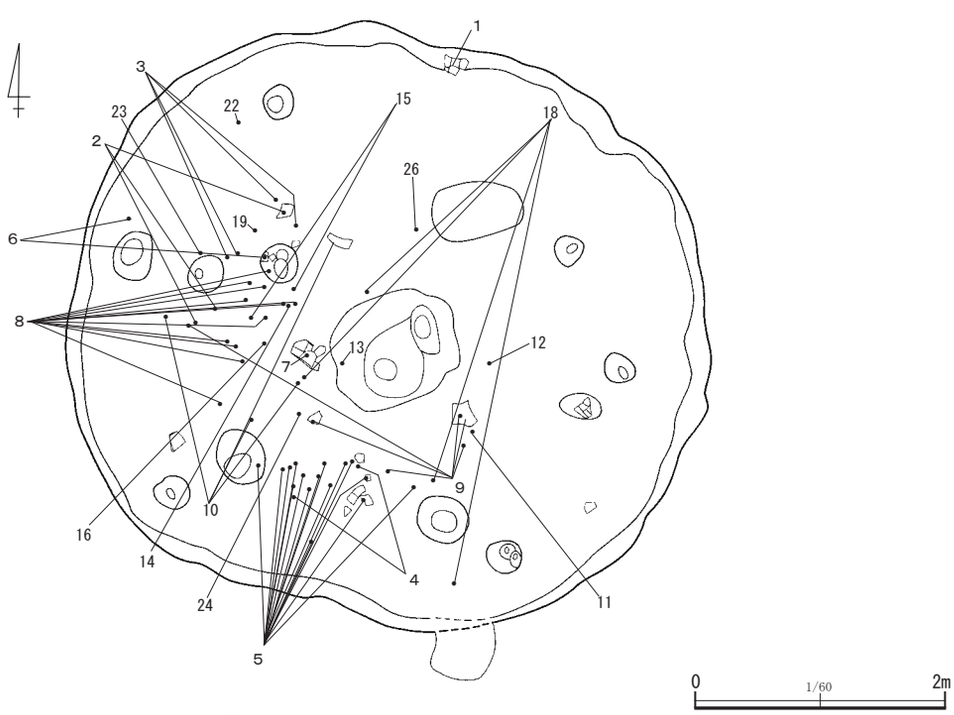
文様が施される。縄文は微隆線上にも認められる。15 は 2 本の屈曲する微隆線と RL の単節縄文が認められる。微隆線上にも縄文が認められる。16 は鉢形土器の口縁部破片で、広い無文帯と微隆線と縄文が認められる。17 は縄文が施された後に、指ナデで口縁部が区画される。

18・19 は加曽利ＥⅣ式と考えられる。沈線と縄文が施される。20 は後期初頭の関沢類型である。波状口縁で、口縁直下は微隆線により区画され、微隆線脇には丸棒状工具による 2 列の列点が施される。胴



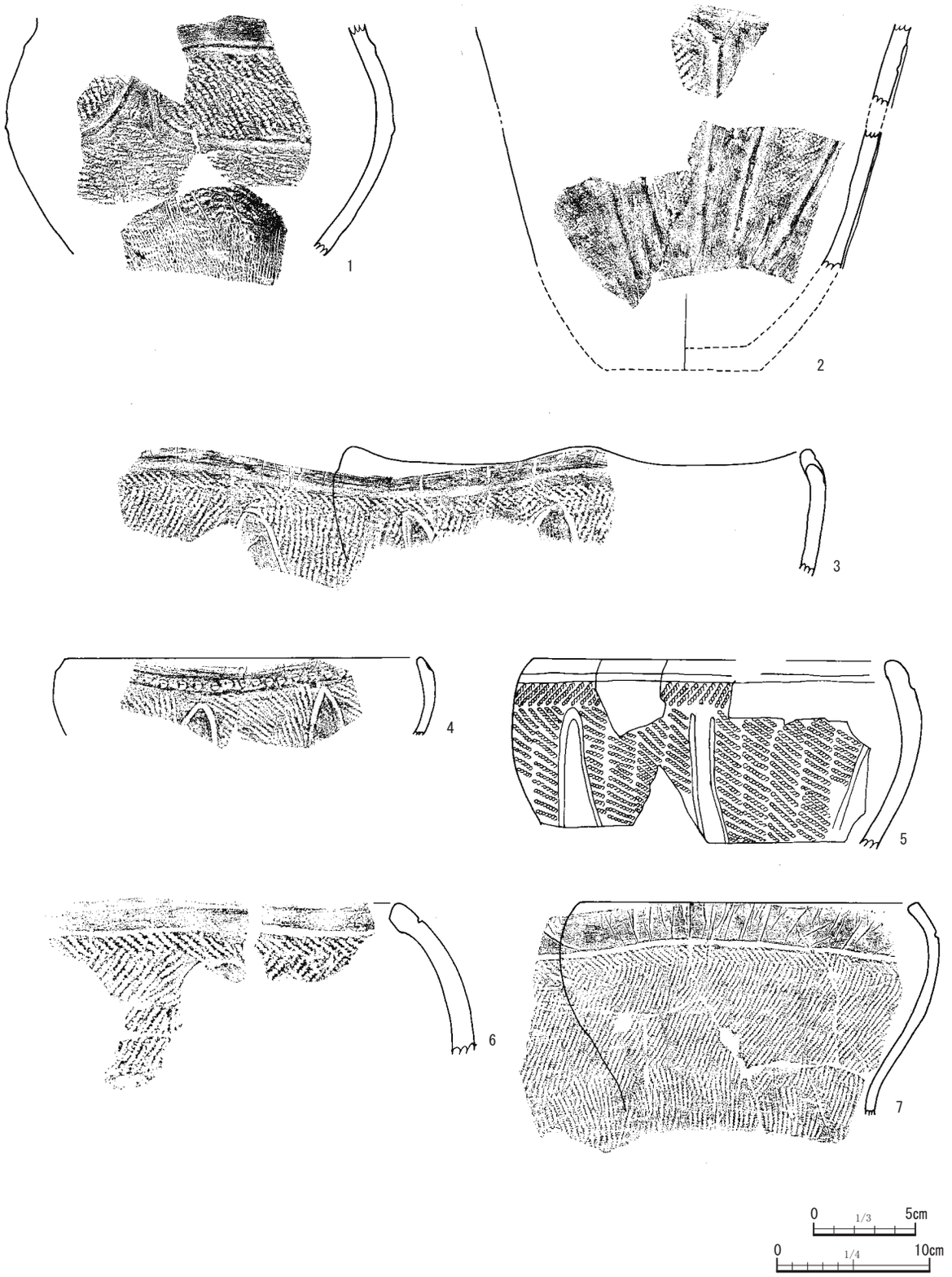
第 58 図　J -6(2)


J－7
H
B1
B2
P1
D
P2
P3
C
G
I
P12
炉
E
P4
P5
P10
P11
F
J
P9
P7
P6
P8
A
撹乱
L=26.30m
L=26.60m
1 黄褐色土 暗褐色土・焼土を含む
2 橙色土 焼土
3 橙色土 焼土
1 暗褐色土 ローム粒・焼土粒・炭化粒を含む
2 暗褐色土 ローム粒・焼土を多く含む
3 暗褐色土 ローム粒・焼土を含む
4 明褐色土 暗褐色土を含む
5 暗褐色土 褐色土を斑文状に含む
6 明褐色土 暗褐色土をわずかに含む
7 暗褐色土 ローム粒を含む
8 暗褐色土 ローム粒を多くロームブロックを少し含む
9 明褐色土 暗褐色土をわずかに含む
10 黒褐色土 黒色土を含む
11 黄褐色土 ロームブロックを多く含む
(住居跡)
0 1/60 2m
(炉跡)
0 1/30 1m

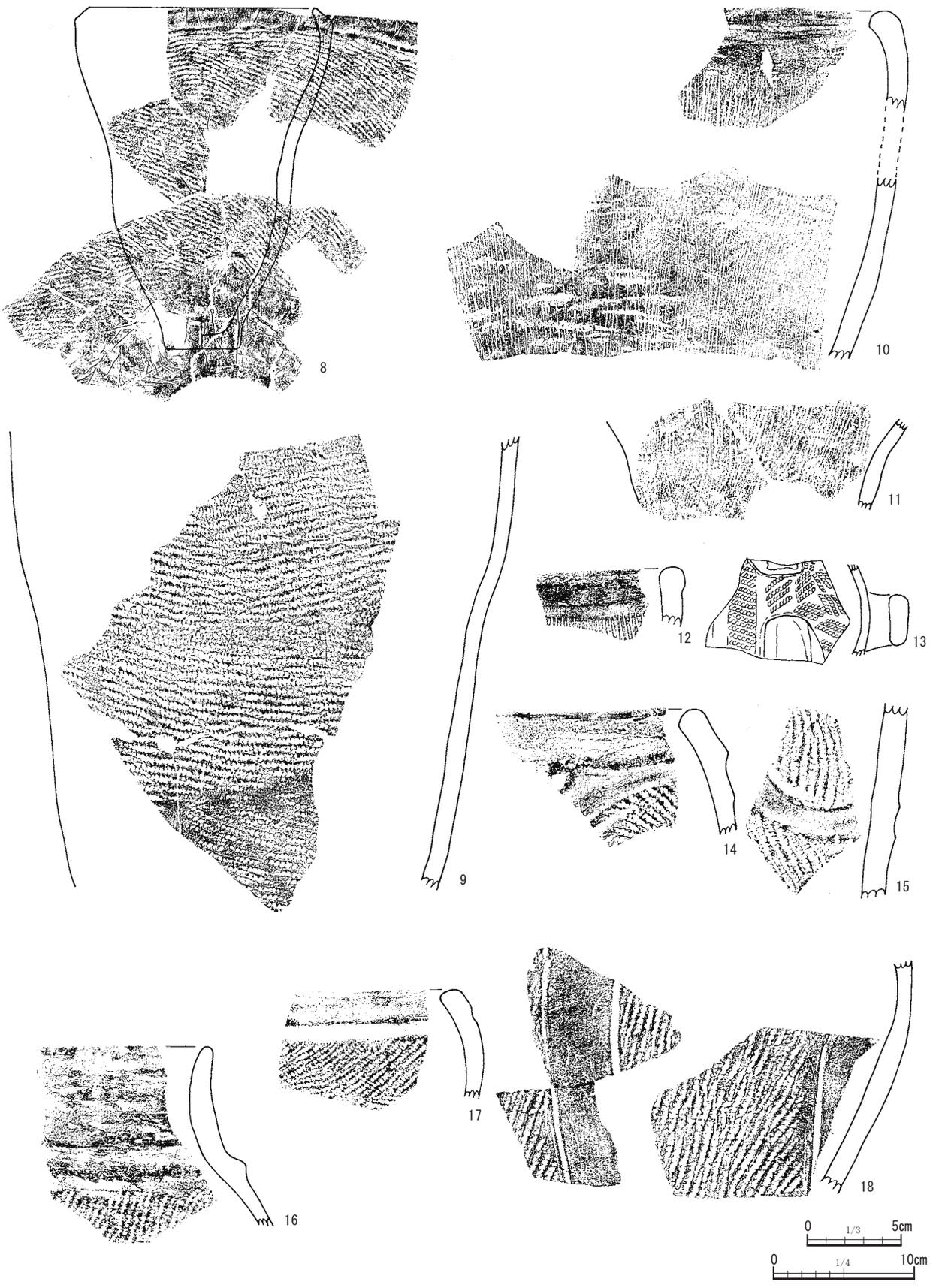

0 1/60 2m

第59図　J -7(1)

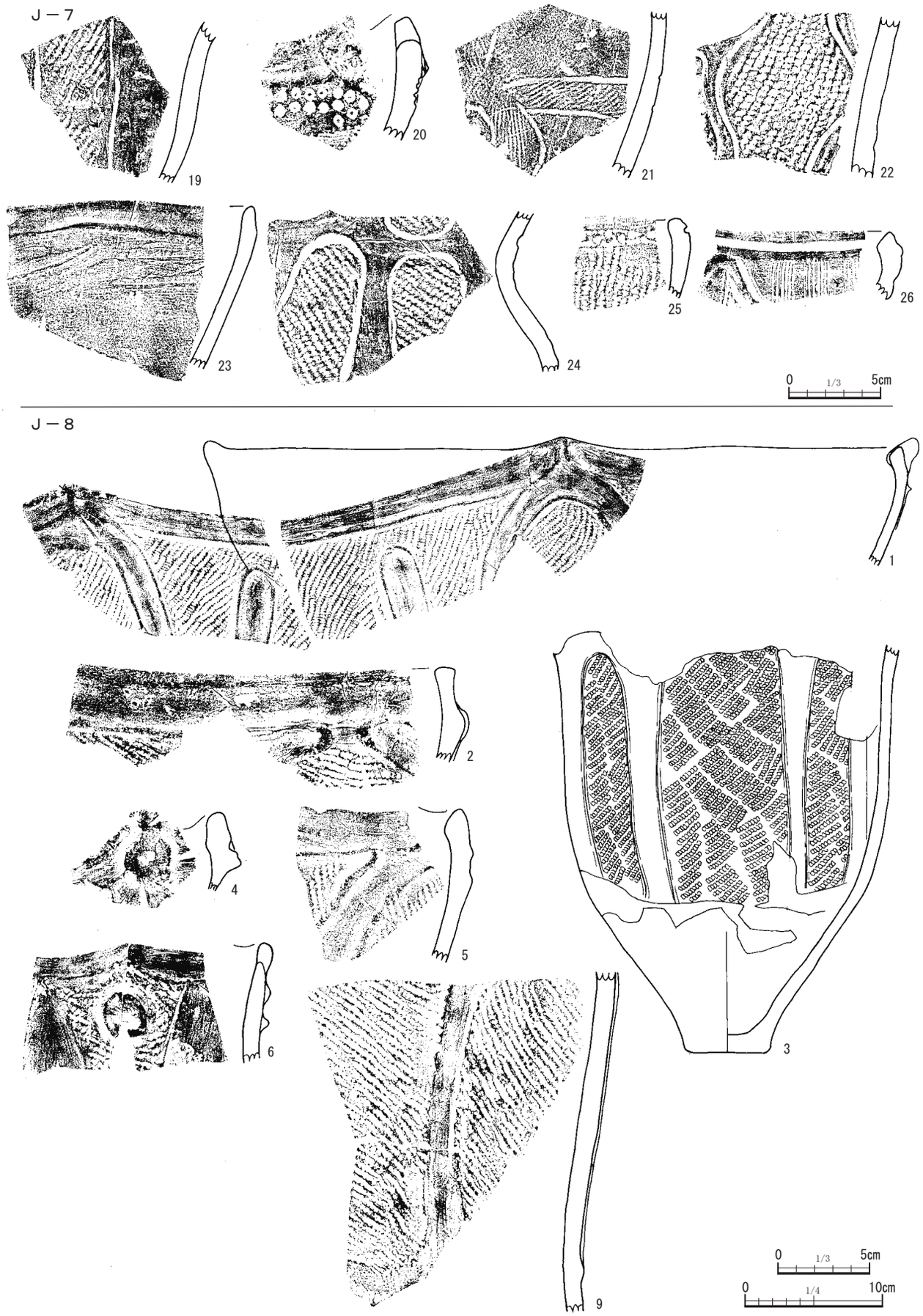
部には目の細かい縄文が施される。21 は称名寺式第３段階の土器である。帯縄文で横位連結のＪ字文が施される。22 は堀之内１式である。縄文施文後に屈曲する沈線が引かれ、沈線で区画された部分が磨り消される。23 も堀之内式と考えられる。口縁部には屈曲による段、胴部にはケズリと考えられる特徴的な調整が認められる。24 ～ 26 は加曽利ＥⅢ式である。24 は沈線と縄文による「対向Ｕ字文」が施され



第 60 図　Ｊ -7(2)



第61図　J -7(3)



第62図　J-7(4)・J-8(1)

る。無文部は狭い。25 は口縁直下に列点が施され、胴部に縄文が施される。連弧文系土器の可能性もある。26 は条線を地文とし、隆線が貼り付けられる。

住居跡の時期は加曽利ＥⅤ式期と考えられる。土器以外では土器片錘２点 (第 279 図４・５)、焼成粘土塊６点 (第 280 図１～６)、打製石斧１点 (第 283 図１)、剥片類１点が出土している。焼成粘土塊は炉内から出土している。炉壁が剥離したものではなく、土器ないし土製品の製作に係わる遺物の可能性が高い。

J- 8 (第 62 ～ 64 図)

旧ミ -15- １住。4.5 × 3.6 ｍの楕円形を呈す。掘り込みの有無の判断が難しい。炉の周辺に踏みしめによる硬化面がある。柱穴は浅いものが７本ある。炉は二つの掘り込みが連なっている。炉２は底面が弱い焼成を受けており、炉１は焼土を多く含む層がある。住居出土土器は、１・３・７～ 10 である。確認面上出土は２・４～６・11 ～ 18 である。

１～ 15 は加曽利Ｅ式終末の土器である。１は加曽利ＥⅣ式である。波状口縁で、波頂部は突起状となる。口縁部は微隆線で区画され、胴部には微隆線と縄文で「逆Ｕ字状」の文様が施される。微隆線脇はナデられる。２は口縁部が微隆線で区画され、一部突起状になる。胴部には縄文が施され、微隆線上にも認められる。３は微隆線と縄文で「逆Ｕ字状」の文様が施される。微隆線脇はナデられるが、一部縄文が微隆線上にも認められる。４は円形の貼付文と微隆線が認められる。関沢類型か。５は口縁部は微隆線で区画され、胴部には微隆線と縄文で文様が構成される。微隆線上にも縄文が認められる。６は口縁部が微隆線で区画され、胴部は円形の貼付文、細い沈線と縄文が施される。７～９は微隆線と縄文が施される。７・８は微隆線脇が丁寧にナデられる。９は微隆線上にも縄文が認められる。10 ～ 14 は口縁部が微隆線で区画され、胴部には縄文のみが認められる。いずれも微隆線上にも縄文が認められる。15 は鉢形土器と考えられる。把手部分が欠損する。16 は加曽利ＥⅢ式である。太い沈線と縄文で「対向Ｕ字文」が施される。無文部は狭い。17 は加曽利Ｅ式後半の土器である。櫛歯状工具による条線が引かれる。18 は称名寺式古段階の土器である。口唇には平坦面が認められ、浅い沈線と目の細かい縄文が認められる。

住居跡の時期は加曽利ＥⅣ式～ＥⅤ式期と考えられる。土器以外では土器片錘１点 (第 279 図６)、石棒１点 (第 296 図４) が出土している。石棒は竪穴北側の床面からやや浮いた状態で出土している。

J- 9 (第 63 ～ 65 図・図版 12)

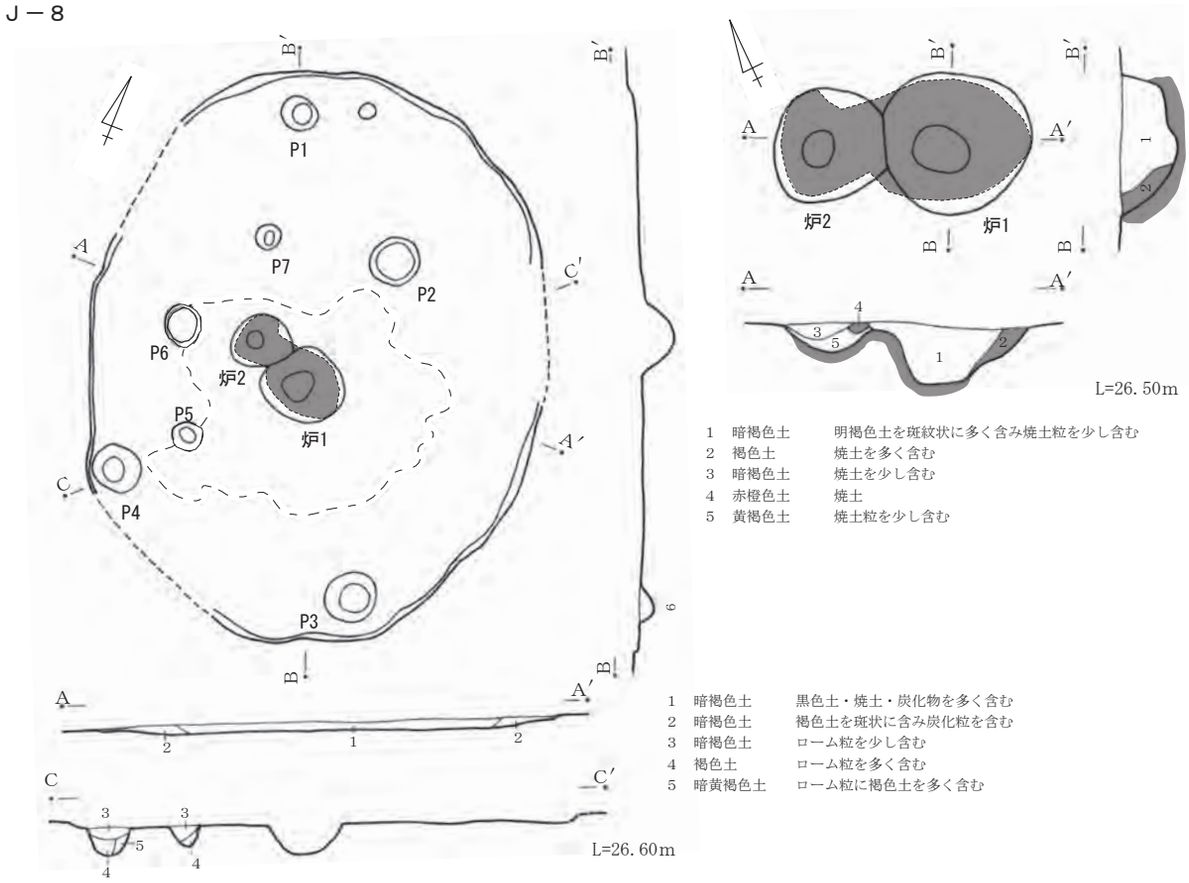
旧ム -10- １住。4.5 × 3.7 ｍの楕円形を呈す。0.2 ｍの掘り込みを有し、D-119(陥し穴) と重複する。深さ 0.2 ｍの壁溝が全周し、壁柱穴 16 本をもつ。柱穴は深さ 0.6 ～ 0.7 ｍの P2・P6 の他に 10 本ある。炉は中央やや北西寄りに位置する。住居跡出土遺物は１～７である。５は炉周辺、１・４は北東側、２は南西部の床面から、５は炉の上から出土している。

１は加曽利ＥⅢ式の鉢形土器である。隆線と縄文で文様が構成され、隆線脇には沈線が引かれる。２・３は加曽利ＥⅣ式である。２は微隆線と縄文で「対向Ｕ字文」が施される。「対向Ｕ字文」は入り組み、無文部が広くなっている。微隆線脇は丁寧にナデられる。３は沈線と縄文で「対向Ｕ字文」が施される。４は加曽利ＥⅤ式の可能性がある。口縁部が微隆線で区画され、胴部には縄文のみが施される。微隆線上にも縄文が認められる。５は器面全面に縄文が施された後、口縁部にナデによる沈線で区画される。６・７は加曽利Ｅ式終末の鉢形土器で、６は口縁部破片、７は胴部につく把手である。

住居跡の時期は加曽利ＥⅣ式期と考えられる。土器以外では打製石斧１点 (第 283 図４)、黒曜石製の石核３点 (付表３- ５-60・62・66)、および剥片類７点が出土している。石核・剥片類は石鏃製作に関わるものと推定される。

J-10(第 65 ～ 67 図・図版 12・13)

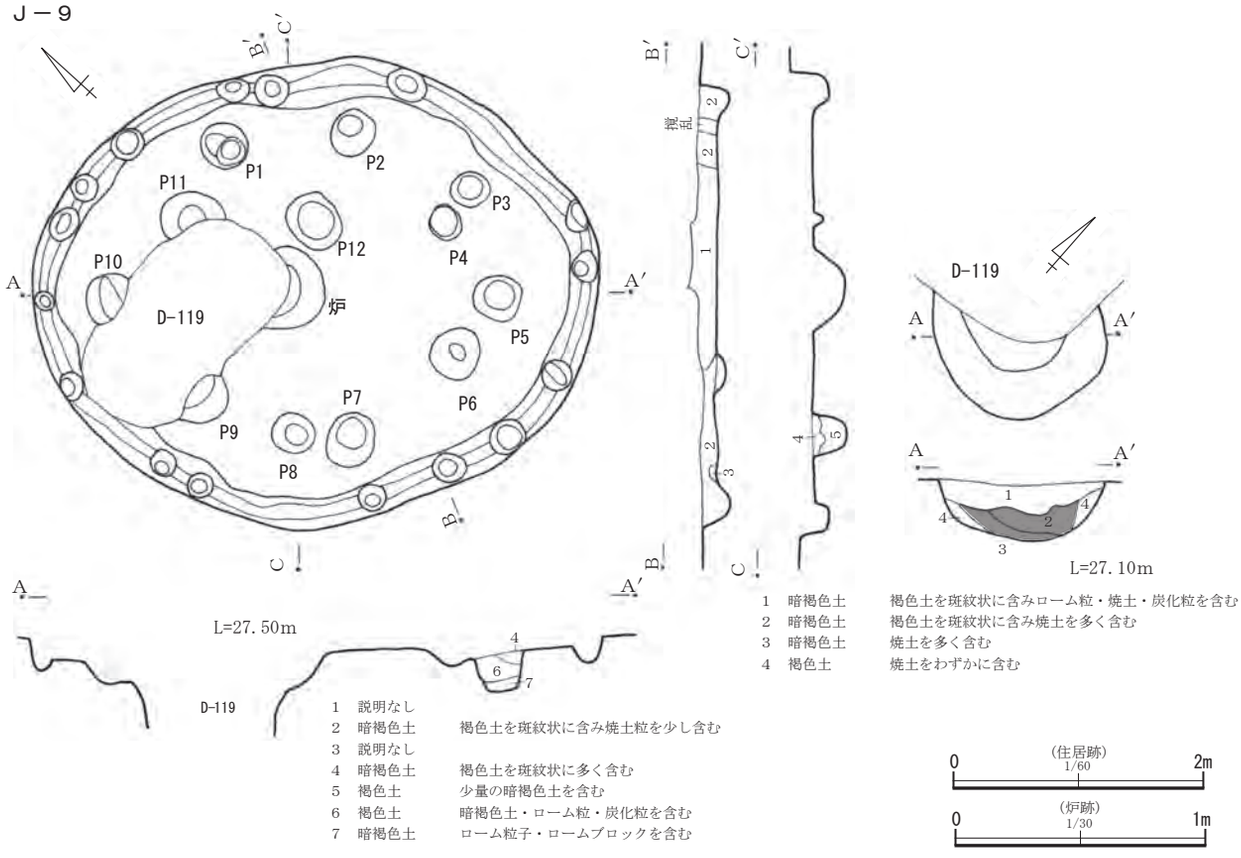
Ｊ－８



1　暗褐色土　　明褐色土を斑紋状に多く含み焼土粒を少し含む
2　褐色土　　焼土を多く含む
3　暗褐色土　　焼土を少し含む
4　赤橙色土　　焼土
5　黄褐色土　　焼土粒を少し含む

1　暗褐色土　　黒色土・焼土・炭化物を多く含む
2　暗褐色土　　褐色土を斑状に含み炭化粒を含む
3　暗褐色土　　ローム粒を少し含む
4　褐色土　　ローム粒を多く含む
5　暗黄褐色土　　ローム粒に褐色土を多く含む

Ｊ－９

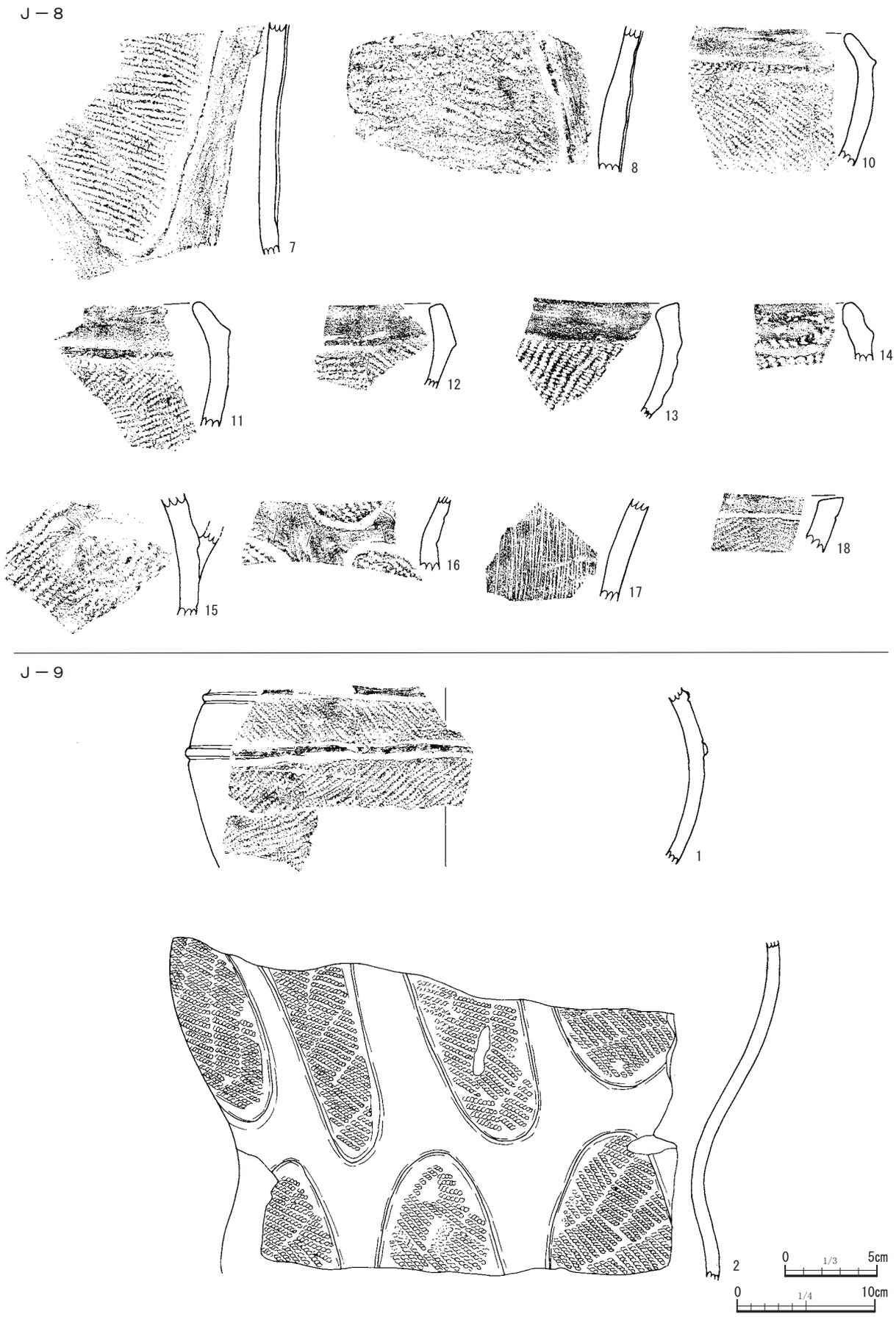


1　暗褐色土　　褐色土を斑紋状に含みローム粒・焼土・炭化粒を含む
2　暗褐色土　　褐色土を斑紋状に含み焼土を多く含む
3　暗褐色土　　焼土を多く含む
4　褐色土　　焼土をわずかに含む

1　説明なし
2　暗褐色土　　褐色土を斑紋状に含み焼土粒を少し含む
3　説明なし
4　暗褐色土　　褐色土を斑紋状に多く含む
5　褐色土　　少量の暗褐色土を含む
6　褐色土　　暗褐色土・ローム粒・炭化粒を含む
7　暗褐色土　　ローム粒子・ロームブロックを含む

(住居跡) 1/60　0　2m
(炉跡) 1/30　0　1m

第63図　Ｊ-8(2)・Ｊ-9(1)



第64図　J -8(3)・J -9(2)

旧ム -10- 2 住。5.5 × 4.7 mの楕円形を呈す。0.3 mの掘り込みを有す。深さ 0.2 mの壁溝が全周し、壁柱穴 15 本をもつ。他の柱穴は不規則で深さ 0.3 ～ 0.4 mの P6・P7・P9 などがある。炉は南側に偏った位置にある。竪穴の南寄りの２か所に貝層を形成していた。Ａは床面上に盛り上がるタイプであり、90cm × 40cm、厚さ 35cm を測る。Ｂは 50cm × 20cm、床面よりやや上で外側に向かってやや傾斜する。現地の観察ではアサリとイボキサゴが含まれていたというが正確なことはわからない。住居跡出土土器は１～５・７・10・12 ～ 16 である。確認面状出土は６・８・９・11 である。

１～ 11 は加曽利Ｅ式終末の土器である。１・２は加曽利ＥⅣ式と考えられる。１は口縁部が微隆線で区画され、胴部には微隆線と縄文で文様が構成される。微隆線脇は丁寧にナデられる。２は口縁部が微隆線で区画され、微隆線脇はナデられる。３は口縁部が微隆線で区画され、一部が突起状になる。胴部は縄文のみが認められる。４・５は縄文施文後に口縁直下にナデによる沈線が引かれる。６は口縁部が微隆線で区画され、胴部に櫛歯状工具で条線が引かれる。７は口縁部が隆線で区画され、沈線と縄文で文様が施される。８は口縁部が沈線で区画され、胴部には縄文のみが認められる。９は沈線による区画と縄文が施され、区画内は磨り消される。10 は縄文のみが認められる。11 は鉢形土器に付される橋状把手である。12 は加曽利ＥⅡ式である。胴部には懸垂文と磨り消し縄文が認められる。13 ～ 16 は加曽利ＥⅢ式と考えられる。13 ～ 15 は口縁部が微隆線で区画され、胴部には沈線と縄文で文様が構成される。16 は沈線と縄文で「Ｕ字状文」が施される。無文部は非常に広い。

住居跡の時期は加曽利ＥⅣ式期と考えられる。土器以外では砥石 1 点 (第 288 図 25)、黒曜石の石核 1 点、剥片類 10 点が出土している。剥片類は石鏃製作に関わるものであろう。

J-11(第 66・68 図・図版 13)

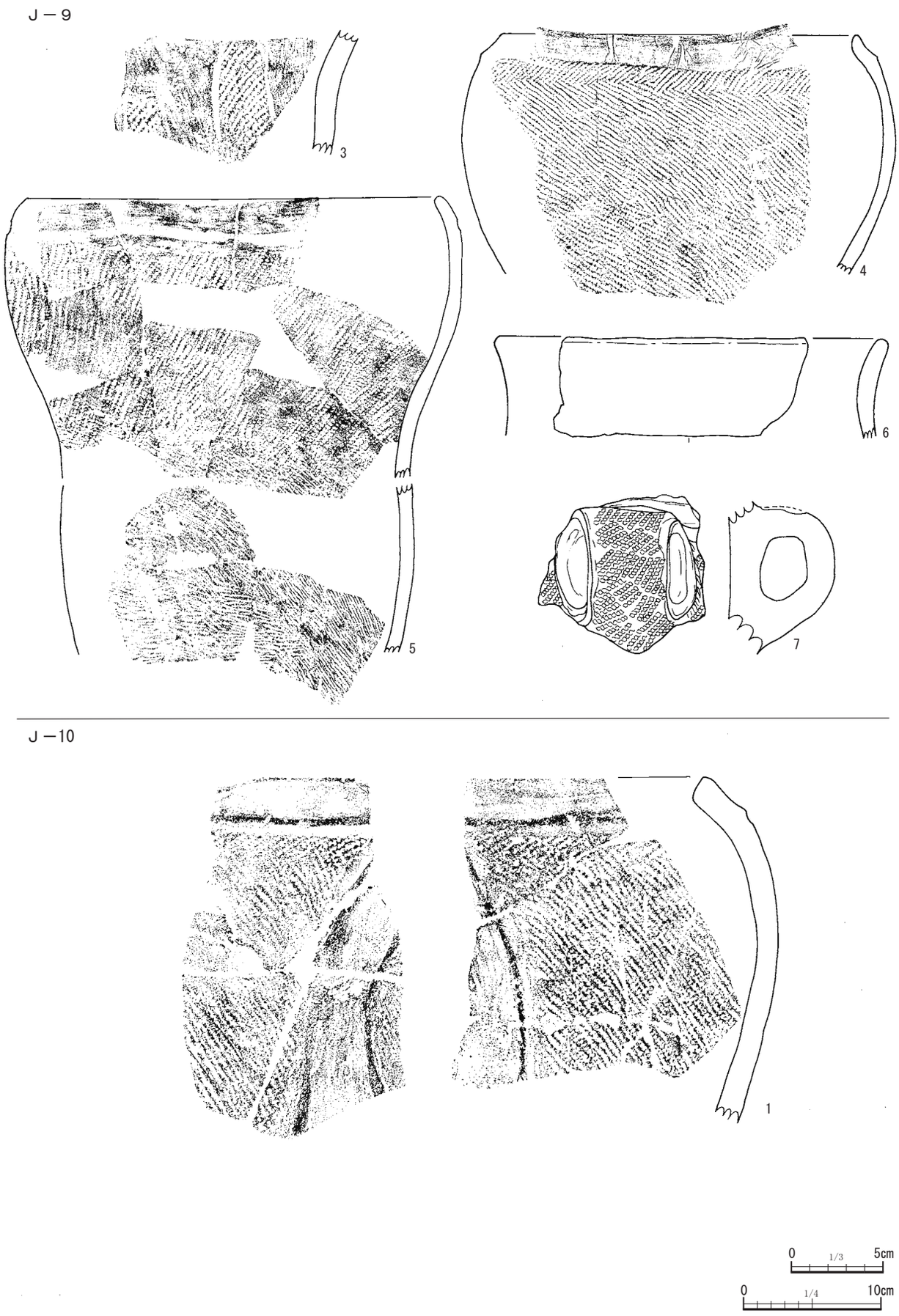
旧ム -15- 1 住。4.6 × 4.4 mの円形を呈す。0.2 mの掘り込みを有す。壁溝が全周し、壁柱穴 12 本をもつ。柱穴は深さ 0.3 ～ 0.4 mの P1・P2 － P5 － P6 － P7 － P9 が五角形に配置されている。炉は南に偏った位置にあり、中央に深鉢胴部下半 (1) を炉体として埋設、周囲に３個体分の土器 (２・３・５) で土器片囲とする。炉体内部と周囲に焼土を含む。住居跡出土土器は 1 ～ 10・13 である。確認面上出土は 11 である。

１～３は加曽利ＥⅡ式である。縄文を地文とし沈線による懸垂文が引かれ、沈線間は磨り消される。４は曽利式土器の口縁部と考えられる。口縁部が顕著に内弯する。５・６は連弧文系土器である。５は弧状の沈線と縄文が認められる。沈線間は磨り消される。６は２列の列点が施される。７～９は加曽利Ｅ式後半の土器である。７は沈線と縄文、８は列点と太い沈線が認められる。９は櫛歯状工具による条線が引かれる。10 ～ 12 は加曽利Ｅ式終末の土器で、10・11 は加曽利ＥⅤ式の可能性がある。微隆線で口縁部が区画され、胴部は微隆線と縄文で文様が施される。12 は動物 (鳥頭形) を模した突起であり、両面に８の字状の貼り付け文が認められる。

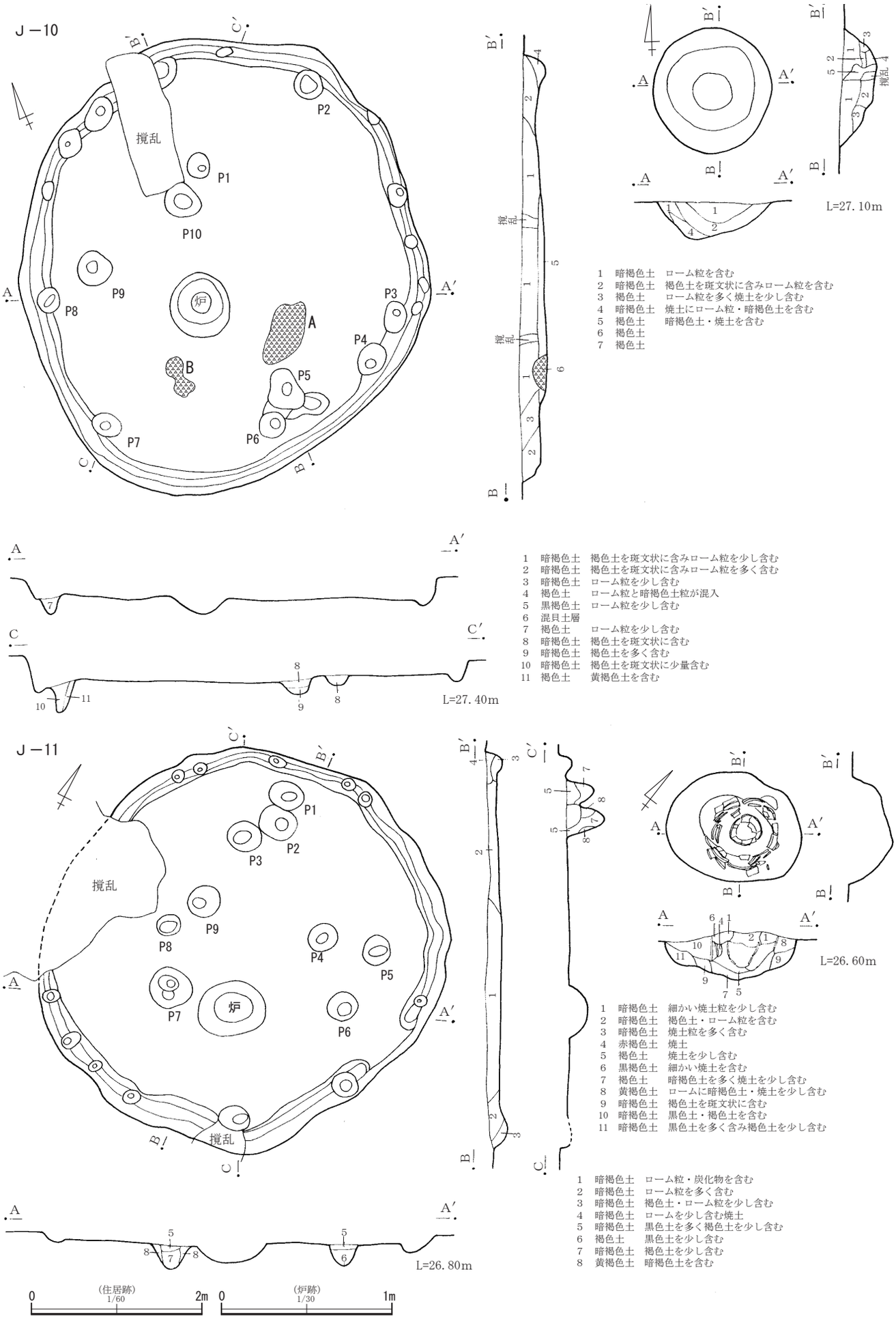
住居跡の時期は加曽利ＥⅡ式期と考えられる。土器以外では土器片錘２点 (第 280 図 79・80)、磨石類 1 点 (付表３- ３-158)、石皿・台石 1 点 (第 290 図 63)、軽石製品 1 点 (第 293 図２)、剥片類 1 点が出土している。

J-12(第 69 ～ 76 図・図版 13・41・44・45)

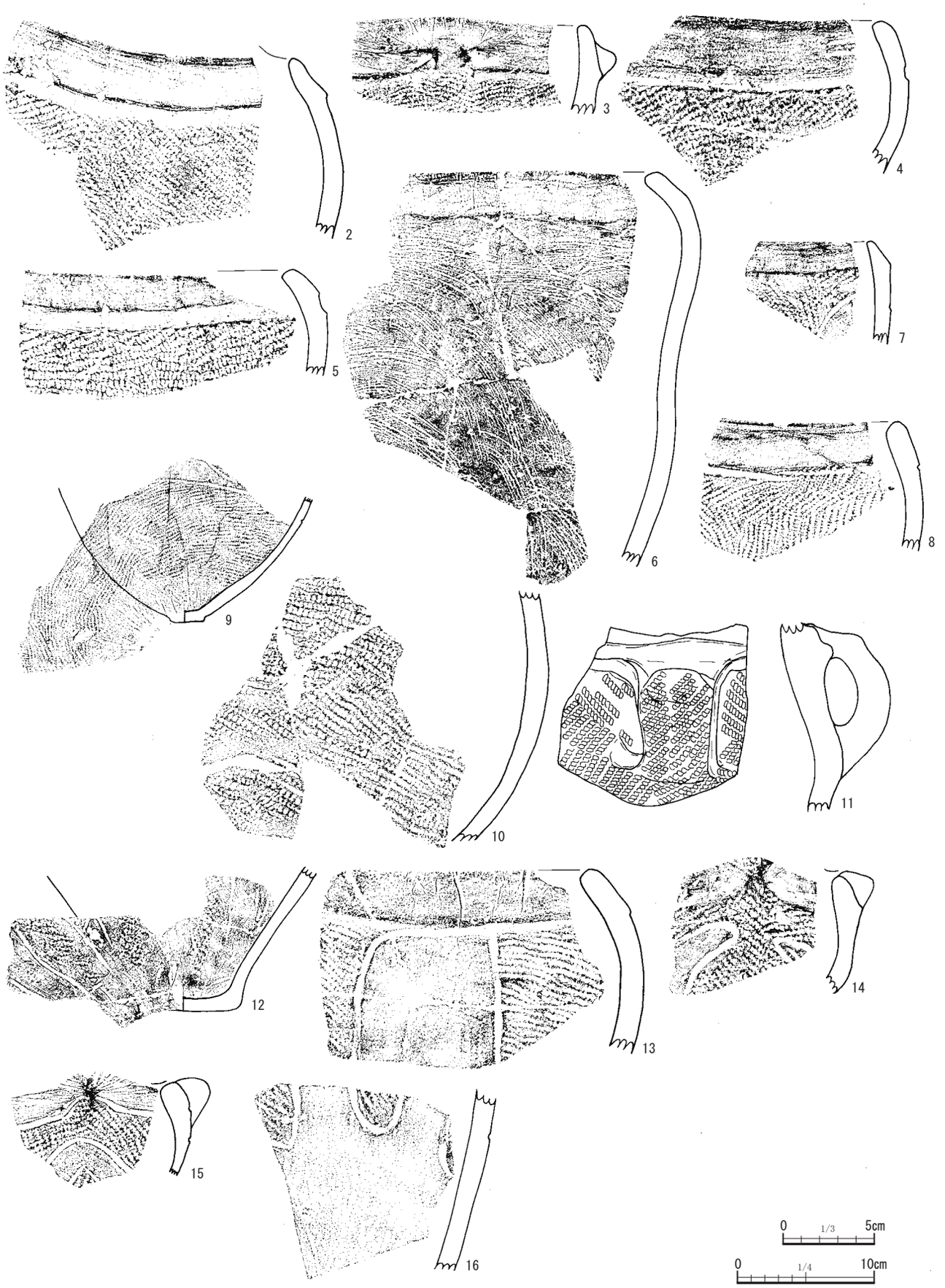
旧ム -17- 1 住。5.0 × 4.8 mの円形の竪穴の南側に最大幅 1.4 m、長さ 1.8 mの張出部が付設された柄鏡形を呈する。竪穴は 0.3 mの掘り込みを有す。壁溝が攪乱部分を除き全周し、壁柱穴 15 本をもつ。壁溝は張出部にもある。柱穴は深さ 0.3 ～ 0.4 mの P1 － P3 － P5 － P7 が方形に位置し、張出部の基部両側に P4 と埋設土器２のピットがある。炉は中央やや南よりに位置し、下部に焼土が堆積していた。張出



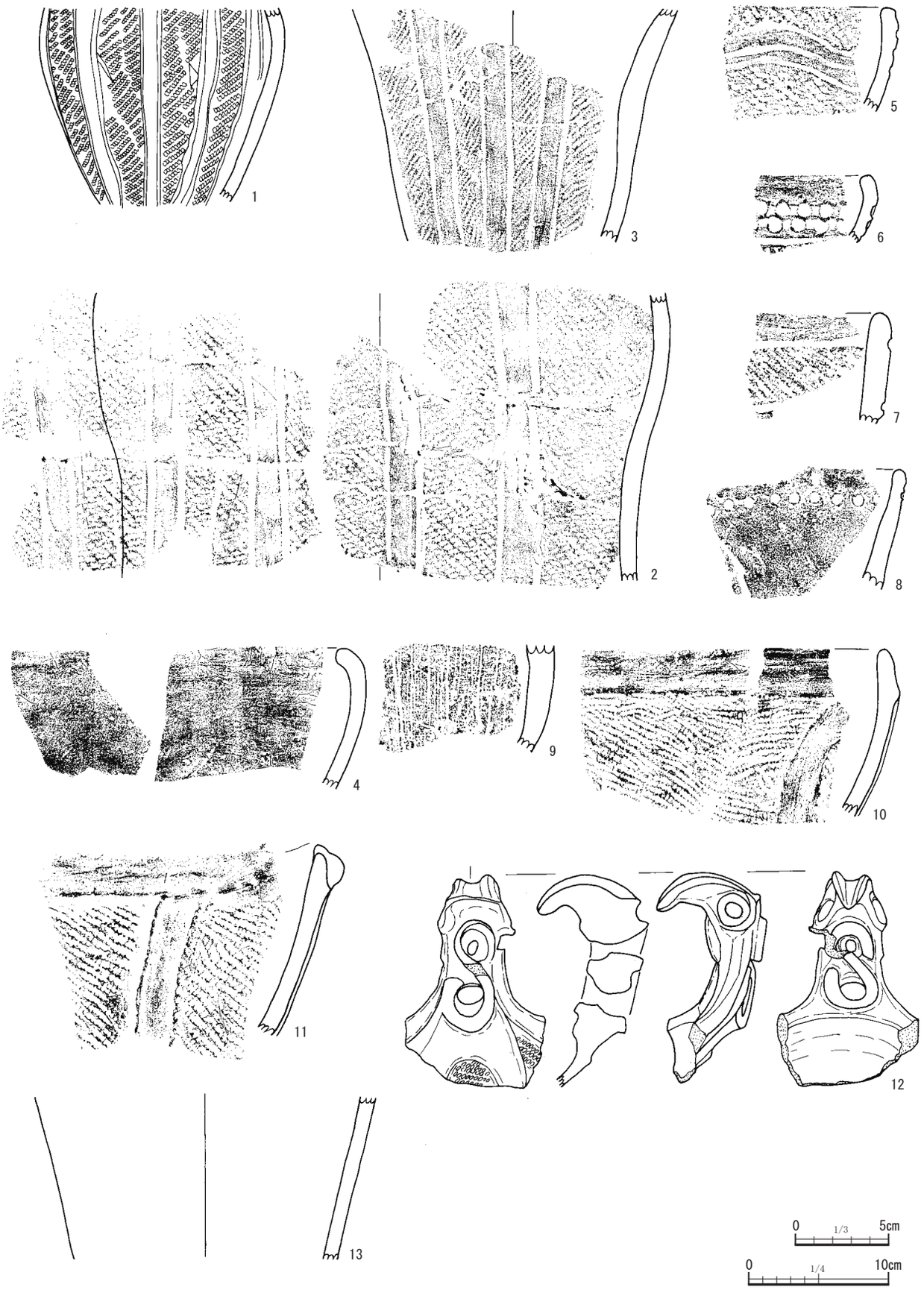
第 65 図　J -9(3)・J -10(1)



第66図　J -10(2)・J -11(1)



第 67 図　J -10(3)



第68図　J -11(2)

部には２か所に３個体の土器が埋設されていた。埋設土器１は張出部先端にあり、１の中に２が入れ子状になり、上部を北に傾けていた。埋設土器２は張出部の連結部にあり上部を北に傾けていた。住居跡出土遺物は１～６・８～19・21～64である。確認面上出土は７・20・65である。第70図に平面分布を示す。垂直分布は不明である。平面的にみて張出部から出土したのは既述の埋設土器１・２のほかに、5・19・32・36・58がある。そのほかは竪穴本体の全体から満遍無く出土しており、１個体の土器が広範囲に四散している。

１～62は加曽利Ｅ式終末の土器である。１～３は加曽利ＥⅤ式である。１・２は口縁部が微隆線で区画され、一部突起状になる。突起の下には、微隆線と縄文で球状とやや崩れた「対向Ｕ字状」の文様が施される。微隆線上にも縄文が認められる。２はほとんどくびれをもたず、立ち上がる器形で、胴部に微隆線による区画と縄文が認められる。微隆線上には縄文が認められる。３は連結部付近に埋設されていた。器形はほとんど内弯しない。口縁部は微隆線で区画され、一部が突起状になる。胴部には沈線と縄文によるやや崩れた「抱球文」が認められる。口縁部の微隆線上には縄文が認められる。

４～22は微隆線と縄文で文様が構成される。４～11は微隆線脇がナデられる。また12～19は微隆線上にも縄文が認められる。20は微隆線脇に沈線が引かれる。４～９・12～18・21は微隆線と縄文による「逆Ｕ字状文」が施され、口縁部の区画に貫入するものである。４～６・12・14～18は貫入した部分は突起状になる。15は器形が屈曲せず立ち上がる点からも加曽利ＥⅤ式と考えられる。22は微隆線と縄文で屈曲する文様が施され、一部に突起が付される。胴部文様は大木10式の影響を受けていると考えられる。

23～32は沈線と縄文で文様が施される。23～26は「逆Ｕ字状文」が施される。27は口縁部の区画が認められない。28・29は文様構成に乱れが生じており、加曽利ＥⅤ式と考えられる。31は口縁部に把手と微隆線による区画が施される。微隆線脇には列点が施される。32は把手の一部と胴部に目の細かい縄文と沈線が施される。

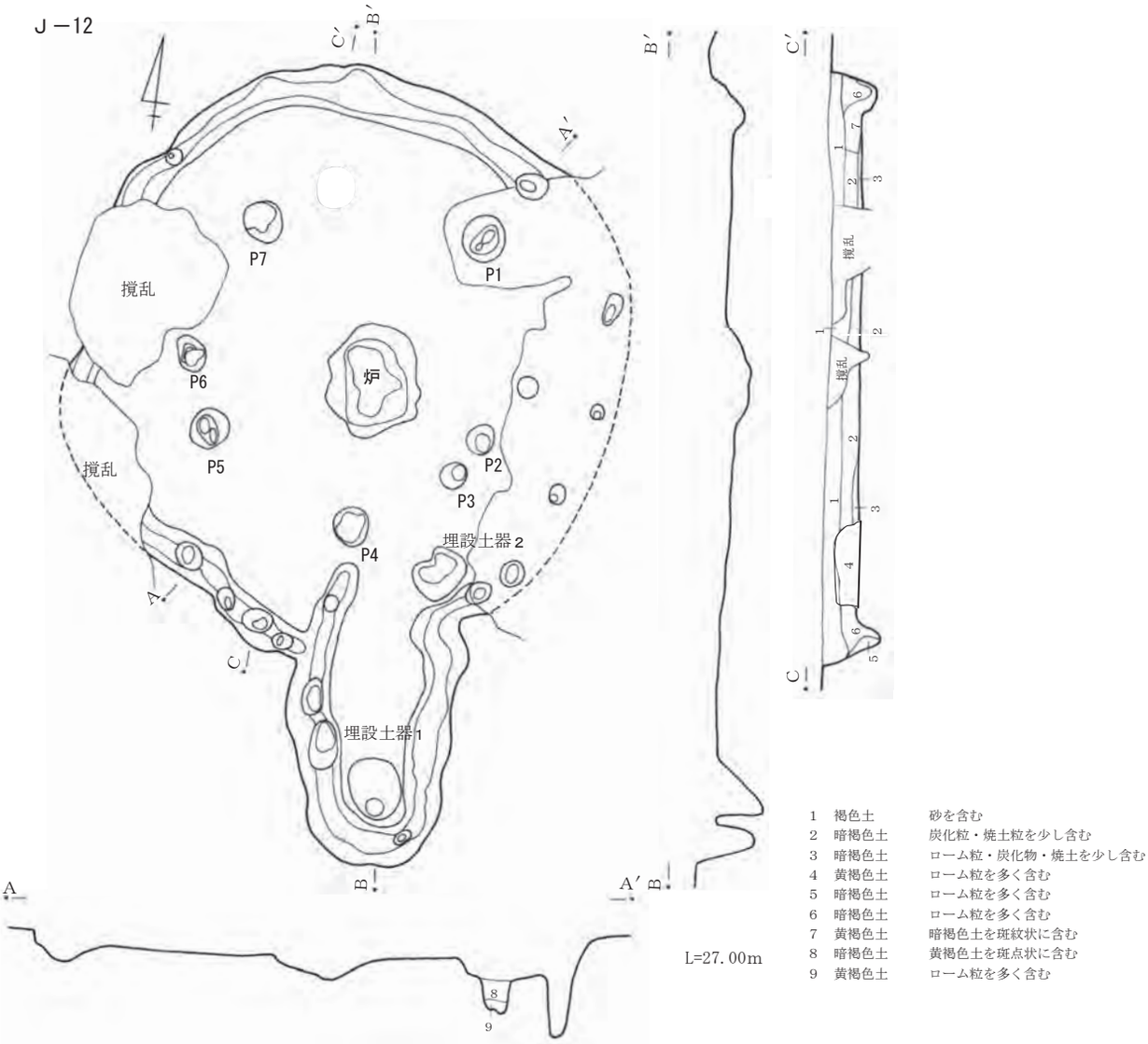
33～52は胴部に縄文のみが施されるものである。33は口縁部の区画が認められない。34は屈曲部で区画される。35～37は微隆線脇がナデられる。34・38・39は口縁部がほとんど内弯せず、立ち上がる器形から加曽利ＥⅤ式の可能性がある。40は縄文の下にヘラ状工具によるケズリが認められる。41は口縁部に突起が施される。

53は櫛歯状工具による条線が引かれる。54～56は口縁部に橋状把手が認められる。

57～62は鉢形土器である。57は胴部に微隆線と縄文で文様が施される。微隆線上にも縄文が認められる。58は胴部に沈線と縄文で文様が施される。59は橋状把手の部分が欠損したものである。

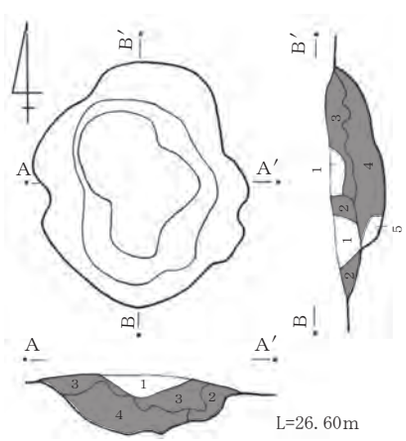
63～65は加曽利ＥⅢ式と考えられる。63は微隆線による区画と縄文が施される。微隆線脇は丁寧にナデられる。胴下部は細い棒状工具による調整が施される。64は沈線と縄文で「横位連繋弧線文」が施される。65は口縁部が沈線で区画され沈線脇に列点が施される。胴部には縄文のみが認められる。口縁部の形態から加曽利ＥⅢ式とした。

住居跡の時期は加曽利ＥⅤ式期と考えられる。土器以外では蓋１点(第278図９)、土器片錘２点(第279図８・９)、磨石類４点(第286図７・91・147・148)、石皿・台石２点(第290図35・60)、石棒１点(第296図３)、石錐１点(第292図１)、石鏃５点(第291図10・13・16・24・26)、同未成品１点(付表３-５-39)、剥片類16点(加工剥片１・剥片８・砕片７)が出土している。石材は黒曜石主体にチャートが混じっており、石鏃製作に伴うものであろう。

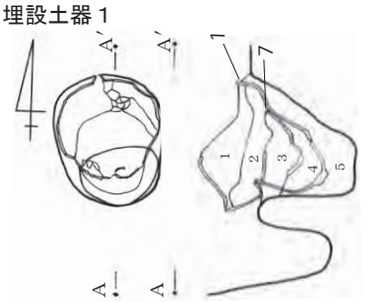


1　褐色土　砂を含む
2　暗褐色土　炭化粒・焼土粒を少し含む
3　暗褐色土　ローム粒・炭化物・焼土を少し含む
4　黄褐色土　ローム粒を多く含む
5　暗褐色土　ローム粒を多く含む
6　暗褐色土　ローム粒を多く含む
7　黄褐色土　暗褐色土を斑紋状に含む
8　暗褐色土　黄褐色土を斑点状に含む
9　黄褐色土　ローム粒を多く含む

埋設土器１

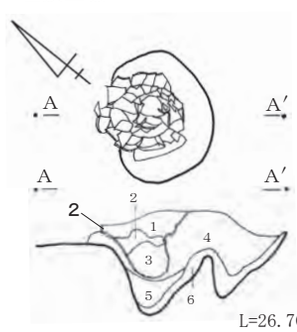


1　黒褐色土　焼土を少し含む
2　黒褐色土　焼土を多く含む
3　暗赤褐色土　焼土
4　赤褐色土　焼土
5　黒褐色土　焼土を含む

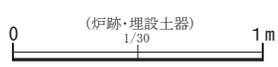


1　黄褐色土　ローム粒を含む
2　褐色土　ローム粒を含む
3　暗褐色土　ローム粒を含む
4　暗褐色土　褐色土を斑紋状に含む
5　明褐色土　褐色土を含む

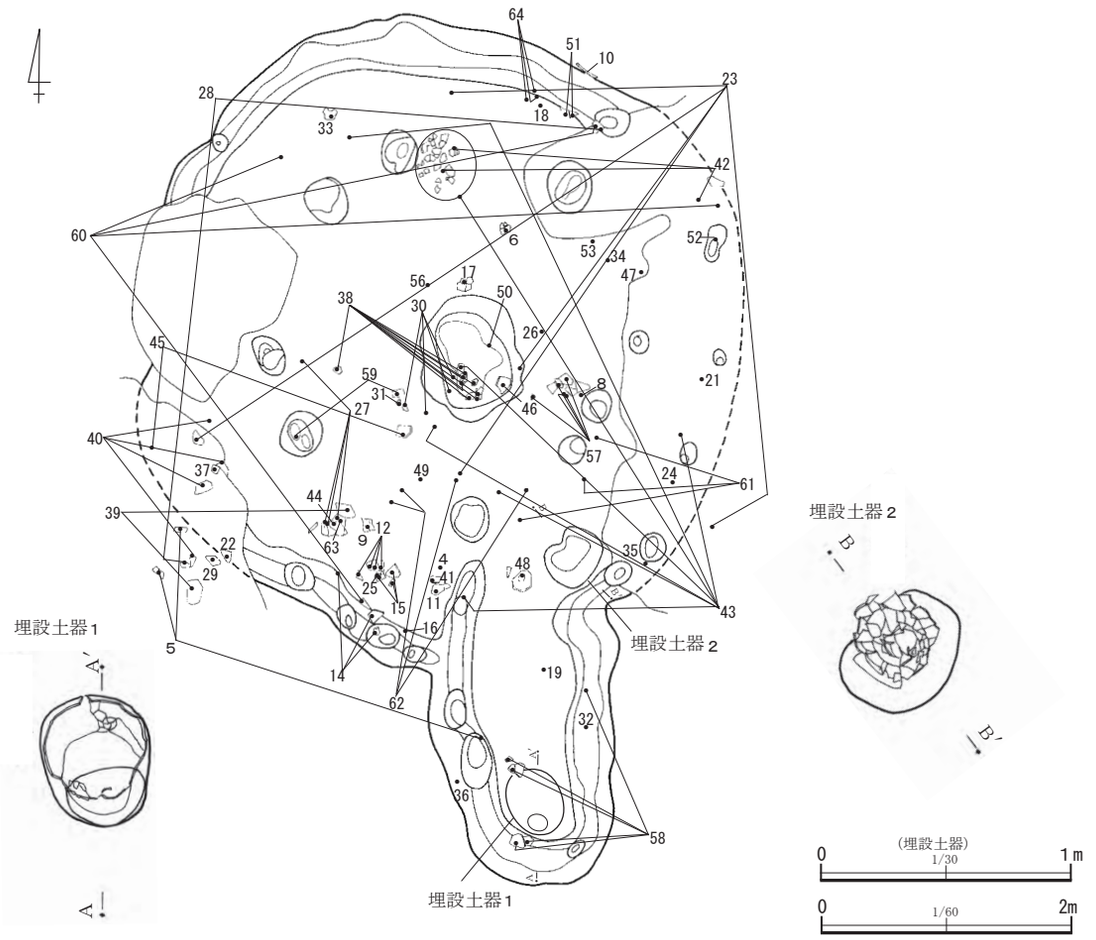
埋設土器２



1　褐色土
2　褐色土　色調は１層よりやや明るい
3　暗褐色土
4　暗褐色土　褐色土を斑紋状に含む
5　暗褐色土
6　明褐色土



第69図　J -12(1)



第 70 図　J -12(2)

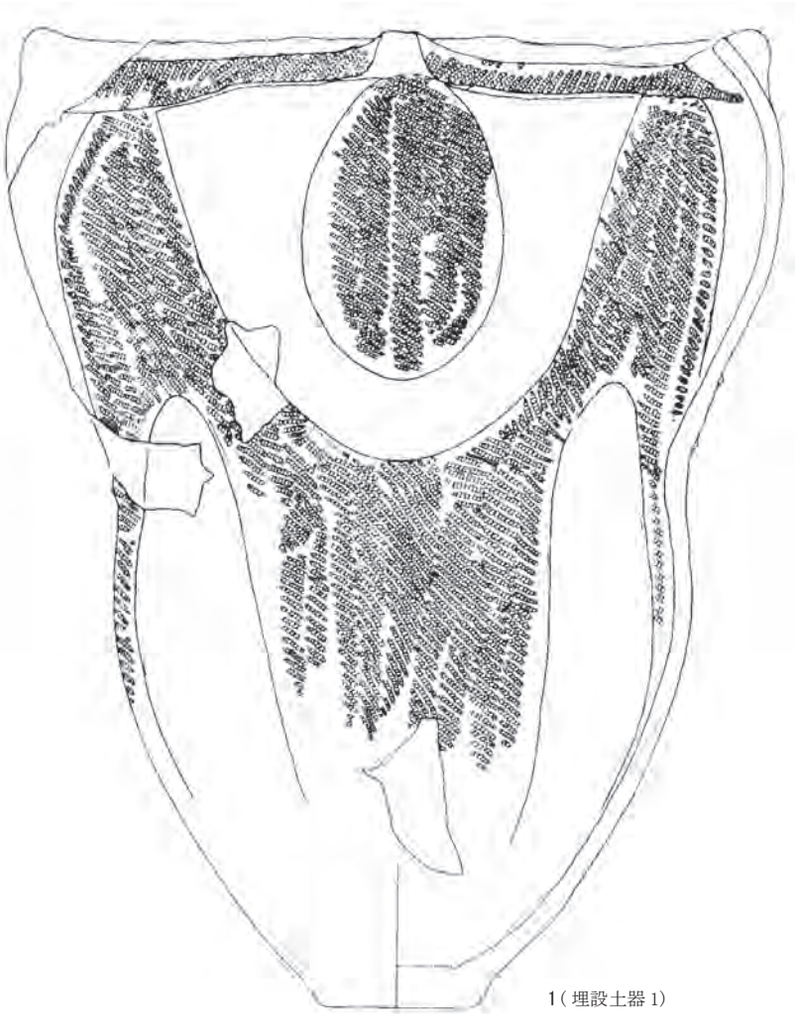
J-13(第 77・78 図・図版 13・41)

旧ム -18- 1 住。掘り込みを有さない。柱穴は深さ 0.4 ～ 0.6 mの P2 － P3 － P7 － P1 が方形に配置されている。P4・P5 は出入口施設であろう。南西壁際の埋設土器はその延長上にある。 1 が直立し口縁部が床面上に出た状態で埋設されていた。炉は中央付近に位置し、底面に焼土が堆積していた。確認面出土は２～４である。

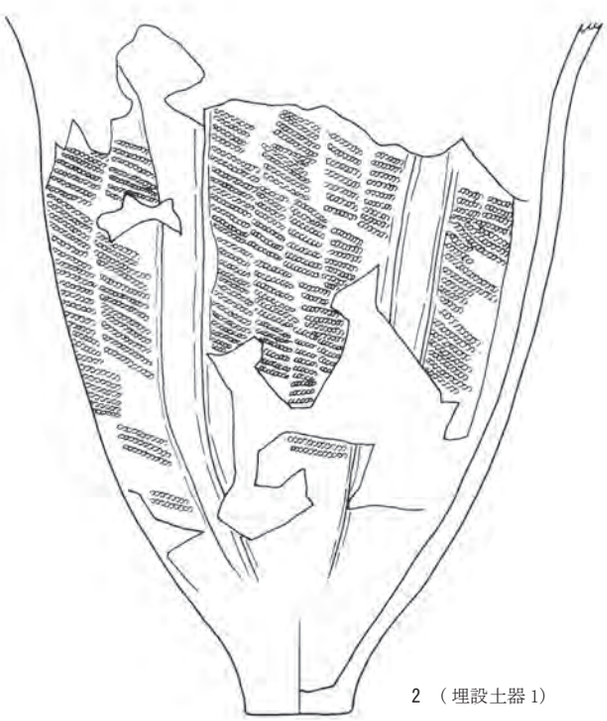
１～４は加曽利Ｅ式終末の土器である。 1 は加曽利ＥⅣ式と考えられる。胴部の屈曲はほとんどなく、立ち上がる器形である。微隆線で胴部から口縁部まで「逆Ｕ字状」の区画が施され、区画内には縄文が施される。微隆線脇は丁寧にナデられる。２は口縁部が微隆線で区画され、一部が突起になる。胴部には縄文のみが認められる。３は胴部に沈線と縄文で文様が施される。４は無文の底部であるが、加曽利Ｅ式終末のものと考える。住居跡の時期は加曽利ＥⅣ式期と考えられる。

J-14(第 77・78 図・図版 14・41)

旧メ - 4 - 1 住。3.7 × 3.6 mの円形を呈す。0.3 mの掘り込みを有す。壁溝が全周する。柱穴は深さ 0.5 ～ 0.6 mの P1 ～ P6 が亀甲形に並ぶ。炉は中央に位置し、焼土を多く含む層がみられる。東寄りの覆土中から中央方向の床面直上にかけて 100cm × 80cm、厚さ 35cm の貝層を形成している。現地の観察によれば、貝類はヤマトシジミ、アサリ、ハマグリ、マガキが多く、写真によればイボキサゴも多い。部分



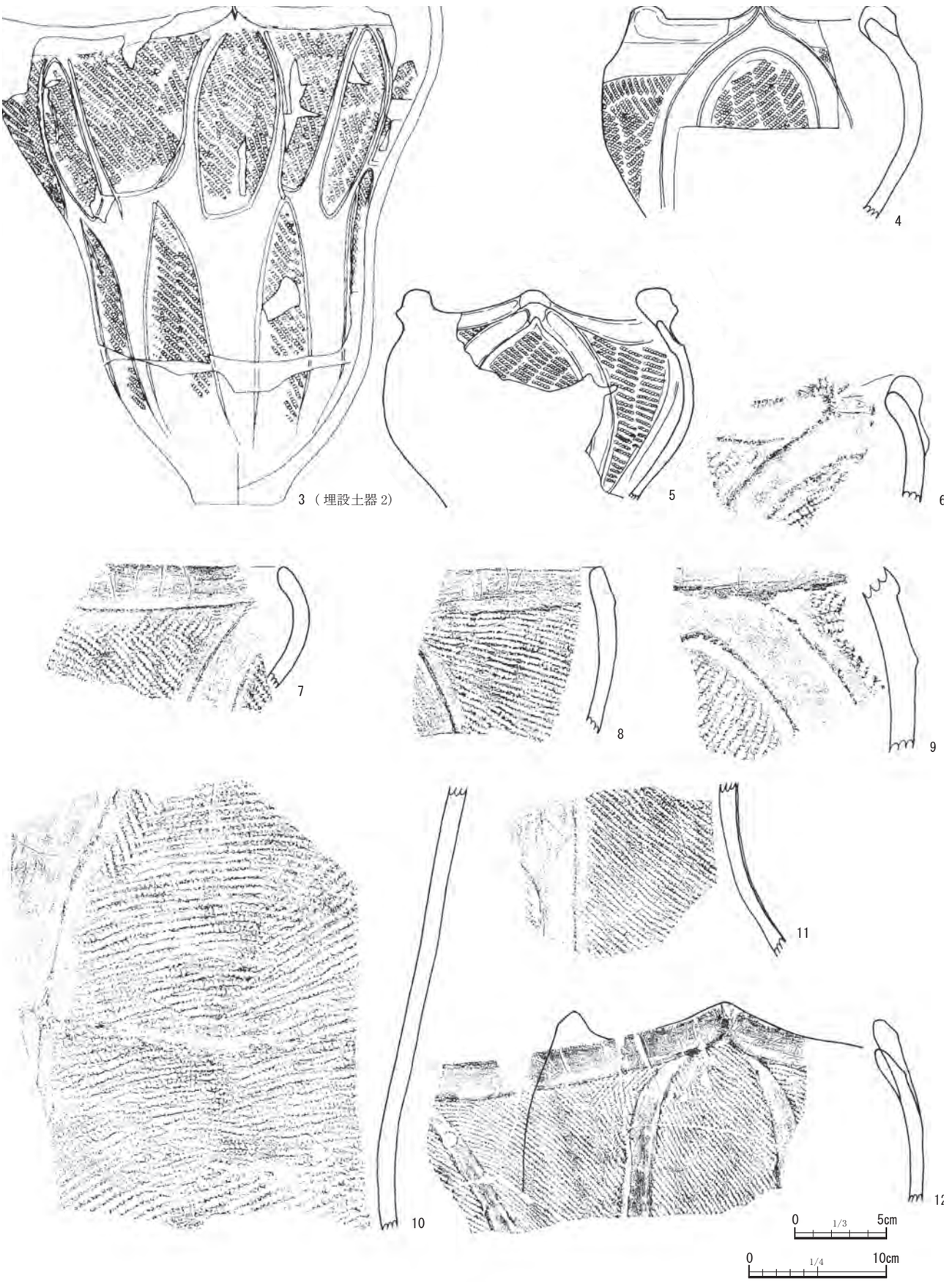
1（埋設土器 1）



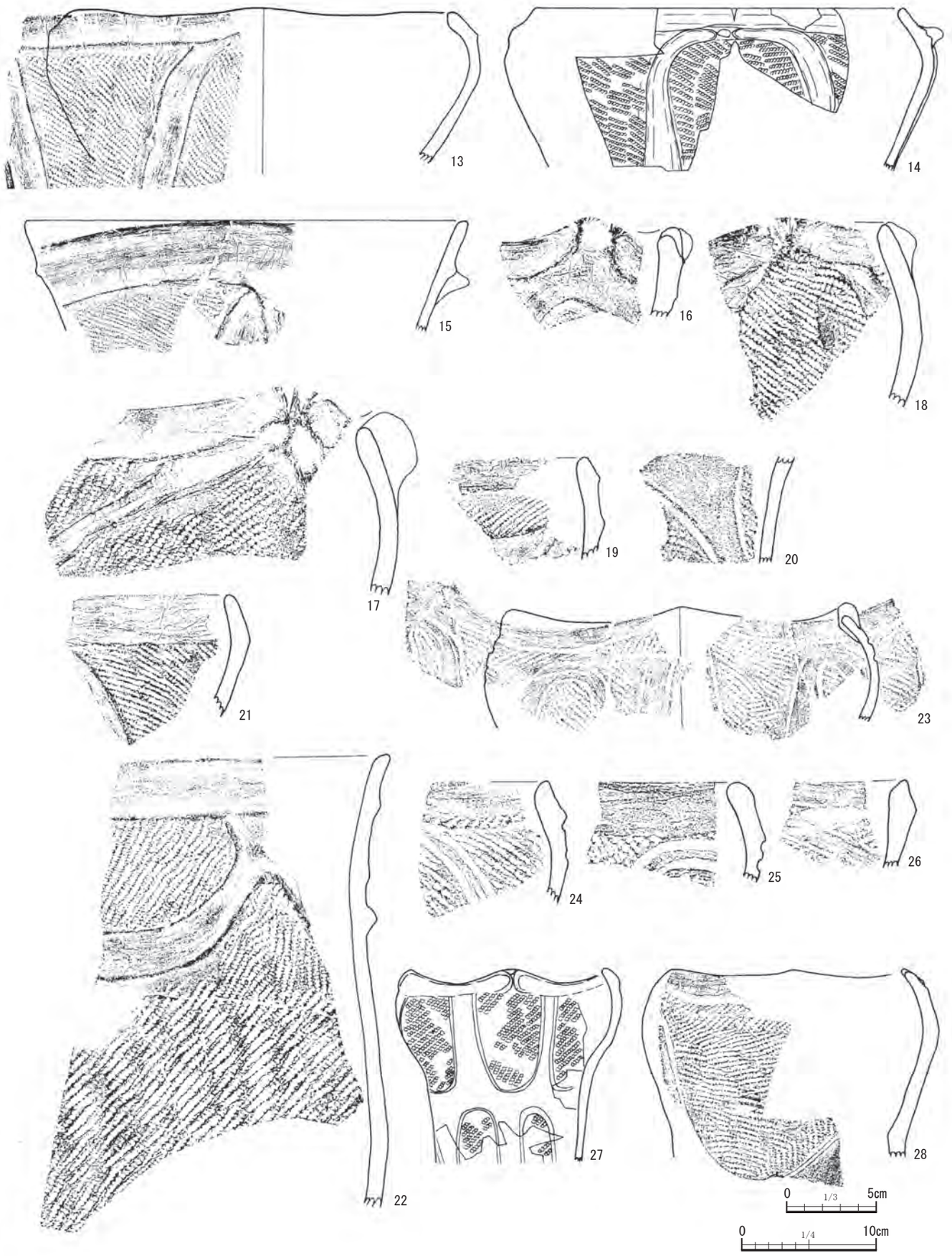
2 （埋設土器 1）

0 1/4 10cm

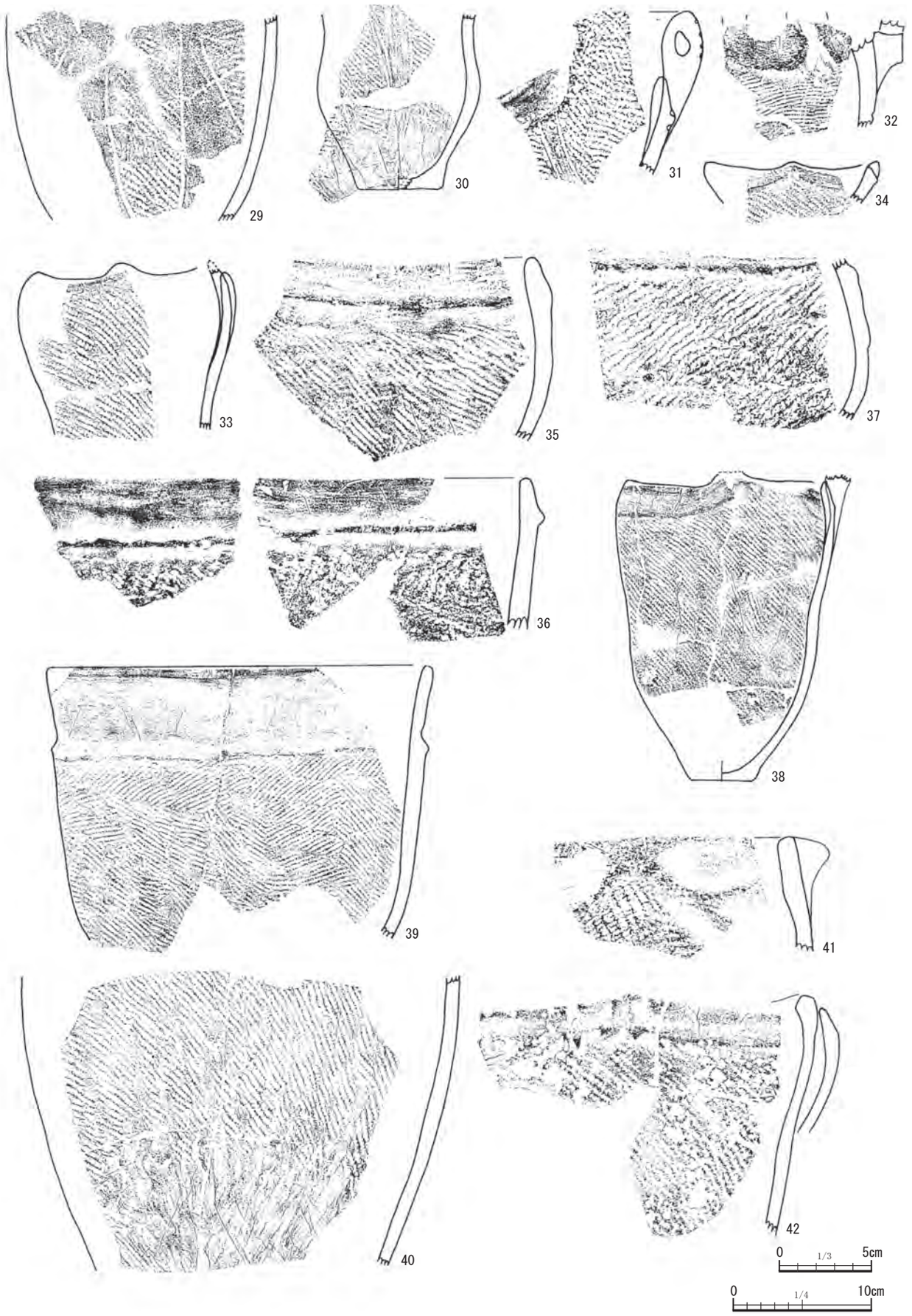
第 71 図　J -12(3)



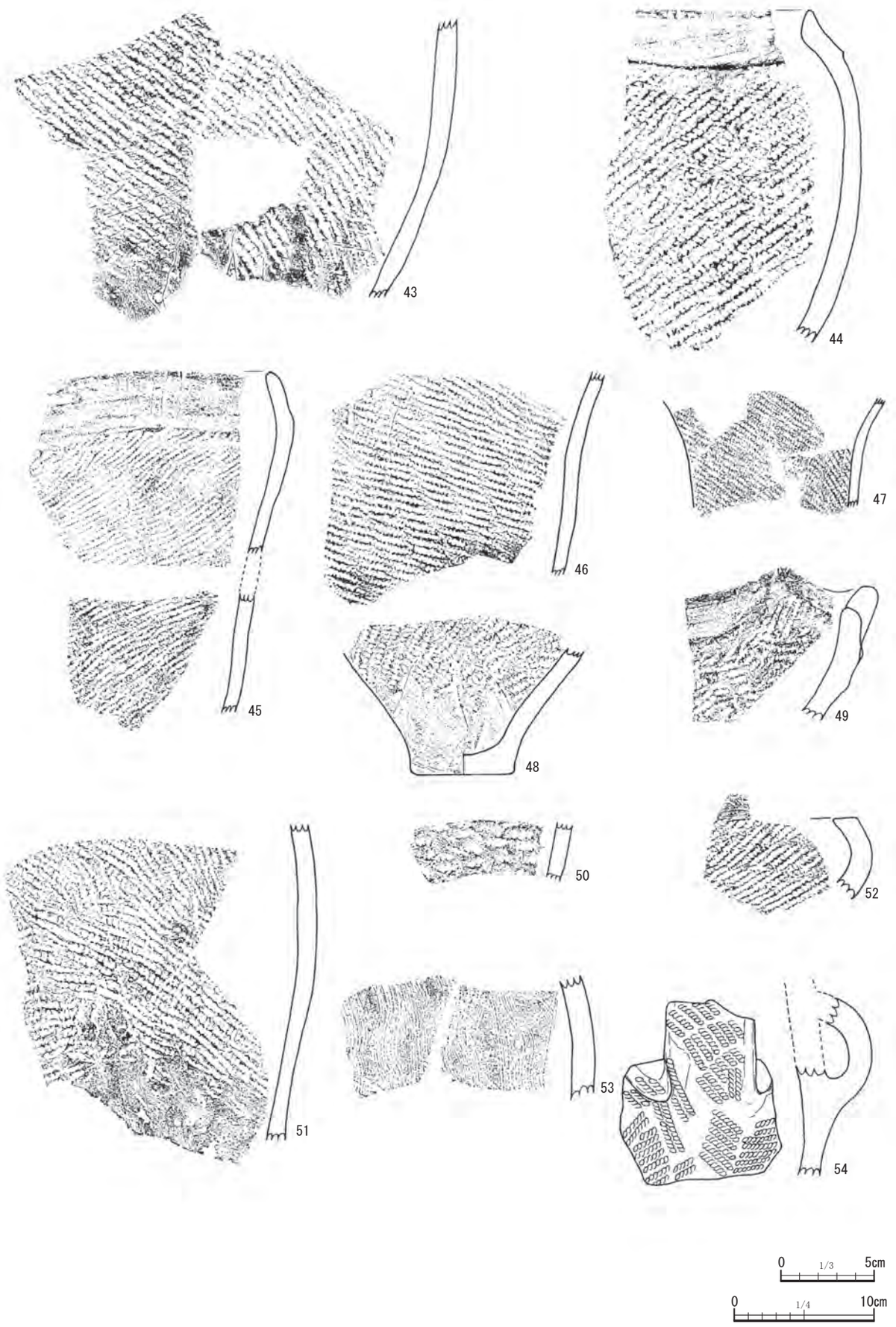
第 72 図　J -12(4)



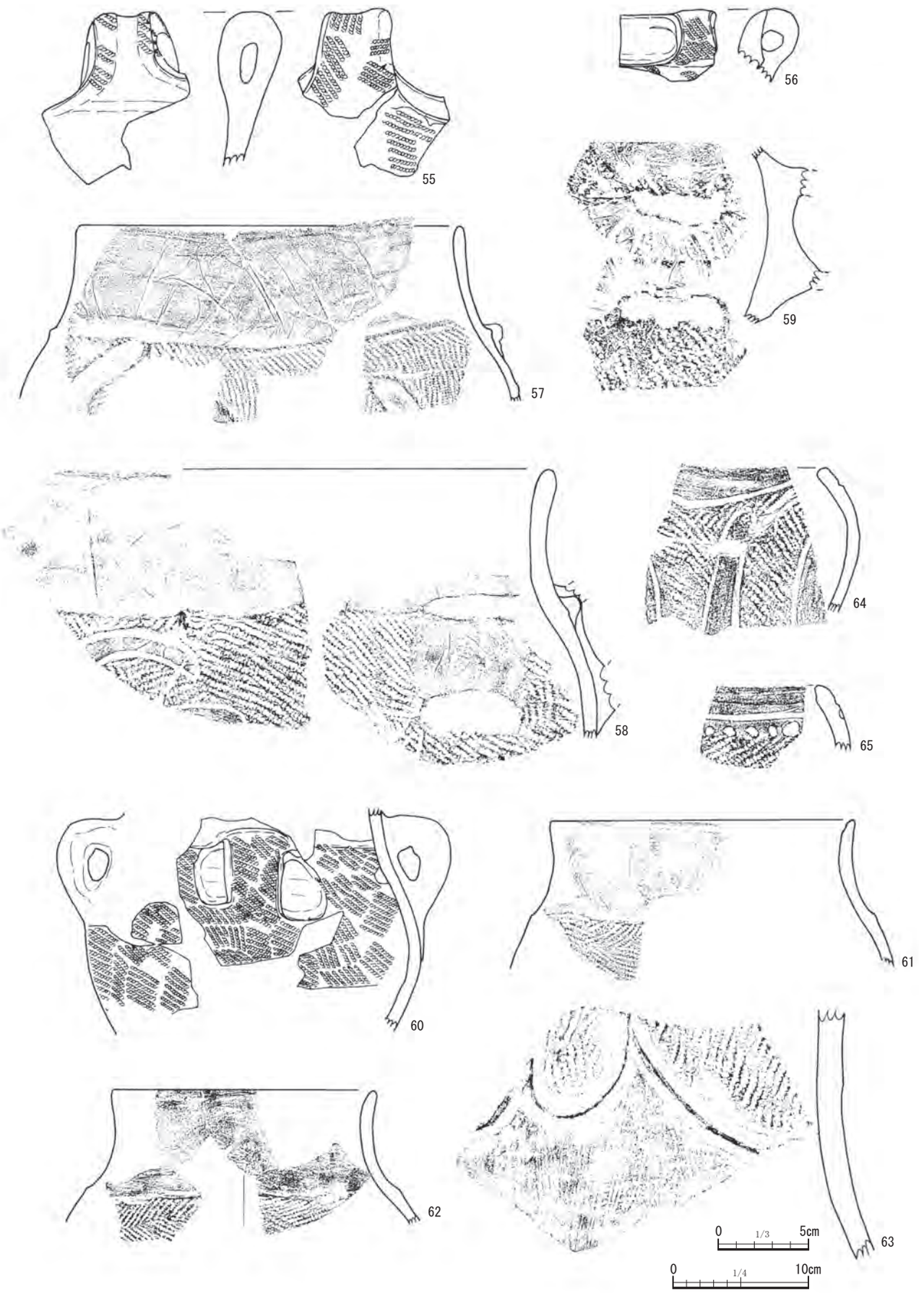
第 73 図　J -12(5)



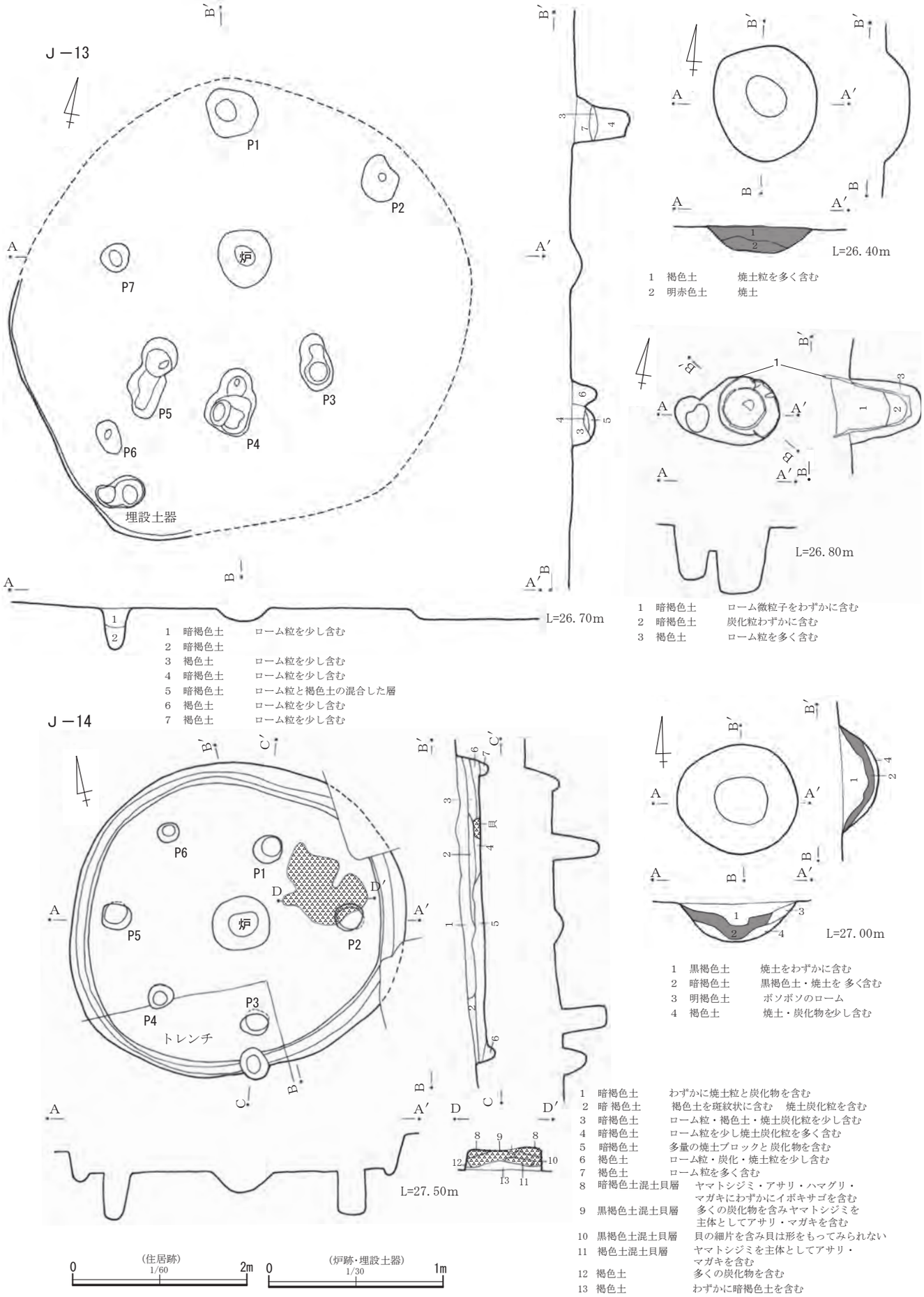
第 74 図　J -12(6)



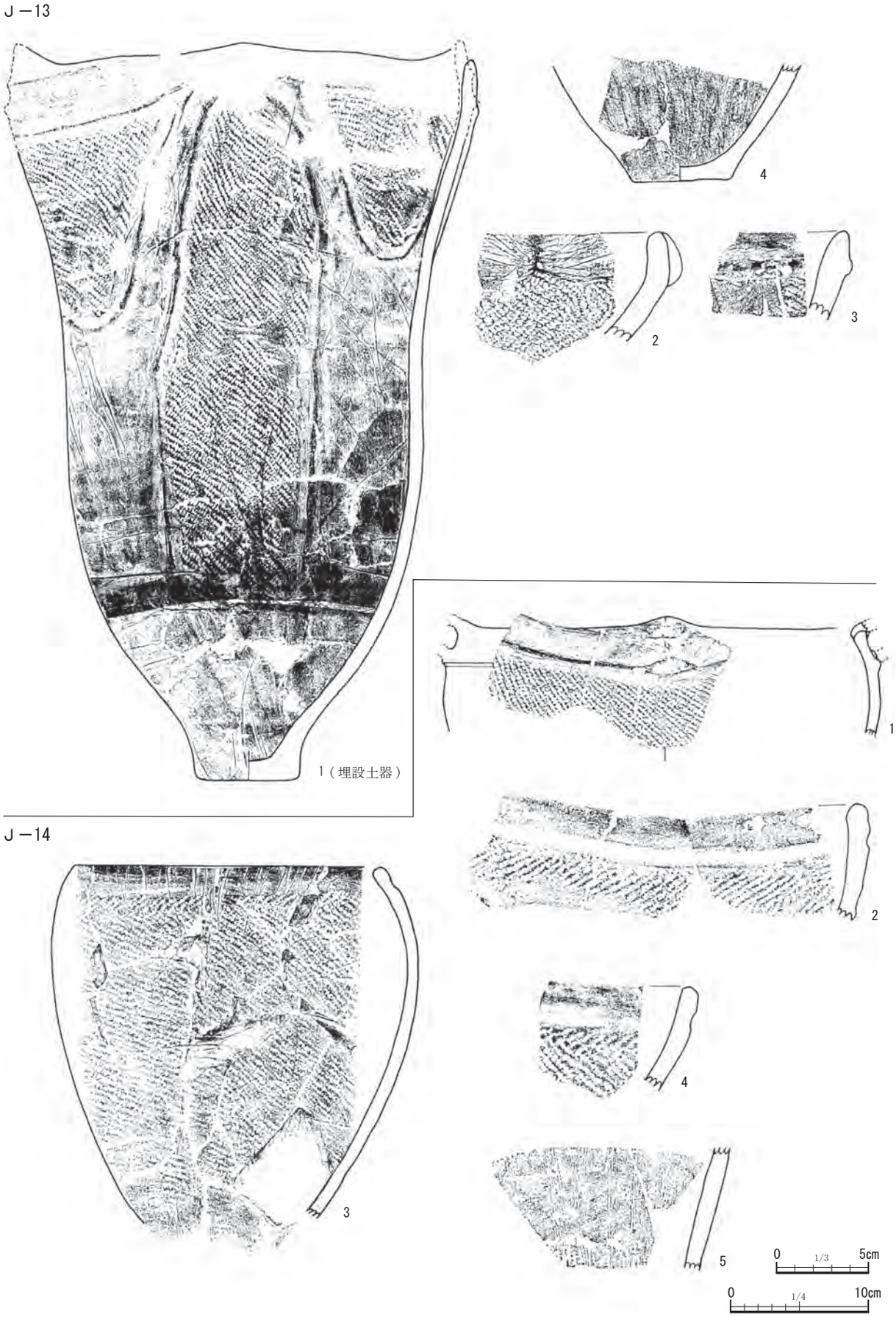
第 75 図　J -12(7)



第 76 図　J -12(8)



第77図 J -13(1)・J -14(1)



第 78 図　J -13(2)・J -14(2)

によって貝種構成の違いや破砕貝層の存在が認められる。住居跡出土土器は２～４である。確認面上出土は１・５である。

１～５は加曽利Ｅ式終末の土器である。１・２は加曽利ＥⅣ式、３は加曽利ＥⅤ式の可能性がある。１・３は口縁部が微隆線で区画され、胴部に縄文のみが認められる。１は口縁部の把手が欠損する。微隆線脇はナデられる。３は微隆線脇がナデられず、微隆線上に縄文が認められる。２・４は口縁部がナデによって区画される。２は胴部に微隆線が貼り付けられ、微隆線脇はナデられる。４は縄文のみが認められる。５は櫛歯状工具による条線が引かれる。

住居跡の時期は加曽利ＥⅣ式期と考えられる。

J-15(第 79・80 図・図版 14)

旧メ -17- １住。大きく攪乱されているが、4.4 × 3.9 mほどの楕円形の竪穴を想定できる。0.2 mの掘り込みを有す。柱穴は P1 ～ P6 があり、炉は遺存しないものの形状と出土遺物から竪穴住居跡と判断した。住居跡出土土器は３である。確認面上出土は１・２・４～９である。

１～９は曽利式系土器である。１～５は同一個体で曽利Ⅲ式と考えられる。櫛歯状工具による条線を地文とし、沈線で文様が描かれる。６～９は同一個体で曽利Ⅱ式と考えられる。半截竹管で重弧文が施される。住居跡の時期は加曽利ＥⅡ式期と考えられる。

J-16(第 79・80 図・図版 14)

旧メ -20- １住。4.9 × 3.6 mの楕円形を呈す。0.2 mの掘り込みを有す。柱穴は深さ 0.4 ～ 0.6 mの P1 ～ P18 が存在する。多くは楕円形に並んでおり、P1・P18 は北側にやや突出する。炉は中央に位置し土器片囲の一部が遺存する。土器は未掲載である。住居跡出土土器は２・３・５・７・11 である。確認面上出土は１・４・６・８～ 10 である。

１～６・９は加曽利Ｅ式終末の土器である。１は加曽利ＥⅤ式である。器形はほとんどくびれず立ち上がる。口縁部は微隆線で区画され、胴部からの「逆Ｕ字状文」が口縁部の区画に貫入し、突起が付される。微隆線脇はナデられる。２・３は加曽利ＥⅣ式である。口縁部が微隆線で区画され、胴部には微隆線と縄文で「逆Ｕ字状文」が施される。微隆線脇はナデられる。４・５は口縁部が微隆線で区画され、胴部は縄文のみが認められる。６は鉢形土器で、橋状把手が付される。７・８は加曽利Ｅ式後半の底部と考えられる。９は瓢形土器である。器壁は薄く器面が丁寧に調整される。胴部には微隆線と欠損した突起または把手が認められる。10 は堀之内１式である。口縁部に突起を持ち、沈線と刻みが認められる。胴部には縄文と沈線で文様が施される。11 は安行 3a 式と考えられる。口縁部には突起が付され、突起間には縄文と刻みが施される。突起下には入組文が施文されていると考えられる。

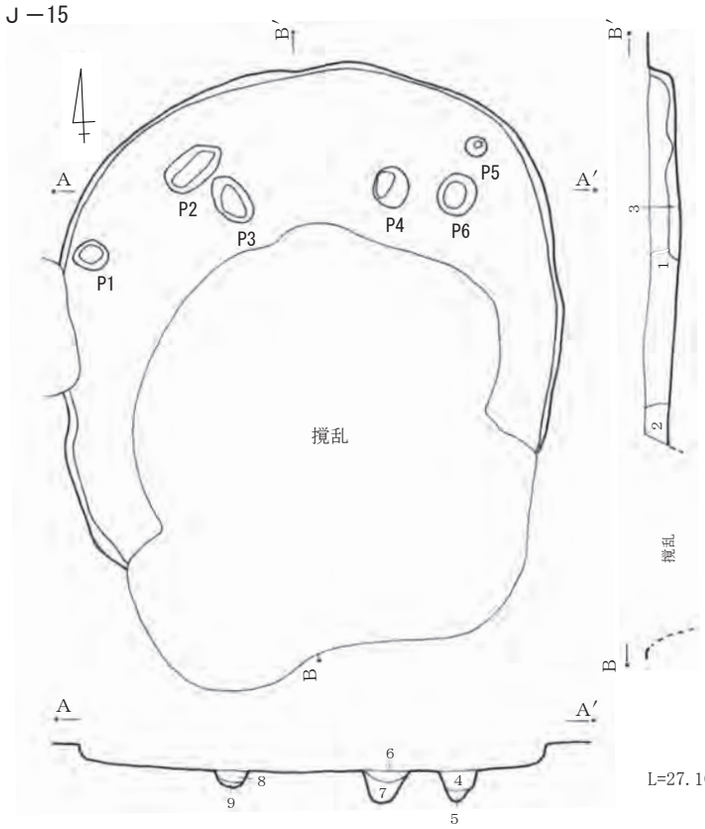
住居跡の時期は加曽利ＥⅣ式期と考えられる。土器以外では土器片円板１点 (第 278 図 12)、土器片錘１点 (第 279 図 10)、軽石製品１点 (第 293 図 14)、剥片類３点が出土している。

J-17(第 81・82 図・図版 14・42)

旧メ -20- ２住。3.9 × 3.5 mの楕円形を呈す。0.1 mの掘り込みを有す。柱穴は深さ 0.3 ～ 0.4 mの P1 ～ 14 があり、北壁側と南壁側に並ぶものが多い。炉は西寄りに位置し下部に焼土が堆積している。住居跡出土土器は１～９・11 である。１は P12 上面から潰れた状態で出土、４は P8 の北側から出土した。確認面上出土は 10・12 である。

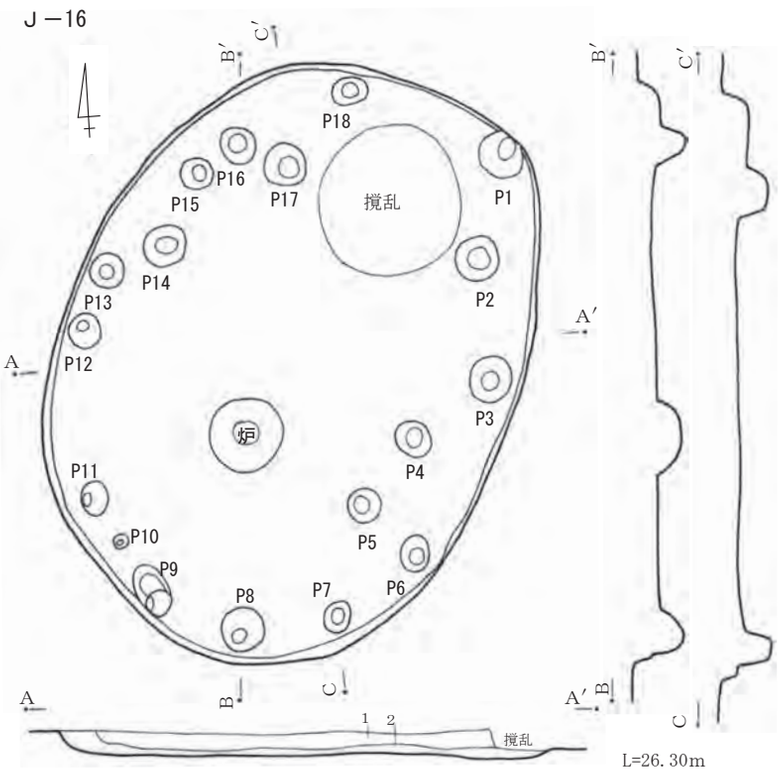
１～ 11 は加曽利Ｅ式終末の土器である。１～３は加曽利ＥⅣ式と考えられる。１は口縁部が微隆線で区画され、胴部は微隆線と縄文で渦巻状の文様が施される。２・３は同一個体である。微隆線と縄文で「対向Ｕ字文」が施される。１～３は微隆線脇がナデられる。４は胴部に微隆線と縄文で球状と渦巻状の文

J－15

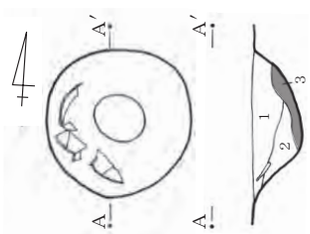


1　黒褐色土　褐色土を斑文状に含みローム粒・焼土・炭化物を含む
2　暗褐色土　褐色土を斑文状に含み炭化物・焼土を少し含む
3　黄褐色土　炭化物・焼土を少し含む
4　暗褐色土　褐色土を斑紋状に含みローム粒を多く含む
5　褐色土　暗褐色土を少しロームブロックを多く含む
6　褐色土　暗褐色土・炭化粒含む
7　褐色土　ロームブロックを多く炭化物を少し含む
8　暗褐色土　褐色土を斑紋状に含みローム粒を少し含む
9　暗褐色土　褐色土多く含む

J－16



1　黒褐色土　ロームブロック・焼土・炭化物を少し含む
2　黄褐色土　ローム粒を多量に含む

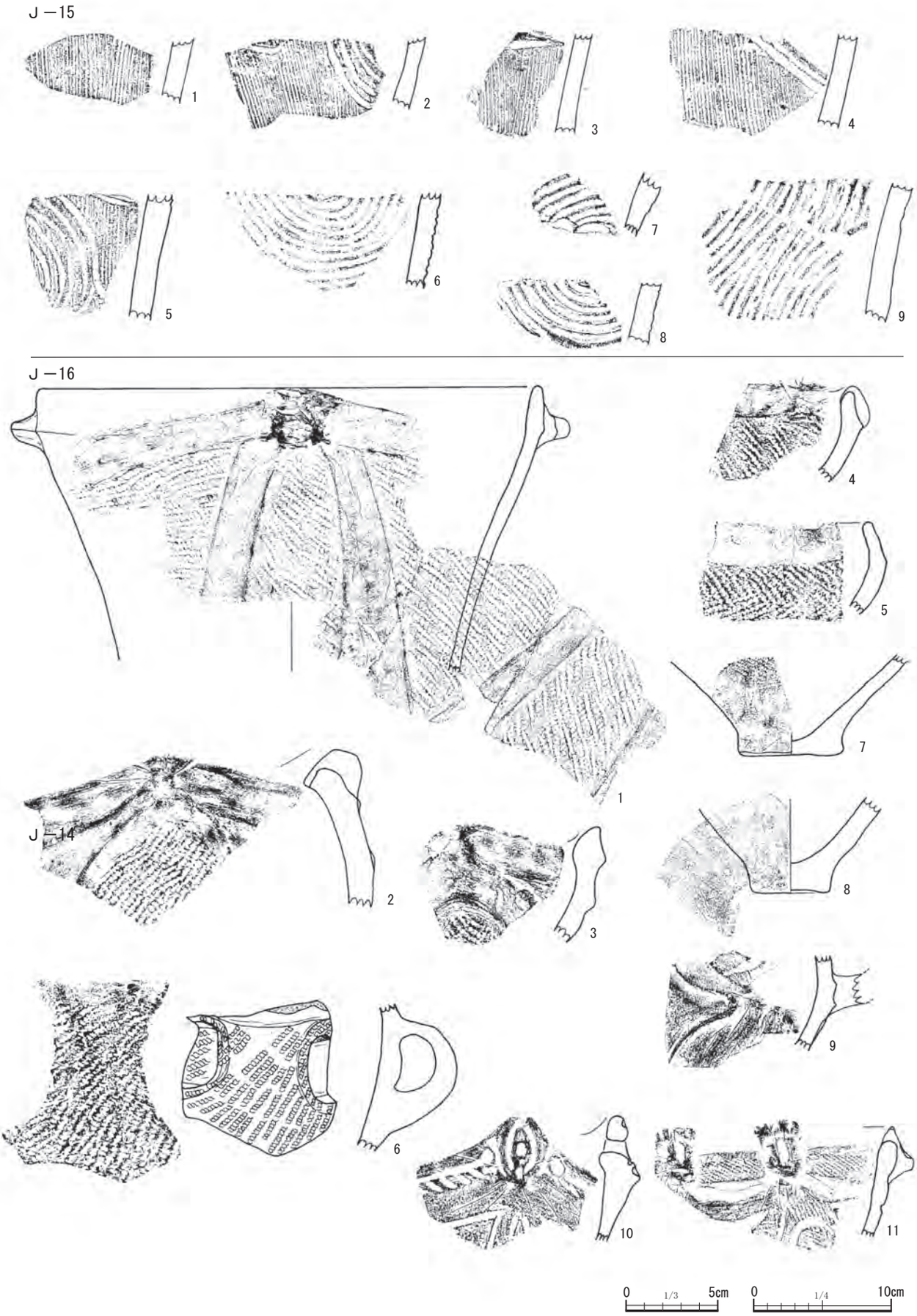


1　黒褐色土　小ロームブロック・焼土・炭化物を少量含む
2　赤褐色土　焼土を多く炭化物少し含む
3　赤褐色土　焼土

(住居跡)
0　1/60　2m

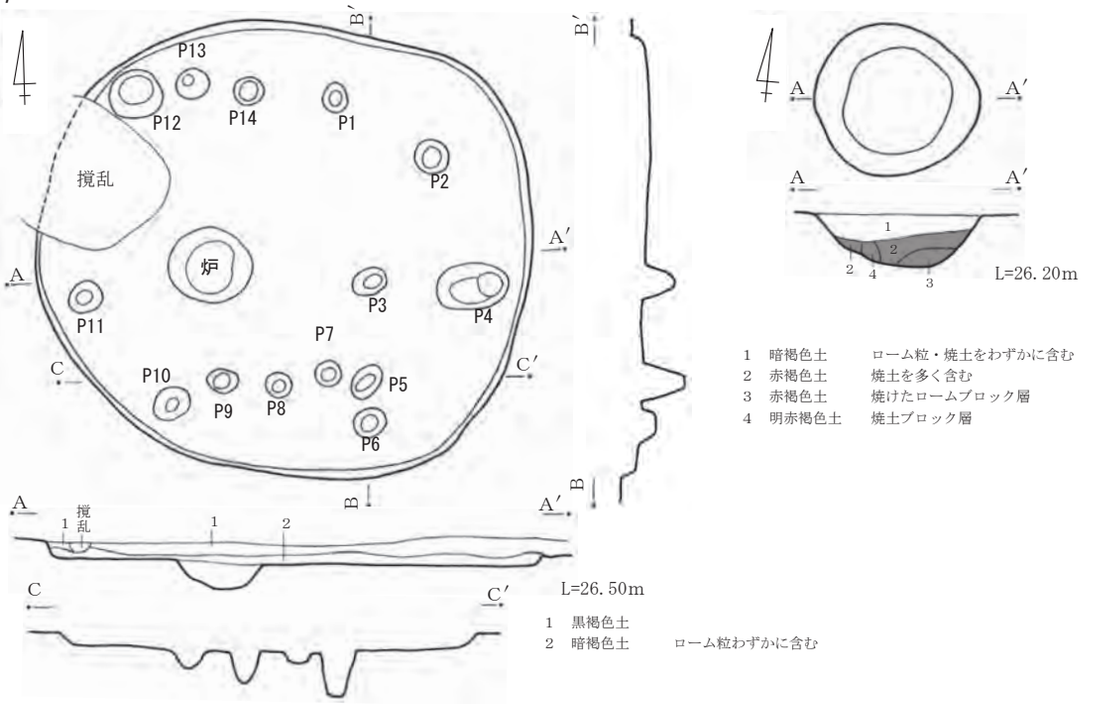
(炉跡)
0　1/30　1m

第79図　J-15(1)・J-16(1)



第80図　J -15(2)・J -16(2)

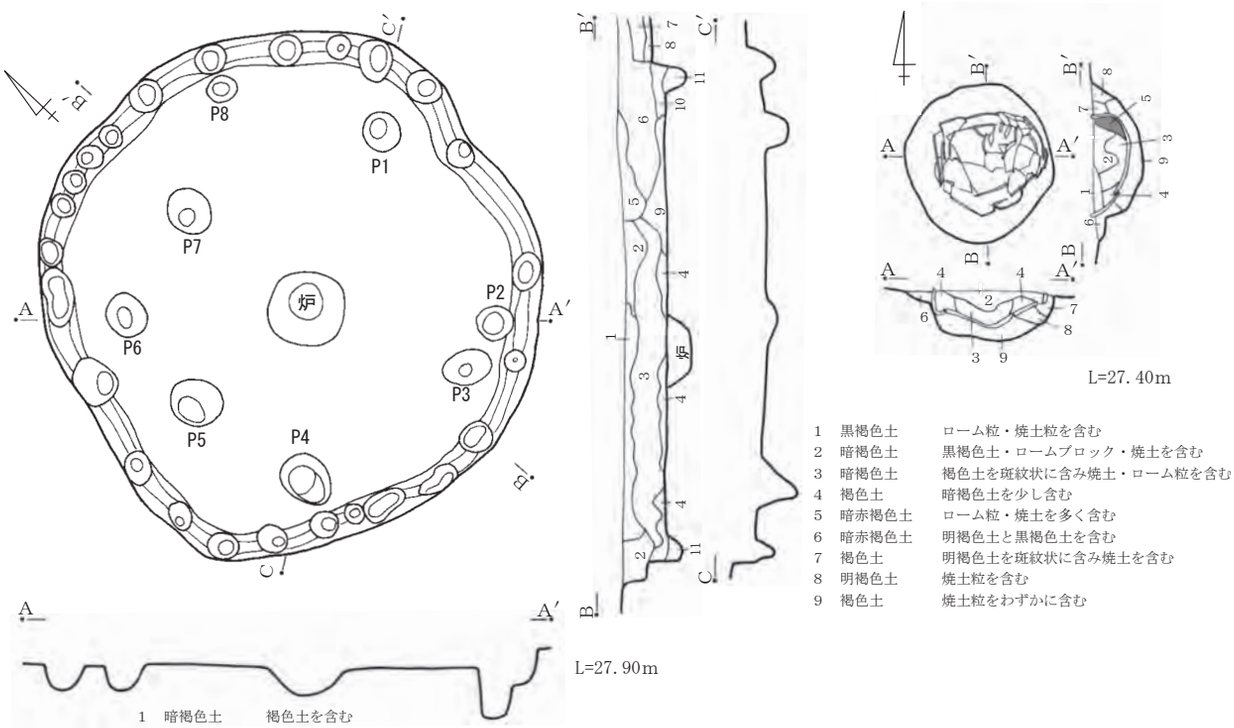
Ｊ－17



1　暗褐色土　　ローム粒・焼土をわずかに含む
2　赤褐色土　　焼土を多く含む
3　赤褐色土　　焼けたロームブロック層
4　明赤褐色土　焼土ブロック層

1　黒褐色土
2　暗褐色土　　ローム粒わずかに含む

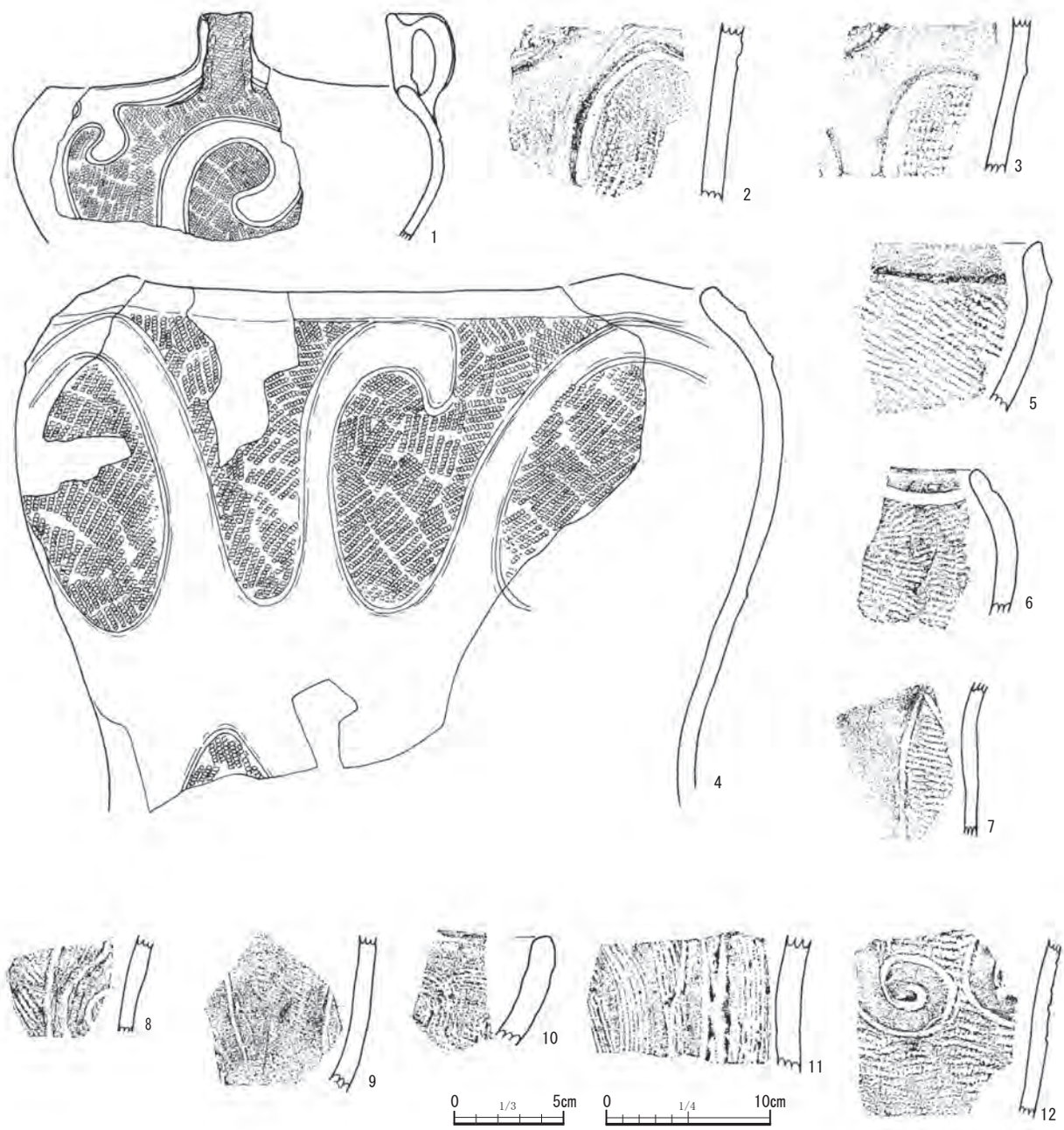
Ｊ－18



1　暗褐色土　　褐色土を含む
2　暗褐色土　　褐色土を斑紋状に含む
3　暗褐色土　　明褐色土を斑紋状に含む
4　褐色土　　暗褐色土を斑紋状に含む
5　褐色土　　明褐色土を斑紋状に含む
6　暗褐色土　　褐色土を斑紋状に含む
7　暗褐色土　　褐色土を含む
8　極暗褐色土　暗褐色土を多量に含む
9　褐色土　　明褐色土を斑紋状に含む
10　極暗褐色土　暗褐色土を多量に含む
11　明褐色土　　褐色土を斑紋状に含み炭化物を少し含む

1　黒褐色土　　ローム粒・焼土粒を含む
2　暗褐色土　　黒褐色土・ロームブロック・焼土を含む
3　暗褐色土　　褐色土を斑紋状に含み焼土・ローム粒を含む
4　褐色土　　暗褐色土を少し含む
5　暗赤褐色土　ローム粒・焼土を多く含む
6　暗赤褐色土　明褐色土と黒褐色土を含む
7　褐色土　　明褐色土を斑紋状に含み焼土を含む
8　明褐色土　　焼土粒を含む
9　褐色土　　焼土粒をわずかに含む

第81図　Ｊ-17(1)・Ｊ-18(1)



第 82 図　J -17(2)

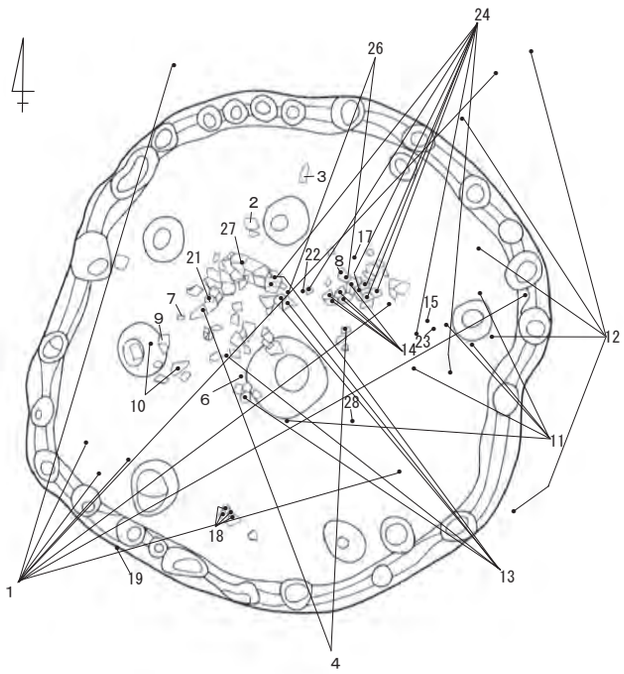
様が施される。微隆線脇はナデられない。５は口縁部が微隆線で区画され、胴部には縄文のみが認められる。６は沈線で口縁部が区画される。７～９は沈線と縄文で文様が構成される。10・11 は櫛歯状工具による条線が引かれる。12 は称名寺式第１段階と考えられる。縄文を地文とし沈線で渦巻文が施される。

住居跡の時期は加曽利ＥⅣ式～Ⅴ式期と考えられる。土器以外では磨石類１点 (付表３- ３-34)、剥片類２点が出土している。

J-18(第 81・83 ～ 86 図・図版 14・42・45)

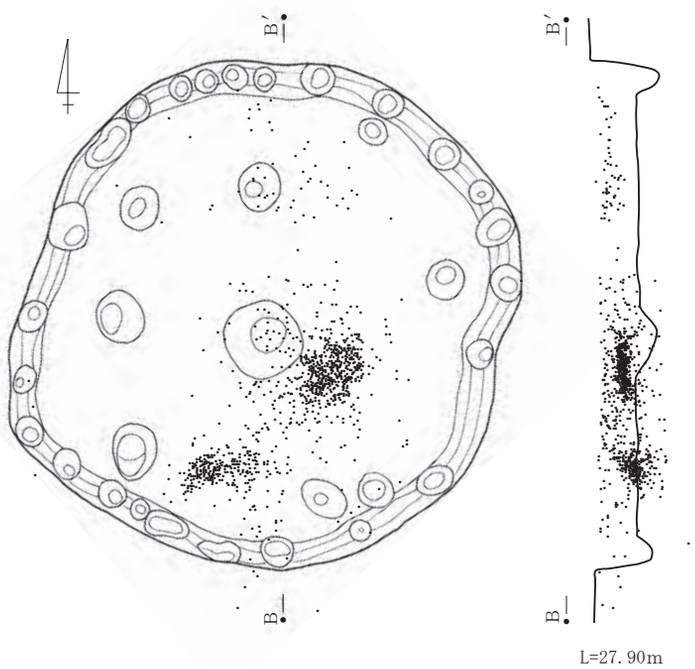
旧モ - ９- １住。径 4.1 ｍの円形を呈す。0.3 ｍの掘り込みを有す。壁溝が全周し、壁柱穴 25 本をもつ。柱穴は深さ 0.3 ～ 0.4 ｍの P1 ～ P8 がある。P1 － P2 － P4 － P6 がほぼ方形を為している。炉はほぼ中央に位置し、深鉢上半部 (１) を埋め込み、底に大形破片 (土器番号不明、掲載土器には見当たらない) を敷き詰めている。住居跡出土土器は１～ 24･26 ～ 28 である。６は一部炉内、他は覆土から出土している。

J－18



0 1/60 2m

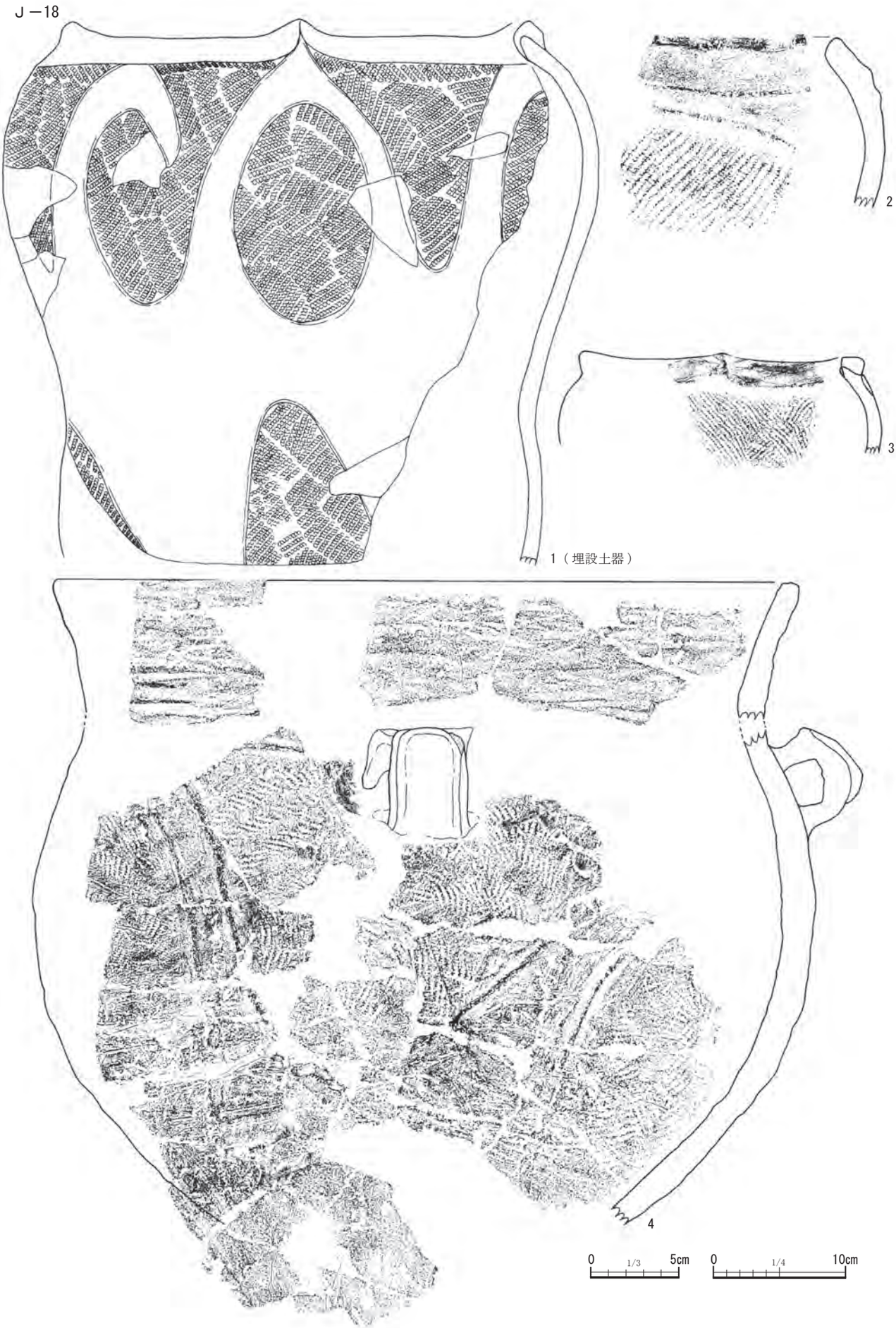
土器出土状況



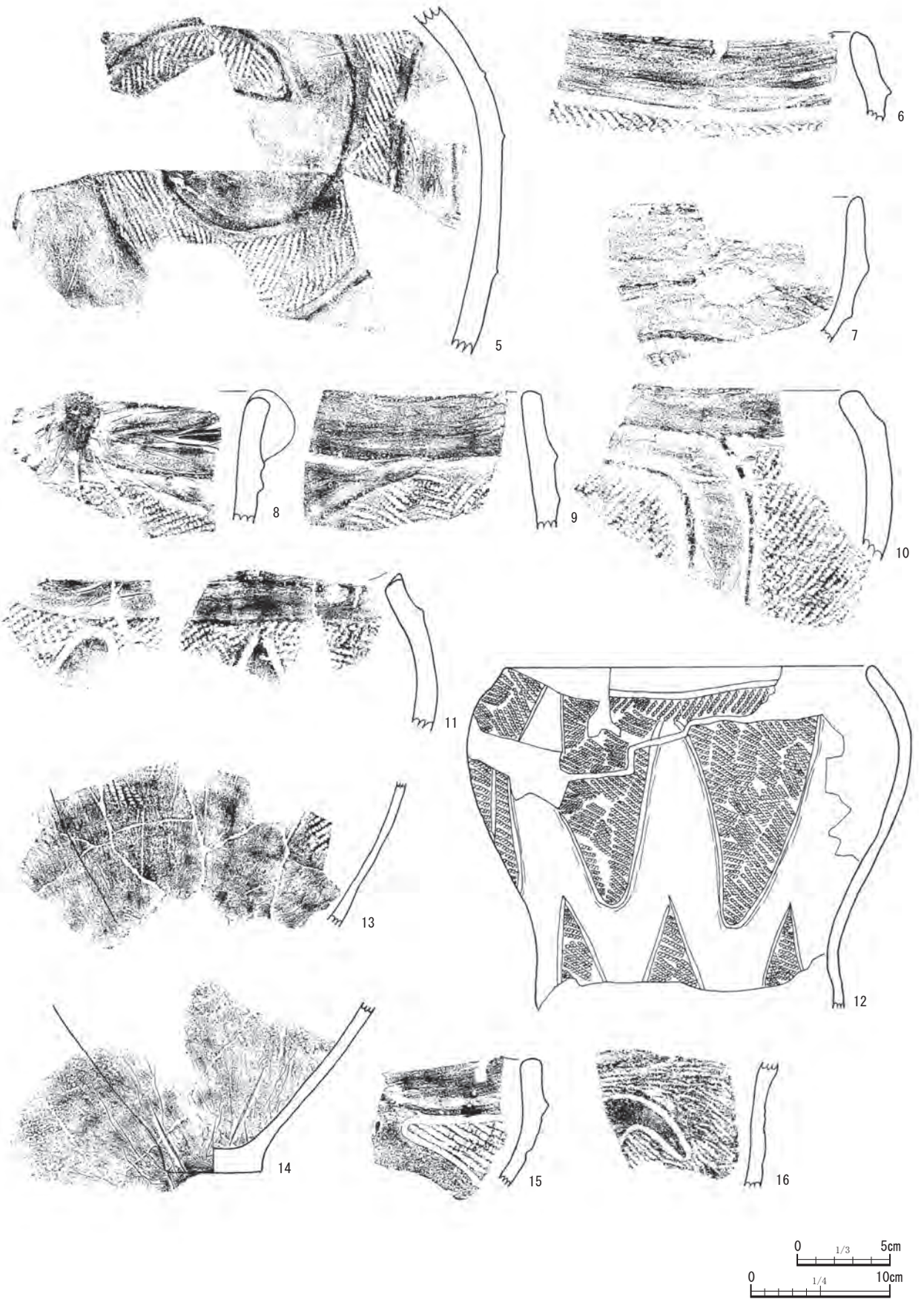
剥片類出土状況

0 1/60 2m

第83図　J -18(2)



第 84 図　J -18(3)



第85図　J -18(4)

第 86 図　J -18(5)

炉の周辺、とくに北側に大破片が集中している。炉の北東側の東南東－西南西に帯状に集中している。確認面上出土は 25 である。

1 ～ 28 は加曽利Ｅ式終末の土器である。 1 は加曽利ＥⅣ式と考えられる。口縁部が微隆線で区画され、一部に突起が施される。胴部には微隆線と縄文で球状、渦巻き状、Ｕ字状の文様が施される。微隆線上にも縄文が認められる。 2 ・ 3 ・ 5 ～ 7 ・ 10 は加曽利ＥⅣ式と考えられ、微隆線と縄文で文様が構成される。微隆線脇は丁寧にナデられる。11 は文様構成から加曽利ＥⅢ式にさかのぼる可能性もある。 8 ・ 9 は加曽利ＥⅤ式の可能性がある。口縁部が微隆線で区画され、胴部の「逆Ｕ字状文」が口縁部区画に貫入する文様構成と考えられる。微隆線脇はナデられない。11 ～ 16 は胴部文様が沈線と縄文で施される。12 は加曽利ＥⅣ式と考えられる。口縁部が内弯するキャリパー形の器形で、胴部には入り組む対向Ｕ字文が施され、無文部は丁寧に調整される。15 は口縁部が微隆線で区画される。微隆線脇には沈線が引かれ、胴部文様と連結する。13・14 は細い沈線が用いられる。16 は目の細かい縄文が施されており、称名寺式の可能性もある。17 は屈曲部で口縁部が区画され、胴部には縄文のみが施される。18 は縄文のみが施される。19・20 ～ 23 は深鉢に付される橋状把手である。 4 ・24 ～ 27 は鉢形土器である。 4 ・11 は加曽利ＥⅤ式の可能性がある。微隆線上にも縄文が認められる。 4 は文様構成がやや崩れた様相である。25･26 は鉢形土器に付される橋状把手である。26 は大部分が欠損している。27 は微隆線脇がナデられる。28 は瓢形土器等に着く橋状把手であり、わずかに赤彩の痕跡がある。

住居跡の時期は加曽利ＥⅣ式期と考えられる。土器以外では、覆土中から黒曜石の剥片・砕片類が多量に出土している (第 83 図下)。分布の中心は、土器の少ない炉の東側と南壁付近にあるが、レベルは床面より低い部分から検出面にまで拡散している。石鏃 1 点 (第 291 図 37)、同未成品 7 点 (付表 3 - 5 -66 ～ 72)、石核 1 点 (付表 3 - 5 -99)、剥片類 1840 点・146 g (加工剥片 3 点・剥片 351 点・砕片 1486 点) であり、石材はわずかな例外を除いて黒曜石である。石鏃製作に伴うものが覆土中にまとめて廃棄されたものと推定される。そのほかに打製石斧 1 点 (第 285 図 34)、砥石 1 点 (第 288 図 23)、石棒 1 点 (付表 3 - 3 -43) が出土している。

J-19(第 87・88 図・図版 15)

旧モ -14- 2 住。5.2 × 4.8 mほどの楕円形を呈す。0.1 mの掘り込みを有す。H -17(古代住居跡)・D -136(土坑) と重複する。柱穴は深さ 0.5 mの P1 ～ 20 がある。炉は中央に位置し、覆土に焼土・炭化粒を含んでいた。住居跡出土土器は 1 ～ 6 である。 1 ～ 3 ・ 5 は炉の北側から出土している。

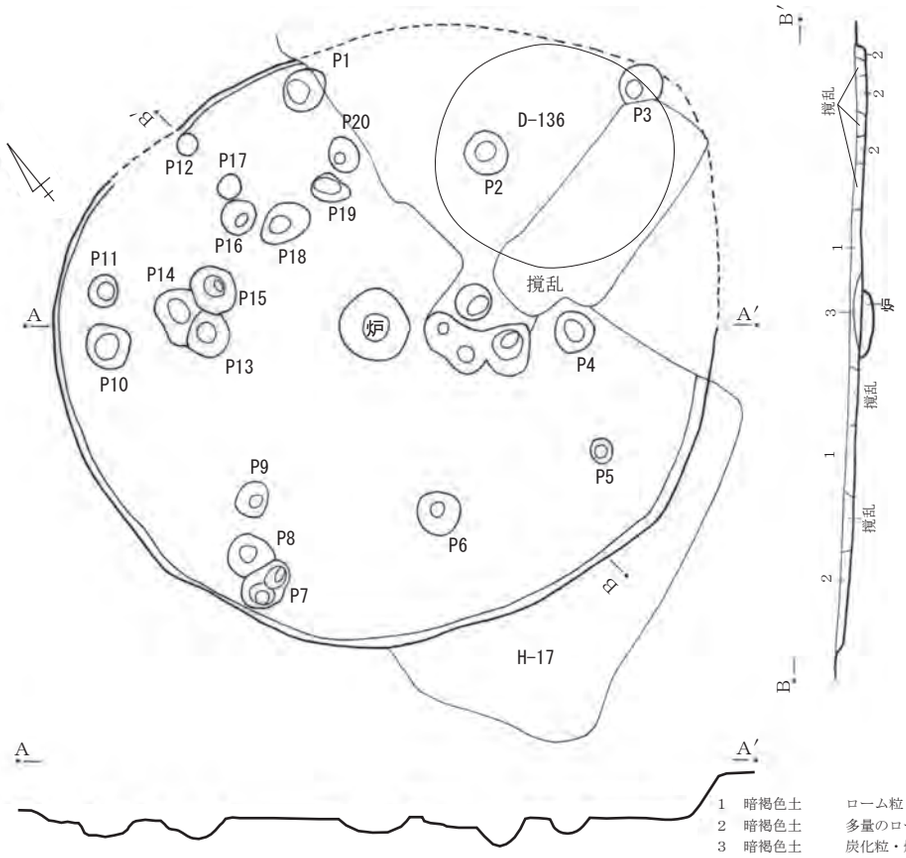
1 ～ 4 は加曽利ＥⅡ式である。 1 は口縁部に隆線で渦巻文と楕円区画が施され、胴部に「対向Ｕ字文」と帯縄文が施される。 2 は加曽利ＥⅡ式に並行する連弧文土器である。口縁部には列点が施され、胴部には沈線で連弧文が施される。胴下部は「逆Ｕ字状文」が認められる。沈線間は磨り消される。 3 ・ 4 は磨消縄文が認められる。 5 は中期中葉の浅鉢と考えられる。外反し屈曲する器形で、内面に稜をもつ。 6 は加曽利Ｅ式と考えられる。底部付近の破片で縄文のみが認められる。住居跡の時期は加曽利ＥⅡ式期と考えられる。

J-20(第 87・88 図・図版 15)

旧モ -27- 1 住。3.5 × 3.1 m、深さ 0.2 mの不整楕円形の掘り込みとピットから竪穴住居と推定したものだが、明確な遺構とは言えない。柱穴は深さ 0.4 ～ 0.6 mの P1 ～ P6 が不規則に位置する。炉はない。土層の内容が不明である。住居跡出土土器は 1 であり、東側床面から出土している。確認面上出土は 2 である。

1 は加曽利ＥⅠ式と考えられる。背割隆線による文様と、頸部の無文帯と考えられる部分が認められる。

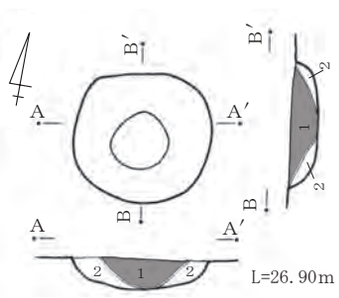
Ｊ－19



L=27.30m

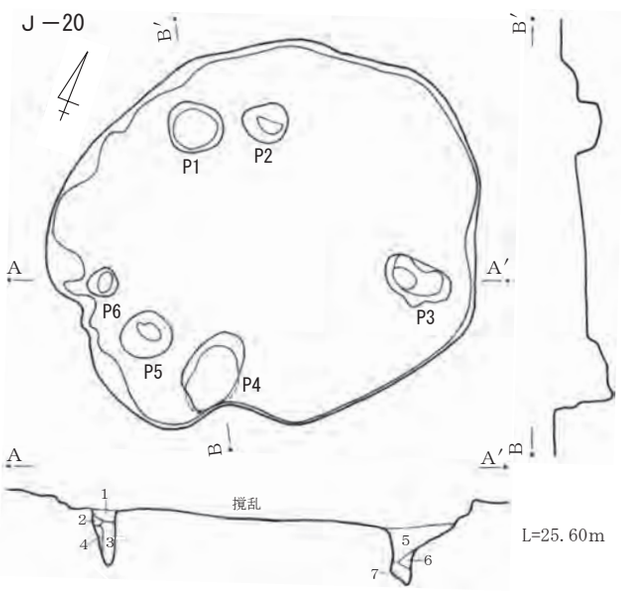
1　暗褐色土　　ローム粒・炭化粒・焼土粒を含む
2　暗褐色土　　多量のローム粒を含み炭化粒・焼土粒を含む
3　暗褐色土　　炭化粒・焼土粒を多く含んでいる
4　褐色土
5　暗褐色土
6　暗褐色土
7　暗褐色土　　ロームブロックを含む

Ｊ－19炉



1　暗褐色土　　焼土ブロック・焼土粒を多く含む
2　暗褐色土　　焼土ブロック・焼土粒・炭化粒を多く含む

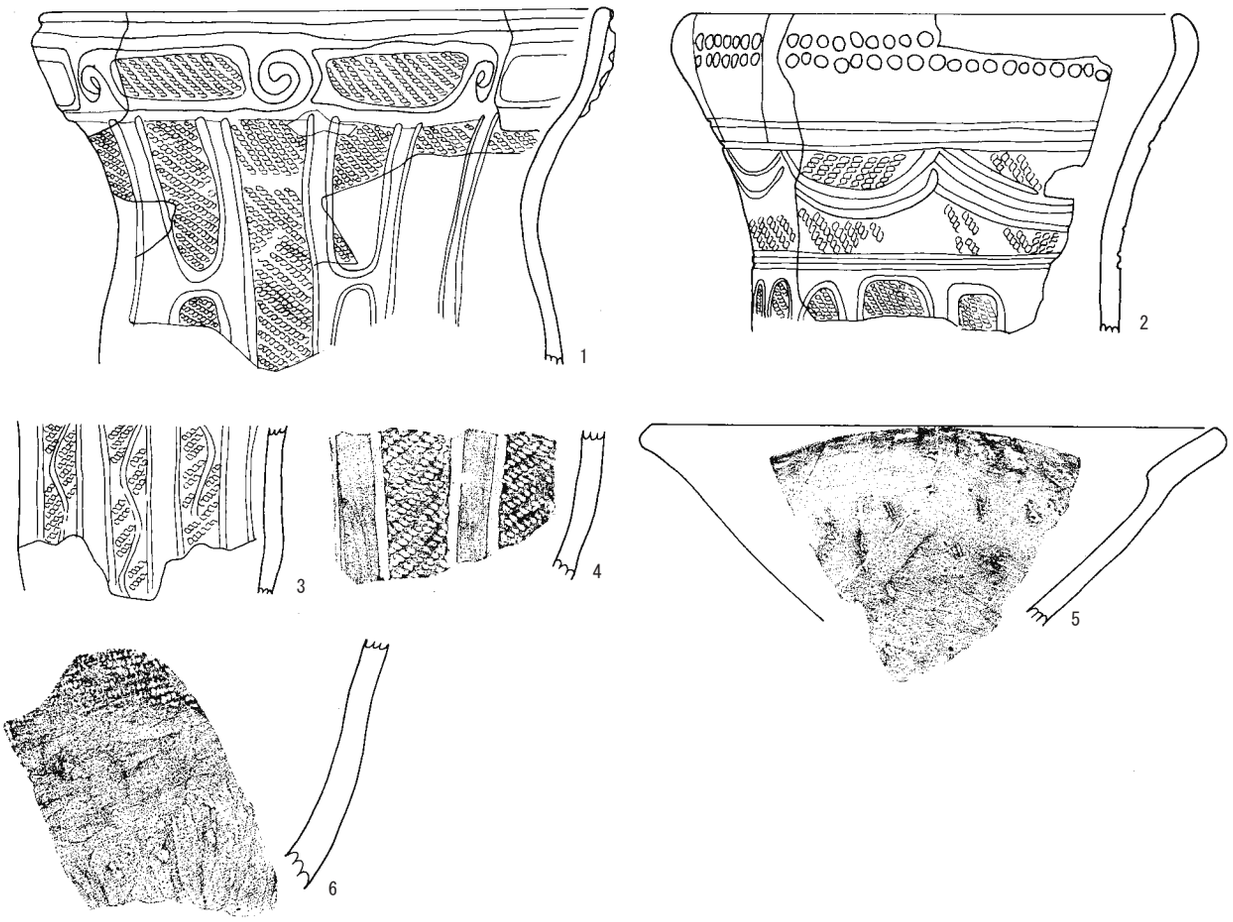
Ｊ－20



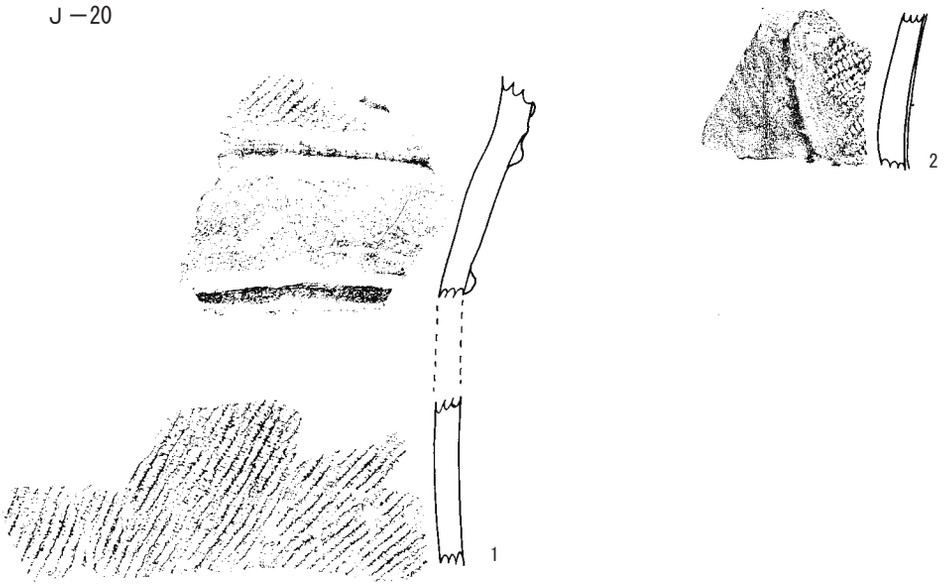
1　褐色土　　ローム粒を含む
2　褐色土　　ロームブロックを含む
3　黒褐色土　　褐色土を斑紋状に少量含みロームブロックを含んでいる
4　褐色土　　黒色土を斑紋状に含む
5　暗褐色土　　ローム粒とロームブロックを少量含む
6　黄褐色土　　ロームブロックが集中
7　暗褐色土　　黒色土粒を少量含む

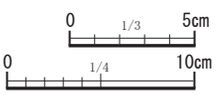
第87図　Ｊ-19(1)・Ｊ-20(1)

J－19

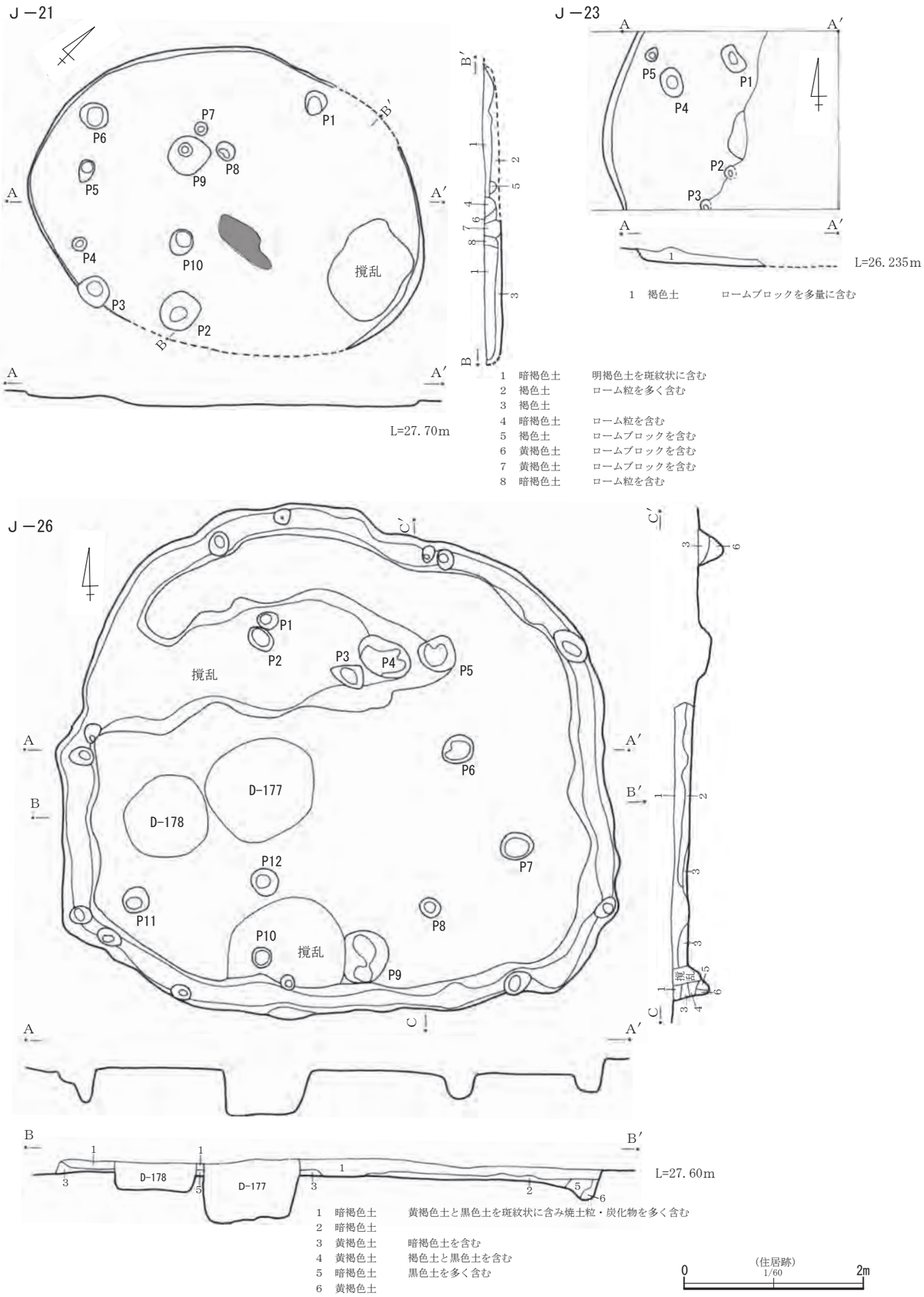


J－20





第88図　J -19(2)・J -20(2)



第89図　J-21・J-23・J-26(1)

隆線脇は沈線またはナデで調整される。２は加曽利Ｅ式終末の土器である。微隆線と縄文で文様が施され､微隆線脇がナデられる。住居跡の時期は加曽利ＥⅠ式期と考えられる。土器以外では磨製石斧１点 (第 282 図 16) が出土している。

J-21(第 89 図)

旧ユ - 7 - 1 住。4.4 × 3.4 ｍの楕円形を呈す。0.2 ｍの掘り込みを有す。柱穴は深さ 0.3 ｍの P1 ～ P10 が不規則に位置する。炉は明確でないが、中央南寄りに掘り込みをもたない焼土の分布がみられた。掲載可能な遺物はなく、縄文時代 (詳細不明) の住居跡としておく。

J-22(第 90 図・図版 15)

旧ユ -22- 1 住。壁柱穴の並びから 6.6 × 4.8 ｍの不整楕円形が想定される。掘り込みを有さない。Ｄ -154(小竪穴)、D-157(土坑) と重複し、D-154 より当遺構が新しい。壁溝は南側半分のみ遺存するが全周していたものと思われ、壁柱穴 14 本がある。柱穴は深さ 0.3 ～ 0.6 ｍの P7・P9・P15・P19 の他、16 本がある。炉は中央に位置しＤ -154 の覆土を切って構築されている。住居跡出土土器は１であり、P19 から出土している。１は縄文のみが施されるもので、加曽利Ｅ式と考えられる。住居跡の時期は加曽利Ｅ式？としておく。

J-23(第 89 図)

旧ユ -25- 1 住。0.1 ｍの掘り込みを有す。柱穴は深さ 0.3 ｍの P1 ～ P5 がある。炉は西側のみ残存。掲載可能な遺物はなく、縄文時代 (細別不明) の住居跡としておく。

J-24(第 91・92 図・図版 15)

旧ユ -26- 1 住。3.1 × (1.0) ｍの略方形で掘り込みの有無の判断が難しい。柱穴は、深さ 0.3 ｍの壁柱穴 10 本が円形に廻る。炉はなく、住居跡としてよいか疑問がある。竪穴出土土器は１～４である。３・４は底面から出土している。１は早期後葉の条痕文系土器で茅山上層式と考えられる。口唇部に刻みを持ち、内外面に条痕が施される。胎土には繊維が含まれる。２は阿玉台式前半の可能性がある。胴部に刻み目が認められる。３は鉢形土器で隆線と沈線が施される。４は底部で、胎土や焼成から中期のものと考えられる。住居跡の時期は中期後葉？としておく。

J-25(第 91・92 図・図版 15)

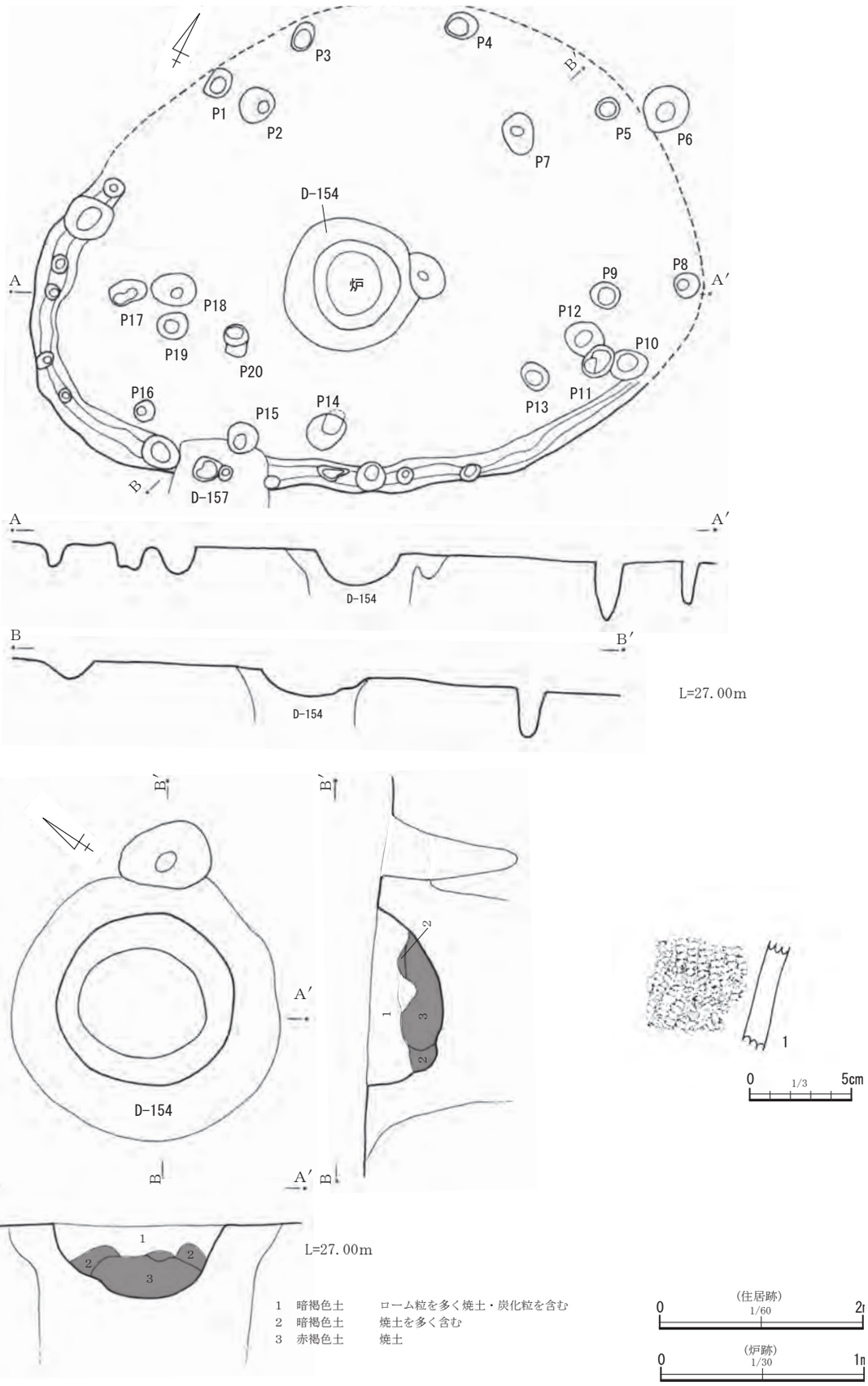
旧ヨ -13- 1 住。5.8 × 5.5 ｍの円形を呈する。0.3 ｍの掘り込みを有す。Ｄ -161(土坑) と重複し当遺構が新しい。壁溝が全周し、壁柱穴 16 本がある。柱穴は深さ 0.3 ～ 0.5 ｍの P1 ～ P5・P8 が亀甲形に位置するほか、細い柱穴が２本ある。炉は中央に位置し、Ｄ -161 の覆土内に掘り込まれている。住居跡出土土器は１・２である。確認面上出土は３である。

１・２は加曽利ＥⅢ式である。１は縄文を地文とし、沈線で「逆Ｕ字状文」が施される。２は加曽利Ｅ式終末の土器で櫛歯状工具による条線が引かれる。住居跡の時期は加曽利ＥⅢ式期と考えられる。土器以外では剥片類６点が出土している。

J-26(第 89・92 図・図版 15・42・45)

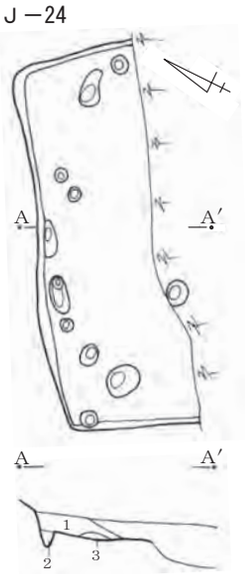
旧ヨ -19- 1 住。6.1 × 5.6 ｍの不整楕円形を呈する。掘り込みの有無の判断が難しい。Ｄ -177・178(小竪穴) と重複し、当遺構が古い。壁溝が全周し壁柱穴 13 本を伴う。柱穴は深さ 0.3 ～ 0.7 ｍの P1 ～ 12 が不規則に位置する。炉は撹乱により消失したとみられる。住居跡出土土器は１・２・７～９・11 である。確認面上出土は３～６・10 である。

１～ 11 は称名寺式土器である。１は称名寺式第３段階の土器である。帯縄文でＪ字文が施される。Ｊ字文はやや変形し、副文様が付されている。２～ 10 は称名寺式古段階の土器である。太くやや深い沈線


P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
P12
P13
P14
P15
P16
P17
P18
P19
P20
D-154
炉
D-157
A
A′
B
B′
L=27.00m
1 暗褐色土 ローム粒を多く焼土・炭化粒を含む
2 暗褐色土 焼土を多く含む
3 赤褐色土 焼土
0 1/3 5cm
(住居跡) 1/60
(炉跡) 1/30

第90図　J -22

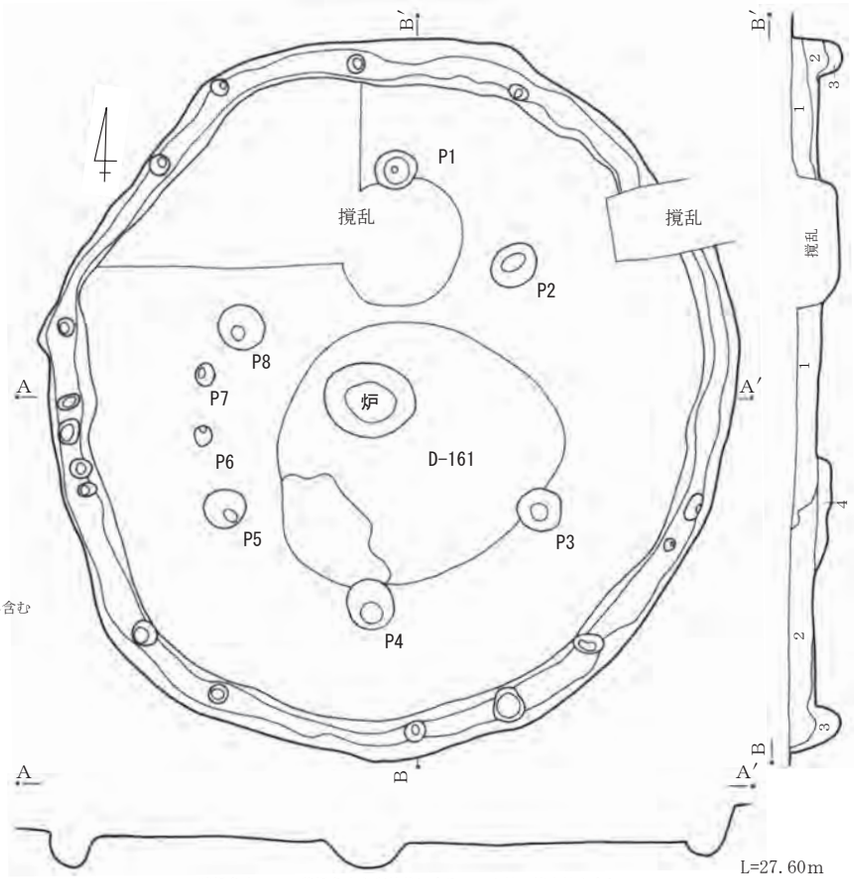
J－24



L=25.00m

1　暗褐色土　　ロームブロック・黄褐色土を少し含む
2　明褐色土　　ローム粒を多く含む
3　暗褐色土　　ロームブロックを多く含む

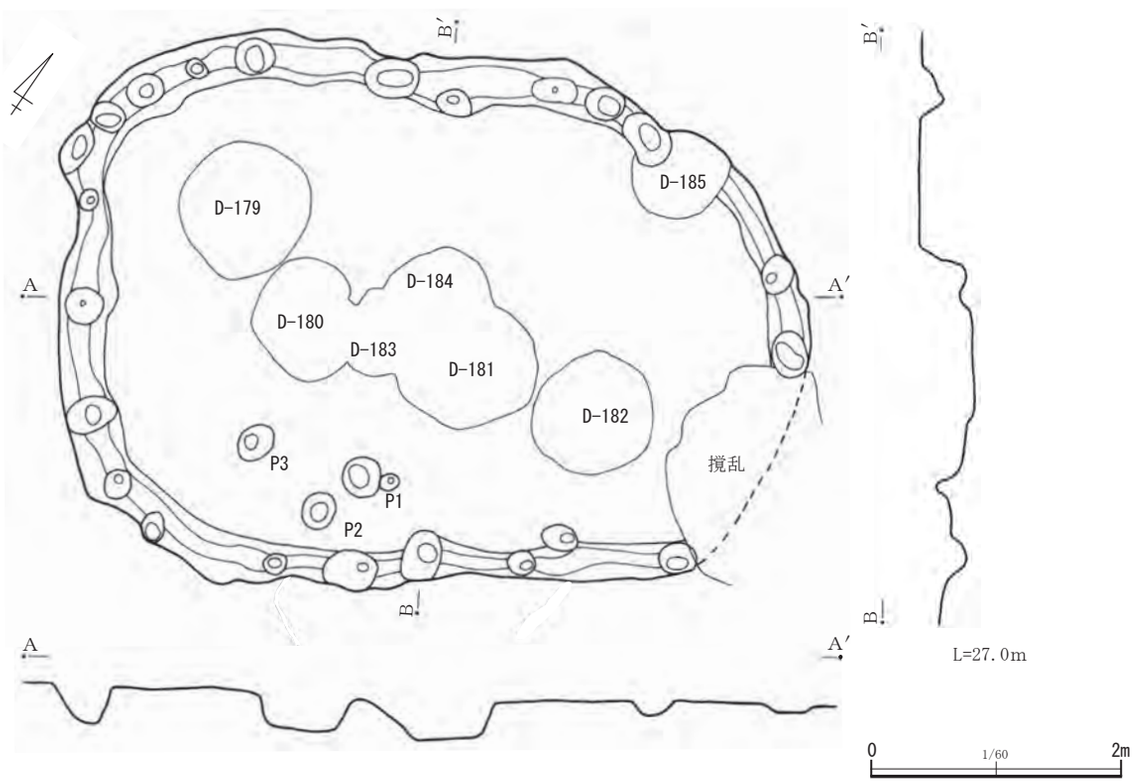
J－25



L=27.60m

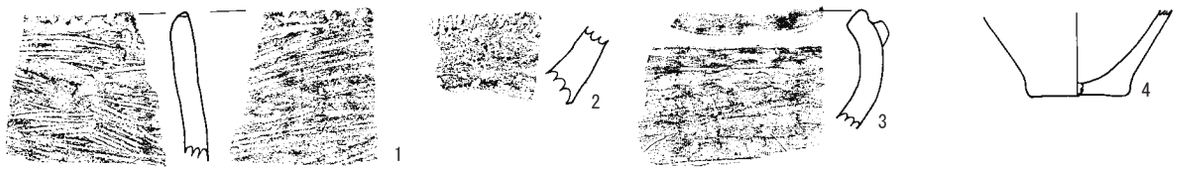
1　暗褐色土　　黄褐色土を斑紋状に含みローム粒・焼土粒を含む
2　暗褐色土　　黄褐色土を斑紋状に含む
3　暗褐色土
4　暗褐色土　　ローム粒とロームブロックを含む

J－27

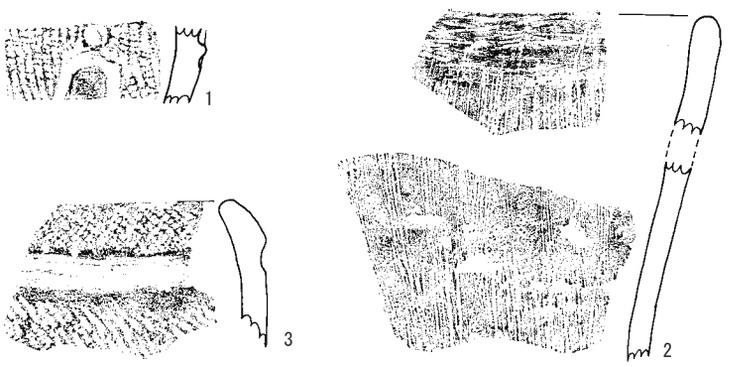


第91図　J-24(1)・J-25(1)・J-27(1)

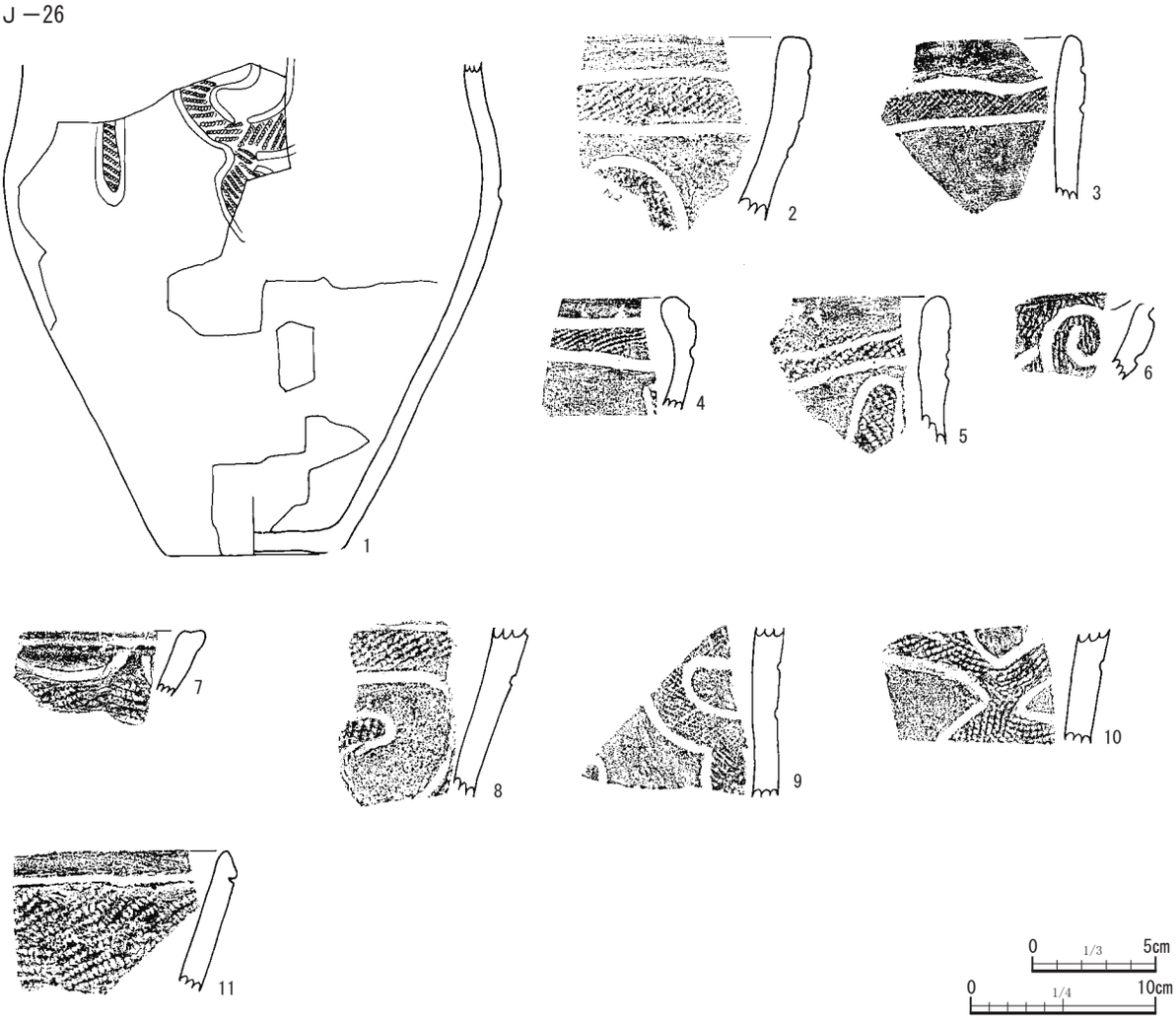
J－24



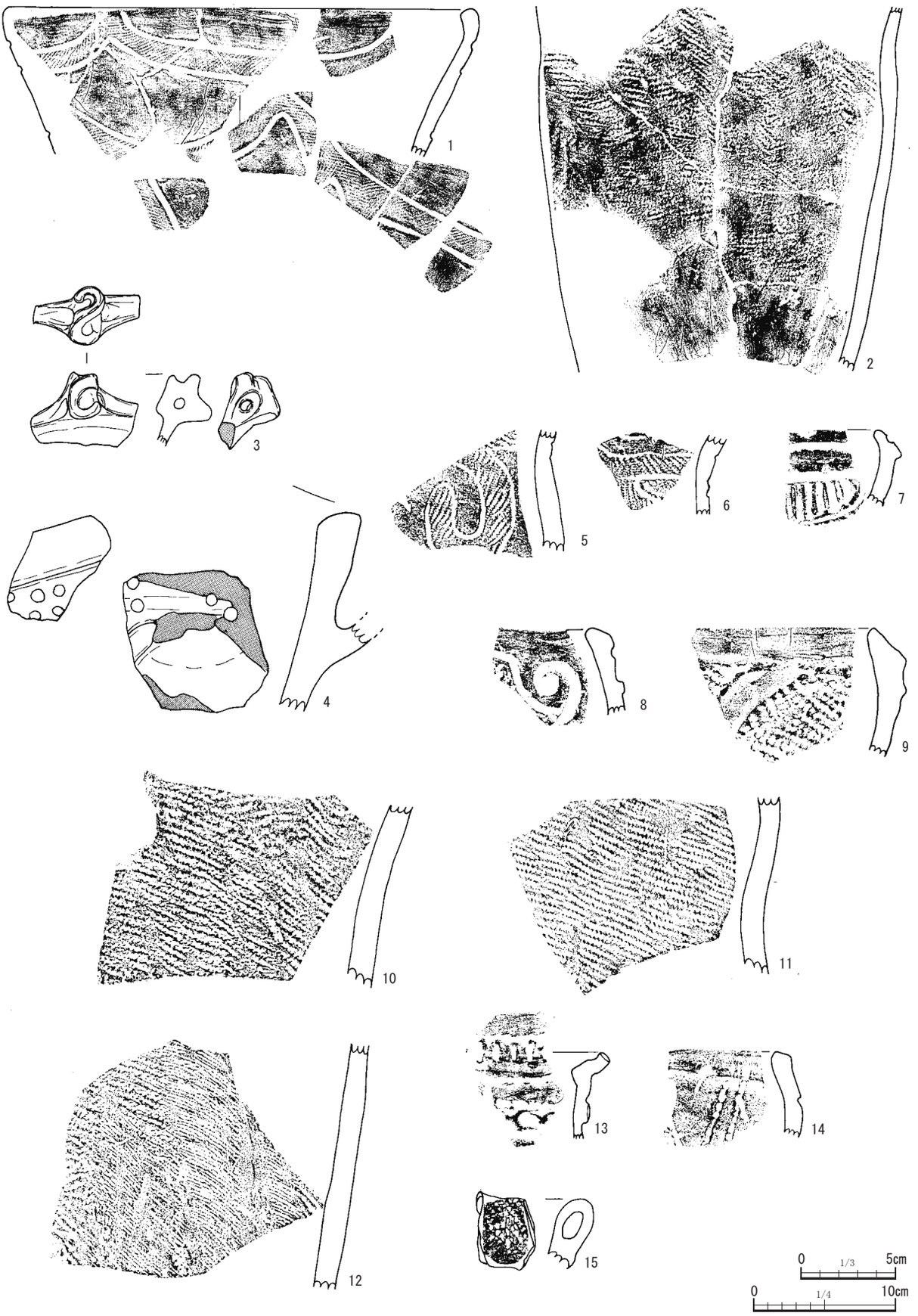
J－25



J－26



第92図　J -24(2)・J -25(2)・J -26(2)



第93図　J -27(2)

と帯縄文で文様が施される。６は器壁が薄く、帯縄文が未発達であることから、称名寺式第１段階のものと考えられる。11 は加曽利Ｅ式終末の土器と考えられる。口縁直下に細く浅い沈線が引かれ区画される。

住居跡の時期は称名寺Ⅰ式期 (第３段階) と考えられる。土器以外では土器片錘２点 (第 279 図 11・12)、剥片類３点が出土している。

J-27(第 91・93 図・図版 15・42・45)

旧ヨ -20- １住。6.0 × 4.2 ｍの楕円形を呈する。掘り込みを有さない。Ｄ -179 ～ 181・185(小竪穴)、D-182 ～ 184(土坑) と重複する。壁溝が全周し、壁柱穴 23 本を伴う。柱穴は径 0.3 ｍ・深さ 0.2 ｍの３本 (P1 ～３) が南側にある。炉は土坑に切られて失われたものとみられる。住居跡出土が確実な土器はない。確認面上出土は１～ 15 である。

１～６は称名寺式土器である。１は称名寺式第３段階の土器である。帯縄文が弧状に施される。２は称名寺式に伴う粗製土器と考えられる。縄文が間隔を開けて施文される。３は称名寺Ⅰ式後半の可能性がある。口縁部に小さな８の字状の突起が施される。４は称名寺式の関沢類型で、微隆線脇に列点と口縁部に把手が付される。５・６は帯縄文で文様が構成される称名寺式古段階の土器である。６は帯縄文がやや乱れている。７は加曽利ＥⅠ式と考えられる。口縁部の区画内に集合沈線が充填される。８は加曽利ＥⅡ式と考えられる。口縁部に隆線で渦巻文が施される。９～ 12 は加曽利Ｅ式終末の土器である。９は加曽利ＥⅤ式の可能性がある。胴部の「逆Ｕ字状文」が口縁部区画に貫入する文様構成で、微隆線上にも縄文が認められる。13・14 は阿玉台Ⅰｂ式である。隆線脇や口縁部に単列の角押文が施される。住居跡の時期は称名寺Ⅰ式期 (第３段階) と考えられる。

J-28(第 94・95 図・図版 15)

旧ヨ -21- １住。掘り込みを有さない。Ｄ -433(土坑) と重複する。柱穴は深さ 0.4 ～ 0.5 ｍの P1 ～ P9 がある。炉は中央に位置し、焼土を多く含む層がある。住居跡出土土器は１・２である。２は炉内から出土している。

１・２は加曽利Ｅ式終末の土器である。１は口縁部が微隆線で区画され、胴部には沈線と縄文で文様が施される。２は微隆線と縄文で文様が施される。微隆線上にも縄文が認められる。住居跡の時期は加曽利Ｅ式終末と推測される。土器以外では蓋１点 (第 278 図 1)、磨石類１点 (第 287 図 85) が出土している。

J-29(第 95・96 図)

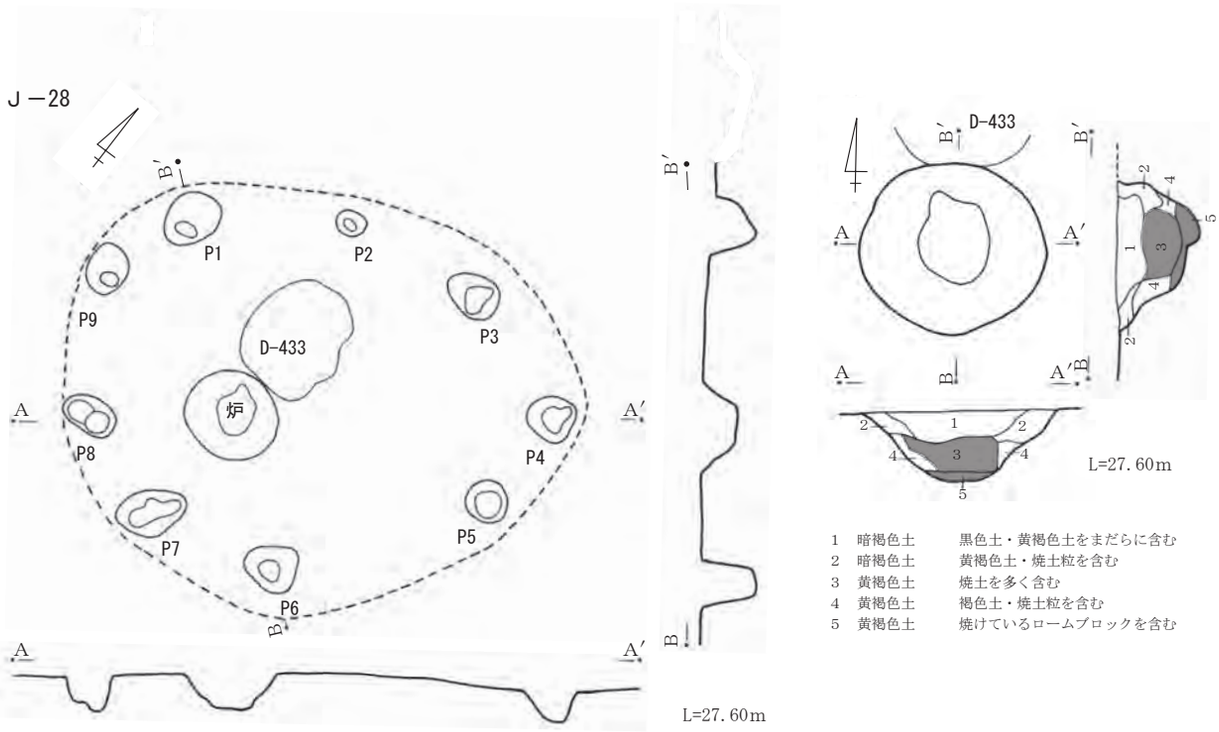
旧ヨ -24- １住。掘り込みを有さない。炉の検出により竪穴住居跡と判断したものである。土層の内容が不明である。確実に住居跡に伴う遺物はない。１～６は確認面上出土である。

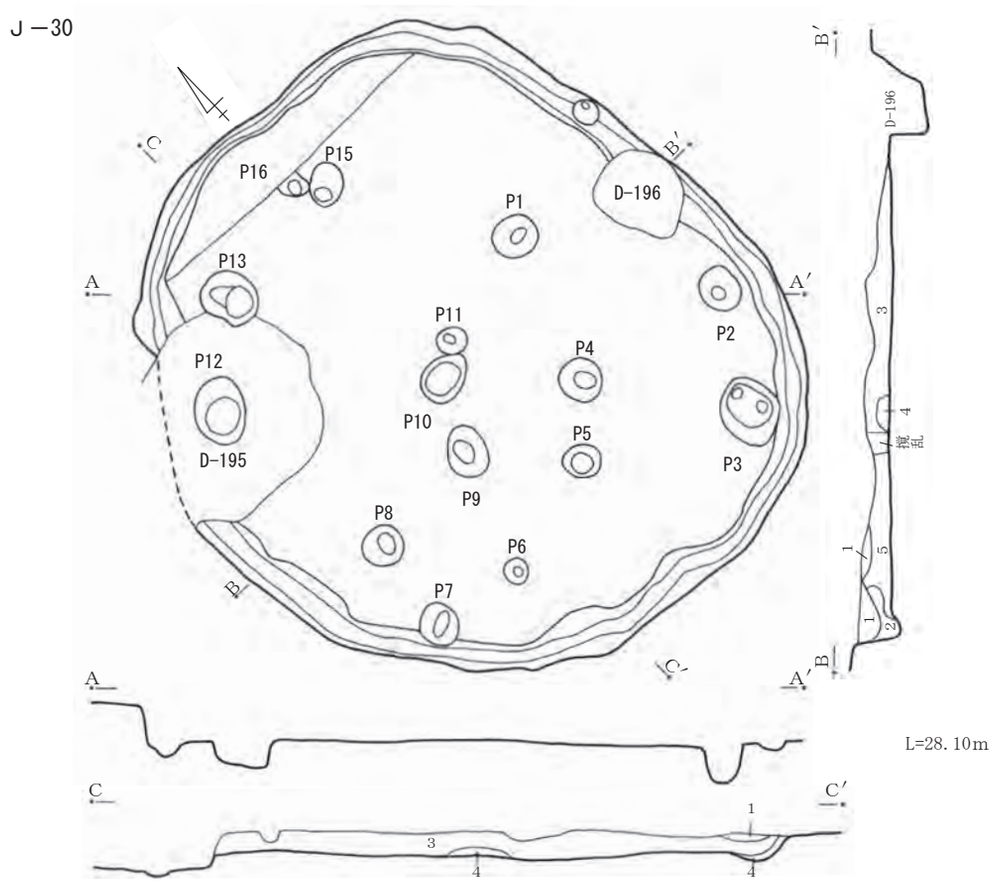
１～４は加曽利Ｅ式終末の土器である。１は加曽利ＥⅤ式の可能性がある。微隆線と縄文が施される。微隆線上にも縄文が認められる。２・３は口縁部が微隆線で区画され、胴部には縄文のみが認められる。４は微隆線と縄文が施される。隆線上にも縄文が認められる。５は称名寺式の関沢類型と考えられる。波状口縁で、波頂部に円形の貼付文と口縁直下に微隆線が貼り付けられる。微隆線脇には列点が施される。胴部には屈曲する沈線が引かれる。住居跡の時期は加曽利ＥⅤ式期の可能性がある。

J-30(第 94・95 図)

旧ラ -14- ４住。5.4 × 4.7 の楕円形を呈す。0.3 ｍの掘り込みを有す。Ｄ -195(土坑)、D-196(ピット) と重複する。壁溝が全周し、壁柱穴１本を伴う。柱穴は深さ 0.1 ～ 0.3 ｍの P1 ～ P16 が不規則に位置する。住居跡出土土器は３・５～７・９・11 である。確認面上出土は１・２・４・８・10 である。

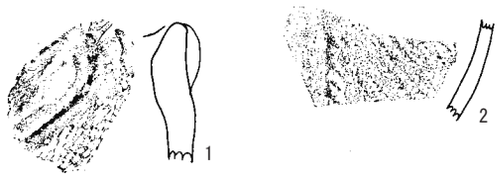
１～９は加曽利Ｅ式終末の土器である。１は沈線と縄文が施される。２・３は加曽利ＥⅣ式と考えられる。器形は口縁部が内弯し、キャリパー形である。口縁部は微隆線で区画され、胴部は微隆線と縄文で



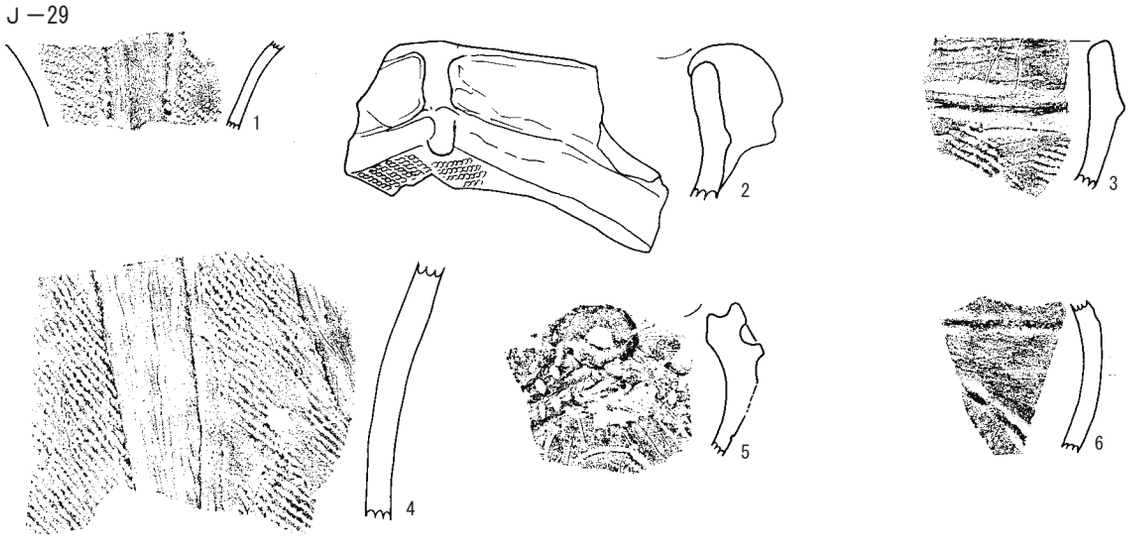


第 94 図　J -28(1)・J -30(1)

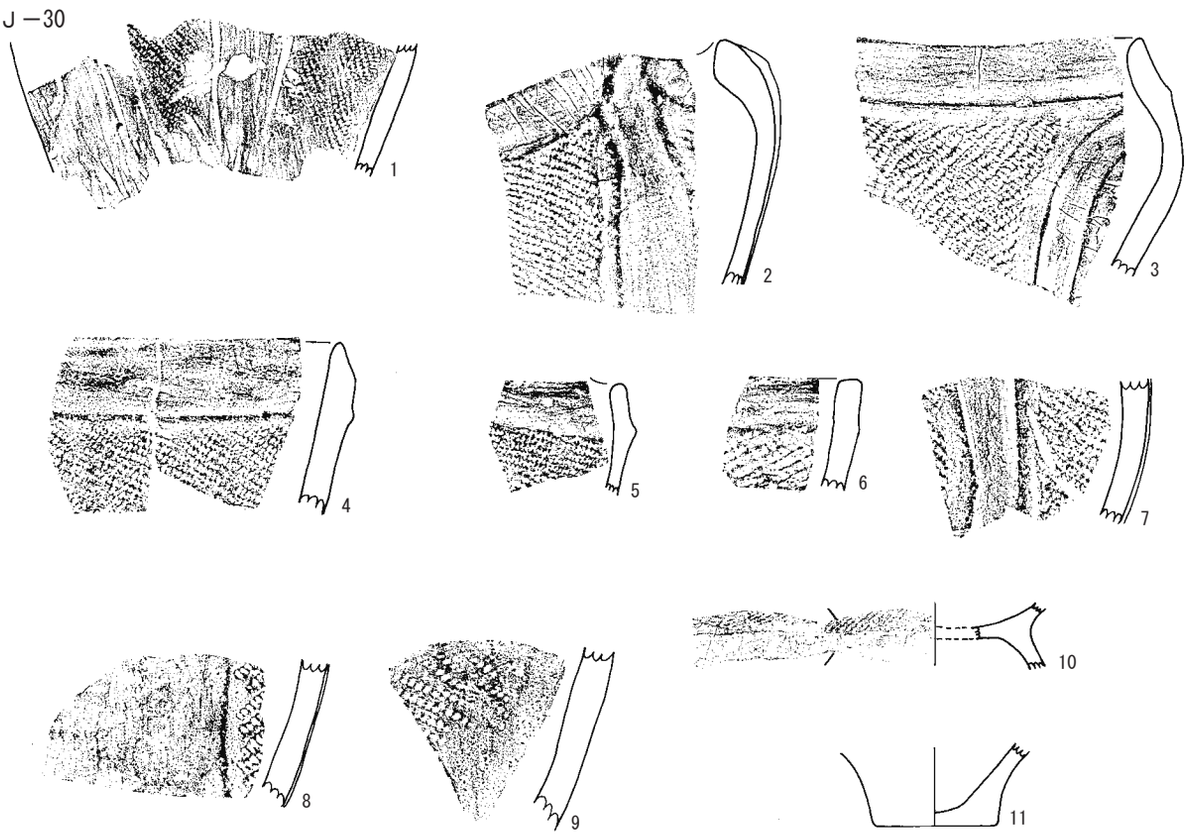
J－28

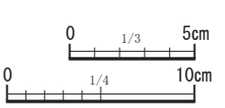


J－29



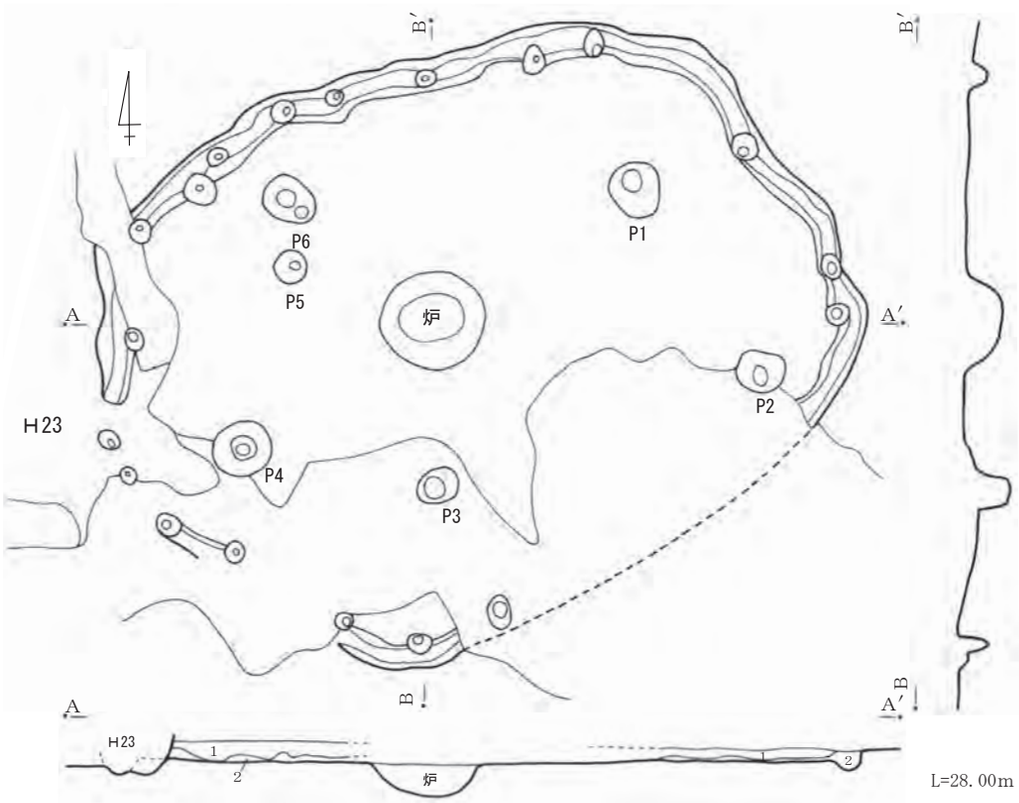
J－30



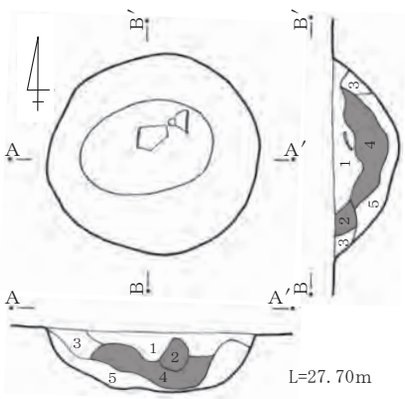


第 95 図　J -28(2)・J -29(1)・J -30(2)

J－31

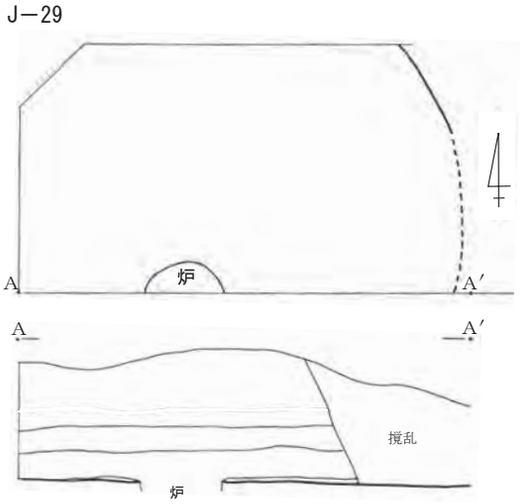


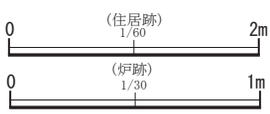
1　黒褐色土　　黄褐色粒を多く含む
2　暗褐色土　　黒色土を含む



1　暗褐色土　　黒色土を斑状に含み焼土粒子を含む
2　暗褐色土　　焼土粒子を多量に含む
3　褐色土　　黄褐色土・暗褐色土をまだらに含む
4　赤褐色土　　焼土
5　にぶい褐色土　焼土粒子をわずかに含む

J－29

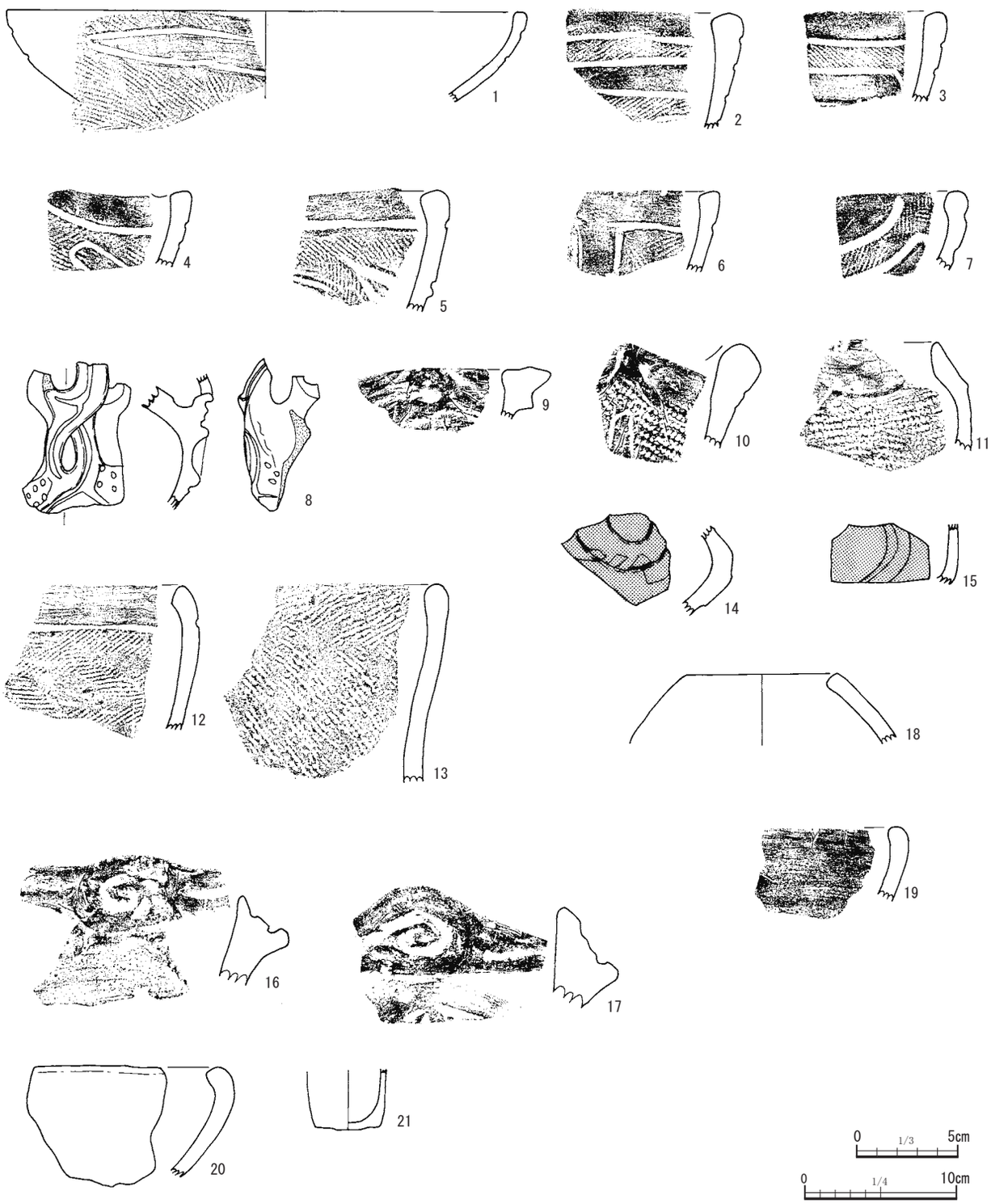




第96図　J -29(2)・J -31(1)

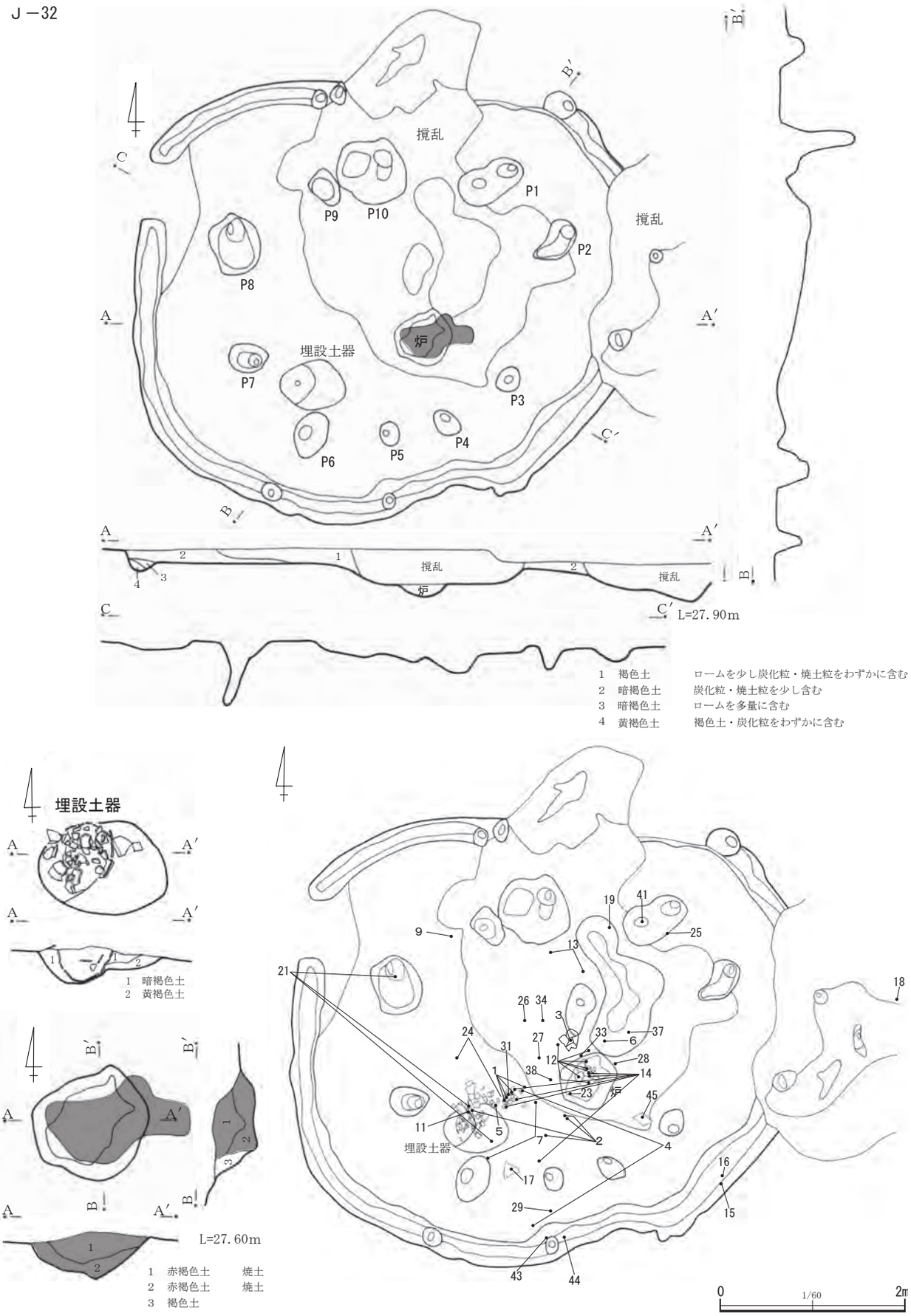
文様が構成される。微隆線脇はナデられる。４～６は口縁部が微隆線で区画され、胴部は縄文のみが施される。微隆線脇はナデられない。７・８は微隆線と縄文で文様が施される。微隆線脇はナデられる。８は無文部がかなり広いことから、加曽利ＥⅤ式の可能性がある。９は縄文のみが認められる。10 は加曽利ＥⅢ式の台付土器と考えられる。縄文が施される。11 は加曽利Ｅ式の底部と考えられ、無文である。

住居跡の時期は加曽利ＥⅣ式期と考えられる。上記の土器のほかに土器片錘２点 (第 279 図 13・14) が出土している。



第 97 図　Ｊ -31(2)

J－32



第98図　J -32(1)

J-31(第 96・97 図・図版 16・42)

旧ラ -19- ２住。5.8 × 4.5 mの楕円形を呈す。掘り込みの有無の判断が難しい。攪乱部分を除いて壁溝が全周し、壁柱穴 19 本を伴う。柱穴は P1 ～ P6 があり、P1・P3・P5 が深さ 0.4 ～ 0.6 mと深い。炉は中央に位置し、焼土が含まれている。住居跡出土土器は１・３・９・11・14・15・19・21 である。確認面上出土は２・４～８・10・12・13・16 ～ 18・20 である。

１～８は称名寺式土器である。１は称名寺式古段階の浅鉢である。縄文を地文とし、沈線が枠状に引かれる。２～７は称名寺式古段階の土器である。やや太い沈線による帯縄文で文様が施される。８は称名寺式の関沢類型で、８の字状の貼付文と列点が施される。９・10 は加曽利ＥⅢ式である。10 は突起が付され、沈線と縄文が施される。11 ～ 15 は加曽利Ｅ式終末である。11 は口縁部が微隆線で区画され、胴部には縄文のみが認められる。12 は口縁部が沈線で区画され、胴部に縄文のみが施される。13 は縄文のみであるが、口縁部付近が横方向、胴部は縦方向に施されている。14・15 は同一個体である。瓢形の土器で器壁が薄く、微隆線で文様が構成される。外面に赤彩が施される。16・17 は加曽利ＥⅠ式である。口縁部に突起が付され､沈線で渦巻文が引かれる。18 ～ 20 は無文の土器で､時期不明である。21 はミニチュア土器である。

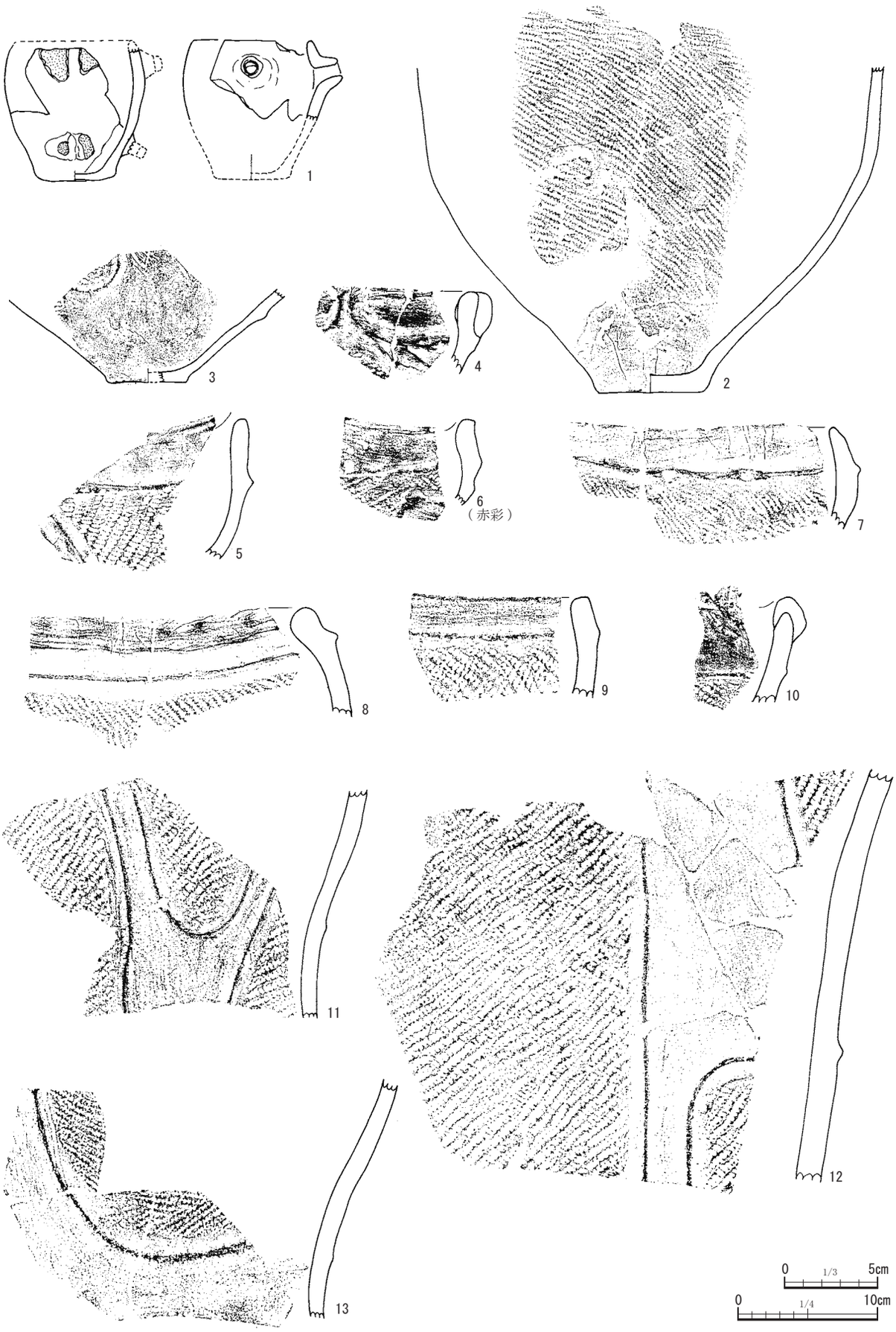
住居跡の時期は称名寺Ⅰ式期 (第３段階) と考えられる。土器以外では土器片錘１点 (第 279 図 15)、剥片類１点が出土している。

J-32(第 98 ～ 101 図・図版 16)

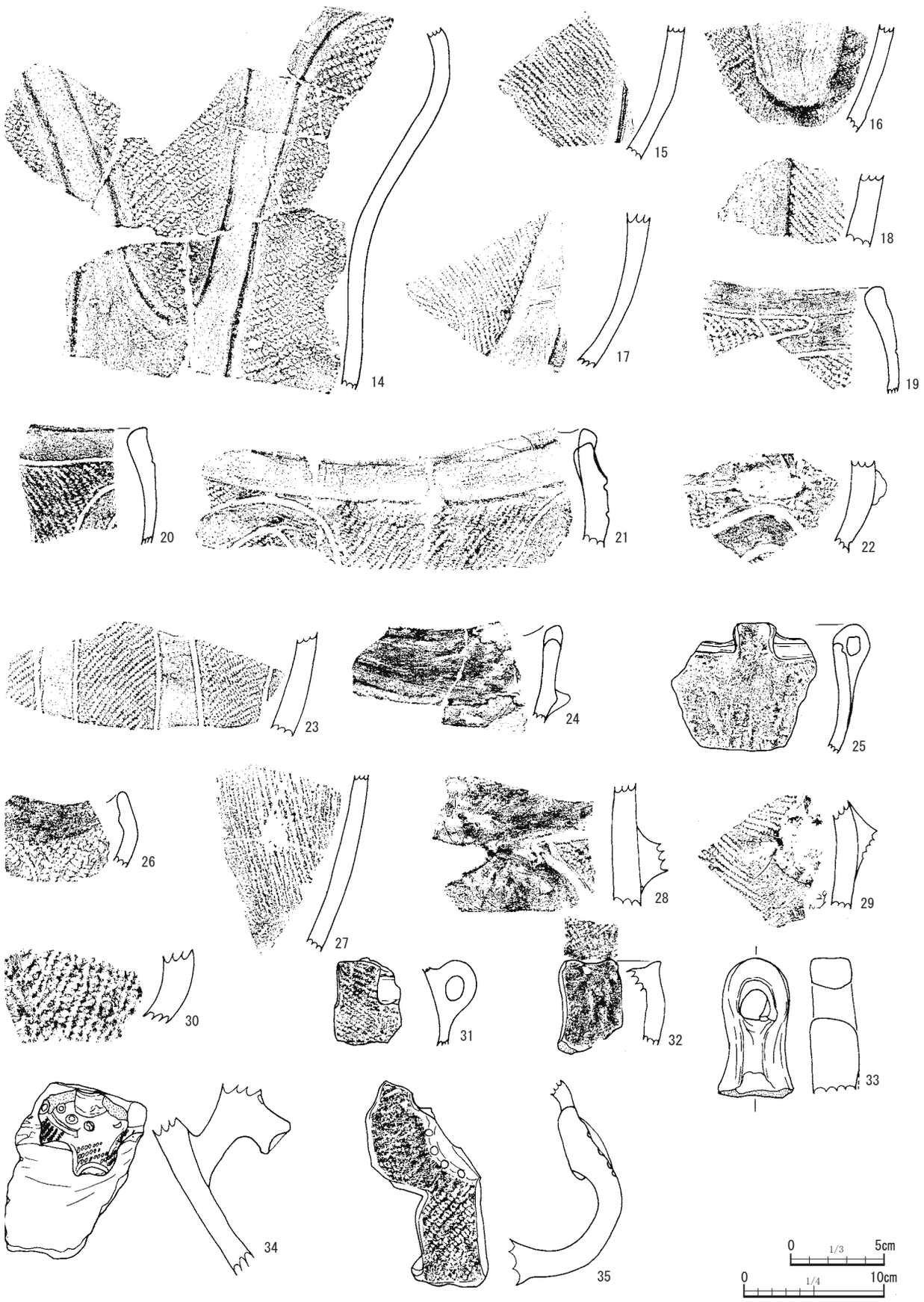
旧ラ -21- １住。5.6 × 4.8 mの楕円形を呈す。掘り込みの有無の判断が難しい。攪乱部分を除いて壁溝が全周し、壁柱穴７本を伴う。柱穴は深さ 0.4 ～ 0.8 mの P1 ～ P10 がある。P6 と P7 の間に埋設土器１基が存在する。炉は南東寄りに位置し、焼土が厚く堆積している。土器は埋設土器と炉の周辺から大破片が多数出土している。床面より上の覆土中が大半である。底部から胴部の大破片とみられる埋設土器は特定できなかったが、未掲載のものか２の可能性がある。埋設土器の掘り込みからは２と 21 の一部と 11 が出土している。出土位置を確認できたものは１～７・９・11 ～ 19・21・23 ～ 29・31・33・34・37・38・41・43 ～ 45 である。住居出土の可能性がある遺物は８・10・20・22・30・32・35・36・39・40・46 である。

１～ 35 は加曽利Ｅ式終末の土器である。１は加曽利Ｅ式の注口をもつ小形土器である。２は縄文のみが認められる。４～６は口縁部が微隆線で区画され、胴部には微隆線と縄文で文様が施されるものである。４は微隆線脇がナデられることから加曽利ＥⅣ式と考えられる。５・６は一部隆線上に縄文が認められる。６は内面に赤彩がされている。７～ 10 は口縁部が微隆線で区画され、胴部に縄文のみが認められるものである。いずれも微隆線脇はナデられる。３・11 ～ 18 は胴部破片で微隆線と縄文で文様が施される。３・11 ～ 15 は微隆線脇がナデられる。３・11・12・14 は文様構成の点からも加曽利ＥⅣ式と考えられる。16 ～ 18 は微隆線上にも縄文が認められる。19 ～ 23 は胴部に沈線と縄文で文様が施される。22 は把手部分が欠損する。24・25 は口縁部に把手が付されるものである。胴部文様は不明である。26 は屈曲部で口縁が区画され、胴部には縄文のみが施される。27 は櫛歯状工具で条線が引かれる。28・29 は鉢形土器である。いずれも把手部分を欠損する。28 は微隆線脇に沈線が引かれる。30 ～ 35 は把手である。30 ～ 32 は橋状把手である。33 は突起状の部分に円孔が施される。34・35 はやや大形の橋状把手と考えられ、把手に円孔と円形刺突、縄文が施される。加曽利ＥⅤ式の可能性がある。

36 は加曽利ＥⅠ式である。背割隆線と縄文で文様が構成される。37・38 は加曽利ＥⅢ式である。１本の微隆線と縄文で文様が構成される「意匠充填系土器群」と考えられる。39 はミニチュア土器である。

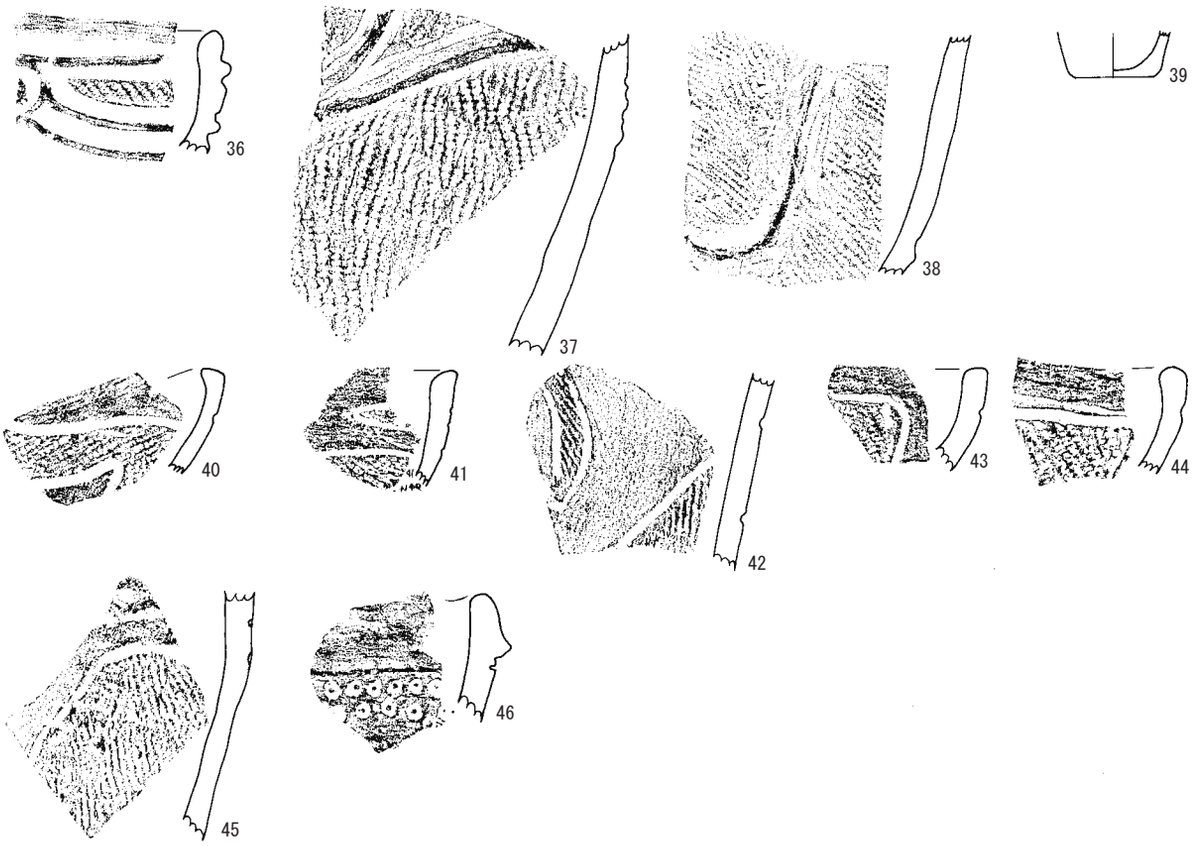


第99図　J -32(2)

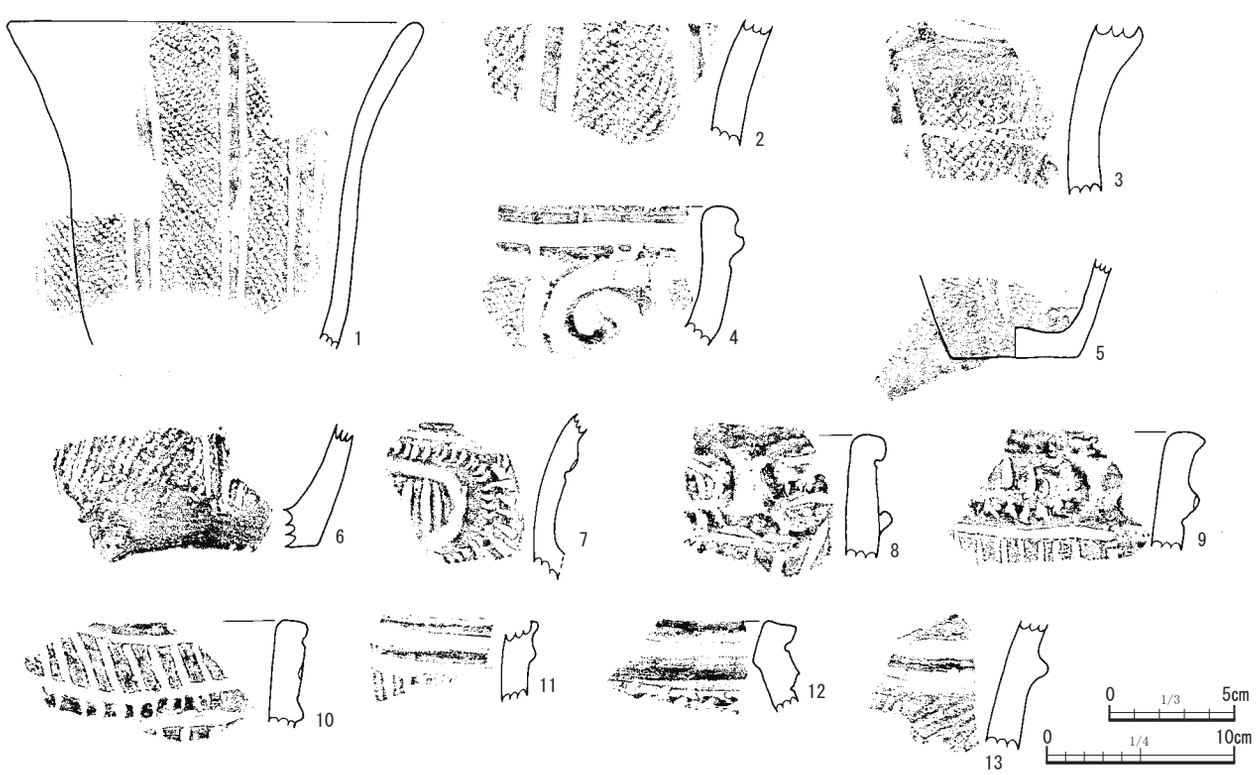

14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
0 1/3 5cm
0 1/4 10cm

第 100 図　J -32(3)

J－32



J－34



第 101 図　J -32(4)・J -34(1)

40 ～ 45 は称名寺式である。40 ～ 42 は帯縄文で文様が構成される。43 ～ 45 は縄文を地文とし、無文部分で文様が構成されるものである。46 は称名寺式の関沢類型である。微隆線脇に円形刺突が施される。

住居跡の時期は加曽利ＥⅣ式期と考えられる。土器以外では土器片錘１点 (第 279 図 16) が出土している。

J-33(第 102 図)

旧リ -11- １住。長径 6.0、短径は推定 5.0 ｍほどの楕円形を呈す。掘り込みを有さない。Ｄ -215(小竪穴)、D-192・193(土坑) と重複する。攪乱部分を除いて壁溝が全周し、壁柱穴６本を伴う。柱穴は深さ 0.4 ｍの P1 ～ P3 がある。中央の床面に 1.6 × 0.7 ｍの焼土分布がある。炉は検出していない。住居跡に確実に伴う掲載遺物はない。縄文時代 (細別不明) の住居跡としておく。

J-34(第 101・103・104 図・図版 16)

J-34 Ａ (旧リ -13- １住)・J-34 Ｂ (旧リ -13- １住) の重複する２軒の住居跡として調査されている。Ａの竪穴は 4.0 × 3.6 ｍの円形を呈す。Ｂの竪穴は 6.0 × 4.6 ｍの楕円形を呈し、0.4 ｍの掘り込みを有す。柱穴はＡの範囲に深さ 0.2 ～ 0.8 ｍの P1 ～Ｐ９が壁際に円形に廻る。炉は中央に位置し、炉体土器と土器片囲を伴う。Ｂの範囲では深さ 0.2 ～ 0.4 ｍの 10 本が壁際に円形に廻る。

現地での所見は、出土土器のほとんどは２層から出土していること、床面付近の７層からは礫１点のみでよく締まっていたこと、主柱穴は１軒分とみられ、炉に重複が見られないことを根拠として、Ａを掘り下げたのち、ほとんど使用しないうちに拡張を行い、７層を埋め戻してＢを構築したとしている。しかし、７層は貼床は検出されておらず、他の所見は建替えの根拠とはならない。２段の掘り込みをもつ１軒の住居跡の可能性も排除できないであろう。

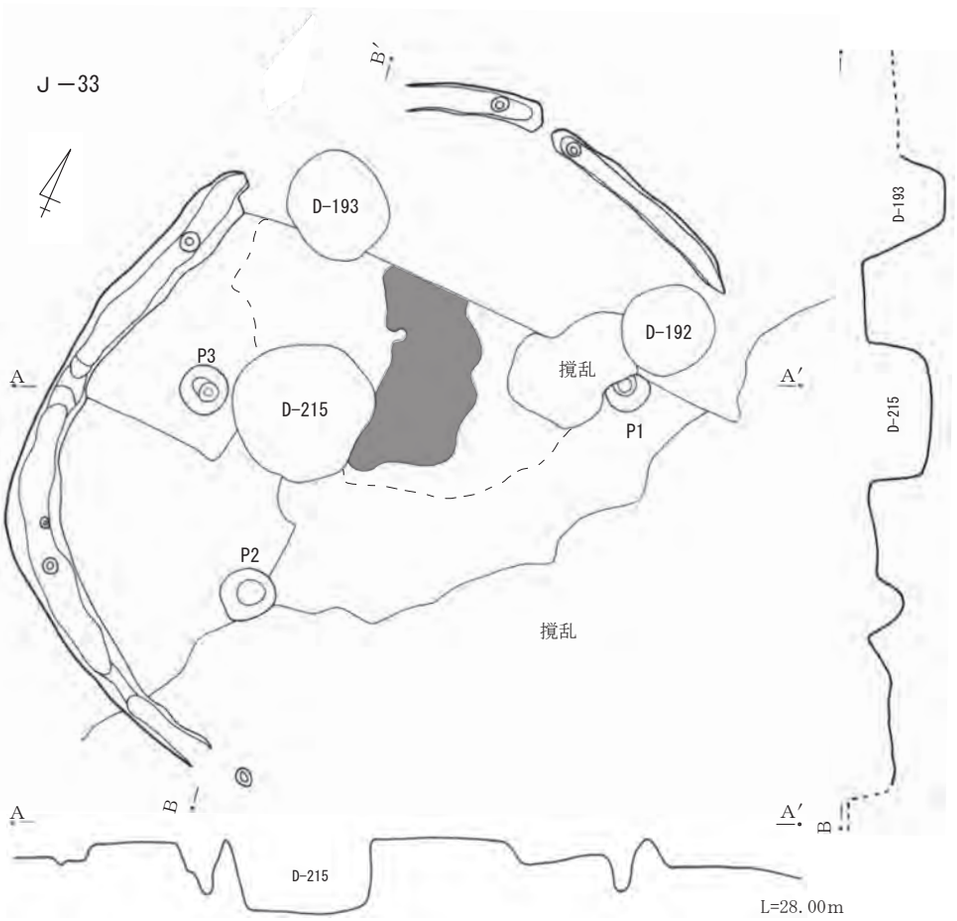
掲載土器のうち、炉囲土器の一部は３・16 であり、他は未掲載である。住居跡出土土器のうち、Ａの範囲出土は２・３・７・14・16 ～ 18・20・23・25、範囲外は 15 のみである。位置不明だが竪穴から出土したものは１・４である。確認面上出土は５・６・８～ 13・19・24 である。

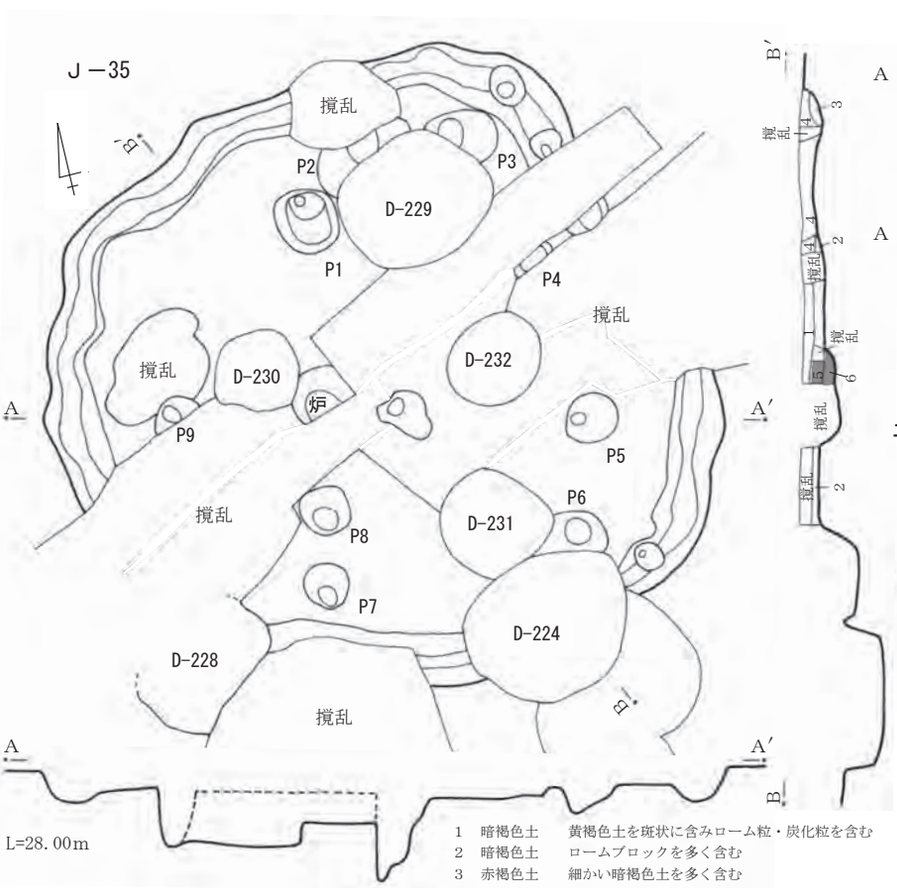
１～６は加曽利ＥⅡ式である。１～３・５・６は縄文を地文とし、沈線による懸垂文が引かれる。１～３は沈線間が磨消される。４は口縁部に隆線と沈線で渦巻文が施される。７は勝坂Ⅳ式である。隆線上に爪形の刻みが施される。８～ 10 は勝坂Ⅴ式と考えられる。隆線で区画され、隆線上に刻みが施される。区画内には集合沈線が認められる。11・12 は中期中葉末から後葉初頭の土器である。11 は背割隆線と集合沈線が認められる。12 は交互刺突文が施される。内面に稜を持つ。13・14 は加曽利ＥⅠ式である。隆線で区画され、縄文が施される。15 ～ 17 は加曽利ＥⅢ式である。隆線と縄文で文様が施される。隆線脇には沈線が引かれる。18 は加曽利Ｅ式と考えられる。隆線と縄文が認められる。19 ～ 23 は撚糸文のみが認められる。加曽利Ｅ式または連弧文土器と考えられる。24 は無文の底部で、中期のものと考えられる。25 は加曽利Ｅ式終末の土器である。微隆線と縄文で文様が施される。微隆線脇はナデられる。

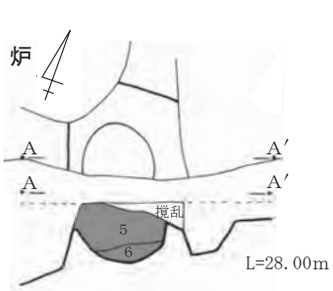
住居跡の時期はＡ・Ｂを区別せず加曽利ＥⅡ式期としておく。土器以外では磨製石斧２点 (第 281 図３・282 図 30)、磨石類２点 (第 282 図 66・88)、剥片類３点が出土している。磨製石斧は２点とも破片を再加工した小型定角式である。

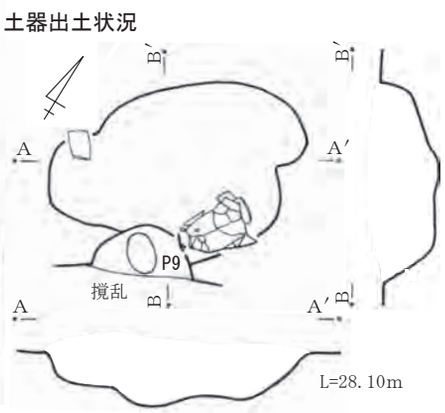
J-35(第 102・104 図・図版 16)

旧リ -14- １住。5.5 × 5.0 ｍの円形を呈す。0.2 ｍの掘り込みを有す。Ｄ -224・229(小竪穴)、D-231・232(土坑)、D-230(ピット) と重複し、当遺構が古い。攪乱部分を除くと壁溝が全周し、壁柱穴３本を伴う。柱穴は深さ 0.3 ～ 0.5 ｍの P1・P3・P6・P8) の他に浅いものが５本ある。炉は中央やや西寄りに位置し、焼土が厚く堆積する。確実な住居跡出土の掲載土器は２のみである。確認面上出土は１である。



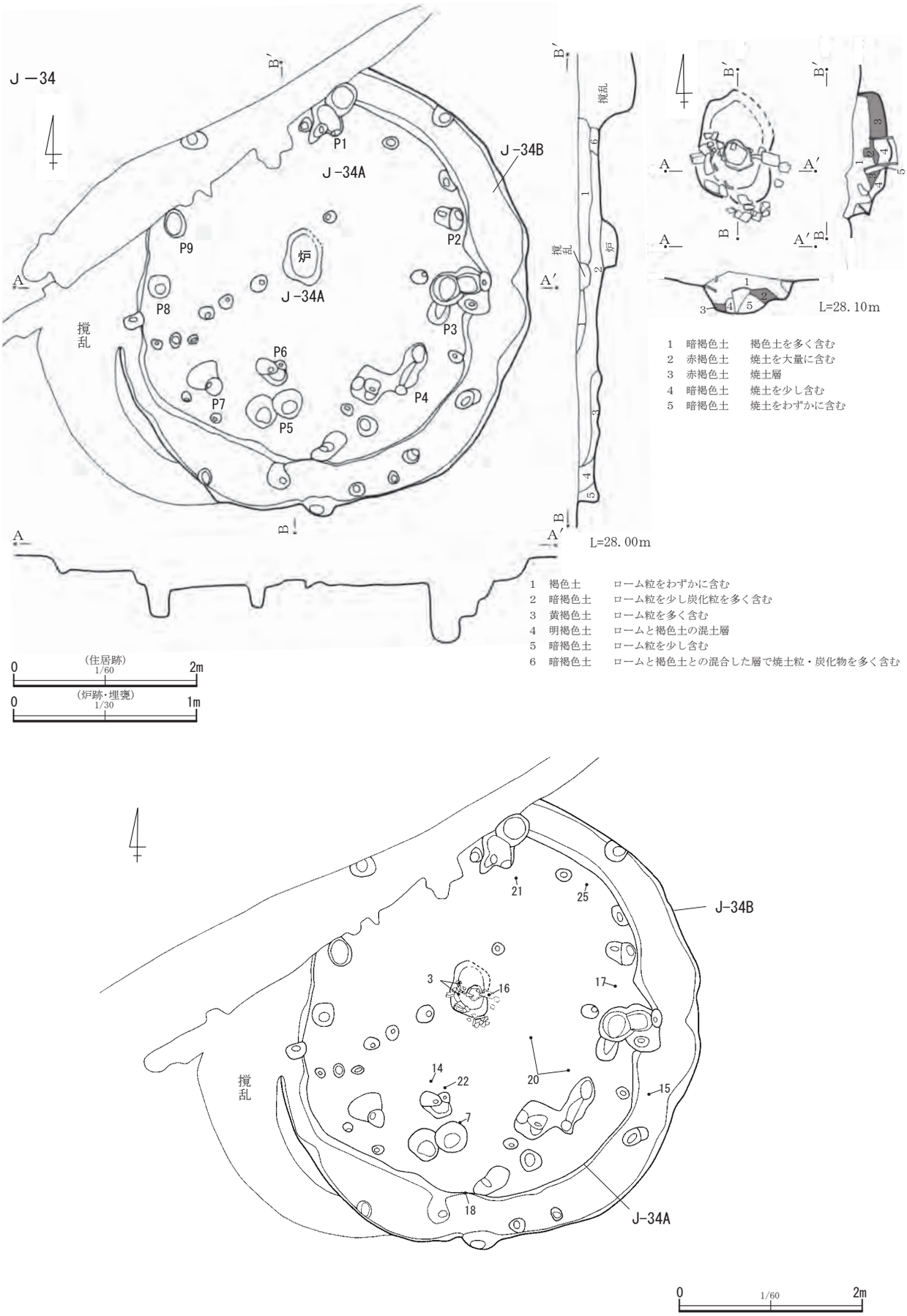






1　暗褐色土　黄褐色土を斑状に含みローム粒・炭化粒を含む
2　暗褐色土　ロームブロックを多く含む
3　赤褐色土　細かい暗褐色土を多く含む
4　暗褐色土　ローム粒・炭化粒を少し含む
5　赤褐色土　焼土
6　黄褐色土　焼土・炭化粒・多量のローム粒含む

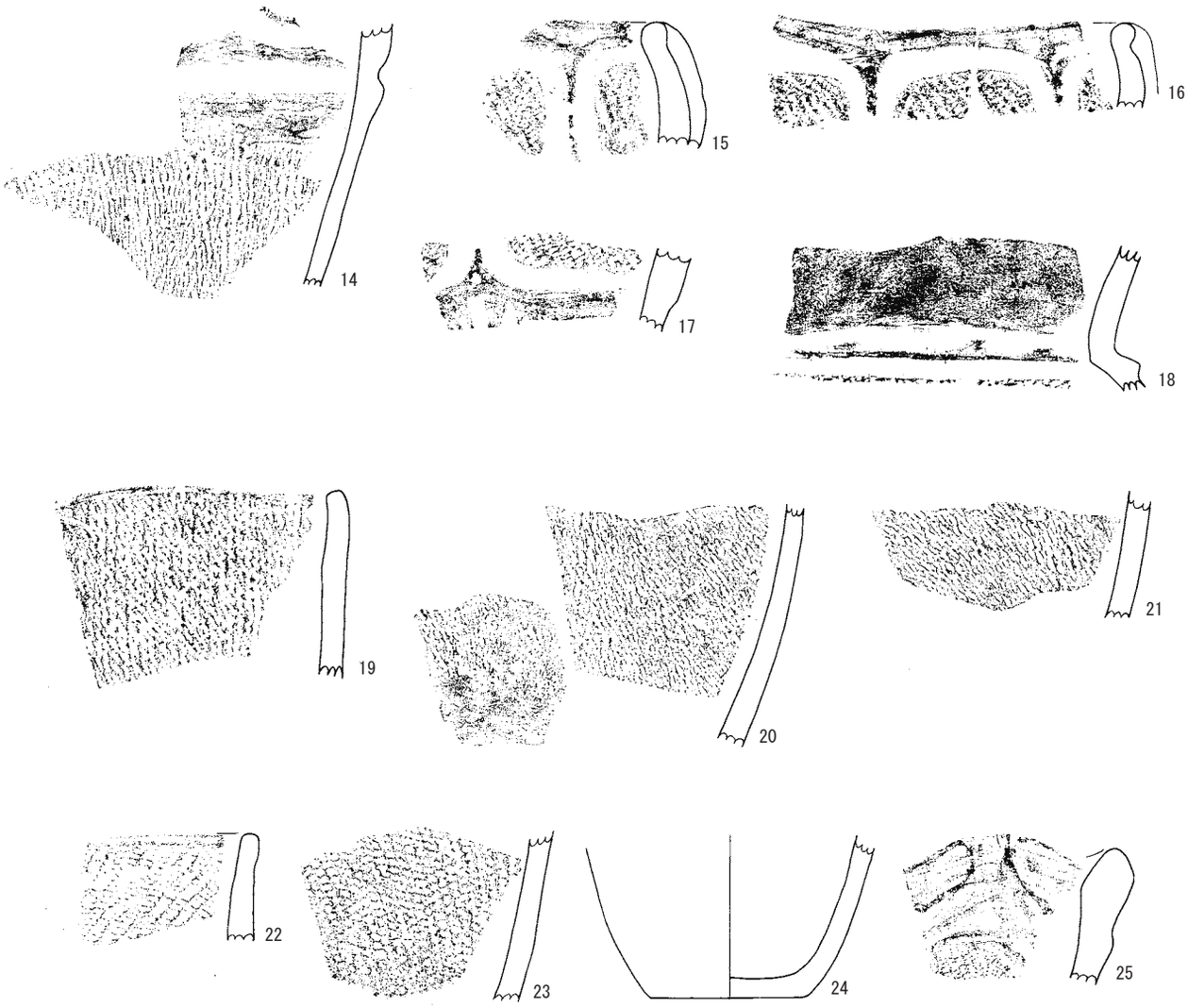
第 102 図　J -33・J -35(1)


J－34
J-34A
J-34B
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
炉
撹乱
A
A′
B
B′
L=28.00m
L=28.10m
1 暗褐色土 褐色土を多く含む
2 赤褐色土 焼土を大量に含む
3 赤褐色土 焼土層
4 暗褐色土 焼土を少し含む
5 暗褐色土 焼土をわずかに含む
1 褐色土 ローム粒をわずかに含む
2 暗褐色土 ローム粒を少し炭化粒を多く含む
3 黄褐色土 ローム粒を多く含む
4 明褐色土 ロームと褐色土の混土層
5 暗褐色土 ローム粒を少し含む
6 暗褐色土 ロームと褐色土との混合した層で焼土粒・炭化物を多く含む
(住居跡) 1/60
(炉跡・埋甕) 1/30
0
2m
1m

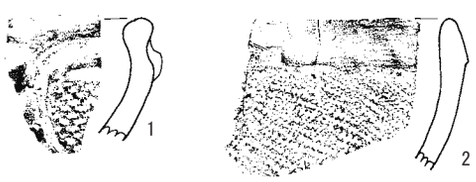
J-34B
J-34A
撹乱
3
14
15
16
17
18
20
21
22
25
7
0
1/60
2m

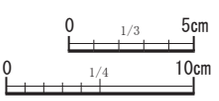
第 103 図　J -34(2)

Ｊ－34

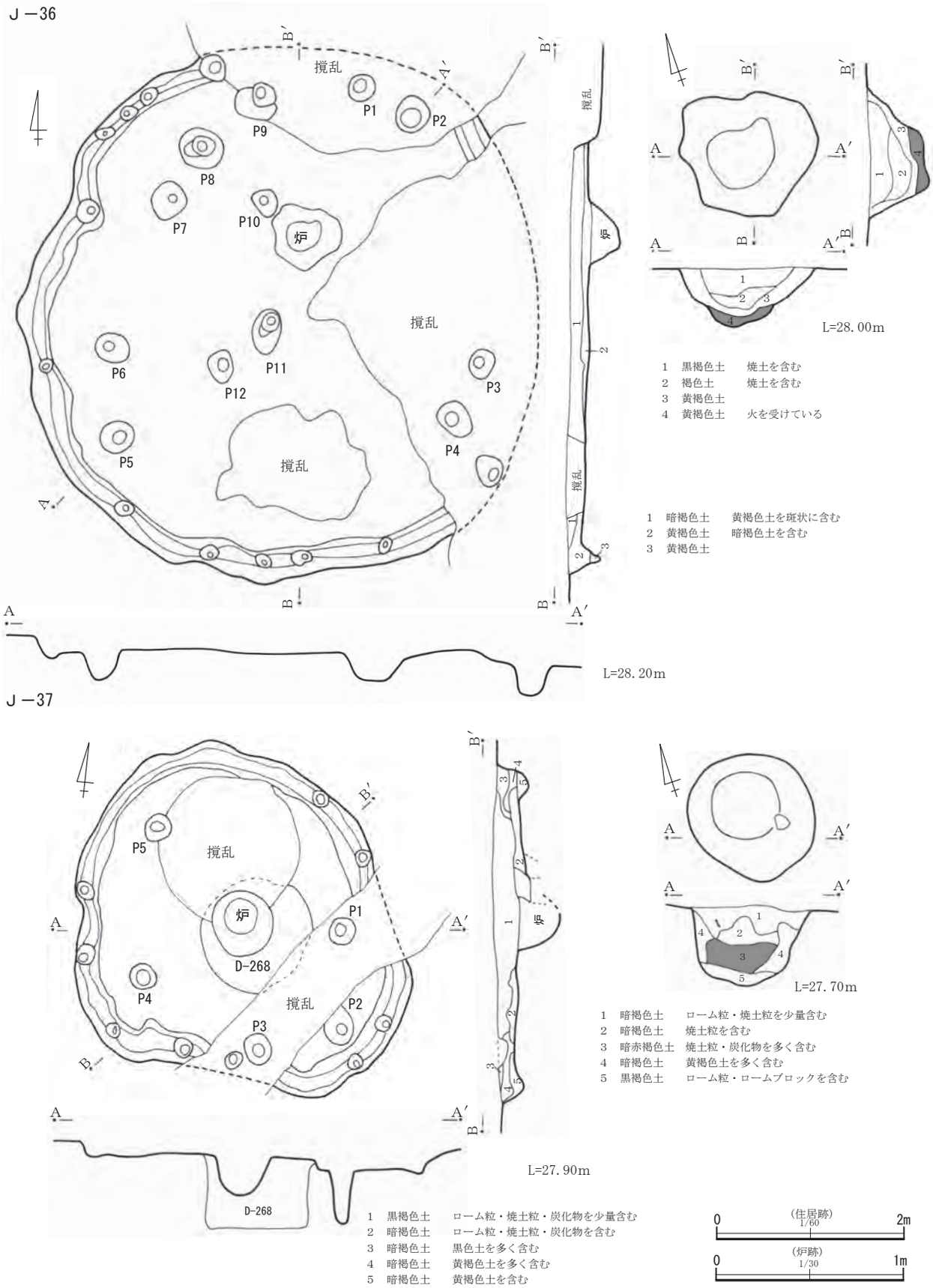


Ｊ－35





第 104 図　Ｊ -34(3)・Ｊ -35(2)



第105図　J -36(1)・J -37(1)

1は加曽利ＥⅡ式と考えられる。隆線と縄文で口縁部文様が構成される。隆線脇には沈線が引かれる。２は加曽利Ｅ式終末の土器で口縁部が微隆線で区画され、胴部に縄文が施される。住居跡の時期は遺物数が少ないため不明であるが、加曽利Ｅ式後半の可能性が高い。土器以外では土器片錘１点 (第 279 図 17) が出土している。

J-36(第 105 ～ 107 図・図版 16・42)

旧リ -20- 1 住。5.8 × 5.0 mの楕円形を呈す。掘り込みの有無の判断が難しい。攪乱部分を除いて壁溝が全周し、壁柱穴 12 本を伴う。柱穴は深さ 0.3 ～ 0.5 mの P4・P5・P9・P11 の他に浅いもの８本がある。炉は北寄りに位置し、覆土に焼土が含まれる。住居跡出土土器は１・２・４・５・19・20・23 ～ 25・29 である。確認面上出土は３・６～ 18・21・22・26 ～ 28・30 ～ 41 である。

１～ 25･27 ～ 30 は加曽利Ｅ式終末の土器である。1 は加曽利ＥⅤ式の可能性がある。沈線と縄文で「逆Ｕ字状文」が口縁部区画に貫入する構成であるが、やや乱れが生じている。２は口縁部が微隆線で区画され、胴部に縄文のみが認められる。３・４は口縁部が微隆線で区画され、胴部は微隆線と縄文で文様が施される。微隆線上にも縄文が認められる。５～７は口縁部が微隆線で区画され、胴部に縄文のみが認められるものである。８～ 11･16 は胴部破片で微隆線と縄文で文様が施される。11･16 は微隆線脇がナデられる。12 ～ 15･17 は胴部破片で沈線と縄文で文様が構成されるものである。18 ～ 23 は縄文のみが認められる。23 は附加縄文である。24 は瓢形土器である。器壁は薄く、器面調整は丁寧である。25 は櫛歯状工具による条線が引かれる。26・27 は加曽利Ｅ式の鉢形土器である。28・29 は橋状把手で、30 は突起状のものである。31・32 は加曽利ＥⅡ式である。やや低い隆線で口縁部文様が施され、胴部には磨消縄文が認められる。32 は胴部に懸垂する磨消縄文が認められる。

33 ～ 35 は加曽利ＥⅢ式である。33 は「横位連繋弧線文土器」とされるものである。34 は 1 本の微隆線と縄文で文様が構成される「意匠充填系土器」と考えられる。35 は隆線脇に沈線が引かれることから加曽利ＥⅢ式と捉えた。

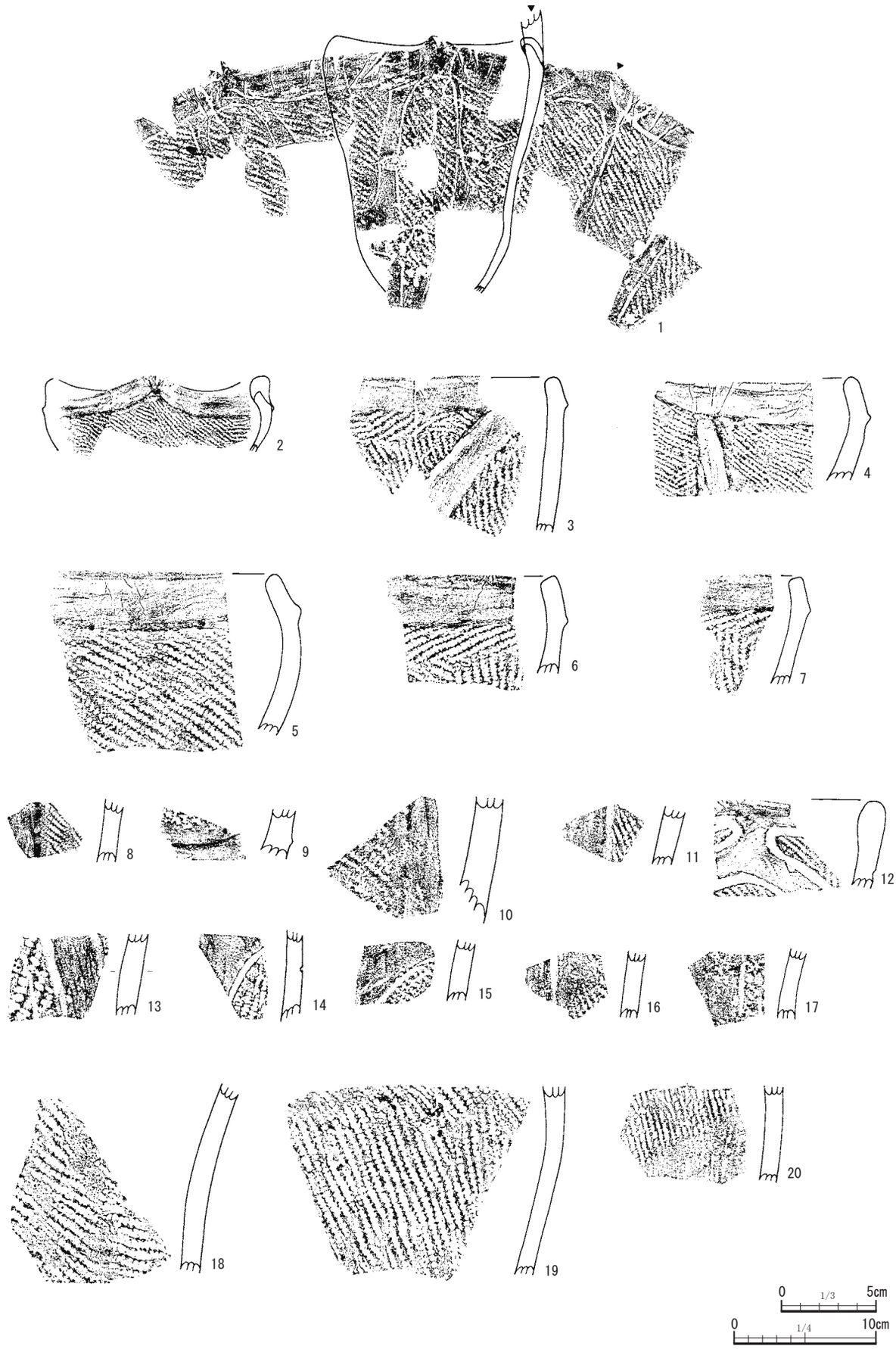
36 ～ 40 は称名寺式である。36・38 ～ 40 は称名寺式第 1 段階の土器である。36 は帯縄文が徹底されない土器である。38・40 は太く深い沈線と縄文による帯縄文で文様が施される。39 は太く深い沈線のみが施される。40 はやや細い沈線と縄文が認められる。称名寺式古段階のものと捉えられる。41 は堀之内 1 式の可能性がある。細い沈線のみが認められる。器面がケズリにより調整される。

住居跡の時期は加曽利ＥⅤ式期？としておく。土器以外では土器片錘２点 (第 279 図 18・19)、石鏃未成品２点 (付表３- ５-23・55)、剥片類３点が出土している。

J-37(第 105・107・108 図・図版 16・45)

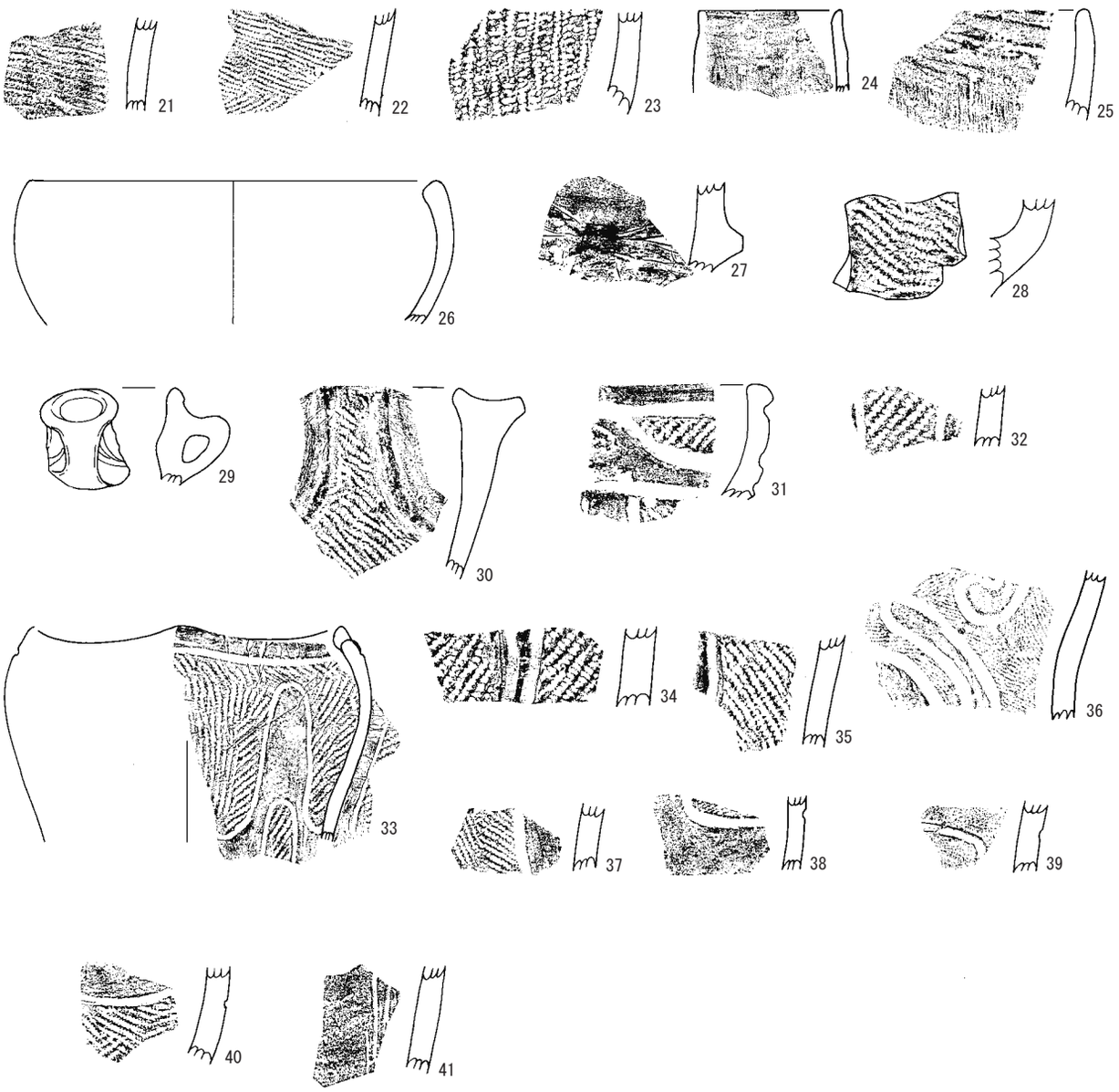
旧リ -22- 1 住。4.1 × 3.5 mの不整円形を呈す。0.2 mの掘り込みを有す。D-268(小竪穴) と重複し、当遺構が新しい。攪乱部分を除いて壁溝が全周し、壁柱穴９本を伴う。柱穴は深さ 0.6 mの P2・P4・P5 の他に浅いもの２本がある。炉は中央に位置し、覆土に焼土が含まれる。住居跡出土土器は４・９・10・15・16・18 ～ 20 である。確認面上出土は１～３・５～８・17・21 ～ 27 である。

１～３は加曽利ＥⅠ式である。1 は口縁部に３つの孔を持つ把手が付される。２・３は突起部分で、突起頂部に沈線で渦巻文が施される。４～ 22 は加曽利Ｅ式終末の土器である。４～９は口縁部が微隆線で区画され、胴部の「逆Ｕ字状文」が貫入する文様構成をもつ。4 は微隆線脇がナデられるが、他はナデられない。５・６・８・９は口縁部がほとんど内弯せず、立ち上がる器形であることから、加曽利ＥⅤ式と考えられる。10 ～ 14 は口縁部が微隆線で区画され、胴部に縄文のみが認められる。15・16 は胴部に微隆線と縄文で文様が構成される。微隆線脇にはナデが明瞭に認められる。17・18 は沈線と縄文で文様

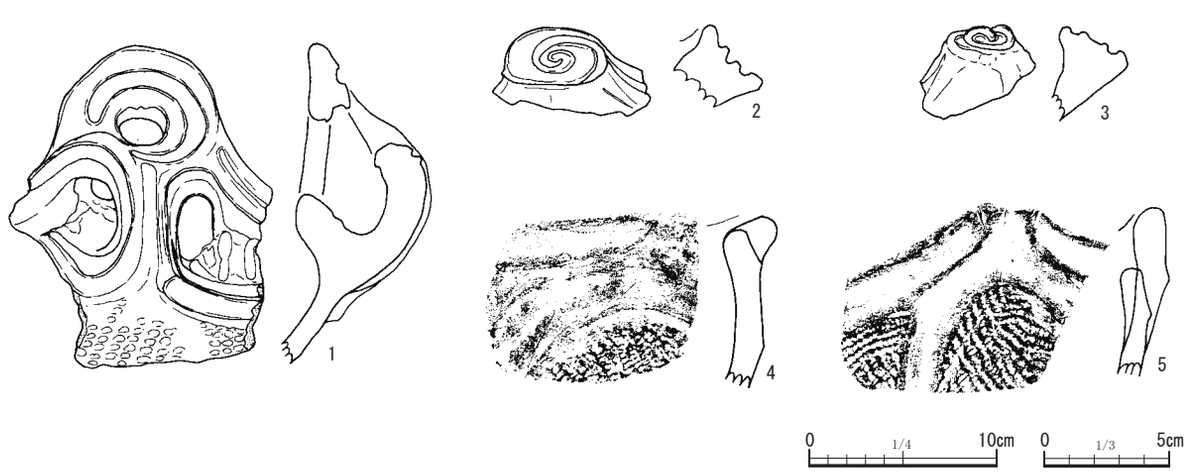


第 106 図　J -36(2)

J－36



J－37

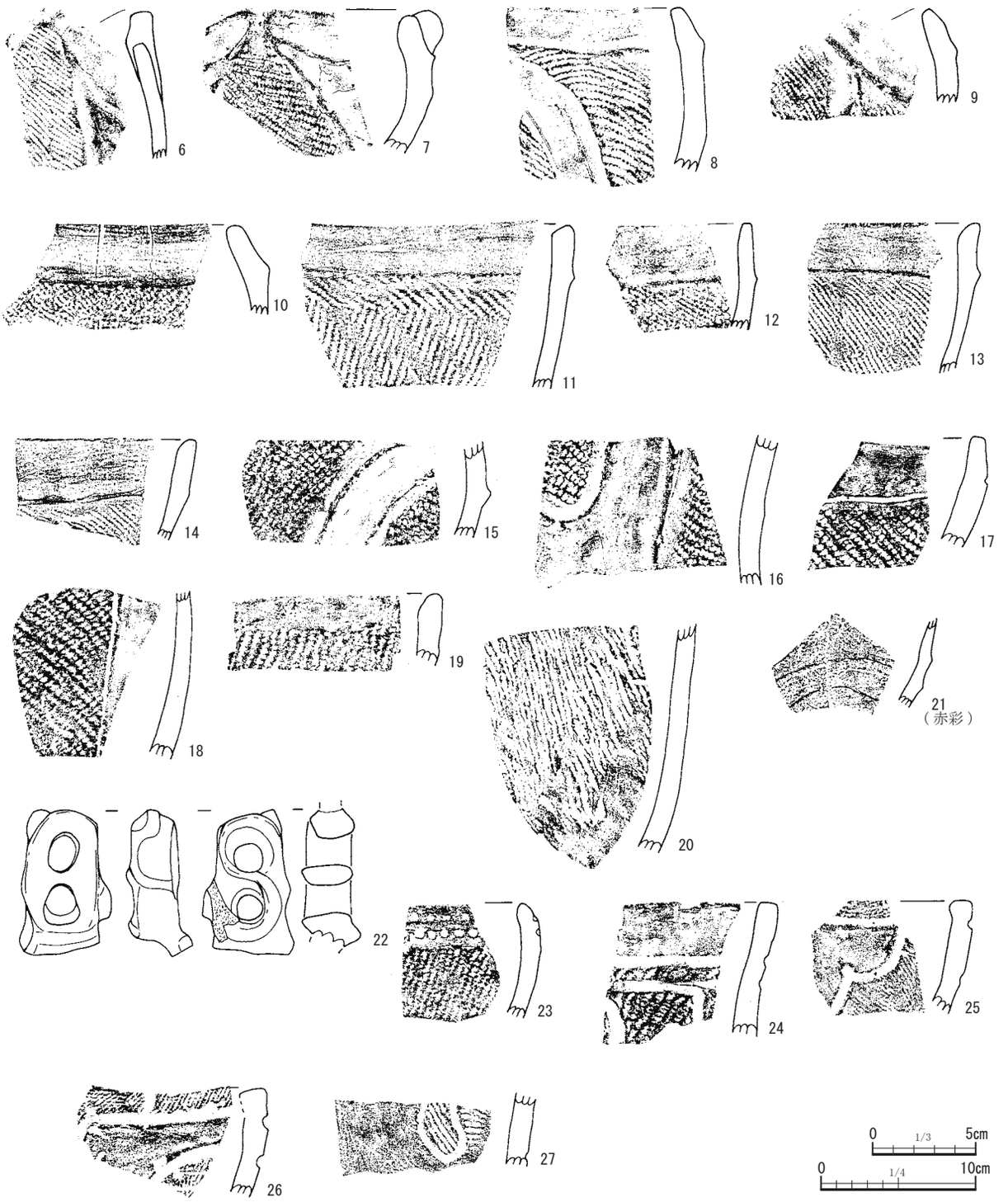


第 107 図　J -36(3)・J -37(2)

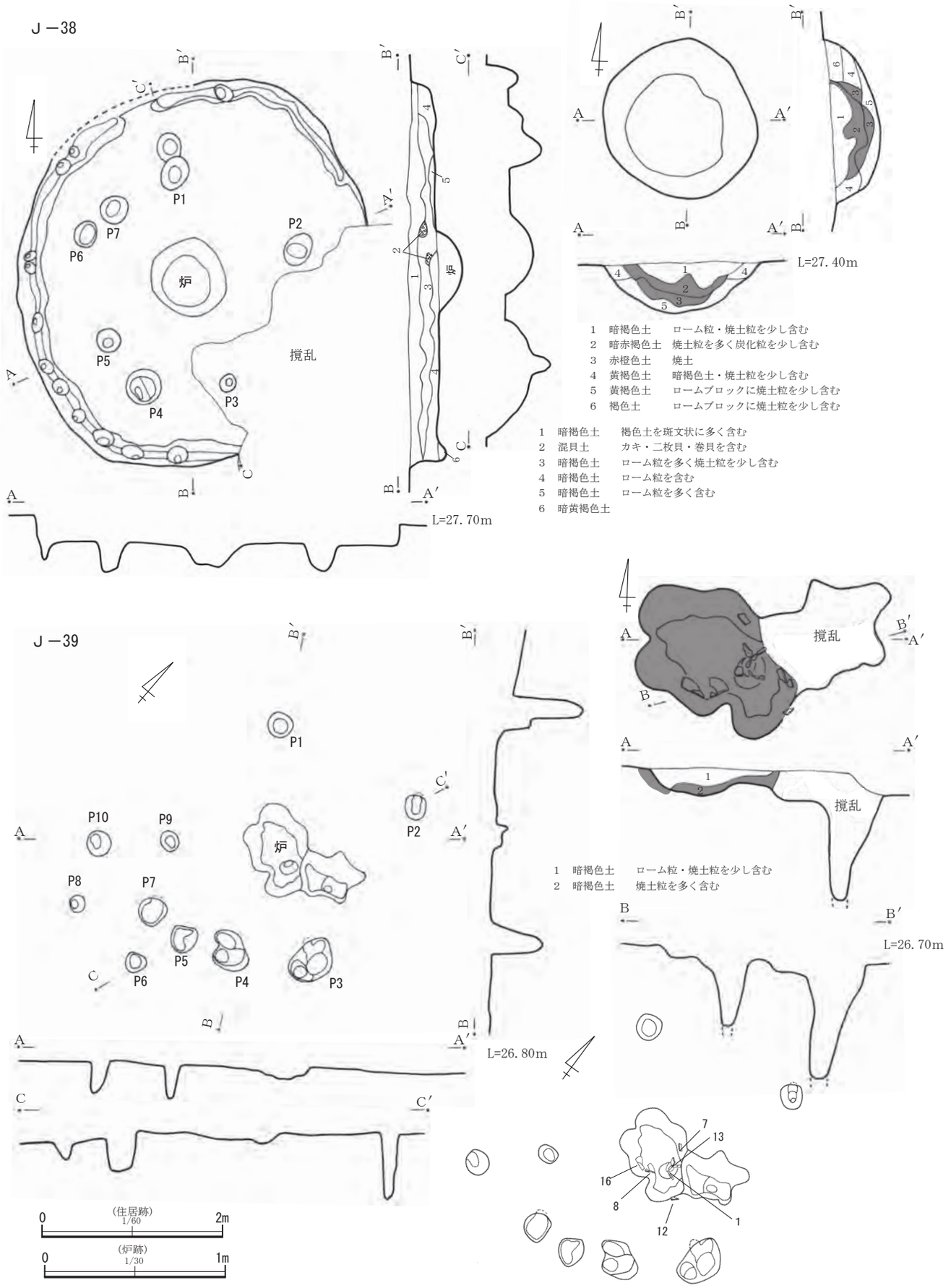
が施される。19・20 は縄文のみが認められる。21 は瓢形の土器である。器壁は薄く、調整は丁寧である。赤彩が認められる。22 は把手で、８の字状に粘土紐が貼り付けられる。23 は加曽利ＥⅡ式または連弧文系土器と考えられる。口縁部に列点、胴部に縄文が認められる。

24 ～ 27 は称名寺式で、いずれも第１段階である。24 ～ 26 は口唇部に平坦面を持つ。25・26 は太く深い沈線と縄文による帯縄文で文様が施される。24・27 は帯縄文が不徹底なものである。

住居跡の時期は加曽利ＥⅣ式～ＥⅤ式期と考えられる。土器以外では土器片円板１点 (第 278 図 23)、石皿・台石１点 (付表３- ３-67)、石鏃４点 (第 291 図 14・21・22・42)、石核１点 (付表３- ３-56)、剥



第 108 図　Ｊ -37(3)



第 109 図　J -38(1)・J -39(1)

片類 1 点 (70) が出土している。

J-38(第 109 ～ 113 図・図版 16・17・46)

旧リ -23- 1 住。4.1 × 4.0 mの円形を呈す。0.3 mの掘り込みを有す。攪乱部分を除いて壁溝が全周し、壁柱穴 12 本を伴う。柱穴は深さ 0.3 ～ 0.5 mの P1・P2・P4・P7 の他に浅いものが 2 本ある。炉は中央に位置し、底面よりやや上に中央が窪んだ焼土層を形成している。覆土中には 3 ～ 4 か所の小規模な混土貝層を形成していた。貝層の位置・形状は不明だが、 B 断面と図示しなかった断面図に 10 ～ 20cm ほどの小規模な貝層が見える。

住居跡出土土器は 1 ～ 8 ・10 ～ 12・16 ～ 33 である。確認面上出土は 9 ・13 ～ 15・34 である。

1 ～ 21 は加曽利 E 式終末の土器である。 1 は加曽利 E Ⅳ式である。口縁部が微隆線で区画され、胴部には微隆線と縄文で「抱球文」が認められる。微隆線脇はナデられる。 2 は加曽利 E Ⅳ式と考えられる。口縁部が微隆線で区画され、胴部には微隆線と縄文で「逆 U 字状文」が施される。口縁部区画の微隆線脇はナデられないが､胴部文様を構成する微隆線脇はナデられる。 3 ～ 9 は胴部に縄文のみが施される。 3・4 は口縁部が微隆線で区画され、微隆線上に縄文が認められる。 5 は口縁を欠損するか同様の構成と考えられる。 6 はナデによる沈線で口縁部が区画され、胴部には補修孔が 1 ヶ所認められる。 7 ～ 9 は沈線で口縁部が区画される。10 は沈線と縄文で「逆 U 字状文」が施されていると考えられる。11 は口縁部がナデによる浅い沈線で区画され、胴部には縄文のみが施される。12・13 は口縁部に橋上把手が施される。12 は加曽利 E Ⅳ式と考えられる。胴部には微隆線と縄文で文様が施される。微隆線脇はナデられる。13 は胴部に沈線と縄文で文様が施される。14 は口縁部の突起部分である。15・16 は口縁部が微隆線で区画され、胴部には「逆 U 字状文」が施される。15 は加曽利 E Ⅴ式と考えられる。器形は屈曲せず立ち上がり、胴部の「逆 U 字状文」が口縁部に貫入する部分が突起状になる。15 は微隆線上に縄文が認められるが、16 は微隆線脇がナデられる。17 は鉢形土器である。広い口縁部無文帯をもち、胴部は微隆線と縄文で文様が施される。微隆線脇はナデられる。内外面の縄文施文部以外を赤彩している。18・19 は胴部に「対向 U 字文」が施される加曽利 E Ⅳ式と考えられる。18 は微隆線脇がナデられる。20 は櫛歯状工具による条線、21 は縄文と条線が認められる。

22 ～ 27 は加曽利 E Ⅲ式である。22 は口縁部が沈線で区画され、胴部には渦巻文と縄文が施される。23 はナデによる沈線で口縁部が区画され、縄文と沈線で「横位連繋弧線文」が施される。24 は沈線で区画が作出され、区画内に縄文と蕨手文が施される。25・26 は口縁部に列点が施される。25 は微隆線により口縁部が区画され、胴部に沈線が引かれる。27 は沈線と縄文で文様が施される。

28 ～ 32 は加曽利 E 式後半以降の底部である。28･30 は縄文、32 は櫛歯状工具による条線が引かれる。33 は称名寺式第 1 段階の土器である。太く深い沈線と縄文による帯縄文が認められる。

住居跡の時期は加曽利 E Ⅳ式期と考えられる。土器以外では剥片石器がややまとまっている。石鏃 1 点 (第 291 図 19)、同未成品 1 点 (付表 3 - 5 -56)、石核 2 点 (付表 3 - 5 -97・98)、剥片類 53 点・38 g (加工剥片 1 ・剥片 35・砕片 17) の計 57 点である。石材はチャート 35、黒曜石 14、硬質頁岩 4 、不明 1 である。石鏃製作に伴うものであろう。ほかに打製石斧 2 点 (第 283 図 6 ・284 図 26)、砥石 1 点 (付表 3 - 3 - 5)、石皿・台石 1 点 (第 289 図 17) が出土した。

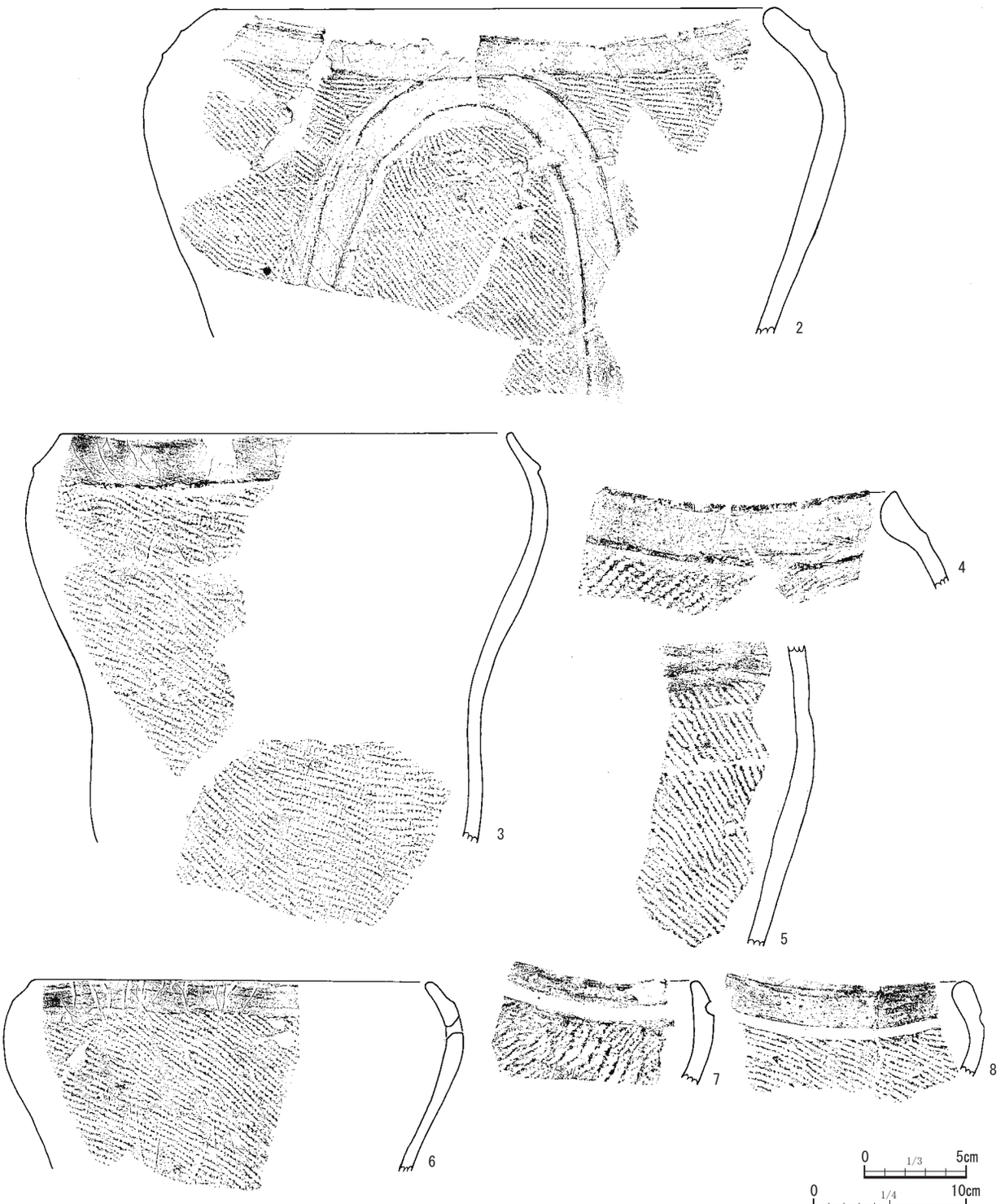
J-39(第 109・113・115 図・図版 17)

旧リ -24- 1 住。掘り込みを有さず柱穴のみ検出した。柱穴は深さ 0.4 mの P1 ～ P3・P9 の他に浅いものが 6 本ある。炉は中央に位置し、東側に小形深鉢を埋設、土器片囲を伴う。土器片囲の土器片は大半が抜き取られているが、炉内から取り上げられたのは 11 である。掲載土器で位置が確認できたうち、 1 は

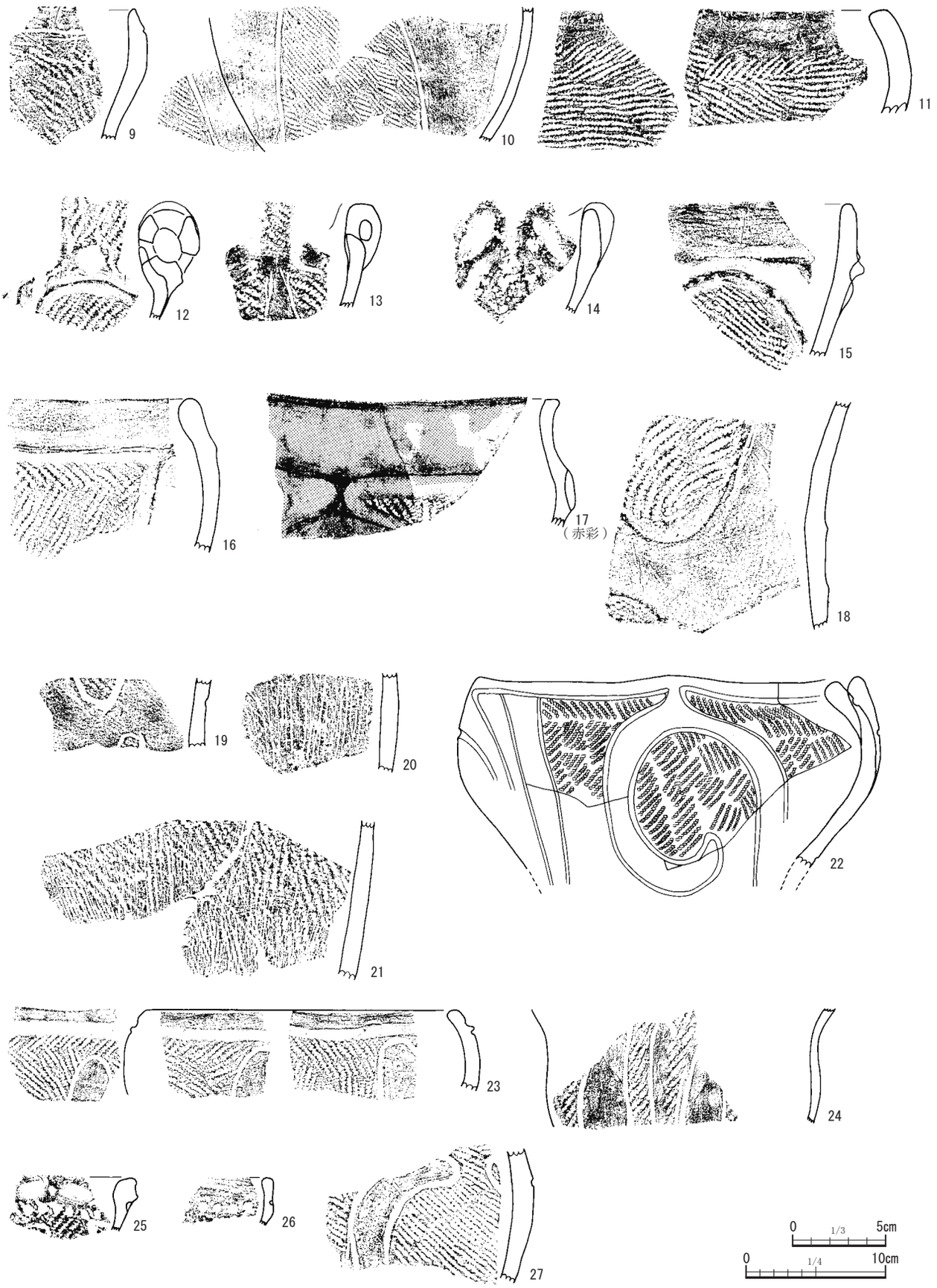
第110図　J -38(2)

炉体土器、７・８・12・16 は炉囲いとみられる。13 は炉内出土である。そのほかの住居跡出土土器は６・９である。確認面上出土は２～５・10・14・15・17 ～ 20 である (注記が「Ⅶ層」となっているものも「Ⅲ層」の誤りと判断してここに含めた)。

１～ 22 は加曽利Ｅ式終末の土器である。１は胴部に縄文のみが認められる。２は、口縁部が微隆線で区画され、胴部の「逆Ｕ字状文」が口縁部に貫入する文様構成を持つ。微隆線脇がナデられる。３・４は口縁部が微隆線で区画され、胴部には屈曲する微隆線と縄文が施される。微隆線脇はナデられる。４は赤彩が認められる。５～７は口縁部が微隆線で区画され、胴部には縄文のみが認められる。いずれも微隆線

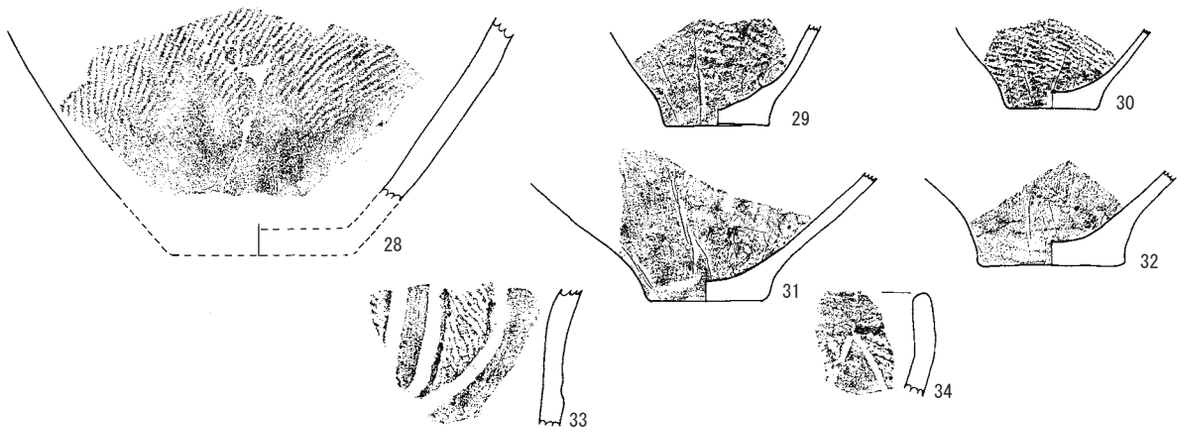


第 111 図　Ｊ -38(3)

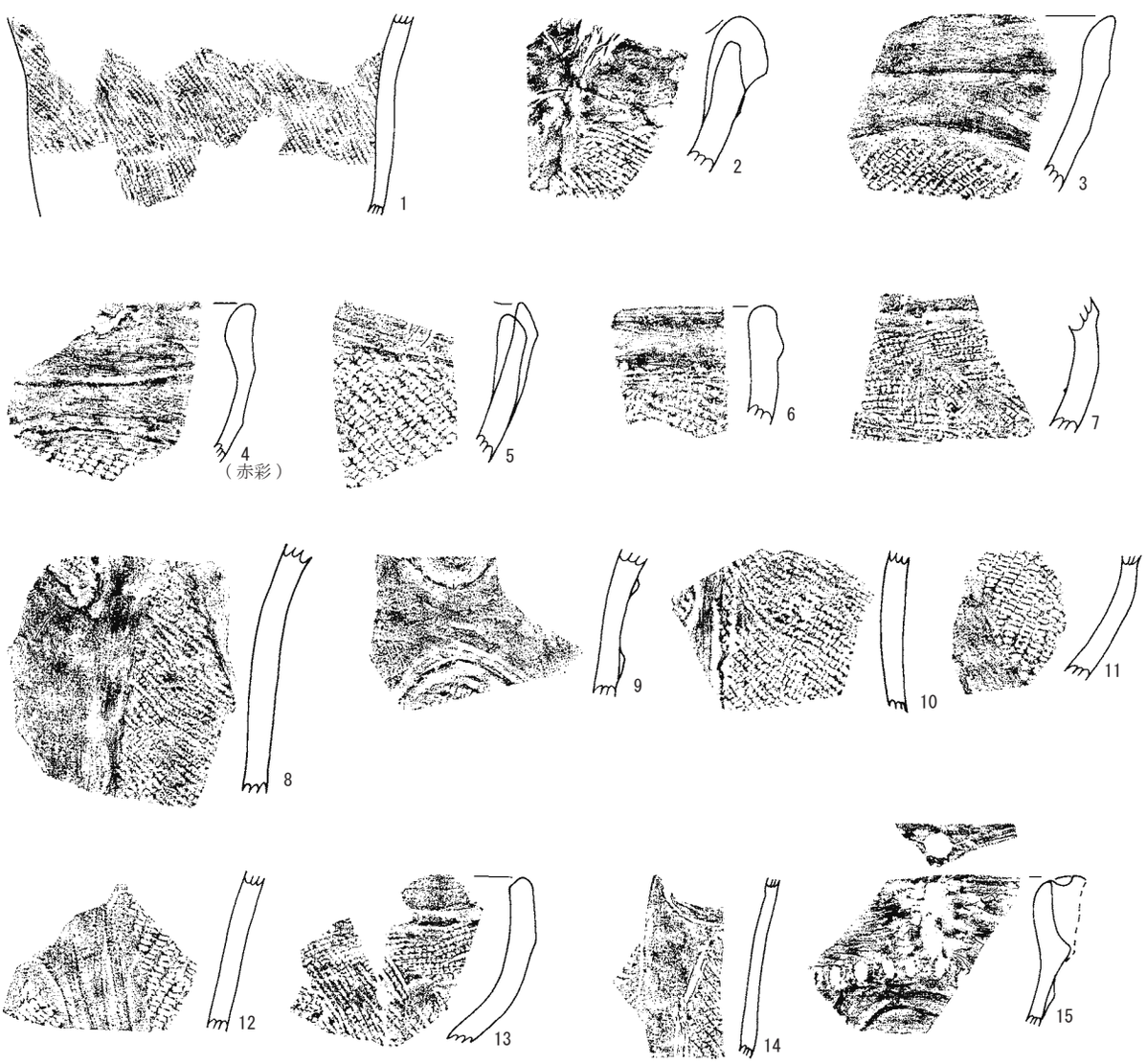

9
10
11
12
13
14
15
16
17
（赤彩）
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
0
1/3
5cm
0
1/4
10cm

第 112 図　J -38(4)

J－38



J－39



第113図　J -38(5)・J -39(2)

脇がナデられる。8～13は胴部に微隆線と縄文で文様が構成される。9・12は微隆線脇がナデられる。8・10・11・13は微隆線脇がナデられない。9は加曽利ＥⅣ式である。14は細い沈線と縄文で文様が構成される。15は瓢形の土器である。器壁は薄く、器面調整は丁寧である。口唇部には孔、口縁部には刻みが施され、胴部には微隆線が貼り付けられる。16～18は鉢形土器である。16は微隆線上に縄文が認められる。17・18は鉢形土器の把手である。19は台形土器である。加曽利Ｅ式期のものと考えられる。

住居跡の時期は加曽利ＥⅣ～Ⅴ式期と考えられる。土器以外では蓋1点(第278図2)、土器片錘1点(第279図20)、磨石類1点(第286図40)、剥片類1点が出土している。

J-40(第114・115図・図版17)

旧ル-9-1住。径4.6ｍの円形を呈す。0.3ｍの掘り込みを有す。Ｊ-42、Ｄ-277～279(小竪穴)、D-280(土坑)と重複し、当遺構はどれよりも古い。壁溝が全周する。柱穴は深さ0.5～0.6ｍのP3・P8の他に、浅い柱穴が9本ある。住居跡出土土器は1・3・5・9である。確認面上出土は2・4・6～8である。

1は加曽利Ｅ式終末の土器である。1・2は加曽利ＥⅤ式である。胴下部から微隆線と縄文で「逆Ｕ字状文」が施され、胴くびれ部で胴上部の文様と連結し、連結部分が突起状になる。微隆線上に縄文が認められる。2は内弯がほとんどせず、立ち上がる器形である。口縁部が微隆線で区画され、胴部の「逆Ｕ字状文」が口縁部に貫入する文様構成を持つ。貫入する部分が突起状になる。縄文は一部ナデられるが、微隆線上に縄文が認められる。3・4は口縁部が微隆線で区画され、胴部に縄文のみが認められる。5は胴部が微隆線と縄文で文様が施される。6は縄文のみが認められる。

7・8は把手である。7は8の字状に粘土紐が貼り付けられる把手である。8は縄文と円形の刺突が施される。9は称名寺式の関沢類型である。波状口縁で、口縁部が微隆線で区画される。微隆線脇には列点が施される。胴部には縄文と沈線で文様が構成される。

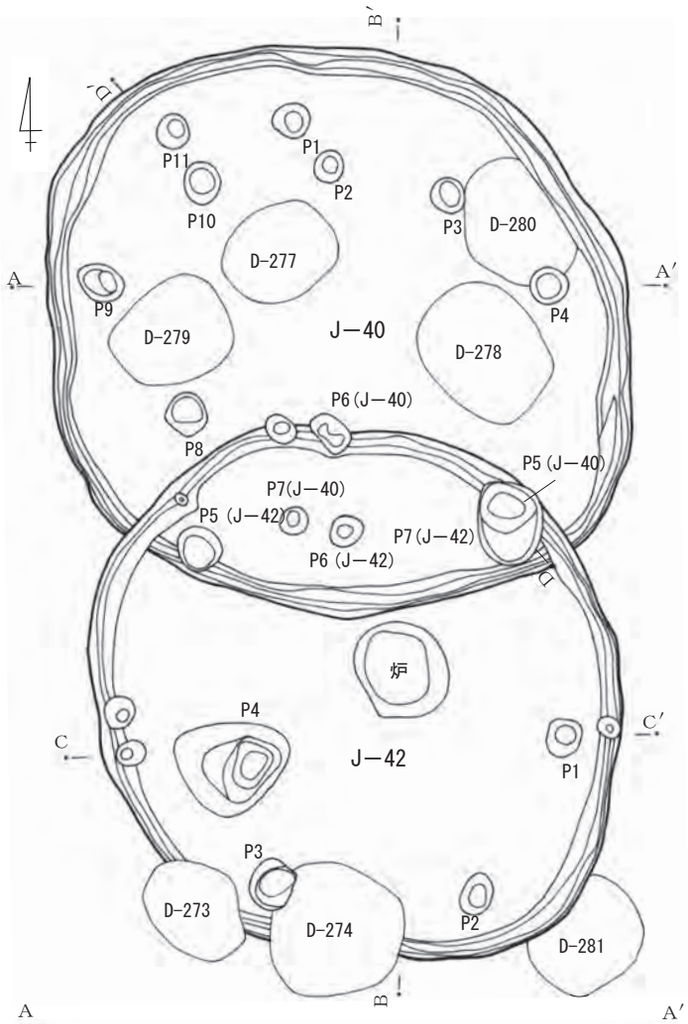
住居跡の時期は称名寺Ⅰ式期と考えられる。土器以外では土器片錘15点(第279図21～35)、石鏃未成品1点(付表3-5-54)、剥片類1点が出土している。

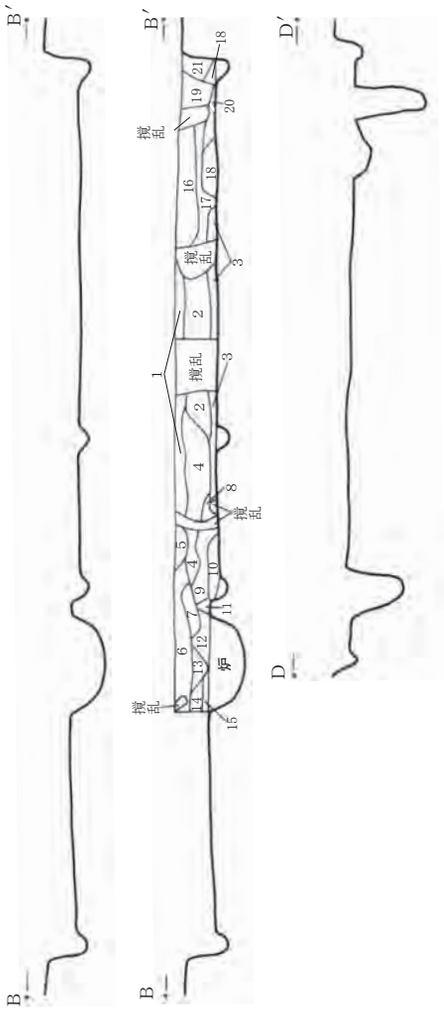
J-41(第116～118図・図版17・42・46)

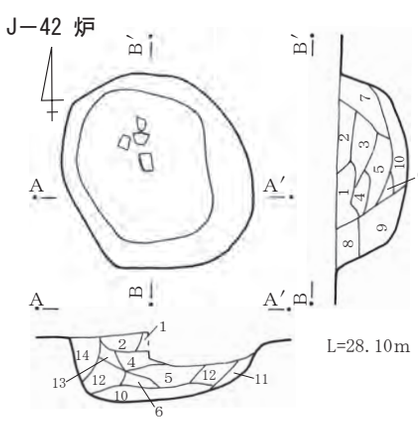
旧ル-9-2住。径4.8×4.4ｍの円形を呈す。0.3ｍの掘り込みを有す。壁溝が全周する。柱穴は深さ0.4～0.7ｍのP1・P2・P6・P7・P10・P11の他に浅いものが6本ある。東側壁近くには床面を掘って深鉢が埋設されており、上部を西側に傾けている。炉は中央に位置するが、撹乱により底面付近のみ残存する。住居跡出土土器は1～7である。3は埋設土器、1・2・4～6は床面よりやや上の壁際から集中して出土している。北西側と南側に分かれているが、1以外は両方から出土している。

1～3は埋設土器で、称名寺Ⅰ式(第2段階)である。1・2は帯縄文で副文様が付く紡錘文が施され、横位に連繋される。1は口縁部に段を持ち、刺突が施される。胴部には銛状文も認められる。3は太い沈線と縄文による帯縄文で2段のＪ字文と十字状の文様が施される。一部に帯縄文が不徹底な部分が見られる。4～6は加曽利ＥⅤ式と考えられる。4・5は口縁部が微隆線で区画され、「逆Ｕ字状文」が口縁部に貫入する文様構成を持つ。波頂部は突起状になる。微隆線上には縄文が認められる。5は屈曲がほとんどなく、立ち上がる器形である。6も屈曲がほとんどなく、立ち上がる器形であり、口縁部が微隆線で区画され、胴部には縄文のみが認められる。微隆線脇はナデられない。7も同様の構成を持つものと考えられる。

住居跡の時期は称名寺Ⅰ式(第2段階)である。土器以外では剥片類1点が出土している。







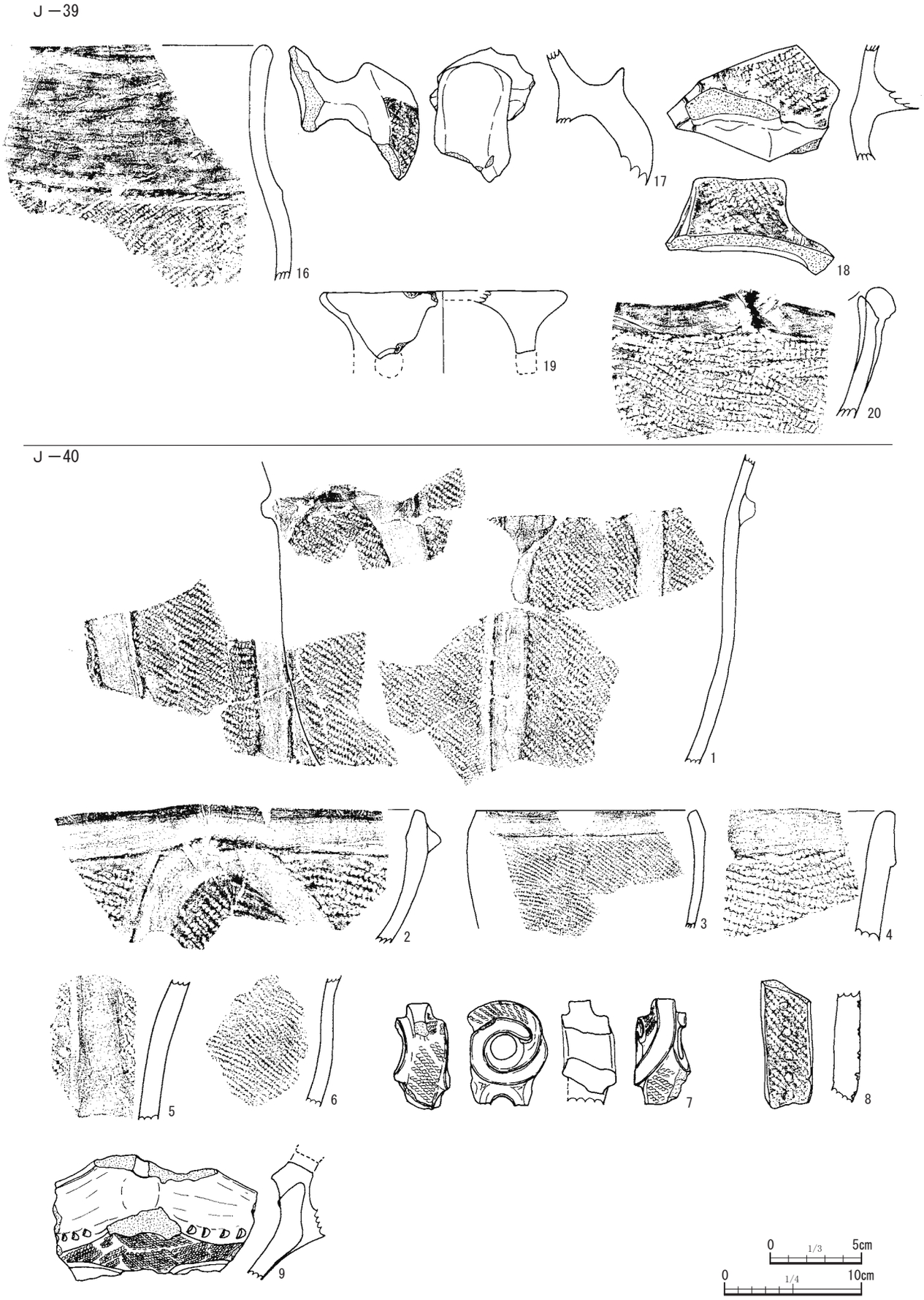
1	暗褐色土	黄褐色土を斑文状に含み焼土粒をわずかに含む
2	暗褐色土	ローム粒を含む
3	暗褐色土	ローム粒を多く含む
4	暗褐色土	黄褐色土を斑文状に含みローム粒を少し含む
5	褐色土	黄褐色土を含む
6	暗褐色土	黄褐色土を斑文状に含み炭化粒を含む
7	暗褐色土	ローム粒を含む
8	暗褐色土	黒色土・ローム粒を含む
9	暗褐色土	黒色土・ローム粒を含む
10	褐色土	黒色土・ローム粒・焼土粒を含む
11	褐色土	ローム粒を多く含む
12	暗褐色土	炭化粒を含む
13	暗褐色土	黄褐色土を含む
14	暗褐色土	ローム粒・炭化粒を含む
15	暗褐色土	ローム粒・焼土粒・炭化粒を含む
16	暗褐色土	黄褐色土を斑文状に含み焼土粒をわずかに含む
17	暗褐色土	ローム粒を含む
18	褐色土	ローム粒を多く含む
19	暗褐色土	黄褐色土を斑文状に含む
20	褐色土	ローム粒を多く含む
21	暗褐色土	ローム粒を含む

(住居跡) 1/60　0　2m

(炉跡) 1/30　0　1m

1	黒褐色土	ローム粒を少し含み灰を含む
2	暗褐色土	ローム粒・灰を含む
3	暗褐色土	ローム粒・焼土粒・灰を含む
4	黒褐色土	焼土粒・灰を含む
5	黒褐色土	焼土粒・灰を含む
6	黒褐色土	ローム粒・焼土粒・灰を含む
7	暗褐色土	ローム粒を多く含む
8	暗褐色土	ロームを含む
9	暗褐色土	ローム粒・焼土粒を含む
10	褐色土	ローム・灰を含む
11	褐色土	ローム粒を含む
12	暗褐色土	ローム粒・焼土粒を含む
13	暗褐色土	ローム粒・焼土粒・灰を含む
14	褐色土	ロームブロック

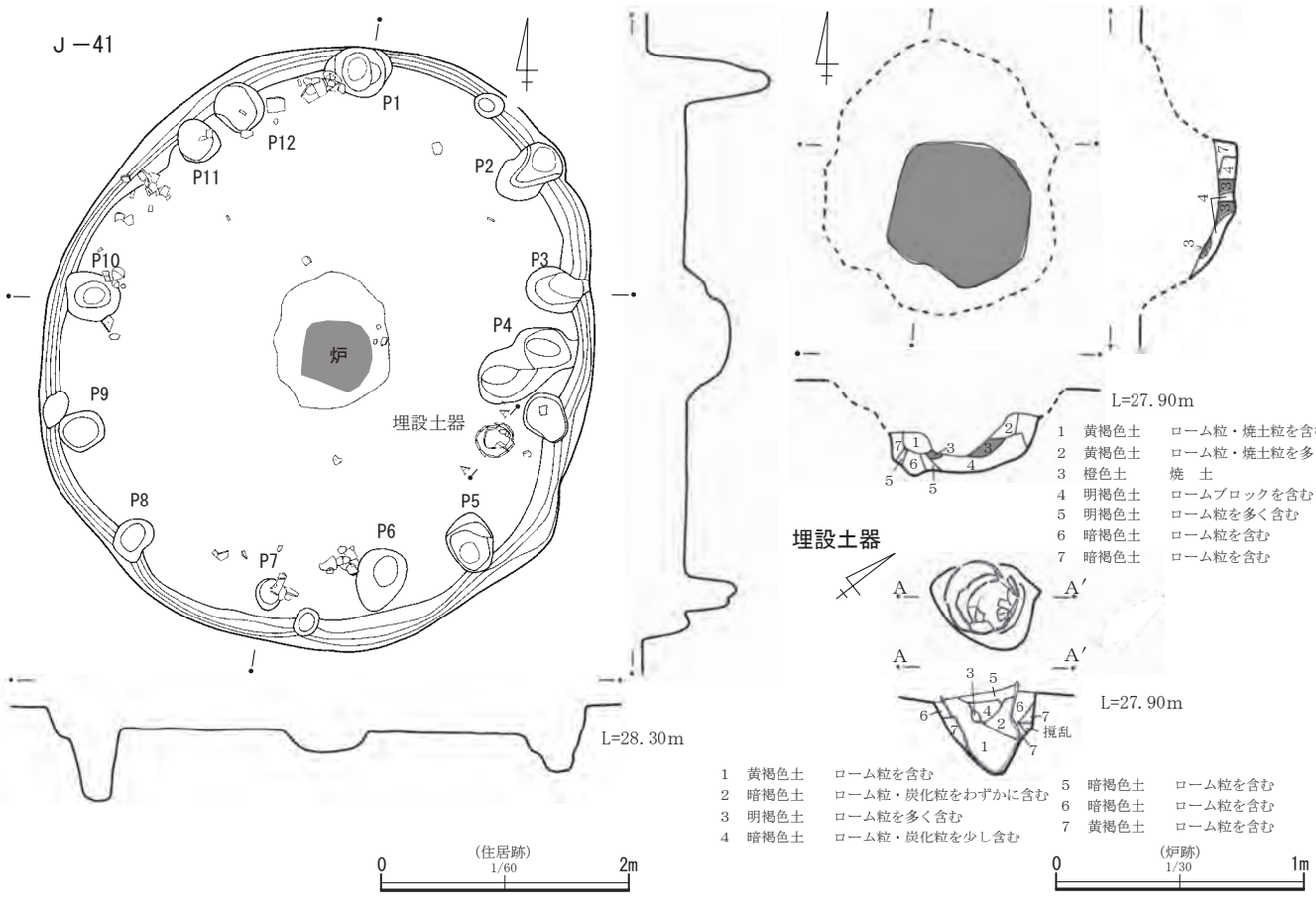
第 114 図　J -40(1)・J -42(1)

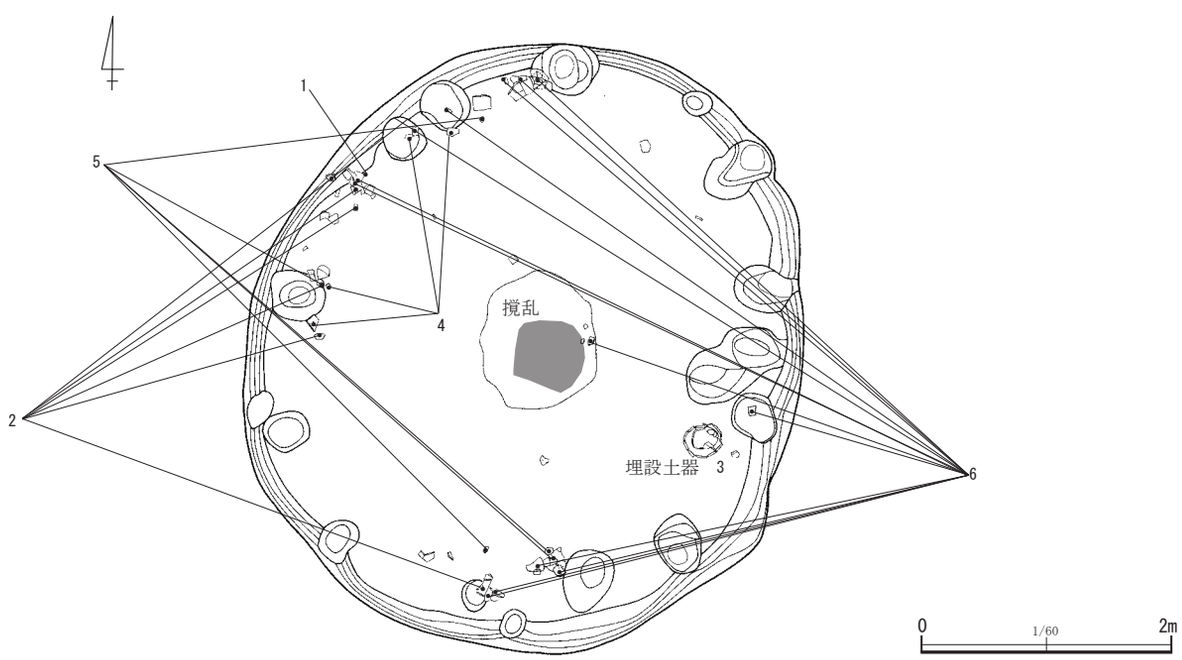


第 115 図　J-39(3)・J -40(2)

J-42(第 114・118・120 図・図版 17)

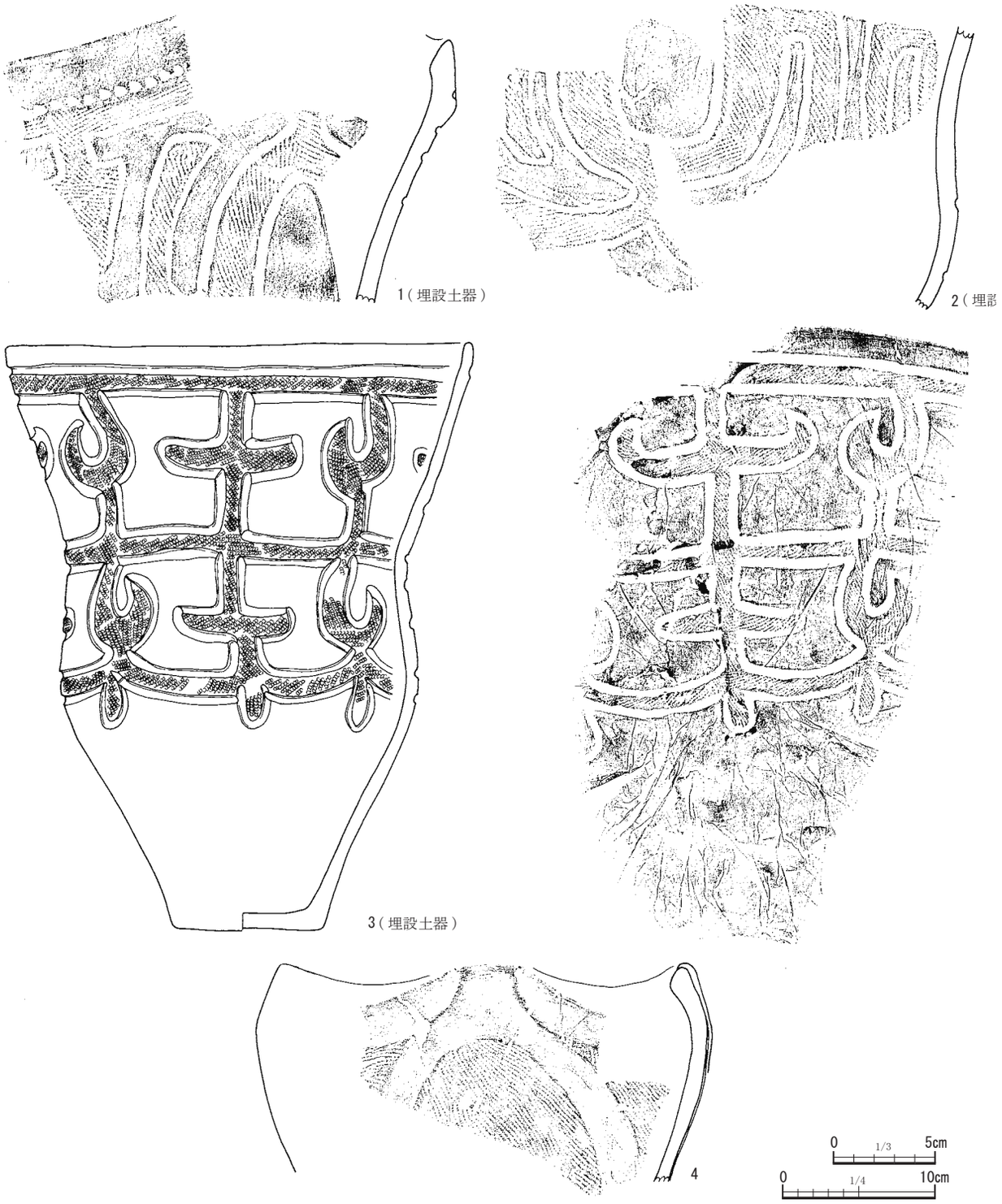
旧ル - 9 - 3 住。4.1 × 4.0 ｍの円形を呈す。0.3 ｍの掘り込みを有す。重複する遺構との新旧はＪ -40 より新しく、Ｄ -273・274・281(土坑) より古い。壁溝が全周する。柱穴は深さ 0.4 ～ 0.5 ｍの P1 ～ P3 の他に、浅いもの 4 本がある。炉は中央に位置し、中央から土器片が出土した。住居跡出土土器は 1 ～ 15 である。炉内出土は 9 ・ 14 である。



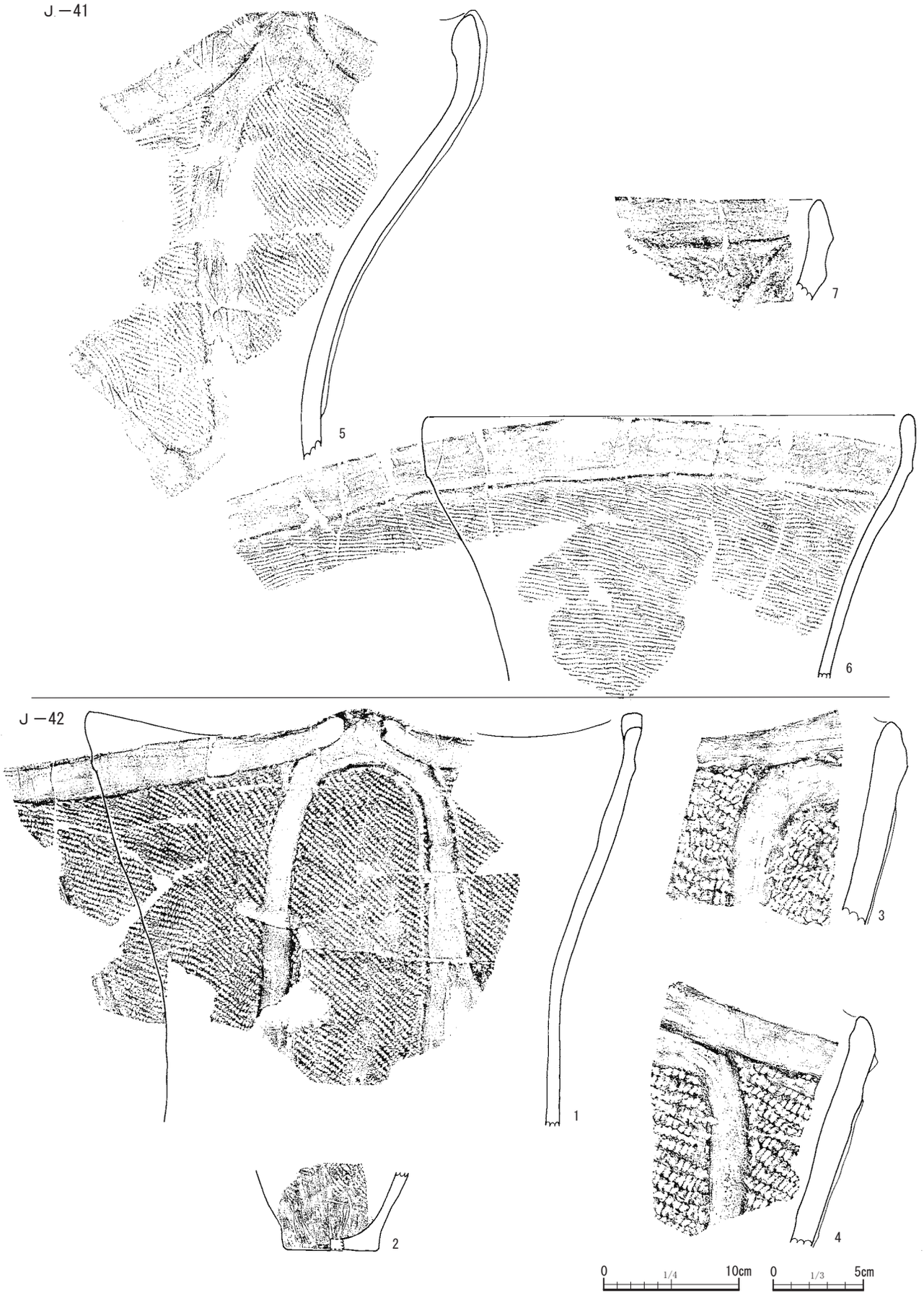


第 116 図　Ｊ -41(1)

２は加曽利Ｅ式後半の底部である。縄文が認められる。１・３～ 13 は加曽利Ｅ式終末の土器である。１・３・４は加曽利ＥⅤ式の可能性がある。器形は口縁部がほとんど内弯せず、立ち上がる。口縁部は微隆線で区画され、胴部は「逆Ｕ字状文」が施される。微隆線上にも縄文が認められる。５・６は口縁部が微隆線で区画され、胴部は縄文のみが施される。５は微隆線脇がナデられるが、６はナデられない。７は口縁部が微隆線で区画され、胴部は無文である。８～ 10 は微隆線と縄文で文様が構成される。微隆線上には縄文が認められる。11 は縄文のみが認められる。12 は８の字状の把手で縄文が施される。13 は橋状把手である。14･15 は称名寺式古段階の土器である。太く深い沈線と縄文による帯縄文で文様が施される。



第 117 図　Ｊ -41(2)

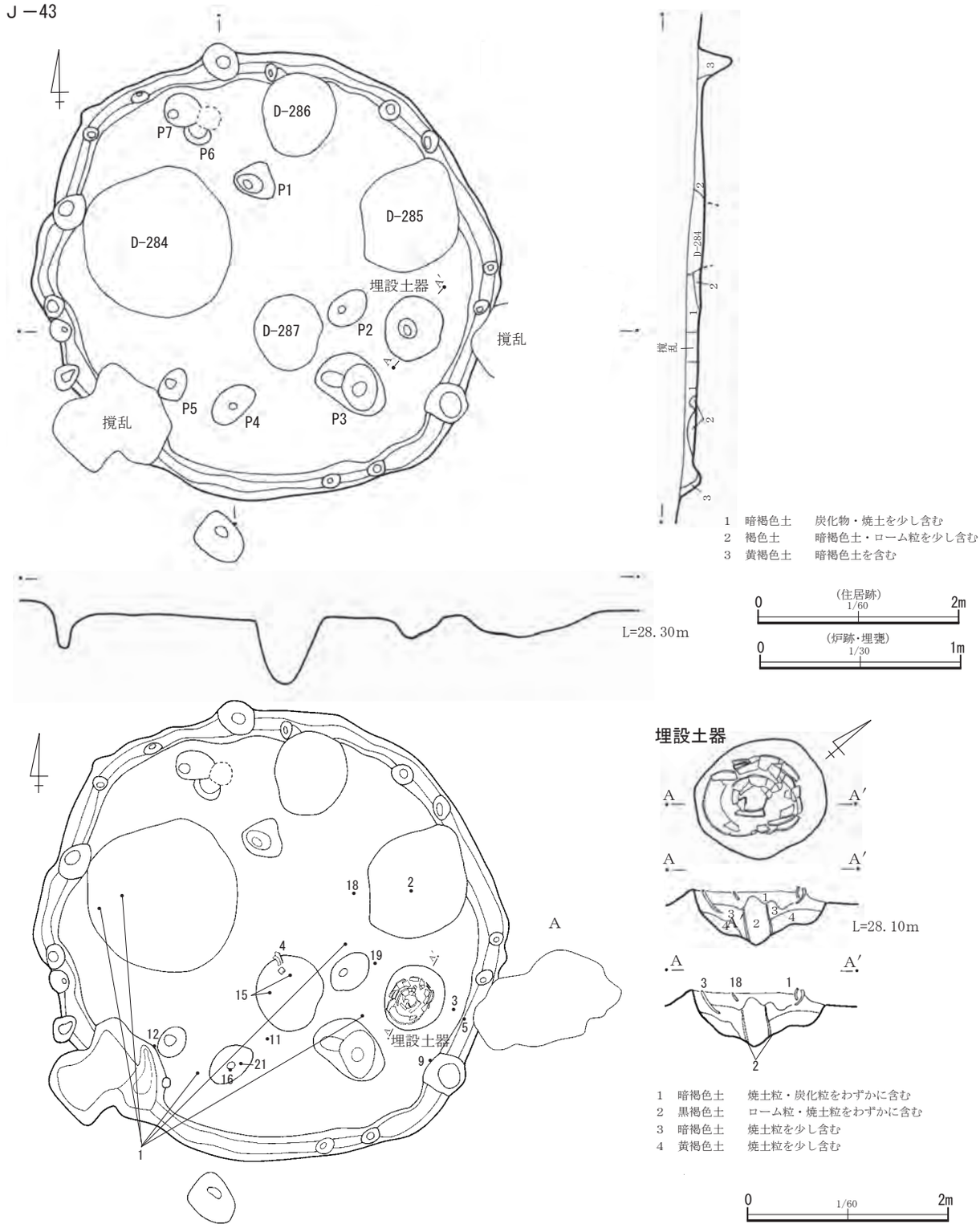


第118図　J -41(3)・J -42(2)

住居跡の時期は加曽利ＥⅤ式期と考えられる。土器以外では磨石類２点 (第 287 図 97・付表 3-3-79)、剥片類２点が出土している。

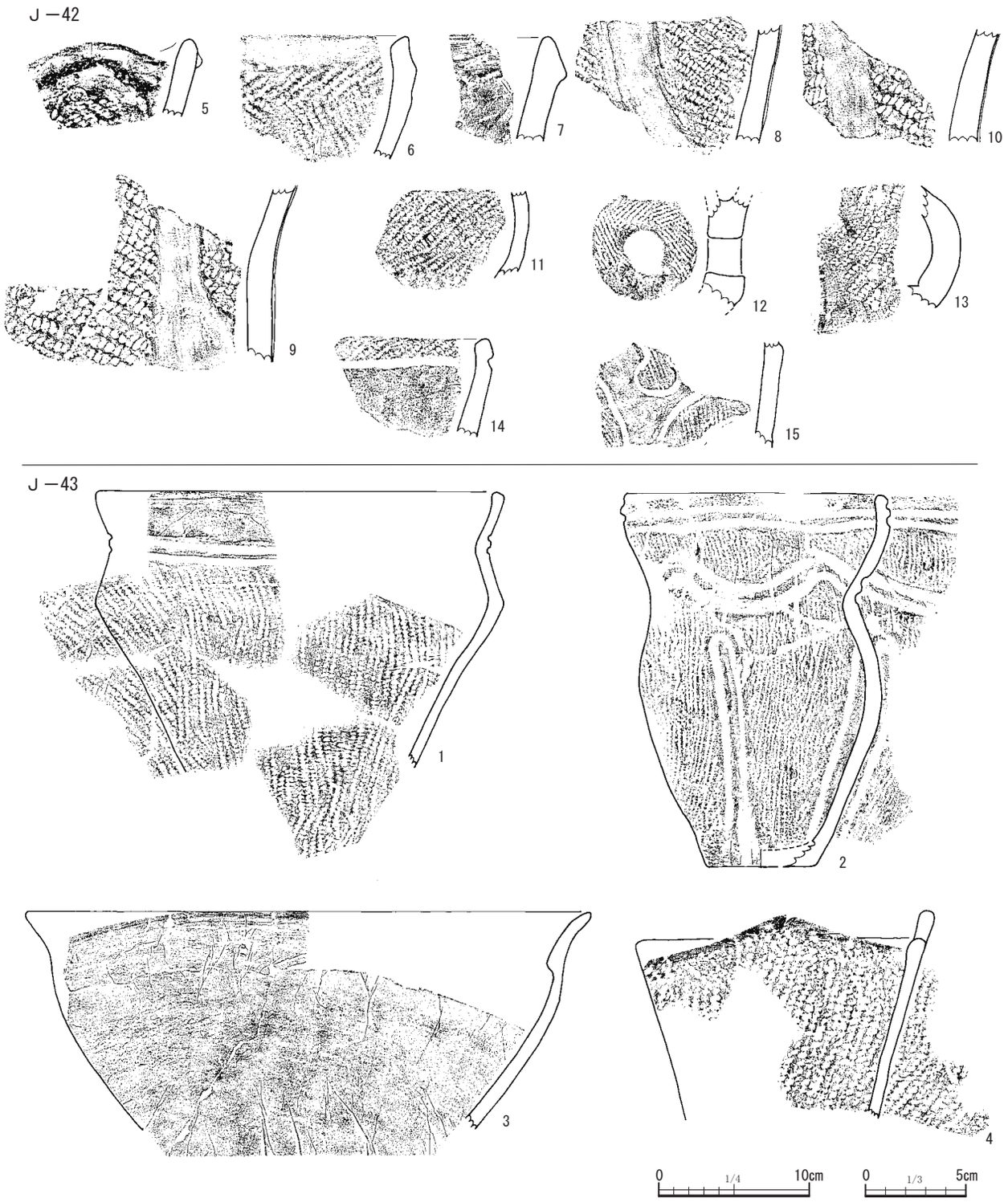
J-43(第 119 ～ 121 図・図版 17・18・42)

旧ル -12- 1 住。4.7 × 4.2 mの円形を呈す。0.2 mの掘り込みを有す。D -284(小竪穴)、D-285・286(土坑)、D-287(ピット) と重複し、当遺構が古い。壁溝が全周し、壁柱穴 15 本を伴う。柱穴は深さ 0.3 ～ 0.7 m の P1・P2・P4 の他に、浅いもの４本がある。炉は検出されておらず、あるいは D-287 によって失われ



第 119 図　Ｊ -43(1)

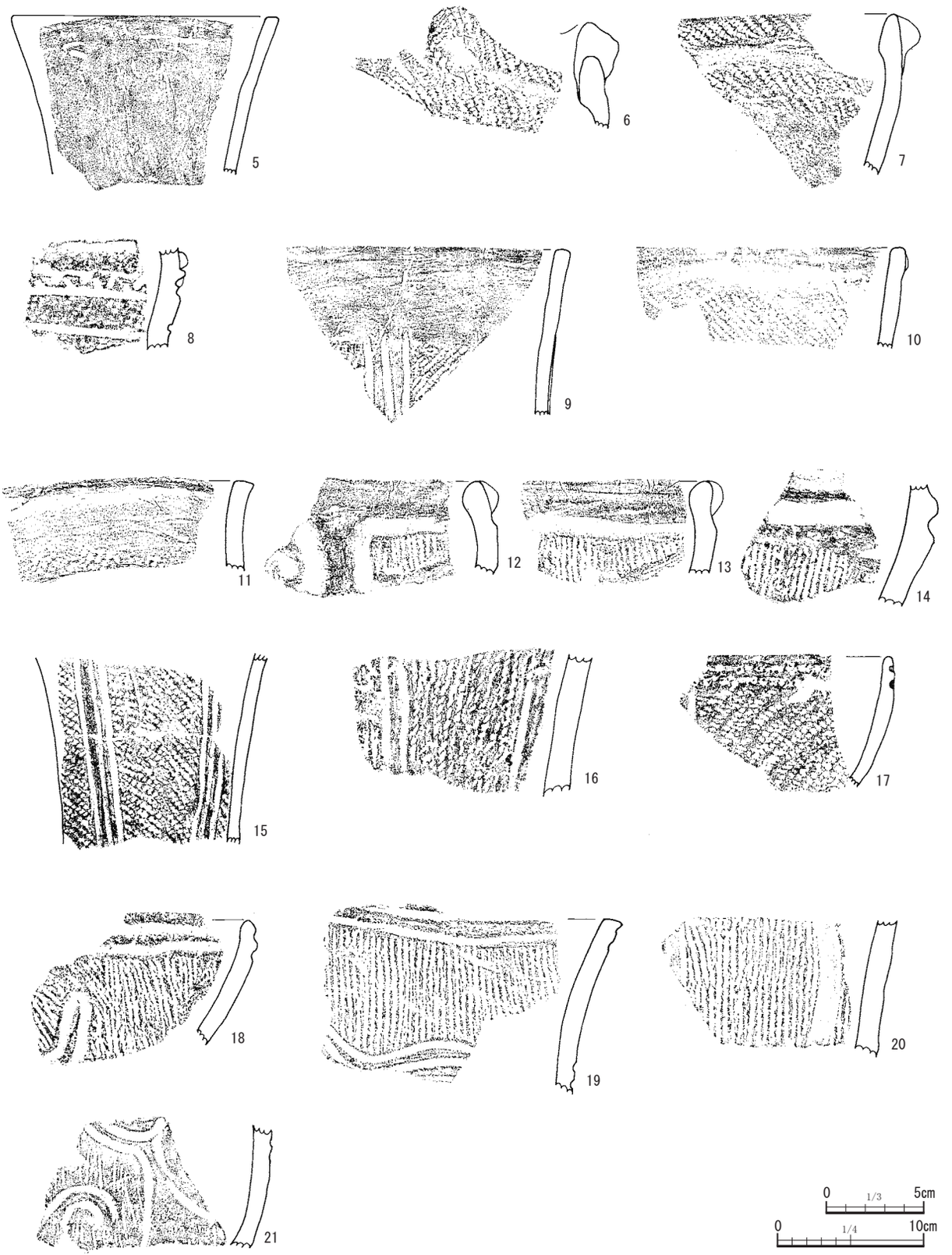
たものであろうか。東壁に近い部分の埋設土器の覆土には若干焼土が混じっていたが、位置から炉の可能性は低いであろう。埋設土器としたが、炉における炉体土器と土器片囲のように多数の個体が使われている。下部に埋め込まれている炉体土器にあたるものは２である。上部には少なくとも１・３・５・11・12・14 ～ 16・18・19・21 の 11 個体が使われており、１は７片、３・10 は２片ある。このうち、１・３・５・11・12・15 は覆土中ないし重複する土坑覆土からも破片が出土している。以上のほかに覆土中の出土地点が判明するものは４・11 であり、竪穴南半に散在している。確認面上からの出土遺物で住居



第 120 図　J -42(3)・J -43(2)

に伴うと判断できるのは 21 である。確認面上出土は６～８・10・13・17・20 である。

１は加曽利Ｅ式の鉢形土器である。くびれ部に沈線が引かれ、胴部には縄文が施される。２は加曽利ＥⅡ式に並行する連弧文土器である。撚糸文を地文とし、口縁部は沈線で区画され、胴上部に連弧文、胴下部は「逆Ｕ字状文」が施される。沈線間は磨消される。３は中期中葉の浅鉢である。内面に稜が認められる。



第 121 図　Ｊ -43(3)

４・５は加曽利Ｅ式と考えられる。４は縄文のみが認められる。５は口縁部に平坦面を持ち、胴部は無文である。６・７は阿玉台式後半の土器である。内面に稜を持ち、隆線と縄文で文様が施される。８は勝坂式後半の土器と考えられる。半截竹管による半隆線と縄文、交互刺突文が認められる。９～ 17 は加曽利ＥⅡ式である。９は口縁部文様が無文で、胴部に縄文と沈線による懸垂文が施される。10・11 は同様の文様構成を持つものと考えられる。12 ～ 14 は口縁部及び口縁に近い部分で、縄文と隆線で文様が構成される。15 は縄文を地文とし、沈線による懸垂文が引かれ、沈線間が磨消される。16 は地文が撚糸文である。17 は口縁部に列点、胴部に縄文と沈線が施される。連弧文系土器の可能性もある。18 ～ 20 は連弧文土器である。20 は半截竹管で沈線が引かれる。21 は曽利Ⅲ式と考えられる。まばらな条線を地文とし、沈線で文様が引かれる。

住居跡の時期は加曽利ＥⅡ式期である。土器以外では土器片錘３点 (第 279 図 36 ～ 38) が出土している。

J-44(第 122 ～ 124 図・図版 18)

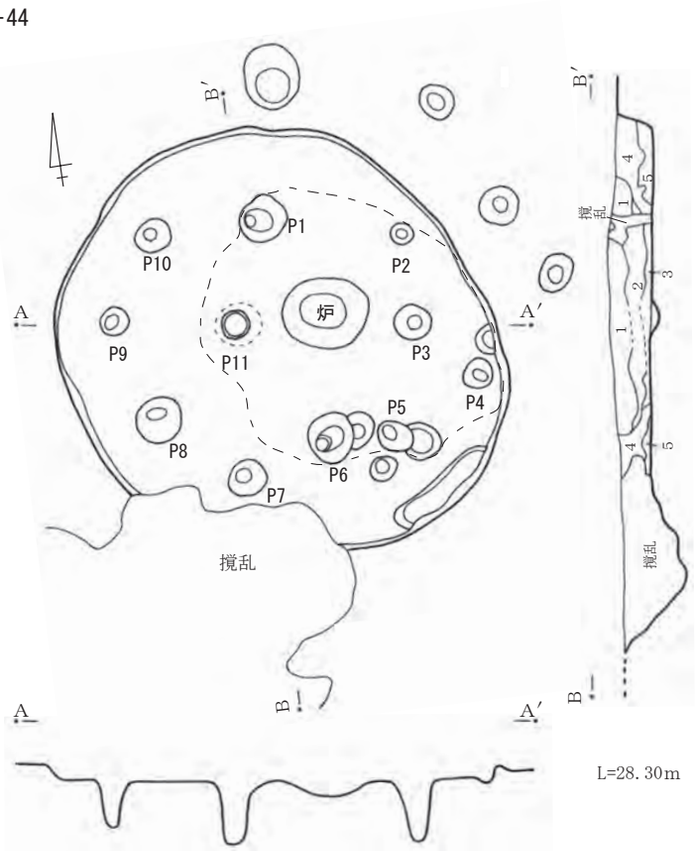
旧ル -13- １住。3.6 × 3.3 mの円形を呈す。壁高は 0.2 mの掘り込みを有す。壁溝が南東部の一部のみ遺存する。柱穴は深さ 0.5 ～ 0.7 mの P1・P4・P8・P9・P11 の他に、浅いもの７本がある。炉は中央に位置する。破線の範囲は踏みしめにより硬化し、光沢を帯びていた。炉の周辺の 1.2 m× 1.0 mの範囲は硬化面上に黒色土が貼り付いていた。住居跡出土土器は１～３・５～ 31 である。確認面上出土は４である。

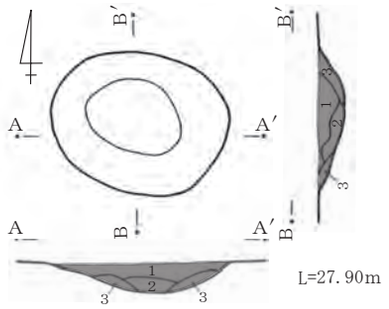
１は阿玉台Ⅱ式である。半截竹管による刺突が斜方向に施される。２～５は勝坂Ⅴ式と考えられる。２は隆線で枠状に区画され、区画内に集合沈線が引かれる。口縁部内面にも粘土紐が貼り付けられている。３は半截竹管による沈線と、隆線による区画が認められる。隆線上には刻みが施される。地文は櫛歯状工具による条線である。４・５は刻みを持つ隆線と沈線による文様が施される。６～ 16 は中期中葉末から後葉初頭の土器である。６・７は中峠０地点型深鉢である。６は狭い文様帯に集合沈線が施される。橋状把手が付される。７は３つの孔を持つ把手が付され、口縁部に隆線と交互刺突文が施される。隆線上には刻みが認められる。８は口縁部の把手部分で、大部分が欠損しているが中空の把手と考えられる。内面には稜が認められる。９は縄文と低く幅広の隆線が貼り付けられる。口縁部には円環状の突起が付されていたと考えられる。10 は２本の沈線と０段多条の RL が施される。14 は縄文を地文とし、沈線で文様が構成される。大木式系の影響が強く認められる。12・13 は口縁部がやや外反し、内面には稜が認められる。口縁部にやや広い無文帯を持ち､刻みが施された隆線が貼り付けられる。14 は中峠６次１住型深鉢である。口縁部が強く屈曲する器形で、口頸部に背割隆線と集合沈線が引かれる。15 は口縁部の屈曲部に交互刺突文が施される。16 は口縁部が外反し、口唇部には指ナデによる沈線が引かれる。器面全面に縄文が施される。

17 ～ 21 は加曽利ＥⅠ式である。17 は口縁部が強く屈曲する器形で、２本の隆線で渦巻文と区画と縄文が施される。渦巻文には大木式に特徴的な剣先文が付されていると考えられる。隆線脇は調整されていない。18 は縄文を地文とし、隆線で渦巻文と区画が施される。隆線脇は一部ナデられるが、調整されない部分が多い。19 は口縁部に波状の隆線が貼り付けられ、隆線脇には沈線が引かれる。20 は口縁部に隆線と沈線で文様が施される。21 は胴部に縄文と蛇行沈線が認められる。22 ～ 28 は文様と共に胎土や調整から加曽利Ｅ式と捉えたものである。22 ～ 26 は縄文のみが認められる。27 は櫛歯状工具による条線が引かれる。28 は突起と縄文が認められる。29 は曽利Ⅲ式と考えられる。口縁部に沈線で斜行文が施される。

30 は加曽利Ｅ式終末の土器である。口縁部が微隆線で区画され、胴部には縄文のみが認められる。31 は称名寺式中段階の土器である。帯縄文による文様が施され、帯縄文部と無文部の広さが等しくなるよう

J－44

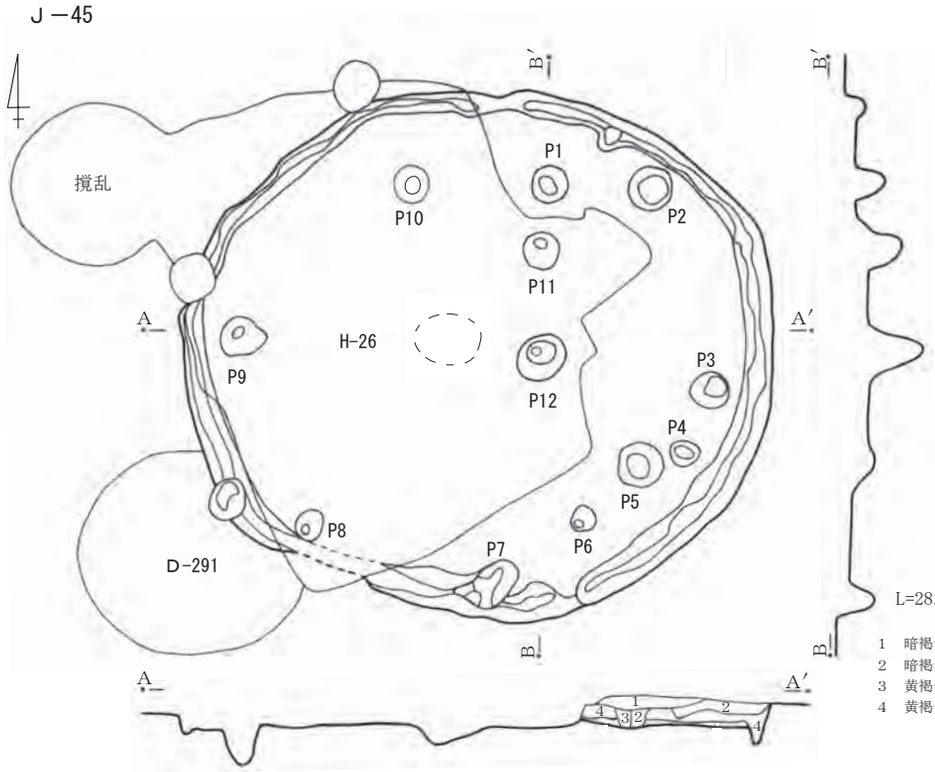




1　黒褐色土　　ローム粒・焼土粒を多く含む
2　橙色土　　焼土
3　黄褐色土　　ロームが火を受けている

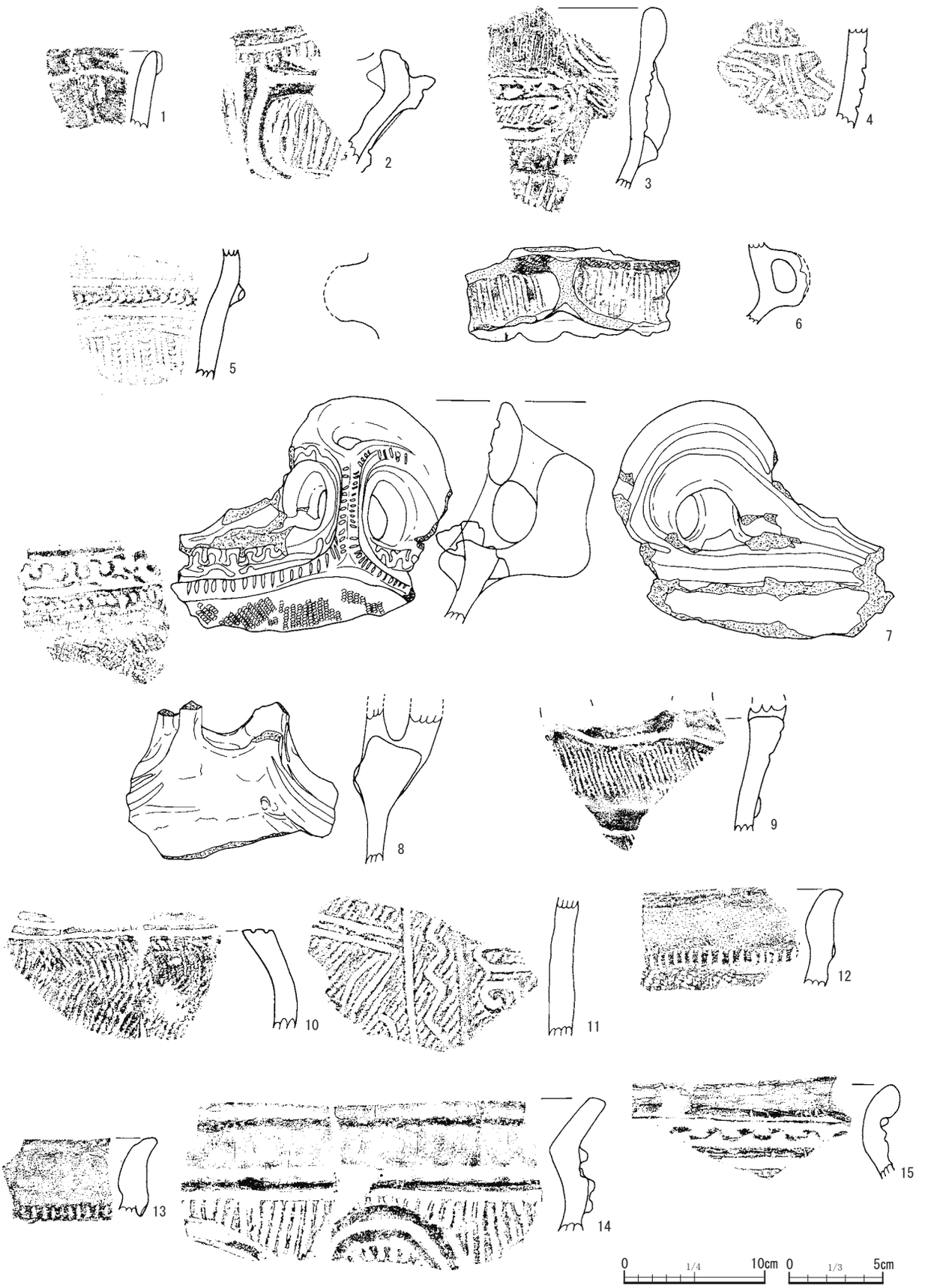
1　黒褐色土
2　黒褐色土　　焼土ブロックを含む
3　黒褐色土　　ローム粒を少し含み焼土粒・炭化物を多く含む
4　黒褐色土　　ローム粒を含む
5　褐色土　　ローム粒を多く含む

J－45



1　暗褐色土　　黒色土を斑文状に多く含む
2　暗褐色土　　黒色土を斑文状に少し含む
3　黄褐色土　　黒色土・暗褐色土を少し含む
4　黄褐色土　　黒色土・暗褐色土を含む

第122図　J -44(1)・J -45(1)



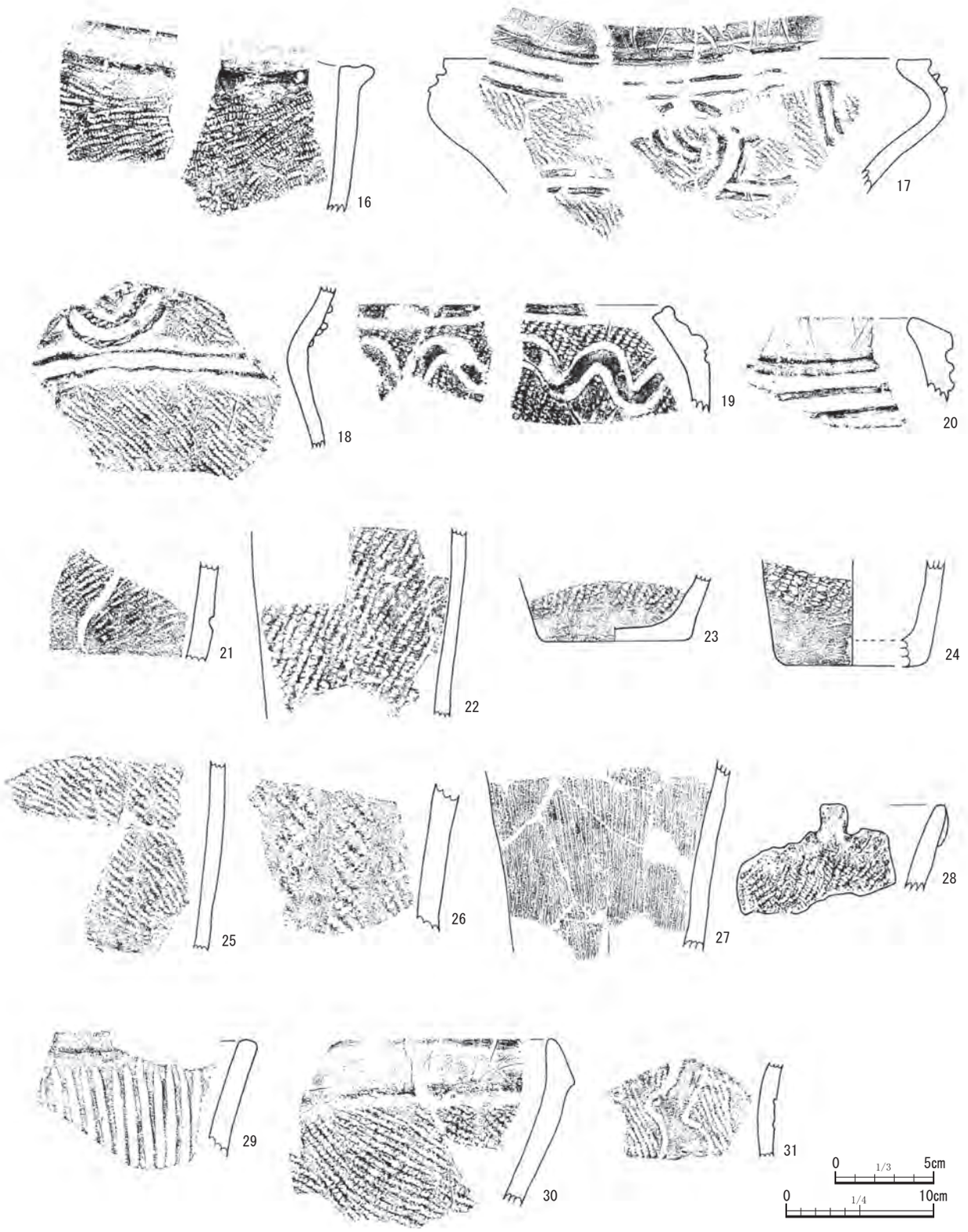
第 123 図　J -44(2)

に文様が構成される。

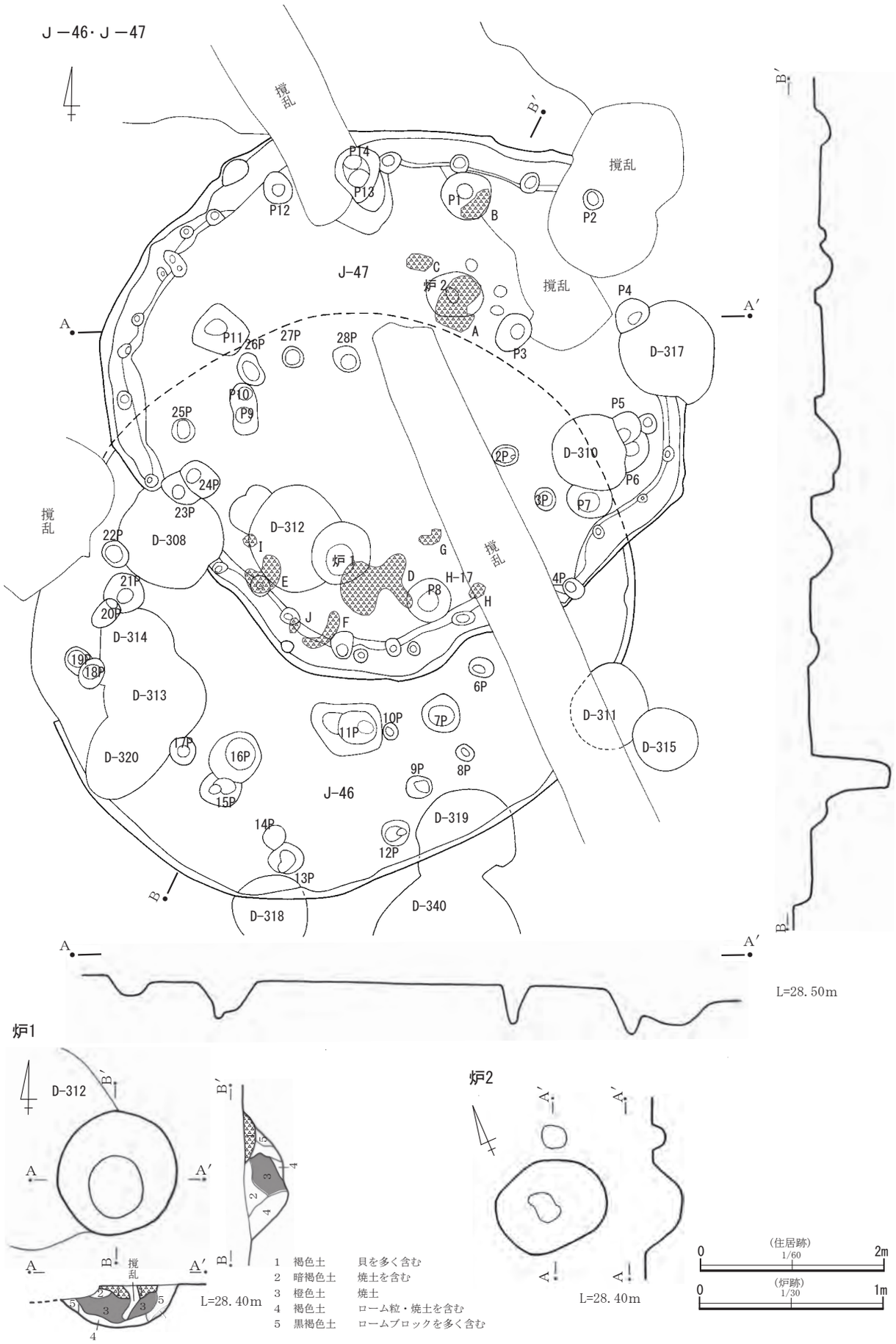
住居跡の時期は加曽利ＥⅠ式期と考えられる。土器以外では土器片錘 4 点 (第 279 図 39、41 ～ 43)、打製石斧 1 点 (第 285 図 48)、磨石類 1 点 (付表 3-3-149)、剥片類 2 点が出土している。

J-45(第 122・127 図・図版 18)

旧ル -14- 2 住。径 5.7 mの円形を呈す。0.2 mの掘り込みを有す。H -26(古代住居跡)・D -291(土坑)



第 124 図　J -44(3)



第125図　J -46(1)・J -47(1)

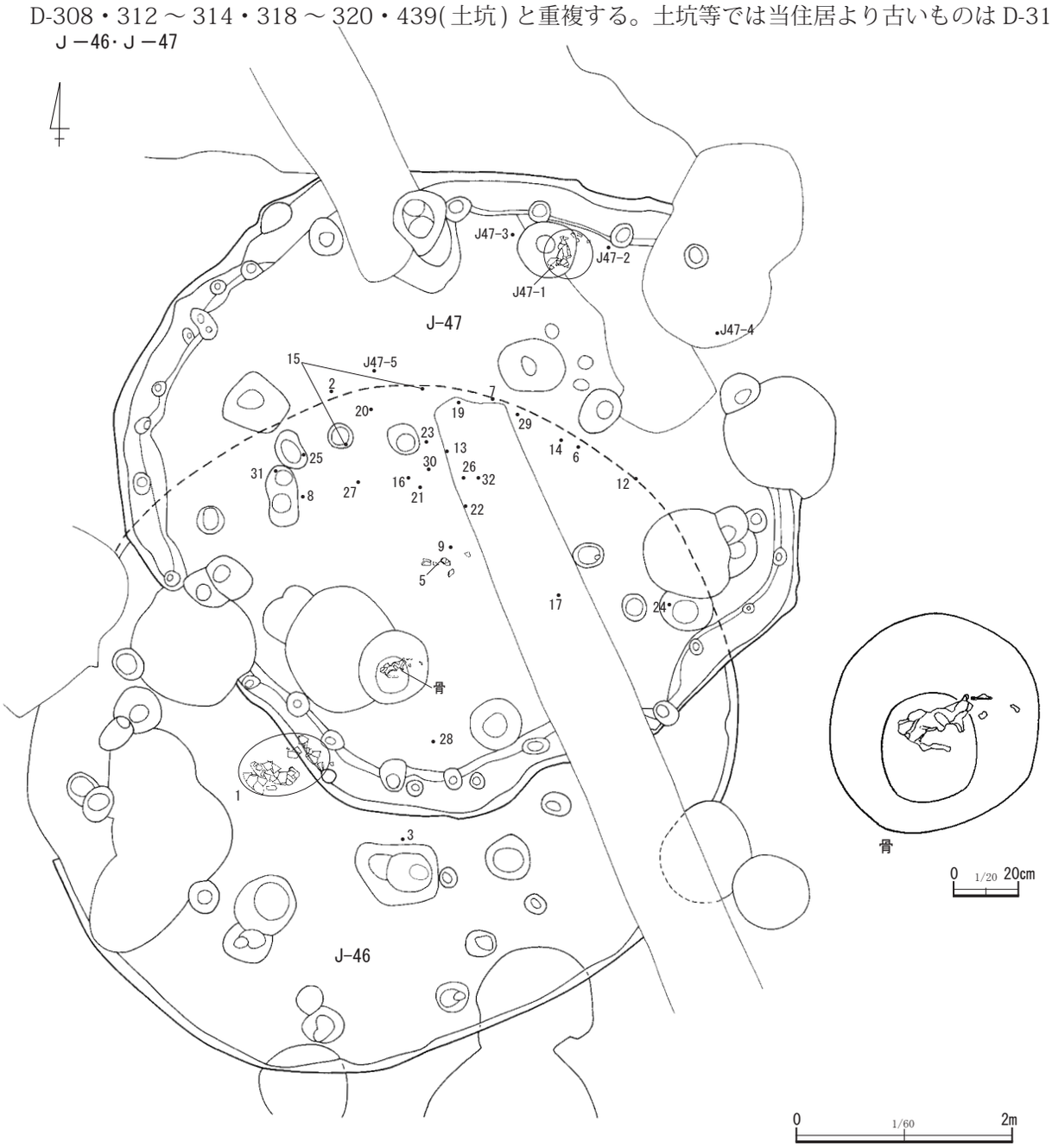
と重複し当遺構が古い。壁溝が全周し、壁柱穴４本を伴う。柱穴は深さ 0.3 ～ 0.5 ｍの P2・P5・P7・P9・P12 の他に浅いもの７本がある。炉は検出されていない。中央やや西寄りに床の硬化が認められた。確実に住居跡に伴う土器はない。確認面上出土は１～４である。

１～４は加曽利ＥⅡ式に伴う連弧文土器と考えられる。１は口縁部に交互刺突文が施され、胴部には縄文を地文とし、沈線が弧状に引かれ、磨消が認められる。２は口縁部に列点、胴部には縄文を地文とし、沈線が引かれ沈線間が磨消される。３は浅鉢で無文である。中期中葉の可能性がある。４は加曽利Ｅ式と考えられる。縄文のみが認められる。

住居跡の時期は加曽利ＥⅡ式期の可能性が高い。

J-46(第 125 ～ 128 図・図版 18・43)

旧ル -19-1 住。6.4 × 5.8 ｍの楕円形を呈す。掘り込みを有さず、J-47、D-310・311(小竪穴)、D-308・312 ～ 314・318 ～ 320・439(土坑) と重複する。土坑等では当住居より古いものは D-312 ～



第 126 図　Ｊ -46(2)･Ｊ -47(2)

314・318・320、新しいものはD-308・310・317・319、である。現地での土坑等との新旧、柱穴の帰属等の検討ではJ-46が新しくJ-47が古いとしており、土器1の出土位置がJ-47の竪穴の内外に跨ることからも裏付けられる。柱穴は番号の後ろにPを付けたものが当遺構に帰属する可能性が高いものである。炉は中央やや北寄りに位置する炉1が当遺構に帰属するものであり、焼土層を形成している。

住居内の出土位置を確認できた土器は、1～3・5～9・12～17・19～32である。注記から住居内と判断できるものは4・10(番号不明ピット内)・11・18である。J-46・47の範囲の確認面上から出土したものは第128図1～5である。

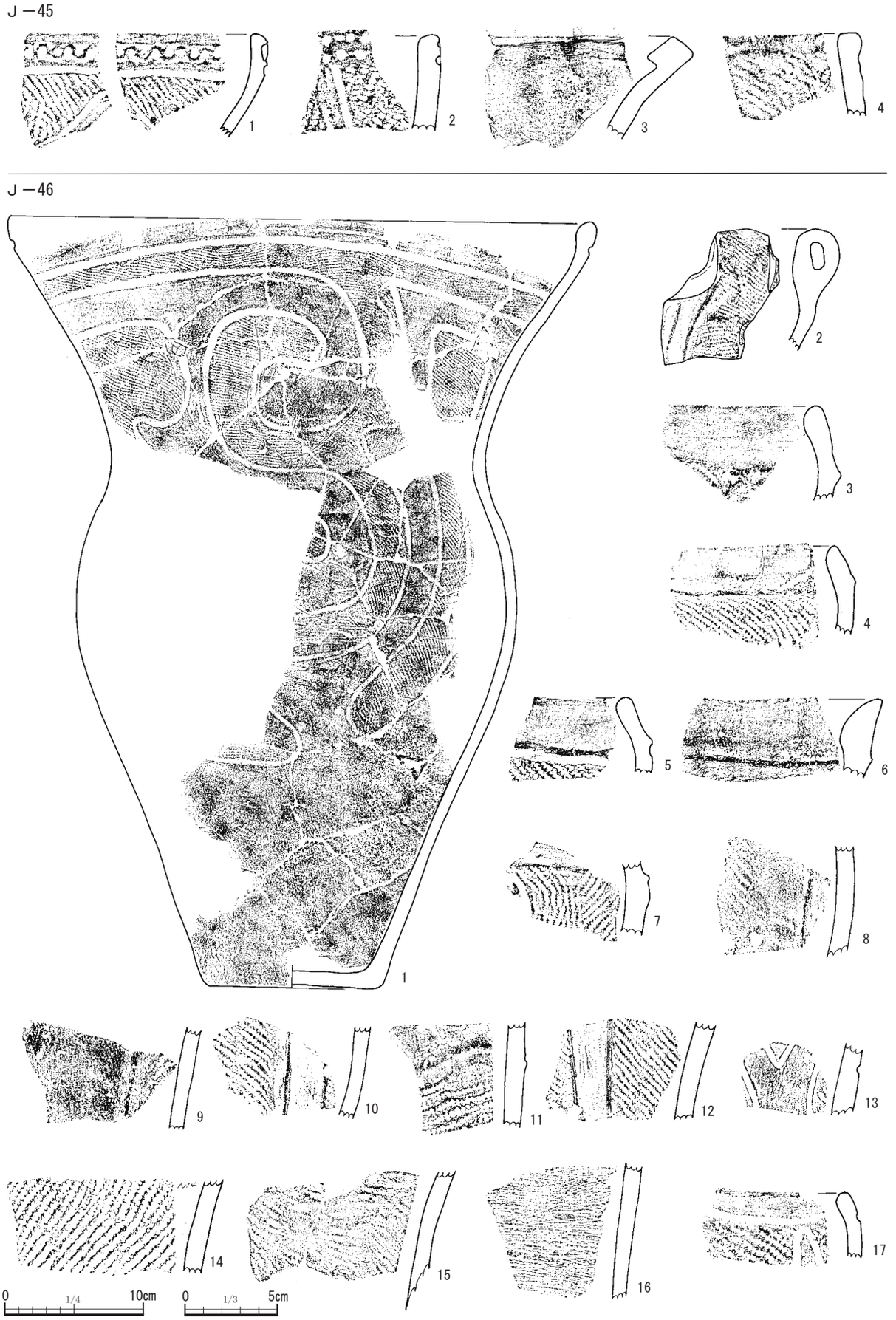
土器以外では、J-46またはJ-47として取り上げられているものも合わせると、蓋1点(第278図5)、土器片円板2点(第278図7・19)、土器片錘2点(第279図44・45)、石皿・台石1点(付表3-3-47)、石棒13点(296図7、付表3-3-17～21・28・31～36)、及び多数の剥片石器が出土している。剥片石器の内訳は石錐1点(付表3-5-18)、石鏃1点(第291図66)、同未成品4点(付表3-5-81～84)、石核3点(付表3-5-61・115・116)、剥片類353点・73ｇ(加工剥片3・剥片87・砕片247)である。石材は大半が黒曜石であり、石核・剥片類は石鏃製作に伴うものであろう。石棒は安山岩系の大形石棒の被熱・剥離破片である。火を伴う石棒祭祀に使われた後、竪穴内に廃棄されたものであろう。なお、J-47の範囲でも石棒片4点が出土している(付表3-3-22・23・29・30)。また、中央よりやや北のピット内、床面レベルから同定不可能な保存状態の悪い骨が出土しており、これも祭祀に関わる可能性がある。

1は称名寺式第4段階の土器である。帯縄文で2段のJ字文が施され、帯縄文部と無文部が等しくなるように文様が構成される。2～16は加曽利E式終末の土器である。2は加曽利EⅣ式である。口縁部に橋状把手が付され、胴部には微隆線と縄文が施される。微隆線脇はナデられる。3は口縁部が微隆線で区画され、胴部には縄文と微隆線が認められる。4・5は口縁部が微隆線で区画され、胴部に縄文のみが認められる。微隆線脇はナデられる。6は口縁部が微隆線で区画される。胴部の文様は不明である。7は微隆線で区画され、胴部には沈線と縄文が施される。微隆線上にも縄文が認められる。8・9は微隆線とまばらな縄文が認められる。10～12は微隆線と縄文が施される。10・11は微隆線上にも縄文が認められるが、12は微隆線脇がナデられて調整される。13は沈線と縄文で「対向U字文」が施されているものと考えられる。14・15は縄文のみが認められる。15はややまばらである。16は櫛歯状工具による条線が引かれる。

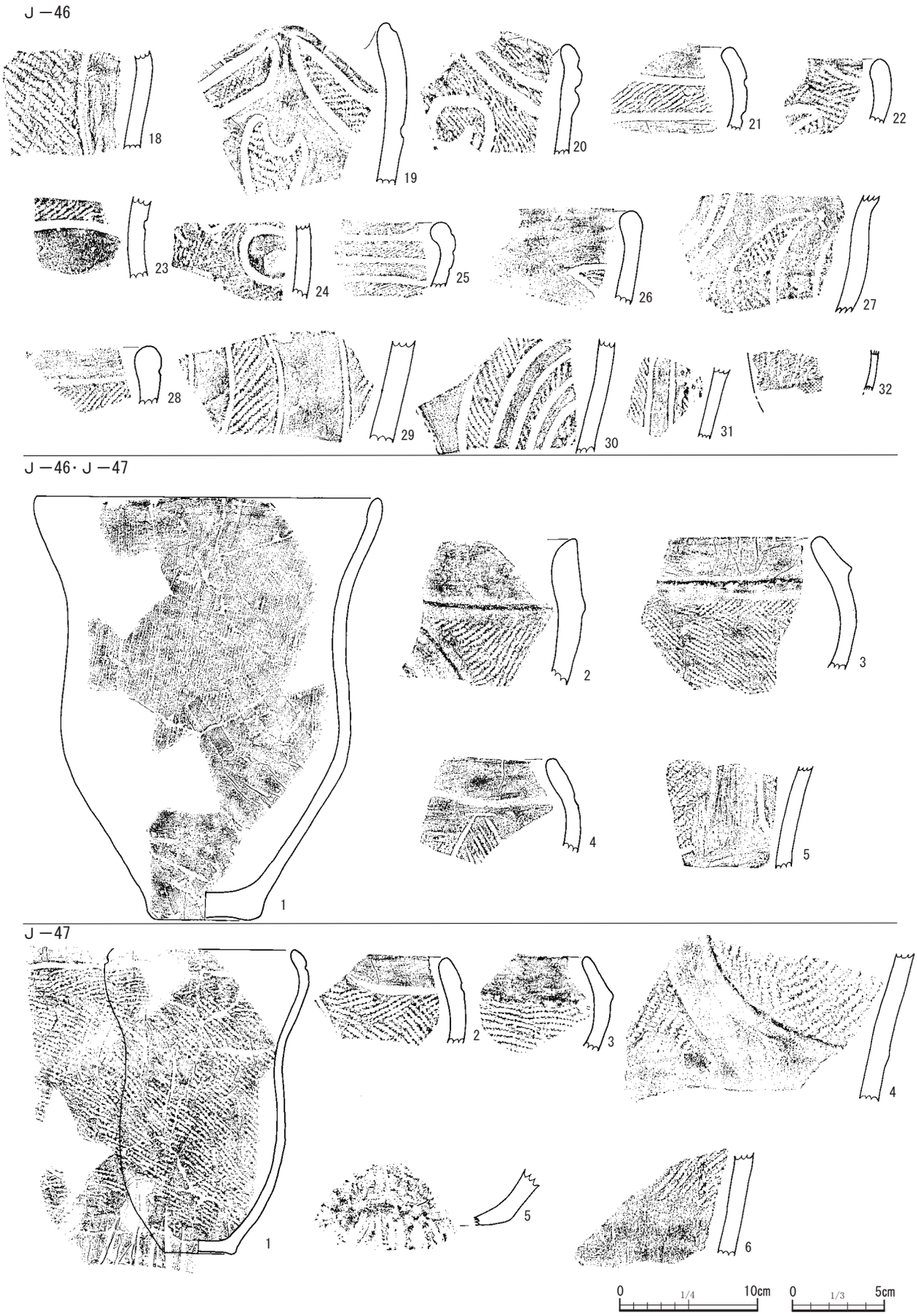
17・18は加曽利EⅢ式の「横位連繋弧線文土器」と考えられる。19・20は称名寺式第1段階の土器である。19は太く深い沈線が引かれる。口縁部に窓枠状の区画が認められる。全体的に文様構成に乱れが認められる。20は口縁部に段を持つ。太く深い沈線と縄文で文様が施されるが、帯縄文は不徹底である。19・20共に沈線による内面突出は認められない。21～27はやや太く深い沈線と縄文による帯縄文で文様が構成されることから称名寺式古段階と捉えた。このうち22～24は文様構成から称名寺Ⅰ式(第2段階)と考えられる。25～27は細別段階の特定はできない。28～30は浅い沈線と縄文による帯縄文で文様が構成されることから称名寺式中段階と捉えた。29・30は帯縄文部と無文部の幅が等しくなるように構成される。31は堀之内式と考えられる。縄文を地文とし、沈線が引かれる。32は時期不明である。薄手で胴部に縄文のみが認められる小形土器小片で、胎土は白っぽく異系統的である。外面に赤色系顔料が付着、色調は茶色を帯びる。内面は黒色で塗膜状の付着物がある。土製品で容器としたものと同様のものとみられる。

住居跡の時期は称名寺式第4段階と考えられる。

J-46またはJ-47出土土器　1～5は加曽利E式終末の土器である。1は櫛歯状工具による条線が引かれ



第 127 図　J -45(2)・J -46(3)



第128図　J -46(4)・J -46.47・J -47(3)

る。２は口縁部が微隆線で区画され、胴部には微隆線と縄文で「逆Ｕ字状文」が施される。微隆線脇はナデられる。３は器形がキャリパー形で、口縁部が微隆線で区画され、胴部には縄文のみが認められる。微隆線脇はナデられる。加曽利ＥⅣ式の可能性がある。４は口縁部がナデによる沈線で区画され、沈線と縄文で「逆Ｖ字状文」が施される。５は沈線と縄文で「Ｕ字状文」が施される。

J-47(第 125・126・128 図・図版 18)

旧ル -19-2 住。6.0 × 5.9 ｍの円形を呈す。掘り込みを有さず、J-46、D-310(小竪穴)、D-308・312・317(土坑)と重複する。現地の観察によると土坑等はすべて当住居より新しい (D-308・310・312・317)。J-46 との新旧は、前述の通り当遺構が古い。壁溝が全周し、壁柱穴 24 本を伴う。柱穴は番号の前にＰをつけたものが当遺構に帰属する可能性が高いものである。炉は北東寄りに位置する。覆土に焼土を含む。重複する２軒の住居跡の範囲で 10 か所の小規模貝層が検出されており、いずれも J-47 のプランの範囲内に収まるが、J-46 が新しいという見解から、Ｄ～Ｊは J-46 に帰属する。最大のＡは径 70cm、厚さ 14cm で他はごく小さい。分布も分散的であり少量の貝殻を何度も廃棄したのであろう。Ｄ～Ｈ貝層の下面には灰の堆積がみられた。なお、Ｄ貝層が一部かかる炉内部、床面付近から保存状態の悪い骨が出土している。

住居内の出土位置を確認できた土器は１～５である。１はP1 内でＢ貝層に伴う。注記から住居内と判断できるものは６(P24 出土。J-46 に帰属するが修正できなかった)である。J-46 または 47 の範囲の確認面上から出土したもの及び表土・撹乱・グリッド一括土器、土器以外の出土遺物については、J-46 に記載した。

１～４は加曽利Ｅ式終末の土器である。１は口縁部が太く浅い沈線で区画され、胴部には縄文のみが施される。器形から加曽利ＥⅣ式の可能性が高い。３は口縁部が微隆線で区画され、胴部には縄文と微隆線が認められる。２は口縁部が沈線で区画され、胴部に縄文と沈線で文様が構成される。３は口縁部が器形の屈曲部分で区画され、胴部には縄文のみが認められる。４は胴部に微隆線と縄文で「Ｕ字状文」が施されていると考えられる。微隆線上にも縄文が認められる。５・６は加曽利Ｅ式である。５は底部付近の破片である。縄文と沈線が認められる。底部には古代以降の刀傷痕のようなものが認められる。

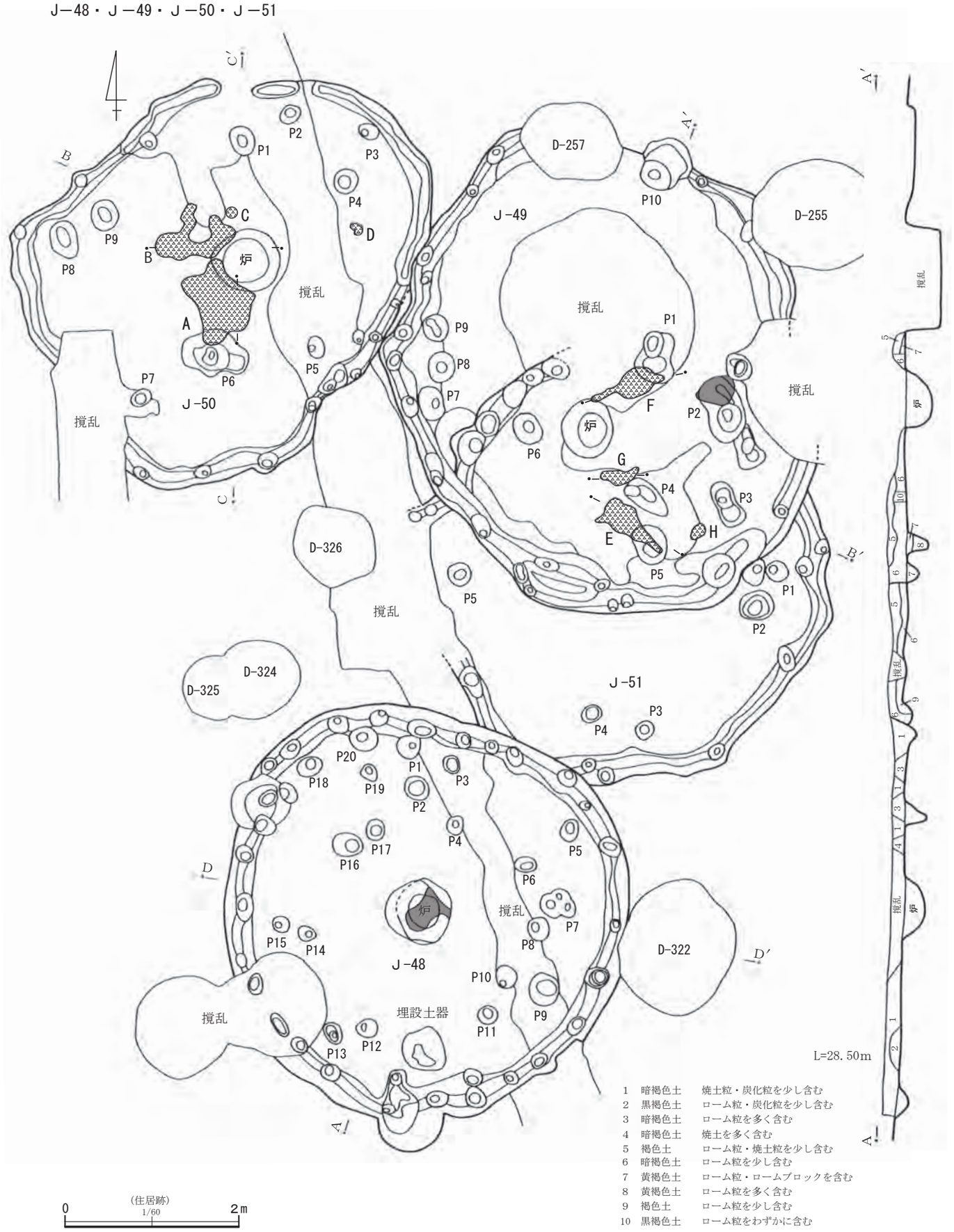
住居跡の時期は加曽利ＥⅣ式期の可能性が高い。土器以外では石棒４点(付表 3-3-22・23・29・30)、剥片類５点が出土した。

J-48(第 129 ～ 131 図・図版 18・43・46)

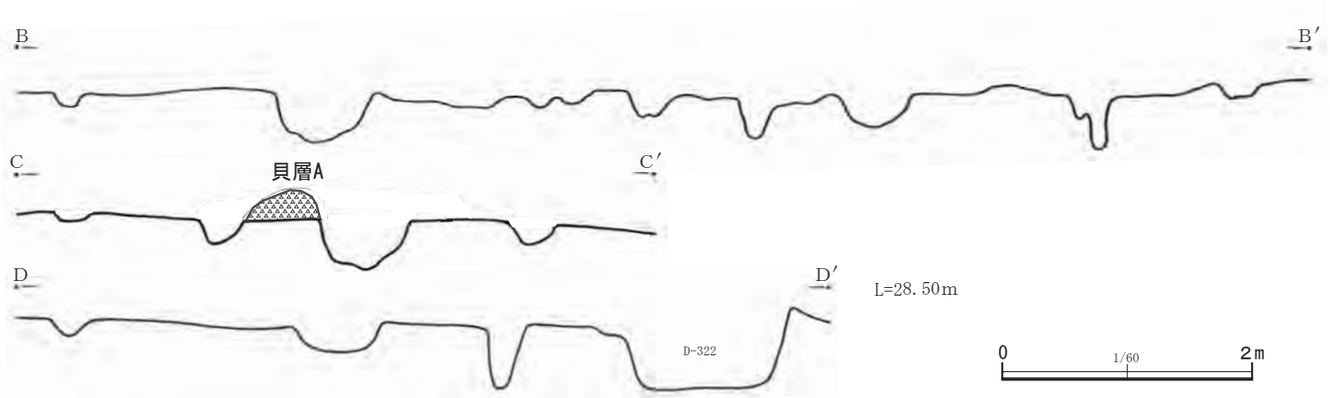
旧ル -20- １住。4.9 × 4.8 ｍの円形を呈す。掘り込みの有無の判断が難しい。J-51、D-322(小竪穴)と重複する。J-51 との重複はわずかだが、現地では当遺構のほうが古いとしている。壁溝が全周し、壁柱穴 32 本を伴う。北側では２重に並んでおり、壁もやや張り出しており、現地では拡張があったとみている。南側の張り出しと連結する２対の壁柱穴は入口施設の可能性があり、内側に土器が埋設されている。柱穴は深さ 0.4 ～ 0.6 ｍの P7・P8・P11・P15・P16・P19 の他に浅いもの 14 本がある。南側壁際に深鉢(１)が埋設され、上部を北に傾けている。炉は中央に位置し、底面に燃焼面を形成する。住居跡出土土器は１～ 19 である。

１～ 17 は加曽利Ｅ式終末の土器である。１は加曽利ＥＶ式の可能性が高い。口縁部が内弯するキャリパー形であるがやや歪んだ器形である。口縁部に橋状把手が付され、微隆線と縄文で「Ｕ字状文」と長楕円形の文様が施される。隆線脇にナデは認められるが、ナデられた後に縄文が施されている。２～４は深鉢に付される把手である。２は突起状になり、橋状把手が認められる。突起頂部は凹み、外面に縄文と列点が認められる。３は把手部分を欠損する。列点と縄文が認められる。５～７は口縁部が微隆線で区画され、

J－48・J－49・J－50・J－51

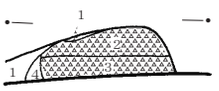


第129図　J -48(1)・J -49(1)・J 50-(1)・J -51(1)



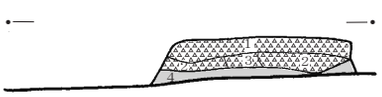
J-50

貝層A



1 暗褐色土
2 混土貝層 二枚貝主
3 混土貝層 イボキサゴ主、黒褐色土混
4 黒褐色土

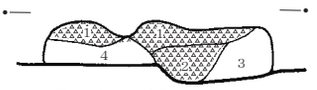
貝層B



1 混土貝層 イボキサゴ主、黒褐色土混
2 混土貝層 イボキサゴ主
3 暗黄褐色土
4 灰層

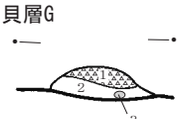
J-51

貝層E



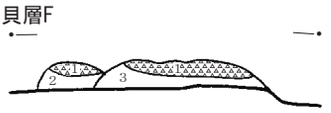
1 貝層 二枚貝と破砕貝
2 混貝土層 黒褐色土に破砕貝とマガキ
下部にマテガイの薄層
3 黒褐色土
4 黒褐色土 ローム混

貝層G



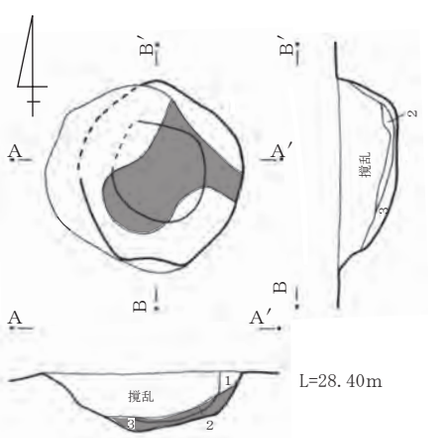
1 貝層 二枚貝と破砕貝
2 黒褐色土
3 灰層

貝層F



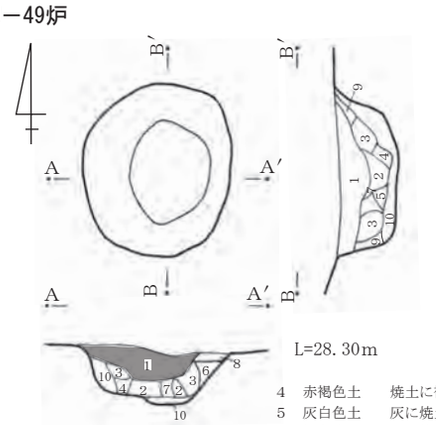
1 貝層 二枚貝主、イボキサゴ含む
2 黒褐色土
3 暗黄褐色土

J－48炉



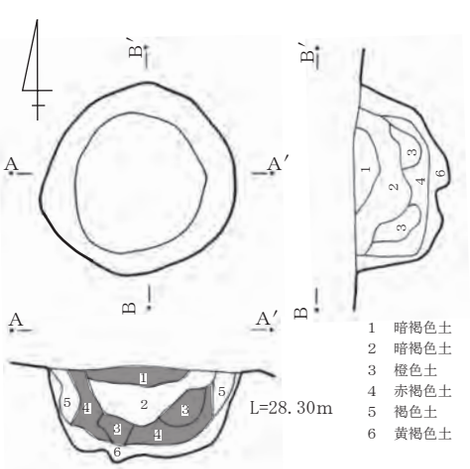
1 暗褐色土 焼土を少し含む
2 赤褐色土 焼土
3 褐色土 火を受けている

J－49炉



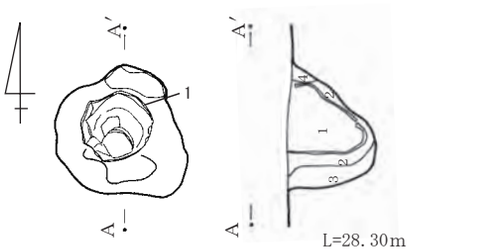
1 黒褐色土 焼土を多く含む
2 橙色土 焼土粒を多く、炭化物をわずかに含む
3 赤褐色土 焼土に炭化物を含む
4 赤褐色土 焼土に褐色土を含む
5 灰白色土 灰に焼土粒を多く含む
6 橙色土 灰に焼土ブロックを含む
7 橙色土 灰に焼土を含む
8 黒褐色土 灰を多く含む
9 暗褐色土 焼土を少し含む
10 赤褐色土 焼けたローム

J－50炉

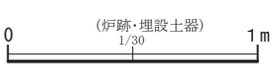


1 暗褐色土 焼土粒を多く含む
2 暗褐色土 焼土粒を少し含む
3 橙色土 焼土
4 赤褐色土 焼土
5 褐色土 焼土を含む
6 黄褐色土 ロームを多く含む

J－48埋設土器



1 黒褐色土 炭化材を少し含む
2 暗褐色土 ローム粒を多く含む
3 褐色土 ロームとロームブロックの混土
4 褐色土 ロームブロックと褐色土を突き固めた層



第130図 J-48(2)・J-49(2)・J 50-(2)・J-51(2)

胴部には縄文のみが認められる。６は微隆線の一部に突起が施される。８～ 12 は微隆線と縄文により文様が施される。いずれも微隆線脇はナデられる。13・14 は胴部に沈線と縄文で文様が構成される。13 は円環状の突起が付される。15 ～ 17 は胴部に縄文のみが施される。18・19 は加曽利Ｅ式と考えられる。18 は小形の無文土器で底部がやや出っ張る。19 は底部で縄文のみが認められる。

住居跡の時期は加曽利ＥⅣ式～ＥⅤ式期と考えられる。土器以外では土器片円板１点 (第 278 図 21)、土器片錘１点 (第 279 図 46)、打製石斧３点 (第 283 図８、第 285 図 46・59)、磨石類１点 (付表 3-3-59)、石皿・台石１点 (第 290 図 22)、軽石製品１点 (第 293 図 18)、黒曜石の石鏃１点 (第 291 図 62)・剥片類 10 点が出土している。剥片類は石鏃製作に伴うものであろう。

J-49(第 129・130・132 図・図版 18)

旧ル -20- ２住。5.8 × 4.8 mの楕円形を呈す。掘り込みの有無の判断が難しく、J-50･51、D-255(小竪穴)、D-257(土坑) と重複する。壁溝が全周し、壁柱穴 15 本を伴う。柱穴は深さ 0.3 ～ 0.8 mの P2・P3・P5 ～ P7・P10 のほか浅いもの４本がある。炉は中央に位置し、底面に燃焼面を形成、覆土にも焼土を含む。J-51 との重複部分で貝層を検出しており、現地では当遺構に伴うものとして調査したが、J-51 が J-49 の覆土を切っているとみられるため、貝層は J-51 に帰属するものとした。住居跡出土土器は１～４・６・７・９・12・14 ～ 16・18 ～ 21 である。確認面上出土は５・８・10・11・13・17 である。

１～４は加曽利ＥⅢ式である。１～３は「横位連繋弧線文土器」である。口縁部が沈線で区画され、胴部に縄文と沈線で文様が構成される。４は「意匠充填文系土器」と考えられる。微隆線と縄文が施され、微隆線間に突起が付される。５～９は加曽利Ｅ式後半の土器である。５は沈線と縄文で文様が構成される。６～９は縄文のみが施される。

10 ～ 20 は加曽利Ｅ式終末の土器である。10 ～ 12 は口縁部が微隆線で区画され、胴部は微隆線と縄文で「逆Ｕ字状文」が施される。10 は微隆線脇がナデられるが、11 は微隆線脇上にも縄文が認められる。13 は口縁部が沈線で区画され、胴部に縄文のみが認められる。14 は口縁部が微隆線で区画され、胴部には縄文のみが認められる。15 ～ 17 は胴部に微隆線と縄文で文様が施される。15・16 は微隆線脇がナデられるが、17 はナデられていない。18 は沈線と縄文で文様が構成される。19 は櫛歯状工具による条線が引かれる。20 は把手の一部である。21 は称名寺式第１段階の土器である。太く深い沈線と縄文で施される。帯縄文が不徹底である。

住居跡の時期は加曽利ＥⅢ式期と考えられる。土器以外では蓋１点 (第 278 図 14)、打製石斧１点 (第 283 図５)、石皿・台石１点 (付表 3-3-50)、石鏃１点 (第 291 図 27)、剥片類２点が出土している。

J-50(第 129・130・133 図・図版 18・19・43)

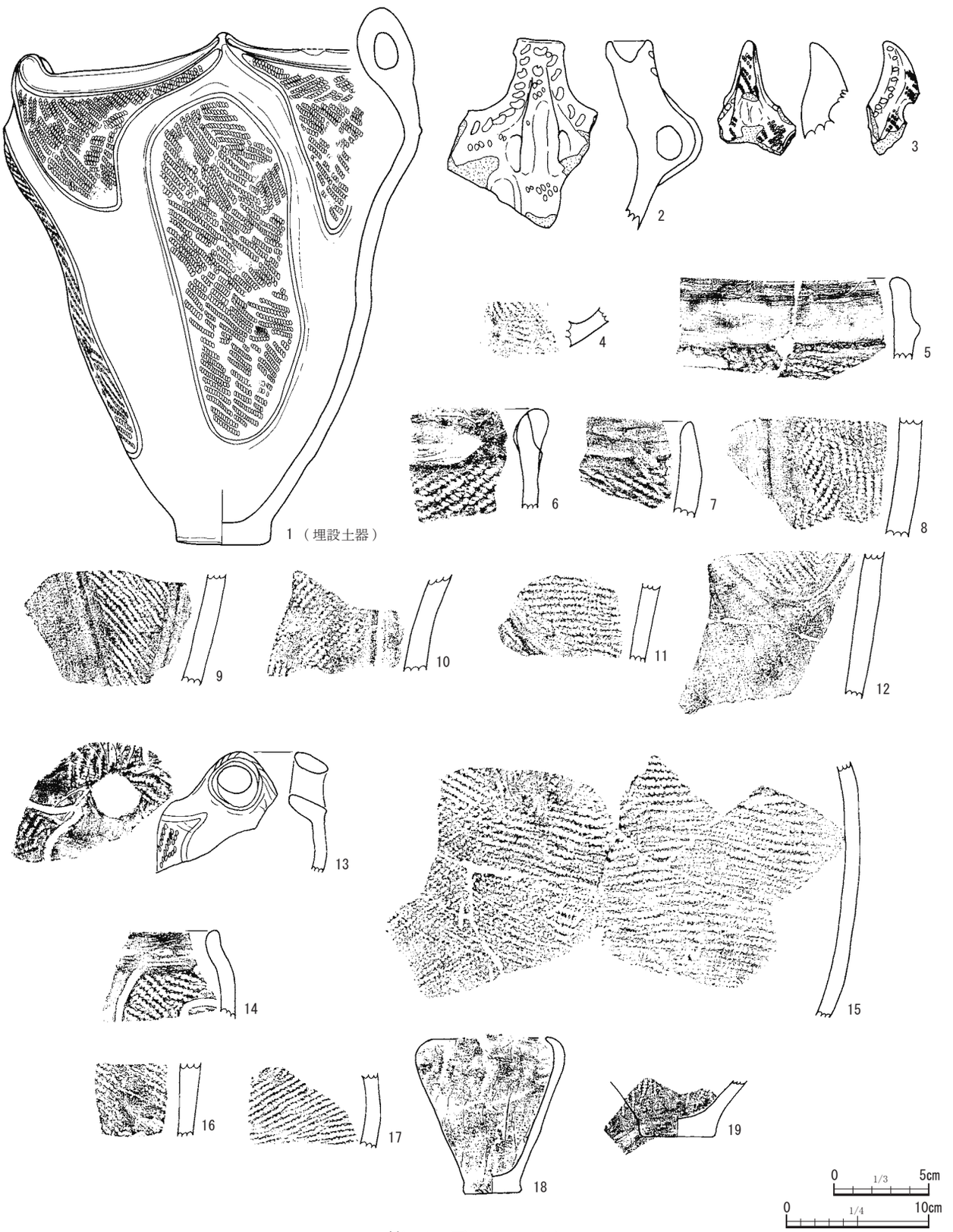
旧ル -20- ３住。5.0 × 4.0 mの楕円形を呈す。掘り込みの有無の判断が難しく、J-49・51 と重複する。壁溝が全周し、壁柱穴 12 本を伴う。柱穴は深さ 0.3 ～ 0.4 mの P2・P4・P6・P8 の他浅いもの５本がある。炉は中央に位置し、覆土に焼土を含む。

４か所の貝層があり、Ｃ・Ｄはごく小規模である。Ａ・Ｂは炉の部分を避けるように位置しており、Ａは 70cm × 60cm、厚さ 19cm、Ｂはやや小さく厚さは 13cm を測る。いずれも貝層下の床面上にうっすらと灰が堆積していた。写真等の記録がなく不確かではあるが、千葉市大膳野南貝塚や加曽利貝塚等で確認された「漆喰状」の貝灰であった可能性が考えられる。なお、Ａは P6 の上部に若干流れ込んでいた。

住居跡出土土器は３～ 18・20 ～ 24 である。J-49 または J-50 で取り上げられた土器は１・２である。J-50・J-51 の確認面上出土は第 133 図 J-50・J-51- １である。

１～８は加曽利Ｅ式終末の土器である。１は加曽利ＥⅤ式である。器形がほとんど屈曲せず立ち上がる。

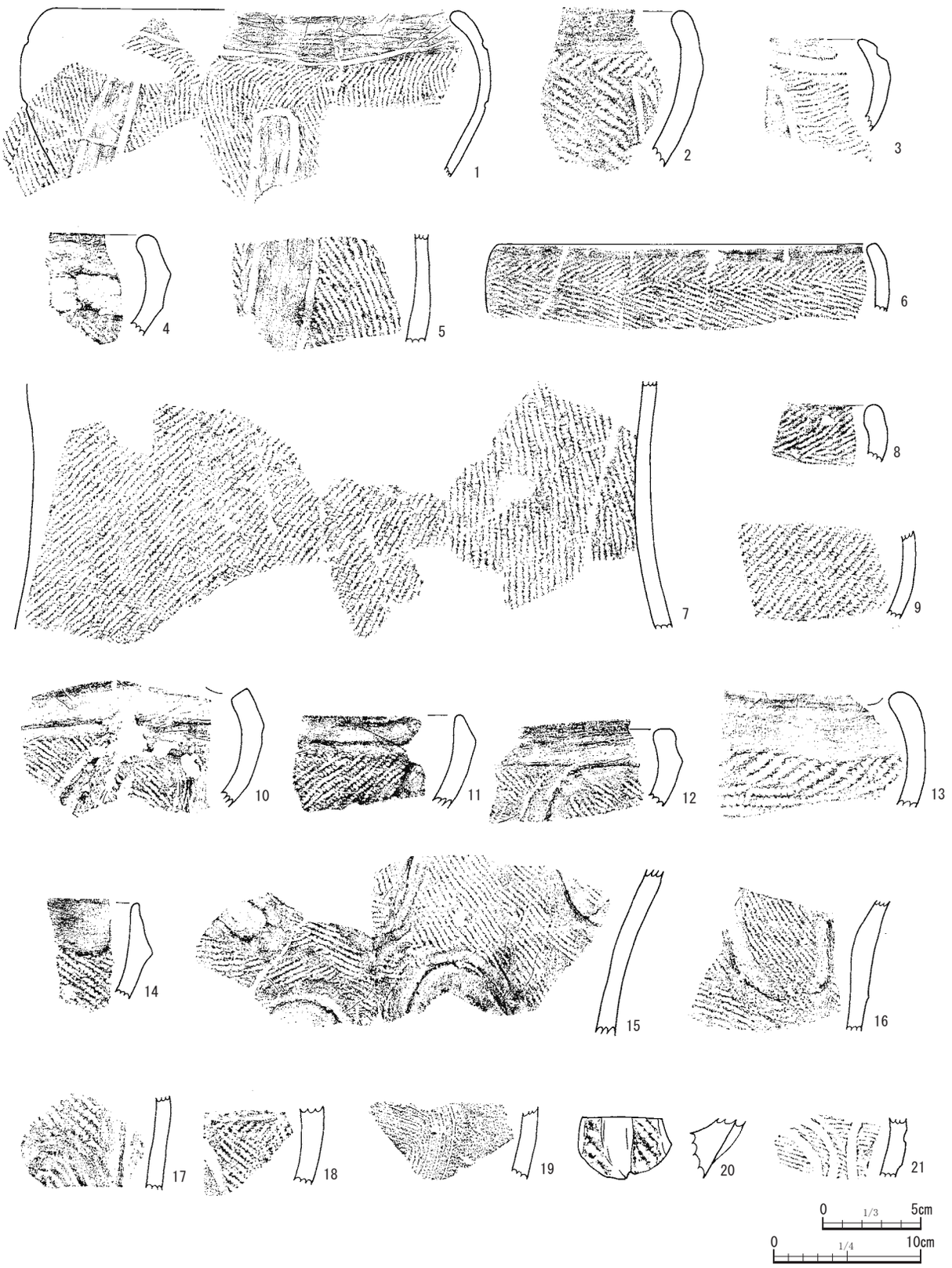
口唇部には平坦面を持つ。口縁部が細い沈線で区画され、胴部には縄文のみが施される。２は瓢形土器の底部で高台が付く。器壁は薄く、器面調整は丁寧である。微隆線が貼り付けられる。３は注口土器の注口部である。微隆線が貼り付けられる。胎土などから２と同一個体の可能性が高い。４は口縁部が微隆線で区画され、胴部には縄文のみが認められる。微隆線脇はナデられる。５は口縁部がナデによる沈線で区画



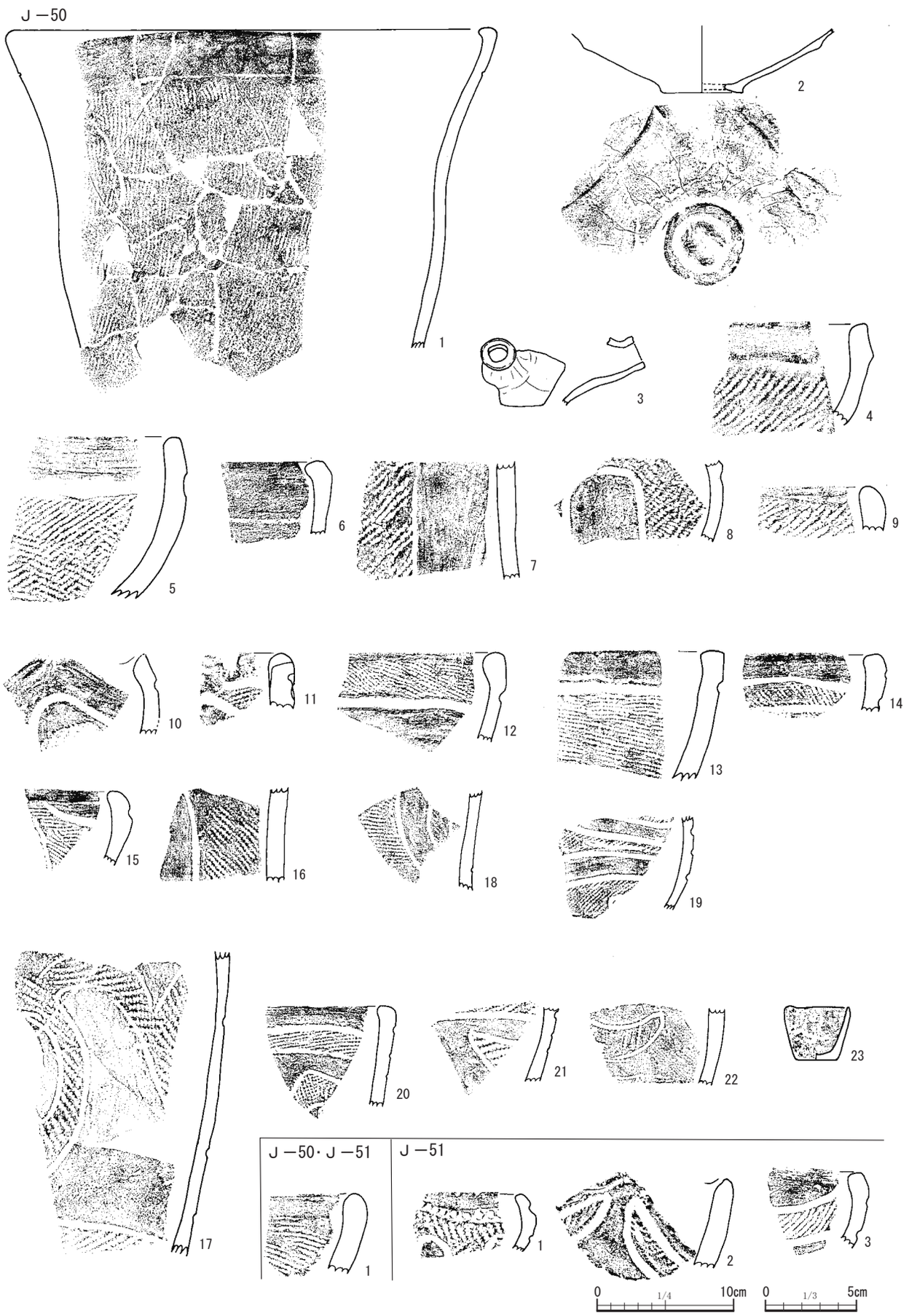
第 131 図　Ｊ -48(3)

され、縄文のみが施される。６は口縁部が沈線で区画され、胴部は無文である。７・８は沈線と縄文で文様が構成される。８は加曽利ＥⅢ式の可能性もある。９は加曽利Ｅ式後半と考えられる。口縁部に縄文のみが認められる。

10 ～ 22 は称名寺式である。10 ～ 13 は称名寺式第１段階と考えられる。10 は太く深い沈線のみが施



第 132 図　Ｊ -49(3)



第133図　J -50(3)・J -51(3)

される。11・12 は口縁部に太い沈線と縄文で文様が施される。11 は口唇部に刻みが認められる。13 は口唇部に平坦面を持ち、口縁部が太く深い沈線で区画され縄文のみが施される。14 ～ 19 は称名寺式古段階の土器と考えられる。太い沈線と縄文による帯縄文で文様が構成される。15 は文様構成から称名寺Ⅰ式 (第２段階) と考えられる。17 は横位連結するＪ字文が施されていると考えられ、称名寺式第３段階の可能性が高い。20 ～ 22 は称名寺式中段階の土器と考えられる。浅い沈線と縄文による帯縄文で文様が施される。帯縄文部と無文部の幅が等しくなるように構成される。23 はミニチュア土器である。

J-50 または J-51 出土土器　１は口縁部の屈曲する部分で区画され、縄文のみが認められる。

住居跡の時期は加曽利ＥⅤ式期と考えられる。土器以外では J-50 または J-51 のものも含めて蓋２点 (第 278 図 10・13)、石鏃１点、剥片類２点が出土している。

J-51(第 129・130・133 図・図版 18・19)

旧ル -20- 4 住。5.1 × 4.6 mの楕円形を呈す。掘り込みの有無の判断が難しく、J-48･49･50 と重複する。J-48 との重複はわずかだが、現地での観察では当遺構が新しいとしている。壁溝が全周し壁柱穴 14 本を伴う。柱穴は深さ 0.4 ～ 0.5 mの P2・P5 の他に浅いもの３本がある。炉は不明である。J-49 との重複部分で４か所の貝層が検出されている。現地では J-49 に伴うものとして調査されたが、J-51 が J-49 の覆土を切っているとみられるため、貝層は当遺構に帰属するものとした。もっとも大きいＥ貝層は 80cm × 30cm、厚さ 10cmを測る。薄い貝層だが上部にはマテガイの集中がみられた。F の規模も同程度であり、G・Hはごく小さい。いずれも覆土下層に水平堆積しているが、Ｅ貝層は P5 の上部に流れ込んでやや厚みを増していた。住居跡出土土器は１～３である。J-50・J-51 の確認面、表土・撹乱出土土器と、土器以外の出土遺物については J-50 に記載した。

１は加曽利ＥⅢ式の「横位連繋弧線文土器」である。口縁部が沈線で区画され、沈線上に列点が施される。胴部には沈線と縄文で文様が構成される。２・３は称名寺式古段階である。２は太く深い沈線と縄文で、窓枠状の文様が施される。３は口唇部が平坦面を持つ。帯縄文が弧状に施される。

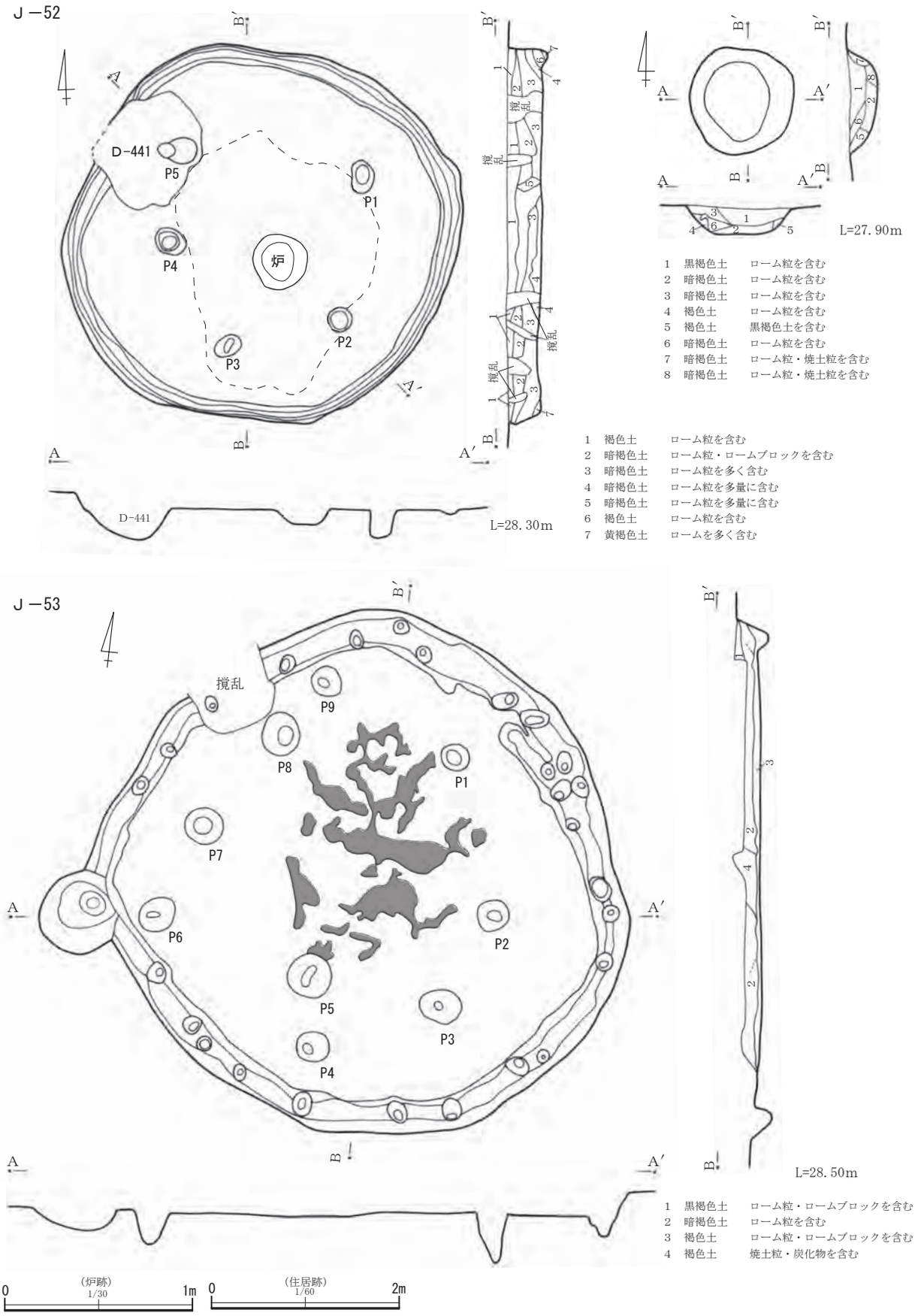
住居跡の時期は称名寺式古段階と考えられる。土器以外では石鏃１点 (第 291 図 74) が出土した。

J-52(第 134 ～ 136 図・図版 19)

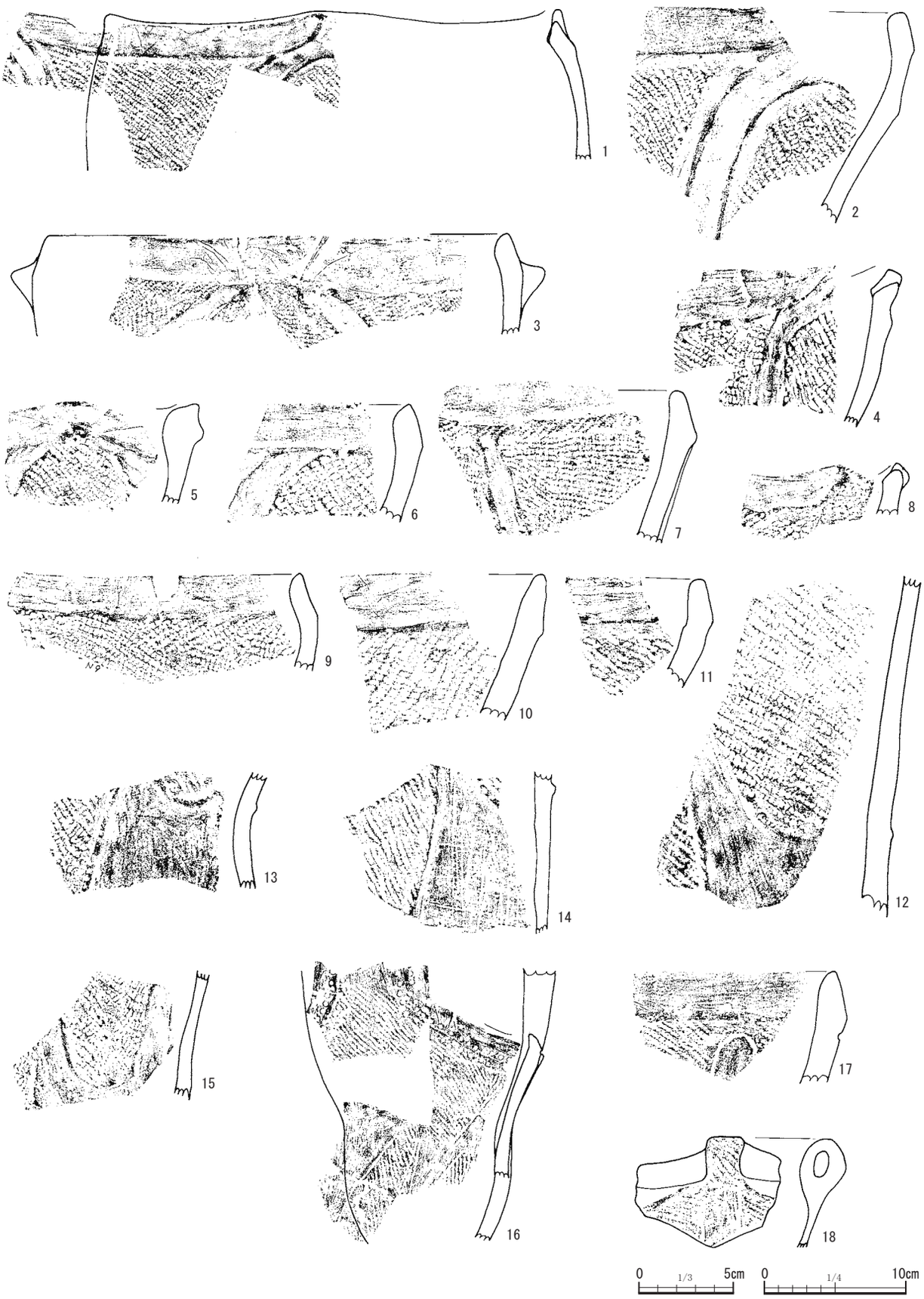
旧レ - 8 - 1 住。4.3 × 4.0 mの円形を呈す。0.4 mの掘り込みを有す。壁溝が全周する。柱穴は深さ 0.2 ～ 0.4 mの P1 ～ P5 がある。P1 － P2 － P3 － P4 は規則的に位置しており、主柱穴であろう。ほぼその範囲で床の硬化が認められた。炉は中央やや南寄りに位置し、覆土下部に焼土を含んでいた。住居跡出土土器は２・５～７・９・10・12・16・18・19 である。確認面上出土 (ここではグリッドで点上げされたものも含む) は１・３・４・８・11・13 ～ 15・17・20 ～ 22 である。

１～20は加曽利Ｅ式終末の土器である。1 ～７は口縁部が微隆線で区画され、胴部に微隆線と縄文で「逆Ｕ字状文」が施される。１・２は微隆線脇がナデられ、３～７は微隆線上に縄文が認められる。1・２は口縁部が内弯する器形であることから加曽利ＥⅣ式と考えられる。３・４・７はほとんど屈曲せず立ち上がる器形で、加曽利ＥⅤ式の可能性が高い。８～ 11 は口縁部が微隆線で区画され、胴部に縄文のみが認められる。いずれも隆線脇はナデられない。12 ～ 15 は胴部に微隆線と縄文で文様が施される。いずれも隆線上に縄文が認められる。16・17 は口縁部が微隆線で区画され、胴部には縄文と沈線で文様が施される。16 は口縁部に突起が付され、微隆線脇に列点、胴部には入り組む「対向Ｕ字文」が施される。17 は加曽利ＥⅢ式の可能性もある。9・20 は把手である。19 は動物 (鳥頭形) を模したものである。20 は突起状のものである。

21･22 は阿玉台Ⅱ式と考えられる。21 は幅広の角押文が施される。22 は隆線上に指頭押圧が施される。



第 134 図　J -52(1)・J -53(1)



第 135 図　J -52(2)

ひだ状の整形痕が認められる。

住居跡の時期は加曽利ＥⅤ式期の可能性が高いと考えられる。土器以外では砥石２点 (第 288 図 18・19)、石鏃未成品１点 (付表 3-5-33)、石核１点 (付表 3-5-64)、剥片類３点が出土している。

J-53(第 134・136 図・図版 19)

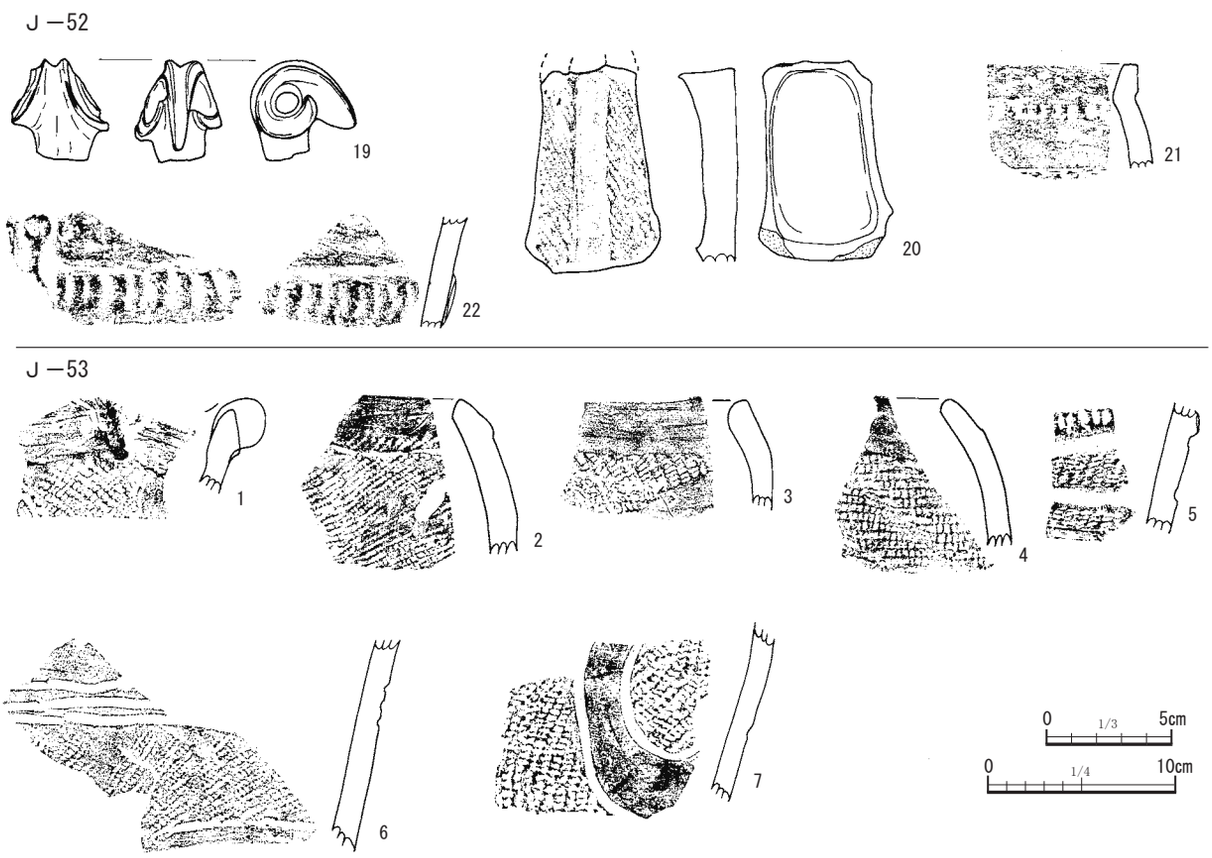
旧レ -12- １住。5.6 × 5.4 ｍの円形を呈す。掘り込みの有無の判断が難しい。壁溝が全周し壁柱穴 27 本を伴う。北東部の一部では二重に廻っており、建替えがあったことを示唆する。柱穴は深さ 0.5 ｍの P1・P3 ～ P5・P7・P8 の他に浅いもの３本がある。炉はない。柱穴に囲まれた範囲に焼土が堆積していた。確実に住居跡に伴う土器はない。確認面上出土は１～７である。

１～４は加曽利Ｅ式終末の土器である。１・２は口縁部が微隆線で区画され、胴部には沈線と縄文で文様が施される。微隆線上には縄文が認められる。３は口縁部が微隆線で区画され、胴部には微隆線と縄文で文様が施される。微隆線上には縄文が認められる。４は口縁部が微隆線で区画され、胴部には縄文のみが認められる。５は中期中葉の土器と考えられる。刻みが施された隆線が貼り付けられ、隆線脇には沈線が引かれる。地文には０段多条の RL が施される。６は加曽利ＥⅡ式に並行する連弧文土器である。沈線と縄文で文様が施される。７は称名寺式第３段階と考えられる。太くやや浅い沈線と縄文で文様が施される。縄文を地文とし、無文部で渦巻文が施される。

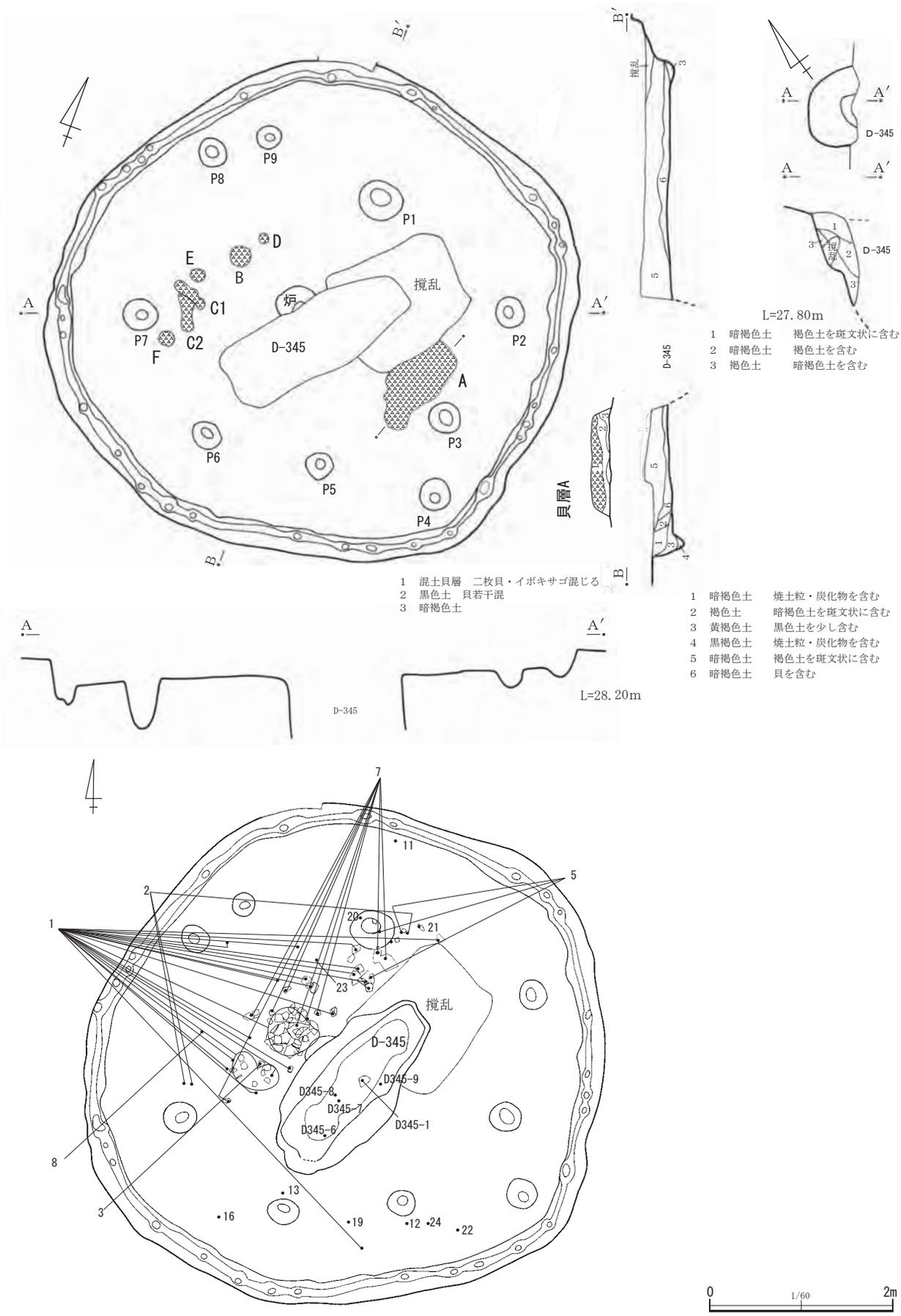
住居跡の時期は加曽利ＥⅣ～Ⅴ式期と考えられる。土器以外では石皿・台石１点 (付表 3-3-42) が出土している。

J-54(第 137 ～ 139 図・図版 19・43・46)

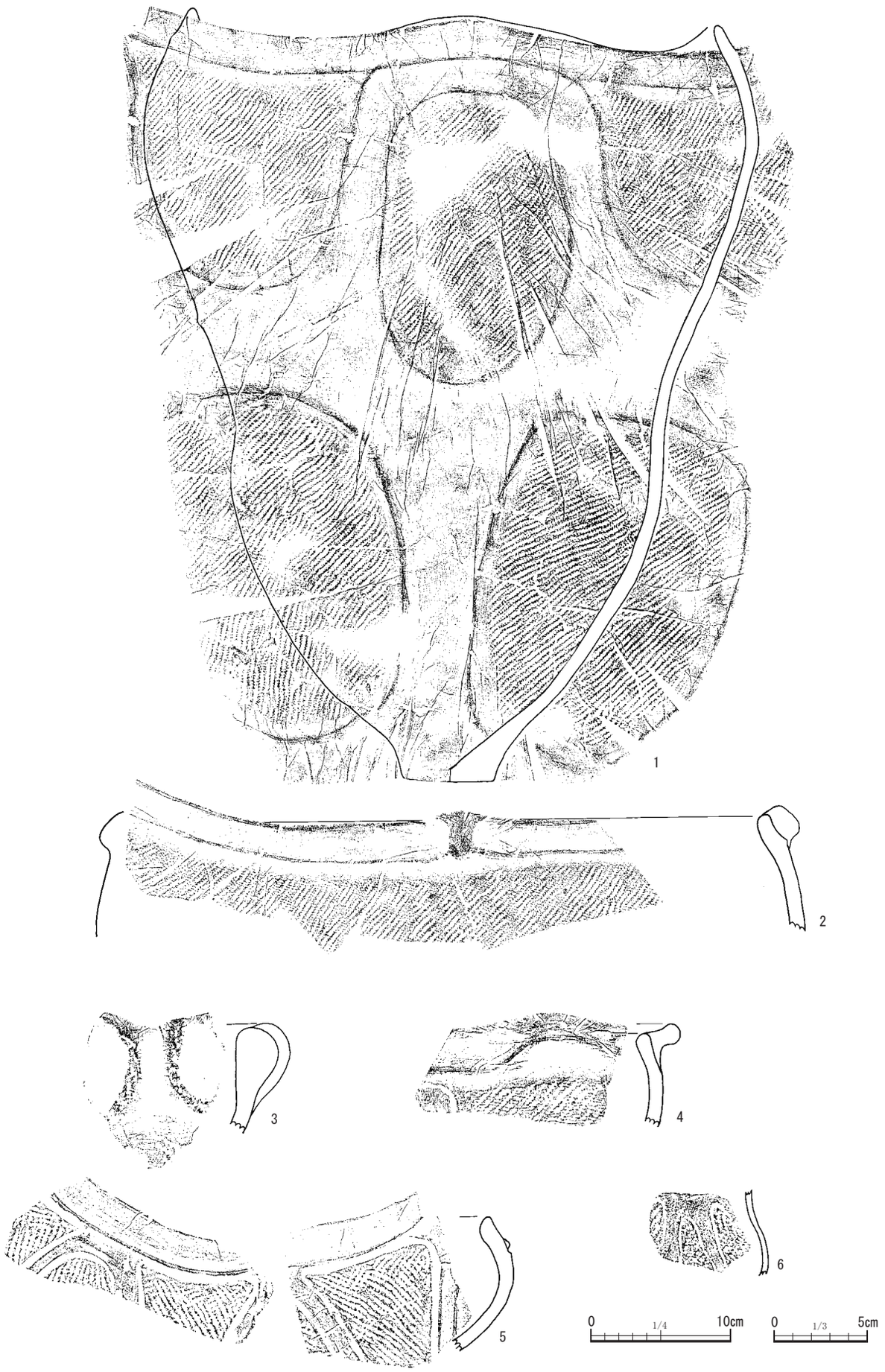
旧ロ - ８- １住。径 5.5 ｍの円形を呈す。0.3 ｍの掘り込みを有し、D-345(陥し穴) と重複する。壁溝が全周し壁柱穴 29 本を伴う。柱穴は深さ 0.5 ～ 0.6 ｍの P3 ～ P5・P7 の他に浅いもの５本がある。炉



第 136 図　Ｊ -52(3)・Ｊ -53(2)


P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
A
B
C1
C2
D
E
F
炉
撹乱
D-345
貝層A
A
A′
B
B′
L=27.80m
L=28.20m
1 暗褐色土 褐色土を斑文状に含む
2 暗褐色土 褐色土を含む
3 褐色土 暗褐色土を含む
1 混土貝層 二枚貝・イボキサゴ混じる
2 黒色土 貝若干混
3 暗褐色土
1 暗褐色土 焼土粒・炭化物を含む
2 褐色土 暗褐色土を斑文状に含む
3 黄褐色土 黒色土を少し含む
4 黒褐色土 焼土粒・炭化物を含む
5 暗褐色土 褐色土を斑文状に含む
6 暗褐色土 貝を含む
D345-1
D345-6
D345-7
D345-8
D345-9
0
1/60
2m

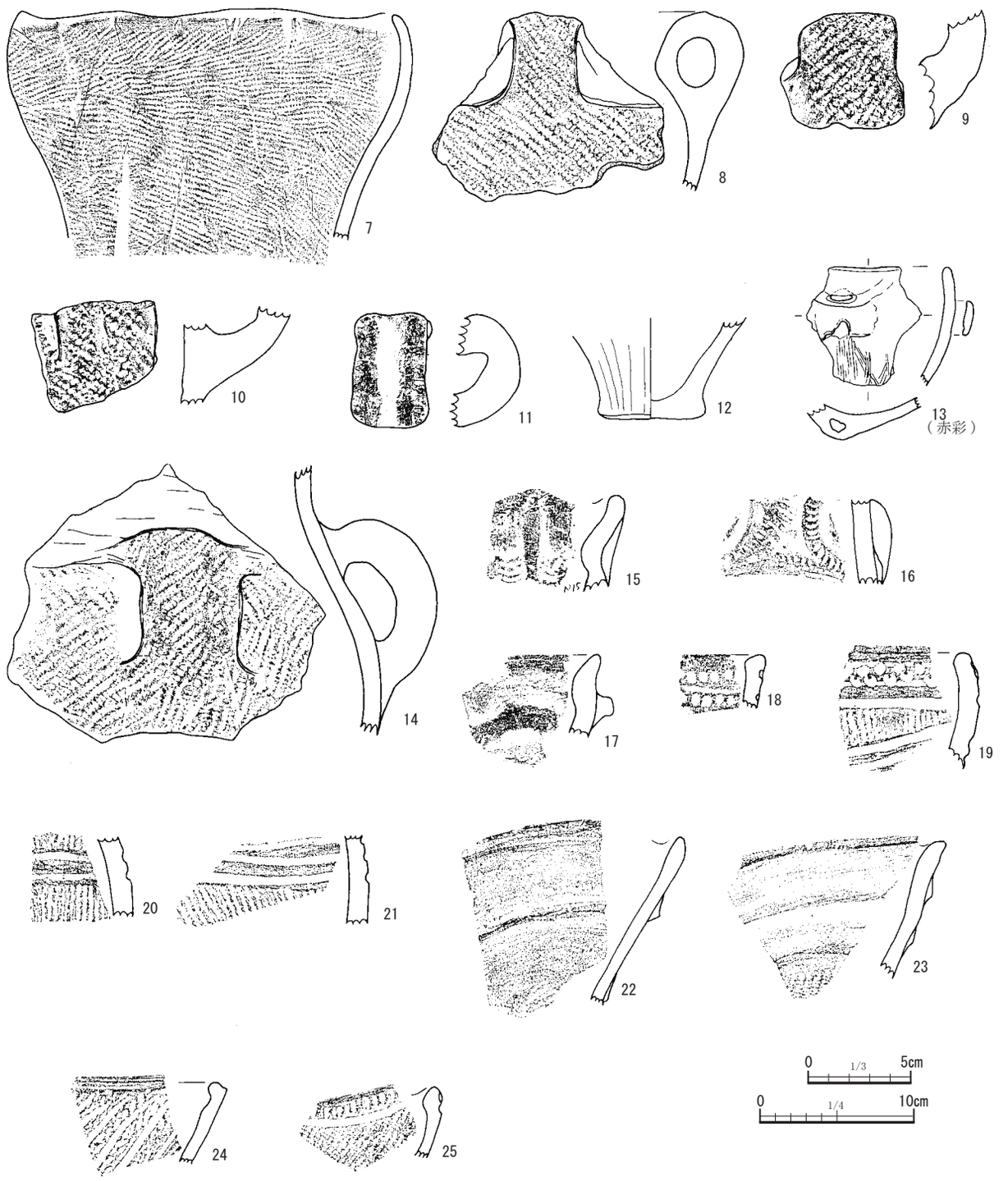
第 137 図　J -54(1)



第 138 図　J -54(2)

は中央に位置するがD -345 により半分消失している。A～Fの6か所で貝層を形成しており、Cは2つに区分して図化されていたので、7か所のブロック状貝層と認識されていた。最大のA貝層は 110cm × 60cm、厚さ 14cm を測る。なお、B～F貝層は土器集中と共伴しており、多量の土器と貝殻がD-345(陥し穴) 内に落ち込んだようである。新旧や時間的な経緯などきわめて興味深いが未掲載土器が見つからなかったため、接合関係の有無などを確かめることができなかった。当住居に伴うことが明らかな土器は1・2・4～7・9～15・19～25である。確認面上出土は3・8である。

1～14は加曽利E式終末の土器である。1は加曽利EⅣ式である。口縁部が内弯するキャリパー形の



第139図　J -54(3)

器形である。口縁部が微隆線で区画され、胴部には微隆線と縄文で「抱球文」、胴下部には楕円状の文様が施される。微隆線脇は丁寧にナデられる。２は口縁部が微隆線で区画され、一部突起状になる。胴部には縄文のみが施される。微隆線脇は明瞭なナデが認められる。３は口縁部に微隆線が貼り付けられ、突起状になる。微隆線上に縄文が認められる。４・５は口縁部が微隆線で区画され、胴部には縄文と沈線で文様が施される。４は口縁部の一部が突起状になる。６は沈線と縄文で「逆Ｕ字状文」が施される。７は縄文のみが施される。８は口縁部に橋状把手が付され、胴部には縄文のみが認められる。９～ 11 は深鉢に付される橋状把手である。12 は深鉢の底部である。器面調整の際の擦痕が認められる。13 は橋状把手の付く小形土器であり、器壁は薄く、調整は丁寧である。わずかに赤彩が認められる。14 は鉢形土器である。橋上把手が付され、胴部には縄文が施される。

15・16 は勝坂Ⅳ式である。隆線が貼り付けられ、隆線脇に爪形文が施される。隆線上にも刻みが認められる。17 は加曽利Ｅ Ⅰ式と考えられる。口縁部に波状の隆線が貼り付けられる。18 ～ 21 は連弧文土器である。18 は口縁部に列点が施される。19 ～ 21 は撚糸文を地文とし、沈線で連弧文が施される。沈線間は磨消される。22・23 は加曽利Ｅ式後半の土器である。微隆線が貼り付けられる。23 は縄文が認められる。24・25 は加曽利Ｂ式である。24 は縄文と斜行沈線が施される。25 は緩い波状口縁で口縁部下に沈線と刻みが施される。

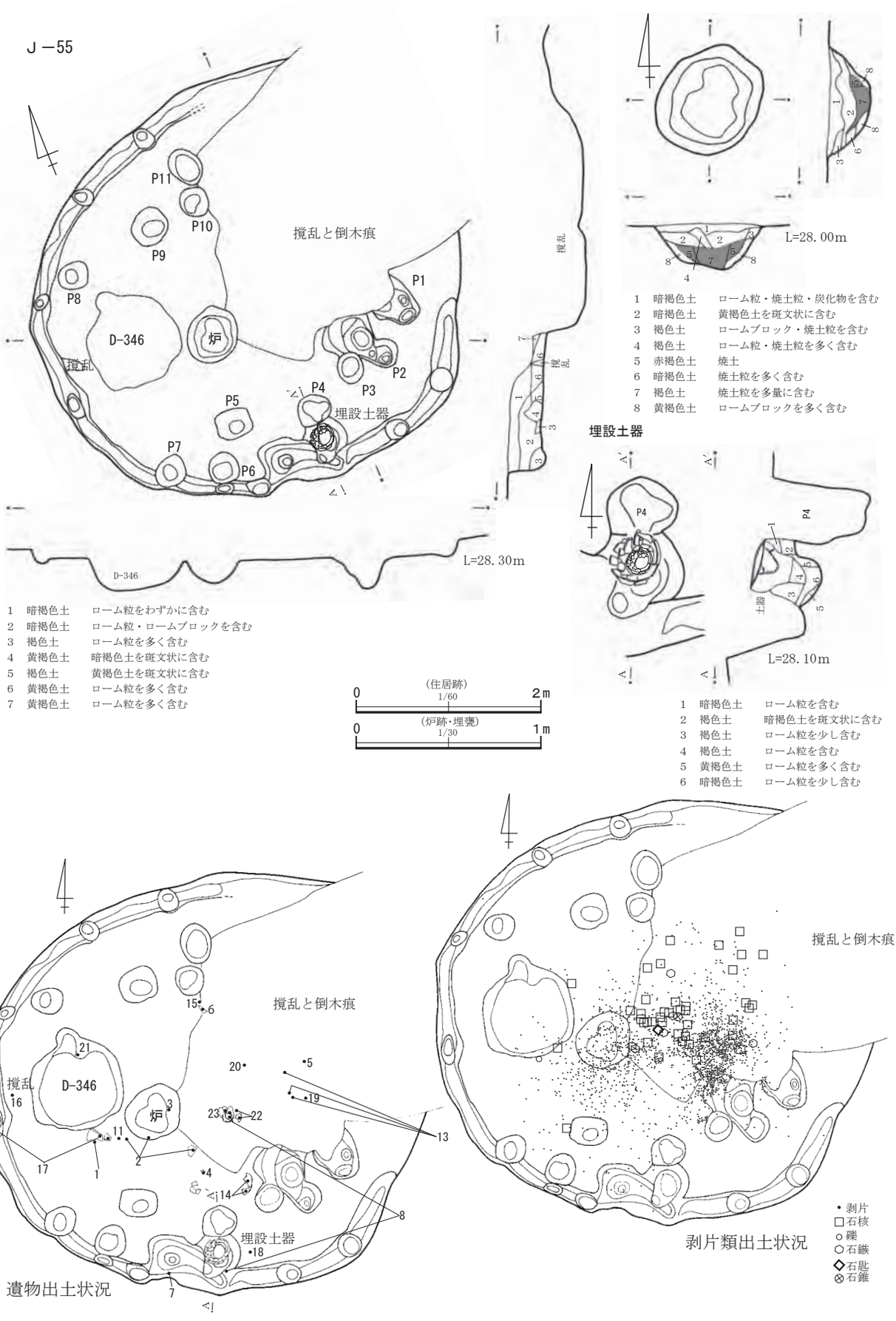
住居跡の時期は加曽利ＥⅣ式期と考えられる。土器以外では剥片石器がややまとまっている。石鏃１点 (第 291 図 25)、同未成品２点 (付表 3-5-32・34)、石核１点 (付表 3-5-63)、剥片類 15 点である。そのほか、打製石斧１点 (第 285 図 63)、磨石類１点 (第 286 図 46)、石皿・台石１点 (付表 3-3-39)、軽石製品１点 (付表 3-3-20) が出土している。

J-55(第 140・141・143 図・図版 19)

旧ロ - 9 - 1 住。4.9 × 4.5 ｍの円形を呈し、0.2 ｍの掘り込みを有す。D-346 と重複する。攪乱・倒木痕の部分を除いて壁溝が全周し、壁柱穴 11 本を伴う。炉は南西寄りに位置し、下部に焼土層を形成する。南壁付近のピット内には１が埋設されている。そのほかの住居跡出土土器は２～ 23 である。覆土中からは竪穴の中央付近を中心に黒曜石の剥片類が多量に出土している (第 140 図右下)。その分布は「攪乱と倒木痕」と表示した部分に連続しているので、住居跡より古い倒木痕が主体であったものとみられる。多量の石核が出土している点は注目される。土器・剥片類の一部は D-346 の範囲に連続しているが新旧は不明確である。

１～ 21 は加曽利Ｅ式終末の土器である。１・２は口縁部が微隆線で区画され、胴部には微隆線と縄文による「逆Ｕ字状文」が施され、口縁部の区画に貫入する文様構成である。２は貫入した部分が突起状になる。１は微隆線脇がナデられるが、２は微隆線上にも縄文が認められる。１は加曽利ＥⅣ式と考えられる。３・４は口縁部が微隆線で区画され、波頂部で突起状になるものである。いずれも微隆線脇はナデられない。５～７は口縁部が微隆線で区画され、胴部には縄文のみが認められる。５・６は微隆線脇に明瞭なナデが認められ、７は微隆線脇がナデられない。８は微隆線と縄文で文様が施される。微隆線脇は丁寧にナデられる。９は口縁部が沈線で区画され、胴部には沈線と縄文で「逆Ｕ字状文」が施される。10・11 は沈線と縄文で文様が施される。11 は渦巻文が施されている。12 は深鉢に付される橋状把手である。13 は底部で、微隆線と縄文がわずかに認められる。14 ～ 19 は鉢形土器である。14 は口縁部に広い無文帯を持ち、沈線で区画される。15・16 は口縁部で幅の広い無文帯が認められる。17・18 は微隆線と縄文が施される。微隆線脇はナデられる。19 は鉢形土器に付される把手と考えられる。

20 は阿玉台Ⅰｂ式である。突起部分は剥落している。単列の角押文が認められる。21 は加曽利ＥⅢ


J－55
P11
P10
P9
P8
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
D-346
炉
撹乱
撹乱と倒木痕
埋設土器
L=28.30m
L=28.00m
L=28.10m
1 暗褐色土 ローム粒をわずかに含む
2 暗褐色土 ローム粒・ロームブロックを含む
3 褐色土 ローム粒を多く含む
4 黄褐色土 暗褐色土を斑文状に含む
5 褐色土 黄褐色土を斑文状に含む
6 黄褐色土 ローム粒を多く含む
7 黄褐色土 ローム粒を多く含む
1 暗褐色土 ローム粒・焼土粒・炭化物を含む
2 暗褐色土 黄褐色土を斑文状に含む
3 褐色土 ロームブロック・焼土粒を含む
4 褐色土 ローム粒・焼土粒を多く含む
5 赤褐色土 焼土
6 暗褐色土 焼土粒を多く含む
7 褐色土 焼土粒を多量に含む
8 黄褐色土 ロームブロックを多く含む
埋設土器
1 暗褐色土 ローム粒を含む
2 褐色土 暗褐色土を斑文状に含む
3 褐色土 ローム粒を少し含む
4 褐色土 ローム粒を含む
5 黄褐色土 ローム粒を多く含む
6 暗褐色土 ローム粒を少し含む
(住居跡) 1/60 0 2m
(炉跡・埋甕) 1/30 0 1m
遺物出土状況
剥片類出土状況
撹乱と倒木痕
埋設土器
・剥片
□石核
○礫
⬡石鏃
◇石匙
⊗石錐

第 140 図　J -55(1)

式と考えられる。口縁部が沈線で区画され、胴部には縄文と斜位の沈線が引かれる。「横位連繋弧線文土器」か。22・23 は加曽利Ｅ式後半の土器である。22 は器面調整の際の擦痕が明瞭に認められる。23 は口縁部にナデによる沈線が引かれ、縄文が施される。

住居跡の時期は加曽利ＥⅣ～Ⅴ式期と考えられる。土器以外では砥石 1 点 (付表 3-3-37) と剥片石器多数が出土している。剥片石器の内訳は石錐 3 点 (付表 3-5-15・17・19)、石鏃 4 点 (第 291 図 43・68 ～ 70)、同未成品 8 点 (35・57 ～ 63)、石核 28 点 (付表 3-5-65・70 ～ 96)、剥片類 1,907 点・400 ｇ (加工剥片 17・剥片 511・砕片 1,379) であり、石材はほとんどが黒曜石である。石鏃・石錐の製作を行った後に竪穴に廃棄したものであろう。石核 28 点の長さの平均は 21.5㎜± 7.7㎜、30㎜を超えるものは 3 点と少なく、石鏃素材をとるのが難しいサイズである。

J-56(第 142・143 図・図版 20)

旧ロ -12- 1 住。4.9 × 4.3 mの楕円形を呈す。壁溝はほぼ全周し、壁柱穴 12 本を伴う。柱穴は深さ 0.2 ～ 0.4 mの P1 ～ P3･P7･P9 の他に浅いもの 6 本がある。炉は中央に位置し、覆土に多くの焼土が含まれる。住居跡出土土器は 2 である。確認面上出土は 1 ・ 3 である。

1 は中期のものと考えられる無文の底部である。 2 は阿玉台式後半の土器と考えられる。折返し口縁で胴部には縄文が施される。 3 は加曽利Ｅ式終末の土器である。口縁部が微隆線で区画され、胴部には沈線と縄文で文様が施される。微隆線上にも縄文が認められる。住居跡の時期は中期と考えられるが細別時期は不明である。

J-57(第 142・143 図・図版 20)

旧ロ -17- 1 住。径 4.3 mの円形を呈す。0.4 mの掘り込みを有す。壁溝はほぼ全周する。柱穴は深さ 0.4 ～ 0.7 mの P1 ～ P10 がある。炉は中央やや西寄りに位置し、わずかに焼土を検出した。 1 ～ 8 の土器はすべて住居跡出土が確認できる。

1 ～ 6 は加曽利Ｅ式終末の土器である。 1 ～ 3 は口縁部が微隆線で区画され、胴部には縄文のみが認められる。縄文は微隆線上にも認められる。 4 ・ 5 は縄文のみが施されるものである。 6 は鉢形土器である。広い無文帯を持ち、微隆線による区画と、縄文が施される。微隆線脇はナデられない。 7 は加曽利Ｅ式後半と考えられる。細い沈線が弧状に引かれる。 8 は称名寺式第 1 段階の土器である。太くやや深い沈線と目の細かい縄文が施される。

住居跡の時期は加曽利ＥⅣ～Ⅴ式期としておきたい。土器以外では剥片類 3 点が出土している。

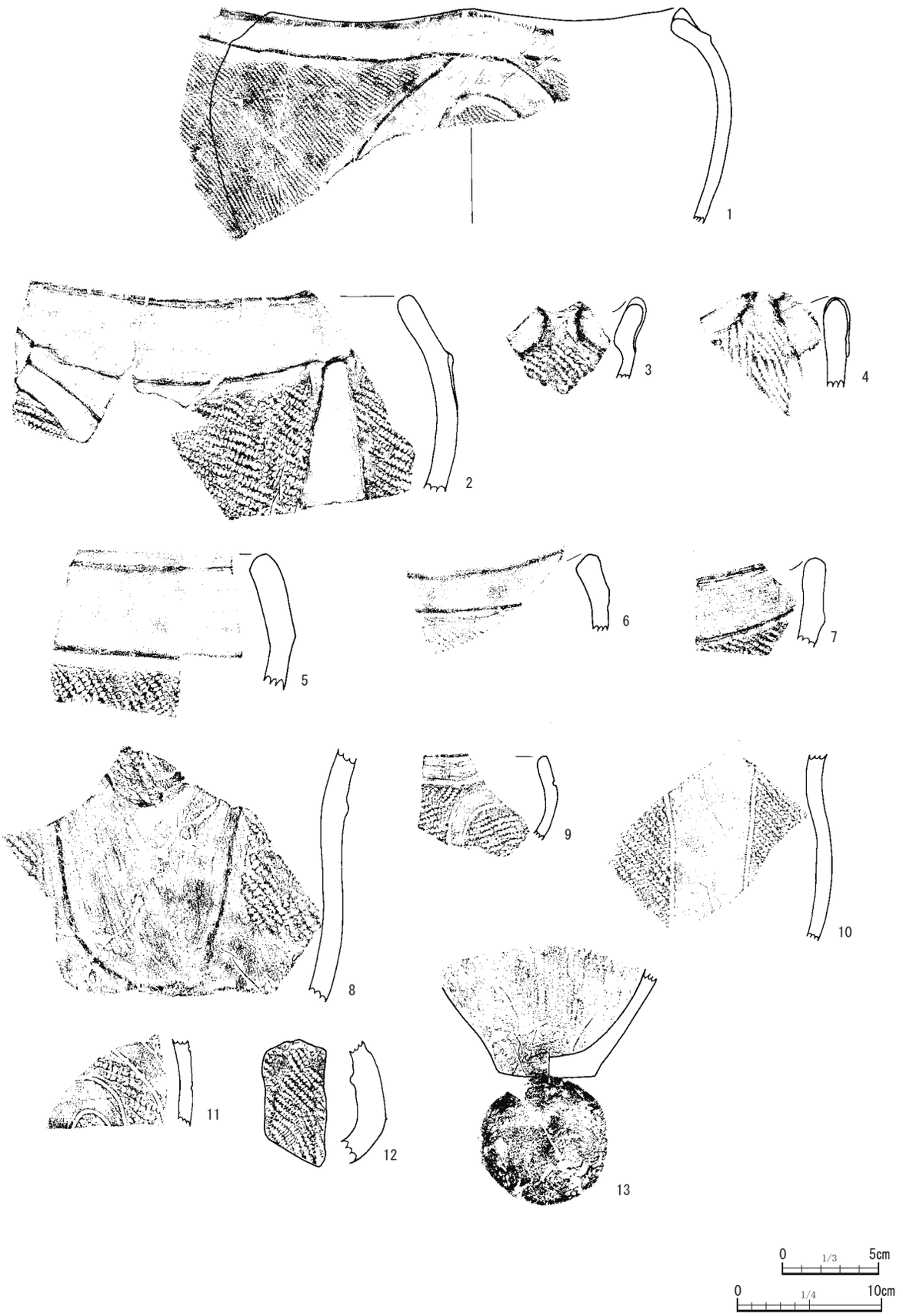
J-58(第 143・144 図・図版 20)

旧ロ -19- 1 住。炉と柱穴により住居跡と認識したものである。炉の覆土には焼土が含まれる。柱穴は深さ 0.1 ～ 0.4 mの P1 ～ P7 がある。炉は中央に位置し、下部に燃焼面を形成する。住居跡出土が確認できる土器はない。確認面上出土は 1 である。

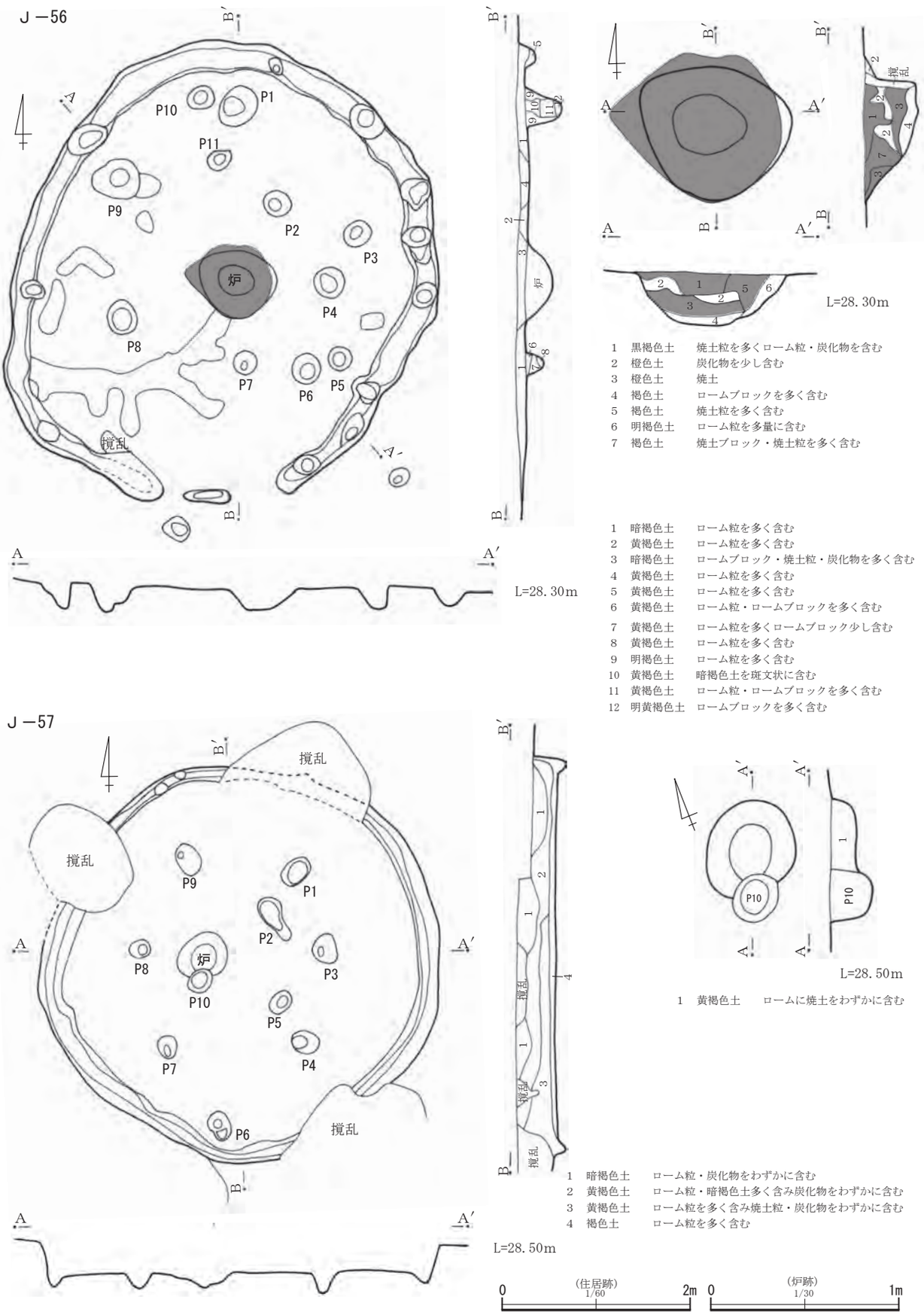
1 は堀之内式の注口土器と考えられる。隆線上に刺突と沈線が施される。出土遺物が少ないため縄文時代 (細別不明) の住居跡としておく。土器以外では土器片錘 1 点 (81) が出土している。

J-59(第 145 ～ 148 図・図版 20・43・46)

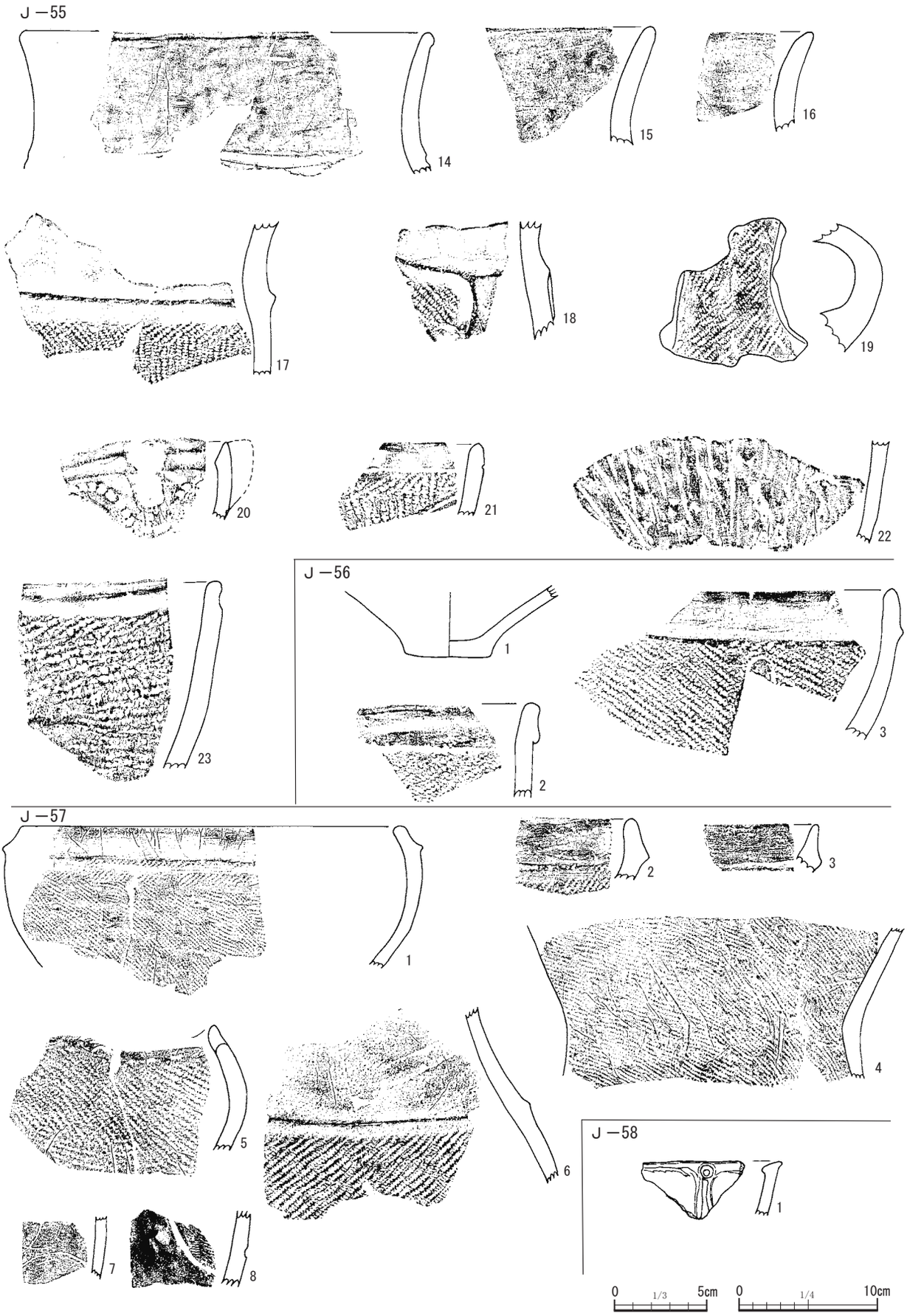
旧ロ -20- 1 住。長径 5.4 m、短径約 4 mの楕円形を呈す。掘り込みの有無の判断が難しい。Ｊ -60 と重複する。新旧は不明確だが、土器の内容は当遺構のほうが古い。壁溝を半周分検出し、壁柱穴 12 本を伴う。柱穴は深さ 0.3 ～ 0.4 mの P1・P3・P4・P8・P9 の他に浅いもの 6 本がある。炉の内部には焼土が多かった。炉の周囲は床面が 5 cm 程度低くなっているため遺存していた。住居跡出土土器は 1 の一部・２～ 10 である。J-59・J-60 の確認面上出土は第 148 図 2 ～ 5 である。なお、 1 の一部は竪穴の範囲外



第 141 図　J -55(2)



第 142 図　J -56(1)・J -57(1)



第143図　J-55(3)・J-56(2)・J-57(2)・J-58(1)

から出土している。この点は J-60 に記載する。

1 ～ 4 は加曽利 E Ⅲ式と考えられる。1 ～ 3 は「横位連繋弧線文土器」と考えられる。1 ・ 2 は口縁部が沈線で区画され、胴部には縄文と沈線で横位に連結した弧状の文様が施される。3 は沈線と縄文で楕円形の文様が施される。4 は幅広の沈線で口縁部が区画され、胴部には沈線と縄文で文様が施される。5 ～ 7 は加曽利 E 式終末の土器である。5 は胴部に縄文のみが施される。6 ・ 7 は深鉢に付される橋状把手である。6 は縄文、7 は列点が施される。7 は把手部分を欠損する。8 は阿玉台Ⅳ式と考える。縄文を地文とし、隆線脇に沈線が引かれる。隆線上にも縄文が施される。9 は称名寺式第 1 段階の土器と考えられる。太く深い沈線と縄文で文様が構成される。帯縄文は不徹底である。胎土は灰褐色で砂粒が多く含まれる。沈線による内面突出は認められない。10 は堀之内式の注口土器の把手と考えられる。眼の表現があり鳥頭を模したものであろう。

J-59 または J-60 出土土器　1 は加曽利 E 式後半の底部破片で縄文が認められる。底部付近には器面調整の際の擦痕が認められる。2 は加曽利 E 式終末の土器である。口縁部が微隆線で区画され、胴部には縄文が認められる。微隆線上にも縄文が認められる。3 ・ 4 は称名寺式である。3 は称名寺式古段階の土器と考えられ、太くやや深い沈線と目の細かい縄文が施される。5 は後期末から晩期初頭の安行系の土器である。口縁部に突起状の貼付文が付され、刻みが施される。胴部には沈線が認められる。器面にはかなりの摩耗が認められる。

住居跡の時期は加曽利 E Ⅲ式期と考えられる。土器以外では焼成粘土塊 1 点 (第 280 図 8)、土器片円板 1 点 (J-59 または J-60、第 278 図 14)、磨石類 1 点 (第 287 図 83)、石鏃未成品 1 点 (付表 3-5-18)、石核 1 点 (付表 3-5-57)、剥片類 1 点が出土している。

J-60(第 145 ・ 146 ・ 148 図 ・ 図版 20)

旧ロ -20- 2 住。掘り込みを有さず柱穴のみを検出した。J-59 と重複する。新旧は不明確だが、土器の内容は当遺構のほうが新しい。柱穴は深さ 0.2 ～ 0.5 mの 21 本がある。床面を掘り込んで深鉢が埋設されており、上部は床面上に露出していた。炉は焼土を多く含む層があり、土器片が出土した。小さなピット上に 40cm × 35cm、厚さ不明のごく小さな貝層を形成していた。住居跡出土土器は 1 ～ 5 である。J-59 ・ J-60 の覆土、確認面上、一括等の土器については J-59 に記載した。J-59- 1 の一部と、J-59 ・ J-60- 1 は J-59 の竪穴に近い部分から出土している。J-60 に帰属するとすれば考えられるのは出入口部分の埋設であるが、別の遺構の可能性も捨てきれない。

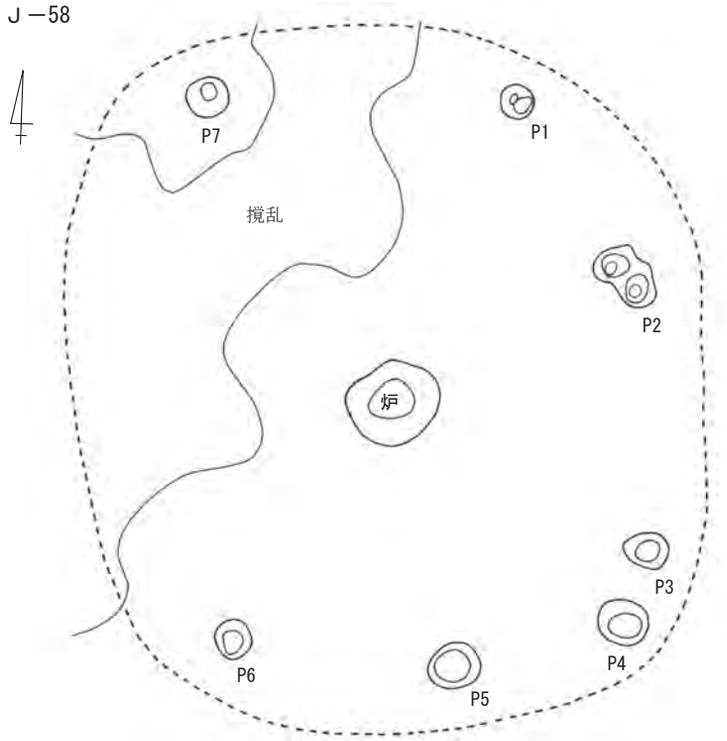
1 ～ 5 は加曽利 E 式終末の土器である。1 は埋設土器で、加曽利 E Ⅳ式と考えられる。微隆線と縄文で「対向 U 字文」「U 字状文、逆 U 字状文」が施される。微隆線脇は丁寧にナデられる。2 ・ 3 は口縁部が微隆線で区画され、胴部には微隆線と縄文で「逆 U 字状文」が施される、2 は微隆線上にも縄文が認められる。3 は胴部の微隆線脇はナデられるが、口縁部の微隆線はナデられない。4 は口縁部が微隆線で区画され、胴部には縄文のみが認められる。微隆線上にも縄文が認められる。5 は沈線と縄文による磨消縄文が認められる。無文部は丁寧に調整される。

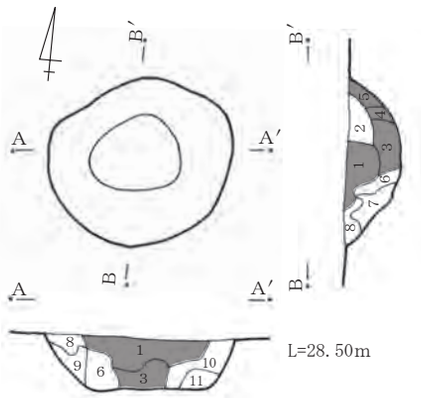
住居跡の時期は加曽利 E Ⅳ式期と考えられる。土器以外では土器片円板 1 点 (J-59 または J-60)、剥片類 1 点が出土している。

J-61(第 144 ・ 151 図 ・ 図版 20 ・ 43)

旧ワ - 8 - 1 住。4.6 × 4.0 mの不整円形を呈す。0.4 mの掘り込みを有す。壁溝が全周し、壁柱穴 29 本を伴う。柱穴 14 本がある。炉は中央やや東よりに位置し、深鉢上半 (1) を炉体として埋設している。住居跡出土は 1 ・ 3 ～ 9 である。確認面上出土は 2 である。

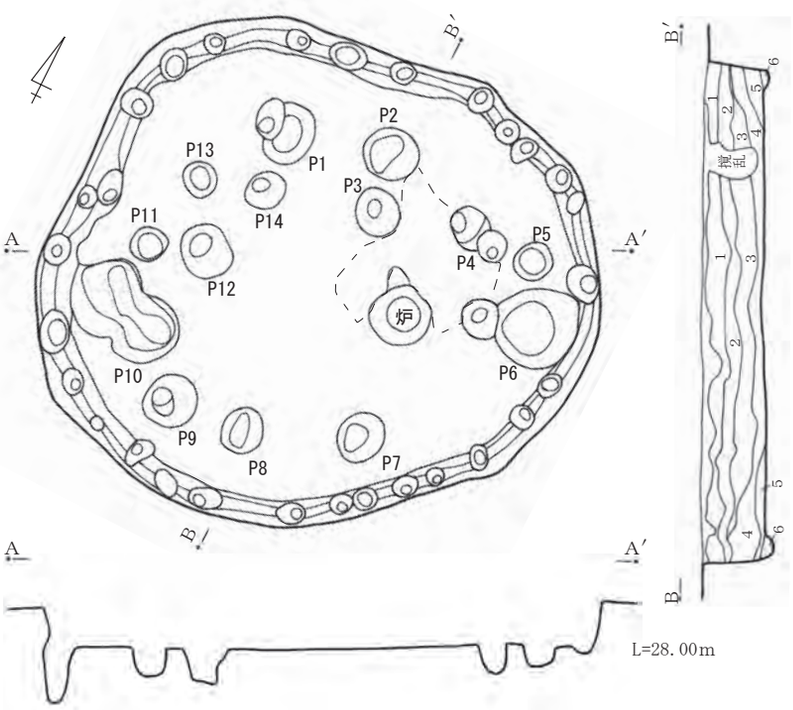
J－58

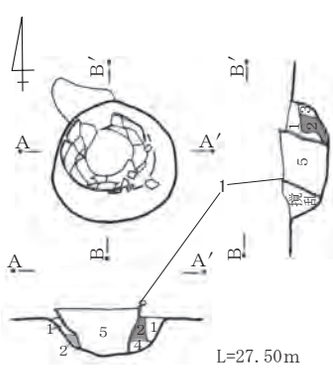




1　黒褐色土　焼土・炭化物を多く含む
2　暗褐色土　焼土・炭化物を少し含む
3　赤褐色土　焼土
4　黄褐色土　ロームが焼けている
5　暗褐色土　火を受けている
6　橙色土　焼土を少し含む
7　黄褐色土　ローム粒を含む
8　暗褐色土　ローム粒を含む
9　暗褐色土　ローム粒を含む
10　暗褐色土　ローム粒・炭化物を含む
11　黄褐色土　ローム粒子を含む

J－61



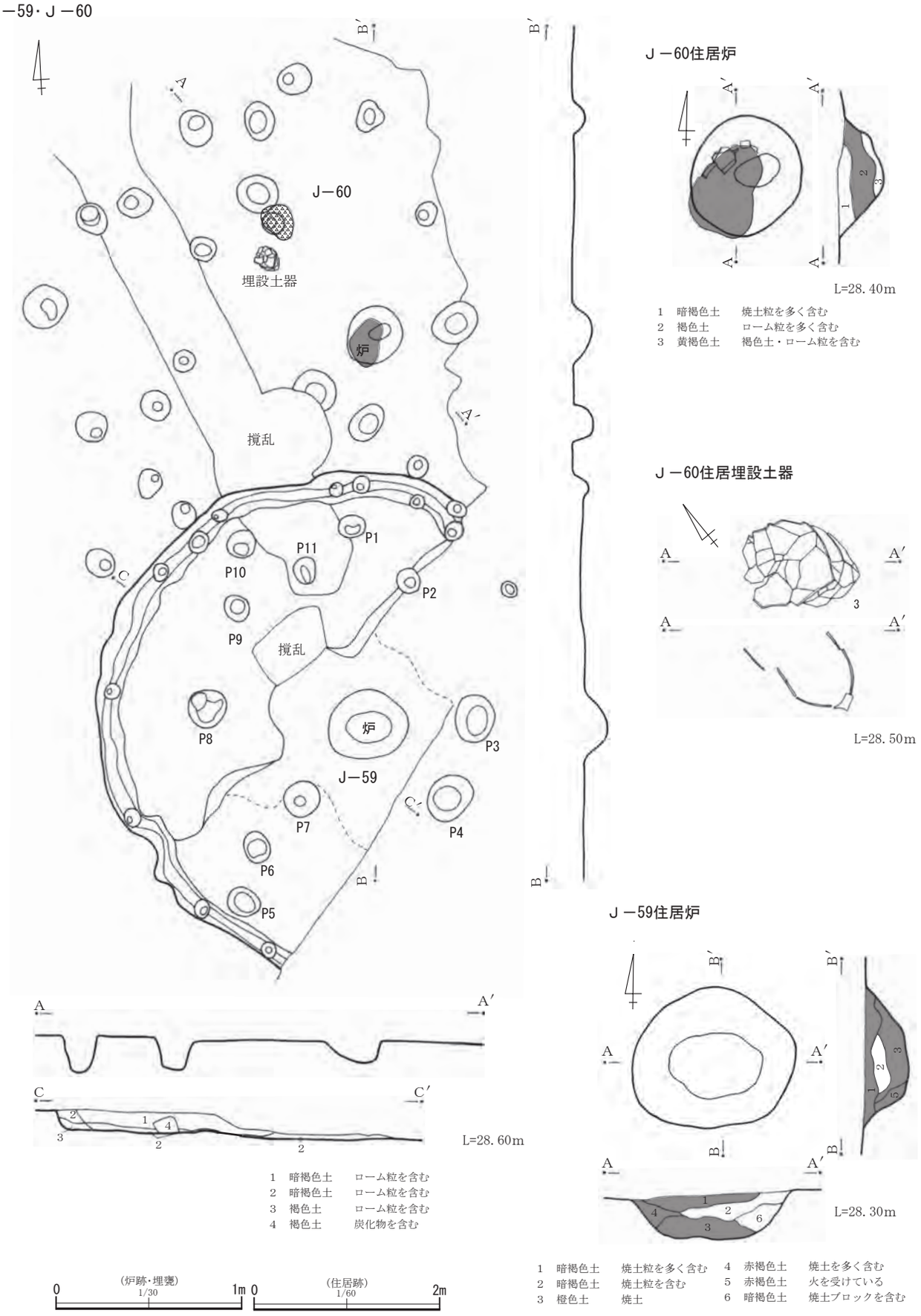


1　暗褐色土　褐色土を斑文状に含む
2　暗褐色土　焼土を多く含む
3　暗褐色土　ローム粒を少し含む
4　褐色土　黄褐色土を含む
5　暗褐色土　焼土粒を含む

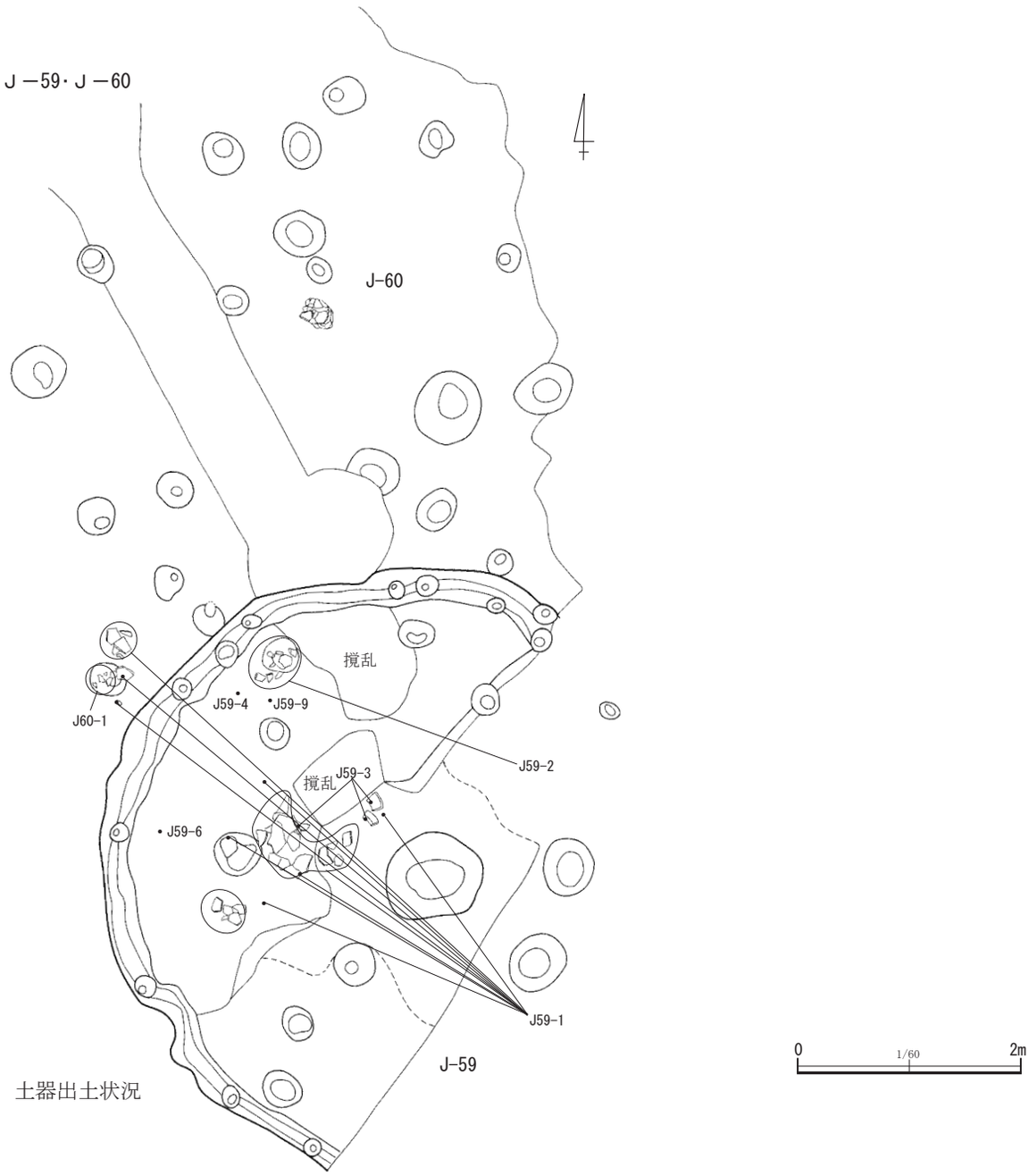
1　褐色土　炭化物を少し含む
2　暗褐色土　ローム粒を多く含む
3　暗褐色土　ローム粒を多く含む
4　暗褐色土　ローム粒を多量に含む
5　褐色土　黄褐色土・暗褐色土を含む
6　黄褐色土　ロームブロックを多く含む

第144図　J -58(2)・J -61(1)

Ｊ－59・Ｊ－60



第 145 図　Ｊ -59(1)・Ｊ -60(1)



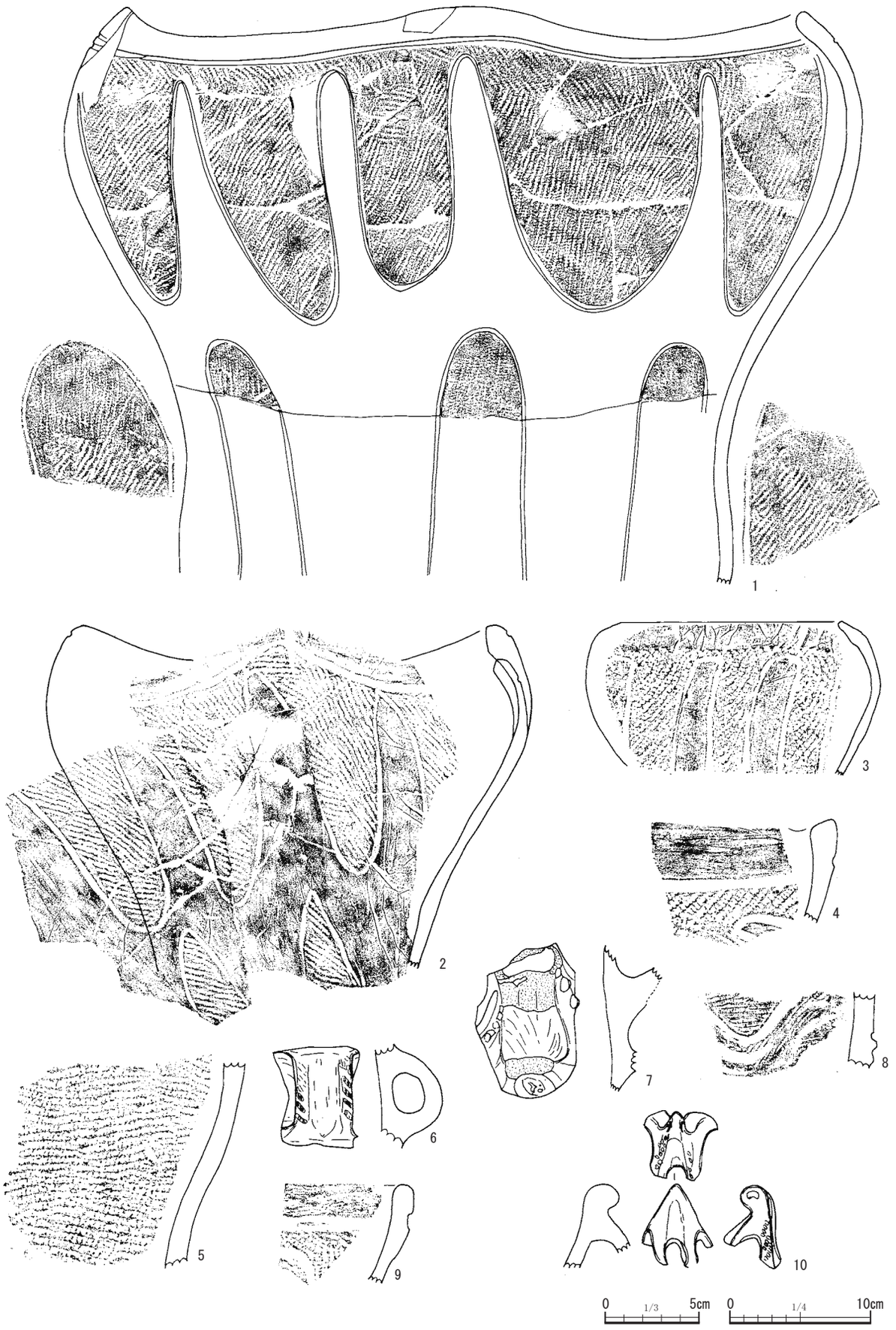
第 146 図　Ｊ -59(2)･Ｊ -60(2)

１～９は加曽利Ｅ式終末の土器である。１は埋設土器で、加曽利ＥⅤ式である。口縁部がほとんど内弯せず立ち上がる器形である。口縁部が微隆線で区画され、胴部には縄文のみが施される。微隆線上に縄文が認められる。２は波頂部に隆線で渦巻文が施される。胴部には縄文が施される。８は口縁部に突起状の把手が付される。把手には貫通する孔が認められる。３は口縁部が微隆線で区画され、胴部に縄文のみが認められる。微隆線上にも縄文が施されている。３・４と同様の構成と考えられる。５・６は胴部に微隆線と縄文で文様が施される。５は微隆線脇がナデられるが、６は一部ナデが施されない。７は縄文のみが認められる。９は鉢形土器である。口縁部に広い無文帯を持つ。

住居跡の時期は加曽利ＥⅤ式期と考えられる。土器以外では土器片円板１点 (第 278 図 18) が出土している。

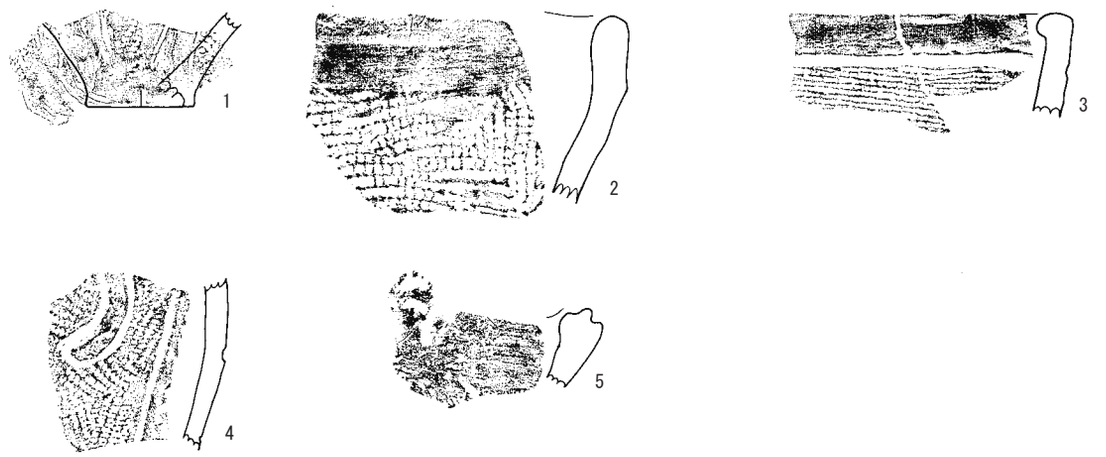
J-62(第 149・151・152 図・図版 21・43・46)

旧ワ -15- １住。4.2 × 3.9 ｍの円形を呈す。0.3 ｍの掘り込みを有す。柱穴は深さ 0.2 ～ 0.6 ｍの P1 ～ 3・5 ～ 7 の他に浅いもの３本がある。炉はない。住居跡出土土器は 1・2・5 ～ 13 である。確認面上出土は３・

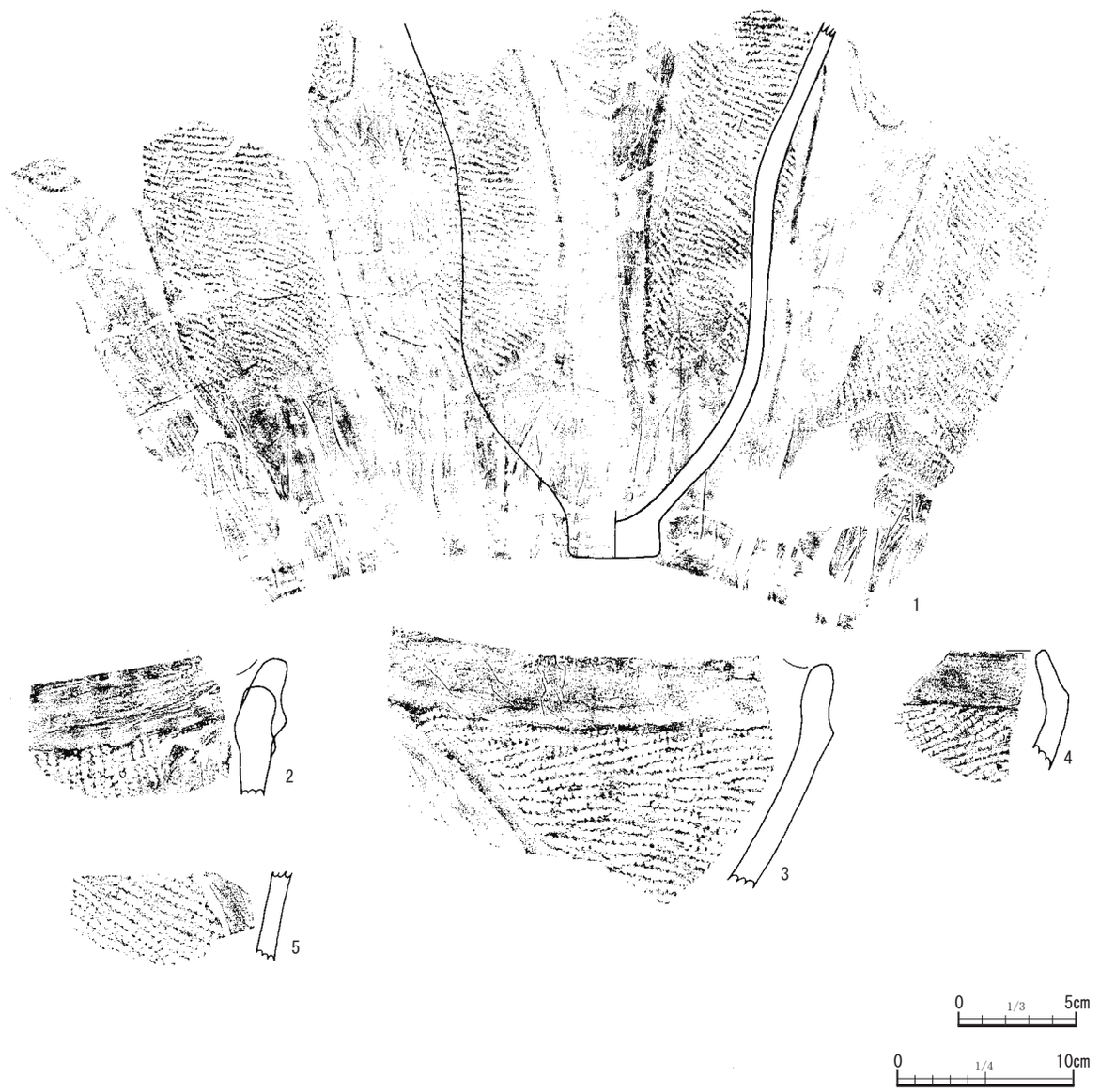


第 147 図　J -59(3)

J－59･J－60



J－60



第148図　J -59.60・J -60(3)

４である。

１～ 13 は加曽利Ｅ式終末である。１は口縁部が内弯せず、立ち上がる器形である。口縁部が微隆線で区画され、胴部には微隆線と縄文で「逆Ｕ字状文」が施され、口縁部に貫入する。微隆線脇はナデられる。口縁部に補修孔が２つ認められる。２は口縁部が微隆線で区画され、胴部には微隆線と縄文で文様が構成される。微隆線上にも縄文が認められる。３は加曽利ＥⅤ式の可能性がある。器形は口縁部が内弯せず立ち上がり、口唇部には平坦面を持つ。口縁部が微隆線で区画され、胴部には微隆線と縄文で「逆Ｕ字状文」が施される。微隆線上にも縄文が認められる。４は口縁部が微隆線で区画され、胴部には縄文のみが施される。５～８は微隆線と縄文で文様が施される。微隆線脇はナデられる。６～８は同一個体である。器面は被熱により摩耗が激しい。９～ 12 は同一個体と考えられる。胴部に縄文のみが施される。13 は底部で調整痕のみが認められる。

住居跡の時期は加曽利ＥⅤ式期の可能性が高い。

J-63(第 149・150・152 図・図版 20・21・43)

旧ワ -18- 1 住。5.9 × 4.7 ｍの不整円形を呈す。0.3 ｍの掘り込みを有す。J-64、D-366・444(土坑) と重複する。現地ではＪ -64 より新しいとしている。壁溝が全周し、38 本の壁柱穴を伴う。柱穴は深さ 0.2 ～ 0.5 ｍの P3・P7・P9・P10 の他に浅いもの６本がある。炉は中央やや西寄りに位置し、多くの焼土が堆積していた。炉の東側の掘り込みには深鉢 (1) が上部をやや西側に傾けて埋設されていた (第 149 図)。住居跡出土土器は１・３・４・６である。確認面上出土は２・５・７～９である。

１～４は加曽利Ｅ式終末の土器である。１は埋設土器で、加曽利ＥⅤ式と考えられる。口縁部は微隆線で区画され、胴部は微隆線と縄文で入り組む「対向Ｕ字文」が施される。口縁部の微隆線は、一部突起状になる。微隆線脇は一部にナデが認められる。２・３は口縁部付近の破片である。２は微隆線と縄文で「逆Ｕ字状文」が施され、口縁部に貫入する文様構成と考えられる。微隆線脇はナデられる。３は横位の微隆線と縄文が施される。微隆線上にも縄文が認められる。４は微隆線と縄文で文様が施される。微隆線上にも縄文が認められる。５は加曽利ＥⅢ式の「横位連繋弧線文土器」である。口縁部がナデによる沈線で区画され、弧状の沈線が引かれた後に縄文が施される。６・７は称名寺式古段階の土器である。太い沈線と目の細かい縄文で帯縄文が施される。６は浅い沈線、７は深い沈線である。８は中期中葉末から後葉初頭の口縁部の突起と考えられる。刺突と沈線による円文が認められる。９は堀之内１式の貼付文と考えられる。２か所の孔と粘土紐による貼り付け文に指頭押圧が認められる。

住居跡の時期は加曽利ＥⅤ式と考えられる。土器以外では剥片類１点が出土している。

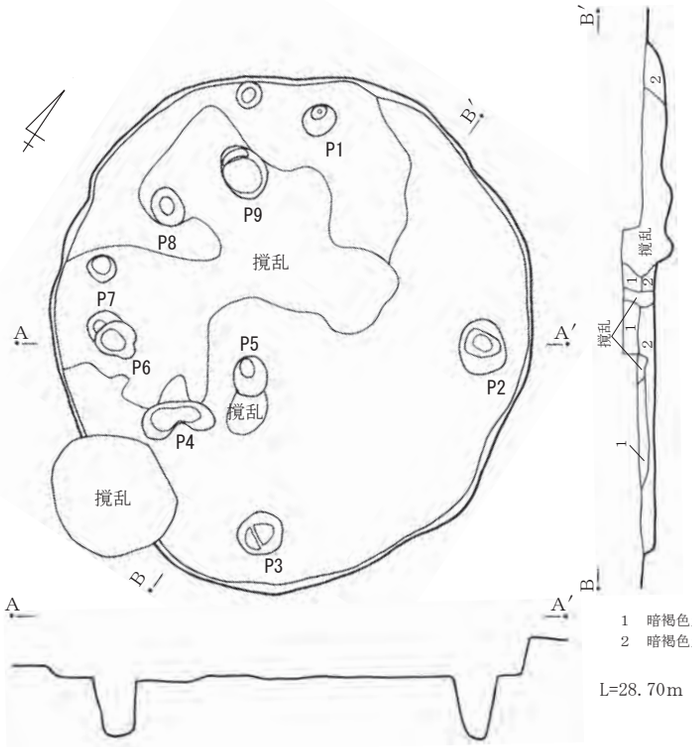
J-64(第 149・150・154 図・図版 20)

旧ワ -18-2 住。6.2 × 6.0 ｍの円形を呈す。0.3 ｍの掘り込みを有す。J-63 と重複し、現地では当遺構が古いとしている。壁溝が全周し 15 本の壁柱穴を伴う。柱穴は深さ 0.3 ～ 0.6 ｍの P2・P4・P8・P10 の他に浅いもの８本がある。炉は中央に位置し、下部に焼土が堆積していた。住居跡出土土器は１～５である。

１・２は加曽利Ｅ式終末の土器である。１・２は口縁部が微隆線で区画され、胴部に縄文のみが認められる。１は口縁部の一部が突起状になる。いずれも微隆線上に縄文が認められる。３～５は称名寺式土器である。３・４は称名寺式中段階の土器と考えられる。細い沈線と目の細かい縄文による帯縄文によるＪ字文が施される。４は鉢形土器である。５は称名寺Ⅱ式と考えられる。沈線のみが引かれる。

住居跡の時期は称名寺Ⅰ式期と考えられる。土器以外では石皿・台石１点 (第 289 図 15)、石棒１点 (第 296 図２)、剥片類６点が出土している。

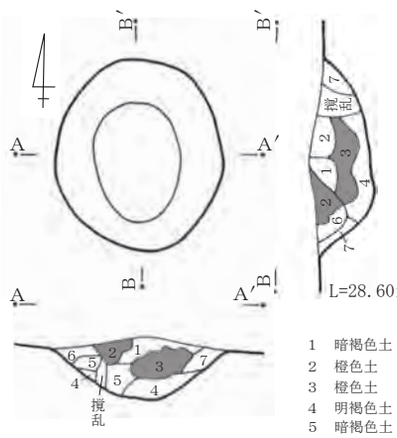
Ｊ－62



1　暗褐色土　　褐色土を斑文状に含む
2　暗褐色土　　ローム粒・焼土粒・炭化物を含む

L=28.70m

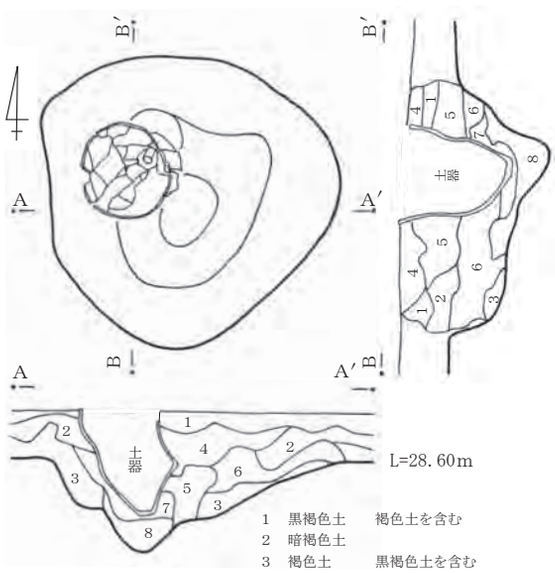
Ｊ－63 住居炉



L=28.60m

1　暗褐色土　　焼土粒を含む
2　橙色土　　焼土粒を多量に含む
3　橙色土　　焼土粒を多く含む
4　明褐色土　　ローム粒・ロームブロックを多く含む
5　暗褐色土　　焼土を含む
6　明褐色土　　焼土を含む
7　明褐色土　　ローム粒を含む

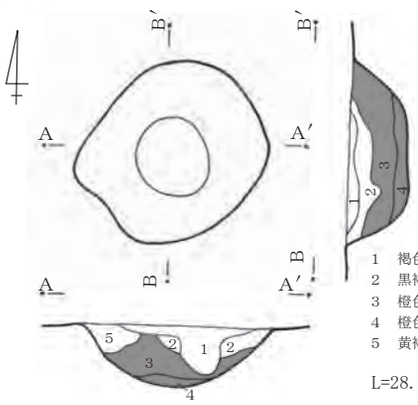
Ｊ－63 住居埋設土器



L=28.60m

1　黒褐色土　　褐色土を含む
2　暗褐色土
3　褐色土　　黒褐色土を含む
4　黒褐色土　　ローム粒を少し含む
5　褐色土　　黒褐色土を含む
6　暗褐色土
7　黒褐色土　　ローム粒を含む
8　橙色土　　焼土粒を含む

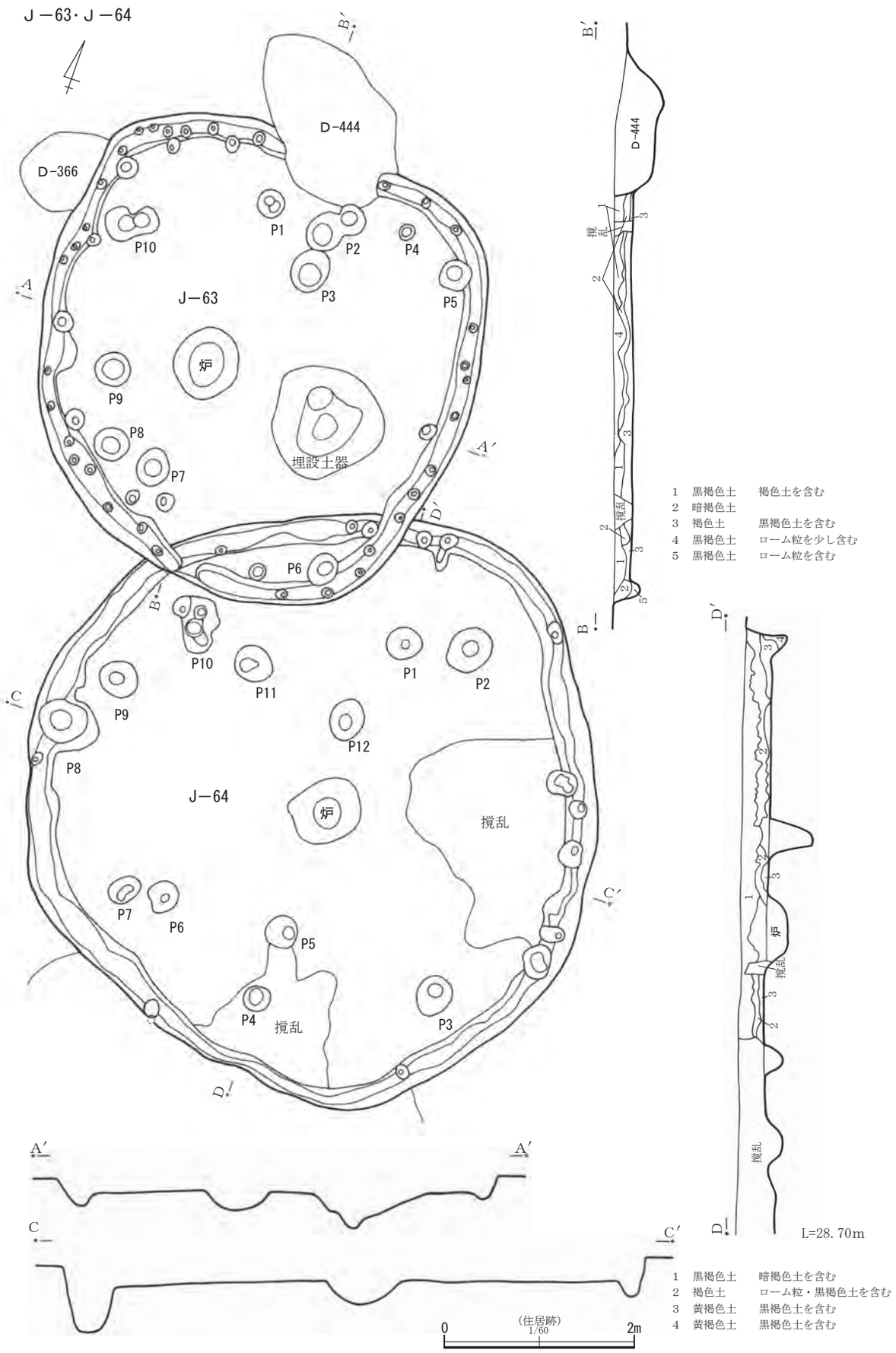
Ｊ－64 住居炉



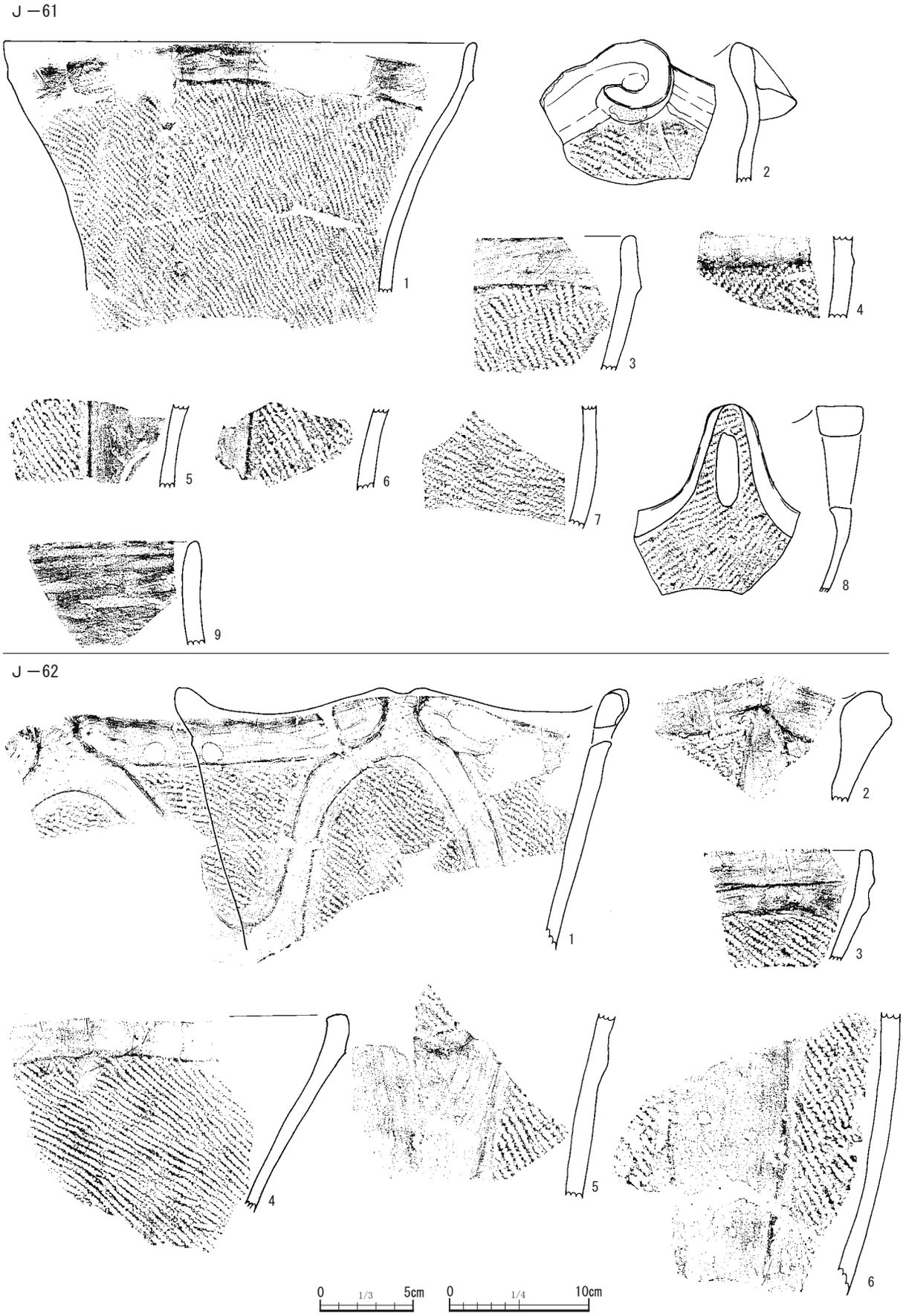
1　褐色土　　褐色土を含む
2　黒褐色土　　焼土を多く含む
3　橙色土　　焼土
4　橙色土　　焼土に炭化物を含む
5　黄褐色土　　黒褐色土を含む

L=28.60m

第149図　Ｊ-62(1)・Ｊ-63(1)・Ｊ-64(1)

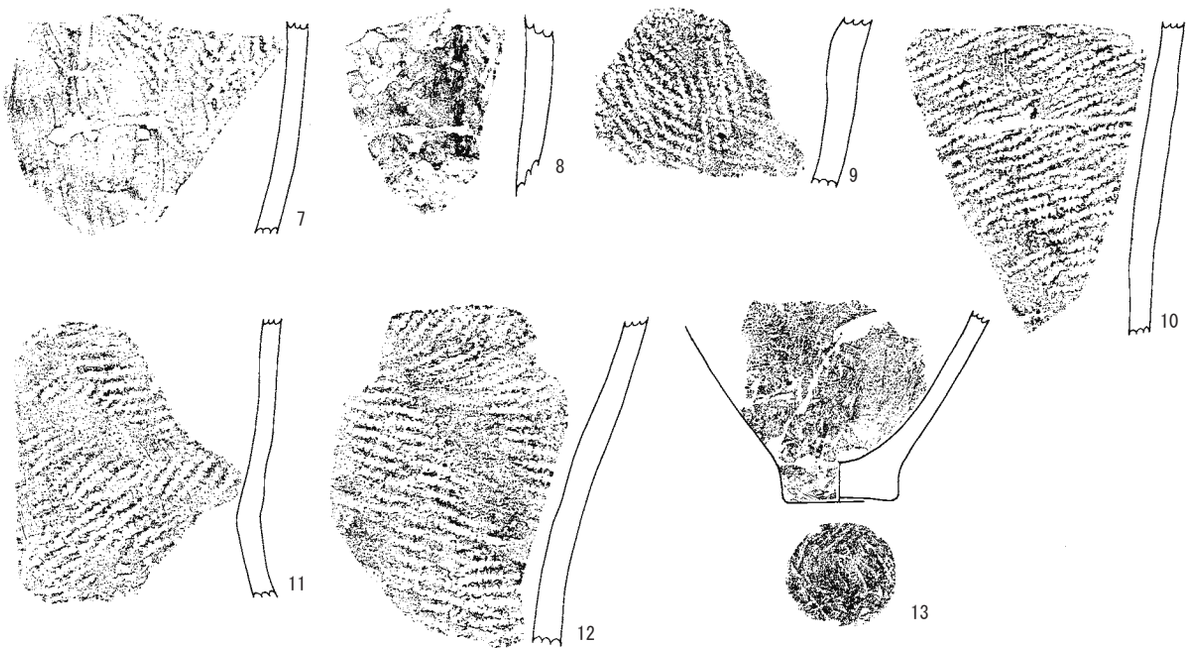


第 150 図　J -63(2)・J -64(2)

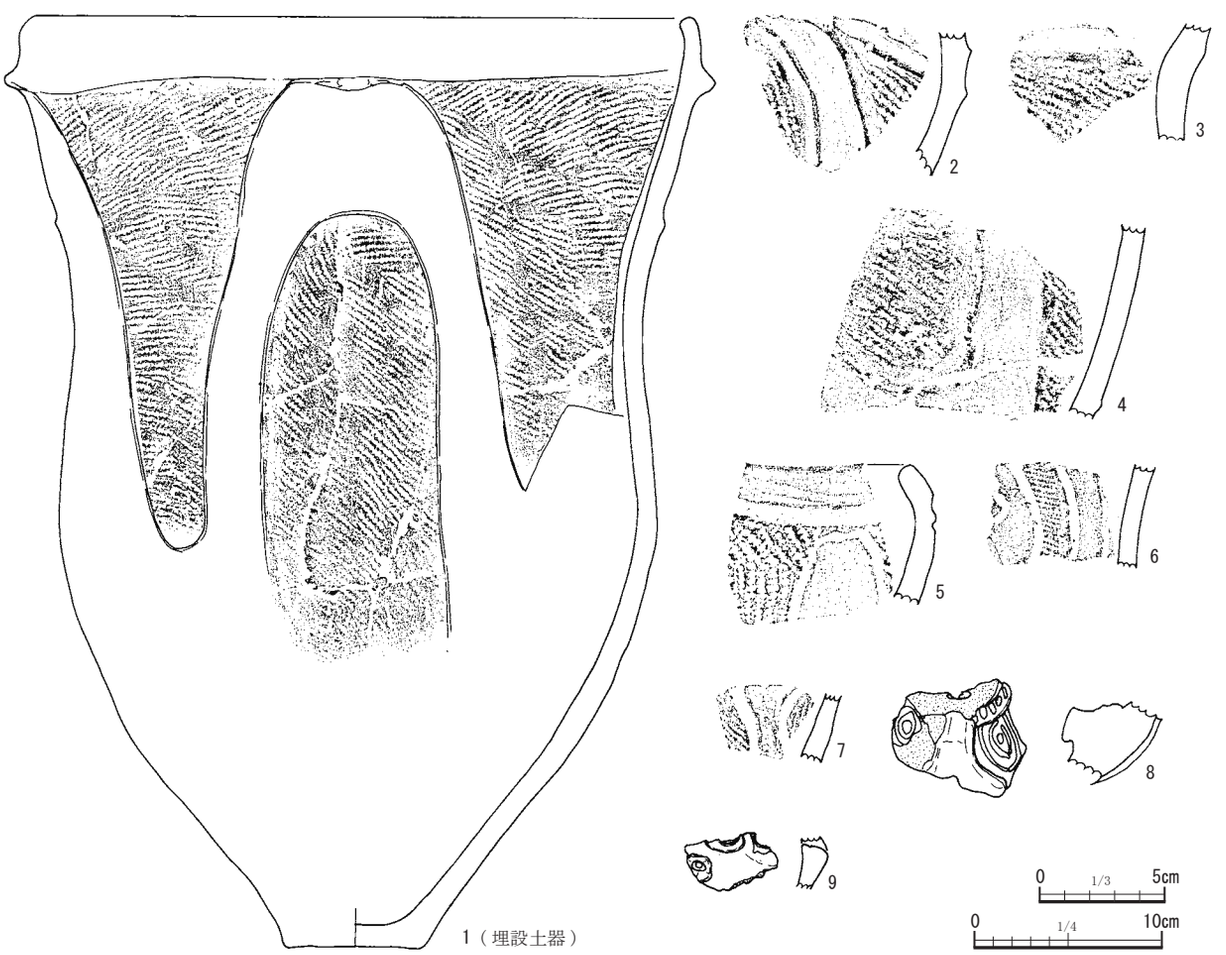


第 151 図　J -61(2)・J -62(2)

J－62



J－63



第 152 図　J -62(3)・J -63(3)

J-65(第 153 ～ 155 図・図版 21・43)

旧ヲ -15- 1 住。5.4 × 5.0 mの不整円形を呈する。0.3 mの掘り込みを有す。壁溝が全周し壁柱穴 25 本を伴う。柱穴は深さ 0.2 ～ 0.6 mの P3・5・7・10・15 の他に浅いもの 13 本がある。炉は中央に位置し、下部に焼土層を形成していた。住居跡出土土器は 1 ～ 4・7 ～ 15・18・19・21・24 である。確認面上出土は 5・6・16・17・20・22・23 である。

1 ～ 18 は加曽利 E 式終末の土器である。1 ～ 6 は口縁部が微隆線で区画され、胴部には縄文のみが認められる。2 ～ 4 は口縁部の一部に突起が付される。3・4 は微隆線脇がナデられるが、1・2・5・6 は微隆線上に縄文が認められる。7・8 は口縁部が微隆線で区画され、胴部には微隆線と縄文で「逆 U 字状文」が施される。微隆線脇はナデられる。9 は胴部に微隆線と縄文で文様が施される。微隆線脇はナデられる。10・11 は口縁部がナデによる沈線で区画され、胴部に縄文のみが認められる。12 ～ 17 は胴部に沈線と縄文で文様が施される。12 はキャリパー形で、胴部に「U 字状文」が施される加曽利 E Ⅳ式である。18 は鉢形土器である。胴部には微隆線と縄文で文様が構成され、橋状把手が付される。微隆線脇はナデられる。19 ～ 23 は加曽利 E Ⅲ式と考えられる。19・20 は「意匠充填系土器」であると考える。微隆線と縄文で文様が構成され、微隆線脇には明瞭なナデが認められる。21 は口縁部に沈線と列点が認められる。22・23 は「横位繋弧線文土器」と考えられる。沈線と縄文で文様が構成される。24 は称名寺式中段階の土器である。細い沈線と縄文で文様が構成される。無文部で主文様が施されているものと考えられる。

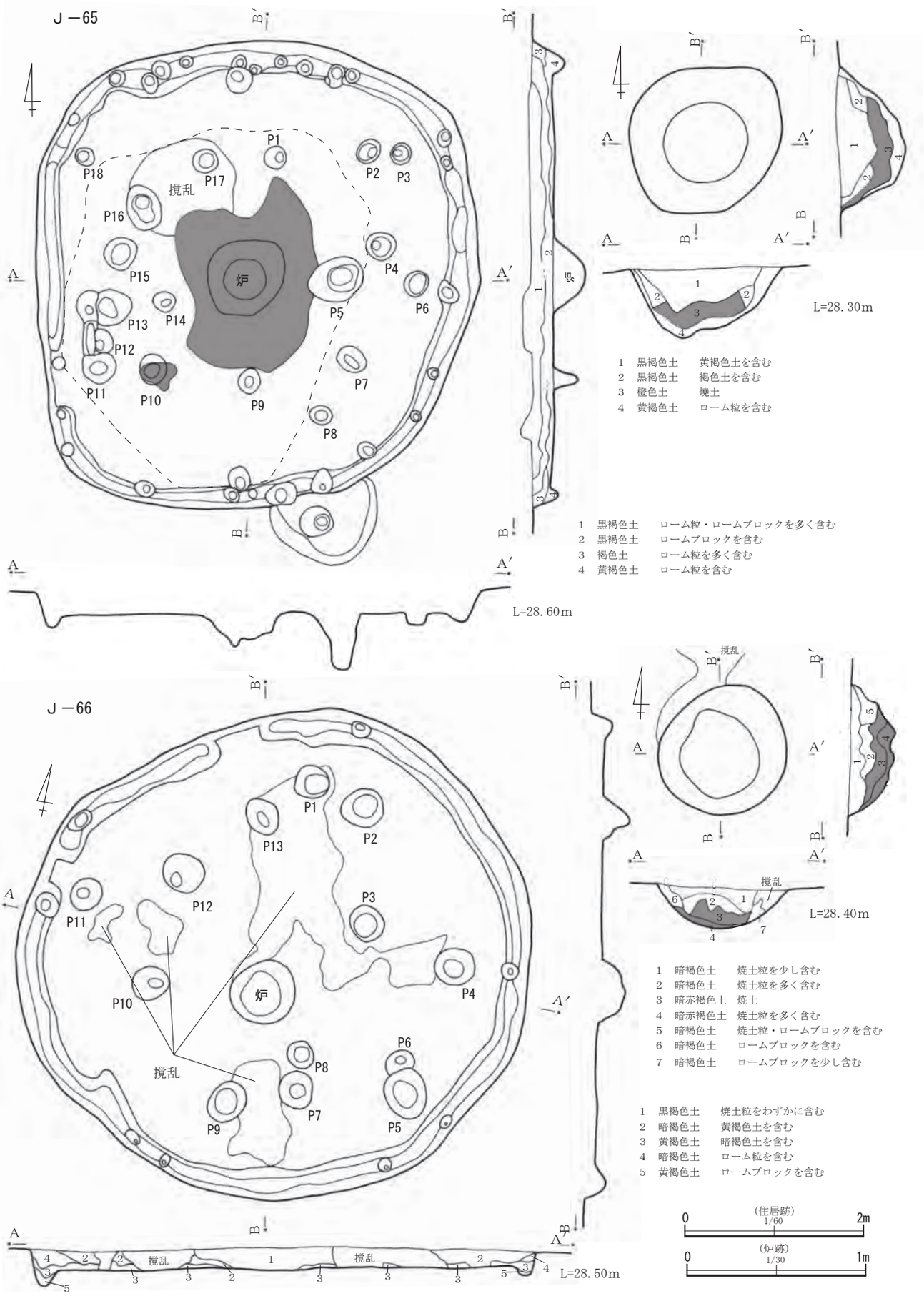
住居跡の時期は加曽利 E Ⅳ式期であると考えられる。土器以外では軽石製品 1 点 (第 293 図 17)、剥片類 5 点が出土している。

J-66(第 153・155・156 図・図版 21・43)

旧ヲ -16- 1 住。5.8 × 5.5 mの円形を呈す。0.2 mの掘り込みを有す。壁溝が全周し壁柱穴 8 本を伴う。柱穴は深さ 0.5 ～ 0.6 mの P1・P3・P5・P8・P10・P11 のほか浅いもの 7 本がある。炉は中央やや南寄りに位置し、下部に焼土層を形成していた。住居跡出土土器は 1 ～ 3・6・8 ～ 13・15 ～ 24 である。確認面上出土は 4・5・7・14・25 である。

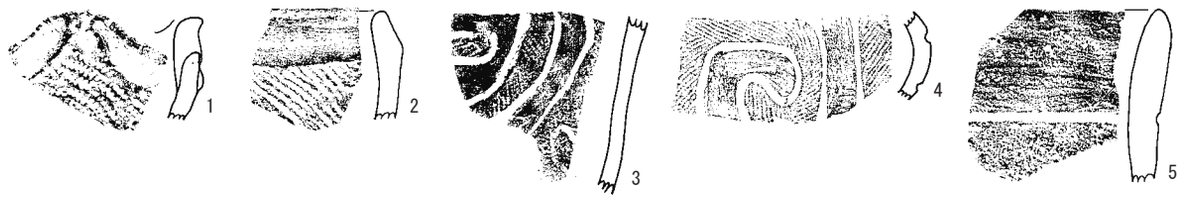
1 ～ 8 は加曽利 E Ⅲ式である。1 ～ 4 は「意匠充填系土器」である。1・2 は微隆線と縄文で文様が施される。微隆線脇にはナデが明瞭に認められる。3・4 は同一個体である。微隆線と縄文で文様が施され、微隆線脇には沈線が引かれる。微隆線上にも縄文が施される。5・6 は「横位連繋弧線文土器」である。5 は口縁部に列点が施される。6 は口縁部にナデによる沈線が引かれる。7・8 は、口縁部にナデによる沈線が引かれ、胴部には縄文のみが認められる。口縁部の無文帯が加曽利 E Ⅳ式に比べ狭い。9 は加曽利 E Ⅲ式と考えられる。沈線と縄文で文様が施された後に、沈線脇がナデられる。10 は加曽利 E Ⅲから Ⅳ式と考えられる。口縁部は微隆線で区画され、微隆線脇に列点が施される。口縁部の一部は突起状になる。胴部には沈線と縄文で「抱球文」と推測される文様が施される。11 ～ 21・25 は加曽利 E 式終末の土器である。11 ～ 17・25 は口縁部が微隆線で区画され、胴部には縄文のみが認められる。16・17 は同一個体である。いずれも微隆線上にも縄文が認められる。18 は口縁部の屈曲部で区画される。19 は櫛歯状工具による条線が引かれる。20 は鉢形土器で、微隆線と縄文が施される。微隆線脇はナデられる。把手が付される。21 は把手の一部である。22・23 は加曽利 E 式後半の底部である。22 は沈線による懸垂文と縄文、23 は縄文のみが認められる。24 は口縁部破片であるが、時期不明である。赤彩が認められる。

住居跡の時期は加曽利 E Ⅲ式期と考えられる。土器以外では石皿・台石 1 点 (第 290 図 49)、石鏃 1 点 (第 291 図 35)、剥片類 1 点が出土している。

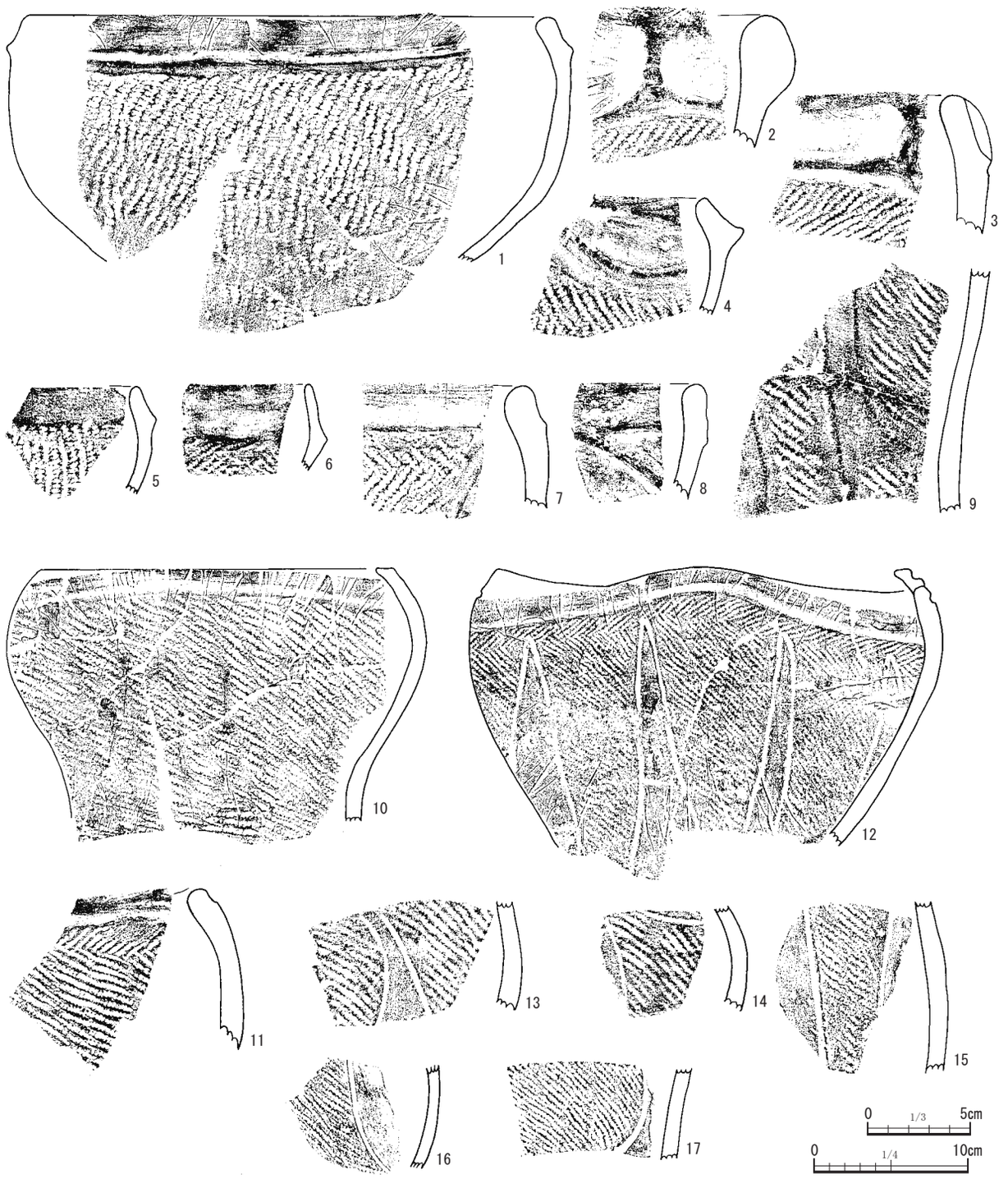


第153図　J -65(1)・J -66(1)

J－64

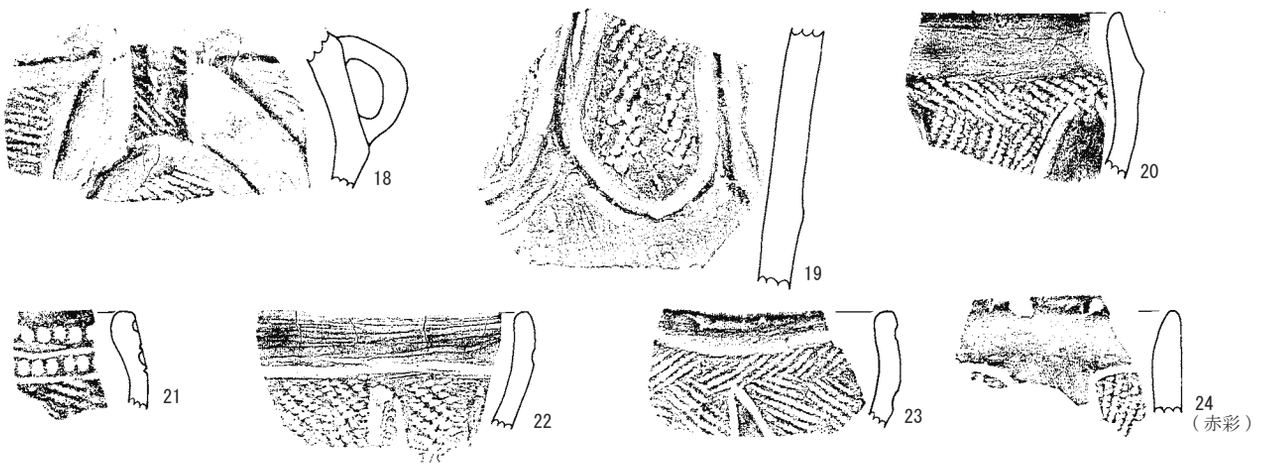


J－65

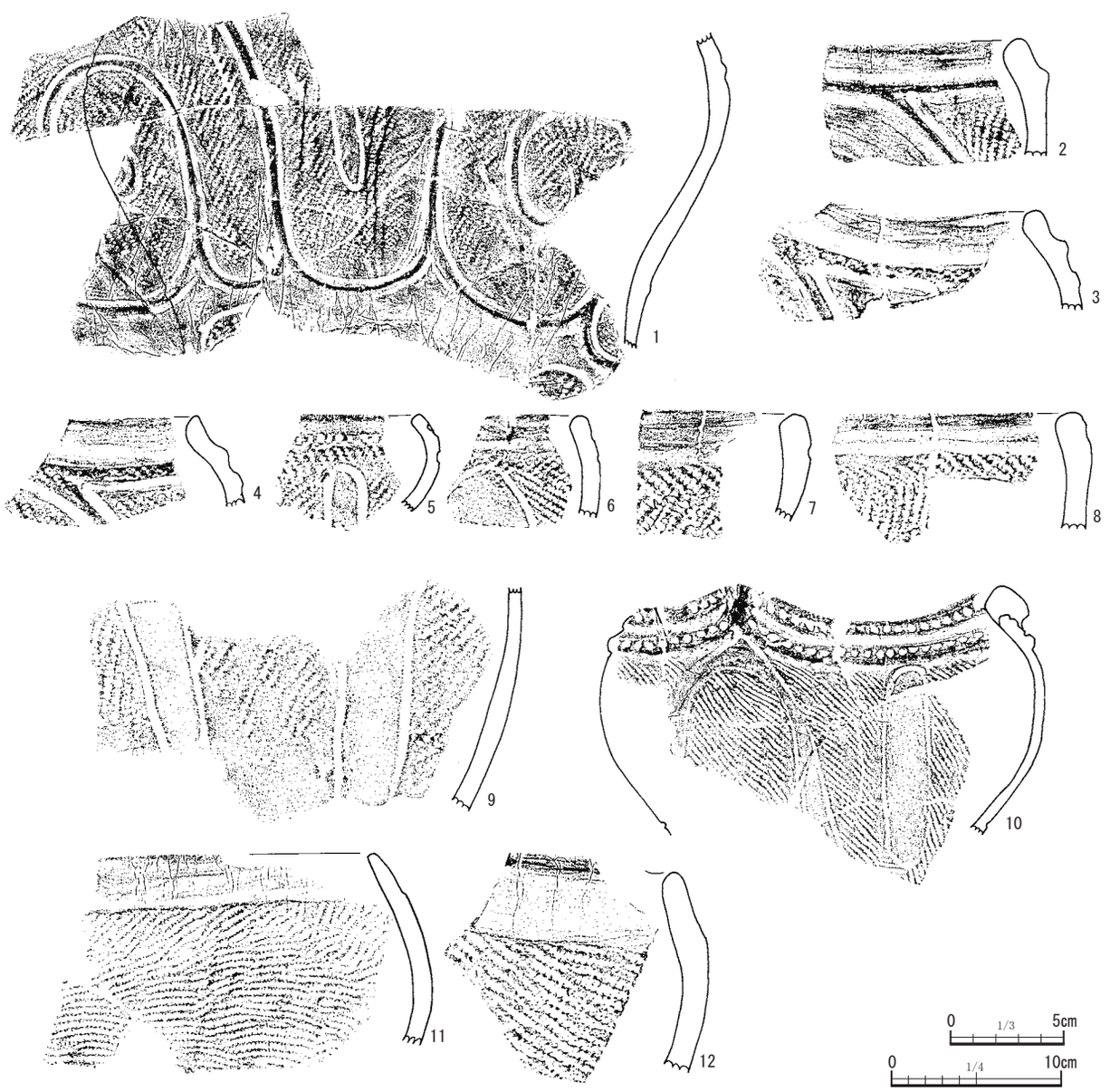


第 154 図　J -64(3)・J -65(2)

J－65



J－66



第 155 図　J -65(3)・J -66(2)

J-67(第 156・157 図)

旧Ⅰア -17- 1 住。掘り込みを有さず、柱穴のみを検出した。D -386 と重複する。柱穴は深さ 0.5 ～ 0.8 m の P1 ～ 10 がある。炉はない。住居跡出土を確認できる掲載土器はない。確認面上出土は 1 である。 1 は加曽利Ｅ式後半の土器と考えられる。縄文のみが施される。住居跡の時期は出土遺物が少なく不明である。

J-68(第 157・158 図・図版 21)

旧Ⅰイ -11- 1 住。5.3 × 4.6 mの楕円形を呈す。0.4 mの掘り込みを有す。壁溝が全周し 13 本の壁柱穴を伴う。柱穴は深さ 0.3 ～ 0.5 mの P1・P2・P5・P6 のほか浅いもの 3 本がある。炉は中央に位置し、下部に焼土層を形成していた。 1 ～ 14 の土器は住居跡出土を確認できる。

1 ～ 10 は加曽利Ｅ式終末の土器である。 1 ～ 3 は口縁部が微隆線で区画され、胴部に縄文のみが施される。 3 は微隆線脇がナデられるが、 1 ・ 2 は微隆線上にも縄文が認められる。 4 は口縁部が微隆線で区画され、胴部は微隆線と縄文で「逆Ｕ字状文」が施される。微隆線脇はナデられない。 5 は口縁部が微隆線で区画され、胴部は沈線と縄文で文様が施されるものと考えられる。微隆線脇には沈線が引かれ、胴部文様と連結される。 6 ・ 7 は沈線と縄文で文様が施される。 8 ～ 10 は縄文のみが施される。11・12 は称名寺式古段階の土器である。11 は口唇部に平坦面を持つ。やや太い沈線と縄文が施される。12 は帯縄文で文様が構成される。沈線上には刺突が認められる。13 は加曽利ＥⅡ式である。口縁部は無文で、胴部は縄文と沈線による懸垂文が施される。14 は加曽利ＥⅢ式である。口縁部に 2 列の列点が施され、胴部には沈線と縄文で文様が施される。「横位連繋弧線文土器」の可能性が考えられる。

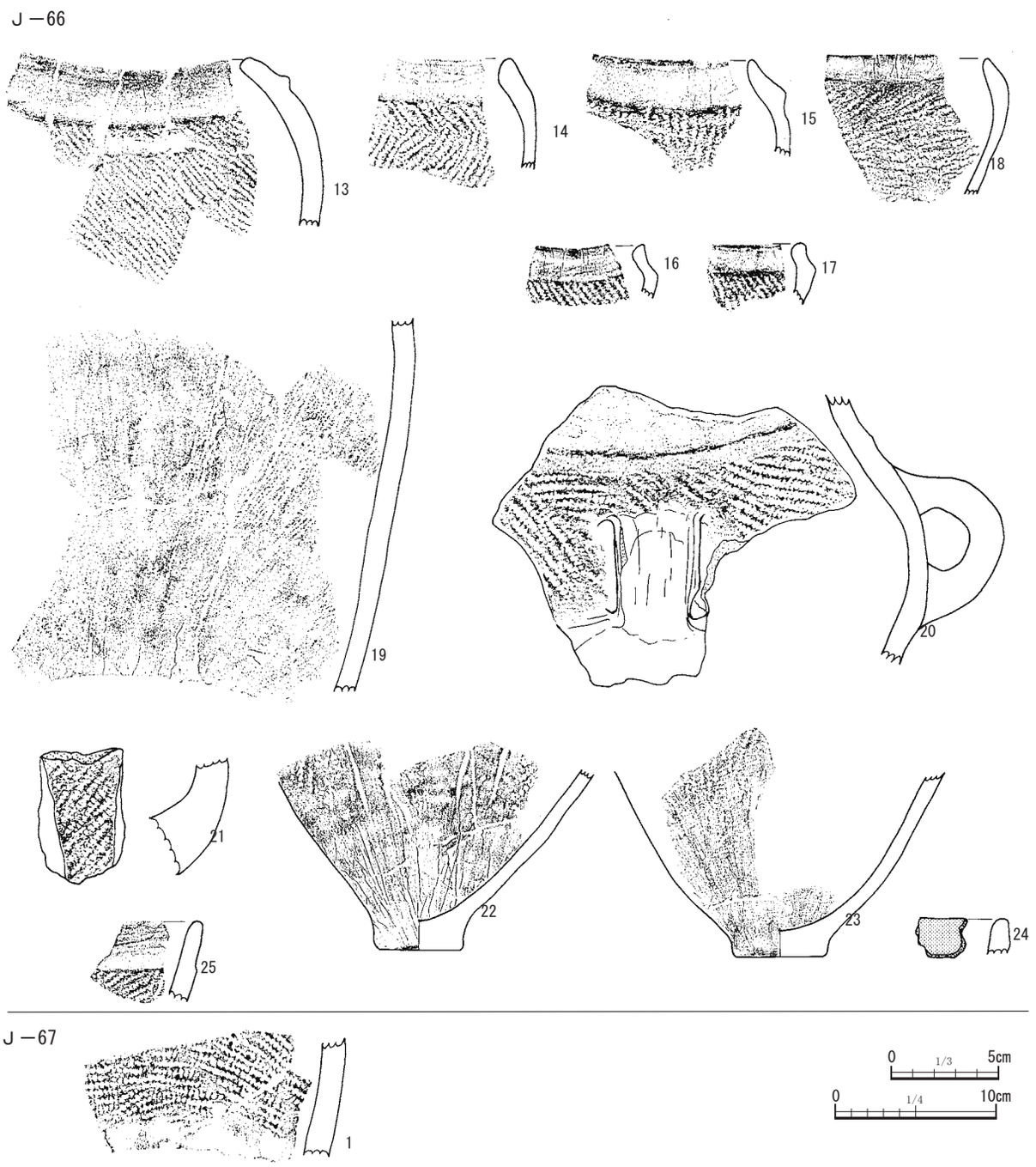
住居跡の時期は加曽利ＥⅣ～Ⅴ式期と考えられる。土器以外では石棒 1 点 (第 296 図 38)、石鏃 2 点 (第 291 図 34・63)、同未成品 1 点 (付表 3-5-31) が出土している。

J-69(第 159 ～ 161 図・図版 21・44・46)

旧Ⅰイ -13- 1 住。5.0 × 4.7 mの円形を呈す。0.2 mの掘り込みを有す。柱穴は深さ 0.4 ～ 0.6 mの P1・P3・P7・P8・P14 の他浅いもの 10 本がある。炉は中央に位置し、覆土に焼土を含む。住居跡出土土器は 1 ～ 5・8 ～ 13・15・16・18・19 である。 1 は P12 の東側から出土した。確認面上出土は 6・7・14・17 である。

1 ～ 12・18・19 は加曽利Ｅ式終末の土器である。 1・2 は加曽利ＥⅣ式と考えられる。 1 はキャリパー形の器形である。沈線で口縁が区画され、胴部には沈線と縄文で渦巻文が施される。口縁部の一部は突起状になる。 2 は口縁部が内弯する器形である。口縁部が微隆線で区画され、一部が突起状になる。口縁部には把手が付されていたと考えられるが、欠損している。胴部には沈線と縄文で「対向Ｕ字文」が施される。 3 ～ 10 は胴部に沈線と縄文で文様が施される。 5 ・ 6 は微隆線脇に沈線が引かれ、胴部文様と連結される。 7 は沈線で口縁部が区画される。 9 ・ 10 は細い沈線で文様が施される。11 は口縁部が微隆線で区画され、一部が突起状になる。胴部には縄文が認められる。微隆線上にも縄文が認められる。12 は微隆線と縄文で「対向Ｕ字文」が施される。微隆線脇はナデられる。18・19 は櫛歯状工具による条線が引かれる。13・14 は加曽利ＥⅢ式の「意匠充填系土器」である。微隆線と縄文で文様が構成され、微隆線脇にはナデが明瞭に認められる。15・16 は加曽利ＥⅢ式の可能性が考えられる。口縁部が沈線で区画され、胴部には縄文が施される。口縁部の無文帯が狭い。17 は安行 2 式である。口縁部に突起が施され、沈線と縄文で、文様が構成される。

住居跡の時期は加曽利ＥⅣ式期と考えられる。土器以外では石皿・台石 1 点 (第 289 図 4)、石核 1 点 (付表 3-5-69)、剥片類 1 点が出土している。



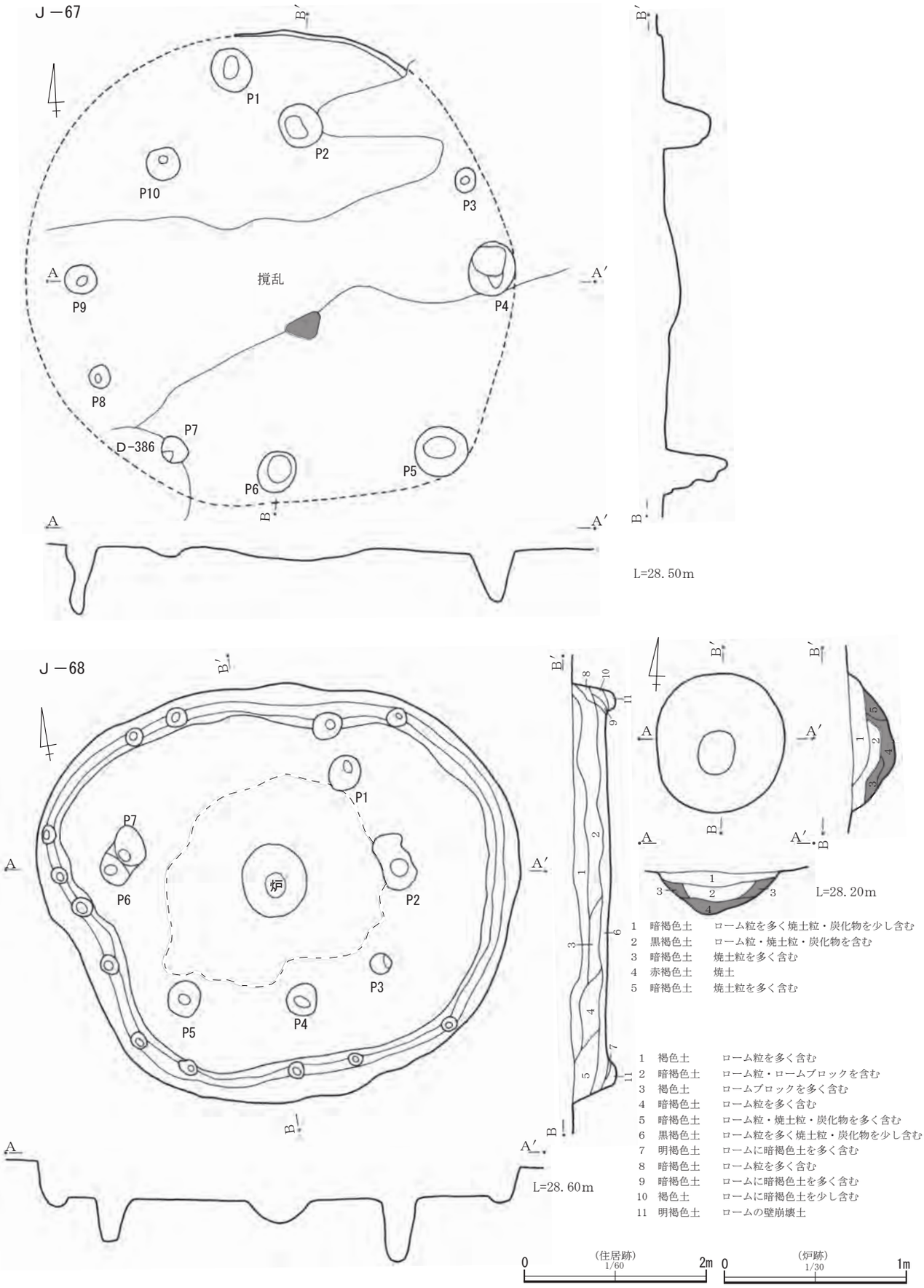
第 156 図　Ｊ -66(3)・Ｊ -67(1)

J-70(第 159・161 図・図版 21)

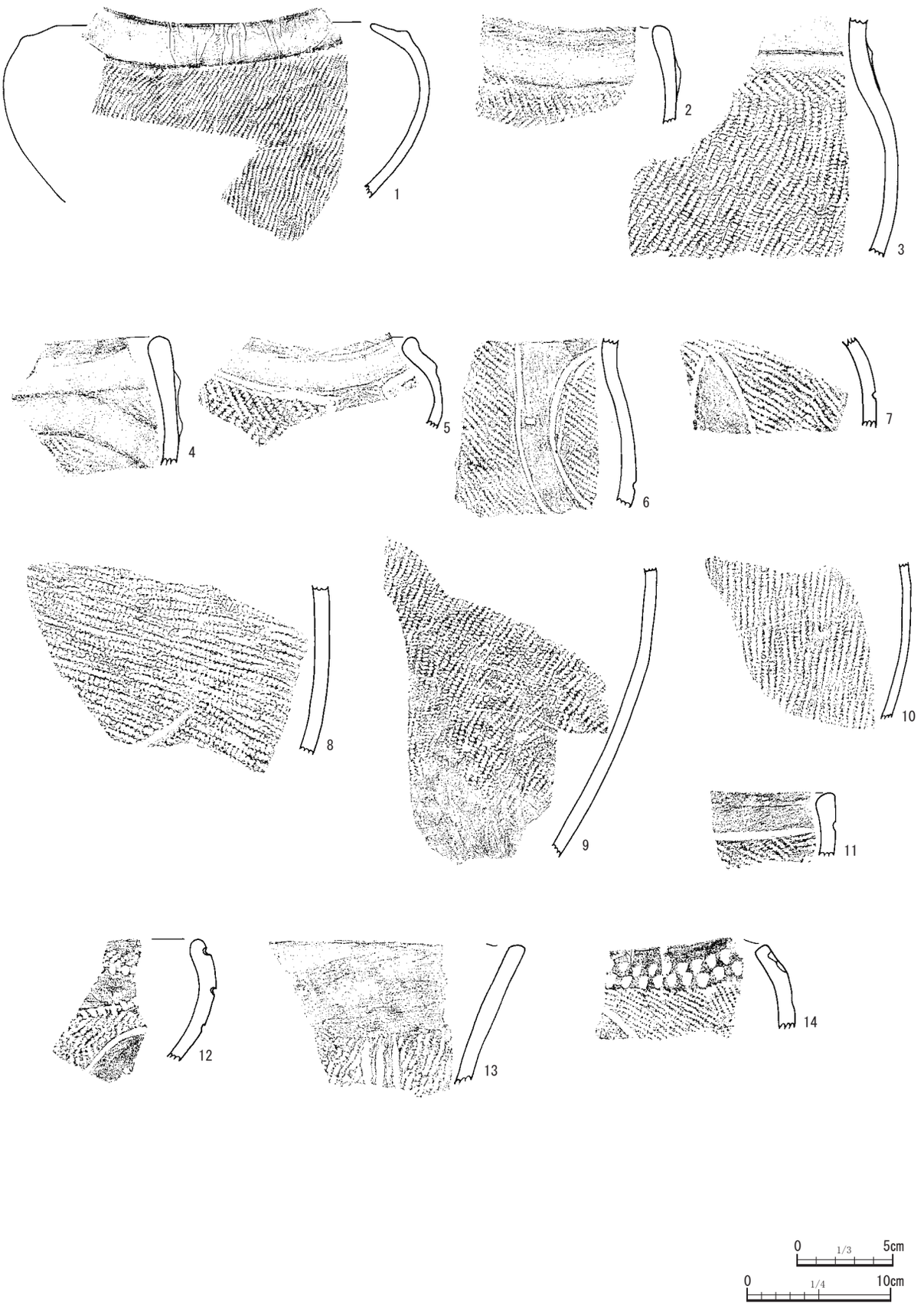
旧Ｉイ -16- 1 住。5.5 × 5.1 ｍのほぼ円形を呈す。0.2 ｍの掘り込みを有し、1 号方形周溝状遺構に切られる。柱穴は深さ 0.4 ～ 0.5 ｍの P2・P4・P8 ～ P10 の他に浅いもの５本がある。炉は中央に位置し、下部に焼土層を形成している。住居跡出土土器は１・２・５である。確認面上出土は３・４・６・７である。

１～７は加曽利Ｅ式終末の土器である。１・２は口縁部が微隆線で区画され、胴部には微隆線と縄文が施される。微隆線上にも縄文が認められる。３～５は口縁部が微隆線で区画され、胴部には縄文が施される。微隆線脇はナデられない。６は微隆線と縄文で「Ｕ字状文」が施される。７は口縁部が沈線で区画され、胴部には縄文のみが施される。

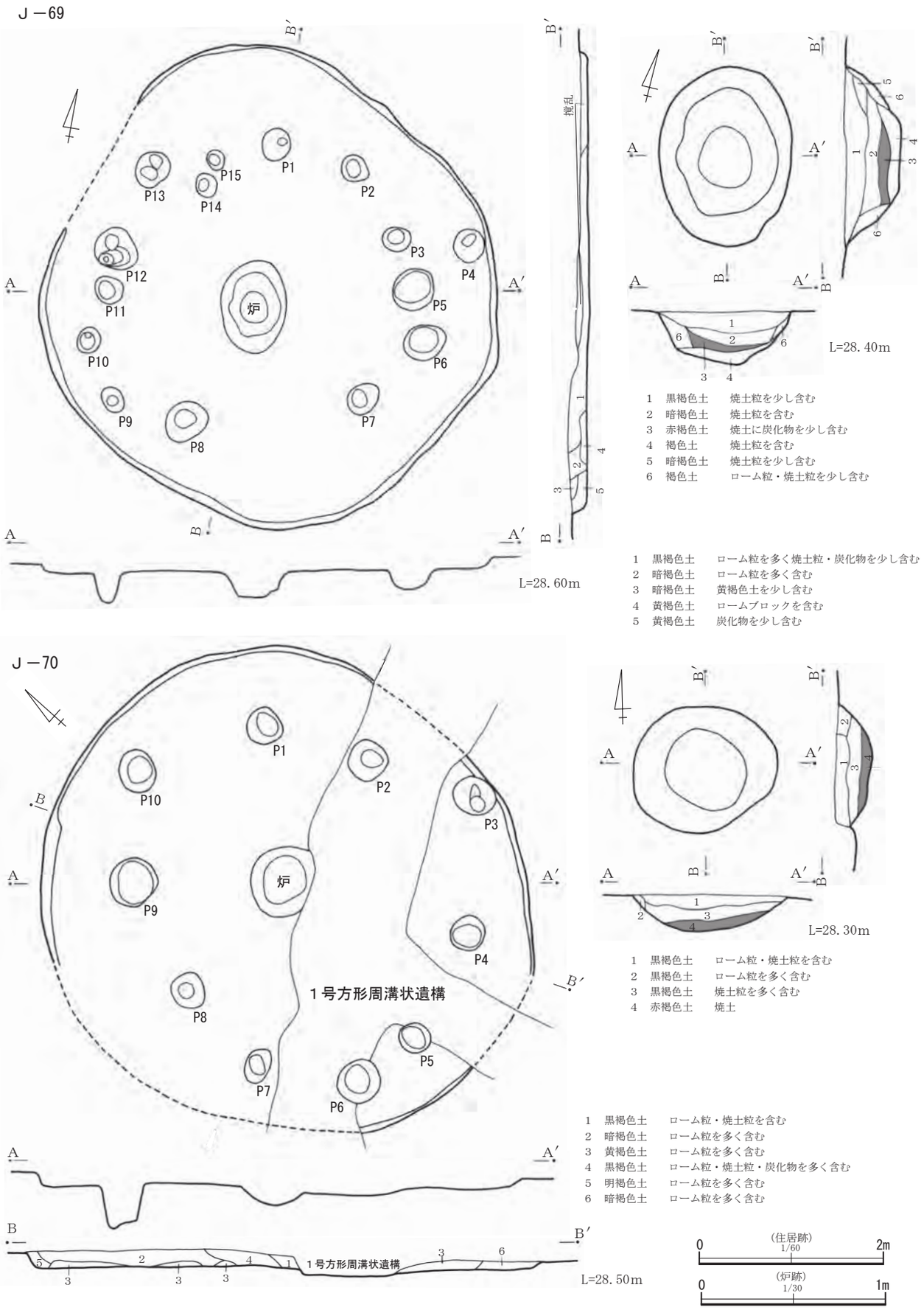
住居跡の時期は加曽利ＥⅣ～Ⅴ式期と考えられる。土器以外では剥片類３点が出土している。



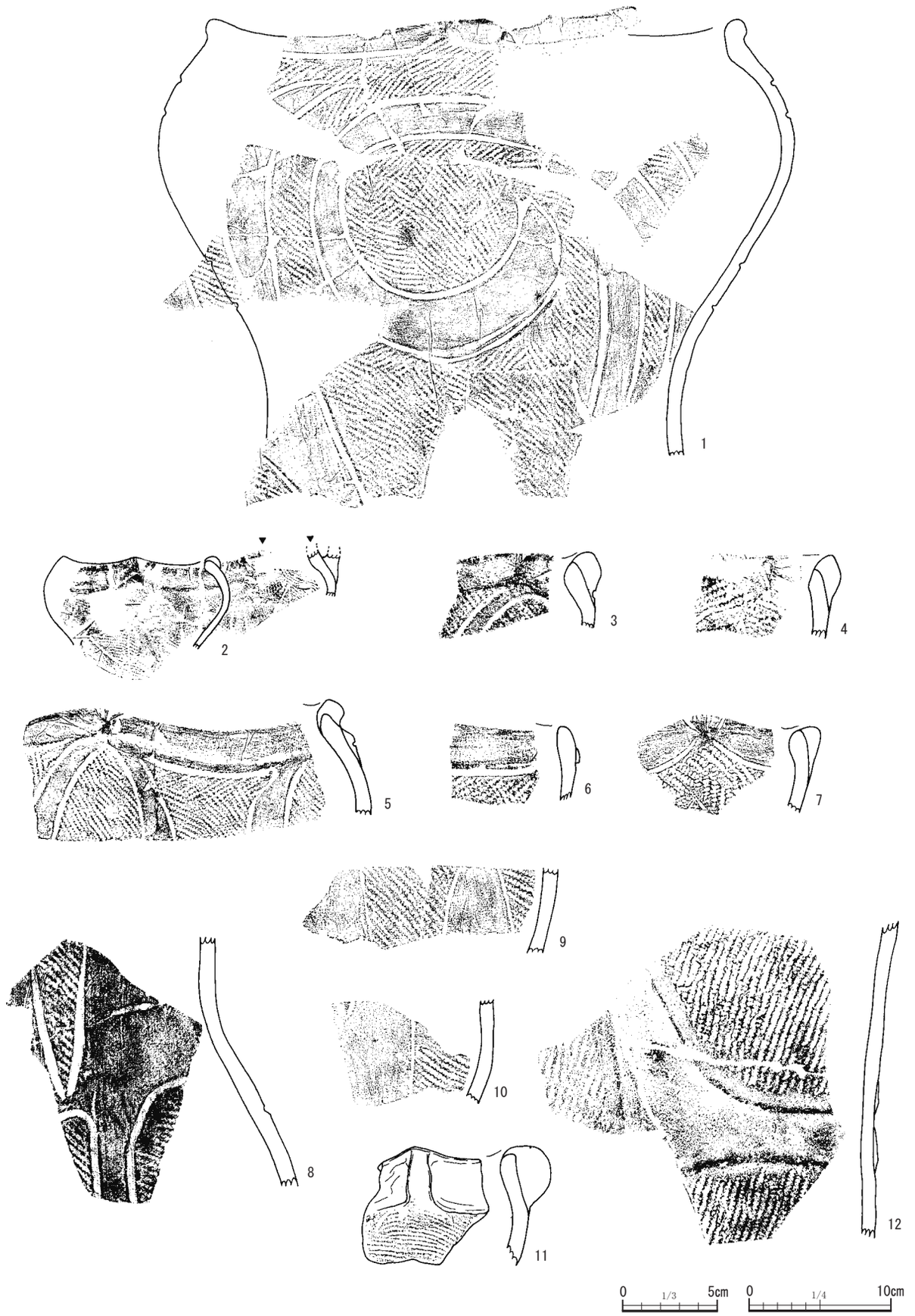
第 157 図　J -67(2)・J -68(1)



第 158 図　J -68(2)

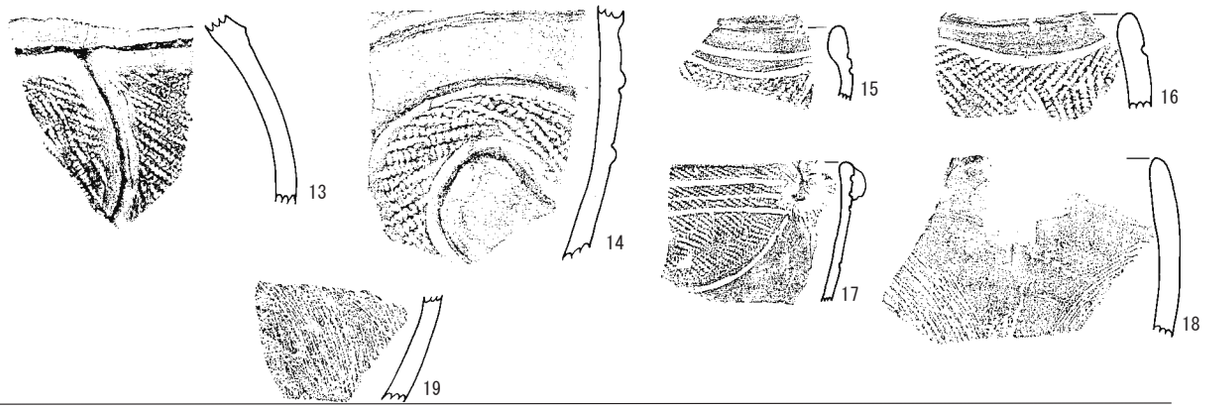


第159図　J -69(1)・J -70(1)

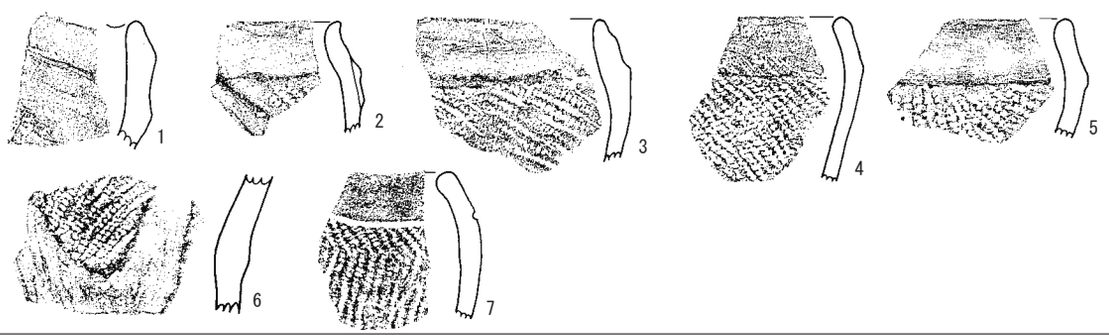


第 160 図　J -69(2)

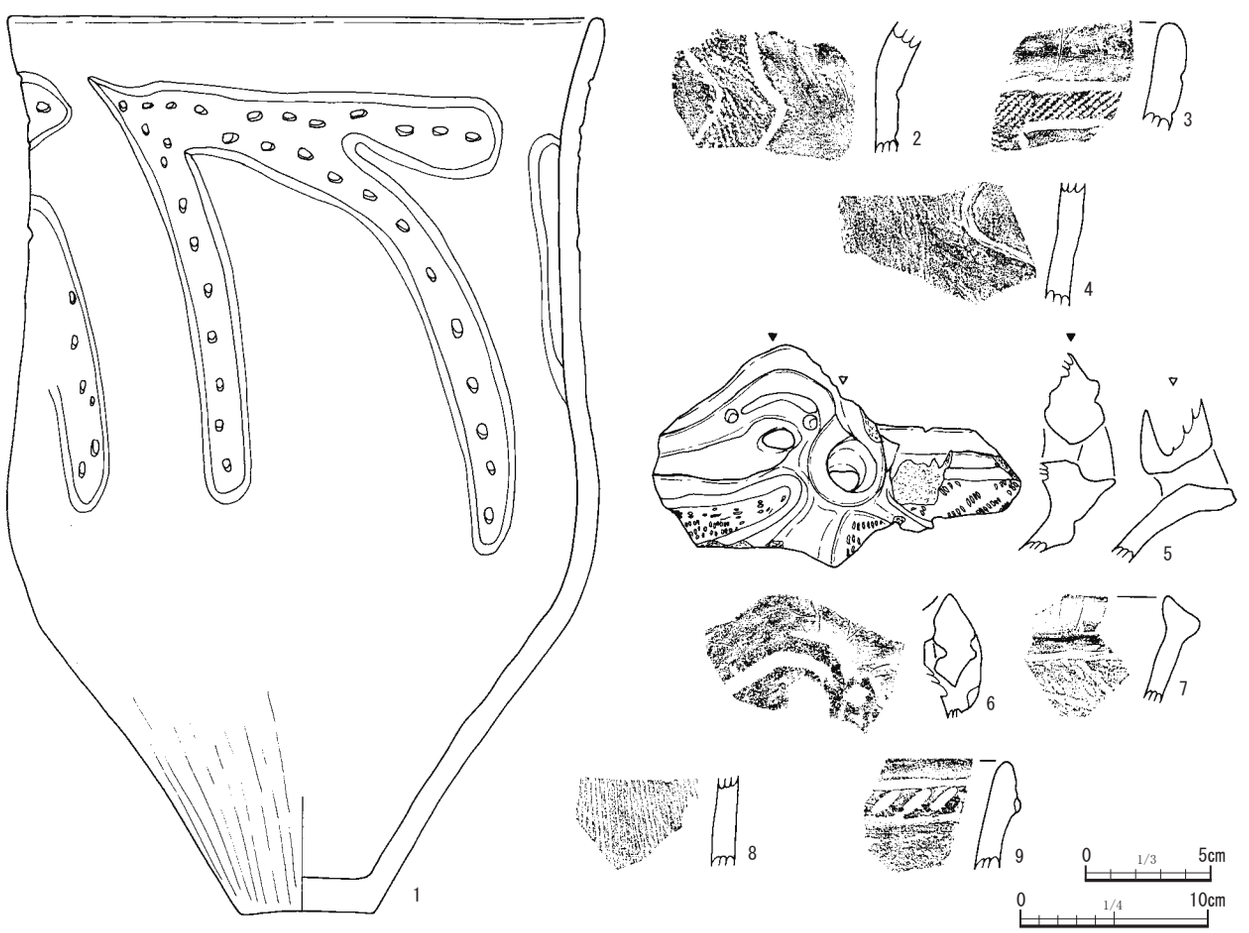
J－69



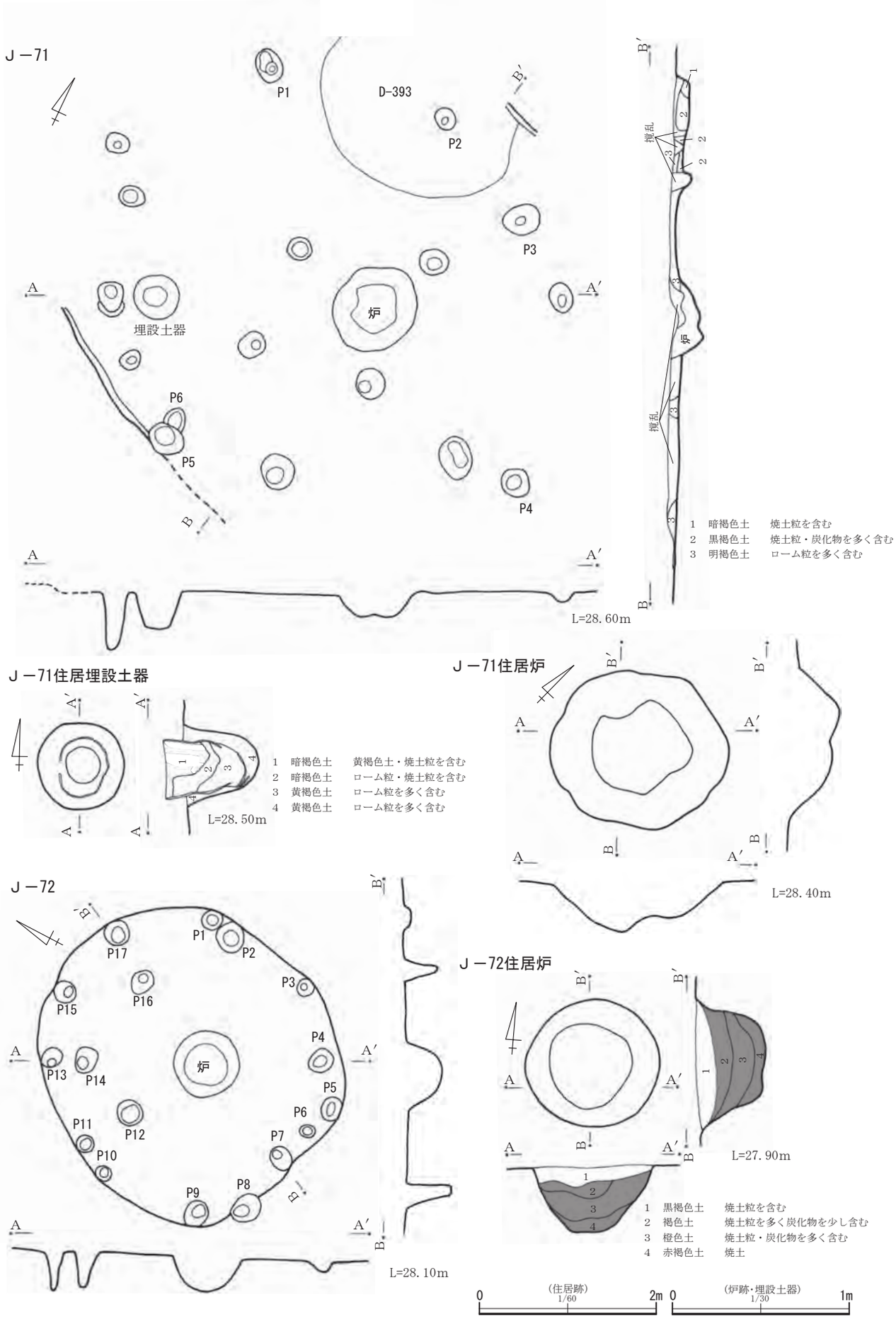
J－70



J－71



第 161 図　J -69(3)・J -70(2)・J -71(1)



第 162 図　J -71(2)・J -72(1)

J-71(第 161・162 図・図版 21・44・47)

旧Ⅰイ -17- 1 住。掘り込みを有さず柱穴のみを検出した。D -393(小竪穴) と重複する。柱穴は深さ 0.5 ～ 0.6 mの P1 ～ P5 の他に浅いもの 12 本がある。炉は中央に位置し、覆土に焼土を含んでいた。南西壁付近のピット内には深鉢 (1) がほぼ直立して埋設されていた。なお、この土器は『日本の美術 498(縄文土器　後期)』(至文堂 2007) に掲載されている。住居跡出土土器は 1 ・ 3 ・ 5 ～ 8 である。確認面上出土は 2 ・ 4 ・ 9 である。

1 は称名寺Ⅱ式である。沈線で区画された部分に列点が施される。文様は単位文化している。 2 は称名寺式古段階の可能性がある。帯縄文部と無文部の幅の広さが不均衡である。 3 は称名寺式中段階と考えられる。口縁部下に帯縄文が施される。 4 は称名寺式と考えられる。太い沈線のみが引かれている。 5 ・ 6 は称名寺Ⅱ式の注口土器である。隆線で区画され、区画内には櫛歯上工具による刺突が施される。隆線脇には沈線が引かれる。 7 ・ 8 は加曽利Ｅ式終末の土器である。 7 は口縁部が微隆線で区画され、胴部には沈線と列点が施される。 8 は櫛歯状工具による条線が引かれる。 9 は堀之内Ⅰ式である。口縁部に隆線が貼付され、隆線上に刻みが施される。

住居跡の時期は称名寺Ⅱ式期と考えられる。土器以外では打製石斧 1 点 (第 284 図 25)、剥片類 1 点が出土している。

J-72(第 162・164 図・図版 22)

旧Ⅰイ -20- 1 住。3.5 × 3.3 mの円形を呈す。掘り込みを有さない。炉と貼床、円形に並ぶ柱穴を検出したものであり、貼床面下で検出された柱穴・壁溝をもつものを J-73 とした。当遺構に伴う柱穴は深さ 0.4 ～ 0.6 mの P2・P7 ～ P9・P13 ～ P15 の他に浅いもの 10 本である。中央の炉にも作り替えが認められている。炉の覆土下部に焼土層を形成していた。J-72 の範囲内から出土した土器は 1 ～ 3 であり、 1 の一部は炉内出土、 1 は炉囲いであった可能性が高い。

1 ・ 2 は加曽利Ｅ式終末の土器である。 1 は縄文のみが施される。 2 は口縁部に付される橋状把手で、把手頂部には凹みが施される。胴部には沈線が認められる。 3 は堀之内式か。格子目状に沈線が引かれる。

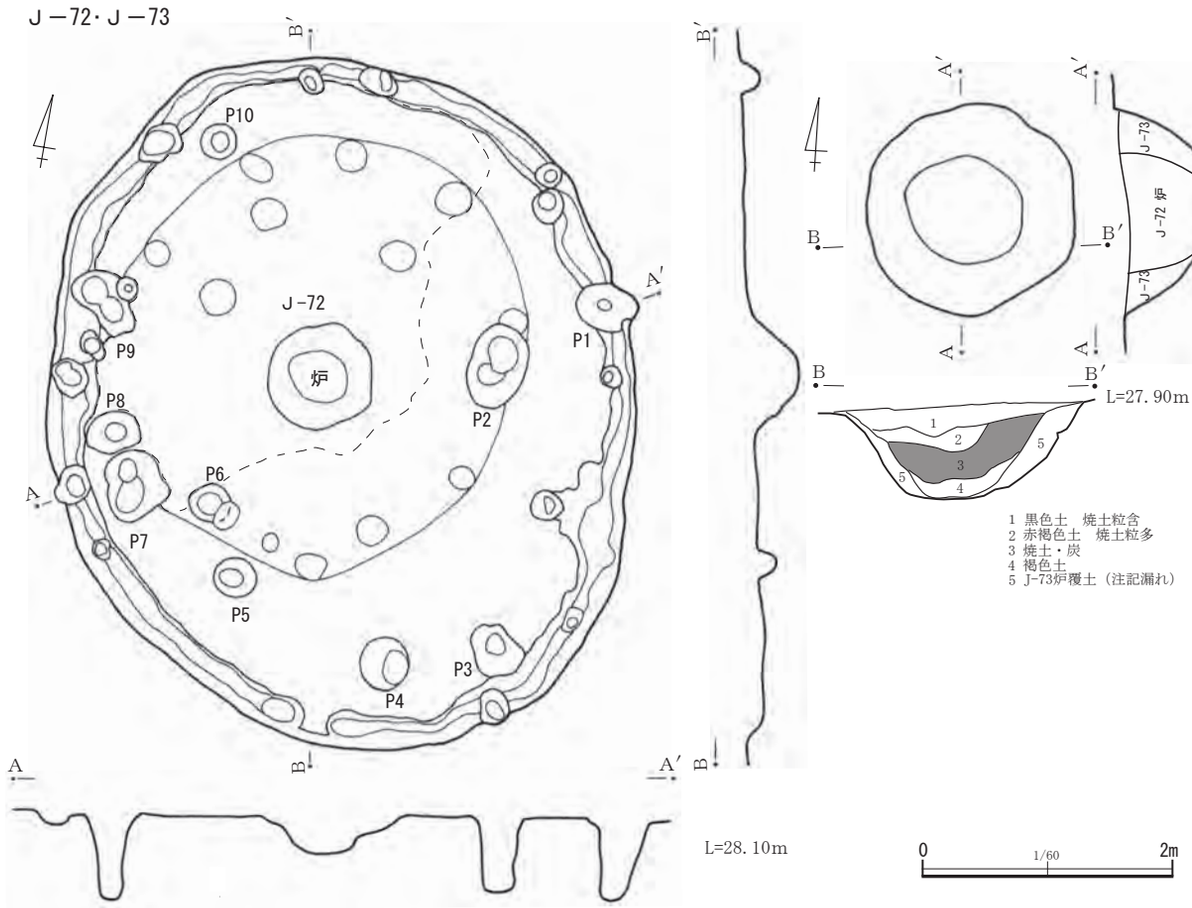
住居跡の時期は、73 号住居より新しい時期に構築されていることから堀之内式期と考えられる。土器以外では J-72・J-73 の範囲で土器片錘 3 点 (第 279 図 47 ～ 49)、焼成粘土塊 1 点 (第 280 図 7)、石鏃 1 点 (第 291 図 44) が出土している。

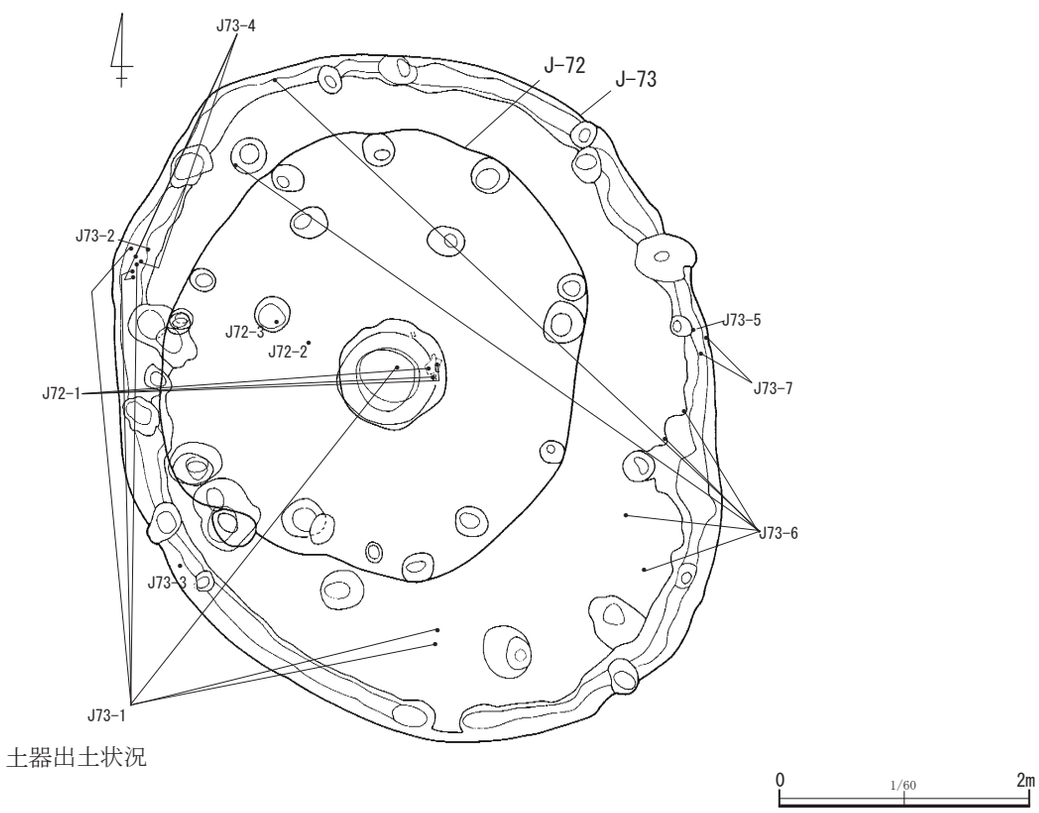
J-73(第 163 ～ 165 図・図版 22・44)

旧Ⅰイ -20-2 住。5.7 × 4.7 mの楕円形を呈す。掘り込みを有さない。J-72 の貼床面下で検出したものである。現地で当遺構に伴うと判断したものを図化した。壁溝は全周し 14 本の壁柱穴を伴う。柱穴は深さ 0.5 ～ 0.7 m P1 ～ P3・P7・P9 の他に浅いもの 5 本がある。炉は中央に位置し、J-72 の炉の作り替え前の部分を検出したが、土層注記もれである。J-73 の範囲内かつ J-72 の範囲外出土土器は 1 ～ 7 である。

1 ～ 3 は加曽利Ｅ式終末の土器である。 1 ・ 2 は口縁部が微隆線で区画され、胴部には縄文が施される。微隆線脇はナデられる。 3 は胴下部で、縄文のみが施される。底部に近い部分ではケズリによる調整痕が認められる。 4 は堀之内式と考えられる。胴部は強く屈曲し、屈曲部に隆線と刻みが施される。上部には縦方向の隆線が貼り付けられ、指頭で押捺される。 5 は加曽利Ｂ式から曽谷式と考えられる。くびれ部に沈線と刻みが施される。胴下部には縄文が認められる。 6 は加曽利Ｅ式に伴う台形土器で約 4/5 が遺存する。体部には貫通孔と縄文が認められる。頂部には使用による摩耗痕が明瞭に認められる。

住居跡の時期は堀之内 1 式期と考えられる。土器以外では剥片類 1 点が出土している。

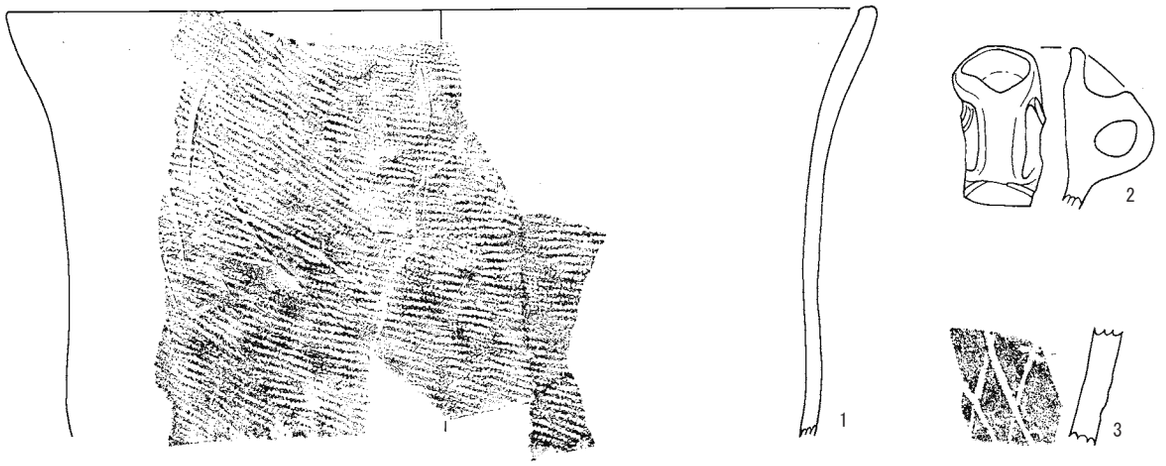




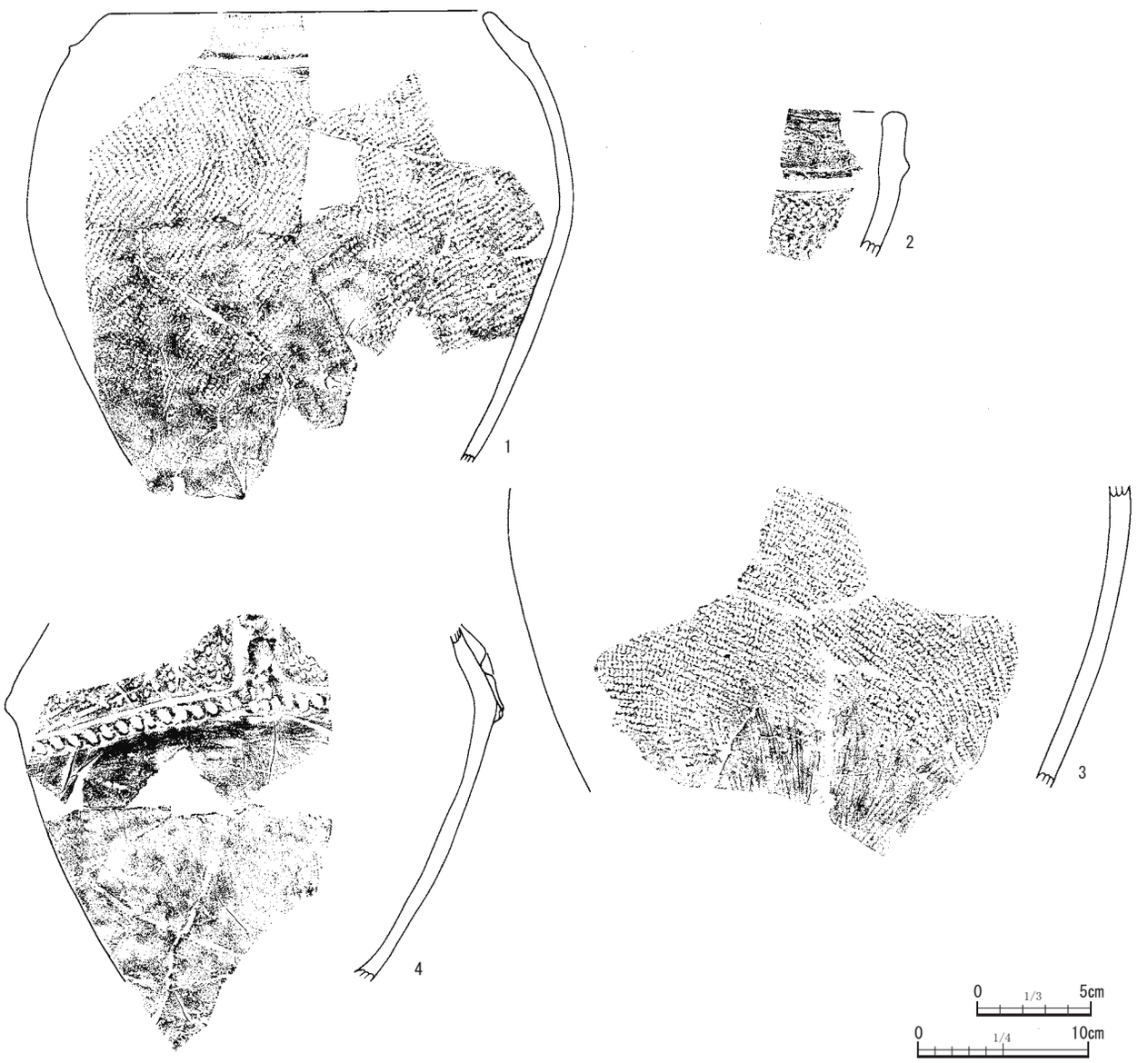
土器出土状況

第 163 図　J-72(2)・J -73(1)

J－72

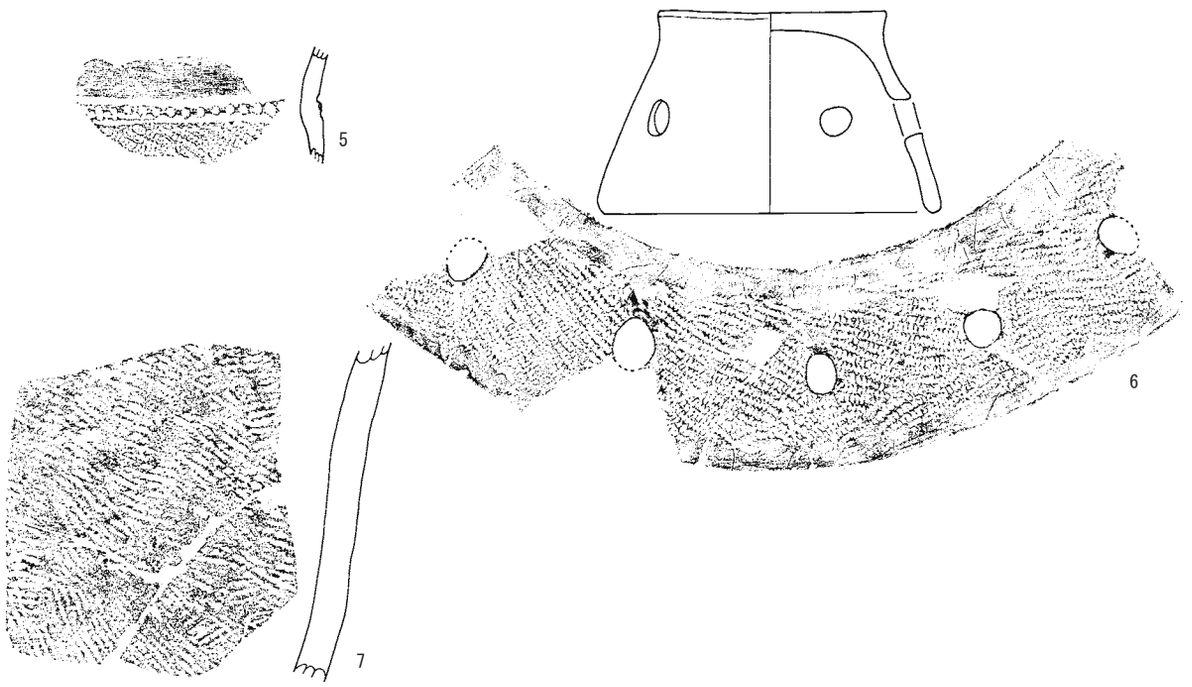


J－73

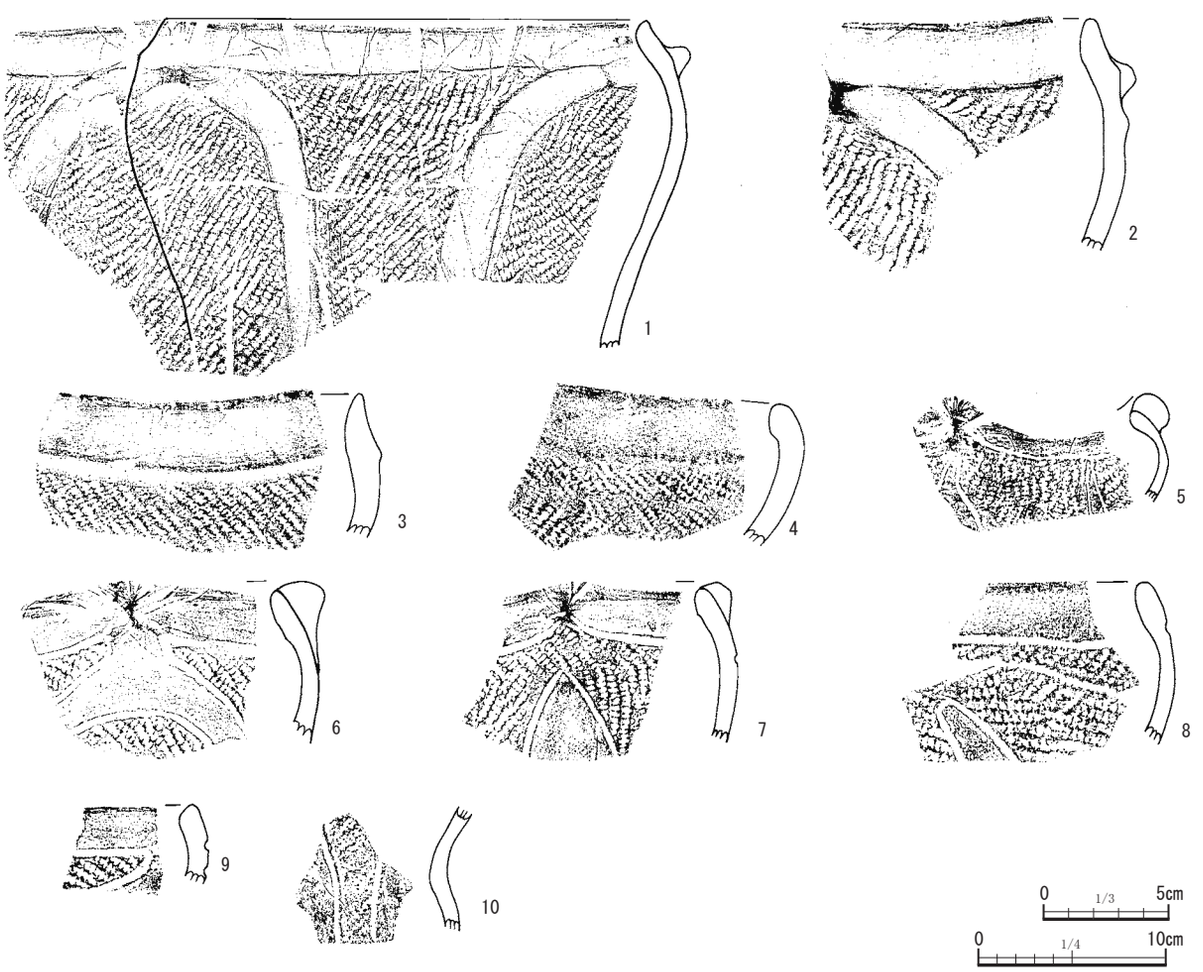


第 164 図　J -72(3)・J -73(2)

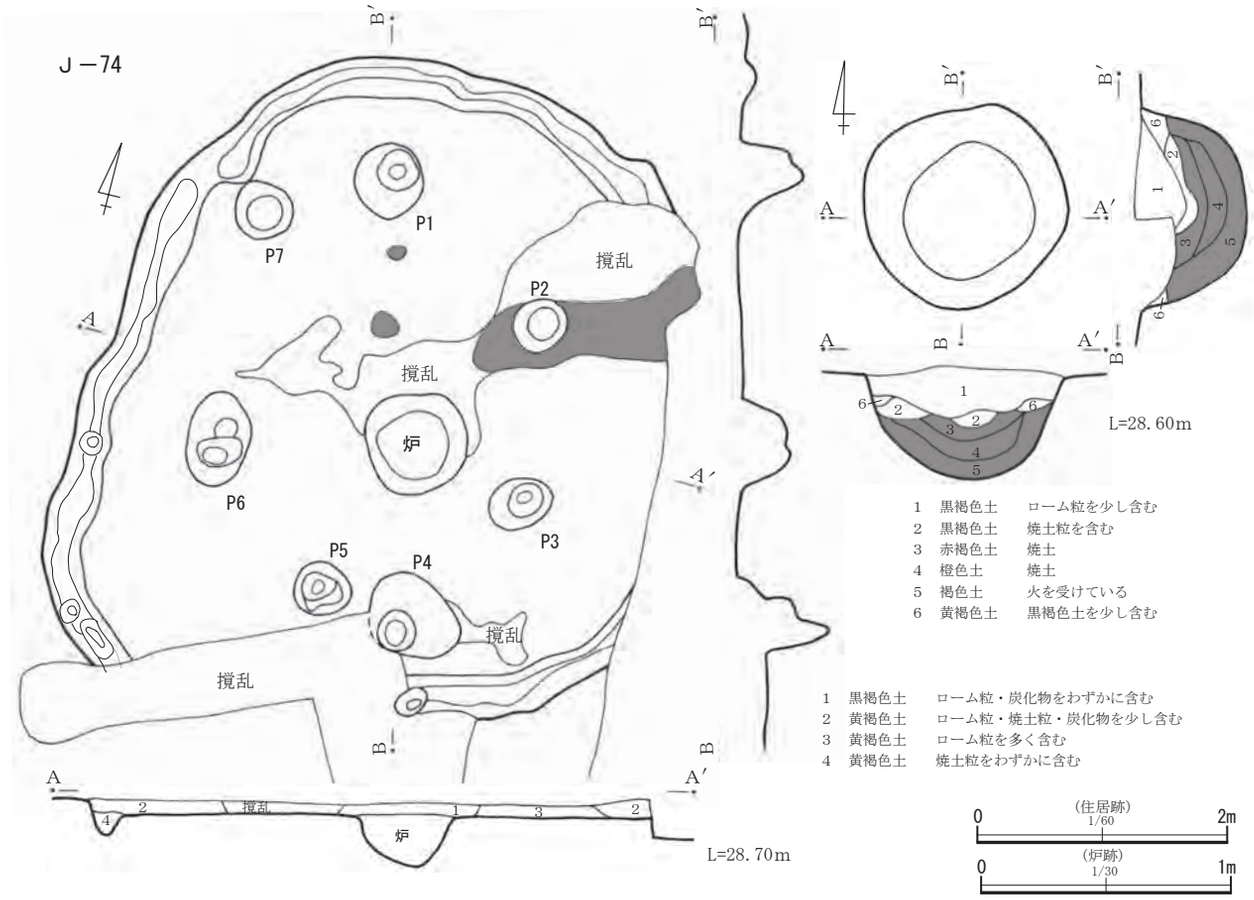
J－73



J－74



第 165 図　J -73(3)・J -74(1)



第 166 図　J -74(2)

J-74(第 165 ～ 167 図・図版 22・44・47)

旧Ｉウ -13- 1 住。5.4 × 5.0 ｍの楕円形を呈す。掘り込みの有無の判断が難しい。壁溝がほぼ全周し壁柱穴 4 本を伴う。柱穴は深さ 0.4 ～ 0.8 ｍの P1 ～ P4･P6 の他に浅いもの 2 本がある。炉は中央に位置し、焼土が厚く堆積する。住居跡出土土器は 1 ～ 21 である。

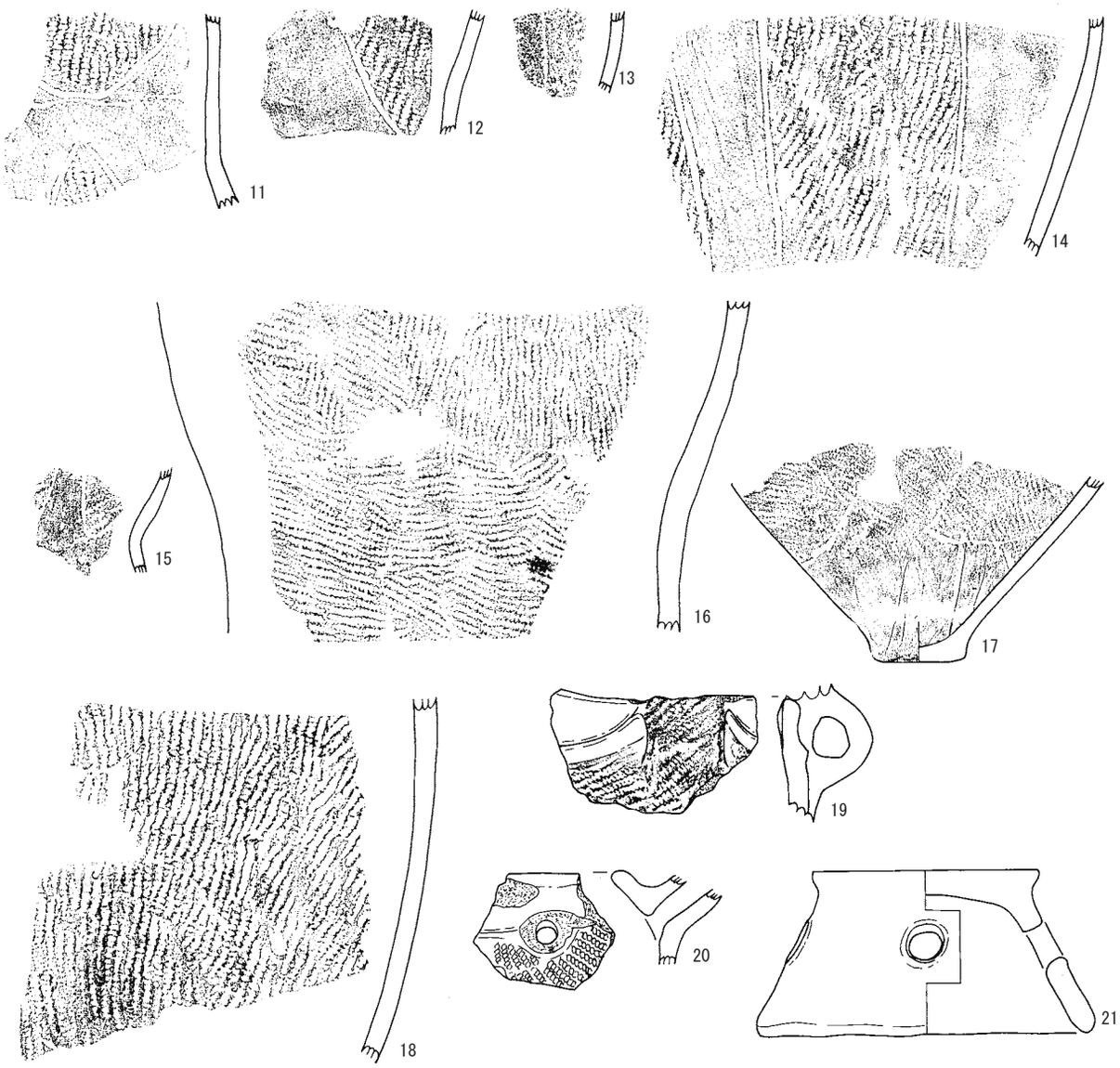
1 ～ 20 は加曽利Ｅ式終末の土器である。 1 は加曽利ＥⅣ式と考えられる。口縁部はやや強く内弯するキャリパー形である。口縁部が微隆線で区画される。胴部には微隆線と縄文で「逆Ｕ字状文」が施され、口縁部に貫入する文様構成である。貫入した部分は突起状になる。微隆線脇には縄文が認められる。16 ～ 18 は縄文のみが施される。 2 は口縁部が微隆線で区画され、胴部には微隆線と縄文で「逆Ｕ字状文」が施される。微隆線上に縄文が認められる。 3 ・ 4 は口縁部が微隆線で区画され、胴部には縄文のみが施される。 3 は微隆線脇がナデられ、 4 は微隆線脇がナデられない。19 は口縁部に橋状把手が付される。20 は注口土器である。胴部には縄文が認められる。 5 ～ 15 は沈線と縄文で文様が施される。 5 ～ 7 は口縁部の一部が突起状になる。 8 は文様構成から加曽利ＥⅢ式の可能性もある。21 は台形土器で 1 / 2 程度遺存する。体部には貫通する孔が施され、頂部には使用に伴う摩耗痕が認められる。

住居跡の時期は加曽利ＥⅣ式期と考えられる。土器以外では軽石製品 1 点 (付表 3-3- 7)、黒曜石の石核 1 点 (付表 3-5-59) ・剥片類 7 点が出土している。石鏃製作に伴うものであろう。

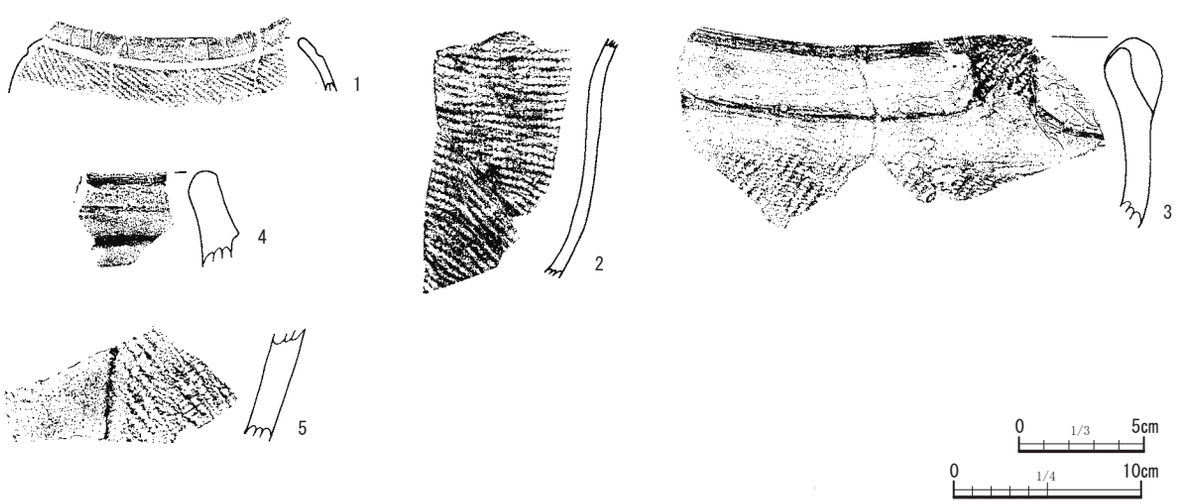
J-75(第 167 ～ 170 図・図版 22)

旧Ｉウ -16- 1 住。5.8 × 4.8 ｍの楕円形を呈す。0.1 ｍの掘り込みを有し、J-76 と重複する。当住居の床面下から J-76 の壁溝を検出していることから当遺構が新しい。掘り込みの有無の判断が難しい。壁溝が全周し 22 本の壁柱穴を伴う。柱穴は深さ 0.4 ～ 0.6 ｍの P2・P3・P5・P6・P8・P10 ～ P12 の他に

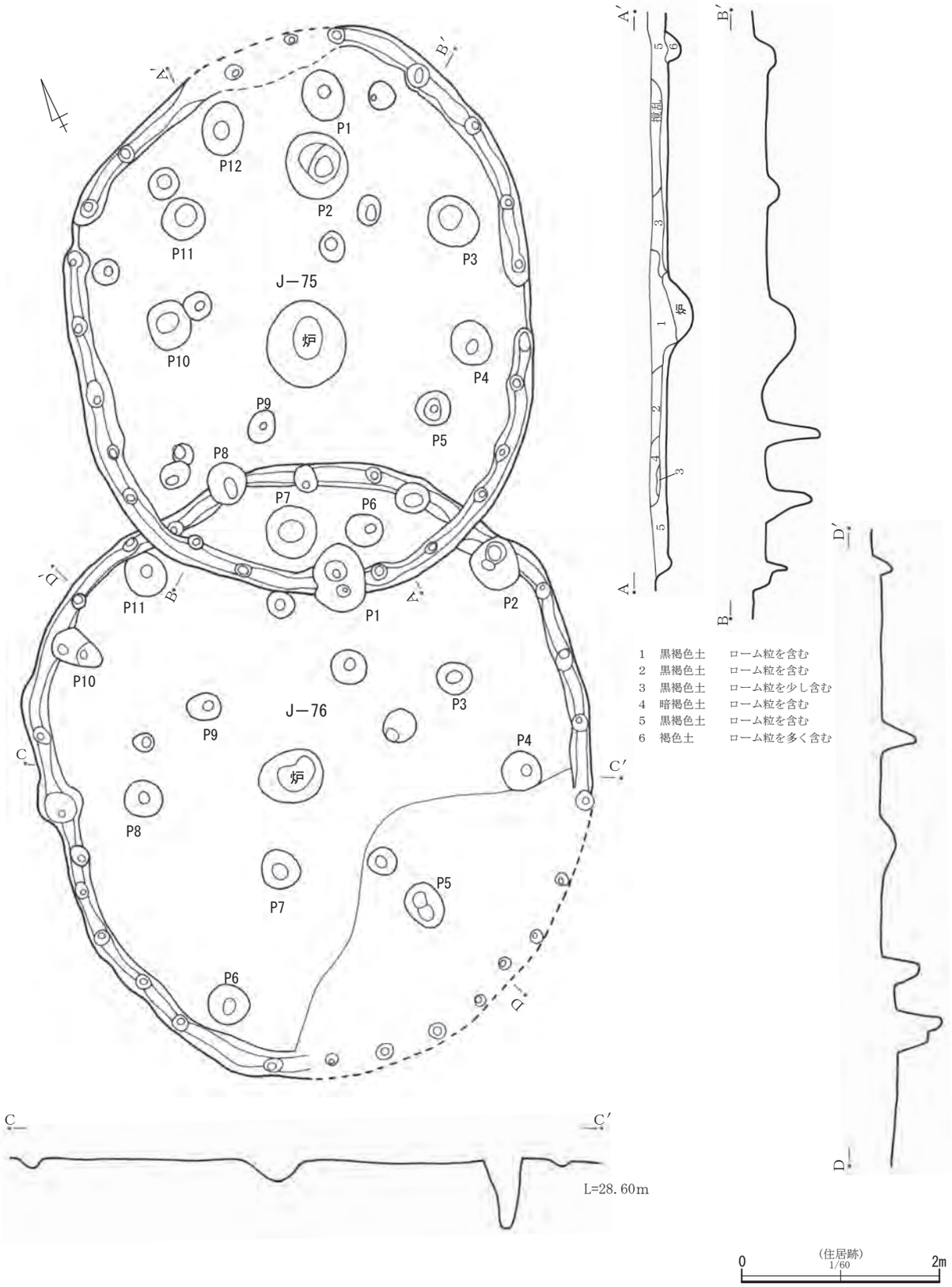
J－74



J－75

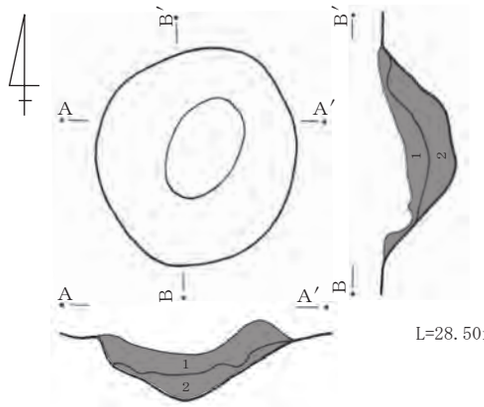


第 167 図　J -74(3)・J -75(1)



第 168 図　J -75(2)・J -76(1)

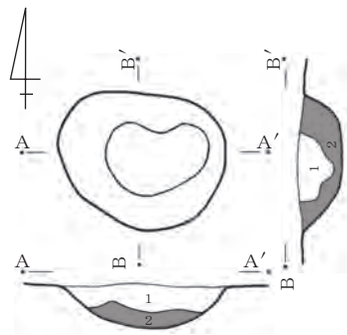
J－75炉



L=28.50m

1　橙色土　　焼土粒を多く含む
2　橙色土　　焼土

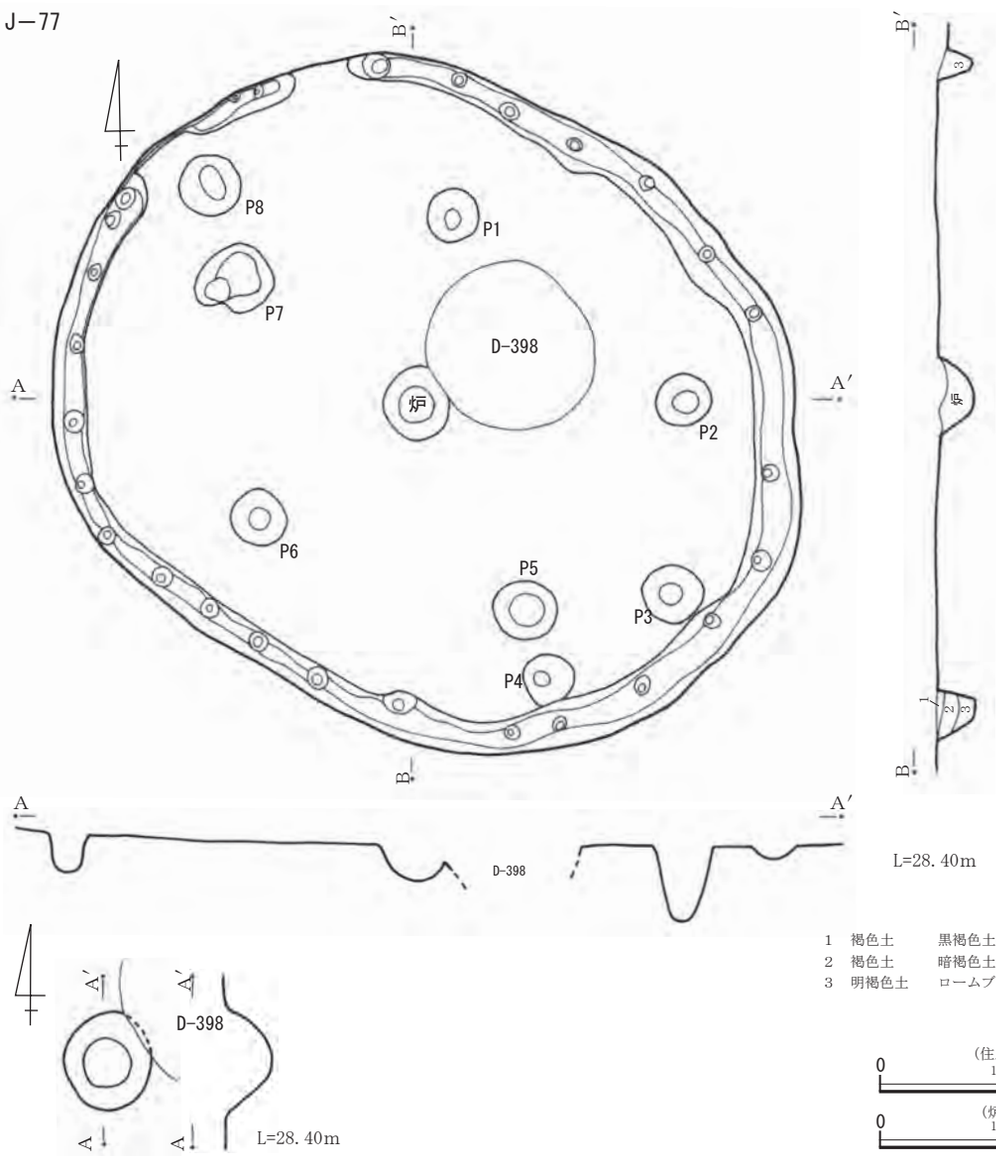
J－76炉



L=28.50m

1　暗褐色土　　ローム粒・焼土粒を少し含む
2　黄褐色土　　ローム粒・焼土粒を多く含む

J－77



L=28.40m

L=28.40m

1　褐色土　　黒褐色土を含む
2　褐色土　　暗褐色土を含む
3　明褐色土　　ロームブロックを多く含む

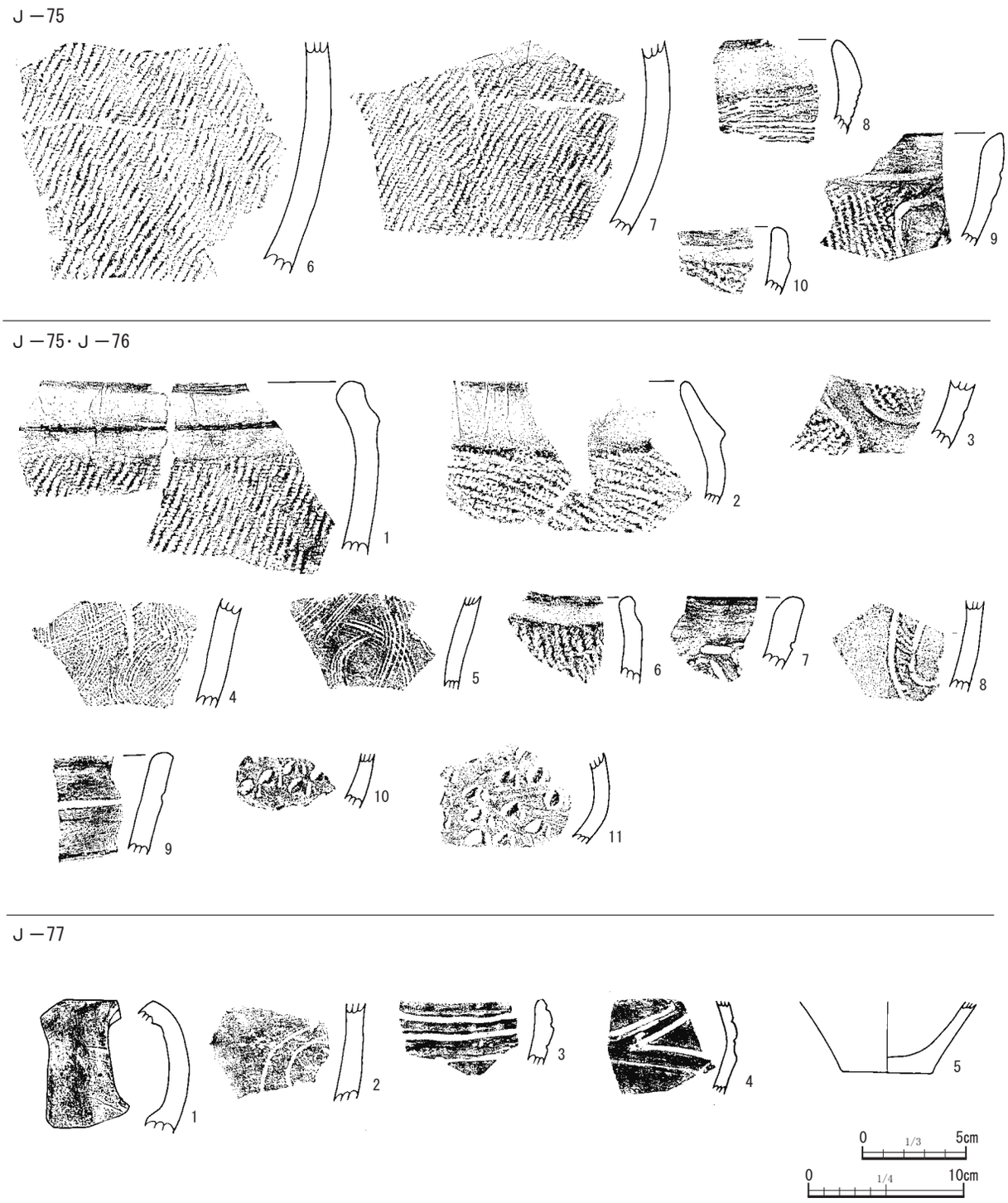
(住居跡)
0　1/60　2m

(炉跡)
0　1/30　1m

第169図　J -75(3)・J -76(2)・J -77(1)

浅いもの 12 本がある。炉は中央に位置し、下部に焼土層を形成する。J-75 住居跡出土土器は 1 ～ 10 である。J-75・J-76 の確認面上出土は 1 ～ 11 である。

1 ～ 8 は加曽利 E 式終末の土器である。1 ・ 2 は同一個体である。1 は口縁部が沈線で区画される。2 は縄文のみが施される。器面は摩耗が激しい。3 は口縁部が微隆線で区画され、胴部には縄文が施される。口縁部の一部が突起状になる。微隆線脇はナデられる。4 は口縁部が微隆線で区画される。5 は微隆線と縄文が施される。微隆線上にも縄文が認められる。8 は櫛歯状工具による条線が引かれる。6 ・ 7 は縄文のみが施される。9 ・ 10 は加曽利 E Ⅲ式の「横位連繋弧線文土器」である。口縁部がナデによる沈線で区画され、胴部には沈線と縄文で文様が構成される。10 は口縁部がナデによる沈線で区画されるが、無



第 170 図　J -75(4)・J -75.76(1)・J -77(2)

文帯が狭い。

J-75 または J-76 出土土器　1 ～ 5 は加曽利 E 式終末の土器である。1 ・ 2 は口縁部が微隆線で区画され、胴部には縄文のみが施される。1 は微隆線脇がナデられるが、2 は微隆線上にも縄文が認められる。3 は沈線と縄文による「対向 U 字文」が施される。4 ・ 5 は櫛歯状工具による蛇行条線が引かれる。6 は加曽利 E Ⅲ式の可能性が考えられる。ナデによる沈線と縄文が認められる。7 ～ 11 は称名寺式土器である。7 ・ 8 は称名寺式古段階と考えられる。7 は太い沈線と縄文が施される。8 は帯縄文で文様が施される。無文部が広い。9 ～ 11 は称名寺Ⅱ式と考えられる。9 は口唇部に平坦面を持ち、胴部には沈線のみが引かれる。10・11 は同一個体で、爪形状の列点が施される。北陸地方の三十稲場式の可能性もある。

住居跡の時期は加曽利 E Ⅳ～Ⅴ式と考えられる。J-75・J-76 の土器以外は軽石製品 1 点 (付表 3-3-19)、剥片類 2 点が出土している。

J-76(第 168 ～ 170 図・図版 22)

旧 I ウ -16- 2 住。6.0 × 5.4 mの楕円形を呈す。0.1 mの掘り込みを有し、J-75 と重複し、その床面下から当住居の壁溝を検出したことから当遺構が古い。壁溝がほぼ全周し 25 本の壁柱穴が廻る。柱穴は深さ 0.34 ～ 0.71 mの 7 本 (P1 ～ 6 ・ 8)、浅いもの 8 本がある。炉は中央に位置し、下部に焼土が多く含まれていた。J-76 住居跡に確実に伴う土器はない。J-75 または J-76 の確認面上、表土出土土器、土器以外の出土遺物については J-75 に記載した。住居跡の時期は重複関係から加曽利 E Ⅳ式以前の可能性が高い。土器以外では剥片類 1 点が出土している。

J-77(第 169・170 図・図版 22)

旧 I ウ -17- 1 住。6.2 × 5.0 mの楕円形を呈す。0.2 mの掘り込みを有し、D-398(小竪穴) と重複する。壁溝がほぼ全周し 25 本の壁柱穴が廻る。柱穴は深さ 0.31 ～ 0.42 mの 6 本 (P1 ～ 6)、浅いもの 2 本がある。炉は中央に位置するが、覆土や被熱の有無などは不明である。住居跡出土土器は 1 ～ 5 である。

1 は加曽利 E 式終末の鉢形土器の橋状把手である。2 は称名寺Ⅱ式と考えられる。屈曲する 2 本の沈線が引かれる。3 ・ 4 は堀之内 1 式である。3 は口縁部に沈線が引かれる、4 は隆線が貼付けられ、隆線脇は沈線が引かれる。注口土器と考えられる。5 は底部で無文である。

住居跡の時期は称名寺Ⅱ式から堀之内 1 式にかけての時期と考えられる。土器以外では土器片円板 1 点 (第 278 図 22) が出土している。

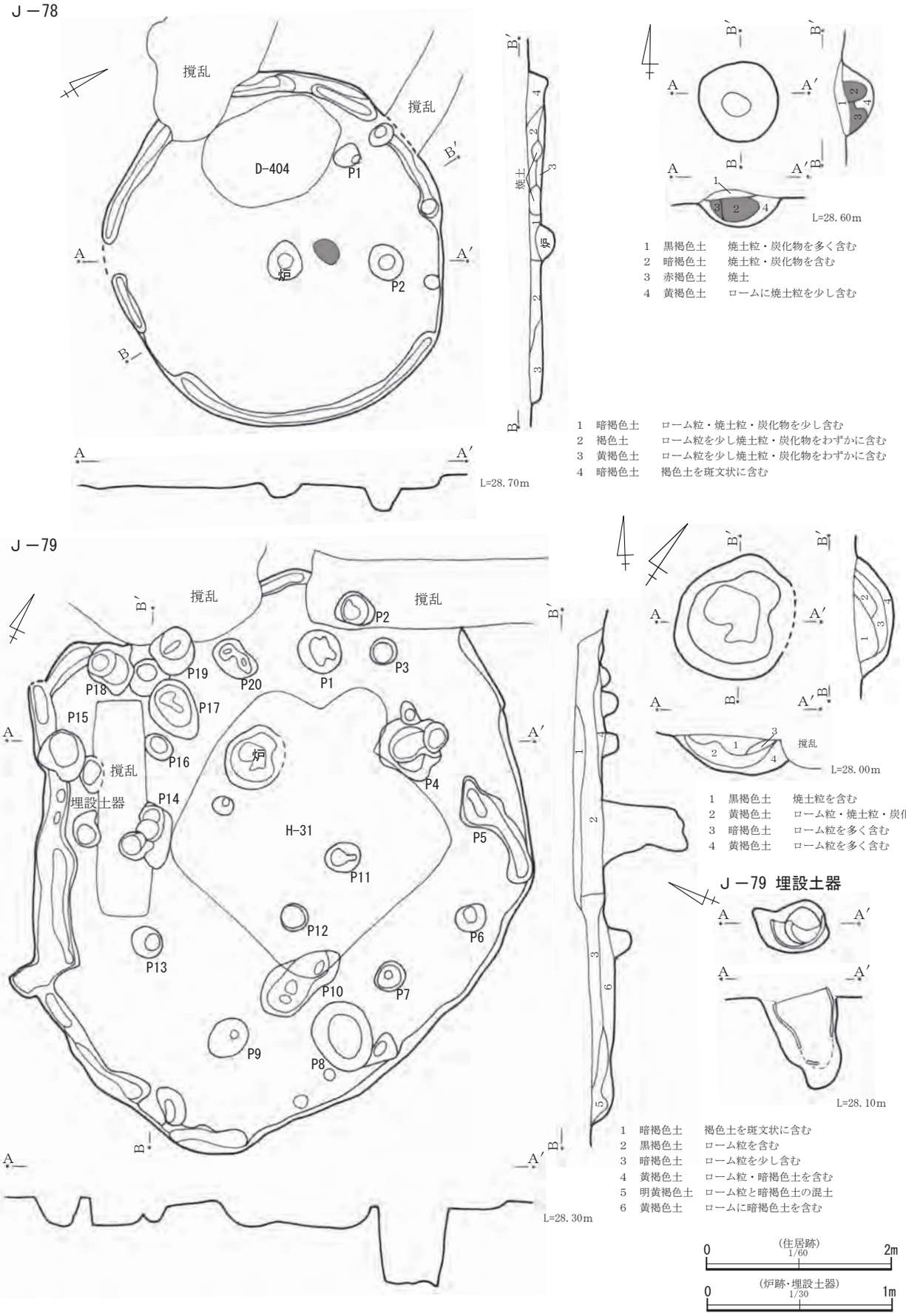
J-78(第 171・172 図・図版 22)

旧 I エ -13- 1 住。3.9 × 3.8 mの円形を呈す。0.2 mの掘り込みを有し、D-404(土坑) と重複する。壁溝がほぼ全周する。柱穴は深さ 0.3 mの P1・P2 を検出。炉は中央に位置し、底面からやや浮いて焼土を含む層を形成する。住居跡出土土器は 1 ～ 4 である。

1 ～ 4 は加曽利 E 式終末の土器である。1 は加曽利 E Ⅳ式と考えられる。口縁部が内弯する器形で、口縁部が微隆線で区画され、胴部には微隆線と縄文で渦巻文が施される。胴部の微隆線脇はナデられるが、口縁部区画の微隆線上には縄文が認められる。2 は口縁部が微隆線で区画され、胴部には微隆線と縄文が認められる。微隆線脇はナデられる。3 は沈線と縄文で文様が構成される。4 は目の細かい縄文のみが施される。住居跡の時期は加曽利 E Ⅳ式期と考えられる。

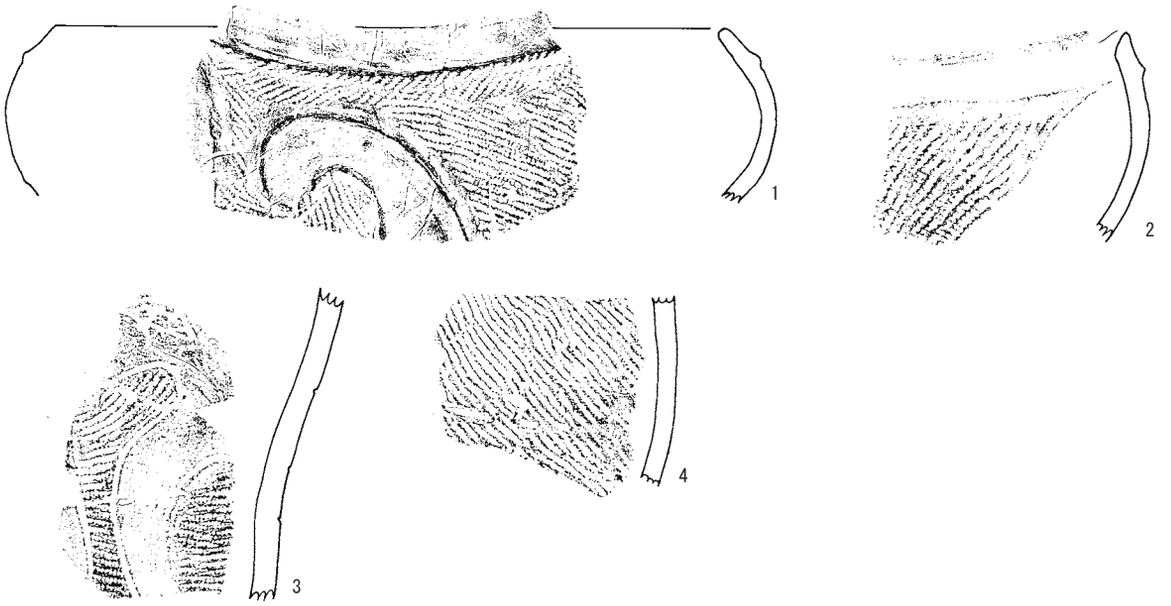
J-79(第 171 ～ 174 図・図版 23・44)

旧 I エ -17- 2 住。6.4 × 5.2 mの不整楕円形を呈す。0.4 mの掘り込みを有し、中央が H-31(古代住居跡) に切られる。壁溝を有し西壁付近のピットに深鉢 1 が埋設されている。ピット自体が斜めに掘り込まれ、土器は上部を北に傾ける。住居跡の軸には合わない。炉は北西寄りに位置し、覆土に焼土を含む。住

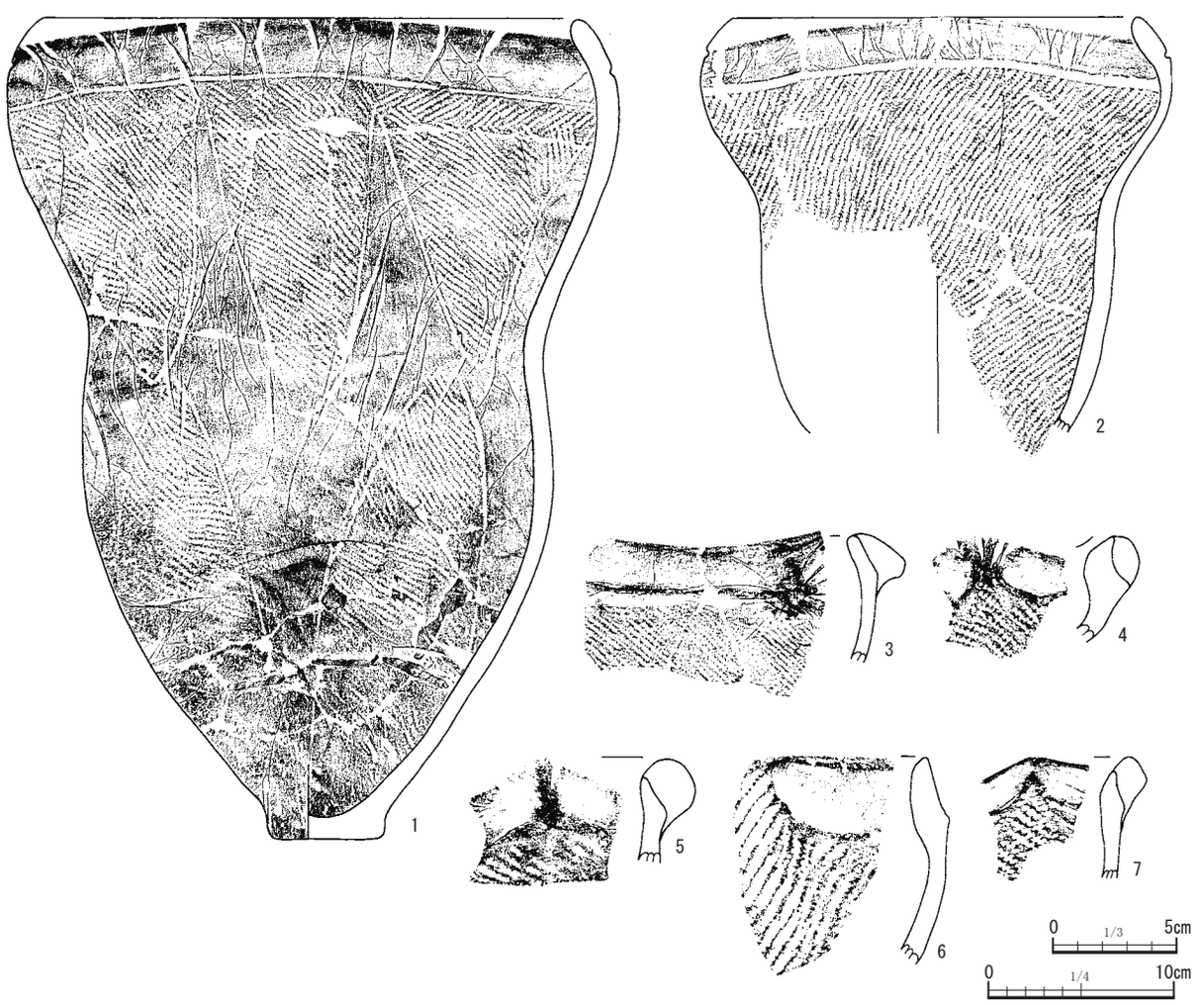


第 171 図　Ｊ -78(1)・Ｊ -79(1)

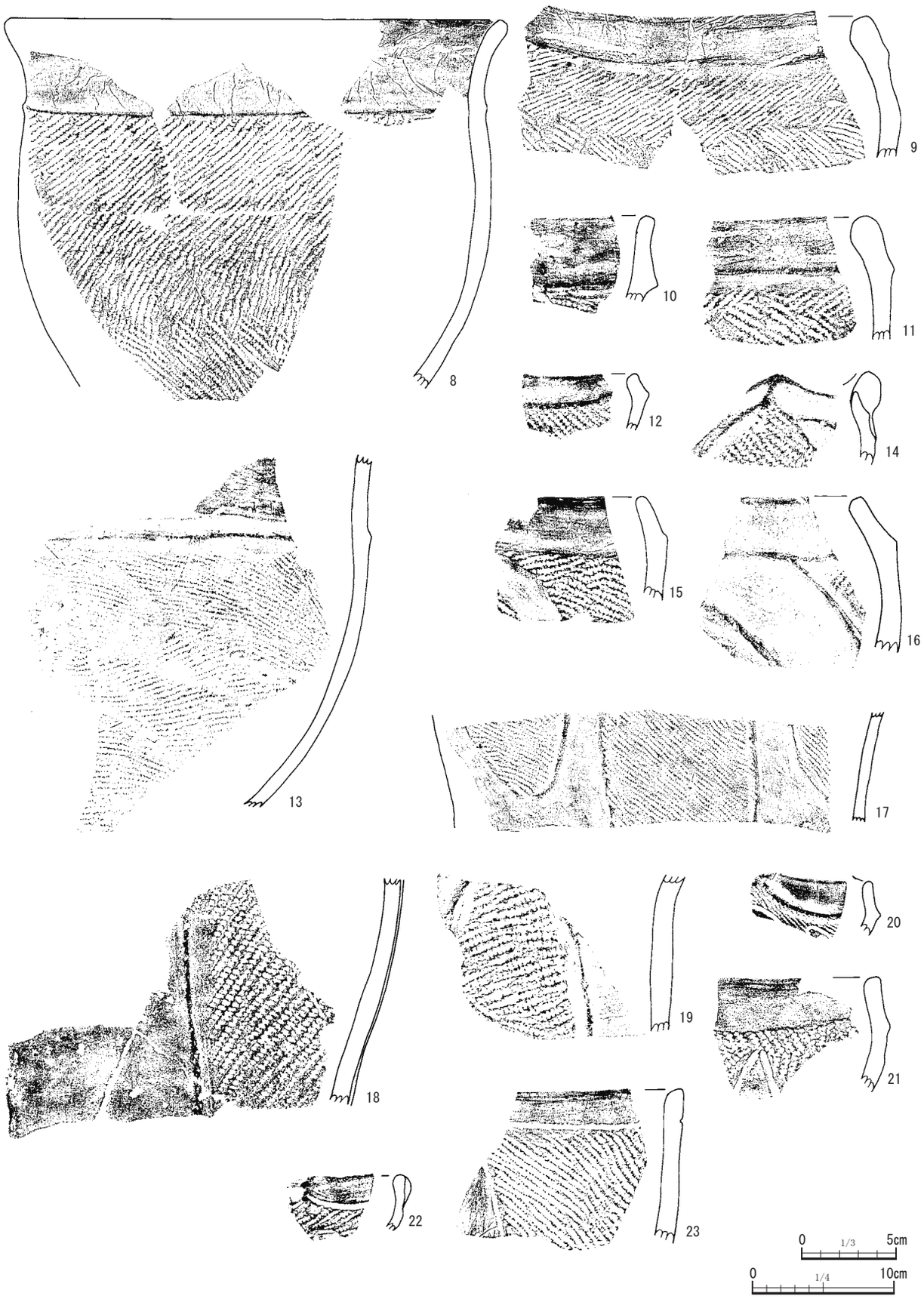
J－78



J－79



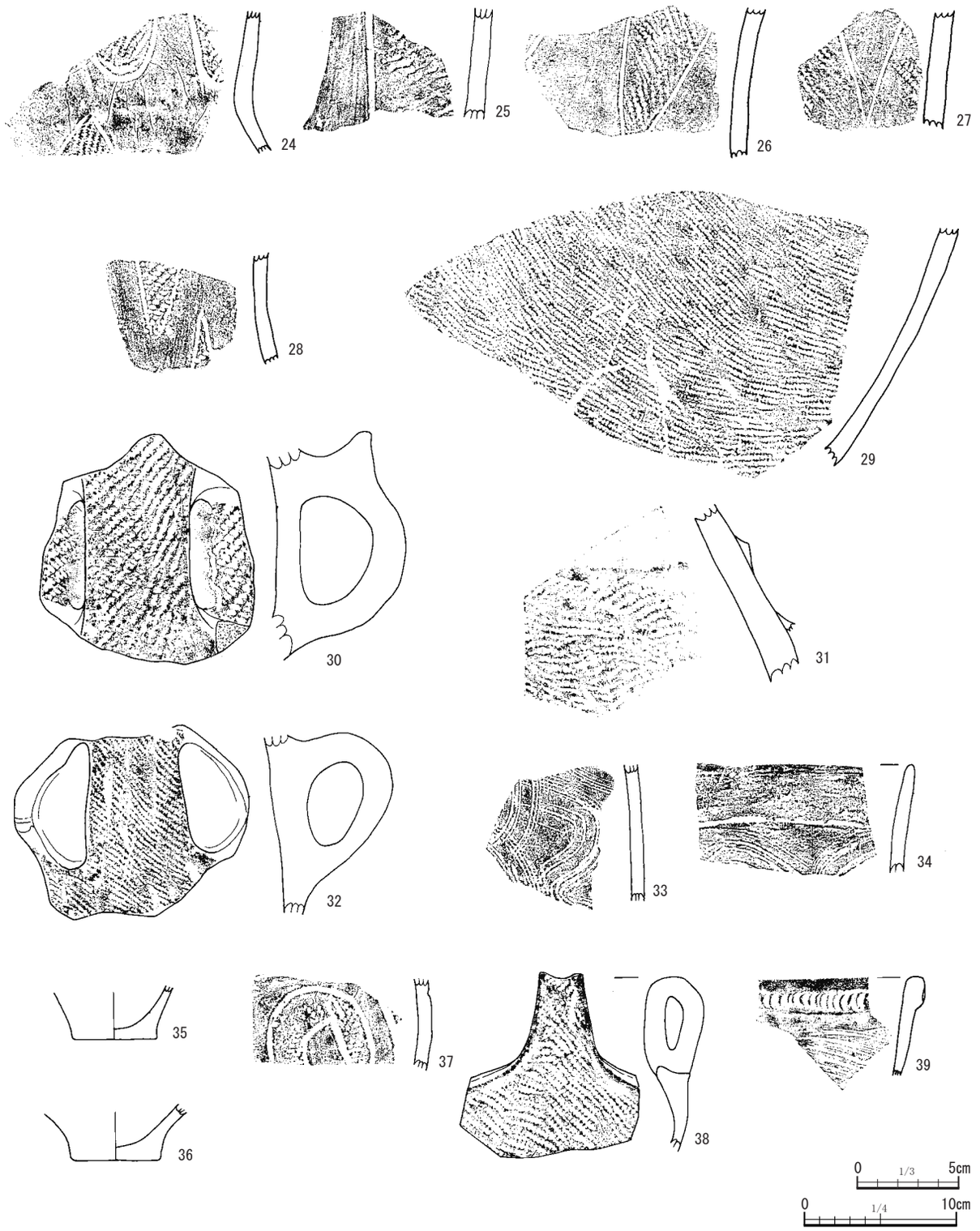
第 172 図　J -78(2)・J -79(2)



第 173 図　J -79(3)

居跡出土土器は２・３・５～10・14～17・20・22～24・26～30・32～35・38である。確認面上出土(グリッド点挙げを含む)は１・４・11～13・18・19・21・25・31・36・37・39である。

１～34は加曽利Ｅ式終末の土器である。１は器形がキャリパー形である。口縁部が沈線で区画され、胴部には沈線と縄文で「対向Ｕ字文」が施される。加曽利ＥⅣ式の可能性が高い。２は器形がキャリパー形である。口縁部が沈線で区画され、胴部には縄文のみが施される。加曽利ＥⅣ式と考えられる。３～13は口縁部が微隆線で区画され、胴部には縄文のみが施される。３～８は口縁部に突起が付される。３



第174図　Ｊ-79(4)

～ 10・12 は微隆線上に縄文が認められる。11・13 は微隆線脇がナデられる。14 ～ 16 は口縁部が微隆線で区画され、胴部には微隆線と縄文で「逆Ｕ字状文」が施され、口縁部に貫入する文様構成である。いずれも微隆線上に縄文が施される。14 は口縁部の貫入が特に顕著であり、加曽利ＥⅤ式の可能性が高い。17 は胴部に微隆線と縄文で「対向Ｕ字文」が施されていると考えられる。微隆線上にも縄文が認められる。18・19 は微隆線と縄文で文様が施される。微隆線脇はナデられる。20・21 は口縁部が微隆線で区画され、胴部には沈線と縄文で文様が施される。いずれも微隆線上に縄文が認められる。22・23 は口縁部が沈線で区画される。23 は胴部に沈線と縄文、22 は縄文のみが施される。24 は沈線と縄文で対向Ｕ字文が施される。文様構成に乱れが生じていないことから加曽利ＥⅣ式と考えられる。25 ～ 28 は胴部に沈線と縄文で文様が施される。29 は縄文のみが施される。30 ～ 32 は鉢形土器である。微隆線で区画され無文帯を持つ。胴部には縄文が施される。把手部分は欠損する。30・32 は把手である。33・34 は櫛歯状工具で条線が引かれる。35・36 は底部で無文である。器形から加曽利Ｅ式終末の可能性が高い。37 は称名寺式古段階の土器と考えられる。やや太く深い沈線でＪ字文が施される。38 は加曽利Ｅ式終末の橋状把手である。堀之内式の注口土器である。器壁は薄い。微隆線が貼り付けられ、微隆線脇には沈線が引かれる。

住居跡の時期は加曽利ＥⅣ式期と考えられる。土器以外では蓋１点 (第 278 図 15)、土器片円板１点 (第 278 図 15)、土器片錘１点 (第 279 図 50)、石皿・台石１点 (第 289 図 11)、軽石製品１点 (第 294 図 34)、剥片類２点が出土している。

J-80(第 175・177 図・図版 23)

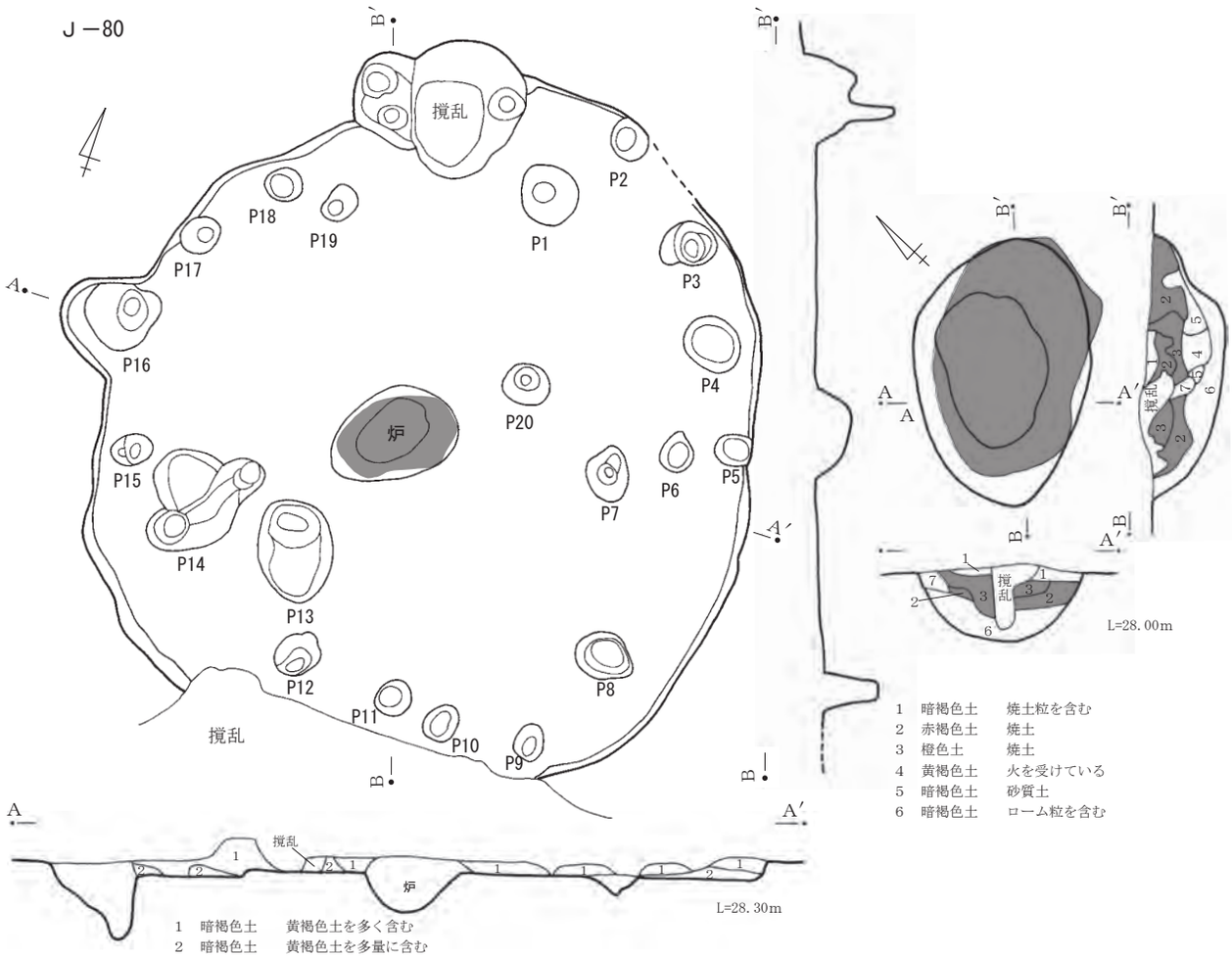
旧Ｉエ -18- １住。5.5 × 5.6 ｍの不整楕円形を呈す。0.6 ｍの掘り込みを有す。柱穴は深さ 0.5 ～ 0.9 ｍの P3・P8・P11 ～ P14・P16・P17 の他に浅いもの 12 本がある。炉は中央やや西寄りに位置し、覆土上部に平坦な燃焼面を形成する。住居跡出土土器は１・８である。確認面上出土は２～７・９・10 である。

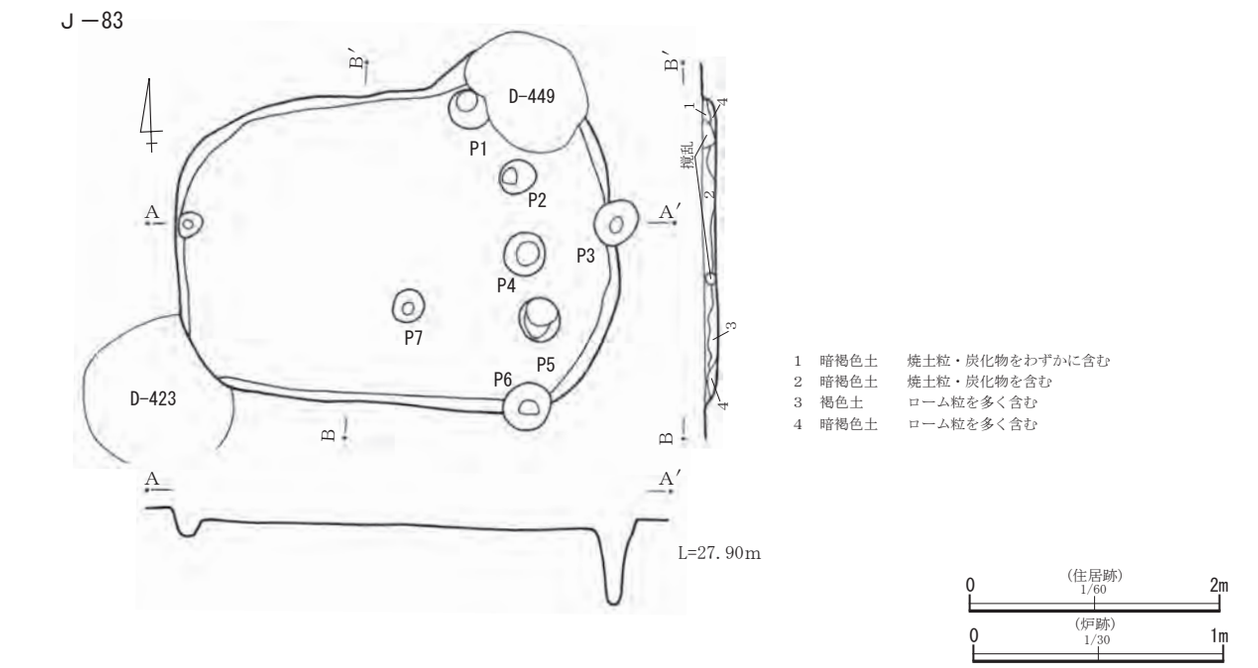
１～４は加曽利Ｅ式終末の土器である。１は底部で器面調整の擦痕が認められる。２は加曽利ＥⅣ式と考えられる。微隆線と縄文が認められ、隆線脇は丁寧にナデられる。３は加曽利ＥⅤ式と考えられる。微隆線上に縄文が認められる。微隆線の文様構成から後期初頭の関沢類型の可能性もある。４は櫛歯状工具で条線が引かれる。５・６は称名寺Ⅱ式である。６は幅広い面に列点が施されることから、北陸地方の三十稲場式の可能性もある。７は、後期初頭から前半にかけての土器と考える。口唇部に平坦面を持ち、太い沈線と条線が認められる。８・９は堀之内１式の口縁部の突起である。10 は時期不明の土器である。

住居跡の時期は称名寺Ⅱ式から堀之内１式にかけての時期と考えられる。

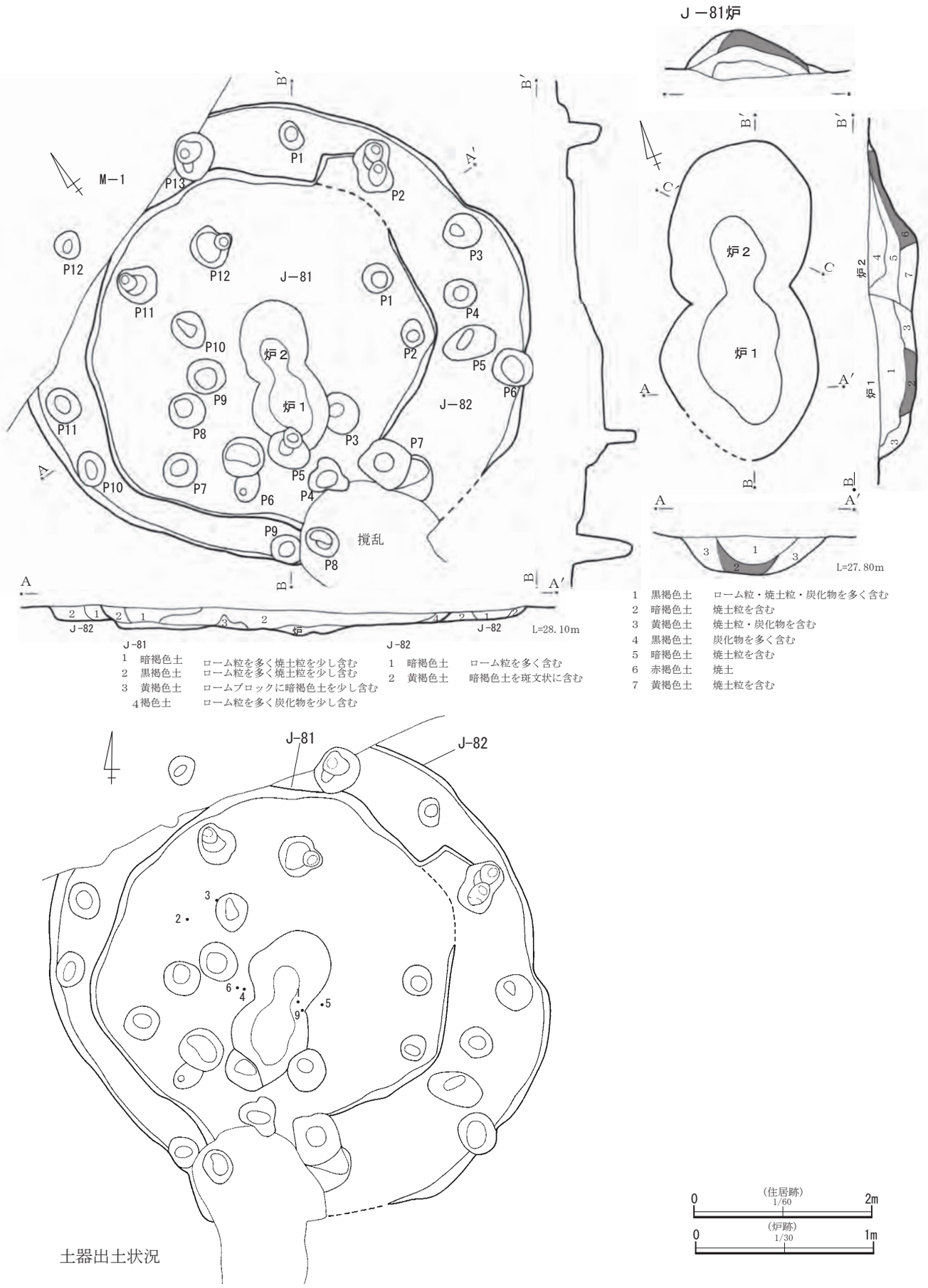
J-81・82(第 176・177 図・図版 23)

J-81(旧Ｉカ -15- １住)・J-82(旧Ｉカ -15- ２住) の重複する２軒の住居跡とみられる。同心円状に位置しており、２段の掘り込みをもつ住居跡の可能性も否定できないが、J-81 が J-82 の覆土を切っており、炉に新旧がみられるという現地の観察にしたがって２軒としておく。J-81 の竪穴は 4.0 × 3.6 ｍの不整円形を呈し、0.3 ｍの掘り込みを有す。J-82 の竪穴は 5.8 × 5.1 ｍの不整楕円形を呈し、0.2 ｍの掘り込みを有す。柱穴の帰属は詳細な検討がなされていないが、二段の掘り込みごとに№をつけており、下段では深さ 0.4 ～ 0.7 ｍの P2 ～ P4・P10・P12 の他に浅いもの７本がある。上段では柱穴は深さ 0.4 ～ 0.8 ｍの P2・P3・P5・P7・P8・P12・P13 の他に浅いもの６本があり、壁に沿って分布している。炉は中央からやや南側にかけて２基が重複し、炉１が新しく J-81 に伴うものとみられる。いずれも覆土の一部に焼土を含む。位置を確認できた掲載土器はすべて J-81 出土である。J-81 の覆土中出土は１～６・８・９である。J-81・J-82 の確認面上出土は１である。

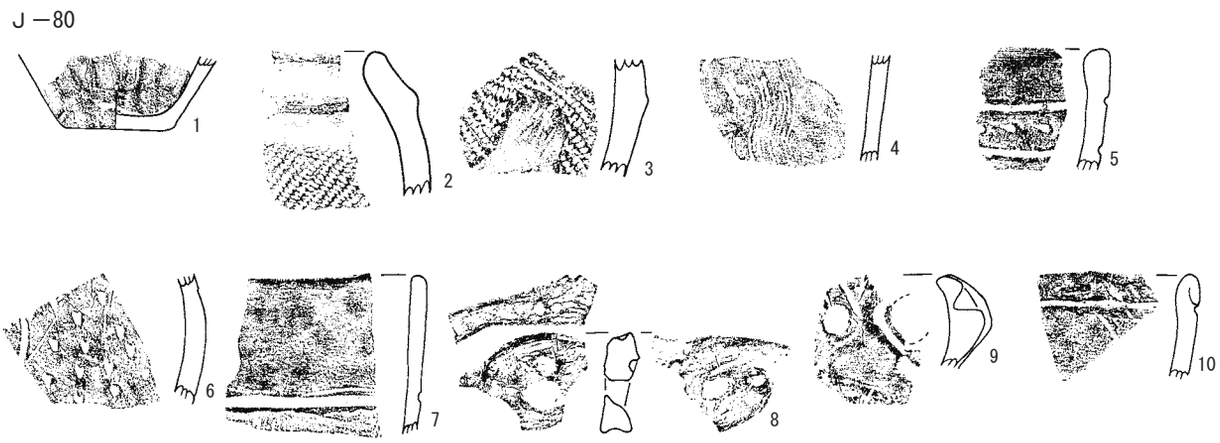


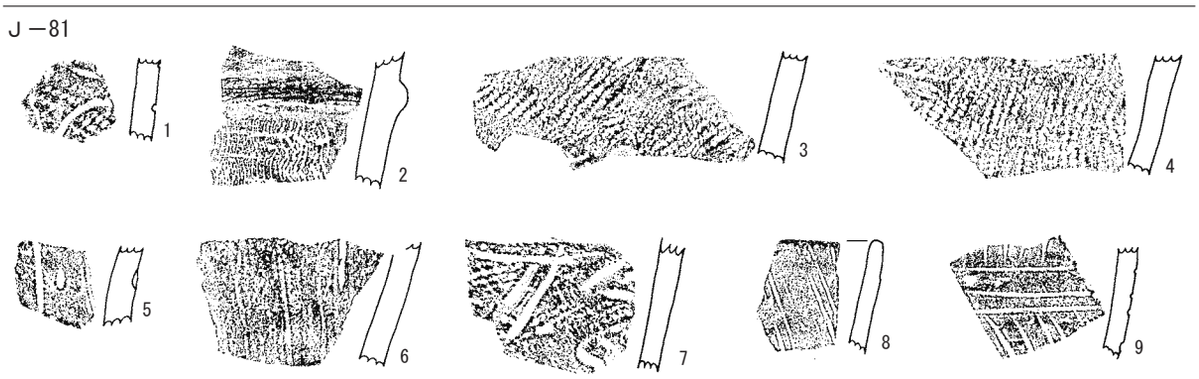


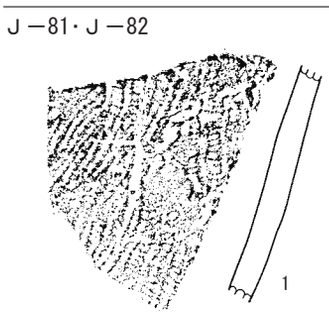
第175図　J-80(1)・J-83(1)

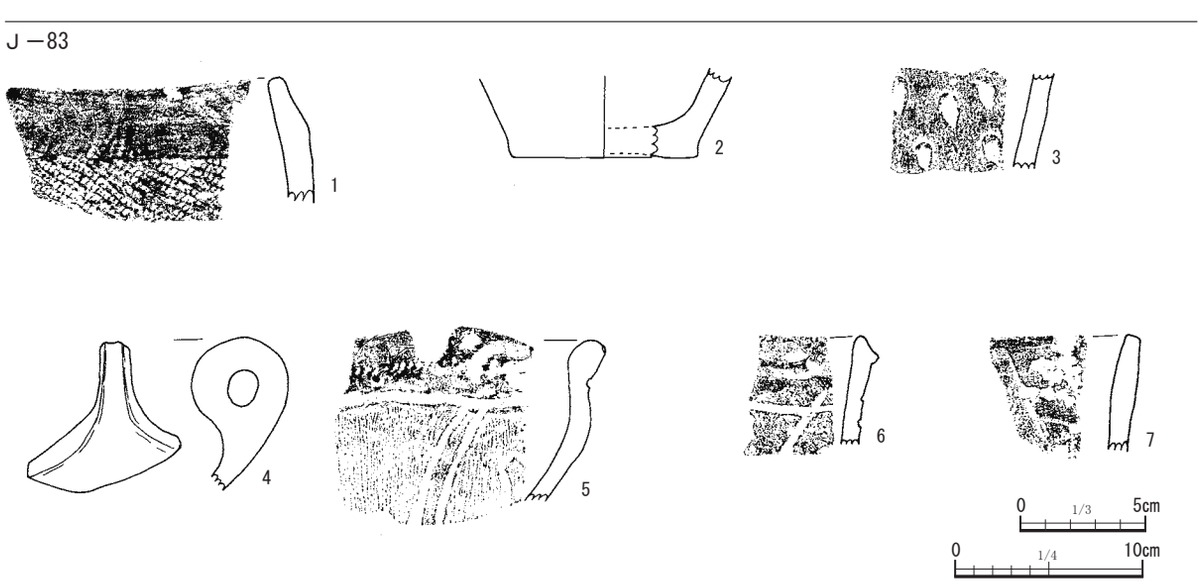


第 176 図　Ｊ -81(1)・Ｊ -82(1)









第 177 図　J -80(2)・J -81(2)・J -81.82・J -83(2)

1 ～ 4 は加曽利 E 式終末の土器である。 1 は沈線と縄文で対向 U 字文を構成する加曽利 E Ⅳ式と考えられる。 2 は微隆線と櫛歯状工具による条線が認められる。 3 ・ 4 は縄文のみが施される。 5 は称名寺Ⅱ式である。 6 は後期初頭から前葉の土器と考えられる。 7 は堀之内 1 式である。 8 は堀之内式に伴うものであるが、細別は不明である。 9 は加曽利 B 式から曽谷式にかけてのものである。沈線が横位、斜位に引かれる。

J-81 または J-82 出土土器　1 は加曽利 E 式終末の土器と考えられる。縄文のみが認められる。なお、J-82 に確実に伴う遺物は無い。

住居跡の時期は 2 軒とも称名寺式から堀之内式にかけての時期と考えられる。土器以外では J-81 で石皿・台石 1 点 (付表 3-3-71)、軽石製品 1 点 (第 294 図 28) が出土している。

J-83(第 175 ・ 177 図 ・ 図版 23)

旧 Ⅰ カ -17- 1 住。3.5 × 2.5 ｍの不整楕円形を呈す。0.1 ｍのわずかな掘り込みを検出し、炉は検出されていない。D-423(土坑)、D-449(土坑) と重複する。竪穴住居跡とする根拠が乏しいが、わずかだが可能性があるものとして掲載した。明確に住居跡出土と確認できる土器はない。 3 は注記が不完全だが住居跡出土の可能性がある。確認面上出土は 1 ・ 2 ・ 4 ～ 7 である。

1 は加曽利 E 式終末の土器で、微隆線上にも縄文が施されている。 2 は加曽利 E 式後半の底部と考えられる。 3 は称名寺Ⅱ式である。 4 は称名寺式の把手である。 5 ・ 6 は称名寺式終末から堀之内式にかけての土器である。 5 は口唇部に刻みと突起、胴部には条線を地文とし、沈線で J 字文が施される。 6 は口縁部に微隆線が貼り付けられ、胴部は沈線のみで文様が施される。 7 は時期不明である。

住居の時期は称名寺式から堀之内式にかけての時期と考えられる。土器以外では蓋 1 点 (第 278 図 11) が出土している。

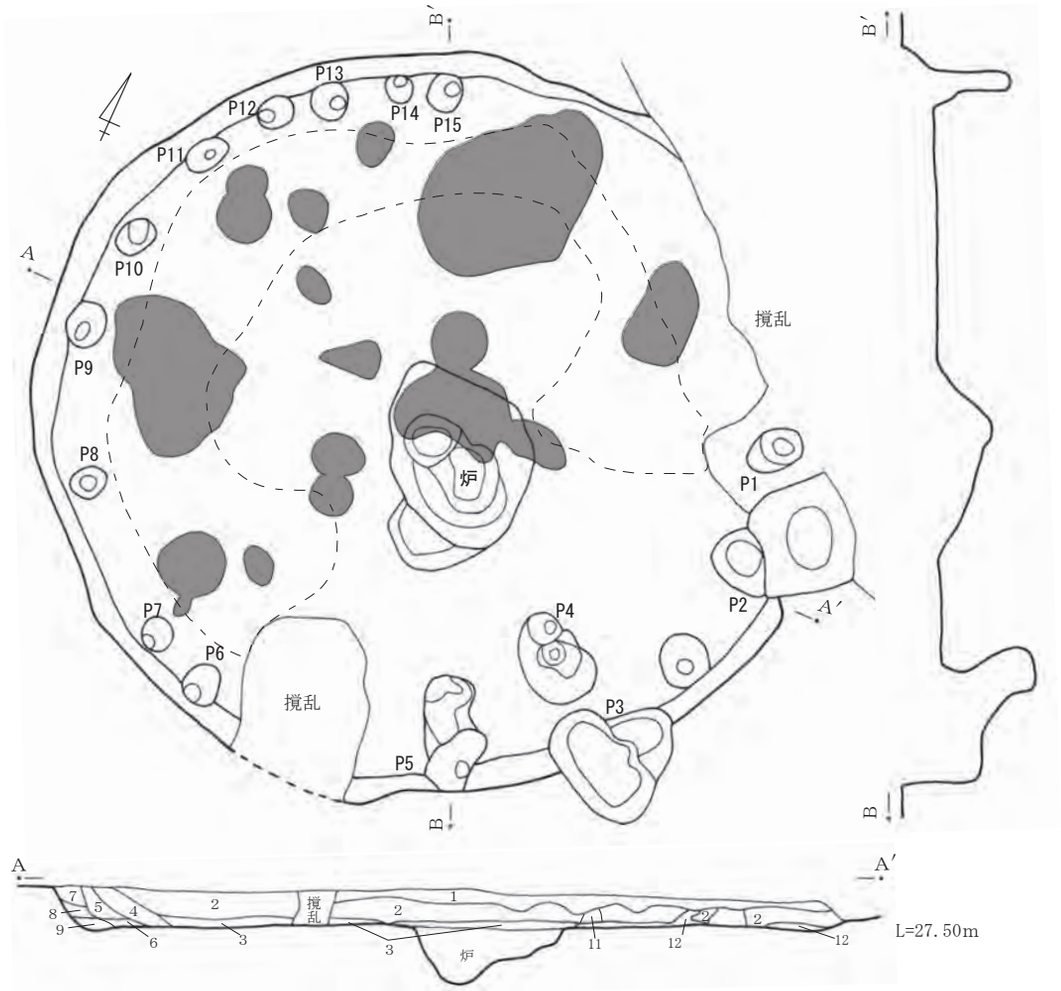
J-84(第 178 ～ 180 図 ・ 図版 23 ・ 44)

旧 Ⅰ カ -18- 1 住。6.4 × 6.0 ｍの不整楕円形を呈す。0.3 ｍの掘り込みを有す。柱穴は深さ 0.6 ～ 0.8 ｍの P2 ・ P5 ・ P7 ・ P9 ・ P13 ・ P15 の他に浅いもの 9 本がある。壁溝は有さないが、壁柱穴が廻っており、P3 ～ P5 は出入口施設に伴うものであろう。炉は出入口側 (中央やや南東寄り) に位置する。燃焼面を切る形でピットの内部から深鉢上部の一部 (27) が出土している。炉体土器を抜き取った際に一部が残った可能性がある。壁柱穴の内側には帯状に床の硬化面があり、その上に焼土が堆積していた。硬化面と焼土の分布は、出入口－炉の軸に対して左右対称となっている。住居跡出土土器は 1 ～ 16 ・ 18 ～ 22 ・ 24 ・ 26 ～ 29 ・ 31 ～ 34 である。竪穴の全体から出土しているが、中央部から出入口部に多い。確認面上出土は 17 ・ 23 ・ 25 ・ 30 である。

1 は堀之内 1 式の注口土器である。刺突と沈線で文様が施される。 2 ～ 24 は堀之内 1 式である。 2 ～ 4 は縄文を地文とし、半截竹管による平行沈線で文様が施される。 5 ～ 12 は縄文を地文とし沈線で文様が施される。13 は沈線による区画と縄文で文様が構成される。14 ・ 15 は口縁部破片で口縁部が隆線で区画され、胴部には縄文のみが認められる。14 は隆線上に刻みが施される。16 ・ 17 は口唇部に沈線が引かれる。17 はナデによる沈線で、胴部には沈線のみで文様が施される。18 ～ 21 は沈線のみで文様が施される。21 は工具に半截竹管が用いられる。22 ～ 24 は口縁部に指頭押圧が連続して施される。25 は堀之内 2 式である。26 ～ 28 は堀之内式に伴うものか。胴部には縄文のみが施される。29 ・ 30 は加曽利 E 式終末の土器で、櫛歯状工具による条線が引かれる。32 ～ 34 は時期不明である。

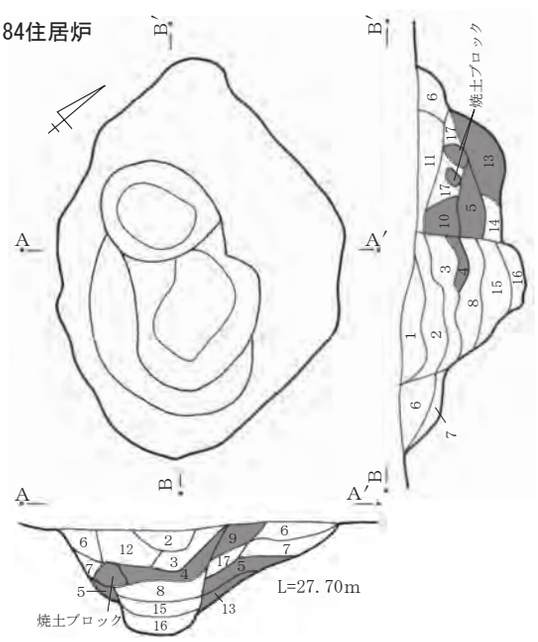
住居の時期は堀之内 1 式期と考えられる。土器以外では蓋 2 点 (第 278 図 6 ・ 8)、土器片円板 1 点 (第 278 図 4)、軽石製品 2 点 (第 293 図 15 ・ 27)、異形石器 1 点 (図版 56-8、付表 3-5-24) が出土している。

Ｊ－84



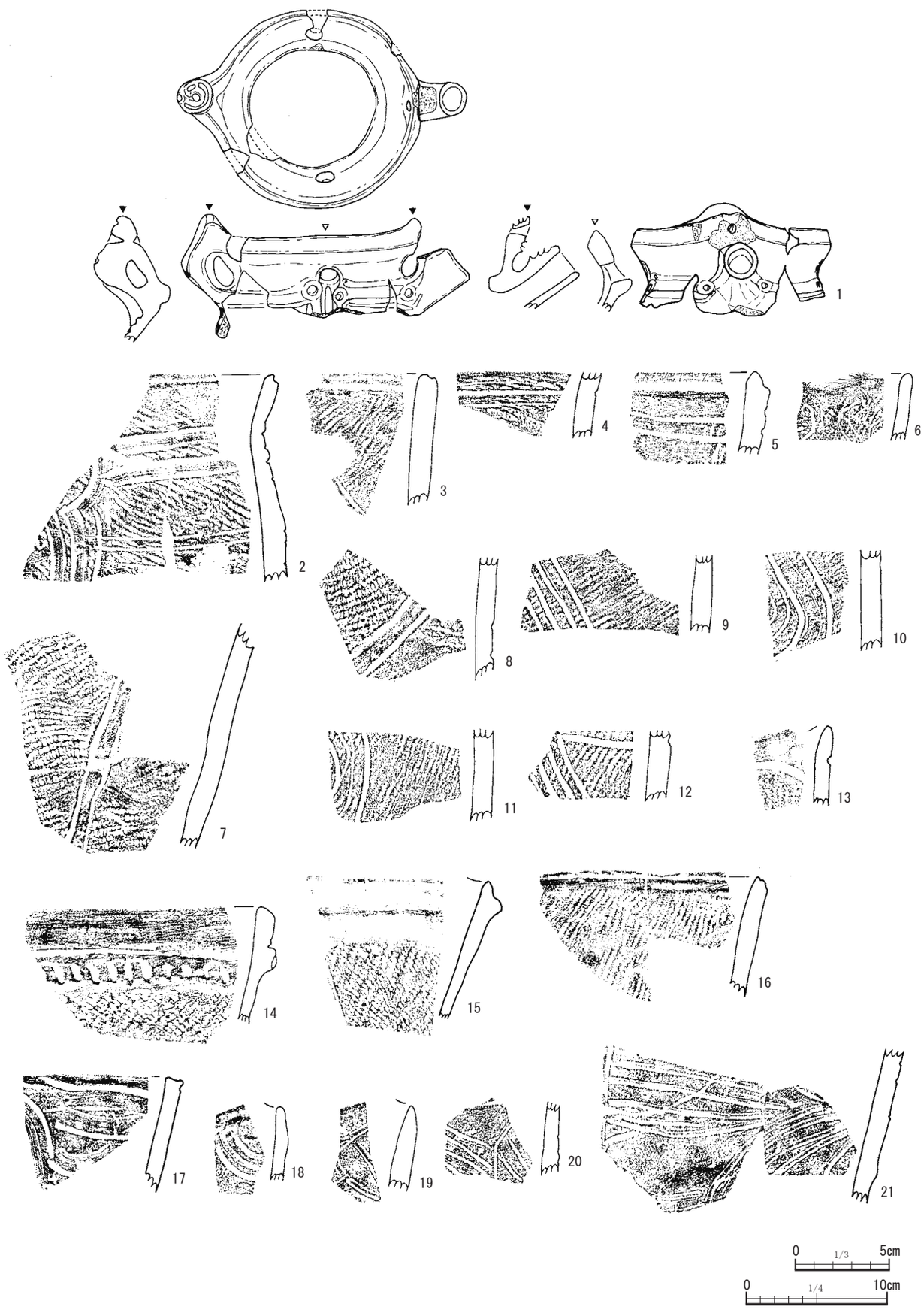
1　暗褐色土　暗褐色土を斑文状に含む
2　黒褐色土　ローム粒を斑文状に含む
3　黒褐色土　焼土粒・炭化物を多く含む
4　暗褐色土　焼土粒を多くローム粒・炭化物を少し含む
5　黒褐色土　炭化物を多くローム粒・焼土粒を少し含む
6　黒褐色土　炭化物を多くローム粒を少し含む
7　暗褐色土　ローム粒を含む
8　暗褐色土　ローム粒・炭化物を少し含む
9　褐色土　ローム粒を多く含む
10　黄褐色土　暗褐色土を含む
11　暗褐色土　ローム粒を含む
12　褐色土　ローム粒を多く含む

Ｊ－84住居炉

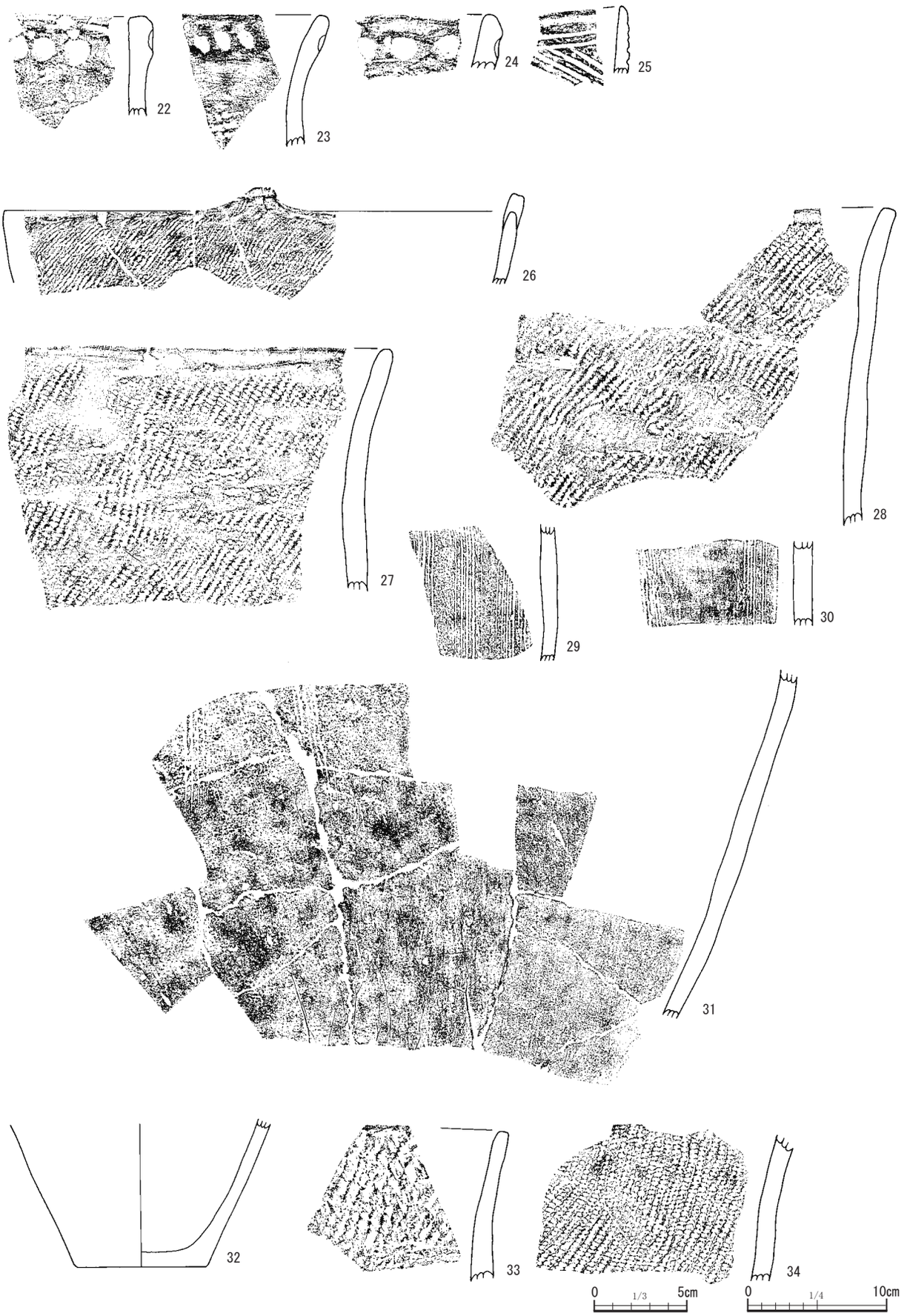


1　黒褐色土　焼土粒を含む
2　黒褐色土　ローム粒・焼土粒を含む
3　黒褐色土　ローム粒・焼土粒を含む
4　橙色土　焼土
5　橙色土　焼土に黒褐色土を含む
6　黒褐色土　ローム粒を多く焼土粒を少し含む
7　黄褐色土　黒褐色土を含む
8　暗褐色土　焼土粒を含む
9　暗褐色土　焼土粒を多く含む
10　暗褐色土　焼土粒を多く含む
11　黒褐色土　ローム粒・焼土粒を少し含む
12　黒褐色土　ローム粒・焼土粒を含む
13　橙色土　焼土
14　橙色土　焼土にローム粒を含む
15　暗褐色土　焼土粒を含む
16　暗褐色土　焼土粒を少し含む
17　黒褐色土　焼土粒を少し含む

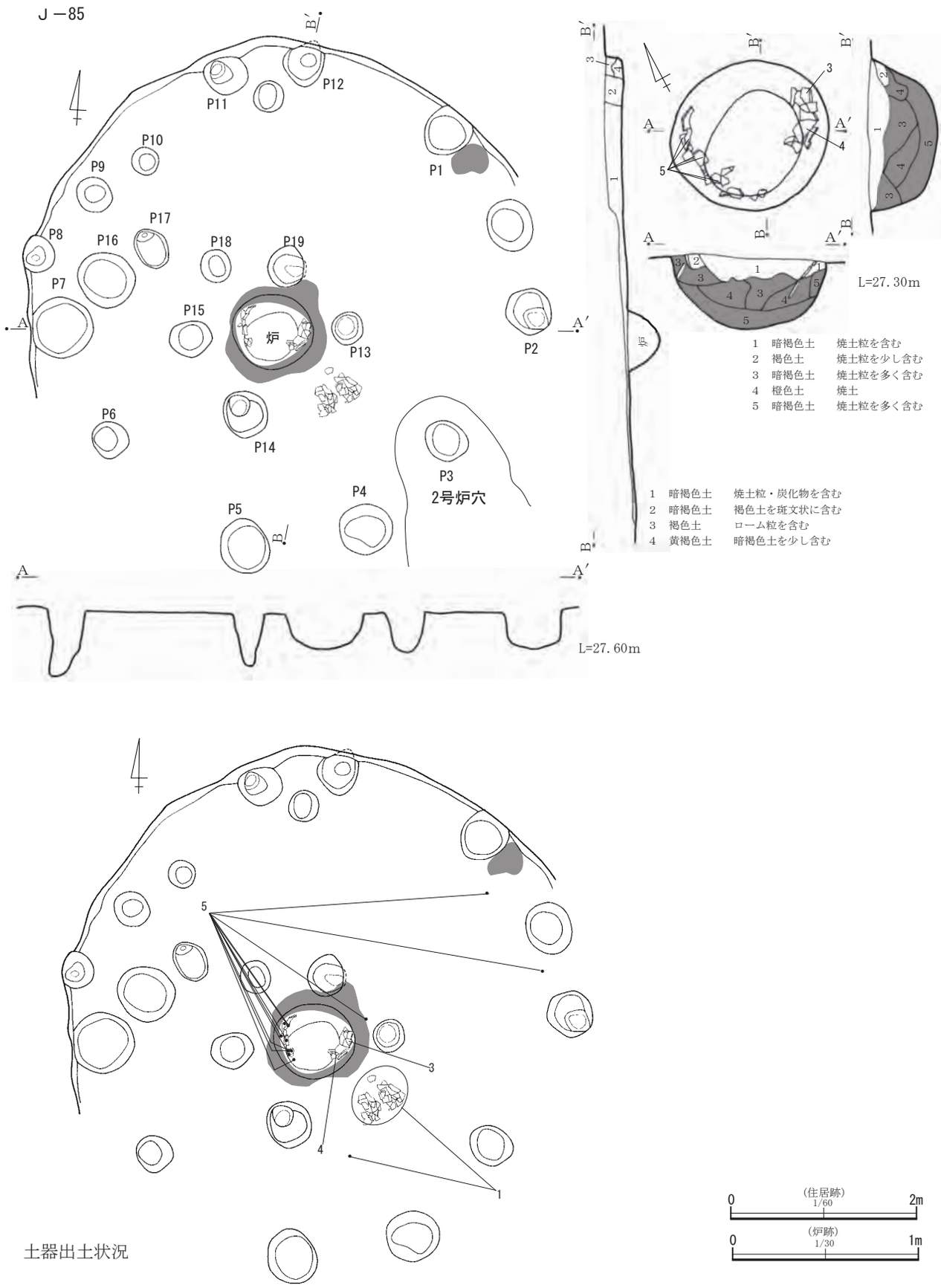
第 178 図　Ｊ -84(1)



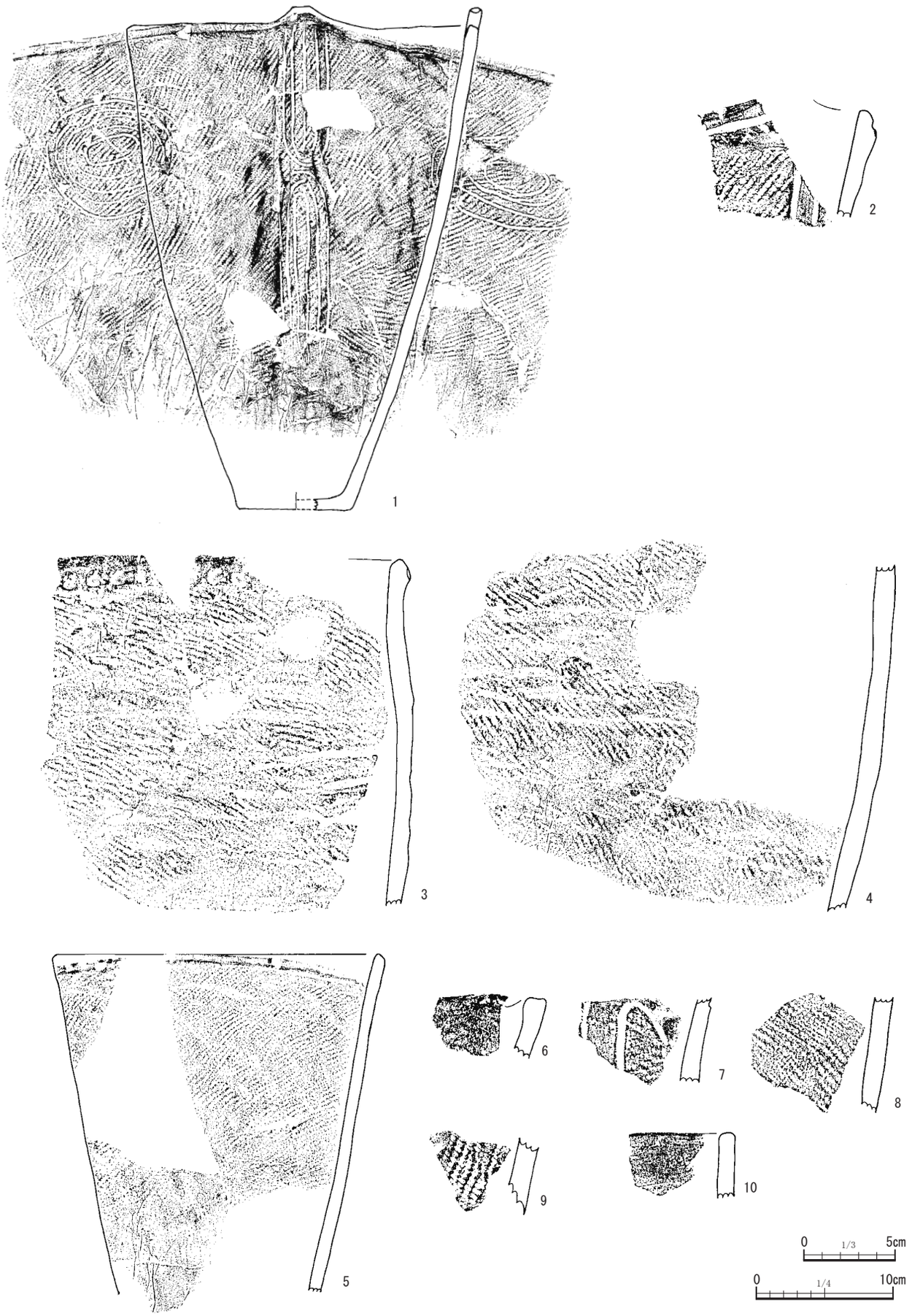
第 179 図　J -84(2)



第 180 図　J -84(3)


J－85
P1
P2
P3
2号炉穴
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
P12
P13
P14
P15
P16
P17
P18
P19
炉
A
A′
B
B′
L=27.60m
L=27.30m
1 暗褐色土 焼土粒を含む
2 褐色土 焼土粒を少し含む
3 暗褐色土 焼土粒を多く含む
4 橙色土 焼土
5 暗褐色土 焼土粒を多く含む
1 暗褐色土 焼土粒・炭化物を含む
2 暗褐色土 褐色土を斑文状に含む
3 褐色土 ローム粒を含む
4 黄褐色土 暗褐色土を少し含む
土器出土状況
(住居跡) 1/60
0 2m
(炉跡) 1/30
0 1m

第 181 図　J -85(1)



第 182 図　J -85(2)

J-85(第 181・182 図・第表・図版 23・44)

旧Ⅰキ-17- 1 住。5.8 × 5.7 mの略円形を呈す。掘り込みの有無の判断が難しい。柱穴は深さ 0.5 ～ 0.9 m の P2・P4・P8・P12 ～ P14・P19 の他に浅いもの 11 本がある。炉は下部に焼土が堆積しており、土器片囲を伴う。炉囲いに使われた土器は 5 の大半、 3 ・ 4 である。覆土中出土は 1 ・ 5 の一部であり、 1 は炉の近くでまとまって出土した。確認面上出土は 2 ・ 6 ～ 10 である。

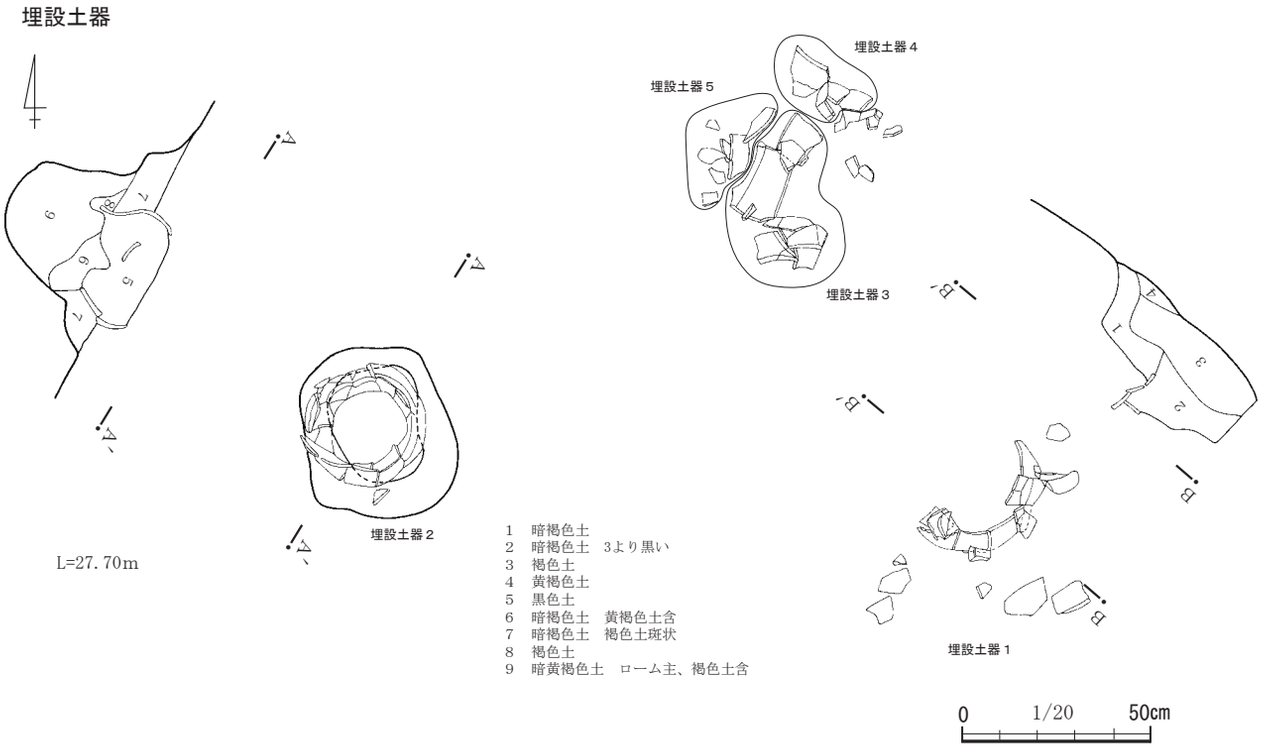
1 ～ 4 は堀之内 1 式である。 1 は縄文を地文とし、細い沈線で文様が施される。 2 は口縁直下に横位の沈線が引かれ、刻みが施される。 3 は口縁直下に指頭押圧が認められ、胴部には縄文のみが施される。 4 は 3 と同一個体である。 5 ・ 6 は堀之内式に伴うものと考えられる。 6 は口唇部に指ナデによる凹みが認められる。 7 は称名寺Ⅰ式である。太い沈線と縄文で J 字文が施されていると考えられる。 8 ～ 10 は時期不明である。

住居跡の時期は堀之内 1 式期と考えられる。

第 2 節　埋設土器

埋設土器 1 ～ 5 (第 183・184 図・図版 24・47)

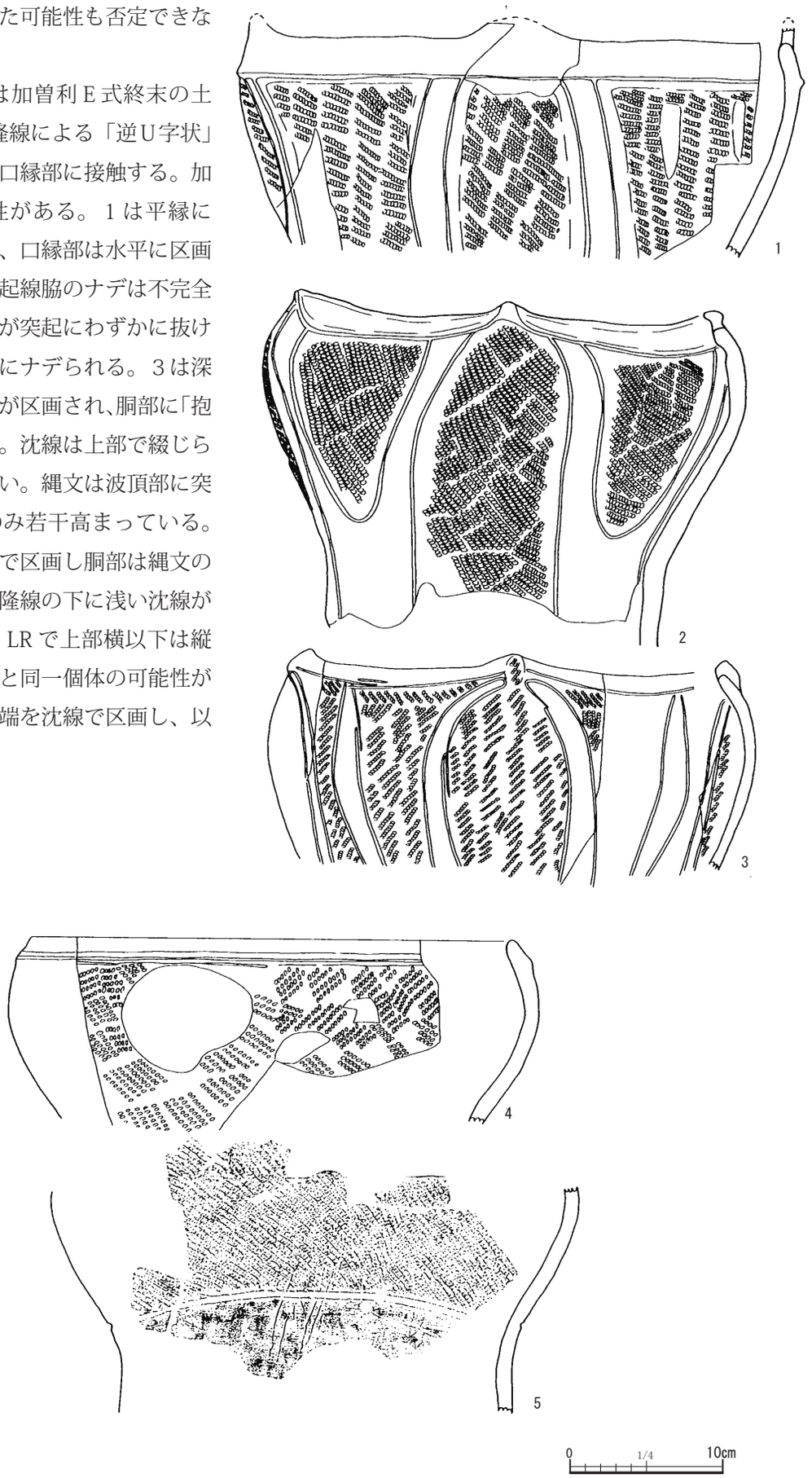
縄文集落のもっとも集中する区域の東端にあたるラ－ 23 区で深鉢の上半部 5 個体分が集中して検出されている (第 183 図)。明確に埋設状態にあったのは 1 個体のみであるが、まとめて埋設土器として報告する。 1 は一部が伏せた状態、 2 は正位で窪みに埋設状態、 3 ～ 5 は大破片が 3 個体分重なった状態であった。埋設状態にある 1 と 2 は劣化が進んでおり、とくに埋設時の上側が顕著である。重ねた状態の 3 ～ 5 は保存状態が良好であり、付着した灰も残存していた。 1 は大半が黒変し、黒変していない部分が風化している。 2 は全体が劣化し、上端部は磨滅が顕著。内面下半は剥離が目立つ。 3 は残存部の上半が赤変、外面から口唇上に灰が付着する。 4 は残存部の外面に灰が付着する。上半と下半の色調は異なる。 5 は内外面に灰が付着する。以上から、これらの炉に伴う炉体土器として使われたものであった可能性が高



第 183 図　埋設土器 (1)

い。住居跡が存在した可能性も否定できない。

第 184 図１・２は加曽利Ｅ式終末の土器であり、胴部の微隆線による「逆Ｕ字状」区画文が開いたまま口縁部に接触する。加曽利ＥⅤ式の可能性がある。１は平縁に波頂部が付くもので、口縁部は水平に区画される。胴部の微隆起線脇のナデは不完全である。２は区画文が突起にわずかに抜ける。微隆線脇は丁寧にナデられる。３は深く細い沈線で口縁部が区画され、胴部に「抱球文」が表出される。沈線は上部で綴じられて口縁部に付かない。縄文は波頂部に突き抜け、この部分のみ若干高まっている。４は口縁部を微隆線で区画し胴部は縄文のみの土器である。微隆線の下に浅い沈線が沿っている。縄文は LR で上部横以下は縦施文である。５は４と同一個体の可能性があるもので、頸部上端を沈線で区画し、以下に無文帯をもつ。



第 184 図　埋設土器 (2)

第３節　土坑

１　概要

先頭に「Ｄ」を付けた遺構のうち、縄文時代と時期不明の土坑をここで扱う。奈良・平安時代と中近世の土坑については別に記載した。本遺跡の主体は縄文後期初頭の集落であり、土坑はこの時期の集落を構成する重要な要素の一つである。いっぽうで、時期・性格を知る手がかりを得られないものが大半を占めている。そこで、以下の方針で報告を行うこととした。

・調査時点の記載や記録類から人為的な掘り込みと判断できないものは除外した。遺構番号の付け替えは事前に行っているため欠番が多くなっている。

・形状から識別しやすい陥し穴は別に扱った。

・そのほかは土坑としてまとめ、図は番号順に掲載した。このなかには後期集落の重要な構成要素である「小竪穴」、性格を判断できない「土坑」、径が小さく柱穴等の可能性の高い「ピット」などが含まれている。

このような事情から、土坑として扱ったものの記載や一覧 (第３表) は番号が飛び飛びになっている。遺構番号から探したい場合は第１表 (遺構索引表) を参照していただきたい。

２　陥し穴

(1) 概要と分布

縄文時代の狩猟用罠とみられる陥し穴の可能性が高いものを 26 基抽出した (第３表)。第２期工事区域では２基検出しているので、合計は 28 基となる。ただし、中近世の鹿穴等が含まれている可能性がある。調査区南東部の中近世の遺構群域の溝に近接するものは、形状も考慮した上で多くを中近世の遺構と判断した。陥し穴の分布 (第 185 図) は全体として散漫だが、縄文中期末～後期初頭主体の遺構群を避けるように、その縁辺に分布する傾向がある。調査区北西端の台地上にややまとまっている。形状と直線状の位置関係から、同時に列状に仕掛けられた可能性があるものが見られる。① D-004・007・009・011、② D-056・097・436、③ D-345・372(やや形状が異なる)、④ D-013・014、⑤ D-416・430 である。とくに可能性が高いのは①と②である。①は二つの谷の間の尾根を横断する方向、②は緩斜面をトラバースする方向のけもの道に仕掛けられたものであろう。陥し穴の年代の判断は難しいが、縄文草創期から早期前葉に多い深く形状の整った溝型陥し穴は皆無であり、以下の記載のように比較的形状が似たものが集落範囲の縁辺に分布することから、後期集落の形成時期またはそれに近い年代のものが多いと推定される。

(2) 形状 (第 186 ～ 190 図・図版 24)

溝型は D-050・D-452 の２基のみであり、そのほかは楕円型である。底面の幅が 0.8 ｍ～ 1.0 ｍで、長さが３倍～４倍の比較的よく似た形状のものが大半を占めている。底面は長方形のものが多く、上部も長方形のものから、壁面が凸凹に中膨れするもの、上部が楕円形ないし不整形に大きく膨らむものなどが見られる。上部も長方形のものは壁面が平坦であるのに対して、中間や上部が広がっているものは凹凸が著しい。後者は動物が落ちたことを示す可能性がある。D-007 は２段に掘り込まれたような特異なものである。検出面から断面図７層まで、中央部は炭化物・焼土ブロック・ロームブロックを多く含む暗褐色土～褐色土 (３～７層)、図版 24 － ５の部分で精査を行った時点では、周囲は暗黄褐色土 (９層) で明確に線を引ける状況であった。底面に逆茂木状の小ピットをもつものは皆無である。D-033・056・345・354 の４基は細長く、溝型に近いものである。

第３表　縄文時代土坑

陥し穴

No.	旧No.	時期	種別１	種別２	平面形	長軸	短軸	底長軸	底短軸	深さ	重複遺構	備考
D-003	*サ-16-1 土坑*		陥し穴	楕円型	長楕円形	315	205	145	50	266		下部は長方形、上部広がる
D-004	*シ-13-1 土坑*		陥し穴	楕円型	長方形	214	94	142	56	167		上部一方に広がる
D-006	*セ-11-1 土坑*		陥し穴	楕円型	長方形	224	136	110	46	200		上部やや楕円形に広がるが中間は平坦
D-007	*セ-12-1 土坑*		陥し穴	楕円型	長方形	303	200	207	60	232		奥部
D-008	*セ-19-1 土坑*		陥し穴	楕円型	隅丸長方形	230	127	165	68	219		
D-009	*ソ-11-1 土坑*		陥し穴	楕円型	不整楕円形	284	(155)	198	80	246		
D-011	*タ-10-1 土坑*		陥し穴	楕円型	楕円形	246	162	182	63	250		上部楕円形
D-013	*チ-12-1 土坑*		陥し穴	楕円型	不整楕円形	290	173	170	50	232		
D-014	*ツ-9-1 土坑*		陥し穴	楕円型	楕円形	325	188	178	52	236		炭化物あり
D-016	*テ-10-1 土坑*		陥し穴	楕円型	長方形	280	262	197	65	242		上部不整形に広がる
D-028	*ヒ-10-1 土坑*		陥し穴	楕円型	長方形	155	90	107	55	192		
D-033	*フ-18-3 土坑*		陥し穴	楕円型	隅丸長方形	142	76	95	20	68		小形の陥し穴？溝型に近い
D-050	*ヘ-20-3 土坑*		陥し穴	溝型	長楕円形	155	76	114	15	70		
D-056	*ホ-5-1 土坑*		陥し穴	楕円型	隅丸長方形	240	164	151	45	223		溝型に近い
D-097	*ミ-5-1 土坑*		陥し穴	楕円型	隅丸長方形	277	178	168	48	256		一方に広がる
D-119	*ム-10-1 土坑*	加曽利ＥⅣ以前	陥し穴	楕円型	隅丸長方形	186	105	144	55	241	J9 より新	
D-134	*モ-12-1 土坑*		陥し穴	楕円型	長方	198	118	150	45	96		
D-151	*ヤ-27-1 土坑*		陥し穴	楕円型	長方	155	71	138	59	162		
D-345	*ロ-8-1 土坑*	称名寺以前	陥し穴	楕円型	楕円	213	16	156	42	200	J54	溝型に近い。貝ブロックあり
D-372	*ヲ-10-1 土坑*		陥し穴	楕円型	隅丸長方	188	82	112	47	185		
D-416	*Ｉオ-17-2 土坑*		陥し穴	楕円型	不整楕円	174	134	137	69	230	D415	
D-430	*Ｉキ-18-3 土坑*		陥し穴	楕円型	隅丸長方	191	149	127	53	210		
D-432	*ノ-17-1 土坑*		陥し穴	楕円型	隅丸長方	140	115	106	55	96		
D-436	*ム-5-3 土坑*		陥し穴	楕円型	不整長楕円	294	150	232	90	40	D117	上部に古代土坑
D-451	*セ-41-1 土坑*		陥し穴	楕円型	楕円	274	197	188	79	223		
D-452	*セ-41-2 土坑*		陥し穴	溝型	隅丸長方	(140)	(119)	93	18	164		

土坑

No.	旧No.	時期	種別１	種別２	平面形	上長軸	上短軸	底長軸	底短軸	深さ	重複遺構	備考
D-005	*ヌ-10-1 土坑*		土坑	土坑	円	126	110	90	74	55		
D-015	*テ-9-1 土坑*		土坑	土坑	不整楕円	339	270	241	107	70		焼土あり
D-017	*ト-11-1 土坑*		土坑	土坑	不整長楕円	311	105	256	80	40		土坑？
D-022	*ヌ-16-1 土坑*		土坑	土坑	楕円	114	70	101	58	26		
D-023	*ネ-16-1 土坑*	晩期前半	土坑	ピット	円	72	50	71	42	24		
D-027	*ノ-41-2 土坑*		土坑	土坑	不整楕円	190	120	147	87	43		土坑？
D-029	*ヒ-28-1 土坑*		土坑	土坑	隅丸長方	181	117	113	84	33		
D-030	*ヒ-28-2 土坑*	後期後葉	土坑	土坑	楕円	204	152	134	72	213		陥し穴？
D-031	*フ-18-1 土坑*	中・後期	土坑	小竪穴	円	133	131	116	109	17		浅いが底は広く平坦
D-032	*フ-18-2 土坑*		土坑	土坑	不整楕円	103	92	86	72	22		
D-034	*フ-19-1 土坑*		土坑	土坑	隅丸長方	114	87	99	70	15		
D-035	*フ-20-1 土坑*	中・後期	土坑	小竪穴	円	95	90	72	63	51		底やや小さいが形状整う
D-036	*フ-20-2 土坑*	中・後期	土坑	小竪穴	楕円	135	117	120	93	26		貝ブロックあり
D-037	*フ-20-3 土坑*	称名寺	土坑	ピット	楕円	52	47	42	28	42		
D-039	*ヘ-14-1 土坑*	中・後期	土坑	小竪穴	円	156	135	96	93	73		貝ブロックあり
D-040	*ヘ-18-1 土坑*		土坑	土坑	隅丸長方	97	83	71	48	23		土坑？
D-041	*ヘ-18-2 土坑*		土坑	ピット	楕円	86	65	21	14	56		遺構かどうか
D-042	*ヘ-19-1 土坑*		土坑	土坑	不整円	103	102	78	67	22		
D-043	*ヘ-19-2 土坑*		土坑	土坑	楕円	115	105	81	57	27		貝ブロックあり

土坑

No.	旧No.	時期	種別1	種別2	平面形	上長軸	上短軸	底長軸	底短軸	深さ	重複遺構	備考
D-044	ヘ-*19-3 土坑*		土坑	土坑	楕円	(76)	82	62	45	17	D45より旧	
D-045	ヘ-*19-4 土坑*		土坑	土坑	不整	124	85	98	45	17	D44より新・D46より旧	
D-046	ヘ-*19-5 土坑*		土坑	土坑	楕円	133	98	104	62	30	D45より旧新	
D-047	ヘ-*19-6 土坑*	称名寺	土坑	小竪穴	円	87	86	71	69	35		径小さいが底広く平坦。貝ブロックあり
D-048	ヘ-*20-1 土坑*	中・後期	土坑	小竪穴	楕円	130	112	112	95	26		
D-049	ヘ-*20-2 土坑*		土坑	土坑	円	101	90	72	68	10		
D-051	ヘ-*21-1 土坑*	加曽利EⅡ～Ⅲ	土坑	土坑	円	110	100	78	65	16		被熱土器あり
D-053	ヘ-*23-1 土坑*		土坑	土坑	長楕円	239	98	213	45	65		陥し穴の下部？浅いため土坑とした
D-054	ヘ-*24-1 土坑*		土坑	ピット	楕円	33	26	22	24	65		貝ブロックあり
D-058	ホ-*14-1 土坑*	中・後期	土坑	土坑	円	180	157	158	138	22		小竪穴？
D-060	ホ-*17-1 土坑*	称名寺	土坑	土坑	楕円	85	61	61	33	20		土坑？
D-061	ホ-*18-1 土坑*	称名寺	土坑	小竪穴	円	104	98	89	86	23		径小さく平面形やや歪だが底面広い
D-062	ホ-*18-2 土坑*	称名寺	土坑	小竪穴	円	95	93	85	79	20		
D-064	ホ-*19-1 土坑*		土坑	土坑	楕円	94	80	51	45	24		
D-065	ホ-*19-2 土坑*		土坑	土坑	楕円	144	118	119	82	32		土坑？
D-067	ホ-*20-2 土坑*	称名寺	土坑	土坑	円	108	98	84	76	32		
D-068	ホ-*20-3 土坑*		土坑	土坑	楕円	74	65	58	43	12		
D-069	ホ-*20-4 土坑*	称名寺	土坑	小竪穴	円	131	131	112	110	75		
D-070	ホ-*21-1 土坑*		土坑	ピット	円	70	67	43	40	29		
D-071	ホ-*22-1 土坑*		土坑	土坑	円	101	101	55	51	19		
D-072	ホ-*23-1 土坑*		土坑	土坑	不整楕円	180	85	142	54	20		土坑？
D-073	ホ-*23-2 土坑*		土坑	土坑	楕円	141	105	111	78	23		
D-074	ホ-*23-3 土坑*		土坑	土坑	円	119	113	85	75	21		
D-075	マ-*5-1 土坑*		土坑	土坑	円	79	74	22	20	20		
D-076	マ-*14-1 土坑*	EⅣ～称名寺	土坑	土坑	不整楕円	159	136	110	97	49		
D-077	マ-*14-2 土坑*		土坑	土坑	隅丸長方	200	162	168	118	46		
D-078	マ-*15-1 土坑*	EⅣ～称名寺	土坑	土坑	円	170	145	120	113	75		
D-079	マ-*15-2 土坑*	EⅣ～称名寺	土坑	小竪穴	円	127	(125)	80	80	68	D80より新	貝ブロックあり
D-080	マ-*15-3 土坑*	EⅣ～称名寺	土坑	小竪穴	円	187	175	159	158	58	D79より旧	壁大ピットあり
D-081	マ-*19-1 土坑*	称名寺	土坑	小竪穴	円	109	102	61	80	47		
D-082	マ-*19-2 土坑*		土坑	土坑	不整	241	80	219	55	20		土坑？
D-083	マ-*19-3 土坑*		土坑	土坑	楕円	123	111	93	80	16		
D-084	マ-*19-4 土坑*		土坑	土坑	隅丸長方	129	114	105	85	30		
D-085	マ-*19-5 土坑*		土坑	土坑	楕円	87	73	58	42	18		
D-086	マ-*19-6 土坑*		土坑	土坑	不整	116	106	89	76	29		
D-087	マ-*19-7 土坑*		土坑	ピット	円	49	47	31	29	12		
D-088	マ-*19-8 土坑*	称名寺	土坑	小竪穴	円	110	108	91	86	50		貝ブロックあり
D-089	マ-*19-9 土坑*	称名寺	土坑	小竪穴	円	114	107	95	85	77		貝ブロックあり
D-090	マ-*20-1 土坑*		土坑	ピット	楕円	64	52	44	29	11		
D-091	マ-*20-2 土坑*	称名寺	土坑	小竪穴	楕円	103	81	91	77	34		貝ブロックあり
D-092	マ-*21-1 土坑*	中・後期	土坑	小竪穴	楕円	97	90	72	57	58		底面がやや小さく歪
D-093	マ-*21-2 土坑*		土坑	土坑	楕円	117	85	89	67	23		
D-096	マ-*27-2 土坑*		土坑	土坑	円？	108	(83)	95	(73)	23	マー27-1溝	土坑？
D-098	ミ-*6-1 土坑*	阿玉台・勝坂	土坑	小竪穴	円	237	222	160	154	103		
D-099	ミ-*8-1 土坑*	中・後期	土坑	小竪穴	楕円	126	100	105	67	29		楕円形だが底面平坦。多量の焼土・炭化物
D-101	ミ-*13-1 土坑*	中・後期	土坑	小竪穴	円	150	122	126	114	45		
D-102	ミ-*15-1 土坑*	称名寺	土坑	小竪穴	不整円	92	90	72	56	71		貝ブロックあり
D-103	ミ-*15-2 土坑*		土坑	ピット	円	76	69	44	40	27		
D-104	ミ-*16-1 土坑*	EⅣ～称名寺	土坑	小竪穴	円	132	120	95	99	53		
D-105	マ-*16-2 土坑*		土坑	土坑	円	115	101	77	73	40		
D-106	ミ-*16-3 土坑*		土坑	土坑	楕円	136	99	103	71	25		

土坑

No.	旧No.	時期	種別 1	種別 2	平面形	上長軸	上短軸	底長軸	底短軸	深さ	重複遺構	備考
D-108	ミ-19-2 土坑		土坑	土坑	不整円	145	121	105	96	11		
D-109	ミ-20-1 土坑		土坑	土坑	楕円	103	66	84	54	18		
D-112	ミ-21-1 土坑	中・後期	土坑	小竪穴	円	125	117	113	108	21		
D-113	ミ-21-2 土坑		土坑	土坑	楕円	109	96	79	79	12		
D-116	ミ-23-1 土坑		土坑	土坑	楕円	116	94	79	68	43		
D-118	ム-5-2 土坑		土坑	土坑	楕円	135	102	85	63	41		
D-121	ム-16-1 土坑	中・後期	土坑	小竪穴	円	108	96	98	85	47		貝ブロックあり
D-122	ム-17-1 土坑		土坑	土坑	円	80	78	64	52	30	J12	
D-123	ム-18-1 土坑	中・後期	土坑	小竪穴	円	107	107	83	70	65		貝ブロックあり
D-124	ム-19-1 土坑	欠番	土坑	土坑	不整楕円	135	116	71	58	73		近世以降本来欠番
D-125	ム-21-1 土坑		土坑	土坑	楕円	111	93	82	54	19		
D-126	ム-21-2 土坑		土坑	土坑	円	87	82	50	45	64		
D-127	ム-22-1 土坑		土坑	土坑	楕円	150	92	124	67	27		
D-128	ム-22-2 土坑		土坑	土坑	楕円	125	84	84	47	17		
D-129	ム-22-3 土坑		土坑	土坑	楕円	107	95	78	58	15		
D-130	メ-10-1 土坑		土坑	土坑	円	84	75	53	51	57		
D-133	モ-10-1 土坑		土坑	土坑	円	81	76	61	58	20		
D-136	モ-14-1 土坑		土坑	土坑	円	132	122	113	105	15	J19	土坑？
D-137	モ-16-1 土坑		土坑	ピット	不整楕円	90	6	39	27	85		
D-138	モ-16-2 土坑		土坑	ピット	円	66	61	51	46	79		
D-139	モ-16-3 土坑		土坑	土坑	楕円	111	87	91	66	26		多量の焼土
D-140	モ-16-4 土坑		土坑	ピット	円	43	40	38	26	33		ピット？
D-141	モ-17-1 土坑		土坑	土坑	円	76	68	65	60	23		
D-142	モ-19-1 土坑		土坑	土坑	楕円	140	98	107	66	27		撹乱あり
D-143	モ-20-1 土坑		土坑	土坑	不整楕円	205	179	189	164	15		撹乱あり
D-144	モ-20-2 土坑		土坑	土坑	楕円？	78	(35)	71	(30)	36		
D-145	モ-20-3 土坑		土坑	土坑	楕円	87	69	53	48	47		土坑？
D-146	ヤ-11-1 土坑		土坑	土坑	円	167	162	107	114	72		
D-150	ヤ-22-1 土坑		土坑	土坑	円	126	116	92	92	51		貝ブロックあり
D-154	ユ-22-1 土坑	E Ⅳ～称名寺	土坑	小竪穴	円	116	114	38	38	112	J22 より旧	J22 の炉の下
D-156	ユ-22-3 土坑	E Ⅳ～称名寺	土坑	小竪穴	円	106	101	110	105	69		貝ブロック
D-157	ユ-22-4 土坑		土坑	土坑	楕円	121	95	97	78	22		土坑？
D-159	ヨ-10-1 土坑		土坑	土坑	円	100	84	60	56	92		
D-160	ヨ-11-1 土坑	中・後期	土坑	小竪穴	円	102	100	76	74	74		
D-161	ヨ-13-1 土坑	称名寺	土坑	土坑	円	232	208	157	151	66	D162・J25	
D-163	ヨ-14-1 土坑		土坑	土坑	円	120	118	80	77	20		
D-164	ヨ-15-1 土坑		土坑	ピット	円	77	70	40	37	99		
D-168	ヨ-16-2 土坑		土坑	土坑	楕円	85	71	72	55	13		
D-169	ヨ-18-1 土坑	称名寺	土坑	小竪穴	円	139	126	105	100	77	D173・174・176	
D-174	ヨ-18-6 土坑		土坑	土坑	楕円？	101	94	92	70	32	D169	
D-175	ヨ-18-7 土坑		土坑	土坑	円	297	115	270	69	98		不整楕円形の掘り込みは遺構？
D-177	ヨ-19-1 土坑		土坑	小竪穴	不整円	131	113	105	98	(73)	J26	焼土あり
D-178	ヨ-19-2 土坑	中・後期	土坑	小竪穴	円	90	90	79	76	(28)		小竪穴？径小さく底面やや丸みもつ。貝ブロックあり
D-179	ヨ-20-1 土坑	称名寺	土坑	小竪穴	円	109	106	97	95	90	J27	
D-180	ヨ-20-2 土坑	中・後期	土坑	小竪穴	円	102	92	80	71	31	D183・J27	
D-181	ヨ-20-3 土坑	E Ⅳ～称名寺	土坑	小竪穴	楕円	120	102	110	90	40	D183・184・J27	
D-182	ヨ-20-4 土坑	称名寺	土坑	土坑	円	101	90	87	82	46	J27	貝ブロックあり , 小竪穴？
D-183	ヨ-20-5 土坑		土坑	土坑	-	71	-	61	-	23	D180・181・184・J27	
D-184	ヨ-20-6 土坑		土坑	土坑	円	91	(47)	70	(35)	37	D181・183・J27	
D-185	ヨ-20-7 土坑	称名寺	土坑	小竪穴	円	76	70	64	55	32	J27	小竪穴？貝ブロックあり
D-187	ヨ-20-9 土坑	中・後期	土坑	小竪穴	円	139	120	106	110	59		
D-188	ヨ-21-1 土坑	中・後期	土坑	小竪穴	円	107	107	85	78	47		

土坑

No.	旧No.	時期	種別1	種別2	平面形	上長軸	上短軸	底長軸	底短軸	深さ	重複遺構	備考
D-190	ヨ-22-1 土坑	称名寺	土坑	小竪穴	円	113	110	100	95	91		貝ブロックあり
D-191	ラ-11-1 土坑	中・後期	土坑	小竪穴	円	121	117	93	90	81		
D-192	ラ-11-2 土坑		土坑	土坑	円	75	72	54	44	45	J33	
D-193	ラ-11-3 土坑		土坑	土坑	不整円	90	84	47	29	35	J33	
D-194	ラ-14-2 土坑	称名寺	土坑	土坑	楕円	157	117	117	75	23		
D-195	ラ-14-3 土坑	E Ⅳ～称名寺	土坑	土坑	楕円	156	133	14	121	33	J30	
D-196	ラ-14-4 土坑		土坑	ピット	楕円	75	57	46	42	45	J30	
D-197	ラ-16-1 土坑	称名寺	土坑	土坑	円	127	115	95	81	45		
D-198	ラ-16-2 土坑		土坑	土坑	不整円	142	132	107	99	21		土坑？
D-199	ラ-16-3 土坑		土坑	土坑	円	86	77	67	54	90		大きな柱穴 or 小竪穴？
D-203	ラ-15-4 土坑		土坑	土坑	不整円	90	83	72	61	14		
D-204	ラ-20-1 土坑	中・後期	土坑	小竪穴	円	128	118	101	96	45		
D-206	ラ-21-1 土坑	E Ⅳ～称名寺	土坑	土坑	不整円	122	117	107	60	56		
D-207	ヨ-21-2 土坑		土坑	土坑	円	104	101	47	46	75		
D-208	ヨ-21-3 土坑		土坑	土坑	円	68	66	39	38	46		
D-209	ラ-25-1 土坑	称名寺	土坑	小竪穴	円	107	94	100	91	37		
D-210	ラ-25-2 土坑	加曽利 E Ⅳ	土坑	土坑	不整円	131	123	120	105	70		
D-211	ラ-25-3 土坑	加曽利 E Ⅳ	土坑	ピット	円	92	65	31	25	91		
D-213	リ-9-1 土坑	中・後期	土坑	小竪穴	円	117	105	82	64	106		
D-214	リ-9-2 土坑		土坑	土坑	円	70	65	57	53	56		
D-215	リ-11-1 土坑	中・後期	土坑	小竪穴	楕円	113	106	107	90	68	J33	貝ブロックあり
D-216	リ-12-1 土坑		土坑	土坑	-	132	130	88	78	30		平面図なし
D-218	リ-12-3 土坑		土坑	土坑	円	76	70	53	48	30		ピット？
D-219	リ-13-3 土坑	中・後期	土坑	小竪穴	楕円	140	113	112	92	43		
D-220	リ-13-4 土坑	E Ⅳ～称名寺	土坑	小竪穴	円	158	127	130	106	85		やや不整形
D-221	リ-14-2 土坑		土坑	土坑	楕円	92	73	74	62	65		小竪穴？
D-223	リ-14-4 土坑	加曽利 E Ⅳ	土坑	土坑	不整楕円	140	113	128	89	67		
D-224	リ-14-5 土坑	加曽利 E 前半	土坑	小竪穴	円	133	(123)	95	(102)	63	J35・D231	
D-226	リ-14-7 土坑		土坑	土坑	円	83	(70)	70	(65)	37	J227	
D-227	リ-14-8 土坑		土坑	土坑	円	90	(65)	68	(54)	33	J26	
D-228	リ-14-9 土坑		土坑	土坑	-	114	52	(71)	68	40	J35	
D-229	リ-14-10 土坑	中・後期	土坑	小竪穴	円	129	(104)	88	85	87	J35	
D-230	リ-14-11 土坑		土坑	ピット	円	70	67	38	35	70	J35	
D-231	リ-14-12 土坑		土坑	土坑	円	88	78	54	51	43	J35・D224	
D-232	リ-14-13 土坑		土坑	土坑	楕円	82	73	48	40	68	J35	ピット？
D-234	リ-15-1 土坑	中・後期	土坑	小竪穴	円	130	129	108	105	34	H25	
D-235	リ-16-1 土坑	加曽利 E 後半	土坑	小竪穴	円	180	165	158	152	69	H25	土器時期混在
D-236	リ-16-2 土坑		土坑	土坑	円	90	90	71	70	43	H25	
D-237	リ-16-3 土坑		土坑	土坑	円	130	112	94	78	31		
D-240	リ-17-1 土坑	中・後期	土坑	小竪穴	円	96	94	80	77	43		
D-241	リ-18-1 土坑	中・後期	土坑	小竪穴	楕円	90	90	73	68	46		
D-242	リ-18-2 土坑	E Ⅳ～称名寺	土坑	土坑	不整楕円	120	110	90	81	11		
D-243	リ-19-1 土坑	E Ⅳ～称名寺	土坑	小竪穴	円	137	135	121	120	73	D244	石鏃製作残滓出土
D-244	リ-19-2 土坑	中・後期	土坑	小竪穴	円	101	97	84	76	47	D243・439	
D-245	リ-19-3 土坑		土坑	土坑	不整円	121	119	115	99	30		
D-246	リ-19-4 土坑	E Ⅳ～称名寺	土坑	小竪穴	円	105	95	98	95	84		
D-247	リ-19-5 土坑	加曽利 E 後半	土坑	土坑	楕円	71	65	50	32	102		ピット？
D-248	リ-19-6 土坑		土坑	土坑	楕円	86	76	55	40	101		ピット？
D-249	リ-19-8 土坑	中・後期	土坑	小竪穴	楕円	101	88	71	62	81		
D-250	リ-19-9 土坑	加曽利 E 後半	土坑	小竪穴	不整楕円	90	82	75	60	63	D251	
D-251	リ-19-10 土坑	加曽利 E 後半	土坑	小竪穴	円	99	97	72	70	80	D250	石鏃製作残滓出土
D-254	リ-19-13 土坑		土坑	土坑	楕円	91	82	57	48	24		
D-255	リ-20-1 土坑	称名寺	土坑	小竪穴	楕円	150	127	119	98	79	J49	
D-257	リ-20-3 土坑	称名寺	土坑	土坑	楕円	102	88	74	54	43	J49	
D-258	リ-21-1 土坑		土坑	土坑	円	100	88	69	58	47		
D-259	リ-22-1 土坑	加曽利 E 後半	土坑	土坑	-	119	(95)	89	(78)	54	D260	
D-260	リ-22-2 土坑		土坑	土坑	-	90	(46)	70	38	33	D259	

土坑

No.	旧No.	時期	種別1	種別2	平面形	上長軸	上短軸	底長軸	底短軸	深さ	重複遺構	備考
D-263	*リ-22-5 土坑*		土坑	土坑	楕円	98	81	59	35	23		
D-264	*リ-22-6 土坑*	加曽利E後半	土坑	土坑	楕円	85	(56)	66	(44)	26		
D-267	*リ-23-3 土坑*		土坑	土坑	楕円	134	106	94	80	21		
D-268	*リ-23-4 土坑*	加曽利EⅡ～Ⅲ	土坑	小竪穴	円	123	(112)	110	102	78	J37	
D-269	*ル-7-1 土坑*	EⅣ～称名寺	土坑	小竪穴	円	135	130	108	87	68		
D-270	*ル-8-1 土坑*		土坑	土坑	円	114	110	59	50	77		
D-271	*ル-8-3 土坑*	称名寺	土坑	小竪穴	円	172	170	120	117	90		貝ブロックあり
D-272	*ル-8-4 土坑*	中・後期	土坑	小竪穴	円	110	99	87	80	77		
D-273	*ル-8-5 土坑*		土坑	土坑	不整楕円	98	70	56	50	53	J42	
D-274	*ル-8-6 土坑*		土坑	土坑	円	106	105	81	63	43	J42	
D-275	*ル-8-7 土坑*	EⅣ～称名寺	土坑	土坑	円	100	88	70	57	50		
D-276	*ル-9-1 土坑*	EⅣ～称名寺	土坑	土坑	楕円	144	123	131	102	32		
D-277	*ル-9-2 土坑*	称名寺	土坑	小竪穴	円	111	110	86	84	69	J40	
D-278	*ル-9-4 土坑*	称名寺	土坑	小竪穴	円	120	100	95	81	40	J40	
D-279	*ル-9-5 土坑*	EⅣ～称名寺	土坑	小竪穴	円	99	89	85	66	23	J40	
D-280	*ル-9-6 土坑*	EⅣ～称名寺	土坑	土坑	楕円	102	91	75	72	34	J40	
D-281	*ル-9-7 土坑*		土坑	土坑	不整楕円	92	74	72	60	30	J42	
D-282	*ル-9-8 土坑*		土坑	土坑	長楕円	248	132	206	88	27		
D-283	*ル-10-1 土坑*		土坑	土坑	円	88	85	73	66	67		小竪穴？
D-284	*ル-12-2 土坑*	称名寺	土坑	小竪穴	円	155	150	126	124	67	J43	
D-285	*ル-12-3 土坑*	加曽利E後半	土坑	土坑	不整楕円	122	95	100	74	46	J43	
D-286	*ル-12-4 土坑*		土坑	土坑	円	86	73	48	40	57	J43	
D-287	*ル-12-5 土坑*		土坑	ピット	円	73	67	33	30	64	J43	
D-288	*ル-13-2 土坑*		土坑	土坑	円	89	88	66	64	24		
D-289	*ル-14-1 土坑*		土坑	小竪穴	円	86	81	70	61	74	D290	小竪穴？径小さく底面やや丸みあるが広い
D-290	*ル-14-2 土坑*		土坑	土坑	円	88	(59)	41	38	38	D289	
D-291	*ル-14-3 土坑*	加曽利E前半	土坑	土坑	円	180	(122)	114	(80)	20	J45	
D-292	*ル-14-4 土坑*		土坑	ピット	隅丸方	50	(48)	37	34	51	D293	
D-293	*ル-14-5 土坑*	加曽利EⅣ	土坑	ピット	不整円	78	(60)	50	40	64	D292	
D-294	*ル-16-1 土坑*		土坑	土坑	円	134	121	72	64	59		
D-295	*ル-17-1 土坑*	称名寺	土坑	小竪穴	円	110	106	95	94	60		
D-298	*ル-17-4 土坑*	中・後期	土坑	小竪穴	円	134	111	96	86	34		
D-299	*ル-18-1 土坑*	称名寺	土坑	土坑	不整円	198	192	68	65	45		貝ブロックあり
D-300	*ル-18-2 土坑*	中・後期	土坑	小竪穴	不整円	98	91	76	75	43		貝ブロックあり
D-301	*ル-18-3 土坑*		土坑	土坑	不整円	95	89	55	54	58		
D-302	*ル-18-4 土坑*		土坑	土坑	楕円	142	123	102	68	39		
D-303	*ル-18-5 土坑*		土坑	土坑	円	103	94	55	49	65		
D-304	*ル-18-6 土坑*		土坑	ピット	円	67	65	35	31	65		
D-305	*ル-19-1 土坑*	称名寺	土坑	小竪穴	円	99	(99)	83	80	53		貝ブロックあり
D-306	*ル-19-2 土坑*	加曽利E後半	土坑	土坑	円	74	68	52	44	27		貝ブロックあり
D-308	*ル-19-4 土坑*	称名寺	土坑	土坑	不整円	104	97	81	70	40	J46・47	貝ブロックあり
D-310	*ル-19-6 土坑*	加曽利E後半	土坑	小竪穴	円	89	82	50	49	102	J47	黒曜石集積, 土器集中
D-311	*ル-19-7 土坑*	中・後期	土坑	小竪穴	円	92	67	87	63	63	D315	
D-312	*ル-19-8 土坑*		土坑	土坑	円	110	(85)	72	69	51	J47	
D-313	*ル-19-9 土坑*	称名寺	土坑	土坑	円	109	108	78	65	45	D314・J46	
D-314	*ル-19-10 土坑*		土坑	土坑	円	78	(44)	50	(35)	62	D313・J46	
D-315	*ル-19-11 土坑*		土坑	ピット	円	74	62	20	19	55	D311	
D-316	*ル-19-12 土坑*	称名寺	土坑	土坑	楕円	139	129	111	92			小竪穴？
D-317	*ル-19-13 土坑*		土坑	土坑	円	108	99	46	44	87	J47	
D-318	*ル-19-14 土坑*	称名寺	土坑	土坑	不整円	83	80	51	42	62	J46	
D-319	*ル-19-15 土坑*		土坑	土坑	不整円	115	97	61	55	57	J46・D340	
D-320	*ル-19-16 土坑*		土坑	土坑	長楕円	173	72	139	25	37	D313・J46	
D-321	*ル-20-1 土坑*		土坑	土坑	円	77	73	58	48	33		
D-322	*ル-20-2 土坑*		土坑	小竪穴	楕円	150	133	110	88	74		
D-323	*ル-20-3 土坑*		土坑	土坑	楕円	65	55	38	36	39	J48	

土坑

No.	旧No.	時期	種別1	種別2	平面形	上長軸	上短軸	底長軸	底短軸	深さ	重複遺構	備考
D-324	*ル-20-4 土坑*		土坑	土坑	不整楕円	161	135	82	(34)	52	D325	
D-325	*ル-20-5 土坑*	中・後期	土坑	小竪穴	円	80	80	67	66	75	D324	小竪穴？径小さくが底面平坦で広い
D-327	*ル-21-1 土坑*	E Ⅳ～称名寺	土坑	小竪穴	円	138	133	101	92	58		
D-329	*ル-7-1 土坑*		土坑	土坑	円	146	133	113	102	19		
D-330	*レ-10-1 土坑*	称名寺	土坑	土坑	円	110	108	87	86	71		内耳鍋片
D-331	*レ-10-2 土坑*		土坑	土坑	不整楕円	88	78	58	55	84		
D-332	*レ-12-1 土坑*	E Ⅳ～称名寺	土坑	小竪穴	円	147	143	126	113	92		
D-333	*レ-13-1 土坑*		土坑	小竪穴	円	165	162	130	113	62		
D-334	*レ-16-1 土坑*		土坑	小竪穴	円	101	99	87	83	63		
D-335	*レ-16-2 土坑*		土坑	土坑	円	133	110	81	79	58	ル-16-1pit	
D-336	*レ-16-3 土坑*		土坑	土坑	不整円	108	101	73	60	25		
D-337	*レ-16-4 土坑*		土坑	土坑	円	95	86	70	61	32		
D-338	*レ-18-2 土坑*	中・後期	土坑	土坑	円	122	110	75	74	49		
D-340	*レ-19-1 土坑*	称名寺	土坑	小竪穴	楕円	185	162	170	130	88	D319	石鏃製作残滓出土
D-341	*レ-19-2 土坑*		土坑	土坑	楕円	147	123	70	66	31		貝ブロックあり
D-342	*レ-19-3 土坑*		土坑	土坑	円	71	68	54	49	42		
D-343	*レ-20-1 土坑*		土坑	土坑	円	98	93	70	68	82		
D-344	*レ-20-2 土坑*		土坑	土坑	円	160	156	125	113	47		
D-346	*ロ-9-2 土坑*	E Ⅳ～称名寺	土坑	ピット	円	96	93	78	78	56	J55	
D-347	*ロ-10-1 土坑*		土坑	土坑	円	116	113	77	70	58		
D-349	*ロ-13-2 土坑*		土坑	ピット	楕円	56	48	34	27	46		
D-350	*ロ-13-3 土坑*		土坑	土坑	円	96	89	60	59	51		
D-351	*ロ-17-1 土坑*	加曽利 E 後半	土坑	小竪穴	円	93	89	67	63	45		貝ブロックあり
D-352	*ロ-20-1 土坑*		土坑	ピット	楕円	65	53	47	38	22		
D-353	*ロ-20-2 土坑*	称名寺	土坑	小竪穴	円	102	100	85	80	30		
D-354	*ロ-20-3 土坑*		土坑	土坑	円	75	73	55	53	20	J60	
D-355	*ワ-9-1 土坑*	中・後期	土坑	小竪穴	円	147	138	117	105	47		
D-356	*ワ-9-2 土坑*	中・後期	土坑	小竪穴	円	200	196	108	101	95		貝ブロックあり
D-357	*ワ-15-1 土坑*	称名寺	土坑	小竪穴	円	140	126	123	108	113		
D-358	*ワ-15-2 土坑*	加曽利 E 後半	土坑	小竪穴	円	190	178	145	140	92		石鏃製作残滓出土
D-361	*ワ-15-5 土坑*	称名寺	土坑	土坑	円	146	140	105	100	33	D362	
D-362	*ワ-15-6 土坑*		土坑	土坑	隅丸方	100	(89)	72	65	27	D361	
D-365	*ワ-16-1 土坑*	加曽利 E 前半	土坑	小竪穴	不整円	198	192	97	95	125		貝ブロックあり
D-366	*ワ-18-1 土坑*	称名寺	土坑	土坑	楕円	101	78	85	54	22		
D-367	*ワ-20-1 土坑*	中・後期	土坑	小竪穴	円	88	77	69	55	120		
D-370	*ワ-21-3 土坑*		土坑	土坑	円	90	80	72	64	16		
D-373	*ヲ-11-1 土坑*	加曽利 E 後半	土坑	小竪穴	円	155	142	112	95	82		貝ブロックあり
D-374	*ヲ-11-2 土坑*	中・後期	土坑	小竪穴	円	105	98	86	78	61		
D-375	*ヲ-13-1 土坑*	加曽利 E 後半	土坑	土坑	円	201	179	128	128	51		
D-378	*ヲ-18-1 土坑*		土坑	ピット	不整楕円	100	85	25	22	144		貝ブロックあり
D-379	*ヲ-19-1 土坑*	E Ⅳ～称名寺	土坑	土坑	長楕円	217	92	170	51	40		
D-380	*ヲ-19-2 土坑*	加曽利 E 後半	土坑	小竪穴	不整円	195	175	180	165	85		貝ブロックあり
D-381	*ヲ-19-3 土坑*		土坑	ピット	円	102	90	43	40	115		
D-383	*ヲ-20-1 土坑*		土坑	土坑	円	98	90	85	70	32		貝ブロックあり
D-385	*Ⅰア-11-1 土坑*	加曽利 E 後半	土坑	小竪穴	円	168	150	149	136	65		
D-386	*Ⅰア-16-1 土坑*	加曽利 E 後半	土坑	小竪穴	円	141	134	106	102	82	J67	貝ブロックあり
D-387	*Ⅰア-18-1 土坑*	中・後期	土坑	小竪穴	円	130	125	105	102	53		粘土
D-389	*Ⅰア-20-1 土坑*	称名寺	土坑	小竪穴	楕円	142	133	129	100	76		貝ブロックあり
D-390	*Ⅰイ-10-4 土坑*	E Ⅳ～称名寺	土坑	小竪穴	円	(160)	140	102	100	20	F21	貝ブロックあり
D-391	*Ⅰイ-12-1 土坑*	中・後期	土坑	小竪穴	楕円	125	105	100	96	64		貝ブロックあり
D-393	*Ⅰイ-17-1 土坑*	称名寺～堀之内	土坑	小竪穴	円	224	224	195	159	145		貝ブロックあり
D-394	*Ⅰイ-18-1 土坑*	加曽利 E Ⅱ～Ⅲ	土坑	小竪穴	円	131	123	102	95	98		
D-395	*Ⅰイ-18-2 土坑*	中・後期	土坑	小竪穴	円	170	166	151	149	124		
D-396	*Ⅰイ-20-1 土坑*	堀之内 1	土坑	土坑	不整	149	130	116	98	119		貝ブロックあり
D-397	*Ⅰイ-20-2 土坑*		土坑	土坑	楕円	105	82	90	64	29		
D-398	*Ⅰウ-17-1 土坑*	中・後期	土坑	小竪穴	円	130	117	107	95	51	J77	前期後葉土器出土

土坑

No.	旧No.	時期	種別 1	種別 2	平面形	上長軸	上短軸	底長軸	底短軸	深さ	重複遺構	備考
D-400	*イウ-17-3 土坑*	称名寺	土坑	土坑	楕円	127	105	110	89	44		
D-403	*イウ-19-1 土坑*	加曽利 E 後半	土坑	小竪穴	円	181	174	143	132	105		
D-404	*イエ-13-1 土坑*		土坑	土坑	楕円	151	105	122	80	62	J78	
D-405	*イエ-15-1 土坑*		土坑	土坑	楕円	115	94	85	71	47		
D-406	*イエ-18-1 土坑*	中・後期	土坑	小竪穴	円	163	144	133	120	17		
D-408	*イエ-19-1 土坑*		土坑	土坑	楕円	123	107	99	83	19		
D-409	*イエ-19-2 土坑*	称名寺	土坑	小竪穴	円	175	168	152	149	92		焼土
D-410	*イエ-19-3 土坑*	称名寺	土坑	小竪穴	円	159	149	115	105	110		焼土
D-411	*イエ-20-1 土坑*		土坑	土坑	円	105	96	77	76	20		
D-412	*イエ-20-2 土坑*		土坑	土坑	楕円	86	76	70	54	23		
D-413	*イエ-20-3 土坑*		土坑	土坑	楕円	70	66	45	34	19		
D-414	*イオ-16-1 土坑*	中・後期	土坑	小竪穴	円	131	126	107	97	50		貝ブロックあり
D-415	*イオ-17-1 土坑*		土坑	土坑	楕円	100	92	66	64	39	D416	
D-418	*イオ-18-1 土坑*	堀之内 1	土坑	小竪穴	円	99	95	85	83	35		焼土
D-422	*イカ-16-1 土坑*	称名寺	土坑	小竪穴	円	174	158	154	154	103		
D-423	*イカ-17-1 土坑*		土坑	土坑	円	155	143	116	115	30	J83	
D-424	*イカ-17-3 土坑*		土坑	土坑	円	91	78	59	57	31		
D-425	*イカ-19-1 土坑*	堀之内 1	土坑	小竪穴	円	167	155	145	144	80		
D-426	*イカ-20-1 土坑*	中・後期	土坑	小竪穴	円	143	131	133	122	83		
D-427	*イキ-17-1 土坑*	堀之内 1	土坑	小竪穴	円	145	136	144	142	49		
D-428	*イキ-18-1 土坑*		土坑	土坑	楕円	131	105	107	86	18	D430	
D-431	*イキ-18-4 土坑*		土坑	土坑	隅丸長方	(95)	72	(70)	53	61		
D-433	*ヨ-21-4 土坑*	加曽利 E 後半	土坑	土坑	楕円	95	78	50	42	45	J28	貝ブロックあり
D-434	*イイ-18-3 土坑*		土坑	土坑	円	75	71	41	47	47		
D-435	*マ-18-1 土坑*		土坑	土坑	楕円	92	(76)	72	(63)	44	H12	
D-439	*リ-19-7 土坑*		土坑	土坑	-	85	(36)	70	(17)	32	D244	
D-444	*ワ-18-2 土坑*		土坑	土坑	不整楕円	203	125	147	66	42	J63	
D-449	*イカ-17-2 土坑*		土坑	ピット	円	135	108	36	36	156	J83	
D-456	*ホ-64-2 土坑*		土坑	土坑	円	105	103	79	66	53		小竪穴？
D-457	*ホ-64-1 土坑*		土坑	土坑	円	111	105	87	78	80		小竪穴？
D-463	*ヘ-46-1 土坑*		土坑	土坑	隅丸長方	265	125	168	53	42		

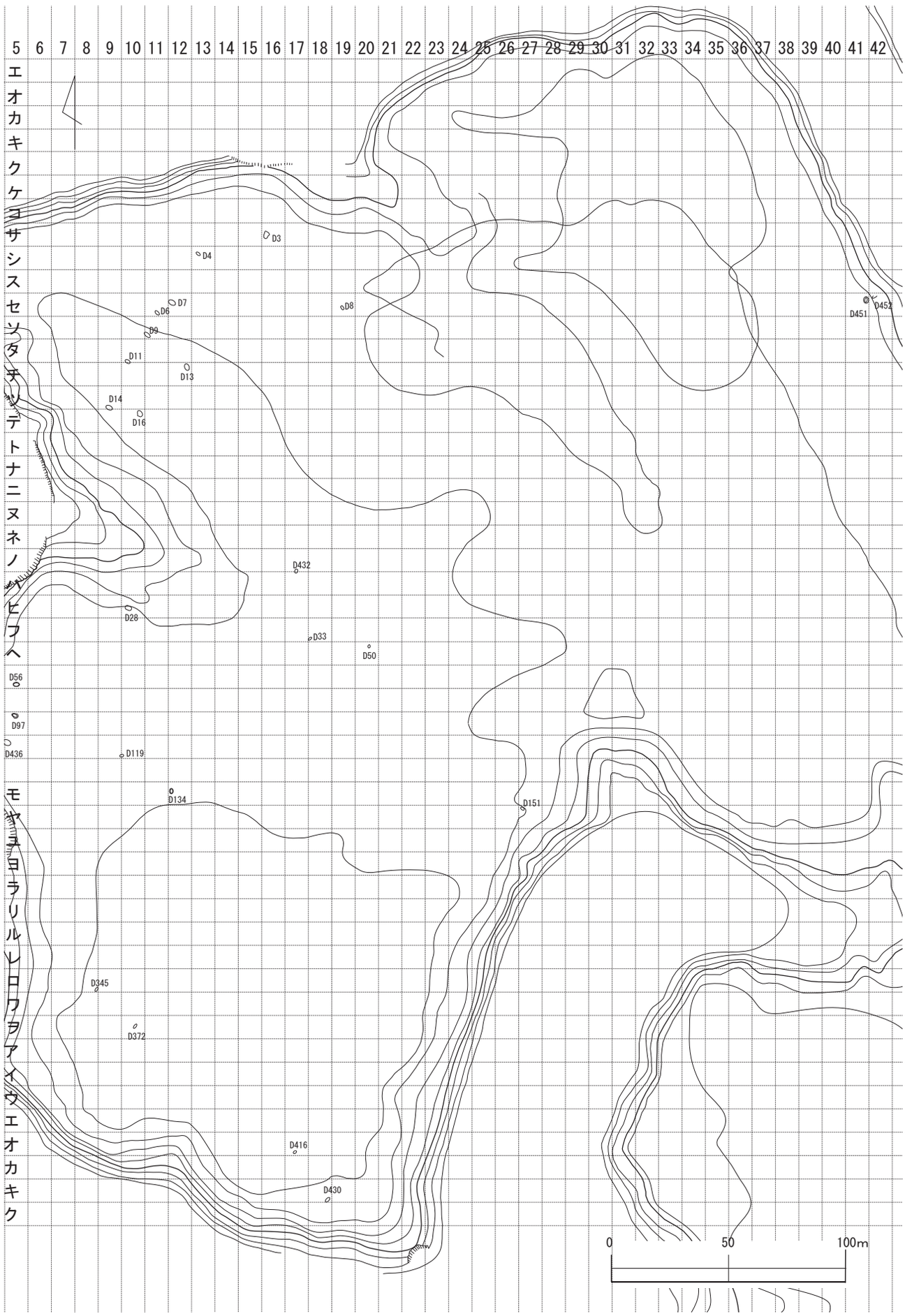
(3) 出土遺物 (第 191 図・付表 3-1・3-3)

D-4　1 は覆土 6 層から出土した土器口縁部片である。

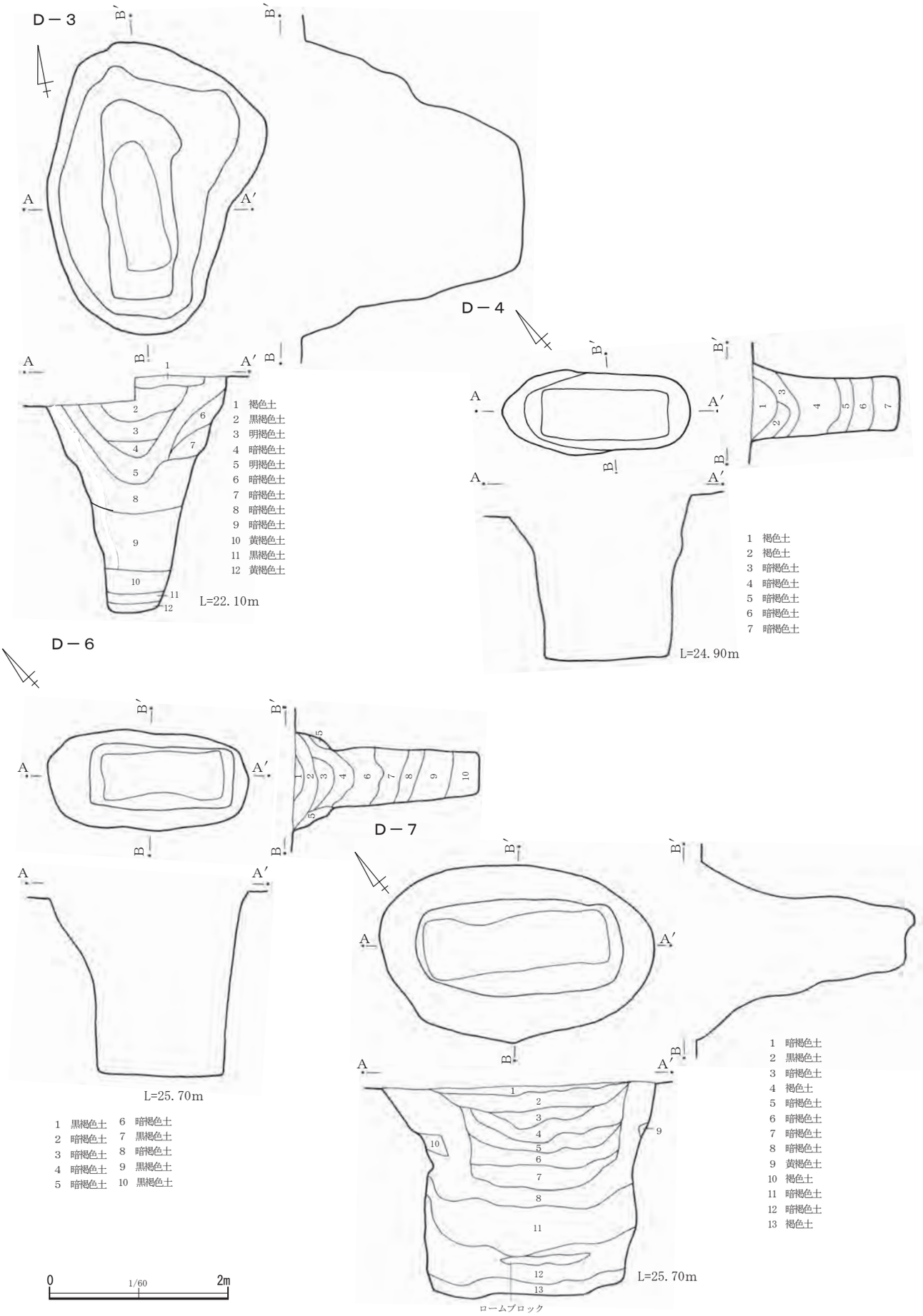
D-14　1 は覆土 1 層から出土している。

D-119　加曽利 E Ⅳ式土器多数と打製石斧 1 点 (第 281 図 60) が出土している。遺物の出土位置は不明であるが、重複する J-9 住居跡の遺物が流入した可能性が高い。つぎの D-345 と同様の意味をもつものとみられる。

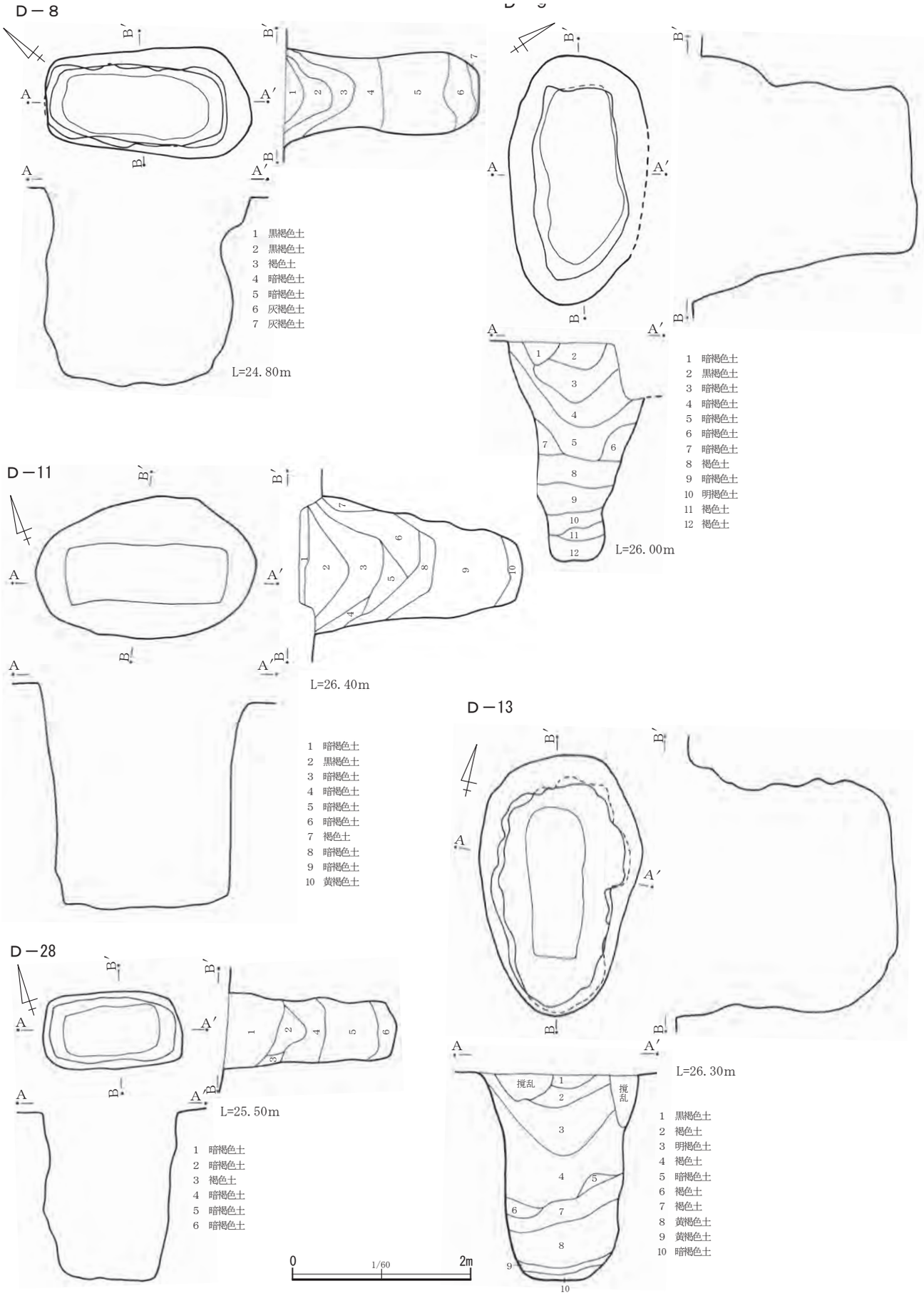
D-345　称名寺式土器が多数出土している。詳細な位置は不明だが、調査写真から J-54 住居跡の貝と土器の集中が土坑内に連続し (図版 19)、少なくとも貝は覆土下層まで入っていた。千葉県や茨城県では加曽利 E Ⅳ式期は遺物を伴う陥し穴の例が散見する。集落形成の前後に狩猟の場となることがあった可能性を示唆するものといえる。



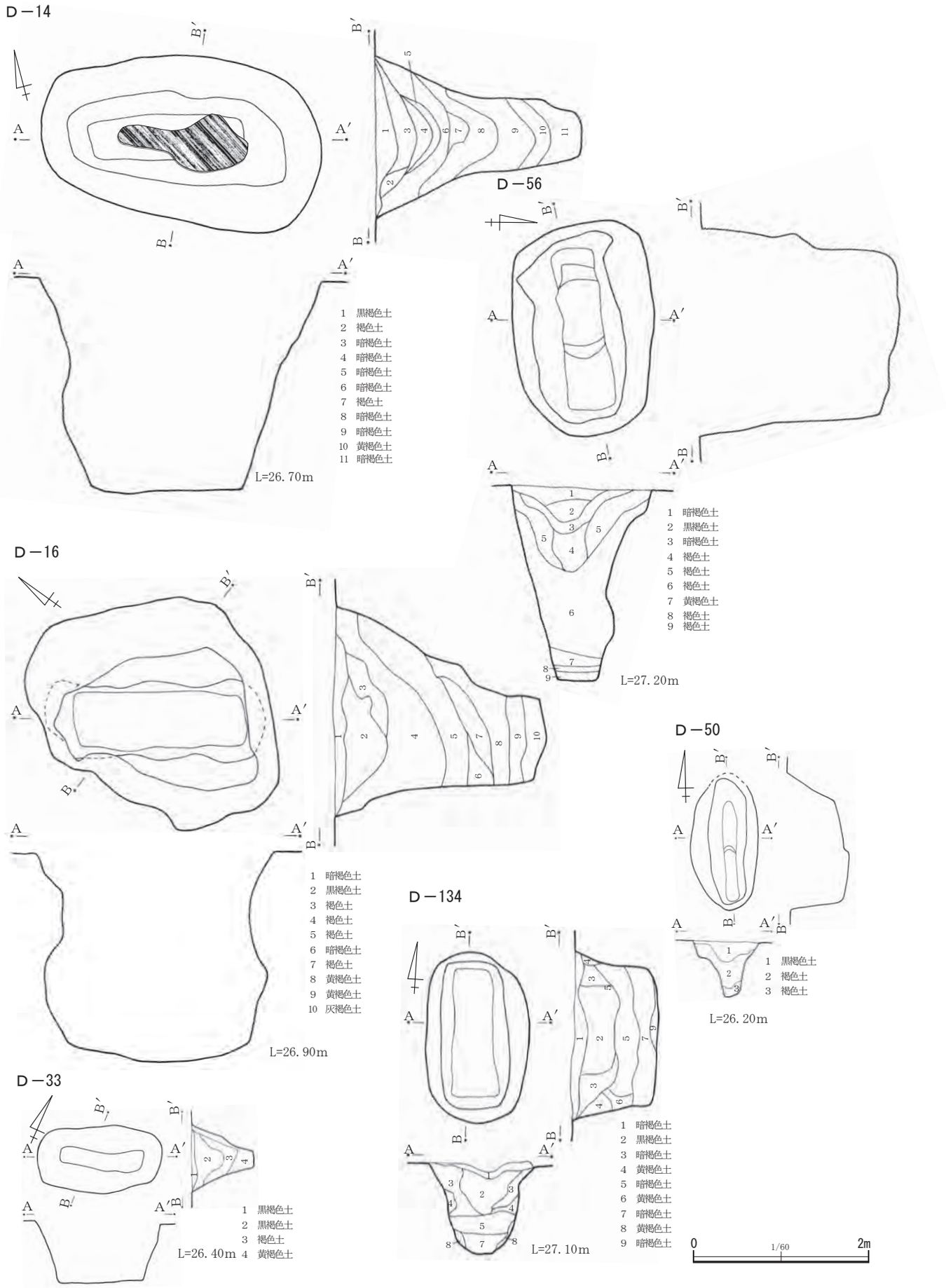
第 185 図　陥し穴分布図


D－3
A
A′
B
B′
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
L=22.10m
1 褐色土
2 黒褐色土
3 明褐色土
4 暗褐色土
5 明褐色土
6 暗褐色土
7 暗褐色土
8 暗褐色土
9 暗褐色土
10 黄褐色土
11 黒褐色土
12 黄褐色土
D－4
L=24.90m
1 褐色土
2 褐色土
3 暗褐色土
4 暗褐色土
5 暗褐色土
6 暗褐色土
7 暗褐色土
D－6
L=25.70m
1 黒褐色土
2 暗褐色土
3 暗褐色土
4 暗褐色土
5 暗褐色土
6 暗褐色土
7 黒褐色土
8 暗褐色土
9 黒褐色土
10 黒褐色土
D－7
L=25.70m
1 暗褐色土
2 黒褐色土
3 暗褐色土
4 褐色土
5 暗褐色土
6 暗褐色土
7 暗褐色土
8 暗褐色土
9 黄褐色土
10 褐色土
11 暗褐色土
12 暗褐色土
13 褐色土
ロームブロック
0
1/60
2m

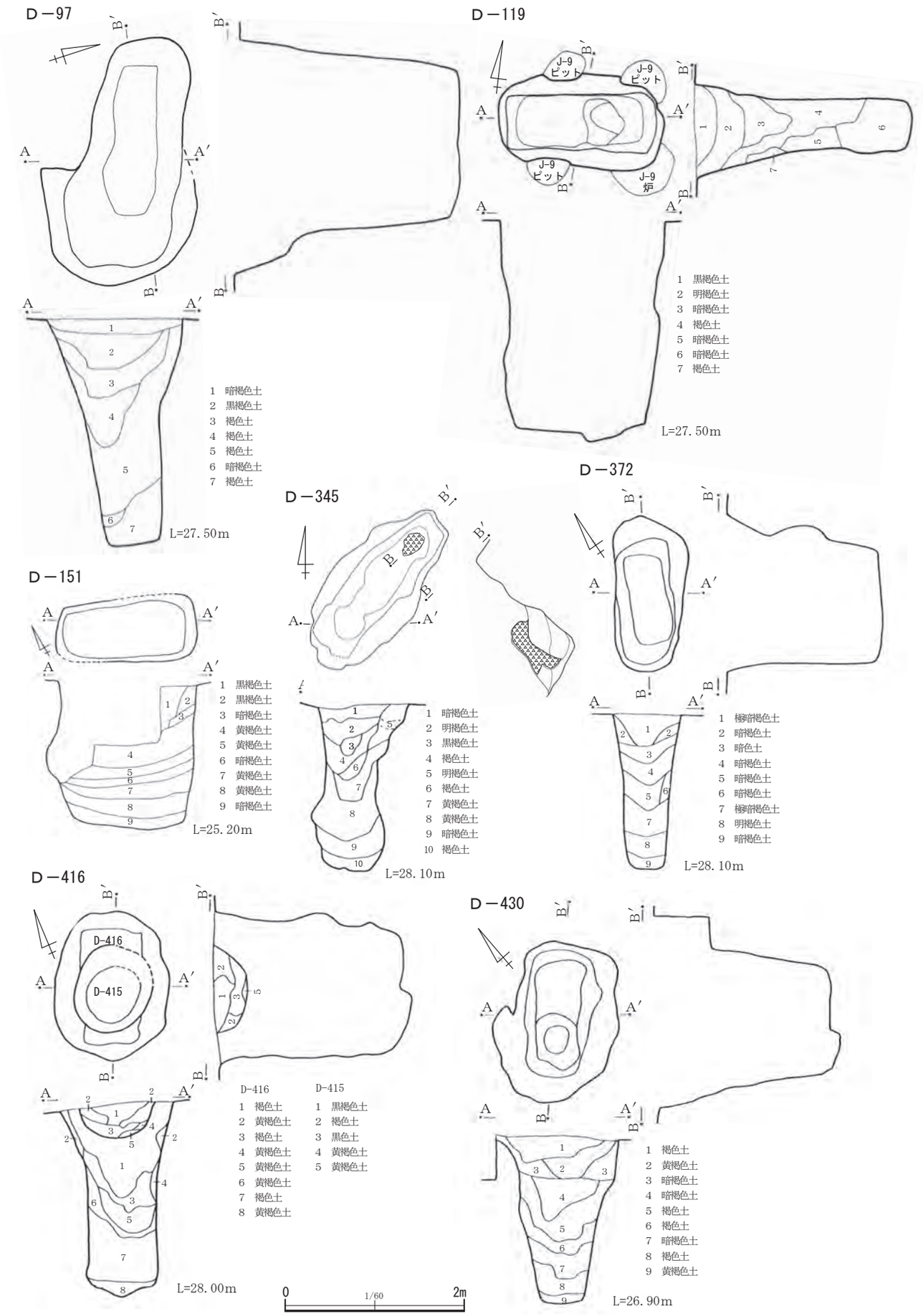
第 186 図　陥し穴 (1)


D－8
L=24.80m
1 黒褐色土
2 黒褐色土
3 褐色土
4 暗褐色土
5 暗褐色土
6 灰褐色土
7 灰褐色土
D－11
L=26.40m
1 暗褐色土
2 黒色土
3 暗褐色土
4 暗褐色土
5 暗褐色土
6 暗褐色土
7 褐色土
8 暗褐色土
9 暗褐色土
10 黄褐色土
D－28
L=25.50m
1 暗褐色土
2 暗褐色土
3 褐色土
4 暗褐色土
5 暗褐色土
6 暗褐色土
L=26.00m
1 暗褐色土
2 黒褐色土
3 暗褐色土
4 暗褐色土
5 暗褐色土
6 暗褐色土
7 暗褐色土
8 褐色土
9 暗褐色土
10 明褐色土
11 褐色土
12 褐色土
D－13
L=26.30m
1 黒褐色土
2 褐色土
3 明褐色土
4 褐色土
5 暗褐色土
6 褐色土
7 褐色土
8 黄褐色土
9 黄褐色土
10 暗褐色土
撹乱
0
1/60
2m

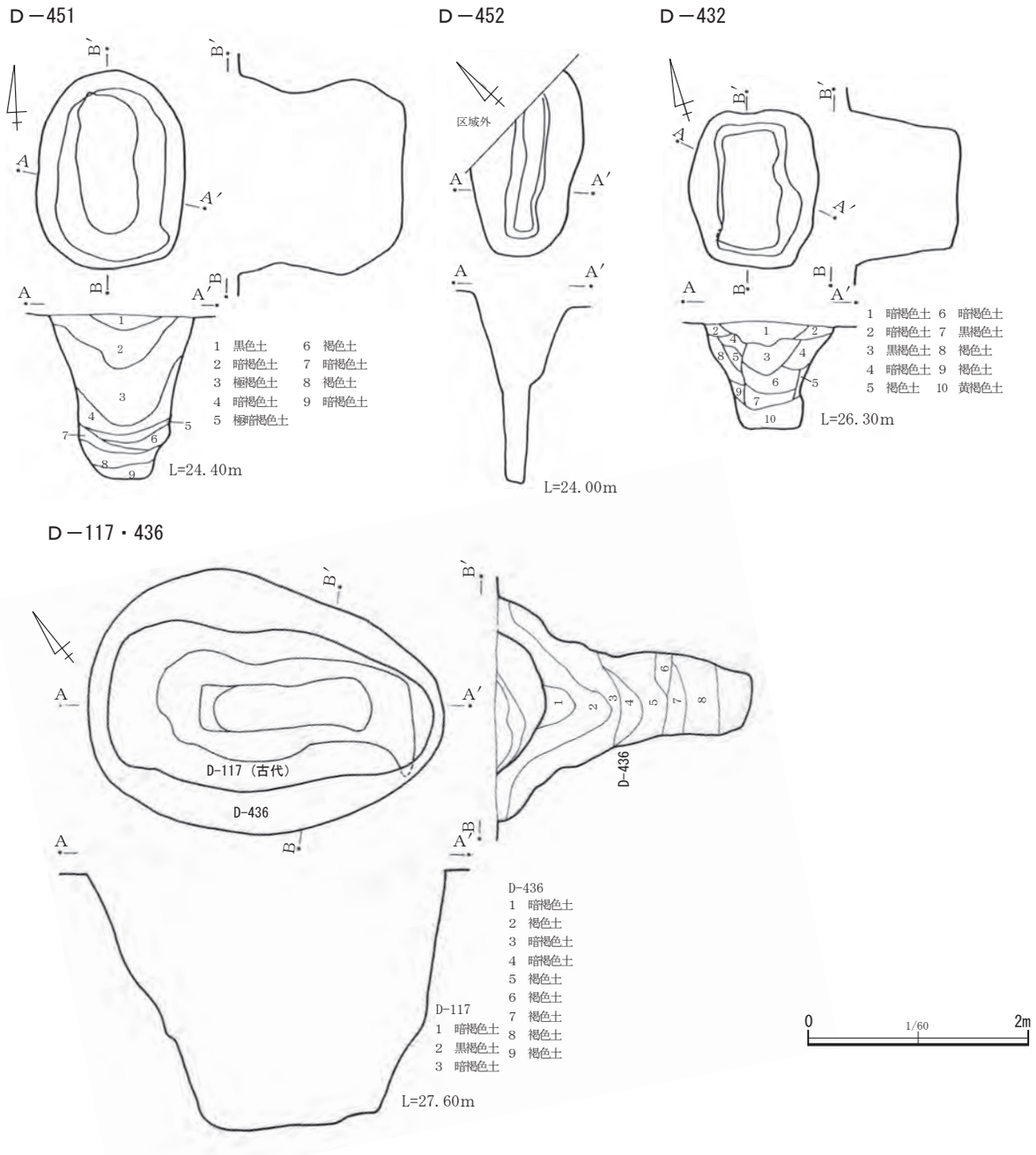
第 187 図　陥し穴 (2)


D－14
L=26.70m
1 黒褐色土
2 褐色土
3 暗褐色土
4 暗褐色土
5 暗褐色土
6 暗褐色土
7 褐色土
8 暗褐色土
9 暗褐色土
10 黄褐色土
11 暗褐色土
D－56
L=27.20m
1 暗褐色土
2 黒褐色土
3 暗褐色土
4 褐色土
5 褐色土
6 褐色土
7 黄褐色土
8 褐色土
9 褐色土
D－16
L=26.90m
1 暗褐色土
2 黒褐色土
3 褐色土
4 褐色土
5 褐色土
6 暗褐色土
7 褐色土
8 黄褐色土
9 黄褐色土
10 灰褐色土
D－50
L=26.20m
1 黒褐色土
2 褐色土
3 褐色土
D－134
L=27.10m
1 暗褐色土
2 黒褐色土
3 暗褐色土
4 黄褐色土
5 暗褐色土
6 黄褐色土
7 暗褐色土
8 黄褐色土
9 暗褐色土
D－33
L=26.40m
1 黒褐色土
2 黒褐色土
3 褐色土
4 黄褐色土
0 1/60 2m

第188図　陥し穴(3)


D－97
1 暗褐色土
2 黒褐色土
3 褐色土
4 褐色土
5 褐色土
6 暗褐色土
7 褐色土
L=27.50m
D－119
J-9 ピット
J-9 炉
1 黒褐色土
2 明褐色土
3 暗褐色土
4 褐色土
5 暗褐色土
6 暗褐色土
7 褐色土
L=27.50m
D－151
1 黒褐色土
2 黒褐色土
3 暗褐色土
4 黄褐色土
5 黄褐色土
6 暗褐色土
7 黄褐色土
8 黄褐色土
9 暗褐色土
L=25.20m
D－345
1 暗褐色土
2 明褐色土
3 黒褐色土
4 褐色土
5 明褐色土
6 褐色土
7 黄褐色土
8 黄褐色土
9 暗褐色土
10 褐色土
L=28.10m
D－372
1 極暗褐色土
2 暗褐色土
3 暗色土
4 暗褐色土
5 暗褐色土
6 暗褐色土
7 極暗褐色土
8 明褐色土
9 暗褐色土
L=28.10m
D－416
D-416
D-415
D-416
1 褐色土
2 黄褐色土
3 褐色土
4 黄褐色土
5 黄褐色土
6 黄褐色土
7 褐色土
8 黄褐色土
D-415
1 黒褐色土
2 褐色土
3 黒色土
4 黄褐色土
5 黄褐色土
L=28.00m
D－430
1 褐色土
2 黄褐色土
3 暗褐色土
4 暗褐色土
5 褐色土
6 褐色土
7 暗褐色土
8 褐色土
9 黄褐色土
L=26.90m
0 1/60 2m

第 189 図　陥し穴 (4)

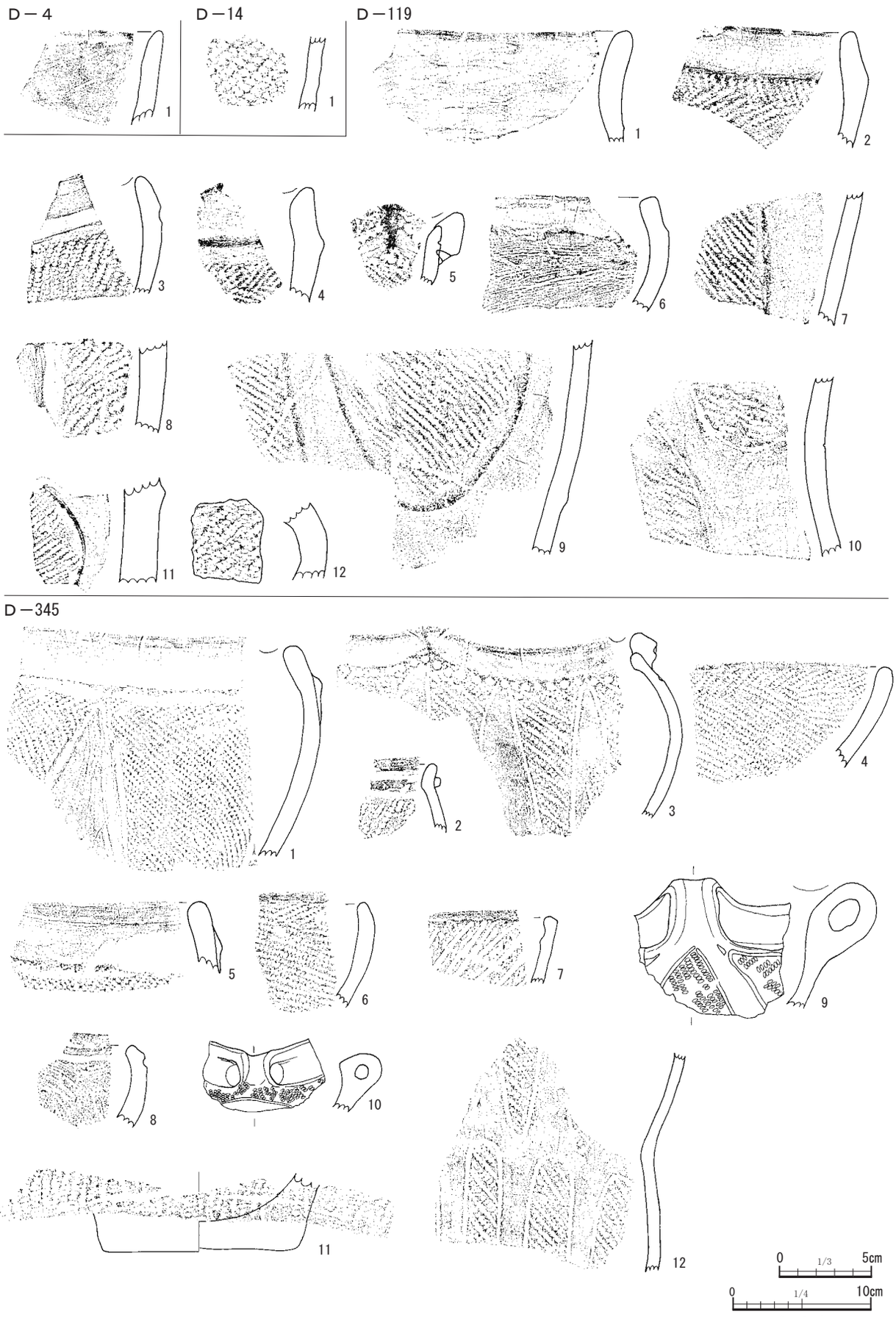


第 190 図　陥し穴 (5)

3　土坑

現地で土坑として調査されたもののうち、整理作業段階で人為的な掘り込みと判断したものについて、陥し穴・小竪穴・土坑・ピットの区分を設けた。奈良・平安時代、中・近世、近現代と判断したものは除外したが、形状や出土遺物によって時期の判断ができないものも便宜的にここに含めている。陥し穴については別に記載を行い、それ以外については、ここでまとめて取り扱う。第３表はここで扱う土坑の一覧である。小竪穴とした根拠はこの表に示した。遺構図と事実記載は、遺構番号が飛び飛びになることを避けるため、遺構の種類ごとに区分せず番号順に提示した。なお記載は、出土遺物があるものや遺構の形状・出土状況などとくに取り上げるべきものに限定した。

第 192 図は種類ごとの遺構分布である。



第 191 図　陥し穴出土遺物

(1) 小竪穴

110 基を検出した。当地域の前期後葉から晩期の比較的大きな集落遺跡では、略円筒形で底面が広く平坦な土坑が数多く見つかっている。おもに堅果類等の穴貯蔵に使われたと推定されるもので、他の土坑と区別して「小竪穴」と呼ばれている。形状や大きさは時期的な傾向があり、中期末から後期初頭では比較的小さくあまり深くないものが主体となる。ここでは径が概ね 1.0 m以上のものとしたが、0.9 m前後であっても底面が平坦で丸みをもたないものは含めている。これを下回る D-185・D-289・D-325 は柱穴等の可能性があり、土坑としたものとの区別は厳密ではない。

分布範囲 (第 192 図) は中・後期の住居跡群と一致しており (第 360 図)、その外側には皆無である。特別に集中する箇所はなく、住居跡の粗密とよく符号しているようである。小竪穴が比較的多く検出されたことは、当遺跡の性格を考える上で重要な情報となるだろう。

(2) 土坑・ピット

住居跡の柱穴程度の大きさのものを便宜的にピットとし、それ以外を (狭義の) 土坑とした。そのうち小竪穴との区別が難しいものは D-058・078・182・199・221・283・316・456・457 である。D-030 は陥し穴の可能性がある。分布は縄文時代集落の範囲全体にわたっており、個々にも、全体としても性格を明らかにできない。ピットという分類を設けたのは土坑の数から除外することが主な目的である。同様のものは現地で番号がつけられなかったものや住居跡の一部として記録されたものがあり、全体的な整合性はとっていない。縄文中・後期の住居跡・小竪穴の分布範囲内にほぼ収まっていることから、土坑・ピットについてもこの時期のものが多いものとみられる。分散的でとくに集中箇所は認められない。

(3) 出土状況と遺物

遺構図は掲載対象全部を 1/40 で掲載したほか、貝層や遺物出土状況の提示が別に必要と判断したものは、1/30 の図を作成した。出土遺物の属性表は付表 3 -1 ～ 5 にある。土坑出土土器の事実記載に際しては、拓影図・実測図・写真により取得できる情報については、文字での記載を行っていない。あくまで、図・写真では観察することのできない事項や、当該土器の本遺跡や地域における希少性を鑑みたところでの視点を基に、文字により記載を行っている。

遺物の時期の表現に際しては、出土土器の大半が中期後半から後期初頭にほぼ限定されることから、その内部での区分に重きを置いた。具体的には以下の 4 つに分けられる。

1 ：明らかに後期初頭のもの

2 ：一瞥して中期的な顔つきをしているが、後期初頭に下る可能性のあるもの

3 ：中期後半に属し、後期初頭に下ることのないもの

4 ：中期後半に属すると考えられるが、後期初頭に属する可能性が捨てきれないもの

しかし、中期後半加曽利 E 式系譜の土器について、破片内での情報のみをもって、後期初頭に下るか否かの判断を行い得ない状況を鑑み、また、土坑出土土器の由来に関しては、出土量の多少や覆土の由来を考えると、現状では断定し得ないと判断せざるを得ない。したがって、本報告では、上記 1 ～ 4 のうち、3・4 については敢えて区別することなく、同一の分類項目とした。

D-15(第 193 図)　剥片類 1 点が出土している。

D-23(第 193・198 図)　1 は薄手で焼成は比較的堅緻な個体で、若干の風化が認められる。安行 3a 式であろう。

D-30(第 193・198 図・図版 25)　1 ～ 3 は後期後葉の土器であろう。

D-34(第 194 図)　黒曜石の石核 1 点 (100) が出土している。

D-36(第 194・195 図・図版 25)　小竪穴の底面直上から検出面より上にかけて 60cm × 60cm、厚さ 35cm の混土貝層を形成している。イボキサゴ主体の層とハマグリ主体の層が明瞭な互層をなしており、明確な土層を挟まずに何度も廃棄されたことがわかる。底面付近はごく薄い土層があり、11 層は底面に有機質が染みついたものであろう。掲載遺物はない。

D-37(第 194・198 図)　1 は沈文系の加曽利 E 式系土器の単位部の破片で、口縁下に沈線が巡ることなく、単位下で途切れている。単位部両脇の U 字状意匠と、U 字状意匠間に円形意匠が施される個体であろう。2 は口縁端部内面が直に立ち上がる個体で、口縁下隆帯の下半側面には縄文が施される。隆帯下側面では隆帯に沿うように横位に縄文が施され、体部では縦位に間隔を置いて施されているようである。後期初頭に属する土器群である。

D-39(第 194 図)　小竪穴の覆土中に 20cm × 10cm、厚さ 10cm のごく小さなブロック状の混土貝層を形成している。3 層のなかの下部、底面よりやや上に堆積しており、イボキサゴと二枚貝を主体としていた。掲載遺物はない。

D-43(第 194 図)　土坑の覆土中に径 20cm と径 10cm の 2 つの小さなブロック状の貝層を形成している。位置や厚さは不明である。掲載遺物はない。

D-47(第 194・195・198 図・図版 25)　小竪穴の中央部、底面から検出面より上にかけて 60cm × 60cm、厚さ 40cm の比較的大きな貝層を形成している。土の混じりや主体貝により分層されている。層の違いは明瞭だが、写真をみると 2 層のイボキサゴ純貝層はレンズ状に堆積し、3 層が 2 層の脇に回り込んでいるようである。貝層最下部の 4 層は貝が少ない。

1 は口縁が肥厚・湾曲等することなく直に立ち上がる個体で、口縁無文部が途切れる単位部に、胴部の縄文が及ぶ。口縁無文部を描出する隆帯の側面に明確に縄文が施されるわけではない。2・3 は破片下端に縄文が認められる。隆帯側面部に施されたものであろう。4 は口縁下の微隆起の側面に縄文が施される。縄文の施文方向は、横位や斜位など不定方向である。全面縄文のみの半精製個体ではなく、意匠の施される精製個体の意匠部の破片の可能性もあろう。内面は横位の雑な調整である。

後期初頭に属する土器群である。

D-51(第 194・198 図)　1 は被熱によると推定される赤変がみられ、土器埋設炉ないし土器片囲炉として使われた可能性が高いが、遺構には被熱や焼土の堆積がみられず、土器の出土状況は不明であるため、土坑としておく。

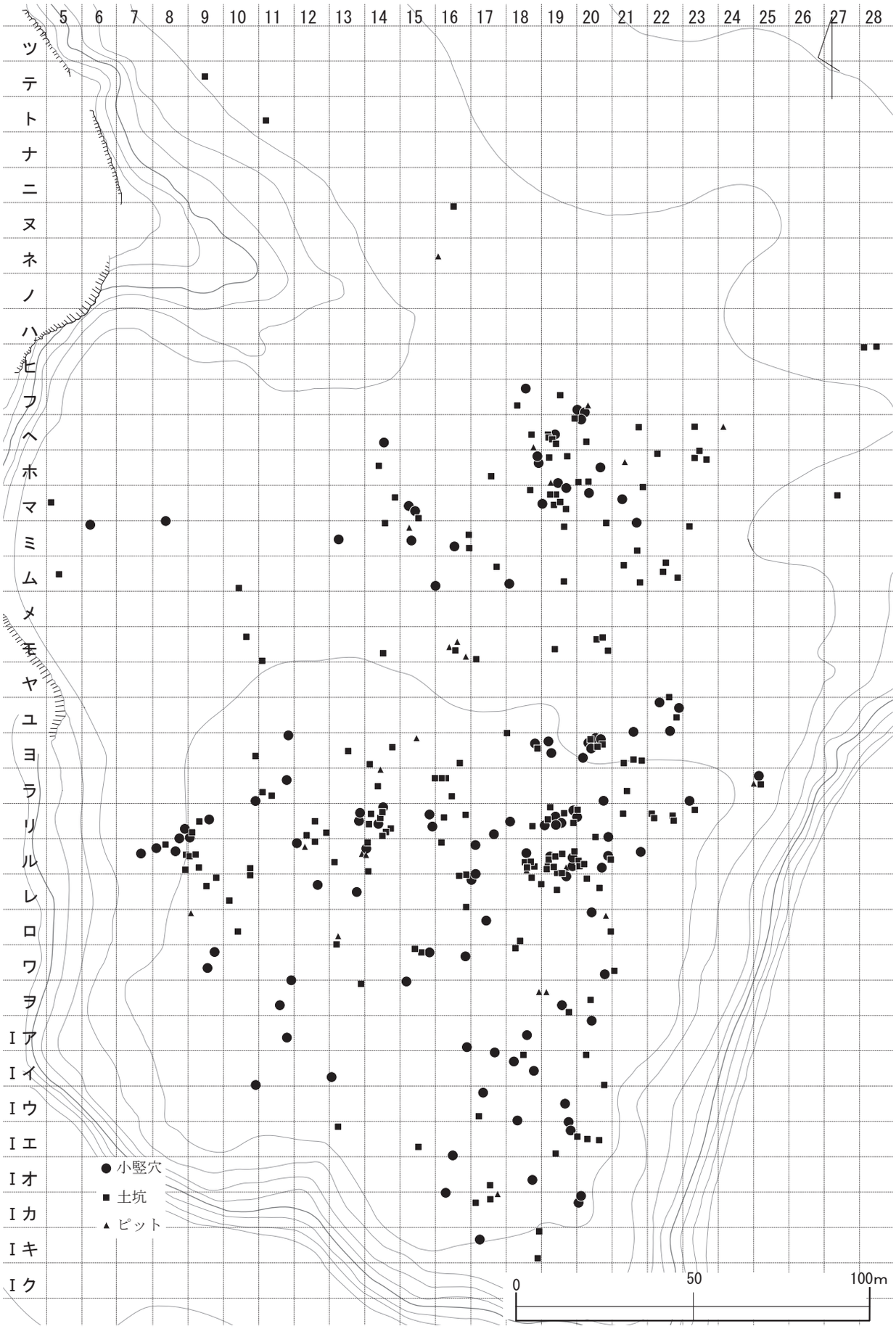
1 は粗雑な凹線による楕円区画文と、比較的丁寧な幅広の沈線による懸垂文が施される。口縁部と胴部を区画する横位の隆帯が剥落しているようである。中期後半に属する土器である。

D-54(第 194 図)　径 30cm のピットの覆土上部に径 15cm、厚さ 35cm の混貝土層を形成している。柱の抜き取り穴に入ったものであろうか。大形ハマグリ主体と記録されている。掲載遺物はない。

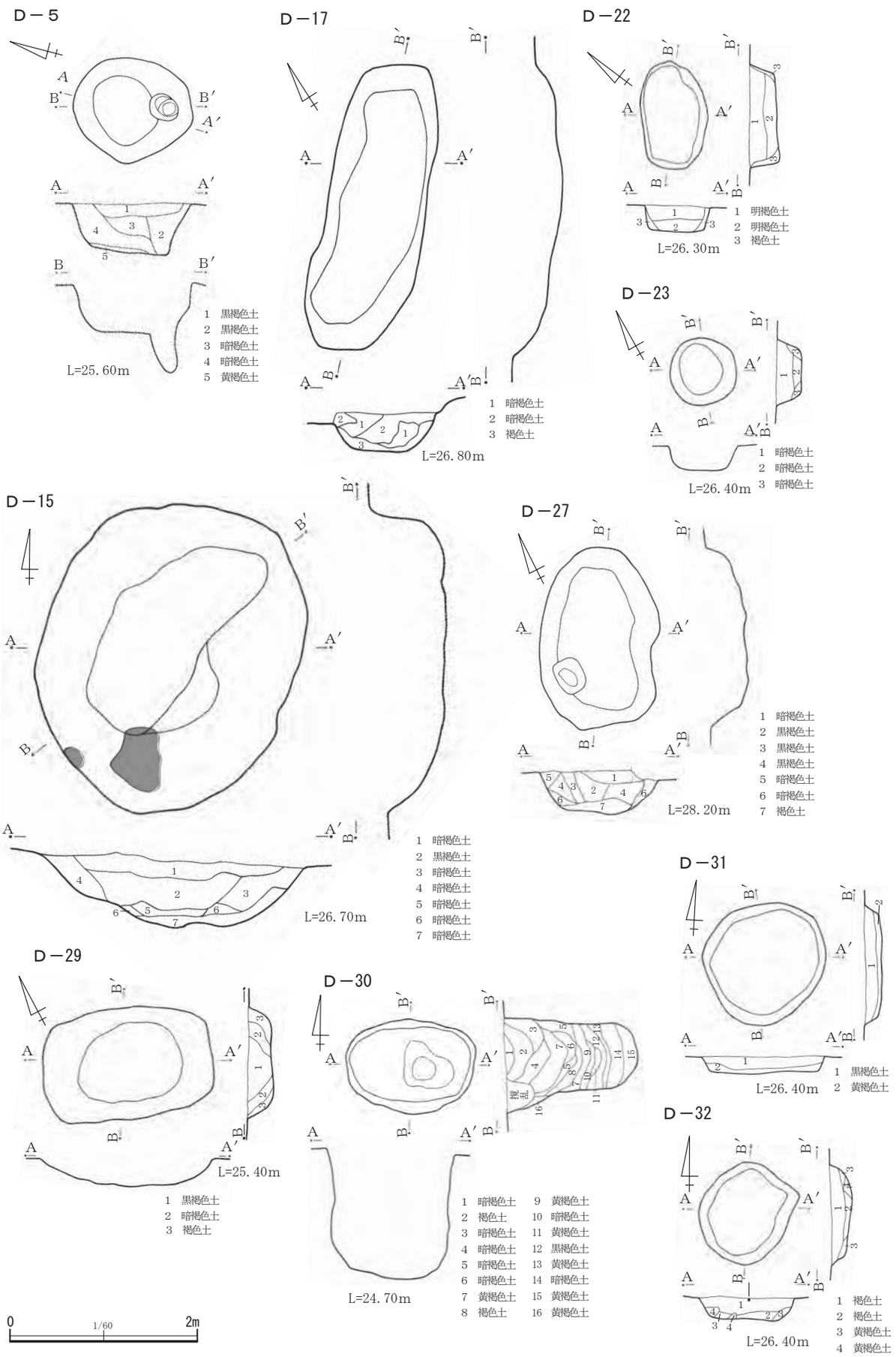
D-60(第 196・198 図)　2 は口縁内面が直に立ち上がる。焼成は堅緻で、隆帯脇には明瞭なナゾリが認められる。破片左上の穿孔は焼成後のもので、補修孔と考えられる。内面は丁寧なナゾリ調整である。後期初頭に属する土器群である。

D-61(第 196・199 図)　2 は縄文が施される環状突起の単位部下に、無文部による逆 J 字状の意匠が施される。意匠を描出する隆帯側面には縄文が施される部分がある。内面はやや雑なミガキ調整である。後期初頭に属する可能性が高い土器群である。

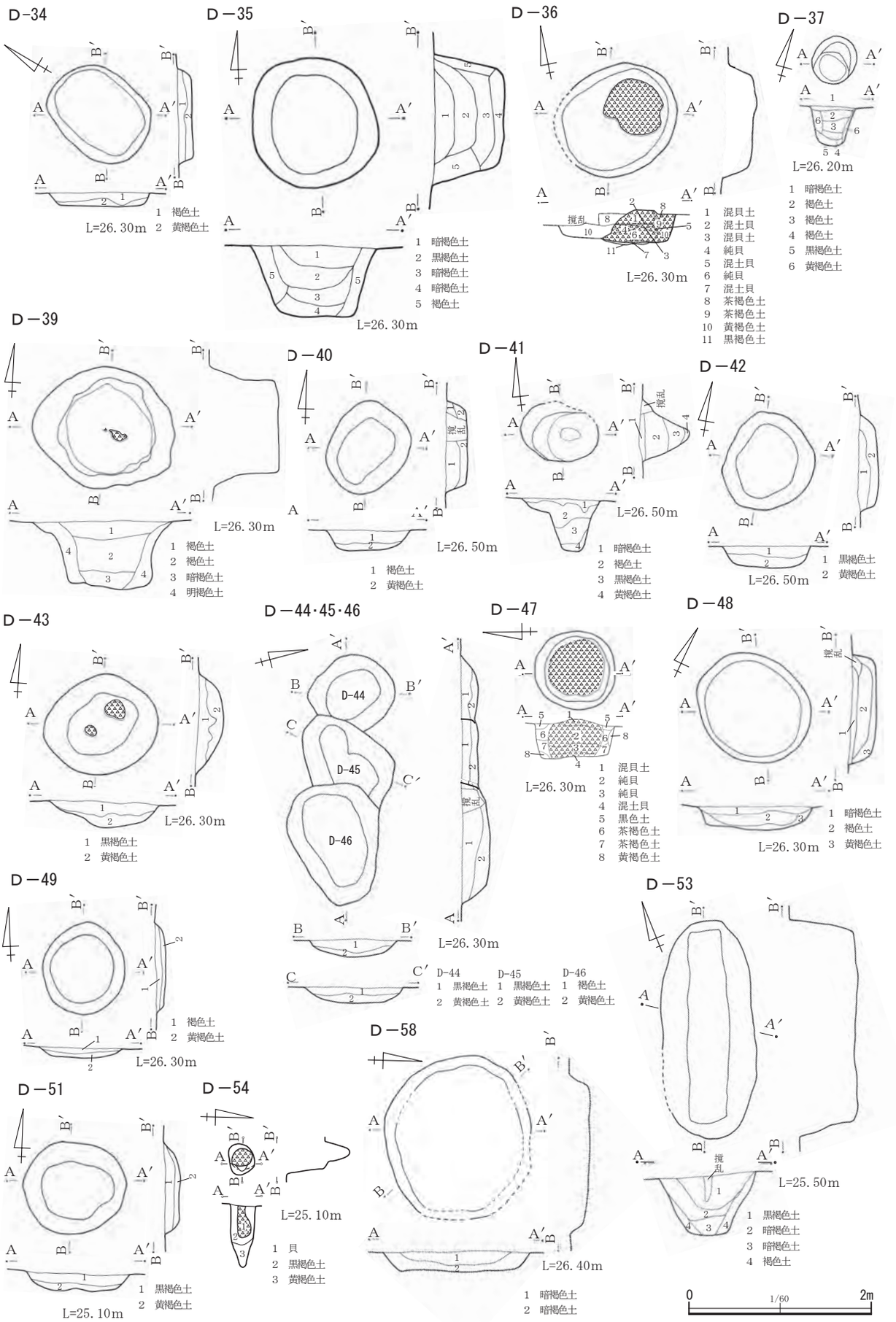
D-62(第 196・198 図)　1 は意匠の描線の隆帯側面に縄文が施されるが、口縁下に巡る隆帯下は比較的明瞭に調整され、側面に縄文は認められない。内面の湾曲は断面図よりも湾曲しているような印象を受


5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28
ツテトナニヌネノハヒフヘホマミムメモヤユヨラリルレロワヲ
ⅠアⅠイⅠウⅠエⅠオⅠカⅠキⅠク
● 小竪穴
■ 土坑
▲ ピット
0
50
100m

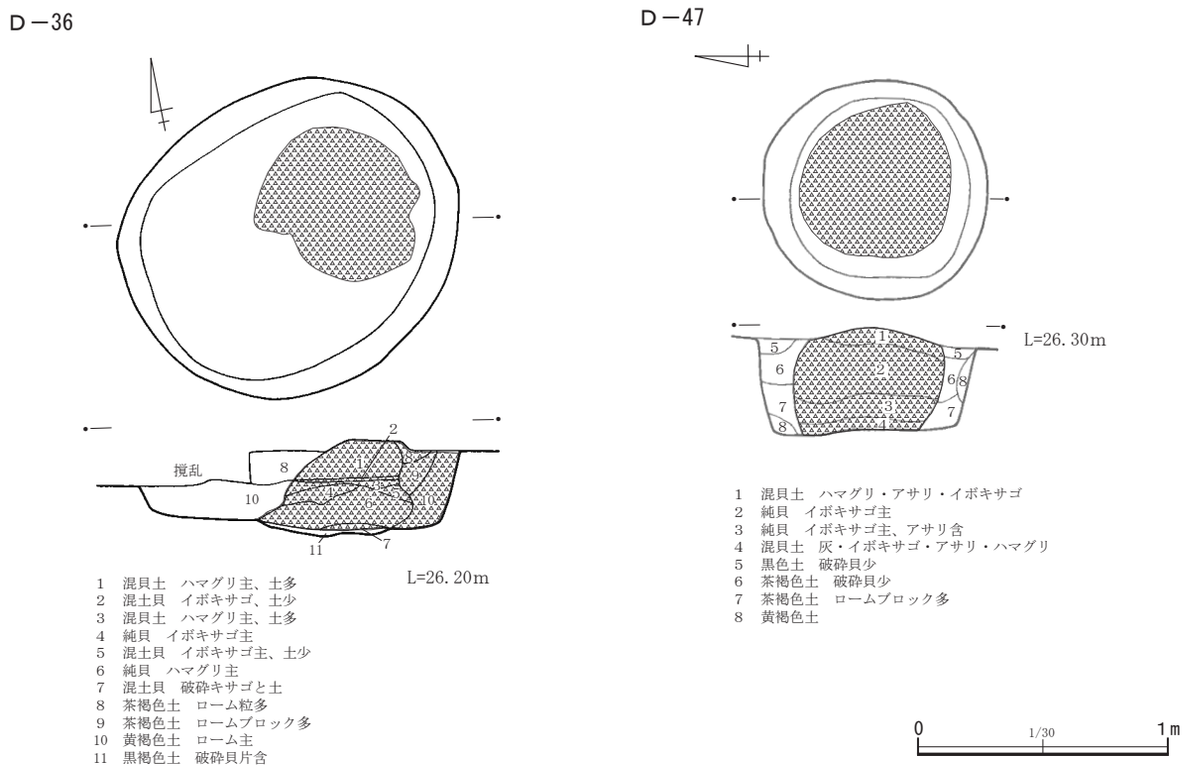
第 192 図　土坑分布図


D－5
1 黒褐色土
2 黒褐色土
3 暗褐色土
4 暗褐色土
5 黄褐色土
L=25.60m
D－17
1 暗褐色土
2 暗褐色土
3 褐色土
L=26.80m
D－22
1 明褐色土
2 明褐色土
3 褐色土
L=26.30m
D－23
1 暗褐色土
2 暗褐色土
3 暗褐色土
L=26.40m
D－15
1 暗褐色土
2 黒褐色土
3 暗褐色土
4 暗褐色土
5 暗褐色土
6 暗褐色土
7 暗褐色土
L=26.70m
D－27
1 暗褐色土
2 黒褐色土
3 黒褐色土
4 黒褐色土
5 暗褐色土
6 暗褐色土
7 褐色土
L=28.20m
D－31
1 黒褐色土
2 黄褐色土
L=26.40m
D－29
1 黒褐色土
2 暗褐色土
3 褐色土
L=25.40m
D－30
1 暗褐色土
2 褐色土
3 暗褐色土
4 暗褐色土
5 暗褐色土
6 暗褐色土
7 黄褐色土
8 褐色土
9 黄褐色土
10 暗褐色土
11 黄褐色土
12 黒褐色土
13 黄褐色土
14 暗褐色土
15 黄褐色土
16 黄褐色土
L=24.70m
D－32
1 褐色土
2 褐色土
3 黄褐色土
4 黄褐色土
L=26.40m
0 1/60 2m

第193図　土坑（1)D-5～



第 194 図　土坑 (2)D-34 ～



第 195 図　土坑 (3)D-36･D-47 貝層

ける。後期初頭に属する土器群である。

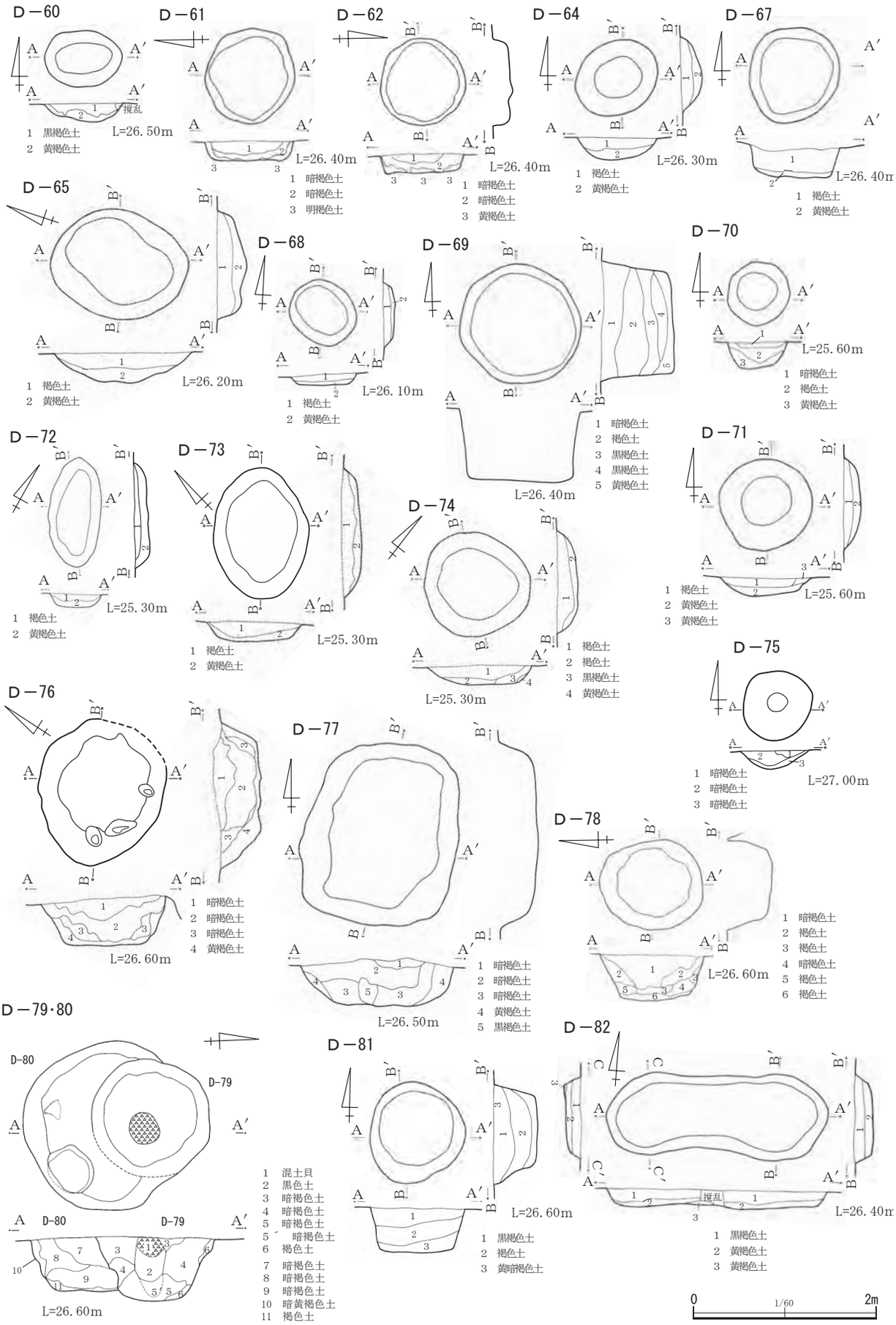
D-67(第 196・199 図)　1 は口縁下に巡る沈線下に、横位に間延びした渦巻文が連続的に施されるようである。渦巻文は口縁下の沈線を切るかたちで施される。沈線は粗雑で、意匠内が無文となる。焼成は甘い。2 は口縁下の微隆起側面に縄文が施される。3 は摩滅が進行した波頂部の破片である。4 は無節の細かい縄文が沈線施文後に施される。摩滅が進行している。5 は摩滅が進行している。後期初頭に属する土器群である。

D-69(第 196・199 図・図版 25)　図版 25 のように底面のやや上で土器片がまとまって出土している。4 は口縁端部が肥厚することなく、比較的直に立ち上がる印象がある。5 は口縁部の湾曲が強く、口縁下隆帯下は明確にナゾリ調整され、隆帯側面に縄文は施されない。9 の隆帯は断面が三角形を呈し頂部が鋭利であるが、実測図ほどの鋭利な印象はない。隆帯側面に縄文が施される。10 は隆帯側面に縄文が施される。12 は多裁竹管もしくは櫛状工具により意匠が描出されるが、厳密には縦位方向の条線による地文上に弧状もしくは渦状の意匠が描出される。

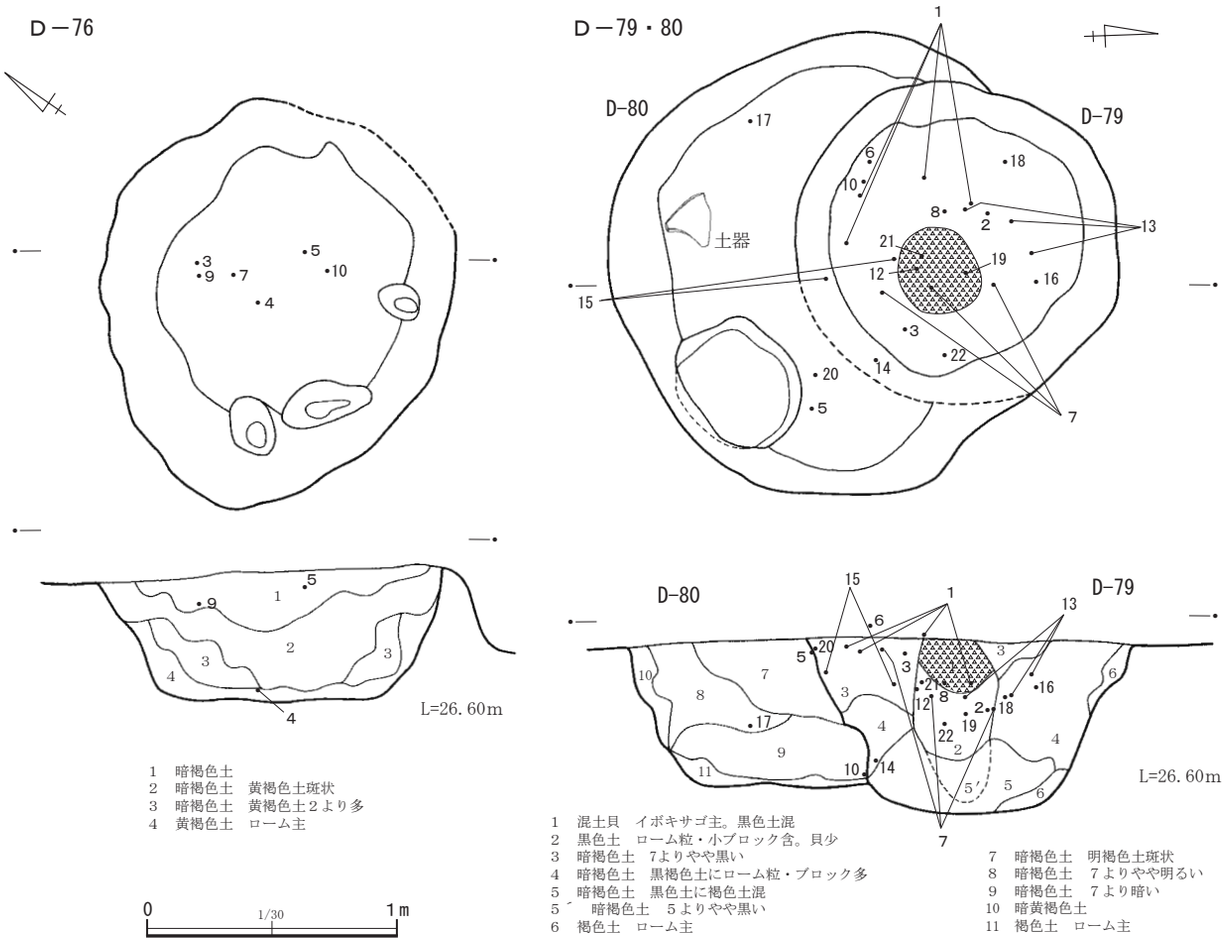
5 を除き、後期初頭に属する土器群の可能性が高い。

D-76(第 196・197・200 図)　上部がやや広がる土坑の覆土中から比較的多くの土器が出土している。時期幅があることから出土位置を確認したところ、平面的には 6 点を示すことができ、断面図に落とすことができたのは 4・5・9 の 3 点のみである。3・7・10 は検出面よりずっと上のレベルが記録されていた。このような混乱があることから、当遺構に確実に伴うのは 3 点のみである。3 は破片下端に縄文が認められ、この縄文は隆帯側面には施されない。5 は口縁内面が直に立ち上がる。隆帯側面は明瞭に調整され、縄文は施されない。6 は波頂部から小柄な渦巻文が無文部によって描出される。

1・2・7・11 は中期後半に属する土器群、3・5・6 などは加曽利 E 式系譜の土器群であるが後期



第 196 図　土坑 (4)D-60 ～



第 197 図　土坑 (5)D-76･D-79.80 遺物分布

初頭に下るものである。土器以外では磨石類 1 点 (160)、剥片類 5 点が出土している。

D-78(第 196・200 図・図版 25)　土器片錘 1 点 (第 279 図 51) が出土している。

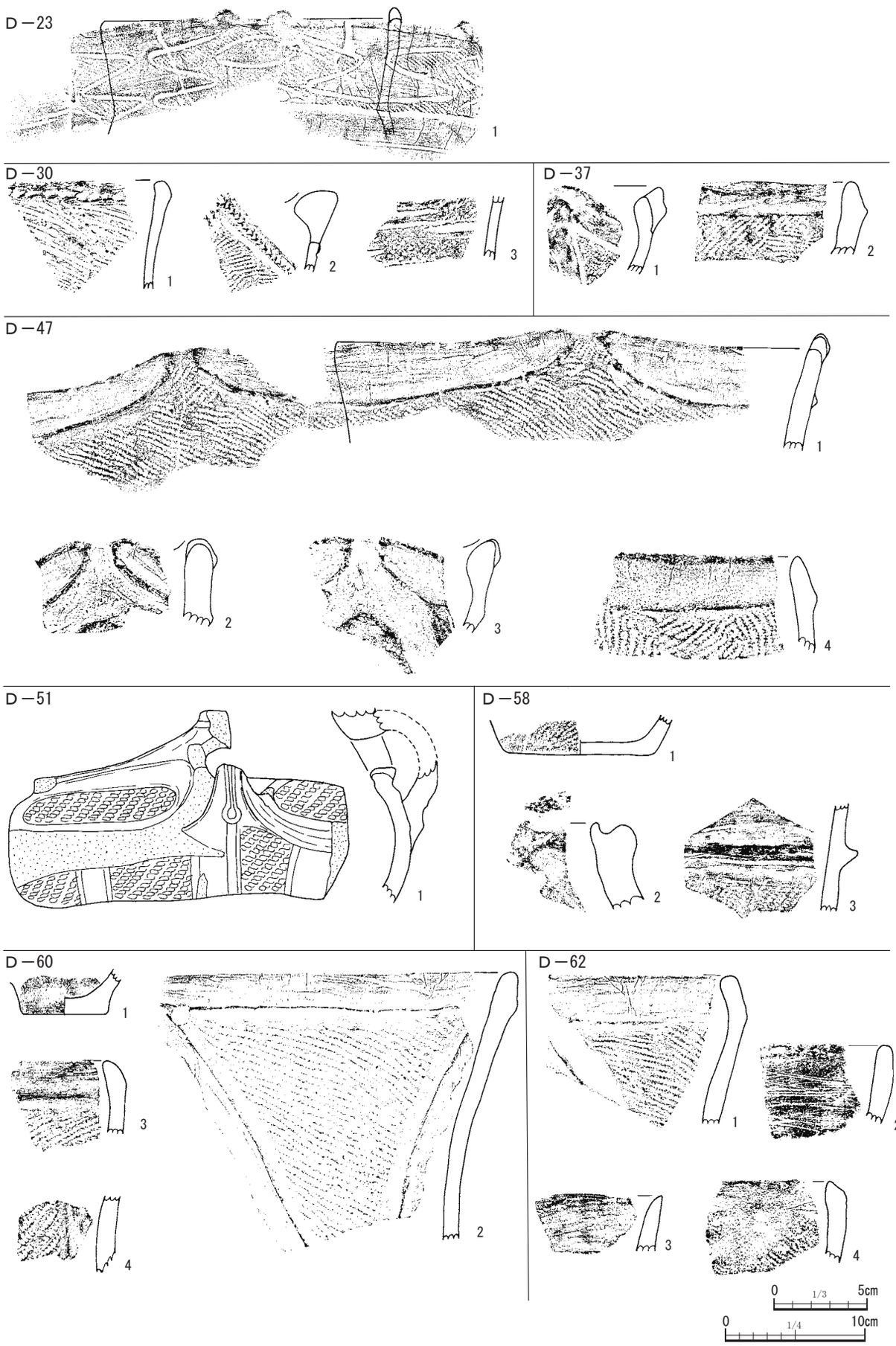
D-79･80(第 196･197･200･203 図･図版 25･47)　D-079 が新しい。覆土は中央付近がピット状になっており、覆土上部に径 20cm、厚さ 20cm のブロック状の混土貝層 (1 層) を形成している。 2 層にも少量の貝が混じる。土器の大半は D-79 の貝層下の 2・3 層付近から出土している。検出面付近出土を除くと、D-79 出土は 1 ～ 3 ・ 7 ・ 8 ・ 10・12 ～ 16・18・19・21・22 である。D-80 出土は 17 である。

1 は器表面に若干の風化が認められる。口縁は比較的直に立ち上がり、隆帯側面に縄文が施される。 3 は器表面に若干の風化が認められる。器面の軟らかい段階で沈線が施される。主文様は紡錘状の意匠であろうか。 6 は口縁端部無文化を作出する隆帯は、以下の意匠を描出する隆帯よりも高い。隆帯側面には縄文が施される。 7 は風化が進行している。20 は破片内では無文部が認められない。器面が比較的軟らかい段階で沈線が施される。21 は器面が比較的軟らかい段階で破片左上と右上に沈線が施されている。

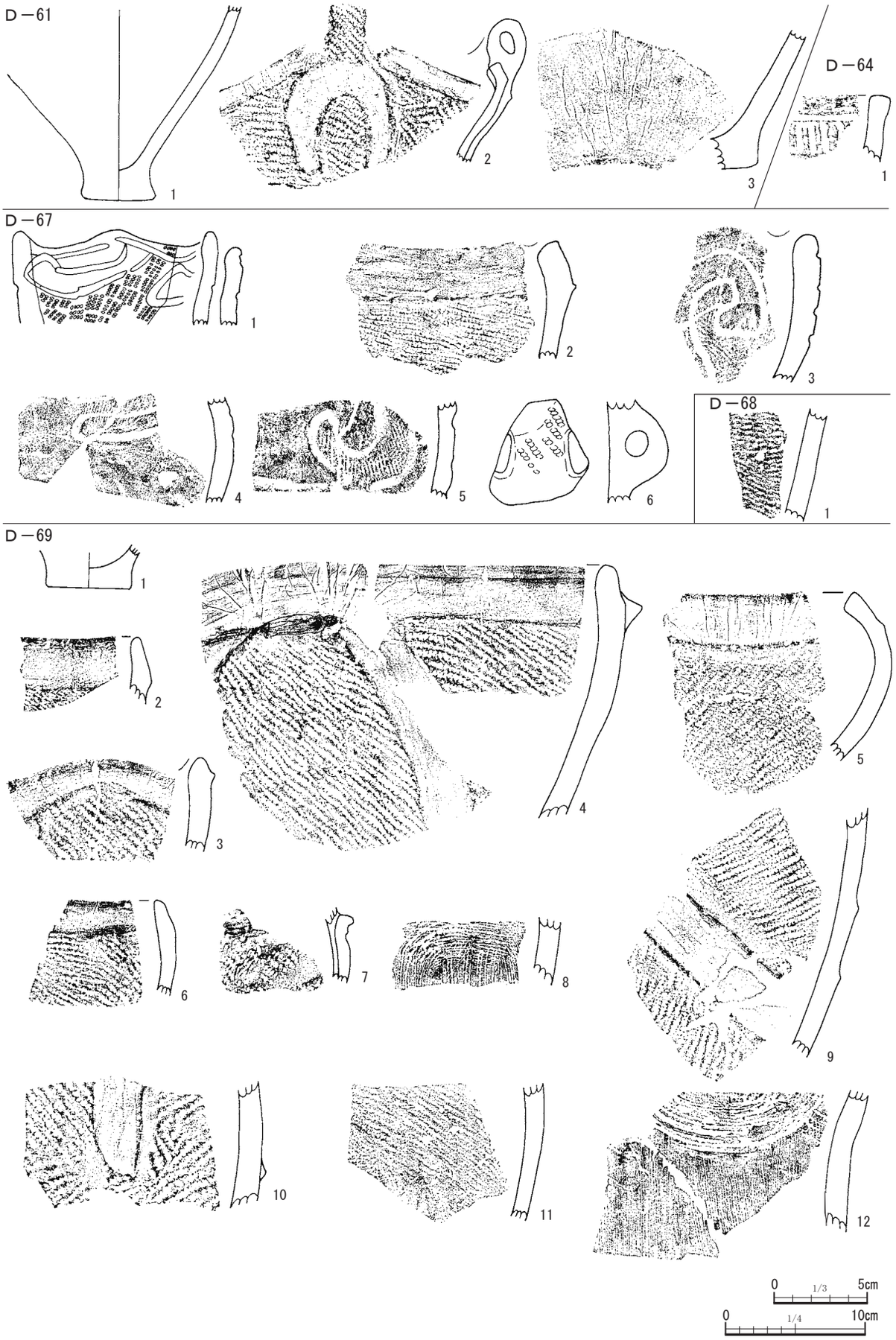
1 ～ 4 ・ 6 ・16・17・20・21 は後期初頭に属する土器群で、それ以外の多くは中期後半に属する土器群であろう。加曽利 E 式前半と称名寺式が混在しているが、掘り込みの古い D-80 からも称名寺式が出土しているため、 2 基とも称名寺式期の可能性が高い。土器以外では D-79 の掘り込みから磨製石斧 1 点 (第 282 図 19)、磨石類 2 点 (124・146) が出土している。

D-81(第 196 図・203・図版 25)　1 は微隆起側面に縄文が施され、無文部の調整はやや粗い。風化が若干進行している。後期初頭に属する土器である。

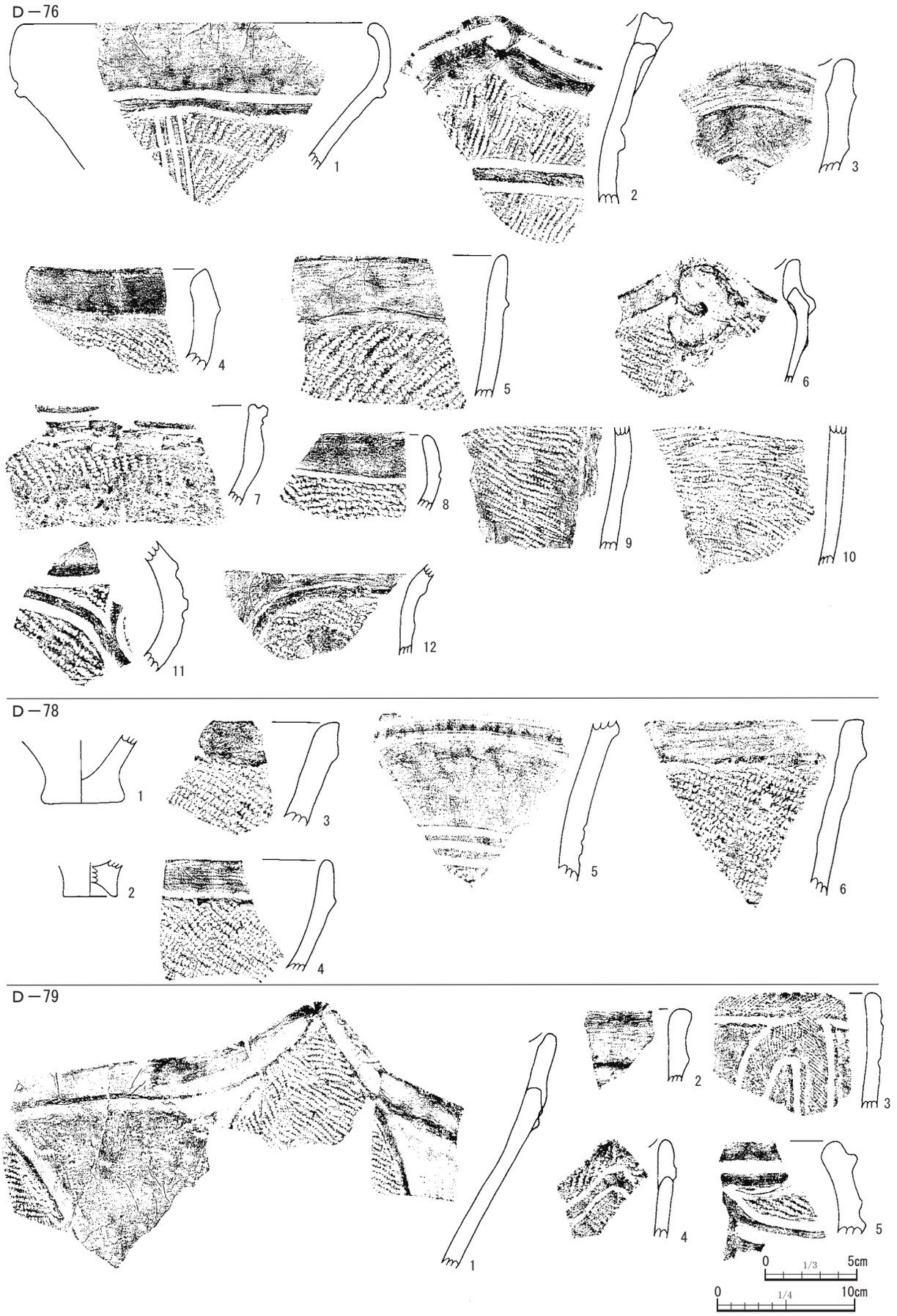
D-88(第 201・202・203 図・図版 25)　小竪穴中央の覆土下層と中層に径 40cm、厚さ 10cm のブロッ



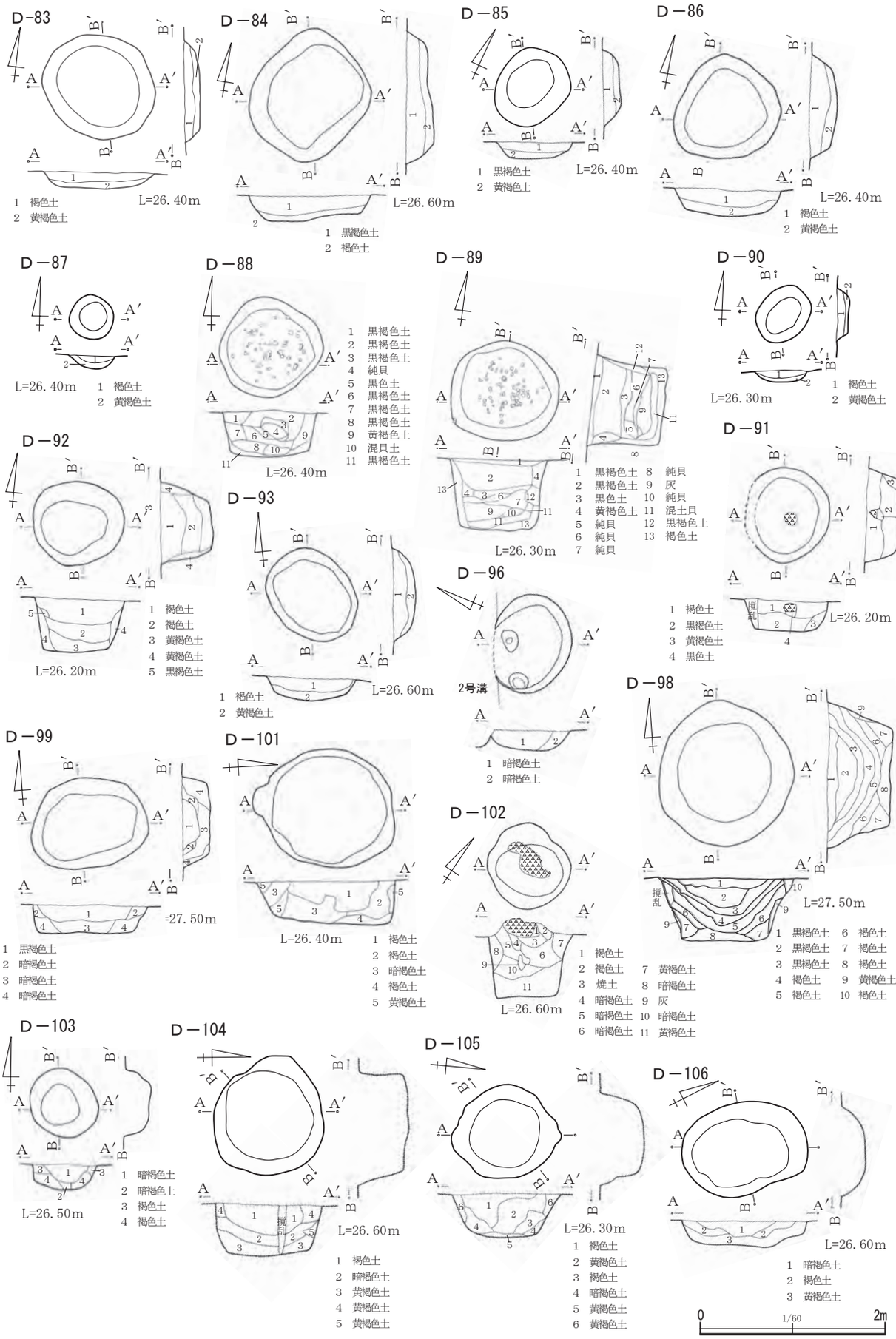
第 198 図　土坑 (6) 土器 D-23 ～



第 199 図　土坑 (7) 土器 D-61 ～



第 200 図　土坑 (8) 土器 D-76 ～



第 201 図　土坑 (9)D-83 ～

ク状の貝層を２か所で形成している。D-089 に隣接するが貝層は規模が小さく、土器は小片が点在する状況である。覆土上部の上部貝層 (４層) はイボキサゴ主体で上下にアサリの集中する部分がある。下部貝層は (10 層) は底面直上でハマグリ主体の混土貝層である。土器は上部貝層の上部から貝層付近に多かった。１は上部貝層に伴う。２～４は貝層上の覆土出土である。

２は口縁下の沈線が器面の軟らかい段階で施され、粘土がはみ出る。破片中央上部の斜方向のキズは焼成前のものである。破片右端の沈線は、口縁下の横位の意匠の沈線施文後に施される。４は口縁端部に縄文帯が巡る。以下は横位に幅広の無文部が巡るが、これはナデ等の調整により意図的に描出されたものである。縦位方向の隆帯はやや粗雑で、側面に縄文が施される。口唇部は明瞭に面取りされる。５は隆帯側面に縄文が施される。後期初頭に属する土器群である。

D-89(第 201・202 ～ 204 図・図版 25)　小竪穴の覆土下部に 70cm × 70cm、厚さ 35cm の比較的大きな貝層を形成しており、多量の土器を伴っている。貝層は覆土下層に形成され、イボキサゴ主体層・ハマグリ主体層、灰層が土層を挟まずに重なっている。土器は灰層付近から検出面までばらついていた。５は貝層下、３は灰層中、11 は貝層上部から、４・６～８・10・12・13 は覆土上層から出土している。

１は粗い削り調整の個体に雑な沈線が施される。４は上下２段の渦巻意匠による縦位橋状把手で、渦巻意匠の中心部は穿孔されない。縄文部は微隆起によって描出され、微隆起側面に縄文が施される。堅緻な焼成で、調整はよく研磨される。内面にも渦巻がひとつ施される。５は隆帯側面に縄文が施される。６は隆帯側面に縄文が施されるが、軽易なナデ調整によって消される。11 は微隆起側面に縄文が施される。12 は器面の軟らかい段階で無文地に沈線が施され、粘土が沈線両脇にはみ出る。14 は４に比べ焼成は堅緻ではなく、器表面の調整もやや雑である。後期初頭に属する土器群である。

D-91(第 201・204 図・図版 25・26)　小竪穴の中央覆土中に径 10cm、厚さ 10cm のごく小さな貝層を形成している。アサリ主体という記録がある。貝層下の４層にも破砕貝が混じる。貝層の平面図をみると２層・３層の中心には貝層の空白がある。柱状のものが存在したか、撹乱であるか判然としない。

１は沈線による懸垂状の意匠の下端部であろうか。雑な沈線が２本認められる。２はやや風化が進行し縄文の有無が判断できない。１は後期初頭に属する土器である。

D-98(第 201・204 図・図版 26)　１は隆帯上面と側面に雑な刻みが施される。平行する雑な沈線間には刻みが施されるところと施されないところがある。破片左上には円形意匠が施される。破片右端の平行沈線は懸垂する。小径の小形の個体で、焼成はやや甘い。２は波頂部の破片で縄文は認められない。口縁端部は丁寧ナデ、以下は雑なナデ調整で、両者は明瞭に区別できる。全点に金雲母の混入が認められる。

中期中葉に属する土器群である。

D-101(第 201 図・図版 26)　磨石類 1 点 (60) が出土している。

D-102(第 201・204 図)　小竪穴の覆土上部に 55cm × 20cm、厚さ 15cm のブロック状の貝層を形成している。貝層下の３層は焼土の堆積、９層は灰の堆積層である。貝層・焼土層の部分から多くの土器が出土している。

１はミニチュアの土器で、調整・焼成ともに甘い。逆Ｕ字状の懸垂文内には縄文が施される。２は隆帯の断面が三角形を呈し、頂部がとがる。口唇面は面取りされる。３は隆帯側面に縄文が施される。４は口唇部が面取りされる。６は把手で、前面及び端部の面取りされる部分にも縄文が施される。８は隆帯側面に縄文が施される。10 は縦位の橋状把手で、把手基部にも縄文が施される。把手を螺旋状に巻くように、微隆起による無文部が描出される。11 は口唇部が面取りされる。

２・５は中期後半に属する可能性の高い土器群、３・４・８は後期初頭に属する土器群である。

D-104(第 201・209 図・図版 26)　1 は口縁下の隆帯上面に縄文が施される。隆帯下は調整により帯状に無文となる。2 は沈線がやや浅い。

D-116(第 205 図)　黒曜石の石核 1 点 (109) が出土している。

D-117(第 209 図)　土器口縁部 1 点を掲出したが実物が見当たらない。

D-121(第 205・206 図)　小竪穴の覆土のほぼ全体、床面直上に 90cm × 80cm、厚さ 40cm の大きな貝層を形成している。2・3 層はイボキサゴの純貝層で、3 層は破砕された貝殻が凝着して塊状を呈していた。5 層はイボキサゴ主体の混土貝層である。掲載遺物はない。

D-123(第 205 図)　小竪穴の覆土下層に 60cm × 50cm、厚さ 10cm の混土貝層がレンズ状に堆積している。イボキサゴ主体に二枚貝を多く含む。掲載遺物はない。

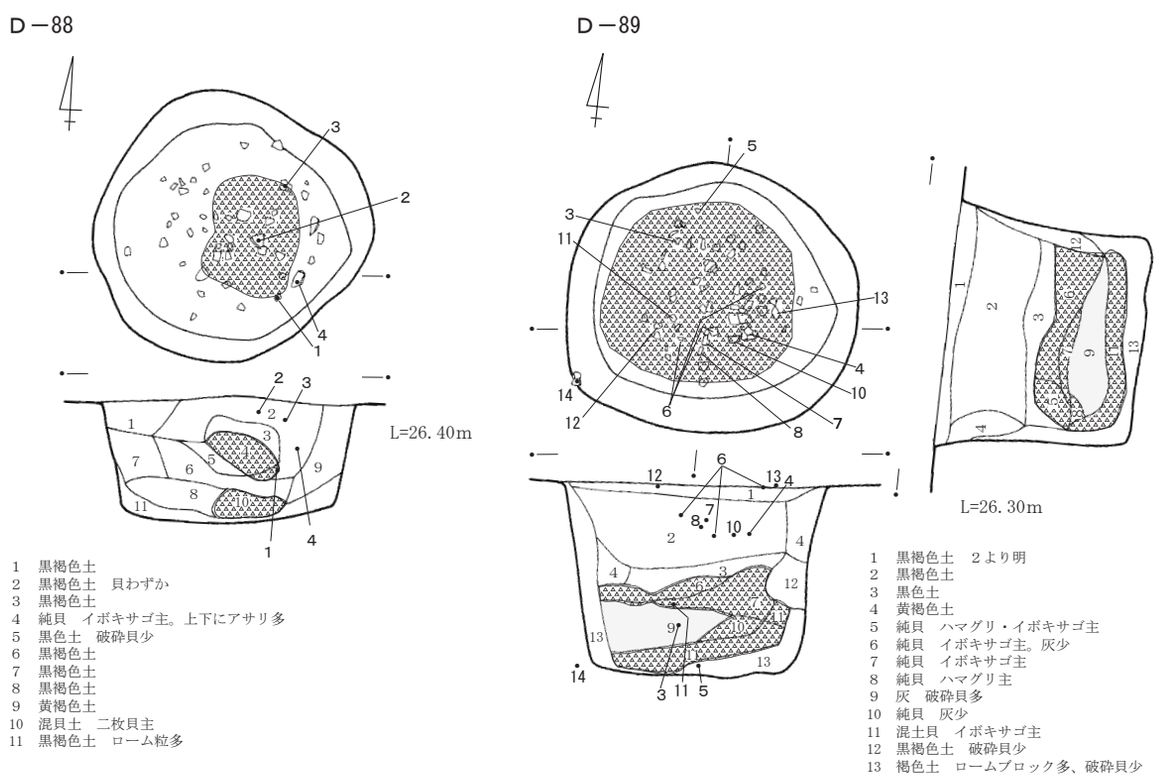
D-124(第 205 図)　磨石類 1 点 (第 286 図 11) が出土している。整理作業終盤に近世以降のものとみられる鉄片が多量に出土していることが判明した。近世以降の土坑である。

D-141(第 207・209 図)　土器底部 1 点を掲出した。

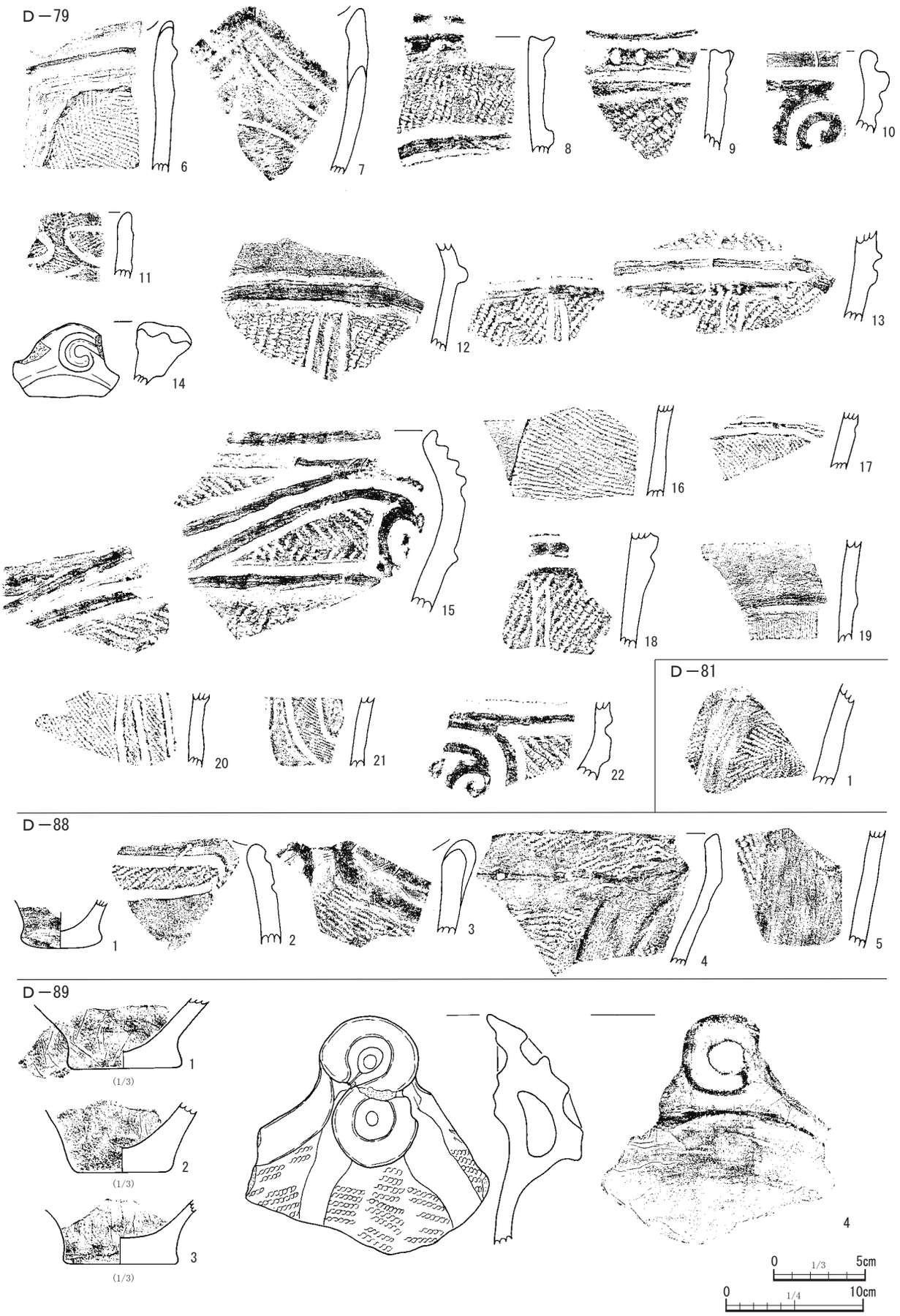
D-150(第 207・209 図)　土坑の覆土下層に 60cm × 50cm、厚さ 10cm の混土貝層がレンズ状に堆積している。東から西へやや傾斜している。二枚貝主体でローム粒が混じる。炭化物も多い。土器以外では剥片類 1 点が出土している。

D-154(第 207・209 図・図版 26)　1 は器面の軟らかい段階で縄文が施される。3 は破片左下の破片の輪郭に沿うように沈線が施される。4 は口縁内面が直に立ち上がり、隆帯の側面には縄文が施される。5 は隆帯の側面には縄文が施される。

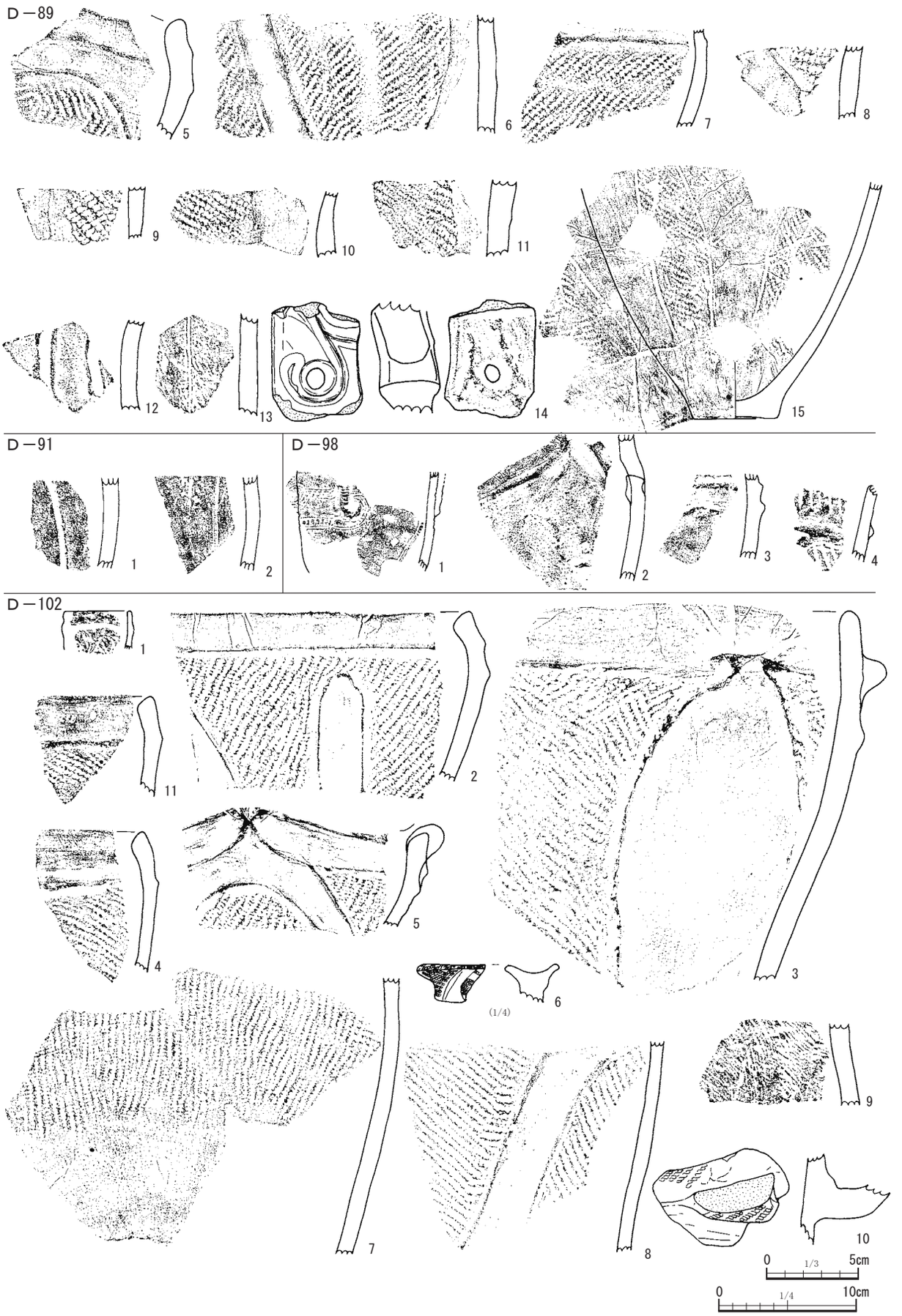
D-156(第 207・209 図・図版 26)　小竪穴の底面直上に 100cm × 75cm、厚さ 20cm の比較的大きな混土貝層を形成している。イボキサゴ主体に二枚貝が混じる。褐色土と炭化物も混じる。



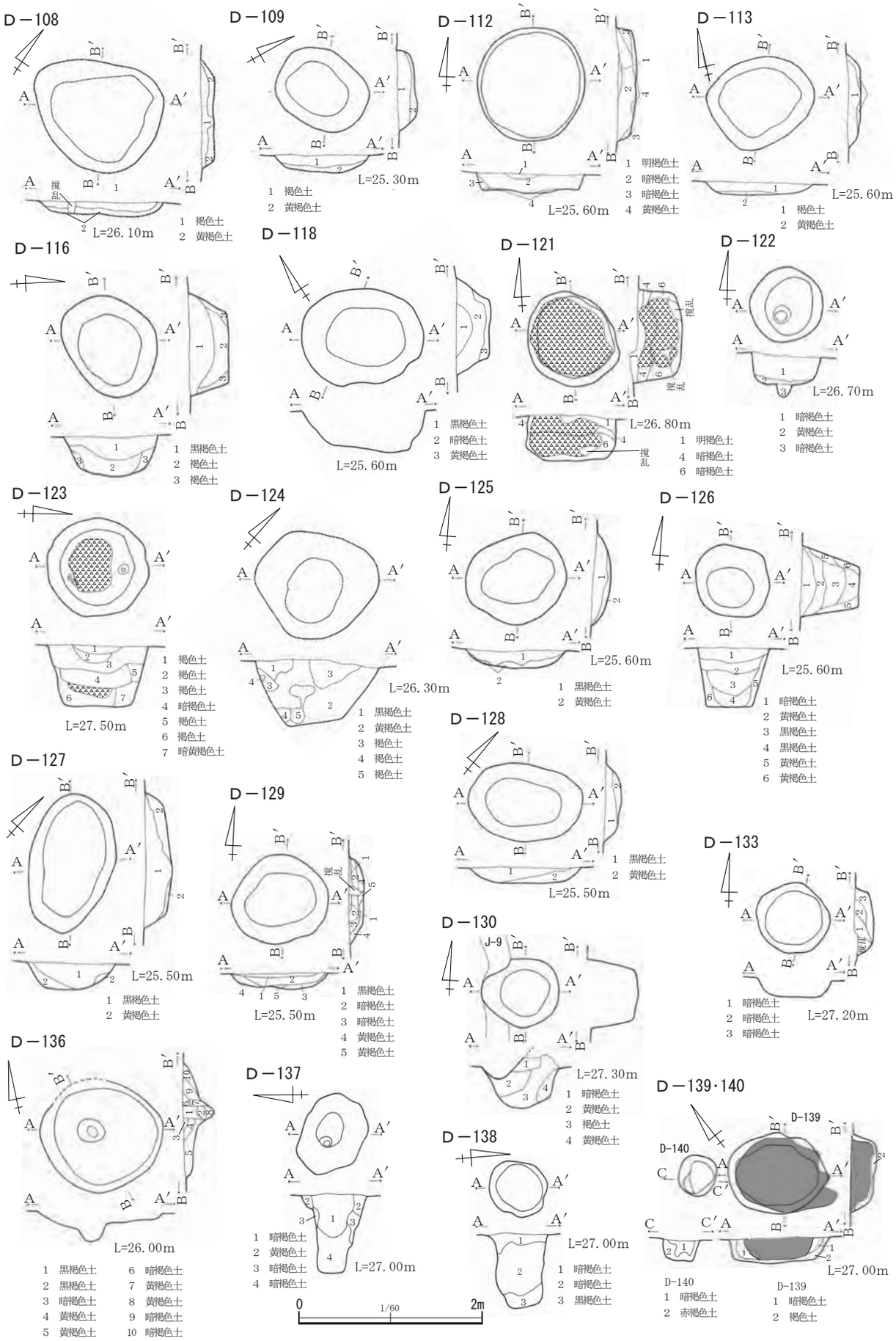
第 202 図　土坑 (10)D-88・D-89 貝層・遺物分布



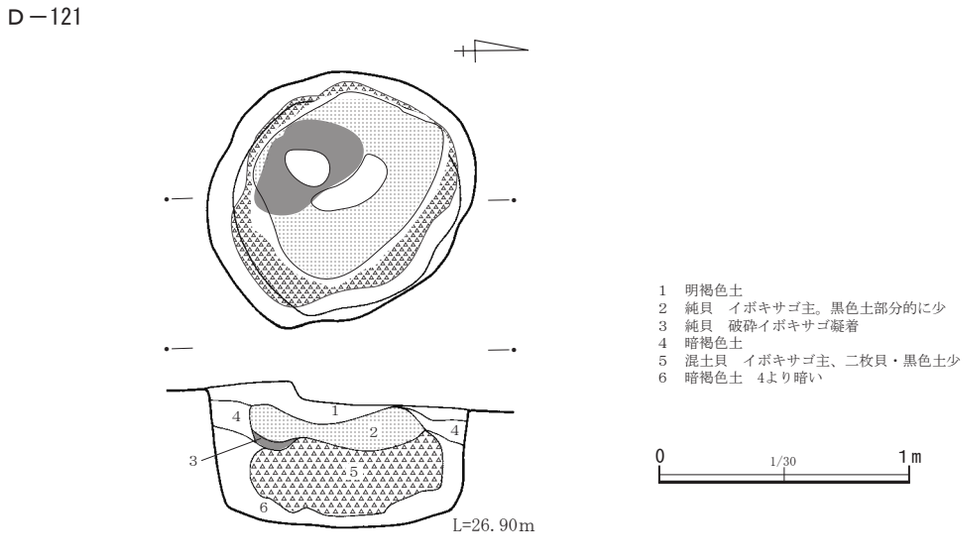
第 203 図　土坑 (11) 土器 D-79 ～



第 204 図　土坑 (12) 土器 D-89 ～



第 205 図　土坑 (13)D-108 ～



第 206 図　土坑 (14)D-121 貝層

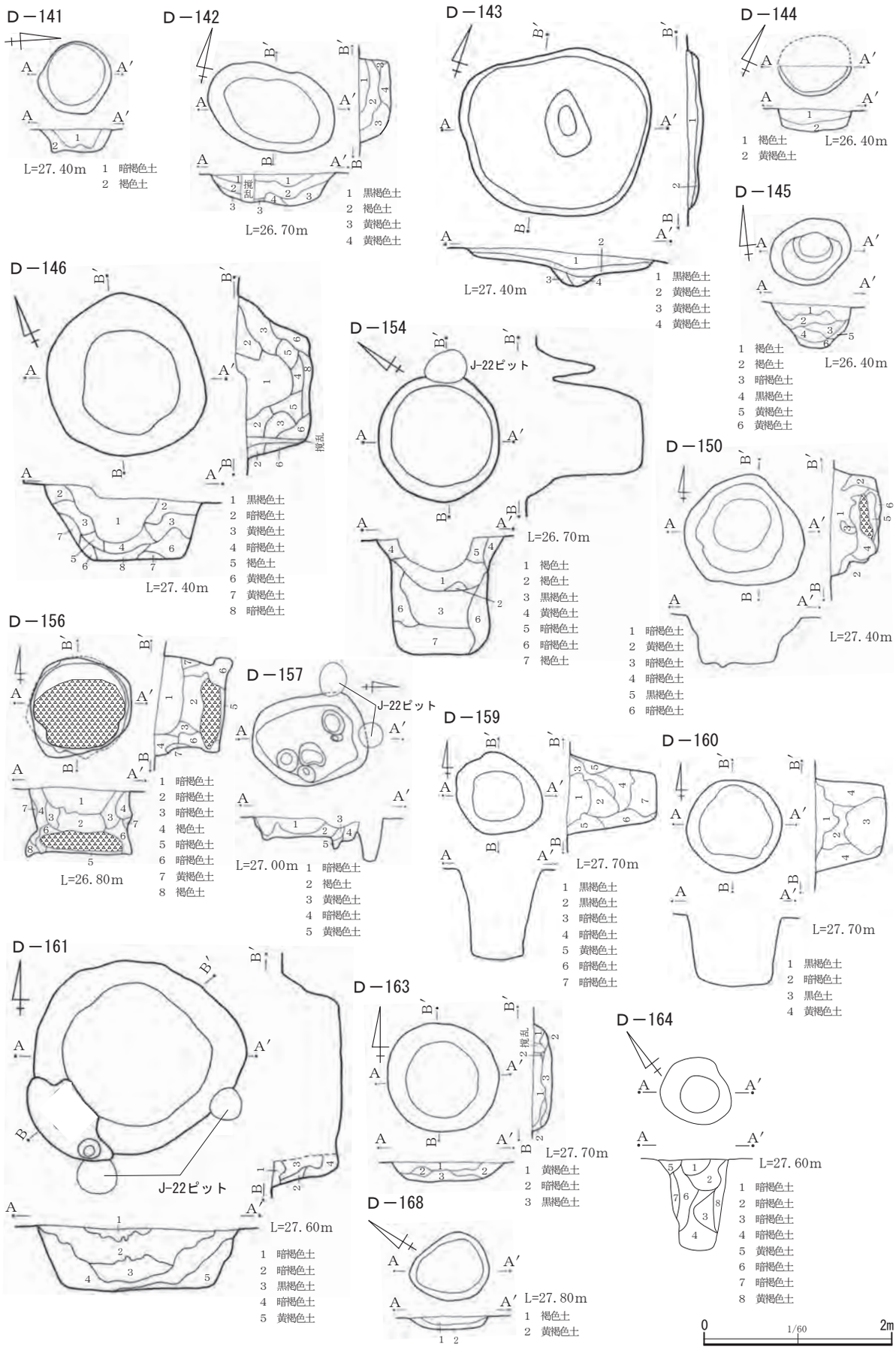
D-157(第 207・209 図)　1 は早期後半の撚糸文期の破片である。本来は遺構外とすべきものである。

D-161(第 207・209 図)　2 は隆帯下に明瞭なナゾリが認められる。3 は隆帯側面に縄文が施され、隆帯上側の無文部には浅い凹線風の効果が認められるが、調整の可能性もある。5・6 は無文部と条線施文部の間に明瞭な区画等は認められない。後期初頭に属する可能性がある土器群である。土器以外では石棒 1 点 (第 296 図 12)、剥片類 9 点が出土している。

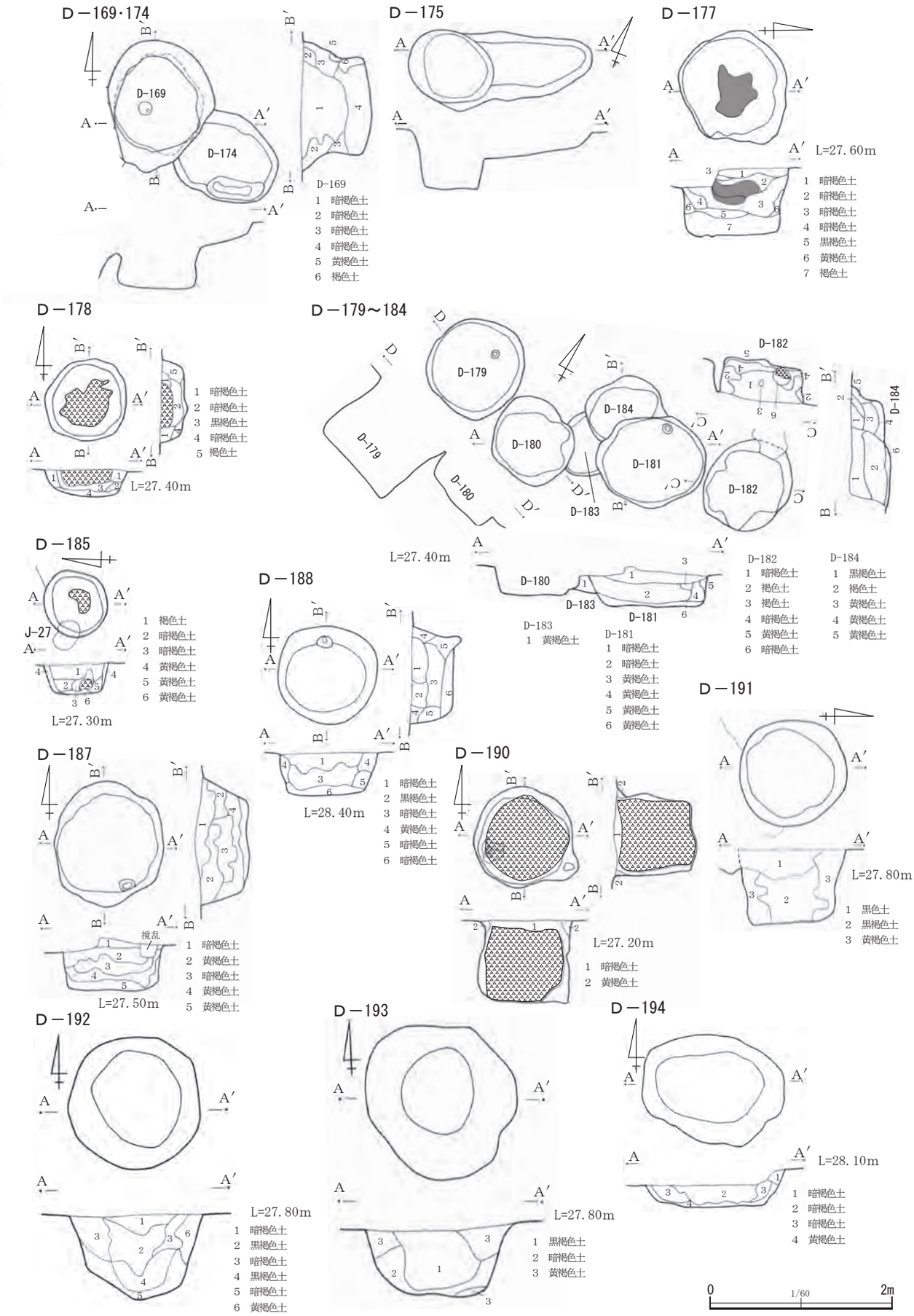
D-169(第 208・209 図)　2 は口唇部が面取りされ平坦化し、棒状工具による調整により凹線が施されているような様相を呈している。意図的な凹線の可能性も捨てきれない。微隆起側面には縄文が施される。3 は隆帯側面に縄文が施される。後期初頭の土器群である。土器以外では剥片類 2 点が出土している。

D-178(第 208 図)　小竪穴の覆土上部から検出面に径 50cm、厚さ 20cm の混土貝層ないし混貝土層を形成している。二枚貝主体にイボキサゴが混じる。貝が集中する場所と黒褐色土に貝が若干混じる場所があるが明確に分層できない。掲載遺物はない。

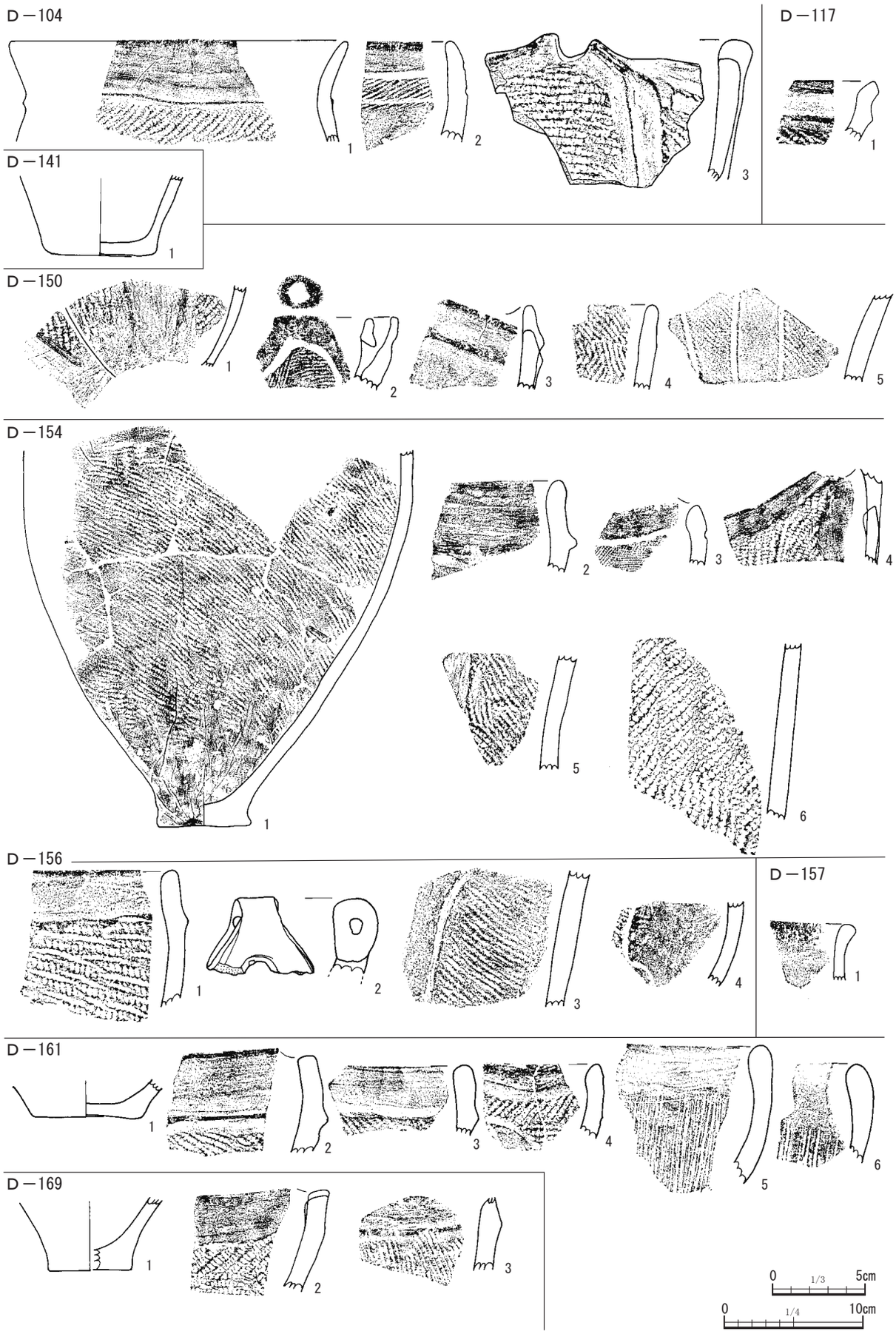
D-179(第 208・210 図・図版 26・47・48)　小竪穴の覆土中に貝層を形成していたが位置は不明である。現地の観察によればマテガイが含まれていた。1 は口縁無文部が単位部でせり上がる 4 単位の個体で、加曽利 E 式系土器の系譜にある様相を示す。無文部を作出する無文部下の隆帯側面には縄文が施される。ただし、単位部の正面観は、西日本の当該期の深鉢 C 類の形骸化した様相を彷彿とさせるような印象もある。器形は胴部上半の括れ部以上から口縁に向けて外反し、口縁端部は内外面共に直に立ち上がるもので、称名寺式土器の系譜にある様相を示す。施文は、個体のほぼ全面に縄文を施した後に、比較的器面の軟らかい段階で、先端がやや鋭利な棒状工具で、様々な意匠を単沈線により粗雑に施す。意匠は、単位部である波頂部下では、①楕円の意匠を配し、意匠を下から囲うように J 字状意匠が施され、この J 字を描いた描線は個体下半に向けて垂下する部分と、②波頂部下の両脇に U 字状もしくは舌状の意匠を配し、この意匠を描く描線は波底部側で口縁下に接続し閉じるのではなく、懸垂する。この 2 つの U 字状もしくは舌状の意匠下に、2 単位一対に連携するような逆 U 字状意匠が懸垂する。この懸垂文下には、J 字状もしくは渦巻状の閉じた意匠が施される部分がある。この観察通り、加曽利 E 式系譜と称名寺系譜の意匠が施されている印象がある。



第 207 図　土坑 (15)D-141 ～

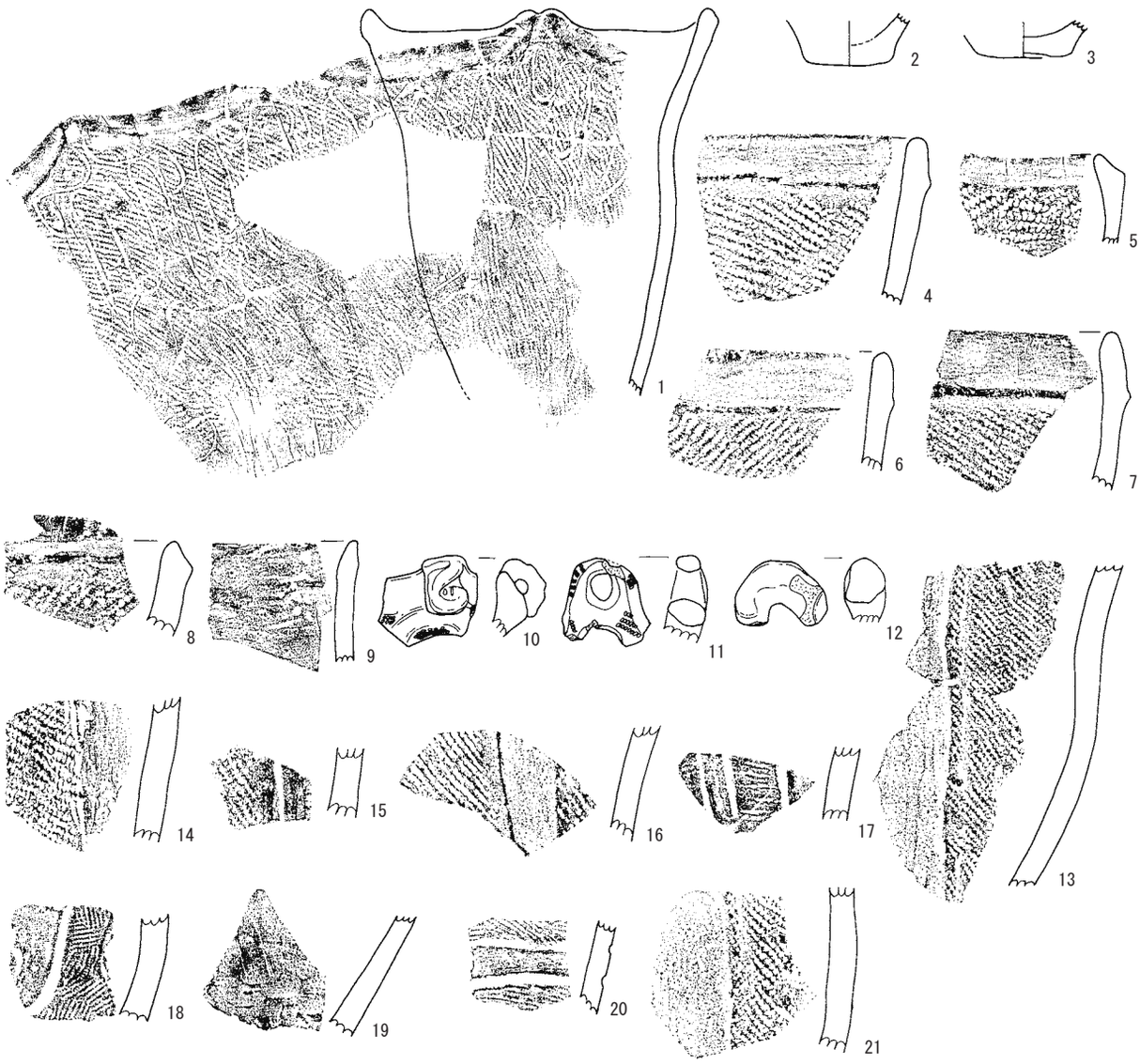


第 208 図　土坑 (16)D-169 ～

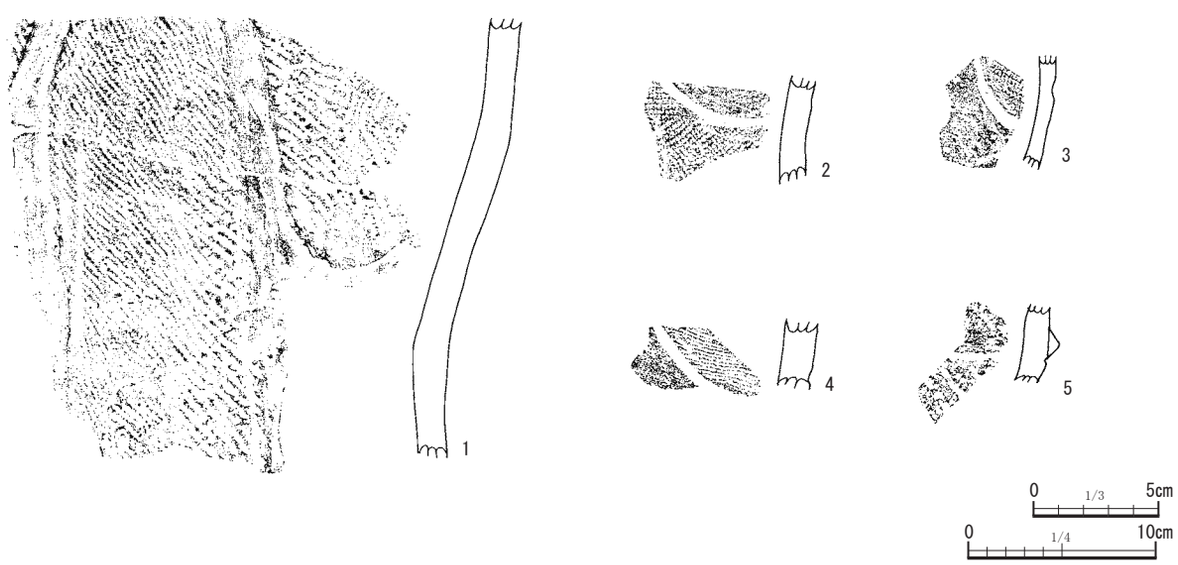


第 209 図　土坑 (17) 土器 D-104 ～

D－179



D－181



第 210 図　土坑 (18) 土器 D-179 ～

4・7は隆帯側面に縄文は施されない。6は微隆起側面に縄文が施される。7は隆帯下に明瞭なナゾリが認められる。13は隆帯正面の平坦部に縄文が施される。隆帯上全面に縄文が施され、結果として隆帯上面が平坦化する。隆帯の仕上げ及び無文部の調整は雑である。18は破片左端中央部は沈線が施される。20は平行する沈線のうち上部の沈線は、沈線内にまで縄文が施される。下部の沈線も、沈線施文後に縄文が施される。

後期初頭の土器群である。

D-181(第208・210図)　1は隆帯側面に縄文が施される。2～4は器面の比較的軟らかい段階で太い沈線により意匠が施される。5は中期中葉の破片である。土器以外では磨石類1点(102)が出土している。

D-182(第208・211図)　土坑の底面直上に径10cm、厚さ15cmの小さなブロック状の混土貝層を形成している。6層と同じ暗褐色土主体であり、この二つの層の下部に貝が集まっている状況である。

1は口縁下隆帯の下側面に縄文が施される。口縁端部の内面は肥厚することなく直に立ち上がる。2は薄手の個体で、隆帯は全体的に前面に突出する。3は器面の軟らかい段階で太い沈線を施すことにより、粘土が沈線の両脇にはみ出る。4は加曽利ＥⅡ式土器である。5は隆帯側面の一部に縄文が及ぶ部分がある。6は器面の軟らかい段階で太い沈線を施すことにより、粘土が沈線の両脇にはみ出る。無文部に及ぶ縄文が明瞭に磨り消されない部分がある。施文順序は、沈線→縄文である。7は薄手で小形の個体で、隆帯側面に縄文が施される。

4を除き、後期初頭に属する土器群である。土器以外では黒曜石の石核1点(102)が出土している。

D-185(第208・211図)　小竪穴の覆土下層に30cm×20cm、厚さ10cmの小さなブロック状の混土貝層を形成している。

1は口縁下隆帯の下側面に縄文が施される。2は隆帯両側面は調整され、縄文は認められない。無文も丁寧に調整される。3は隆帯側面に縄文が施され、意匠間の無文部の調整は雑である。4は器面の軟らかい段階で太い沈線を施すことにより、粘土が沈線の両脇にはみ出る。

後期初頭に属する土器群である。土器以外では石棒1点(第296図37)が出土している。

D-187(第208図・図版26)　剥片類1点が出土している。

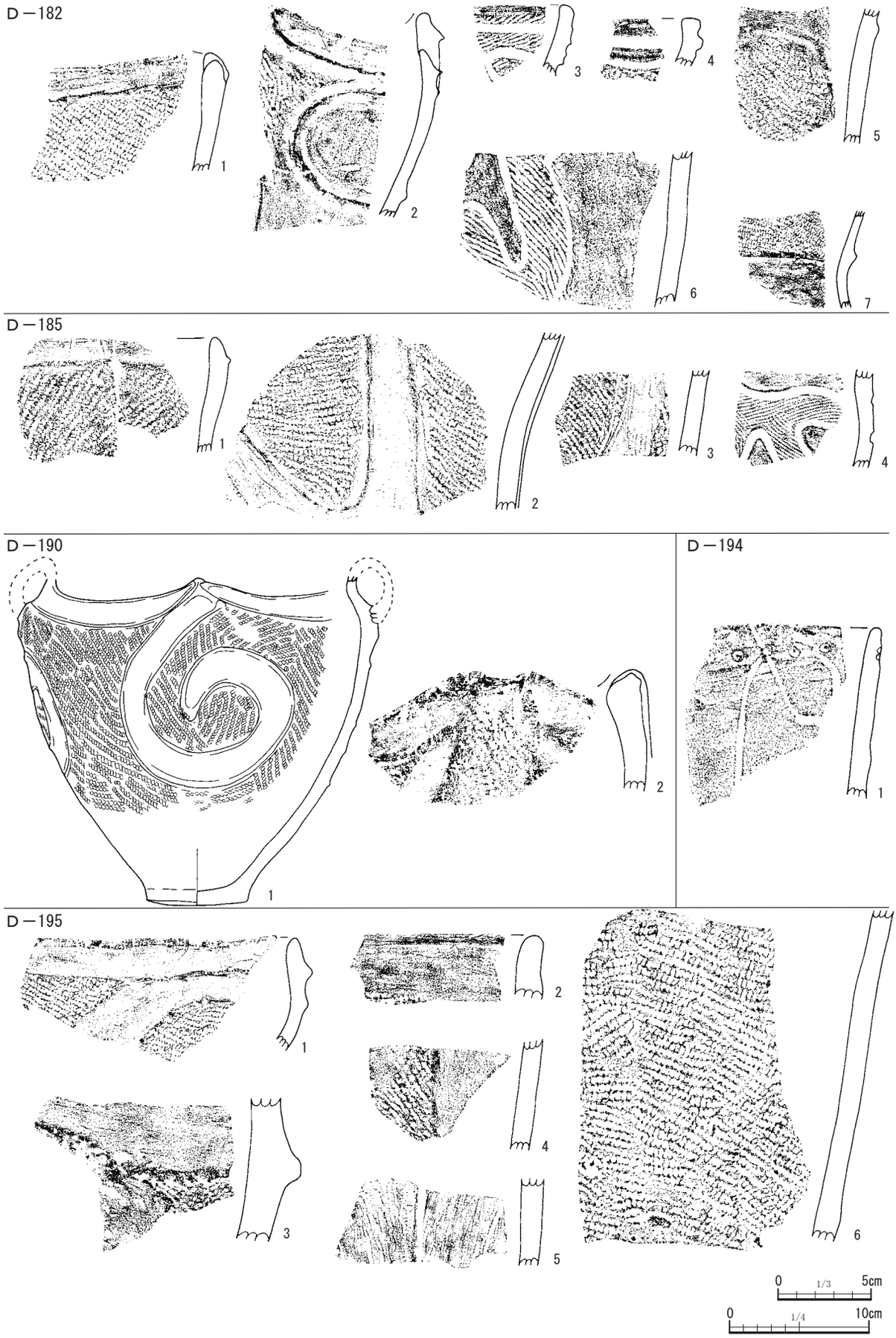
D-190(第208・211・213図・図版26・27・47)　多くの土器が出土している。出土層位は1が3層、2が2層上面であるほかは不明である。1は把手の部分を除いて完形であり、貝層上部から出土している。土器の内部にも貝殻がびっしり入っていた(図版27)。小竪穴の覆土のほとんどを埋める径90cm、厚さ80cmの大きな貝層を形成している。貝種はほとんどの層がイボキサゴ主体であり、繰り返しイボキサゴが利用・廃棄されたことを示す。水洗済みの貝殻が若干保管されていたので第5節に貝種組成と特徴を記載した。

1は4単位の波頂部から帯状の無文部で渦巻状の意匠を描出する。無文部は隆帯によるもので、隆帯側面には縄文が施される。無文部の調整はやや丁寧さに欠ける。個体内面は棒状工具で縦位に比較的丁寧に研磨される。2は摩滅の進行した破片で、波頂部両脇から帯状の無文部の意匠が施される。無文部は微隆起によって作出されているようであり、隆帯側面には縄文が施されているようである。

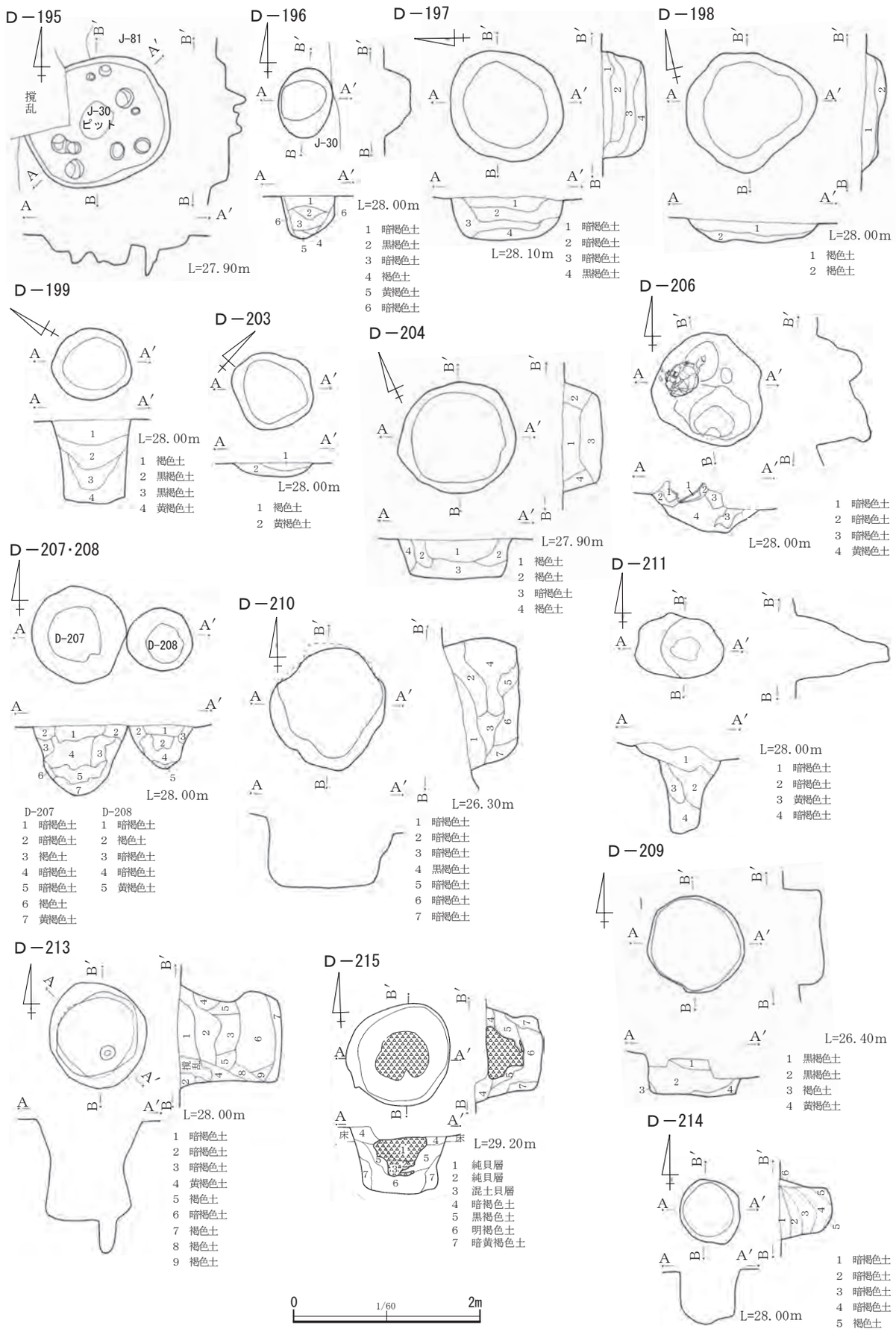
称名寺式土器は伴出していないが、後期初頭に属する土器群である。土器以外では貝刃1点(第298図1)が出土している。

D-191(第208図)　剥片類1点が出土している。

D-194(第208・211図)　1は薄手で焼成がやや甘い破片である。直に立ち上がる口縁で、口縁下に竹管による円形押捺と、体部の懸垂文が円形押捺付近で相互に連携するように施され、逆U字状の意匠を醸

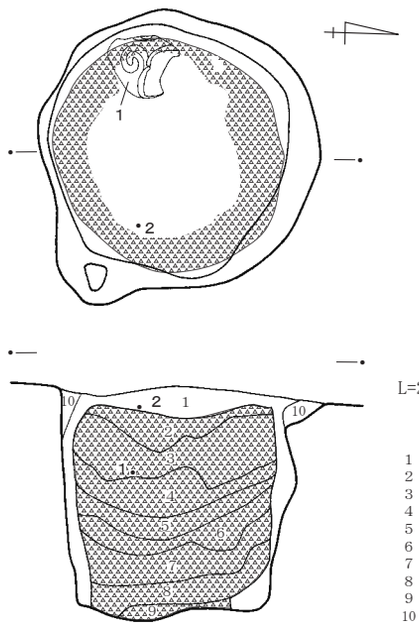


第 211 図　土坑 (19) 土器 D-182 ～



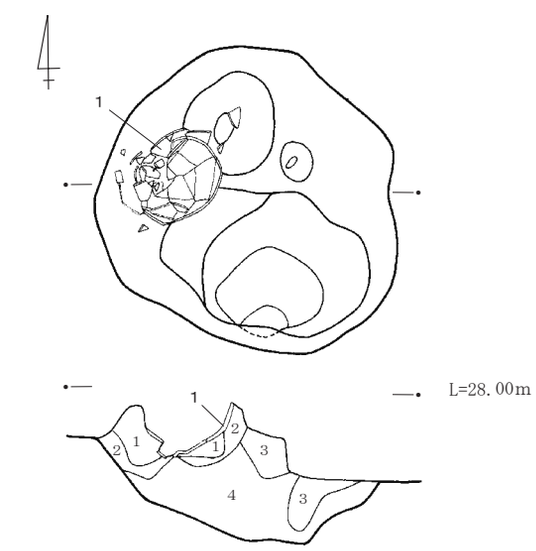
第 212 図　土坑 (20)D-195 ～

D－190



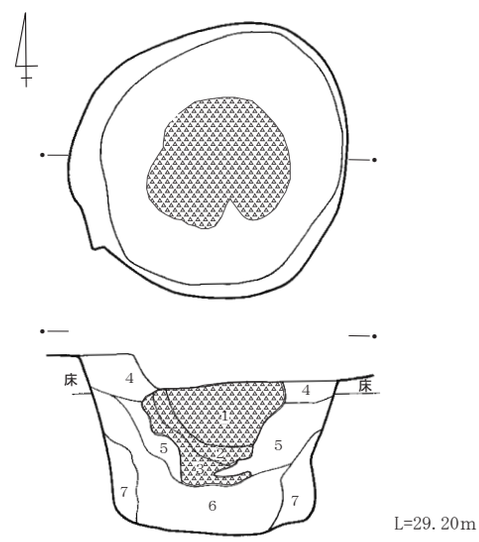
1　暗褐色土　黒味強い。貝層の脇も区分できない
2　混貝土　イボキサゴ主。上面破砕
3　純貝　イボキサゴ主。炭化材多
4　混土貝　イボキサゴ主、周囲は破砕主
5　純貝　イボキサゴ主
6　混土貝　イボキサゴと黒色土
7　純貝　イボキサゴ主
8　混貝土　二枚貝とイボキサゴ。黒色土・黄褐色土多
9　混土貝　イボキサゴと黒色土主。黄褐色土含
10　黄褐色土　暗褐色土含

D－206

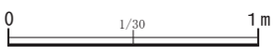


1　暗褐色土　黒色土・黄褐色土混
2　暗褐色土　1より黄色味強
3　暗褐色土　2よりやや明るい
4　黄褐色土

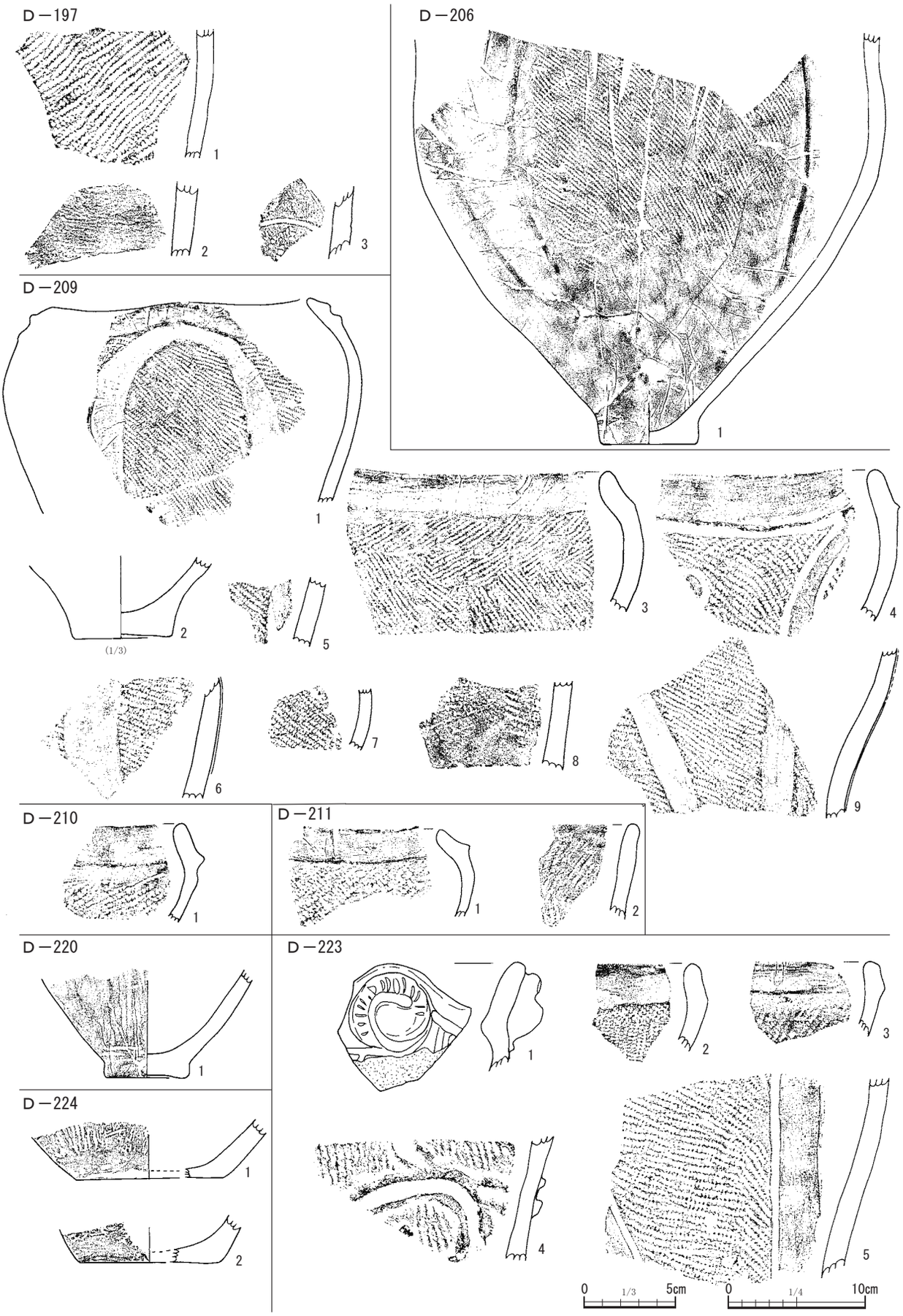
D－215



1　純貝層　イボキサゴ主。若干土含
2　純貝層　イボキサゴ主。木炭・灰含
3　混土貝層　暗褐色土とイボキサゴ
4　暗褐色土　黒色土にローム細斑状
5　黒褐色土　黒色土にローム混
6　明褐色土　硬く締まる
7　暗黄褐色土　ローム主。硬く締まる



第213図　土坑(21)D-190･D-206･D-215貝層・遺物分布



第 214 図　土坑 (22) 土器 D-197 ～

し出す。沈線は浅い。器表面の調整は横位の擦痕のように観察できる。本破片は加曽利Ｅ式土器の系譜上に成立するのではなく、東海以西の土器群の系譜上に位置づけることができる。

積極的に中期末に位置づける根拠はなく、後期初頭と考えたい。土器以外では石鏃未成品１点（３）が出土している。

D-195（第 211・212 図）　１は微隆起側面に縄文が施される。内面には受熱による剥落が観察できる。２の破片下端左半には縄文が認められる。微隆起側面部の縄文と考えられる。３は厚手で大形の個体の破片である。４は微隆起側面に縄文が施される。５は破片左上端部に僅かに縄文が認められる。破片中央部の沈線以外にも、破片両脇に縦位の同種の沈線が施される。

D-197（第 212・214 図）　３は破片右上の割れ口部分にも沈線が施される。破片中央の沈線以下の部分には縄文が施される。器面がやや軟らかい段階で浅い沈線が施される。３点共に焼成は堅緻である。１・２は中・後期の区別はできない。３は後期初頭の可能性がある。

D-206（第 212 ～ 214 図・図版 27・47）　不整形の窪みの上部から深鉢の胴部から底部（１）がほぼ正立して出土した。覆土全体に焼土が少量混じっていた。埋設された可能性がある。１はやや粗雑な隆帯両脇は粗く調整される。積極的に後期初頭に下る根拠にかける個体である。

D-209（第 212・214 図・図版 47）　石皿・台石１点 (25) が出土している。１は隆帯側面に縄文が施され、内面には受熱の痕跡が認められる。９は隆帯側面に縄文が施される。１・９は後期初頭に下る破片であろう。３・４は中期末に属する破片であろう。

D-210（第 212・214 図・図版 27）　１はやや小形の個体と思われ、隆帯下部には調整による無文部分が認められる。後期初頭に下る可能性の乏しい破片である。

D-211（第 212・214 図）　１は隆帯下部には縄文は認められない。隆帯側面には明瞭な縄文施文は認められない。1 は積極的に後期初頭に下る可能性を指摘できない破片、2 は早期後半撚糸文期の破片であろう。

D-215（第 212・213 図・図版 27）　小竪穴の中央、覆土上部に 55cm × 40cm、厚さ 40cm の貝層を形成している。土の混じり方により３つに分層されているが、層界は不明瞭であり一連の堆積に見える。ほぼイボキサゴのみであるが (図版 27)、サンプルはイボキサゴ以外を取り上げたものらしくアサリの幼貝主体である。本来サンプルとして扱わないものであるが、イボキサゴ漁に伴う混獲を示すものとして取り上げた。掲載遺物はない。

D-217　剥片類３点が出土している。

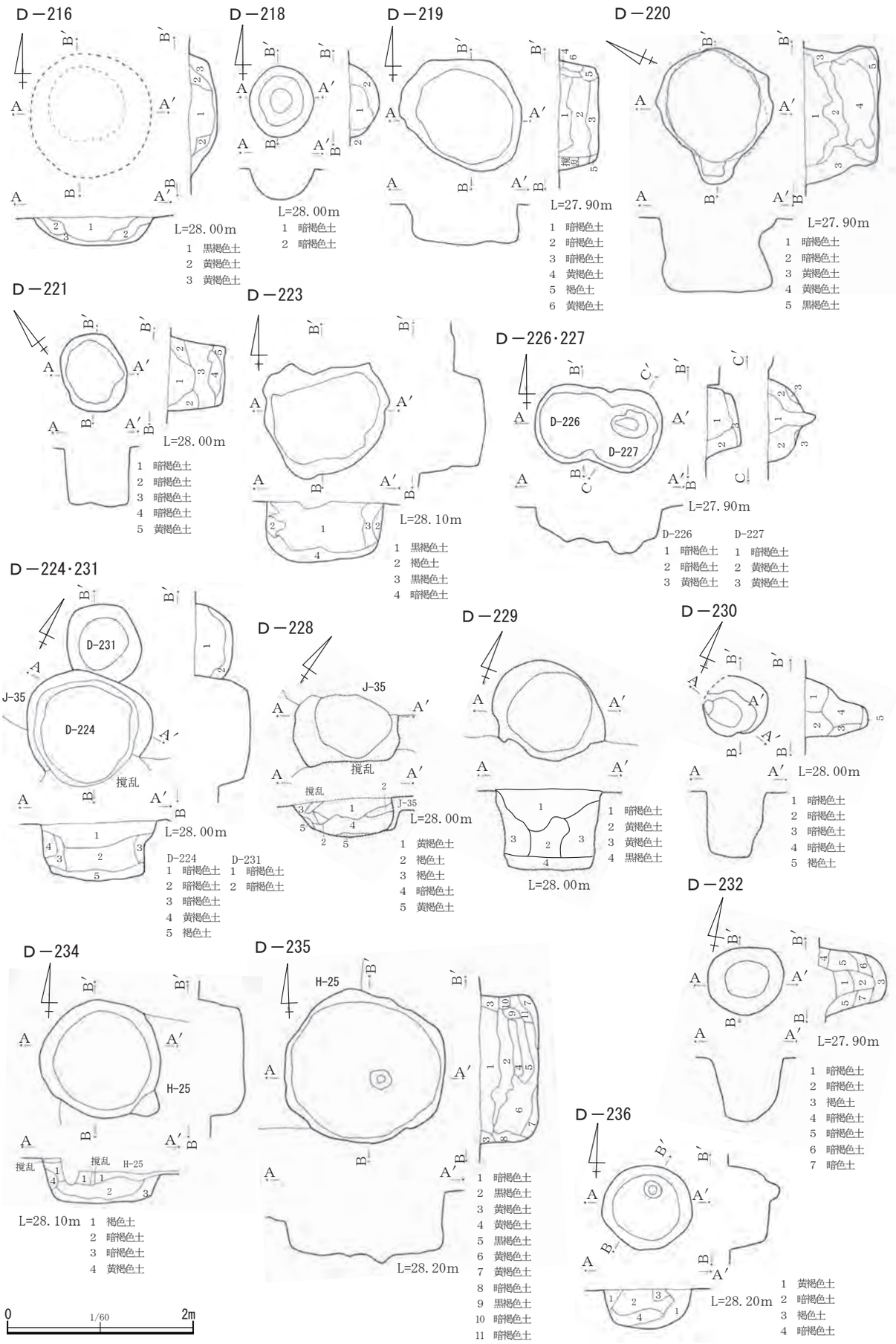
D-220（第 214・215 図）　１は縦位方向の調整が主体であるが、底面付近のみ横方向の調整が認められる。共に棒状工具による比較的丁寧なミガキ調整である。中期末～後期初頭に属する破片であろう。土器以外では剥片類１点が出土している。

D-223（第 214・215 図）　２は隆帯下では横方向の縄文施文で、それ以下は縦位の施文となる。５は破片右端には沈線の痕跡が認められ、無文部による懸垂文効果を有する破片であることがわかる。内面は受熱の痕跡が認められる。１・４は中期中葉の破片、それ以外は中期後半に属し、積極的に後期初頭に位置づけることが困難な破片である。

D-224（第 214・215 図・図版 27）　１の底面付近は横方向の明瞭な無文調整がなされる。地文上には棒状工具による横方向の短沈線２本が認められる。２の底面付近は無文調整がなされる。破片上端には縄文が認められる。１・２共に、加曽利ＥⅡ式器以前の破片であろう。

D-231（第 215 図）　剥片類１点が出土している。

D-235（第 215・217 図・図版 27）　14 は器面が軟らかい段階で沈線が施される。７・11 は早期後半



第 215 図　土坑 (23)D-216 ～

撚糸文期の破片である。10 は称名寺式期末期の破片であろうか。12・13 は加曽利 E Ⅲ式器に属する可能性が高い。14 は後期初頭の破片である。土器以外では土器片錘 1 点 (第 279 図 52)、石皿・台石 1 点 (54)、石鏃 1 点 (第 291 図 47)、同未成品 1 点 (73)、剥片類 9 点が出土している。

D-237(第 216 図)　剥片類 1 点が出土している。

D-242(第 216・217 図)　2 は無文部に懸垂文効果を有する破片である。3 は平行する浅い沈線間に縄文が施される。3 は後期初頭の可能性がある破片である。

D-243(第 216・217 図・図版 27)　黒曜石の剥片類が 31 点出土している。石鏃製作に関わるものであろう。1 は突起部の破片で、奥部に竹管状工具による円形押捺が充填される。7 が幅狭の扁平な工具による格子状の意匠が施される破片で、半精製土器もしくは粗製土器であろう。2 ～ 5 は後期初頭と断言する根拠にかける破片である。

D-246(第 216・217 図・図版 27)　1 は隆帯両脇にはナゾリの調整が認められる。口唇部の断面形態は、実測図に示されているような面取りは顕著ではなく、むしろ丸みを帯びている印象がある。2 は受熱の痕跡が顕著である。1 ・ 2 共に、積極的に後期初頭に下る可能性を指摘できない破片である。土器以外では石鏃未成品または石錐 1 点 (22) と剥片類 9 点が出土している。1 点を除いて黒曜石であり、石鏃製作に関わるものであろう。

D-247(第 216・217 図)　3 ～ 5 は両耳壺の把手もしくは把手基部の破片である。1 ～ 5 ・ 6 は中期後半に属する破片である。7 は後期初頭に属する。

D-249(第 216 図)　剥片類 1 点が出土している。

D-250(第 216・219 図・図版 27)　1 は口縁直下では縄文が横方向に、以下は縦方向に施される。中期後半に属する破片である。土器以外では剥片類 2 点が出土している。

D-251(第 216・219 図・図版 27)　1 は断面が蒲鉾状を呈する隆帯の両脇に、凹線風の調整がなされる。中期後半に属する破片である。土器以外では黒曜石の剥片類 13 点が出土している。石鏃製作に関わる資料であろう。

D-255(第 216・219 図)　1 は隆帯側面に縄文が施され、口縁端部の内面はフラットに立ち上がる。3 は胎土に微砂粒を若干多く含むような印象がある。器面が比較的軟らかい段階で沈線を施す。沈線施文による粘土がはみ出ることはない。調整により消去された可能性はある。器表面の沈線内と内面に煤が残存する。内外面はやや丁寧なナデ調整であろう。口唇は面取りされるがやや丸みは帯びる。5 は隆帯側面に縄文が施される。6 は隆帯側面が明瞭に調整され、側面に縄文が施されることはない。7 は胎土・焼成や沈線の雰囲気から、加曽利 E 式系譜の破片と考えられる。

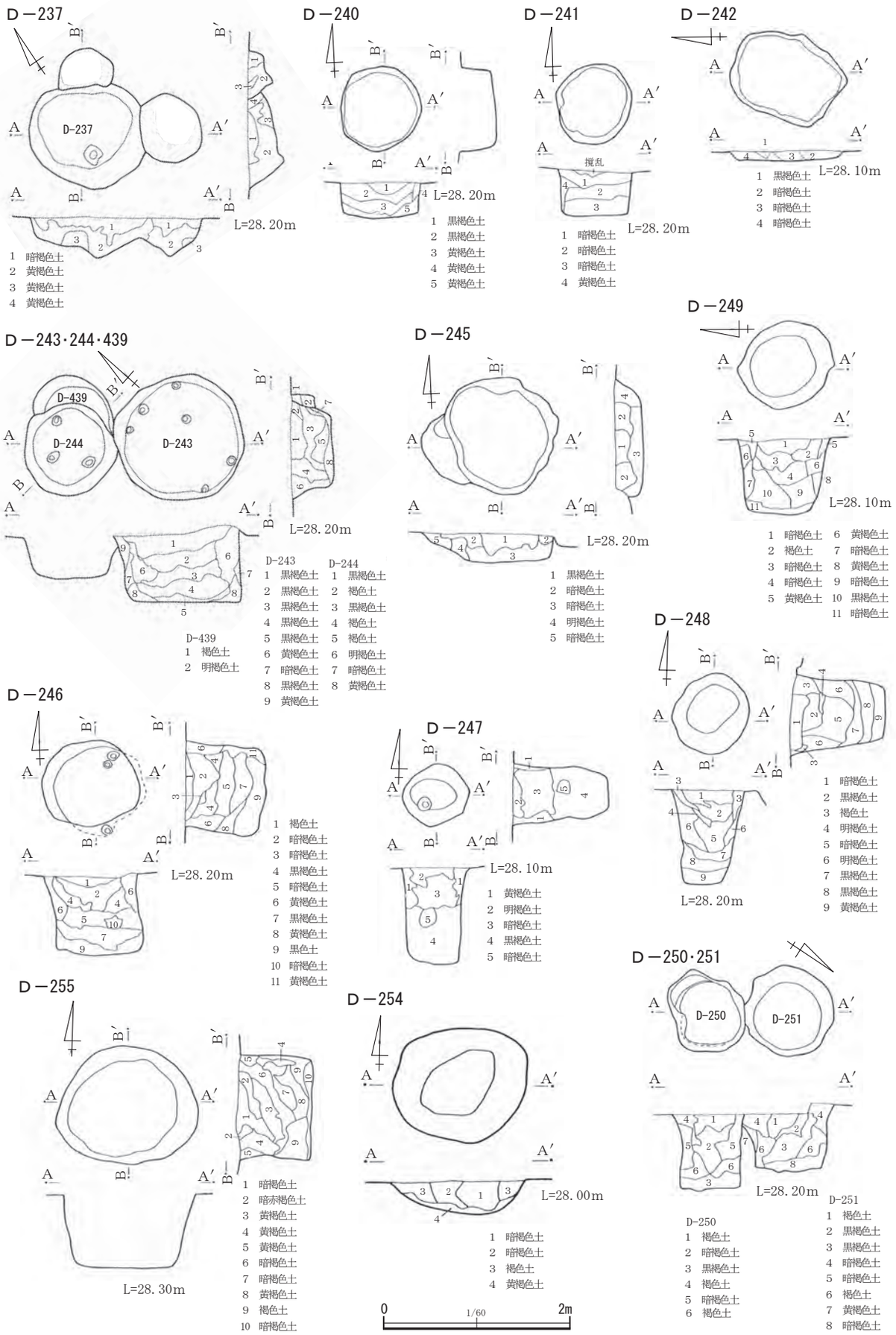
1 ・ 3 ・ 5 ・ 8 は後期初頭に属する破片であろう。3 は近畿地方の北白川 C 式に起源を有し、後期初頭に下る破片である。

D-257(第 218・219 図)　1 は口縁端の肥厚部と以下の部分にも縄文が施されるが、肥厚部直下には凹線風の調整により縄文は認められない。2 は器面の軟らかい段階で浅い沈線が施される。2 は後期初頭に属する破片である。

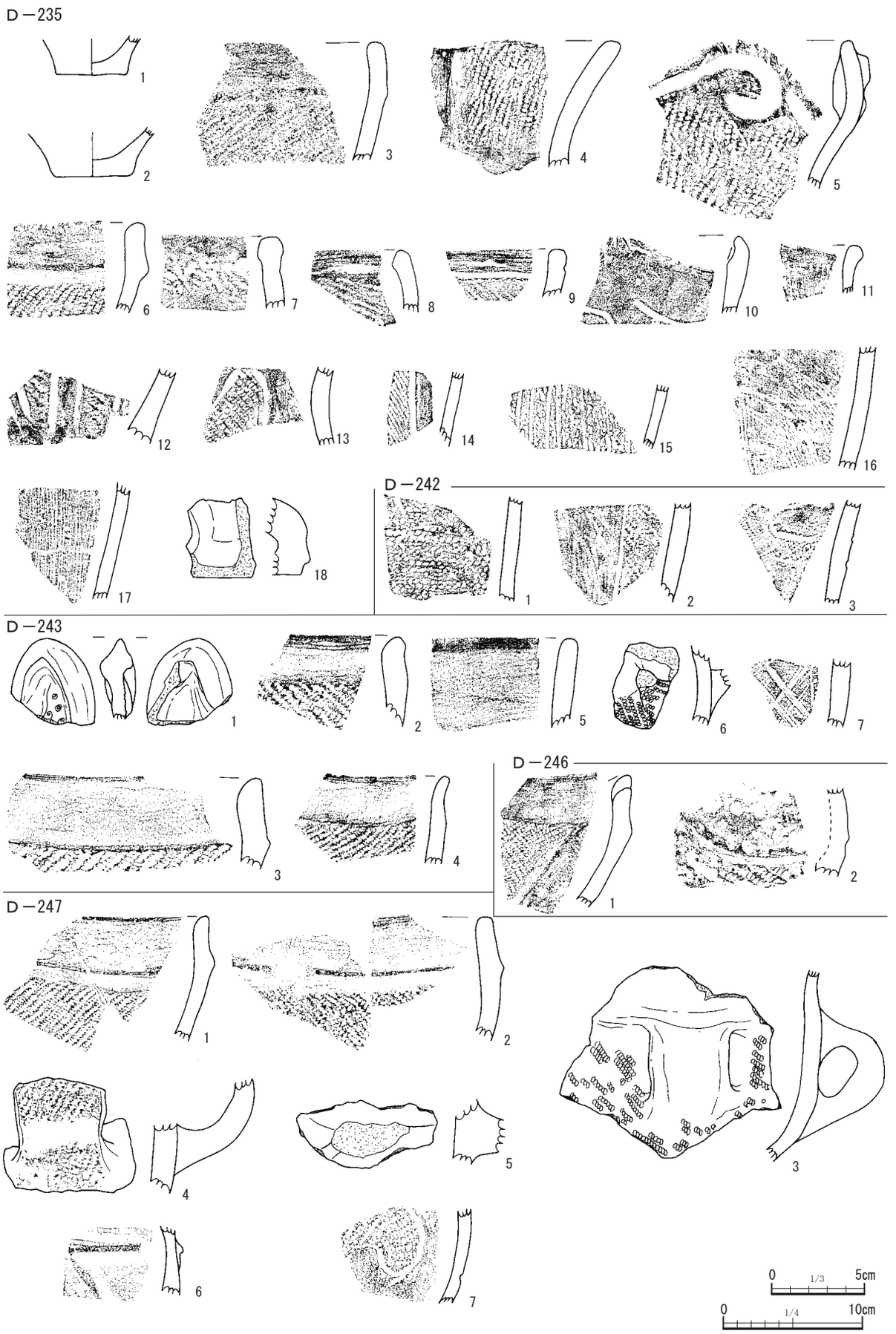
D-259(第 218・219 図)　1 は隆帯側面に縄文が施され、口縁端部内面はフラットに立ち上がる。2 ～ 4 の隆帯下側面はナゾリが認められ、縄文が施されることはない。1 は後期初頭の破片で、2 ～ 4 は中期後半に属する破片であろう。

D-264(第 218・219 図)　1 は隆帯測面に縄文が施される。中期後半に属する。

D-267(第 218 図)　土器片錘 1 点 (第 279 図 53) が出土している。



第 216 図　土坑 (24)D-237 ～



第 217 図　土坑 (25) 土器 D-235 ～

D-268(第 218・219 図・図版 27)　1 の破片左端には縦位の沈線が施される。加曽利ＥⅡ式期もしくは加曽利ＥⅢ式期の所産であろうか。

D-269(第 218・219 図・図版 28)　1 は口縁端部の無文部間に、縄文施文部が貫入する破片で、口唇部は明瞭に面取りされ、口縁端部内面は直に立ち上がる。2 は破片下半には縄文は施されない。1 は後期初頭に下る可能性がある。

D-270(第 218 図・図版 28)　剥片類 1 点が出土している。

D-271(第 218・220・222 図・図版 28)　小竪穴の覆土下部に 90cm × 70cm、厚さ 90cm の比較的大きな貝層を形成している。イボキサゴを主体に二枚貝を含む。貝種により 4 つに分層しているが層界はすべて不明瞭であり、写真をみると中心部分が純貝層で周囲は土が混じっている状況である。

1 は隆帯側面に縄文が施される。単位部下の逆Ｕ字意匠もしくは楕円形意匠を描出する無文部は口唇部に抜けない。口縁端部内面は比較的直に立ち上がる。5 と同一個体の可能性がある。5 の隆帯は雑な印象がある。2 は隆帯側面に縄文が施され、口縁端部内面はフラットに立ち上がる。内面や横方向のケズリが目立つ。3 は隆帯側面に縄文が施される。7 は断面が蒲鉾形の隆帯によるＳ字状の意匠が内外面に施される。内外面の調整はやや雑で、隆帯もやや粗雑な印象がある。破片外周端部は凹線風にくぼむ。

1 ～ 3・5 は後期初頭に下る破片である。

D-272(第 218・220 図・図版 28)　1 の隆帯側面は調整され縄文は施されない。内面には明瞭に稜が作出され、断面は鋭利な印象を受ける。後期初頭に下る可能性もあろう。

D-275(第 218・220 図)　1 の破片右端中央部は器表面が剥落している。口縁下の隆帯側面には縄文が施される。破片右下端には隆帯が認められ、側面に縄文は施されない。2 の隆帯側面には縄文が施される。4 は実物が見当たらない。1・2 共に後期初頭に下る可能性はあるが、積極的に認めることはできない。土器以外では石鏃未成品 1 点 (25)、剥片類 1 点が出土している。

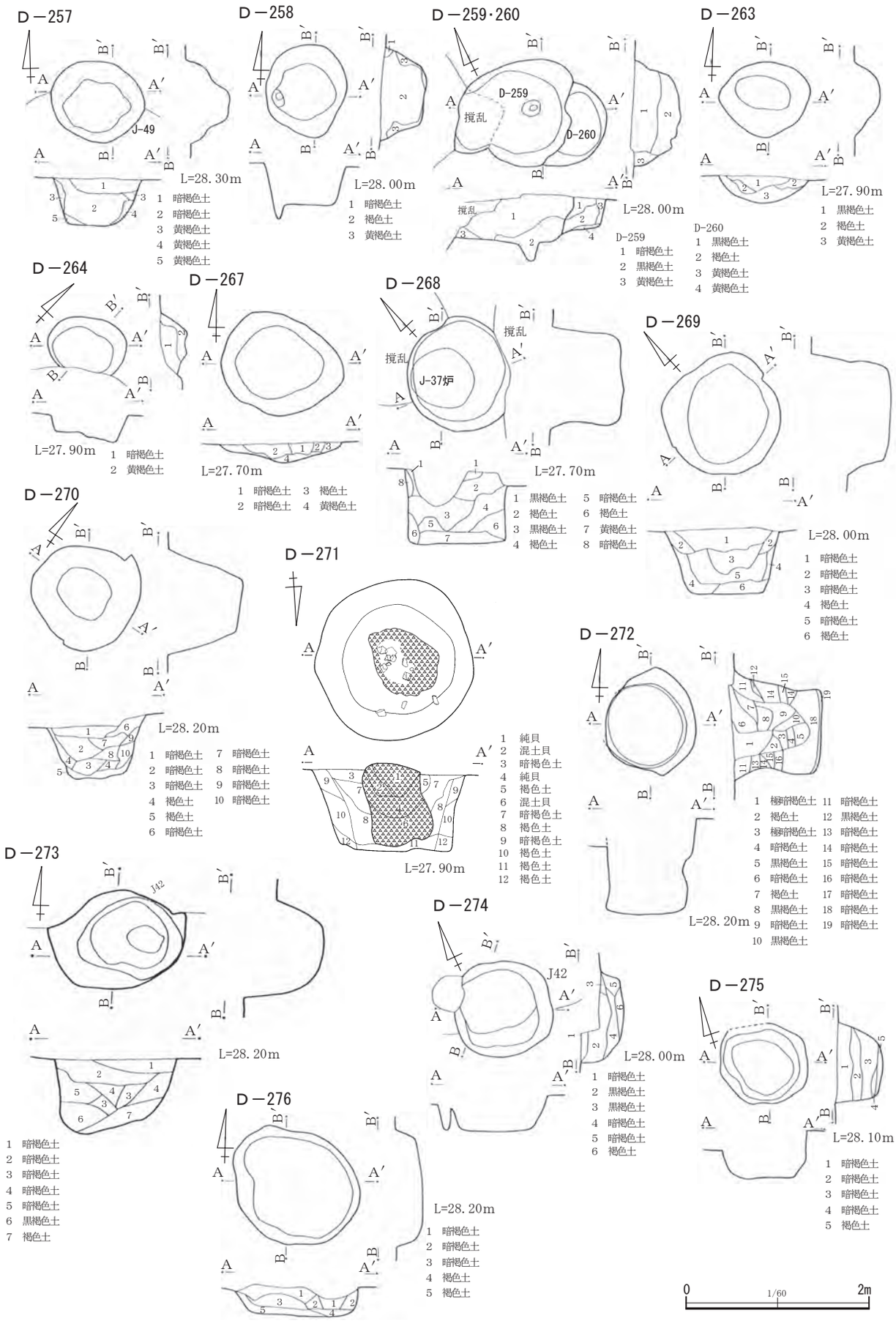
D-276(第 218・221 図)　1 の破片下端は横位の隆帯の上端部である。2 の突起右側には僅かに無節の縄文施文が認められる。風化が進行している破片である。3 の口縁下の隆帯は微隆起で、側面に縄文が認められる。2・3 は後期初頭に下る可能性がある。

D-277(第 221・223 図・図版 47・48)　1 は隆帯側面や隆帯上面に縄文が施される。口縁内面には稜が作出される。2 は口縁下の隆帯側面には縄文が施され、破片左端の沈線は細く鋭利な印象である。口縁内面はフラットに立ち上がる。4 の口縁内面はフラットに立ち上がる。7 は器面の調整がやや雑なナデ調整で、隆帯側面に縄文が施される。8 の口縁内面はフラットに立ち上がる。9 の隆帯側面には縄文が施される。10 の隆帯側面はナデ調整され、縄文は認められない。21・22 の沈線は細く鋭利であるが、25 の沈線は鋭利ではない。

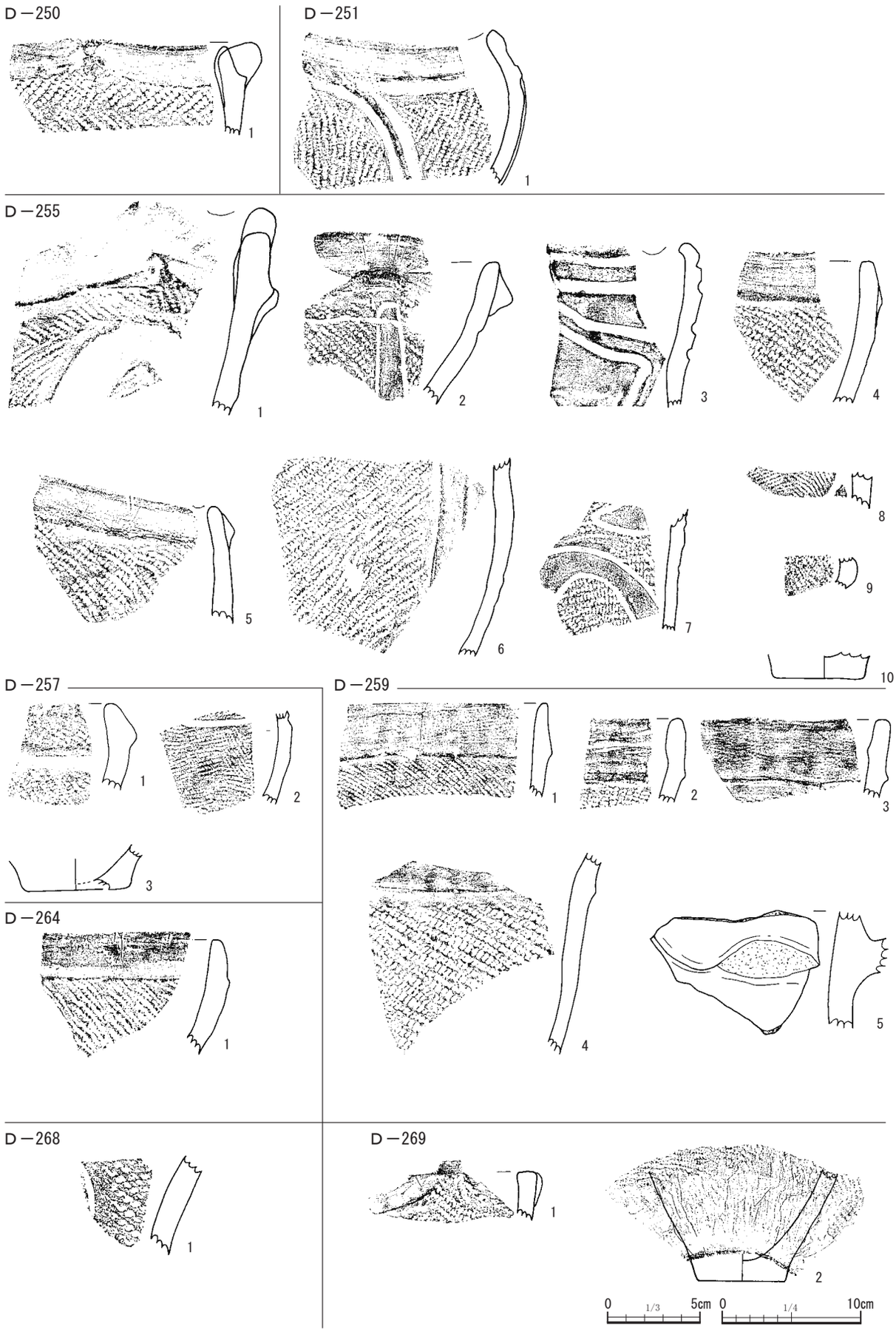
明瞭な称名寺式土器は含まれないが、破片はほぼ後期初頭に下るものである。土器以外では土器片錘 2 点 (第 279 図 54・55)、剥片類 1 点が出土している。

D-278(第 221・224 図・図版 28)　覆土中層から土器大破片がまとまって出土しており、外側から中央に向かってやや傾斜をもっている (図版 28)。1 の隆帯は断面が低い微隆帯で、隆帯側縁と隆帯上部に縄文が施される。2 は隆帯側面に縄文が施される。3 は隆帯側面に縄文が施され、口縁内面はフラットに立ち上がる。4 は風化が進行し、隆帯側面に縄文が施される。6・7 は実物が見当たらない。称名寺式土器を含まないものの、概ね後期初頭に下る破片であろう。

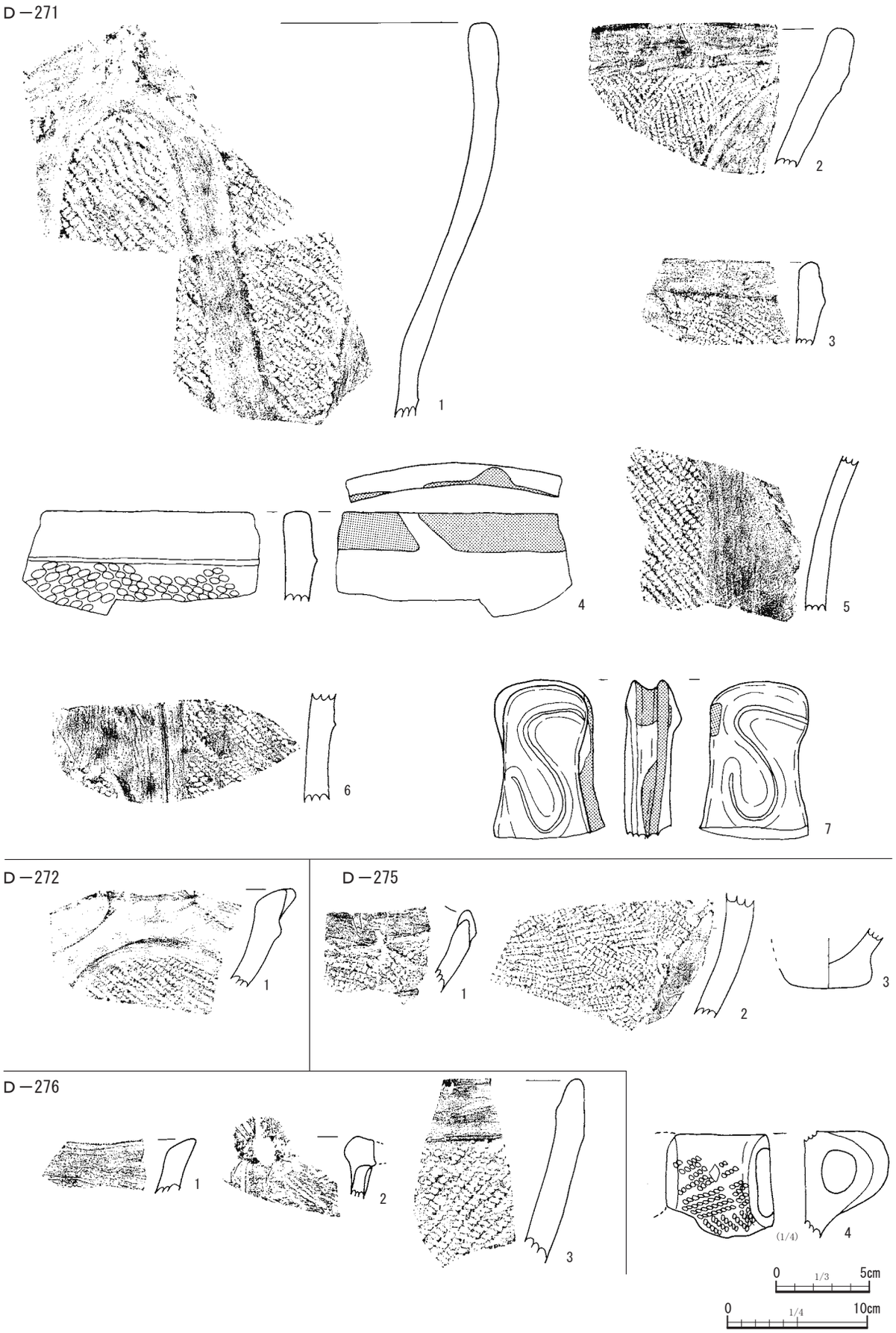
D-279(第 221・224 図・図版 28)　1 は 2 本の隆帯の両脇は雑に調整され、縄文は認められない。積極的に後期初頭と位置づける根拠にかける。



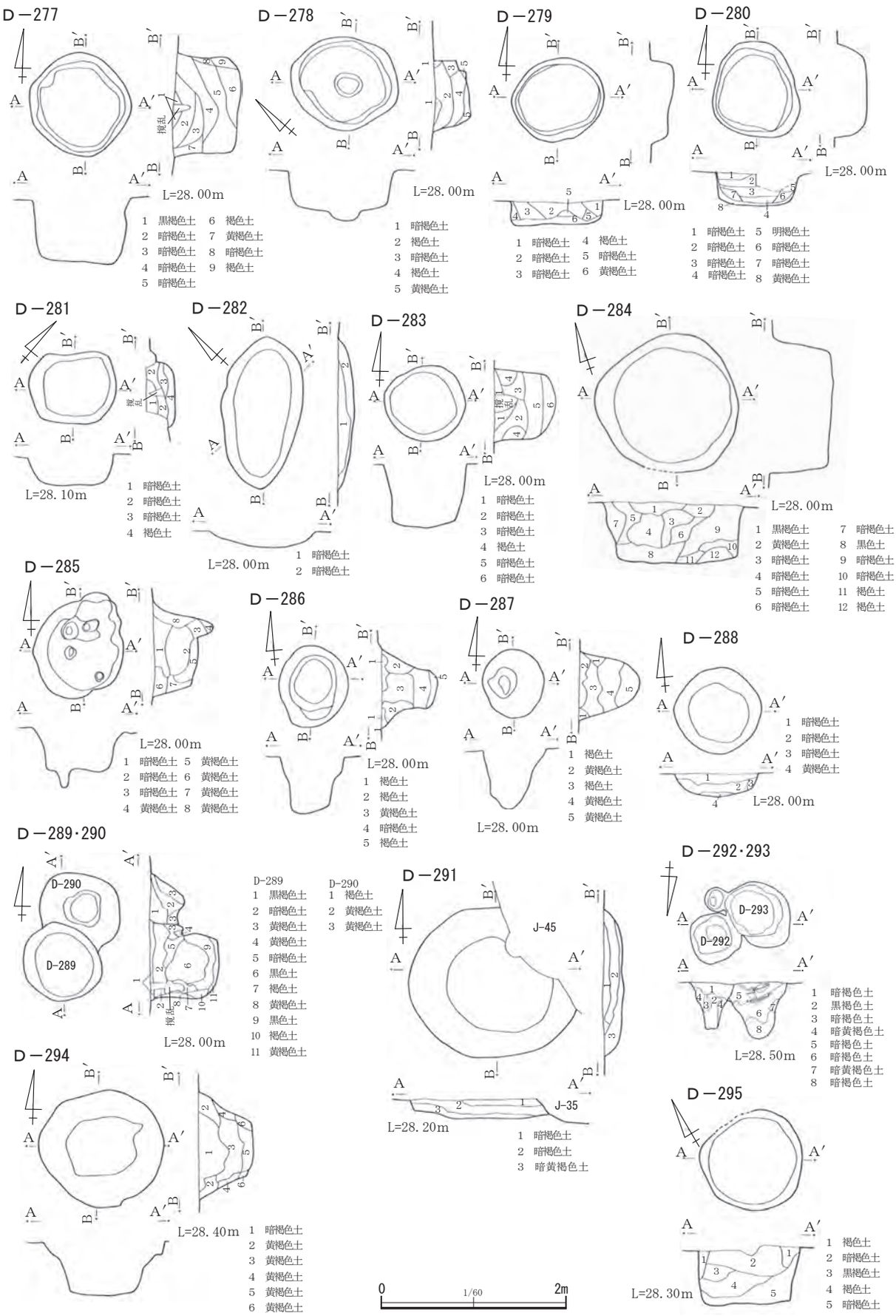
第218図　土坑(26)D-257～



第 219 図　土坑 (27) 土器 D-250 ～

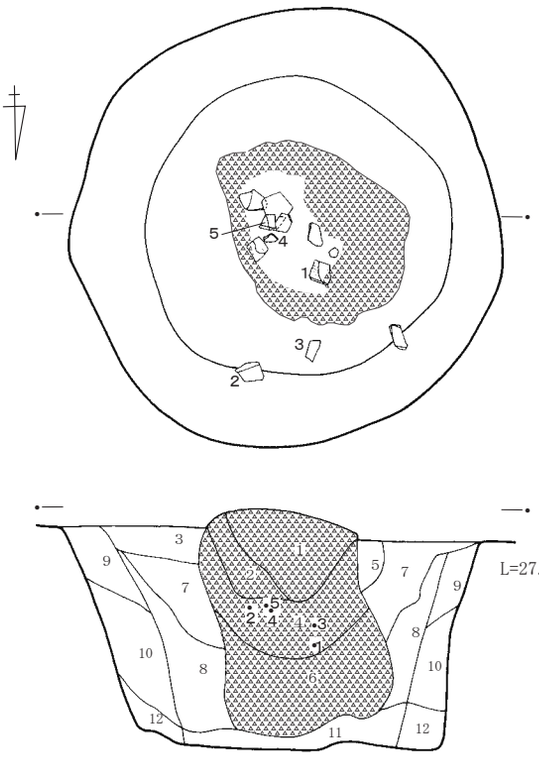


第 220 図　土坑 (28) 土器 D-271 ～



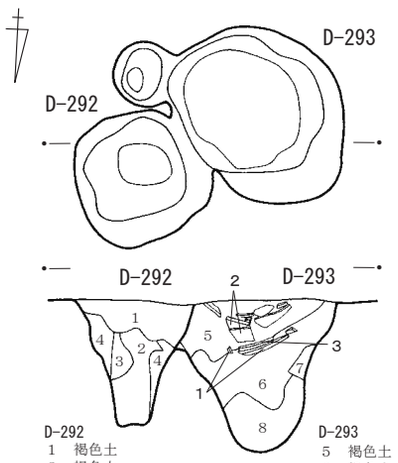
第 221 図　土坑 (29)D-277 ～

D－271

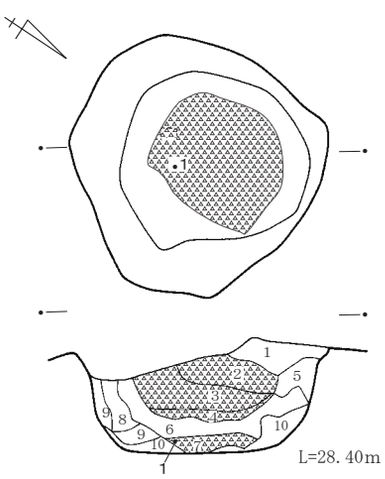


1　純貝　イボキサゴ主。上部土多
2　混土貝　イボキサゴ主
3　暗褐色土
4　純貝　イボキサゴ主
5　褐色土
6　混土貝　イボキサゴ主
7　暗褐色土　ローム粒多
8　褐色土　ロームブロック含
9　暗褐色土
10　褐色土
11　褐色土　8より明
12　褐色土　10より暗

D－292・293

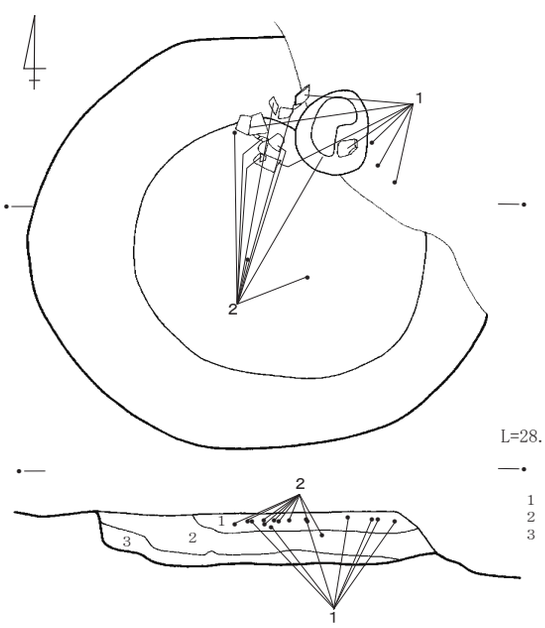


D－299



1　黒色土
2　純貝　イボキサゴ・二枚貝
3　純貝　イボキサゴ主、灰・黒褐色土含
4　純貝　イボキサゴ・二枚貝
5　暗褐色土
6　暗褐色土
7　褐色土　上下貝層の間層
8　暗褐色土
9　黒褐色土
10　暗褐色土

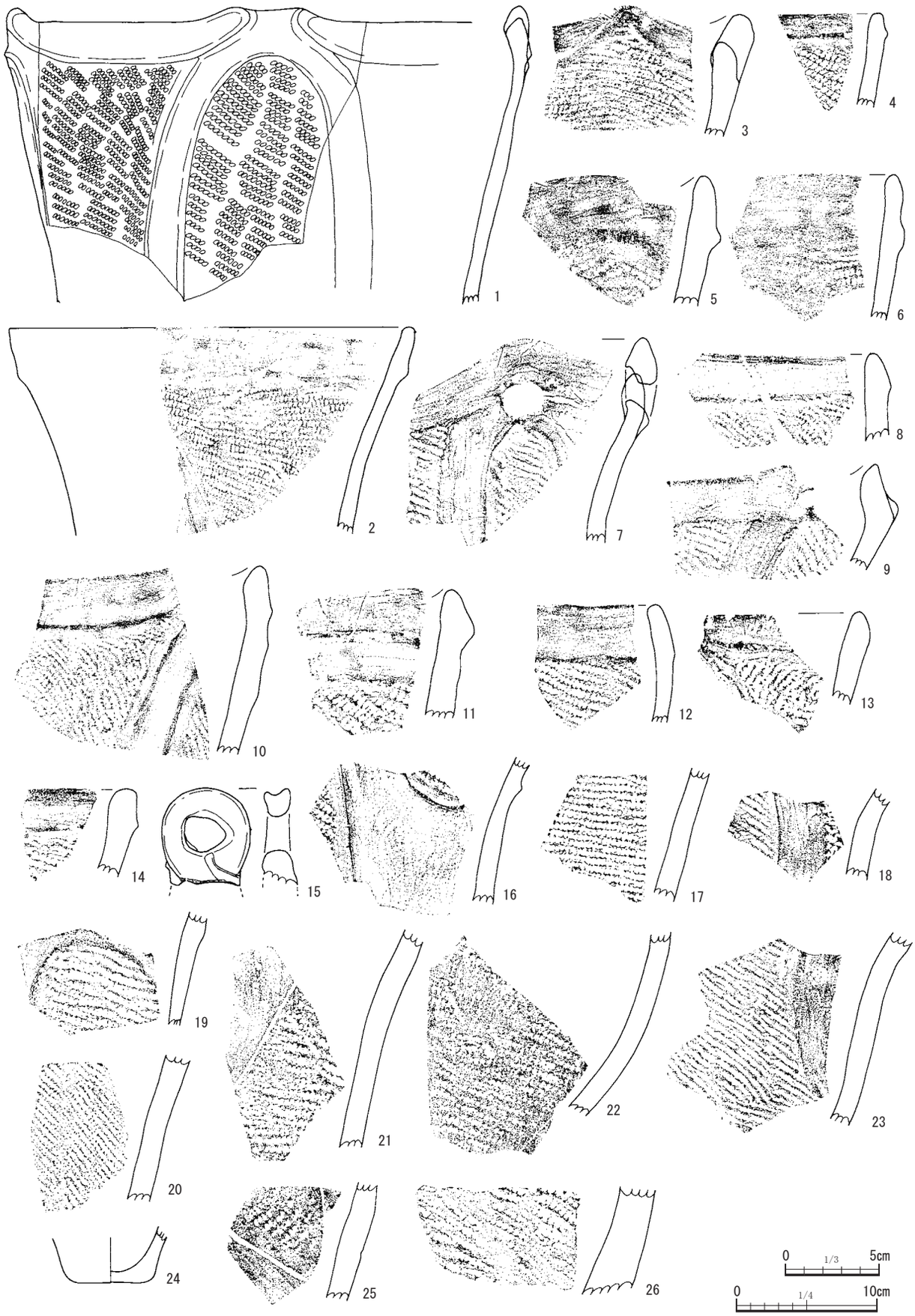
D－291



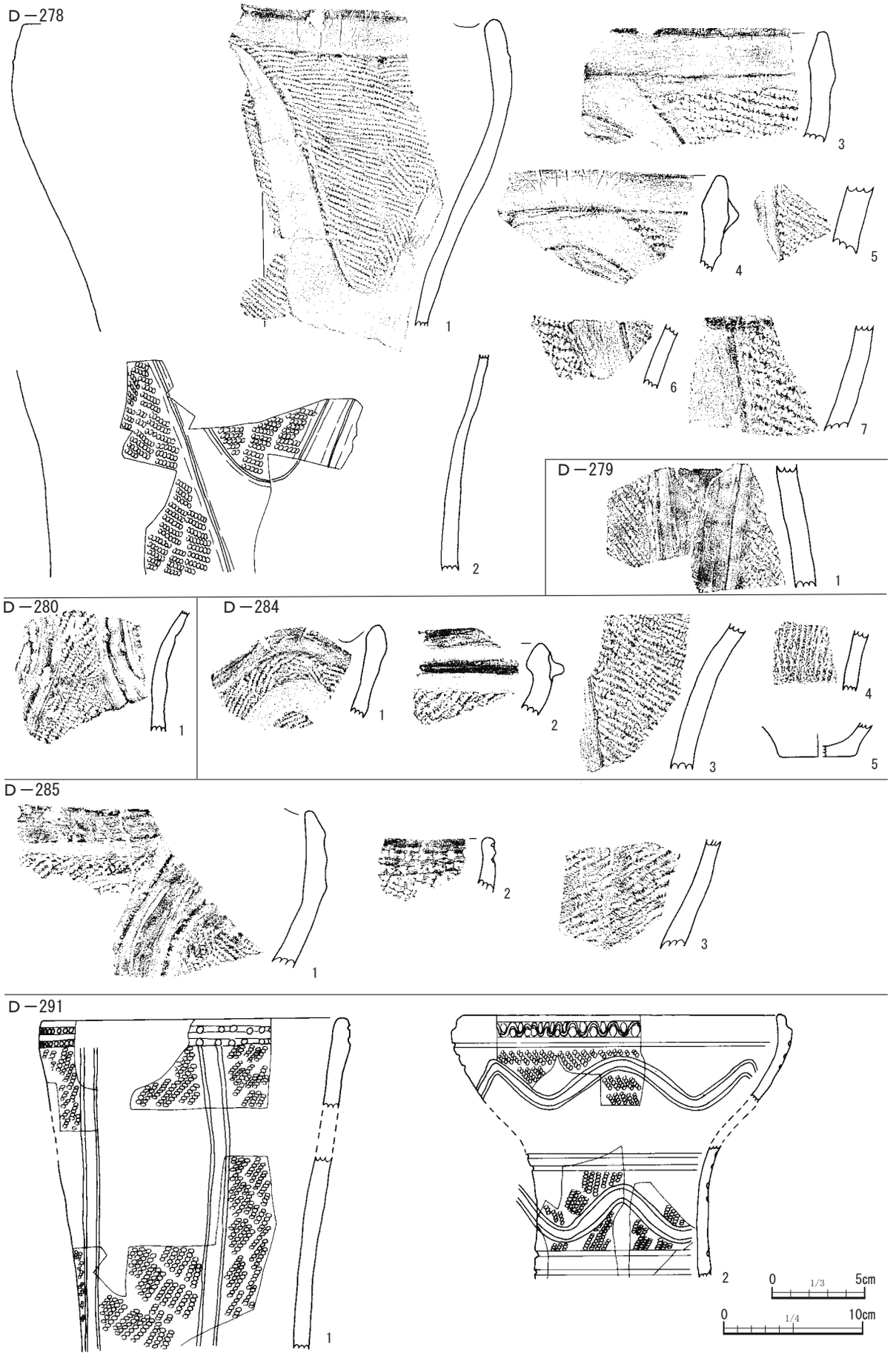
1　暗褐色土　黒褐色に近い
2　暗褐色土　ローム粒多
3　暗黄褐色土

第 222 図　土坑 (30)D-271・D-291・D-292.293・D-299 貝層・遺物分布

D－277

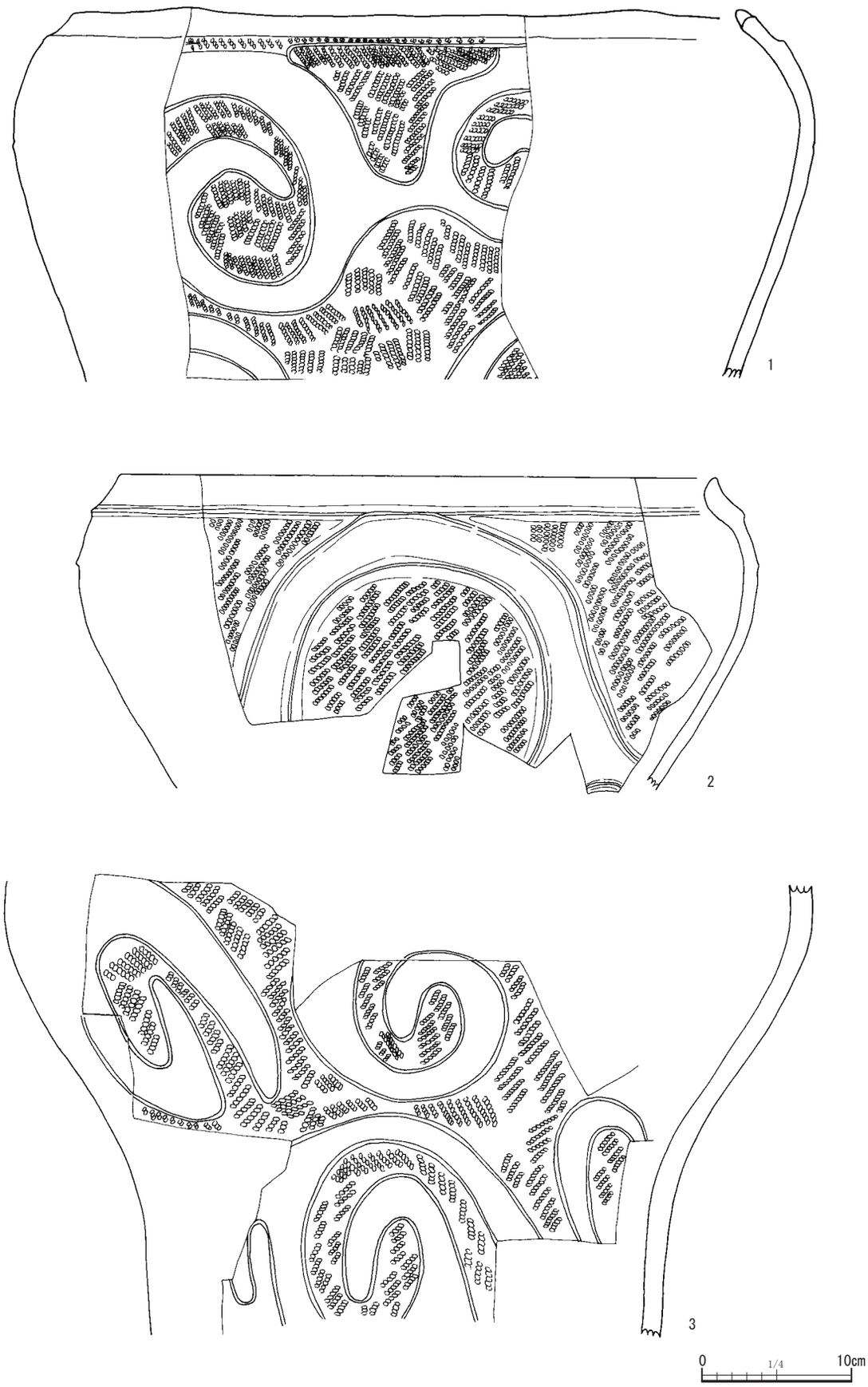


第 223 図　土坑 (31) 土器 D-277



第 224 図　土坑 (32) 土器 D-278 ～

D－293



第 225 図　土坑 (33) 土器 D-293

D-280(第 221・224 図)　1 の隆帯両脇は明瞭に調整され、内外面共に受熱の痕跡が顕著である。後期初頭に下る根拠にかける破片である。土器以外では剥片類 1 点が出土している。

D-284(第 221・224 図・図版 28)　小竪穴の覆土に径 10cm、厚さ 5 cm のごく小さなブロック状混貝土層を形成している。おそらく 1 層の下部付近である。イボキサゴ主体である。 1 ・ 3 は隆帯側面に縄文が施される。後期初頭に下る破片である。 2 は加曽利 E Ⅲ式期以前に属するものであろう。土器以外では石核 1 点 (107)、剥片類 1 点が出土している。

D-285(第 221・224 図・図版 28)　1 は隆帯両脇には雑なナデ調整が認められる。2 の沈線内には竹管状工具による円形刺突が認められる。 1 ・ 2 共に中期後半に属する破片である。

D-291(第 221・222・224 図・図版 28)　すり鉢状の土坑覆土 1 層から深鉢 2 個体分 (1 ・ 2) の破片が集中して出土した。 1 は沈線内に丸先棒状工具による円形刺突が施される。 2 の口縁端部には交互刺突が施される。 1 ・ 2 共に中期後半に属する。

D-293(第 221・222・225 図・図版 28・47)　柱穴状の掘り込みで D-292 に切られている。覆土上層 (5 層) から複数個体の土器が重なった状態で出土している。 3 の出土位置は不明だが、 1 ～ 3 の 3 個体が一緒に出土したのであろう。 1 は口縁の幅広の無文凹部下に、幅狭の縄文帯が横位に巡るが、その一部はナデ消される。破片中央の舌状の意匠は描出する沈線が閉じることなく、口縁下を巡るように施される。舌状意匠上半の縄文は横位に施される。それ以外の縄文は意匠に制約されるような充填縄文である。 2 は隆帯両脇は明瞭に調整される。内面は受熱により剥落している部分がある。

1 ・ 2 共に後期初頭に下る可能性は無い。

D-295(第 221・229 図・図版 28)　1 は隆帯側面に縄文が施される。後期初頭の破片であろう。土器以外では撚糸文系土器を素材とした土器片円板 1 点 (第 278 図 1) が出土している。遺構の形状から中・後期の小竪穴の蓋然性が高い。

D-299(第 222・226・229 図・図版 28)　土坑の床面直上に厚さ 7 cm の小さな貝層、覆土下部に 60cm × 50cm、厚さ 25cm の貝層を形成している。いずれもレンズ状である。上部貝層は 3 つに分層されており、内容の差は明らかだが層界は不明瞭である。出土土器は 1 ・ 2 共に器面のやや柔らかい段階で、比較的太い沈線が施される。 1 ・ 2 共に後期初頭の破片である。

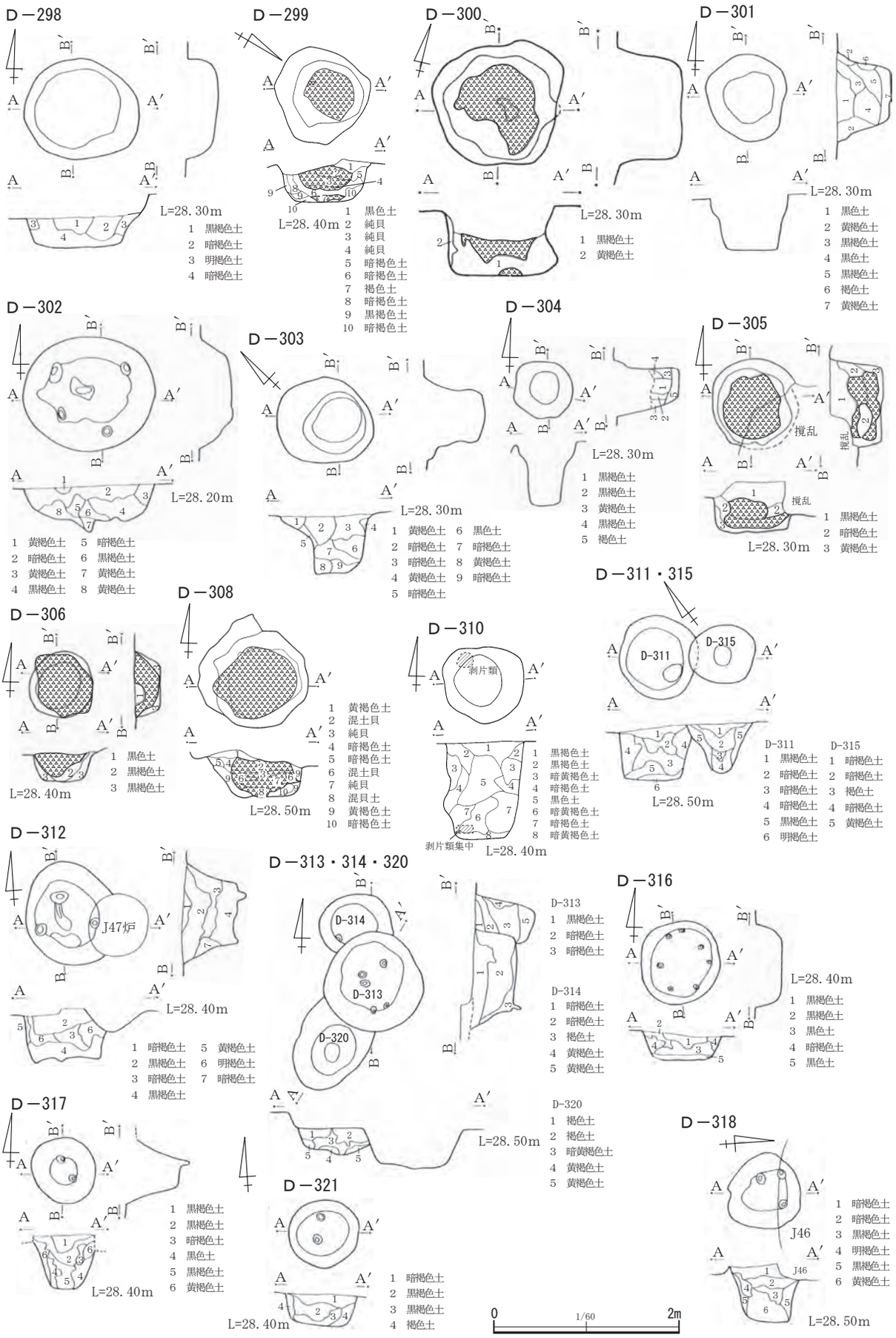
D-300(第 226 図・図版 28)　小竪穴の底面に 30cm × 10cm、深さ 10cm の貝層を、覆土中層に 100cm × 85cm、厚さ 20cm の貝層を形成している。上下の貝層はいずれもイボキサゴ主体の混土貝層であり一部で接触しているが、1 層を挟んでいる。掲載遺物はなく、掘り込みの形状はやや歪であるが、中・後期の小竪穴であろう。

D-303(第 226 図)　剥片類 1 点が出土している。

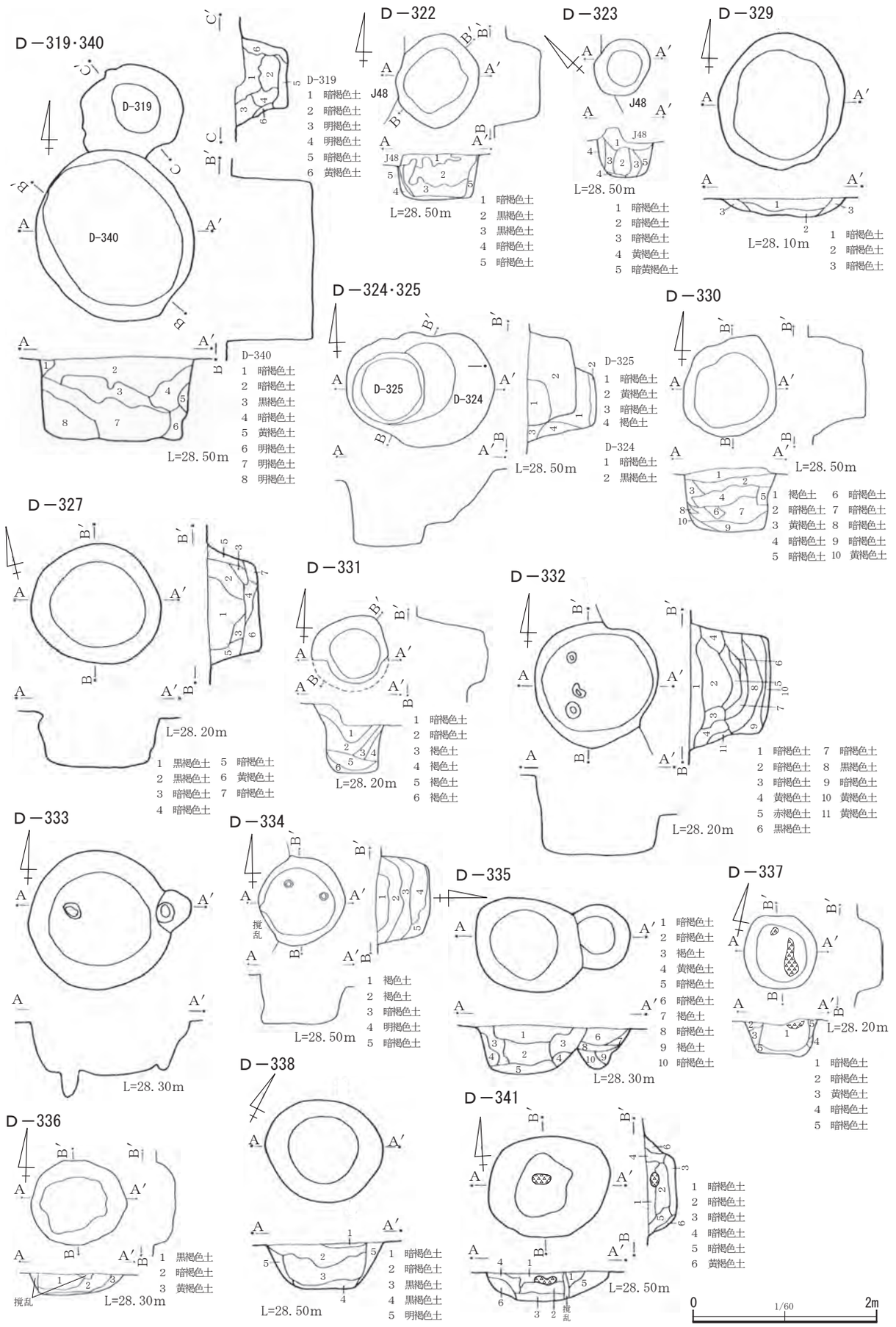
D-305(第 226・229 図・図版 28)　小竪穴の覆土下部に 2 層の混土貝層を形成している。上部貝層は 70cm × 60cm、厚さ 30cm で、イボキサゴを主体に二枚貝・灰を含む。下部貝層は径 80cm、厚さ 10cm で、イボキサゴを主体に破砕貝を含む。上部貝層より土の割合が多い。

1 の口縁下に巡る隆帯下は明瞭に調整され縄文が施されることはない。破片左下端は隆帯脇の無文部である。 2 は器面の軟らかい段階で太い沈線が施され、沈線両脇に粘土がはみ出る。縄文が磨り消されることはなく、帯縄文により意匠が施されることもない。破片右端には蛇行する沈線の端部が 2 か所認められる。 2 ・ 3 は後期初頭に属する破片である。

D-306(第 226・229 図・図版 28)　土坑の覆土下部に 80cm × 60cm、厚さ 25cm の混土貝層を形成している。イボキサゴを主体に暗褐色土を含む。 1 は受熱により器表面の大半が剥落している。口縁端部

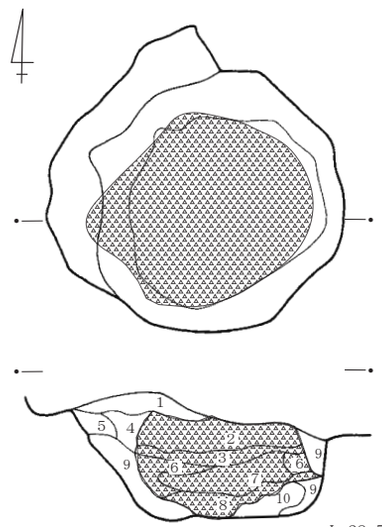


第 226 図　土坑 (34)D-298 ～



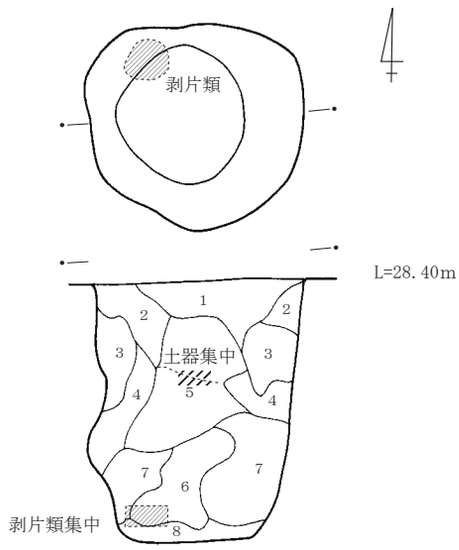
第 227 図　土坑 (35)D-319 ～

D－308



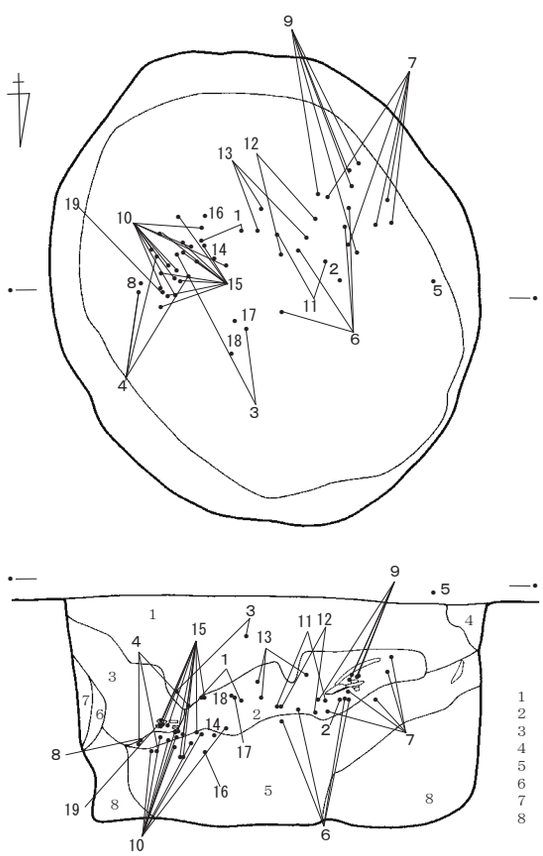
1　黄褐色土
2　混土貝　イボキサゴ主体。中心は純貝
3　純貝　イボキサゴ・二枚貝
4　暗褐色土
5　暗褐色土
6　混土貝　イボキサゴ主
7　純貝　イボキサゴ主。下部に二枚貝
8　混貝土　イボキサゴ・二枚貝
9　黄褐色土
10　暗褐色土

D－310



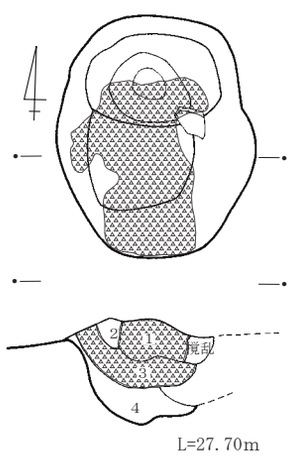
1　黒褐色土　ローム小ブロック含
2　黒褐色土　1よりローム多
3　暗黄褐色土　黄褐色土に黒色土含
4　暗褐色土　黒色土と黄褐色土
5　黒色土　上部は明るい
6　暗黄褐色土　ロームブロック主
7　暗褐色土　　黒色土と黄褐色土。4より明るい
8　暗黄褐色土

D－340

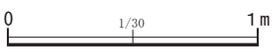


1　暗褐色土　粘土少
2　黒褐色土　土器多
3　暗褐色土
4　暗褐色土　1より粘土多
5　明褐色土　ロームブロック多
6　明褐色土　ロームごく多
7　黄褐色土　ロームブロック
8　明褐色土　ロームブロック含

D－433



1　混土貝　二枚貝・イボキサゴ主。暗褐色土主
2　暗褐色土
3　混貝土　黄褐色土主、二枚貝混
4　黄褐色土



第 228 図　土坑 (36)D-308･D-310･D-340･D-433 貝層・遺物分布

は無文で、以下には縄文が施される。中期後半に属する破片である。土器以外では黒曜石の石錐 1 点 (13) が出土している。

D-308(226・228・229 図・図版 28)　土坑の底面から検出面にかけて 80cm × 75cm、厚さ 40cm の貝層を形成している。全体としてイボキサゴ主体だが、二枚貝主体の部分や間層、土の混じり方などによって分層が可能である。何度も廃棄されたことは明らかである。 1 は薄手の個体で、口縁は波状を呈するものと思われる。隆帯側面には縄文が施される。後期初頭に属する。

D-310(第 226・228・229 図・図版 29)　89 × 82cm、深さ 102cm の小竪穴である。覆土最下層の 8 層上面から 6 ・ 7 層にかけて黒曜石の剥片類が多量に出土した。内訳は剥片類 12,322 点、石鏃 1 点 (第 291 図 36)、同未成品 6 点 (1 ・76 ～ 80)、石核・原石 1 点 (113) である。石材別には黒曜石が 10,063 点 (81.6％)、硬質頁岩が 2,260 点 (18.3％)、不明 7 点である。また、覆土中部・5 層から土器がまとまって出土した。

出土土器 1 は薄手の個体で、口縁端部まで縄文が施される。 2 は隆帯脇は明瞭に調整され、縄文は認められない。 1 ・ 2 共に中期後半の破片である。

D-311(第 226 図)　軽石製品 1 点 (第 293 図 11)、石鏃 1 点 (第 291 図 39)、石核 1 点 (103)、剥片類 1 点が出土している。

D-312(第 226 図)　貝層は検出していないが骨が出土したほか、石鏃 1 点 (第 291 図 54)、剥片類 3 点が出土している。

D-313(第 226・229 図・図版 48)　1 は縄文地に単沈線で意匠を施す。器面の軟らかい段階で粗雑な沈線が施される。沈線の深さは一定ではない。破片中央下半の横位の楕円形意匠内は、縄文がやや磨り消されているような印象がある。口唇面は実測図よりも丸みを帯びる印象がある。 7 と同一個体の可能性がある。 2 ～ 6 は風化が進行した破片で、 2 ・ 5 ・ 6 は隆帯側面に縄文が施される。

1 ・ 7 は近畿地方の北白川 C 式土器に起源を有し、後期初頭に下る破片である。 2 ・ 5 ・ 6 も後期初頭に下る破片であろう。

D-316(第 226・229 図)　1 は薄手で小形の個体で、隆帯側面に縄文が施される。後期初頭に属する破片である。

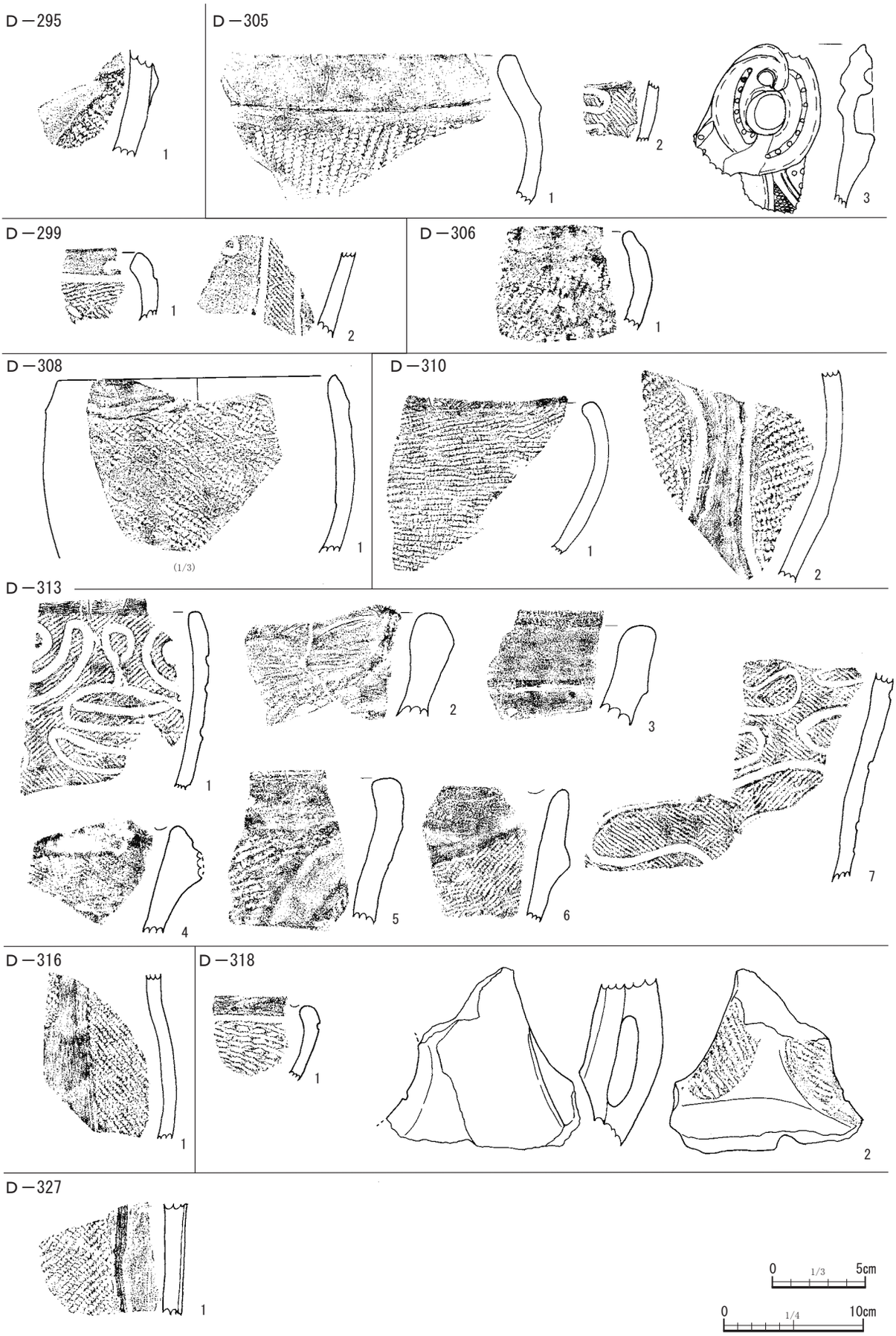
D-318(第 226・229 図)　1 は沈線が比較的太いが、断面形態から判断して加曽利 E 式系譜の土器である。 2 は焼成が極めて堅緻で入念にミガキ調整された大形の把手である。破片は橋状把手となる右半部と個体口縁部の左半からなる。左半には口縁に沿う方向で 2 本の微隆起が認められるが、器表面の剥落により、そのような効果となっている可能性もある。内面のみ縄文施文が認められる。

2 は後期初頭に属する破片である。土器以外では剥片類 2 点が出土している。

D-324(第 227 図・図版 29)　土器片錘 1 点 (第 279 図 56)、剥片類 1 点が出土している。

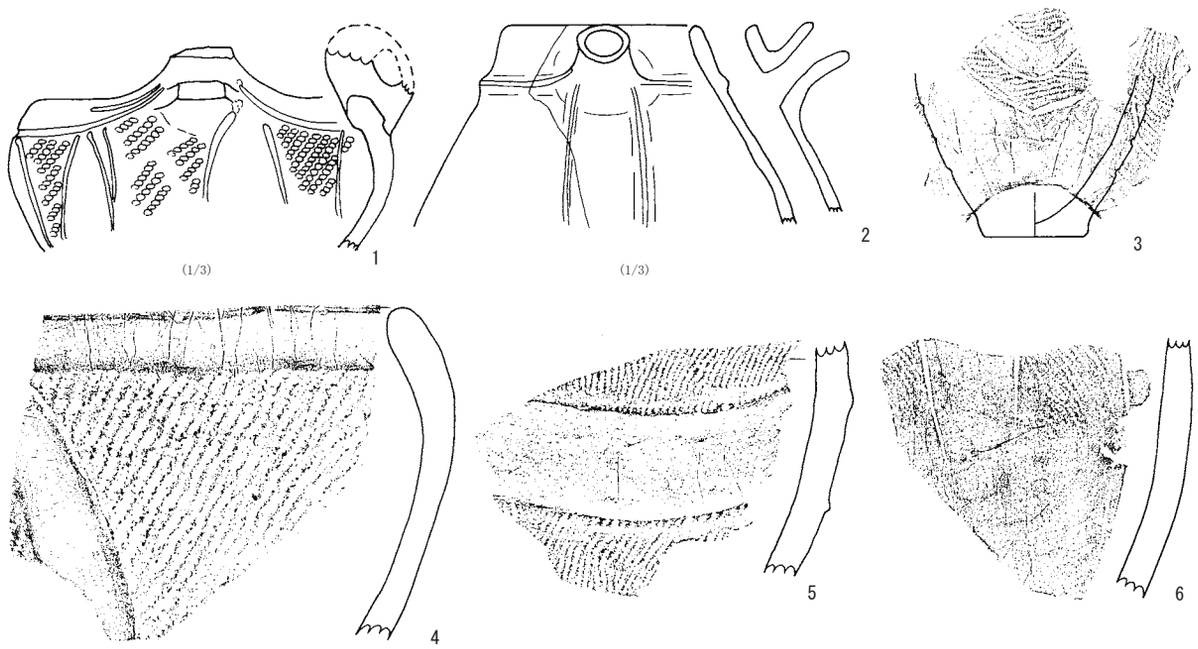
D-327(第 227・229 図)　1 は断面が蒲鉾形から方形を呈する粗雑な隆帯が施される。後期初頭に属するとは判断できない破片である。土器以外では容器 1 点 (第 278 図 1)、土器片錘 1 点 (第 279 図 57) が出土している。容器としたものは小形壷を再加工したもので、内面に黒色塗膜状の付着物が観察される。アスファルトまたは漆の容器として使用されたものと推定される。

D-330(第 227・230 図・図版 29)　1 は縦位の環状把手が破損した個体で、口縁下を幅広の凹線が巡る。体部の意匠は細くて浅い沈線によって描出される。口唇部の断面形態はやや鋭利になる。 2 は比較的丁寧にミガキ調整された注口を有する個体である。3 は帯縄文によって意匠が描出される。沈線はやや浅い。4 ・ 5 は隆帯脇に縄文が施される。 6 は体部下半の破片で細い沈線により意匠が描出される。

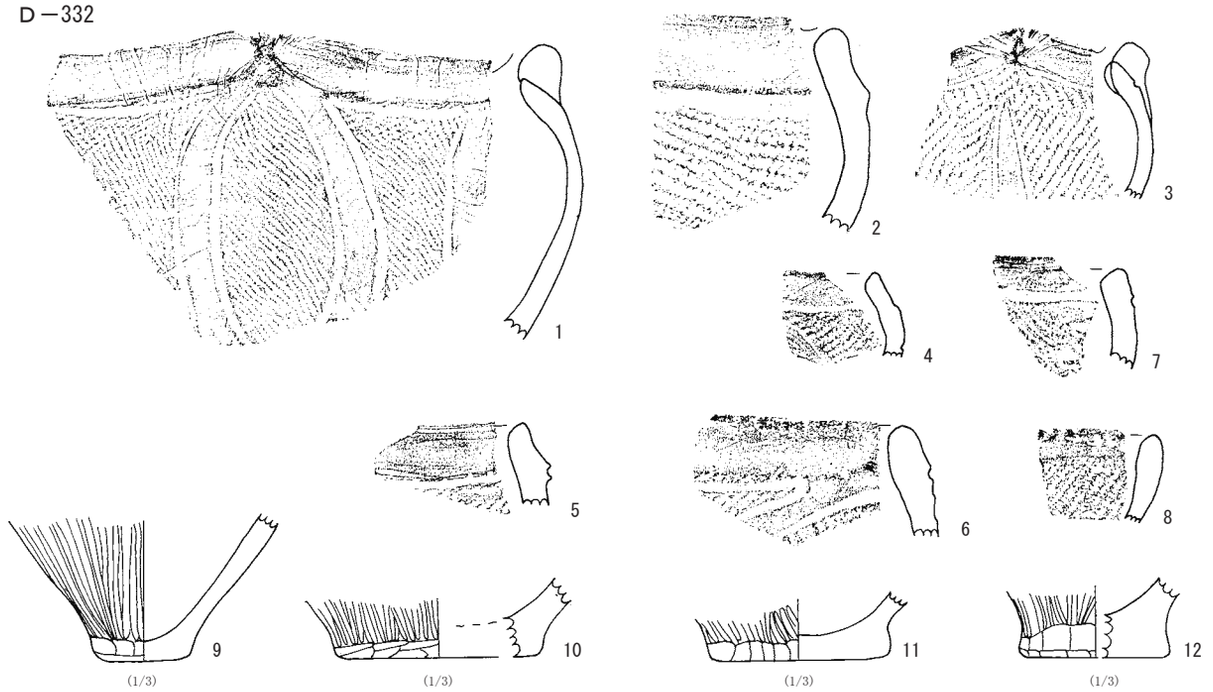


第 229 図　土坑 (37) 土器 D-295 ～

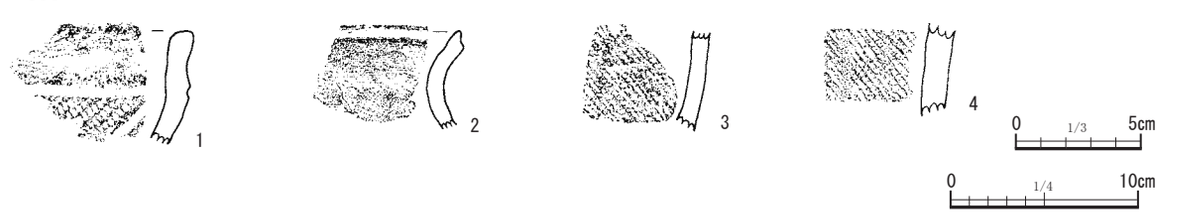
D－330



D－332

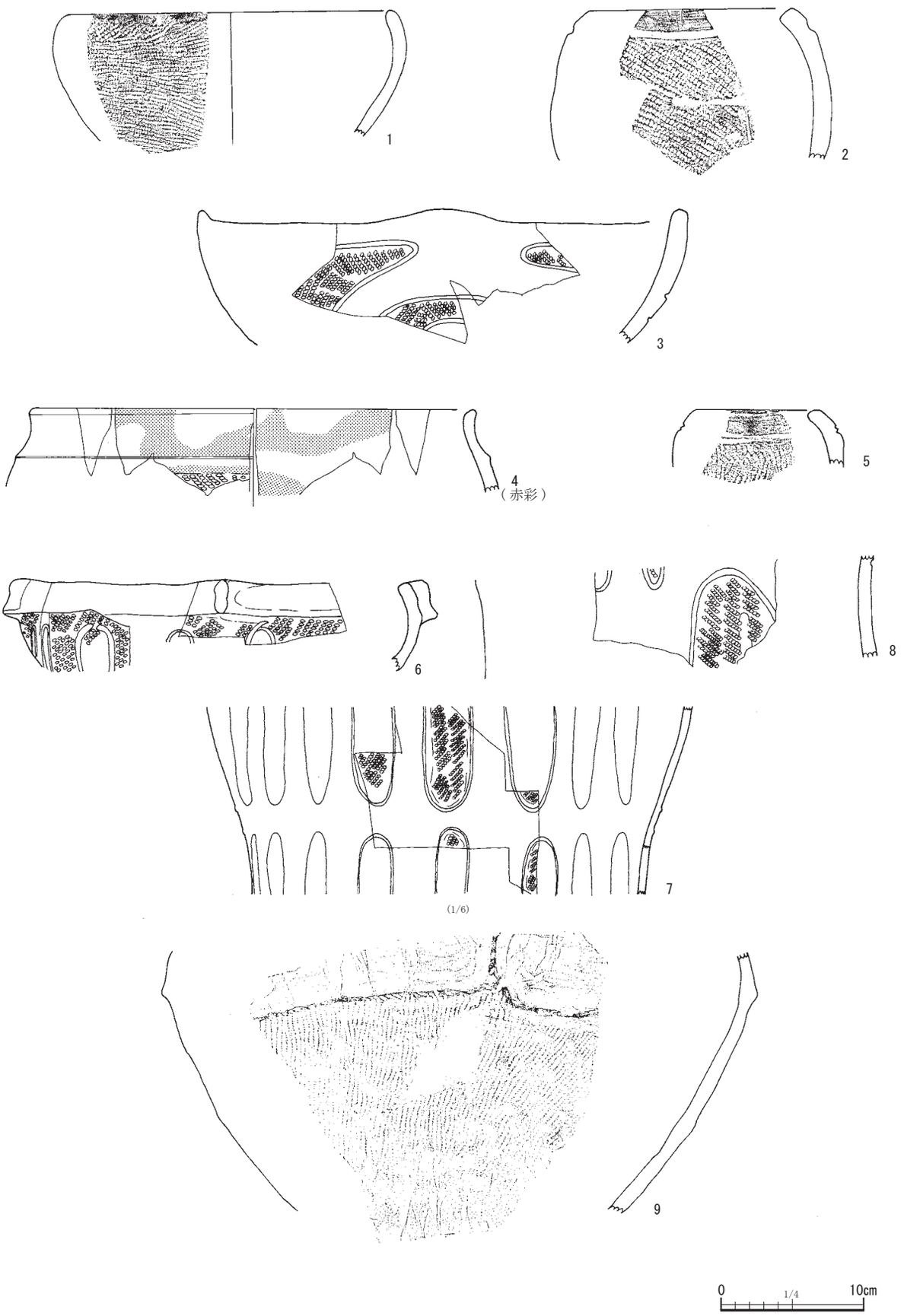


D－338

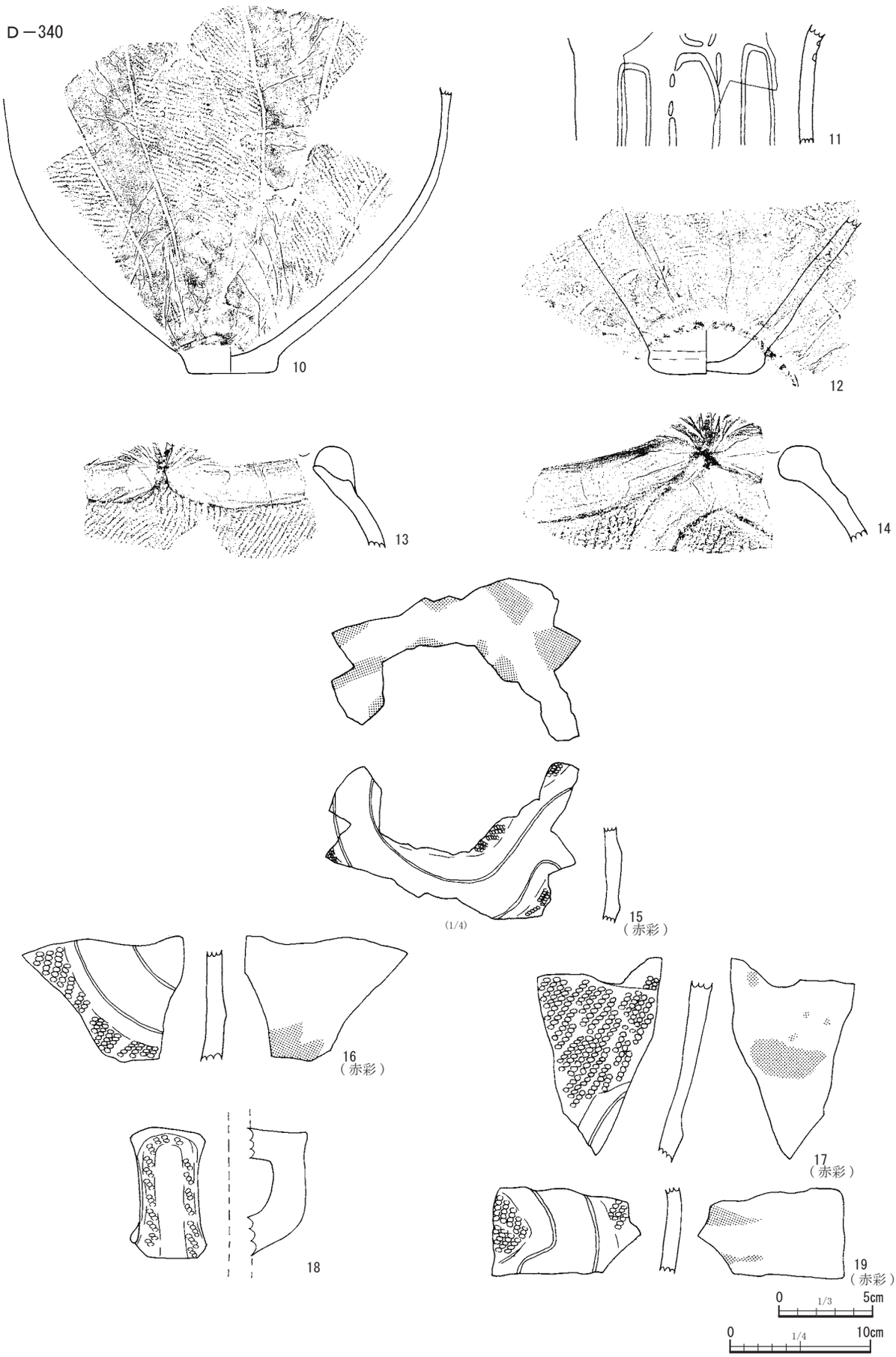


第 230 図　土坑 (38) 土器 D-330 ～

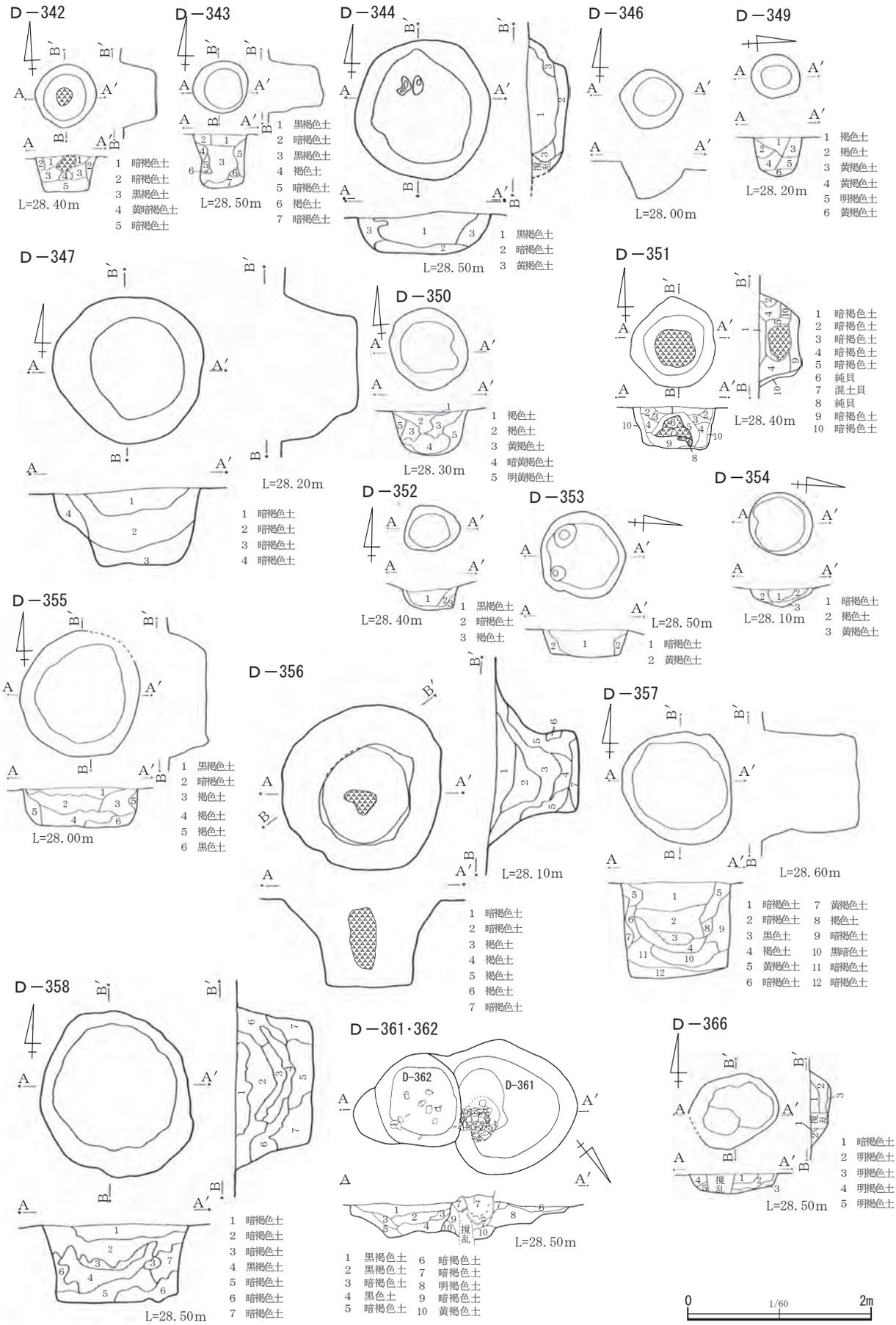
D－340



第 231 図　土坑 (39) 土器 D-340(1)



第 232 図　土坑 (40) 土器 D-340(2)



第 233 図　土坑 (41)D-342 ～

３・５は後期初頭に属する破片である。土器以外では磨石類１点 (第 287 図 116)、剥片類１点が出土している。

D-332(第 227・230 図・図版 29)　覆土下部に焼土主体の層が堆積していた。図版 29-12 はその検出状況である。１は、口縁下隆帯側面に縄文が施されるが、隆帯側面全域に縄文が施されるのではなく、以下の縄文施文域の舌状意匠部分のみに縄文が施される。舌状意匠の上端は口縁下隆帯により描出されるのではなく、沈線によって描出される。右側の舌状意匠の右上端は一筆書きで描出されるが、左側の舌状意匠の右上端は、横位の沈線と縦位の沈線は途切れる。２は口縁下隆帯の側面及び隆帯下は明瞭に調整され、縄文は認められない。６は風化が進行している。

いずれの破片も積極的に後期初頭に下る可能性に欠ける。

D-334(第 227 図・図版 29)　剥片類１点が出土している。

D-337(第 227 図)　土坑の検出面に① 50 × 10cm、厚さ 6cm、②径 10cm、厚さ不明の２か所の混貝土層を形成していた。貝殻は少ないがイボキサゴ・二枚貝が混じる。掲載土器はないが、石鏃未成品１点 (4) が出土している。

D-338(第 227・230 図)　１は後期初頭に下る可能性が低い加曽利Ｅ式土器、２は薄手で小形の堀之内１式土器である。

D-340(第 227・228・231・232 図・図版 29)　小竪穴の覆土中部２層付近から多数の土器が出土している。覆土に貝が含まれていたが位置や形状は不明であり、写真にも見えない。

１は小形の深鉢で、口縁端部と以下の部位では縄文の回転方向が異なる。２は破片右下に縦位の細い沈線が認められる。沈線より右の範囲にも縄文が認められる。３は破片中央単位部下に、両脇の意匠につながるような短沈線の痕跡が認められる。調整によりナデ消されているようである。４は内外面に赤色塗布が認められる。破片右下の縄文部下には無文部分が認められる。５はミニチュア土器で口縁下の沈線が二重になっている部分がある。６の口縁端部の無文部の調整は粗い。前面に突出する単位部はいずれも剥落している。７は破片下半の逆Ｕ字状意匠のうち２か所について隆帯側面に縄文が施されるが、それ以外の意匠の側面は粗い調整で縄文は認められない。８は幅広の浅い沈線で、粗い施文である。11 は「Ｕ字状文」と「逆Ｕ字状文」が対向する加曽利Ｅ式系譜の文様構成に類似するが、縄文は認められない。器面の調整は粗いナデである。12 は撚りの緩い浅い縄文が散漫に施される。13 は単位部の突出部上面にも縄文が施される。18 は両耳壺の耳部分の破片で、端部の肥厚部のみに縄文が施される。

12・19 は後期初頭に属すると考えられる。土器以外では土器片円板１点 (第 278 図８)、土器片錘３点 (第 279 図 58 ～ 60)、石皿・台石 1 点 (31)、石鏃未成品 1 点 (37)、剥片類 19 点が出土している。石鏃と剥片のうち 18 点は黒曜石であり、石鏃製作に関わるものであろう。

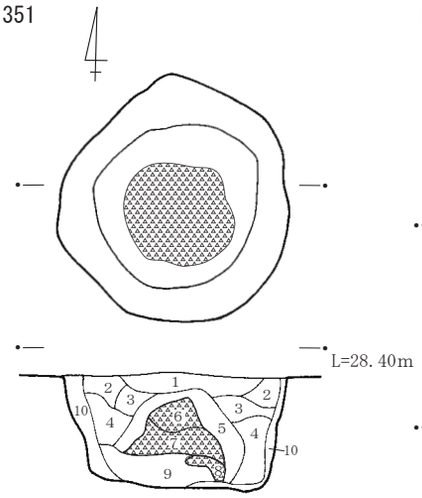
D-341(第 227 図)　土坑の覆土下部に 20cm × 10cm、厚さ 10cm のごく小さなブロック状の混土貝層を形成している。イボキサゴと破砕貝主体に黒褐色土が混じる。掲載土器はないが、剥片類１点が出土している。

D-342(第 233 図)　土坑の検出面から覆土上層に 30 × 20cm、厚さ 25cm のブロック状の貝層を形成していた。層の内容は不明である。掲載遺物はない。

D-344(第 233 図)　石鏃未成品 1 点 (47)、剥片類１点が出土している。

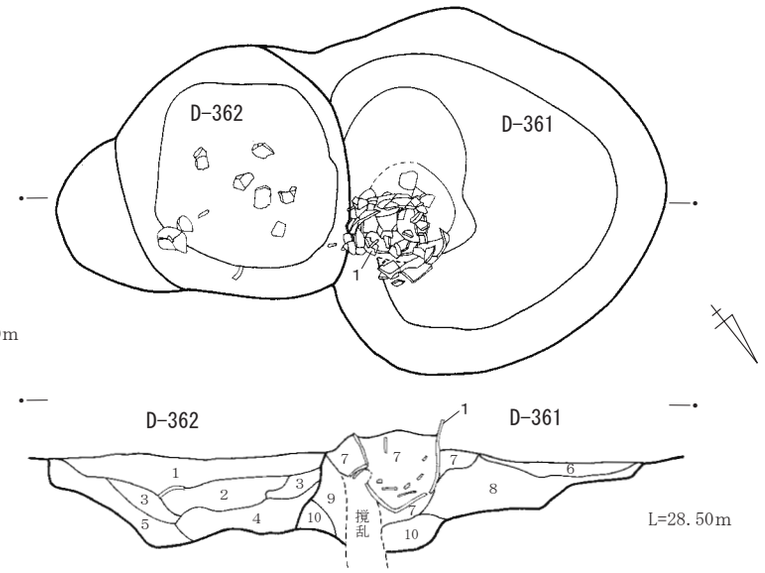
D-346(第 140・233・235 図)　J-55 と重複しており、多量の剥片類の分布範囲が当遺構の範囲にも及んでいる。詳細は J-55 に記載した。５は口縁下の隆帯上面にまで縄文が施される。隆帯側面から隆帯下にも縄文が施されていたが、調整により縄文は消され、結果として隆帯上面のみに縄文が残る。６の口

D－351



1　暗褐色土
2　暗褐色土
3　暗褐色土
4　暗褐色土　ローム粒多
5　暗褐色土
6　純貝　イボキサゴ主
7　混土貝　イボキサゴ主。二枚貝、褐色土含
8　純貝　イボキサゴ主。木炭・焼土含
9　暗褐色土　ローム粒多
10　暗褐色土　ローム粒多

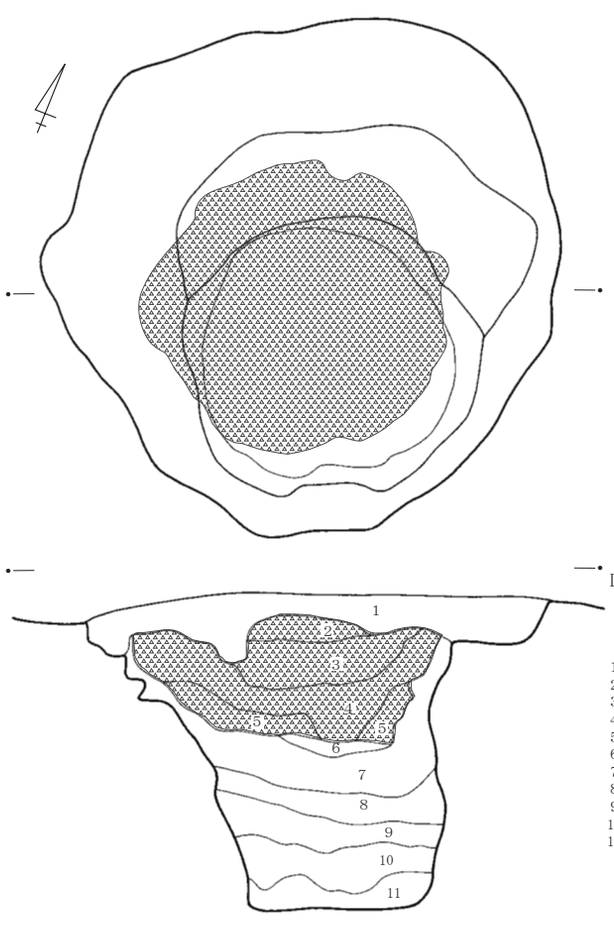
D－361・362



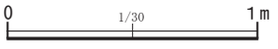
D-362
1　黒褐色土　褐色土主に黒色土混。土器多
2　黒褐色土　1より黒い。ロームブロック混
3　暗褐色土　ローム粒やや多
4　黒色土　褐色土斑状
5　暗褐色土　ロームやや多

D-361
6　暗褐色土
7　暗褐色土　土器内はしまり欠き下部黒味帯びる
8　明褐色土主
9　暗褐色土
10　黄褐色土　ローム主

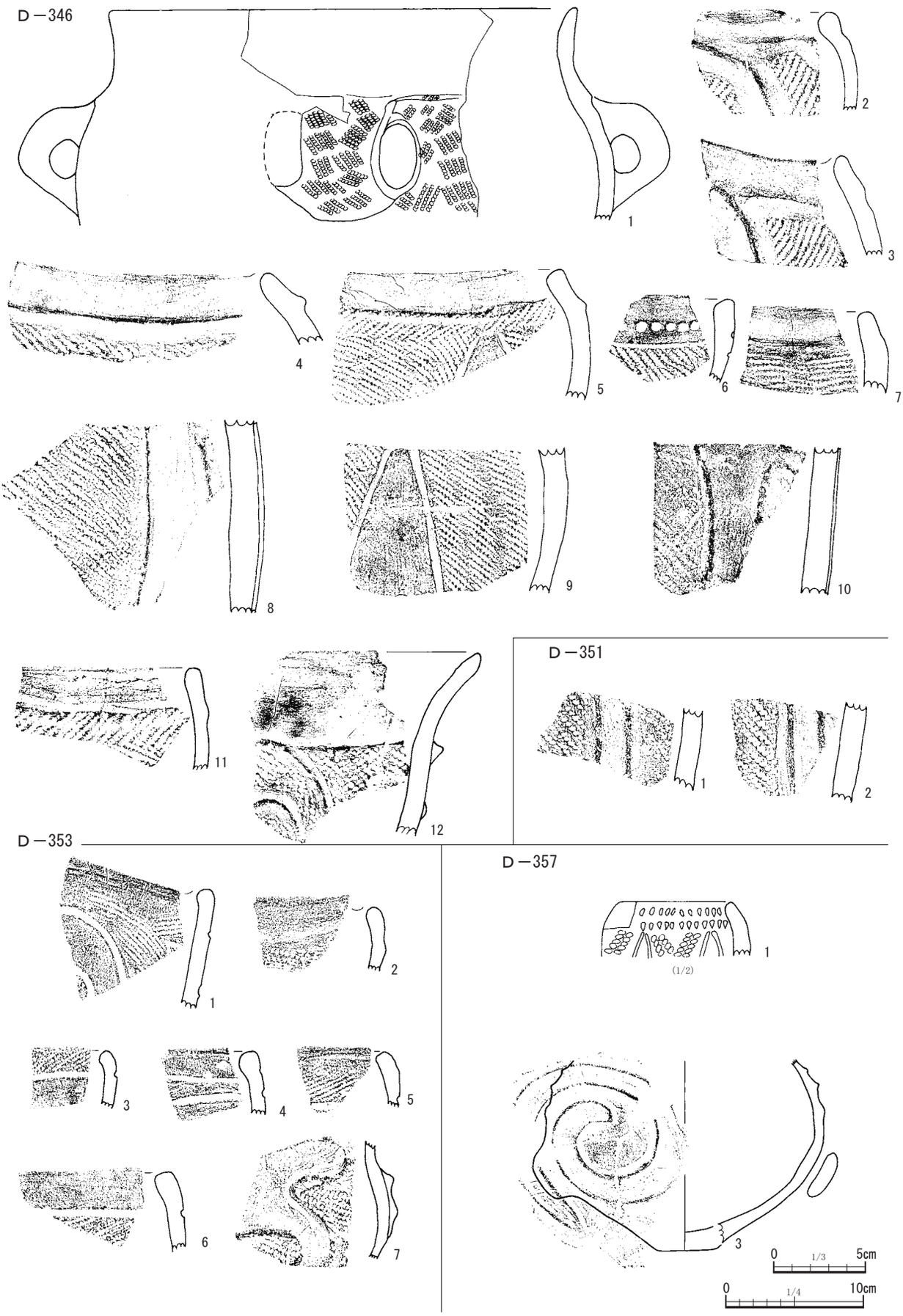
D－365



1　暗褐色土
2　混土貝　二枚貝・イボキサゴ・破砕貝に黒色土混
3　純貝　イボキサゴ・二枚貝に破砕貝含
4　混土貝　イボキサゴ主。黒色土混
5　混貝土　褐色土にマテガイ主体の貝混
6　黄褐色土　ローム主に黒色土混
7　褐色土　黄褐色土斑状
8　暗褐色土　ローム粒混
9　暗褐色土　ローム粒他
10　黒褐色土
11　黄褐色土　ロームブロック含



第 234 図　土坑 (42)D-351･D-361.362･D-365 貝層・遺物分布



第 235 図　土坑 (43) 土器 D-346 ～

縁無文部に施される深い連続押捺は、個体正面から押捺されるのではなく、右方向から左奥へ向かって斜位に押捺される。10 は風化が進行している。

５は後期初頭に下る可能性があるが判然としない。他は中期後半に属する破片である。土器以外では土器片錘 1 点 (第 279 図 61)、剥片類 4 点が出土している。

D-351(第 233 ～ 235 図)　小竪穴の覆土下部に 40cm × 35cm、厚さ 25cm の貝層を形成している。イボキサゴ主体だが二枚貝と土を含む部分を元に３つに分層されている。土器 1 ・２は共に風化が進行し、隆帯上面は擦れている。共に隆帯側面には縄文が施されることはなく、中期後半に属するものと判断できる。土器以外では剥片類９点が出土している。

D-353(第 233・235 図)　1 は破片右端に沈線が認められ、沈線より右側にも縄文が施される。７は無文部は棒状工具によるやや粗い調整で、隆帯は粘土紐が軟らかい段階での粗雑な施文であり、施文後に潰れている状況を見ることができる。１・３～６は後期初頭、２は中期後半の破片、７は加曽利Ｅ式系であるが後期初頭に下るものであろう。

D-356(第 233 図)　小竪穴の覆土下部から上部にかけて 35cm × 25cm、厚さ 65cm の縦長の貝層を形成している。柱状に堆積しており、柱穴等が存在していた可能性がある。掲載遺物はない。

D-357(第 233・235・236 図・図版 29・48)　底面よりやや上の壁際に土器が集中していた (図版 29-15)。１はミニチュア土器で、口縁無文部に巡る２列のうち下段の刺突列は、沈線内に施文される。器表面の風化がやや進行している。２は無文部が広い個体で、隆帯側面に縄文が施される部分がある。低い隆帯の上面・側面の調整は雑で、無文部の調整もやや雑である。３は縦位に孔を有する耳が貼付される瓢箪形の両耳壺の個体下半部の破片である。５は隆帯側面に縄文が施される。

２・4・5 は後期初頭に下る可能性がある。土器以外では土器片円板 1 点 (第 278 図６)、磨石類 1 点 (48)、石核 1 点 (106)、剥片類 4 点が出土している。

D-358(第 233・236 図・図版 29)　1 は隆帯側面は明瞭にナゾリ調整される。口唇面は面取りされるような印象があるが、実際はやや丸みを帯びている。１・２共に中期後半に属する破片である。土器以外では黒曜石の石核２点 (104・105)、剥片類 54 点、磨石類 1 点 (第 286 図 70) が出土している。石核・剥片類は石鏃製作に関わるものであろう。磨石類は、焼け礫→磨石→焼け礫→磨石と再利用が繰り返されている。敲打痕はない。

D-361(第 233・234・236 図・図版 29・30)　D-362 に切られた不整形の掘り込みから深鉢 (1) が出土している。口縁から底部までの一部があり、胴下部～底部はやや斜めに埋設された状況であった。

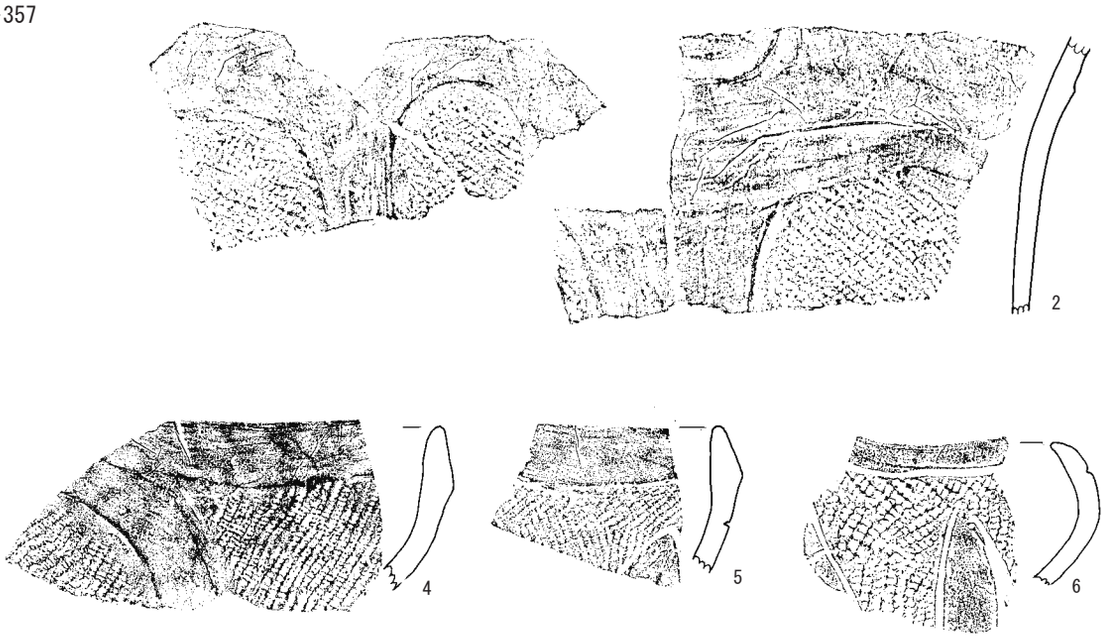
１は口縁下隆帯側面に縄文が施され、体部の縄文は縦方向に密に施される。口縁内面はフラットに立ち上がる。後期初頭に下る個体である。土器以外では石核 1 点 (101)、剥片類２点が出土している。

D-365(第 234・236・237 図)　小竪穴の覆土上部に径 110cm、厚さ 40cm の比較的大きな貝層を形成している。分層は明瞭であり、２・３層は二枚貝とイボキサゴの混じり、４層はイボキサゴ主体、５層は土層のなかにマテガイが集中していた。1 は逆ノ字状の隆帯に囲まれた地文縄文の範囲内に、沈線や交互刺突が施される。中期中葉に属する破片である。

D-366(第 233・238 図・図版 48)　1 は口縁端部に無文部を作出した後に以下の縄文が施される。縄文は施文域上半では横方向、以下は縦方向を基本とする。無文部と縄文部を区画するものはない。２は縦位方向に意匠が施されるが、個体下端には横位に巡る可能性がある縄文帯が認められる。1 は後期初頭に下る可能性があるものの判然としない。２は後期初頭である。

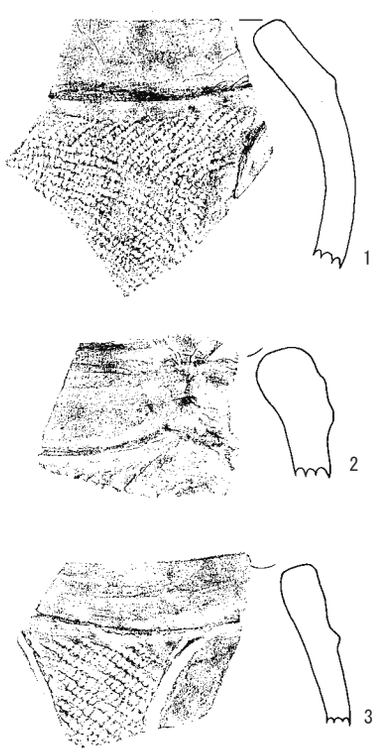
D-373(第 237・238・239 図・図版 30)　小竪穴の覆土中部に 65cm × 30cm、厚さ 15cm のブロック

D－357

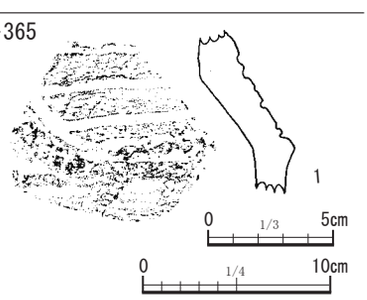


D－361

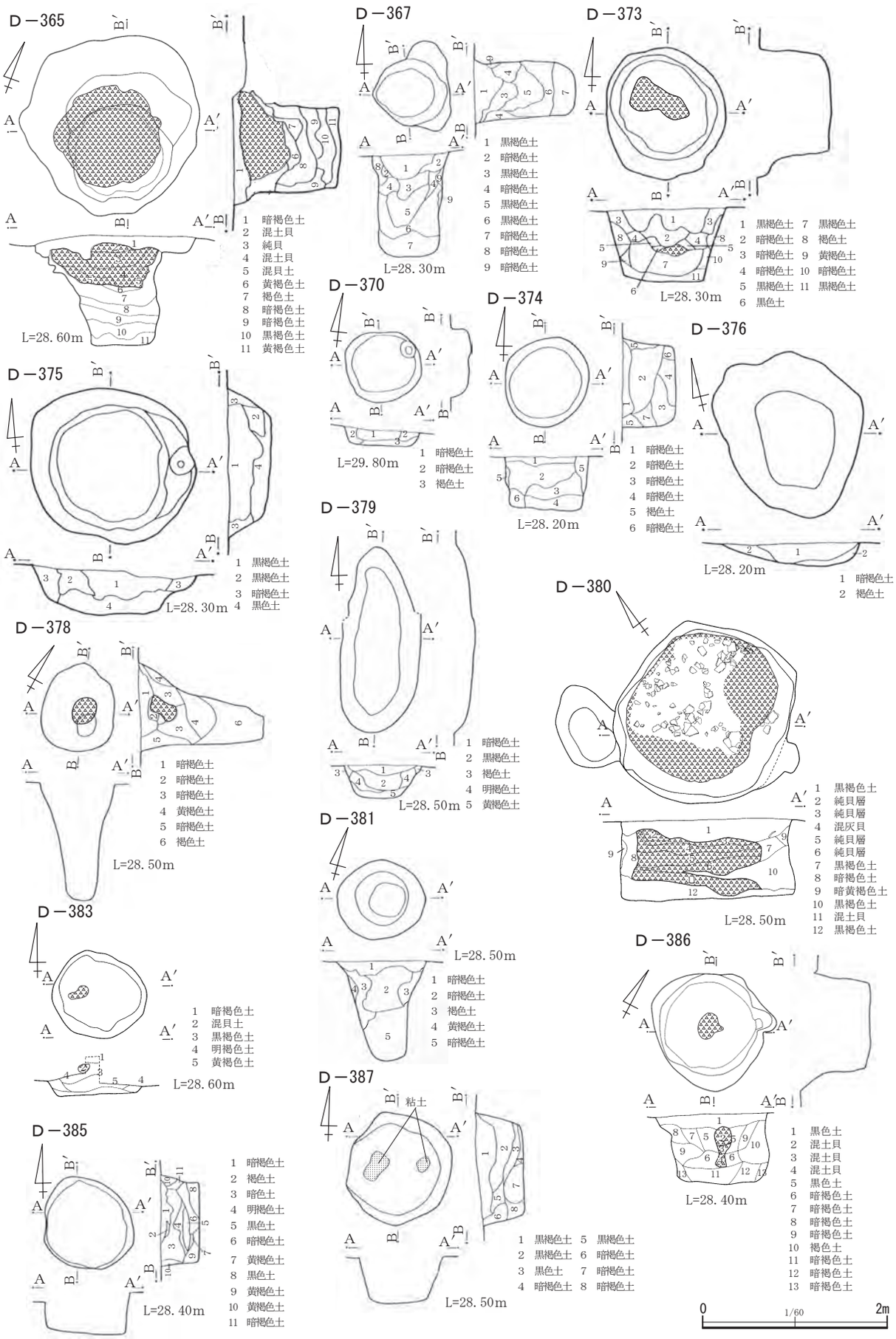
D－358



D－365

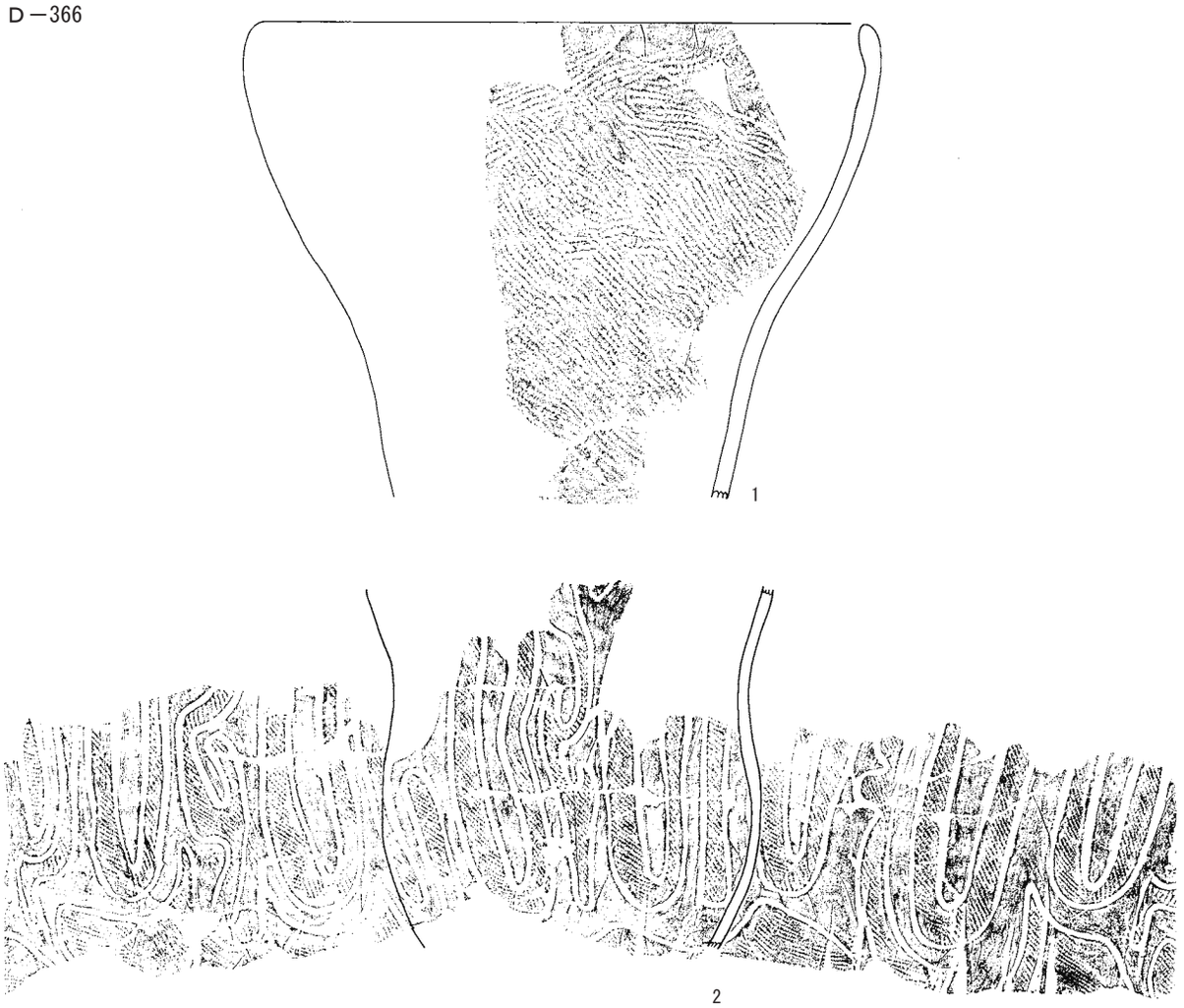


第 236 図　土坑 (44) 土器 D-357 ～

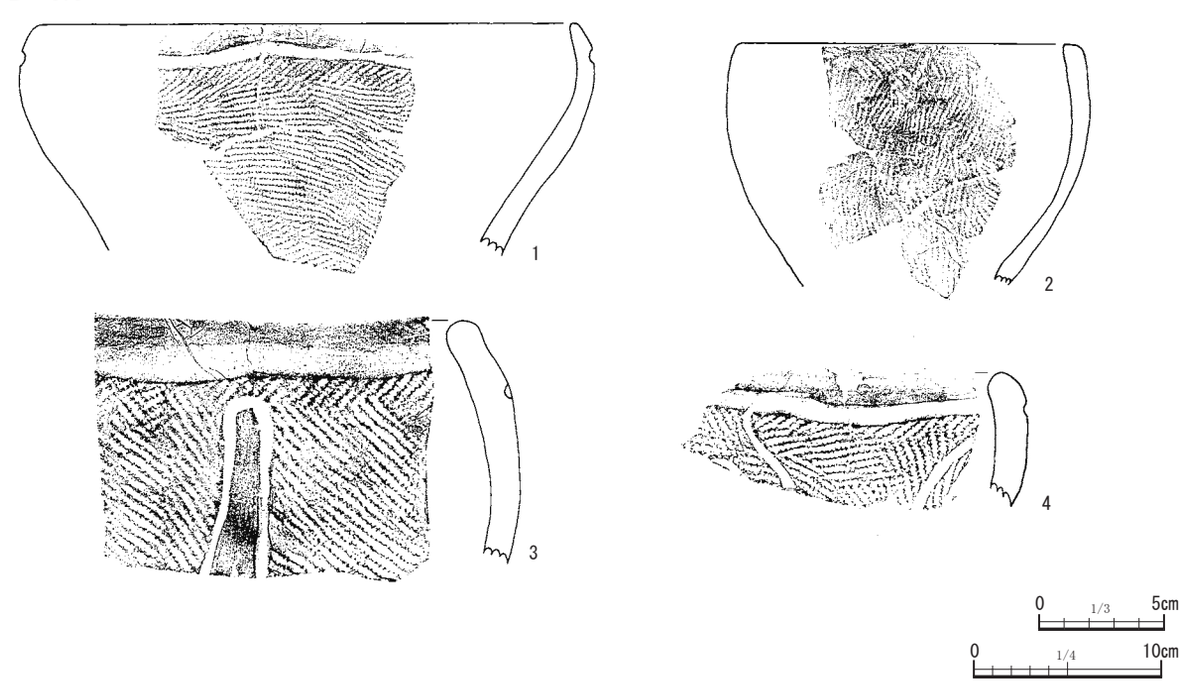


第 237 図　土坑 (45)D-365 ～

D－366



D－373



第 238 図　土坑 (46) 土器 D-366 ～

状の貝層を形成している。破砕貝が主体であり、図示していないが純破砕貝層や混土層がある。８層中にもごく小さな貝ブロックがみられた。３は口縁端部無文部と以下の縄文施文域は隆帯によって区画されるのではなく、無文部のケズリ調整により器壁が減じ、これにより作出された段により区画される。破片右端には縦位の沈線が施される。４は口縁下は幅広の凹線が巡る。体部の沈線は口縁部下の凹線より明瞭に浅く、凹線施文後に施される。縄文は磨り消されることはない。７は大形の壺形土器の破片であろう。

いずれの破片も明確に後期初頭に下る可能性を指摘し得ない。土器以外では剥片類１点が出土している。

D-375(第 237・239 図・図版 30)　１は四隅方向から大径の穿孔が認められる突起部である。結果として横位方向と縦位方向の橋状を呈することになる。幅広の無文帯が湾曲・外反する壺形の個体であろうか。突起部自体は肉厚で焼成はやや甘く、調整の丁寧さに欠ける印象がある。５は早期後半の撚糸文土器である。

５を除き中期後半の破片であろう。土器以外では黒曜石の石核２点 (111・112) が出土している。

D-378(第 237 図)　ピットの覆土上部に 30cm × 25cm、厚さ 25cm の小さな純貝層を形成している。イボキサゴのみと記録されている。掲載遺物はない。

D-379(第 237・239 図)　２は無文に調整された口縁下の縄文は横方向、以下は縦方向に施される。３の縄文は縦方向のみに施される。薄手の個体である。いずれも口縁無文部と縄文部は沈線や凹線等によって区別されず、縄文と調整のみによって区別される。２は中期後半に属する破片で、３は後期初頭に下る可能性を捨てがたい破片である。

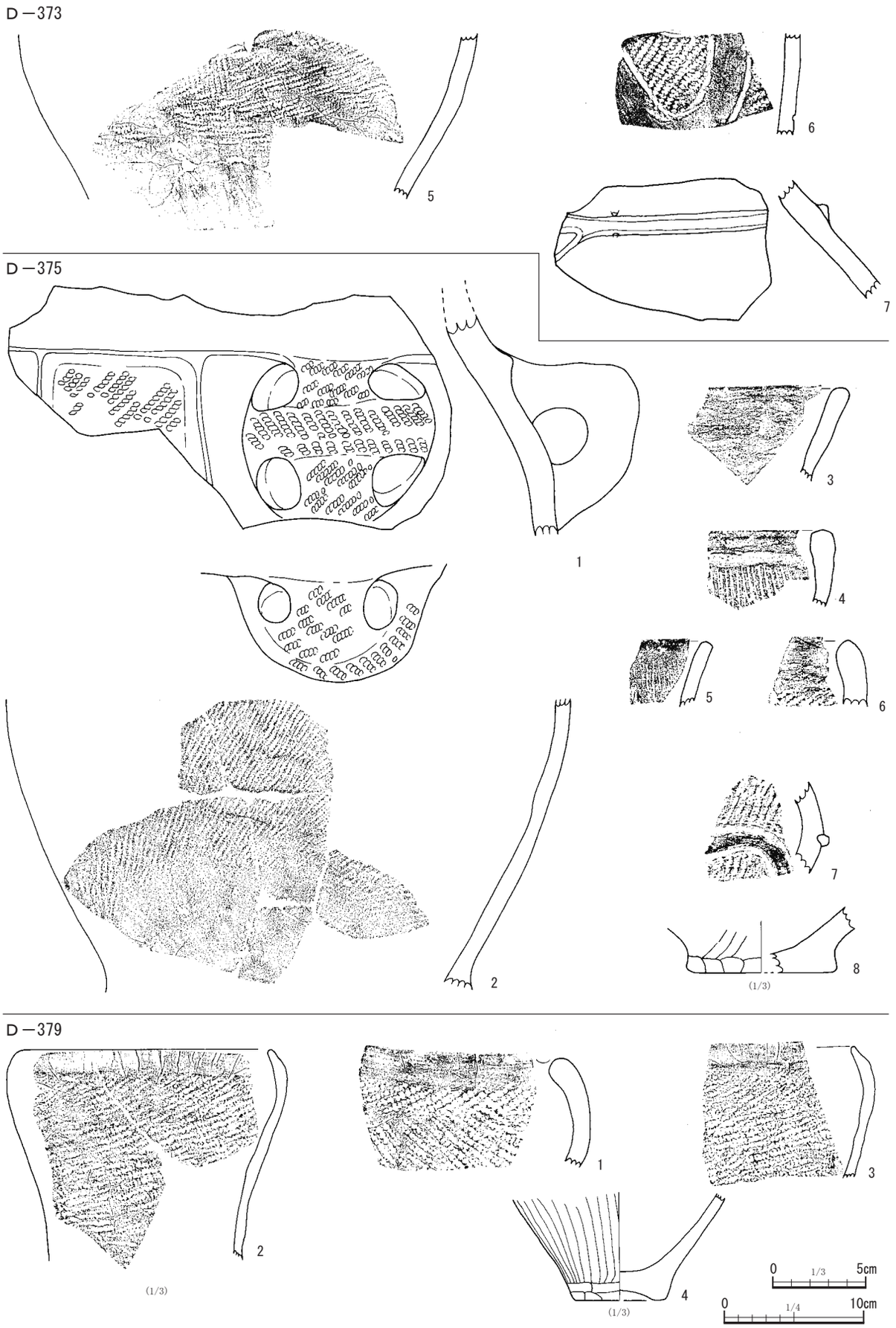
D-380(第 237・240・241・243 図・図版 30)　小竪穴の覆土下部から中部に 150cm × 120cm、厚さ 60cm の比較的大きな貝層を形成している。間層 (10 層) の存在によって上部貝層 (２～６層) と下部貝層 (11 層) に区分でき、上部貝層はさらにマテガイの集中や破砕貝層などによって分層可能である。土器が多数出土しており、①覆土最下層 (12 層)、②上部貝層の下部 (５層)、③上部貝層上面の順に多い。土器の番号と照合できないため個別の出土状況は不明である。

１は内外面が雑な器面調整で、口縁無文部は粗雑な凹線によって区画される。凹線内に縄文が残る部分がある。体部上半のＵ字状意匠の沈線に比べ、体部下半の逆Ｕ字状意匠の沈線の方が細い。上半部の破片と下半部の破片は接合していない。２・３は口縁下に凹線が巡り、縄文施文域上部は横方向、以下は縦方向に縄文が施される。４は断面が蒲鉾形の隆帯が口縁下に巡り、隆帯両脇は凹線風に明瞭に調整される。６の口縁下にはやや浅い隆帯が巡り、以下の縄文は全て縦方向の施文である。７の口縁無文部下は頂部に連続押捺を施した隆帯が巡り、隆帯下には沈線が認められる。破片右下の無文部脇には沈線が認められる。10 の突起部の基部から左右に向けて極めて浅い凹線が施され、以下の縄文帯との区画をなす。13 は粗雑で低い隆帯の両脇は雑に調整される。20 の破片上部はＵ字状意匠の最下部の沈線である。破片下半の逆Ｕ字状意匠の沈線と共に、沈線施文の圧により粘土がやや浮き上がり、沈線脇に微粒帯状の効果がある。上下の施文域間の括れ部には、丸先棒状工具による連続円形押捺が施される。

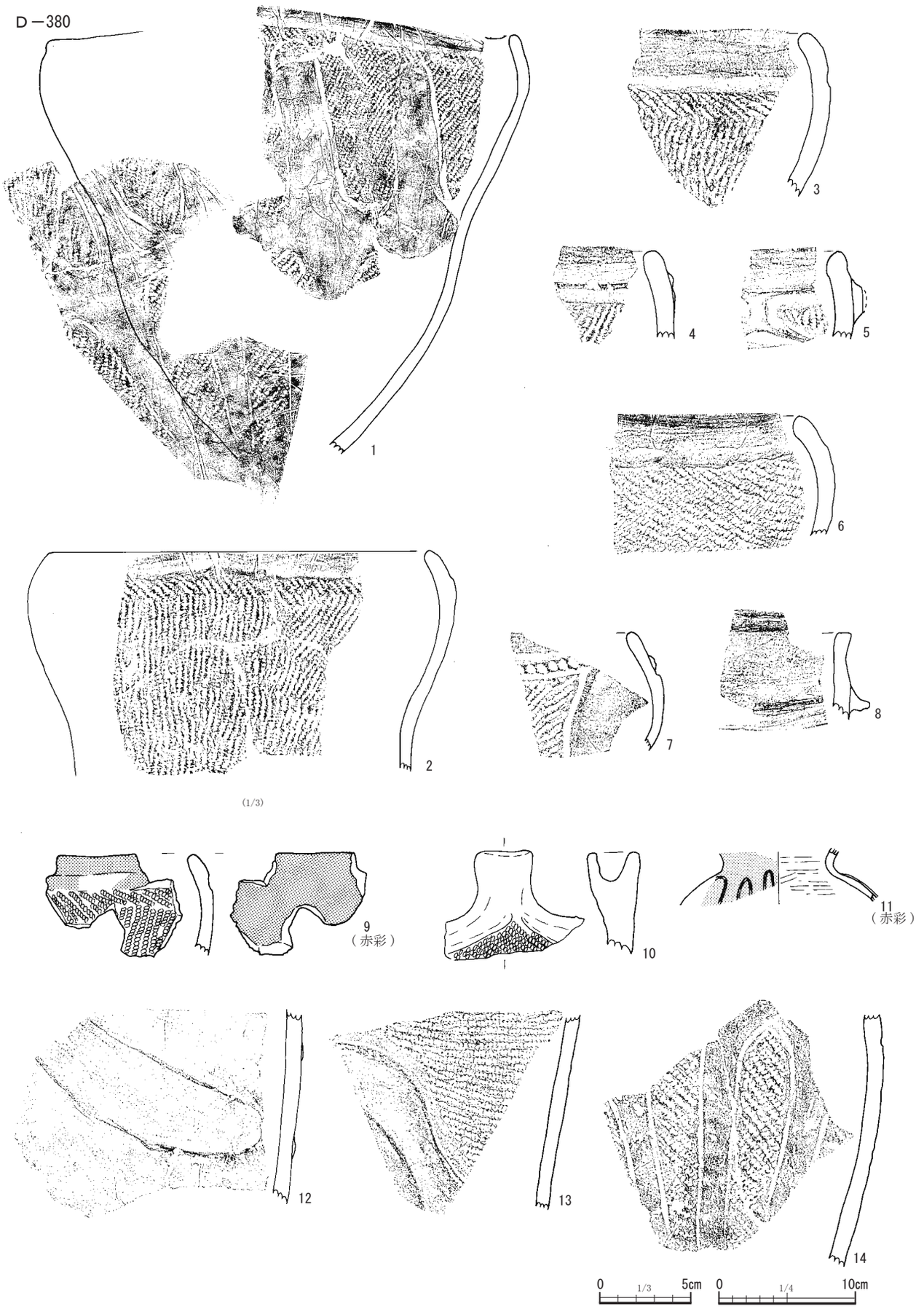
いずれの破片も中期後半に属するものであろう。土器以外では貝刃３点 (第 298 図２・３・５)、磨製石斧２点 (第 281 図２・６)、磨石類１点 (74)、半円形の滑石玉１点 (第 295 図２)、石鏃１点 (第 291 図 17)、剥片類２点が出土している。玉は全面に粗い線状痕が残り、穿孔部に紐ずれ痕がみられる。

D-383(第 237・241 図・図版 30)　土坑の覆土下部に 20cm × 10cm、厚さ 15cm のごく小さなブロック状貝層を形成している。微細図と出土状況写真から、殻長 10cm を超えるハマグリの集積と推定される。掲載遺物はない。

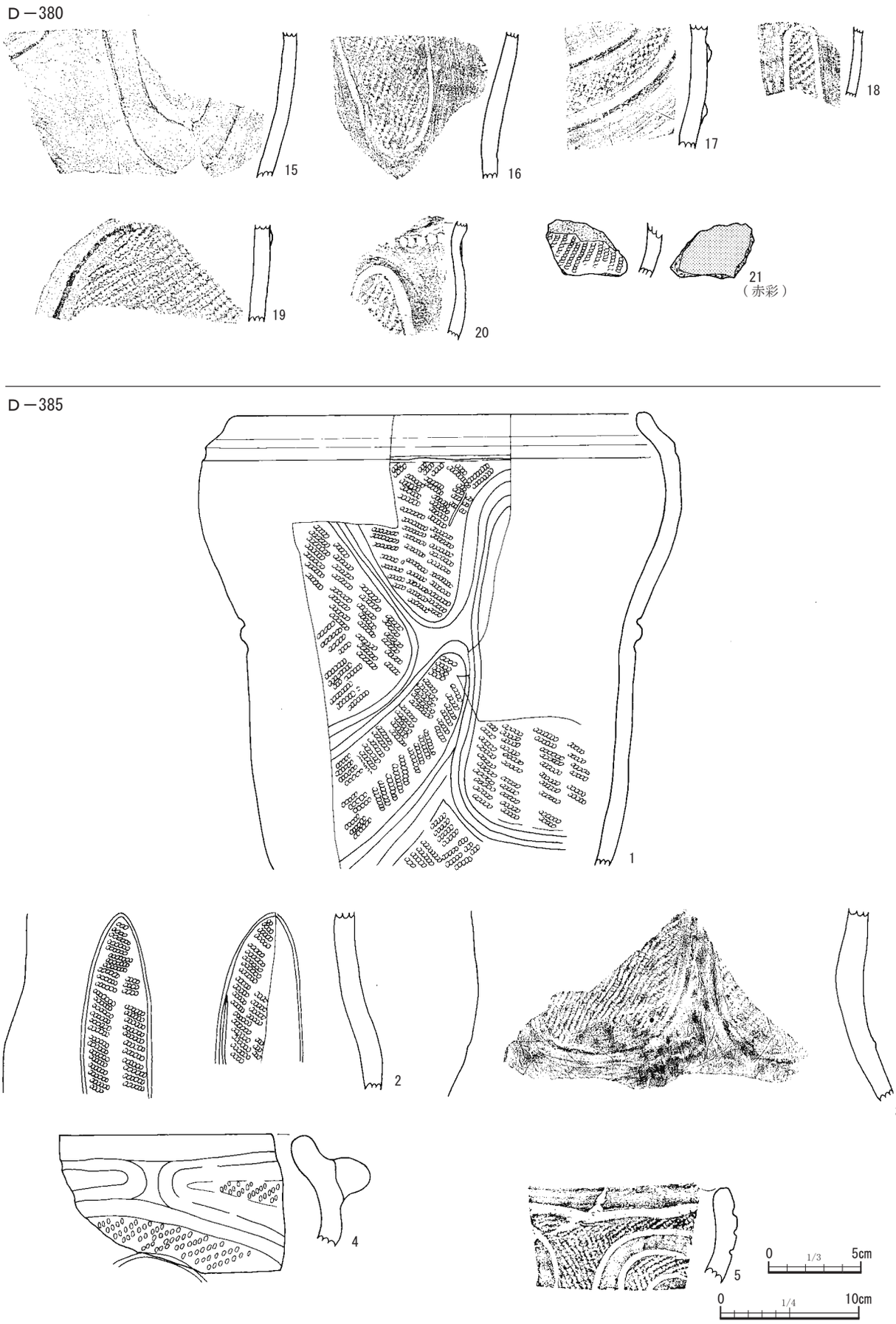
D-385(第 237・241 図・図版 30)　１は断面が蒲鉾形で丸みを帯びた隆帯脇が凹線風に明瞭に調整さ



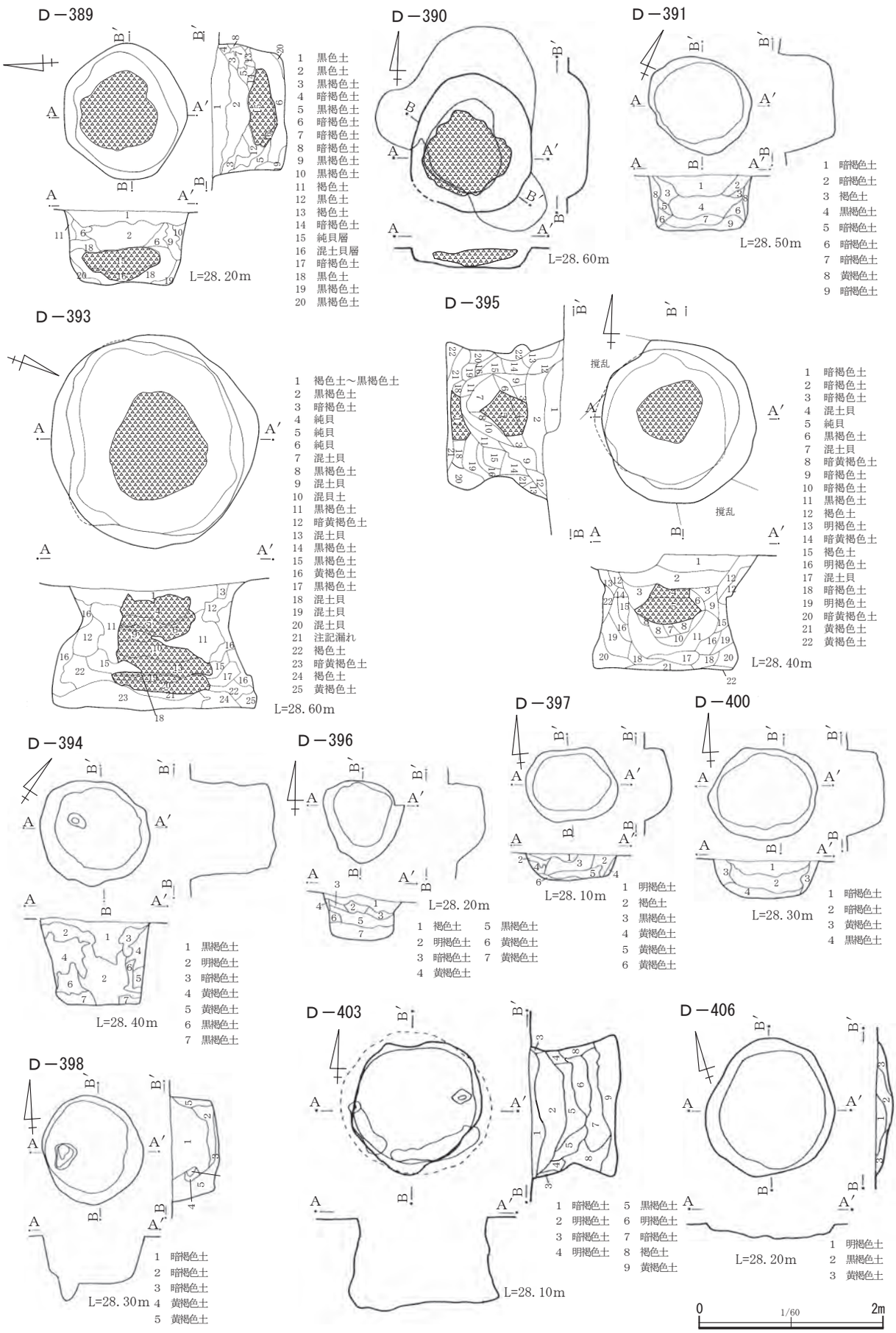
第 239 図　土坑 (47) 土器 D-373 ～



第 240 図　土坑 (48) 土器 D-380(1)

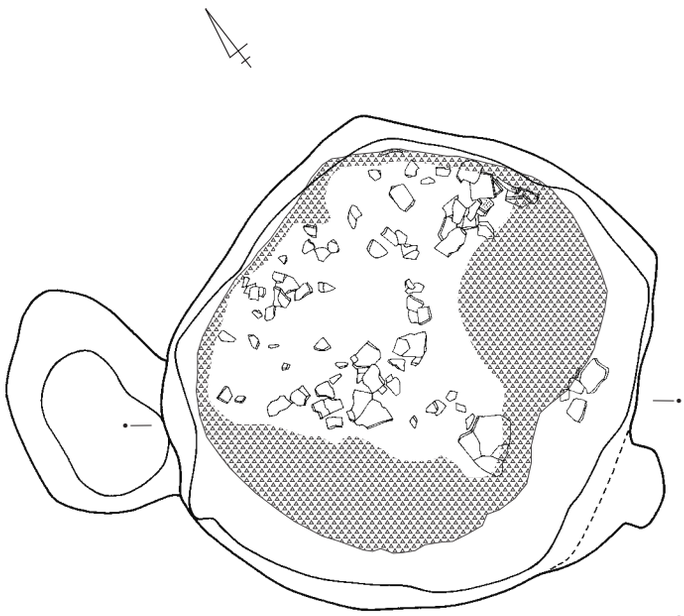


第 241 図　土坑 (49) 土器 D-380(2) ～



第 242 図　土坑 (50)D-389 ～

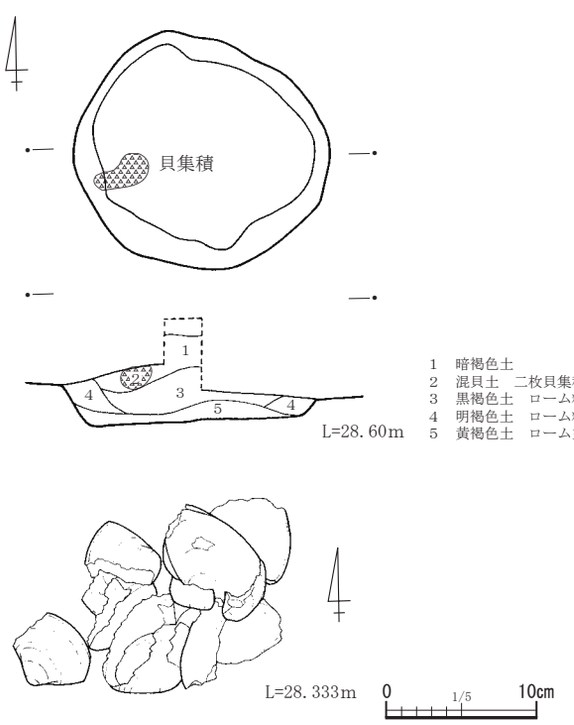
D－380



L=28.50m

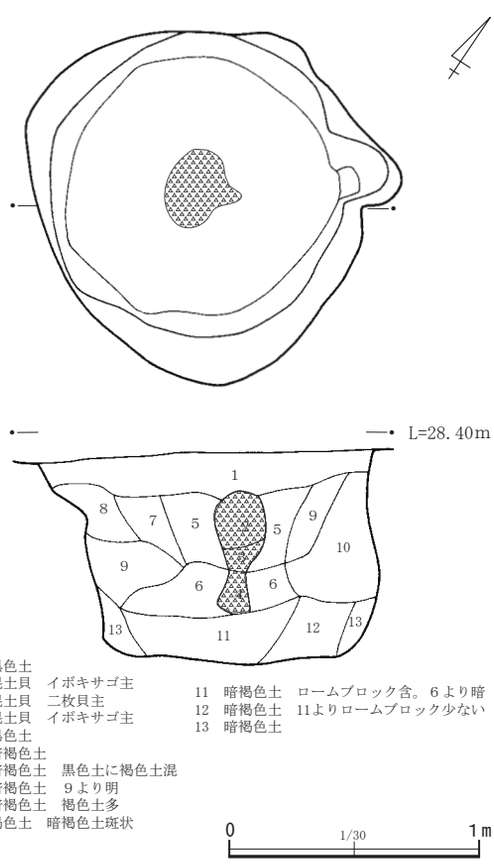
1　黒褐色土
2　純貝層　二枚貝・イボキサゴ・破砕貝
3　純貝層　破砕貝主にイボキサゴ含。マテガイブロック状
4　混灰貝　二枚貝・破砕貝主。木炭粒多
5　純貝層　二枚貝・イボキサゴ主。木炭粒・灰含
6　純貝層　イボキサゴ主
7　黒褐色土　1より黒味強い
8　暗褐色土
9　暗黄褐色土
10　黒褐色土
11　混土貝　二枚貝主
12　黒褐色土

D－383



1　暗褐色土
2　混貝土　二枚貝集積
3　黒褐色土　ローム粒含
4　明褐色土　ローム粒多
5　黄褐色土　ローム主

D－386



1　黒色土
2　混土貝　イボキサゴ主
3　混土貝　二枚貝主
4　混土貝　イボキサゴ主
5　黒色土
6　暗褐色土
7　暗褐色土　黒色土に褐色土混
8　暗褐色土　9より明
9　暗褐色土　褐色土多
10　褐色土　暗褐色土斑状
11　暗褐色土　ロームブロック含。6より暗
12　暗褐色土　11よりロームブロック少ない
13　暗褐色土

第 243 図　土坑 (51)D-380･D-383･D-386 貝層・遺物分布

れる。３は粗雑で低い隆帯で両脇はやや粗雑な調整が認められる。５は口縁沈線下は横方向に縄文が施される。いずれの破片も中期後半に属するものであろう。

D-386(第 237・243・248 図・図版 30)　小竪穴の覆土中部に 30cm × 25cm、厚さ 45cm の柱状の混土貝層を形成している。柱穴等が存在した可能性がある。図示しないが、中間に二枚貝主体の部分を挟んで上下にイボキサゴ主体となっていた。１は隆帯の断面形態は三角味を帯び、頂部はやや鋭利な印象がある。２は早期後半撚糸文土器である。１は中期後半に属する破片である。

D-389(第 242・244・248 図・図版 30)　小竪穴の覆土下部に 70cm × 60cm、厚さ 25cm のレンズ状の貝層を形成している。イボキサゴ主体の純貝層と、その下の混土貝層が記録されている。

１は小形の個体で、沈線はやや浅く鋭利な印象がある。２は隆帯上面や隆帯側面に縄文が施される。器表面の調整はやや粗く、風化が進行している。１・２共に後期初頭に下る可能性を有する破片である。土器以外では磨石類１点 (第 286 図 41)、剥片類１点が出土している。

D-390(第 242・248 図・図版 30)　小竪穴の底面直上に 95cm × 90cm、厚さ 25cm の貝層を形成している。アサリ主体の混土貝層であり、暗褐色土・黒色土を多く含んでいた。底面付近にはイボキサゴが集中する箇所があった。２は隆帯側面に縄文が施される。４は多裁竹管もしくは板状工具による浅く粗雑な沈線が施される。５の隆帯下は明瞭に調整され縄文は認められない。１は早期条痕文土器、２・４は後期初頭に下る可能性のある破片、５は中期後半の破片である。土器以外では石核１点 (108)、剥片類１点が出土している。

D-393(第 242・244・248 図・図版 31)　小竪穴の下部から上部に 105cm × 90cm、厚さ 100cm の貝層を形成している。繰り返し貝殻と土が廃棄されている。貝殻は中央の窪んだ部分に集まり、周囲の貝殻の少ない部分は腐朽したことによるものであろう。分層は明瞭であり、上部の４～７層、中部の９・10・13 層、下部の 18 ～ 21 層の間には間層がある。

１は口縁下隆帯側面に縄文が施される。３は微隆起側面に縄文が施される部分と明瞭な調整により認められない部分がある。４は口縁部が肥厚せずに直に立ち上がる。５は単位部下に焼成前の孔が認められる。６は破片最下端に沈線と列点が認められる。８は加曽利Ｅ式系譜の破片であるが、器面の軟らかい段階で沈線が施され、沈線施文により粘土が両脇にはみ出る。９は破片左上部に斜位の沈線が施される。風化の進行した破片である。

１・２・７は中期後半の破片、３・４・８は後期初頭に下る破片、９は後期初頭、５・６・11 は称名寺式最終末の段階に属する破片で、堀之内１式期に下る可能性もある。土器以外では土器片錘１点 (第 279 図 62)、貝刃１点 (第 298 図４) が出土している。

D-394(第 242・248 図・図版 31)　１は加曽利ＥⅡ式土器もしくは加曽利ＥⅢ式土器であろう。

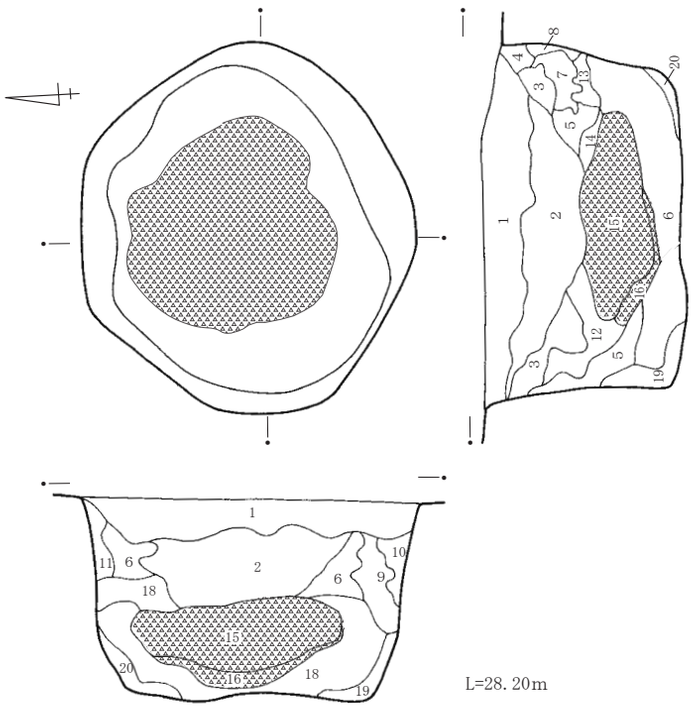
D-395(第 242・245 図・図版 31)　小竪穴の覆土中部に 80cm × 60cm、厚さ 60cm の上部貝層、覆土下部に径 40cm、厚さ 20cm の下部貝層を形成している。現地でコウイカ科貝殻破片１点が取上げられている。掲載土器はない。

D-396(第 242・249 図)　１は破片左上の口縁部分に隆帯の貼付が認められる。２は縦位の沈線の右側にも縄文が施されている。軽易にナデ消されているのであろうか。１・２共に堀之内１式期の破片である。

D-398(第 242・249 図・図版 31)　１はやや薄手で焼成が堅緻な前期に属する破片である。

D-400(第 242・249 図)　１は低い隆帯で断面は三角形を呈し、頂部はややとがる。側面に縄文は認められない。３は器面が比較的軟らかい段階で粗雑な沈線が施される。４は加曽利Ｅ式系の土器である。１・２は中期後半、３は後期初頭の土器である。４は両者の可能性がある。

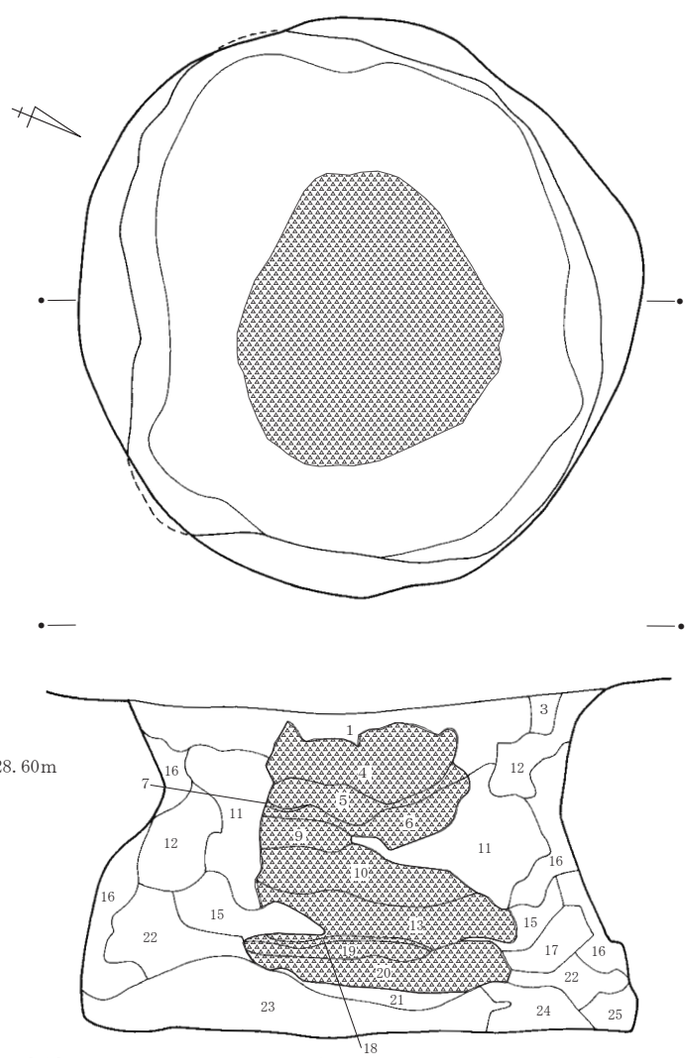
D－389



L=28.20m

1　黒色土
2　黒色土　1より暗、ローム粒含
3　黒褐色土
4　暗褐色土
5　黒褐色土　部分的にローム含
6　暗褐色土　ローム粒含
7　暗褐色土　3・4より暗
8　暗褐色土　4より暗、ローム粒含
9　黒褐色土　10より褐色土少
10　黒褐色土　褐色土斑状
11　褐色土
12　黒色土　18よりローム少
13　褐色土　ローム粒なし
14　暗褐色土　5より褐色味おびる
15　純貝層　イボキサゴ主体
16　混土貝層
17　暗褐色土　ロームブロック多
18　黒色土　ローム粒・ブロック多
19　黒褐色土　ローム粒多
20　黒褐色土　19よりローム少

D－393



L=28.60m

1　褐色土～黒褐色土
2　黒褐色土
3　暗褐色土　ローム多
4　純貝　二枚貝主
5　純貝　二枚貝・イボキサゴ
6　純貝　イボキサゴ
7　混土貝　イボキサゴ
8　黒褐色土
9　混土貝　二枚貝
10　混貝土　二枚貝・イボキサゴ
11　黒褐色土
12　暗黄褐色土
13　混土貝　マガキ
14　黒褐色土
15　黒褐色土
16　黄褐色土
17　黒褐色土
18　混土貝　二枚貝
19　混土貝　イボキサゴ
20　混土貝　二枚貝
21　注記漏れ
22　褐色土
23　暗黄褐色土
24　褐色土
25　黄褐色土

0　1/30　1m

第244図　土坑(52)D-389･D-393貝層

D-403(第 242・249 図)　３は中期後半に属する破片である。

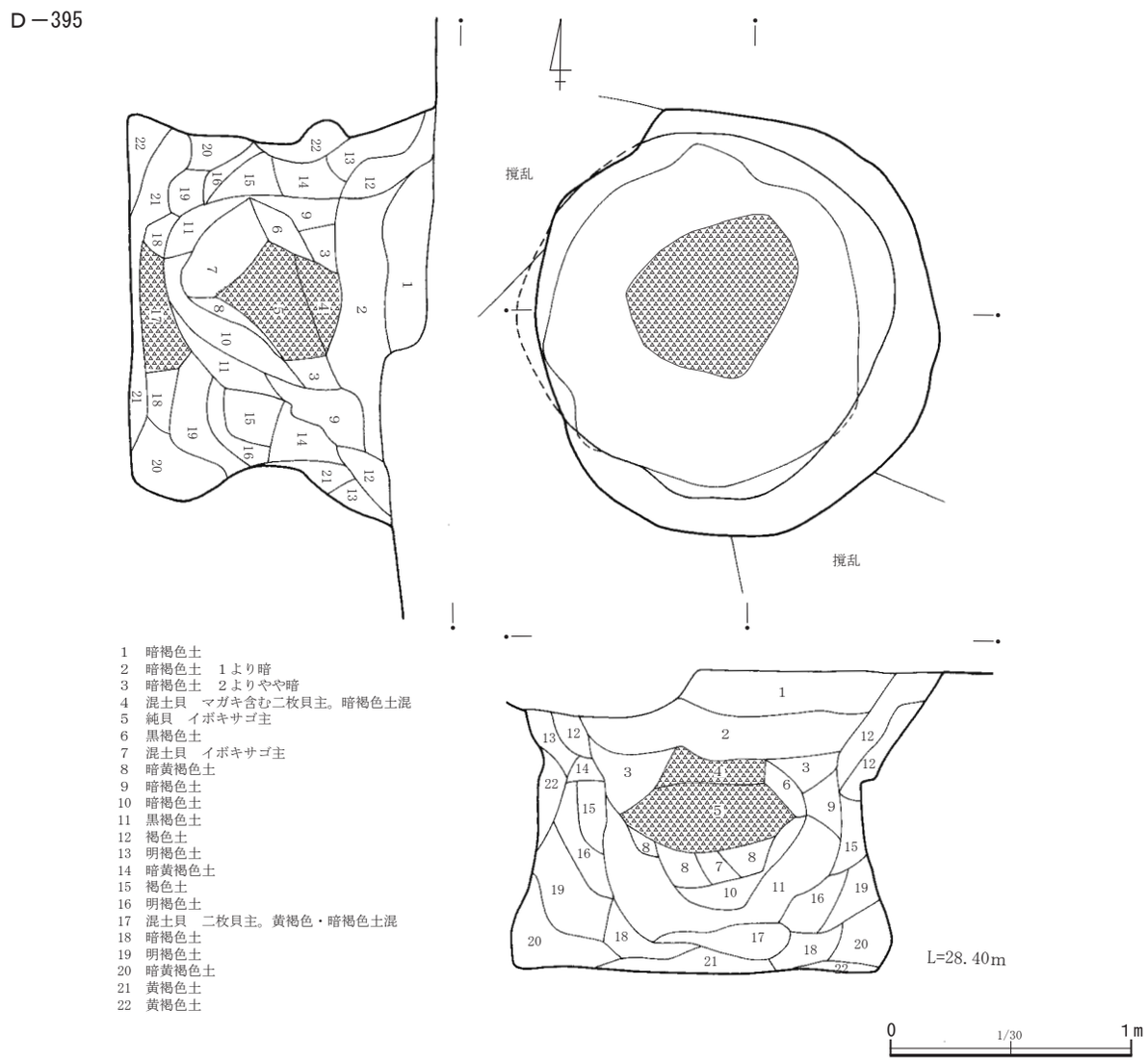
D-409(第 246・249 図・図版 31)　１の口縁下無文部と縄文施文部は、浅く幅広の凹線によって区分される。凹線施文によりはみ出た粘土が縄文部にかぶる。縄文部の縄文の施文方向は同一である。２は小形の個体で煤の付着が認められる。口縁無文下に巡る沈線と、以下の縦位の沈線は接しない。３の隆帯側面には縄文が認められる。４は単位部の突出部は擦れている。隆帯は粗雑で側面の調整も粗雑である。５は受熱の痕跡が認められる。沈線は比較的深い。

３・４は後期初頭に下る可能性がある。土器以外では石鏃未成品１点 (74) が出土している。

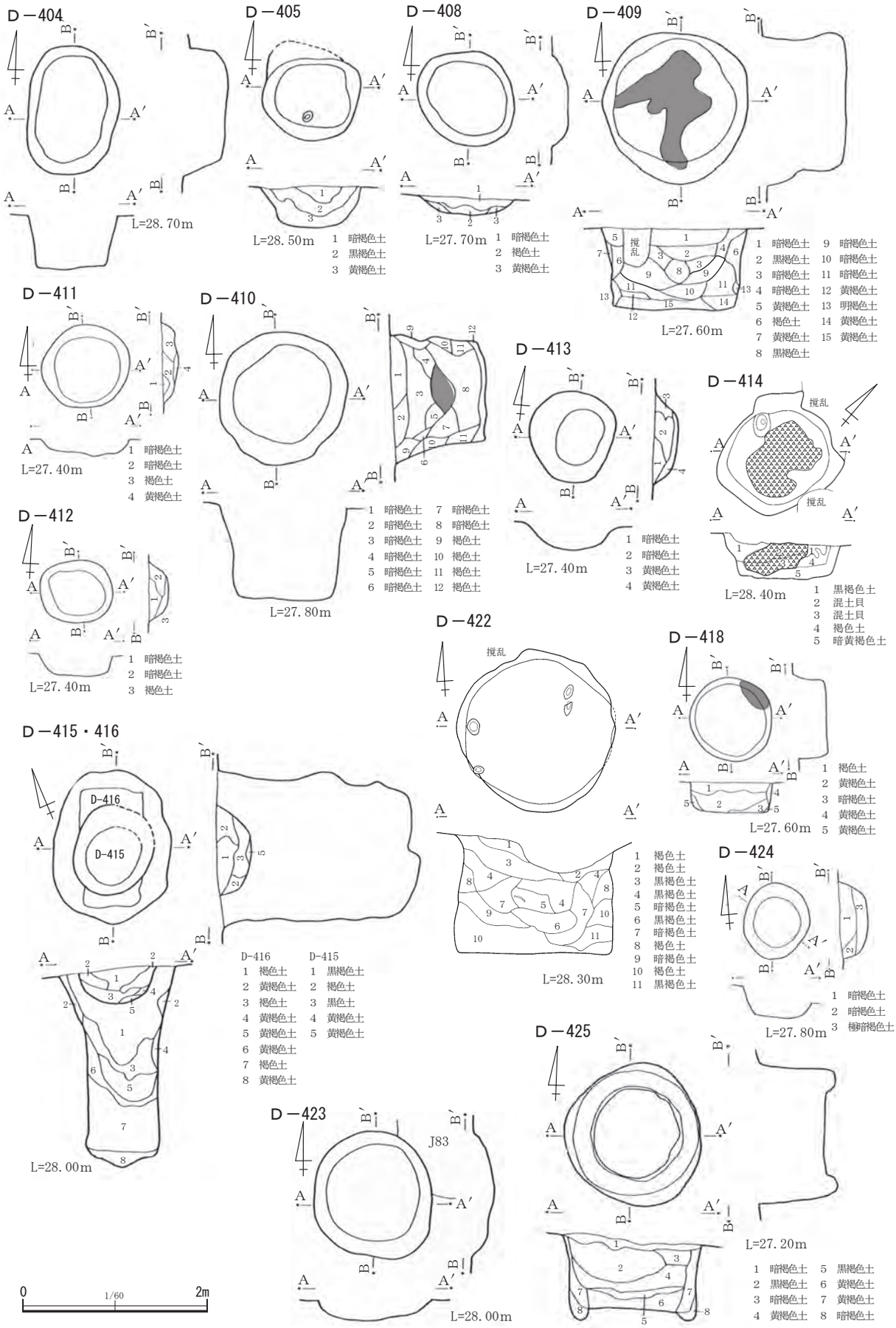
D-410(第 246･249 図･図版 31)　１は器面が硬化した段階で浅い沈線が施される。縄文は付加条である。器表面は若干の剥落が認められるが、風化によるものではなく、受熱によるものであろうか。２は口縁下隆帯の側面には縄文が認められる。４は口縁下隆帯の側面には縄文が認められるが、縦位の隆帯側面は明瞭に調整される。

１・２・４は後期初頭に下る破片、３は早期撚糸文土器である。土器以外では剥片類１点が出土している。

D-414(第 246・247 図・図版 31)　小竪穴の覆土下部に 75cm × 45cm、厚さ 20cm の貝層を形成している。全体にイボキサゴ主体だが、混じる土の色調により上下２層に区分可能である。掲載土器はない。

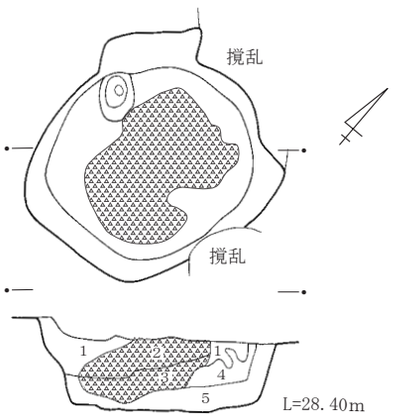


第 245 図　土坑 (53)D-395 貝層



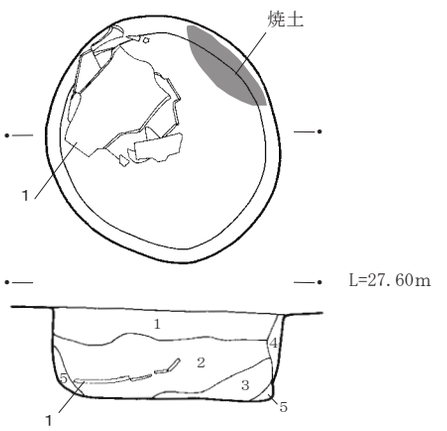
第 246 図　土坑 (54)D-404 ～

D－414



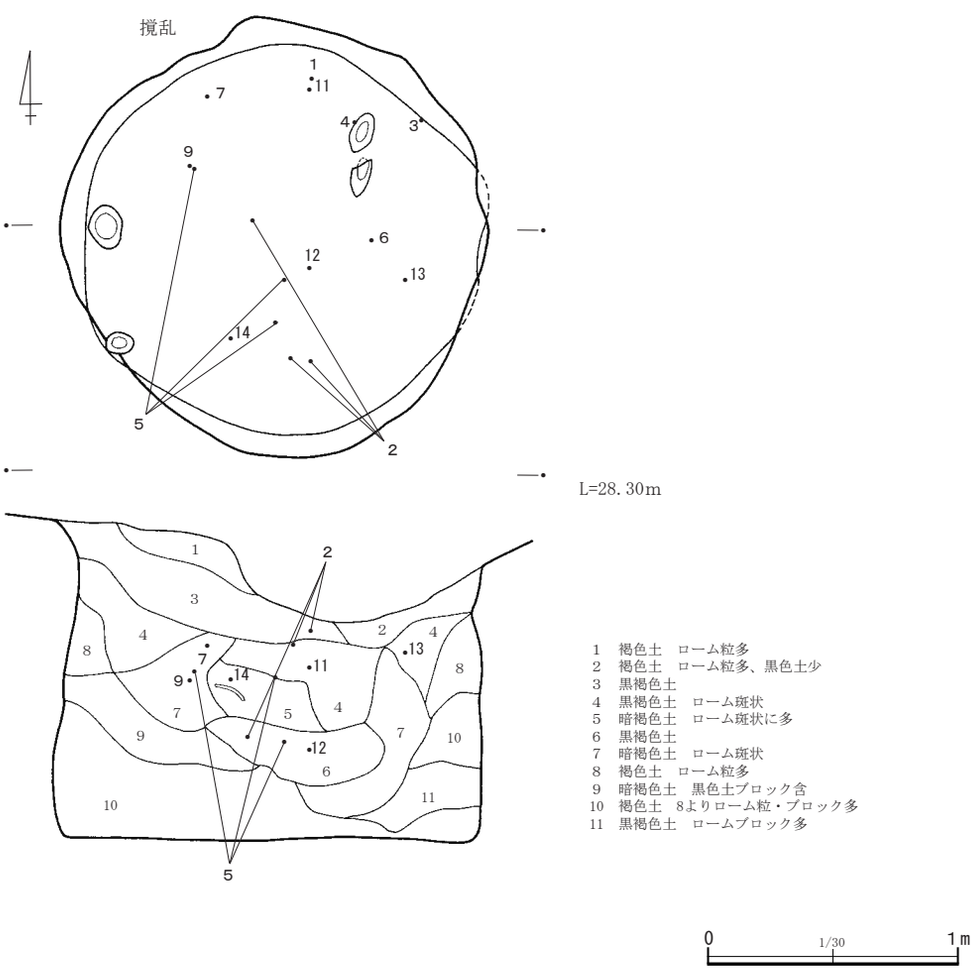
1　黒褐色土
2　混土貝　イボキサゴ主。黒色土混
3　混土貝　イボキサゴ主。褐色土混
4　褐色土
5　暗黄褐色土

D－418



1　暗褐色土
2　褐色土
3　暗褐色土
4　暗黄褐色土　ローム主
5　黄褐色土　ロームと褐色土

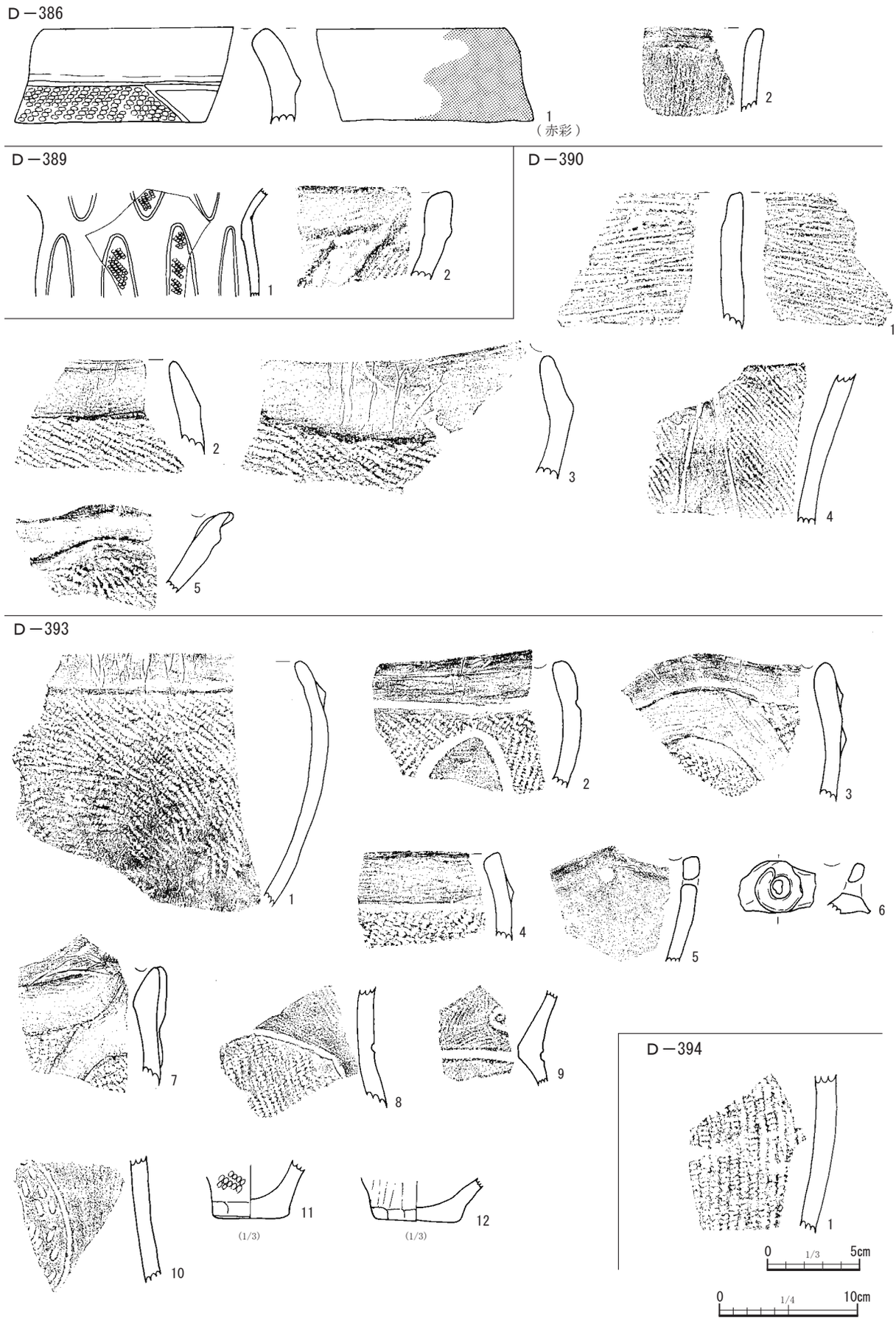
D－422



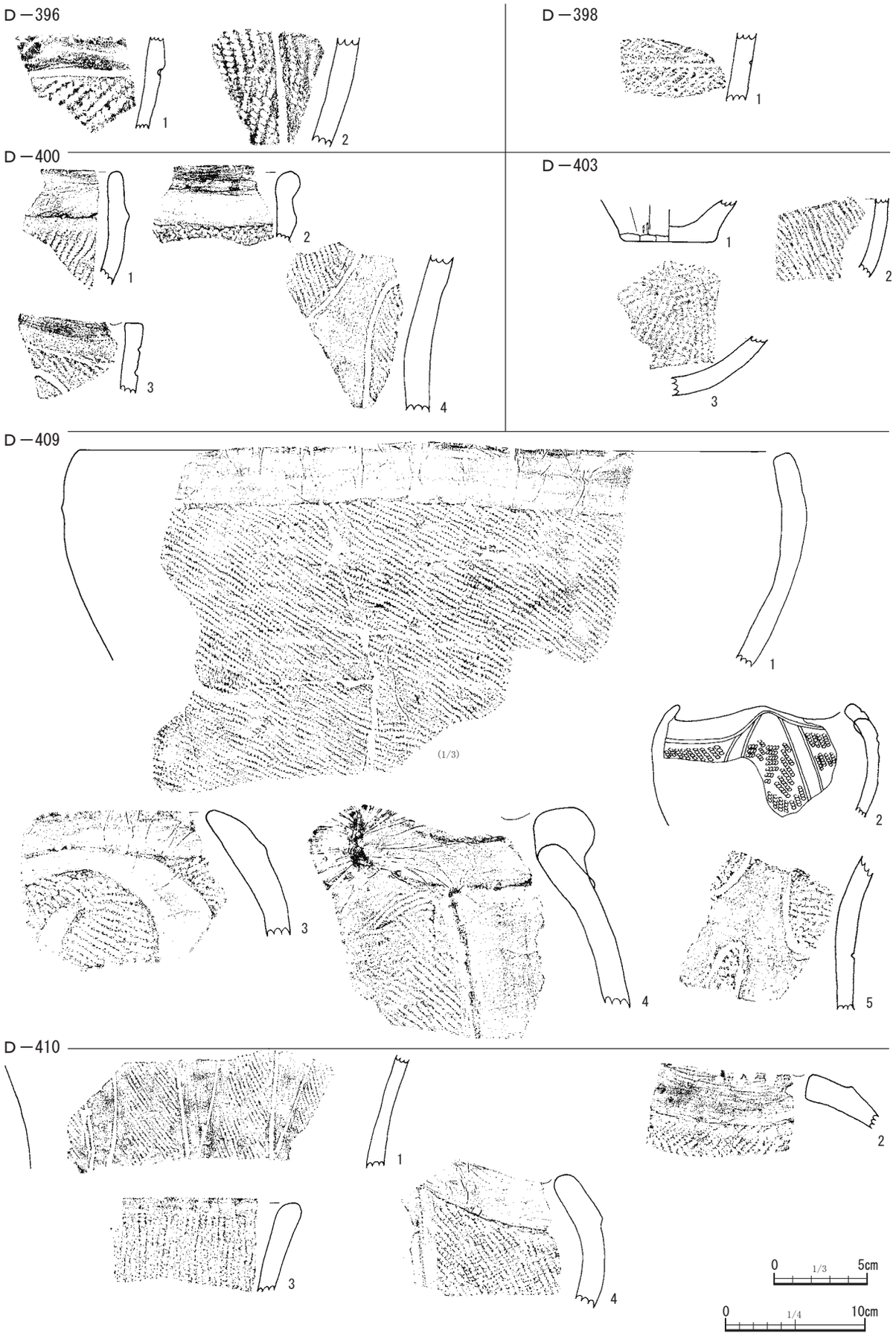
1　褐色土　ローム粒多
2　褐色土　ローム粒多、黒色土少
3　黒褐色土
4　黒褐色土　ローム斑状
5　暗褐色土　ローム斑状に多
6　黒褐色土
7　暗褐色土　ローム斑状
8　褐色土　ローム粒多
9　暗褐色土　黒色土ブロック含
10　褐色土　8よりローム粒・ブロック多
11　黒褐色土　ロームブロック多

0　1/30　1m

第 247 図　土坑 (55)D-414･D-418･D-422 貝層・遺物分布



第 248 図　土坑 (56) 土器 D-386 ～



第 249 図　土坑 (57) 土器 D-396 ～

D-418(第 246・247・250 図・図版 31・48)　小竪穴の覆土２層から深鉢 (1) が出土している。破片を重ねた状態であり、口縁～胴下部が復元された。北東壁際から焼土が出土している。

Ｊ字状意匠と剣先状意匠が施され、Ｊ字状意匠内には意匠に沿うように沈線が充填され、結果として３本単位の意匠描出のような効果を有する。口縁部は同心円状の意匠による単位部と、単位部脇には、単沈線もしくは刺突による横位の連鎖状を呈する部分と、３本一対の横位の沈線が施され、両者の間には８の字状の貼付文が施される。頸部には縦位の連鎖状貼付文が施され、頸部と体部は、３本単位の沈線で区画され、８の字状貼付文以下には小波状文が施される。個体の大きさに比べやや焼成は甘い。器表面の風化・剥落がやや進行している。堀之内１式期の個体である。

D-420　剥片類１点が出土している。

D-422(第 246・247・251・253 図・図版 31・48)　ほぼ垂直に掘り込まれた小竪穴の覆土中層～上層にかけて土器片が比較的多く出土している。土器の多い部分には炭化物も多く含んでいた。土器は破片主体だが２は上半部が比較的大きく接合した。

１は口縁部無文部の作りは雑である。縄文の施文方向は不定で、間隔は疎である。２は口縁下の横位の沈線施文後に、以下の体部の意匠が施される。４は２片の破片からなり、両者は接合しない。６は単位部の波状を呈する。単位部下の円形意匠は、沈線により一筆書きされる。沈線が隆帯に付着することはない。円形意匠脇には舌状の意匠が施される。11 は口縁下隆帯以上に縄文が認められる。

１・２・11 などは後期初頭に下る可能性が高い破片である。土器以外では石鏃１点 (第 291 図９) が出土している。

D-425(第 246・253 図・図版 31)　１は口縁下の隆帯上に斜位の単沈線による刻みが連続的に施される。２は鍔付土器の破片である。やや雑な作りの破片である。３の破片上端部は隆帯で、隆帯上に斜位の刻みが認められる。縄文は磨り消されない。４は櫛状工具による蛇行文が施される。

１・２は中期後半の破片、３は堀之内１式期の破片、４は称名寺式期後半から堀之内１式期の粗製土器であろう。

D-427(第 252・253 図)　１は口縁直下の極めて幅狭の無文部下に、竹管状工具により円形刺突が連続押捺される。以下は縄文地に円形浮文が貼付けされ、逆Ｕ字状の沈線が施される。沈線間は無文である。２の口縁下は、左半では沈線内に棒状工具による単沈線風の連続刺突、破片右半では円形押捺が認められる。体部の縄文地部分では、沈線間は磨り消される。３は沈線間に粗雑な刺突が充填される。

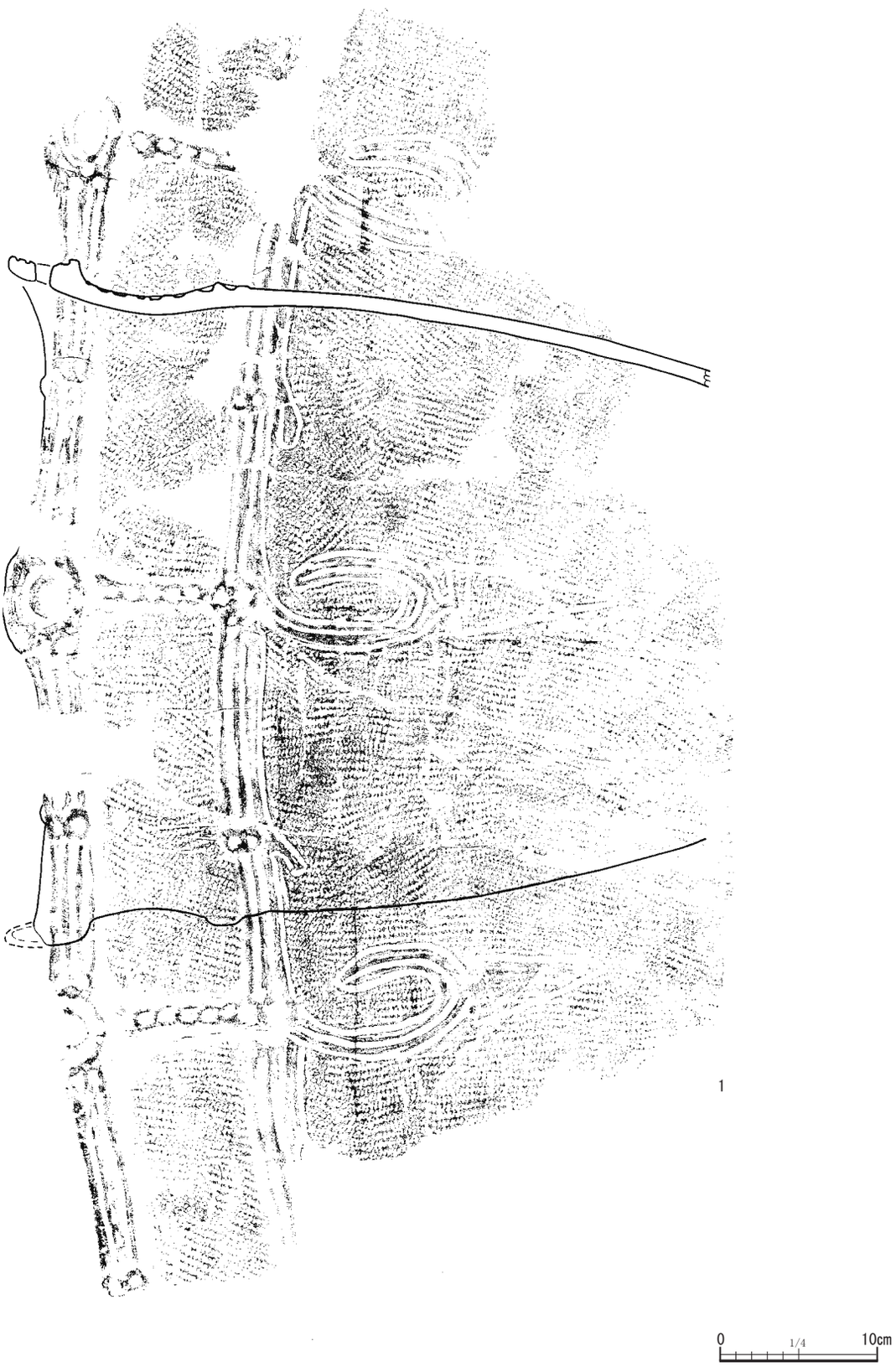
１・２は堀之内１式期の破片、３は称名寺式期後半期もしくは堀之内１式期の破片である。土器以外では石鏃未成品１点 (75) が出土している。

D-433(第 228・252・253 図)　ピットの下部に 60cm × 40cm、厚さ 30cm の貝層を形成している。１層は二枚貝とイボキサゴを主体とした混土貝層、３層は二枚貝主体の貝を含む混貝土層である。

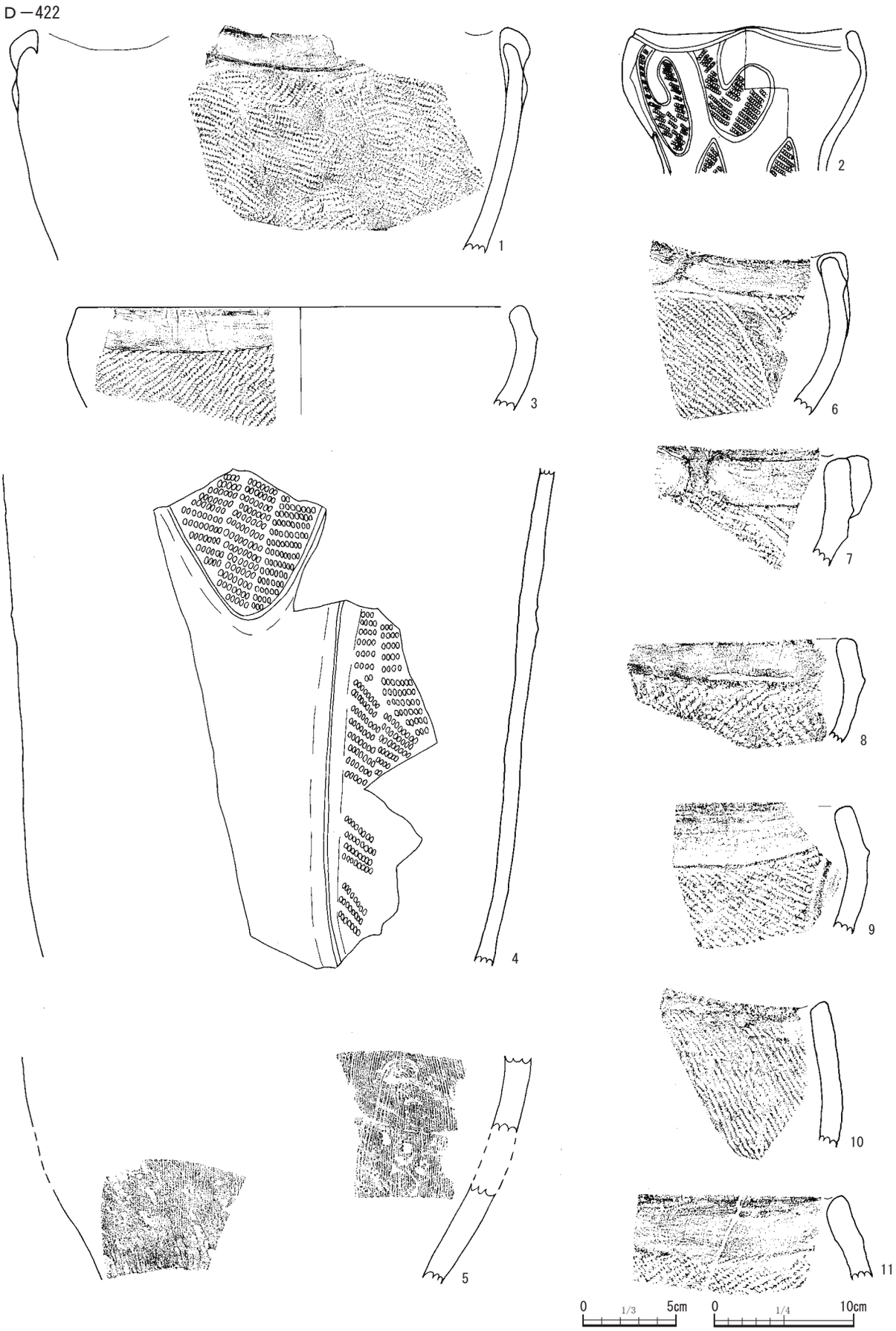
１は口縁無文下の隆帯下は幅広の凹線風に調整され、以下は横位縄文が施され、その下は縦位に施される。中期後半の破片であろう。

D-434(第 252 図)　磨石類１点 (19) が出土している。

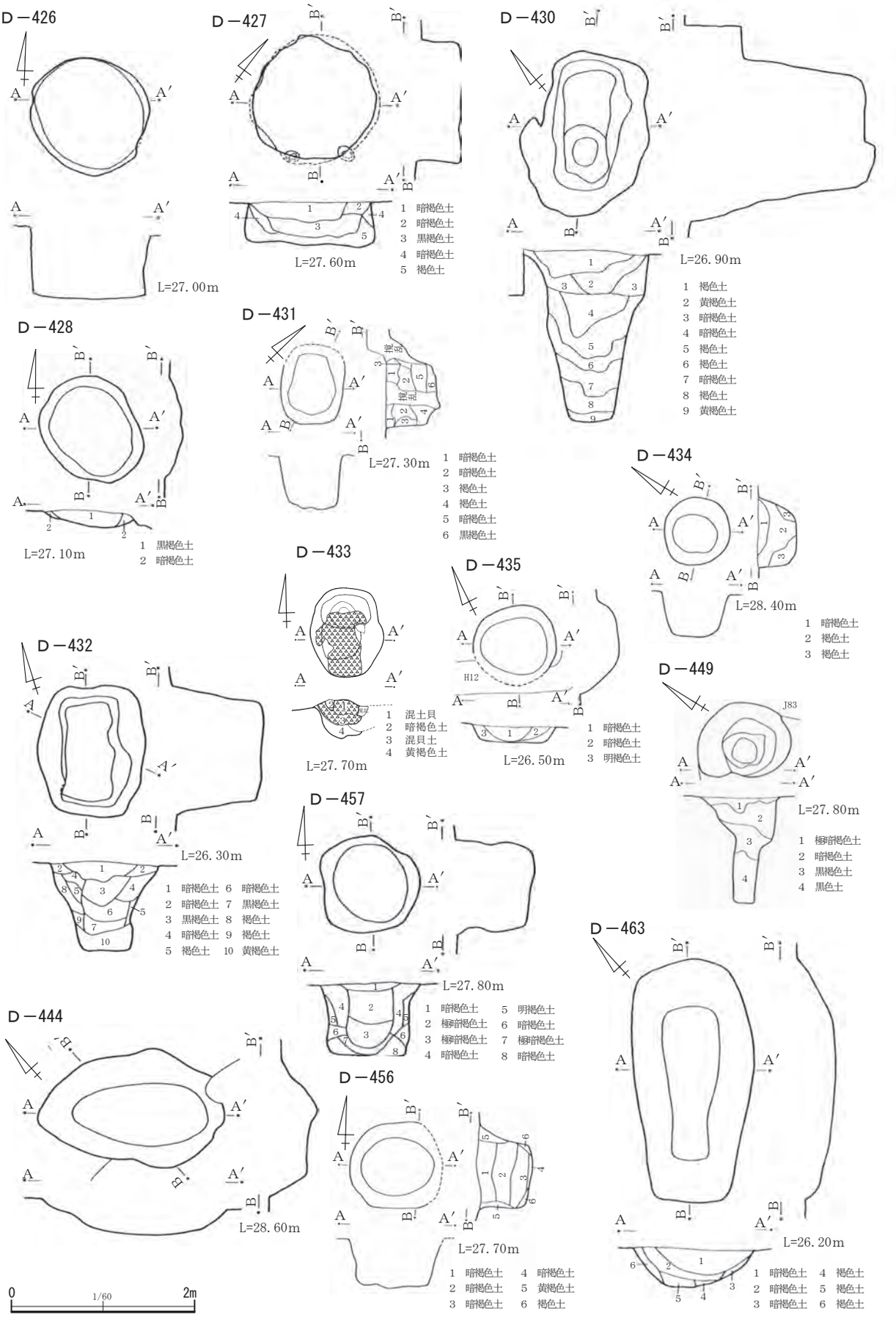
D-462　石皿・台石１点 (58) が出土している。



第 250 図　土坑 (58) 土器 D-418

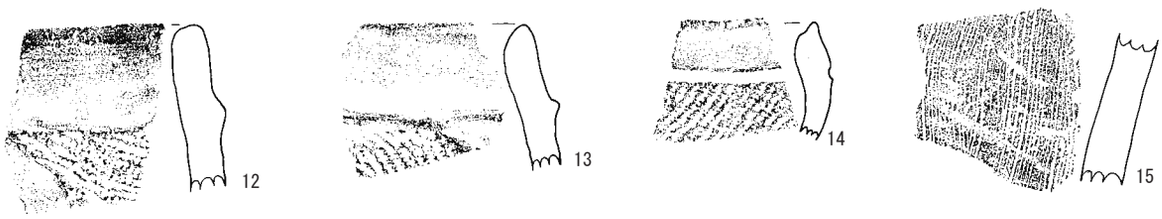


第 251 図　土坑 (59) 土器 D-422(1)

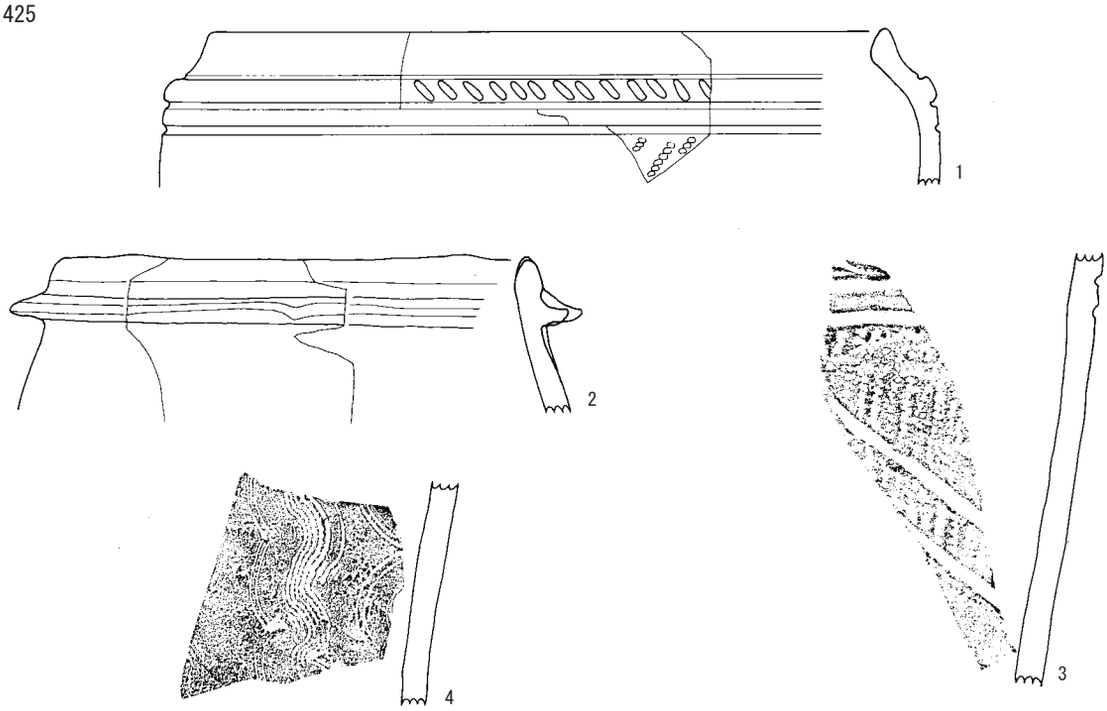


第 252 図　土坑 (60)D-426 ～

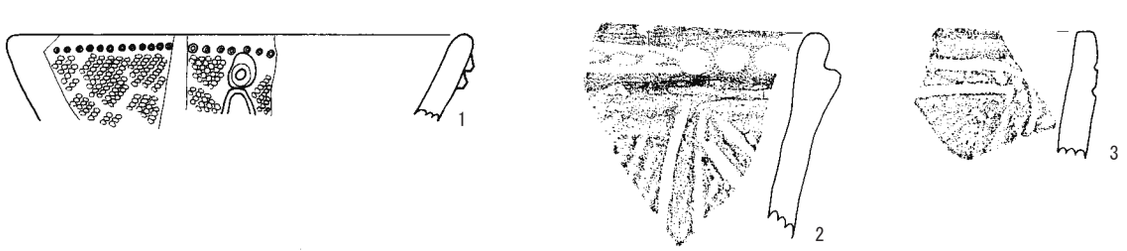
D－422



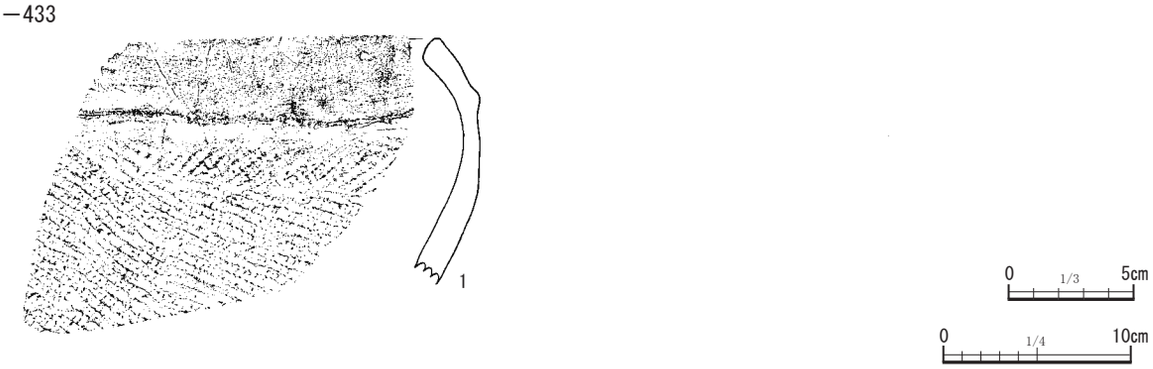
D－425



D－427



D－433



第 253 図　土坑 (61) 土器 D-422（2）～

第４節　炉穴

早期後葉の炉穴 25 群 37 基を検出した（第４表）。第２期工事区域の５群９基を加えると 30 群 46 基となる。遺構図の網掛けは薄網は焼土を含む、濃網は焼けた火床面を示す。広い台地の縁辺部に分散し、北西・北東・南西・南東の張り出し部４か所に集中する（第 254 図）。重複は最多でも５基で、単独ないし２基重複が主体を占める。

北西群（第 255 図・図版 32）　F-1 はやや窪む火床部に幅広で短い足場がつく。F-2 は火床面４・５をもつ掘り込み覆土を２・３の掘り込みが切る。現地の観察によれば１→２→３の順である。F-3 はフラットな楕円形の掘り込みの一方に、F-4 は中央部を足場として３か所の火床部をもつ。F-5 は１基としたが掘り込み形状から２基重複の可能性がある。

南西群（第 256 図・図版 32）　F-6・F-9 は F-9 が新しい。F-6 は火床部の北壁面の被熱硬化・赤色化が著しい。４層は崩落した天井部とみられる。

F-7 は壁面が強い焼成を受けていた。火床面を覆う２層は一部焼成を受けており落下した天井部の可能性がある。F-12 は火床部側壁が強い焼成を受けていた。土器が出土している。F-8・10・F-11 は炉穴としたが明確ではない。

南西群（第 257 図・図版 32・33）　F-15 はわずかに窪む火床部に比較的厚く焼土が堆積する。土器が出土しているが未掲載である。F-16 は土坑が重複している可能性がある。F-17 は小規模な単独の炉穴である。F-18 は比較的大きく深い単独の炉穴である。F-19･F-20 は近接して２基単位の炉穴２群が近接する。F-20・F-21 で土器が出土している。

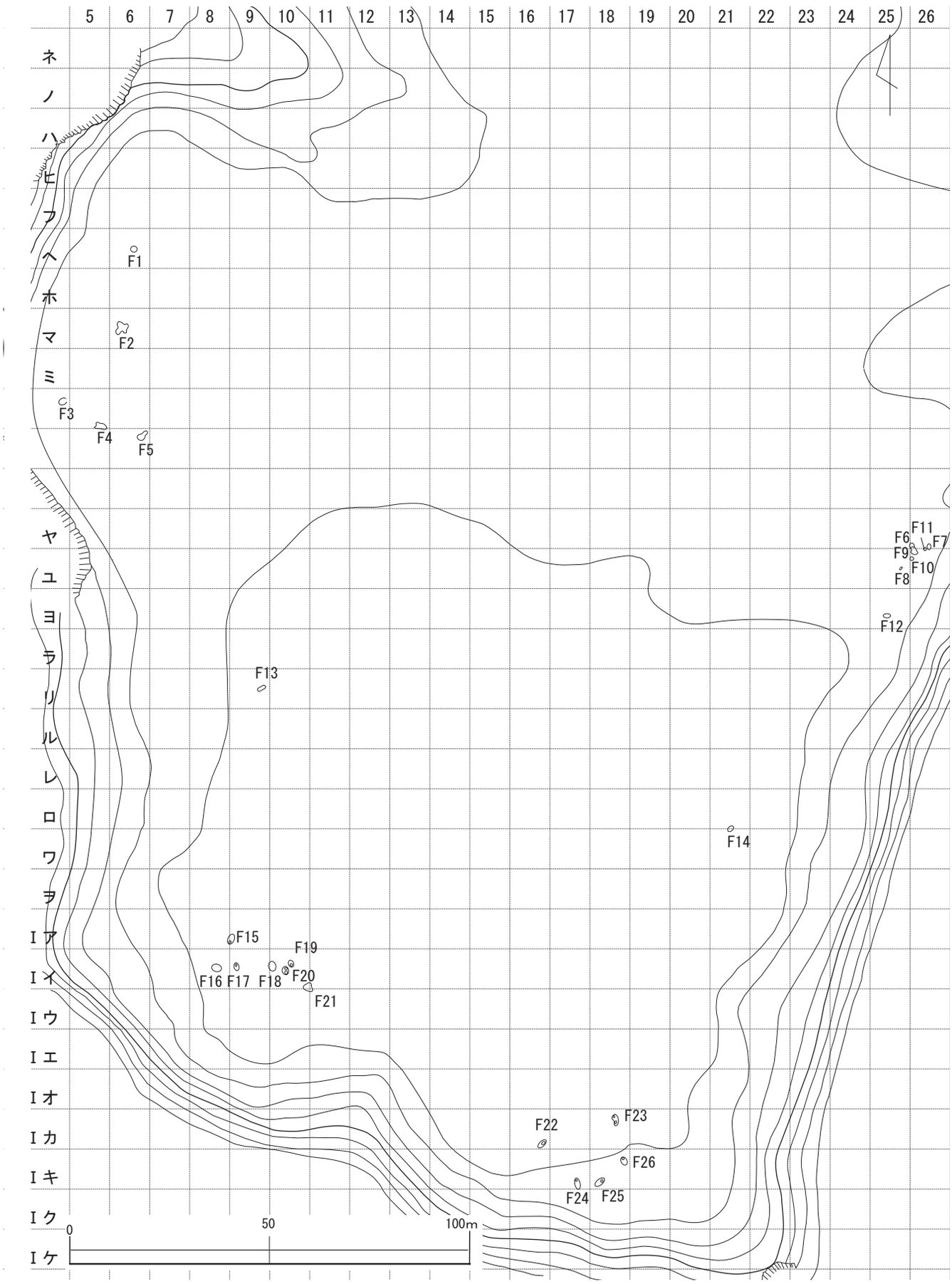
南東群（第 258 図・図版 33）　F-22 で土器が、F-23 で台石が出土している。F-24 は調査区外で重複する可能性が高い。F-25 は深い掘り込みをもつ単独の炉穴で土器が出土している。F-26 も単独の炉穴である。

群外（第 256 図）　F-13 は２基重複の可能性がある。F-14 は炉穴かどうか明確でない。

出土遺物（第 259 図・図版 51）　１は F-1 出土の底部で早期前葉の天矢場式である。流れ込みまたは混入が考えられる。２は F-12 出土。直線的に開き頸部に低い隆帯がめぐる。胴部片もあり被熱劣化が顕著である。３は F-20 から口縁部と底部が出土しており、被熱が顕著である。４・５は F-25 出土。４は口縁部で刺突列がめぐる。５は張り出し部で刺突列が巡る。土器以外では、F-23 で台石（第 286 図 62）が出土している。長さ 18cm、610 ｇの巨大な扁平楕円礫であり、両面の一部が平滑化している。中央が窪まない形状はこの時期に散見する。

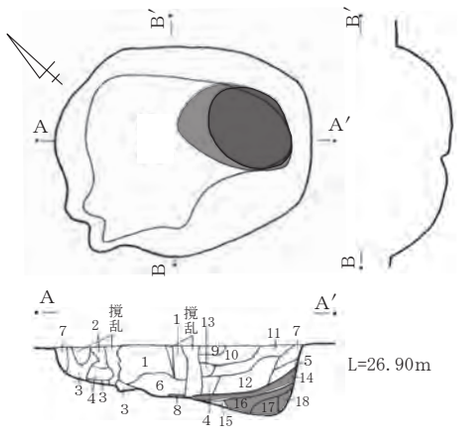
第４表　炉穴

遺構No.	旧No.	形状	長×幅	基数
F-01	ハ-6-1	不整楕円	1.6×1.3	1
F-02		十字	3.4×3.4	5
F-03	ム-4-1	楕円	2.1×1.5	1
F-04	ム-5-1	不整	3.1×1.5	3
F-05	メ-6-1	不整楕円	2.8×1.5	1
F-06	ヤ-26-1	不整	1.2×1.0	1
F-07	ヤ-26-2	楕円	1.6×1.1	1
F-08	ユ-26-1		0.7×0.4	1
F-09	ユ-26-1	不整方	2.3×1.8	1
F-10	ユ-26-2	楕円	1.0×0.8	1
F-11	ユ-26-3	円	0.7×0.6	1
F-12	ヨ-25-1	不定	1.9×1.7	2
F-13	リ-9-1	楕円	2.0×0.8	1
F-14	ワ-21-1	楕円	1.3×0.8	1
F-15	Ⅰア-9-1	楕円	2.9×1.6	1
F-16	Ⅰイ-8-1	双円	2.4×2.1	1
F-17	Ⅰイ-9-1	楕円	1.8×1.0	1
F-18	Ⅰイ-10-1	楕円	2.6×1.6	1
F-19	Ⅰイ-10-2	不整	1.9×1.5	2
F-20	Ⅰイ-10-3	不整	2.6×2.1	2
F-21	Ⅰイ-10-4	不整	2.4×2.0	2
F-22	Ⅰカ-16-1	楕円	2.5×1.4	1
F-23	Ⅰカ-18-1	不整	2.2×0.9	2
F-24	Ⅰキ-17-1	楕円	1.8×1.4	1
F-25	Ⅰキ-18-1	楕円	2.1×1.4	1
F-26	Ⅰキ-18-2	楕円	2.5×1.2	1


5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
ネ
ノ
ハ
ヒ
フ
ヘ
ホ
マ
ミ
ヤ
ユ
ヨ
ラ
リ
ル
レ
ロ
ワ
ヲ
Ⅰア
Ⅰイ
Ⅰウ
Ⅰエ
Ⅰオ
Ⅰカ
Ⅰキ
Ⅰク
Ⅰケ
F1
F2
F3
F4
F5
F6
F7
F8
F9
F10
F11
F12
F13
F14
F15
F16
F17
F18
F19
F20
F21
F22
F23
F24
F25
F26
0
50
100m

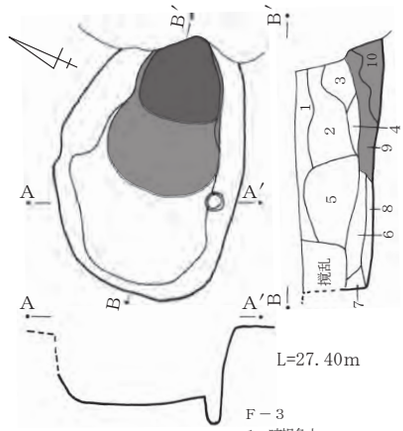
第 254 図　炉穴分布図

F－1



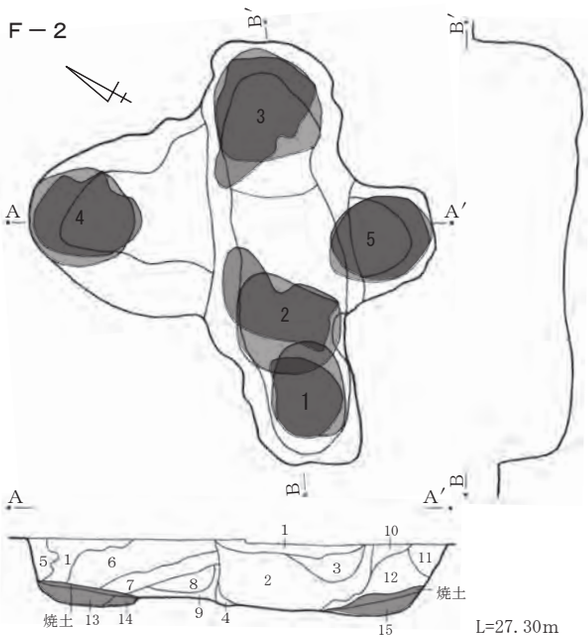
F－1
1　黒褐色土
2　暗褐色土
3　黄褐色土
4　黒色土
5　暗褐色土
6　暗褐色土
7　暗褐色土
8　焼土
9　褐色土
10　暗褐色土
11　黄褐色土
12　褐色土
13　黒褐色土
14　暗褐色土－焼土粒を少し含む
15　暗黄褐色土－焼土粒を少し含む
16　暗褐色土－焼土粒を少し含む
17　赤褐色土－所々に粒状の固い焼土を含む
18　暗赤褐色土－焼土粒を少し含む

F－3



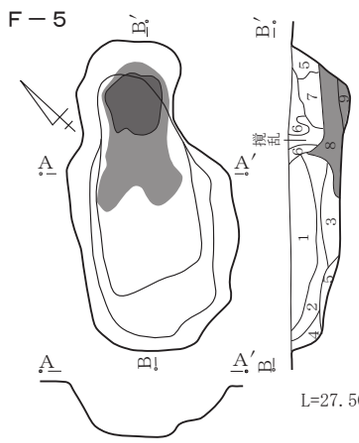
F－3
1　暗褐色土
2　暗黒褐色土
3　褐色土
4　暗黒褐色土
5　黒褐色土
6　暗黒褐色土
7　暗褐色土
8　褐色土
9　暗褐色土－焼土がベース
10　焼土がベース

F－2



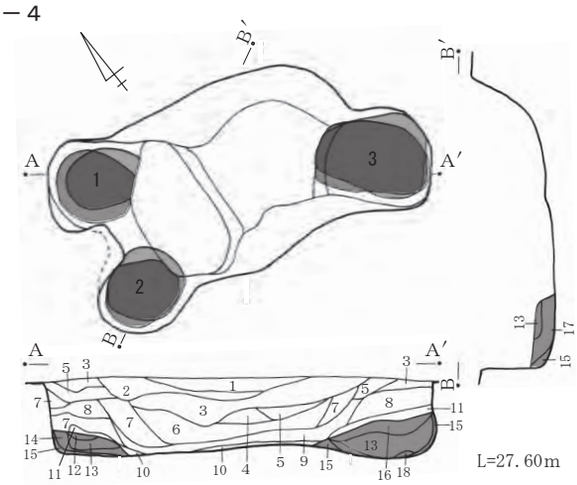
F－2
1　褐色土
2　暗褐色土
3　褐色土
4　暗黄褐色土
5　黄褐色土
6　暗褐色土
7　暗褐色土
8　暗褐色土
9　暗黄褐色土
10　褐色土
11　黄褐色土
12　暗褐色土
13　黒褐色土　－細かい粒子の焼土を多く含む
14　黄褐色土－焼土粒を少し含む
15　暗褐色土－焼土粒を多く含む

F－5



F－5
1　黒褐色土
2　黒褐色土
3　暗褐色土
4　黄褐色土
5　黄褐色土
6　暗褐色土
7　褐色土
8　焼土がベース
9　暗褐色土－細かい焼土粒を多く含む

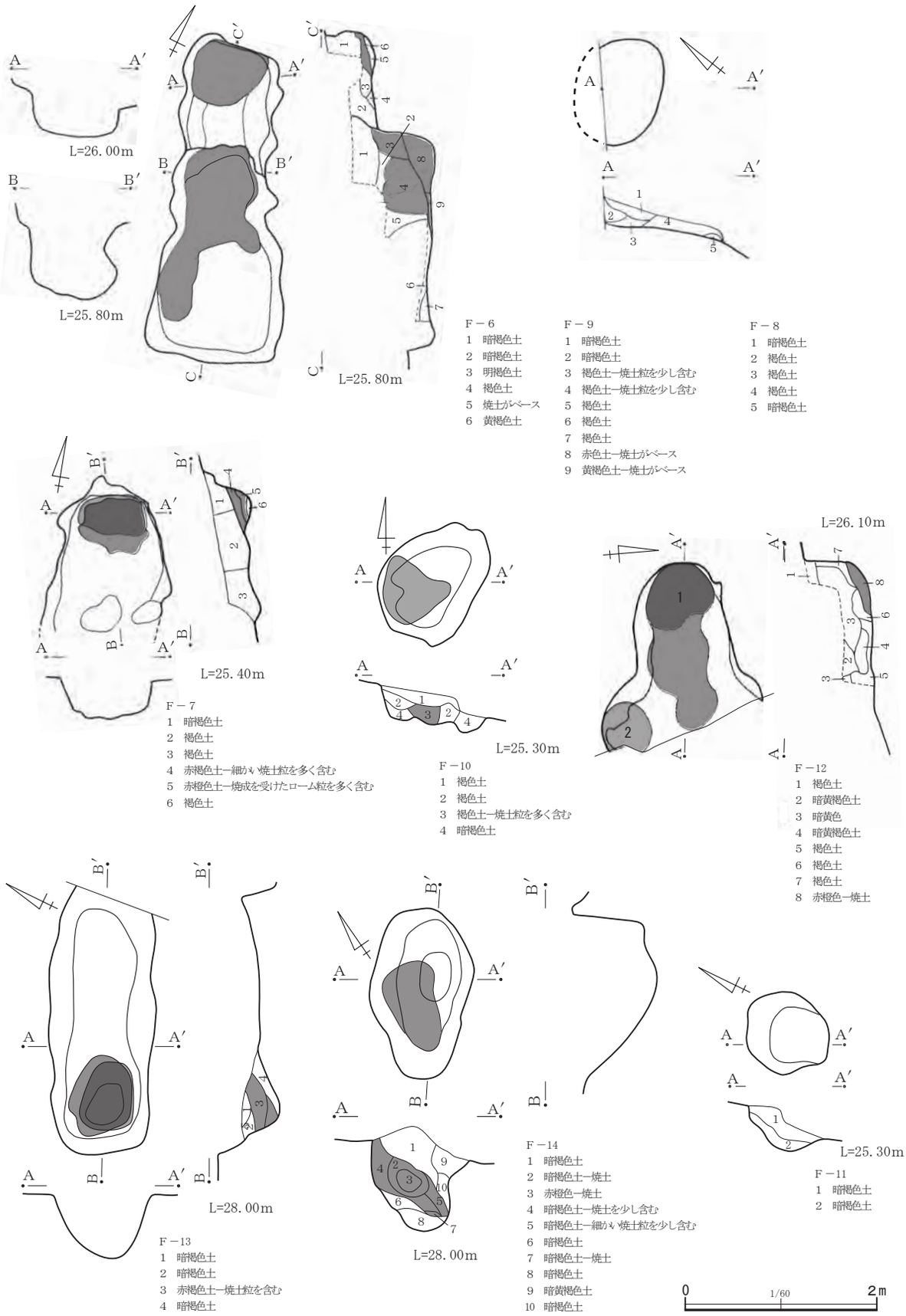
F－4



F－4
1　褐色土
2　暗褐色土
3　暗褐色土
4　暗褐色土
5　褐色土
6　暗褐色土
7　暗褐色土
8　明褐色土
9　褐色土
10　暗褐色土
11　暗赤色－焼土粒を多く含む
12　黒色土－焼土粒を斑状に含む
13　ロームに多量の焼土粒を含む
14　褐色土－焼土粒を多く含む
15　ロームに多量の焼土を含む
16　暗褐色土－焼土をベースに上部に黒色土　下部にローム
17　褐色土－焼土粒を含む
18　焼土がベース

0　1/60　2m

第255図　炉穴 (1)



F－6
1 暗褐色土
2 暗褐色土
3 明褐色土
4 褐色土
5 焼土がベース
6 黄褐色土

F－9
1 暗褐色土
2 暗褐色土
3 褐色土ー焼土粒を少し含む
4 褐色土ー焼土粒を少し含む
5 褐色土
6 褐色土
7 褐色土
8 赤色土ー焼土がベース
9 黄褐色土ー焼土がベース

F－8
1 暗褐色土
2 褐色土
3 褐色土
4 褐色土
5 暗褐色土

F－7
1 暗褐色土
2 褐色土
3 褐色土
4 赤褐色土ー細かい焼土粒を多く含む
5 赤橙色土ー焼成を受けたローム粒を多く含む
6 褐色土

F－10
1 褐色土
2 褐色土
3 褐色土ー焼土粒を多く含む
4 暗褐色土

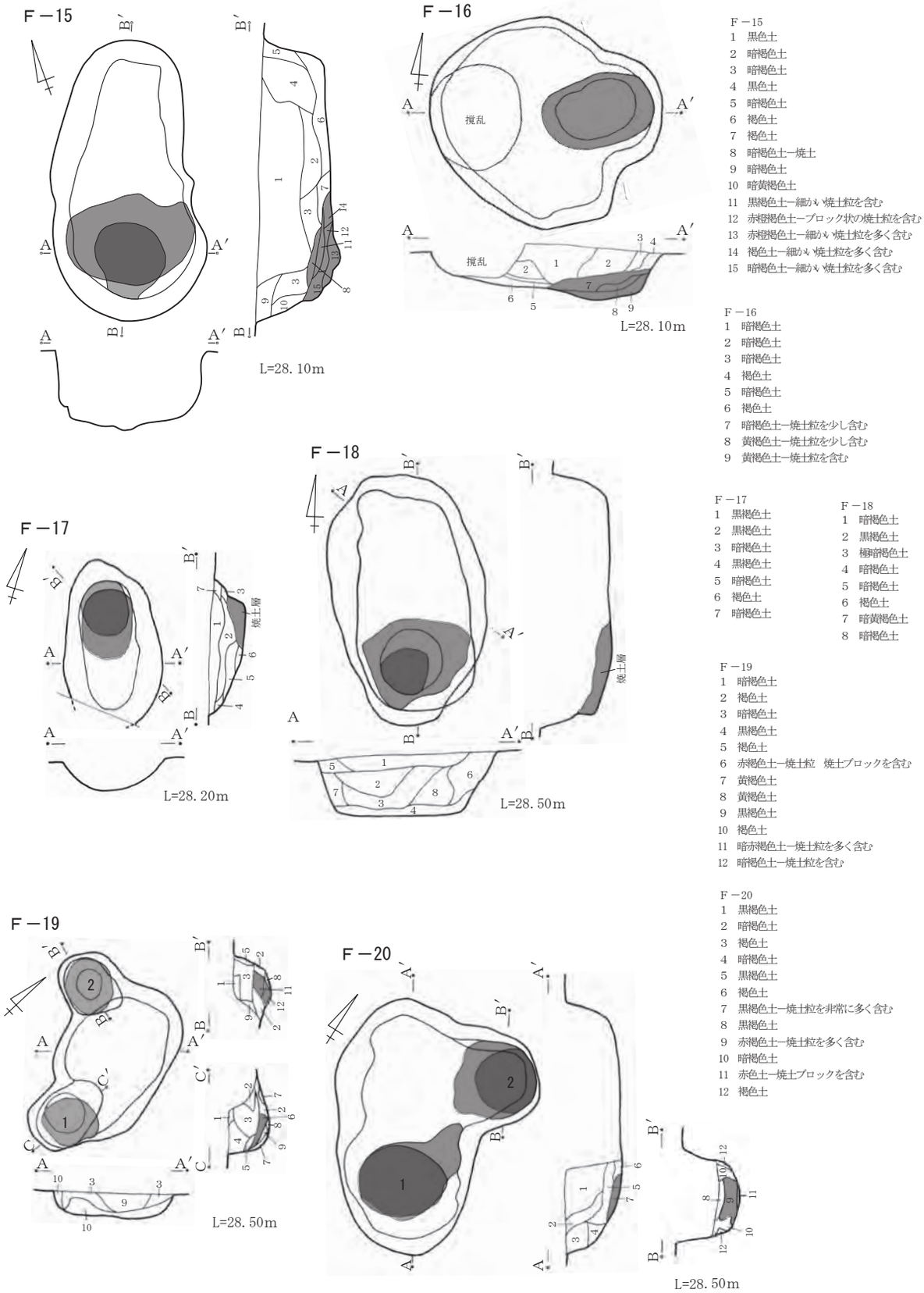
F－12
1 褐色土
2 暗黄褐色土
3 暗黄色
4 暗黄褐色土
5 褐色土
6 褐色土
7 褐色土
8 赤橙色ー焼土

F－13
1 暗褐色土
2 暗褐色土
3 赤褐色土ー焼土粒を含む
4 暗褐色土
5 暗褐色土ー焼土

F－14
1 暗褐色土
2 暗褐色土ー焼土
3 赤橙色ー焼土
4 暗褐色土ー焼土を少し含む
5 暗褐色土ー細かい焼土粒を少し含む
6 暗褐色土
7 暗褐色土ー焼土
8 暗褐色土
9 暗黄褐色土
10 暗褐色土

F－11
1 暗褐色土
2 暗褐色土

第256図　炉穴(2)



F－15
1 黒色土
2 暗褐色土
3 暗褐色土
4 黒色土
5 暗褐色土
6 褐色土
7 褐色土
8 暗褐色土－焼土
9 暗褐色土
10 暗黄褐色土
11 黒褐色土－細かい焼土粒を含む
12 赤褐色土－ブロック状の焼土粒を含む
13 赤褐色土－細かい焼土粒を多く含む
14 褐色土－細かい焼土粒を多く含む
15 暗褐色土－細かい焼土粒を多く含む

F－16
1 暗褐色土
2 暗褐色土
3 暗褐色土
4 褐色土
5 暗褐色土
6 褐色土
7 暗褐色土－焼土粒を少し含む
8 黄褐色土－焼土粒を少し含む
9 黄褐色土－焼土粒を含む

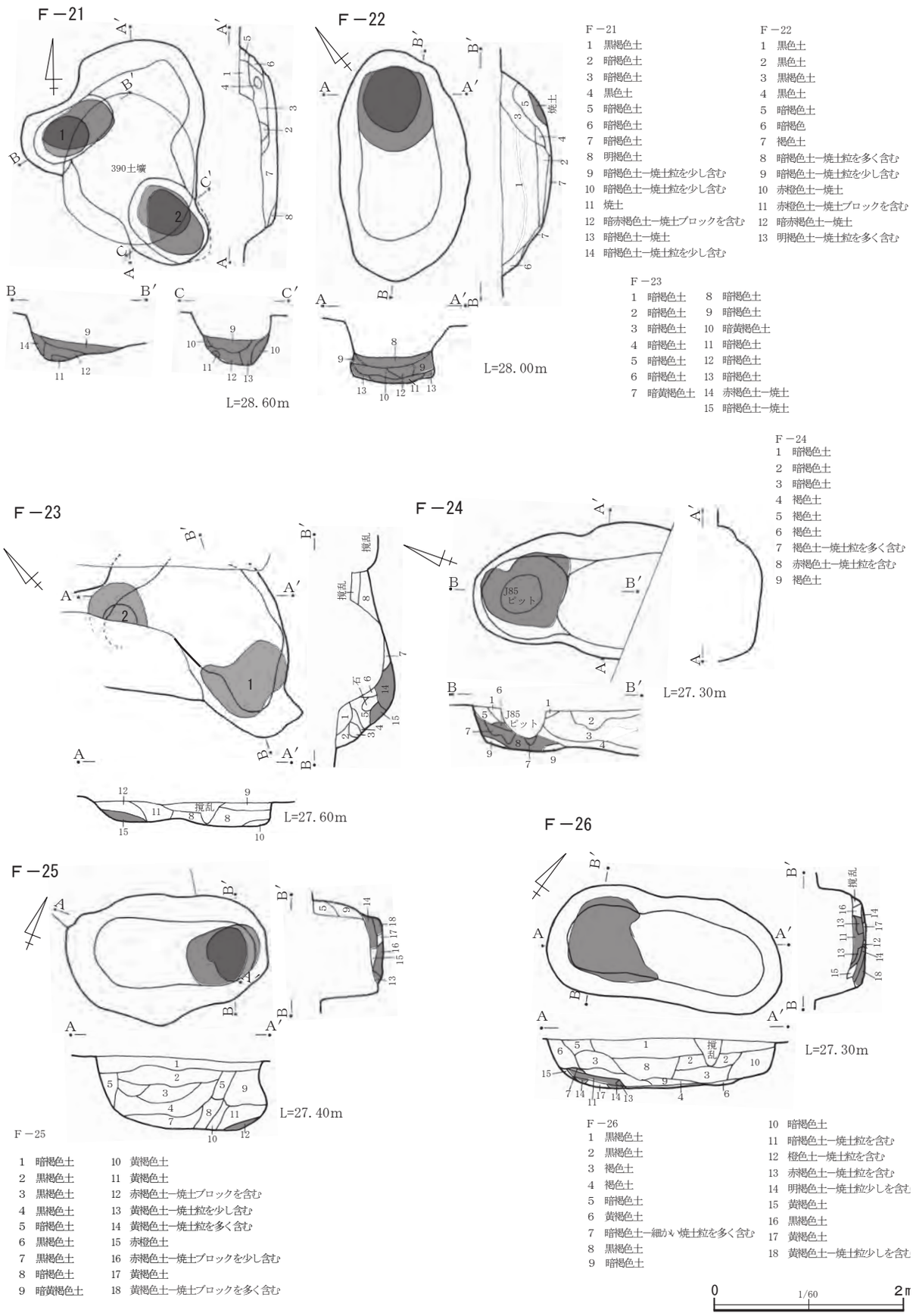
F－17
1 黒褐色土
2 黒褐色土
3 暗褐色土
4 黒褐色土
5 暗褐色土
6 褐色土
7 暗褐色土

F－18
1 暗褐色土
2 黒褐色土
3 極暗褐色土
4 暗褐色土
5 暗褐色土
6 褐色土
7 暗黄褐色土
8 暗褐色土

F－19
1 暗褐色土
2 褐色土
3 暗褐色土
4 黒褐色土
5 褐色土
6 赤褐色土－焼土粒　焼土ブロックを含む
7 黄褐色土
8 黄褐色土
9 黒褐色土
10 褐色土
11 暗赤褐色土－焼土粒を多く含む
12 暗褐色土－焼土粒を含む

F－20
1 黒褐色土
2 暗褐色土
3 褐色土
4 暗褐色土
5 黒褐色土
6 褐色土
7 黒褐色土－焼土粒を非常に多く含む
8 黒褐色土
9 赤褐色土－焼土粒を多く含む
10 暗褐色土
11 赤色土－焼土ブロックを含む
12 褐色土

第 257 図　炉穴 (3)



F－21
1 黒褐色土
2 暗褐色土
3 暗褐色土
4 黒色土
5 暗褐色土
6 暗褐色土
7 暗褐色土
8 明褐色土
9 暗褐色土－焼土粒を少し含む
10 暗褐色土－焼土粒を少し含む
11 焼土
12 暗赤褐色土－焼土ブロックを含む
13 暗褐色土－焼土
14 暗褐色土－焼土粒を少し含む

F－22
1 黒色土
2 黒色土
3 黒褐色土
4 黒色土
5 暗褐色土
6 暗褐色
7 褐色土
8 暗褐色土－焼土粒を多く含む
9 暗褐色土－焼土粒を少し含む
10 赤褐色土－焼土
11 赤褐色土－焼土ブロックを含む
12 暗赤褐色土－焼土
13 明褐色土－焼土粒を多く含む

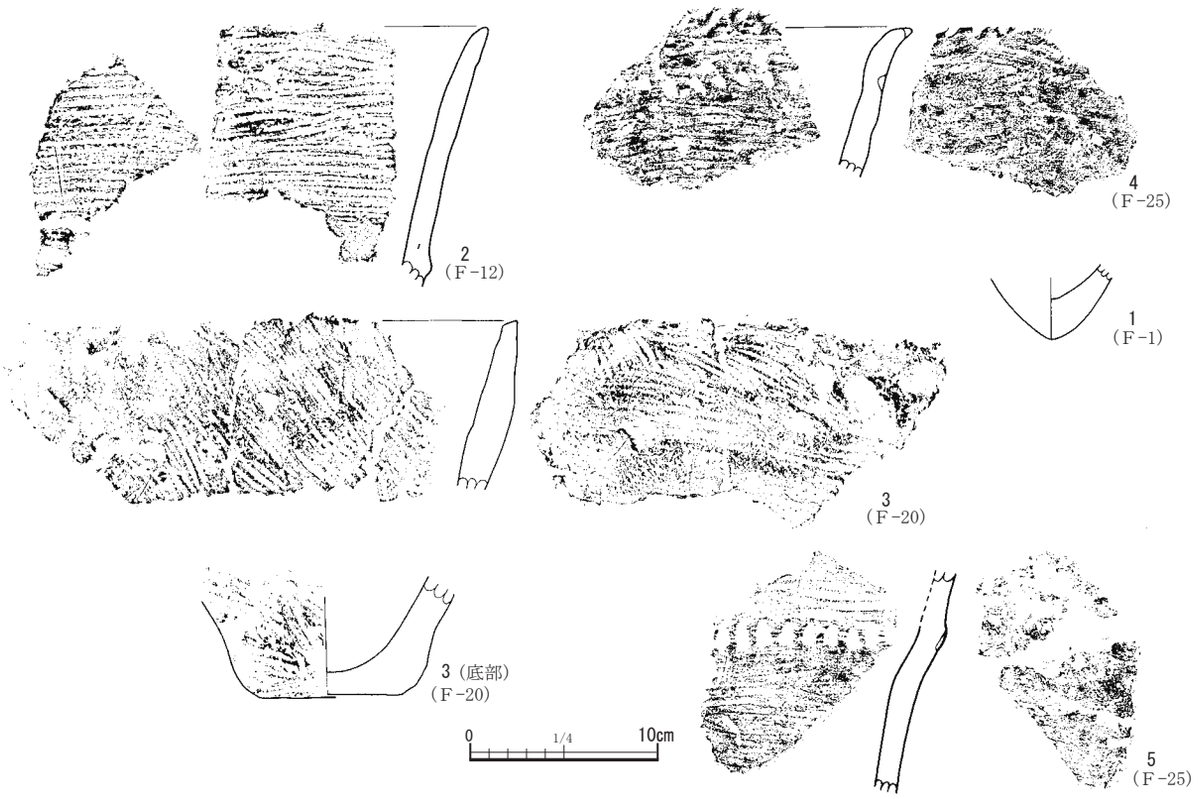
F－23
1 暗褐色土
2 暗褐色土
3 暗褐色土
4 暗褐色土
5 暗褐色土
6 暗褐色土
7 暗黄褐色土
8 暗褐色土
9 暗褐色土
10 暗黄褐色土
11 暗褐色土
12 暗褐色土
13 暗褐色土
14 赤褐色土－焼土
15 暗褐色土－焼土

F－24
1 暗褐色土
2 暗褐色土
3 暗褐色土
4 褐色土
5 褐色土
6 褐色土
7 褐色土－焼土粒を多く含む
8 赤褐色土－焼土粒を含む
9 褐色土

F－25
1 暗褐色土
2 黒褐色土
3 黒褐色土
4 黒褐色土
5 暗褐色土
6 黒褐色土
7 黒褐色土
8 暗褐色土
9 暗黄褐色土
10 黄褐色土
11 黄褐色土
12 赤褐色土－焼土ブロックを含む
13 黄褐色土－焼土粒を少し含む
14 黄褐色土－焼土粒を多く含む
15 赤褐色土
16 赤褐色土－焼土ブロックを少し含む
17 黄褐色土
18 黄褐色土－焼土ブロックを多く含む

F－26
1 黒褐色土
2 黒褐色土
3 褐色土
4 褐色土
5 暗褐色土
6 黄褐色土
7 暗褐色土－細かい焼土粒を多く含む
8 黒褐色土
9 暗褐色土
10 暗褐色土
11 暗褐色土－焼土粒を含む
12 橙色土－焼土粒を含む
13 赤褐色土－焼土粒を含む
14 明褐色土－焼土粒少しを含む
15 黄褐色土
16 黒褐色土
17 黄褐色土
18 黄褐色土－焼土粒少しを含む

第258図　炉穴(4)



第 259 図　炉穴出土遺物

第５節　遺構外出土土器

ここで扱う土器は、整理作業の段階で平成 29 年度に「遺構外」として抽出されていたもの、及び遺構出土土器の整理作業において遺構に伴わないことが明らかなもののなかから、以下の分類が不可能なものを除いたものである。以前に未掲載と判断された箱を見直すことはできなかったため、抽出基準は不明確であり、全体のうちどの程度が抽出されたのかも不明である。土器のほとんどは集落の主体となる加曽利ＥⅣ式から称名寺式期の土器であり、それ以外の時期について点数を集計し、一部を掲載対象とした。

(1) 第１群　撚糸文土器 (第 260 ～ 269 図・図版 49 ～ 51)

抽出数は 1,437 点であり、そのうち 409 点を掲載対象とした。初期から終末期まであり、点数的には井草Ⅱ式～稲荷台式が多い。掲載対象のうちグリッドの判明する 394 点の分布を見ると、すべて南西部から出土しており (付表 3-1・１群分布)、集中箇所は標高 28 ｍの範囲内 (第７図) に収まる。中・後期の遺構に流入していたものも多いが、分布傾向は中・後期の遺構群とよく似ており、選地の志向に共通点があった可能性が高い。

抽出土器は以下の基準で分類した。カッコ内の点数は掲載数 / 抽出数、その後の番号は図番号である。

１類　井草Ⅰ式 ･･･････････････････････････23 点

Ｊ型・口縁部ａ：異方向施文あり (13/21 点)1 ～ 11・14・15

ｂ：異方向施文無し (１/ ２点)12

２類　井草Ⅱ式 ･･･････････････････････････137 点

JY/YJ 型・口縁部：縄文・撚糸文併用 (２/ ２点)16・57

Ｊ型・口縁部ａ：口唇から胴に縄文 (40/67 点)13・17 ～ 22・24 ～ 56

b：口唇下に指頭圧痕列 (3 / 5 点)58 ～ 60
c：口縁に無文部あり (29/54 点)61 ～ 89
Y 型・口縁部 a：撚糸文施文 (5 / 5 点)90 ～ 93・263
b：裏面施文あり (2 / 2 点)94・95
無文口縁 (2 / 2 点)96・97
3 類　夏島式 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・358 点
J 型・口縁部 a：口縁に無文部あり (9 /10 点)98 ～ 105・107
b：縄文施文 (97/219 点)23・108 ～ 203
c：焼成前貫通孔あり (1 / 1 点)204
Y 型・口縁部 a：口縁に無文部あり (1 / 1 点)205
b：撚糸文施文 (60/126 点)206 ～ 245・247 ～ 262・264 ～ 267
c：焼成前貫通孔あり (1/1 点)268
3･4 類　夏島式～稲荷台式 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・102 点
口縁部 a：撚糸文施文 (1 / 1 点)270
b：縄文施文 (14/18 点)271 ～ 284
c：絡条体条痕＋斜沈線 (？)(1 / 1 点)269
d：無文口縁 (21/61 点)285 ～ 305
底　部：(5 /21 点)306 ～ 310
4 類　稲荷台式 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・71 点
Y 型・口縁部 a：撚糸文施文 (44/64 点)246・311 ～ 353
b：口唇外側に無文帯あり (7 / 7 点)354 ～ 360
5 類　稲荷原式及び類似土器 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・16 点
J 型・口縁・胴：縄文施文 (1 / 1 点)106
Y 型・口縁・胴：撚糸文施文 (8 / 9 点)361 ～ 368
J or Y 型・口縁：撚糸文 or 縄文？ (1 / 1 点)370
胴部撚糸文施文 (2 / 2 点)371・372
稲荷原式類似　：口縁撚糸文帯状＋無節縄文 (2 / 2 点)369・373
：口縁撚糸文鋸歯状施文 (1 / 1 点)374
1 ～ 5 類　井草式～稲荷原式の胴部・底部 ・・・・・・・・692 点
縄文 285 点、撚糸文 407 点のうち 8 点掲載 375 ～ 382
6 類　花輪台 I 式 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4 点
J 型・口縁部 a：LR 縄側面圧痕＋異方向縄文 (2 / 2 点)383・384
b：L 縄側面圧痕＋異方向撚糸文 (1 / 1 点)385
Y 型・胴：撚糸文施文胴部 (1 / 1 点)386
5･6 類　撚糸文終末期の土器 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5 点
Y 型・口縁：頸部刺突文＋胴部撚糸文 (1 / 1 点)387
胴　：撚糸文帯状＋絡条体圧痕多段 (2 / 2 点)388・389
O 型・口縁：絡条体圧痕文 (1 / 1 点)390
無文：(1 / 1 点)391

7類　天矢場式 ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥29点
無文口縁14点、胴15点のうち18点を掲載392～409

1類　井草Ⅰ式 (第260図1～12・14・15)

口縁部の肥厚・外反が著しく、口唇部縄文の多段施文を特徴とする。ほとんどはJ型である。1は無文地に縄の側面圧痕が施される。2～11、14・15は口頸部に異方向施文があるもので、2～7は横位縄文、8～11は斜位縄文が施文される。7は横位縄文の上端に縄の側面圧痕を施す。15は口唇部に縄文、頸部にやや斜位気味の撚糸文が施文され、その上部は施文後ナデ消している。12は口頸部に異方向施文が無いが、口唇部に5などと同様の2段同方向縄文が施文されている。

2類　井草Ⅱ式 (第260～262図13・16～22・24～97・第266図263)

口縁部の肥厚・外反は弱く、口唇部外側と胴部に施文する。ほとんどはJ型で、口唇部は横位、胴部は斜位回転を基本とする。13・17～22・24～56は概ね口唇部直下から胴部縄文を施文するものである。58～60は口唇部下に指頭圧痕列が残るものである。61～89は口縁部に無文部があるものである。89は口唇外側が無文で、口唇上に施文する。16はJY型で、口唇部に縄文RL、胴部に撚糸文Rを施文する。57はYJ型で、口唇部に撚糸文L、胴部に無節縄文Rを施文する。口唇部下には指頭圧痕列が残る。90～93・263はY型で、いわゆる大丸式を含む。90と263は接合する。90～92の口唇部の肥厚は弱く、口唇上に撚糸文を施す。94・95は内面施文をもつもの。94は先細り状の口縁部が外反するもので、裏面、口唇部上、胴部に縄文を施文する。95は角頭状の口唇部が外反するもので、裏面・口唇部上に撚糸文が施文される。96・97は無文の口縁部であるが、口唇部整形の特徴から2類に伴うと考えられる。96は肥厚する口唇部の外側に僅かに縄文の可能性がある圧痕が認められる。

3類　夏島式 (第260図23、第262～266図98～105、107～245、247～262、264～268)

口唇上の施文をもたず肥厚・外反はないか弱いものである。23、98～105、107～204はJ型である。98～105・107は口縁部に無文部があるもので、古段階の特徴を有する。99は、無文となる口縁部に弱い段があり、胴部に横～やや斜走するLR縄文が施文されている。23・108～203は口縁部上端から施文されるものである。口唇形状は丸頭状が多くやや角頭状に近いもの、内削ぎ状のものが混じり、ほとんどは直立するが、わずかに外反や肥厚するものも混じる。124は口縁部に弱い段があり、その直下に不規則な無文部がある。170・177は同一個体とみられ僅かに内弯する。171の破片右側には、RL縄文施文後、短い縄側面圧痕が施されている。類例として、佐倉市大林遺跡 (大野1989) に、縄文施文後口唇部下に縄側面圧痕を施文するものがある。

98は縦長の楕円形、147と156は円形の貫通孔をもつ。両面から臼状に回転穿孔しており、補修孔であろう。204は焼成前貫通孔をもつものである。垂直に穿孔された孔が、口縁部に並んでいると考えられる。

205～245、247～262・264～268はY型である。口唇は角頭状と丸頭状が多く、わずかに肥厚・外反するものが混じる。205は口縁部が小さく肥厚し、無文部を有する。215・216は口縁部に弱い段があり、216はその直下に不規則な無文部がある。252・261は同一個体と考えられ、比較的器高が低い小形の土器で、条間が空いた撚糸文が縦位～斜位に乱雑に施文されている。212は縦長の擦切り穿孔による貫通孔をもつ2つの破片が接合する。242も擦切りと敲打によるとみられる貫通孔をもつ。267は楕円形の貫通孔をもつ。補修孔であろう。268は焼成前貫通孔を有するものである。口縁部よりやや下に円孔列をもつ。

3・4類　夏島式～稲荷台式 (第266・267図269～310)

多くは稲荷台式とみられる。本来は4類の後に置くべきものである。269は、口唇部下から絡条体条痕が帯状施文されるが、その空白部に浅い斜位沈線が施文されている。270は条間が空いたR撚糸文が胴部に縦位施文された後、口唇部外側に横位施文されているものである。271～284は縄文施文の口縁部である。縄文は浅く、施文後ナデ調整が行われるものもあり、圧痕は不明瞭である。272～278は、胎土に大粒の砂粒が多く含まれる。稲荷台式J型の可能性もあるが、この種の土器は夏島式にも存在することから、ここでは幅を持って捉えておく。285～305は無文の口縁部、306～310は底部である。272～277は器壁が厚く、胎土に長石・石英粒を多量に含む。297・298は口唇部下に指頭圧痕列が残る。299・300は同一個体である。309には同心円状の擦痕が観察される。

4類　稲荷台式(第265図246、第267・268図311～360)

全てY型である。口縁部は概ね丸頭状になるものが多く、緩やかに肥厚するもの、直立するものがある。また、口唇部に外削ぎ状の整形がなされる321・322・350・351や、口縁部に撚糸文施文後の横調整による無文部がある354～360は、稲荷台式新に下るものである。324は帯状施文の可能性がある。但し342、343、358等のように、器面に無文部を多く残しながら撚糸文が施文されるものがあるが、明瞭な帯状施文は少ないようである。350・351は同一個体で、細い撚糸文Rが一部交錯しながら乱雑に施文されている。

5類　稲荷原式及び類似土器(第262図106、第268図361～374)

口縁部に弱い段や窪みをもつものである。106は肥厚する口縁部が無文帯となり、RL縄文が施文されている。稲荷原式古。361～368は口縁部下端に弱い段があり、工具調整、指頭による調整が施される部分があるもので、稲荷原式新に属する。362、364～368の口縁部は完全に無文帯とはならずに、撚糸文の施文が及んでいる。370は口縁部下に指頭による調整が施される。胴部の施文は圧痕が浅く判然としないが、縄文の可能性が高い。371・372は、節が大きな撚糸文が施文される胴部破片で、やはり稲荷原式新に属すると考えられる。369・373・374は特殊な施文があるものである。369・373は同一個体である。口縁部は緩く括れ、横調整が施されている。口唇部下から太い撚糸文Rが帯状施文され、間に直前段反撚無節縄文RRが充填されている。374は、肥厚する口縁部に段があり、工具調整が施されている。口縁部に撚糸文Rが鋸歯状に施文され、胴部に同原体による撚糸文が帯状施文されている。破片左には斜位の圧痕が観察されるので、異方向の撚糸文が充填されていると考えられる。

1～5類　井草式～稲荷原式の胴部・底部(第268図375～382)

井草式から稲荷原式の胴部・底部を集めた。375は縄文、377・379・381は撚糸文がつく。379は底部付近で、深い同心円状圧痕が付いている。382は、井草式～夏島式の縄文が施文される胴部片を土器片円板に加工したもので、土製品での掲載がもれたものである。

6類　花輪台Ⅰ式(第269図383～386)

383は唯一径の復元が可能なものである。LR縄側面圧痕を横位に2条施文、その下に3～4条の側面圧痕を鋸歯状に施し、更にその内部に異方向縄文を充填する類例の少ない装飾をもつ。384はLR縄側面圧痕と異方向縄文を施文する。385は、頸部にL縄側面圧痕、L異方向撚糸文が胴部に施文される。撚糸文の施文は一部口縁部にも認められる。386は異方向の撚糸文をもつ胴部片で、R撚糸文を縦位に施文した後、斜位施文を施す。厚手の整形であり、花輪台Ⅰ式のY型と考えられる。

5・6類　撚糸文終末期の土器(第269図387～391)

概ね5・6類に伴出する有文土器である。387は頸部に小角状の刺突による文様がある。上下を横位に区画し、内部に3条単位の鋸歯文を施している。胴部には撚糸文Lを施文する。388・389は同一個体

と考えられる。帯状施文された太い撚糸文Rと多段の横位絡条体圧痕が施文されている。390は口縁部の無文帯下に絡条体圧痕が斜位に施文されているもので、鋸歯文と考えられる。391は無文の口縁部で、下の括れ部に凹線状の調整がある。口縁部整形は、383・387と類似する。

7類　天矢場式（第269図392～409）

胎土に長石・石英粒を多量に含み、器面調整によって擦痕が顕著な無文土器である。392～401は口縁部、402～409は胴部・底部付近である。394・396は、擦痕上に口縁部ナデ調整が施される。口縁部破片は、口唇部～内面に入念なナデもしくは研磨が施されるものが多い。392・393・396・399・407は、内面黒色～灰色を呈している。

（2）第2群　沈線文土器（第270図410～413・図版49）

三戸式土器4点の全点を掲載した。形態・文様とも酷似しており、410・411・413の3点はム-5区から出土していることから同一個体の可能性が高い。三戸式の最古段階ないしそれ以前に位置付けられている竹之内式に該当する土器である。3条ないし4条一組の横位沈線で区画されたなかに斜格子状・斜線状・綾杉状の集合沈線を充填する。口唇部は丸頭状で明確な平坦面や稜をもたない。

（3）第3群　条痕文土器（第270図414～419・図版49）

47点のうち6点を掲載した。この時期の炉穴25群37基検出していることからすれば抽出数はごく少ない。4点は調査区南西部の南側から出土している。414は外面に絡状体圧痕、内面に斜位の貝殻条痕文をもつ。内面にわずかな屈曲があり、早期末葉の土器の口縁部に近い部分であろう。415は内面に条痕、外面には微隆起による襷状区画文をもち、円形刺突と押引文の充填がなされる。鵜ヶ島台式の中ごろの土器であろう。416は内外面条痕が施され、外面緩やかな波状を呈する。口縁部付近は肥厚し、条痕の方向を変えている。417は口唇に、418は胴部に刻みをもつ。条痕文土器は既報告のⅡ期工事地区でも早期末葉の土器がややまとまっている。

（4）第4群　前期後葉～中期初頭の土器（第270図420～424・図版49）

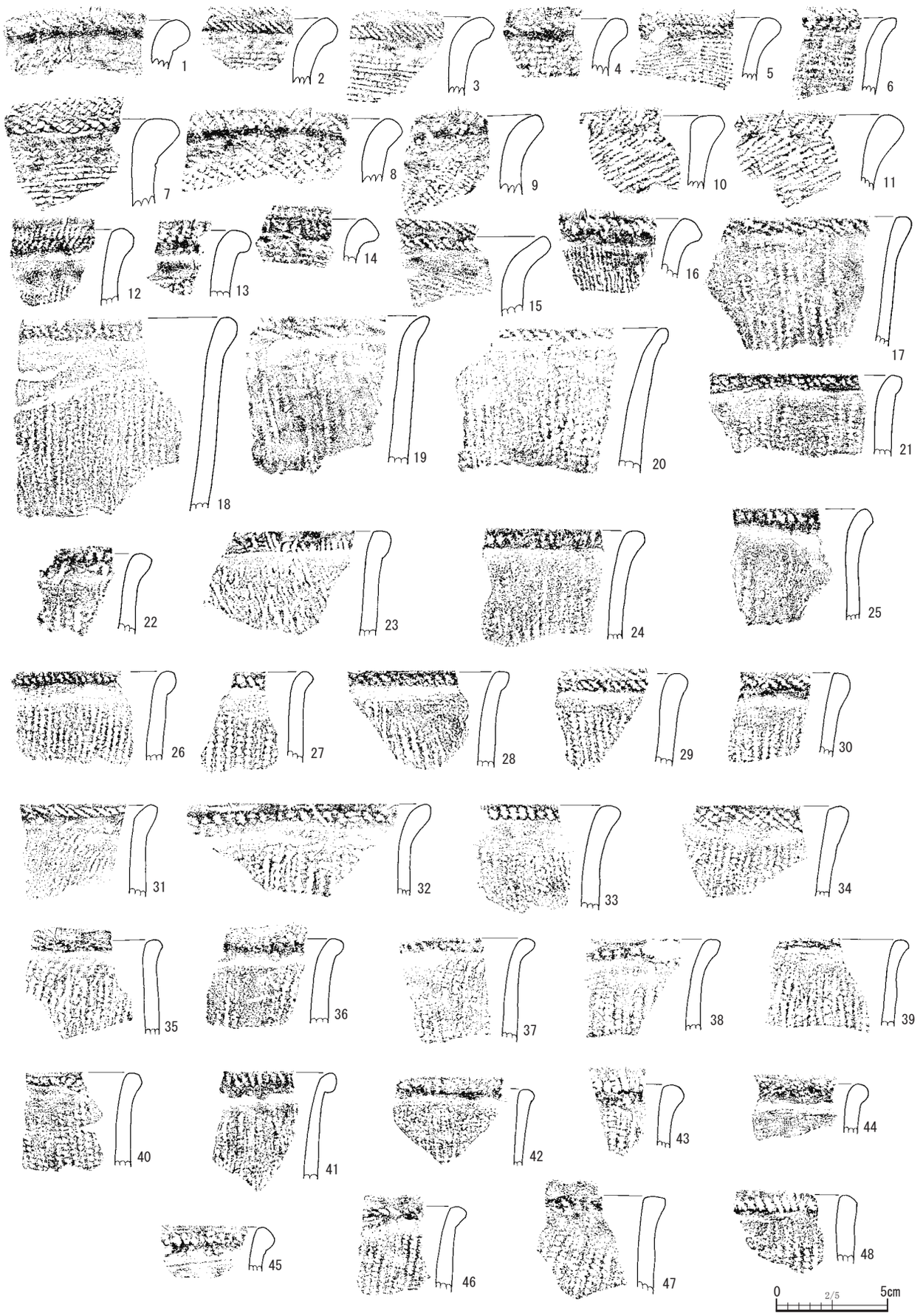
前期後葉～中期初頭の土器5点をすべて掲載した。420は竹管による平行沈線で横位区画と意匠文を施す。422は小形のハマグリ等による波状貝殻文をもつ。421は縄文と波状貝殻文を伴う頸部付近の破片である。縄文は不規則に単節？と結節回転文がつく。423は無節縄文と結節回転文を縦施文する。胎土に雲母を多く含む。424は複合口縁の土器で単節LRを横施文する。

（5）第5群　阿玉台式・勝坂式土器（第270図425～433・図版50）

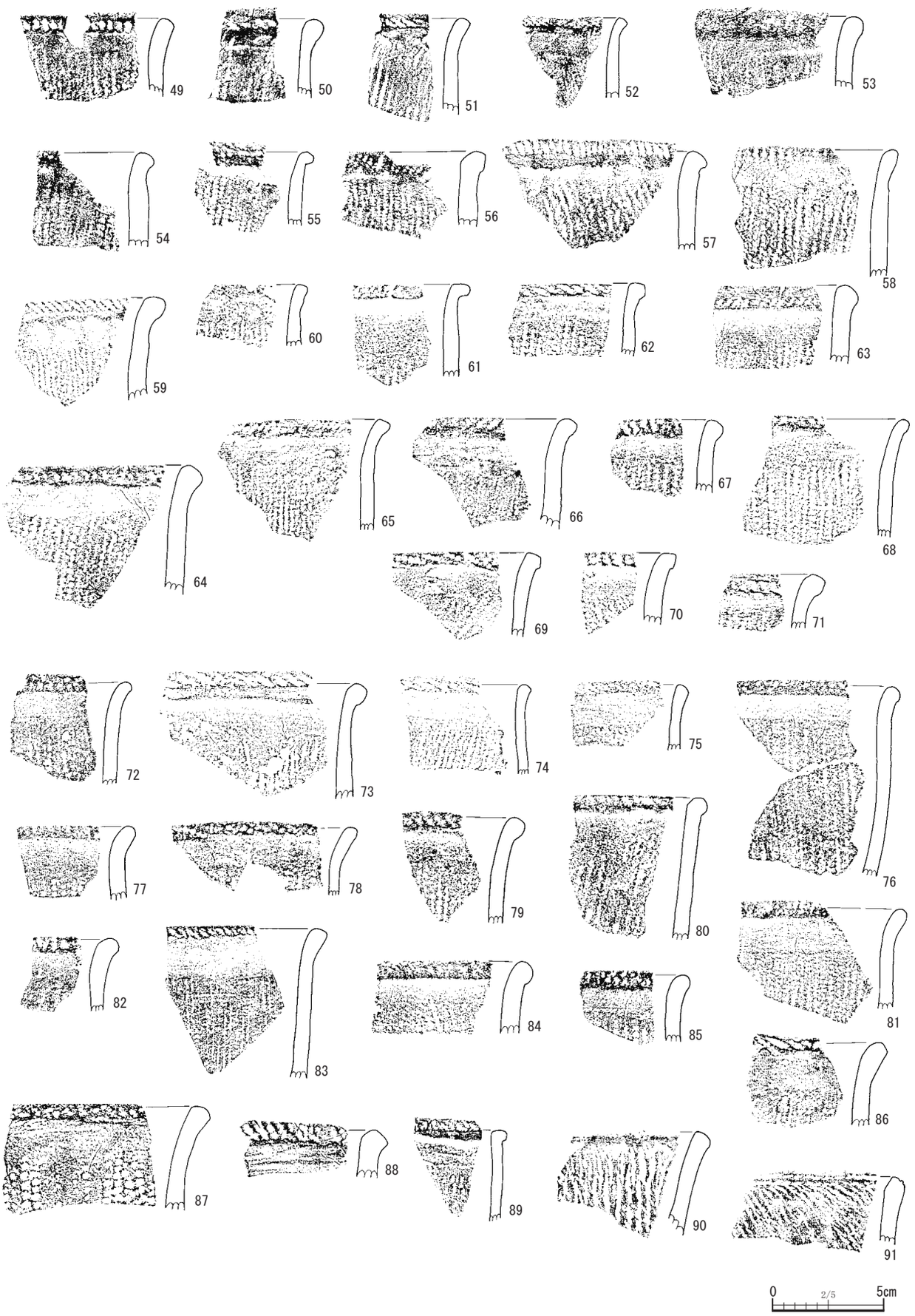
40点あり、大半は後半期の土器である。リ～レ－8～13区の60ｍ×30ｍの範囲から7点出土しており、他は分散的である。9点を掲載した。425～429は阿玉台式土器である。425・427は隆帯と角押文による区画文と朝顔形に開く突起をもつ。阿玉台1b式。426は隆帯区画に2列の結節沈線文が沿う。阿玉台Ⅱ式であろう。428・429は幅広の角押文をもつ。430～433は勝坂式土器である。430・431は刻みをもつ太い隆帯による意匠文をもつ。431は突起部分で、内面にも同心円状の沈線文をもつ。432・433は沈線による意匠文をもつ。

（6）第6群　加曽利Ｅ式前半の土器（第270・271図434～455・図版50）

86点あり、22点を掲載した。加曽利J-43・44住居跡付近のリ・ル－12～14の20ｍ×30ｍの範囲から11点出土しており、ほかはごく少ない。434～441はJ-44出土土器の年代に近い加曽利ＥⅠ式の古い段階のものであろう。454・455もＥⅠ式に伴うものであろう。455は肥厚する口縁が波状を呈し、波頂部から垂下する沈線と括れ部の横位沈線で幅広の矩形区画をつくる。口縁の隆帯上には沈線を引き背割状である。沈線は多截竹管によりきわめて深く引かれている。地文は単節LRが丁寧に縦施文されてい

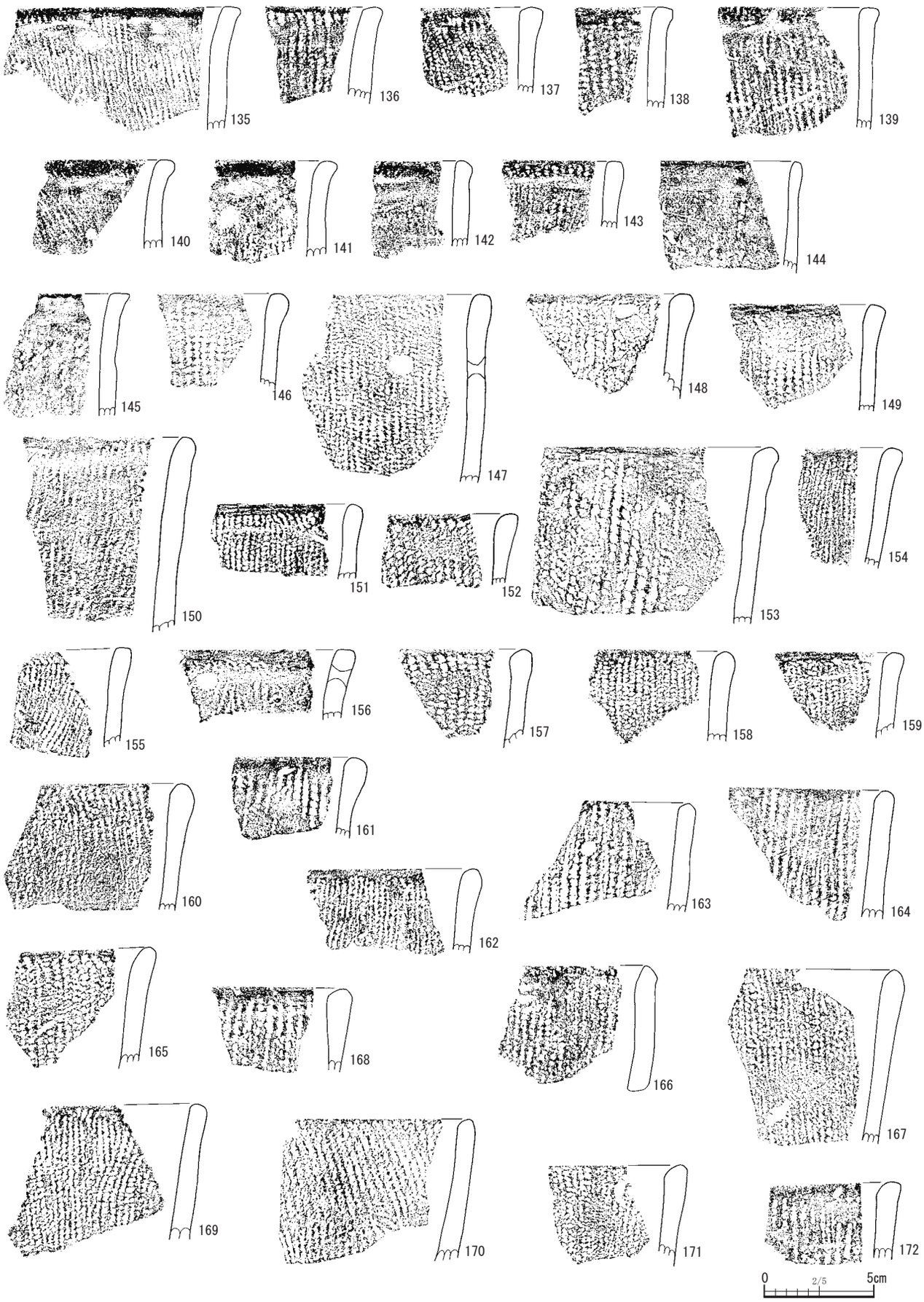


第 260 図　遺構外土器 (1) 第 1 群

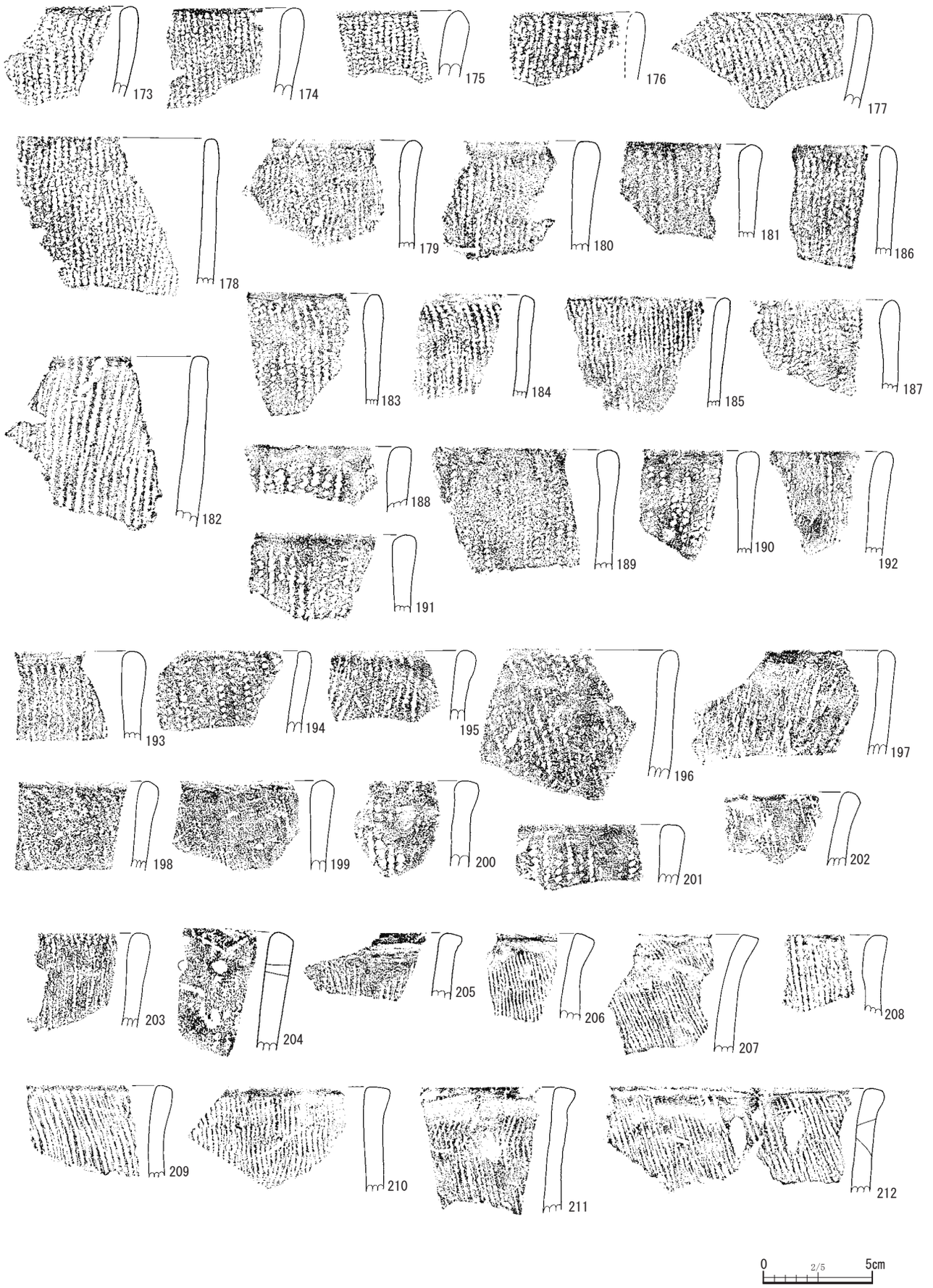


第 261 図　遺構外土器 (2) 第 1 群

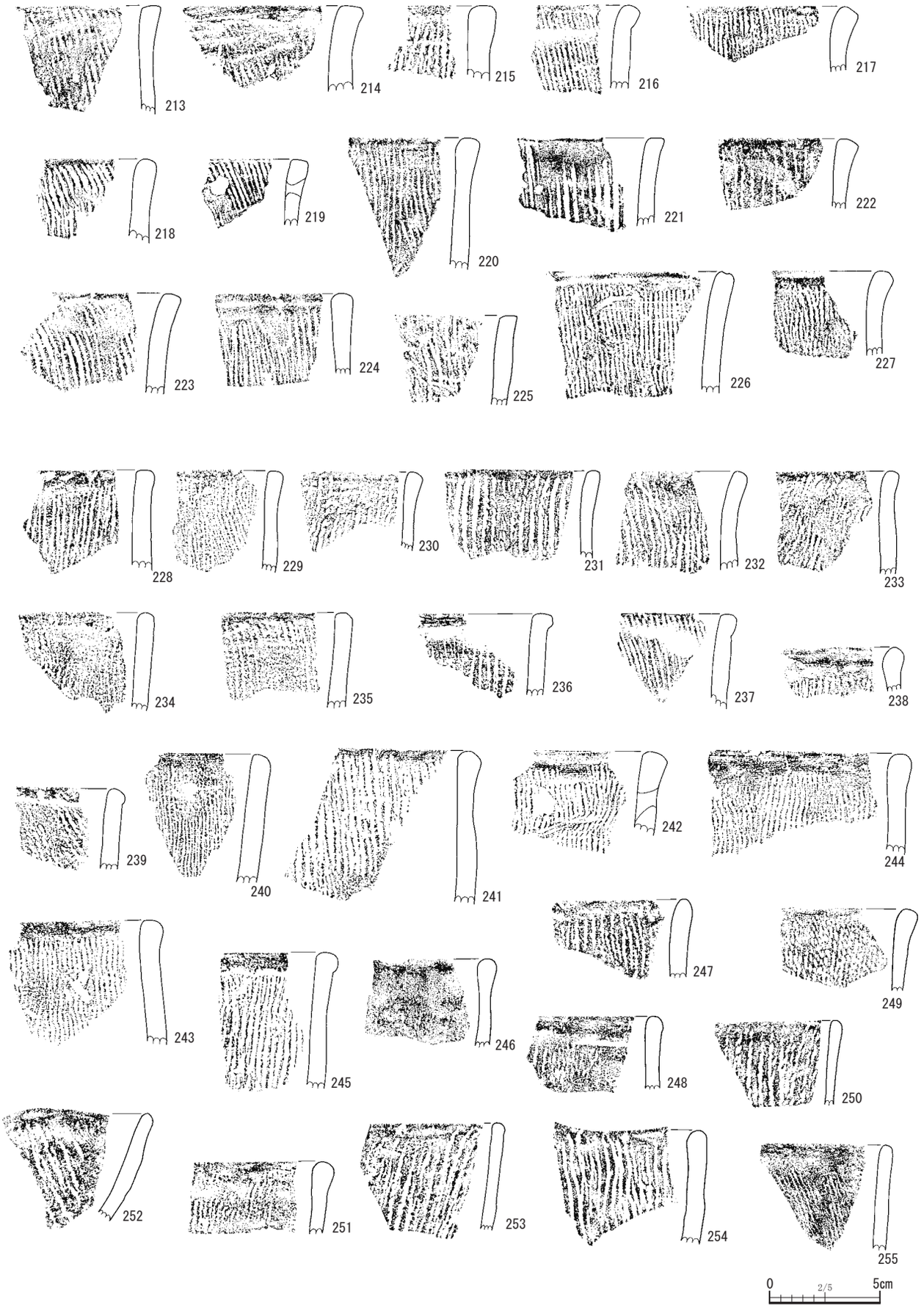
第 262 図　遺構外土器 (3) 第 1 群



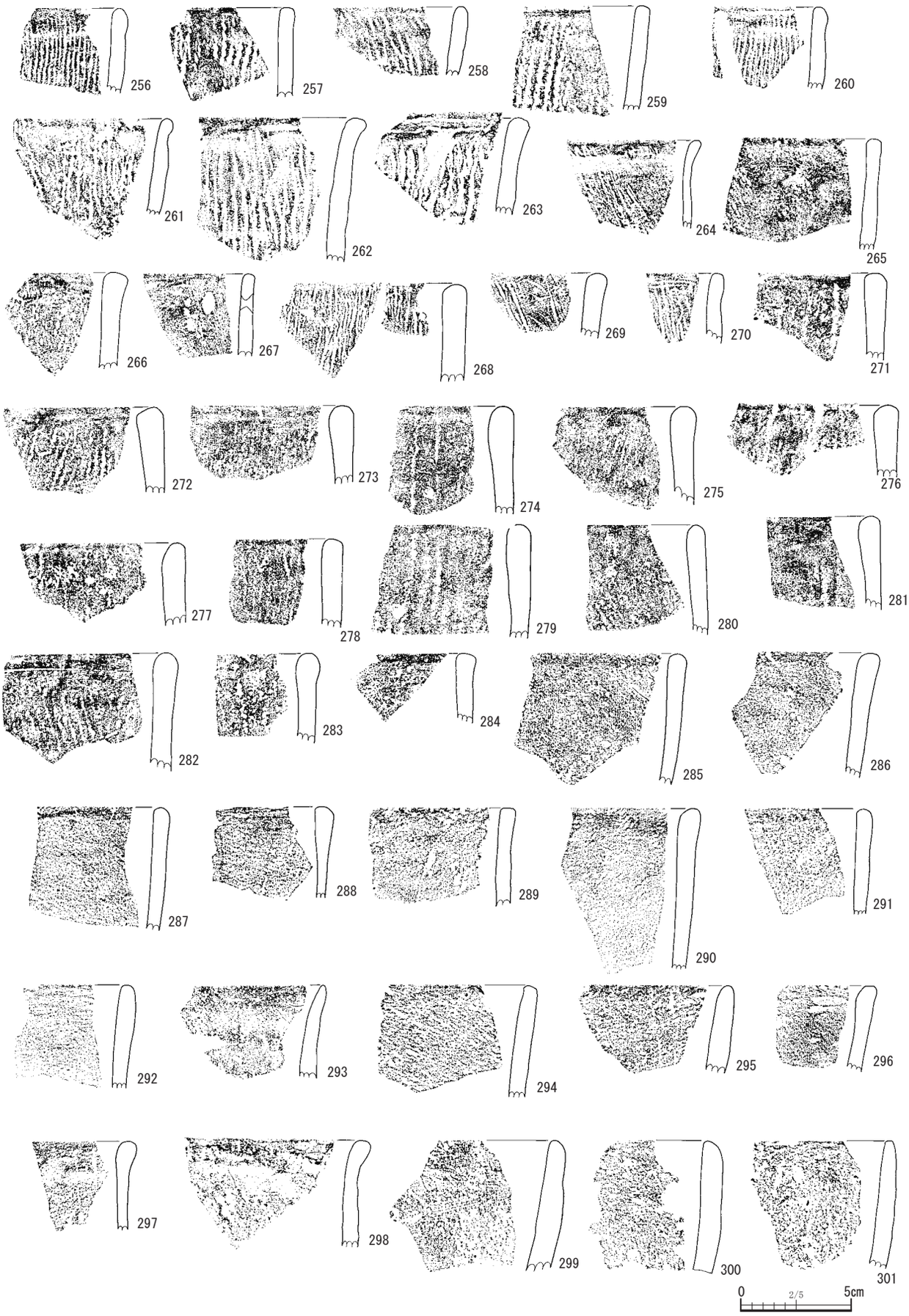
第 263 図　遺構外土器 (4) 第 1 群



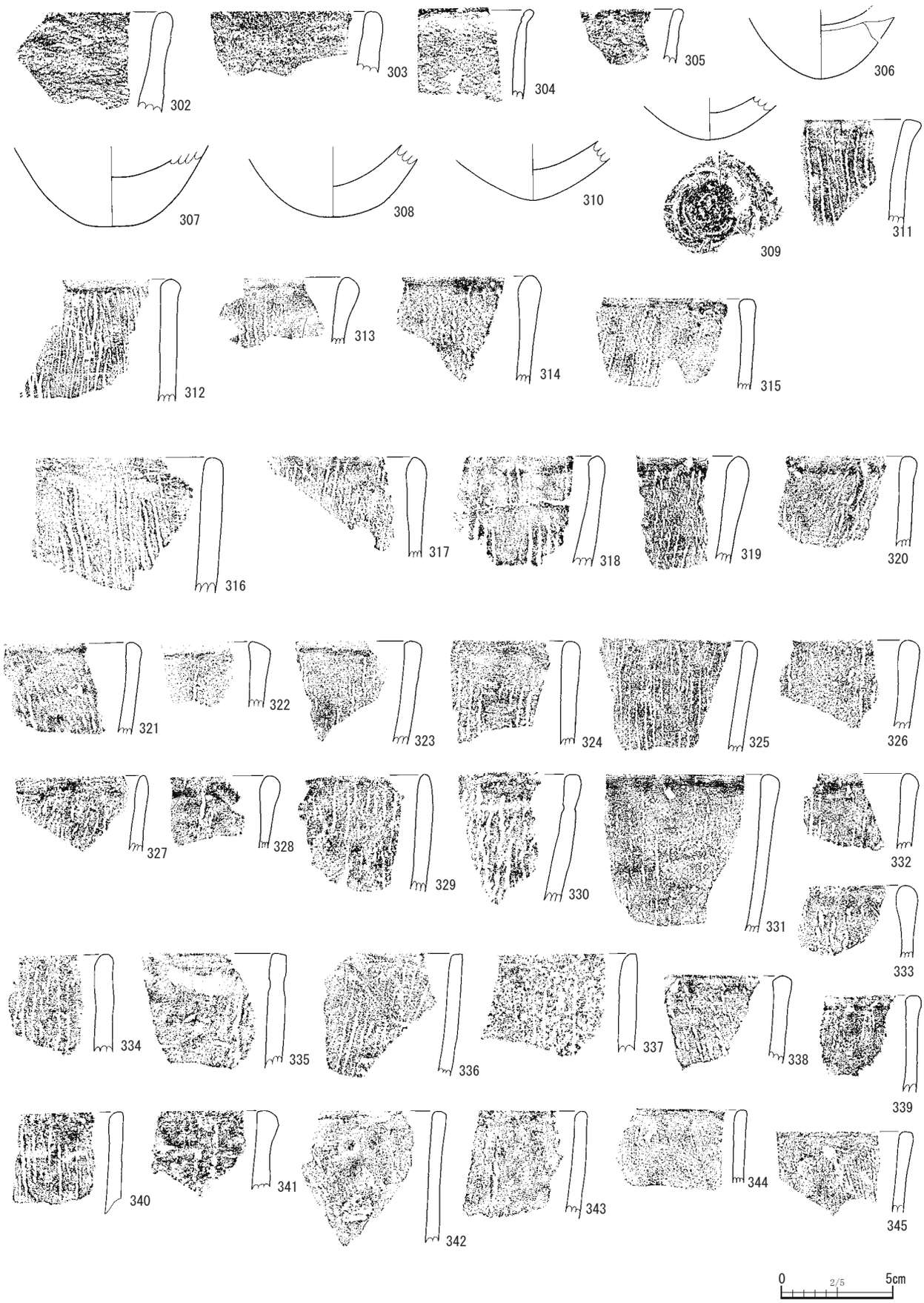
第 264 図　遺構外土器 (5) 第 1 群



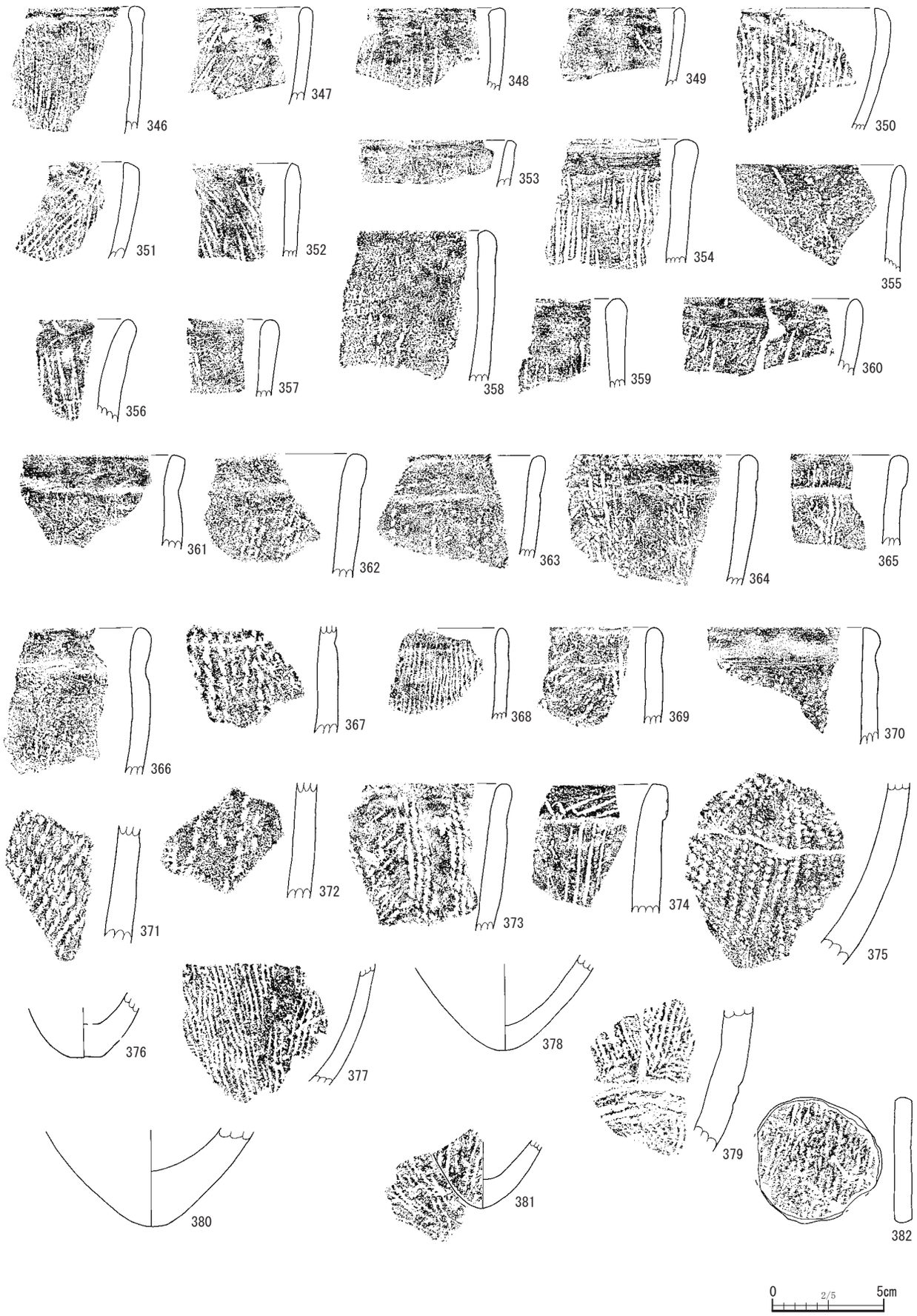
第 265 図　遺構外土器 (6) 第 1 群



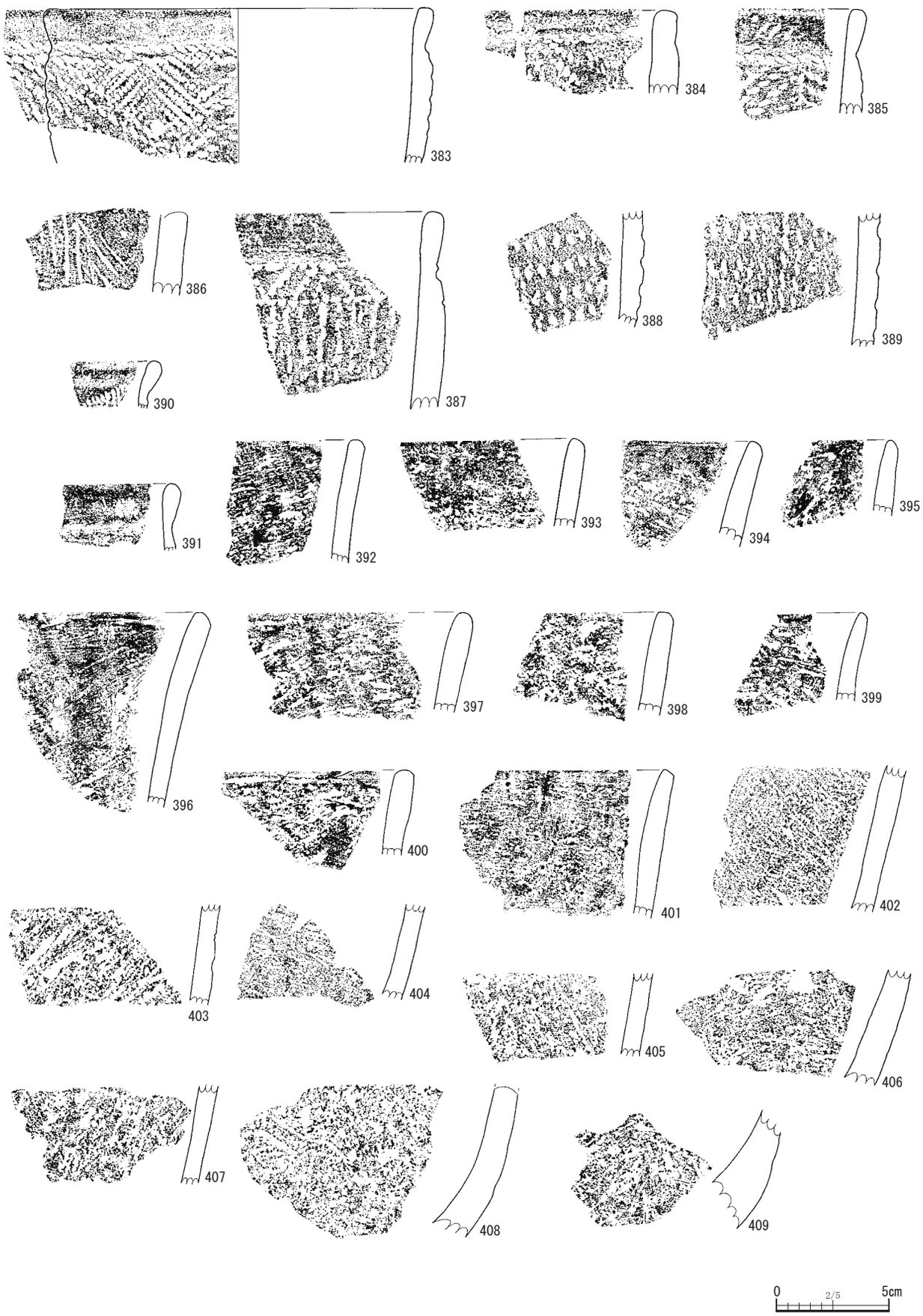
第 266 図　遺構外土器 (7) 第 1 群



第 267 図　遺構外土器 (8) 第 1 群



第 268 図　遺構外土器 (9) 第 1 群



第 269 図　遺構外土器 (10) 第 1 群

第 270 図　遺構外土器 (11) 第２群～第６群

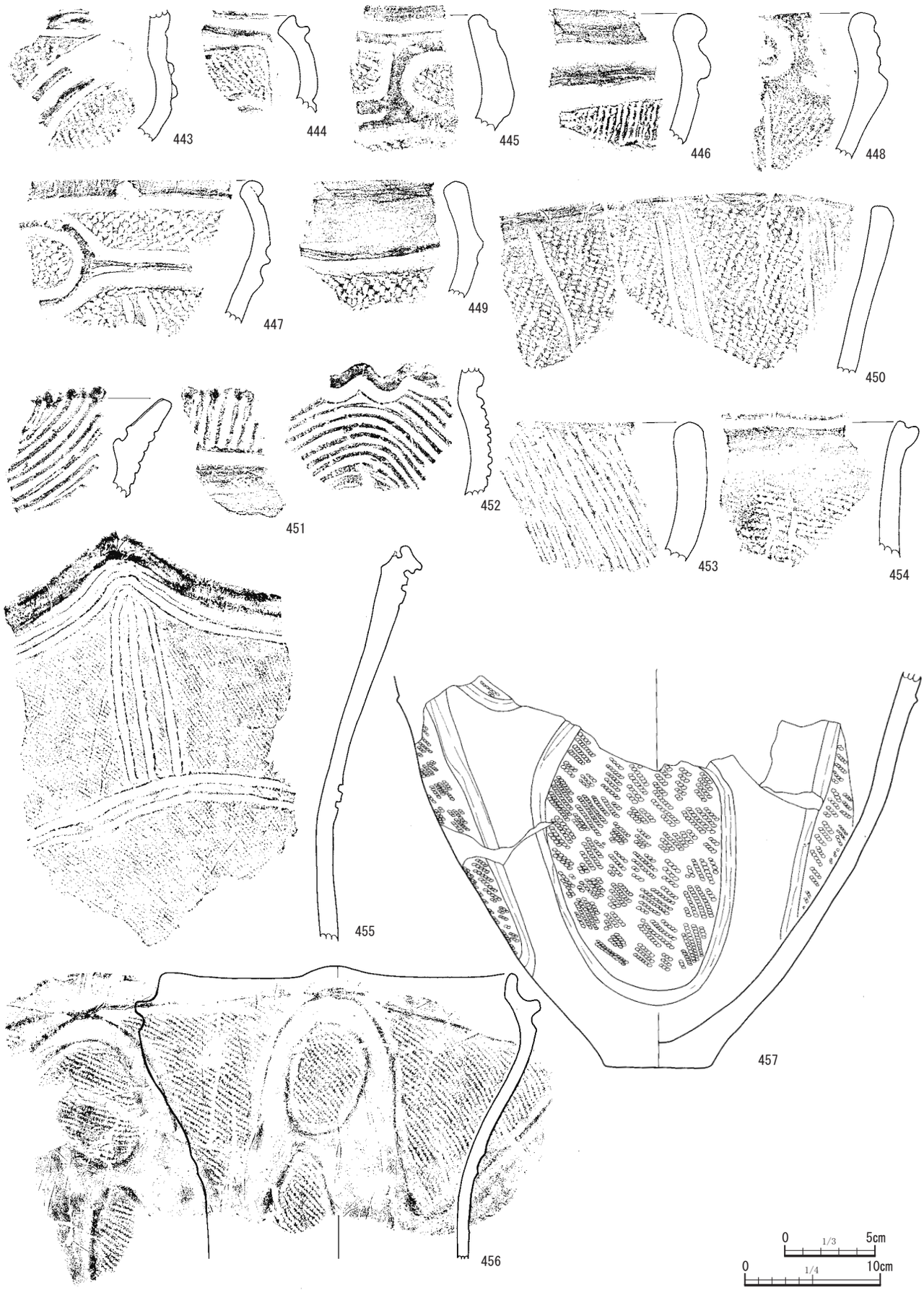
る。背割状隆帯や文様構成から有吉北貝塚SB186出土土器に類似するものと考えた。442～445はＥⅠ式のキャリパー形で、445はＥⅡ式に近いものである。446～453はＥⅡ式で446～447はキャリバー形、450はその系譜の口縁部文様帯をもたないもの、451～453は曽利系土器である。449は加曽利ＥⅢ式の可能性がある。

(７)第７群　加曽利Ｅ式後半～称名寺式土器(第271～275図456～550・図版49・50)

出土した縄文土器のほとんどを占めている第７群については、抽出方法が他の群と大きく異なるため抽出数の集計はしなかった。ここでは95点を掲出する。456・457は加曽利ＥⅣ式である。456は口縁部が微隆線で区画され、胴部には微隆線と縄文で抱球文、胴下部には「逆Ｕ字状文」が施される。457は微隆線と縄文で大きな楕円状の文様が施される。２点とも微隆線脇はナデられる。458～478・480～482は加曽利Ｅ式終末の土器である。458は口縁部が微隆線で区画され、一部突起状になる。微隆線脇には列点が施される。胴部文様は不明だが、沈線が認められる。加曽利ＥⅣ式以降と捉えたが、加曽利ＥⅢ式の可能性もある。459～462は口縁部が微隆線で区画され、胴部の微隆線による「逆Ｕ字状文」が貫入するものである。貫入した部分は突起状になる。459・462は微隆線脇がナデられるが、460・461はナデられない。463は口縁部が微隆線で区画され、一部が大きな突起状になる。胴部には縄文のみが認められる。464～469は沈線と縄文で文様が施されるものである。469は対向Ｕ字文が施されるものだが、胴括れ部で上下の文様が重なってしまっていることから加曽利ＥⅤ式の可能性がある。470～474は把手である。473は突起状になった部分に横方向の孔が認められる。474は８の字状に粘土紐が貼り付けられるもので加曽利ＥⅤ式に下るものと考えられる。475～478は瓢形の土器である。いずれも器壁は薄く、器面は丁寧に調整されている。480～482は口縁部が沈線で区画され、胴部には縄文のみが施されるものである。479は台形土器である。貫通する円孔が認められる。

483・484は称名寺式の関沢類型である。483は特徴的な貼付文と磨消縄文が認められる。484は底部付近で微隆線による渦巻文と横位連繋が認められる。微隆線脇には沈線が引かれる。485～488は西日本の中期末葉土器群の影響が認められるものである。485～487は沈線内に刺突が施される。488は沈線の代わりに刺突で区画が作出されている。489～550は称名寺式である。489～495は帯縄文が徹底されていないものである。いずれも称名寺式第１段階のものである。内面突出が認められるものはない。496～532は称名寺式古段階の土器である。496は称名寺式第１段階の土器で、口縁部に太く深い沈線と縄文で帯縄文が施される。波頂部内面には刻みが施される。497～499は窓枠状区画が施されるものである。ただし498・499は沈線が浅いことから第２段階に下っている可能性が高い。500～502・504は口縁直下に帯縄文が施されるものである。501は口唇部に内削状の平坦面をもつ。502・505はＪ字文と考えられる文様が認められる。502は沈線がやや細く、浅いため称名寺Ⅰ式(第２段階)の可能性がある。503・506～511は口縁部に弧状の帯縄文が施されるものである。503は口唇部に内削状の平坦面をもつ。506～509は口縁部文様の沈線が口唇部まで施される。510・511は口縁部までしか施文されない。505は帯縄文による懸垂文と楕円状の区画が認められる。沈線は口唇部まで引かれる。513は口縁直下が無文で、その下に帯縄文が施される。第２段階と考えられる。514・515は帯縄文で紡錘文と考えられる文様が施される。いずれも副文様が付されており、第２段階のものと考えられる。

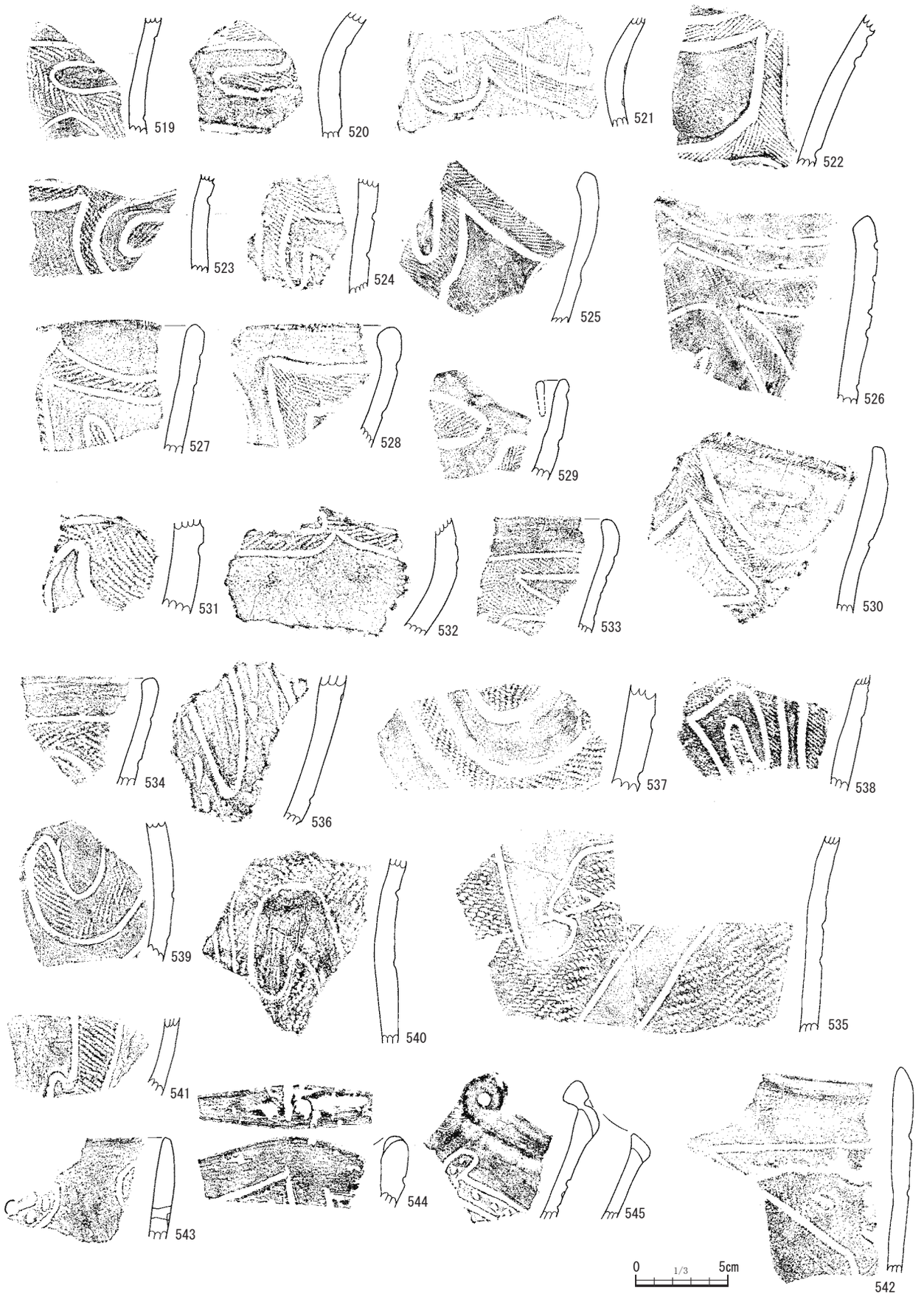
516は細い帯縄文が施され、無文部が広い。522と同様の文様構成の可能性がある。522は帯縄文で枠状の文様が施される。517は胴部が強く屈曲する器形で、鉢形土器の可能性がある。器面に粘土板を貼り付けた後、太く深い沈線と目の細かい縄文が施される。518は太く深い沈線と縄文で楕円状の文様が入り組むように施される。519・520は蛇行する沈線と縄文が施される。519はやや細い沈線で引か



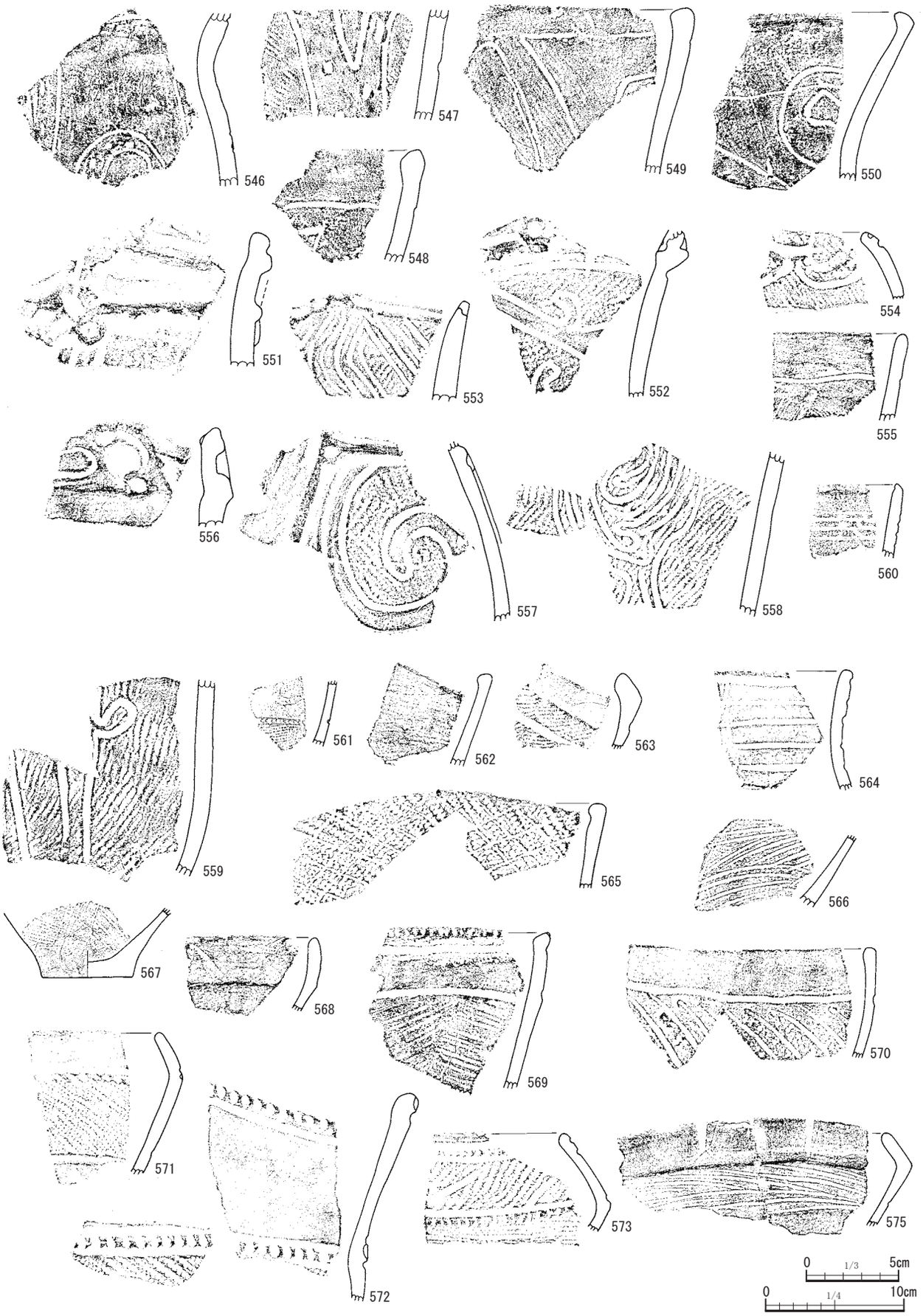
第 271 図　遺構外土器 (12) 第 7 群

第 272 図　遺構外土器 (13) 第 7 群

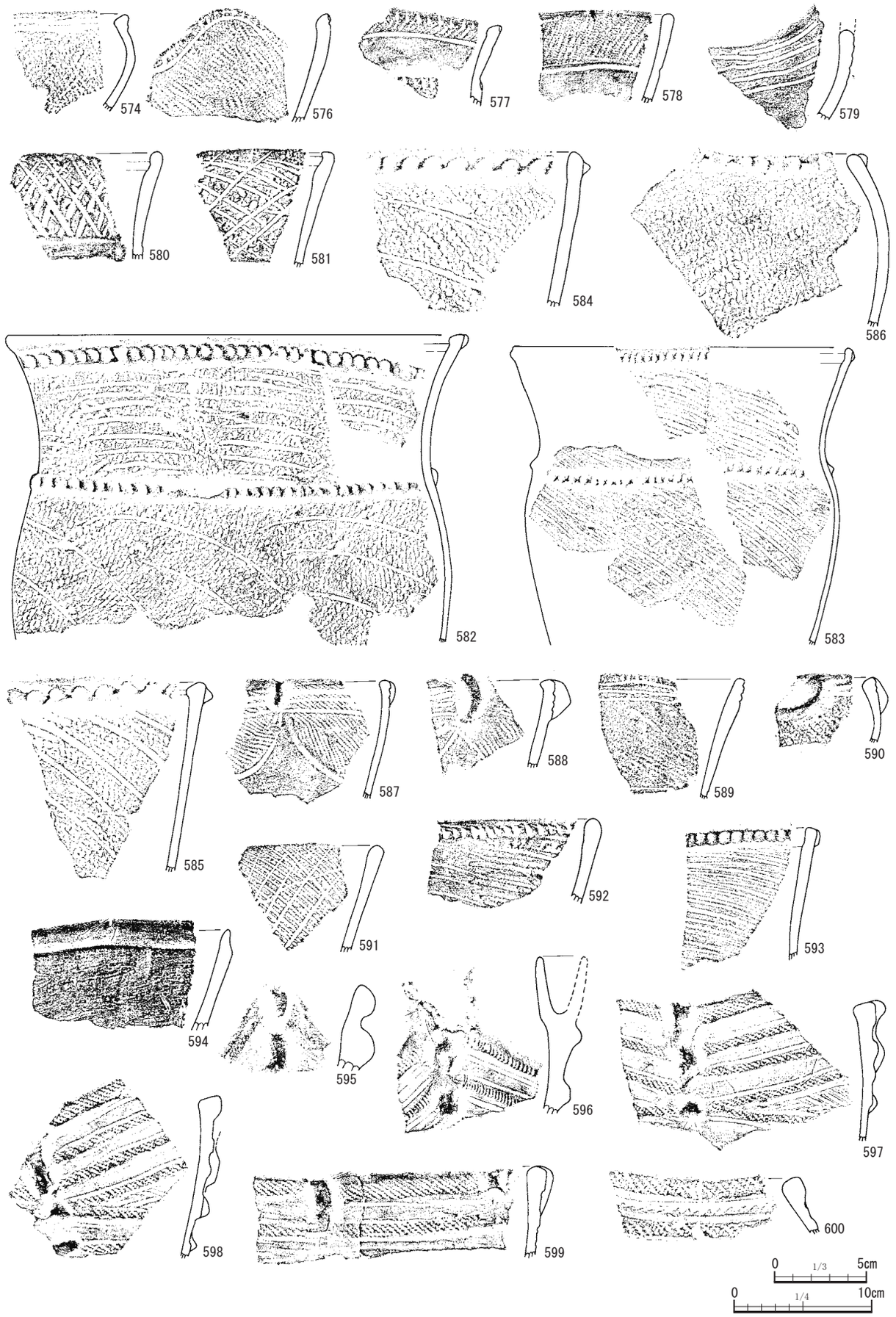
第 273 図　遺構外土器 (14) 第 8 群・第 9 群



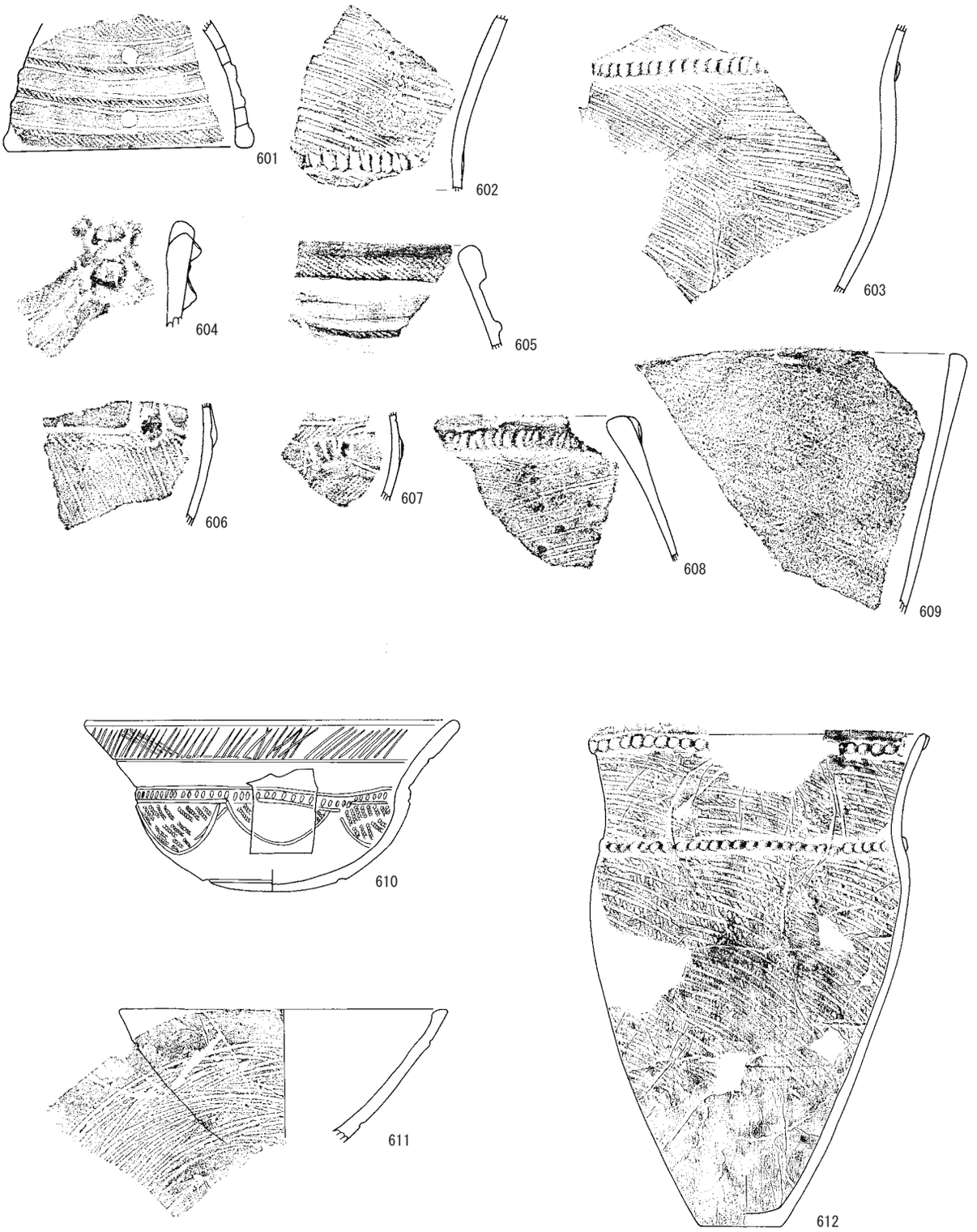
第 274 図　遺構外土器 (15) 第 9 群



第 275 図　遺構外土器 (16) 第 9 群



第 276 図　遺構外土器 (17) 第 9 群



第 277 図　遺構外土器 (18) 第 9 群

れている。521 は小柄の J 字文と斜行する帯縄文が施される。沈線はやや浅く、第 2 段階に下っている可能性がある。523・524 は帯縄文で横位に連結する J 字文が施される。沈線は太く深い。525・526 は称名寺式第 2 段階の土器で、波頂部下に J 字文が施される。526 は浅い沈線で文様が施される。527 ～ 532 は称名寺式第 3 段階と考えられる。太く浅い沈線と縄文で帯縄文が施される。527 はやや大柄な J 字文が施される。528 は無文部で J 字文が施されていると考えられる。529 は波頂部が突起となり、内面に貫通する孔を持つ。530 は帯縄文が弧状に施されるものである。

533 ～ 541 は称名寺式中段階である。帯縄文で文様が構成されるが、帯縄文部と無文部の広さが等しくなるように施文されている。また 535・540 は大柄の J 字文で、やや乱れた構成が認められる。542 ～ 550 は称名寺Ⅱ式である。543 ～ 547 は沈線と列点で文様が施される。548 ～ 550 は沈線のみで文様が構成される。

(8) 第 8 群　堀之内式土器 (第 275 図 551 ～ 559・図版 51)

555 は称名寺 2 式最終末の可能性もあるが、ここで扱った。554 は無頸の壷形土器。557 は蓋受状の口縁部を持つ広口壷もしくは注口土器で、拓本左側の左右を隆帯で区画した縦位の無文部には、横位橋状把手を付した可能性が高い。他は深鉢形土器の口縁部・頭部破片で全て堀之内 1 式。図示可能な堀之内 2 式は無かった。

(9) 第 9 群　加曽利 B 式～安行式 (第 275 ～ 277 図 560 ～ 612・図版 49・51)

145 点抽出し、49 点を掲載した。 7 群、 1 群に次ぐ数であり、加曽利 B2 式～ B 3 式期や安行 1 式期にもある程度の土地利用があったことを示している。加曽利 B1 式は 560 のみ抽出できた。561 は同一個体破片が他に数点ある。器壁の厚さ 4 ㎜前後で褐色を呈し、器壁の厚さ 4 ㎜前後と薄い作りである。胎土は極細粒で、肉眼では白色針状と光を反射する粒子の混入をかろうじて確認できる。文様は直線的な区画文と曲線的な図形を組み合わせた構成と思われ、磨消縄文の描線内に細かな円形の刺突列を加えている。縄文も細かく、単節で条方向 L とまで判別でき、 0 段多条と思われるが確定できない。無文部は平滑に調整され光沢を帯びている。十腰内Ⅱ群 b 類に類似した土器で、搬入品である。加曽利 B2 式は 562 ～ 567、584・586・611。563 以外は遠部台遺跡包蔵地に相当する後半段階と思われる。加曽利 B3 式は 568 ～ 573・575 ～ 578・580・581・582・585・586・610・612 と比較的多い。曽谷式は 583・587 ～ 591・594・612。安行 1 式は 595 ～ 601 である。粗製土器の 592・593・602・603 は遺存部分のみでの判別は難しいが、安行 1 式の可能性が高い。609 は内外面無文の大形鉢形土器で、類例は少ないものの安行 1 式としておく。晩期安行式は 604 ～ 608。このうち 608 は安行 2 式まで遡る可能性があり、605 は破片下側の細い隆起帯縄文から安行 3a 式、604 は偏平化した波頂部下の貼瘤文と隆起帯縄文から安行 3b 式と思われる。606・607 は安行 3a 式・3b 式いずれかである。

第 6 節　土器以外の遺物

1　土製品

土製品として掲載するのは土偶 1 点、容器 1 点、注口土器の蓋 15 点、ミニチュア土器 1 点、土器片円板 24 点、土器片錘 84 点である。蓋形土器、ミニチュア土器 (一部) については本来土器として掲載すべきであるが、便宜的にここで取り上げた。また、点数の少ない器種や突起について最後に取り上げておく。

(1) 土偶 (第 278 図・図版 52・付表 3-2)

J-4 から 1 点出土している。指の表現をもち腕部とみられる。上下を沈線で区画して内部に縄文 LR を

密に施文する。中実で断面形は丸みをもつ。J-4 は中期・加曽利ＥⅡ式期の住居跡であり、後期初頭までの土器が混じるが、土偶は後期中葉以降のものとみられる。流れ込みや別遺構の存在が考えられる。

(2) 容器 (第 278 図・図版 52・付表 3-2)

1 は D-327 から出土した称名寺式の小形壷を再加工したもので、横向きの橋状把手が付く。内面には黒色塗膜状の付着物と、その周囲の器面黒変が観察される (図版 50 － 3)。同様の黒変は広い範囲で認められ、塗膜状付着物がより広い範囲に存在したことを示している。付着物はアスファルトまたは漆が候補となり、これらの容器として使用されたものと推定される。現存上端部は口縁でなく、破面を入念に研磨したものである。外面にはベンガラとみられる赤色顔料が所々に付着しており、外面全体が赤彩されていたものとみられる。なお、J-46・47-32 も内面に同様の付着物がある。異系統的な土器であり注目される

類似例は佐倉市吉見稲荷山遺跡で出土している。橋状把手がつく小形土器にもう 1 点の小形土器で蓋をした状態で発見されており、内面の付着物の分析から漆液容器として使われていたことが判明している (小倉 2006)。加曽利ＥⅠ式からＥⅡ式の事例で時期差があるが、橋状把手の付く土器という共通点がある。

(3) 蓋 (第 278 図・図版 50・付表 3-2)

注口土器の蓋が 15 点出土している。多くは鍔付注口土器に伴うものであろう。 1 ～ 5 は対向する橋状把手が付くものである。微隆起線をもち、 1 ・ 2 ・ 4 ・ 5 は中央がやや膨らむ。 3 は平坦である。 6 ～ 8 は中央に橋状把手が付くもので、中央が 6 ・ 7 は大きく、 8 は小さく膨らむ。 9 ～ 11 は把手をもたないもので、 9 ・ 10 は微隆起線による意匠文、11 は沈線による重圏文。12 ～ 15 は以上の 3 種類に含められないもので、12 は上部の中央と対向する 2 か所に破面、それ以外の全面に擬口縁状の剥離痕跡があって灰が付着する。剥離していない側面部から下面部が赤彩されている。13・14 は小片で中央がやや膨らむシンプルなものであろう。13 は凹線文がつく。14 は蓋ではないかもしれない。15 は周囲が破損しており、対向する 2 か所に焼成前穿孔をもつもので上面全体に RL 縄文を施文する。

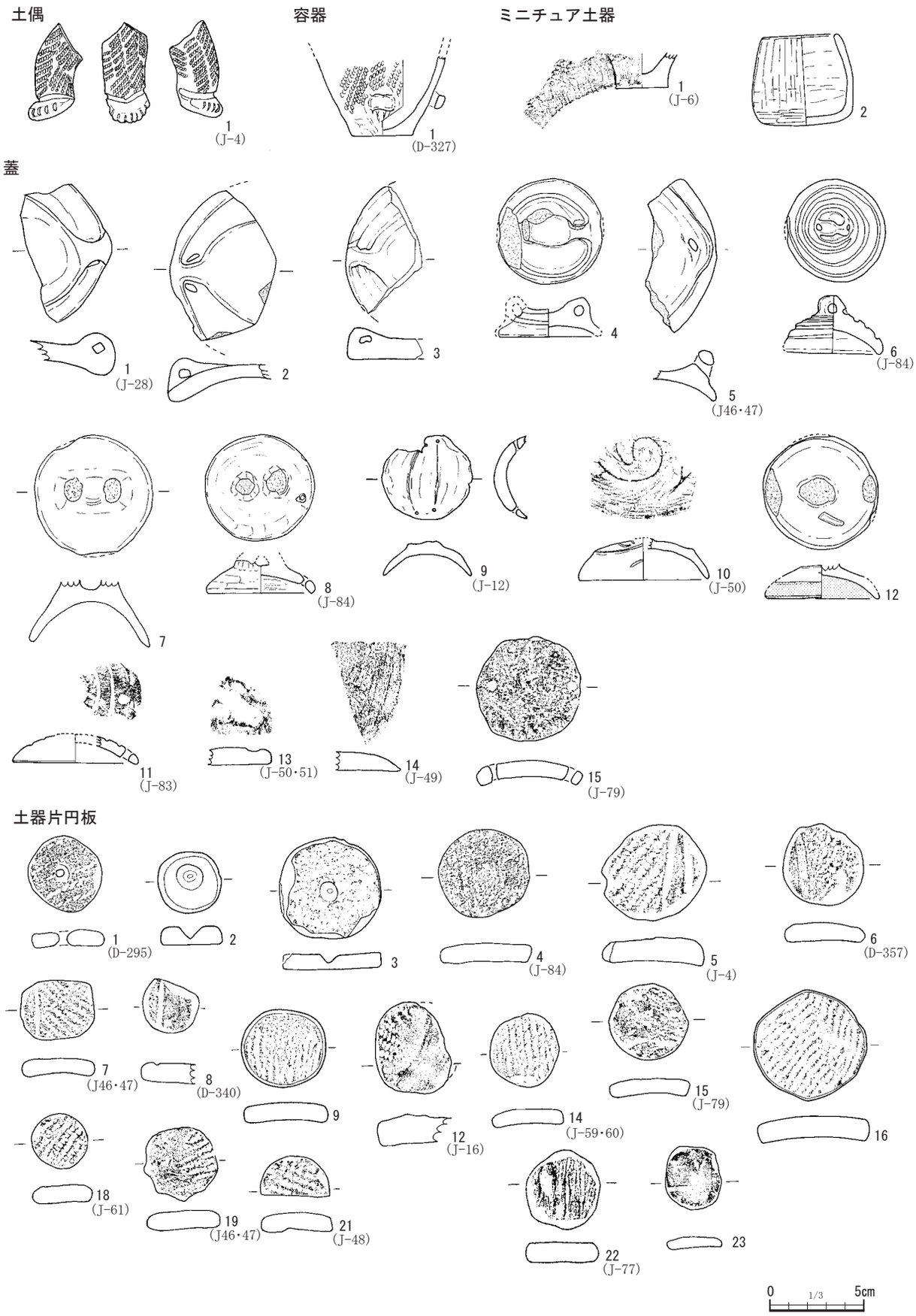
出土傾向をみると、大半が住居跡出土という特徴がある。J-50・51 と J-84 で各 2 点、J-12、28、39、46・47、49、79、83 から各 1 点である。蓋と注口土器本体が同一遺構から出土した例は見られない。蓋の数が多いのに対し、鍔付注口土器は少なく、点数が釣り合わないことの理由は不明である。

(4) ミニチュア土器 (第 278 図・図版 52・付表 3-2)

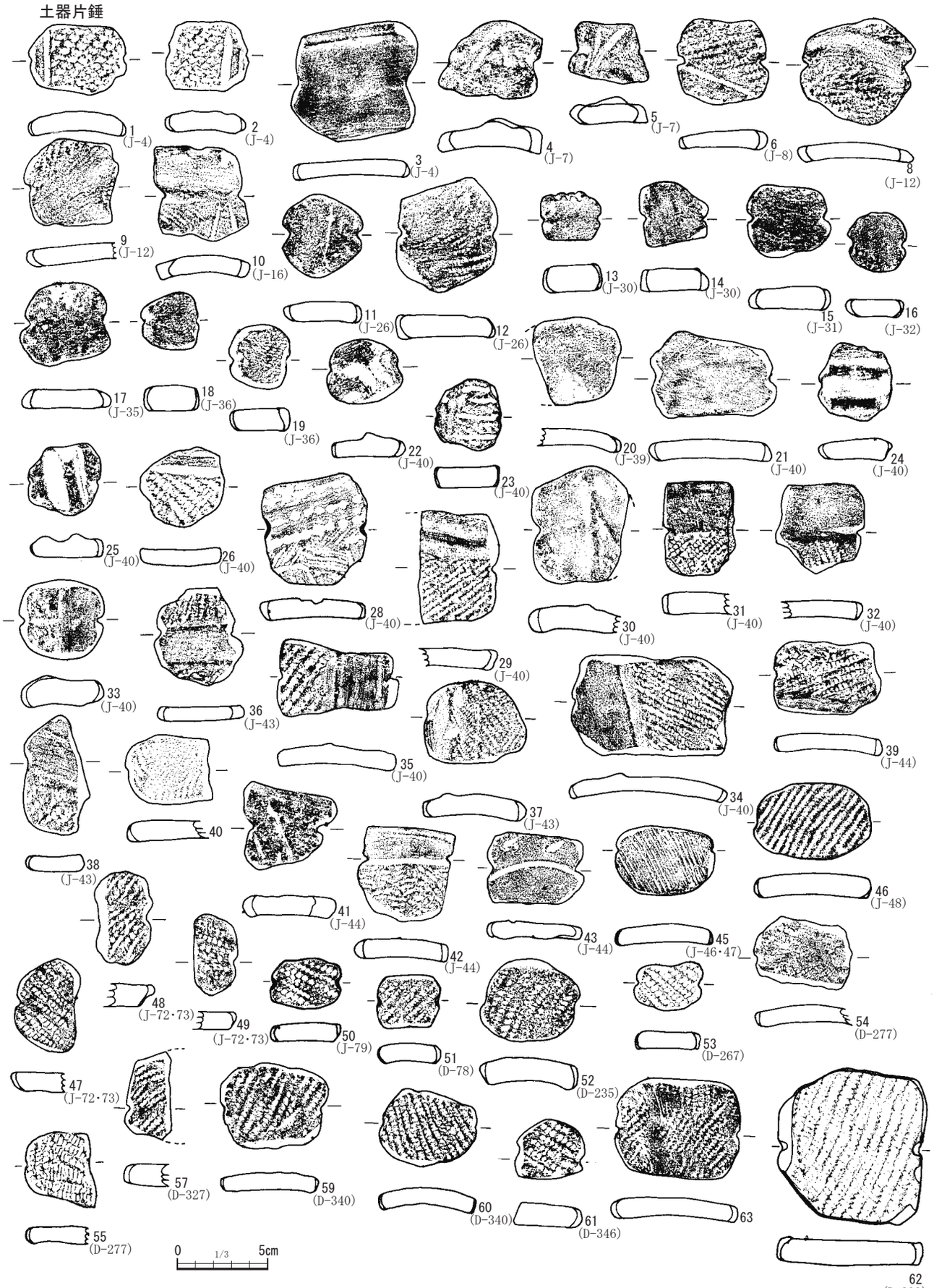
1 は深鉢を模したものであろう。RL 横施文の後、底面付近を縦ナデする (J-6 出土)。 2 は餅ヶ崎遺跡出土として実測されていたが、出土位置が不明のものである。このほかに J-2-9(第 53 図)、J-31-21(第 97 図)、J-50・51-23(第 133 図) があり計 5 点出土してる。

(5) 土器片円板 (第 278 図・図版 52・付表 3-2)

土器破片の周囲を研磨・打欠き成形したものであり、人為的な研磨が認められるものと、加工痕は不明瞭でも形状から成形された可能性が高いもの 24 点を掲載する。当初抽出されていたもののうち、こうした基準を満たさないものは除外して土器片に戻した。1 は中央に貫通孔をもつ有孔土器片円板である。2・3 は内面側に未貫通孔をもつ。当地域での一般的な傾向として、中期・加曽利Ｅ式前半から後半と、後期中葉から後葉に盛行するいっぽう、加曽利ＥⅣ式から称名寺式期には途絶えて堀之内式もごくわずかである。遺構出土資料をみると、住居跡出土 11 点、土坑出土 3 点であり、半数以上が遺構出土だが多くの遺構に分散して集中しない。素材土器の文様等から時期を推定できるものをみると 1 ・ 3 ・ 4 ・ 9 ・ 10 ・ 14 は早期・撚糸文土器、加曽利ＥⅡ式が 5 ～ 8 、加曽利Ｅ式後半が 11・12 であり、これ以外も中期のものが多いとみられる。当遺跡で主体をなす加曽利ＥⅣ式～称名寺式期、及び後期後半のものは見当たらない。このほかに、遺構外土器で掲載した撚糸文土器を素材としたものが 1 点ある (第 268 図 382。


土偶
容器
ミニチュア土器
1 (J-4)
1 (D-327)
1 (J-6)
2
蓋
1 (J-28)
2
3
4
5 (J46・47)
6 (J-84)
7
8 (J-84)
9 (J-12)
10 (J-50)
12
11 (J-83)
13 (J-50・51)
14 (J-49)
15 (J-79)
土器片円板
1 (D-295)
2
3
4 (J-84)
5 (J-4)
6 (D-357)
7 (J46・47)
8 (D-340)
9
12 (J-16)
14 (J-59・60)
15 (J-79)
16
18 (J-61)
19 (J46・47)
21 (J-48)
22 (J-77)
23
0 1/3 5cm

第 278 図　土製品 (1)


土器片錘
1 (J-4)
2 (J-4)
3 (J-4)
4 (J-7)
5 (J-7)
6 (J-8)
8 (J-12)
9 (J-12)
10 (J-16)
11 (J-26)
12 (J-26)
13 (J-30)
14 (J-30)
15 (J-31)
16 (J-32)
17 (J-35)
18 (J-36)
19 (J-36)
20 (J-39)
21 (J-40)
22 (J-40)
23 (J-40)
24 (J-40)
25 (J-40)
26 (J-40)
28 (J-40)
29 (J-40)
30 (J-40)
31 (J-40)
32 (J-40)
33 (J-40)
34 (J-40)
35 (J-40)
36 (J-43)
37 (J-43)
38 (J-43)
39 (J-44)
40
41 (J-44)
42 (J-44)
43 (J-44)
45 (J-46・47)
46 (J-48)
47 (J-72・73)
48 (J-72・73)
49 (J-72・73)
50 (J-79)
51 (D-78)
52 (D-235)
53 (D-267)
54 (D-277)
55 (D-277)
57 (D-327)
59 (D-340)
60 (D-340)
61 (D-346)
63
62 (D-393)
0 1/3 5cm

第 279 図　土製品 (2)

J-84 出土)。撚糸文土器を素材とした 7 点のうち、 4 点は中・後期の遺構から出土しているが、撚糸文系土器がまとまった遺跡では出土例が多いので、早期に加工されたものが流入したものと考えられる。

(6) 土器片錘 (第 279・280 図・図版 52・付表 3-2)

84 点出土し全点を掲載対象とした。切込みの有無については、実体顕微鏡で人為的な加工を確認し、新しい傷や判断できないものを排除した。付表の残存度欄は、＋記号＝一部欠損、一対の切り込みが遺存するもの。++ 記号＝欠損、切り込みの一方が遺存しないものとした。 1 ～ 50・79 ～ 81 は住居跡出土である。 1 ～ 3 は J-4 から出土した。 1 ・ 2 は加曽利 E Ⅱ式のキャリパー形土器を素材としており、今回のなかで唯一同一土器に由来する可能性がある。 4 ～ 7 は加曽利 E Ⅱ～ E Ⅲ式か。18・19 は J-36 出土で大きさと形がよく似ている。21 ～ 35 は J-40 出土であり、15 点はもっとも多いまとまりである。39・41 ～ 43 は J-44 出土である。有文等を選んで素材の時期をみると、ほとんどが中期の土器を素材としている。中期のなかでは加曽利 E 式前半と後半の両方が多く、阿玉台式が混じる。46 ～ 60 の縄文のみのものは大半が加曽利 E 式前半とみられる。43 は称名寺式後半の土器である。

(7) 焼成粘土塊 (第 280 図・図版 52・付表 3-2)

土器や土製品等の成品ではない焼成された粘土塊が 8 点出土している。いずれも住居跡出土で、J-7 に 6 点 (1 ～ 6) がまとまっている。 1・2 には指頭によるとみられる痕跡がある。 4・5・7 はひも状、 1・2・3 はひも状やかけら状の粘土を握ってまとめたような状況である。 8 は半球状で古墳時代の土玉の破片の可能性があるが、破面も焼成しているなど他の資料との共通点をもつこと、縄文時代の住居跡から出土したことからここに含めた。

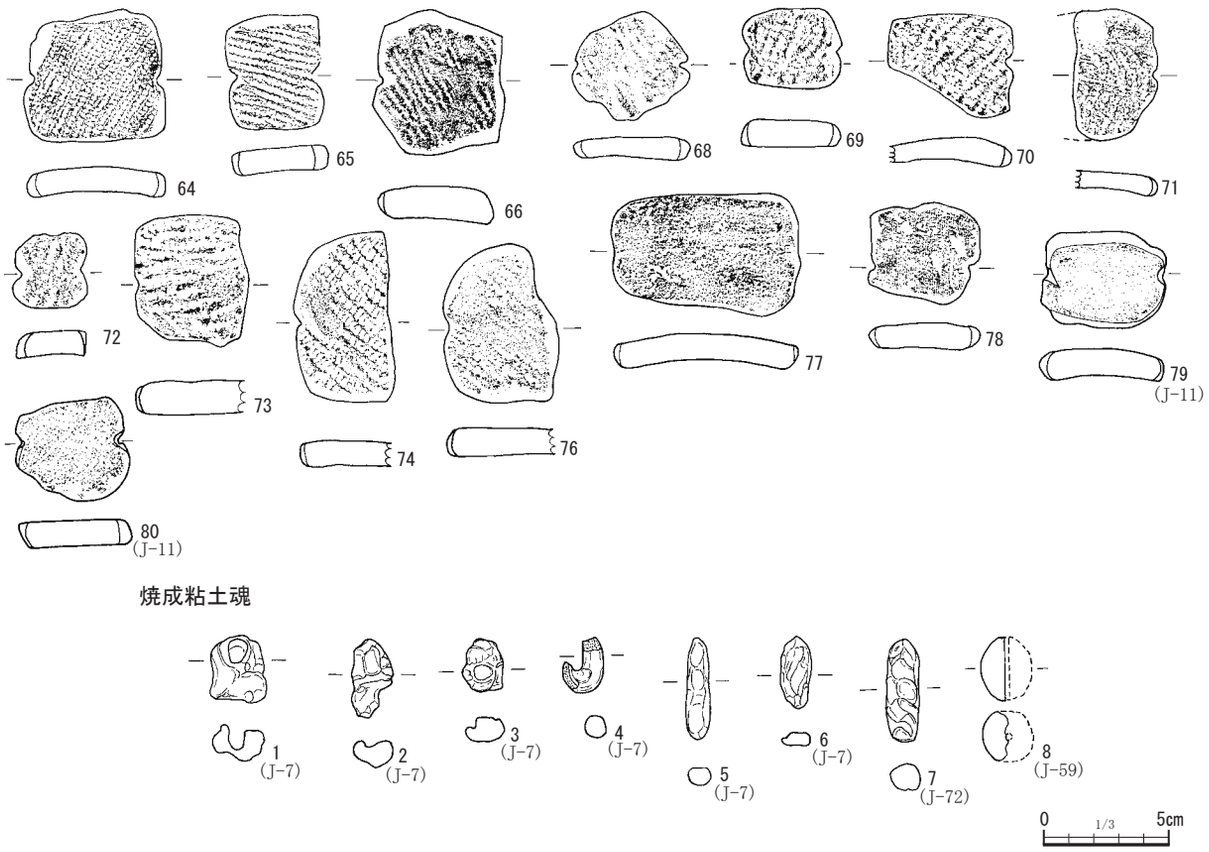
(8) その他

遺構出土遺物として掲載した点数の少ない器種や突起を挙げておく。動物形突起 (鳥頭形突起) が J-11(第 68 図 12)、J-52(第 136 図 19)、J-59・60(第 147 図 10) で各 1 点出土している (巻頭図版 2)。いずれもこの時期に見られる猛禽類の頭部を意匠化したものであろう。J-32-1(第 99 図)、J-54-13(第 139 図)、遺構外 475・478(第 272 図) は橋状把手の付く小形土器である。J-54-13 と遺構外 475 は赤彩されている。J-31-14・15(第 97 図) も外面が赤彩される小形土器である。器台は J-39-19(第 115 図)、J-73-6(第 165 図)、J-74-21(第 167 図) の 3 点を掲載した。注口土器は J-32-1(小形。第 99 図)、J-50・J-51-3(第 133 図)、J-58-1(第 143 図)、J-59-10(第 147 図)、J-71-5・6(第 161 図)、J-74-20(第 167 図)、J-79-38(第 174 図)、J-84-1(第 179 図)、遺構外土器 477(第 272 図) がある。

2　石器・石製品

石鏃 80 点・同未成品 89 点、磨製石斧 32 点 (33 点)、打製石斧 67 点、磨石類 165 点 (173 点)、砥石 41 点 (45 点)、石皿・台石類 73(74 点) 点、他の剥片石器 24 点、軽石製品 41 点、石核類 146 点、剥片類 20,290 点、玉類 4 点、石棒 55 点 (57 点) が出土しており、その全点 21,107 点を掲載・保管対象とし一部を図示した。カッコ内は再加工 / 利用を含めた数である。別の器種に再加工・利用されたものについては、元の器種で記載する方針であったが徹底していない。石材の鑑定は剥片石器について尾崎が行ったが、礫石器は未了である。器種等の確認・観察は整理作業の終盤に行ったため、本文・表の記載内容と実測図の照合・修正はできなかった。詳細な観察も未了であり、後日を期する必要がある。属性表は礫石器と石製品を付表 3-3 に、剥片石器と剥片・砕片類を付表 3-5 に示した。

個別掲載の対象外としたのは人為的な加工 / 使用の認められない礫と軽石である。これらも何らかの目的で遺跡内に運ばれたことは明らかである。礫は 20 箱あり、合計で 1857 点・156.0kg あった。被熱痕



第 280 図　土製品 (3)

跡をもつものを含むが、今回は観察・記載を行わなかった。軽石は製品としたものを除くと 116 点・0.6kg あった (付表 3-3・3-4 と同じファイルに番号外で集計結果を所収)。

遺構からまとまって出土したのは J-46・47 の石棒と、D-310、J-55、J-18、J-46・47 の石核・剥片類である。礫石器は遺構外出土が大半を占めており、土製品や剥片石器とは大きく傾向が異なる。

(1) 磨製石斧 (第 281・282 図・図版 53・付表 3-3)

32 点出土しており、遺構出土は 6 点・19％である。形態別の内訳は、小形定角式 4 点、定角式 28 点である。小形定角式は未注記で出土位置不明を除くと、J-34B から 2 点、D-380 から 1 点とすべて遺構出土であり注目される。石材は未鑑定だが透閃石岩や緑色岩等の良好な素材が少ない印象である。1 ～ 3・30 は小形定角式磨製石斧である。磨製石斧等の破片を再加工したものであろう。1 ・ 3 は全面を成形し研磨しているが、わずかに破面の凹凸を残す。1 の研磨はとくに入念である。2 ・30 は破面を多く残しつつ概ね斧形とし、刃部を作出している。4 はやや大きいが、やはり磨製石斧の破片を再加工したものである。6 ・ 8 ・10・11 は刃部の破損後に再加工や再利用された痕跡をもたないものである。刃部を再生すれば使用できるサイズである。6 は両側縁が敲打ないし粗い研磨でざらざらになっている。装着等に関わるものか、破損後の再利用か判然としない。刃部が使用可能な状態のものは 7 ・ 9 ・25 である。11・12 は大きいが劣化によりこうした検討ができない。13 ～ 15・20 は磨石類に、21・26・29 は砥石に転用されている。16 ～ 19 は基部破片、22 ～ 24・27・31 は刃部破片である。

欠損の少ない小形以外の 12 点の長さの平均±標準偏差は、96.4 ± 31.7㎜である。もっとも長いものは 14 の 139.0㎜である。例えば加曽利貝塚では 18 点の平均が 67.5 ± 29.2㎜と短い。刃部再生はかなり短い段階まで行われており、転用率も高いなど二つの遺跡の差は明確である。

(2) 打製石斧 (第 283 ～ 285 図・図版 53・付表 3-3)

67 点出土しており、遺構出土は 13 点・19％である。形態別の内訳は、分銅形 37 点、短冊形 13 点、撥形 6 点、不明 11 点である。当地域では中期中葉までは短冊形中心で、中期後葉以降分銅形が増える傾向にある。1 ～ 37 は分銅形で、①礫面・片理面をもつものは 11・18・21・23・27・28・31・33・35、②研磨面をもつものは 16・17・19・22・24 ～ 26・29・30・37、③劣化により不明は 36 である。他は④両面に剥離面をもつものであるが、32 が両面加工であるほかは、片面加工ないし周縁や刃部のみ加工を加えたものである。こうした観察結果から、両面を剥離加工することは避けて、薄く剥離した素材を選択 (①・④) ないし、軟質な石材を研磨で薄くする方法が主流であったことがわかる。38 ～ 49・59 は短冊形、50 ～ 55 は刃部側がやや開く撥形である。厚みのある素材の両側面を加工したものが多い。48 は礫片の形状が短冊形に近いもの、49 は磨製石斧からの転用である。55 は基部の側縁は平行で刃部側が膨らむ。56 ～ 58・60 ～ 67 は破片である。60・62・64 は撥形の可能性が高い。

使用不可能な程度の欠損は 67 点中 16 点にみられ、欠損率は 23.9％と他の器種に比べて高い。欠損の少ない 35 点の長さの平均±標準偏差は 84.8 ± 18.1㎜、最長は 35 の 125㎜であった。比較のために加曽利貝塚の数値をみると、欠損は 128 点中 110 点、欠損率 85.9％。長さの平均 75.3 ± 18.9㎜、最長は 139.3㎜であった。欠損率が大きく異なっており、当遺跡は刃部再生によって使用可能な製品が数多く土中に至ったことを物語っている。

(3) 磨石類 (第 286・287 図・図版 53・54・付表 3-3・4)

叩き割り・潰し、突き砕き・潰し、擦り潰し等、多くの用途に複合的に使われた礫石器であり、磨石・叩石・台石・凹石等の器種に区分せず、磨石類としたものである。全部で 165 点のうち遺構出土は 30 点・18％である。複数出土した例は J-12(4 点) に限られる。使用不可能な程度の欠損は 56 点にみられ、欠損率は 33.7％である。完形のまま土中に至ったものも多いが、焼け礫に転用されたものが 21 点、うち焼け礫と磨石類としての使用が繰り返された事例が 7 点、焼け礫から磨石類として使用されたものは 26 点、破損した磨石を再加工 / 再利用したものが 8 点、石棒・石皿片からの転用が各 1 点ある。遺構出土は 18％にすぎず、遺構外でもまとまった出土例はみられない。使用痕の略号は以下の通り。

観察・記載は加曽利貝塚 (西野・米倉他 2017) の方法により、結果を付表 3-4 に示した。

敲 a：表面の微細な損壊による白色化や剥離・破損を伴う敲打部

敲 b：表面に浮き出た硬い鉱物が離脱し凸凹な平滑面を形成する広い敲打面

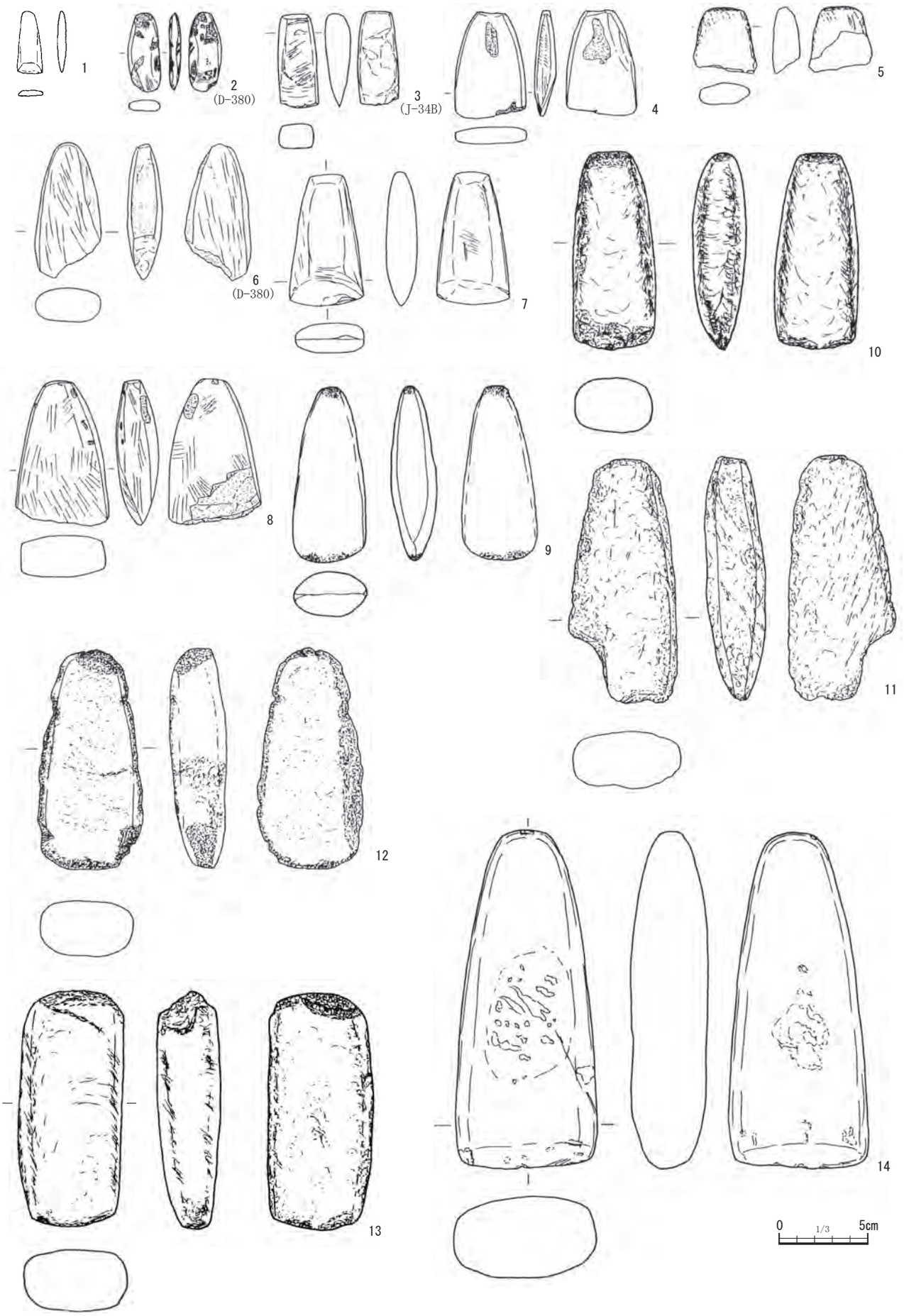
磨 a：ざらついた磨面。しばしば粗い線状痕

磨 b：平滑な磨面。しばしば光沢や細かい線状痕

使用不可能な程度の破損品を除く 107 点でみると、敲のみは 21 点 (19.6％)、磨のみは 36 点 (33.7％)、複合は 50 点 (46.7％) となった。半数近くが磨面と敲打面の両方を有している。端部は敲 a・敲 b・磨 a が多く、叩き割り・潰し、突き砕き・潰しなどを想定できる。平面は磨 b が圧倒的に多く、広い平滑面が擦り潰し等に使われることが多いと推定されるが、広い範囲に硬い鉱物を残して基質部分が凹んでいる敲 b が見られるものは、突き砕き・潰し等の下石に使われたものであろう。平面中央は敲 b・敲 a が多く、おもに堅果類等の敲割りのあてとされたものであろう。側縁は圧倒的に磨 a が多い。突き、擦り等に使われたものであろう。

(4) 砥石 (第 288 図・図版 54・55・付表 3-3)

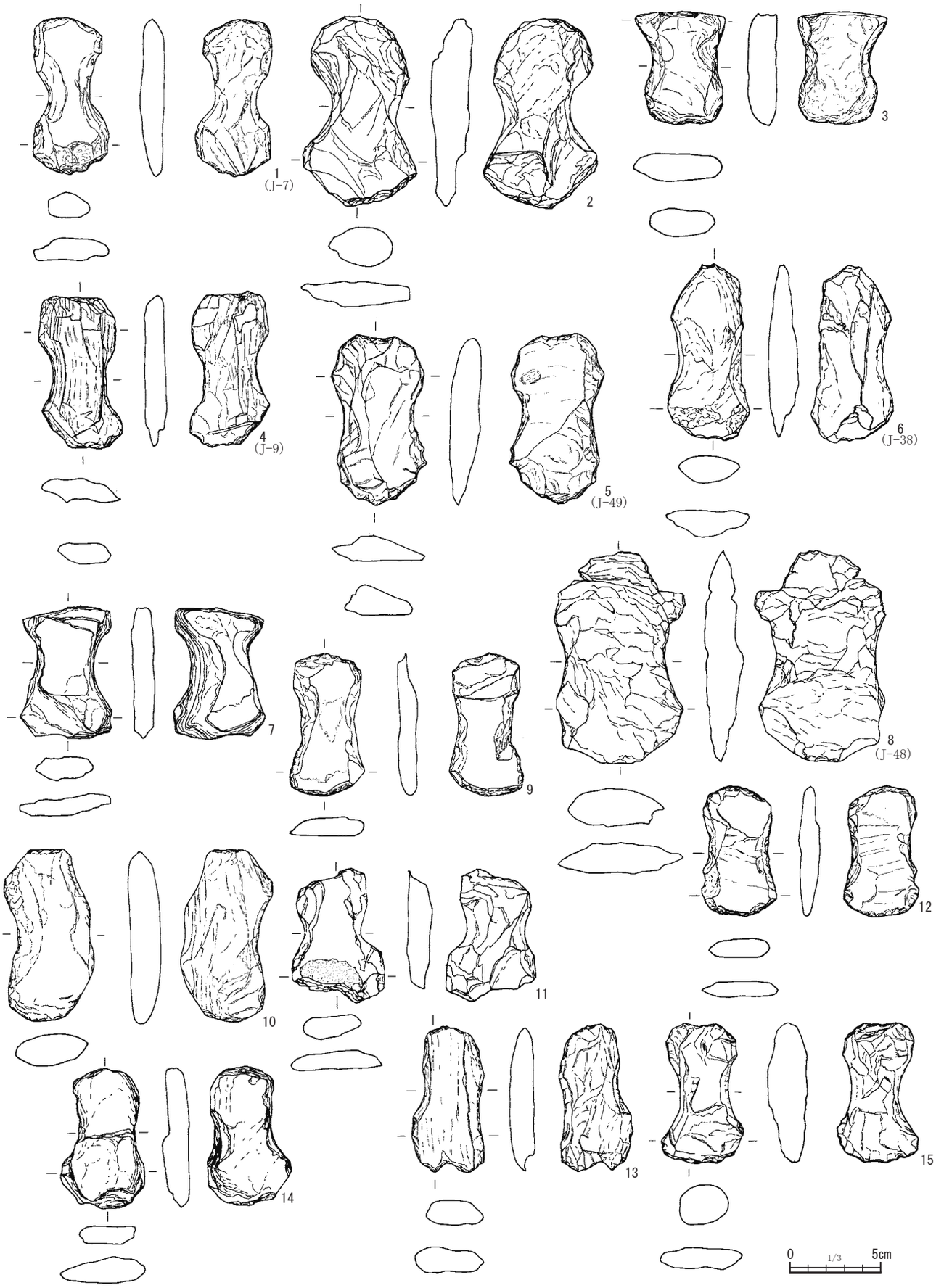
41 点あり、遺構出土は 6 点・15％と少ない。方柱状・板状・薄板状に成形されたもの 11 点、成形をされない礫素材が 26 点と後者が多かった。加曽利貝塚では中期中頃に厚く大きな砥石が多数持ち込まれ中期後葉に薄板状が加わり、後期には薄板状・扁平が多くなるという傾向が認められた。当遺跡で



第 281 図　磨製石斧 (1)

15
16
(J-20)
21
18
20
17
19
(D-79)
23
22
24
25
26
27
28
29
30
(J-34B)
32
31
0
1/3
5cm

第 282 図　磨製石斧 (2)

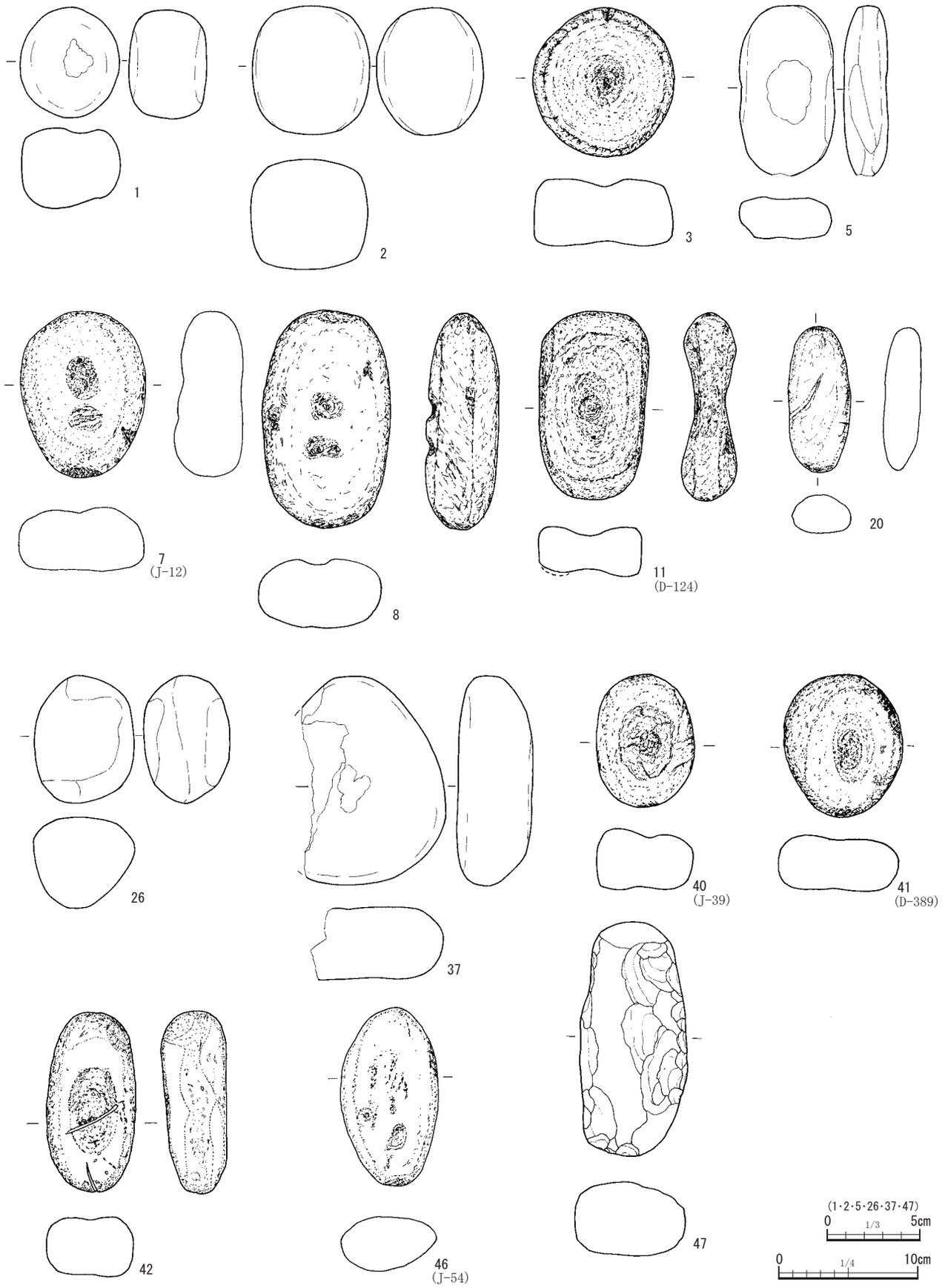


第 283 図　打製石斧 (1)

第 284 図　打製石斧 (2)

31
32
33
34
(J-18)
42
40
35
41
39
49
45
43
44
62
63
(J-54)
59
(J-48)
58
52
51
55
60
(D-119)
0
1/3
5cm

第 285 図　打製石斧 (3)


1
2
3
5
7
(J-12)
8
11
(D-124)
20
26
37
40
(J-39)
41
(D-389)
42
46
(J-54)
47
(1・2・5・26・37・47)
0
1/3
5cm
0
1/4
10cm

第 286 図　磨石類 (1)

も厚く大きな砥石は少なく、扁平・薄板状が多かったが、扁平でない礫も多いことが特徴である。なお、磨石類との区別は、主要な使用痕が一定方向の研磨、平坦・平滑な研磨であるものを砥石としたが、一部に磨石類と同様の磨面や端部の敲打痕をもつものもあり厳密ではない。24・25 は扁平棒状のもので、一部に強い線状痕がつく。玉や貝輪の製作に伴う砥石は見られなかった。

(5) 石皿・台石 (第 289・290 図・図版 55・56・付表 3-3)

石皿が 56 点、台石が 17 点、合計 73 点が出土している。安山岩製石皿が 41 点、多孔質安山岩製石皿が 8 点と大半を占めている。当地域で後期以降増える緑泥片岩製の台石はみられない。巨石を使った台石が比較的多くみられた。25 点・34.2％が遺構出土であり、石器のなかでは高率である。J-6 で 3 点出土している。欠損なしとしたのは石皿 (1)、台石 (62) の各 1 点のみであり、欠損率は 97.3％と全器種中もっとも高い。なお 62 の台石は F-23 炉穴出土で、早期後葉に例の多い窪みをもたない大形の扁平礫である。両面の一部に擦り痕がみられる。

(6) 石鏃 (第 291 図・図版 56・付表 3-5)

成品 80 点、未成品 89 点の合計 169 点がある。石材は黒曜石とチャートが大半を占める。未成品を含めると黒曜石 127、チャート 28、その他 14 と、黒曜石が 75％、チャートが 17％を占める。石核・剥片類では黒曜石が圧倒的なので、チャートの石鏃は成品が持ち込まれる場合が多かったと推定される。剥片類ではチャートよりずっと多い硬質頁岩は製品類がごく少ない。成品 80 点中 49 点 (61.3％) が欠損している。

(7) 他の剥片石器 (第 292 図・図版 56・付表 3-5)

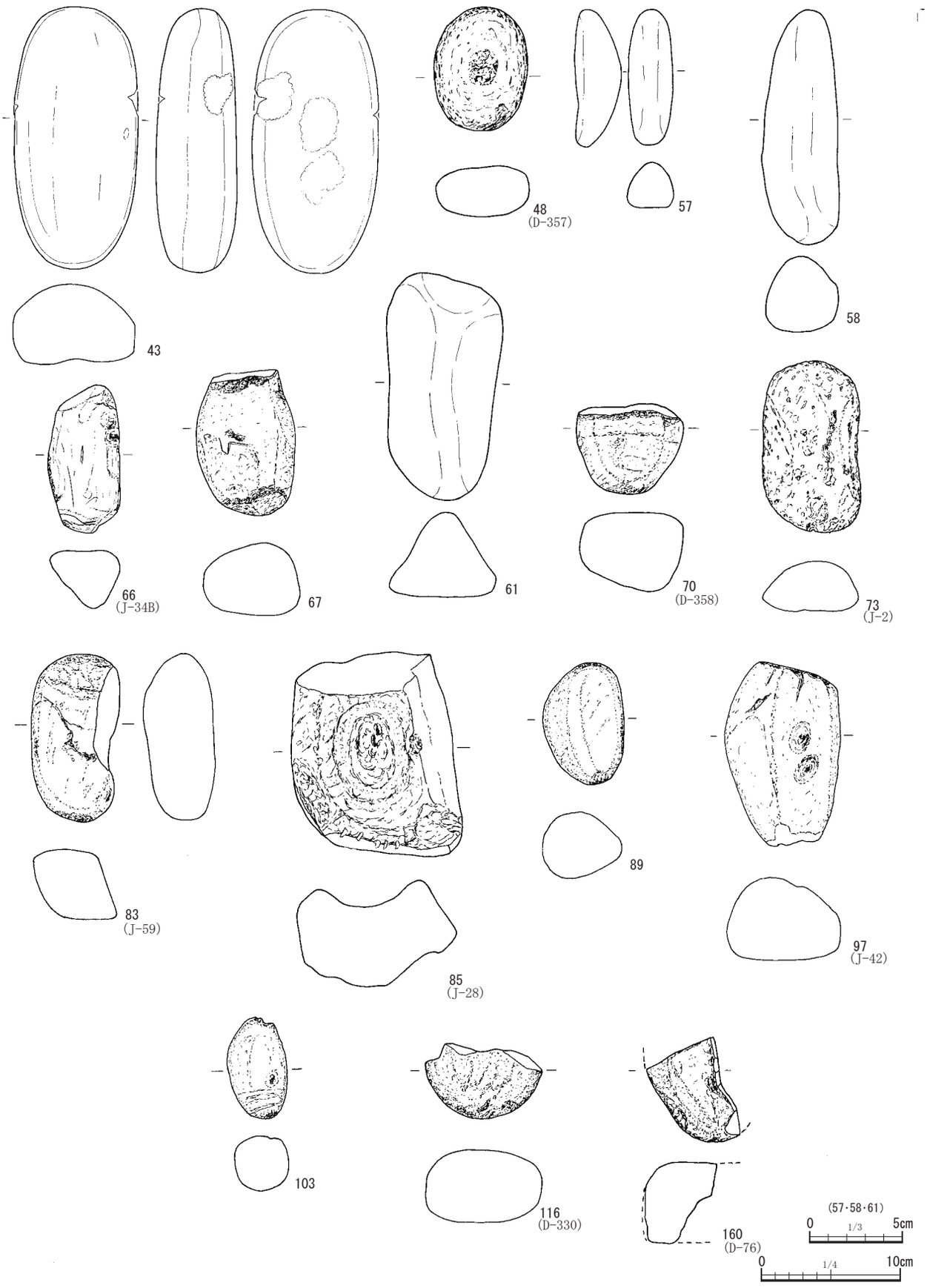
点数の少ない定型的な石器と、それ以外の石器の合計 24 点をここに集めた。石錐は、①つまみ状の頭部を有し長い錐部をもつもの (1 ～ 4)、②断面三角形ないし菱型の細身に加工したもの (8、10 ～ 12)、③不定形の剥片の一端が尖っているかまたは加工して錐部を作出したもの (9・13 ～ 19)、④＝②と③の中間的なもの (5・6・7) がある。①のうち 1 ～ 3 は硬質頁岩、4 はチャート製で丁寧に加工されている。②は不規則な剥離を繰り返している。④は丁寧に剥離調整されている。穿孔による先端の潰れや回転穿孔による先端付近側面の潰れ、擦れなどがみられる。20 は縦型の石匙である。24 は東北地方などに類例がある異形石器であろうか。21 は旧石器の可能性がある。

(8) 石核・剥片類 (巻頭図版 2 ・付表 3-5)

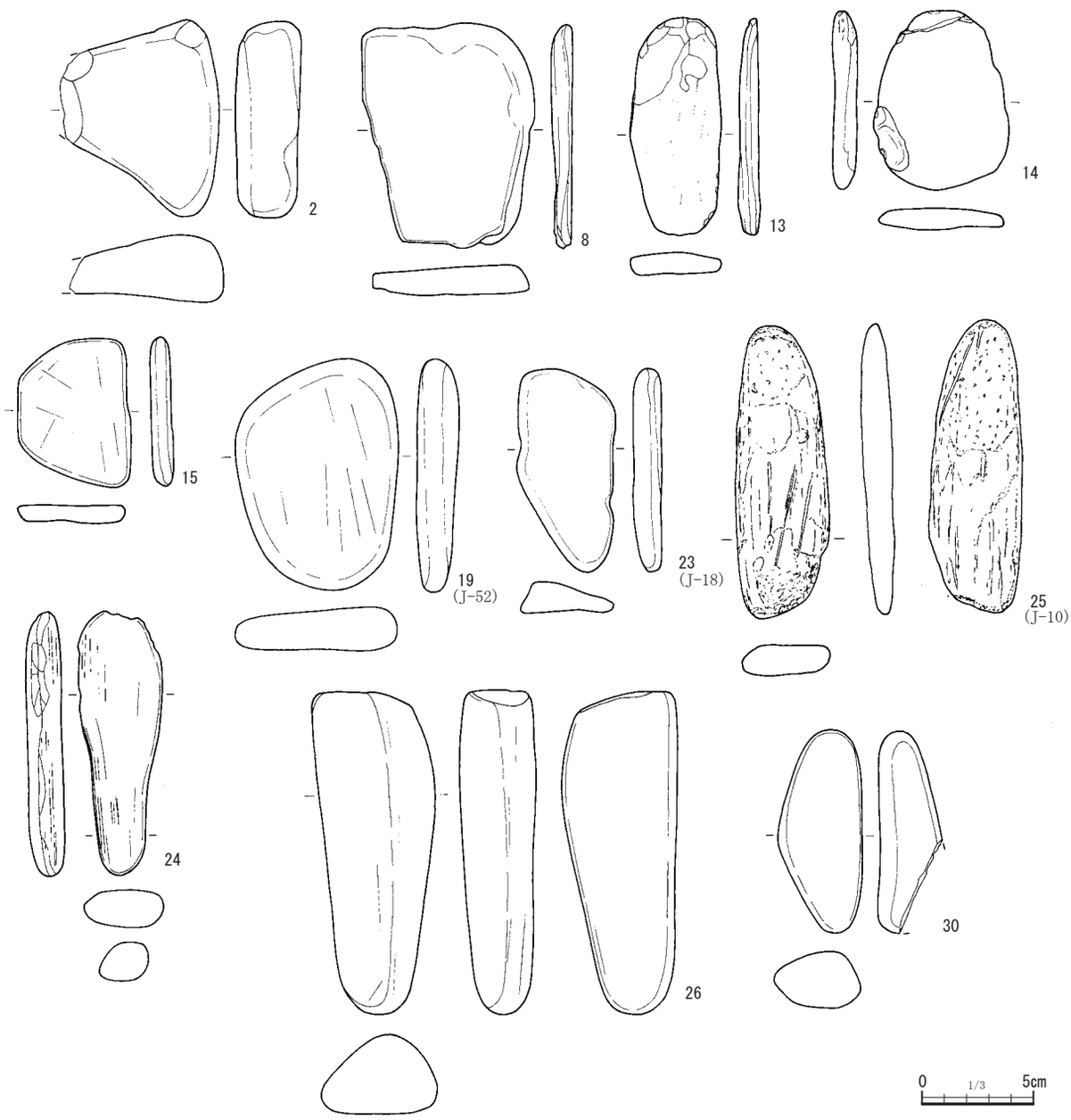
石核類 146 点・1,929 ｇ (原石 2、石核 142、打面再生剥片 2)、剥片類 20,290 点・3,395.8 ｇ (二次加工をもつ剥片「加工剥片」119、剥片 3,411、砕片 16,760)、合計で 20,436 点･5,324 ｇが出土している。当地域の縄文集落としてはとても多く、中・後期としてはかなり大きな素材が目立つ。サイズ分布の比較によって、当遺跡の特徴を明確にすることが可能だが、一部の計測が終了していないため提示できなかった。

石核類は 146 点のうち黒曜石が 122 点・84％を占める。原石は黒曜石 2 点であり、円礫 (90 × 63 × 47㎜、360 ｇ) と、全面が水和した角礫 (66 × 46 × 26㎜、81g) である。黒曜石の石核は両極技法によるものが 32 点を占める。剥片類は黒曜石が 17,684 点・87％を占める。

出土位置別にみると D-310 の石核 1 点・剥片類 12,322 点が突出しており、J-55 の石核 28 点・剥片類 1907 点、J-18 の石核 1 点・剥片類 1840 点、J-46・47 の石核 2 点・剥片類 354 点が続いている。いずれの遺構でも石鏃とその未成品を伴っており、石鏃製作後の残滓とみられる。当遺跡の特徴として、こうした集中例があるだけでなく、きわめて広範囲で剥片類が出土している点を挙げることができる。剥片類が出土した遺構は住居跡 48 軒、土坑 47 基にのぼる。住居跡 85 軒には覆土の遺存しないものが数多く存在するので、剥片出土率 57％はきわめて高い数字といえるであろう。遺構の事実記載のなかで石鏃製


43
48
(D-357)
57
58
66
(J-34B)
67
61
70
(D-358)
73
(J-2)
83
(J-59)
85
(J-28)
89
97
(J-42)
103
116
(D-330)
160
(D-76)
(57・58・61)
0 1/3 5cm
0 1/4 10cm

第 287 図　磨石類 (2)

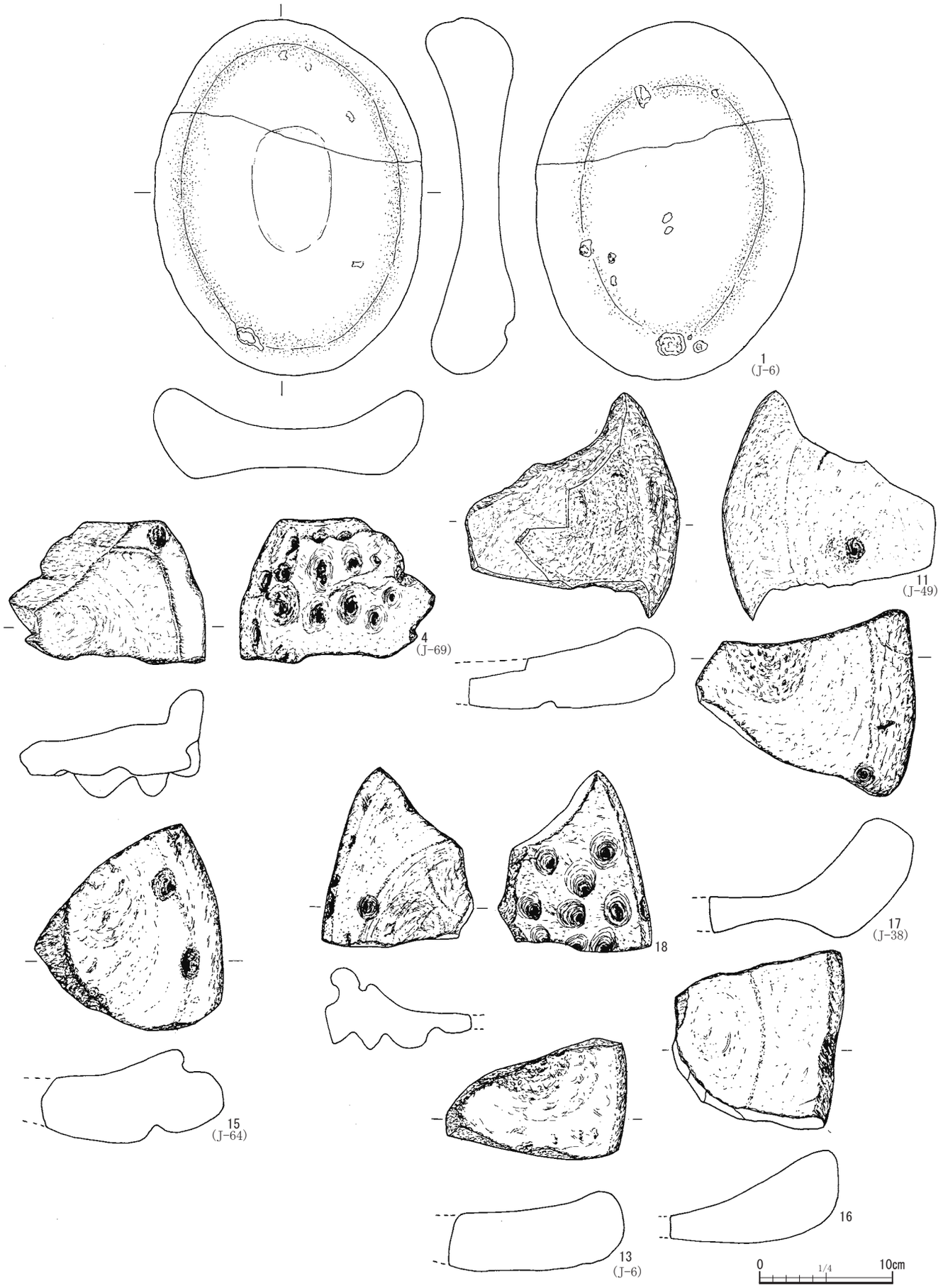


第 288 図　砥石

作に関わる残滓と推定した住居跡は J-9・J-10・J-12・J-18・J-38・J-46・J-48・J-55 の８軒、土坑では D-243・D-251・D-310・D-340・D-358 である。その位置をみると、D-358 のみ住居群の中央部であるが、それ以外は住居跡群の西部－北部－東部と縁辺部を巡るように分布している。住居は広域に分布、土坑は遺構群の北東部に遍在する。こうした傾向からは居住地外縁部への廃棄の意図を読み取ることができる。

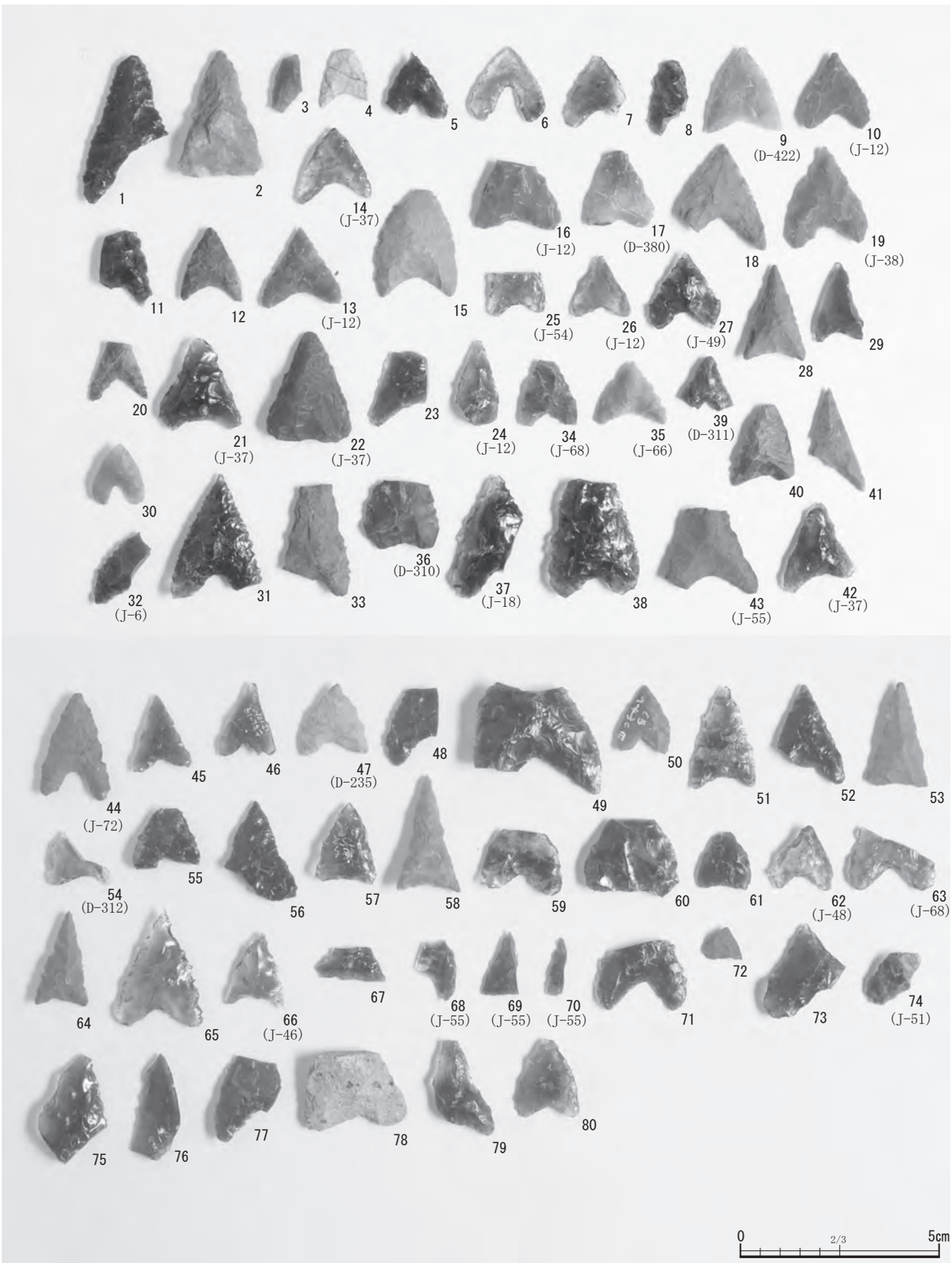
(9) 軽石製品 (第 293・294 図・図版 57・付表 3-3)

軽石 (浮石) のうち、加工・使用の痕跡をもつものを製品とした。41 点あり、遺構出土は 15 点・36.6％と、石器・石製品のなかでは遺構出土率が高い。穿孔された成形品９点、穿孔をもたない / 確認できない成形品 15 点、研磨面をもつもの 15 点、成形または研磨されたもの２点がある。１～９は穿孔品である。１は根付形大珠に似る、２～６は巾着形・短冊形、７は楕円形に成形されている。10 ～ 12 は成形品である。10 は斧形、11 は短冊形に成形されている。12 は円板形で片面中央に回転穿孔による未貫通孔をもつ。

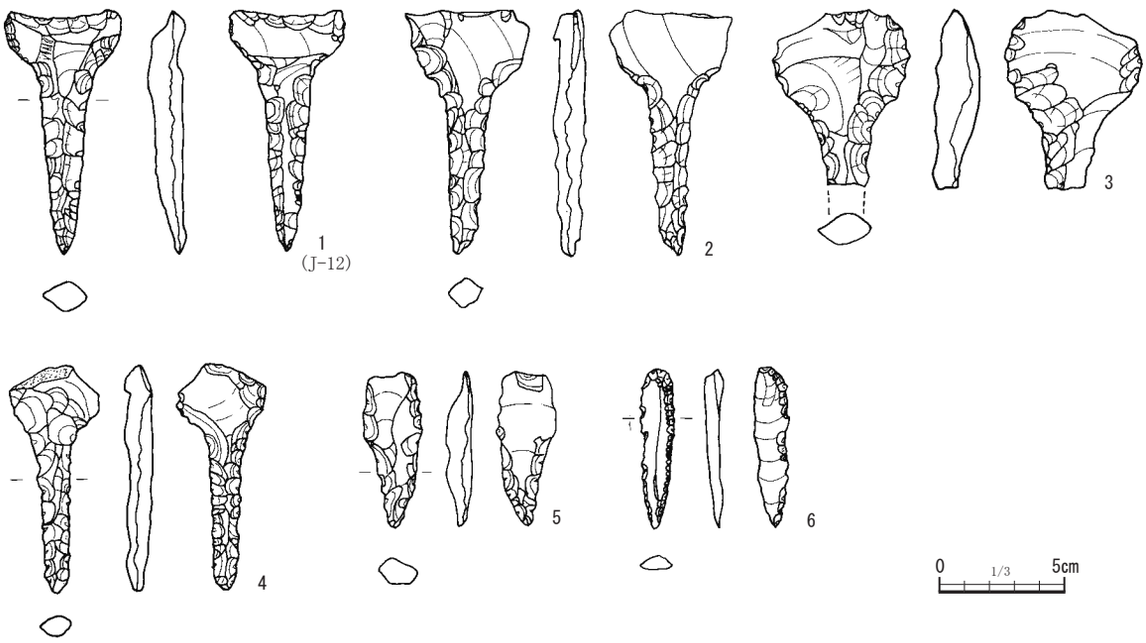


第 289 図　石皿・台石 (1)

第 290 図　石皿・台石 (2)


1
2
3
4
5
6
7
8
9
(D-422)
10
(J-12)
14
(J-37)
16
(J-12)
17
(D-380)
18
19
(J-38)
11
12
13
(J-12)
15
25
(J-54)
26
(J-12)
27
(J-49)
28
29
20
21
(J-37)
22
(J-37)
23
24
(J-12)
34
(J-68)
35
(J-66)
39
(D-311)
40
41
30
31
32
(J-6)
33
36
(D-310)
37
(J-18)
38
43
(J-55)
42
(J-37)
44
(J-72)
45
46
47
(D-235)
48
49
50
51
52
53
54
(D-312)
55
56
57
58
59
60
61
62
(J-48)
63
(J-68)
64
65
66
(J-46)
67
68
(J-55)
69
(J-55)
70
(J-55)
71
72
73
74
(J-51)
75
76
77
78
79
80
0
2/3
5cm

第291図　石鏃



第 292 図　他の剥片石器

第 5 表　剥片石器の集中例

	D310	J055	J018	J046	J046,047	J038	D358	D243	J012	D340	J054
石鏃	**1**	**4**	**1**	**1**		**1**			**5**		**1**
黒曜石		3	1	1					2		1
チャート						1			3		
その他	1	1									
石鏃未成品	**6**	**8**	**7**	**4**		**1**			**1**	**1**	**2**
黒曜石	6	8	6	4					1	1	2
チャート						1					
その他			1								
石核 / 原石	**1**	**28**	**1**	**2**		**2**	**2**				**1**
黒曜石	1	27	1	1		1	2				1
チャート		1				1					
その他				1							
剥片類	**12322**	**1907**	**1840**	**337**	**16**	**53**	**54**	**31**	**16**	**19**	**15**
黒曜石	10056	1897	1837	329	13	13	54	31	15	18	11
チャート				3		32			1		2
その他	2266	10	3	5	3	8				1	2
他の製品		**3**		**1**					**1**		
黒曜石		3		1							
チャート											
その他									1		
全体	**12330**	**1950**	**1849**	**345**	**16**	**57**	**56**	**31**	**23**	**20**	**19**

	個数	%	g
石鏃	**80**		**100**
黒曜石	49		59.2
チャート	20		25.4
その他	11		15.4
石鏃未成品	**89**		**172.6**
黒曜石	78		122.7
チャート	8		45.5
その他	3		4.4
石核 / 原石	**146**		**1928.6**
黒曜石	122	84%	1101.6
チャート	8	5%	291.6
その他	16	11%	535.4
剥片類	**20290**		**3395.8**
黒曜石	17684	87%	1867.4
チャート	84	0%	331.7
その他	2522	12%	1196.7
他の製品	**24**		**142**
黒曜石	13		15.8
チャート	2		3.1
その他	9		123.1
総計	**20629**		**5739**

研磨品ではもっとも広い面に平坦な擦り面をもつものが大半を占める。

使用不可能な程度の欠損は、穿孔品・成形品で 14 点・58.3％と高い。加曽利貝塚では破損率が石器・石製品中もっとも低く、破損・劣化が進まないうちに土中に至ることが多かったとみたので、大きな差がある。研磨品の欠損品は 1 点・0.6％であり、欠損率はきわめて低い。これは加曽利貝塚と共通する。

(10) 玉 (第 295 図・図版 57・付表 3-3)

玉・石製垂飾等は 4 点出土している。 1 は不整形の玉である。片岩系の石材を全面加工し両面穿孔する。２は D-380 から出土した半円形の玉である。滑石の全面に粗い線状痕が残り、穿孔部に紐ずれ痕がみられる。 3 は厚みのある鰹節形の大珠であり下部の 3 分の 1 程度を欠損する。透明感のあるこげ茶色のなかに乳白色の貫入があり、虫食い状の鬆が多数入っている。片面穿孔である。 4 は穿孔礫とみられる。人為的な穿孔であるかどうか微妙だが、全体が被熱赤変した後、穿孔部の赤変が除去されたようにみえるため垂飾と判断した。

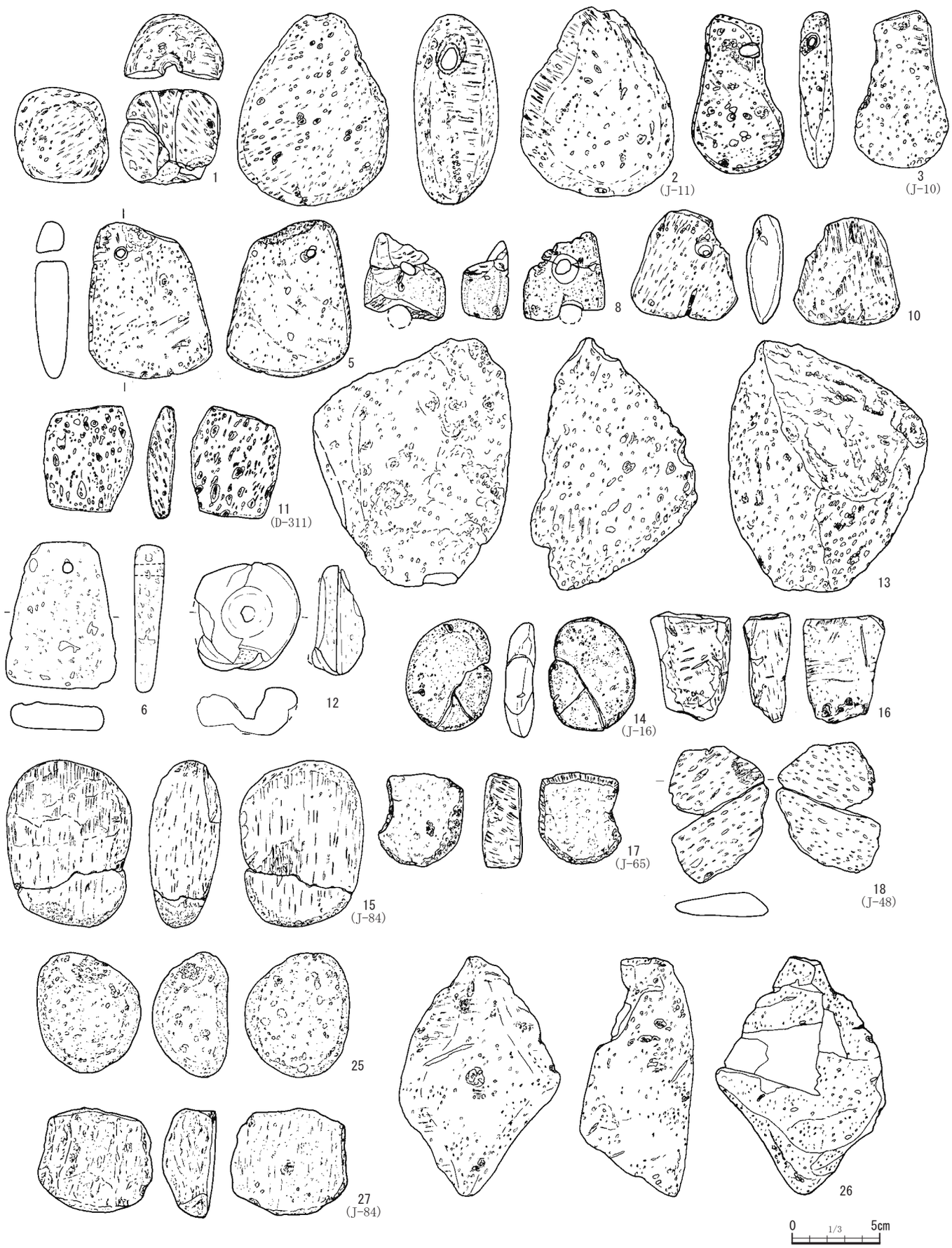
(11) 石棒 (第 296・297 図・図版 57・付表 3-3)

小片が多いが 55 点ある。遺構出土は 24 点・44％と石器・石製品ではもっとも比率が高いが、17 点が J-46・47 から出土している。それを除くと遺構外が大半を占めることになる。 1 は出土位置不明の大形石棒である。 3 ～ 36 は安山岩系の大形石棒である。 4 は唯一保存状態が良いものであるが被熱黒変が認められる。破片の多くも被熱の痕跡があり、薄く剥離したものが多い。火を伴う石棒祭祀に使われたものであろう。10 は石皿に転用している。 2 、37 ～ 51 は片岩系で多くは大形石棒である。39 は断面丸、40 は断面扁平の小形石棒である。39・40 を除く大半に被熱赤変や劣化がみられる。

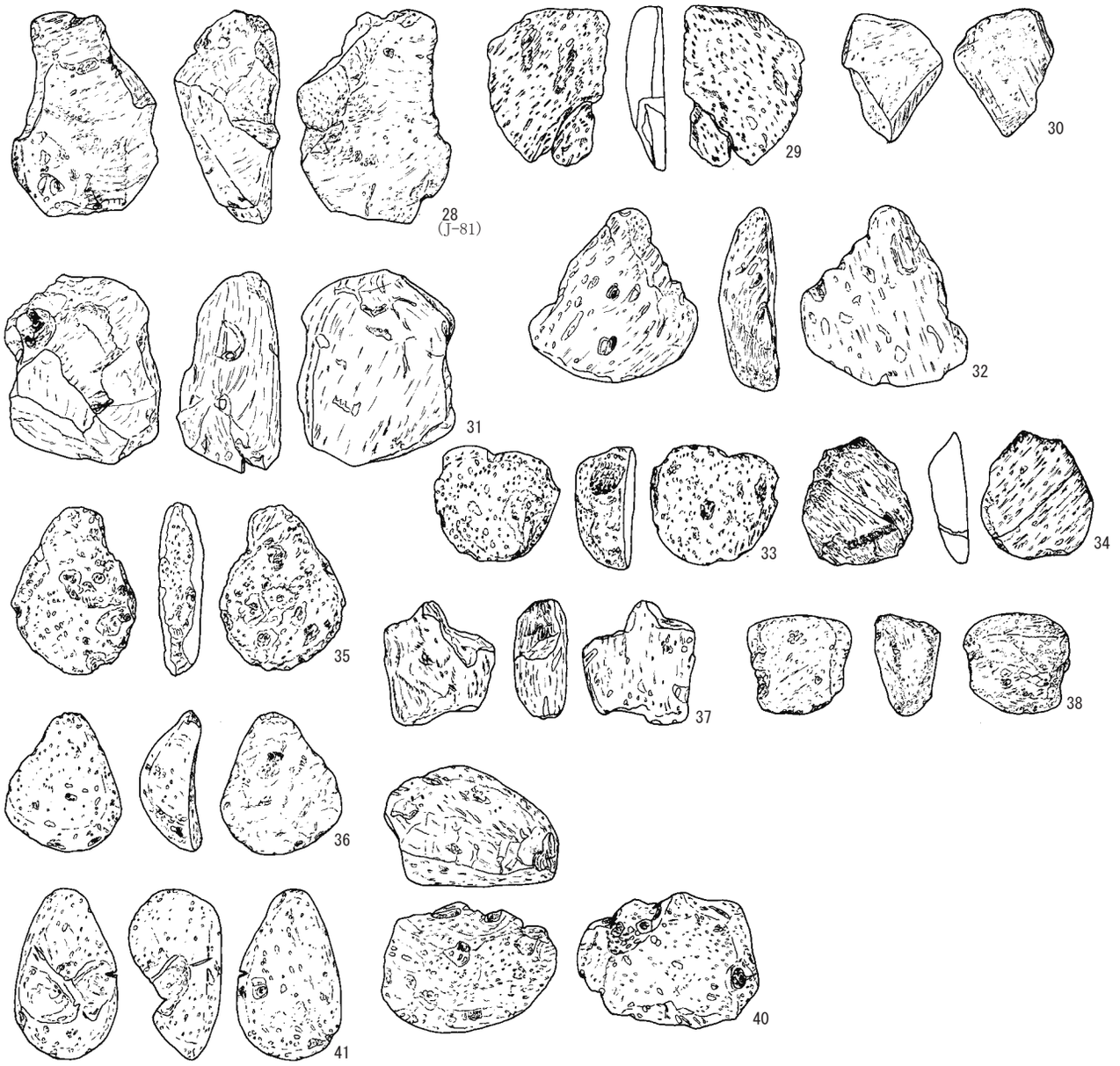
3　貝製品

貝刃 (第 298 図・付表 3-2)

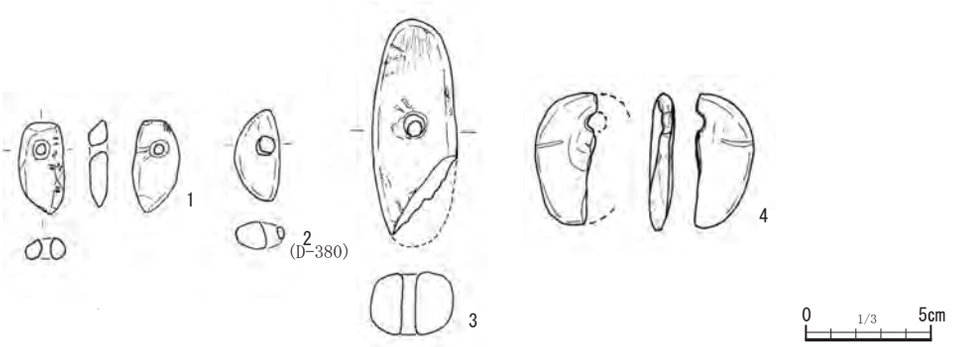
二枚貝の腹縁を加工した貝刃と判断したものが 5 点出土している。すべて土坑内貝層から出土しており、D-380 で 3 点、D-190・D-393 で各 1 点である。刃部の作出がみられる外面の写真と、腹縁側から撮影した写真を用いて、刃部の範囲を記号で示した。白枠三角が貝殻の前側、白塗り三角が後側である。 1 ～ 4 はハマグリ製である。 5 はバカガイ製である。歯の剥離は隣とつながっておらず、やや間隔をあけているが、同様の剥離が連続していることから加工とみてよいであろう。ハマグリ製の特徴は、光沢の残る保存状態の良い素材を用いていることと、小さな剥離を丁寧に繰り返して鋸歯状の刃部を作出していることである。製作実験によれば、素材が新しいほど殻の外層は大きく剥離しやすく、これを避けて丁寧に歯を作出した貝刃は、千葉市内の他の貝塚でも称名寺式期の特徴となっている (有吉北貝塚、六通貝塚)。このことを裏付ける資料といえる。


1
2
(J-11)
3
(J-10)
5
8
10
11
(D-311)
6
12
13
14
(J-16)
16
15
(J-84)
17
(J-65)
18
(J-48)
25
27
(J-84)
26
0
1/3
5cm

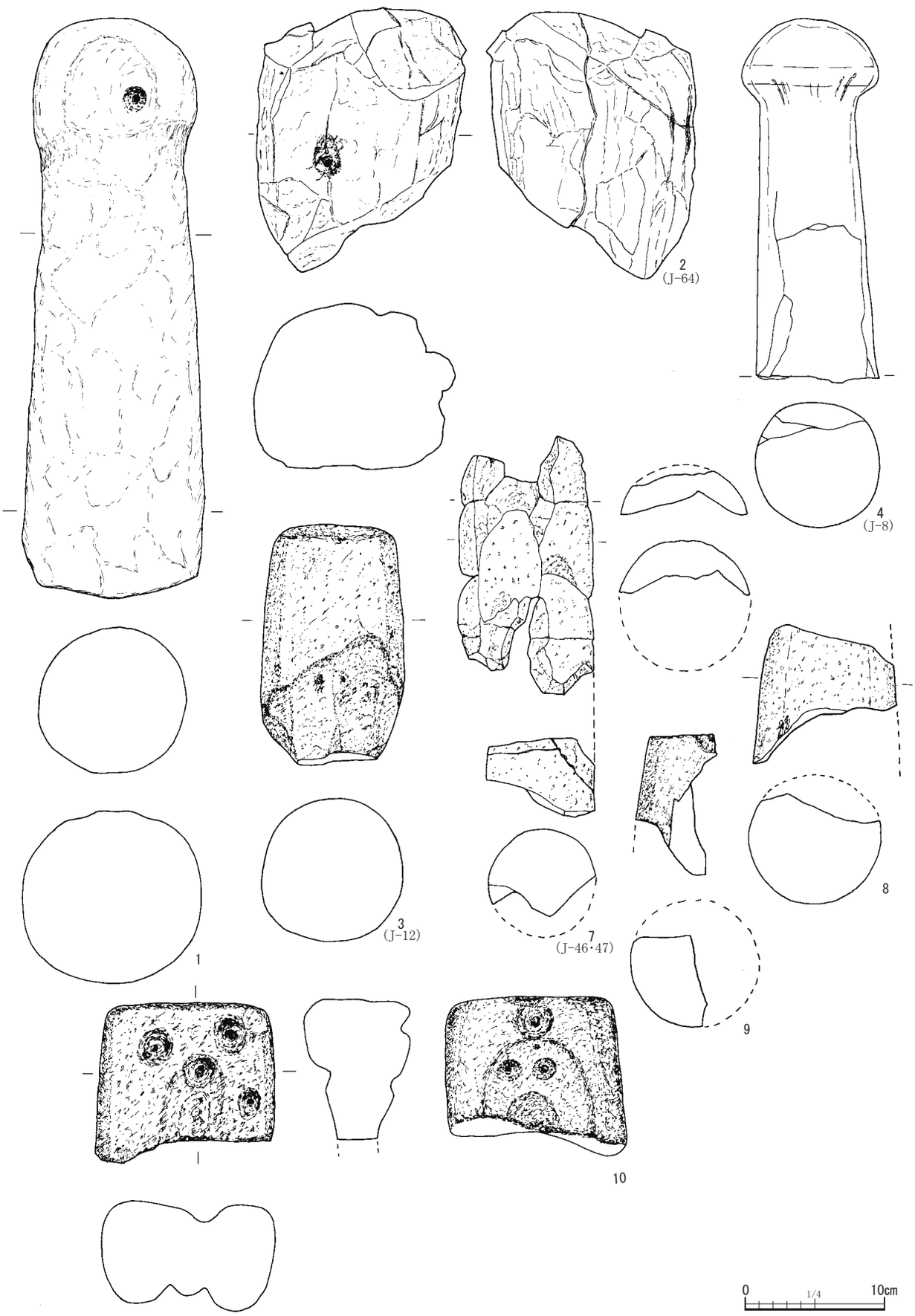
第 293 図　軽石製品 (1)



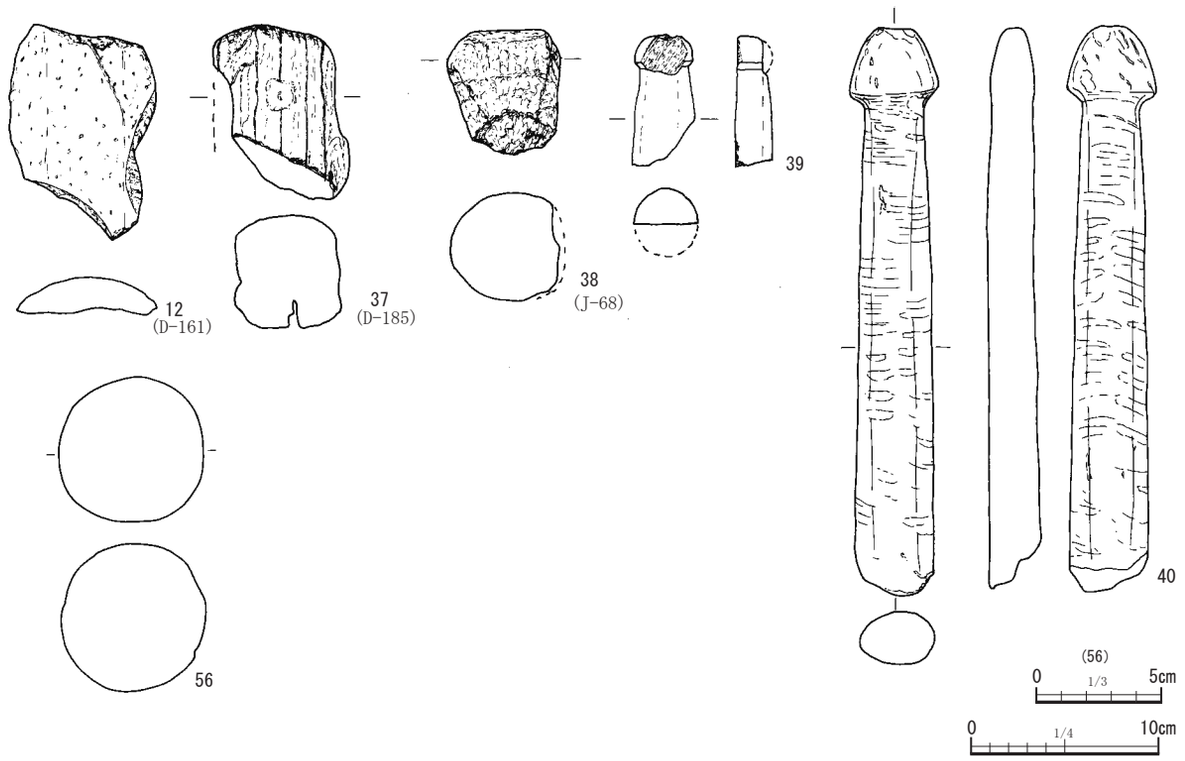
第 294 図　軽石製品 (2)



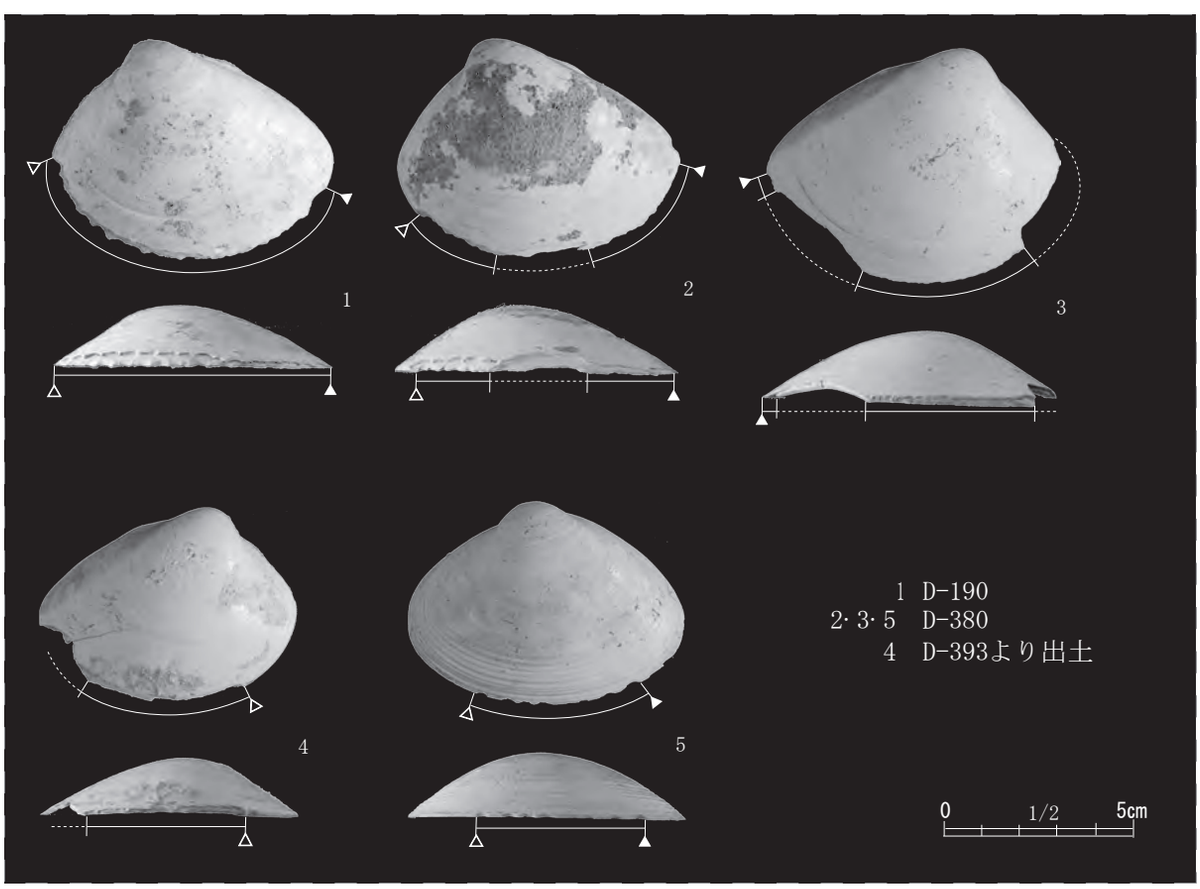
第 295 図　玉



第 296 図　石棒 (1)



第 297 図　石棒 (2)



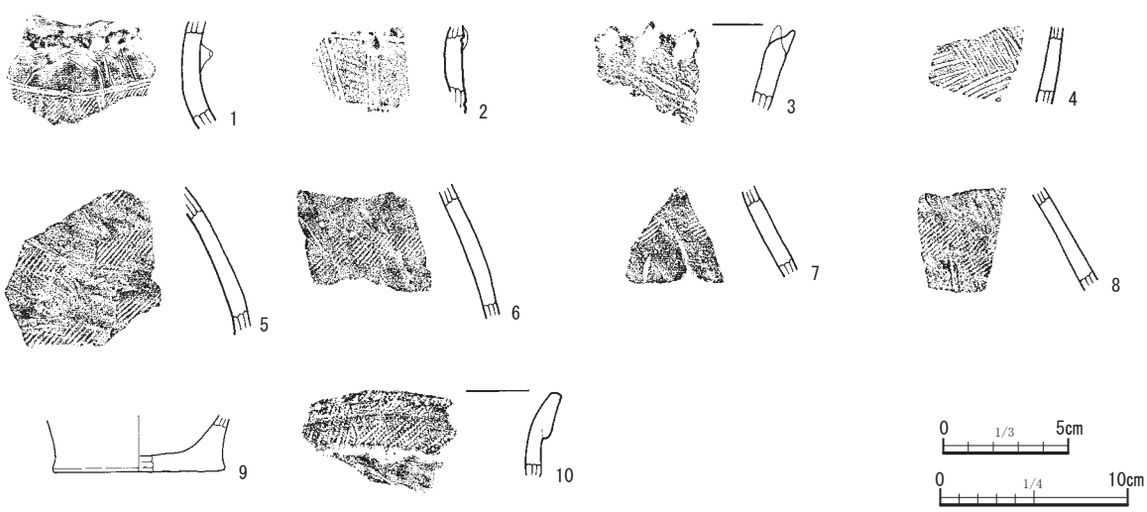
第 298 図　貝製品

第４章　弥生時代以降

第１節　弥生時代

遺構外で弥生土器が少量出土しており、抽出した 10 点を掲載した (第 299 図、付表 4-1)。分布は散漫で集中箇所はない。時期は弥生中期後葉～後期までの幅がある。主体を占めるのは弥生中期後葉・宮ノ台式期の資料である。宮ノ台式は、壺の体部に単節斜縄文が施文され、羽状縄文や結節文が確認されないことから、小倉淳一の編年による ET Ⅱ a ～Ⅱ b 期古 (小倉 1996) に収まるものと考えられる。第 299 図５～８は同一グリッドからの出土であること、文様構成や胎土・色調から同一個体と考えられる。２は宮ノ台式に併行する東関東系の足洗式・阿玉台北式系 (小玉 2002) の資料と考えられる。後期の土器も１点確認された。東関東系の土器であり、複合口縁部の形態から後期前葉のⅡ期 (小林 2015) に位置付けられる。

周辺の同時期の遺跡としては、戸張作遺跡や踏形遺跡が存在する。戸張作遺跡では宮ノ台式期の環濠集落や後期の集落が検出され、踏形遺跡では宮ノ台式期の集落が検出されている。当遺跡も遺構は検出されなかったものの、何らかの生活域として利用されていたものと考えられる。



第 299 図　弥生時代遺構外出土土器

第２節　古代

報告済みの北東部台地上では住居跡３軒、土坑１基がみつかっている。本書対象地区では北西部から南西部の台地上から住居跡 33 軒 (第６表)、土坑２基・方形周溝状遺構１基 (第７表) を検出している。掲載遺物は土器 350 点 (付表 4-2)、鉄製品 26 点・土製品５点 (付表 4-3) である。

１　住居跡

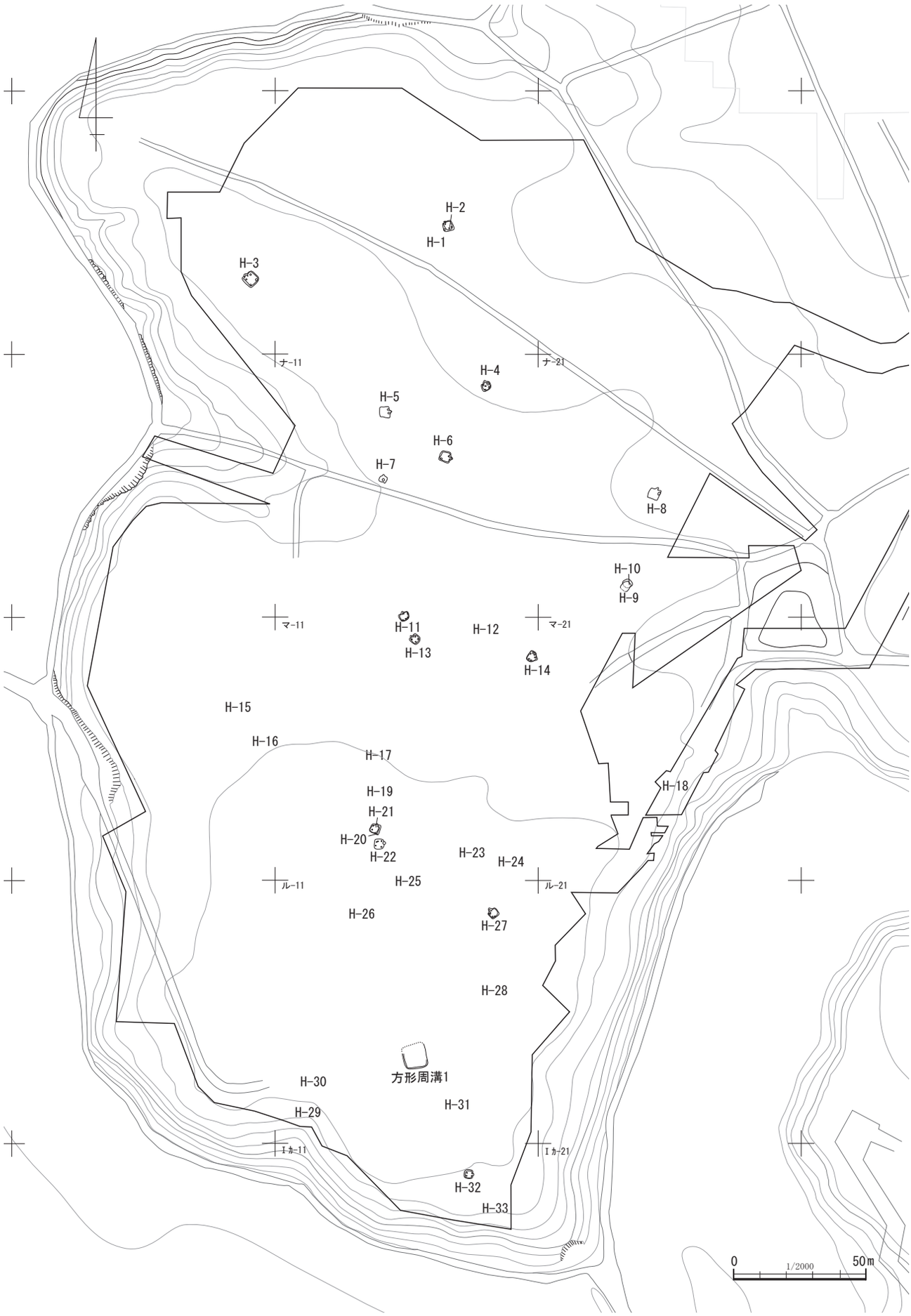
住居跡は８世紀代１軒を含むが、他は平安時代のものであり、ほぼ９世紀代に比定できる。第 300 図のように広大な台地上に散在しており、重複もごく少ない。遺構外出土土器には古墳時代の資料を含むが本節で報告する。遺構から出土した土器以外の遺物については、便宜的に支脚のみ遺構の記載に含め、それ以外は本節３に記載する。

第 6 表　古代住居跡

No.	*旧称*	時期 1	時期 2	平面形	方位	規模 (m)	壁高	カマド	備考
H － 1	*タ -18-1 住*	平安	9C	方形	N-67° -E	3.8 × 3.5	0.2	北壁中央	H-2 を拡張
H － 2	*タ -18-2 住*	平安		方形	N-22° -W	3.2 × 2.7	0.1	－	H-1 の床面下
H － 3	*ツ -10-1 住*	奈良	8C	方形	N-47° -E	4.8 × 4.5	0.6	北壁西寄	焼却。緑釉輪花椀出土
H － 4	*ニ -20-1 住*	平安	9C	方形	N-65° -E	3.2 × 3.0	0.4	北壁中央	硬化面あり
H － 5	*ヌ -16-1 住*	平安	9C	方形	N-1° -E	4.1 × 4.0	0.2	東壁東寄	
H － 6	*ノ -18-1 住*	平安	9C	長方形	N-15° -E	4.0 × 3.1	0.2	東壁中央	焼土、炭化物
H － 7	*ハ -16-1 住*	平安	9C	台形	N-76° -W	2.9 × 2.4	0.2	北壁中央	J2 住と重複
H － 8	*ヒ -25-1 住*	平安		方形	N-28° -E	3.1 × 3.0	0.2	北壁西寄	貯蔵穴住居に伴う？
H － 9	*ヘ -24-1 住*	平安	9C	方形	N-20° -E	3.5 × 3.4	0.5	北壁中央	H-10 より新。硬化面
H － 10	*ヘ -24-2 住*	平安	9C	方形	N-35° -W	3.4 × 2.3	0.3	－	H-9 より旧
H － 11	*マ -15-1 住*	平安	9C	方形	N-20° -W	3.2 × 3.1	0.2	北壁中央	カマド内ピット
H － 12	*マ -18-1 住*	平安	9C	長方形	N-75° -W	2.8 × 2.4	0.4	東壁南寄	灰釉高台付椀出土
H － 13	*ミ -16-1 住*	平安	9C	長方形	N-50° -W	3.3 × 2.9	0.2	北壁中央	
H － 14	*ミ -20-1 住*	平安	9C	台形	N-38° -W	3.6 × 3.2	0.4	北壁中央	硬化面あり
H － 15	*メ -9-1 住*	平安	9C	方形	N-71° -W	3.3 × 2.7	0.3	東壁中央	
H － 16	*モ -10-1 住*	平安	9C	方形	N-78° -E	3.3 × 3.1	0.4	西壁中央	
H － 17	*モ -14-1 住*	平安	9C	方形	N-37° -E	3.0 × 2.7	0.2	東壁中央	焼土。貼床あり
H － 18	*ヤ -26-1 住*	平安	10C?	－	－	4.2 × －	－	北壁西寄	
H － 19	*ユ -15-1 住*	平安		－	－	－	－	北壁西寄	煙道長い
H － 20	*ラ -14-1 住*	平安	9C	方形	N-15° -E	3.3 × 3.6	－	南東角→北東角	H-21 を拡張・貼床後建替えあり
H － 21	*ラ -14-2 住*	平安	9C	方形	N-37° -E	3.3 × 3.2	0.2	北壁中央	H20 住の旧住居。焼土。硬化面あり
H － 22	*ラ -14-3 住*	平安	9C	方形	N-90°	3.6 × 3.4	0.2	東壁中央	炭化クルミ
H － 23	*ラ -18-1 住*	平安		長方形	N-5° -W	4.6 × 3.9	0.3	南東角	焼土、炭化物
H － 24	*ラ -19-1 住*	平安	9C	方形	N-86° -W	3.3 × 3.1	0.5	北壁中央	支脚
H － 25	*リ -15-1 住*	平安	9C	長方形	N-11° -E	3.7 × 3.2	0.3	西壁中央	
H － 26	*ル -14-1 住*	平安	9C	長方形	N-75° -W	3.8 × 3.7	0.3	東壁中央	J45 住と重複
H － 27	*レ -19-1 住*	平安	9C	方形	N-34° -E	3.8 × 3.7	0.5	北壁中央	煙道長。貼床。焼却
H － 28	*ワ -19-1 住*	平安	9C	方形	N-66° -W	3.0 × 2.7	0.2	北壁中央	
H － 29	*Iエ -11-1 住*	平安	9C	台形	N-22° -W	4.0 × 3.1	0.5	北壁東寄	
H － 30	*Iエ -12-1 住*	平安	9C	方形	N-26° -E	3.4 × 2.5	0.4	西壁北寄→北壁中央	建替え
H － 31	*Iエ -17-1 住*	平安	9C	台形	N-15° -E	2.7 × 2.4	0.4	北壁西寄	
H － 32	*Iキ -18-1 住*	平安	9C	方形		3.0 × 2.7	0.4	東壁中央	貼床あり
H － 33	*Iク -19-1 住*	平安	9C	長方形	N-35° -E	3.0 × 2.9	0.4	北壁西寄	

第 7 表　古代土坑・方形周溝状遺構

No.		*旧称*	平面形	長軸m	短軸m	深さm	重複遺構	備考
D-100	土坑	*ミ -10-1 土坑*	円	1.5	1.5	0.8		多量の炭化物
D-117	土坑	*ム -5-1 土坑*	楕円	0.3	0.2	0.2	F3・D436	D436 陥し穴の上
No.	種別	*旧称*	平面形	長軸m	短軸m	深さm	重複遺構	備考
方形周溝状遺構		*Iイ -16- 方形周溝*	方形	9.8	9.1	0.9	J-70	



第 300 図　古代遺構分布図

H- 1 (第 301・303 図・図版 34・58)

旧タ -18- 1 住。床面下より検出した H- 2 の竪穴を拡張し、やや主軸を東に振って建替えた住居跡である。竪穴は 3.8 × 3.5 mの方形、壁は 0.2 mでほぼ垂直に立ち上がり、壁溝はほぼ全周する。柱穴は直径 0.4 m・深さ 0.1 mの P1 を検出。カマドは北壁中央にある。貯蔵穴はカマドの左脇に貯 1 (径 0.6 m・深さ 0.2 m)、南西隅に貯 2 (径 0.7 m・深さ 0.4 m) が存在する。遺物は、カマド左脇の貯蔵穴から土師器甕 (8・9・11)、床面から土師器の坏 (1・5・6) が、カマド内から土師器坏 (2・3・4)・須恵器甕 (7) が出土している。 1・3 は油煙痕跡をもつ。平安時代・9 世紀としておく。

H- 2 (第 301・303 図・図版 34)

旧タ -18-2 住。H- 1 の床面下より検出した建替え前の遺構である。竪穴は 3.2 × 2.7 mの隅丸方形、壁はわずかに遺存し、壁溝も 3/4 ほど遺存する。壁溝の切れ間により、H- 1 と同様に北壁中央にカマドがあったものとみられる。明確な柱穴はないが、径 0.2 m・深さ 0.2 mの P2 は当遺構にともなうものと判断された。南壁付近で砂質粘土の堆積を検出しており、当住居の廃絶に伴って流出したカマドの構築材が踏み込まれたものであろうか。掲載遺物はないが、ほぼ同じ深さで建替え・拡張されていることから H- 1 に近い年代を想定可能である。平安時代・9 世紀代の蓋然性が高い。

H- 3 (第 302・303 図・図版 34)

旧ツ -10- 1 住。竪穴は 4.8 × 4.5 mの方形、壁は 0.6 mでほぼ垂直に立ち上がり、壁溝は全周する。柱穴は 4 本検出しており、P1・P4 は上屋を支えた主柱穴であろう。南壁に寄った P2・P3 はやや浅いものであり、壁溝の途切れる P3 は出入口施設の可能性も考え得る。カマドは北壁の西寄りにあり中央部から支脚が出土した。竪穴の床面付近には焼土を多く含む層が堆積しており、多くの遺物が出土している。廃絶時に上屋の焼却が行われた可能性が高い。遺物はカマド脇から全面赤彩の土師器椀 (1) が、P1 付近から甕 (2・3 同一か) が出土している。奈良時代・8 世紀としておく。奈良時代の住居跡はこの 1 軒のみである。

H- 4 (第 303・304・307 図・図版 34・58)

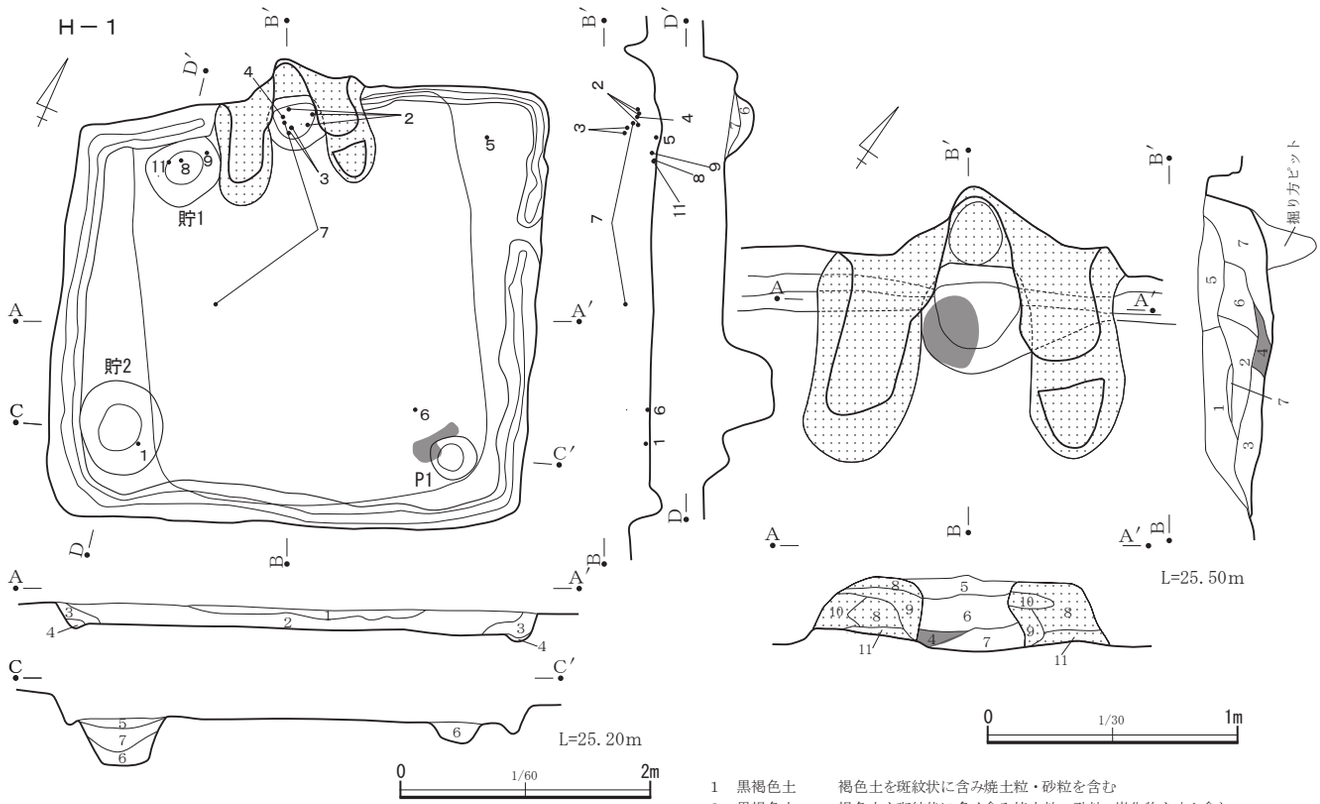
旧ニ -20- 1 住。3.2 × 3.0 mの方形の掘り込みをもつ。壁は 0.4 mで垂直近くに立ち上がり、壁溝が全周する。床面中央に硬化面を形成する。径 0.3 m・深さ 0.3 ～ 0.4 mの柱穴があり、形状・位置ともやや不揃いだが主柱穴であろう。柱穴 3 本が規則的な位置にあって北西の 1 本がずれているのは H-13・14 と共通する。カマドは北壁中央にあり、土師器坏 (8)・甕 (10) が出土した。貯蔵穴は北西隅にあり、土師器坏 (3)・甕 (11) が出土した。床面からは土師器坏 (2・4 ～ 7)・甕 (11)、須恵器甑 (12) が、床面よりやや上からは土師器坏 (1)、須恵器長頸瓶 (9) が出土した。 1・2 は油煙痕跡をもつ。平安時代・9 世紀としておく。

H- 5 (第 304・307 図・図版 34)

旧ヌ -16-1 住。4.1 × 4.0 mの不整方形の掘り込みをもつ。壁は 0.2 mで垂直に近く立ち上がる。壁溝・柱穴はない。カマドは東壁のやや南寄りに位置する。南東壁際の床面から土師器坏 (1) が出土している。平安時代・9 世紀としておく。

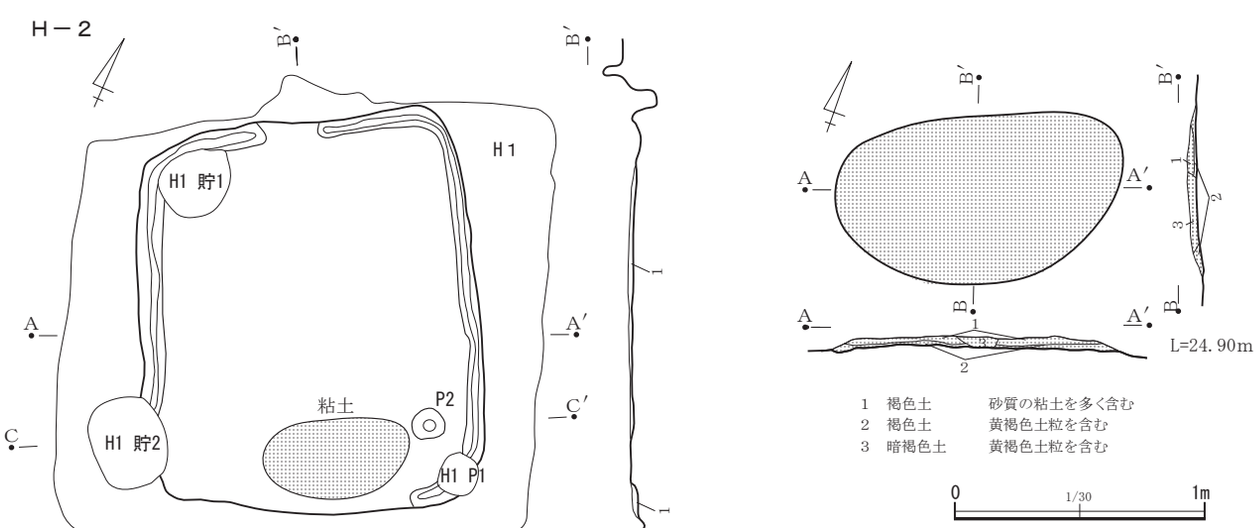
H- 6 (第 305・307 図・図版 34・58)

旧ノ -18- 1 住。4.0 × 3.1 mの長方形の掘り込みをもつ。壁は 0.2 m、壁溝はカマド付近で途切れる。柱穴は南壁近くで径 0.2 m・深さ 0.2 mの柱穴 2 本を検出。カマドは東壁中央に位置する。煙道部が大きく袖が小さい。床面には焼土・炭化物が広がる。遺物は、カマド中央部から土師器坏 (2 ～ 4)、煙道部から土師器甕 (8) が出土した。灰釉陶器坏破片 (1) は P2 と壁溝から、土師器甕 (7) は中央の床面から



1 暗褐色土 粘土を含み砂粒・焼土を少し含む
2 暗褐色土 粘土粒・焼土・砂粒を多く含む
3 黒褐色土 粘土を含み砂粒・焼土粒を少し含む
4 黒褐色土 粘土を少し含み焼土を多く含んでいる
5 暗褐色土 粘土を含む
6 暗褐色土 粘土粒を含み焼土ブロック・焼土粒を多く含む
7 暗褐色土 焼土粒・砂粒を少し含む
8 暗褐色土 粘土を含み砂粒を多く焼土粒を少し含む
9 暗赤褐色土 粘土と砂が火を受け赤化している
10 暗褐色土 ロームを含み砂粒を少し含む
11 暗褐色土 粘土を含む

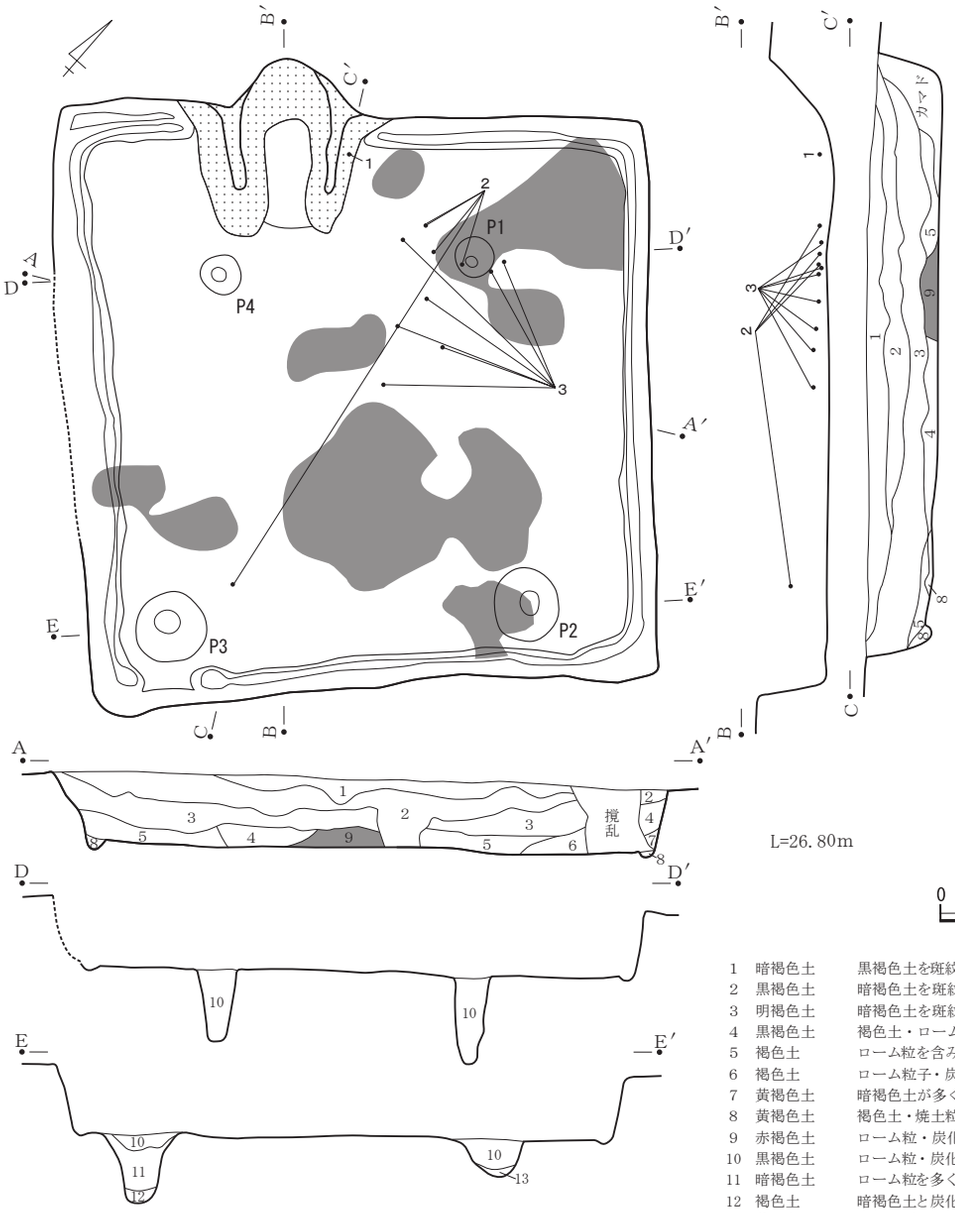
1 黒褐色土 褐色土を斑紋状に含み焼土粒・砂粒を含む
2 黒褐色土 褐色土を斑紋状に多く含み焼土粒・砂粒・炭化物を少し含む
3 暗褐色土 黄褐色土を斑紋状に含む
4 黄褐色土 暗褐色土を少し含む
5 黒褐色土 褐色土を斑紋状に含み焼土粒を少し含む
6 暗褐色土 黄褐色土・黒褐色土・ロームブロックを含む
7 暗褐色土 黄褐色土・黒褐色土・ロームブロックを含む



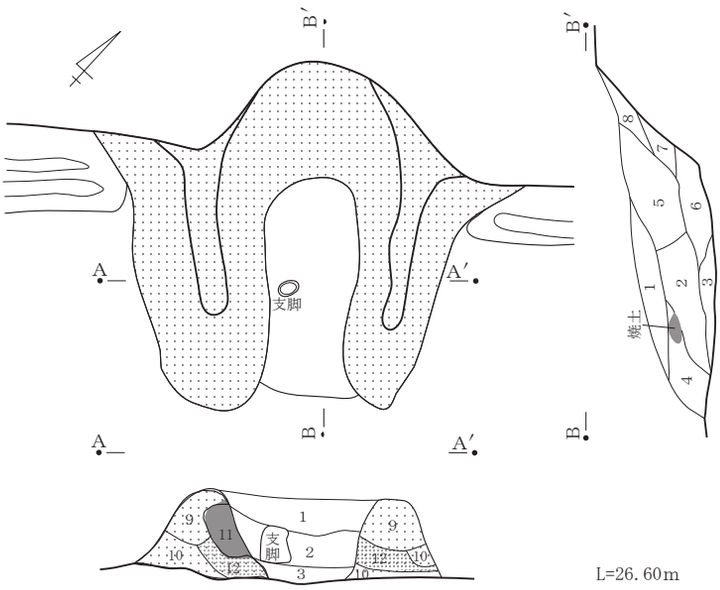
1 暗褐色土 ロームを多く含み 黒色土を少し含む
2 暗褐色土 黒色土を含む
3 黒褐色土 焼土粒・炭化物を少し含む

1 褐色土 砂質の粘土を多く含む
2 褐色土 黄褐色土粒を含む
3 暗褐色土 黄褐色土粒を含む

第301図 H-1・H-2



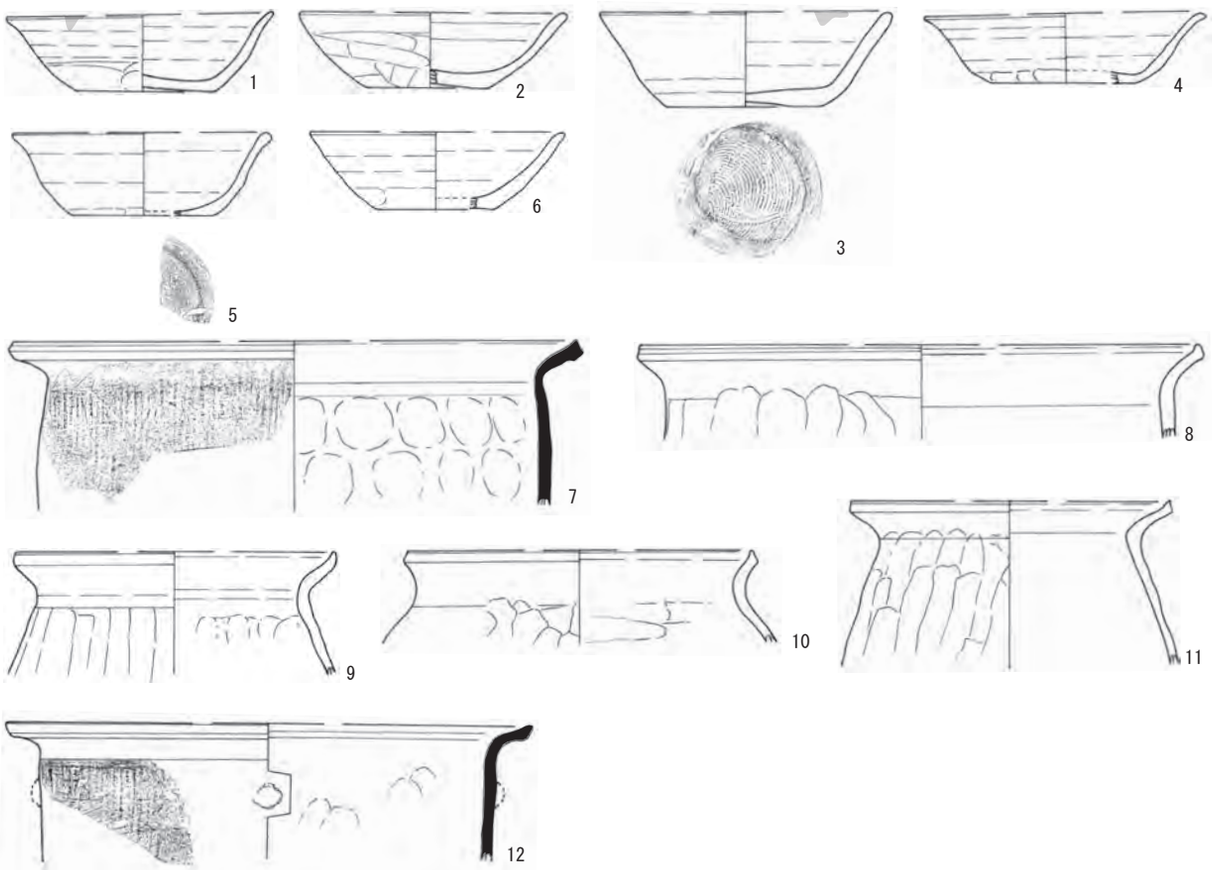
1　暗褐色土　　黒褐色土を斑紋状に少し含む
2　黒褐色土　　暗褐色土を斑紋状に多く含み焼土粒を少し含む
3　明褐色土　　暗褐色土を斑紋状に含み焼土粒・炭化粒を少し含む
4　黒褐色土　　褐色土・ローム粒を含み焼土粒・炭化粒を多く含む
5　褐色土　　ローム粒を含み焼土・炭化材を多く含む
6　褐色土　　ローム粒子・炭化材を含み焼土粒を多くを含む
7　黄褐色土　　暗褐色土が多く含む
8　黄褐色土　　褐色土・焼土粒・炭化粒を少し含む
9　赤褐色土　　ローム粒・炭化粒を含み焼土を多く含む
10　黒褐色土　　ローム粒・炭化物・焼土粒を含む
11　暗褐色土　　ローム粒を多く含み炭化物・焼土粒を少し含む
12　褐色土　　暗褐色土と炭化粒を少し含む
13　黄褐色土　　ロームブロックを含む



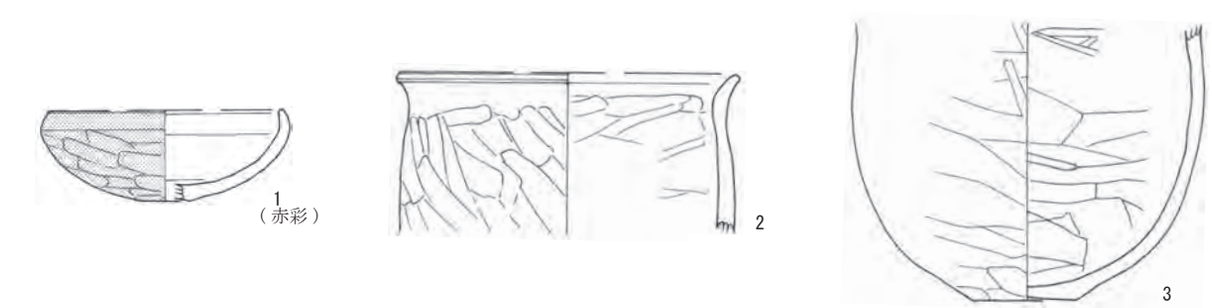
1　暗褐色土　　褐色土を斑紋状に含み粘土粒・焼土粒を少し含む
2　暗赤褐色土　　粘土粒を全体に含み暗褐色土と焼土粒を含む
3　褐色土　　黄褐色土を含む
4　黒褐色土　　褐色土・焼土粒・炭化粒を含む
5　赤褐色土　　暗褐色土・粘土粒・焼土ブロックを含む
6　暗褐色土　　褐色土を斑紋状に含み焼土粒を少し含む
7　黒褐色土　　焼土粒を少し含む
8　褐色土　　暗褐色土・粘土粒を含み焼土粒を少し含む
9　暗褐色土　　ローム粒と焼土粒・炭化粒・粘土粒を少し含む
10　暗褐色土　　黄褐色土・粘土を含む
11　赤褐色土　　焼土に粘土粒・暗褐色土粒を含む
12　粘　土　　焼土粒を多く含む

第302図　H-3

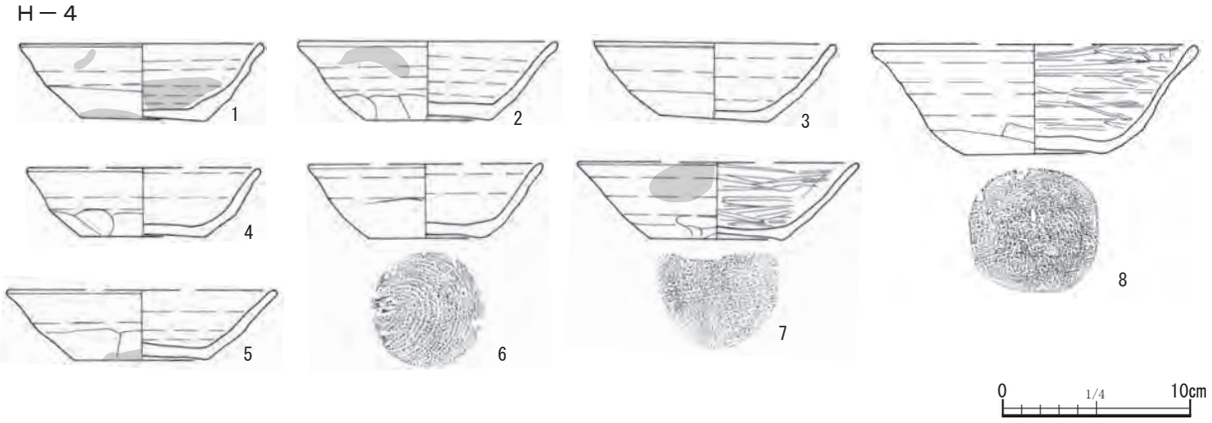
H－1・2



H－3

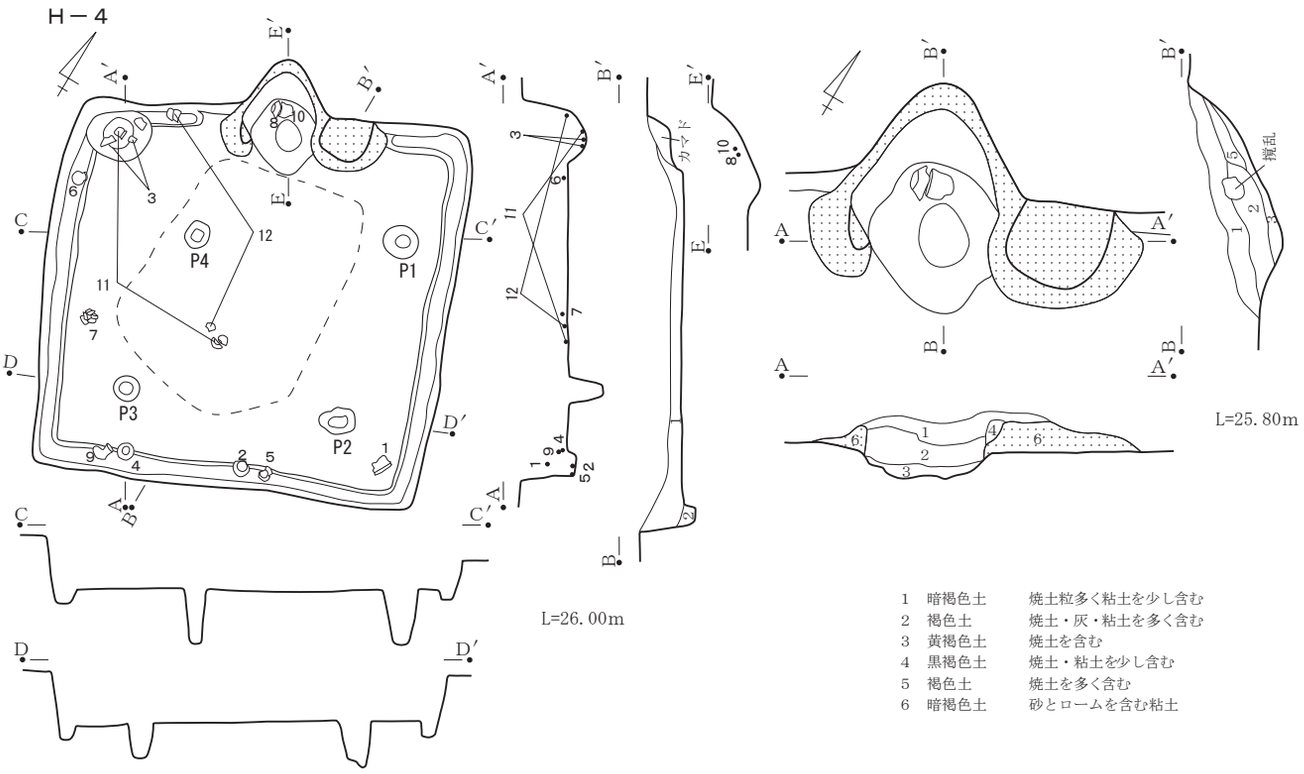


H－4



第 303 図　住居出土土器　H-1 ～ H-4

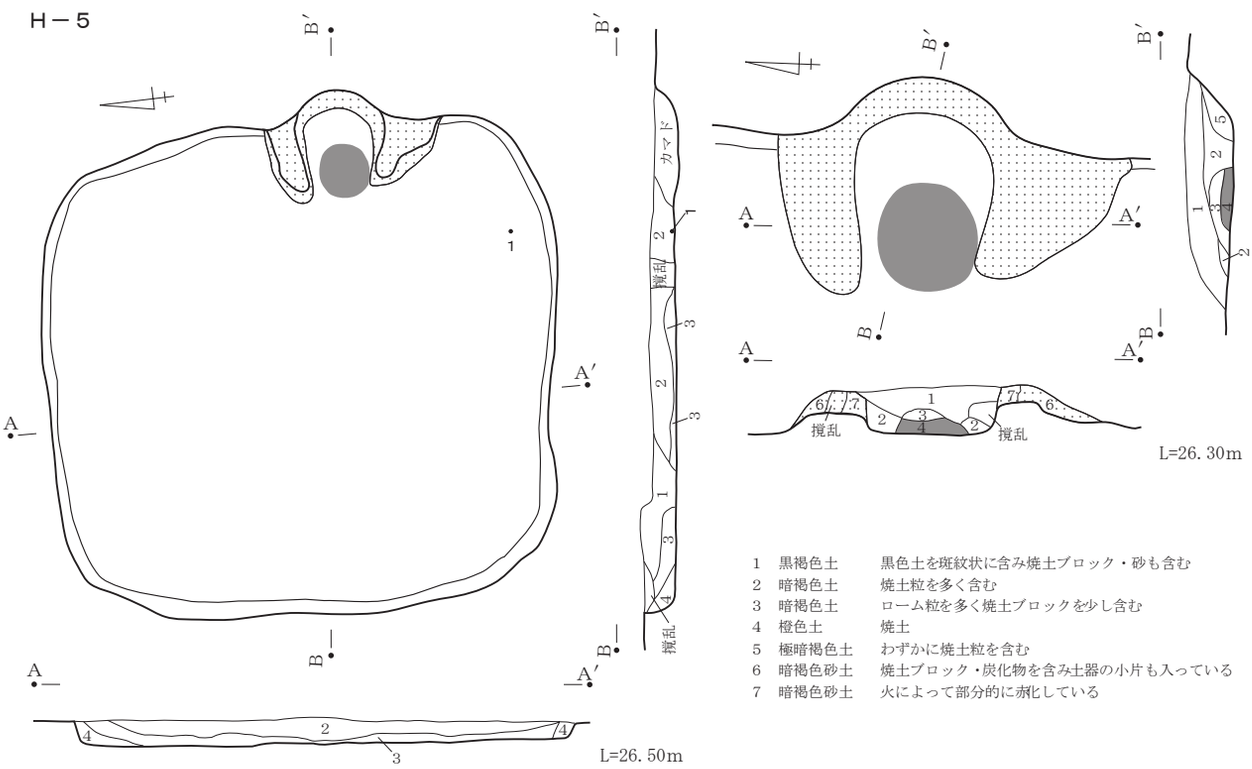
H－4



1　褐色土　　炭化物・粘土を少し含む
2　黄褐色土

1　暗褐色土　　焼土粒多く粘土を少し含む
2　褐色土　　焼土・灰・粘土を多く含む
3　黄褐色土　　焼土を含む
4　黒褐色土　　焼土・粘土を少し含む
5　褐色土　　焼土を多く含む
6　暗褐色土　　砂とロームを含む粘土

H－5

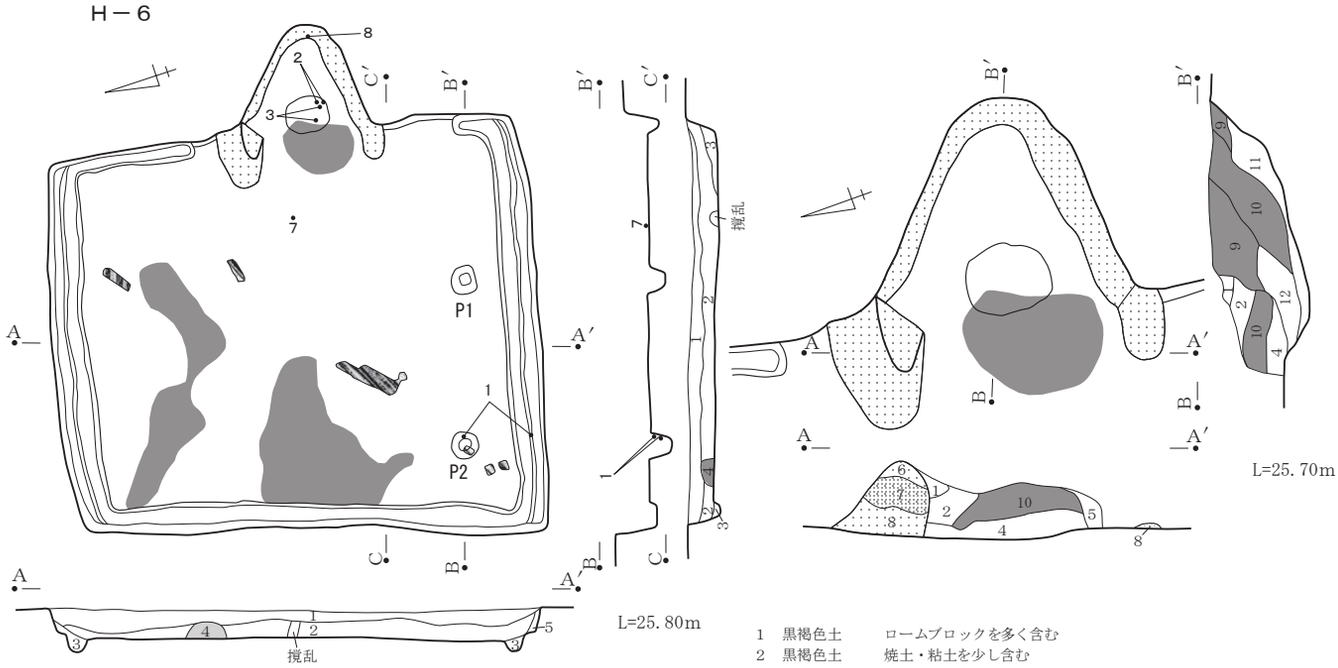


1　黒褐色土　　暗褐色土を含む
2　黒褐色土　　黒色土と暗褐色土を斑紋状に含み炭化粒と焼土粒をわずかに含む
3　暗褐色土　　黒色土を含みわずかに炭化粒・焼土粒を含む
4　暗褐色土

1　黒褐色土　　黒色土を斑紋状に含み焼土ブロック・砂も含む
2　暗褐色土　　焼土粒を多く含む
3　暗褐色土　　ローム粒を多く焼土ブロックを少し含む
4　橙色土　　焼土
5　極暗褐色土　　わずかに焼土粒を含む
6　暗褐色砂土　　焼土ブロック・炭化物を含み土器の小片も入っている
7　暗褐色砂土　　火によって部分的に赤化している

第 304 図　H-4・H-5

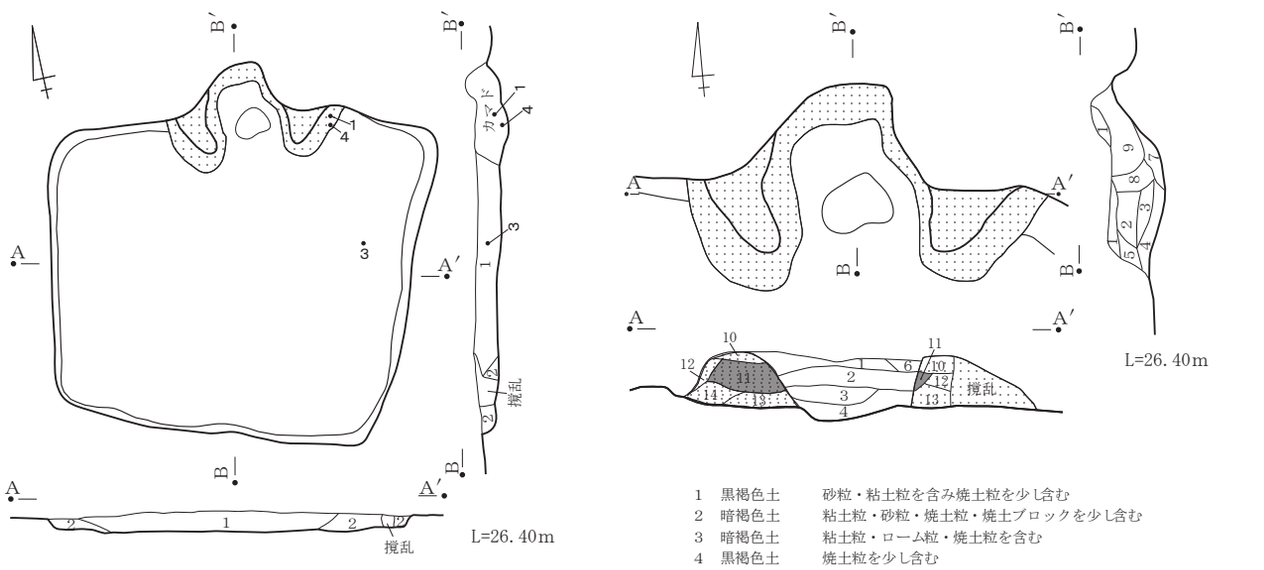
H－6



1　黒褐色土
2　褐色土　　ローム粒・炭化物少し含む
3　黄褐色土
4　焼土
5　黄褐色土

1　黒褐色土　　ロームブロックを多く含む
2　黒褐色土　　焼土・粘土を少し含む
3　暗褐色土　　粘土を少し含む
4　暗褐色土　　炭化物を少し含む
5　黒褐色土　　粘土・炭化物を少し含む
6　灰褐色粘土　　粘土・炭化物を少し含む
7　白色粘土　　少量のロームブロックを含む
8　灰褐色粘土　　黒色土を少し含む
9　黒褐色土　　焼土を多く含む
10　焼土
11　橙色土　　焼土を多く含む
12　橙色土　　焼土・炭化物・灰を少し含む

H－7



1　黒褐色土　　黒色土を斑紋状に含む
2　暗褐色土　　黒褐色土をわずかに含む

1　黒褐色土　　砂粒・粘土粒を含み焼土粒を少し含む
2　暗褐色土　　粘土粒・砂粒・焼土粒・焼土ブロックを少し含む
3　暗褐色土　　粘土粒・ローム粒・焼土粒を含む
4　黒褐色土　　焼土粒を少し含む
5　黒褐色土　　褐色土を斑紋状に含み粘土粒を含む
6　暗褐色土　　粘土粒・焼土粒・焼土ブロックを少し含む
7　暗褐色土　　ローム粒を含む
8　暗褐色土　　粘土粒・焼土粒を含む
9　褐色土　　粘土粒・焼土粒を多く含む
10　黒褐色土　　砂粒・粘土粒・焼土粒を少し含む
11　暗褐色土　　黒褐色土・砂粒を少し含み焼土ブロック・焼土粒を多く含む
12　暗褐色土　　砂粒・焼土をわずかに含む
13　暗褐色土　　焼土粒を少し含む
14　暗褐色土　　褐色土を斑紋状に含む

第 305 図　H-6・H-7

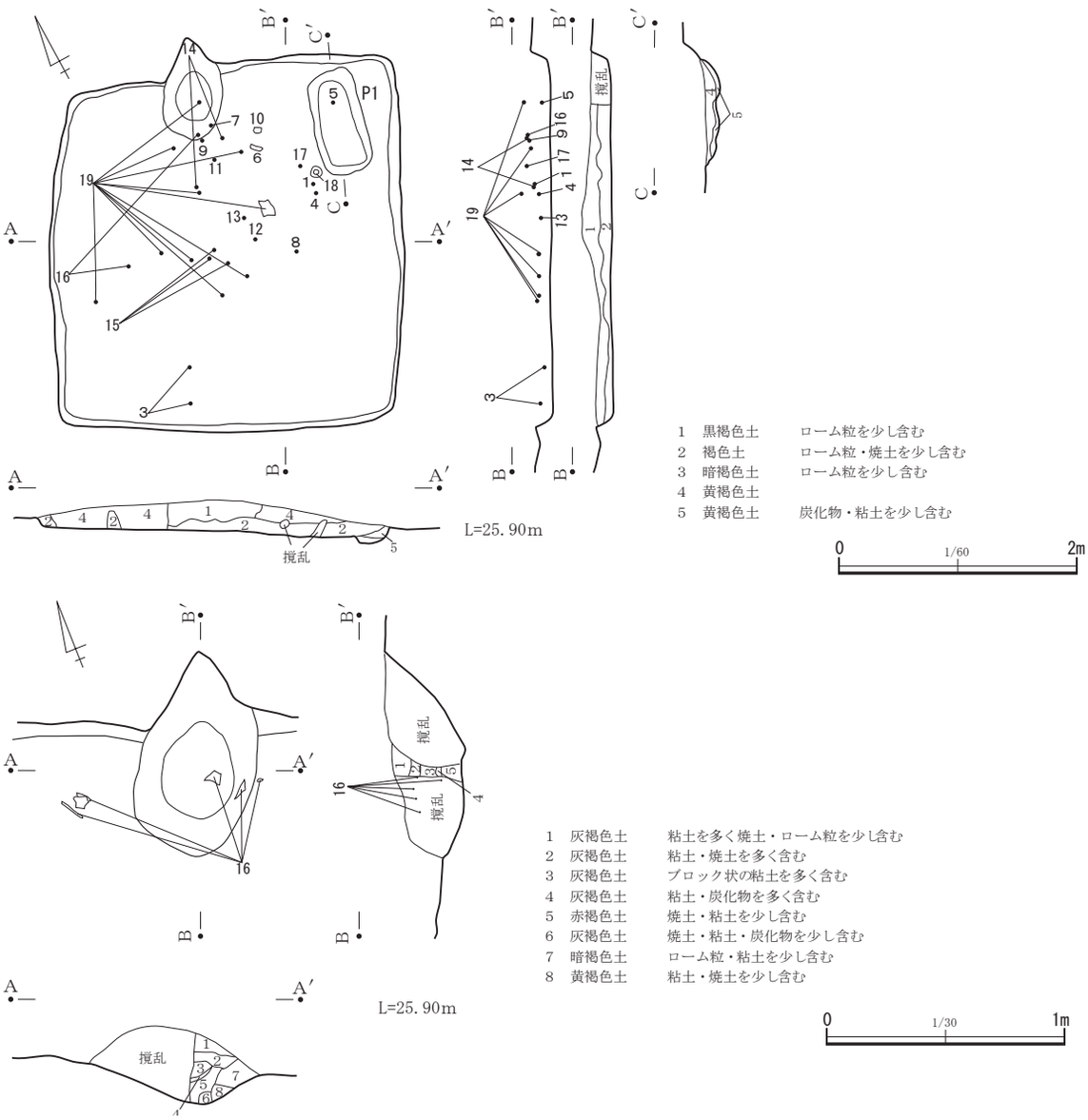
出土した。鉄鎌 (第 346 図 1) と鉄滓 (第 347 図 17) も出土している。平安時代・ 9 世紀としておく。

H- 7 (第 305・307 図・図版 34・35)

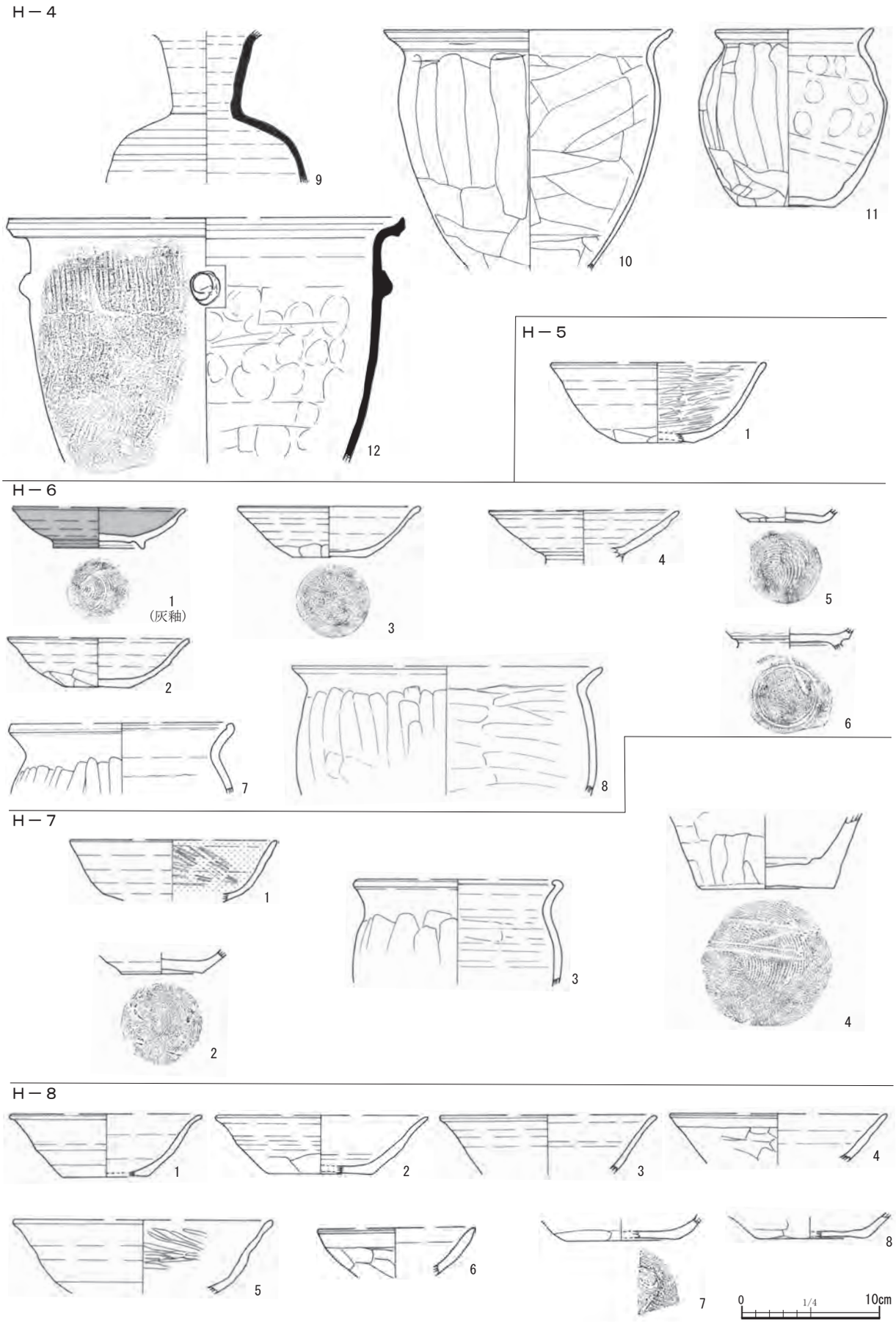
旧ハ -16-1 住。2.9 × 2.4 mの方形の掘り込みをもつ。壁は 0.2 mで上部はやや開く。壁溝と柱穴はない。土師器の甕 (3) が東壁付近から出土。カマドは北壁中央にあり、右袖から内面黒色処理の土師器坏 (1)・甕 (4) が出土している。平安時代・ 9 世紀としておく。

H- 8 (第 306・307・309 図・図版 34)

旧ヒ -25-1 住。3.1 × 3.0 mの方形の掘り込みをもつ。壁は 0.2 mで上部がやや開き、壁溝はない。カマドは北壁の西寄りにあるが撹乱により袖は遺存しなかった。カマド右脇の長方形の浅い掘り込みは主軸が竪穴とずれており、底面も凸凹が目立つ。貯蔵穴であるか、当遺構に伴わないものであるか判然としない。竪穴中央の検出面付近から土器破片が多数出土した。土師器坏 (1・3 ～ 6・8 ～ 11) ・甕 (12 ～ 18)・甑 (19) がある。4 と 16 の破片の一部はカマド覆土から出土している。土器以外では袋状鉄斧が北西隅から出土し、内部から楔が見つかった (第 346 図 2・3)。他に褐鉄鉱 (第 347 図 18) と軽石が出土している。平安時代・ 9 世紀としておく。



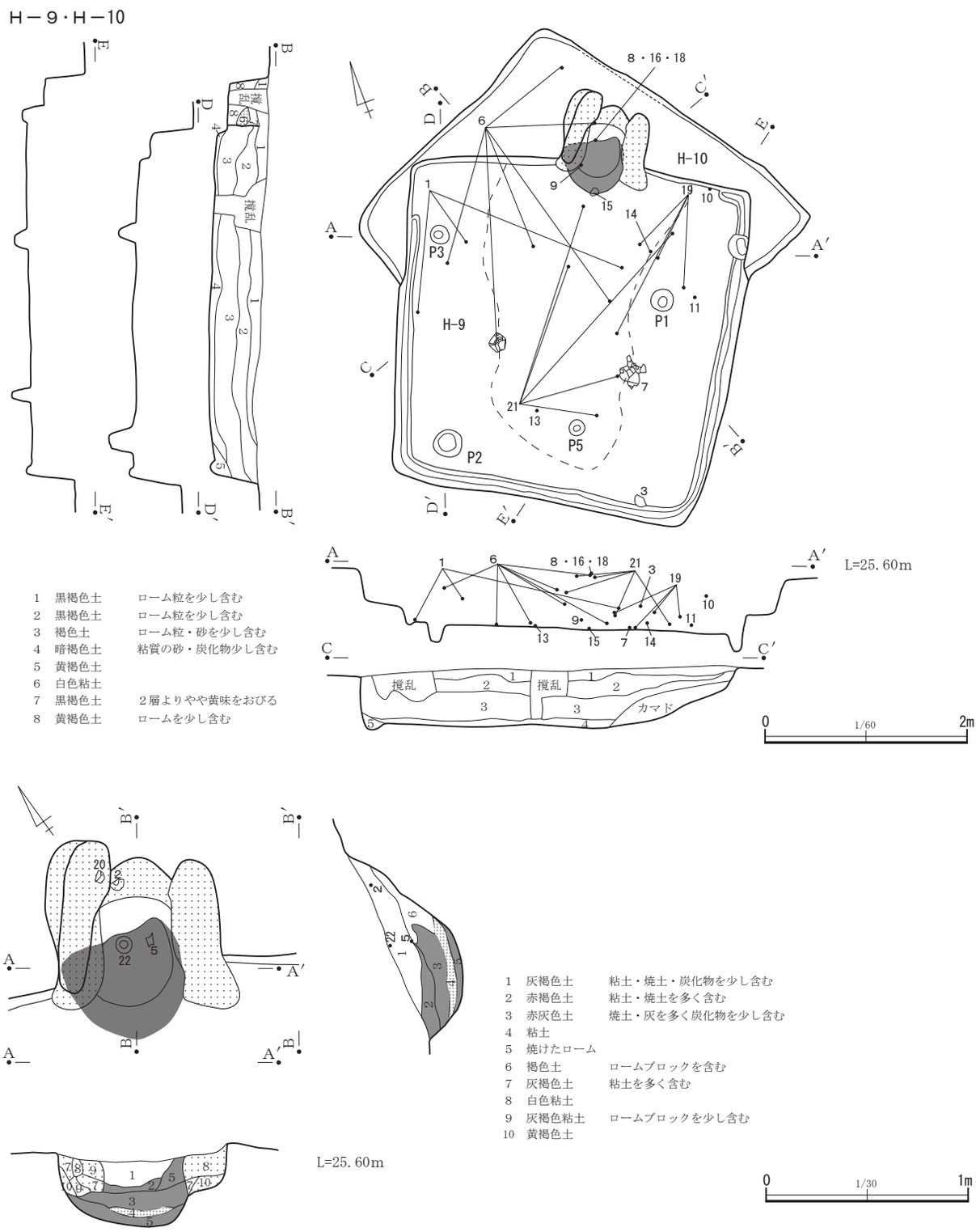
第 306 図　H-8



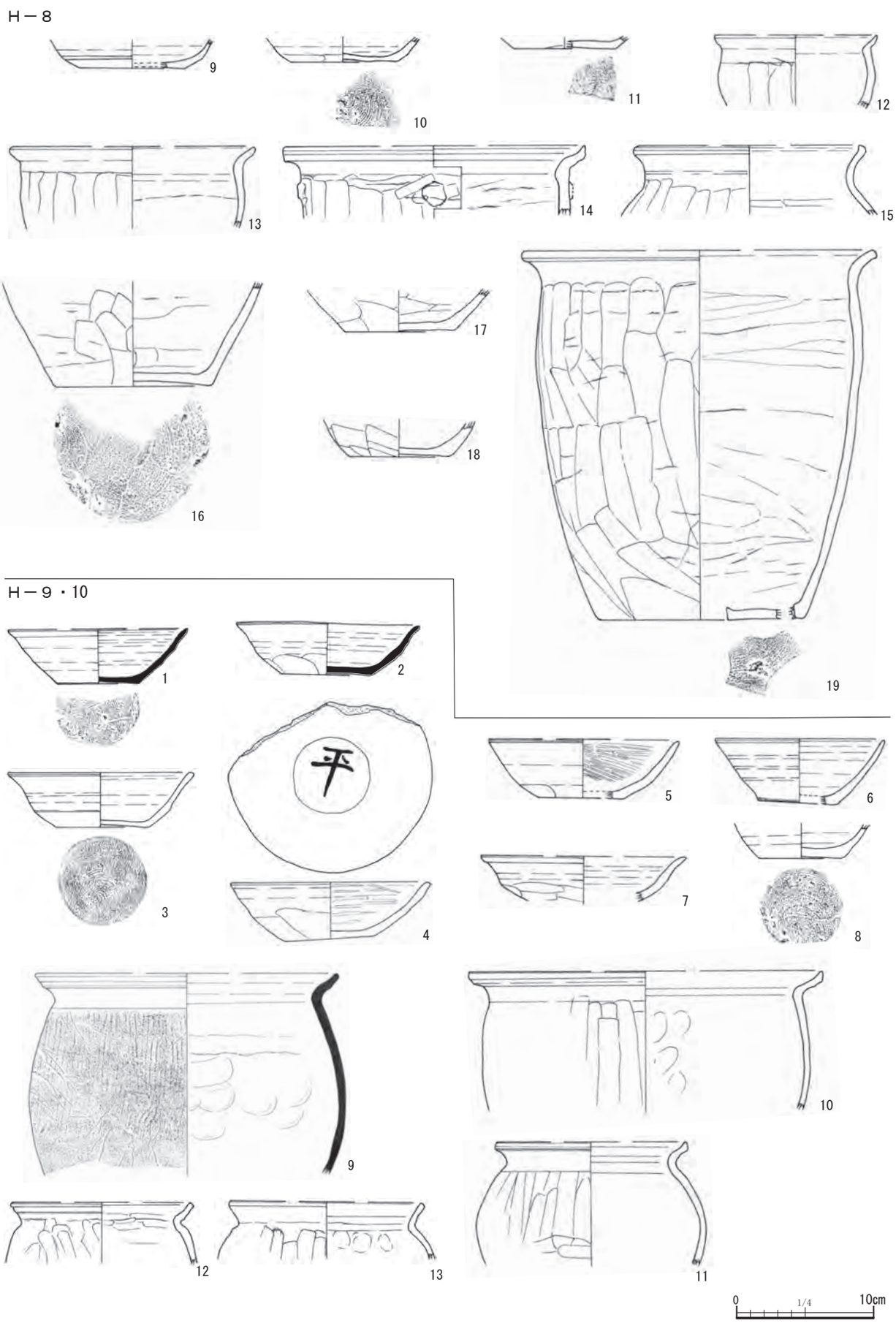
第 307 図　住居出土土器　H-4 ～ H-8

H- 9 (第 308 ～ 310 図・図版 35・58・59)

旧へ -24- 1 住。竪穴は H-10 の覆土を切って 3.5 × 3.4 mの方形に掘り込まれている。壁は 0.5 mでほぼ垂直に立ち上がり、壁溝は 3/4 周する。床面中央は踏みしめによる硬化が南北に伸びており、南に出入口をもつ構造を想定できる。柱穴は径 0.1 ～ 0.3 m・深さ 0.1 ～ 0.2 mのごく浅いものであり、性格は明らかでない。カマドは北壁中央にあり、内部から「平」銘の墨書をもつ須恵器坏 (4、図版 62) と支脚 (22) が出土した。2 は煙道部、5 はカマド覆土上部、20 は袖から出土した。竪穴では床面か

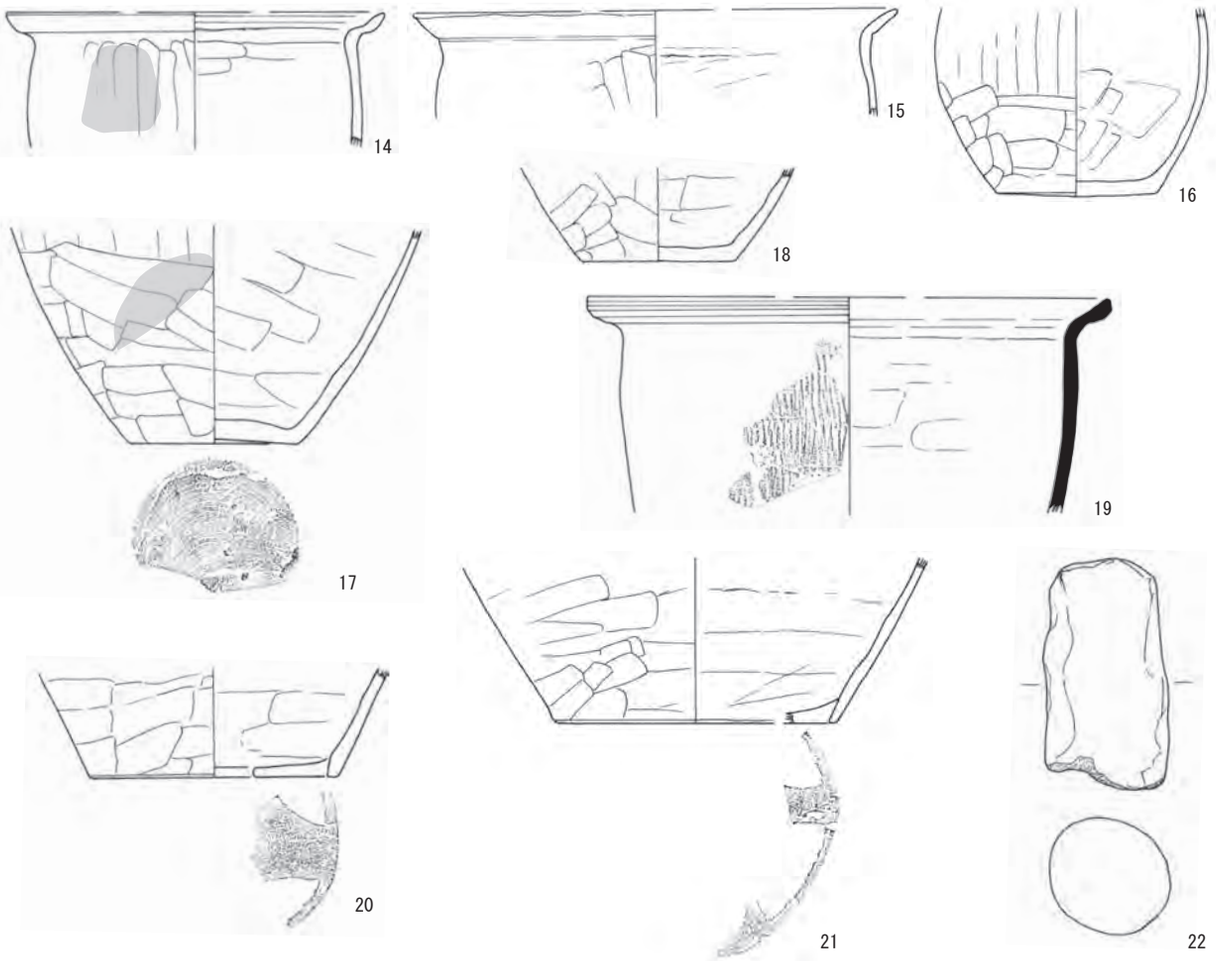


第 308 図　H-9・H-10

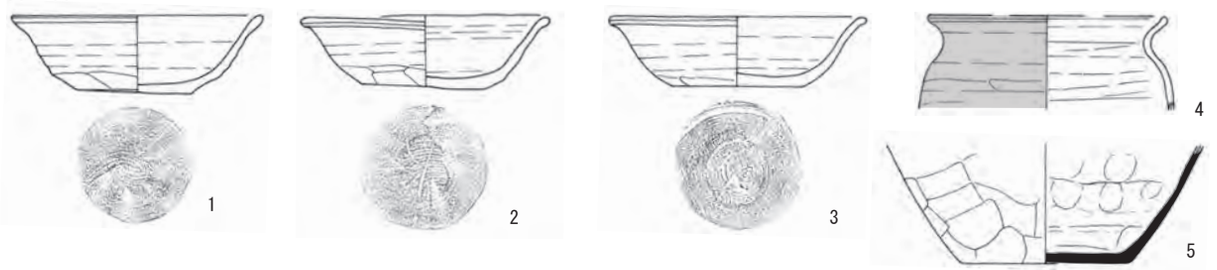


第 309 図　住居出土土器　H-8・H-9

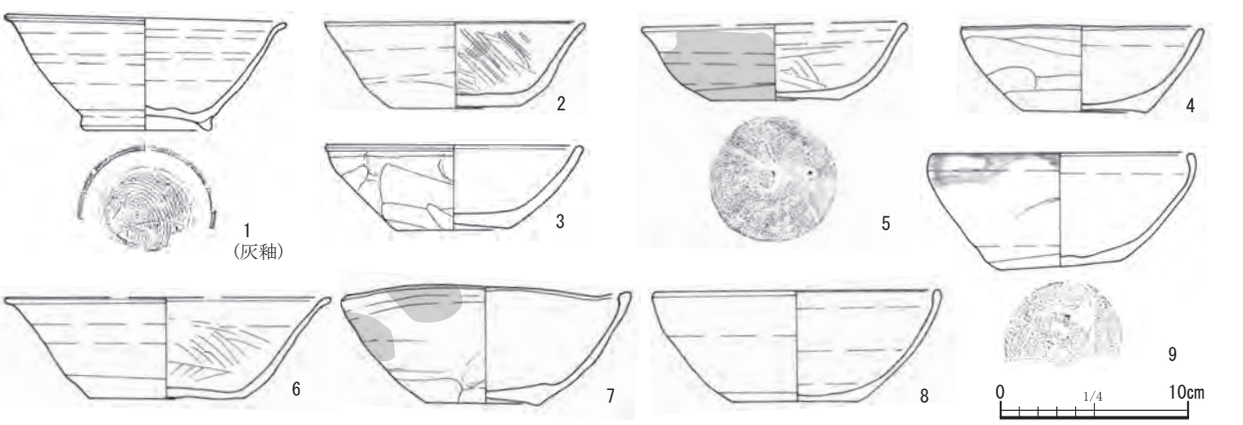
H－９・10



H－11



H－12

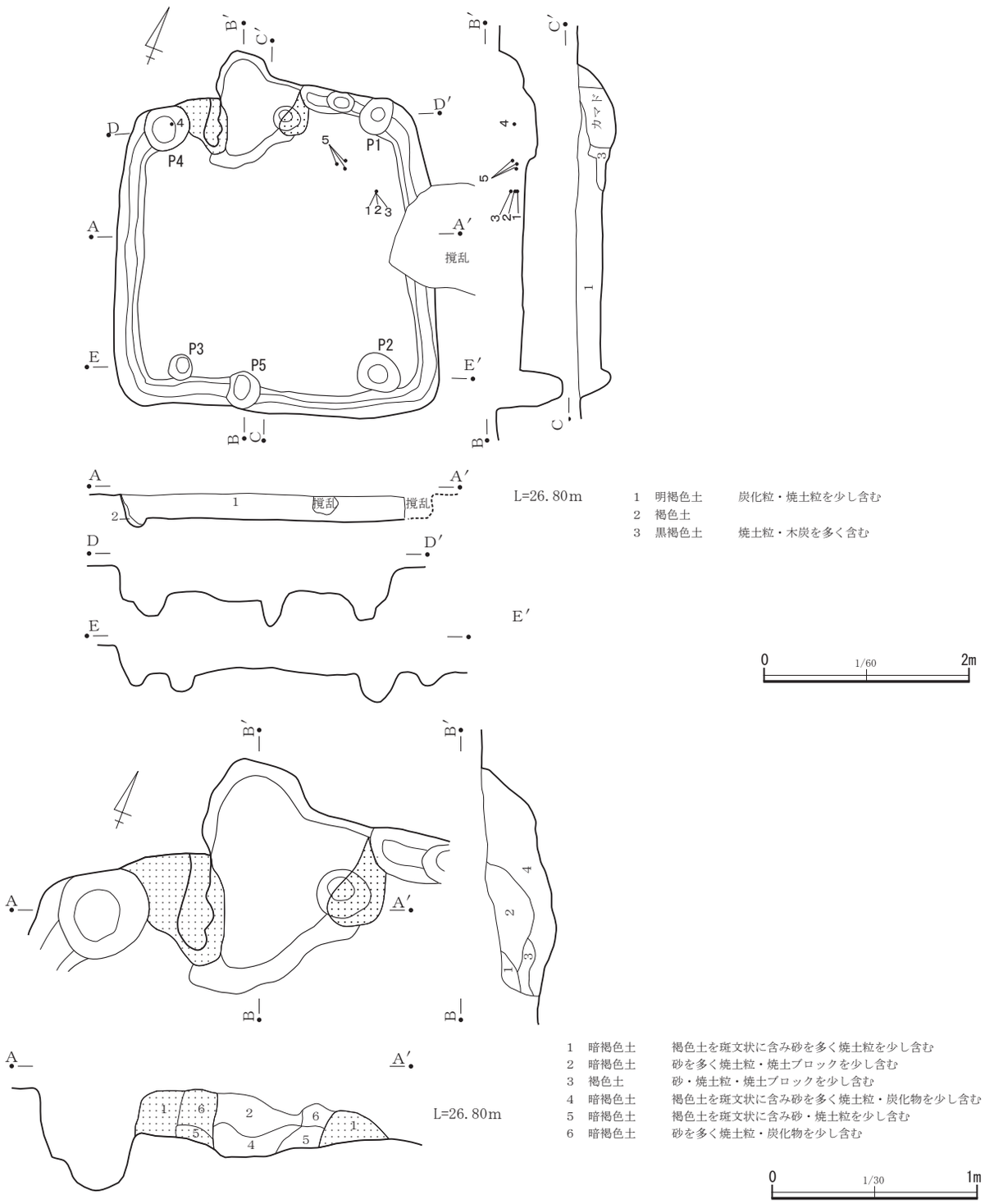


第 310 図　住居出土土器　H-9 ～ H-12

ら覆土上層まで多くの遺物が出土している。出土遺物は H-10 と一緒に取り上げられているが、当住居が新しいことから、掲載土器のほぼすべてがこちらに帰属する。床面付近からは土師器坏 (6 ・ 7) ・甕 (13 ～ 15) が出土している。ただし、6 の破片の一部は H-10 の覆土上層出土である。土器以外では鉄鏃茎部 2 点 (第 346 図 4 ・ 5)、軽石 2 点が出土している。平安時代・9 世紀としておく。

H-10(第 308 図・図版 35)

旧へ -24-2 住。3.4 × 2.3 mの方形の掘り込みをもつ。大部分が H- 9 に切られている。壁は 0.3 mで垂直に近く立ち上がる。壁溝・柱穴はない。カマドは北壁・東壁には痕跡がなく、H- 9 に切られた西壁・



第 311 図　H-11

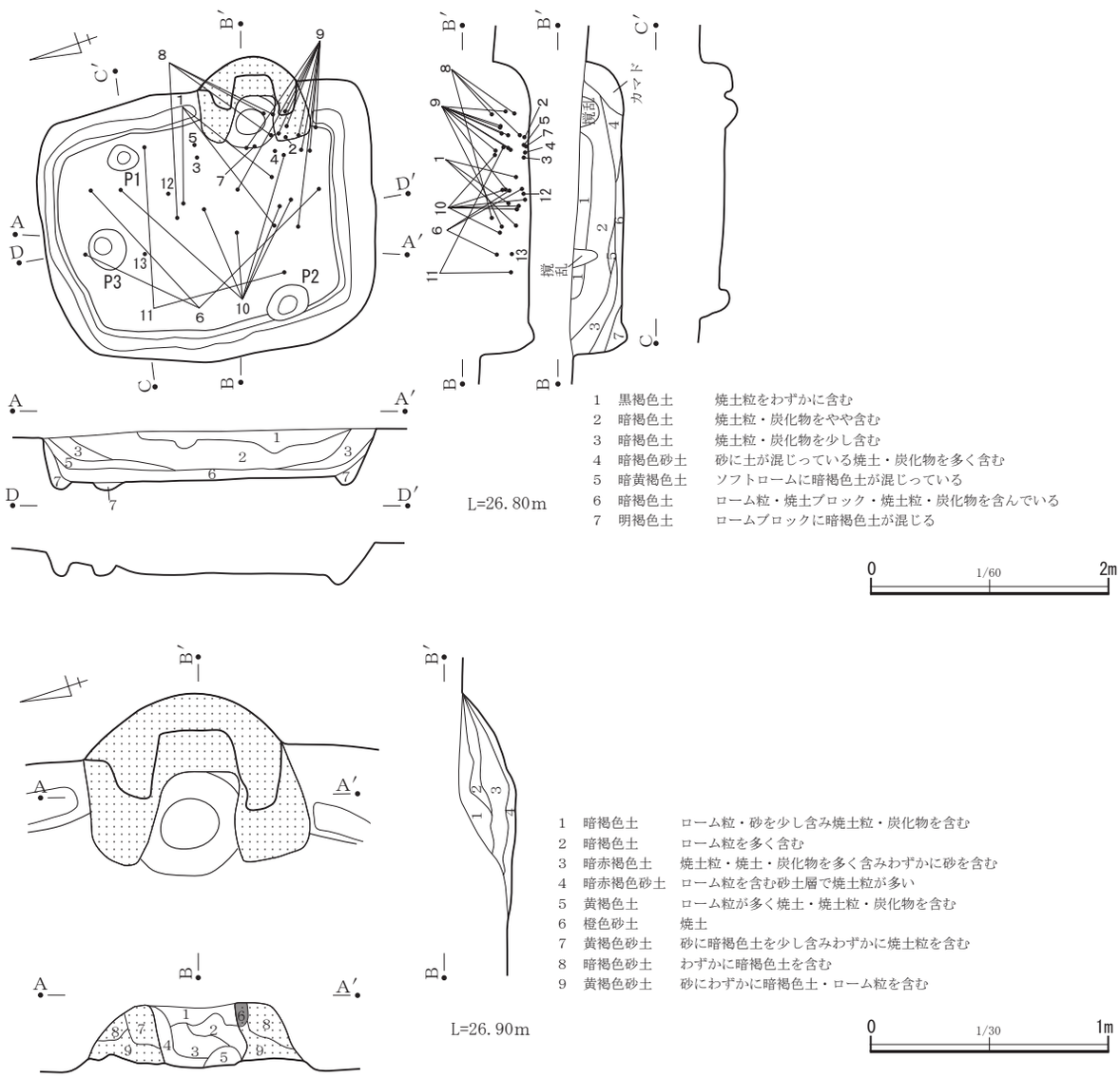
南壁が候補となる。南壁の例はないことから西壁の可能性が高い。出土遺物はないが、H- 9より古く、竪穴の大きさは共通することから年代は平安時代・9世紀としておく。

H-11(第310・311図・図版35・59)

旧マ-15- 1住。3.2 × 3.1 mの方形ないし隅丸方形の掘り込みをもつ。壁は0.2 mで垂直に近く立ち上がり、壁溝は全周する。P1 ～ P4は深さ0.1 ～ 0.2 mの浅いもので壁際に位置するが、規則的な配置から主柱穴の可能性が高い。南壁の壁溝内あるP5は出入口施設であろう。北壁中央のカマドは袖・火床部とも遺存が悪い。土師器坏(1～3)は東壁近くの床面やや上で3枚が重なって出土した。土師器甕(5)と須恵器甕(4)は覆土上層から出土した。土器以外では鉄鏃3点(第346図6～8)・刀子1点(第346図9)が出土している。平安時代・9世紀としておく。

H-12(第310・312・314図・図版35・59)

旧マ-18-1住。2.8 × 2.4 mの隅丸長方形の掘り込みをもつ。H-31と並んで遺構群中もっとも小さい。壁は0.4 mでやや開いて立ち上がり、壁溝は全周する。径0.2 ～ 0.4 m・深さ0.3 mの柱穴3本を検出している。カマドは東壁のかなり南に寄った部分にあり、土師器椀(7・8)が出土した。竪穴の床面から覆土にかけても多数の土器が出土している。出土レベルは土師器坏(2～5)・椀(7)が床面、灰釉高台

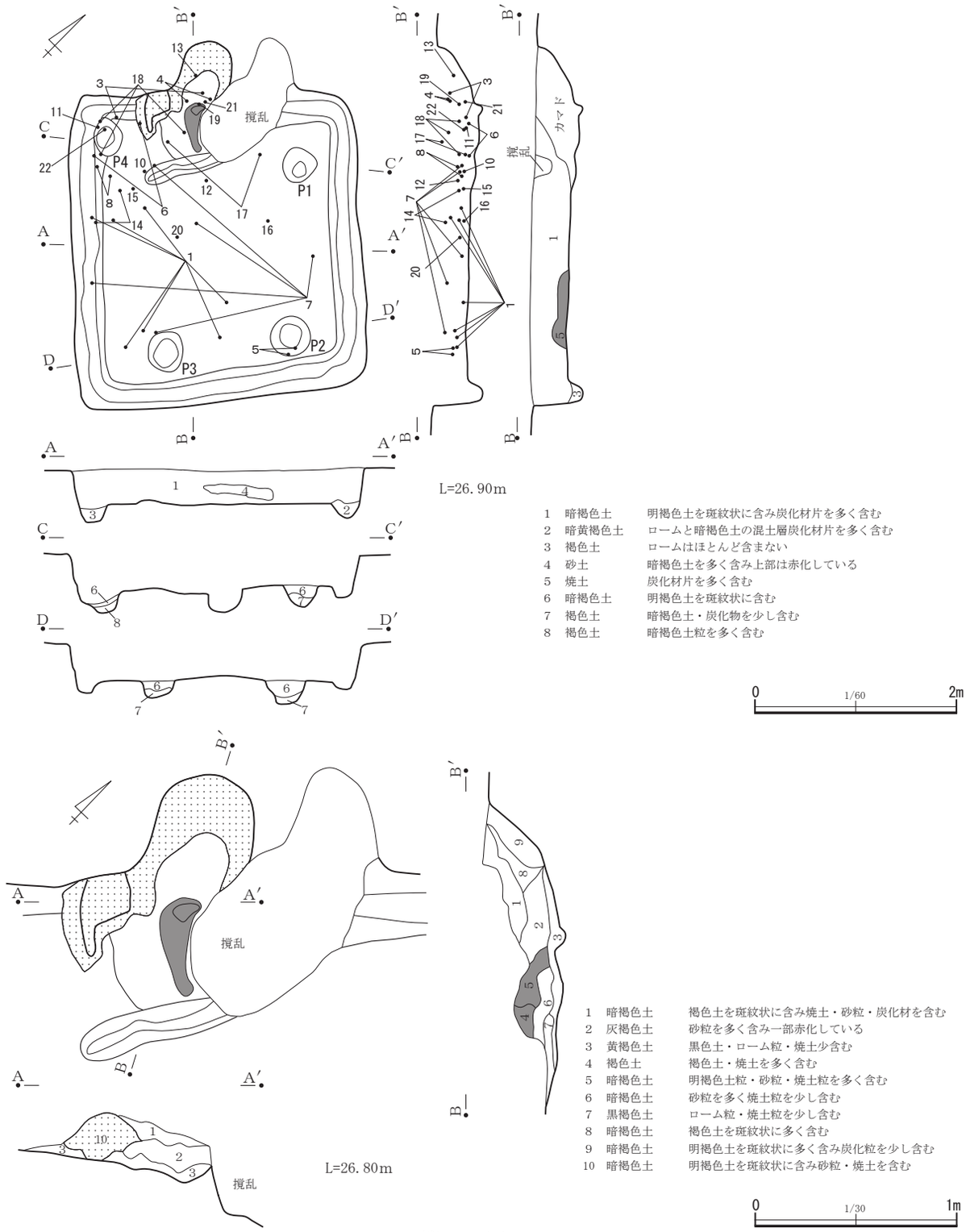


第312図　H-12

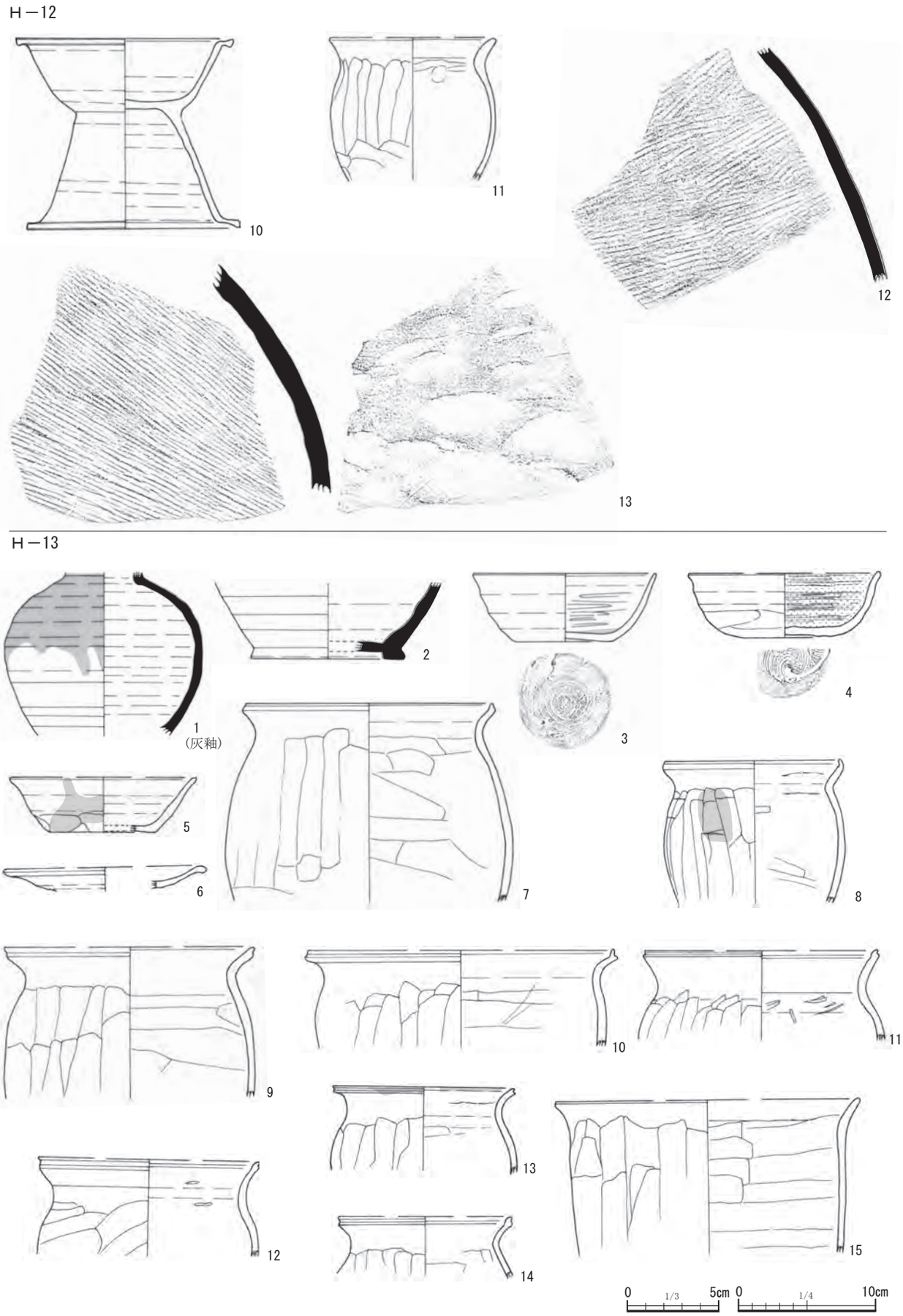
付椀 (1)、土師器坏または椀 (6 ・ 8 ・ 9) ・高台付鉢 (10) ・甕 (11)、須恵器甕破片 (12 ・ 13) が覆土中である。 1 は優品であり、高台付鉢 (10) や口縁が内湾する坏または椀 (7 ～ 9) は当住居のみで出土している。平安時代・ 9 世紀としておく。

H-13(第 313 ～ 315 図・図版 35 ・ 59)

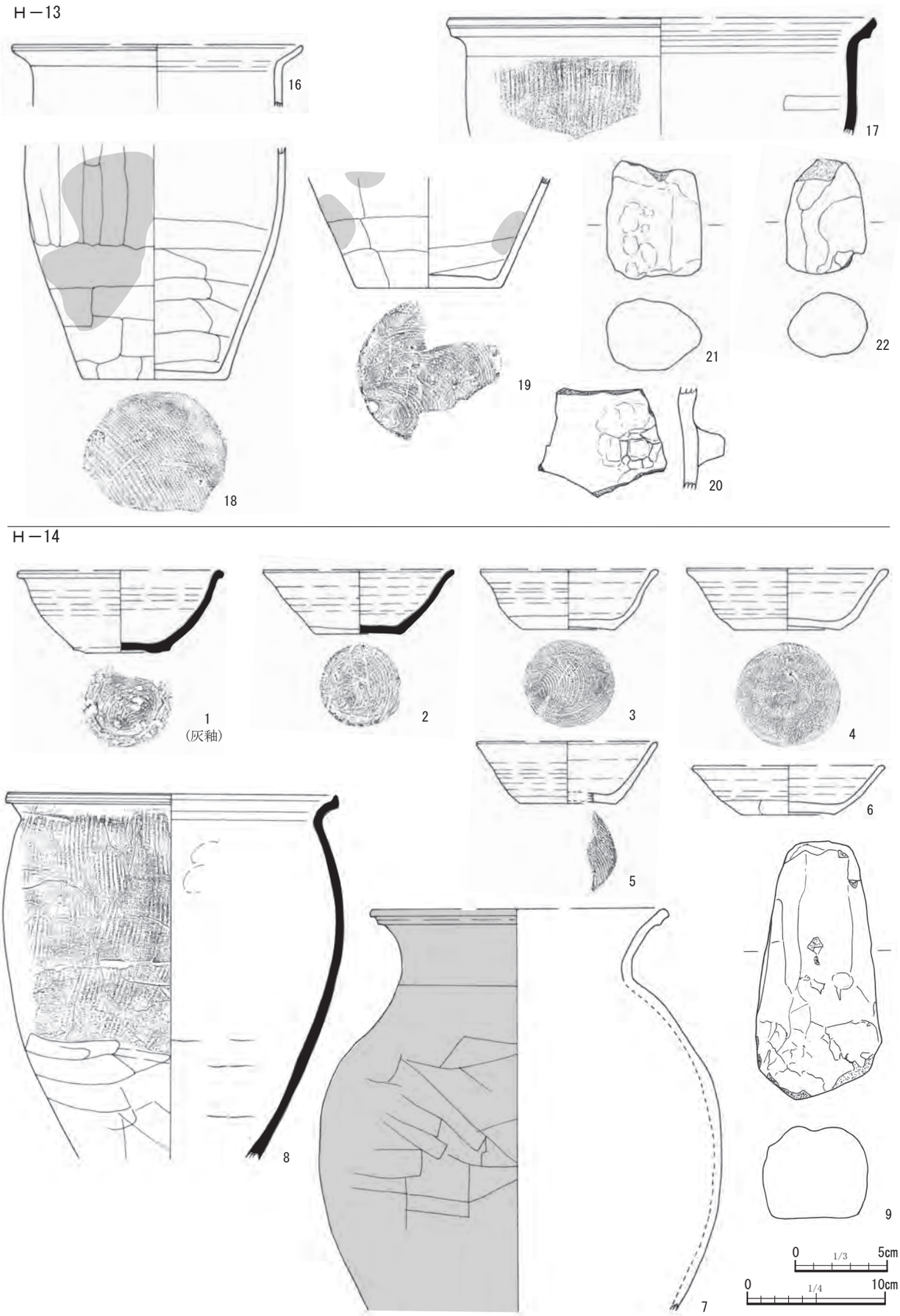
旧ミ -16-1 住。3.3 × 2.9 m の長方形の掘り込みをもつ。壁は 0.2 m でほぼ垂直に立ち上がり、壁溝は全周する。径 0.3 ～ 0.4 m・深さ 0.2 m の柱穴 4 本のうち P 4 は北西隅に偏



第 313 図　H-13



第 314 図　住居出土土器　H-12・H-13

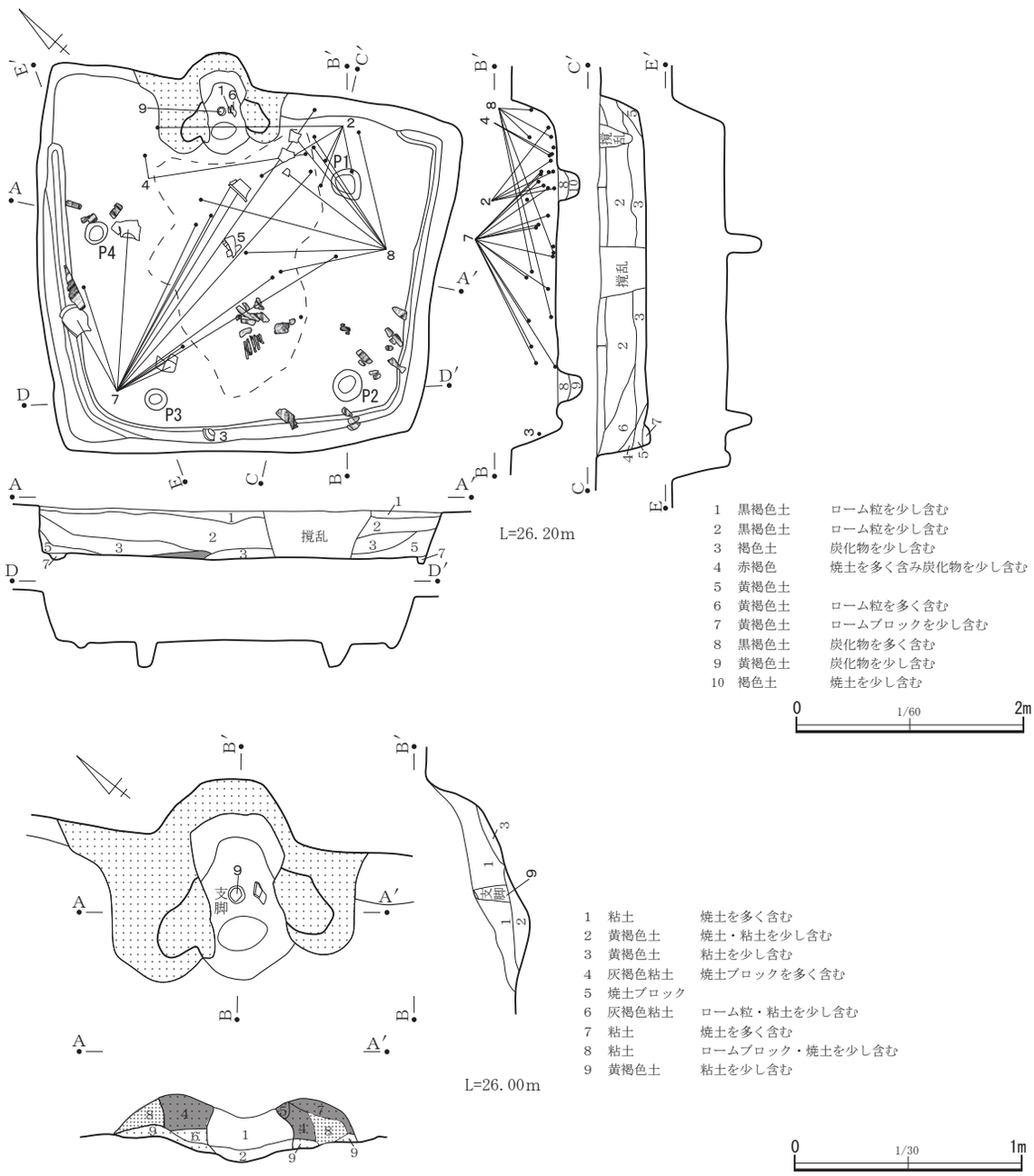


第 315 図　住居出土土器　H-13・H-14

る。柱穴３本が規則的な位置にあって北西の１本がずれているのは H- ４・14 と共通する。カマドは北壁の中央にあり、土師器坏 (３・４)・甕 (13・19)・支脚 (21) が出土している。これも含めて、多量の遺物が床面よりやや上から覆土中で多数出土している。灰釉陶器長頸瓶 (１・2)、土師器坏 (３～５)・皿 (６)・甕 (７・８～ 16・18・19)・甑 (20)、須恵器甕 (17) がある。土器以外では鉄製刀子 (第 346 図 13)、軽石２点が出土している。

H-14(第 315・316 図・図版 36・59)

旧ミ -20-1 住。3.6 × 3.2 mの不整方形の掘り込みをもつ。壁は 0.4 mでやや開いて立ち上がり、壁溝は 3/4 周する。柱穴は径 0.2 m・深さ 0.2 ～ 0.3 mの柱穴４本を検出。柱穴３本が規則的な位置にあって北西の１本がずれているのは H- ４・13 と共通する。カマドから主軸上にかけて床の硬化が認められる。炭化材が多い。カマドは北壁中央やや西寄りにあり、中央より灰釉陶器椀 (１)、土師器坏 (６)、支脚 (９) が出土している。灰釉陶器は二次焼成により変色して爛れている。竪穴の北東部を中心とし

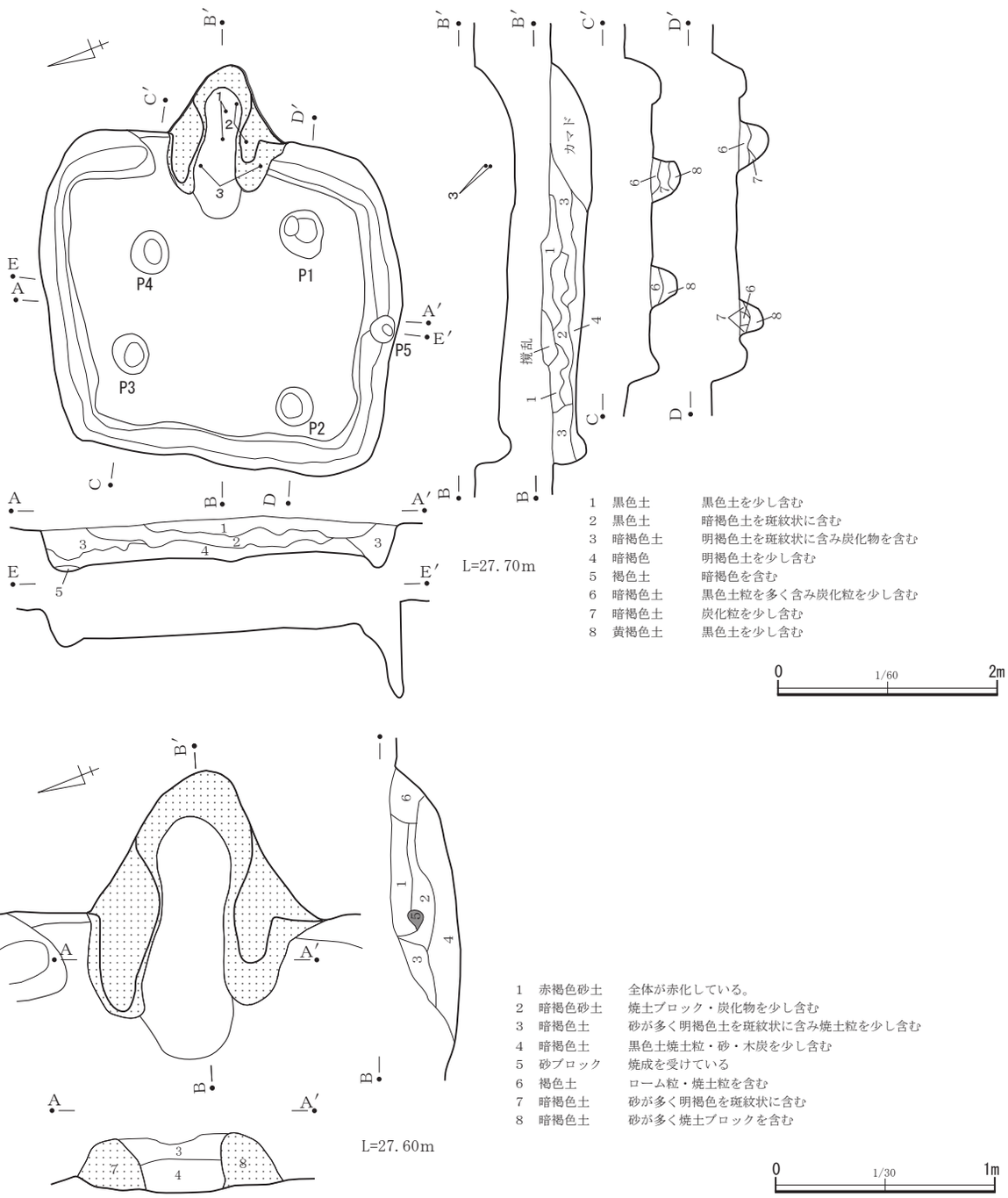


第 316 図　H-14

て、床面直上から覆土中にかけて土器が出土している。須恵器坏 (2)・甕 (8)、土師器坏 (3)・甕 (7) がある。土器以外では鉄鏃２点 (第 346 図 10・11)、木質部の残った刀子 (第 346 図 12) が出土している。平安時代・９世紀としておく。

H-15(第 317・321 図・図版 36)

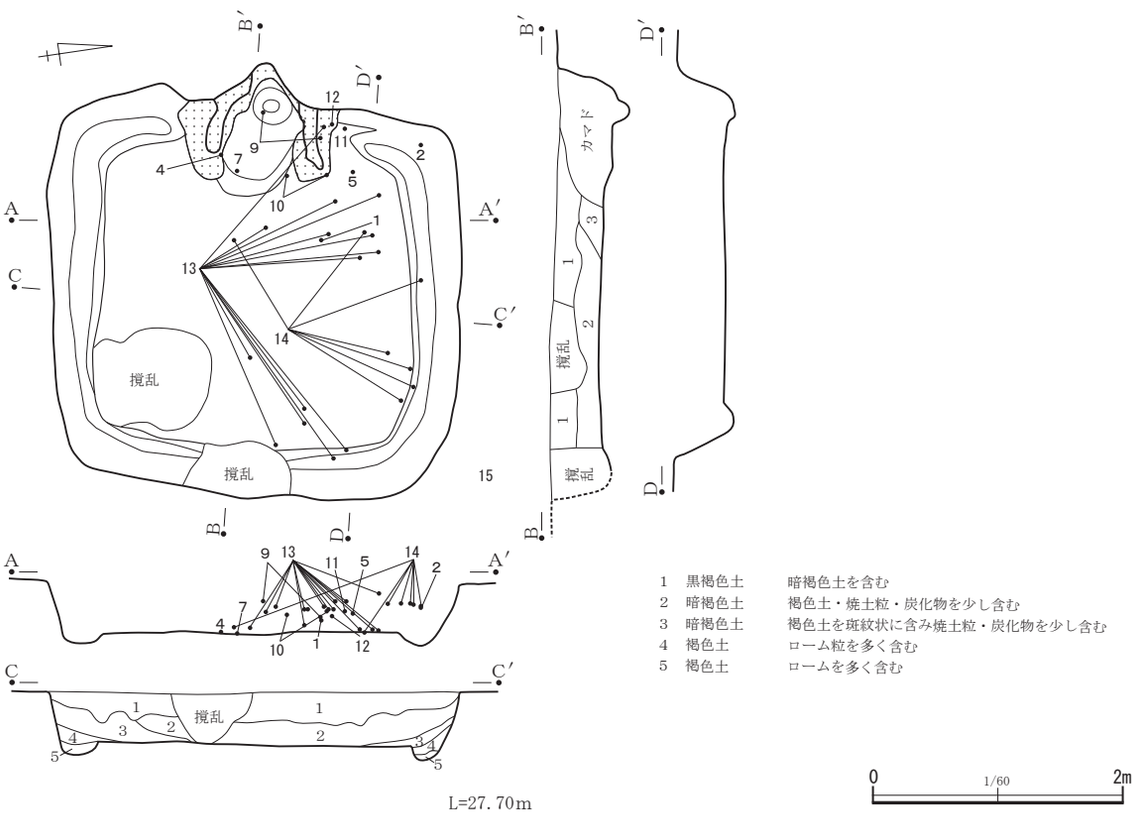
旧メ -9-1 住。3.3 × 2.7 mの隅丸方形の掘り込みをもつ。壁は 0.3 mでやや開いて立ち上がり、壁溝は全周する。柱穴は径 0.3 ～ 0.4 m・深さ 0.2 ～ 0.3 mの P1 ～ P4 が主柱穴であろう。南側壁溝内にある深さ 0.5 mの P5 は出入口施設であろう。カマドは東壁中央にあり内部から上部にかけて土師器坏 (1 ～ 3) が出土した。土器以外では軽石が出土している。平安時代・９世紀としておく。

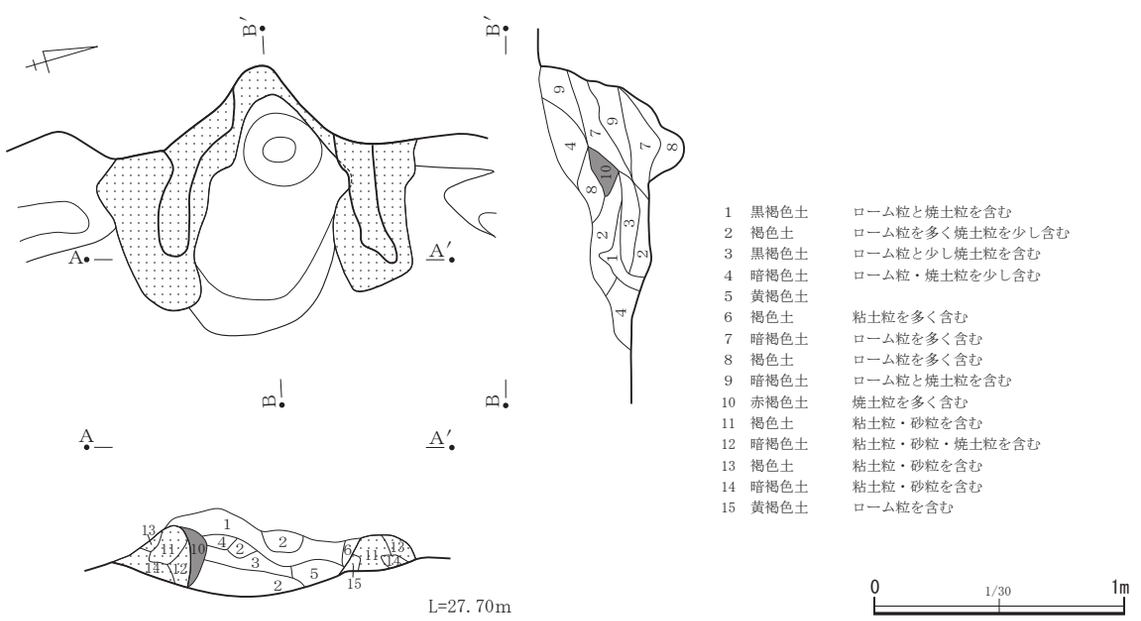


第 317 図　H-15

H-16(第 318・321 図・図版 36・60)

旧モ -10-1 住。3.3 × 3.1 mの方形の掘り込みをもつ。壁は 0.4 mでやや開いて立ち上がり、壁溝はほぼ全周する。柱穴はない。カマドは西壁中央にあり、土師器坏 (4・7) が左袖床面付近から、土師器甕 (9 ～ 12) がカマド付近から出土している。覆土中でも北半部を中心に土器が出土した。土師器坏 (1 ～ 3・5・6・8)・甕 (9 ～ 12)・甑 (13)、須恵器甕片 (14) がある。土器以外では軽石、敵石が出土している。平安時代・9 世紀としておく。

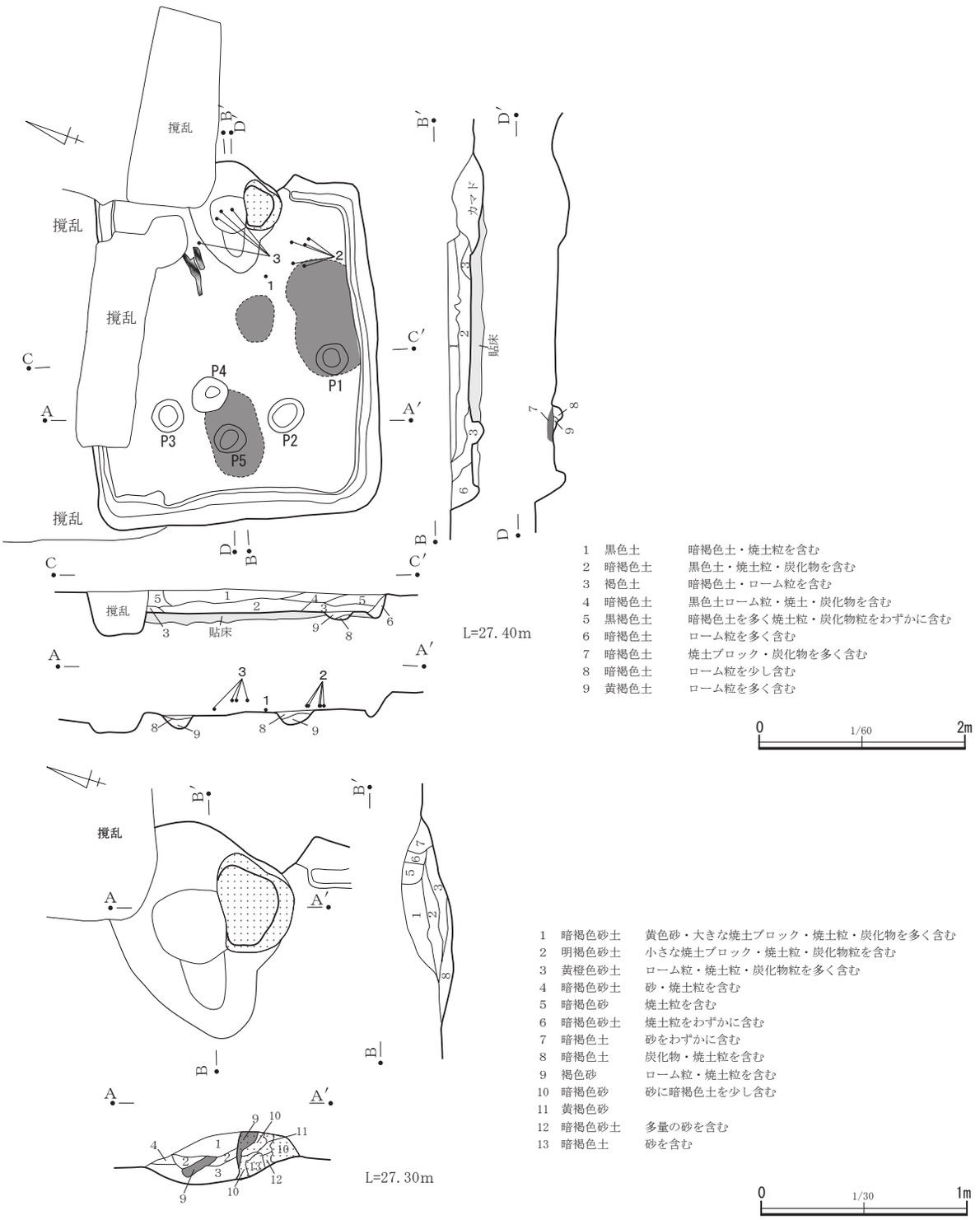




第 318 図　H-16

H-17(第 319・321 図)

旧モ -14-1 住。Ｊ－ 19 と重複。3.0 × 2.7 mの長方形の掘り込みをもつ。北壁・東壁は撹乱を受ける。壁は 0.2 mでやや開いて立ち上がり、壁溝はほぼ全周していたものとみられる。柱穴は径 0.3 ～ 0.4 m・深さ 0.2 mのＰ 2・３が主柱穴であろうか。P5 は深さ 0.1 mと浅いが出入口施設であろうか。床面は貼床状であり、全体が強く踏み固められている。焼土、炭化物が南半に広がる。カマドは東壁中央にあり土師器甕 (3) が内部から出土している。土師器坏 (1)・甕 (2) もカマド付近から出土している。平安時代・９世紀としておく。



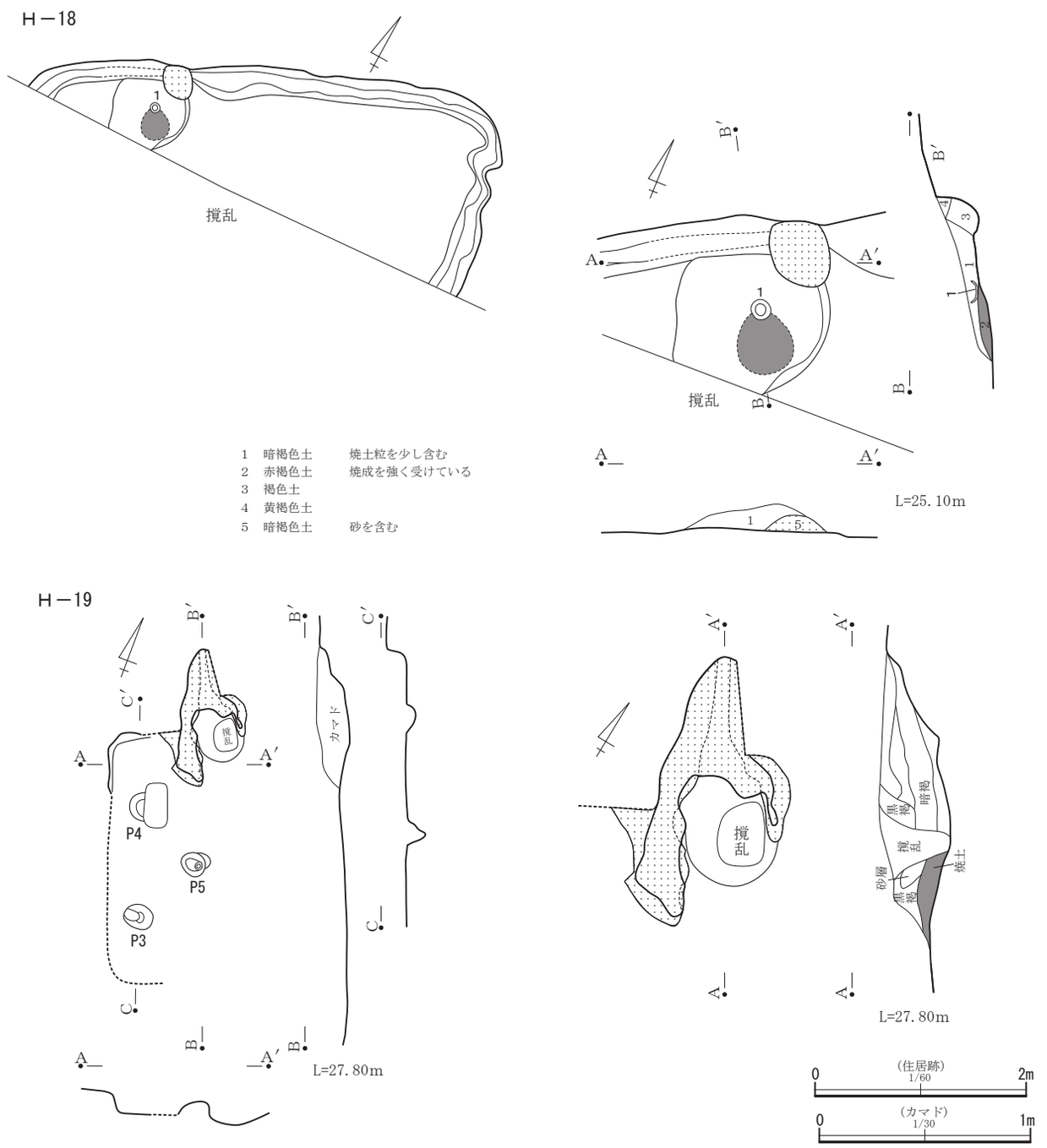
第 319 図　H-17

H-18(第 320・321 図・図版 60)

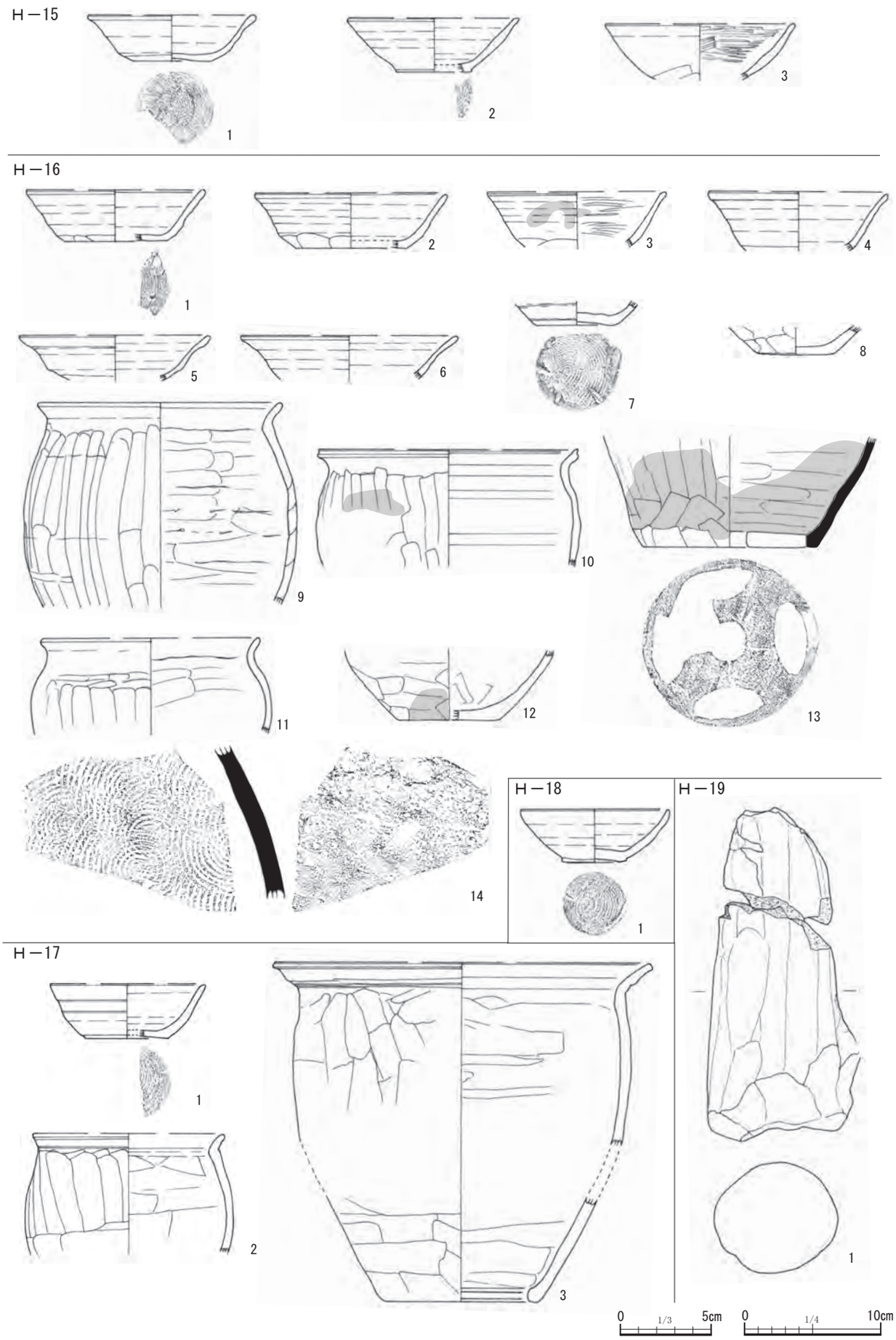
旧ヤ -26-1 住。一辺 4.2 mの方形ないし長方形の竪穴をもつ。北壁西寄りの部分にカマドの痕跡が残る。土師器坏 (1) がカマドの燃焼面に据え置かれていた。この土器から平安時代・10 世紀ころとしておく。

H-19(第 320・321 図)

旧ユ -15-1 住。竪穴の隅とカマドの一部が遺存する竪穴住居跡である。カマドは北壁西寄りに設置されたものとみられ、煙道部が特徴的に長い。柱穴は径 0.2 ～ 0.3 m・深さ 0.2 mの不明確なもの３本を検出した。カマドの内部から支脚 (1) が出土している。 時期認定の根拠が乏しいが平安時代の蓋然性が高い。



第 320 図　H-18・H-19



第 321 図　住居出土土器　H-15 ～ H-19

H-20(第 322 ～ 324・329 図・図版 36・59)

旧ラ -14-1 住。H-21 の竪穴を東に拡張し、貼床をして一段高い床をもつ建替え住居である。3.3 × 3.6 m の隅丸方形の掘り込みをもつ。壁は 0.3 mで垂直に近く立ち上がり、壁溝は拡張部分で検出できなかった。床面は固く踏み固められた貼床が広がっている。 P1 ～ P4 は主柱穴、P5 は出入口施設であろうか。壁溝中にも壁柱穴があるが H-21 との帰属関係は不詳である。カマドは北東隅にあり羽口 (26) が袖から出土した。旧カマドとしたもの (第 324 図) は H-21 から拡張した後のもので、北東のカマドに付け替える前のものである。竪穴の床面から覆土上層にかけて多くの土器が出土している。土師器坏 (5) は P1 から、土師器坏 (1 ～ 3)・甕 (11・12・15・20・21) 、外面に「キ」の刻書をもつ須恵器鉢 (17)、灰釉長頸瓶 (24) は床面ないしやや上から、土師器坏 (4・6・9・10)、須恵器甑 (22・23)・大甕 (25) は覆土中、7・8・14・18・19 は表土やカクラン部分から出土している。平安時代・9 世紀としておく。

H-21(第 325・329 図・図版 60)

旧ラ -14-2 住。H-20 の床面下から検出した拡張・建替え前の住居跡である。3.3 × 3.2 mの隅丸方形の掘り込みをもつ。壁は 0.2 mで垂直に近く立ち上がり、壁溝は全周する。柱穴・壁柱穴がどちらの住居に伴うものかは不明確である。カマドは北壁中央に煙道と焼土による痕跡が残る。体部に墨書をもつ土師器坏 (1、図版 62) が西側と東側の壁溝から出土している。平安時代・9 世紀としておく。

H-22(第 326・329 図・図版 37)

旧ラ -14-3 住。3.6 × 3.4 mの隅丸方形の掘り込みをもつ。壁は 0.2 mで垂直に近く立ち上がる。壁溝はない。柱穴は位置形状が不揃いな 5 本を検出。カマドは東壁中央にあり土師器甕 (2) が出土した。ほかに出土位置の不明な土師器坏 (1)・甕 (3 ～ 6)、炭化したクルミ核 1 点が出土している。平安時代・9 世紀としておく。

H-23(第 327 図・図版 37)

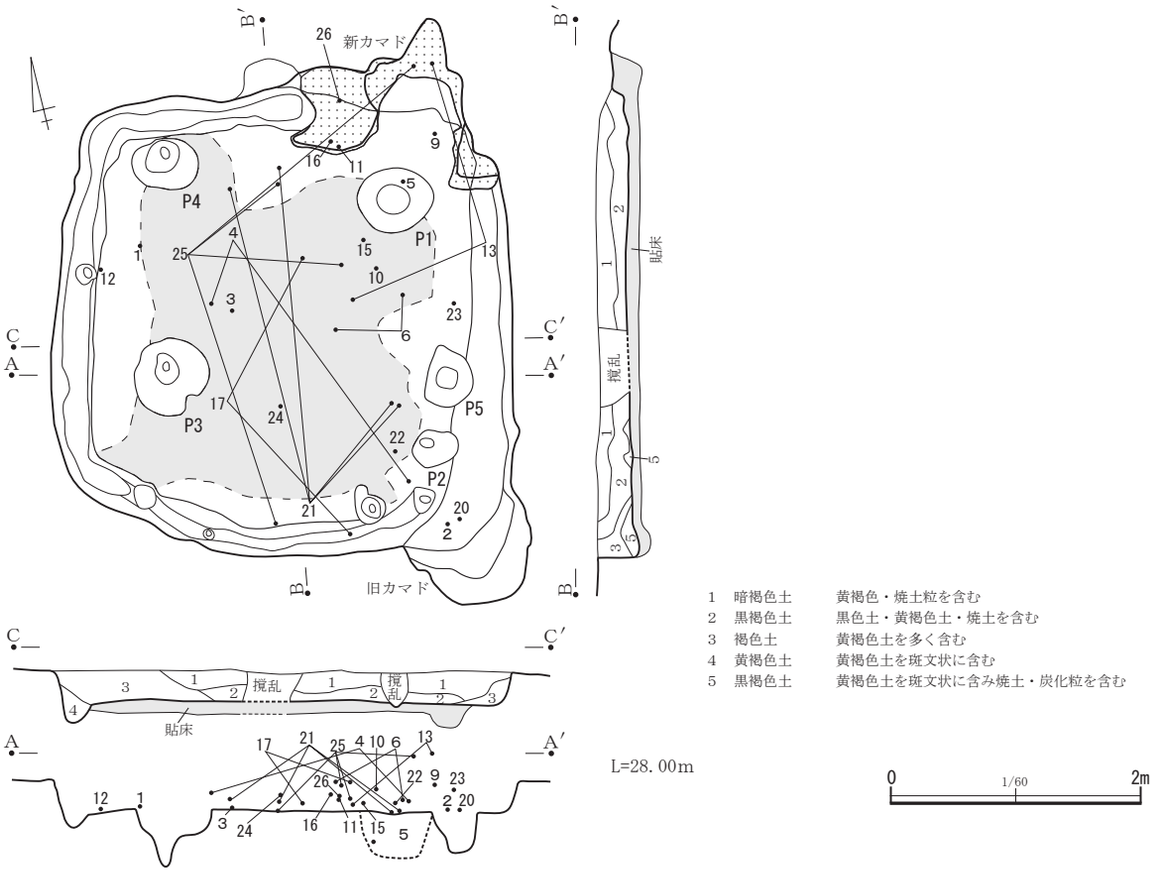
旧ラ -18-1 住。南東部で J － 31(縄文時代住居跡) を切っている。4.6 × 3.9 mの不整長方形の掘り込みをもつ。壁は 0.3 mで垂直に近く立ち上がる。壁溝はほぼ全周し壁柱穴 5 本をもつ。柱穴は径 0.4 ～ 0.5 m・深さ 0.3 ～ 0.4 mの 4 本と北東隅に深さ 0.7 mの 1 本があり。配置は不規則である。カマドは竪穴の南東隅を切り取るように付設されている。覆土中には焼土と炭化物が堆積し、土師器片がわずかに出土している。掲載可能な土器はないが平安時代の住居跡の蓋然性が高い。

H-24(第 328 ～ 330 図・図版 37・60)

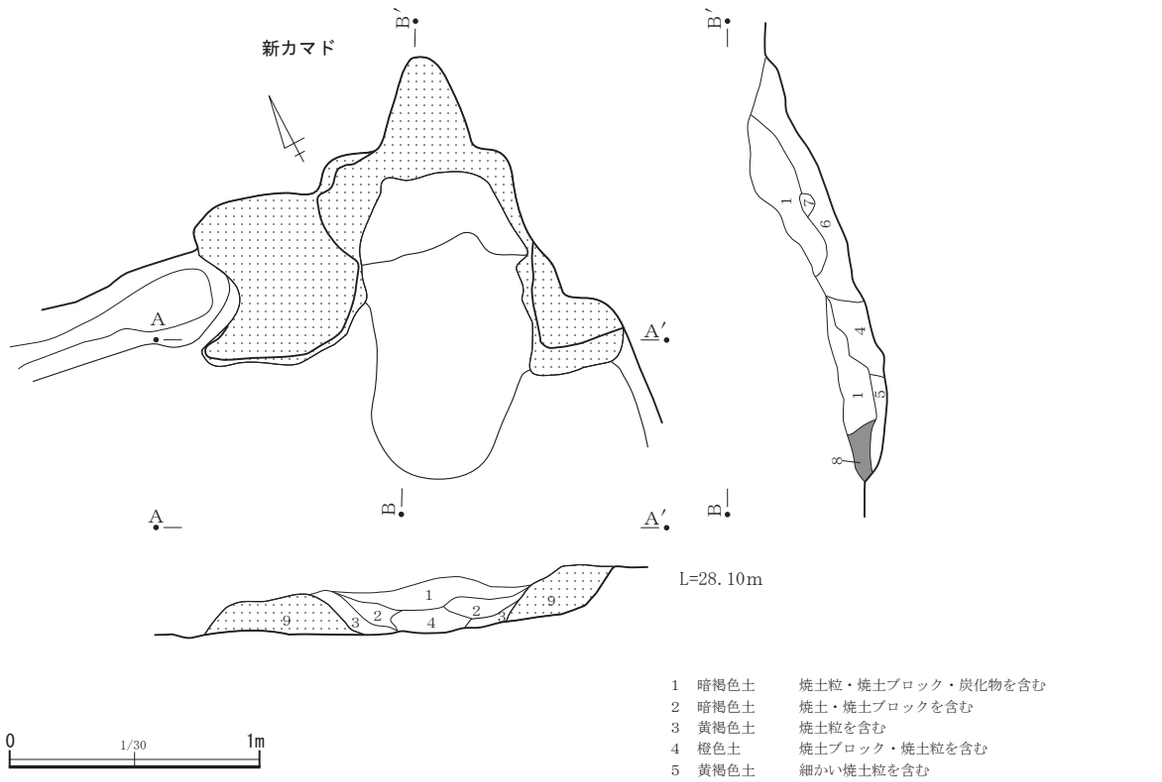
旧ラ -19-1 住。3.3 × 3.1 mの方形の掘り込みをもつ。壁は 0.1 ～ 0.5 mで垂直に近く立ち上がる。中央部と南西角は撹乱を受ける。壁溝は壁柱穴 3 本を含み全周する。柱穴は径 0.3 ～ 0.4 m・深さ 0.2 ～ 0.3 mの 4 本を検出した。カマドは北壁中央にあり、焼土主体の層のなかに支脚が直立していた。竪穴からはカマド付近から西壁を中心に土器が出土している。土師器坏 (1 ～ 8・18・19)・鉢 (11)・甕 (9・12 ～ 14)、須恵器片口鉢 (10)・甕 (15 ～ 17) がある。18 は墨書をもち、13 は内外面が黒色処理されている。平安時代・9 世紀としておく。

H-25(第 330・331 図・図版 37・60)

旧リ -15-1 住。D － 234・235(縄文時代小竪穴) と重複する。3.7 × 3.2 mの長方形の掘り込みをもつ。壁は 0.3 mで垂直に近く立ち上がり、壁溝は全周する。柱穴はカマドのある西壁側に 2 本と出入口施設とみられる P3 を検出した。カマドは西壁中央にあり土師器坏 (6)・甕 (8) が出土した。竪穴からは床面ないしその直上から土師器坏 (1 ～ 4) ・甕 (7・9)、灰釉長頸瓶 (10) が床面より出土している。平安時代・9 世紀としておく。

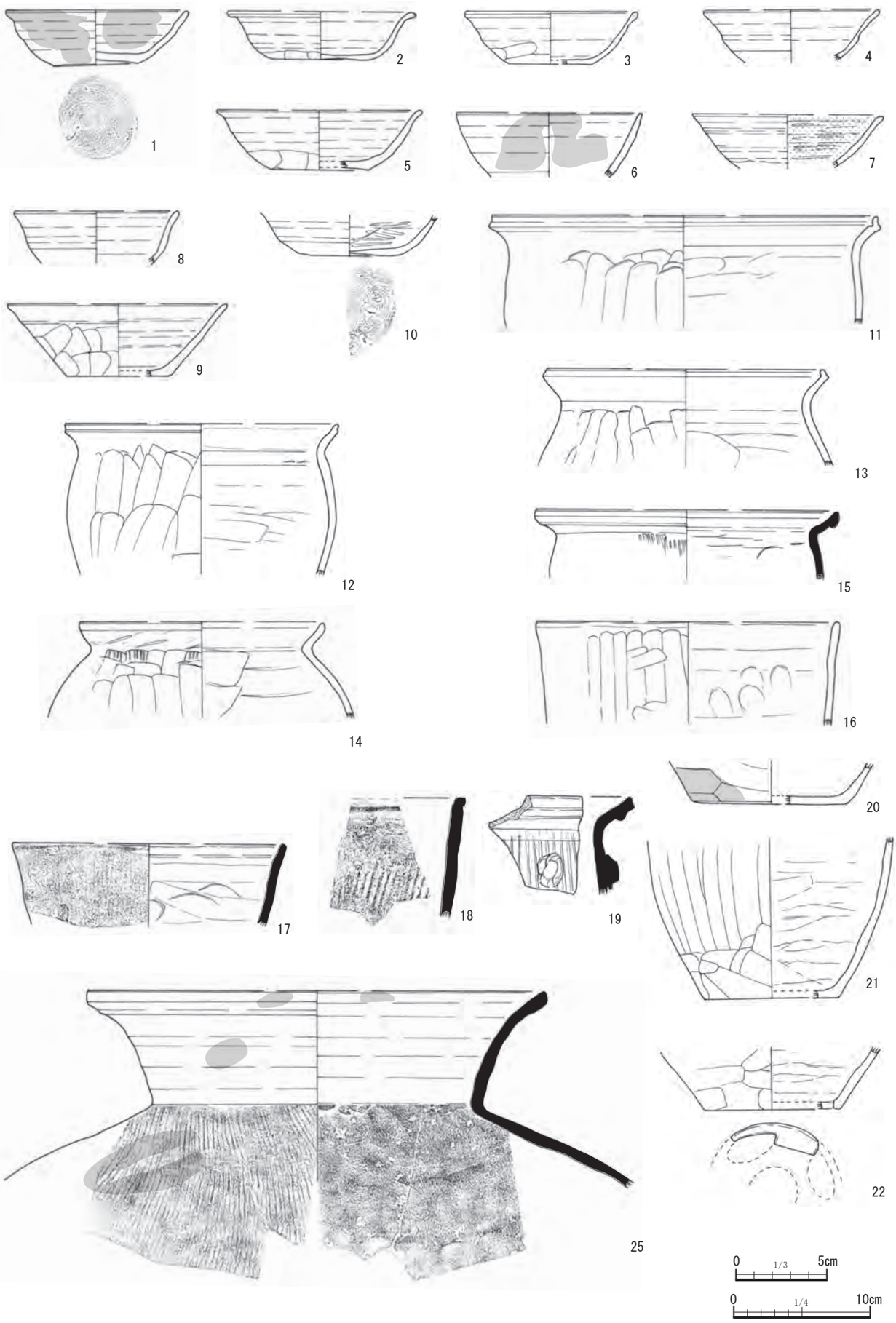


1　暗褐色土　　黄褐色・焼土粒を含む
2　黒褐色土　　黒色土・黄褐色土・焼土を含む
3　褐色土　　黄褐色土を多く含む
4　黄褐色土　　黄褐色土を斑文状に含む
5　黒褐色土　　黄褐色土を斑文状に含み焼土・炭化粒を含む

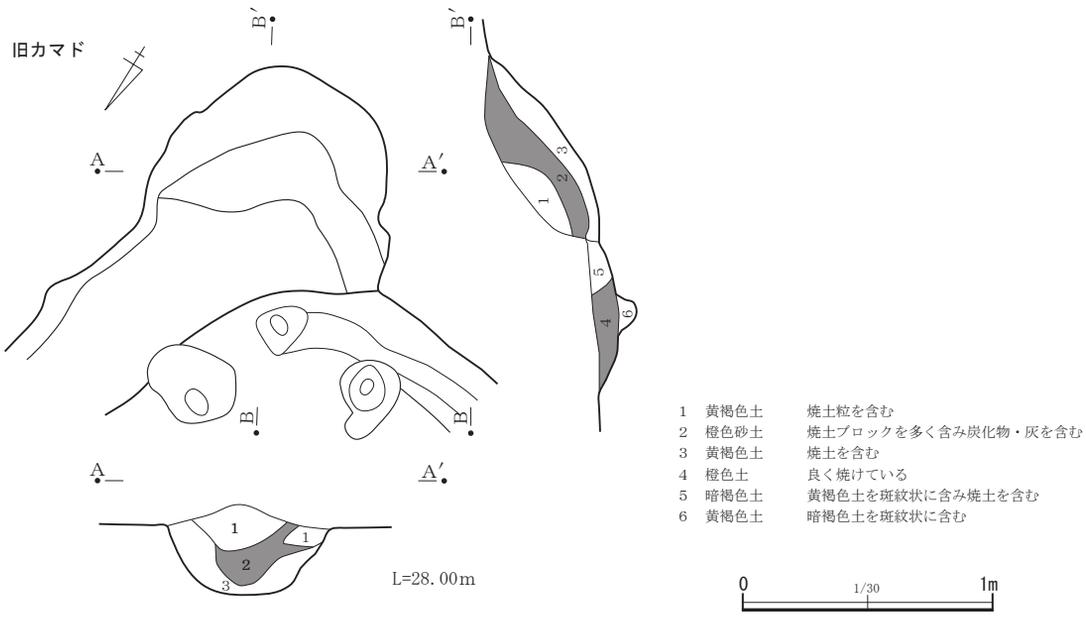


1　暗褐色土　　焼土粒・焼土ブロック・炭化物を含む
2　暗褐色土　　焼土・焼土ブロックを含む
3　黄褐色土　　焼土粒を含む
4　橙色土　　焼土ブロック・焼土粒を含む
5　黄褐色土　　細かい焼土粒を含む
6　黄褐色土　　焼土ブロックを少し含む
7　黒褐色土　　焼土ブロックを少し含む
8　橙色土　　焼土粒・焼土ブロックを多く含む
9　黄褐色土　　焼土粒・焼土ブロック・ロームブロック・炭化物を含む

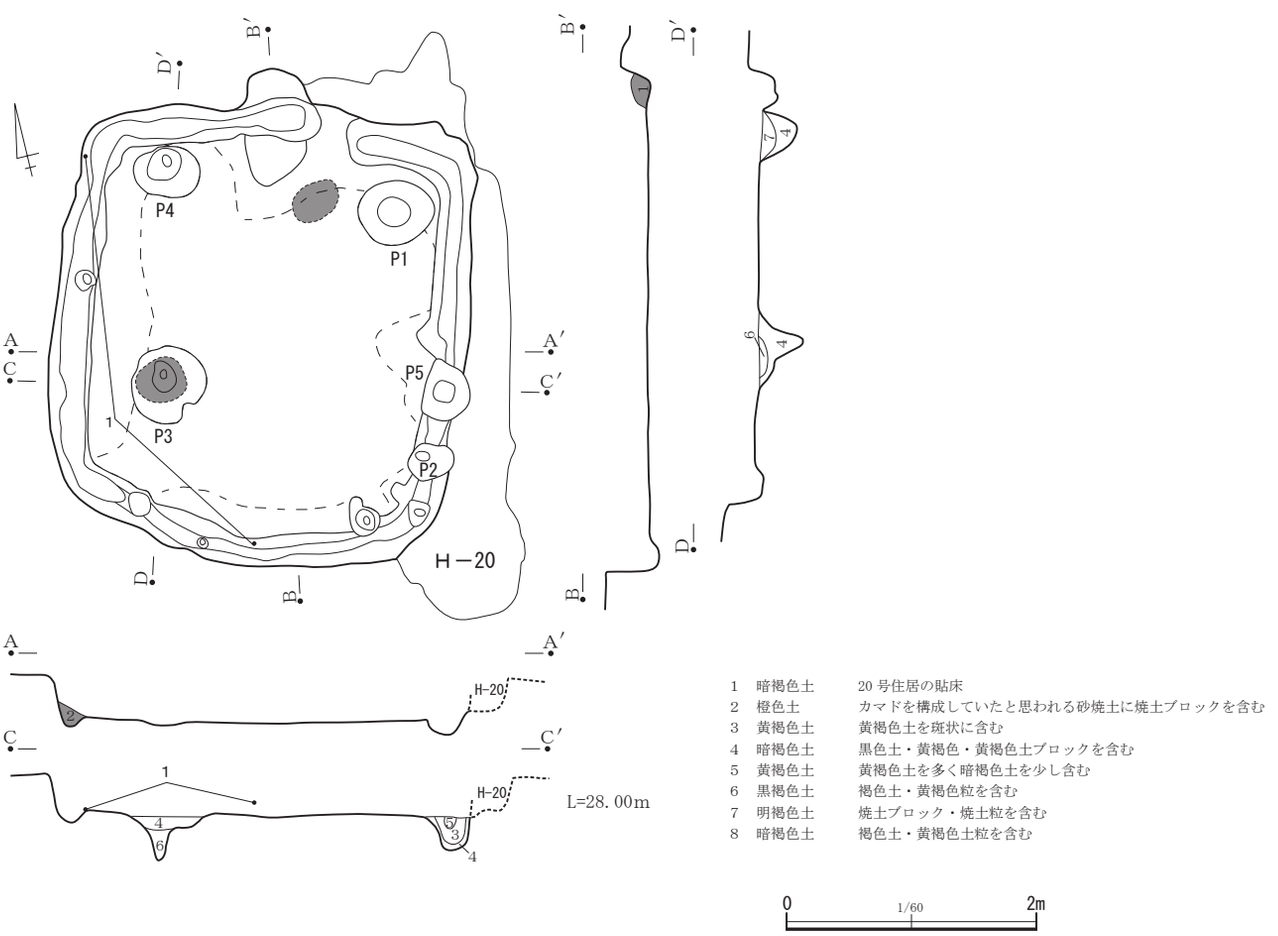
第 322 図　H-20(1)



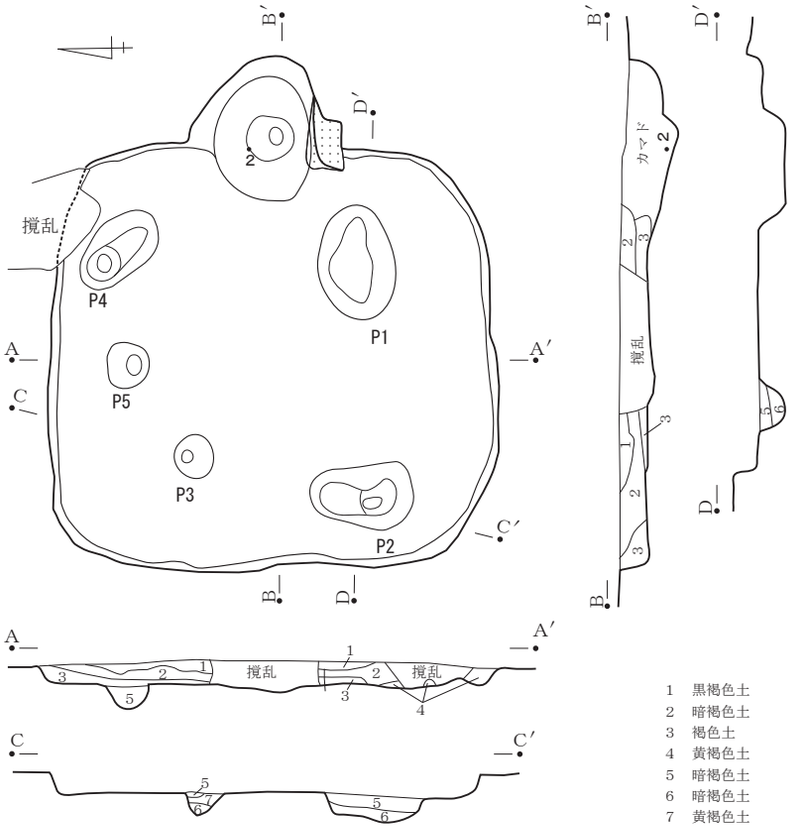
第 323 図　住居出土土器　H-20(2)



第 324 図　H-20(3)

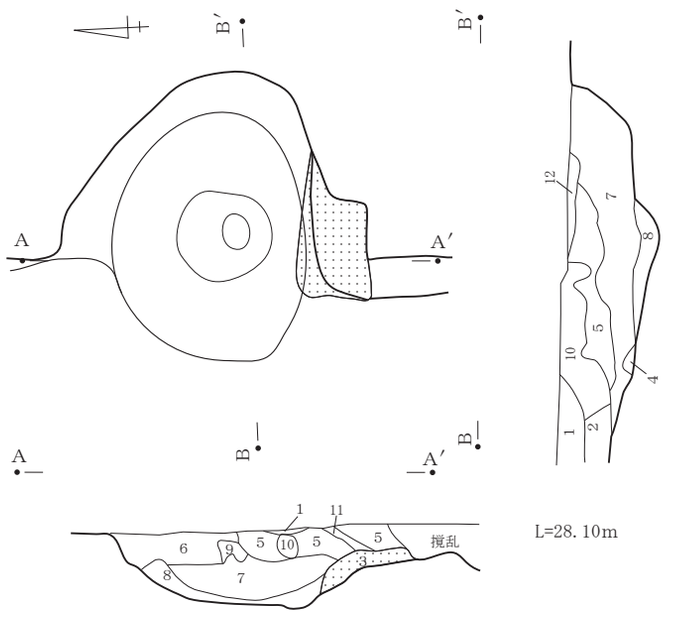


第 325 図　H-21



1 黒褐色土 褐色土粒を少し含む
2 暗褐色土 ローム・褐色土を多く含む
3 褐色土 ロームを斑紋状に多く含む
4 黄褐色土 ロームに褐色土を少し含む
5 暗褐色土 黄色土を含み炭化物をわずかに含む
6 暗褐色土 炭化物をわずかに含む
7 黄褐色土 黄色土を多く含む

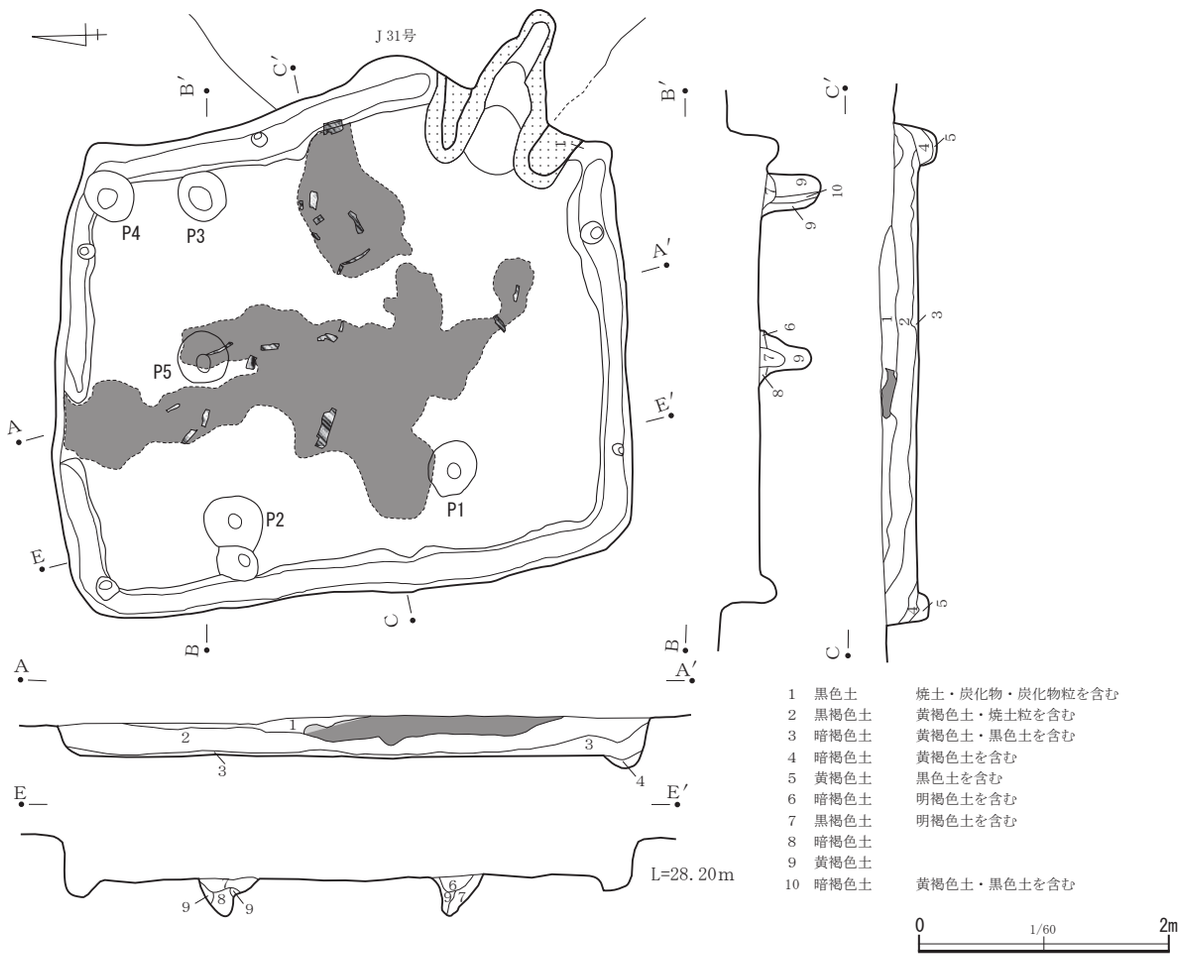
0 1/60 2m

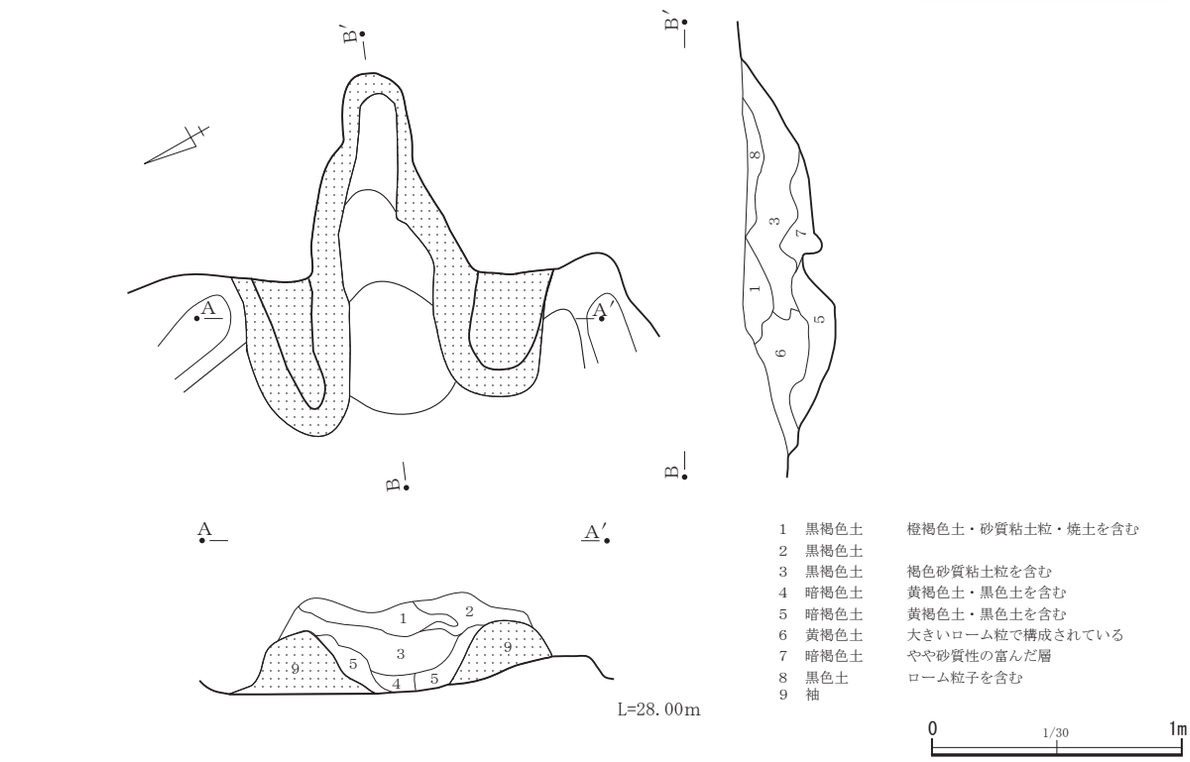


1 黒褐色土 砂を含み焼土わずかに含む
2 暗褐色土 黒色土・砂を含む
3 褐色土 ロームを多く黒色土・砂・焼土粒を少し含む
4 褐色土 焼土をわずかに含む
5 暗褐色土 黄色土・砂を多く含み焼土を含む
6 暗褐色土 ローム・焼土を少し含む
7 暗褐色土 ローム・焼土を少し含む
8 褐色土 黄褐色土を含む
9 褐色土 砂を多く含む
10 黒褐色土 黒色土を多く砂を少し含む
11 黒褐色土 焼土粒・黒色土をわずかに含む
12 暗褐色土 砂・焼土を少し含む

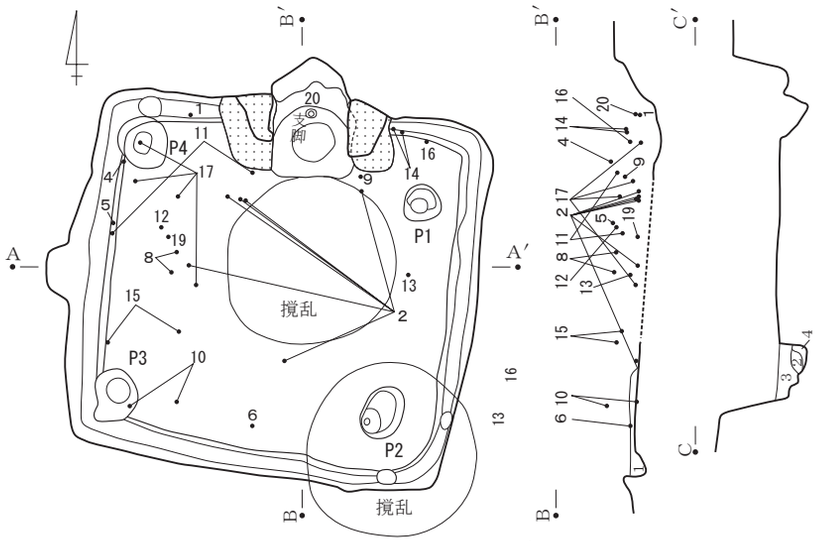
0 1/30 1m

第326図 H-22


J 31号
P1
P2
P3
P4
P5
L=28.20m
1 黒色土 焼土・炭化物・炭化物粒を含む
2 黒褐色土 黄褐色土・焼土粒を含む
3 暗褐色土 黄褐色土・黒色土を含む
4 暗褐色土 黄褐色土を含む
5 黄褐色土 黒色土を含む
6 暗褐色土 明褐色土を含む
7 黒褐色土 明褐色土を含む
8 暗褐色土
9 黄褐色土
10 暗褐色土 黄褐色土・黒色土を含む
0 1/60 2m

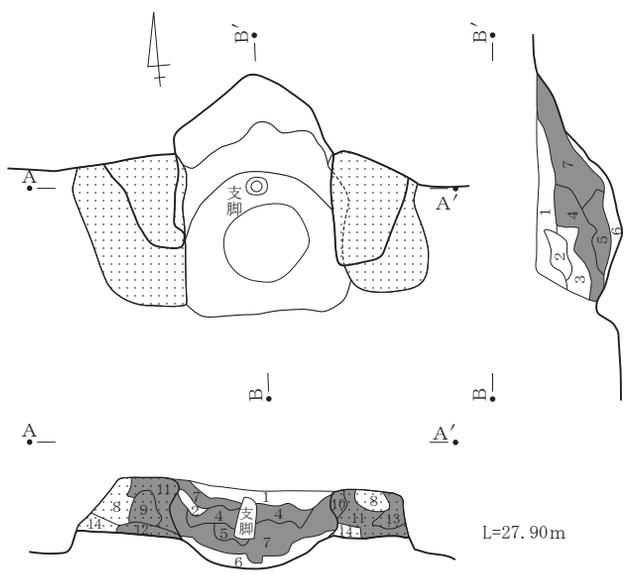

L=28.00m
1 黒褐色土 橙褐色土・砂質粘土粒・焼土を含む
2 黒褐色土
3 黒褐色土 褐色砂質粘土粒を含む
4 暗褐色土 黄褐色土・黒色土を含む
5 暗褐色土 黄褐色土・黒色土を含む
6 黄褐色土 大きいローム粒で構成されている
7 暗褐色土 やや砂質性の富んだ層
8 黒色土 ローム粒子を含む
9 袖
0 1/30 1m

第 327 図　H-23



1　暗褐色土　　ローム粒を多く焼土・炭化粒を少し含む
2　暗褐色土　　ロームを少し含む
3　暗褐色土　　細かいローム粒を含む
4　黄褐色土　　ローム層

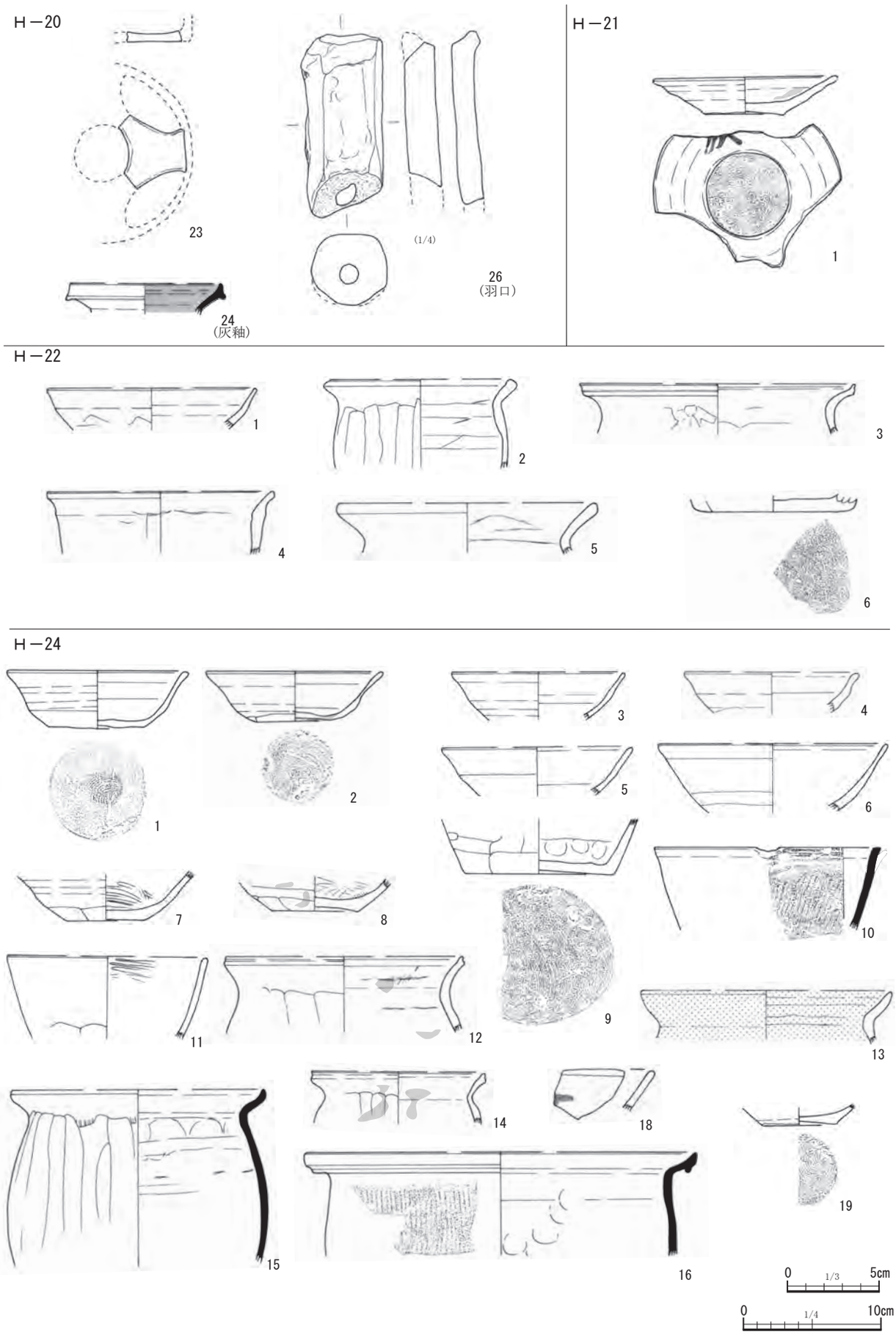
0　1/60　2m



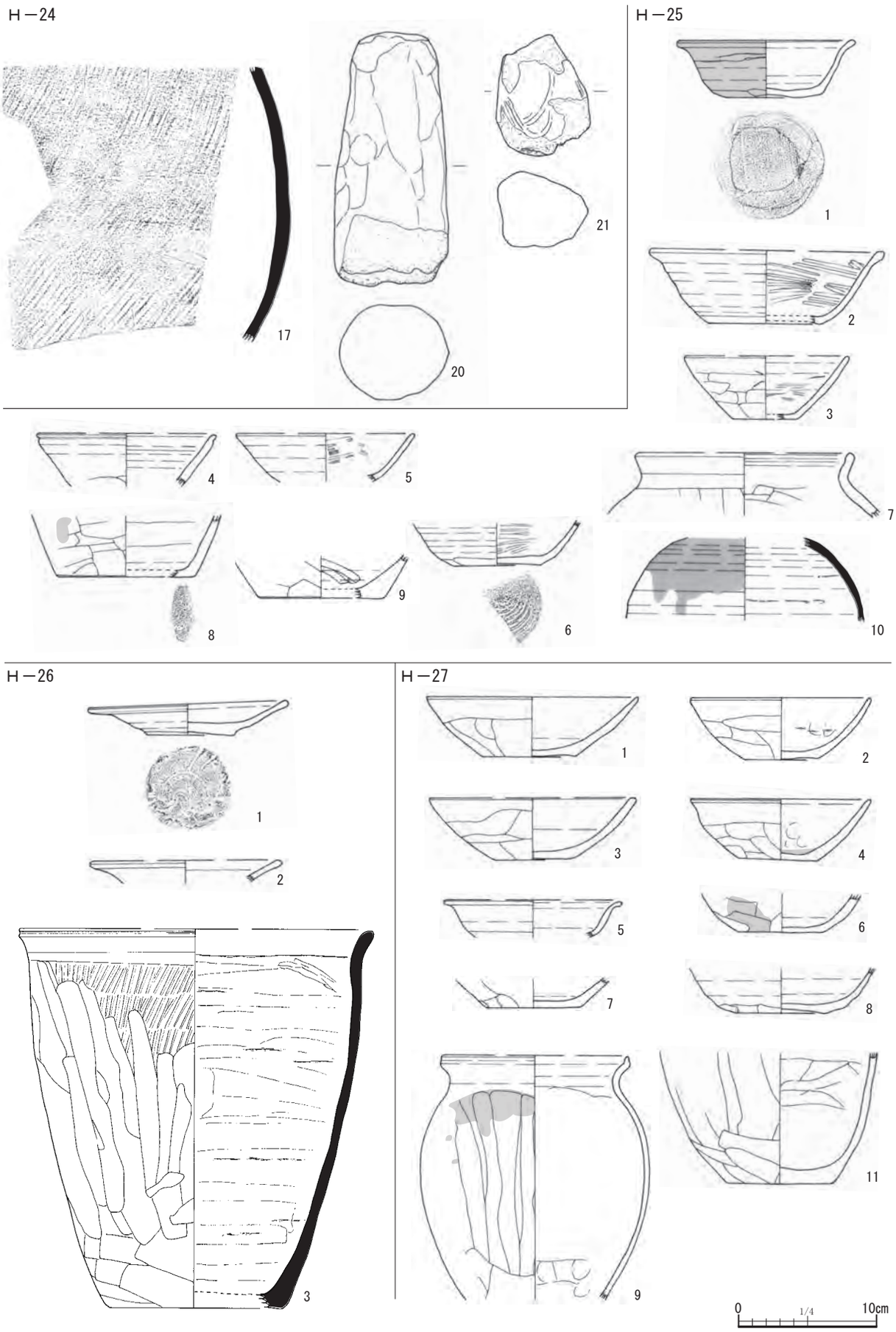
1　暗褐色土　　ローム粒・焼土粒を含む
2　黒褐色土　　炭化物・焼土粒を含む
3　暗褐色土　　黄褐色土を大量に焼土粒・焼土ブロックを多く含む
4　黄橙色土　　焼土粒・ブロックを多量に黄褐色土粒を少し含む
5　橙色土　　焼土
6　黄褐色土　　焼土はほとんど含まない
7　暗褐色土　　暗褐色土・暗黄褐色土と多量の焼土を含む
8　暗褐色土　　砂粒が多くローム粒子がわずかに含む
9　灰褐色土　　砂質粘土の層
10　灰褐色土　　焼成を受けた砂質層と思われる
11　褐色土　　砂質層で細かい焼土粒を多量に含む
12　灰褐色土　　焼土粒・砂粒を少し含む
13　暗褐色土　　細かい焼土粒を多量に含む
14　褐色土　　細かいローム粒・焼土粒を含む

0　1/30　1m

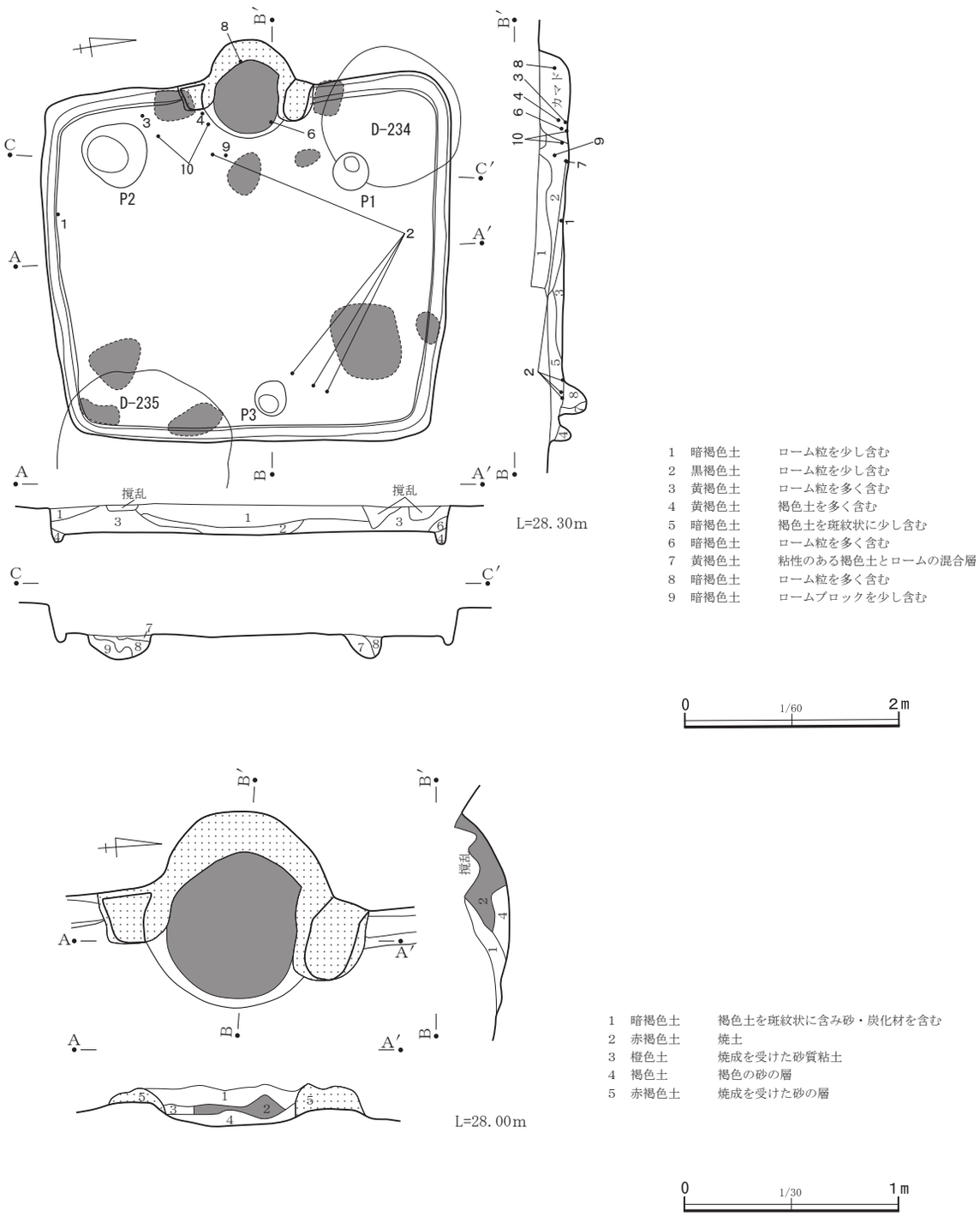
第328図　H-24



第 329 図　住居出土土器　H-20 ～ H-24



第 330 図　住居出土土器　H-24 ～ H-27



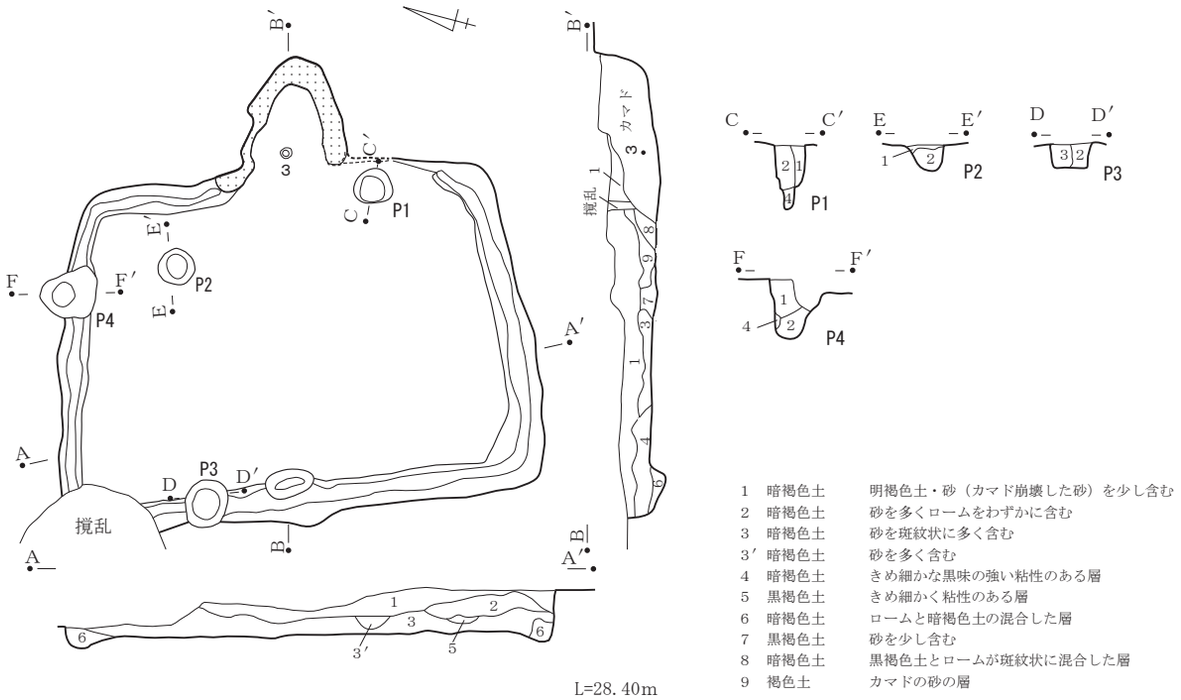
第 331 図　H-25

H-26(第 330・332 図・図版 60)

旧ル -14-1 住。縄文時代の J － 45(住居跡)・D － 291(土坑) の覆土を切る 3.8 × 3.7 mの不整長方形の掘り込みをもつ。壁は 0.3 mでやや開いて立ち上がり、壁溝はほぼ全周する。柱穴は不規則な位置関係の 4 本を検出した。西壁中央の窪みは出入口施設であろうか。カマドは東壁中央にあり、火床中央から須恵器甕 (3) が出土した。そのほか土師器皿 (1 ・ 2) が出土している。平安時代・ 9 世紀としておく。

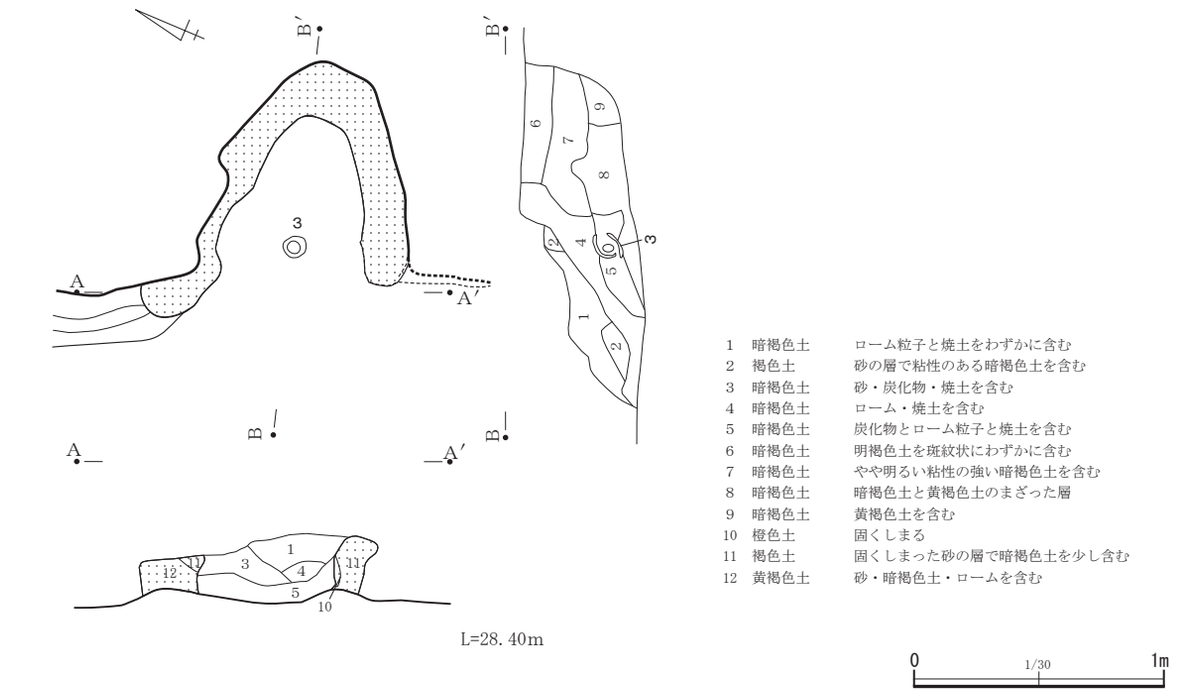
H-27(第 330・333・337 図・図版 37・60)

旧レ -19-1 住。3.8 × 3.7 mの隅丸方形の掘り込みをもつ。壁は 0.5 mでやや開いて立ち上がり、壁溝がほぼ全周する。壁柱穴 15 本は間隔をあけて並んでいる。柱穴は径 0.3 ～ 0.5 m・深さ 0.3 mの P1 ～



1　暗褐色土　明褐色土・砂（カマド崩壊した砂）を少し含む
2　暗褐色土　砂を多くロームをわずかに含む
3　暗褐色土　砂を斑紋状に多く含む
3′暗褐色土　砂を多く含む
4　暗褐色土　きめ細かな黒味の強い粘性のある層
5　黒褐色土　きめ細かく粘性のある層
6　暗褐色土　ロームと暗褐色土の混合した層
7　黒褐色土　砂を少し含む
8　暗褐色土　黒褐色土とロームが斑紋状に混合した層
9　褐色土　カマドの砂の層

0　1/60　2m

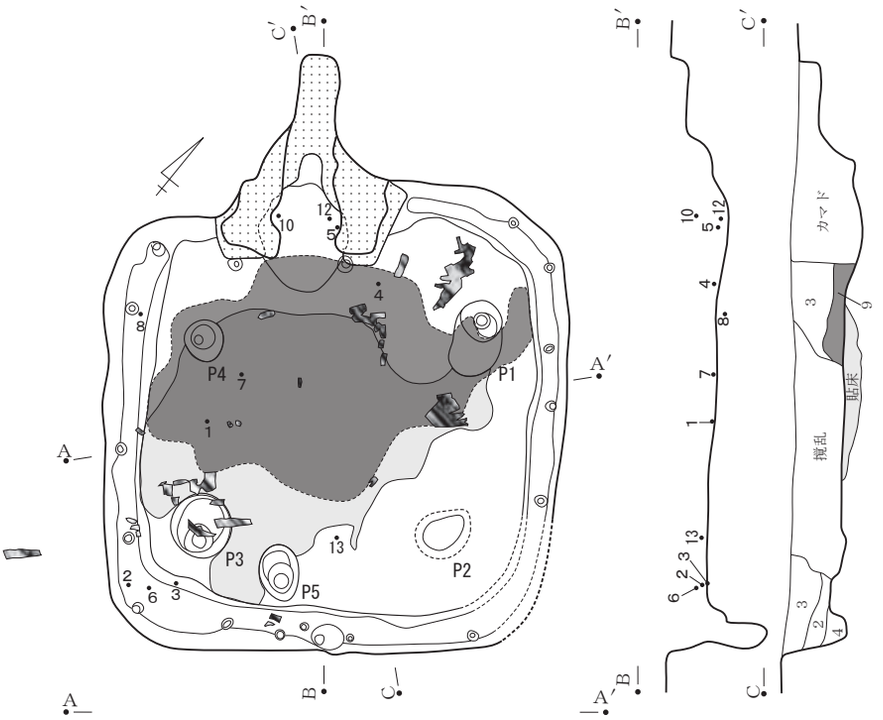


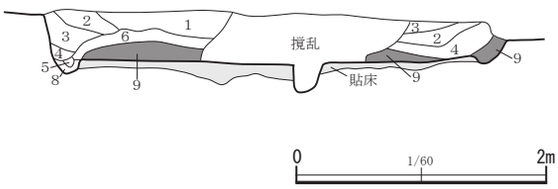
1　暗褐色土　ローム粒子と焼土をわずかに含む
2　褐色土　砂の層で粘性のある暗褐色土を含む
3　暗褐色土　砂・炭化物・焼土を含む
4　暗褐色土　ローム・焼土を含む
5　暗褐色土　炭化物とローム粒子と焼土を含む
6　暗褐色土　明褐色土を斑紋状にわずかに含む
7　暗褐色土　やや明るい粘性の強い暗褐色土を含む
8　暗褐色土　暗褐色土と黄褐色土のまざった層
9　暗褐色土　黄褐色土を含む
10　橙色土　固くしまる
11　褐色土　固くしまった砂の層で暗褐色土を少し含む
12　黄褐色土　砂・暗褐色土・ロームを含む

0　1/30　1m

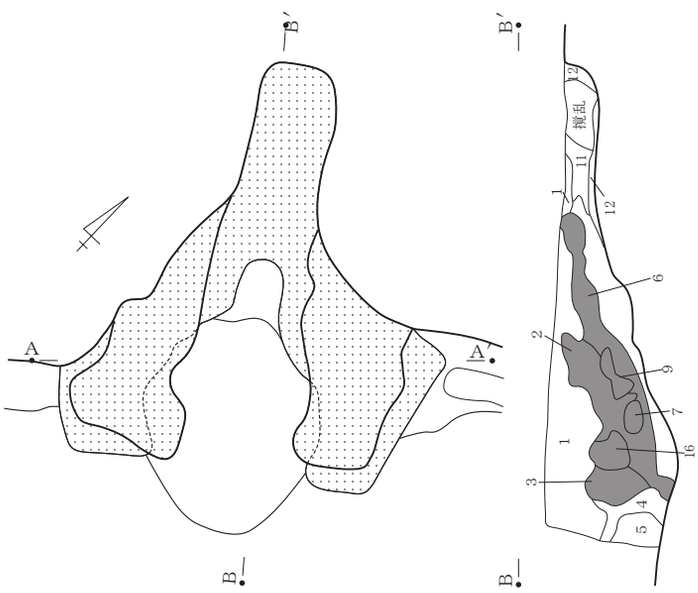
第 332 図　H-26

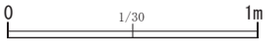
P4 が主柱穴であろう。南東壁中央の P5 と壁柱穴の一部は出入口施設であろう。床面は東隅側を除いて硬化した貼床面を形成しており、灰や焼土が堆積し、炭化材が出土している。廃絶後に上屋の焼却が行われた可能性が高い。カマドは北壁中央にあり煙道がとても長い。カマド内からは土師器坏 (5)・甕 (9・12) が出土している。覆土の遺物は床面ないしやや上から出土しており、土師器坏 (1 ～ 4 ・ 6 ～ 8)・甕 (10・11)、支脚 (13)、鉄製紡錘具 (第 346 図 14)、炭化したタケ類がある。平安時代・9 世紀としておく。





1	褐色土	きめ細かな褐色土
2	褐色土	焼土粒を多く含む
3	暗褐色土	焼土粒を多く炭化物を少し含む
4	暗褐色土	ロームを少し含む
5	黒褐色土	黒褐色土と暗褐色土の混合土層炭化物を多く含む
6	褐色土	ローム・焼土粒・炭化粒多く含む
7	黄褐色土	ロームに暗褐色土・焼土を少し含む
8	暗褐色土	ローム微粒を斑紋状に含む
9	橙色土	焼土



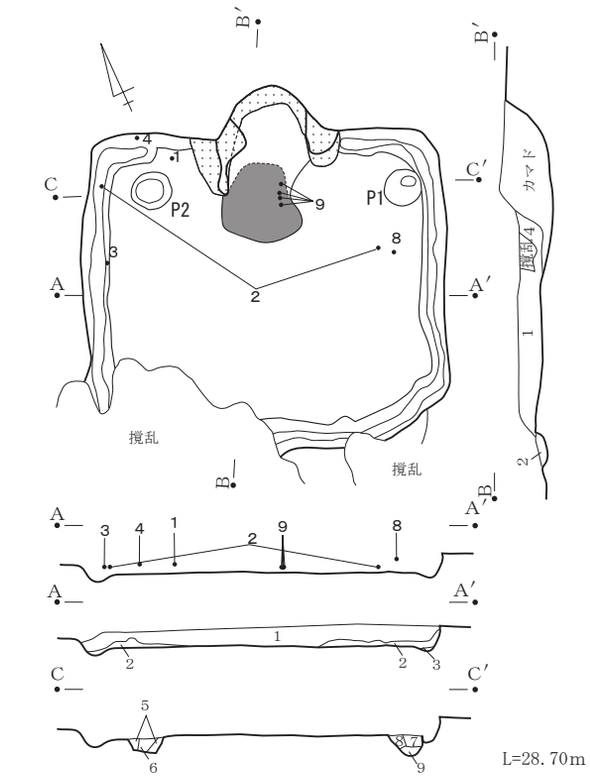


1	黒色土	焼土小ブロックを含む
2	にぶい橙色土	灰・焼土・炭化物粒を含む
3	橙色土	加熱された砂質粘土木炭粒を含む
4	灰褐色土	灰・炭・焼土・黒色土の混合層
5	黒色土	灰・炭を主体とした層
6	褐色土	焼土に灰・炭が混じる
7	橙色土	砂質粘土のブロックを含む
8	灰褐色土	灰・焼土粒・黄褐色土の混合層
9	橙褐色土	カマド崩壊土
10	橙褐色土	砂質・焼土・炭を多く含む
11	灰褐色土	黄色砂質粘土と焼土ブロック・炭化物粒を含む
12	褐色土	黄褐色土を含む
13	褐色土	焼土を含む
14	黒色土	焼土・黄色砂質粘土を含む
15	暗褐色土	しまり強い
16	暗褐色土	砂質粘土に土器片・炭化物を含む

第 333 図　H-27

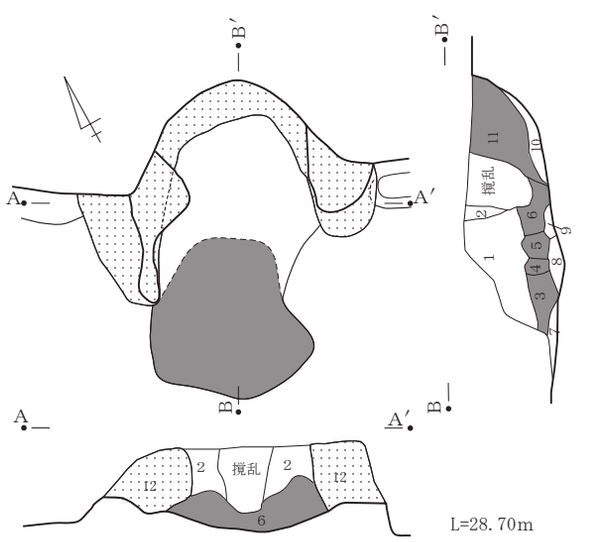
H-28(第 334・337 図・図版 38・60・61)

旧ワ -19-1 住。3.0 × 2.7 mの方形ないし隅丸方形の掘り込みをもつ。壁は 0.2 mでやや開いて立ち上がり、壁溝は 3/4 周する。柱穴はカマドのある北壁側に径 0.3・深さ 0.2 ～ 0.3 mの P1・P 2がある。カマドは北壁中央にあり、須恵器甕 (9) が出土している。そのほか竪穴床面付近を中心に土師器坏 (1 ～ 3・5 ・ 6)・皿 (4)・甕 (7 ・ 8 ・10) が出土している。平安時代・ 9 世紀としておく。



1 暗褐色土 褐色土を斑紋状に含みローム粒・焼土粒・炭化物を含む
2 暗褐色土 黄褐色土が多く焼土粒・炭化粒をわずかに含む
3 黄褐色土 暗褐色土を少し含む
4 灰褐色土 暗褐色土を多く焼土粒を少し含む
5 褐色土 暗褐色土・炭化粒を少し含む
6 黄褐色土 暗褐色土を含む
7 暗褐色土 褐色土を斑紋状に含みローム粒・焼土粒を含む
8 黄褐色土 暗褐色土を斑紋状に含みローム粒・ロームブロックを含む
9 褐色土 黒色土粒を少し含む

0 1/60 2m



1 暗褐色土 粘土・焼土粒を少し含む
2 暗褐色土 暗褐色土の層
3 暗褐色土 焼けたロームを多く含む
4 暗褐色土 焼けたロームブロックを少し含む
5 暗褐色土 焼土粒を少し含む
6 焼土層
7 褐色土 ロームを多く含む
8 暗褐色土 焼土粒を少し含む
9 黄褐色土 ローム層
10 褐色土
11 暗褐色土 赤化した砂・焼土粒を多く含む
12 袖

0 1/30 1m

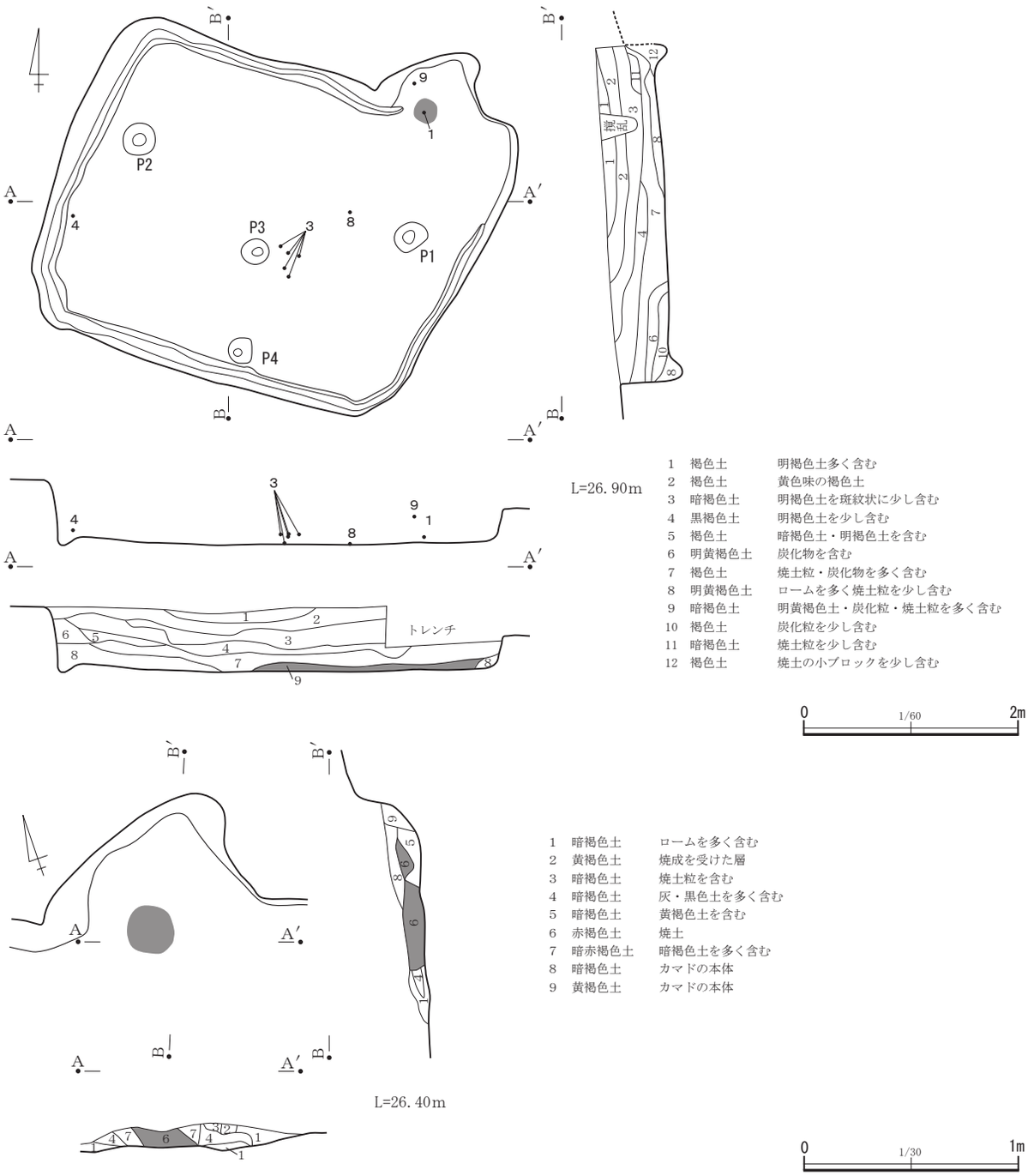
第 334 図　H-28

H-29(第 335・337 図・図版 38・61)

旧Ⅰエ-11-1 住。4.0 × 3.1 mの不整方形の掘り込みをもつ。壁は 0.5 mで垂直に近く立ち上がり、壁溝はほぼ全周する。柱穴は 4 本検出しており、南壁際の P4 は出入口施設であろう。カマドは北壁の北東隅付近に煙道と焼土の痕跡が残る。土師器坏 (1) は火床面上から出土している。そのほか竪穴床面付近を中心に土師器坏 (2 ～ 4) ・高台付杯 (5) ・甕 (6 ～ 8) が出土している。平安時代・9 世紀としておく。

H-30(第 336・337 図・図版 38・61)

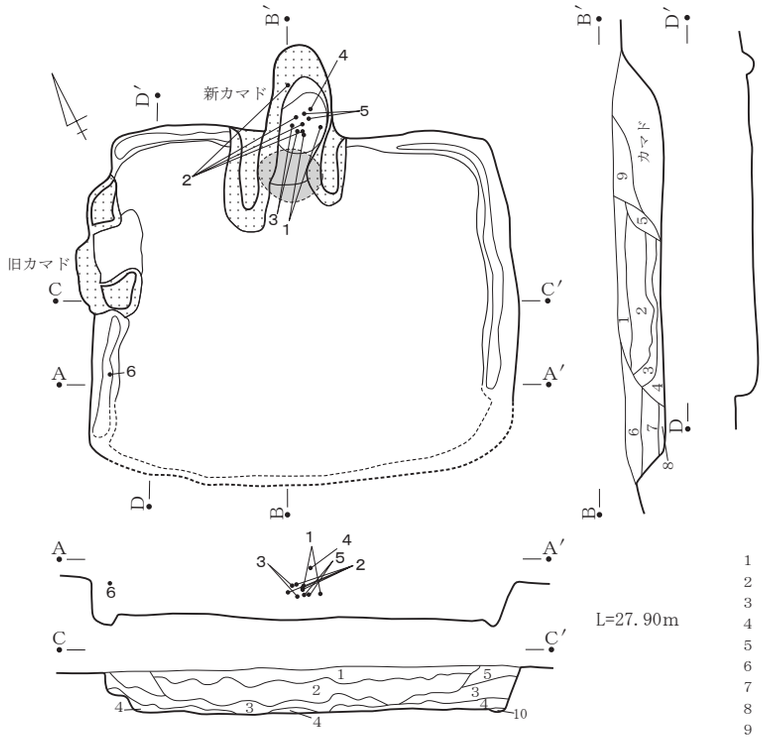
旧Ⅰエ-12-1 住。3.4 × 2.5 mの方形の掘り込みをもつ。壁は 0.4 mでやや開いて立ち上がり、壁溝は半周する。柱穴はない。カマドは新旧があり、旧カマドは西壁中央やや北側に、新カマドは北壁中央にあり、土師器坏 (1 ～ 3) ・甕 (4) ・甑 (5) が廃絶後のカマド上層からまとまって出土した。土師器甕 (6)



1 褐色土 明褐色土多く含む
2 褐色土 黄色味の褐色土
3 暗褐色土 明褐色土を斑紋状に少し含む
4 黒褐色土 明褐色土を少し含む
5 褐色土 暗褐色土・明褐色土を含む
6 明黄褐色土 炭化物を含む
7 褐色土 焼土粒・炭化物を多く含む
8 明黄褐色土 ロームを多く焼土粒を少し含む
9 暗褐色土 明黄褐色土・炭化粒・焼土粒を多く含む
10 褐色土 炭化粒を少し含む
11 暗褐色土 焼土粒を少し含む
12 褐色土 焼土の小ブロックを少し含む

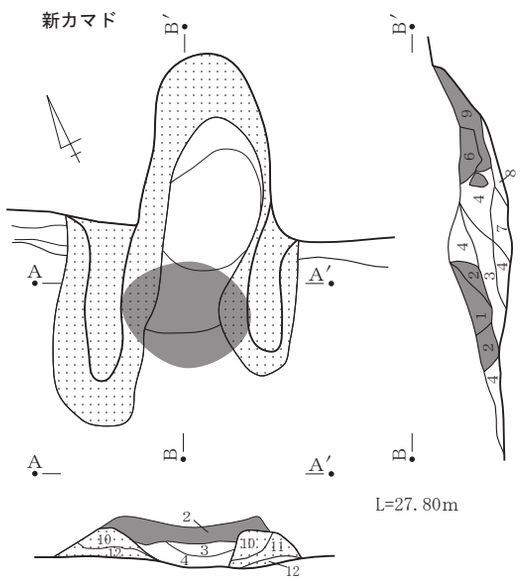
1 暗褐色土 ロームを多く含む
2 黄褐色土 焼成を受けた層
3 暗褐色土 焼土粒を含む
4 暗褐色土 灰・黒色土を多く含む
5 暗褐色土 黄褐色土を含む
6 赤褐色土 焼土
7 暗赤褐色土 暗褐色土を多く含む
8 暗褐色土 カマドの本体
9 黄褐色土 カマドの本体

第 335 図　H-29

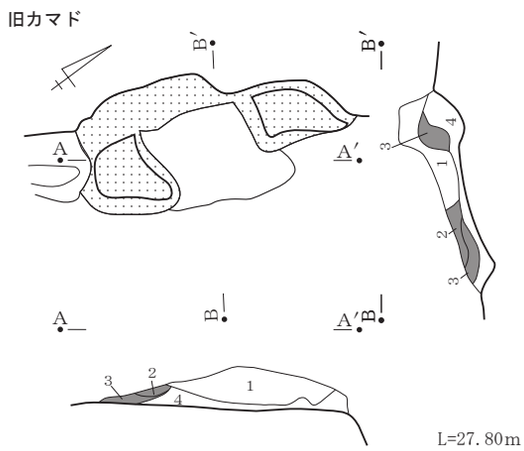


1	黒褐色土	黒色土・ローム粒を含む
2	黒色土	ローム粒・ロームブロックを少量含む
3	暗褐色土	ローム粒を多く黒色土・焼土粒を少し含む
4	黄褐色土	暗褐色土・ロームブロックを含む
5	暗褐色土	褐色土を斑紋状に含みローム粒を多く含む
6	暗褐色土	
7	暗褐色土	ローム粒を少量含む
8	褐色土	暗褐色土粒・ローム粒を含む
9	暗褐色土	ローム粒・焼土粒を含む
10	黄褐色土	ロームブロックを含む

0 1/60 2m



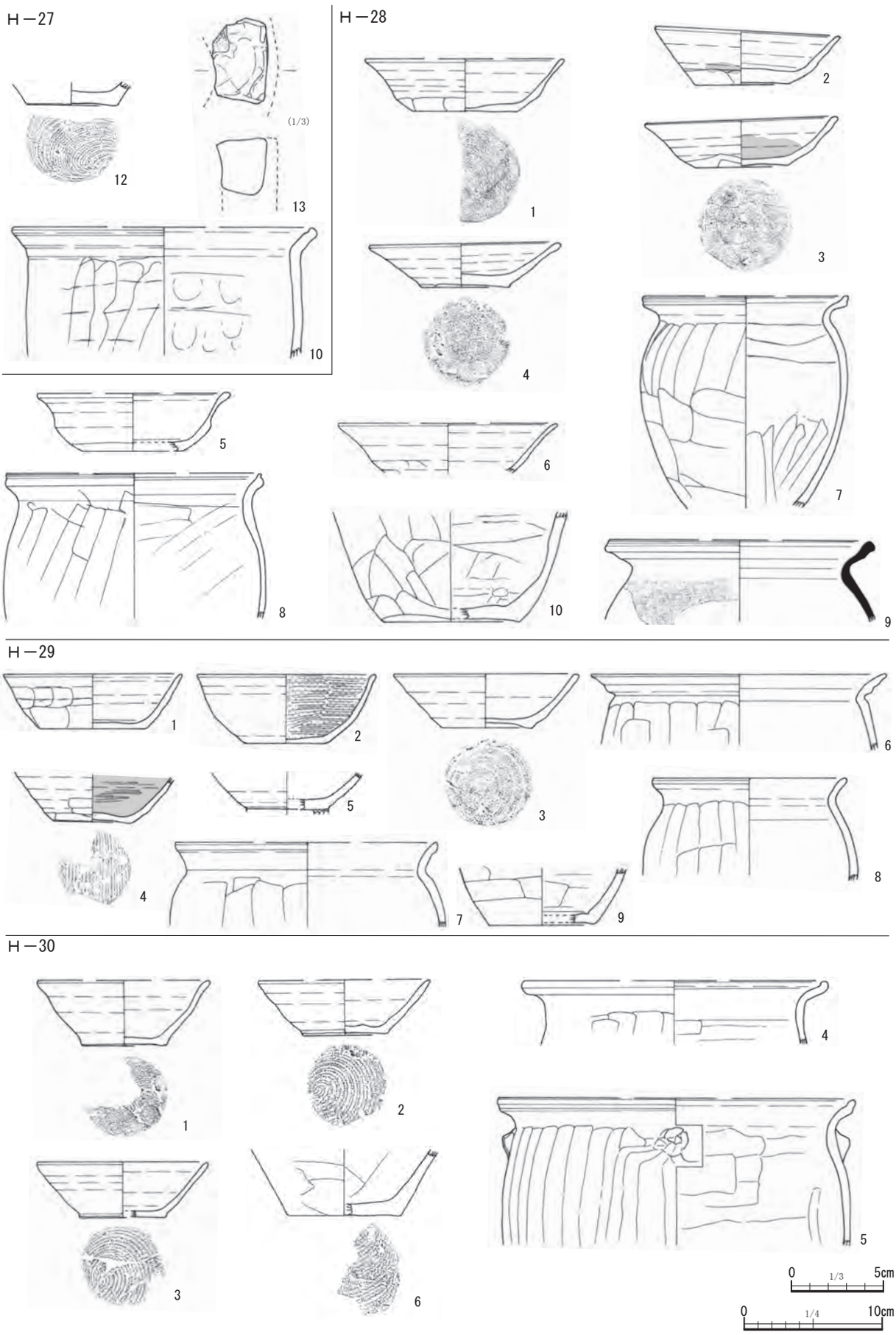
1	橙褐色土	褐色土粒・ロームブロックを含み焼土粒を多くを含む
2	赤褐色土	焼土粒を多く含む
3	褐色土	焼土粒・ローム粒を含む
4	暗褐色土	ローム粒を少し含む
5	黒褐色土	ローム粒・焼土粒を含む
6	赤褐色土	焼土粒・焼土ブロックを含む
7	暗褐色土	焼土粒・焼土ブロックを少し含む
8	明褐色土	焼土粒・暗褐色土粒・粘土粒を含む
9	暗赤褐色土	暗褐色土粒・焼土粒・ロームブロック・粘土粒を含む
10	褐色土	暗褐色土・焼土粒を多く含む
11	暗褐色土	褐色土を斑紋状に含み焼土粒少し含む
12	褐色土	ロームブロックを含む



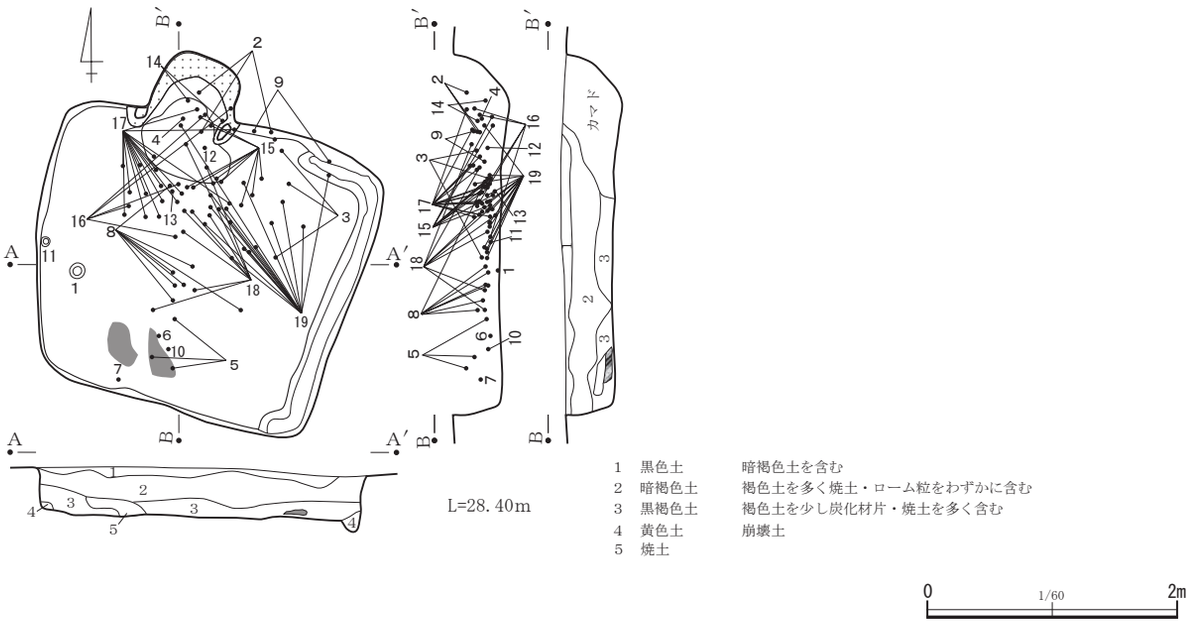
1	暗褐色土	ローム粒を斑紋状に含み黒褐色土・焼土粒をわずかに含む
2	橙褐色土	焼土ブロックを少し焼土粒を多く含む
3	橙褐色土	焼土
4	黄褐色土	ロームブロックを含む

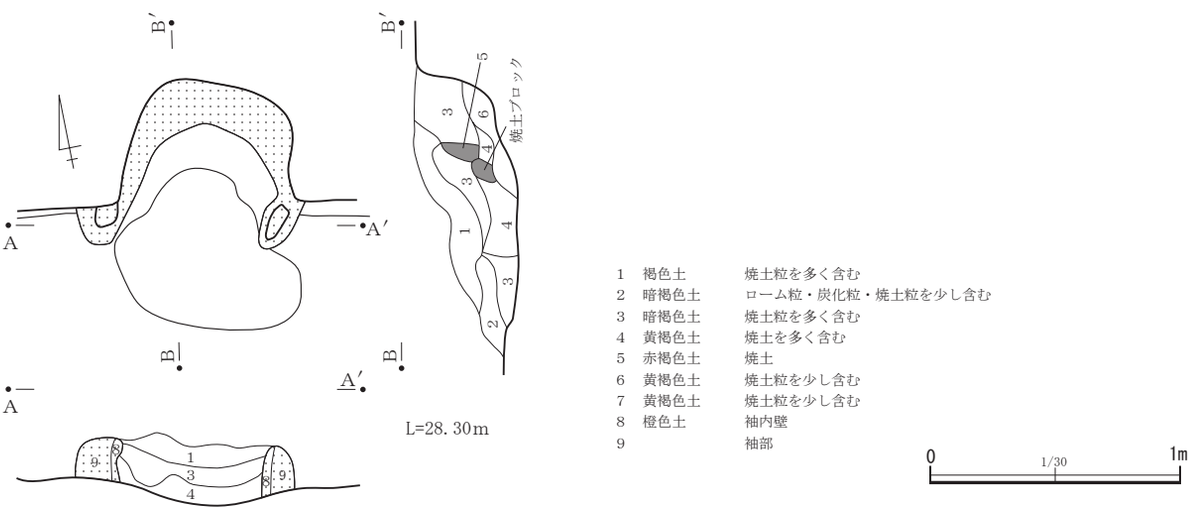
0 1/30 1m

第336図　H-30



第 337 図　住居出土土器　H-27 ～ H-30





第 338 図　H-31(1)

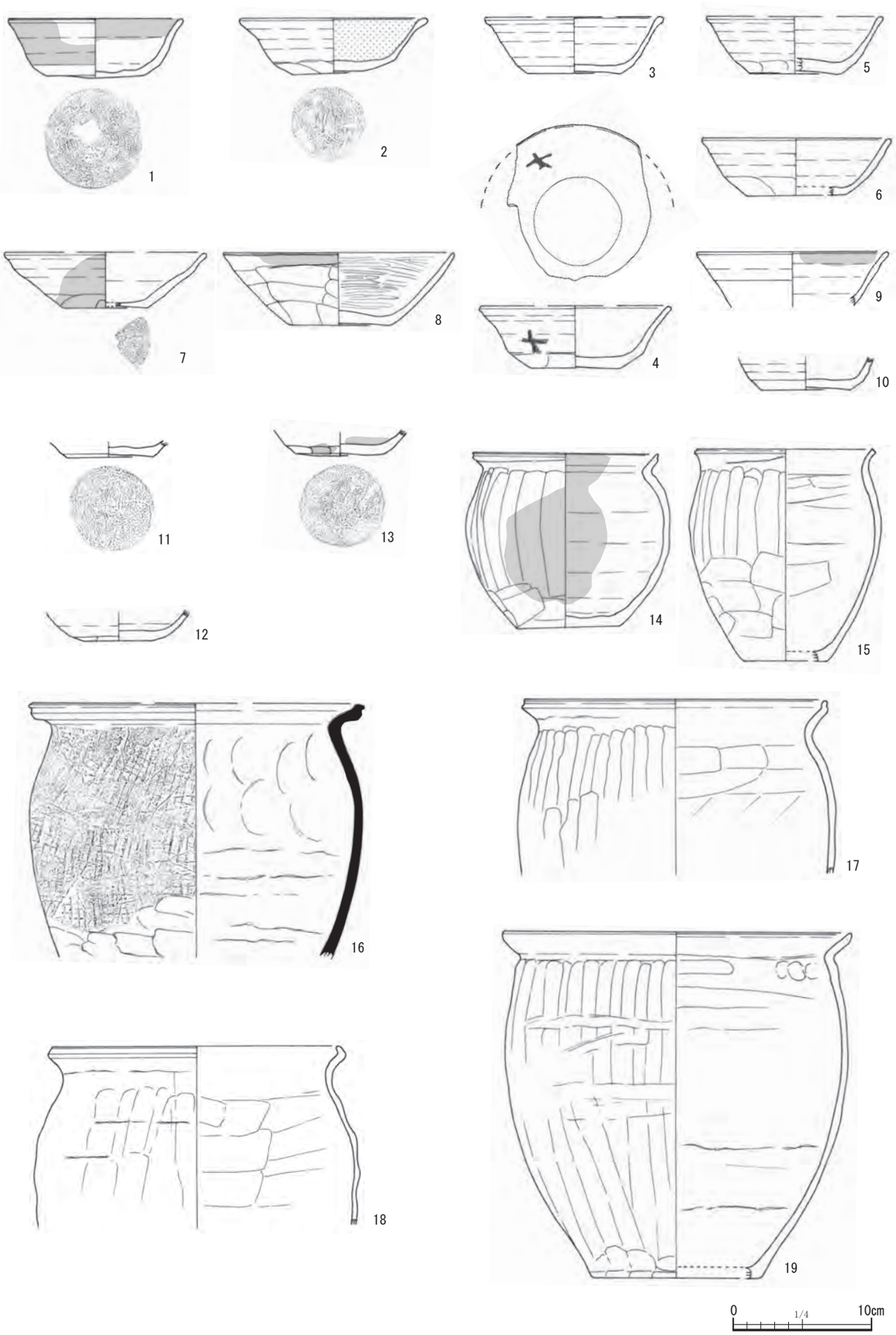
は西壁際の上層から出土している。平安時代・９世紀としておく。

H-31(第 338・339 図・図版 38・61)

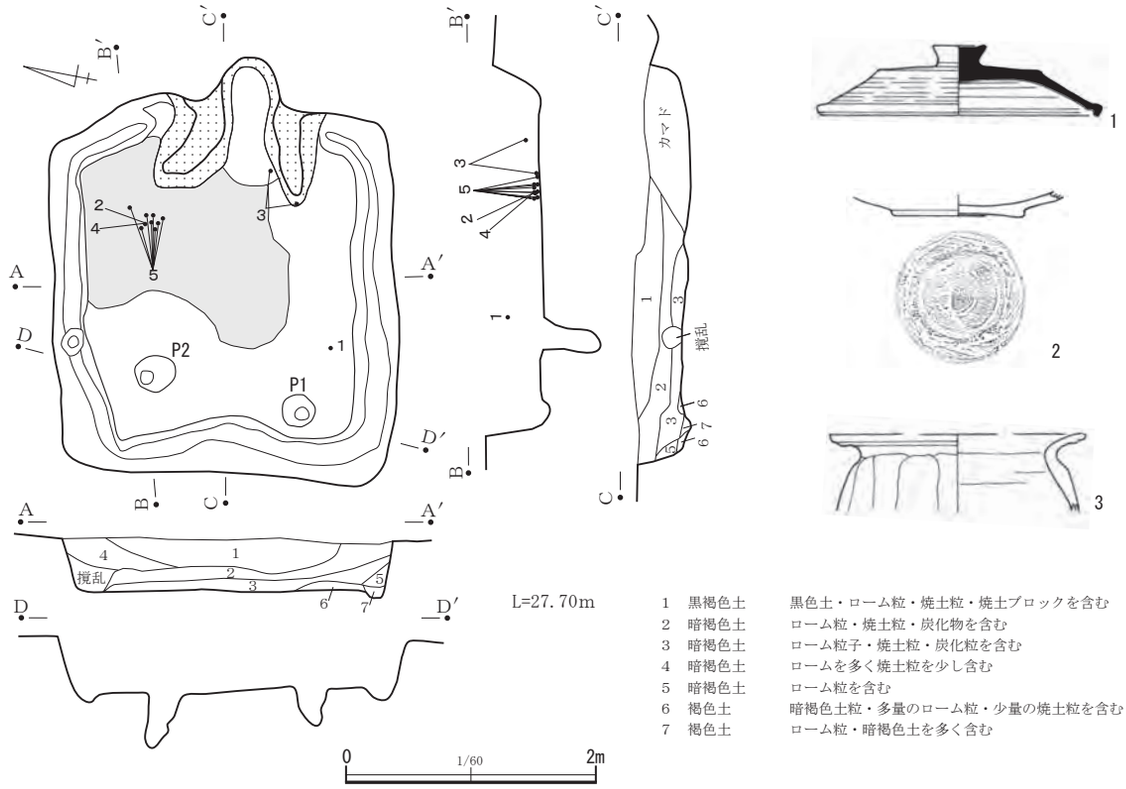
旧Ｉエ-17-1 住。Ｊ -79 と重複。2.7 × 2.4 ｍの不整方形の掘り込みをもつ。H-12 と並んで遺構群中もっとも小さい。壁は 0.4 ｍで垂直に近く立ち上がり、壁溝は東側のみ検出した。柱穴はない。カマドは北壁西寄りにある。カマドから竪穴の覆土にかけて多量の土器が出土している。土師器坏 (1 ～ 13)・甕 (14・15・17 ～ 19)、須恵器甕 (16) が出土している。 4 は体部に「十」の墨書をもつ (図版 62)。土器以外では鉄鏃 (第 346 図 15) と木質部を残した刀子が出土している (第 346 図 16)。平安時代・９世紀としておく。

H-32(第 340 図・図版 38・61)

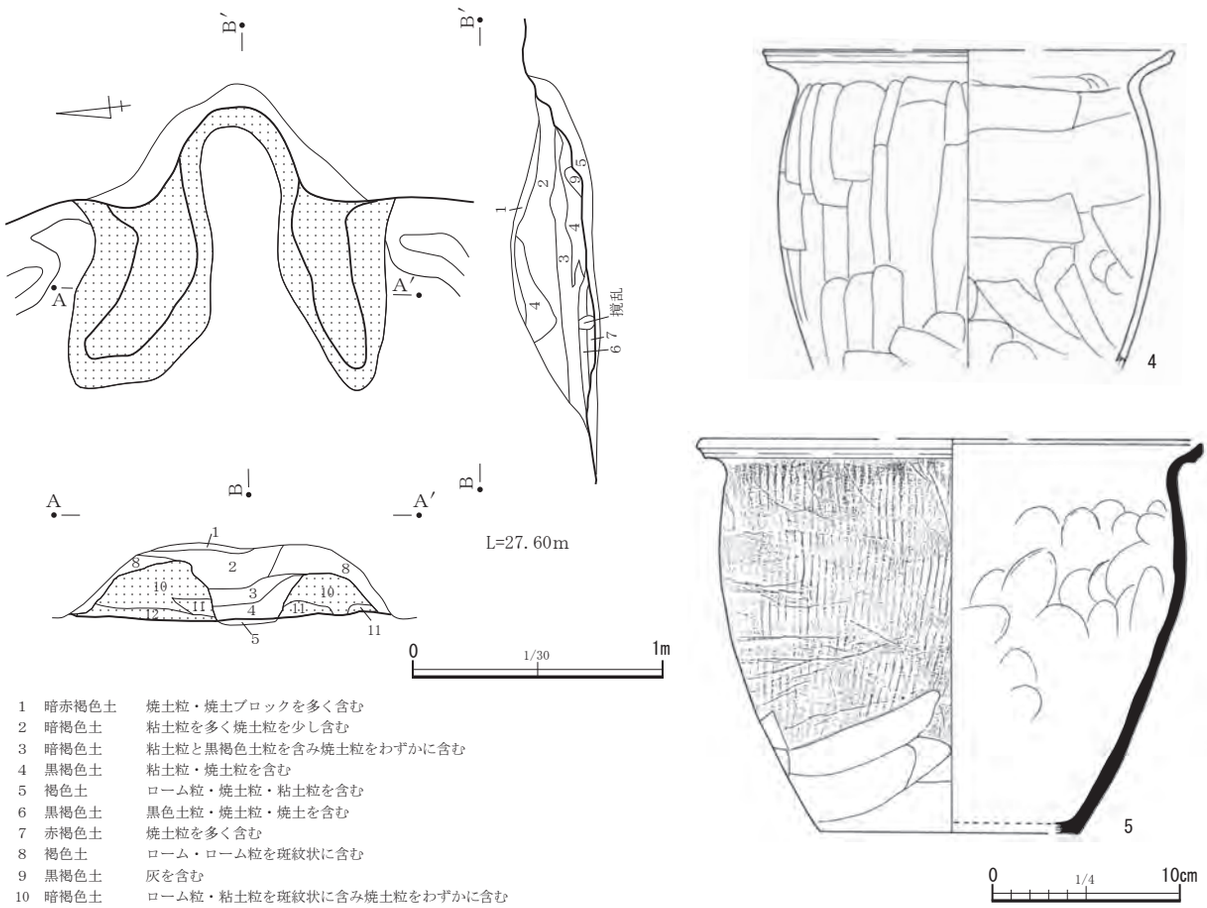
旧Ｉキ -18-1 住。3.0 × 2.7 ｍの隅丸方形の掘り込みをもつ。壁は 0.4 ｍでやや開いて立ち上がり、壁溝はやや歪みつつ全周する。柱穴は西壁側に２本検出した。床の硬化は北東側の 1/4 強の範囲に認められる。カマドは東壁中央にあり、土師器小形甕 (3) が付近から出土した。須恵器坏蓋 (1) は覆土上層から、土師器皿 (2)・甕 (4)、須恵器甕 (5) の３点は床面からまとまって出土した。 1 は砥石に転用されている。平安時代・９世紀としておく。



第 339 図　H-31(2)

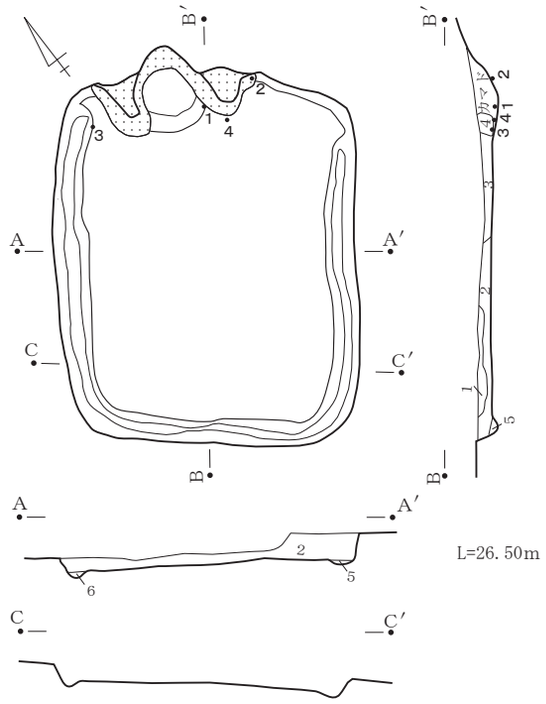


1　黒褐色土　黒色土・ローム粒・焼土粒・焼土ブロックを含む
2　暗褐色土　ローム粒・焼土粒・炭化物を含む
3　暗褐色土　ローム粒子・焼土粒・炭化粒を含む
4　暗褐色土　ロームを多く焼土粒を少し含む
5　暗褐色土　ローム粒を含む
6　褐色土　暗褐色土粒・多量のローム粒・少量の焼土粒を含む
7　褐色土　ローム粒・暗褐色土を多く含む



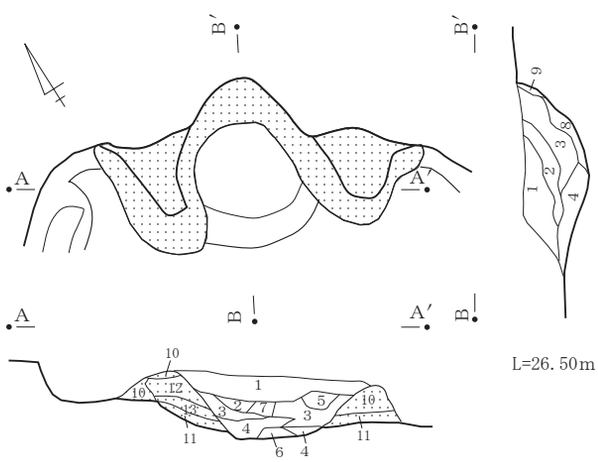
1　暗赤褐色土　焼土粒・焼土ブロックを多く含む
2　暗褐色土　粘土粒を多く焼土粒を少し含む
3　暗褐色土　粘土粒と黒褐色土粒を含み焼土粒をわずかに含む
4　黒褐色土　粘土粒・焼土粒を含む
5　褐色土　ローム粒・焼土粒・粘土粒を含む
6　黒褐色土　黒色土粒・焼土粒・焼土を含む
7　赤褐色土　焼土粒を多く含む
8　褐色土　ローム・ローム粒を斑紋状に含む
9　黒褐色土　灰を含む
10　暗褐色土　ローム粒・粘土粒を斑紋状に含み焼土粒をわずかに含む
11　褐色土　ローム粒に暗褐色土粒・粘土粒・焼土粒を含む
12　黒褐色土　粘土粒・黒色土粒・焼土粒を含む

第340図　H-32



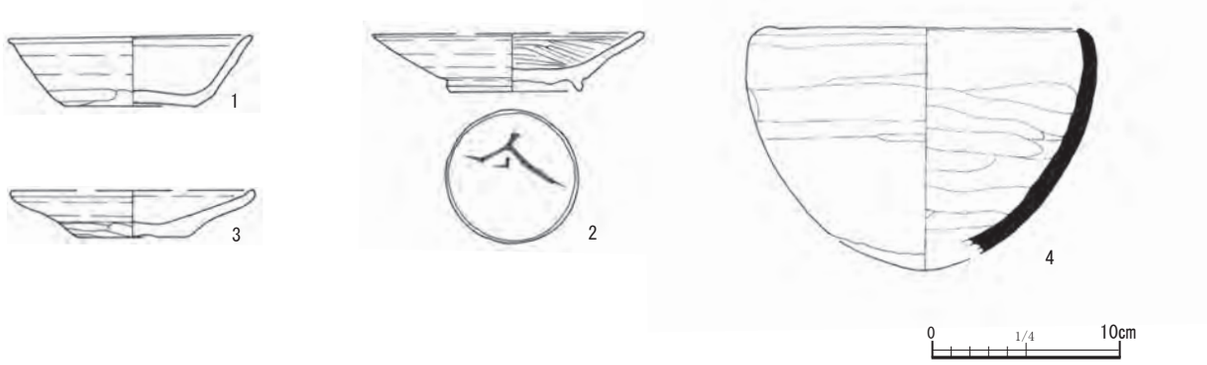
1　暗褐色土　　ローム粒を斑紋状に含む
2　褐色土　　ローム粒を斑紋状に含み暗褐色土粒を含む
3　暗褐色土　　ローム粒を斑紋状に含み黒褐色土粒を含む
4　暗褐色土　　ローム粒・粘土粒・炭化粒を含む
5　黄褐色土　　褐色土粒を含む
6　褐色土　　ローム粒を含む

0　1/60　2m



1　暗褐色土　　粘土粒・ローム粒を含む
2　褐色土　　粘土粒を多く褐色土粒・焼土粒を含む
3　暗赤褐色土　　焼土粒に粘土粒を含む
4　黒褐色土　　焼土・粘土粒を少し含む
5　暗褐色土　　粘土粒を多く含む
6　明褐色土　　粘土粒を含む
7　赤褐色土　　焼土
8　黒褐色土　　ロームに焼土粒を含む
9　褐色土　　粘土粒・焼土粒を少し含む
10　暗褐色土　　ローム粒・粘土粒・少量の焼土粒を含む
11　褐色土　　ローム粒・粘土粒を含む
12　褐灰色土　　粘土（砂質）に焼土粒と暗褐色土を含む
13　褐色土　　粘土に焼土粒・暗褐色土を含む

0　1/30　1m



0　1/4　10cm

第341図　H-33

H-33(第 341 図・図版 38・61)

旧Ｉク -19-1 住。3.0 × 2.9 ｍの隅丸長方形の掘り込みをもつ。壁は 0.4 ｍでやや開いて立ち上がり、壁溝は北壁で欠く。柱穴はない。カマドは北壁の北西隅付近にあり、土師器の坏 (1) ・高台付皿 (2) ・須恵器鉢 (4) が右袖手前から、土師器皿 (3) が左袖脇から出土している。2 は底面に墨書をもつ。「今」ないし「人」の下に「山」のように見える (図版 62)。4 は鉄鉢 (仏鉢) 形土器である。ロクロ成形の痕跡を残さず、内面は多方向のナデで調整後、上部を丁寧にナデる。外面は横方向のナデによって丁寧に丸みを出している。住居跡の時期は平安時代・９世紀としておく。

２　他の遺構

(1) 土坑

古代の土器が出土した土坑のうち、この時期の遺構の可能性が高いと判断したものである。

D-100(第 342 図・図版 38・62)

径 1.5 m、深さ 0.8 ｍの円形土坑である。底面は平坦で壁面はほぼ垂直に立ち上がる。内外面赤彩の土師器坏 (1 ～ 3) が出土している。1 ・ 3 は器高が高く丸底、2 は鉢に近く底面がわずかに窪む。1 ・ 2 は５層下部から重なって出土、底面に焼成前のヘラ書きをもつ。1 は 4 本、2 は 1 本の細い直線で 1 はやや深く、2 は浅い。

D-117(第 342 図)

2.8 × 1.4m の長楕円形の窪みから土師器が出土している。D-436(縄文時代陥し穴) の覆土上部の窪みとみられ、人為的な掘り込みではない可能性も考えられる。土師器小形甕 (1) が出土している。外面に煤が付着する。

(2) 方形周溝状遺構

方形周溝 1 (第 343 図・図版 38)

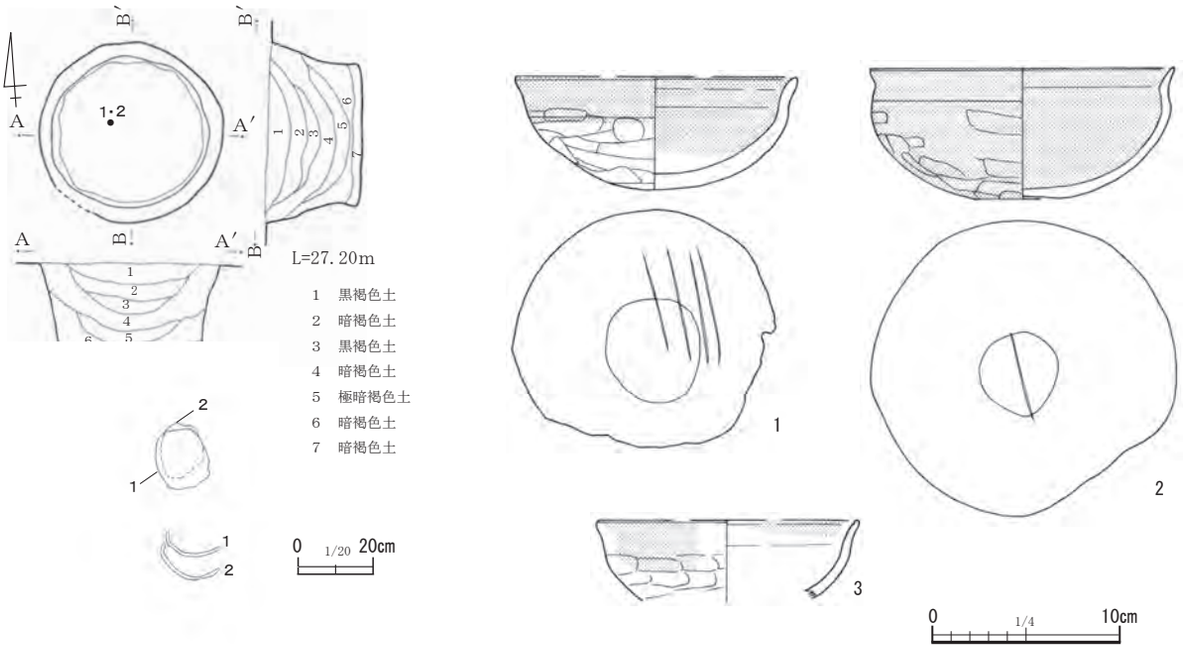
当遺跡では唯一明確な古代墳墓である。周溝の外側で南北 9.5 ～ 9.8 m、東西 8.7 ～ 9.1 ｍを測り、やや歪な方形を呈する。周溝の幅は検出面で 0.7 ～ 0.9 ｍであり、東西方向のほうが広い傾向がある。平面図と断面図では、断面形状が異なっているが、写真等で検証することができなかったためそのまま掲載した。掘上がりの写真をみると丸底である。周溝から須恵器杯 (1) が出土している。口縁部の 1/6 が遺存する。奈良時代・８世紀の遺構であろう。

３　遺構外出土土器と土器以外の遺物

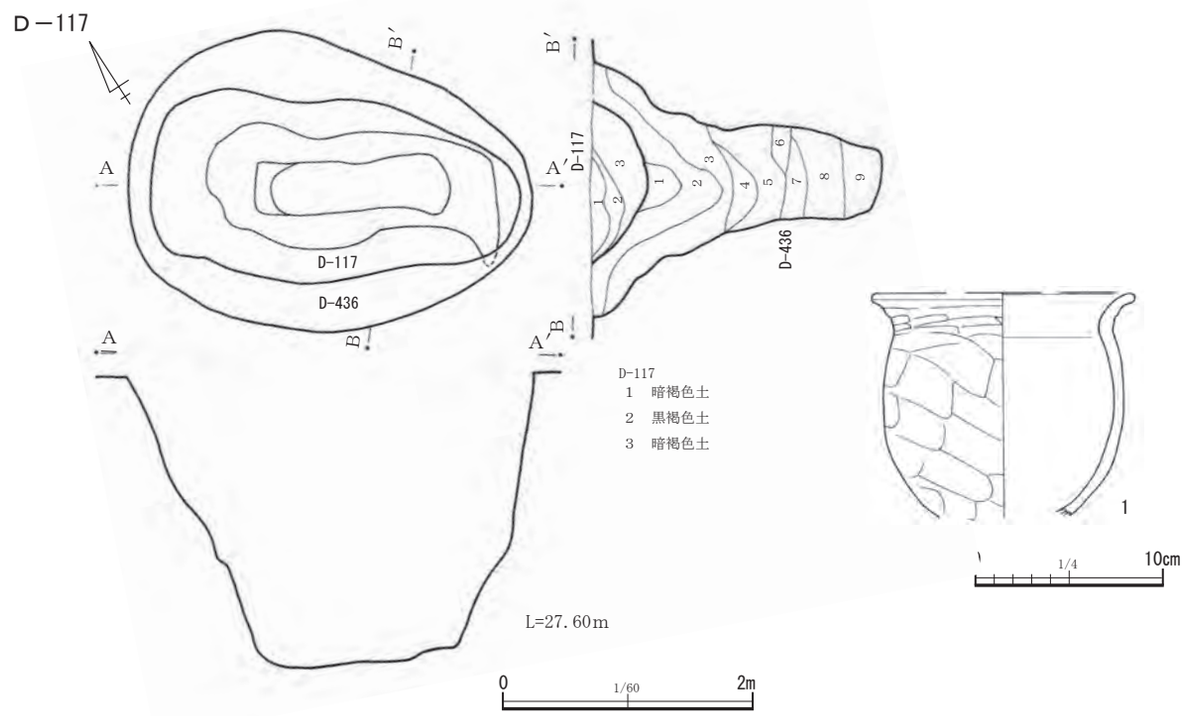
(1) 遺構外出土土器 (第 344・345 図・図版 62)

便宜的に古墳時代の資料もここに掲載する。1 ～ 21・23 ～ 40 は土師器である。1 ～ 5 は高杯であり、２は古墳時代中期、他は後期であろう。23 は古墳中期の坩である。6 ～ 20・52 は坏である。6 ～ 8 は古墳時代、9 ～ 12 は奈良時代、他は平安時代であろう。14 は墨書、20 はヘラ書きをもつが釈読できない (図版 62)。52 は「の」の字状の朱書をもつ (図版 62)。21 は高台付皿であり、体部に「□後」と読める墨書をもつ。24 ～ 40 は甕であり、平安時代を中心に古墳後期から奈良時代のものが混じる。38・39 は底面にヘラ書きをもつ。41 ～ 43・45 ～ 49 は須恵器であり、土師質のものを含む。41 は古墳後期、42 は奈良時代の坏、43 は鉢である。45 ～ 49 は甕である。22・44・50・51 は灰釉陶器である。22 は段皿で、見込みに重ね焼きの痕跡がある。接合しない破片２点が同じグリッドから出土している。50 は椀、44・51 は長頸瓶である。

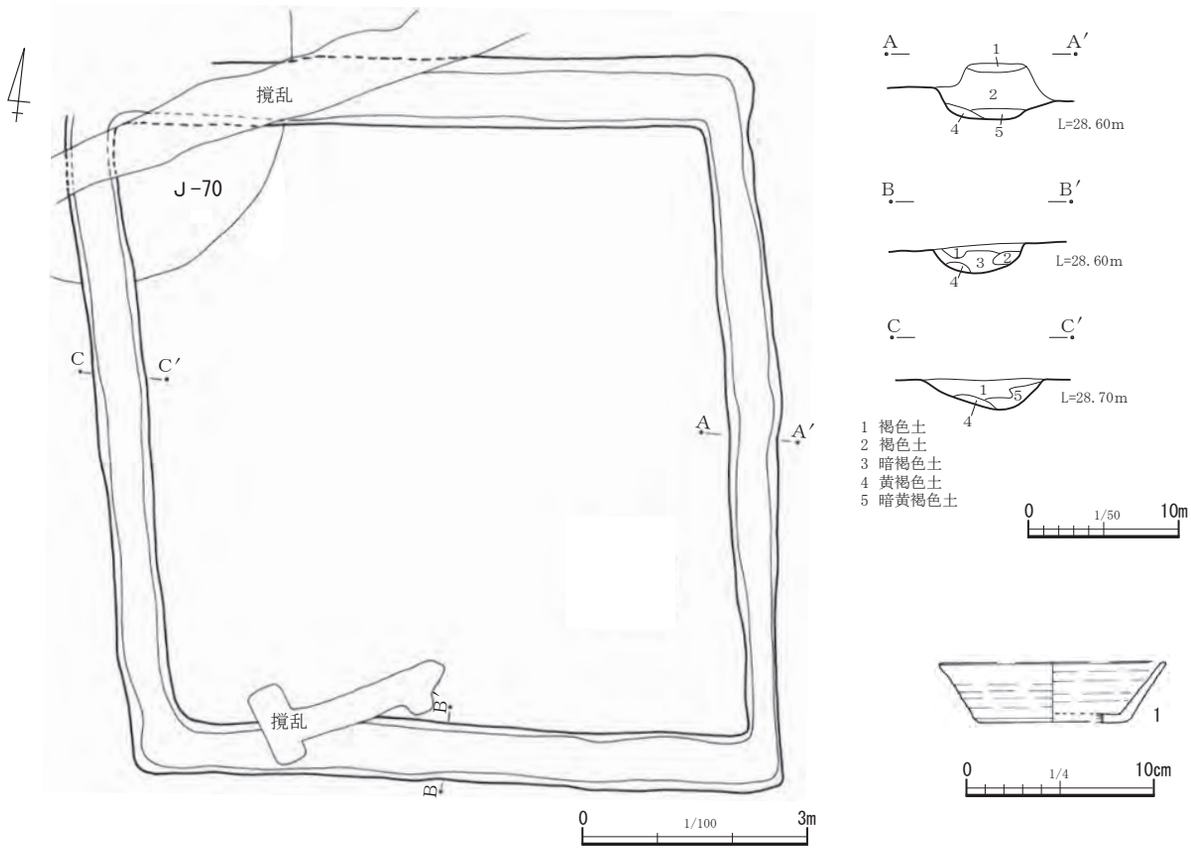
D－100



D－117



第342図　古代土坑



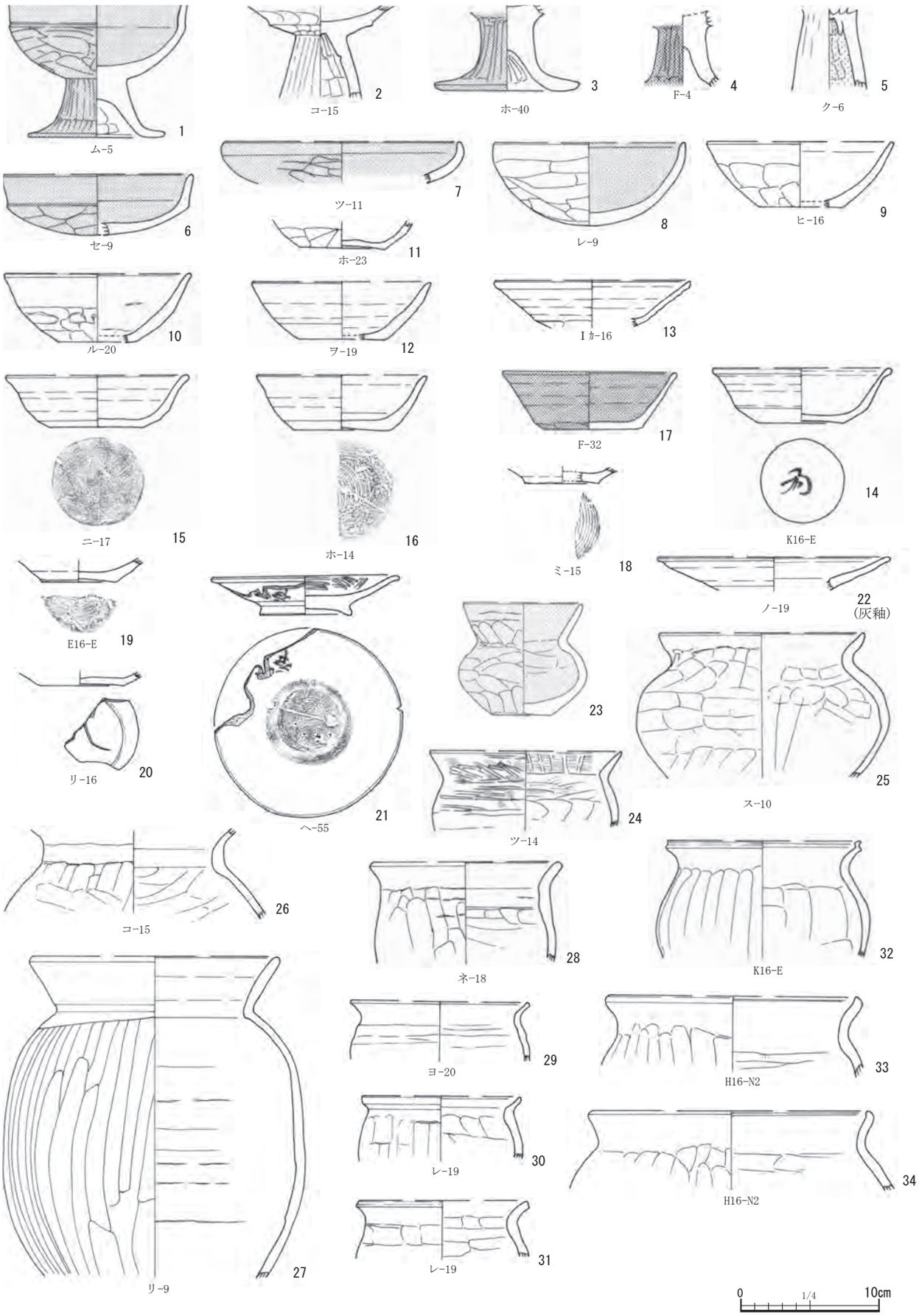
第 343 図　方形周溝状遺構

(2) 鉄製品 (第 346・347 図)

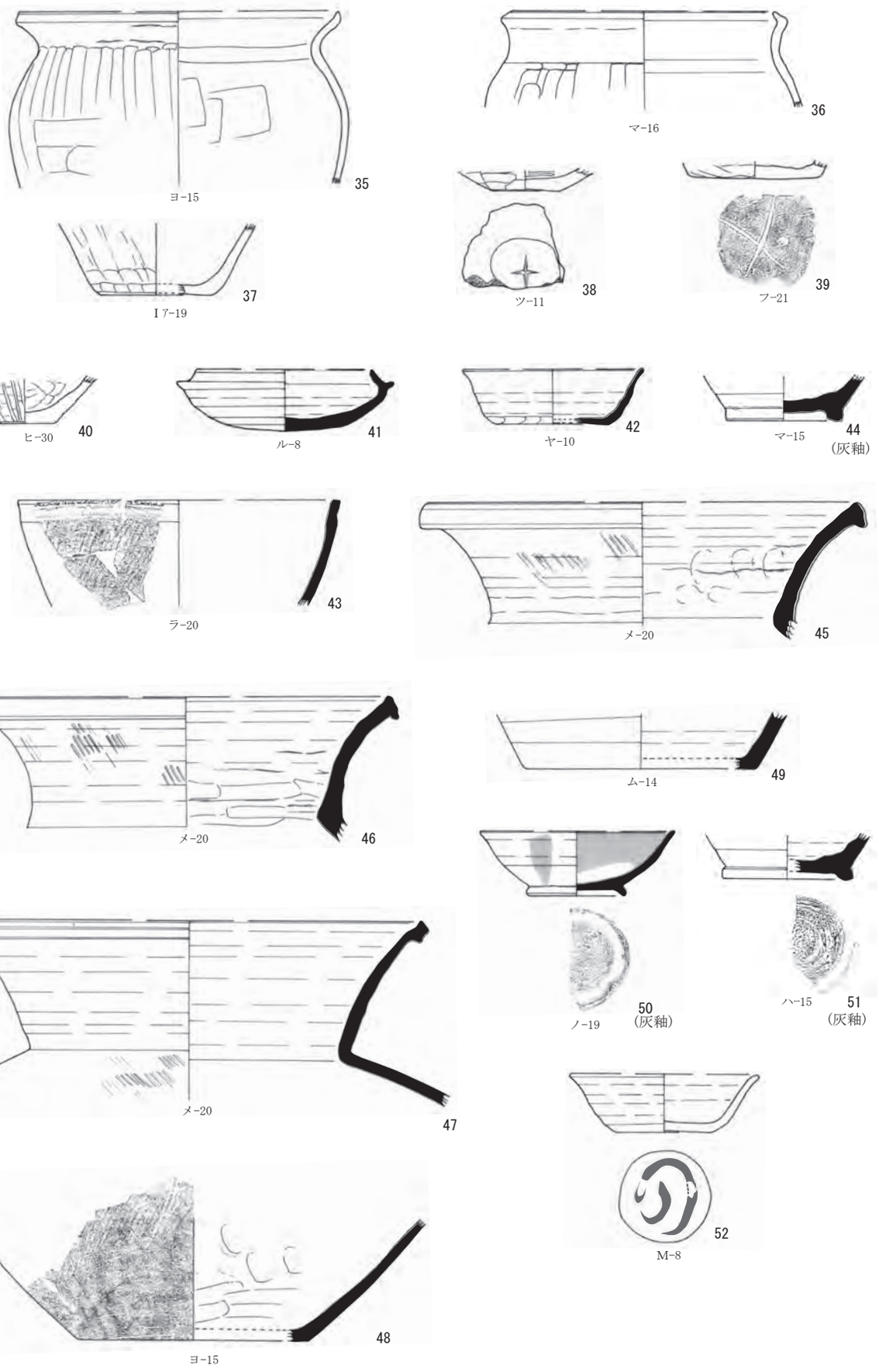
平安時代・９世紀の竪穴住居跡から鉄製品 22 点と鉄滓等２点が出土している。全点を付表 4-3 に掲載し、うち鉄製品 16 点と鉄滓等２点を図示した。武具と農工具があり、内訳は鉄鏃８点、刀子５点、刀子？４点、鎌１点、鉄斧１点、鉄斧に伴う楔１点、紡錘車２点となる。種別不明が２点ある。全体に実測後に劣化が進んでいる。鉄鏃のうち６～８・11 は長頸鏃、刃部の形状は多様である。刀子のうち 12・13 は刃・背両側に関をもつもの。12 は鞘、13・14 は柄の木質が遺存する。１は木製の横柄に装着するいわゆる草刈鎌であり、刃部の摩耗が著しい。２は鉄斧である。柄の装着部を袋状につくり、断面は長方形である。袋部分の長さは全長９cm の約半分に達している。表側の刃部先端には研ぎ出しによる稜がみえる。３は袋部分に入っていた薄い鉄片であり、柄の装着時に打ち込まれた楔であろう。14･26 は紡錘具である。14 の紡輪は六角形をしており珍しい事例である。棒茎は断面円形で残存部長は 24.8cm を測る。26 は円形の紡輪と棒茎片が残る。19 ～ 25 は破片のため種別を明確にできない。17 は鉄滓である。分割によるとみられる破面を複数もち、この部分で磁着度をもつ。18 は鉄分を含む塊状のもので、鉄製品や鉄滓等の人工物ではなくいわゆる褐鉄鉱とみられ、弱い磁着度をもつ。周囲に小さな貝の印象化石が多数みられる。住居跡出土であるので、なんらかの目的で持ち込まれたのであろう。

(3) 土製品 (第 347 図・図版 62)

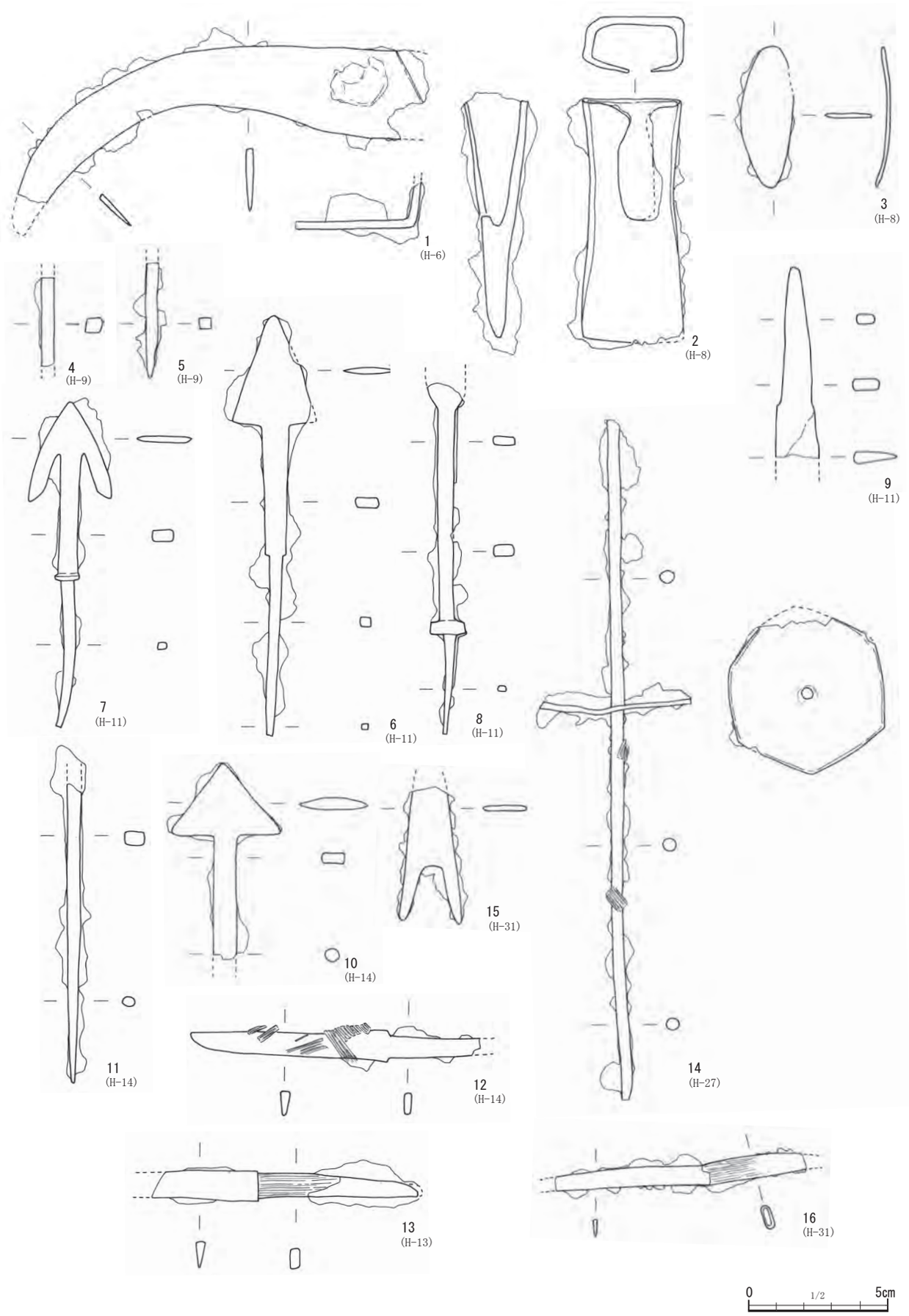
管状土錘４点が出土している。管状土錘は遺構外から出土したものであるが、形状や色調から古代の漁網錘とみられる。４点とも中膨れのよく似た形状であり、孔径も５～６㎜で共通する。１・３・４はノ -19 付近 (H-6 住居跡がある) で出土したもので、長さ・径・色調が近似している。２は長さ・径とも３点よりやや大きく、色調も若干異なっている。５は土師器の破片を円板状に加工し、紡輪などとして使用



第 344 図　遺構外出土古代土器 (1)



第 345 図　遺構外出土古代土器 (2)

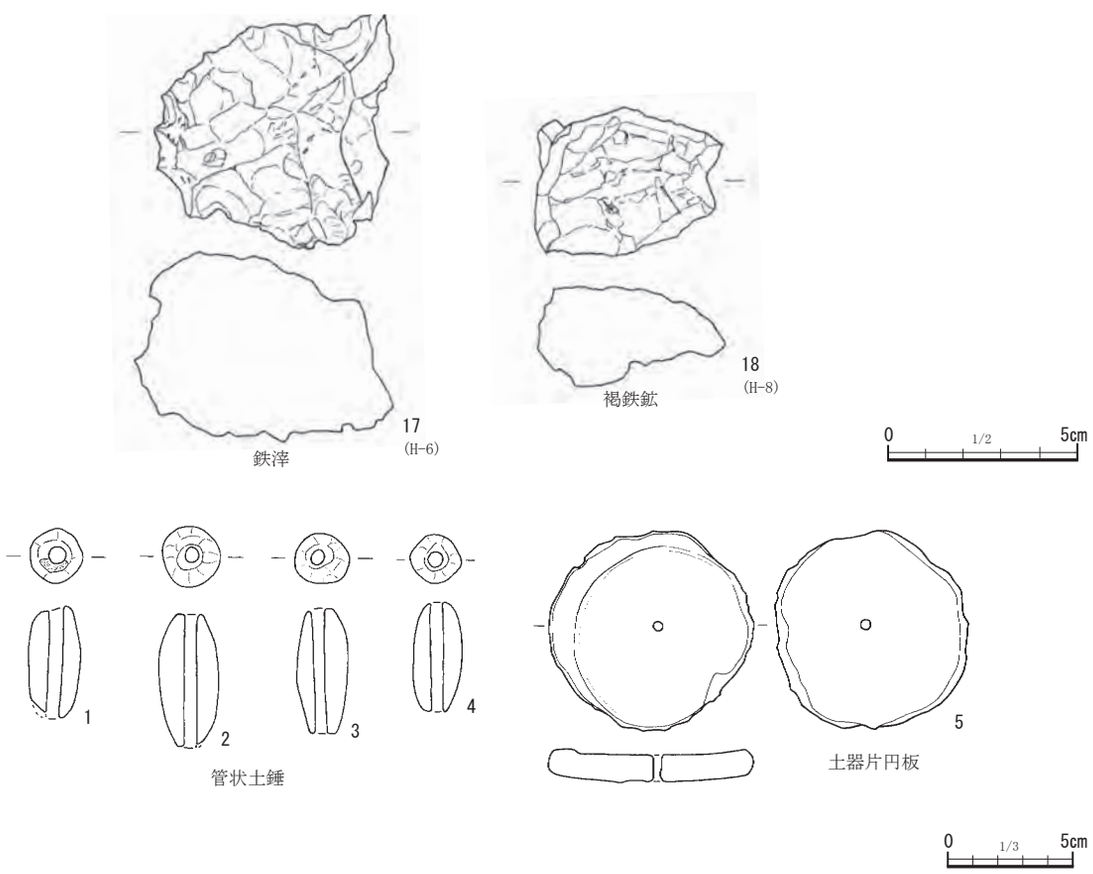

1
(H-6)
2
(H-8)
3
(H-8)
4
(H-9)
5
(H-9)
6
(H-11)
7
(H-11)
8
(H-11)
9
(H-11)
10
(H-14)
11
(H-14)
12
(H-14)
13
(H-13)
14
(H-27)
15
(H-31)
16
(H-31)
0
1/2
5cm

第 346 図　鉄製品 (1)

した可能性のあるものである。縄文時代の同様の製品に倣って土器片円板としておく。土器の外面側は表面が発泡するほど強い火を受けており劣化が著しいが、内面と加工した側縁部はまったく被熱の痕跡がないので、火を受けたのは加工以前ということになる。内面にはあたかもコンパスを使って削り取ったような段があり、その外部はナデ調整であるのに対し内部は凸凹がある。この段は土器の焼成前に行われたものである。中央の孔は円形に成形した後に穿ったものである。孔は垂直で表面は平滑化しており、金属が付着しているので紡錘具としての利用を裏付けるものと考えた。依然として奇妙な印象が残るのは、類例を見ない内面の円形の段であり、これを素材として円板状に加工したのが偶然とは考えにくいことである。なお、へ -43b 区で著しく焼けて変色した平瓦 1 点が採集されている。中・近世の溝 M-6 の北側にあたり由来は不明であり、図示はしなかった。なお、支脚については便宜的に土器と同じ図・記載に含めている。

(4) 炭化植物遺体

H-22 号住から炭化クルミ 1 点、H-27 号住からタケ類の破片 2 点以上が取り上げられている。タケ類は稈・節・枝が観察される。



第 347 図　鉄製品 (2)・土製品

第３節　中・近世

１　概要

調査区南東部の旧字「殿内海道」の台地上、大グリッドでいうとフ～ロ－ 35 ～ 56 の範囲から中・近世の遺物が比較的多く出土している。遺構出土遺物は少なく、時期を判断する情報は乏しいが中・近世の遺構・遺物と判断したものを報告する。近現代の鉄製品や土・石製品も多量に取上げられていたが、報告書対象とはせず、遺構の時期判断の参考とするにとどめた。

出土遺物を概観すると、中世の 15 世紀末～ 16 世紀初めの陶器にまとまりがある。方形土坑や粘土張り土坑を検出していることから、近くに中世の堀込型遺構群が存在した可能性が考えられる。近世では 17 世紀中頃～後半の肥前磁器、瀬戸・美濃がある程度まとまっている。18 世紀代の資料はほとんどみられず、幕末～明治期の日常雑器の破片が比較的多い。発掘調査が行われた当時は台地整形区画等の存在が広まっておらず、本調査は溝を検出した部分に留まっているので、遺構・遺物の内容は、土地利用の性格や年代的な傾向を正確に表してはいない可能性がある。おそらく、東側の街道筋に存在した集落の縁辺部と畑地などを調査したものであろう。

２　遺構

出土遺構のリストを第８表に、分布を 348 図に示す。

(1) 溝 (第 349 ～ 351 図・図版 39)

欠番となった M-1・M-2 を除く７条を掲載した。M-3 は北東部台地の東斜面にあり、等高線に沿って曲がっている。３本の確認トレンチで検出したものである。時期判断の根拠が乏しく、中・近世遺構群から離れているが取り上げておく。M-4・M-5 は中・近世以降群の西端にあり、谷頭の台地上にあたる。M-4 は等高線に沿って走るもので、台地の上側では深さ 1.2 m、底に平均 0.8m 幅の平坦面をもつ。M-5 は南北方向に近く、底面は丸みを帯び、長さ 1.0 ～ 1.2 m、幅 0.6 mほどの掘り込み列を伴う。いずれも検出した距離が短く、遺物も伴っていないことから詳細は不明である。

M-6・M-7 は中・近世遺構・遺物が集中する部分にあり、いずれも東西方向から南北方向に向きを変えている。M-7 は底面の全体に波板状凹凸面を有し、さらに多くのピットを伴っている。平面図は 1/300 スケールではトレースできなかったため、典型的な３か所のみ 1/150 で示した。掲載した４点の土器はいずれも近世のものであった。M-6 は台地側の立ち上がりは明確で、一部に段や細い溝をもつ。谷側は斜面となって立ち上がりがほとんどない。底面は弱い凹凸があり、一部に隅丸方形のピット列をもつ。M-9 は南部の一部に波板状凹凸面をもっており、M-7 に繋がっていた可能性が高い。西から入る谷の谷頭にあたる北側では立ち上がりが不明確となり、凹凸面もみられないが、方向からみると近世西寺山村の中心部に向かう道であった可能性がある。C 断面付近で埋葬人骨とみられる骨の集石が記録されているが、骨は見つかっていない。M-8 は覆土の切り合いによって M-7 より古いもので、出土遺物は平安時代と中近世の土器が混じっている。底面の掘り込みは浅く凹凸程度ものものである。平安時代の溝である可能性も否定できないが決め手を欠いている。なお、出土遺物から近現代の溝と判断できたもの、開発前の道に沿う側溝と考えられるもの (M-1・M-2) は、新№を付けた後に報告対象外となったため欠番である。

(2) 土坑 (第 352・353 図・図版 40)

D-453・D-454 は M-8 溝の東側で検出している。縄文時代の陥し穴に似るが、D-453 は陥し穴としては浅すぎること、D-454 は底面中央に浅い掘り込みをもつことなどから、中・近世の遺構の可能性があ

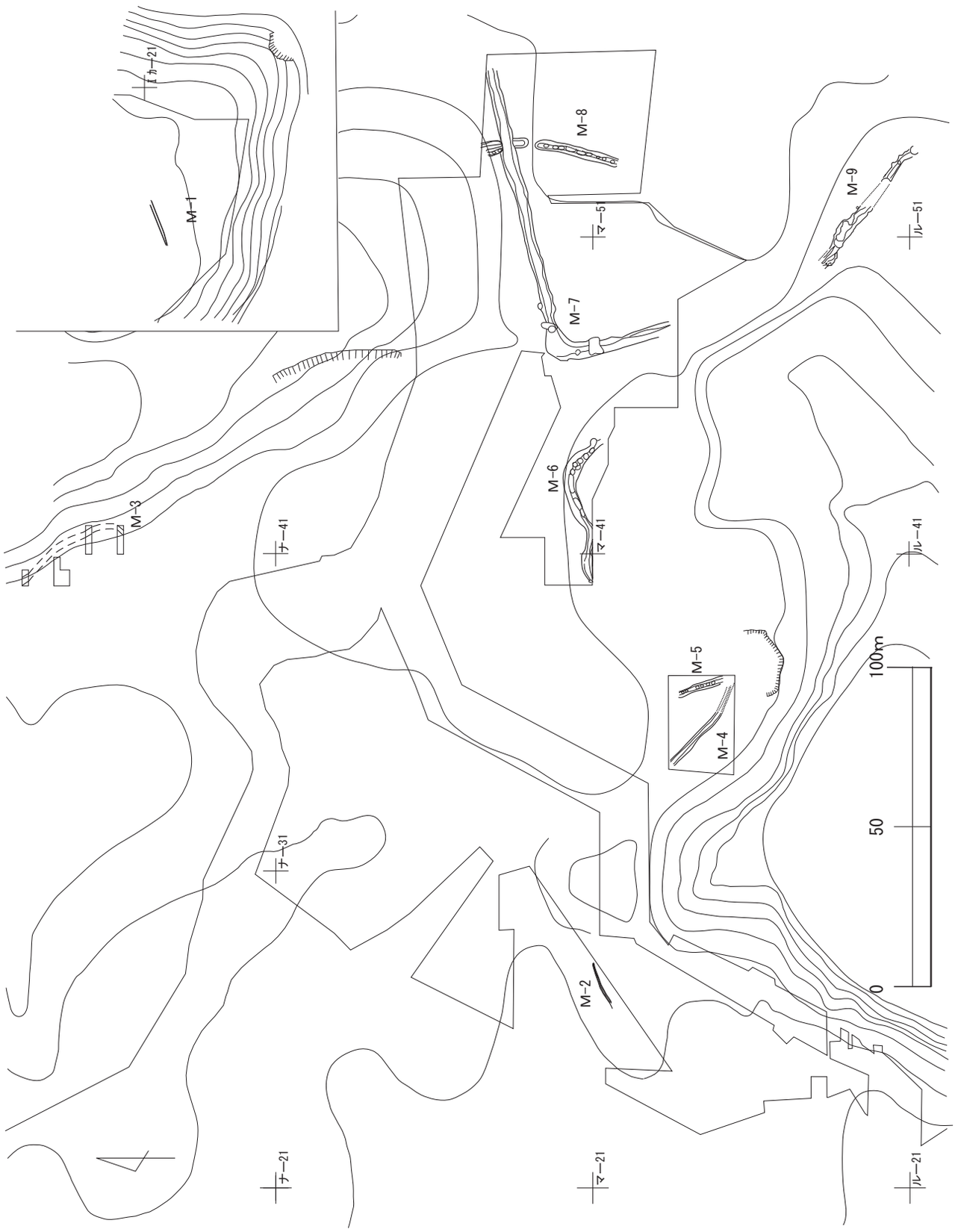
第 8 表　　中近世遺構

No.	グリッド	長さm	幅m	重複遺構	備考
M-1	Ⅰカ-15・16	12	0.9	J-81・82	
M-2	マ-26・27	13	0.8	D-95・96	
M-3	ス-41・ソ-42・ナ-42				
M-4	ム-34・メ-25・モ-36	32	2.1		
M-5	ム-36・メ-36	15	2.5		
M-6	ホ-40 ～ 44	44	3.5	D-459・460・462・467・468	
M-7	ヘ-47 ～ 50・フ-51 ～ 55・ホ-47・マ-47・ミ-47・48・ム-48	67	5.4	D-465、M-8	
M-8	ヒ-53・フ-53・ヘ-53・ホ-53・マ-53	33	2.5	M-7	
M-9	ヨ-50・51・ラ-51・リ-53	44	3.5		

No.	種別 2	旧No.	平面形	上長軸	上短軸	深さ	重複遺構	備考
D-453	土坑	ホ-54-1 土坑	不整楕円	135	104			
D-454	土坑	ホ-56-1 土坑	隅丸長方	153	94	79		
D-458	竪穴遺構	ヘ-40-1 土坑	隅丸方	306	255	51		
D-459	土坑	ホ-40-1 土坑	不整円	178	167	210		
D-460	土坑	ホ-42-1 土坑	隅丸方	230	216	67		
D-461	土坑	マ-43-1 土坑	不整円	205	192	78		
D-462	土坑	マ-44-1 土坑	不整円	223	191	227	ホ-44 ～ 44 溝	
D-466A	土坑	ホ-46-1 土坑	不整	-	-	-		
D-466B	土坑	ホ-46-1 土坑	不整	-	-	-		
D-468	土坑	ホ-43-4.5 土坑	不整	310	290	113		貝ブロックあり
D-469	地下式坑	ル-54-1 土坑	隅丸方	196	93	83		焼土
D-470	地下式坑	ル-55-1 土坑	不整	-	-	95		
D-471	地下式坑	ル-55-2 土坑	不整	-	-	95		

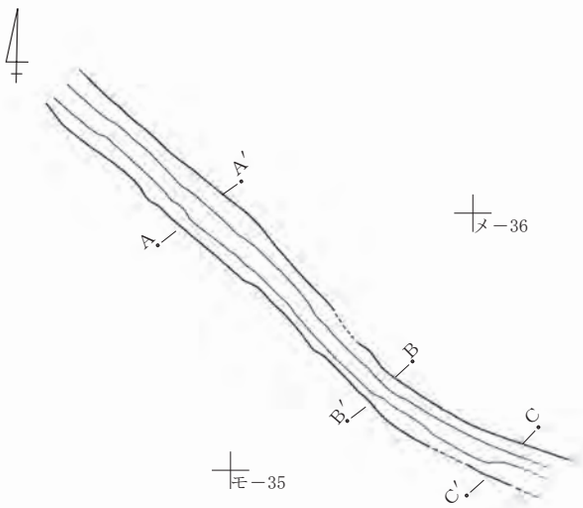
るものとしておく。D-459 ～ D-462・D-468 は 6 号溝の付近に集中する。D-459 と D-462 は底面が一辺 0.8m の方形となる深い土坑である。D-466A も類似している。D-462 では近世の鉄釉茶碗 (第 354 図) が出土している。D-461 は円形土坑、D-460 は方形土坑である。D-468 は一辺 2.6 mの隅丸方形の土坑であり、深さは 1.6 mを測る。覆土中層に貝層を形成している。50cm × 30cm、厚さ 20cm のレンズ状堆積で、中央付近から北に大きく傾斜する。15 世紀後半の常滑片口鉢 (第 354 図) を伴っており、ある程度時期を示すものであろう。D-458 は M-6 溝の北側にある。不整方形で底面も丸みを帯びるが人為的な掘り込みであろう。

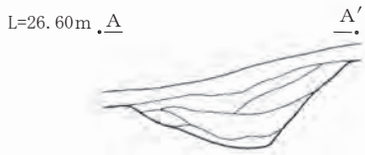
D-466-A・B は M-7 溝付近にあり、A は D-459 と D-462 に類似した深い土坑である。B は長方形の土坑である。D-469・D-470 は 9 号溝付近で検出した。D-469 は 2.0 × 1.7 mの方形を呈し、深さ 0.8 mを測る。底面から壁面にかけて厚く粘土を貼った粘土貼土坑である。D-470・471 は 2 基のピットである。ル -55 区付近にピット群があり、中世渡来銭が 15 点出土している。

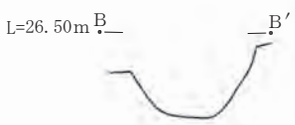


第 348 図　中・近世遺構分布図

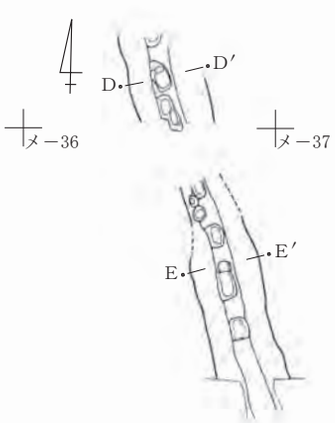
M－4

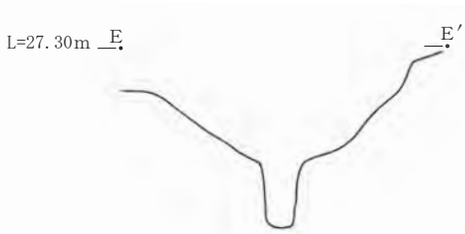


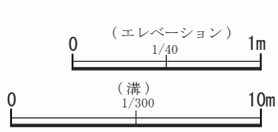




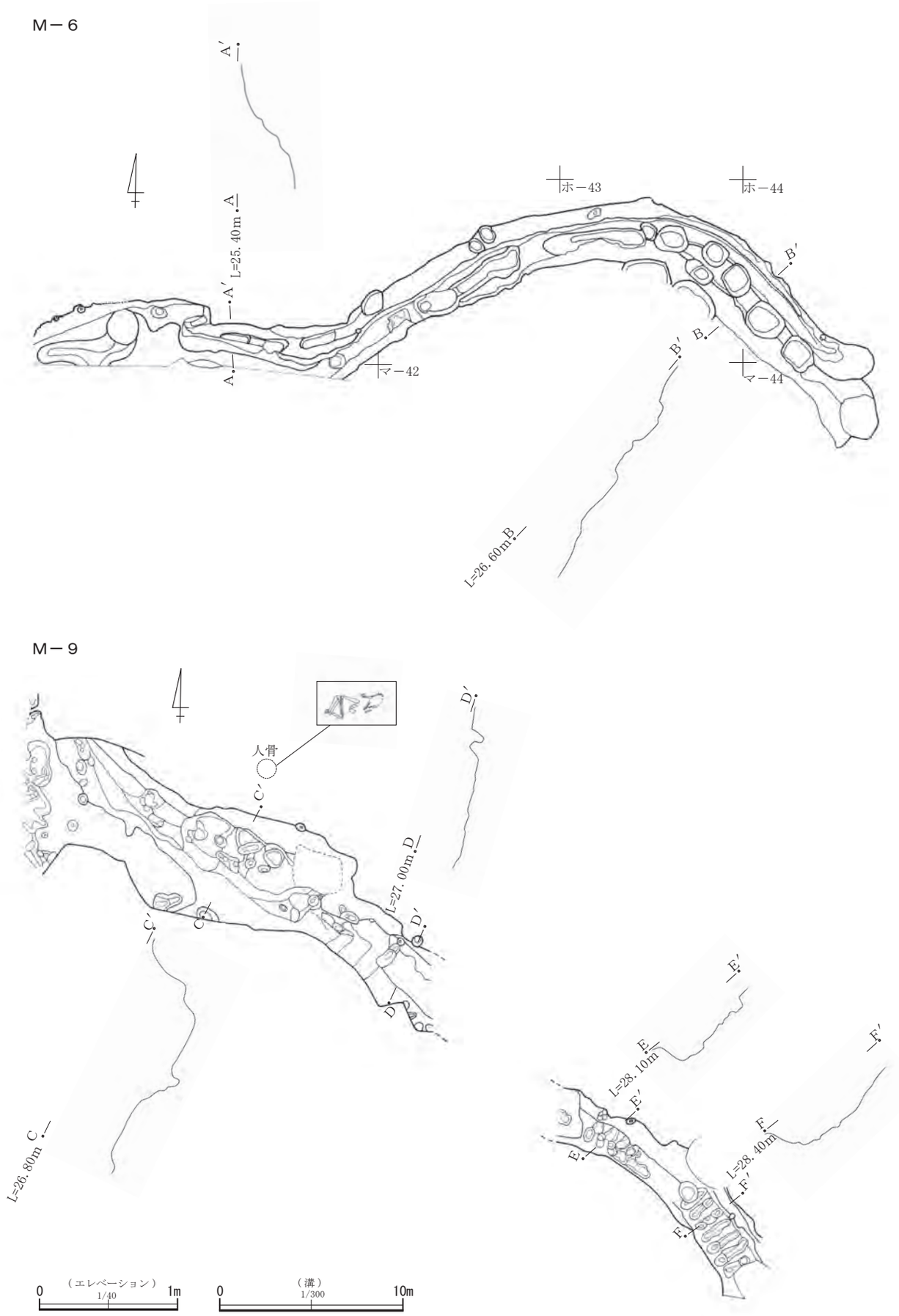
M－5



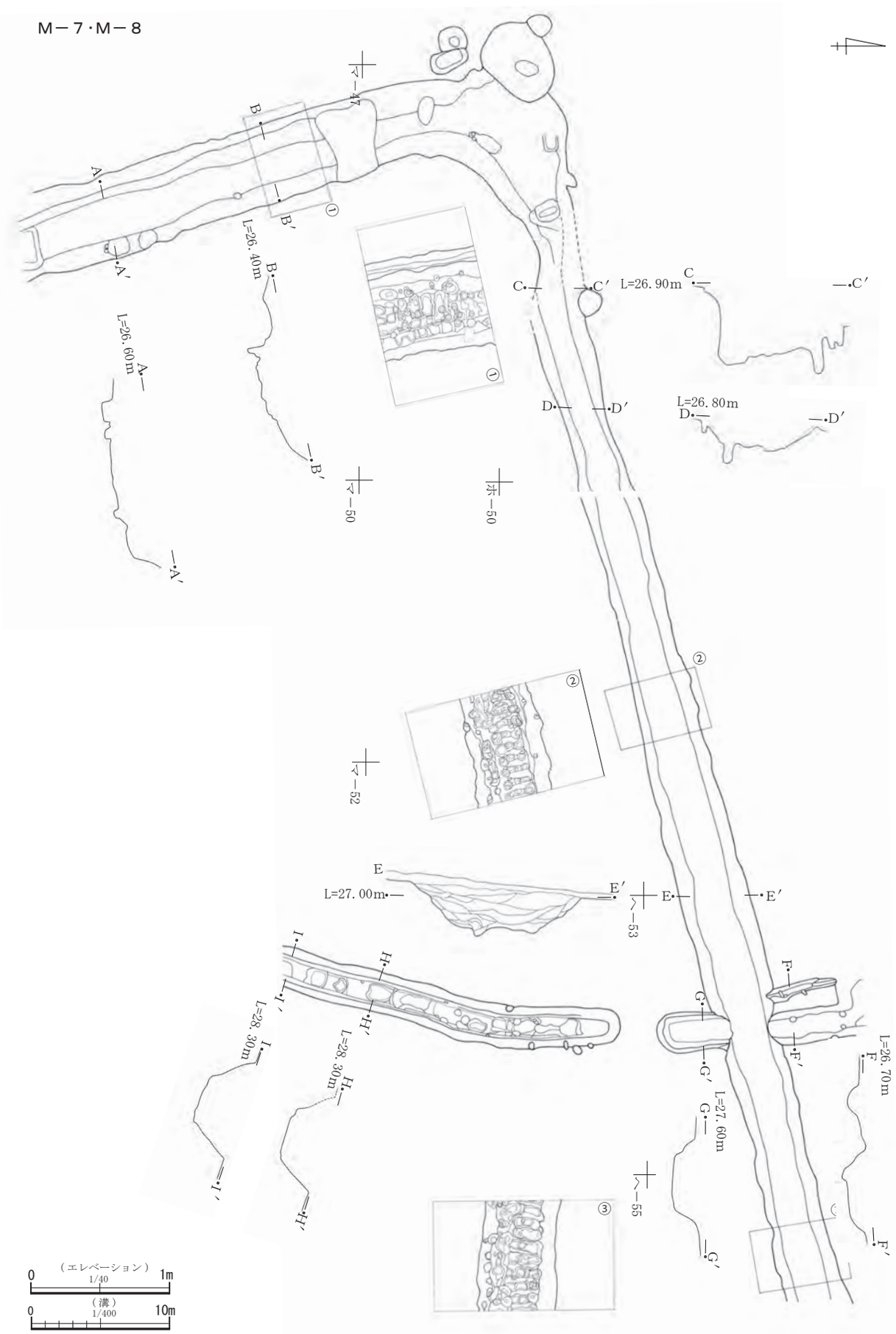




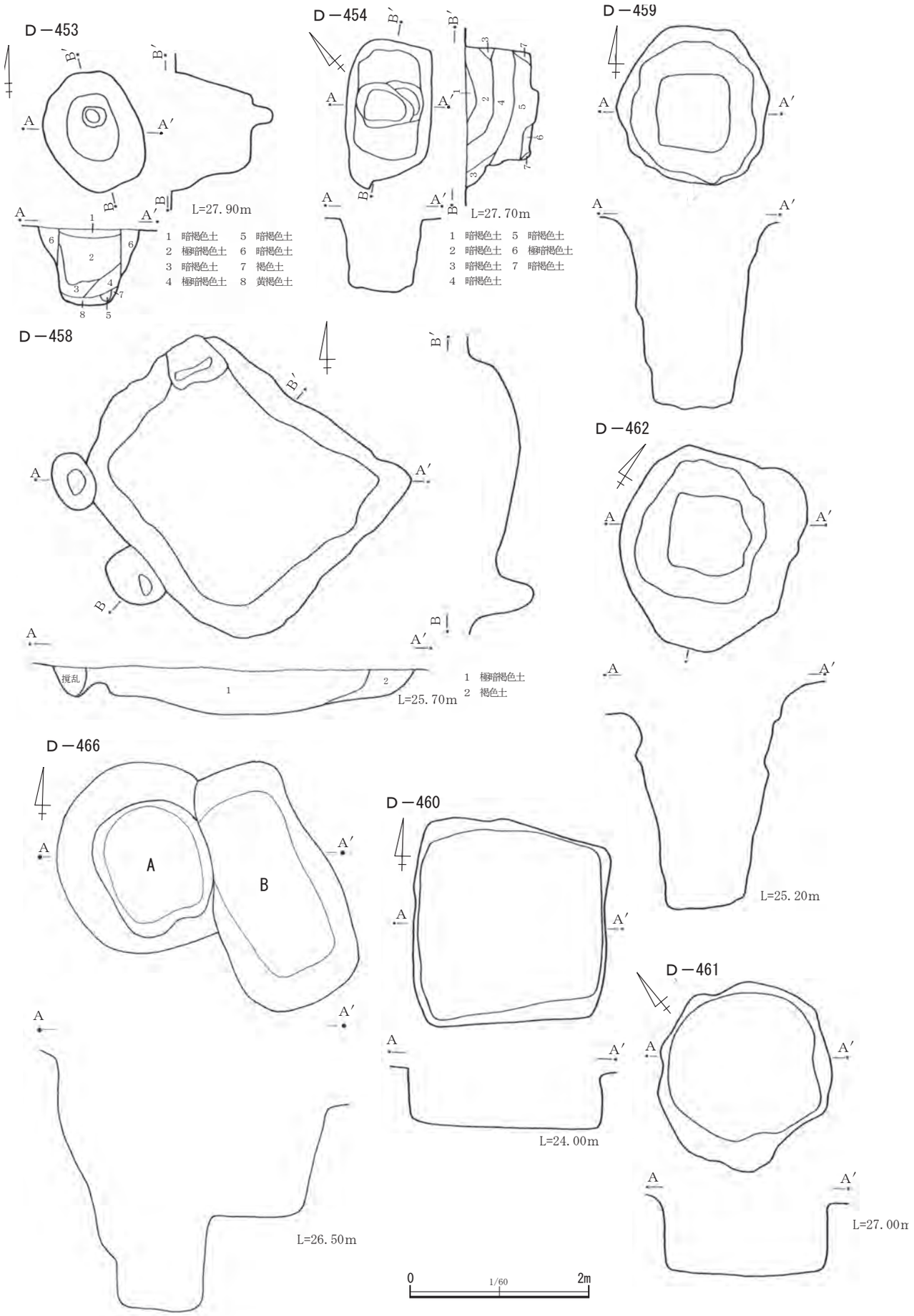
第 349 図　中・近世溝 (1)


M－6
A′
A
L=25.40m
A′
A
ホ－43
ホ－44
B′
B′
B
マ－42
マ－44
L=26.60m
B
M－9
人骨
C′
C
C′
D′
L=27.00m
D
D′
D
L=26.80m
C
E′
E
L=28.10m
E′
F
L=28.40m
F′
F
F′
（エレベーション）
1/40
0
1m
（溝）
1/300
0
10m

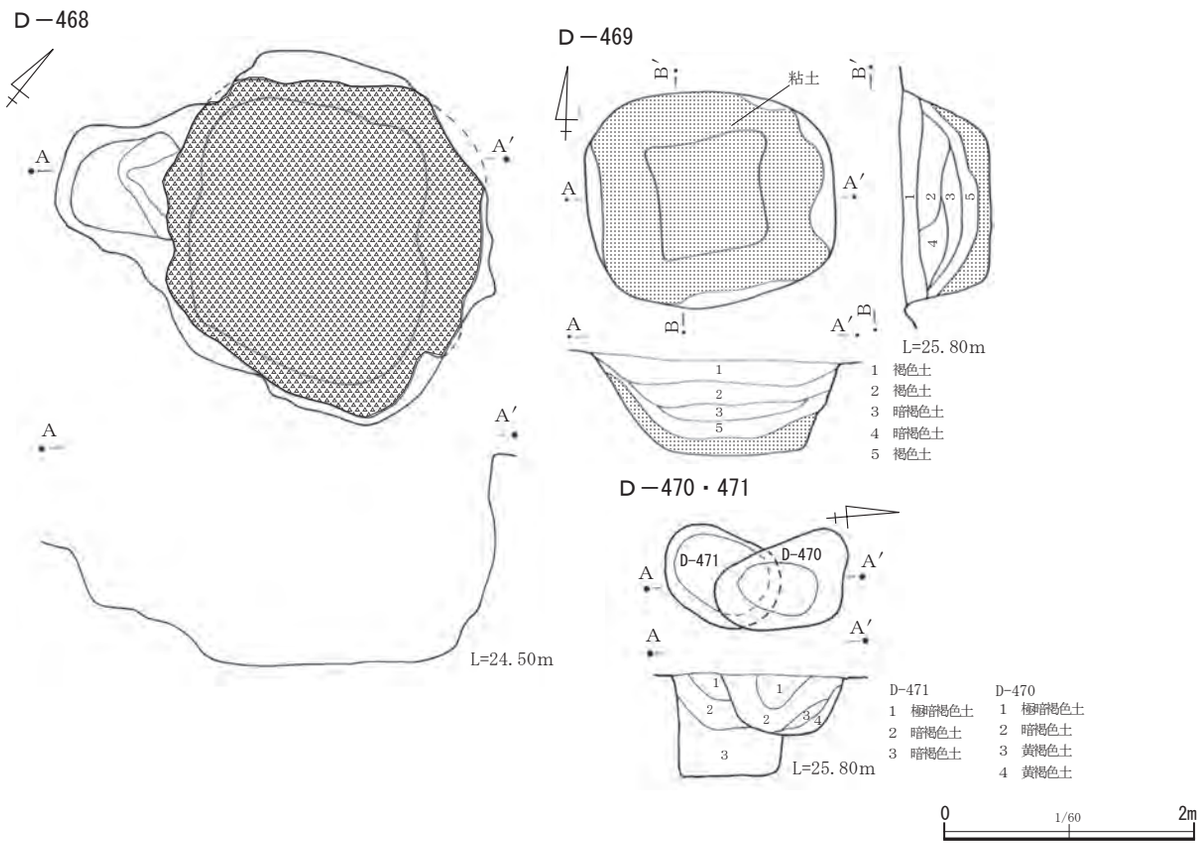
第 350 図　中・近世溝 (2)


M－7・M－8
A
A′
B
B′
C
C′
D
D′
E
E′
F
F′
G
G′
H
H′
I
I′
L=26.40m
L=26.60m
L=26.90m
L=26.80m
L=27.00m
L=28.30m
L=28.30m
L=26.70m
L=27.60m
①
②
③
ベ－47
ベ－50
北－50
ベ－52
ベ－53
ベ－55
（エレベーション）
1/40
0
1m
（溝）
1/400
0
10m

第 351 図　中・近世溝 (3)



第352図　中・近世土坑 (1)



第 353 図　中・近世土坑 (2)

3　出土遺物

(1) 土器類 (第 354 ～ 356 図・図版 63・64・付表 4-4)

中・近世土器類として抽出されたものは、中世 34 点、近世 206 点、幕末から明治時代 107 点である。このうち、中世の全点と近世の主要なもの 27 点の計 61 点を個別掲載した。これ以外については図版 63 － 4 ～ 64 － 1 に集合写真を示すとともに、出土位置を集計して分布傾向を記載した。

中世では、15 世紀末～ 16 世紀初めの瀬戸・美濃、常滑、志戸呂陶器が比較的まとまっている。常滑の甕・片口は 14 ～ 15 世紀のものが混じる。15 ～ 16 世紀代の資料にこの時期のものが混じるのは通例であるため、これのみによって土地利用の開始年代を引き上げることはできないが、後述のように渡来銭の銭種構成から遡る可能性は否定できない。近世 17 世紀中頃～後半の肥前磁器、瀬戸・美濃もある程度まとまっていて、特徴的な輪ハゲ皿、擂鉢が確認される。18 世紀代の資料はほとんどみられず、幕末～明治期の資料は多い。ほとんどが日常雑器の破片であることから、付近に捨て場が存在した可能性がある。

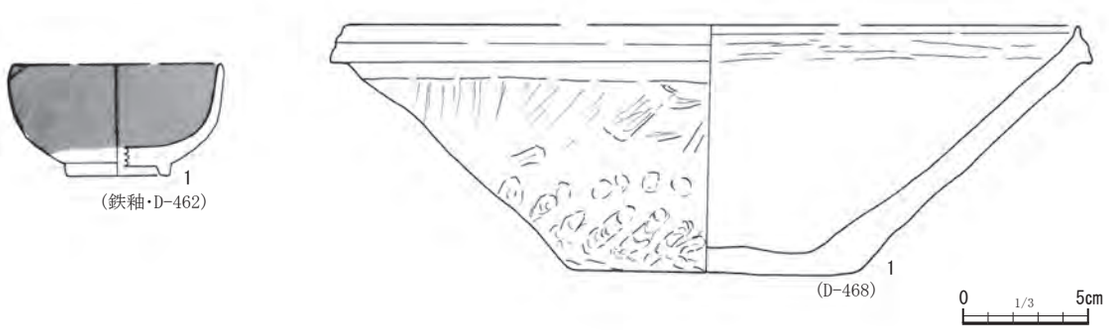
図示したものは遺構出土 11 点、遺構外出土 26 点である。年代の判明する土器をみると、室町時代中期・15 世紀のものと、江戸時代初期・17 世紀代が多い。第 354 図の D-468-1 は常滑の片口鉢である。内面は使用による磨滅・平滑化が顕著であり、底面も擦れている。第 355 図の M-7 では瀬戸・美濃の擂鉢 (17 世紀代)・煙硝擂、伊万里の染付椀、カワラケが出土しており、いずれも近世のものである。M-8 では古瀬戸の緑釉小皿、鉢形土器、カワラケ、焙烙を掲載した。中世・近世が混在するほか、平安時代の土師器も大破片・復元個体が出土している。M-9 では常滑の甕を掲載した。16 世紀後半のものである。

遺構外出土の中世土器類 (第 356 図) は、瀬戸・美濃系は、古瀬戸の灰釉卸目付き大皿 (1 。砥石転用)・錆釉擂鉢 (2・3)・灰釉丸皿 (5)・挟皿 (6)、古志戸呂縁釉小皿 (7)、常滑の片口鉢 (1 8)、カワラケ (19) がある。近世土器類には、瀬戸・美濃の錆釉擂鉢 (4 ・12 ～ 14)、灰釉椀 (8) ・反皿 (9)、志野の輪ハ

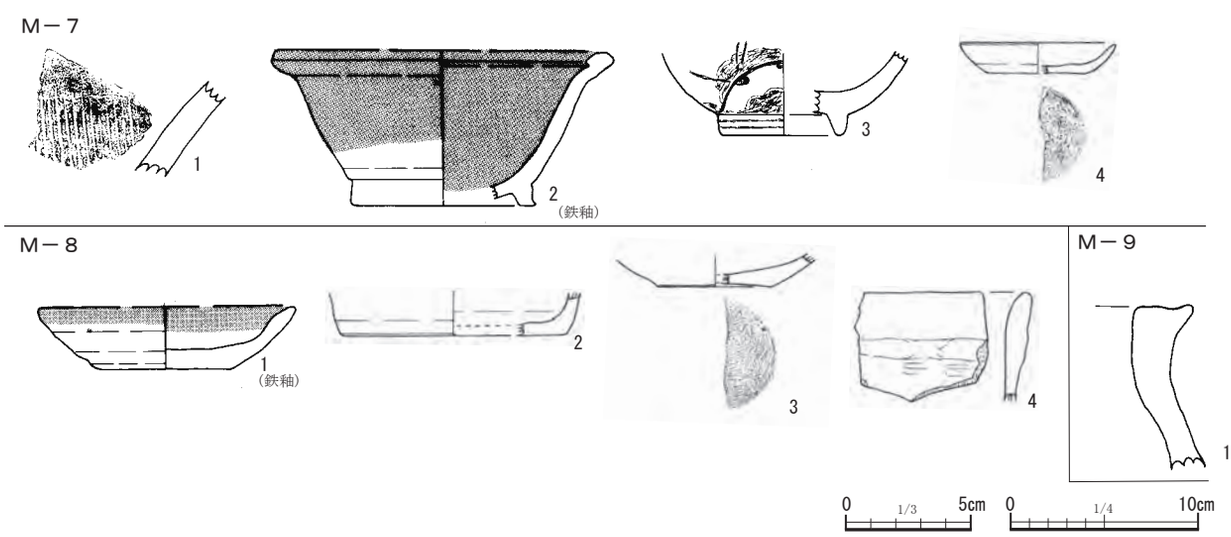
ゲ皿 (10･11)、志戸呂皿 (16)、肥前の染付椀 (17)、素焼きのカワラケ (19)･焙烙 (22･23)･在地の擂鉢 (24)、内耳土器 (25・26) がある。12 は砥石に転用されている。

中世の土器類のうち図示しないものは 24 点ある (付表 4-4)。瀬戸・美濃系では、香炉 1 点・擂鉢 3 点・折縁深皿 1 点、在地土器の擂鉢 1 点、常滑系では片口 2 点、甕 16 点である。現代と判断して欠番となった M-1 から 6 点出土している。

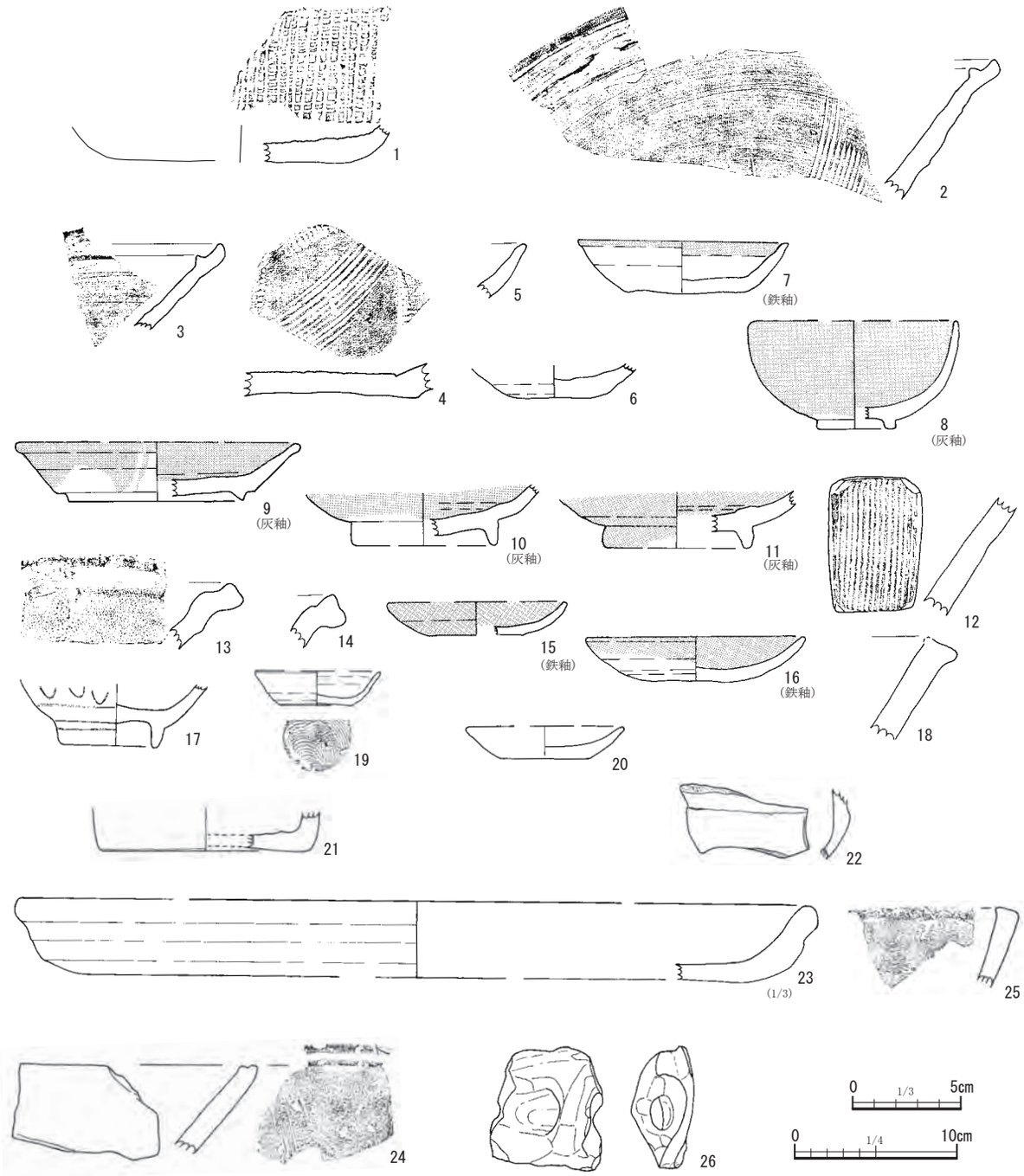
時代ごとの分布傾向をみると、3 時期ともに調査区中央付近から東部地区にかけての平場の南北両側がもっとも多い。北側は M-6 と M-7 溝とその周辺、グリッドでいうとヒ～マ－ 39 ～ 64 にかけて東西に長く伸びている。南側は M-9 溝付近である。中世はこの 2 か所がほとんどであるが、近世と幕末～明治期は南西部地区にもまとまりがある。台地の南西側と、北西部地区との境の浅い谷付近に多い。こうした状況から推定されるのは、①中央から東部の平場が生活・交通の場として利用されてその両側に廃棄が行われたこと、②近世以降南西部地区が畑地として利用されて、その縁辺部に廃棄が行われたことである。



第 354 図　中・近世土器（1）



第 355 図　中・近世土器 (2)



第 356 図　中・近世土器 (3)

(2) 石器 (第 357 ～ 359 図・図版 64・付表 4-5)

凝灰岩性の砥石 53 点 (1 ～ 52・54) と石臼 1 点 (53) がある。砥石は、M-7 から 8 点、M-9 から 12 点出土しており、これを含む調査区南東部出土が 29 点と半数以上を占めている。そのほかは分散傾向だが、南西部から 19 点出土している。近現代のものを含んでいるであろうが、南西部からの砥石の出土は畑地としての利用を示唆するものといえるかもしれない (付表 4 番号外)。大半は凝灰岩製で現在の中砥程度であり、49 ～ 52 はスレート系の仕上砥に相当するものである。53 は上臼の孔の部分の破片で下面は平滑化が顕著である。

第 357 図　中・近世石器 (1)

第 358 図　中・近世石器 (2)

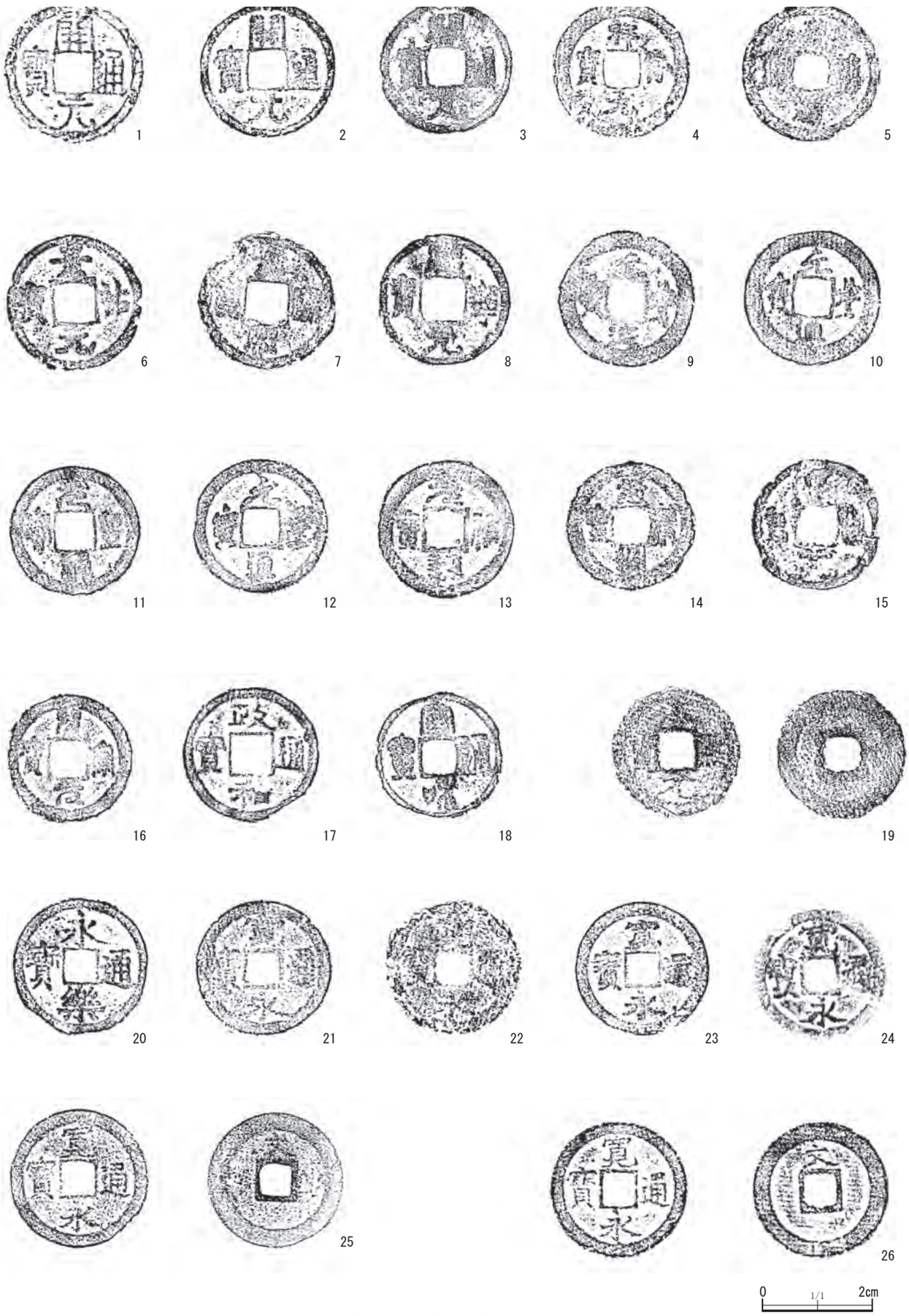
第 359 図　中・近世石器 (3)

(3) 鉄製品 (付表 4-6)

主に近現代のものとみられる鉄製品が多量に取り上げられていた。付表 4-6 には鉄刀 1 点、鍔 2 点を挙げたが、時代は不明である。D-124 から 69 点に及ぶ鉄片が出土している。近世以降のものとみられるが時代を明らかにできず未掲載とした。D-124 の遺構図は縄文時代の項にあるが誤りであり、訂正できなかった。

(4) 銭貨 (第 360・361 図・図版 64・付表 4-7)

44 点の銭貨が出土している。渡来銭は、唐の開元通宝 3 点、北宋銭 15 点、南宋銭 1 点、明銭・永楽通宝 1 点である。いずれも国内で多数流通していたことが調査成果により確認されている銭種である。大半は中・近世遺構群から出土しており、中世銭 (北宋銭＋永楽通宝) のうち 15 点はル -55 区のピット群に集中している。永楽通宝は 1 点のみなので、渡来銭の多くは明銭の流通が活発になる以前の 15 世紀前

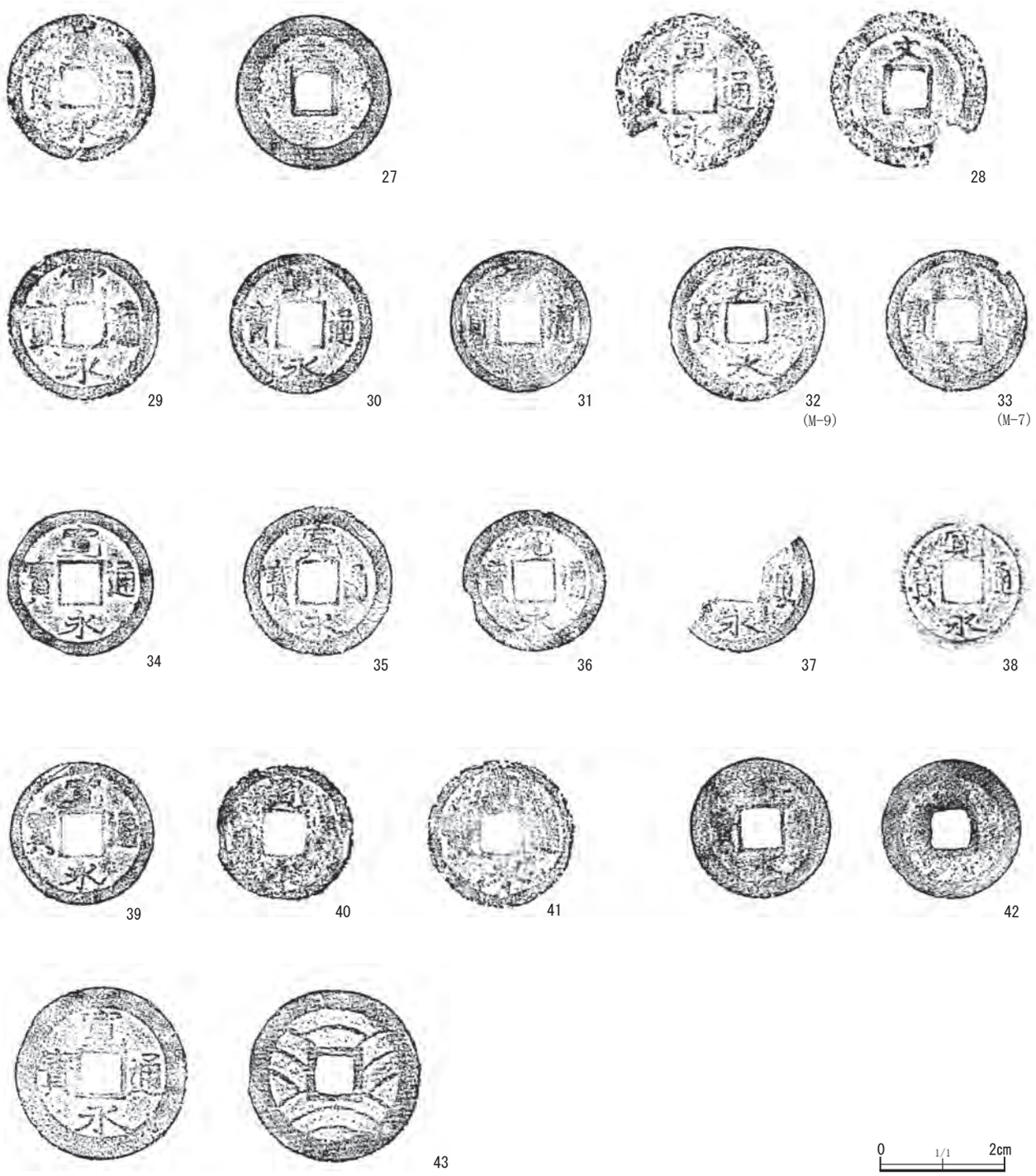


第 360 図　銭貨 (1)

半以前に国内に持ち込まれた蓋然性が高い。したがって中世遺構群がこの時期に遡る可能性も否定できない。寛永通寶は 23 点で新寛永が主体で、四文銭が 1 点混じる。このほか鉄銭の破片 1 点が出土している。分布は散漫であり、複数出土したのはラ -51・リ -52 の 4 点 (9 号溝およびその付近)、ヨ -19 の 3 点である。

(5) その他

泥面子、泥人形、土製碁石、陶製人形、ガラス瓶、銅製の煙管・刀装具、明治～昭和の銭貨、時期不明の大量の鉄製品・鉄片などが取上げられており、未掲載資料として暫定的に保管しておく。



第 361 図　銭貨 (2)

第５章　貝層と動物遺体

１　概要

餅ヶ崎遺跡では、縄文中期末から後期初頭の遺構群から多数の動物遺体が出土している。遺構内貝層は、住居跡 11 軒、小竪穴 32 基、土坑 10 基、ピット３基、陥し穴１基の計 57 か所である (第９表)。貝層の形成時期は、加曽利ＥⅢ式期に確実に遡るものはなく、ＥⅣ式期から称名寺Ⅰ式期までの短期間に限られる。この時期の遺構の貝層形成率は、住居跡 52 軒のうち 11 軒＝ 21.2％である。縄文時代の土坑 295 基のうち 45 基＝ 15％に上る。土坑は加曽利ＥⅣ式～称名寺Ⅰ式の数を明確にできないが、もし時期を絞れば２割を超えるものと思われる。この時期の集落にあって、貝層の検出率が２割というのはきわめて高いといえる。貝層の規模は小さいが、海産資源の利用は比較的活発であったといえる。貝層をもつ遺構の分布は、遺構自体の分布傾向と概ね一致して広範囲に亘っている (第 362 図)。ただし、台地の中央に少ない点は注目に値する。大型貝塚における貝殻を台地縁辺や斜面に意図的に撒くような行為とは認められないことからすれば、貝殻を含む生ゴミ等を集落の外縁部に廃棄したことが考えられる。なお、D-468(中近世土坑) でも 260 × 260cm、厚さ不明の貝層を検出している。

２　貝層とサンプル

採取した貝サンプルのうち、分析対象としたのは D-386 土坑とＦ４区貝層である (第 10 表)。また、水洗済みの貝殻のみが保管された D-190、D-215 の資料がある。このほかに外部収蔵庫に野積みされたサンプルが未整理で残っており、今後の分析を追加したい。

(1) サンプルが採取された貝層

D-386(第 243 図)　加曽利ＥⅣ式期の土坑内に 30cm × 25cm、厚さ 45cm の貝層を形成しており、サンプルは２単位に分けて採取されている。水洗前体積はカット１：1.7 リットル、カット２は計量漏れだが水洗後の貝類の個体数から仮にカット１の５倍程度あったとすると８～９リットル、両方を併せて 10 リットル前後であったと推定される。

Ｆ４区貝層　昭和 49 年に実施された確認調査№ 909 トレンチ (第３図) で検出した小規模な貝ブロックである。径 50 ｃｍの遺構を伴わない貝層とされていたが、本調査結果と付き合わせると J-14 住居跡内の貝層 (第 77 図) の可能性が高い。住居跡の時期は加曽利ＥⅣ式期である。しかし、サンプル中の土器は小片ながら残りの良い阿玉台式と加曽利Ｅ式前半の小片がまとまっており、加曽利Ｅ式後半以降とわかるものを含んでいなかった。貝層の時期は加曽利Ｅ式 (細別不明) としておく。なお、採取されたサンプルのうち、「攪乱層」とされたものについては遺物の有無を確認した上で廃棄した。攪乱層を除くサンプルは９単位、合計 19.6 リットルである。

３　分析の方法

貝サンプルは、第一合成社のウォーターセパレーションを使って水洗とフロテーションを行った。使用したフルイは５㎜・2.5㎜・１㎜である。貝類は５㎜、2.5㎜メッシュに残ったものを抽出し、集計は５㎜のみとした。巻貝は殻口下端を遺存するもの、二枚貝は蝶番の中央部分が遺存するものを１個とし、二枚貝は左右の多い方をもって最小個体数とした。動物遺体は１㎜まで抽出した。分析は貝類を西野が行い、動物遺体は千葉県教育振興財団服部智至氏・小川慶一郎氏に同定を依頼した。

第９表　貝層一覧

遺構等	遺構	遺構２	時期	分析	貝層規模	貝種・備考
J-003	住居跡	住居跡	加曽利ＥⅣ		100 × 30 × 10	ハマグリ主体（現地記載）。床面から炉内
J-007	住居跡	住居跡	称名寺Ⅰ		150 × 130 × 15	９ブロックあり。規模は最大のもの
J-010	住居跡	住居跡	加曽利ＥⅣ		90 × 40 × 20	２ブロック。アサリとイボキサゴあり（現地記載）
J-014	住居跡	住居跡	加曽利ＥⅣ	●	100 × 80 × 20	「Ｆ４区貝層」としてサンプリング、貝層は加曽利Ｅ細別不明
J-038	住居跡	住居跡	加曽利ＥⅣ		10 × 10 × 10	小ブロック２か所以上
J-046	住居跡	住居跡	称名寺Ⅰ			J-047 重複部に小ブロック多，一部 047 帰属か
J-047	住居跡	住居跡	加曽利ＥⅣ？		50 × 40 ×？	小ブロック８，一部は 046 帰属か
J-049	住居跡	住居跡	加曽利ＥⅢ？		80 × 30 ×？	小ブロック４
J-050	住居跡	住居跡	称名寺Ⅰ		160 × 70 ×？	
J-054	住居跡	住居跡	加曽利ＥⅣ		110 × 60 ×？	小ブロック６
J-060	住居跡	住居跡	加曽利ＥⅣ		40 × 35 ×？	
D-036	土坑	小竪穴	中・後期		60 × 60 × 35	
D-039	土坑	小竪穴	中・後期		20 × 10 ×？	
D-043	土坑	土坑	中・後期		20 × 20 ×？	
D-047	土坑	小竪穴	称名寺		60 × 60 × 40	
D-054	土坑	ピット	中・後期		15 × 15 × 35	
D-079	土坑	小竪穴	ＥⅣ～称名寺		20 × 20 × 20	土器はＥⅠと称名寺混在
D-088	土坑	小竪穴	称名寺		45 × 35 × 10	２層あり
D-089	土坑	小竪穴	称名寺		70 × 70 × 35	
D-091	土坑	小竪穴	称名寺		10 × 10 × 10	
D-102	土坑	小竪穴	称名寺		55 × 20 × 15	
D-121	土坑	小竪穴	中・後期		90 × 80 × 40	
D-123	土坑	小竪穴	中・後期		60 × 50 × 10	
D-150	土坑	土坑	中・後期		60 × 50 × 10	
D-156	土坑	小竪穴	加曽利ＥⅣ～称名寺		100 × 75 × 20	
D-178	土坑	小竪穴	中・後期		50 × 50 × 20	
D-179	土坑	小竪穴	称名寺		不明	マテガイあり
D-182	土坑	土坑	称名寺		? × 10 × 15	
D-185	土坑	小竪穴	称名寺		30 × 20 × 10	
D-190	土坑	小竪穴	称名寺	△	90 × 90 × 80	イボキサゴ・マテガイ主体。水洗済の現地採取貝集計
D-215	土坑	小竪穴	中・後期	△	55 × 40 × 40	アサリ幼貝主体。水洗済の現地採取貝を集計
D-271	土坑	小竪穴	称名寺		90 × 70 × 90	
D-284	土坑	小竪穴	称名寺		不明	
D-299	土坑	土坑	加曽利Ｅ後半		60 × 50 × 25	２層あり
D-300	土坑	小竪穴	中・後期		100 × 85 × 20	２層あり
D-305	土坑	小竪穴	称名寺		70 × 60 × 30	現地採取？貝わずかにあり
D-306	土坑	土坑	加曽利Ｅ後半		80 × 60 × 25	
D-308	土坑	土坑	称名寺		80 × 75 × 40	
D-337	土坑	土坑	中・後期		不明	
D-340	土坑	小竪穴	称名寺		不明	
D-341	土坑	土坑	中・後期		20 × 10 × 10	
D-342	土坑	土坑	中・後期		不明	
D-345	土坑	陥し穴	加曽利ＥⅣ		40 × 35 ×？	楕円型陥し穴，J-54 の貝層が混入したもの
D-351	土坑	小竪穴	加曽利Ｅ後半		40 × 35 × 25	
D-356	土坑	小竪穴	中・後期		35 × 25 × 65	
D-365	土坑	小竪穴	加曽利Ｅ前半		110 × 110 × 40	

遺構等	遺構	遺構 2	時期	分析	貝層規模	貝種・備考
D-373	土坑	小竪穴	加曽利 E 後半		65 × 30 × 15	
D-378	土坑	ピット	中・後期		30 × 25 × 25	
D-380	土坑	小竪穴	加曽利 E 後半		150 × 120 × 45	２層あり
D-383	土坑	土坑	中・後期		20 × 10 × 15	
D-386	土坑	小竪穴	加曽利 E 後半	●	30 × 25 × 45	イボキサゴ主体
D-389	土坑	小竪穴	称名寺		70 × 60 × 25	
D-390	土坑	小竪穴	加曽利 E Ⅳ～称名寺		95 × 90 × 25	
D-393	土坑	小竪穴	称名寺～堀之内		105 × 90 × 100	３層ありか？
D-395	土坑	小竪穴	中・後期		80 × 60 × 40	現地採取コウイカ科 1
D-414	土坑	小竪穴	中・後期		75 × 45 × 20	
D-433	土坑	ピット	加曽利 E 後半		60 × 40 × 30	

貝層規模は，長さ×幅×厚さ，単位は cm。ブロック複数の場合は最大のもの

貝層検出遺構数		57 か所	（流入 1 か所を含む）
住居跡	11	軒	
小竪穴	32	基	
土坑	10	基	
ピット	3	基	
陥し穴	1	基（J-54 の貝層の流入）	

4　貝類

(1) 貝種組成 (第 12 表)

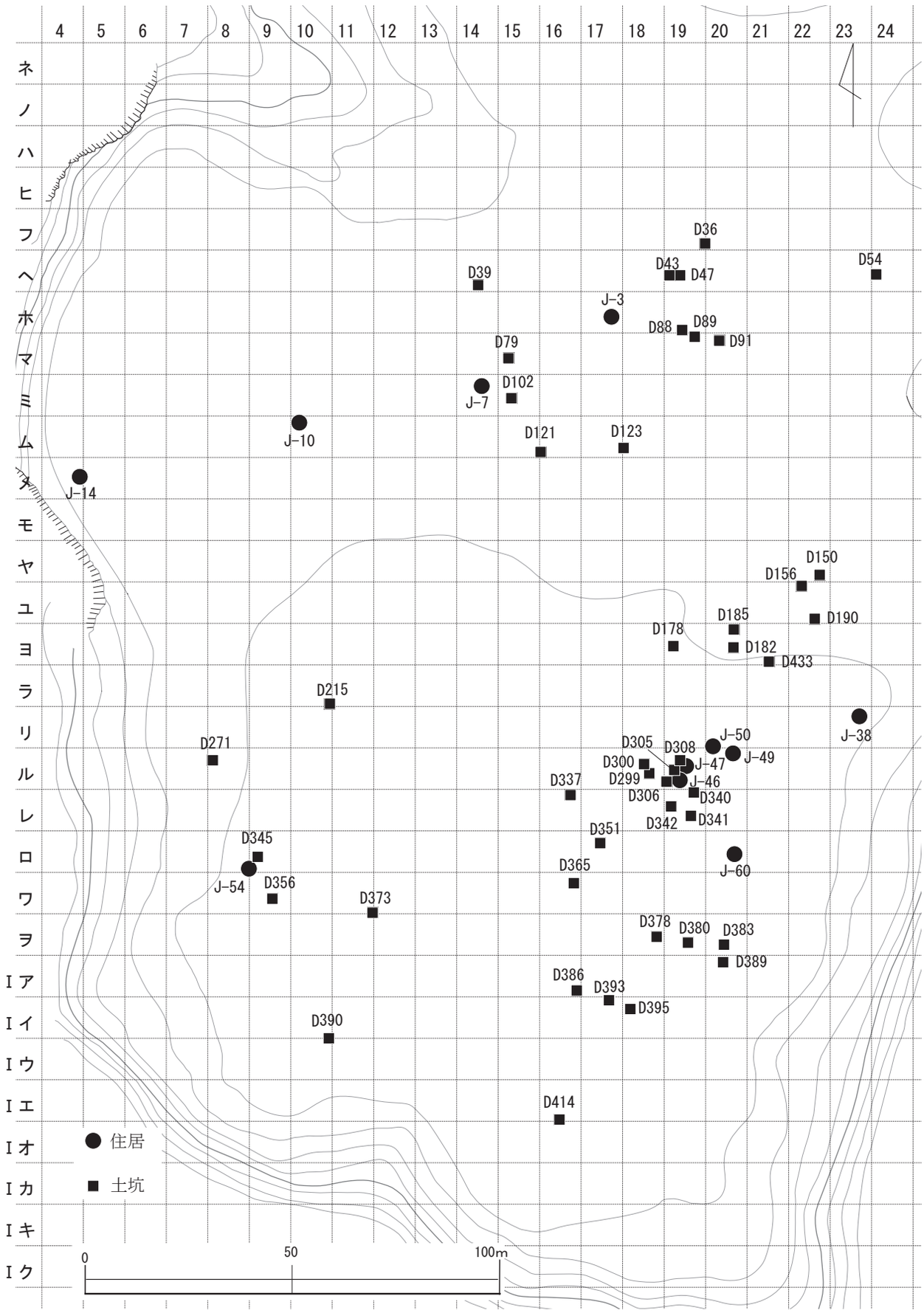
第 11 表のように 13 科 19 種以上を検出しており、貝種組成を第 12 表に示した。同定基礎データは付表 5-1 にある。第 12 表下のグラフでは a 全体のほかに、b イボキサゴを除いた組成も示した。

D-386 はイボキサゴが 94.2％と圧倒的であり、ハマグリも 4.1％とはいえ比較的まとまっている。数は少ないがアサリ・シオフキ・アカニシも食用に持ち込まれたものであろう。Ｆ 4 区もイボキサゴとハマグリが全体の 84.6％を占める。カット 7 がほぼイボキサゴのみであるため、全体としてみるとイボキサゴが 59.2％、ハマグリが 25.4％となるが、ほかのカットではイボキサゴが突出せず、ハマグリと拮抗しており、２種以外のアサリ・マガキ・オキアサリ・シオフキも比較的多く混じっている。

D-190 と D-215 は水洗済みの貝のみが保管されたもので、どのように抽出されたものか不明であるため参考資料として掲載する。いずれも組成自体は一般的であるが、サイズが特異である。D-190 は最小個体数がイボキサゴ 65、マテガイ 13、ハマグリ 1 、シオフキ 1 である。出土状況写真をみるとイボキサゴが圧倒的に多く、この数値は平均的な内容を示していないことは明らかであるが参考として記載した。マテガイはきわめて大きい。最大の殻長は 125.7㎜ (殻幅 17.3㎜) であり、これでもかなり大きいが、拡幅最大は 19.7㎜というさらに大きなものもみられる。D-215 はアサリ 59、ハマグリ 5 、オキシジミ 3 、シオフキ 1 という内容だが、ハマグリ 1 個以外すべて稚貝である。貝層はイボキサゴの純貝層なので、イボキサゴ以外を取上げた可能性が高い。稚貝ばかりなのは、かごを使ったイボキサゴ漁に伴う混獲物の可能性が高い。

(2) 計測値分布 (第 13 表)

計測元のデータは付表 5-2 にある。イボキサゴは、都川・村田川水系の中・後期貝塚の平均的な大きさであり、Ｆ 4 区 -3 の平均 13.2㎜は小さ目、Ｆ 4 区 -1 の 15.5㎜は大きめである。ウミニナ類は大きな個体を含まない。マガキも小さ目のものが中心である。ハマグリは、D-386 の平均 32.2㎜は注記大型貝塚



第 362 図　遺構内貝層分布図

の平均的な大きさであり、中期後葉としては小さ目といえる。F4 区はきわめて小さく、産卵前の資源量に影響を与えうるものも採取している。このことは同じ水系で漁をしたとみられる加曽利北貝塚の一部の貝層においても認められる。

(3) その他の観察事項

Ｆ 4 区のマガキ左殻の付着痕跡をみると (F4 区 -4・5・6・8) アシ等 1 、ウミニナ類 8、アサリ 1 、マガキ同士 9 であった。マガキ同士で付着したものも大きな個体はみられない。大きなカキ礁に由来するものではない。

第 10 表　貝サンプル一覧

遺構等	遺構	カット№	体積	層	内容・備考
D-215	土坑	1	－	－	アサリの稚貝主体
D-386	土坑	1	1.7	貝層 1	
D-386	土坑	2	－	貝層 2	計量漏れ，8 ～ 9 リットルか
D-386 合計			約 10 リットル		
Ｆ 4 区貝層	J-14 住居	1	1.3	1-1	東西セク 15 層
Ｆ 4 区貝層	J-14 住居	2	1.8	3-5 ？	混貝土層
Ｆ 4 区貝層	J-14 住居	3	3.7	1-2d	破砕貝層
Ｆ 4 区貝層	J-14 住居	4	1.7	4-5c	マガキ混じり第 2 混貝土層
Ｆ 4 区貝層	J-14 住居	5	3.4	5-4a	純貝層
Ｆ 4 区貝層	J-14 住居	6	1.4	3-3b	破砕貝層
Ｆ 4 区貝層	J-14 住居	7	2.5	3-5b	混貝土層
Ｆ 4 区貝層	J-14 住居	8	1.7	2-2	灰混じり混貝土層
Ｆ 4 区貝層	J-14 住居	9	2.1	10 層	ドリ東西セク
Ｆ 4 区貝層合計			19.6	リットル	

第 11 表　貝類種名一覧

腹足綱	原始腹足目	ニシキウズガイ科	イボキサゴ	*Umbonium (Suchium) moniliferum*
		リュウテンサザエ科	スガイ	*Lunella coronata coreensis*
	中腹足目		ウミニナ類	*Potamididae* spp.
		タマガイ科	ツメタガイ	*Glassaulax didyma*
	新腹足目	アクキガイ科	アカニシ	*Rapana venosa*
			イボニシ	*Thais (Reishia) clavigera*
		ムシロガイ科	アラムシロ	*Reticunassa festiva*
		エゾバイ科	バイ	*Balylonia japonica*
二枚貝綱	フネガイ目	フネガイ科	ハイガイ	*Tegillarca granosa*
	ウグイスガイ目	イタボガキ科	マガキ	*Crassostrea gigas*
	イシガイ目	イシガイ科	イシガイ科	*Unionidae* gen. & sp. Indet.
	マルスダレガイ目	バカガイ科	シオフキ	*Mactra quadrangularis*
		マテガイ科	マテガイ	*Solen strictus*
		シジミ科	ヤマトシジミ	*Corbicula japonica*
		マルスダレガイ科	カガミガイ	*Phacosoma japonicum*
			アサリ	*Ruditapes philippinarum*
			オキアサリ	*Gomphina (Nacridiscus) aequilatera*
			ハマグリ	*Meretrix lusoria*
			オキシジミ	*Cyclina sinensis*
		オオノガイ科	オオノガイ	*Mya arenaria oonogai*
	計	14 科	20 種	

5　魚類・哺乳類

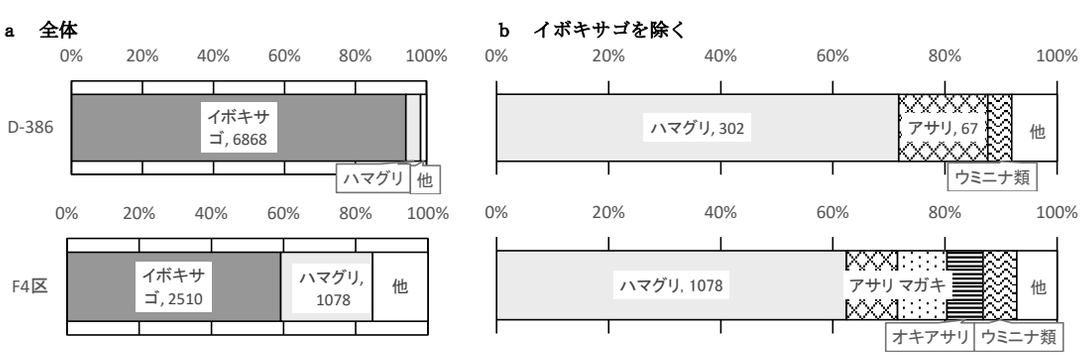
２か所の貝層で採取した貝サンプルで魚類８分類群・哺乳類２分類群を検出しており、同定結果を付表5-3、同定破片数 (NISP) を付表 5-4 に示した。F4 区貝層では魚類 16 点、哺乳類３点、D-386 では魚類５点である。また D-312(縄文時代土坑) と H-24(平安時代住居跡) で焼骨２点が取り上げられている。

魚類　F4 区貝層ではエイ・イワシ類 (ニシン科)、ウナギ、スズキ、キス、タイ科、コチ、カレイ、D-386 ではイワシ類 (ニシン科)、ボラ、スズキ、タイ科、コチをそれぞれ１点から数点検出した。これらの魚種は、都川水系の中・後期貝塚で普通に見られるものである。当遺跡では土器片錘が出土しているので、都川の河口付近で網漁が行われたことを示すものであろう。点数は少ないが、水洗選別を実施した２つのサンプルでいずれも魚類を検出したことは重要である。当地域の中期後葉・加曽利Ｅ式後半期の貝層には魚類がほとんど混じらない事例が大半を占めるからである。海産資源の比較的活発な利用は魚類遺体からもうかがうことができる。

哺乳類　D-386 の貝サンプルでネズミ１点、イヌまたはタヌキ２点が混じっていた (付表 5-5)。また、D-312 と H-24 で白色化した焼骨片各１点が取り上げられている。

第 12 表　　貝種組成

種名	D-386-1	D-386-2	**D-386**	**%**	F4区-1	F4区-2	F4区-3	F4区-4	F4区-5	F4区-6	F4区-7	F4区-8	F4区-9	**F4区**	**%**
イボキサゴ	1246	5622	6868	94.2%	176	29	158	10	34	2	2051	10	40	2510	59.2%
ハマグリ	6	296	302	4.1%	71	120	216	31	220	60	10	143	207	1078	25.4%
アサリ		67	67	0.9%	7	11	25	48	49	6		5	6	157	3.7%
マガキ				0.0%	6	10	13	28	25	39		22	10	153	3.6%
オキアサリ				0.0%	9	12	18	9	42	7		2	12	111	2.6%
ウミニナ類		18	18	0.2%	7	19	22	4	33	11	1	5	2	104	2.5%
他		34	34	0.5%	22	5	14	7	22	11	7	12	24	124	2.9%
合計	1252	6037	7289	100.0%	298	206	466	137	425	136	2069	199	301	4237	100.0%
他の内訳															
シオフキ		22	22	0.3%	3	3	4	3	15	5	1	8	19	61	1.4%
オキシジミ							3		3	5	2	2	2	17	0.4%
イボニシ					8									8	0.2%
ハイガイ					7		1							8	0.2%
アラムシロ		10	10	0.1%	1						4	1	1	7	0.2%
カガミガイ							2	3	1					6	0.1%
アカニシ		2	2	0.0%	2	1	1							4	0.1%
ヤマトシジミ							1		1	1			1	4	0.1%
スガイ									2			1		3	0.1%
ツメタガイ						1	2							3	0.1%
バイ								1						1	0.0%
イシガイ科					1									1	0.0%
オオノガイ													1	1	0.0%



第 13 表　　貝類計測値分布

イボキサゴ殻径

mm	D-386 -1	D-386 -2	F4区-1	F4区-3	F4区-7
-6.0					
-7.0					
-8.0					
-9.0					
-10.0					
-11.0					1
-12.0	5	4	2	6	3
-13.0	28	16	1	6	24
-14.0	40	41	10	7	38
-15.0	69	76	32	4	57
-16.0	46	52	38		60
-17.0	10	10	32	2	13
-18.0	2		11		3
-19.0			2		1
-20.0		1			
-21.0					
-22.0					
-23.0					
-24.0					
試料数	200	200	128	25	200
平均	14.3	14.5	15.5	13.2	14.5
標準偏差	1.2	1.1	1.2	1.4	1.3

ウミニナ類殻高

mm	F4区
-2.0	
-4.0	
-6.0	
-8.0	
-10.0	2
-12.0	
-14.0	2
-16.0	5
-18.0	7
-20.0	10
-22.0	12
-24.0	14
-26.0	8
-28.0	2
-30.0	
-32.0	
-34.0	
-36.0	
-38.0	
試料数	62
平均	20.3
標準偏差	4.0

マガキ殻高

mm	F4区
-15.0	
-17.5	1
-20.0	3
-22.5	1
-25.0	8
-27.5	4
-30.0	7
-32.5	11
-35.0	4
-37.5	5
-40.0	8
-42.5	6
-45.0	4
-47.5	5
-50.0	2
-52.5	1
-55.0	1
-57.5	1
-60.0	1
試料数	73
平均	34.7
標準偏差	9.5

アサリ殻長

mm	D-386	F4区
-15.0		
-17.5	2	
-20.0	7	1
-22.5	8	1
-25.0	5	6
-27.5	4	4
-30.0	5	4
-32.5	2	7
-35.0	3	5
-37.5	1	6
-40.0		2
-42.5		1
-45.0		
-47.5		
-50.0		
-52.5		
-55.0		
-57.5		
-60.0		
試料数	37	37
平均	24.5	30.4
標準偏差	5.6	5.6

オキアサリ殻長

mm	F4区
-15.0	
-17.5	
-20.0	
-22.5	1
-25.0	2
-27.5	5
-30.0	5
-32.5	5
-35.0	4
-37.5	7
-40.0	5
-42.5	5
-45.0	1
-47.5	
-50.0	
-52.5	
-55.0	
-57.5	
-60.0	
試料数	40
平均	33.1
標準偏差	5.9

ハマグリ殻長

mm	D-386	F4区-3	F4区-5	F4区-9
-15.0				
-17.5				
-20.0				1
-22.5	6	8	6	6
-25.0	17	16	14	37
-27.5	23	17	19	56
-30.0	38	8	23	37
-32.5	44	7	15	16
-35.0	18	4	6	7
-37.5	11	1	1	6
-40.0	14	1	1	5
-42.5	11	1	1	4
-45.0	9			3
-47.5	3		1	
-50.0	3			1
-52.5				
-55.0	1			
-57.5	2			
-60.0				
試料数	200	63	87	179
平均	32.2	26.9	28.2	28.1
標準偏差	6.7	4.4	4.3	4.8

第６章　まとめ

１　旧石器時代

本遺跡からは 13 か所のブロックが検出され、それらは５つの文化層に区分された。石器の総点数は 1,024 点であり、そのうち 21 点が単独出土である。ブロック出土石器の器種の内訳は、ナイフ形石器６点、尖頭器１点、細石刃２点、彫器２点、掻器７点、打面再生剥片５点、稜付剥片２点、二次加工のある剥片 22 点、微細剥離痕のある剥片 26 点、剥片 475 点、砕片 243 点、細石刃核１点、石核 34 点、敲石１点、礫 172 点、礫片４点である。単独出土石器の内訳は、ナイフ形石器２点、尖頭器９点、有舌尖頭器４点、楔形石器１点、剥片４点、局部磨製石斧１点である。さいごに、各文化層の特徴をまとめる。

第１文化層（第１ブロック、第２ブロック）

第１ブロックと第２ブロックで構成される。Ⅸｃ層上部からⅦ層、とくにⅨａ層からⅦ層を中心に石器が出土したと考えられる。各ブロックの出土点数は少なく、またブロック間に関係性は認められない。第１ブロックからは６点の石器が出土し、内訳はナイフ形石器１点、二次加工のある剥片１点、剥片４点である。ナイフ形石器は青灰色のチャートを素材とし、先頭部が極めて鋭角である (第 19 図 - 1)。第２ブロックからは 31 点が検出され、内訳は二次加工のある剥片１点、剥片 24 点、砕片１点、石核２点、礫３点である。本遺跡では最も古い時期の石器群であり、近似した時期の石器群として、袖ケ浦市台山遺跡第１文化層、印西市泉北側第３遺跡第１文化層などが考えられる。

第２文化層（第３ブロック、第４ブロック）

第３ブロックと第４ブロックで構成され、遺跡南西部の南端に位置する。Ⅶ層上部からⅥ層に石器が分布する。第３ブロックからは 263 点が出土し、内訳は打面再生剥片２点、二次加工のある剥片１点、微細剥離痕のある剥片２点、剥片 149 点、砕片 91 点、石核８点、礫 10 点である。ガラス質黒色安山岩が 222 点と全体の８割以上を占め、これに石核１点 (第 23 図 -10) を含む黒曜石や、また硬質頁岩などが伴う。円礫状の自然面の残存した石核が複数出土し、また剥片や砕片も一定数伴うことから、この地点に原石あるいはそれに近い状態の石器が持ち込まれ、石器製作が実施された可能性が考えられる。第５ブロックは石器総点数が５点と限られており、全体像は不明瞭と言わざるを得ない。器種の内訳は、剥片３点、石核２点である。石核は小さく白い球顆が認められる黒曜石を素材としている。

第３文化層（第５ブロック～第 10 ブロック）

本遺跡において最も多くの石器ブロックが包含されている。Ⅵ層上部からⅣ層、とくにⅤ層からⅣ層に石器が分布すると考えられる。遺跡南西部の舌状台地上の南端に石器集中部を形成しており（第 18 図）、一部にはブロック間の石器接合も認められる（第 26 図）。第５ブロックでは、硬質頁岩、黒曜石、ホルンエフェルス、嶺岡産珪質頁岩などを素材とした石器群が確認された。硬質頁岩製の石核は剥片と接合し（第 28 図 10）、また別の剥片（第 28 図４）と同一母岩と考えられる。第６ブロックでは、玉髄と硬質頁岩の二種類の石材で構成される石器群が検出された。そして、第７ブロックから第９ブロックにおいては黒曜石を主体とした石器群が確認された。第７ブロックから 60 点、第８ブロックから 30 点、第９ブロックからは 300 点、合計 390 店の石器が検出され、そのうち 370 点（約 94％）の石材が黒曜石である。素材を縦方向に利用した二側縁のナイフ形石器（第 32 図１・２）や、自然面の残存する石核（第 36 図 25 ～ 28）が出土した。なお、礫群は伴わない。これに類似する石器群として、袖ケ浦市八重門田遺跡（第 10 トレンチ）などが挙げられる。

第４文化層（第 11 ブロック、第 12 ブロック）

遺跡南西部と東部の境界部に立地する第 11 ブロックと第 12 ブロックで構成される。Ⅳ層上部からⅢ層に石器の分布がみられる。ブロック間に接合関係が認められ、また石器形態や石器石材の特徴が類似することから、各ブロックは近接する時期に形成された可能性が存在する。

第 11・12 ブロック合わせて 242 点の石器が出土し、その内訳は尖頭器 1 点、掻器 6 点、打面再生剥片 1 点、稜付剥片 1 点、二次加工のある剥片 4 点、微細剥離痕のある剥片 16 点、剥片 55 点、砕片 11 点、石核 5 点、敲石 1 点、礫 141 点である。刃部が半円状で厚みのある掻器が特徴的である (第 39 図 - 1、2、第 42 図 - 1、2、第 43 図 - 3)。また尖頭器 1 点は黒曜石製で、攪乱層からの出土である。

本文化層では嶺岡産珪質頁岩が主体的に利用される。それら石器には原礫面がみられ、石核も伴うことから、この地点で原石からの石器製作が行われた可能性も考えられる。他方で、第 12 ブロックにおいては、破砕し赤く焼けた痕跡がみられる礫群が確認された。

本文化層の石器群に類似する例として、市原市武士遺跡 (第 5 文化層)、印西市角田台遺跡 (第 1 - 3 A 地点、第 1 - 5 A 地点など) 等が挙げられる。

第５文化層（第 13 ブロック）

石器の形態から文化層を判断した。第 13 ブロックが該当し、細石刃 2 点、剥片 18 点、砕片 1 点、細石刃核 1 点、石核 2 点、礫 3 点、総計 27 点が出土した。細石刃核は稜柱形を呈し、頁岩を素材としている。一方で、細石刃 2 点は黒曜石製である。本ブロックでは黒曜石、頁岩、ガラス質黒色安山岩、砂岩、流紋岩など、多種の石材が利用されている点が特徴である。近似する時期の石器群には、佐倉市大林遺跡 (第 1 文化層)、成田市十余三稲荷峰遺跡 (第 6 文化層) 等が挙げられる。

以上、各文化層における石器ブロックの特徴について述べた。くわえて、ヤ -26 グリッドにおけるⅨ c 層の下面より、ホルンフェルス製の局部磨製石斧 (第 49 図 - 1) が単独出土していることを付記しておく。本遺跡では、すでに報告されている遺跡北部 (第 2 期工事調査区) の石器ブロックも含めて、局部磨製石斧を伴う古期の石器群から、細石刃を伴う新しい時期の石器群まで認められる。連続的ではないものの、比較的長期間にわたり人々が訪れこの地を利用した点が特徴といえる。

2　縄文時代

(1) 土地利用の概観と早期前葉の様相

出土した土器の内容から、縄文早期から後期にかけて土地利用があったことを確認できる。そのなかで、多数の土器から積極的な利用が想定できるのは早期前葉、中期中葉～後期初頭の二つの時期である。

下総台地における早期前葉・撚糸文期の遺跡分布の中心は古鬼怒湾・九十九里両水系の分水嶺付近にあった。高崎川、根古名川、取香川、高谷川など 6 つの谷頭が集まる広い台地上であり、ここに遺跡が集中する傾向は旧石器時代から早期中葉・沈線文土器の時期まで継続する。遺物包含層が多数形成され、この時期としては竪穴住居跡の検出例も多い。出土した土器の量はおびただしく、復元個体もきわめて多い。撚糸文期の遺跡がその次に多いのは東京湾・古鬼怒湾・九十九里の三大水系が交わる土気・大網地区である。千葉市内では中鹿子第 2 遺跡・小山遺跡・文六第 1 遺跡で多くの土器が出土している。また、東京湾・古鬼怒湾両水系の分水界付近にも比較的多くの遺跡が分布している (芳賀輪遺跡・芋ノ谷東遺跡他)。分水嶺付近の活発な利用が、この時期の最大の特徴である。ただし、東京湾沿岸域においても千葉市以南では包含層を形成する遺跡が多く、餅ヶ崎遺跡はその代表例として重要である。土器の中心は井草Ⅱ式～稲荷

第 363 図　縄文時代中・後期分布図

台式であり、南西部のもっとも標高の高い範囲から集中的に出土している。早期後葉の初期から後半期にかけて断続的な居住・活動があったものとみられる。南南東２km の近傍には、多数の撚糸文土器が出土した石神遺跡 (東寺山石神遺跡) も存在しており、都川から村田川水系にかけては陥し穴の検出数も多い。旧石器時代から撚糸文期にかけて、この地域が比較的活発に利用された背景として、狩猟好適地であったことや、印旛沼南部の台地と陸路が通じていたことが考えられる。

(2) 中・後期集落の特徴

検出遺構数は住居跡 85 軒・小竪穴 110 基・土坑 185 基・ピット 26 基を数える。細別時期の判明した住居跡の検出数は、中期中葉 (加曽利ＥⅠ・Ⅱ式)8、中期後葉 (加曽利ＥⅢ・Ⅳ式)28、中期後葉～後期初頭 11、後期初頭 20、後期初頭～後期前葉 (堀之内式)4、後期前葉 4、後期後葉 (後期安行式)1 であった。

まず本格的な集落形成以前の状況をみると、加曽利ＥⅠ式期は２軒あるが (J-20・44)、J-44 はＥⅠ式の前半、J-20 はＥⅡ式後半であり、それぞれ１軒である。ＥⅡ式期は６軒で (J-4・11・15・19・34・43)、15・43 は古段階、４・19・34 は中段階、11 は新段階に比定できる。遺構外で抽出された土器は、ＥⅠ式古段階とＥⅡ式中段階のものが当該時期の住居跡周辺でややまとまっているものの点数は少ない。時折居住地となるような小規模集落であったものとみられる。なお、当地域の加曽利ＥⅡ式土器はキャリパー形・曽利系・連弧文系の３種類の安定した組み合わせを特徴とするが、中期大型貝塚周辺に分布する短期・小規模な集落では、曽利系と連弧文系の割合が高いという特徴がある。当遺跡においても同様であり、この見方を追認することができた。

集落の主体は中期後葉の大型貝塚消滅後である。ただし、その当初にあたる加曽利ＥⅢ式期の住居跡は疑問の残る２軒を含めても５軒に留まる。遺構外においてもＥⅢ式期の土器は抽出されていない。以上から、加曽利ＥⅠ式からＥⅢ式期にかけては小規模な集団が断続的に居住する場であったものとみられる。

集落規模が拡大するのは加曽利ＥⅣ式～称名寺式期であり、54 軒の住居跡を検出している。この数は県内最多であろう。遺構内貝層を形成する住居跡 11 軒もすべてこの時期のものである。小竪穴 32、土坑 10 基、ピット３基も合わせると遺構内貝層は 56 か所となり、この数もこの時期の集落としてはとても多いといえる。細別時期ごとの住居跡と小竪穴の数は暫定的ではあるが以下のようになる。小竪穴は時期決定が困難なものが多く、小片から時期を判断する場合、判断しやすいものが多くなるなど、本来の割合とは異なっている可能性がある。すでに抽出された遺物から判断したこともあり、将来的には見直しが必要である。

１	阿玉台後半～加曽利Ｅ前半	住居８・小竪穴３
２	加曽利Ｅ後半 (ＥⅡ後～Ⅲ主)	住居５・小竪穴 13
３	加曽利ＥⅣ	住居 21・小竪穴
3･4	ＥⅣ～称名寺	住居 11・小竪穴 14
４	称名寺Ⅰ	住居 20・小竪穴 28
５	称名寺Ⅱ～堀之内１	住居９・小竪穴４
６	後期後半～晩期	住居１・小竪穴
不明 (中・後期)		住居 10・小竪穴 48

遺構分布 (第 360 図) をみると、標高 27 m範囲内に稠密であり、その北側の標高 26 mの範囲にも広がりをもつ。図示はできなかったが、細別時期ごとにみると、４期の明確な変化が認められる。

①加曽利Ｅ式前半期：集中区の北側 26 m地帯に住居が集中し、小竪穴は集中区の中間のやや遺構の少

ない部分に分布する。

②加曽利Ｅ式後半期：集中区のなかでやや広範囲に分布する。南半にはごく少ない。

③加曽利ＥⅣ～称名寺式期:集中区の北東端、西端、北側 26 m地帯の３か所に住居と小竪穴が集中する。集中区南半には小竪穴が若干分布するが住居跡は皆無である。

④称名寺Ⅱ・堀之内１式期：住居・小竪穴とも集中区の南端部のみに集中する。

注目すべき遺構として柄鏡形住居跡 (J － 12) を挙げることができる。長さ 1.8 m、壁溝を伴う明確な張出部をもち、基部と先端に埋設土器を伴っていた。出土土器は加曽利ＥⅤ式を主体である。加曽利ＥⅣ式きから称名寺式期にかけての最大規模の集落において、称名寺式期の柄鏡形住居跡が１軒のみ見つかったことは、その導入の時期を考える上で重要な事実といえよう。

遺構内貝層の分布は、遺構全体の分布傾向と概ね一致するが (第 358 図)、台地の中央には少なかった。中・後期大型貝塚においては、集落形成期間の前半に貝殻を台地縁辺や斜面の遺構外に撒く行為にが顕著に認められるが、当遺跡を含めてこの時期には遺構外の貝層形成例がみられない。台地上の比較的周縁に遺構内貝層が分布する原因は明確にできないが、生ゴミを集落の中心部に捨てないという配慮があった可能性がある。ここに継続的な居住の意図を読み取ることができるのではに分散居住地ではみられない

(3) 中期末から後期初頭の土器

本書の住居跡出土土器や、遺構外第７群土器の記載のなかで「加曽利ＥⅤ式」とした土器は称名寺式土器と共伴する加曽利Ｅ式土器の系譜をひく土器である。編年的な位置づけと、それによる集落の時期比定をめぐって調査当時から注目されていた。今日では類例も増えたが、これだけまとまった少なく、県内有数の良好な資料といえる。遺構内一括のとくに良好な資料を挙げておく。

・加曽利ＥⅢ式　J-59

・加曽利ＥⅣ式　J-18・J-38・J-54・J-69・J-74

・加曽利ＥⅣ式～ＥⅤ式　J-48

・加曽利ＥⅤ式　J-2・J-12・J-37・J-62・D-179・D-277

J-2・12・62 は称名寺式土器が混じらない。J-37 は加曽利ＥⅤ式主に称名寺式第１段階が混じる。D-179 は器形は加曽利Ｅ式系だが、文様には称名寺式系の意匠文が混じっている。

・称名寺Ⅰ式　Ｊ -26・J-27・J-41

J-41 は第２段階主体でＥⅤ式混じる。Ｊ -26・J-27 は第３段階主体である。

・称名寺Ⅱ式　J-71

J-71 は称名寺Ⅱ式にⅠ式が混じる。

(4) 中期後葉から後期初頭の集落動態

東京湾東岸域における中期大型貝塚形成期＝中期中葉の集落の大きな特徴は、「同一地点での反復居住と集合的居住」(加納 2000) である。この特徴は、拠点集落が成立した阿玉台・勝坂式後半から加曽利ＥⅠ式までに顕著である。拠点集落では環状の遺構帯のなかにほとんどの住居跡が含まれ、周辺の小規模集落やそこに含まれる住居跡の数は少ない。したがって、東京湾沿岸に形成された大規模貝層を伴う拠点集落への人口の集中度はきわめて高かったと推定される。こうした特徴が薄れて分散の傾向が現れるのは、加曽利ＥⅠ式の後半であり、ＥⅡ式期に顕著になる。拠点集落では、環状遺構帯に住居跡が集中することは変わりないが、環の外にも形成されるようになる。また、拠点集落に隣接する比較的規模の大きな集落が、その周囲にはごく小規模な集落が現れる。その周囲には明確な集落の空白があって単位集落群を明確にとらえることができる (西野 2005a)。

第 364 図　加曽利ＥⅠ・ＥⅡ式期の集落分布

第 361 図は加曽利Ｅ式前半 (Ⅰ・ＥⅡ式) 期の集落分布である。貝塚を伴う集落は▲、伴わない集落は●とし、大型貝塚は大きな記号で示している。大型貝塚は東京湾東岸域の２か所に集中しており、北側は奥東京湾湾口部貝塚群、南側は都川・村田川貝塚群と呼称されている。餅ヶ崎遺跡は、都川・村田川貝塚群の北端部付近に位置している。これより北側は、集落の空白地帯であり、奥東京湾湾口部貝塚群の南端に位置する船橋市高根木戸遺跡と海老ヶ作遺跡の間に存在するのは、二つの貝塚群の中間に点在する２つの小規模集落 (千葉市地蔵山遺跡・子和清水遺跡) と、東京湾湾口部貝塚群の外側に張り付くように点在する小・中規模集落 (船橋市上ホシ・薬円台・源七山、八千代市八王子台・西芝山南) が存在するに過ぎない。いずれも貝層をまったく形成しない非貝塚集落である。餅ヶ崎遺跡は住居跡８軒で貝層は形成していないので、都川・村田川貝塚群の外縁部に張り付くように存在する中規模集落と位置付けることができる。八王子台遺跡は加曽利ＥⅡ式新段階からＥⅢ式期の集落であり、石鏃・同未

a 加曽利ＥⅡ

大型貝塚＝大規模集落１つないし２つと複数の中・小規模集落が単位集落をなし、それが集まって広域貝塚・集落群（都川・村田川貝塚群）をつくる。代表的な大型貝塚＝大規模集落は、加曽利「北貝塚」、荒屋敷、有吉北・南。都川・村田川貝塚群縁辺に貝塚をもたない中・小規模集落が点在。

餅ヶ崎遺跡：都川・村田川貝塚群の縁辺の小規模集落となる。

b 加曽利ＥⅢ

中期大型貝塚はすべてなくなる。加曽利ＥⅡ式期の大規模集落のあった場所を避け、その周辺中心に中・小規模集落が点在。牛尾舛・小中台、すすき山、加曽利、うならすずなど数十軒の住居跡がある中規模集落では貝採取が活発だが遺構外の大きな貝層は形成されない。

餅ヶ崎遺跡：貝層をもたない小規模な集落として存在した。

c 加曽利ＥⅣ・称名寺Ⅰ

集落分布は広域に分散。中期大型貝塚があった場所よりも小中台、愛生・餅ヶ崎、うならすず・多部田などの集落の規模が大きくなり、貝類の利用も活発だが遺構外の大きな貝層は形成されない。後期大型貝塚の多くは、この時期から集落が形成されるが、称名寺Ⅱ式期に連続しない。

餅ヶ崎遺跡：この時期としては最大の規模の集落となる。

d 堀之内１

後期大型貝塚＝大規模集落が野田市から君津市にかけて広域貝塚・集落群をつくる。代表的な大型貝塚は、加曽利「南貝塚」、犢橋、園生、草刈場、矢作、誉田高田、六通、大膳野南など。大半は中期大型貝塚とは別の場所が選ばれたが、加曽利などいくつかだけは同地点を選んでいる。

餅ヶ崎遺跡：小規模集落となり、園生貝塚に大規模集落できる。

第 365 図　集落分布の変化

成品や剥片類が多量に出土していることは餅ヶ崎遺跡と共通している (倉内・島立・落合 2013)。

こうした中期大型貝塚群の縁辺部の集落は、加曽利ＥⅠ式期に現れ、ＥⅡ式期の後半からＥⅢ式の初めにかけて数を増し、ＥⅢ式期の集落分布の中心となる (西野 2008)。この時期には、中期大型貝塚等のかつての大規模集落への集中居住から、その周縁部の非居住域への分散居住へと居住様式が大きく変化する (加納 2000)。餅ヶ崎遺跡はこの時期の住居跡も存在するが、加曽利ＥⅣ式期に拡大している。

第 362 図は加曽利ＥⅢ式期 (上段) とＥⅣ式・称名寺式期 (下段) の集落分布である。記号は 360 図と同様である。すすき山遺跡は加曽利ＥⅢ式期の住居跡 11 軒、小竪穴 31 基、遺構内貝層 10 か所を検出している (千葉市史編纂委員会 1976)。

県内で、加曽利ＥⅣ式から称名寺式期の住居跡を多数検出した例を挙げると、成田市長田雉子ヶ原遺跡 (57 軒)、千葉市うならすず遺跡 (37 軒)、市原市武士遺跡 (27 軒)、市川市権現原遺跡 (23 軒) 千葉市愛生遺跡 (19 軒)、香取市多田遺跡 (12 軒) などがある。餅ヶ崎遺跡の 54 軒は、長田雉子ヶ原遺跡と双璧をなすといえる。うならすず遺跡と愛生遺跡は都川水系にあり、とくに後者は同一台地上に隣接する関係の深い遺跡である。この３遺跡は、①加曽利ＥⅣ式～称名寺式期以外の住居が少ない、②貝層の形成が活発、③石棒が多いという共通点がある。

(5) 石器・石材の入手

石核類 146 点・約 1.9kg、剥片類 20,290 点・約 3.4kg が取上げられており、当地域の縄文集落としてはとても多く、中・後期としてはかなり大きな素材が目立っている。D-310 小竪穴で 1 万点以上、J-18、J-46・47、D-55 では千点以上出土したほか、きわめて広範囲で剥片類が出土している。出土した剥片石器の成品･未成品は、石鏃 53 点、同未成品 89 点、石錐 19 点が大半を占めており、大量に出土した石核･剥片類は主に石鏃製作に伴うものとみられる。剥片類出土遺構は住居跡 48 軒、土坑 47 基にのぼり、出土数から石鏃製作に関わる残滓と推定した住居跡８軒・小竪穴４基の細別時期は、すべて加曽利ＥⅣ式期から称名寺Ⅰ式期のものであった。

(6) 石器組成

下総台地では、縄文時代のなかで石材の組成が何度も大きく変化するが、中期大型貝塚形成期の特徴は黒曜石が大半を占め、その９割程度が神津島産であることである。次いで多いのはチャートであり、東京湾沿岸地域においては主に石鏃の製品の形で持ち込まれている。当遺跡においても、黒曜石が石核類の 84％、剥片類の 87％を占めているものの、硬質頁岩も多かった。大型貝塚形成期にはごく少ないので、この時期に新たに入手する経路ができたのであろう。どの地域との繋がりがつよくなったのかなど、今後、黒曜石の産地同定分析を行った上で、改めて検討すべき課題である。

出土遺物の大半が中期末から後期初頭に偏り、集落の全面を調査したことによって、当遺跡の石器組成はかなり実態を反映したものといえるだろう。生産用具の割合は、未成品も含む石鏃 169 点、打製石斧 67 点、磨石類 165 点、石皿・台石類 73 点であった。中期中葉の大型貝塚形成期においては、石器組成の斉一性がきわめて高く、石鏃：打製石斧：磨石類が１：１：１の割合に近いことが特徴である (西野 1999)。大型貝塚消滅後の分散居住期に組成がどう変化するのかは興味深いところだが、今のところ分析事例はないようである。そこで、東京湾沿岸のこの時期の分析に耐えそうな事例を集めたのが以下である。

＜石鏃：打製石斧：磨石類＞

船橋市沢之台	7	：10：	7
船橋市中野木新山	7	： 5：	9
千葉市すすき山	8	： 4：	7
千葉市中野僧御堂	108	：52：	167
千葉市餅ヶ崎	169	：67：	165

これをみる限りでは石器組成が大きく変化することはなかったようであり、打製石斧の利用が活発な西関東から遠い地域ではその割合が少なくなっている可能性がある。当遺跡と同様に良好な条件をもつ愛生遺跡やうならすず遺跡の石器の点数が不明であるため、今後資料を見直して再度検討したい。なお、礫石器は遺構出土の割合が低かった。この傾向は加曽利貝塚でも同様であった。礫は計画的に保管されることはないいっぽう、穴などに埋めることもなく集落内に放置され、様々な用途に繰り返し用いられたのではないか。

(7) 石棒

石棒も時期的な変化が明確である。中期中ごろに形成された東京湾東岸の大型貝塚群においては、石棒と土偶はほとんで出土していない。石棒や土偶を活発に使用した地域との交流は明らかであるから、受け入れない、使用しないという明確な方針が存在したのであろう。その後も土偶は持ち込まれなかったが、石棒は加曽利ＥⅣ式期以降多数持ち込まれている。同じ都川水系のうならすず遺跡では破片が大量に出土しており、石棒の入手・分配に関わっていた可能性が高い。

(8) 貝層の形成と資源利用の特徴

加曽利ＥⅣ式～称名寺Ⅰ式期の住居跡の貝層形成率は２割を超え、土坑も同程度となると推定される。中･後期大型貝塚に特徴的な大規模な面状貝層は形成していないものの､遺構内にびっしりと貝殻の詰まった例が多いなど、この時期の集落としては多量の貝が持ち込まれている。今回分析を実施できた遺構はごく少なく、確定的なことは言えないが、調査状況写真をみてもイボキサゴ１種への偏りがつよいことは誤りのないところである。その傾向は、中期大型貝塚よりも顕著といえる。貝層には海産魚類が混じっており、海産貝類と小魚が頻繁に持ち込まれ消費されていたことが予想される。集落の立地と多量の剥片類からは狩猟活動への偏りが想定されるが、いっぽうで海産貝類の利用も活発であったことが特徴といえる。

第 363 図は東京湾東岸の加曽利ＥⅢ式期から称名寺式期の貝種組成を比較したものである。奥東京湾湾口部 (真間川低地から海老川低地)、中間部 (菊田川・汐田川低地)、都川以南 (都川低地～養老川低地) という地域区分でみると、都川以南ではイボキサゴの割合がきわめて高く例外がみられない。中期大型貝塚形成期よりもハマグリやアサリの占める割合が少なく、今回の分析結果は、この時期・地域の一般的な傾向であったといえる。奥東京湾湾口部から中間部にかけては、ハマグリ・オキアサリ・アサリなども多く、遺跡間のばらつきが顕著だが、やはりもっとも多いのはイボキサゴである。イボキサゴは成長しても２cm にしかならない小さな巻貝であり、その活発な利用は、鍋料理に塩味とうま味を加える食材としての意味がつよかったと考えられる (西野 2005b)。中期中葉に発達したイボキサゴのこうした利用は分散居住期にも引き継がれたことになる。貝層には魚骨の混入がごく少ないことがこの時期の特徴であることから、海産資源のなかでイボキサゴの魅力はこの時期の人びとにとっても魅力的なものであったのだろう。

第 364 図はハマグリとアサリの計測値分布を都川低地で比較したものである。中期中葉の大型貝塚形成期では日常的な活発な利用によって採取圧によるハマグリの小形化が進み、とくに後半期に顕著であった。これに対し、加曽利ＥⅢ式期から称名寺式期のデータは、平均サイズが大きくなり、５cm を超える

個体もかなり混じっている。分布形が不揃いであることも特徴である。中期中葉に比べると、利用が少なくなって採取圧が低くなり、また、計画的な採取でないため不揃いなのであろう。ハマグリ以外の計測データは少ないが、餅ヶ崎遺跡と愛生遺跡とも幼貝まで採取している状況であり、はやり計画性のない採取を物語っている。

(9) 陥し穴

陥し穴は 26 基検出しており、同時期に複数を列状に仕掛けた可能性があるものを 6 例挙げた。可能性の高い 2 例は二つの谷の間の尾根を横断する方向と、緩斜面を横切る方向に仕掛けられていた。遺物を伴う例があり、全体として形状が似たものが集落範囲の縁辺に分布することから、中期末～後期初頭の集落形成期またはそれに近い年代のものが多いと推定した。千葉県や茨城県では、加曽利 E Ⅳ式期の遺物を伴う陥し穴の例を散見する (中村 1998)。形状は上部楕円、下部溝型のものが多いが、草創期から早期前葉に盛行した溝型陥し穴よりずっと小さく、楕円型との中間のようなものが多い。当遺跡のものもこの範疇に入るが方形に近いものが多い点は異なっている。千葉市・内野第 1 遺跡では溝型陥し穴が列状に連なるものが 2 列あり。いずれもきわめて大規模である。後期集落と重なる位置であり、シカの集団猟の場が、集中居住＝拠点集落形成の契機になった可能性が考えられる。当遺跡の事例もこうした視点から検討すべきものであろう。

(10) 集落研究上の意義

集落の全容を知り得る稀有な事例である。他の時期の遺物が少ないことから、生産用具や装身具等の数量・組成も分析の基準となりうる。平成 29 年度に特別史跡に指定された加曽利貝塚については中期大型貝塚から後期大型貝塚の成立、晩期前半の集落消滅に至るまで 1 遺跡で検討できる利点をもっており、新たな発掘調査を含めた研究に着手したところである。しかし、言うまでもないことだが、加曽利貝塚を知るためには周辺の同時期の集落の研究も欠かすことはできず、膨大な資料と情報が得られている割には未解明の点がきわめて多い。

大型貝塚の消滅・再生という大きな謎を解明するためには、この時期としては加曽利貝塚をもしのぐ県内最大規模の集落を形成した餅ヶ崎遺跡の存在意義はきわめて大きい。加曽利貝塚や、東京湾東岸の縄文貝塚群の本当の価値・魅力を解き明かす作業はまさにこれからであり、餅ヶ崎遺跡がそのなかにあってとくに重要な遺跡の一つであることは間違いのないところである。

3　古代以降

36 軒の住居跡を検出しており、平安時代・9 世紀代に小規模な集落が形成されている。千葉市内では、古墳時代後期や奈良時代に開発型集落群が現れるが、大規模な集落が集中する沿岸部の台地上では平安時代に入ると集落数や集落の軒数が激減する。そのいっぽうで内陸側の若葉区や緑区の台地上ではこのころにも新たな集落が現れ、集落数も増加する。当遺跡も平安時代の開発型集落の典型例として重要である。特筆すべきは、既報告分ではあるが 60 年度 3 号住居跡から出土した緑釉陶器である。あまり注目されておらず、資料集成等でも漏れてきたので改めて触れておくとともに、巻頭図版 2 に写真を掲載した。口縁部の 4 か所に押圧を加えて四輪花に作る輪花椀である。濃緑色に変色した接合作業時のテープ痕が惜しまれるが、完形に復元され保存状態も良好な優品である。緑釉陶器は高級陶器であり、県内では官衙や仏教施設をもつ遺跡、有力な集落から出土する傾向がある。この 30 年の膨大な発掘を経てもなお希少な存在であり、破片資料がほとんどである。当遺跡のような小規模集落から希少な四輪花の輪花椀が完形で出土した理由は不明だが、淡い緑が美しい市内出土古代陶器中の逸品といえる。そのほか、須恵器の仏鉢、灰

釉陶器の椀・段皿・坏・長頸瓶、墨書土器「平」「十」「今カ」「□後」、楔を伴う鉄斧や鉄鏃、紡錘車等の鉄製品が出土している。

中・近世の成果は多くなかったが、15 世紀末～ 16 世紀初めの陶器が比較的まとまっており、近世以降では 17 世紀中頃～後半と幕末～明治期の資料がみられた。千葉氏の領地としての中世寺山郷や、その後の土地利用の一端を垣間見ることができた。

水系	真間川	海老川	海老川	海老川	菊田川	菊田川	汐田川	汐田川	汐田川
遺跡名	木戸前Ⅱ	中野木新山	中野木台4	宮本台	藤崎３南	藤崎３南	牛尾舛	小中台	園生新山
時期	EⅣ～称	EⅣ	EⅣ	称名寺	EⅣ	称名寺	EⅢ	EⅢ	称名寺
イボキサゴ	101,598	8,880	37,611	148	35	415	1,703	34,513	20,745
ハマグリ	846	3,307	12,999	166	1,464		2,328	1,131	111
オキアサリ		8,333	9,281	90	372	18	1,068	2,061	1,270
アサリ	746	5,488	2,647	14	7		349	4,356	5
マガキ	109	112	4,543	10			179	240	147
シオフキ	49	276	901	29	24		284	551	9
スガイ	9						11	14	
アラムシロ	130	38	14				10	476	
ウミニナ科	145	24	93		2		38	263	3
その他	25	150	1,583	2	66		122	140	5
合計	103,657	26,608	69,672	454	1,970	433	6,092	43,745	22,295

水系	都川	都川	都川	都川	都川	**都川**	都川	都川	都川
遺跡名	愛生	うならすず	荒屋敷北	愛生	うならすず	**餅ヶ崎**	愛生	うならすず	多部田
時期2	EⅢ	EⅢ	EⅢ	EⅣ	EⅣ	**EⅣ**	称名寺	称名寺	称名寺
イボキサゴ	2,362	21,500	75,725	8,150	41,326	**6,868**	5,111	27,002	10,694
ハマグリ	235	512	12,092	237	571	**302**	477	776	478
オキアサリ	4		11	32			34		3
アサリ	149	45	884	988	464	**67**	220	22	51
マガキ	19	125	3,390	72	10		97	29	9
シオフキ	21	462	1,325	34	371	**22**	41	90	75
スガイ			2,372	1			3		
アラムシロ	9	212	813	56	375	**10**	14	243	43
ウミニナ科	10	123	470	65	239	**18**	20	124	44
その他	72	10	735	165	33	**2**	55	15	35
合計	2,881	22,989	97,817	9,800	43,389	**7,289**	6,072	28,301	11,432

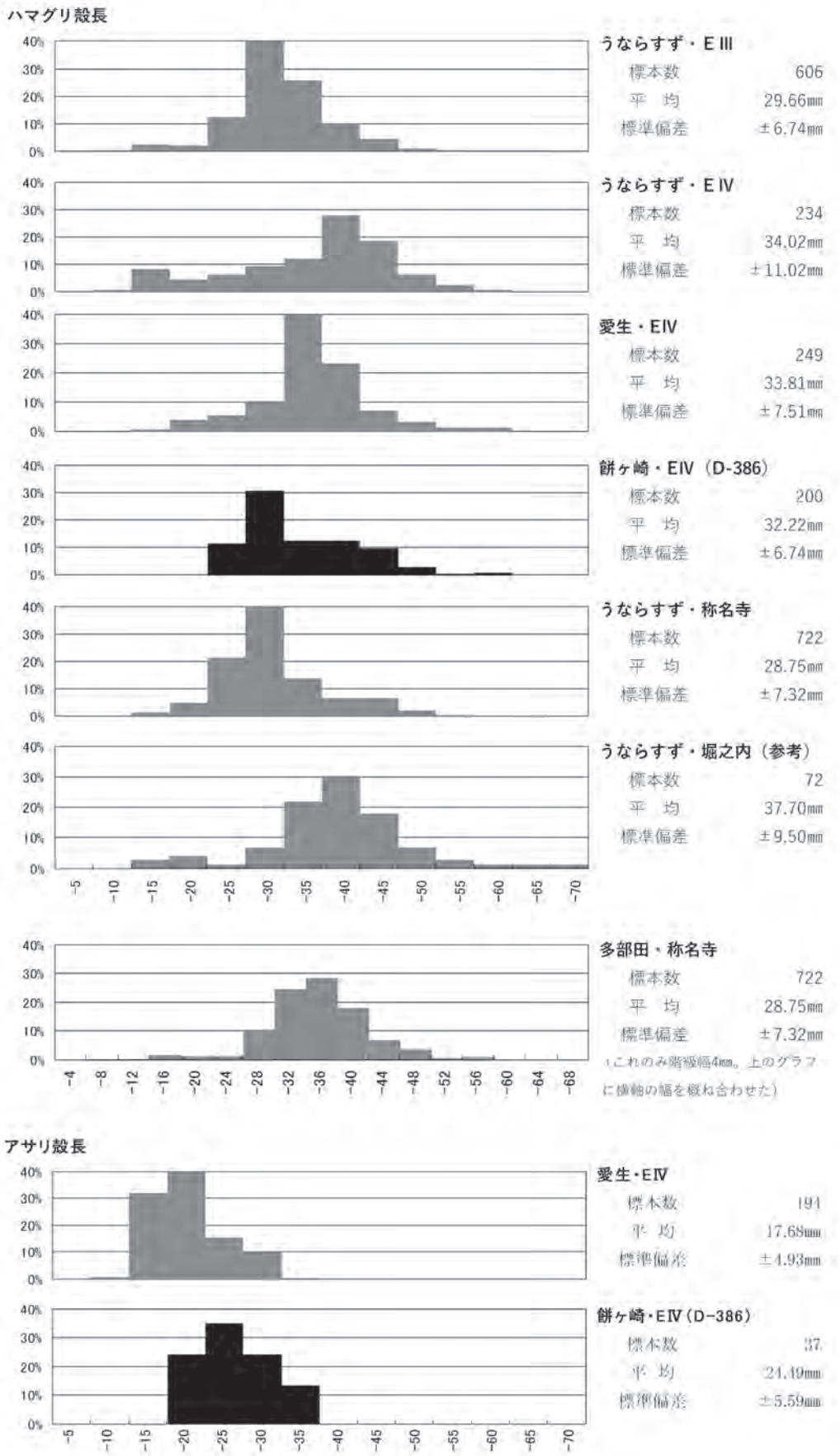
水系	村田川	村田川	村田川	養老川
遺跡名	有吉北	鎌取	有吉北	能満上子
時期2	EⅢ	EⅢ	称名寺	EⅣ～称
イボキサゴ	9,222	2,361	21,130	103,494
ハマグリ	219	364	2,818	12,281
オキアサリ				
アサリ	110	68	175	1,140
マガキ	5	156	72	392
シオフキ	101	113	593	963
スガイ				4
アラムシロ	88	2	246	457
ウミニナ科	51	38	222	816
その他	7	2	155	2,234
合計	9,803	3,104	25,411	121,781

東京湾東岸の奥東京湾湾口部から市原低地（養老川南岸低地）まで、加曽利ＥⅢ式期から称名寺式期までを対象とした。

「Ｅ」は加曽利Ｅ、「称」は称名寺の略

都川以南ではイボキサゴの割合がきわめて高い。奥東京湾湾口部ではハマグリ・オキアサリ・アサリなども多く、汐田川谷は中間的な数値になっている。

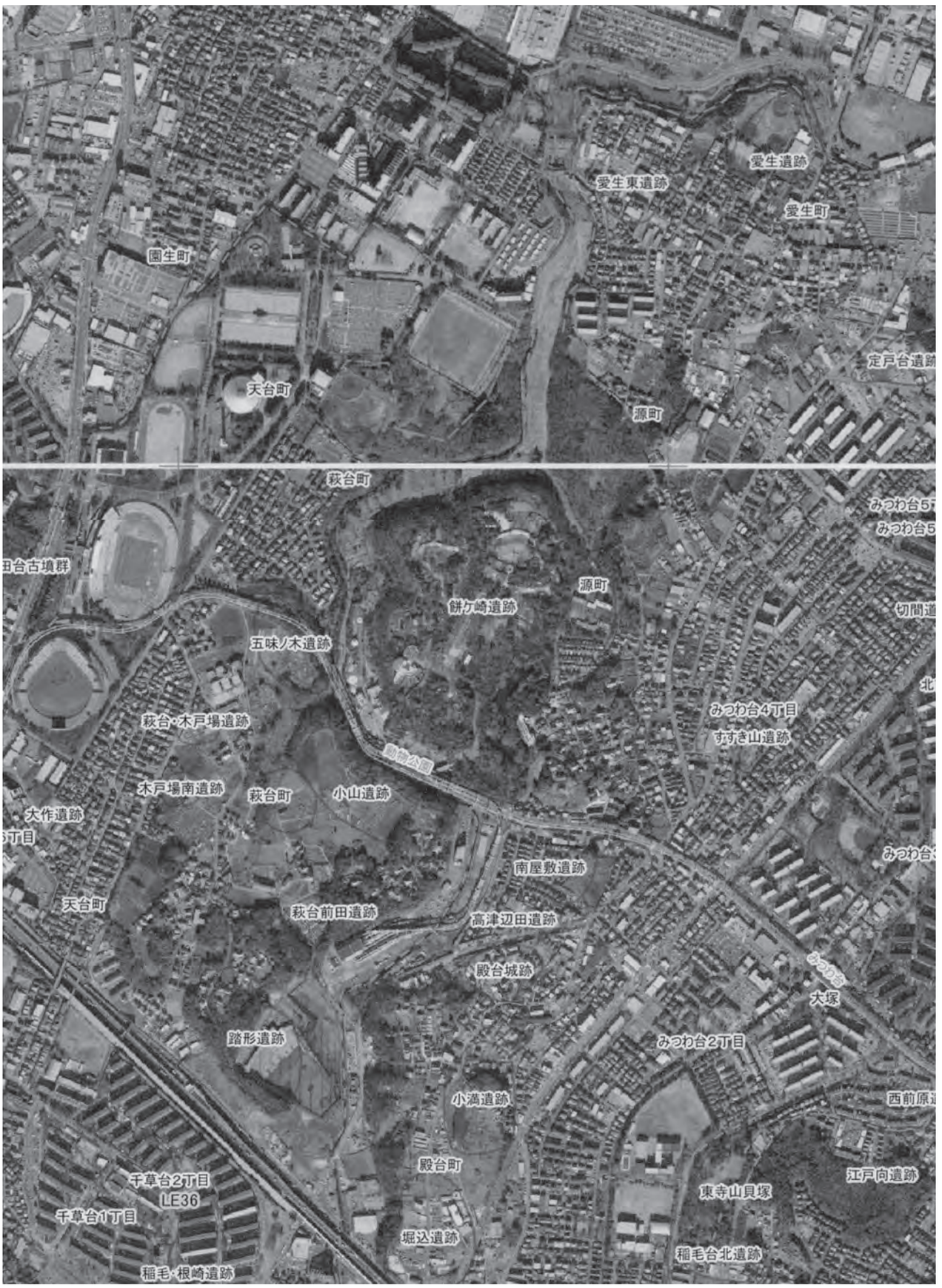
第 366 図　貝類組成の比較



第 367 図　貝類計測値の比較

写　真　図　版

図版１


愛生遺跡
愛生東遺跡
愛生町
園生町
天台町
源町
定戸台遺跡
萩台町
田台古墳群
餅ケ崎遺跡
源町
五味ノ木遺跡
萩台・木戸場遺跡
みつわ台4丁目
すすき山遺跡
勅旨公園
木戸場南遺跡
萩台町
小山遺跡
大作遺跡
南屋敷遺跡
天台町
萩台前田遺跡
高津辺田遺跡
殿台城跡
大塚
踏形遺跡
みつわ台2丁目
小満遺跡
殿台町
千草台2丁目
LE36
千草台1丁目
堀込遺跡
東寺山貝塚
江戸向遺跡
稲毛台北遺跡
稲毛・根崎遺跡

図版２

調査中の遺跡（昭和57年）南西上空より

造成後の遺跡（昭和10年）南上空より

調査中の遺跡（昭和57年）西上空より

調査中の遺跡（昭和57年）東上空より

図版４

昭和57年
北西上空より

昭和57年
西上空より

昭和57年
北上空より

図版５

調査と造成(昭和60年)北北東上空より

調査風景(昭和53年)

調査風景(昭和56年)

調査風景(昭和53年)

調査風景(昭和56年)

図版６

調査風景（昭和56年）

調査風景（昭和56年）

調査風景（昭和57年）

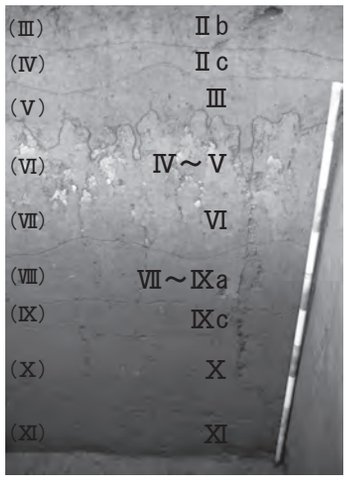
調査風景（昭和58年）

調査風景（昭和57年）

調査風景（昭和58年）

調査風景（昭和58年）

調査風景（昭和59年）



基本土層

調査状況全体図

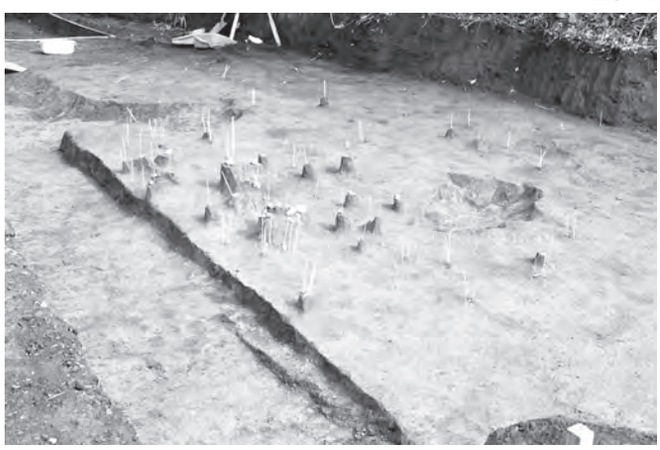
２ブロック出土状況

７・８・９ブロック出土状況

９･12･13ブロック出土状況

９･12･13ブロック出土状況

昭和58年　出土状況


昭和58年　出土状況

図版８

第１文化層第１ブロック

1 ナイフ形石器
チャート

第２文化層第３ブロック

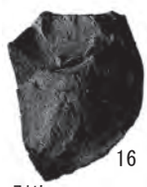
打面再生剥片
ガラス質黒色安山岩 1

3
剥片
ガラス質黒色安山岩

剥片 4
ガラス質黒色安山岩

6
剥片
ガラス質黒色安山岩

7
剥片
ガラス質黒色安山岩



16
剥片
ガラス質黒色安山岩

18
二次加工のある剥片
ガラス質黒色安山岩

19
打面再生剥片
ガラス質黒色安山岩

剥片 20
ガラス質黒色安山岩

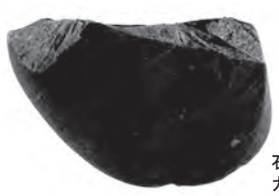
21
剥片
ガラス質黒色安山岩

22
剥片
ガラス質黒色安山岩

23
剥片
ガラス質黒色安山岩

24
剥片
ガラス質黒色安山岩

25
剥片
ガラス質黒色安山岩

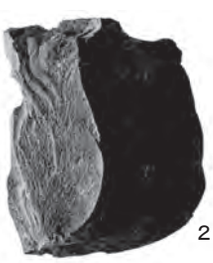


26
石核
ガラス質黒色安山岩

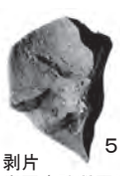
第３文化層第５ブロック

1
二次加工のある剥片
黒曜石

4
剥片
硬質頁岩



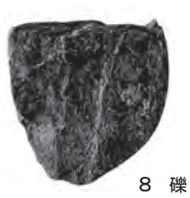
2
剥片
ホルンフェルス



5
剥片
嶺岡産珪質頁岩

7 剥片
ガラス質黒色安山岩

6
剥片
ガラス質黒色安山岩

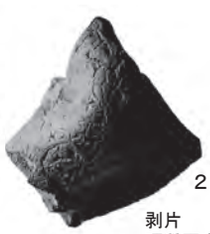


8 礫

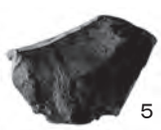
9 石核
硬質頁岩

第３文化層第６ブロック

1 打面再生剥片
玉髄



2
剥片
硬質頁岩



5
剥片
硬質頁岩

6
剥片
硬質頁岩

7
剥片
玉髄

8
剥片
玉髄

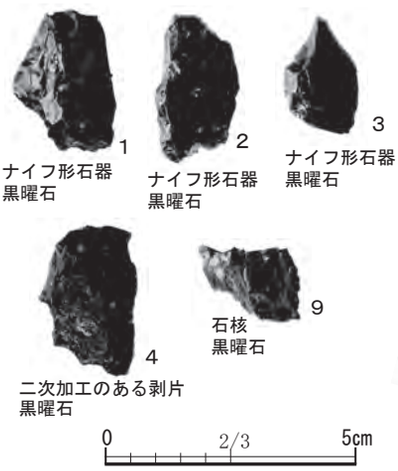
9
剥片
玉髄

第３文化層第７ブロック

3 剥片 黒曜石

10 礫 ホルンフェルス

第３文化層第８ブロック



1 ナイフ形石器 黒曜石

2 ナイフ形石器 黒曜石

3 ナイフ形石器 黒曜石

4 二次加工のある剥片 黒曜石

9 石核 黒曜石

0 2/3 5cm

第３文化層第９ブロック

1 ナイフ形石器 黒曜石

2 彫器 黒曜石

3 彫器 黒曜石

4 打面再生剥片 黒曜石

5 二次加工のある剥片 黒曜石

7 二次加工のある剥片 黒曜石

10 微細剥離痕のある剥片 黒曜石

11 微細剥離痕のある剥片 黒曜石

12 微細剥離痕のある剥片 黒曜石

13 剥片 黒曜石

17 剥片 黒曜石

20 二次加工のある剥片 黒曜石

23 剥片 黒曜石

21 剥片 ガラス質黒色安山岩

24 石核 黒曜石

25 石核 黒曜石

26 石核 黒曜石

27 石核 黒曜石

28 石核 黒曜石

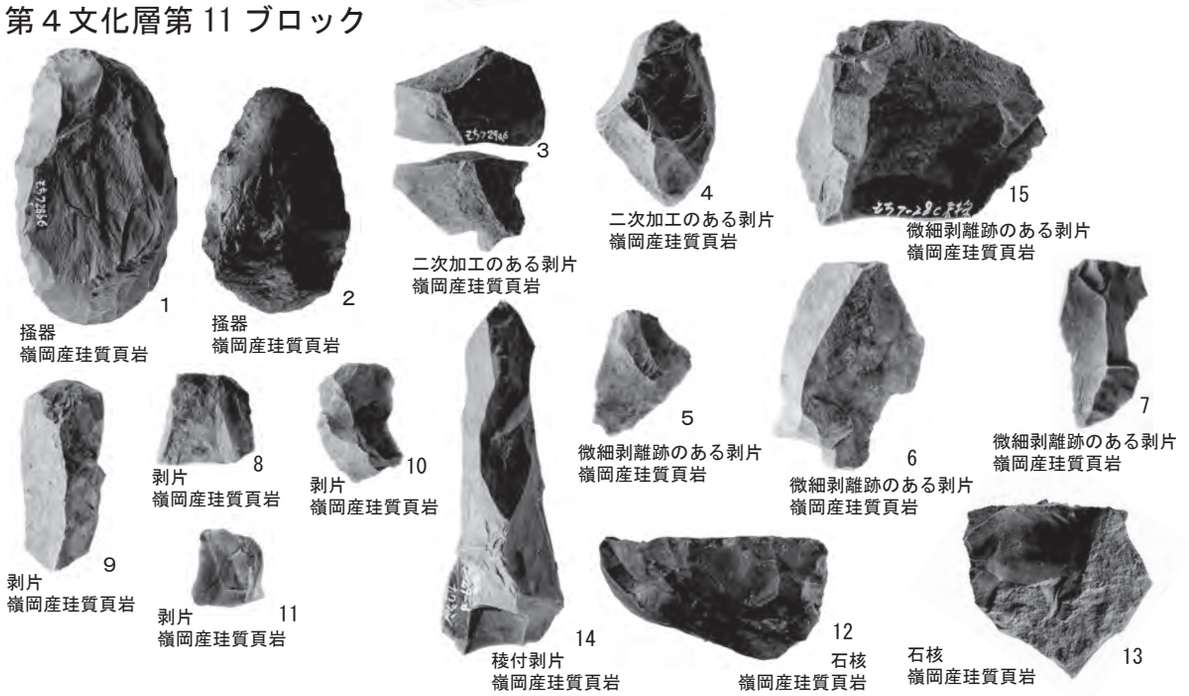
29 石核 ホルンフェルス

32 ナイフ形石器 黒曜石

33 掻器 黒曜石

34 剥片 黒曜石

第４文化層第 11 ブロック



1 掻器 嶺岡産珪質頁岩

2 掻器 嶺岡産珪質頁岩

3 二次加工のある剥片 嶺岡産珪質頁岩

4 二次加工のある剥片 嶺岡産珪質頁岩

15 微細剥離跡のある剥片 嶺岡産珪質頁岩

5 微細剥離跡のある剥片 嶺岡産珪質頁岩

6 微細剥離跡のある剥片 嶺岡産珪質頁岩

7 微細剥離跡のある剥片 嶺岡産珪質頁岩

8 剥片 嶺岡産珪質頁岩

10 剥片 嶺岡産珪質頁岩

9 剥片 嶺岡産珪質頁岩

11 剥片 嶺岡産珪質頁岩

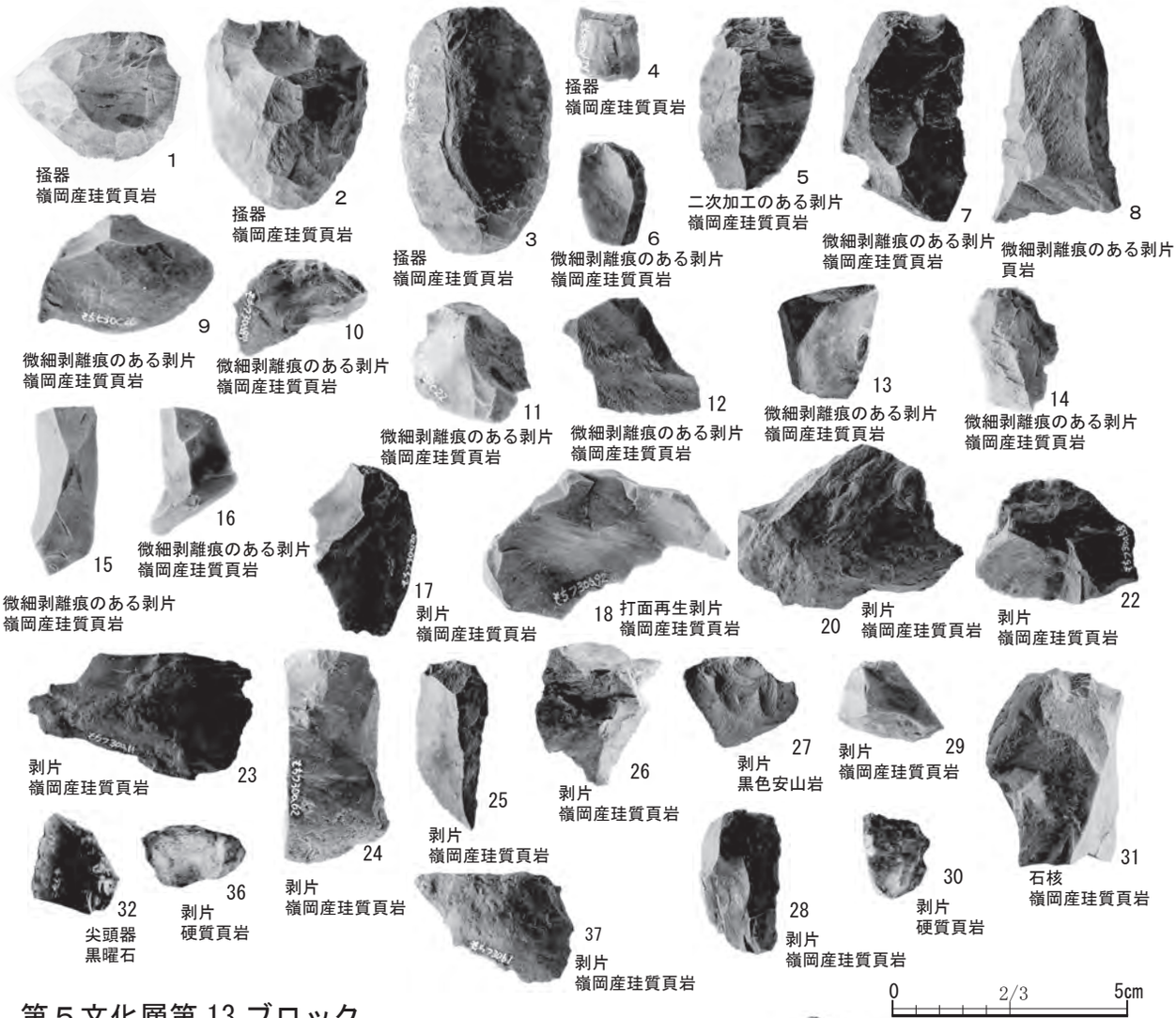
14 稜付剥片 嶺岡産珪質頁岩

12 石核 嶺岡産珪質頁岩

13 石核 嶺岡産珪質頁岩

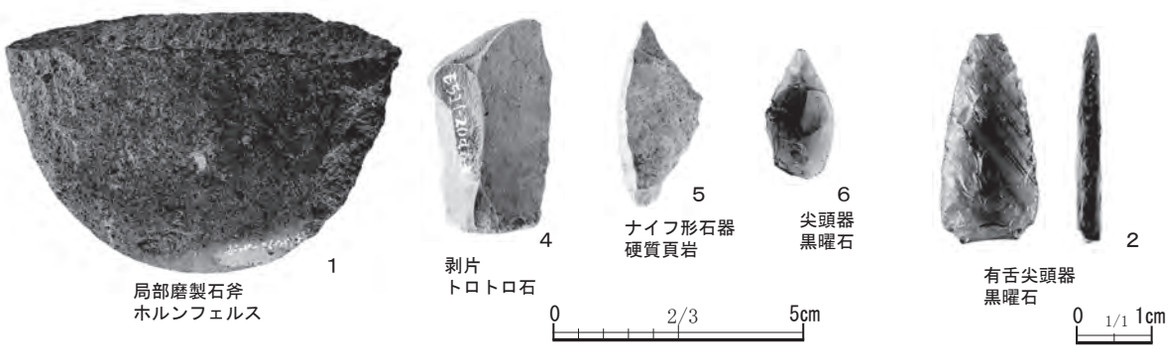
図版10

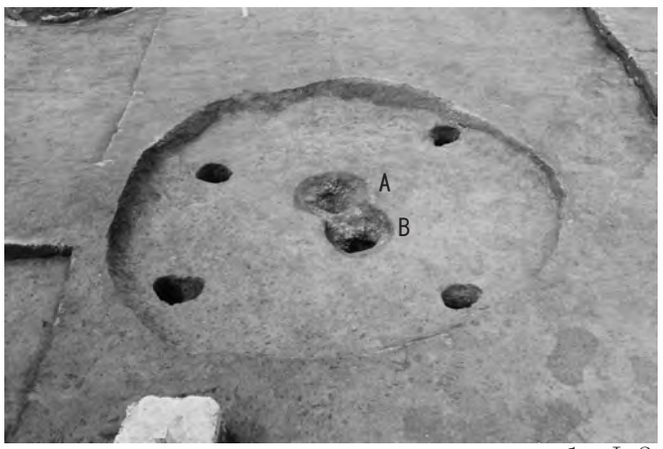
第４文化層第 12 ブロック



第５文化層第 13 ブロック

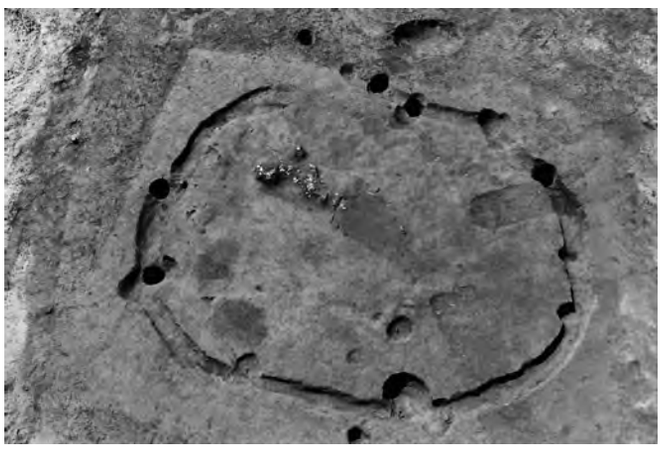
単独出土



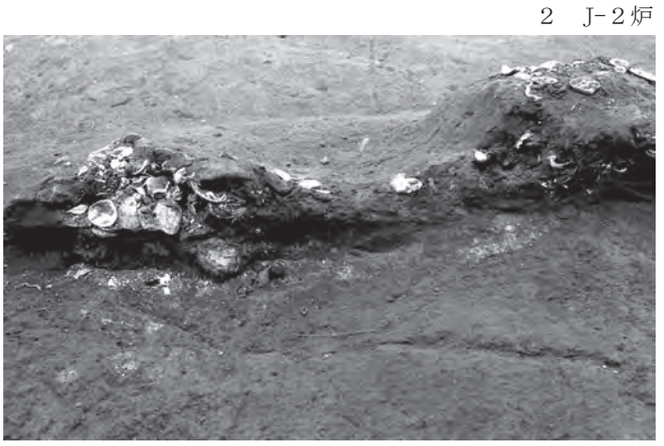


1　J-2

2　J-2炉



3　J-3



4　J-3貝層

5　J-4

6　J-4炉

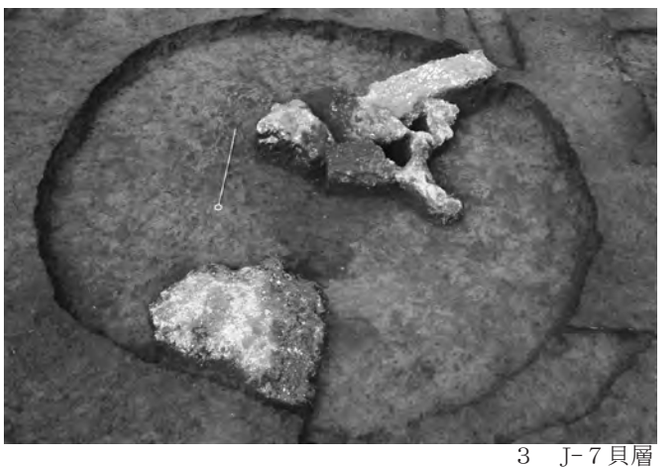
7　J-5

8　J-6

図版12

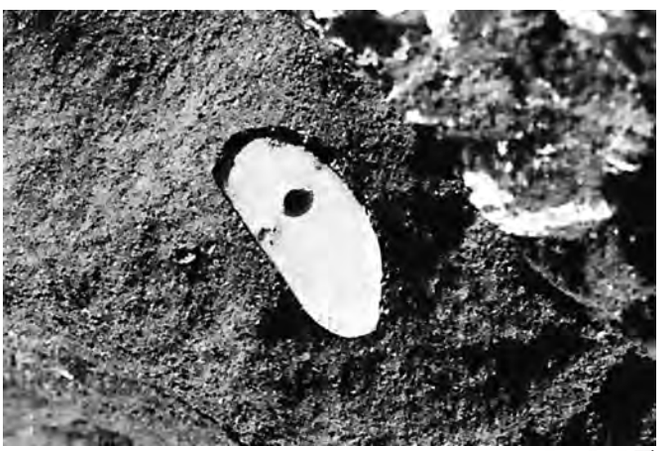
1　J-６出土状況

2　J-６石器

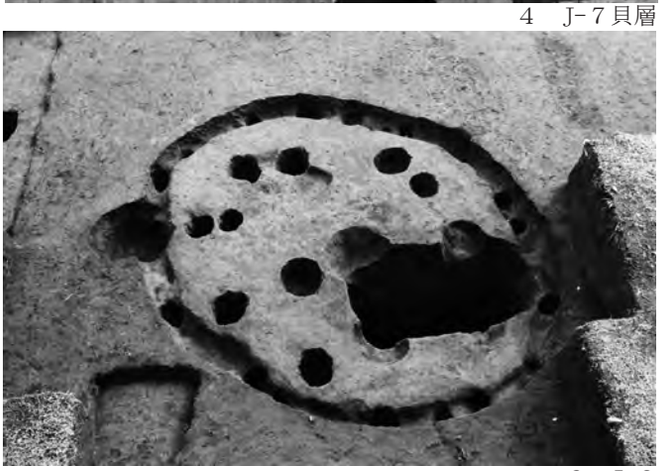


3　J-７貝層

4　J-７貝層

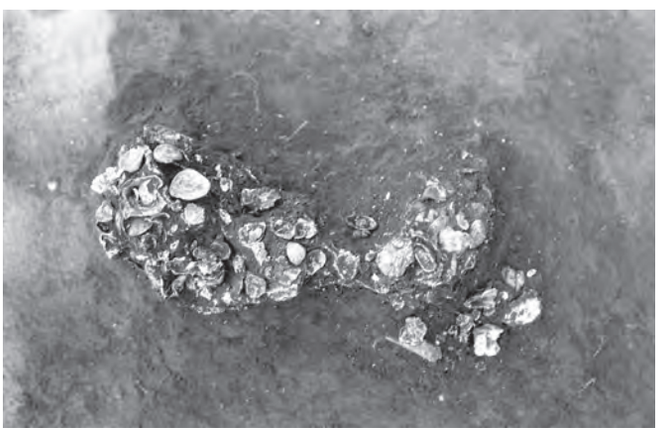


5　J-７玉

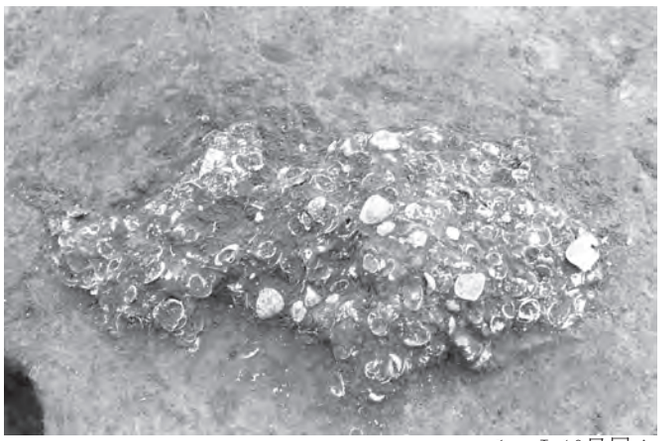


6　J-９

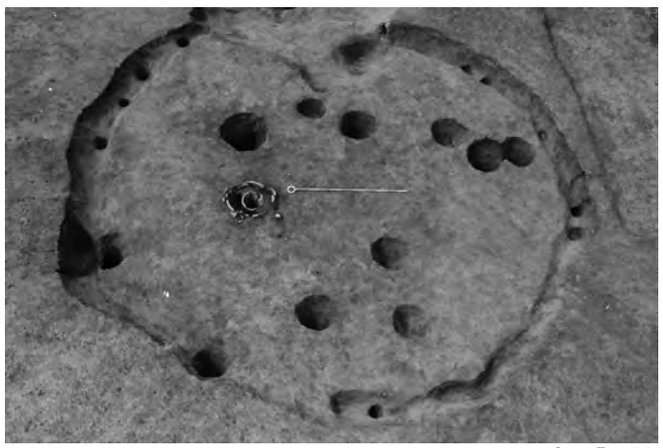
7　J-10貝層



8　J-10貝層Ｂ

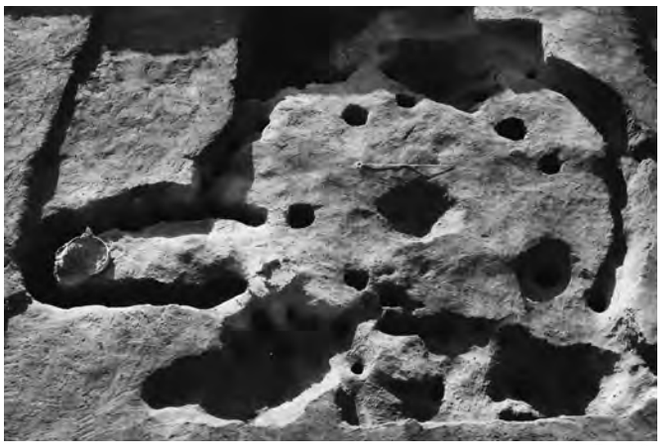


1　J-10貝層A



2　J－11

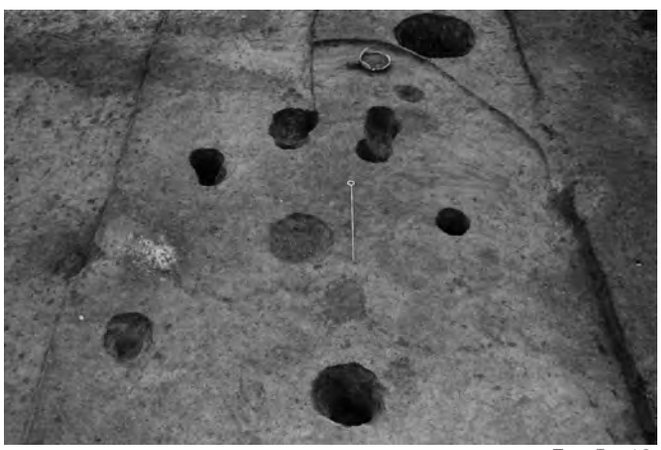
3　J－11炉



4　J－12

5　J－12埋設土器１

6　J－12埋設土器２



7　J－13

8　J－13埋設土器

図版14

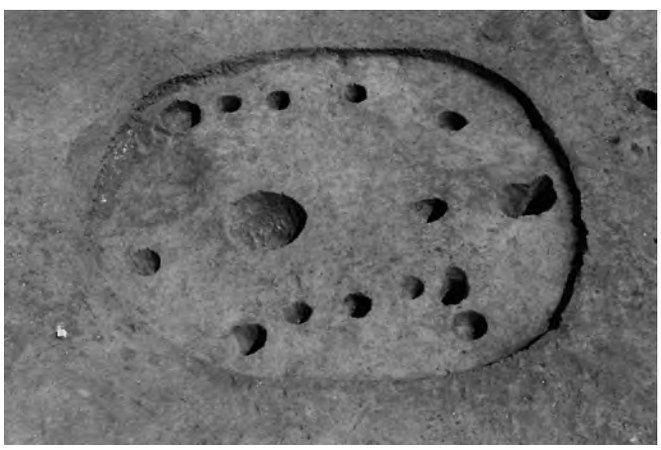
1　J－14

2　J－14貝層

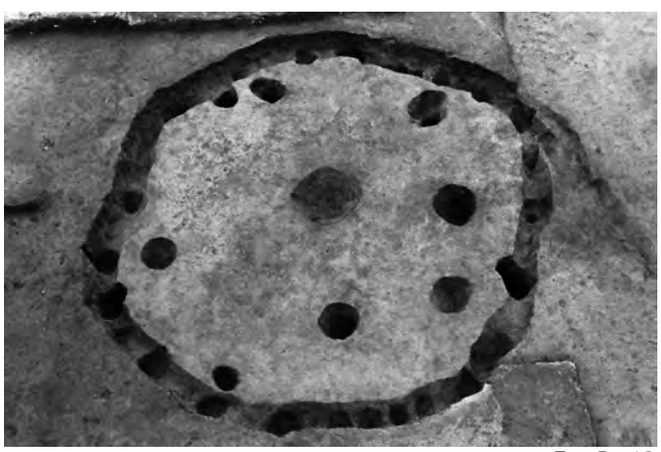
3　J－15

4　J－16

5　J－16炉



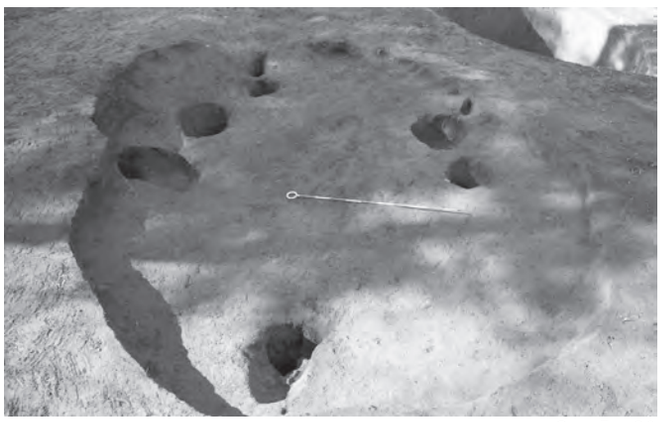
6　J－17



7　J－18

8　J－18炉

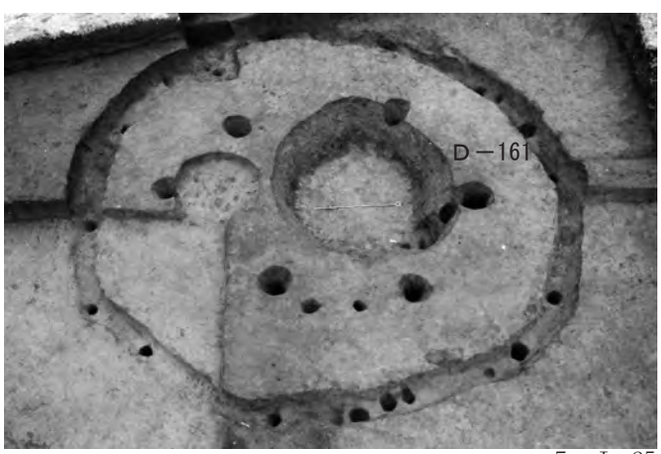
1　J－19出土状況



2　J－20

3　J－22

4　J－24



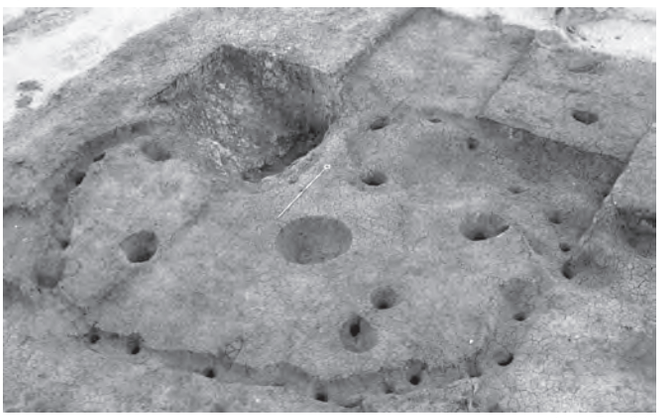
5　J－25

6　J－26

7　J－27

8　J－28

図版16



1　J－31

2　J－32

3　J－34(34Aは内側、34Bは外側)

4　J－34炉

5　J－35

6　J－36

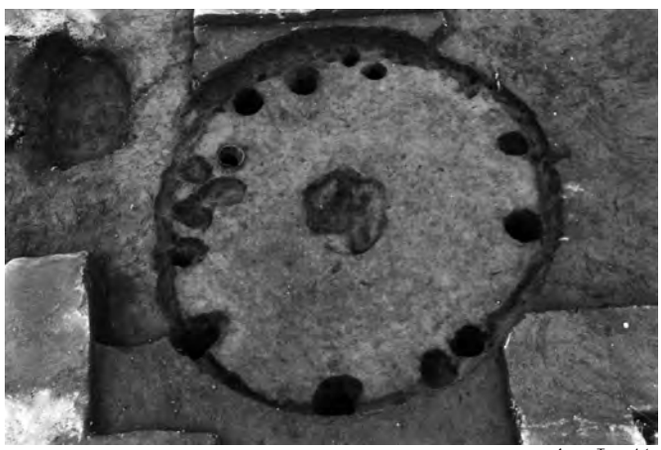
7　J－37

8　J－38

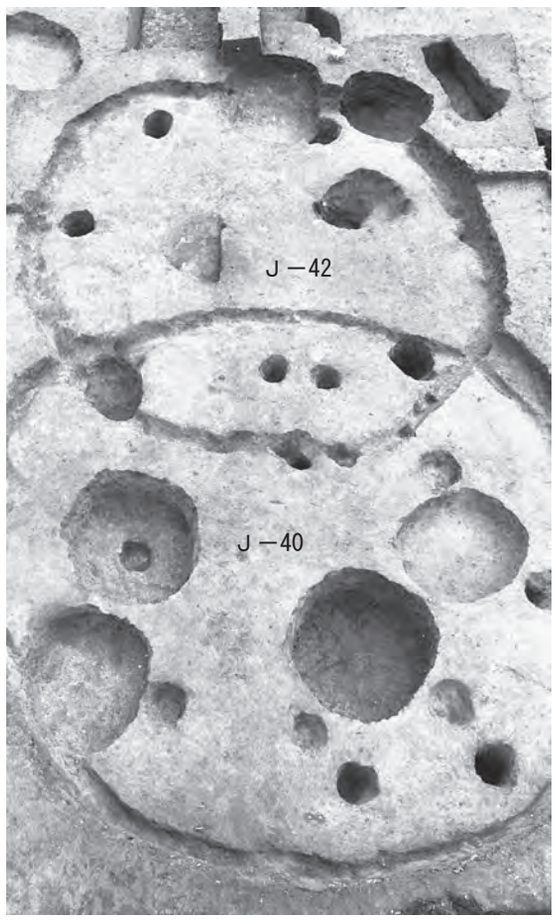
1　J－38貝・土器

2　J－39

3　J－39炉



4　J－41



5　J－40・42

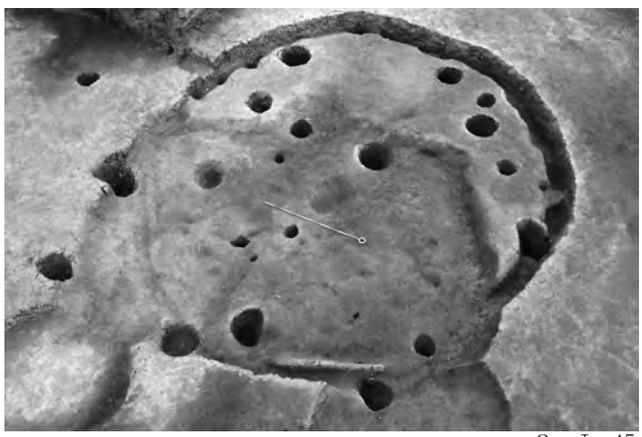
6　J－41埋設土器

7　J－43

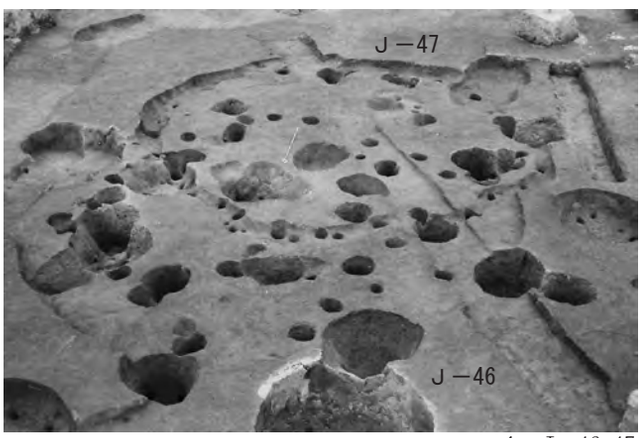
図版18

1　J－43埋設土器

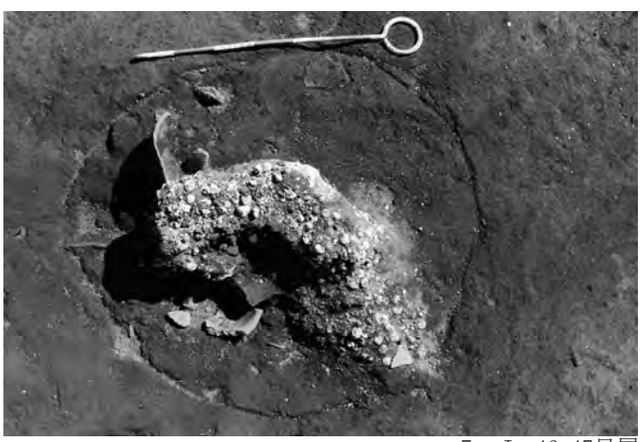
2　J－44



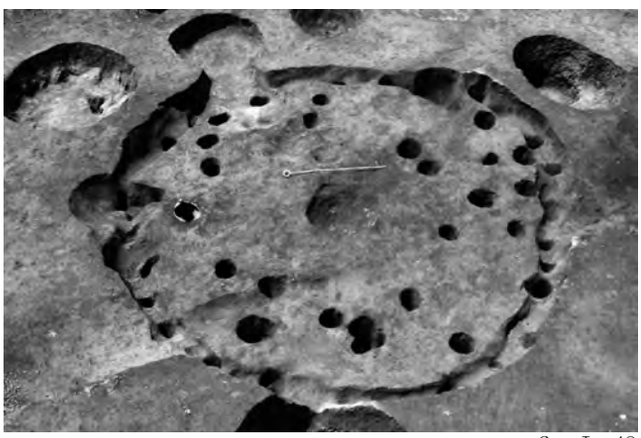
3　J－45



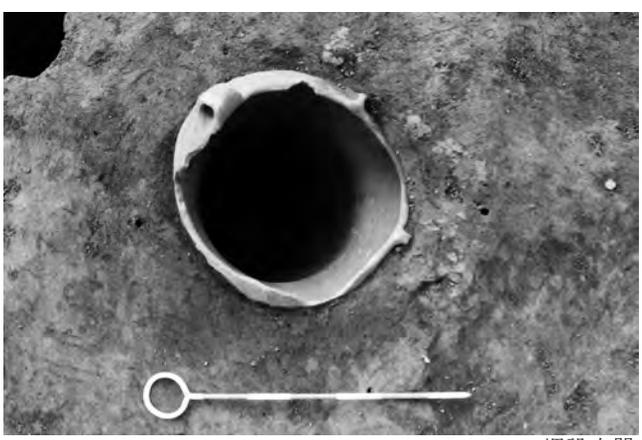
4　J－46･47



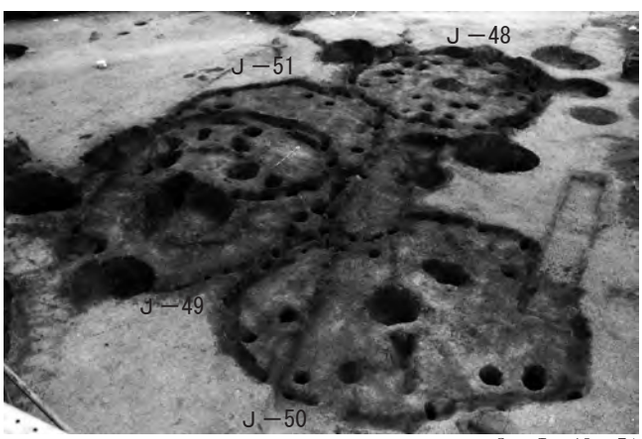
5　J－46･47貝層



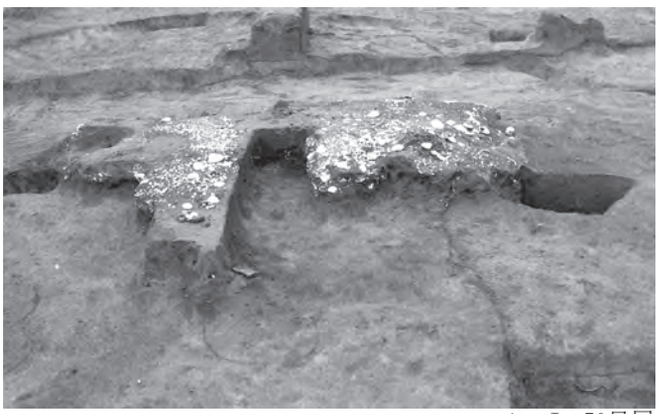
6　J－48



7　J－48埋設土器

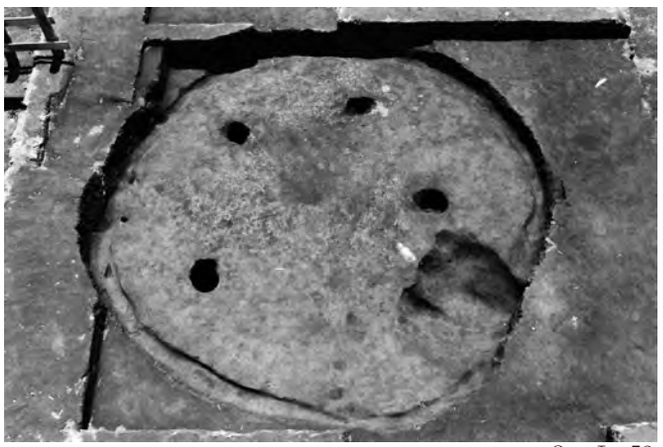


6　J－48～51

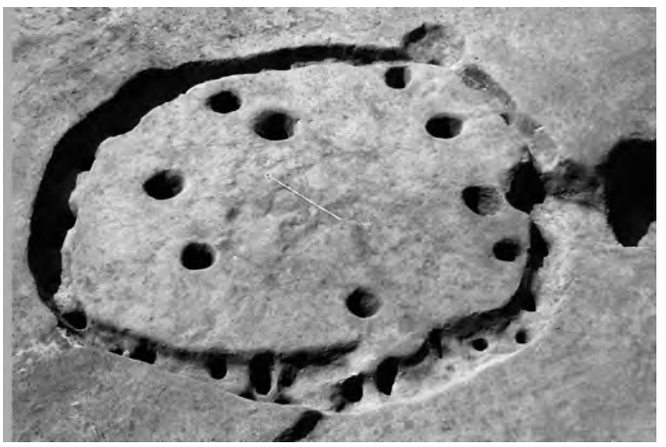


1　J－50貝層

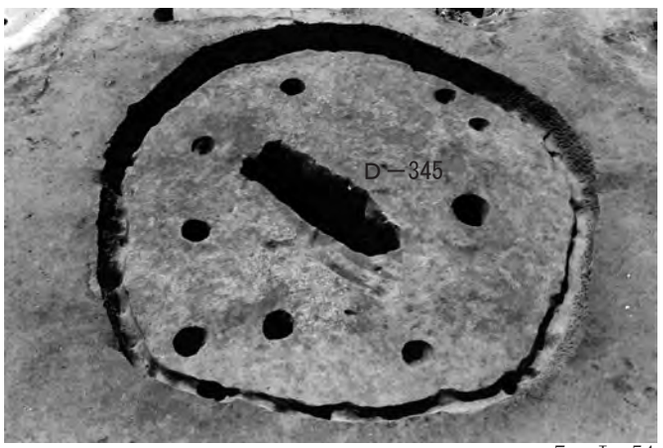
2　J－51



3　J－52

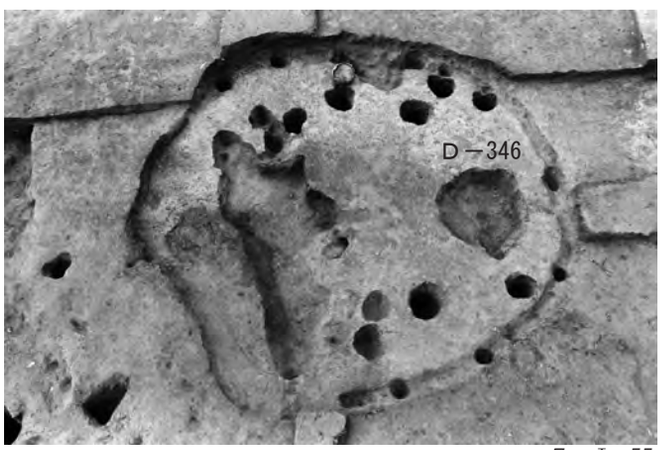


4　J－53



5　J－54

6　J－54・D－345貝層・遺物



7　J－55

8　J－55埋設土器

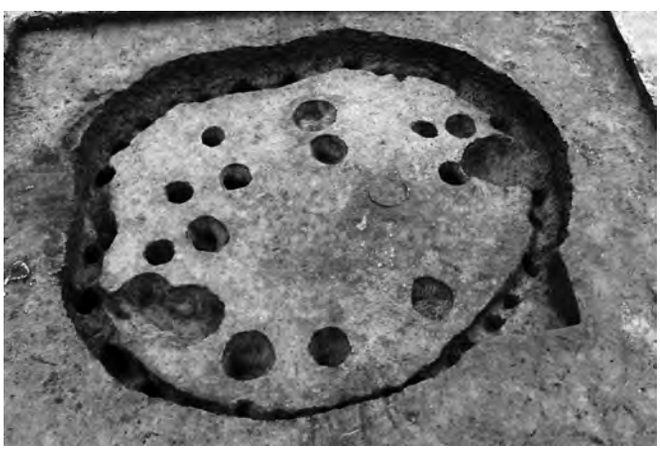
図版20

1　J－56

2　J－57

3　J－58

4　J－59・60



5　J－61

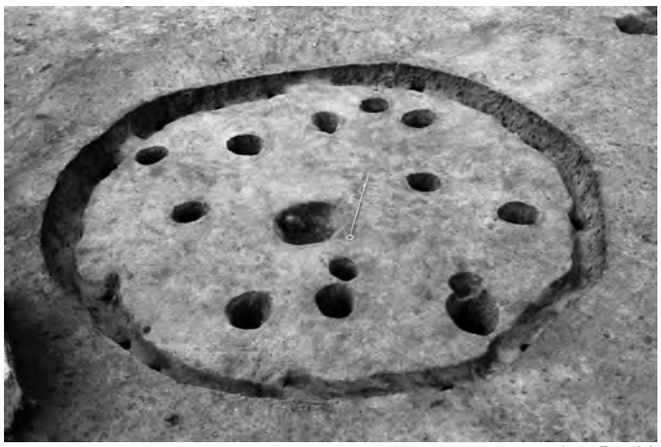
6　J－61炉

7　J－63・64

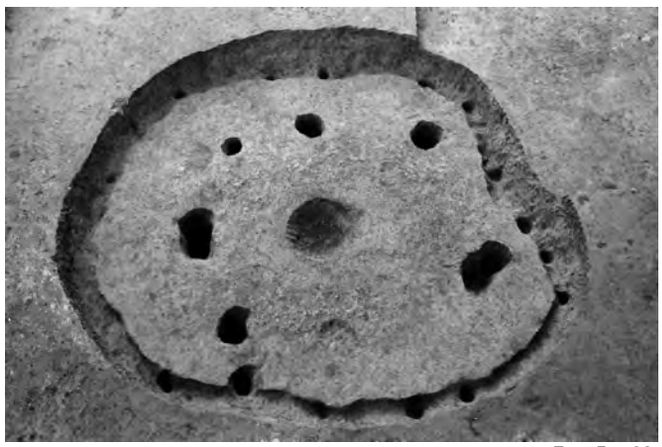
1　J－62

2　J－63埋設土器

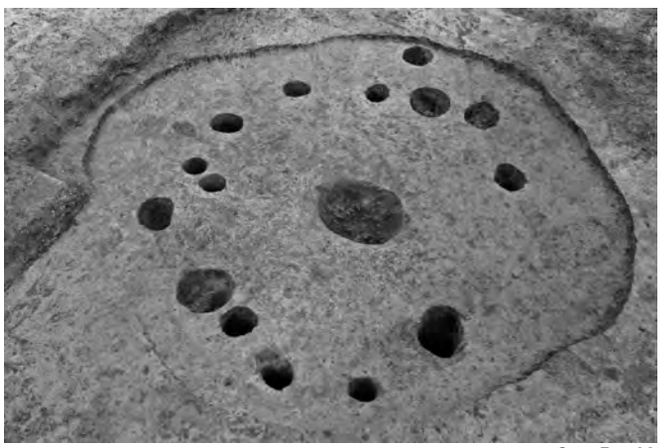
3　J－65



4　J－66



5　J－68

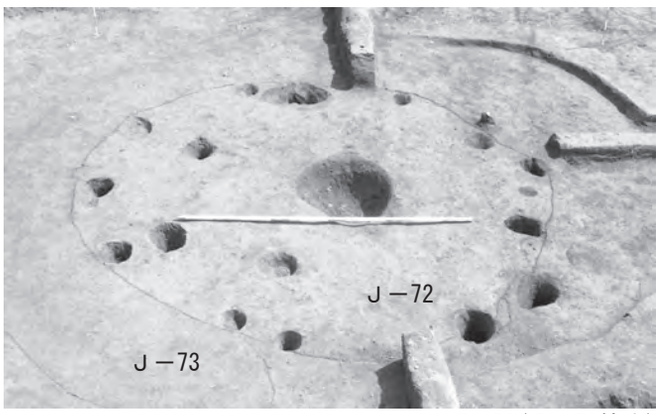


6　J－69

7　J－70

8　J－71

図版22



1　J－72（J－73検出）

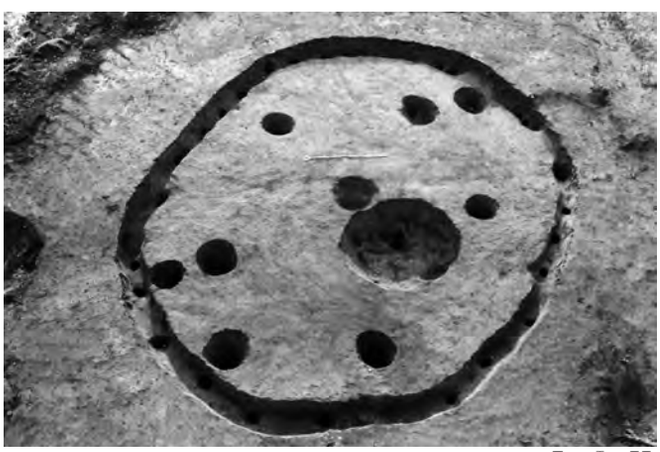
2　J－73

3　J－74

4　J－75（掘削途中）

5　J－75

6　J－76



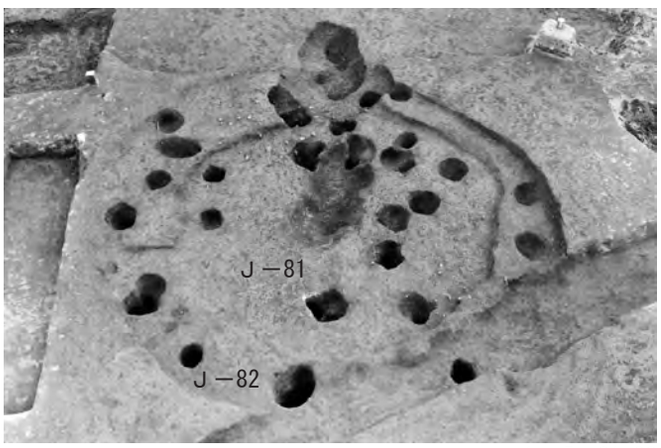
7　J－77

1　J－78

1　J－79

2　J－79埋設土器

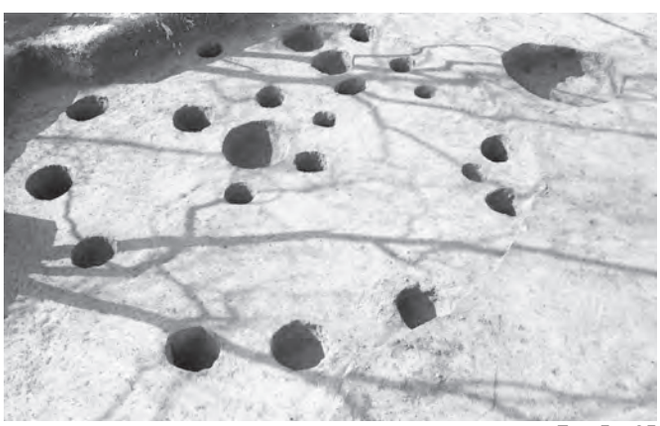
3　J－80



4　J－81･82

5　J－83

6　J－84



7　J－85

8　J－85炉

図版24

埋設土器

1　埋設土器群

2　埋設土器群２

3　埋設土器群３・４・５

陥し穴

4　D－6

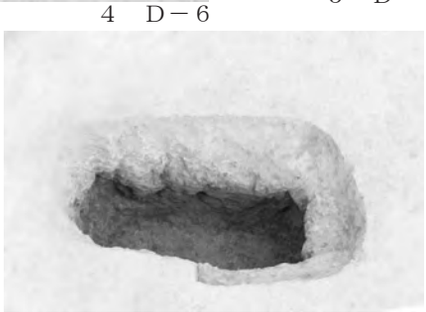
5　D－7

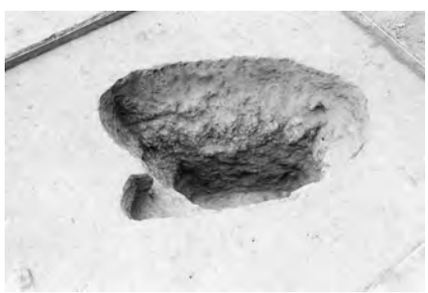
6　D－9

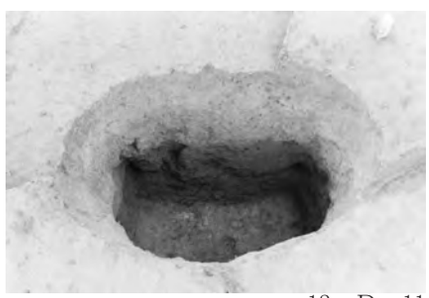
7　D－28

8　D－33

9　D－50


10　D－8


11　D－9


12　D－11

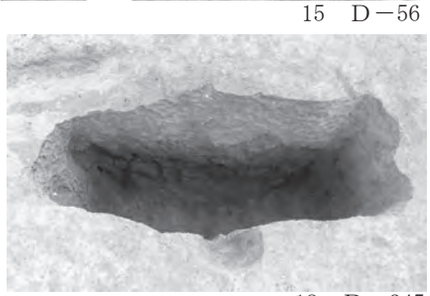
13　D－13

14　D－16

15　D－56

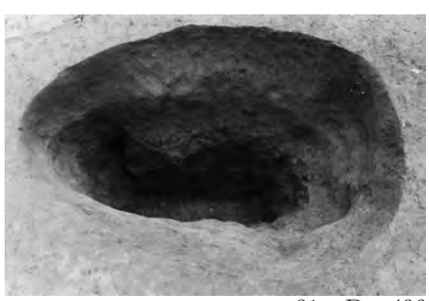
16　D－119

17　D－134


18　D－345

19　D－416

20　D－432


21　D－436

縄文土坑

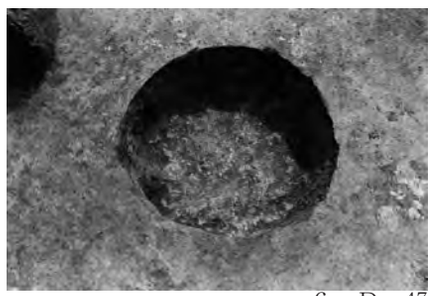
1　D－30

2　D－31

3　D－35

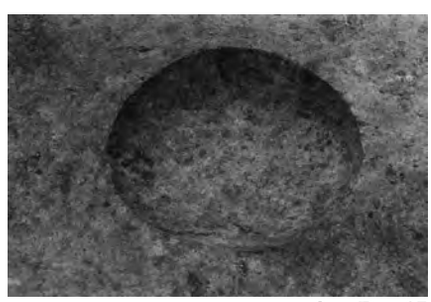
4　D－36

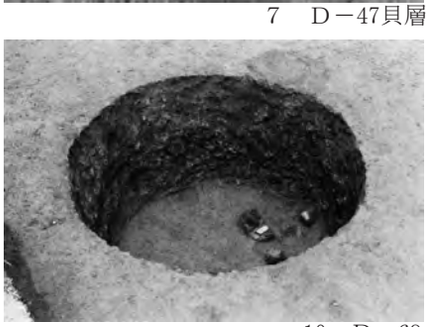
5　D－36貝層

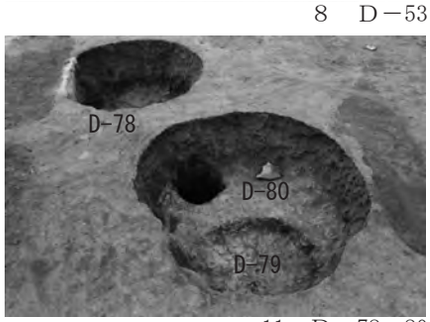

6　D－47

7　D－47貝層

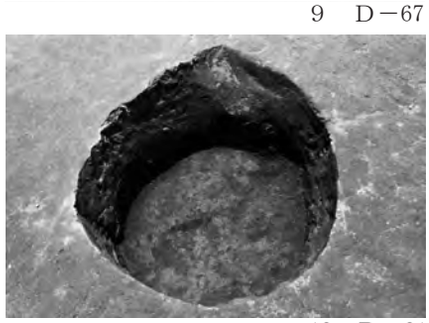
8　D－53

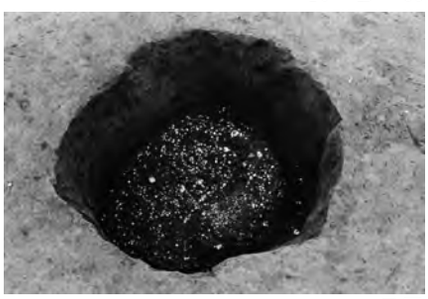

9　D－67


10　D－69

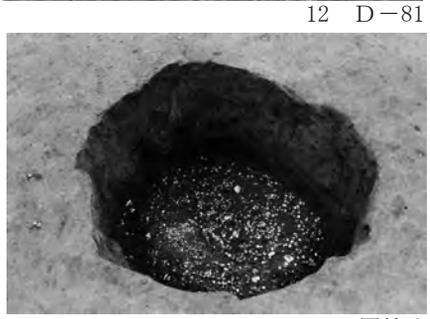


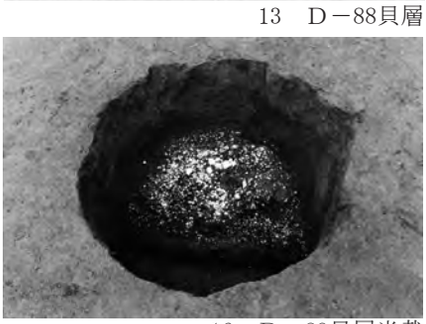
11　D－78～80


12　D－81

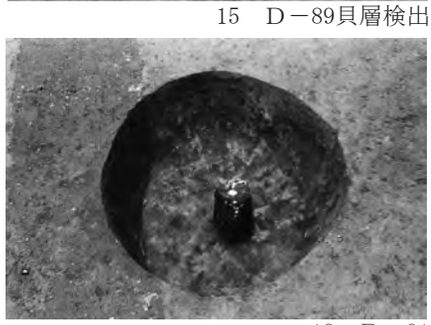

13　D－88貝層

14　D－89


15　D－89貝層検出


16　D－89貝層半截

17　D－89土器出土

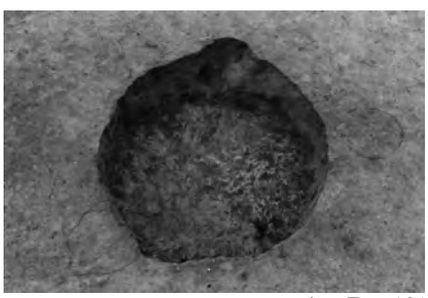

18　D－91

図版26

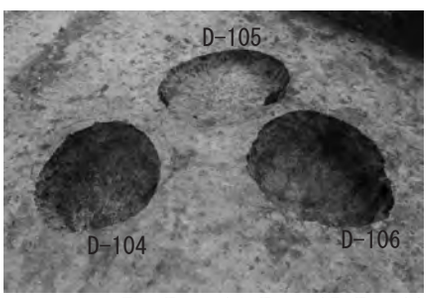
1　D－91貝層

2　D－92

3　D－98

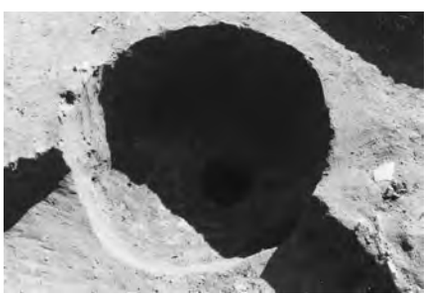


4　D－101



5　D－104・D－105・D-106

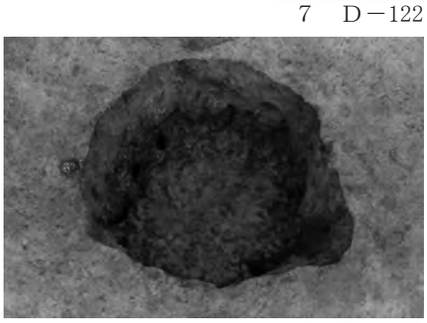
6　D－112



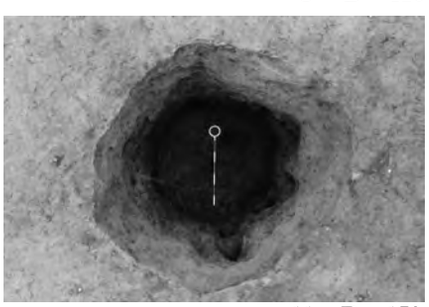
7　D－122

8　D－126

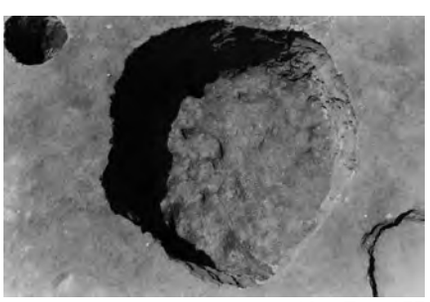
9　D－154



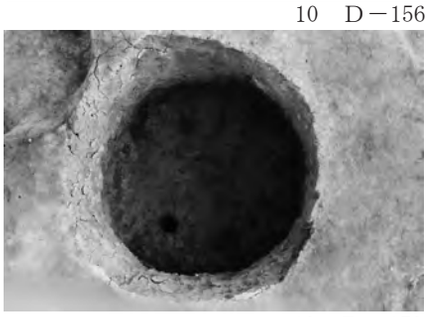
10　D－156



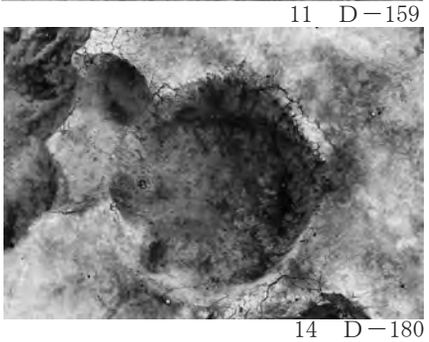
11　D－159



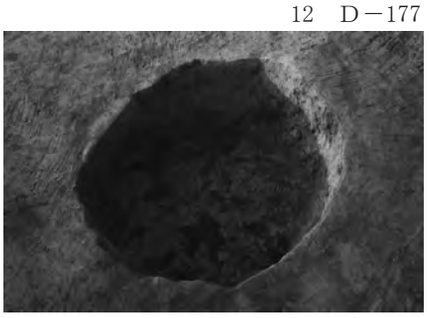
12　D－177



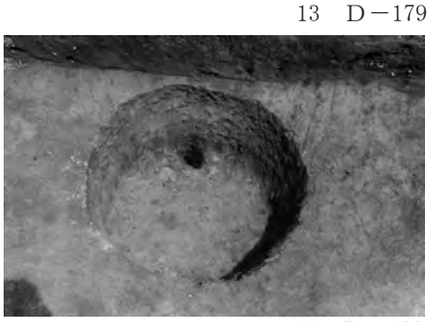
13　D－179



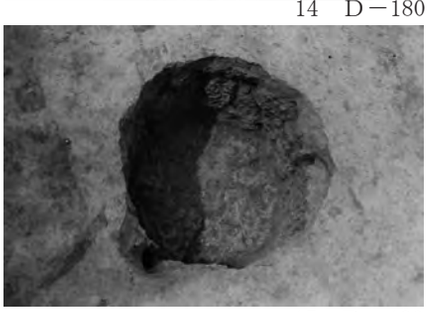
14　D－180



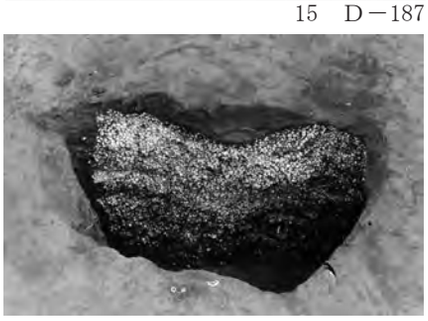
15　D－187



16　D－188



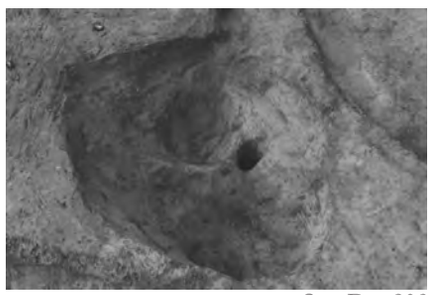
17　D－190



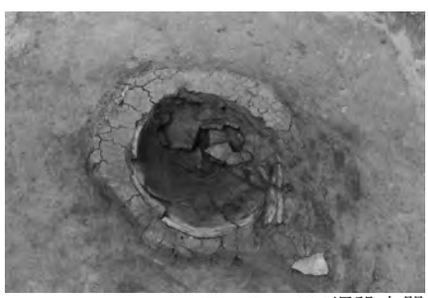
18　D－190貝層

1　D－190土器と貝層

2　D－204


3　D－206

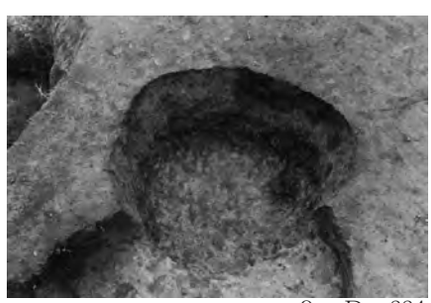
4　D－206埋設土器

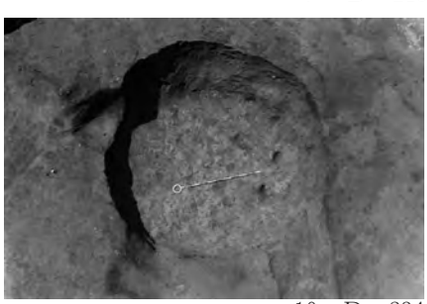

5　D－206埋設土器

6　D－210

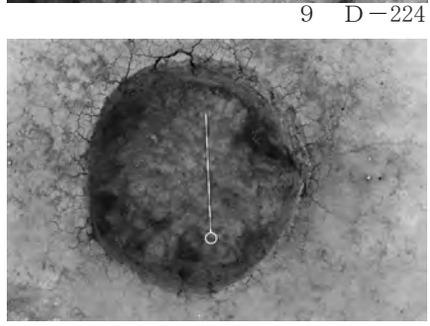
7　D－215

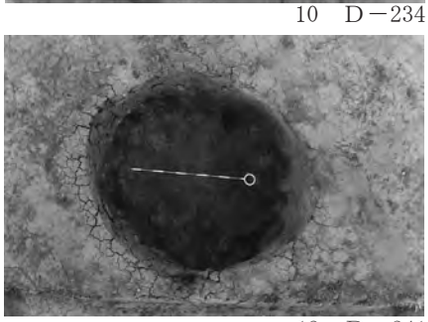
8　D－215貝層

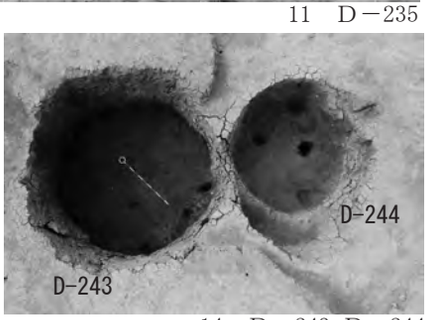

9　D－224


10　D－234

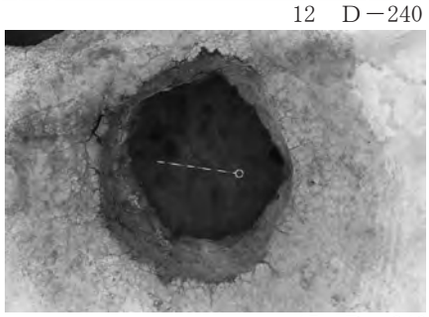
11　D－235

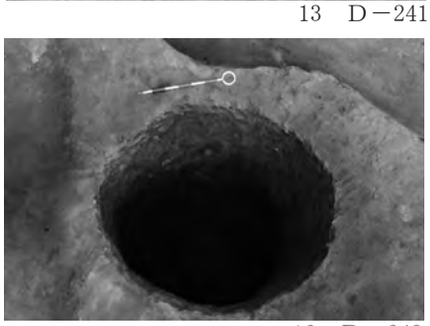

12　D－240

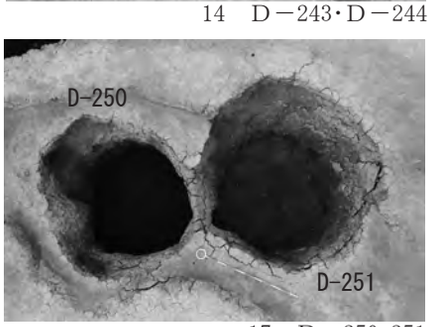

13　D－241



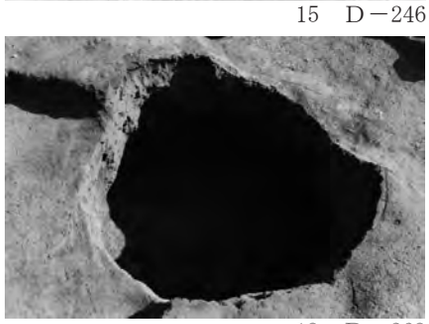
14　D－243・D－244


15　D－246

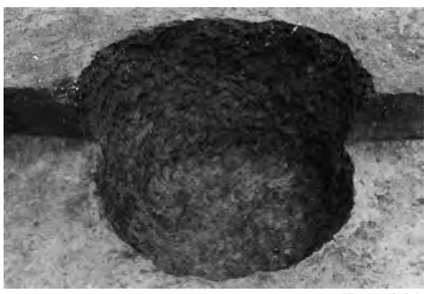

16　D－248



17　D－250・251


18　D－268

図版28

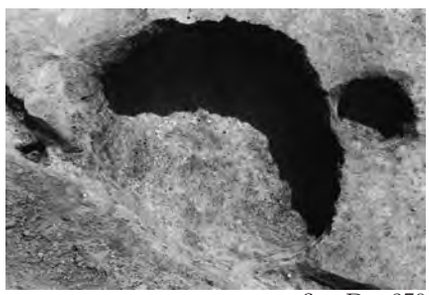

1　D－269

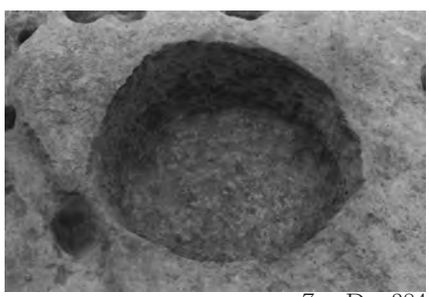
2　D－270

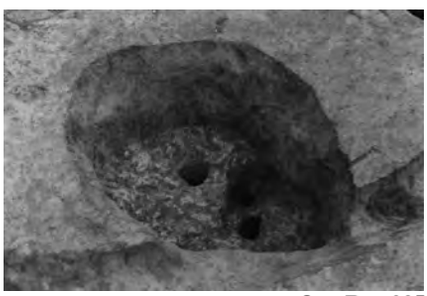
3　D－271

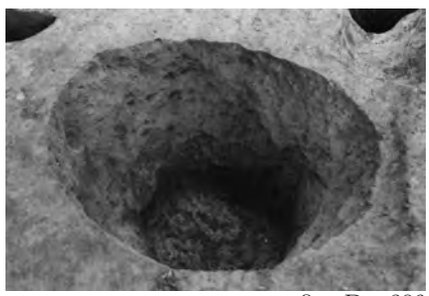
4　D－272

5　D－278


6　D－279

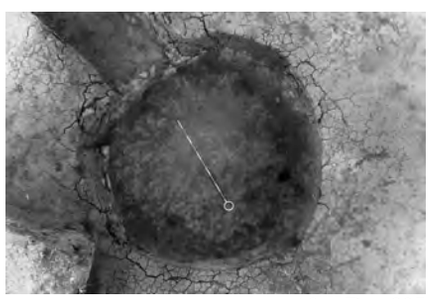

7　D－284

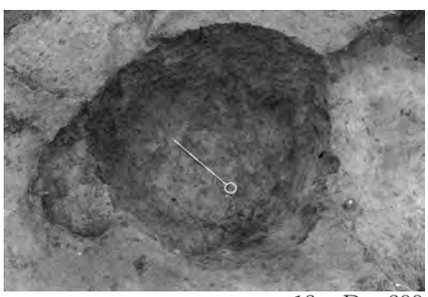

8　D－285


9　D－286

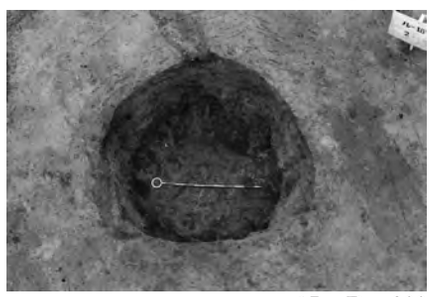
10　D－291

11　D－293


12　D－295

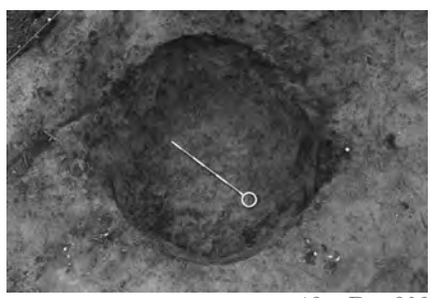

13　D－299

14　D－299貝層

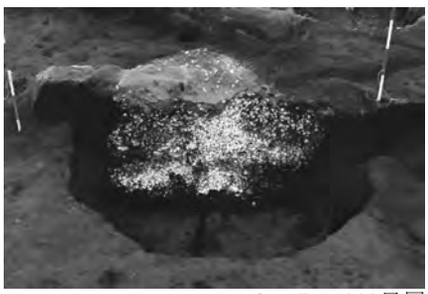

15　D－300

16　D－305

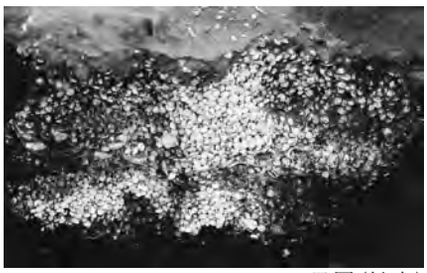
17　D－305貝層


18　D－306

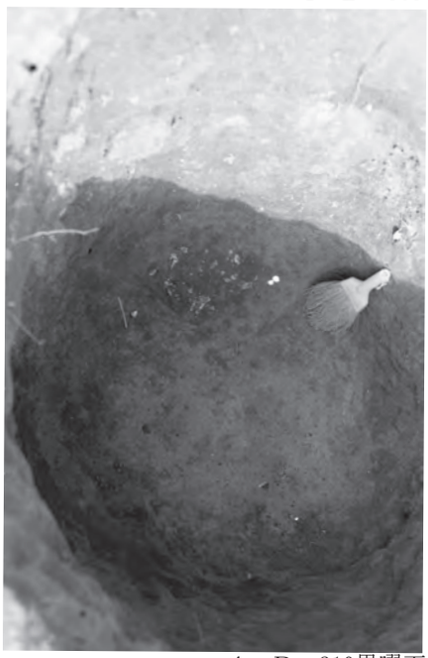
1　D－308



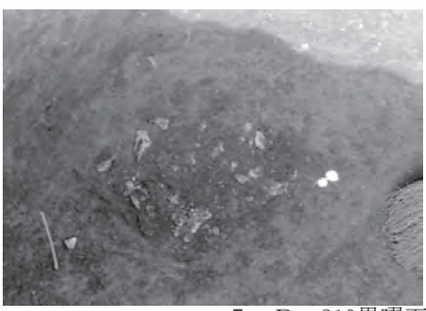
2　D－308貝層



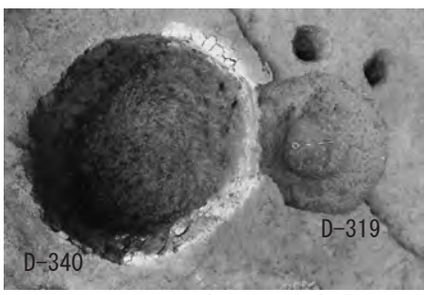
3　D－308貝層(拡大)



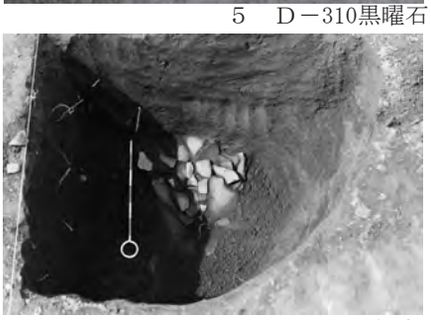
4　D－310黒曜石



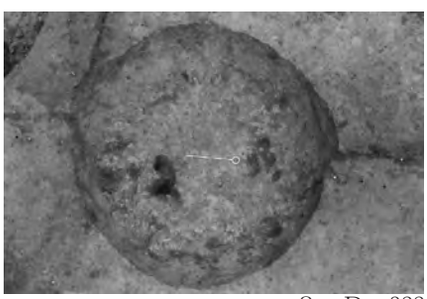
5　D－310黒曜石



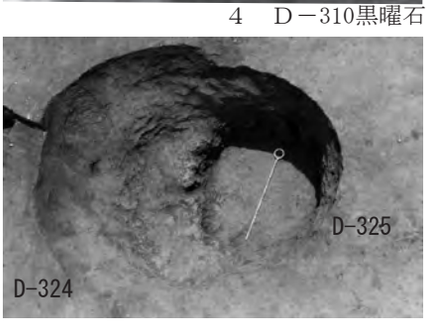
6　D－319・D－340



7　D－340黒曜石拡大



8　D－322

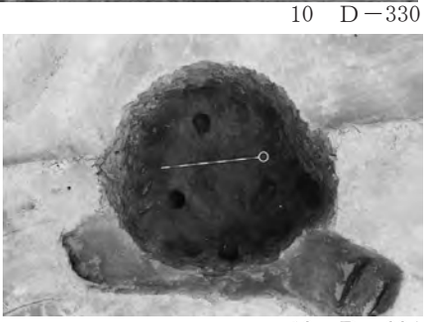


9　D－324・D－325

10　D－330

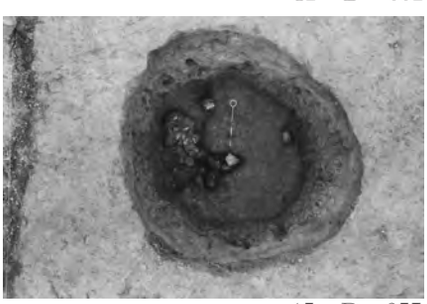
11　D－331

12　D－332

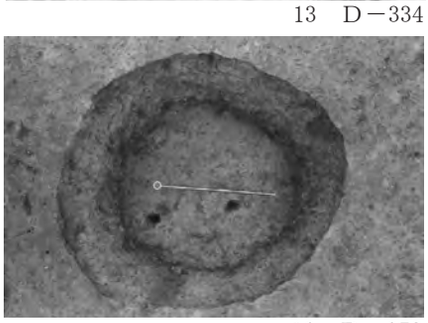


13　D－334

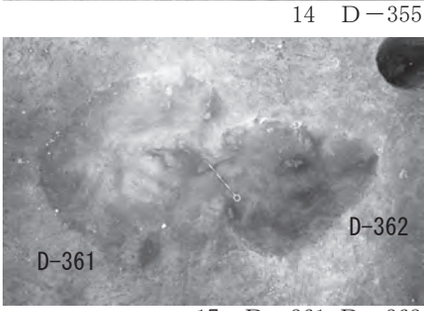
14　D－355



15　D－357



16　D－358



17　D－361・D－362

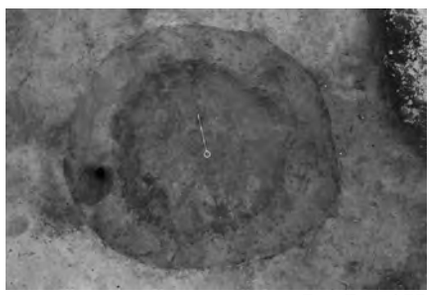
図版30

1　D－361埋設土器

2　D－361埋設土器

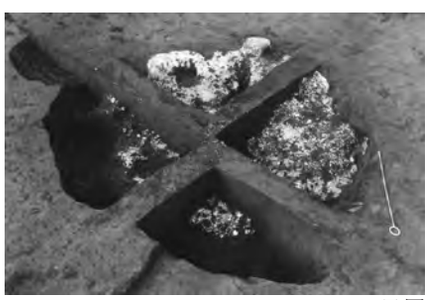
3　D－373

4　D－373貝層



5　D－375

6　D－380

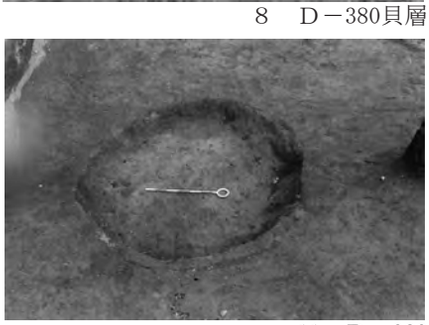


7　D－380貝層

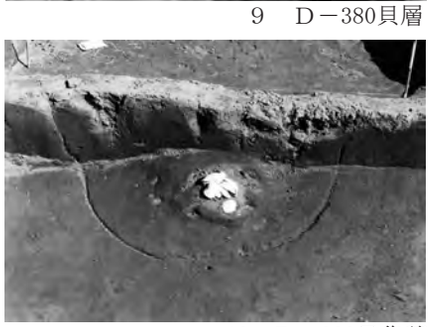
8　D－380貝層

9　D－380貝層

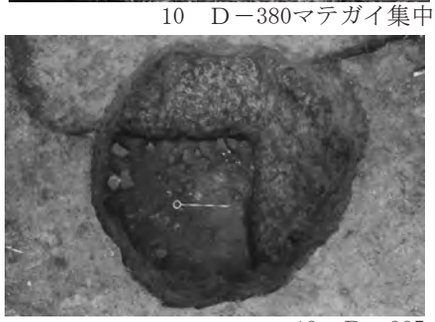
10　D－380マテガイ集中



11　D－383

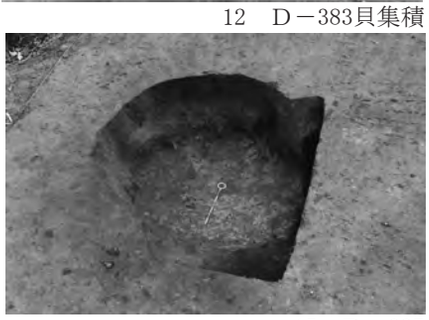


12　D－383貝集積



13　D－385

14　D－386

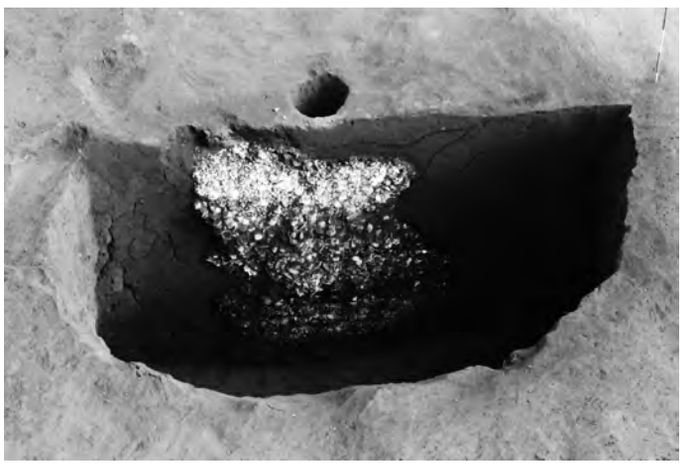


15　D－387

16　D－389

17　D－389貝層

18　D－390



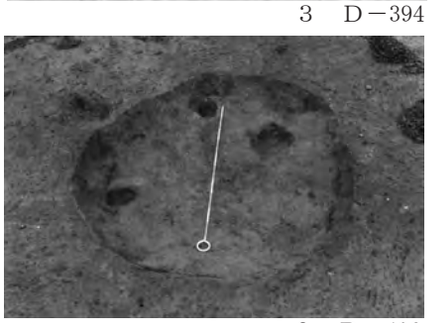
1　D－393貝層

2　D－393貝層

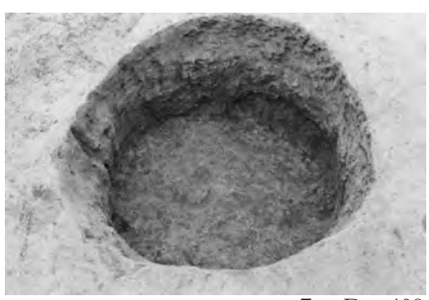
3　D－394

4　D－395

5　D－398

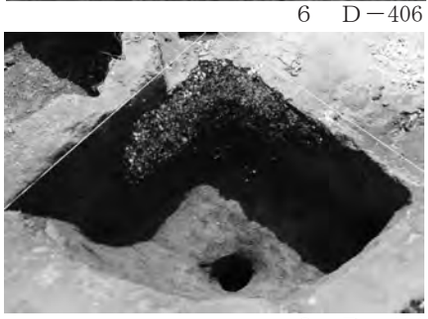


6　D－406

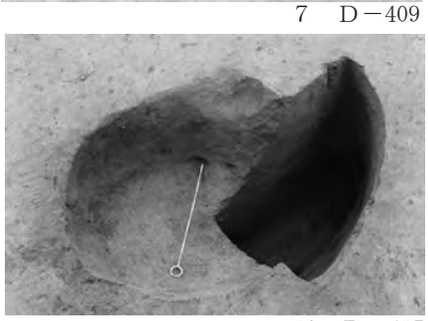


7　D－409

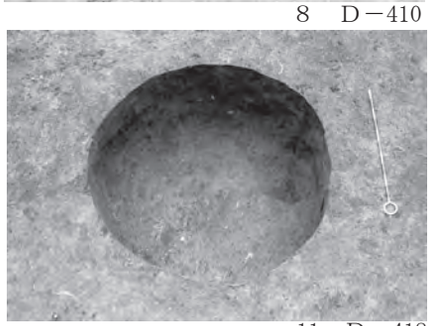
8　D－410



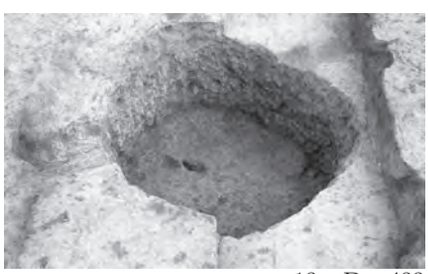
9　D－414



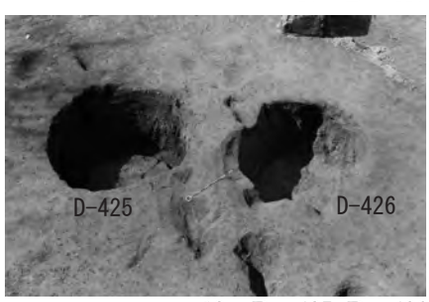
10　D－415



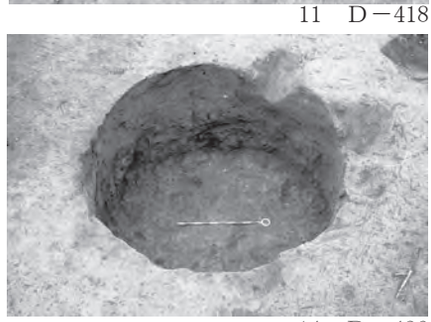
11　D－418



12　D－422



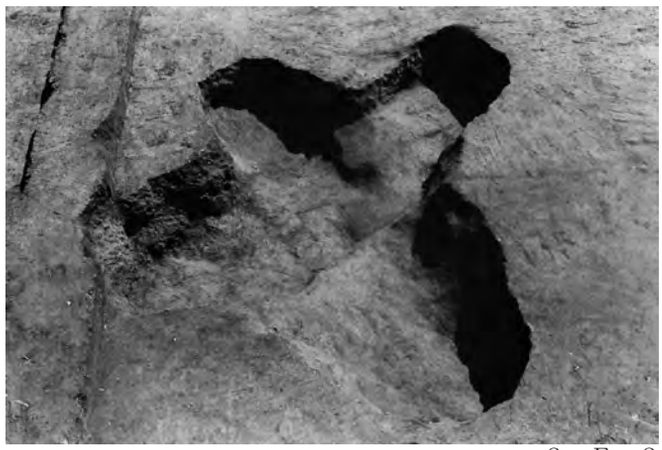
13　D－425・D－426



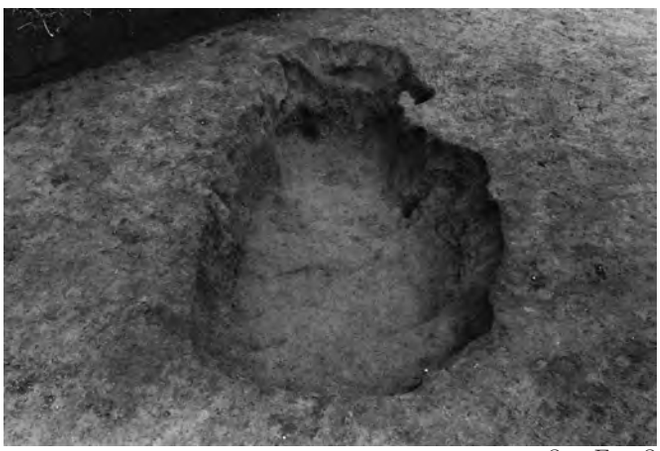
14　D－426

図版32

1　F－1



2　F－2



3　F－3

4　F－4

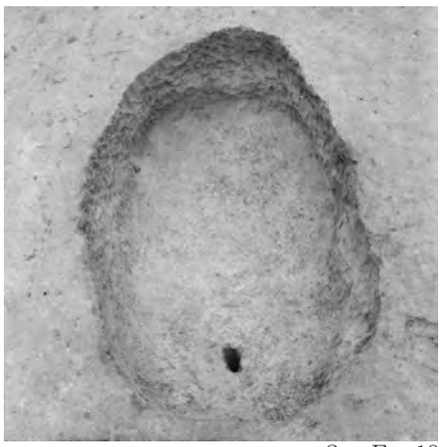
5　F－5

6　F－6・9

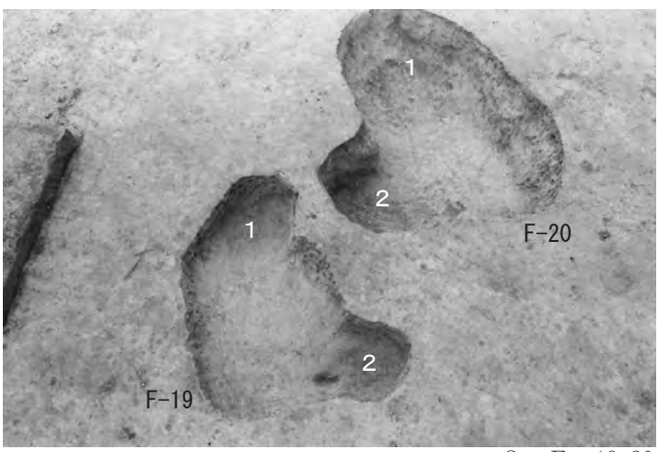
7　F－15

8　F－16

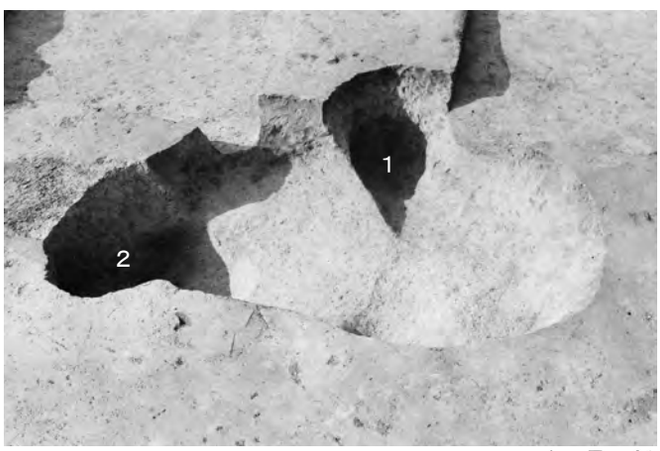
1　F－17



2　F－18



3　F－19･20



4　F－21

5　F－22

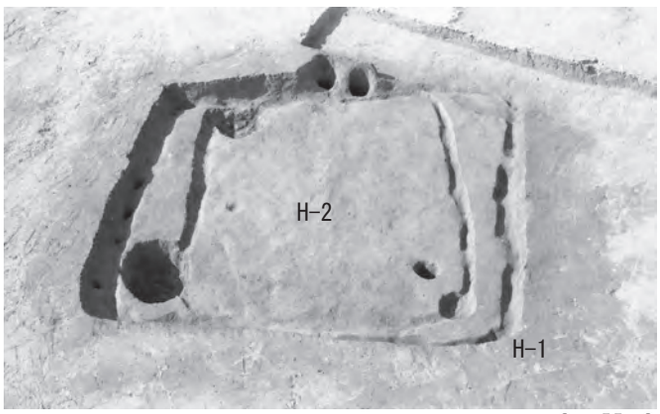
6　F－24

7　F－25

8　F－26

図版34
古代

1　H－1

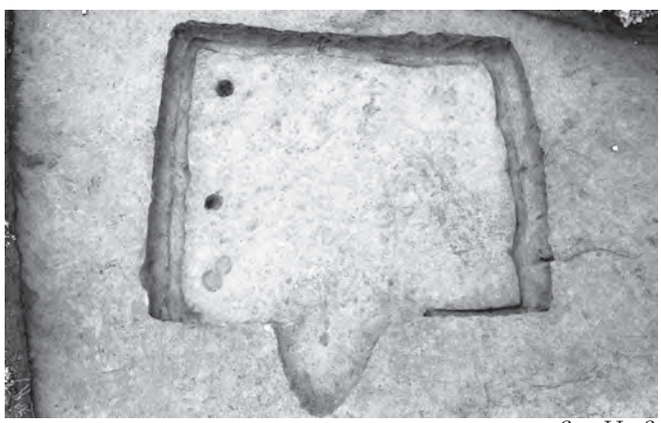


2　H－2

3　H－3

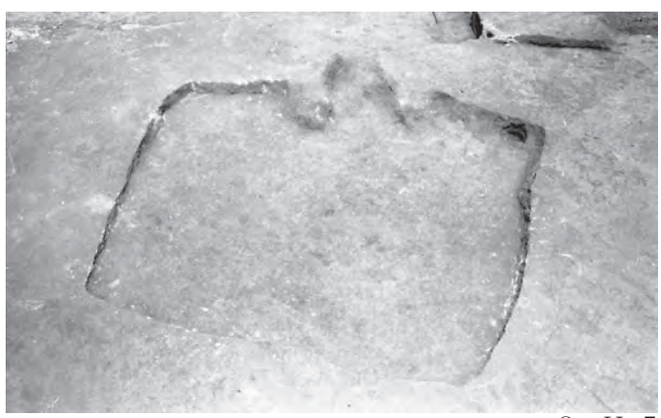
4　H－3焼土･炭化材分布

5　H－5



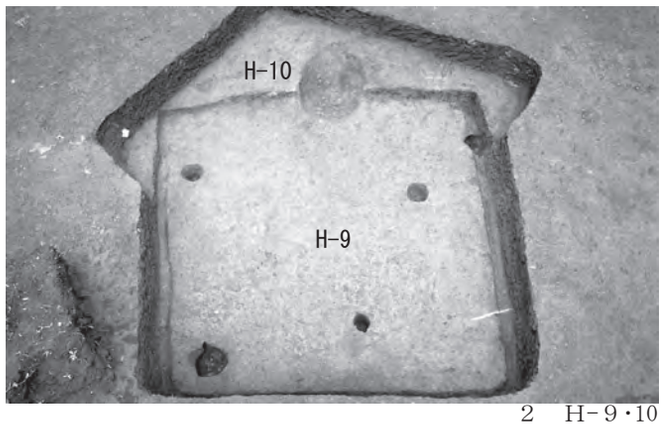
6　H－6

7　H－6焼土･炭化材分布

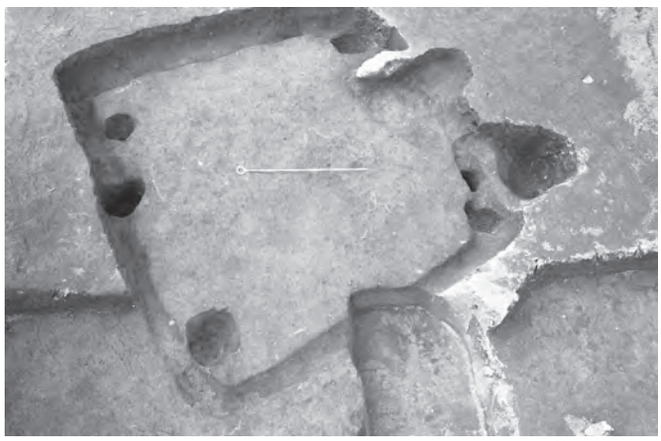


8　H－7

1　H-8

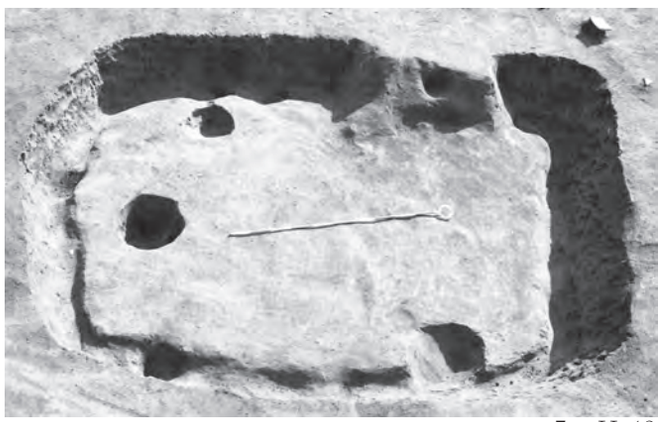


2　H-9・10



3　H-11

4　H-11遺物出土状況



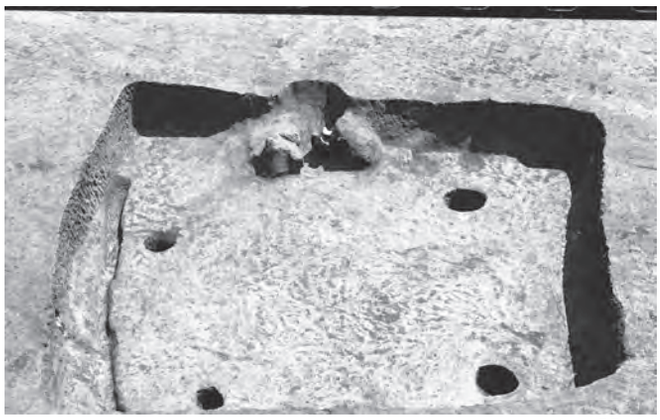
5　H-12

6　H-12遺物出土状況

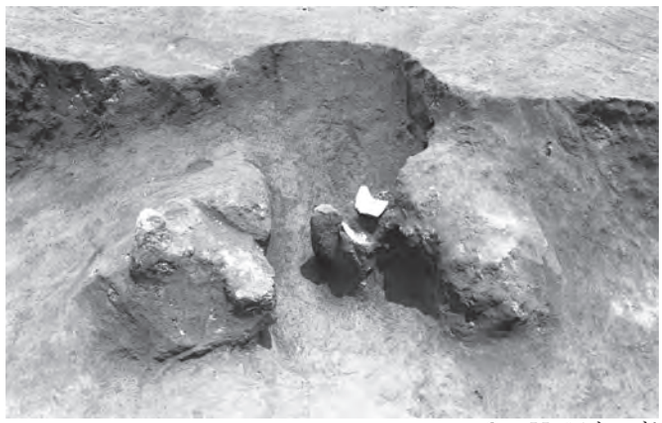
7　H-13

8　H-13遺物出土状況

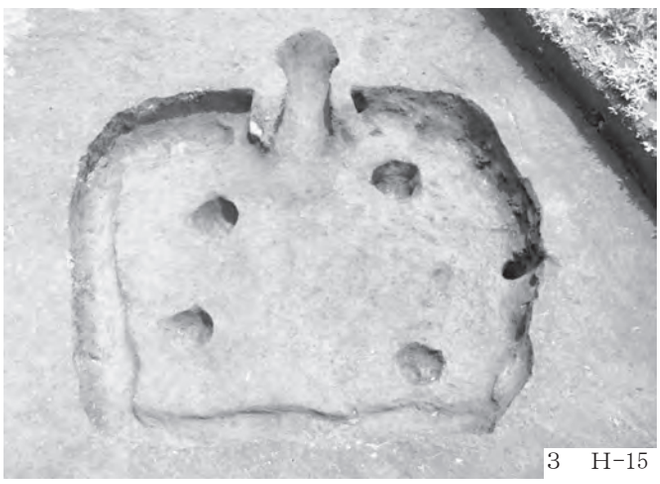
図版36



1　H-14



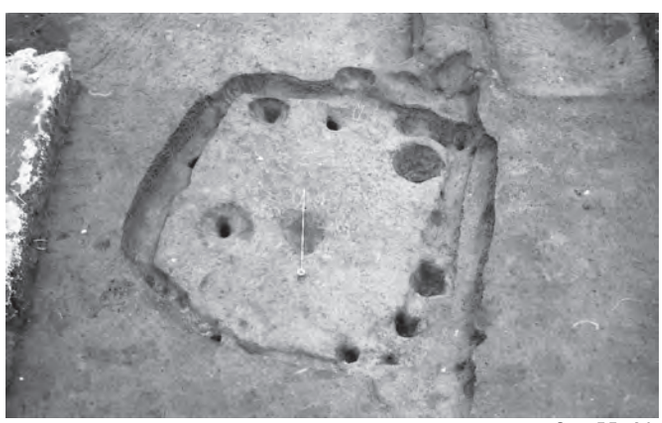
2　H-14カマド



3　H-15

4　H-16

5　H-16カマド



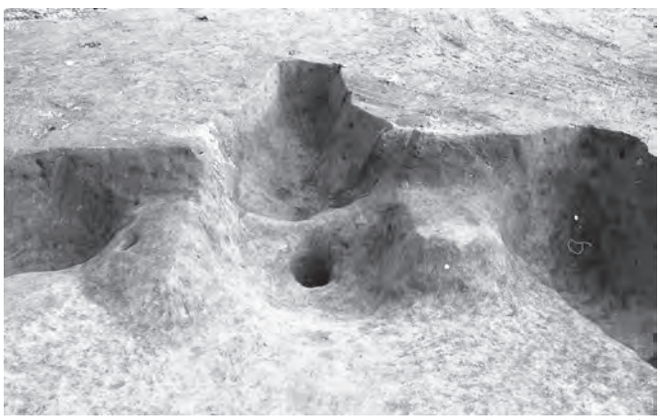
6　H-20

7　H-20カマド

8　H-20遺物出土状況

1　H-22

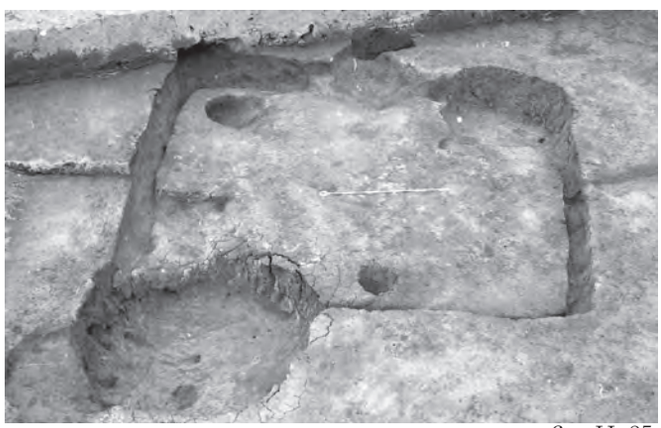
2　H-23



3　H-23カマド

4　H-24

5　H-24カマド

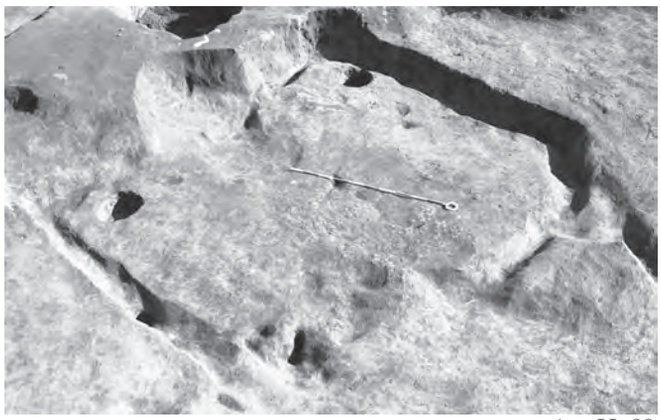


6　H-25

7　H-27

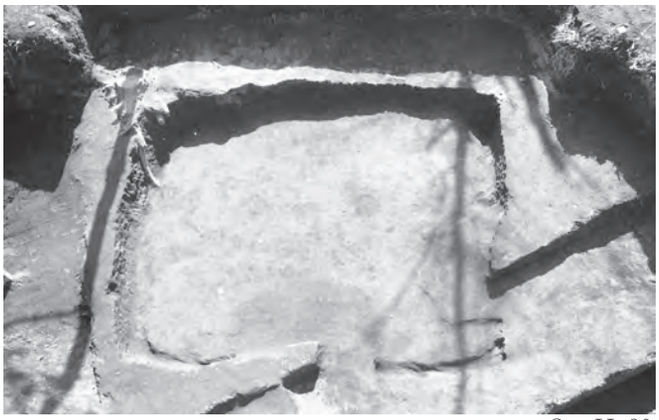
8　H-27焼土

図版38



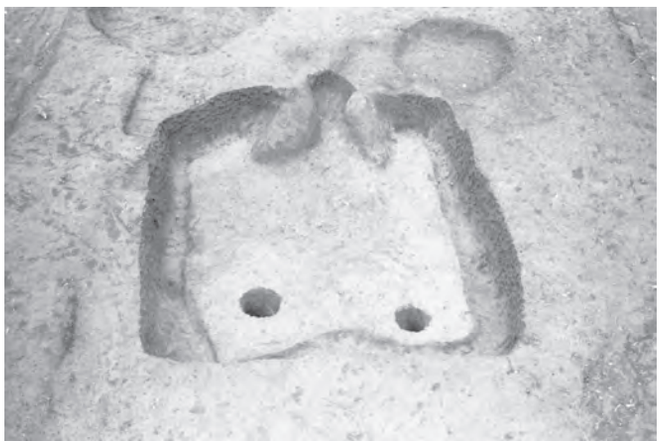
1　H-28

2　H-29

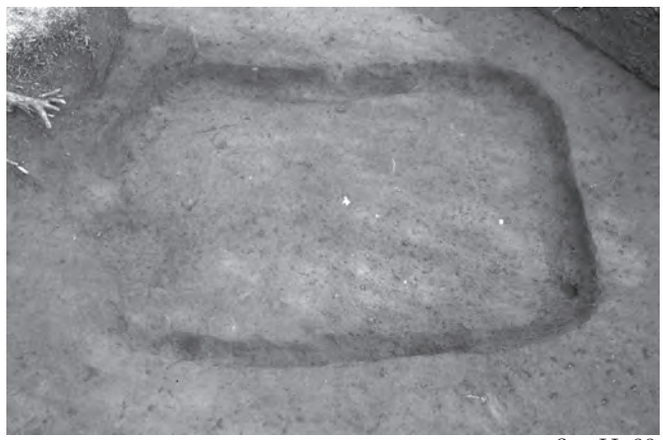


3　H-30

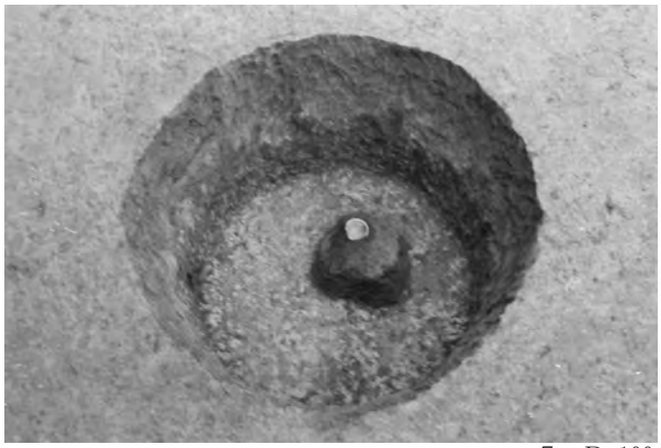
4　H-31



5　H-32



6　H-33



7　D-100

8　方形周溝

中・近世溝

1　M-4

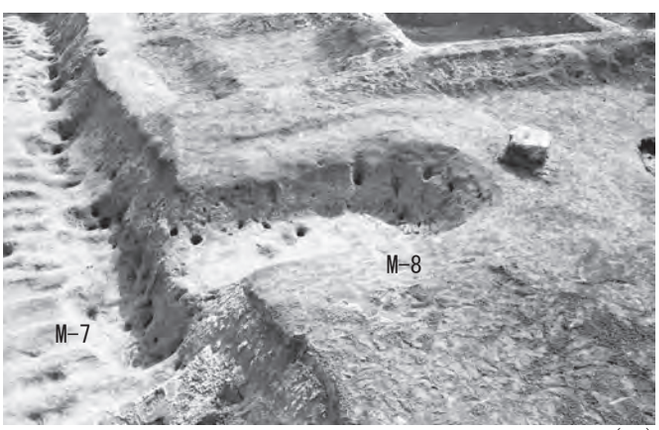
2　M-5

3　M-6

4　M-7（1）

5　M-7（2）

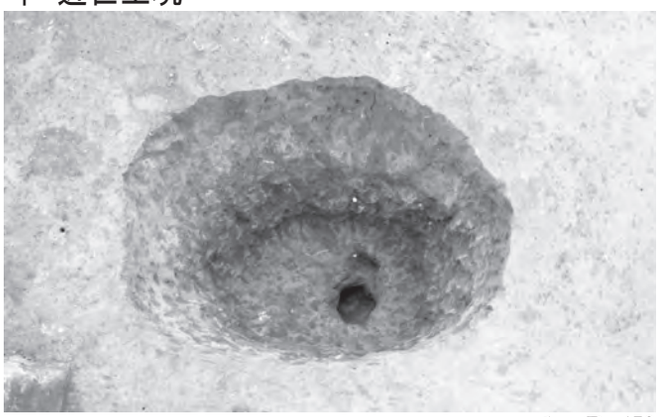
6　M-8（1）



7　M-8（2）

8　M-9

図版40
中・近世土坑



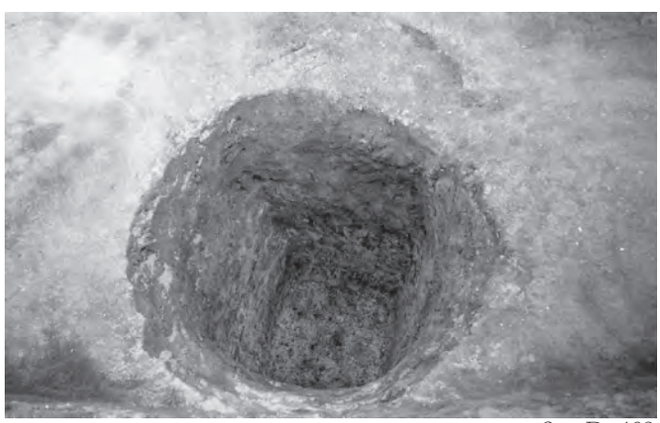
1　D-453

2　D-454

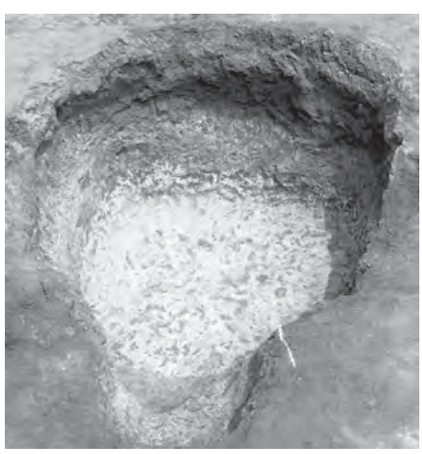
3　D-459

4　D-460

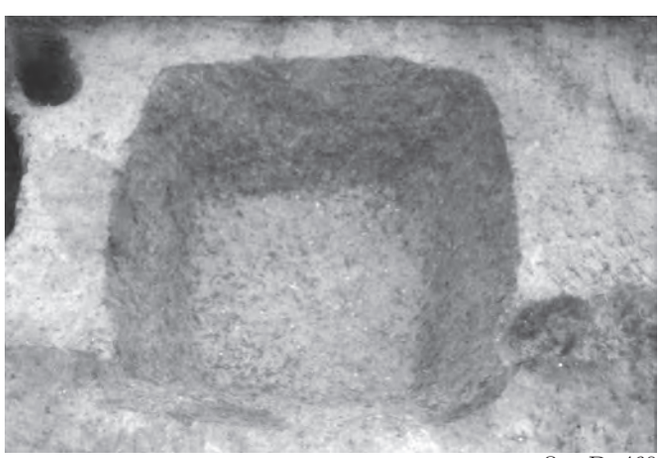
5　D-461



6　D-462



7　D-468



8　D-469

住居跡出土縄文土器

J2-1

J2-2

J2-9

J3-1

J12-1

J3-2

J4-1

J7-8

J13-1

J12-3

J12-27

J12-28

J14-3

図版42

J17-1

J17-4

J18-1

J18-4

J26-1

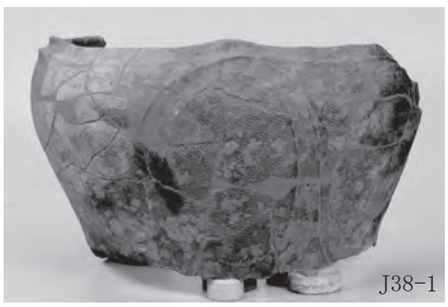
J18-12

J27-1

J31-1

J36-1

J41-3


J38-1

J38-22

J41-1

J41-4

J43-2

図版43

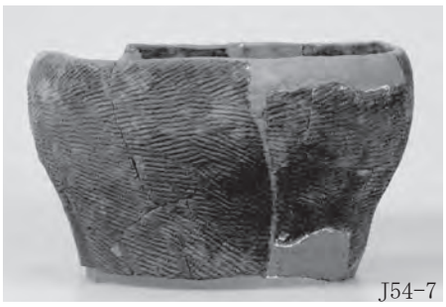
J46-1

J48-1

J48-18

J50-2

J54-1

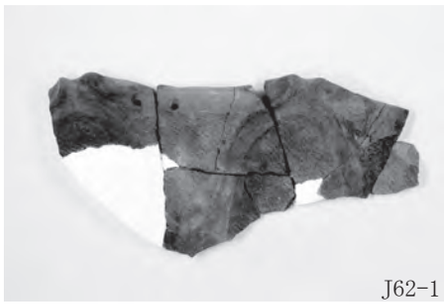

J54-7

J59-1

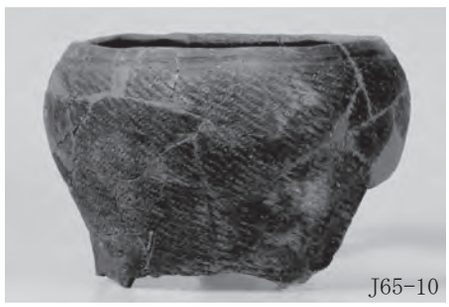
J59-2

J59-3

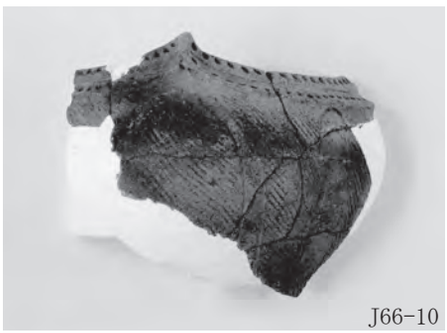
J61-1


J62-1

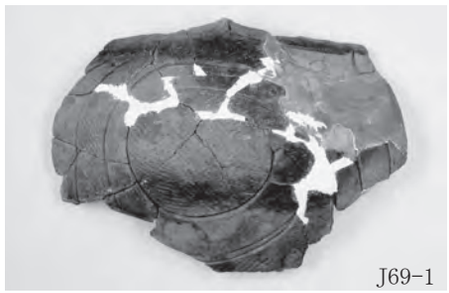
J63-1


J65-10

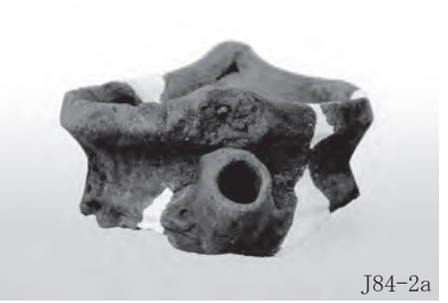
J65-12


J66-10

図版44


J69-1

J73-6

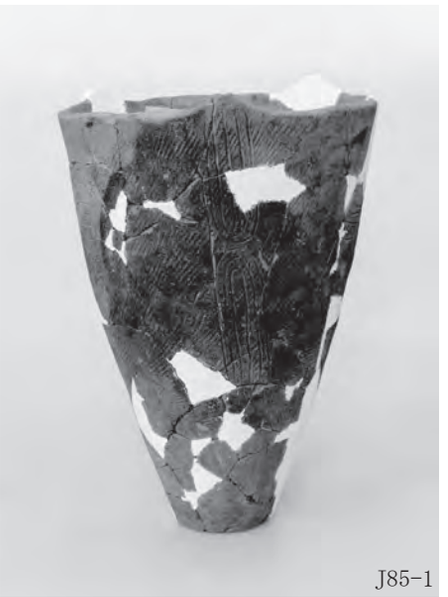

J84-2a

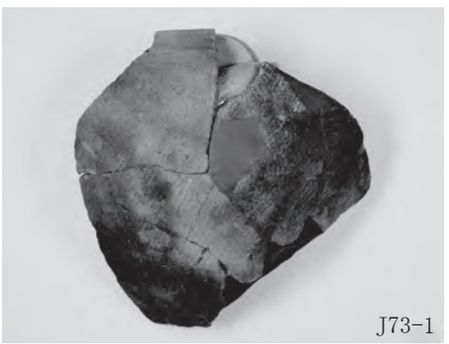
J71-1

J74-1

J84-2b

J74-21


J85-1


J73-1

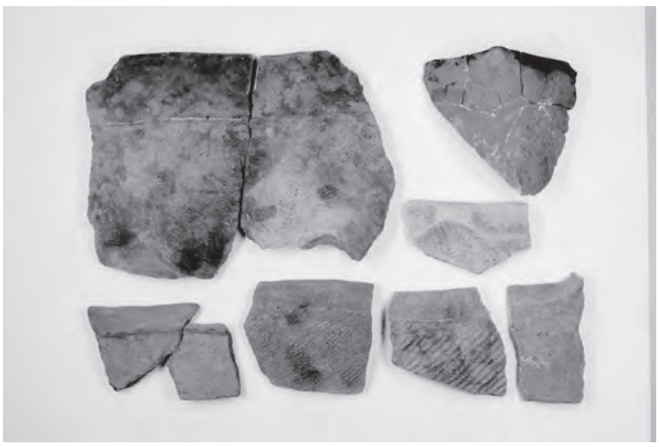
J73-4

J79-1

1　J－2

2　J－12

1　J－12



2　J－12

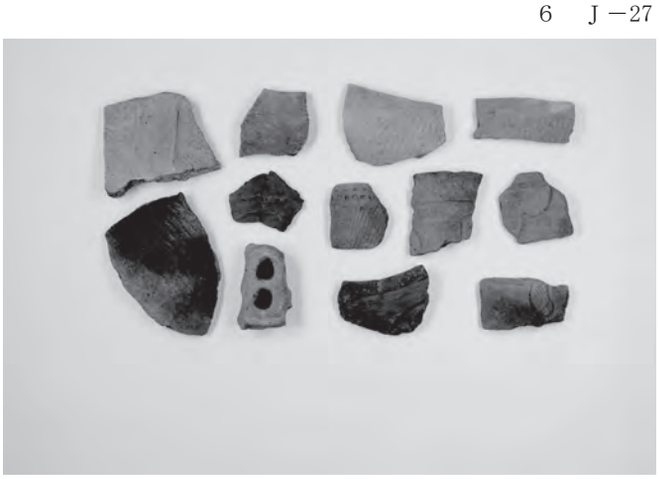
3　J－12

4　J－18

5　J－26

6　J－27

7　J－37



8　J－37

図版46

1　J－38

2　J－38

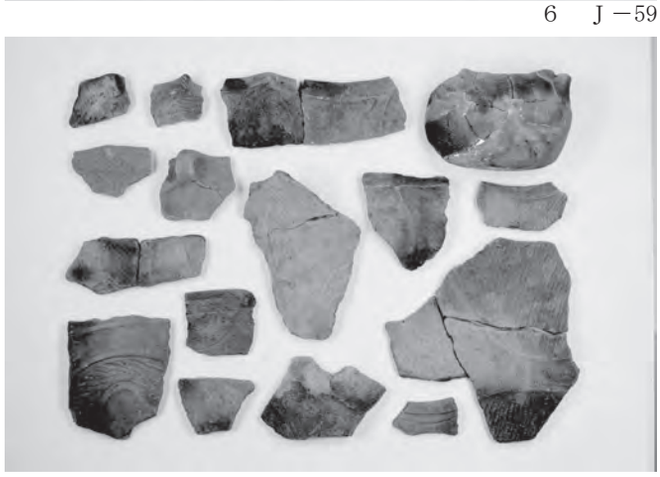
3　J－41

4　J－48

5　J－54

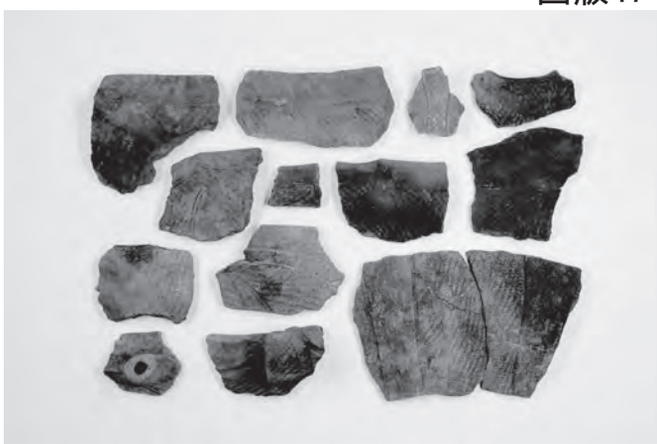
6　J－59

7　J－62



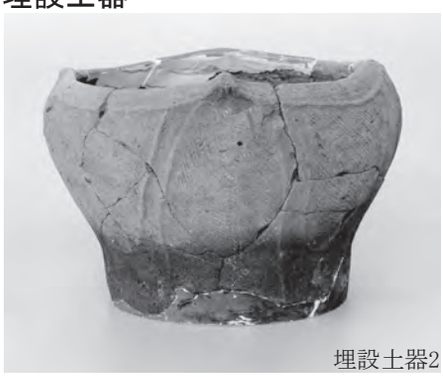
8　J－69

1　J－71

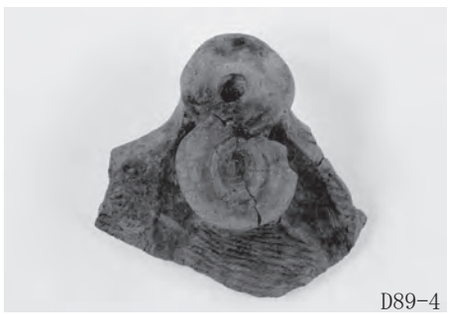


2　J－74

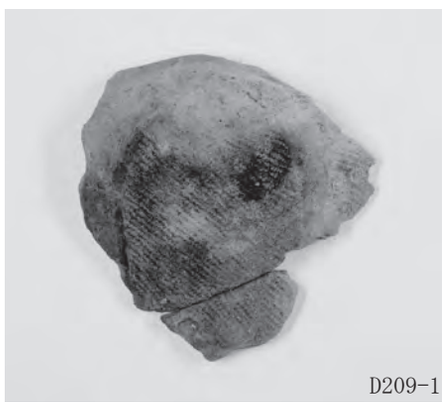
埋設土器



埋設土器2



D89-4

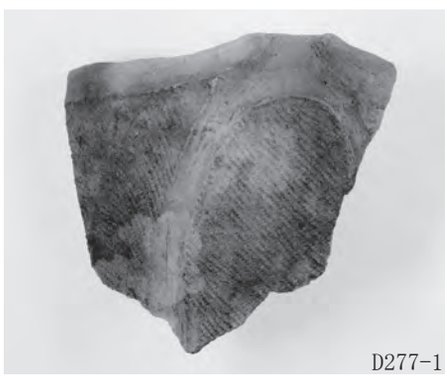


D209-1

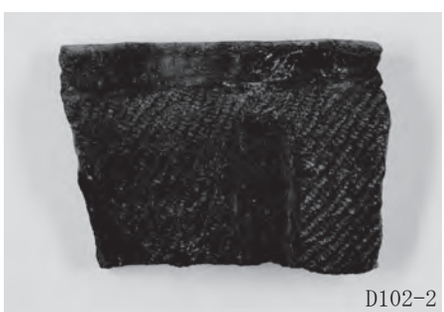
土坑出土縄文土器

D79-1

D179-1

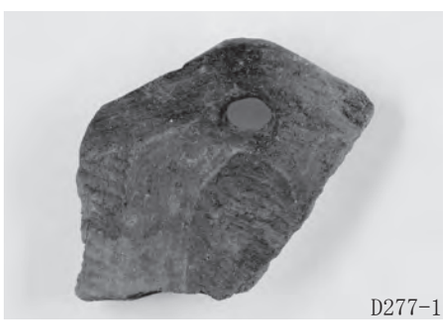


D277-1



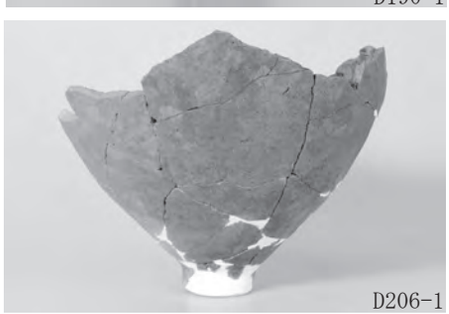
D102-2

D190-1



D277-1

D102-3



D206-1

D293-2

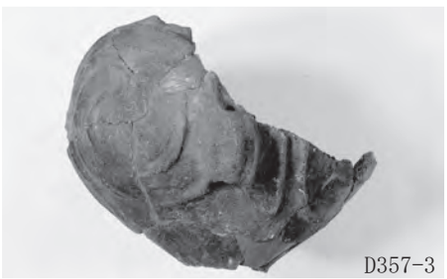
図版48

D293-3

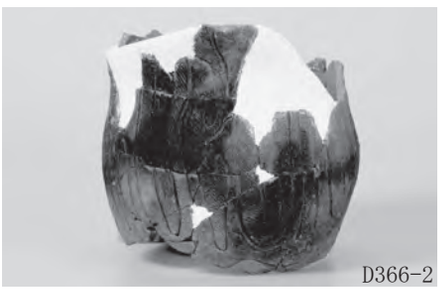
D313-7

D422-2

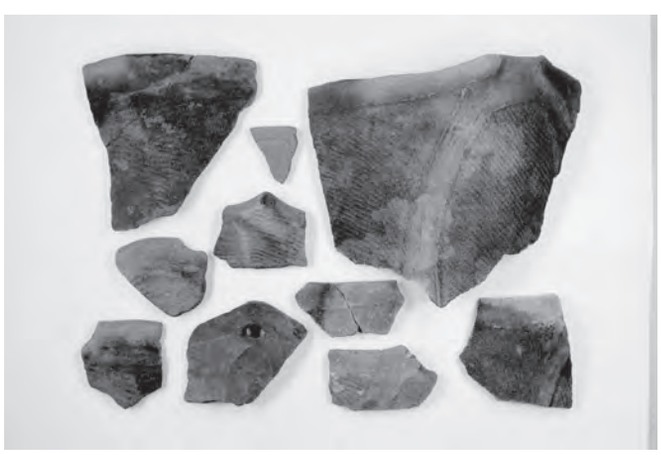
D313-1


D357-3

D418-1

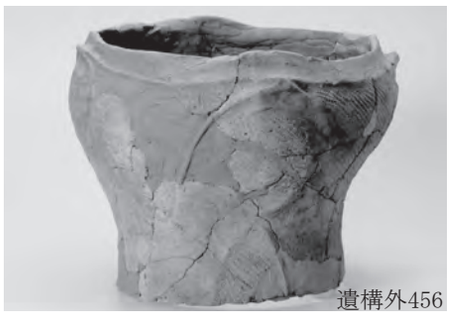

D366-2

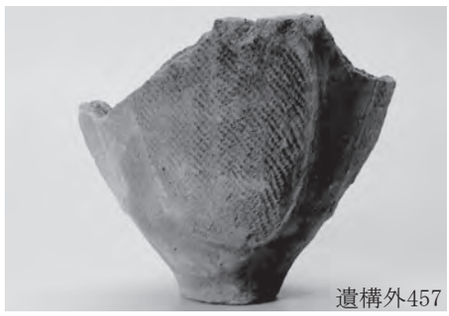
1　D－179

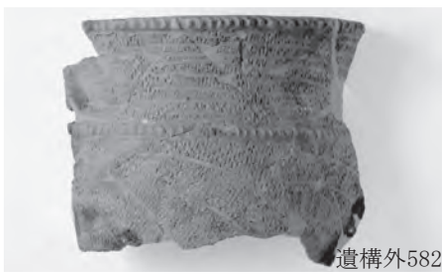

2　D－277

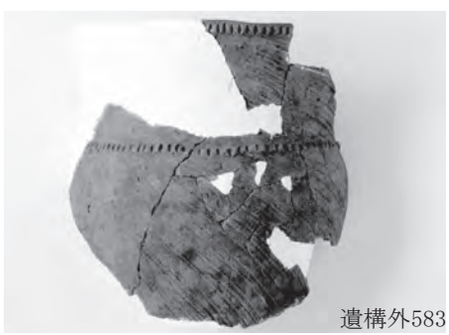
3　D－277

遺構外出土縄文土器


遺構外456

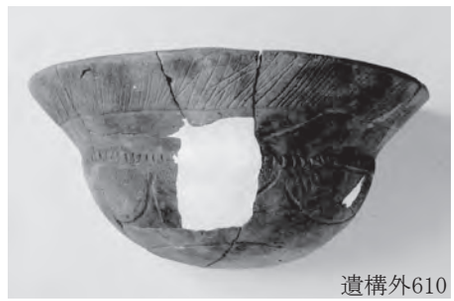

遺構外457


遺構外582


遺構外583

遺構外475a

遺構外475b


遺構外610

遺構外611

遺構外612

1　遺構外第２群

2　遺構外第３群

3　遺構外第４群

図版50

1　遺構外第５群

2　遺構外第６群①

3　遺構外第６群②

4　遺構外第７群①

5　遺構外第７群②

6　遺構外第７群③

7　遺構外第７群④

8　遺構外第７群⑤

1　遺構外第８群

2　遺構外第９群①

3　遺構外第９群②

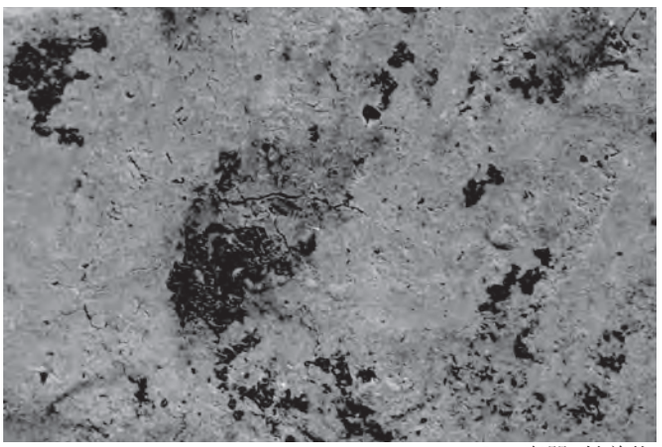
4　遺構外第９群③

5　炉穴

図版52

1　土偶･ミニチュア

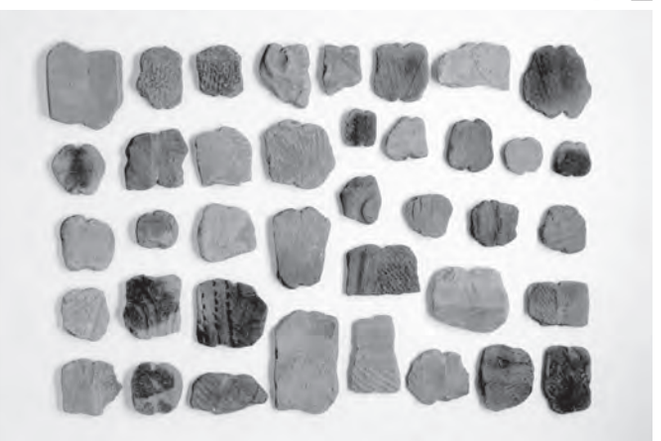
2　容器



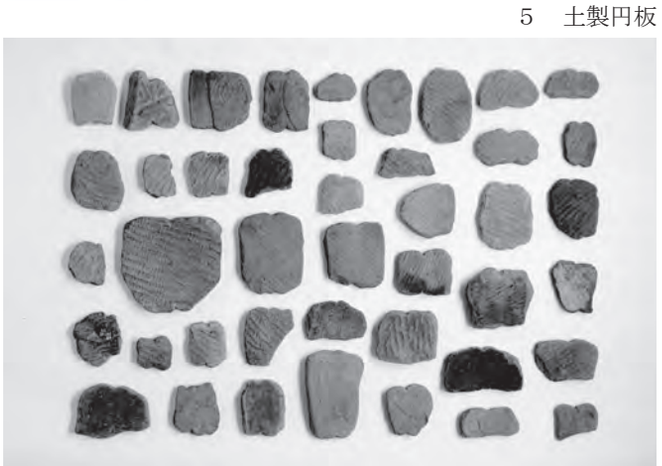
3　容器･付着物

4　蓋

5　土製円板



6　土器片錘 1～39



7　土器片錘 40～82

8　焼成粘土塊

1　磨製石斧 1～14･16

2　磨製石斧 15･17～32

3　打製石斧 1～15

4　打製石斧 16～30

5　打製石斧 31～46

6　打製石斧 47～67

7　磨石類 1～16

8　磨石類 17～31

図版54

1　磨石類 32～42･44～46

2　磨石類 43･47～60

3　磨石類 61～76

4　磨石類 77～96

5　磨石類 97～116

6　磨石類 117～142

7　磨石類 143～165

8　砥石 1～23

1　砥石 24～41

2　石皿・台石 1～4

3　石皿・台石 5～10・12

4　石皿・台石 11・13～16

5　石皿・台石 17～20

6　石皿・台石 21～29

7　石皿・台石 30～45

8　石皿・台石 46～55

図版56

1　石皿・台石 56～61

2　石皿・台石 62～64

3　石皿・台石 65～73

4　石鏃 1～43

5　石鏃 44～80

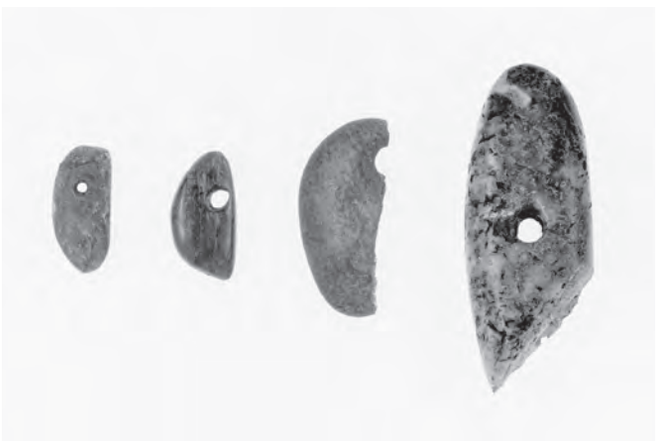
6　石鏃未成品 1～7・9・10・12～51・53

7　石鏃未成品 54～64・66～88・90～92

8　その他剥片石器

1　軽石製品 1～21･23･24

2　軽石製品 22･25～41



3　玉類

4　石棒 1

5　石棒 2･3･5･6･8･9

6　石棒 4･7･10～12

7　石棒 13～39･41～43

8　石棒 40･44～56

図版58

弥生土器

H4-8

H4-11

古代住居

H1-1

H4-4

H4-12

H1-2

H4-5

H6-1

H4-1

H4-9

H6-2

H4-2

H6-3

H4-3

H4-10

H9-1

図版59

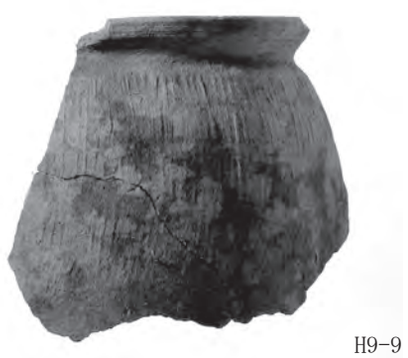
H9-2

H9-3

H9-4

H9-6

H9-7


H9-9

H11-2

H12-1

H12-2

H12-4

H12-5

H12-7

H12-8

H12-9

H13-3

H12-10

H14-1

H14-2

H14-3

H14-6

H14-8

図版60

H16-10

H16-13

H18-1

H20-1

H20-2

H24-12

H20-3

H21-1

H24-1

H24-2

H25-1

H26-1

H26-3

H27-1

H27-2

H27-3

H27-4

H28-1

H28-2

H28-3

H28-4

図版61

H28-7

H29-2

H29-3

H30-2

H30-3

H31-4

H31-1

H31-2

H31-6

H31-8

H31-15

H31-17

H31-16

H32-1

H32-5

H33-1

H33-2

H33-4

図版62

古代土器　土坑

D100-1

D100-2

古代土器　遺構外

14

21

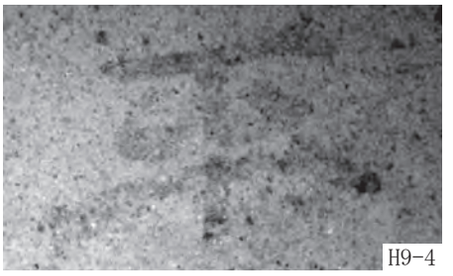
50

23

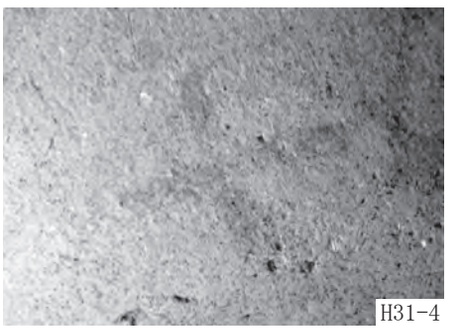
38

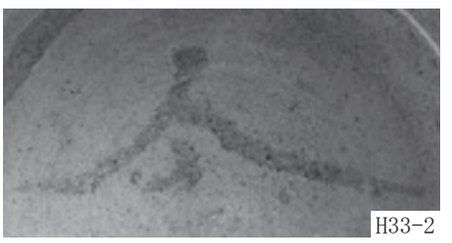
52

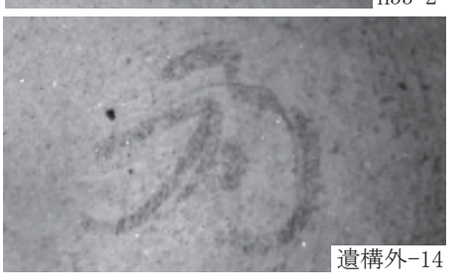
古代土器　墨書赤外線


H9-4

H21-1


H31-4


H33-2


遺構外-14

古代土製品

1　掲載資料（1）

3　掲載資料（2）356図

3　掲載資料（3）付表4-4

4　未掲載（1）

5　未掲載（2）

6　未掲載（3）

7　未掲載（4）

8　未掲載（5）

図版64

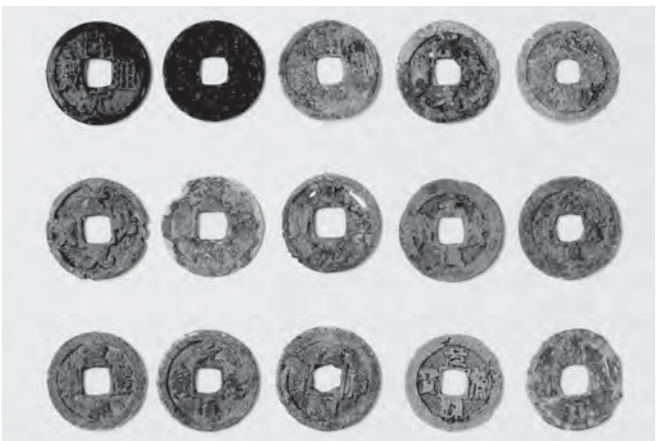
1　未掲載（6）

2　砥石（1）1～14

3　砥石（2）15～33

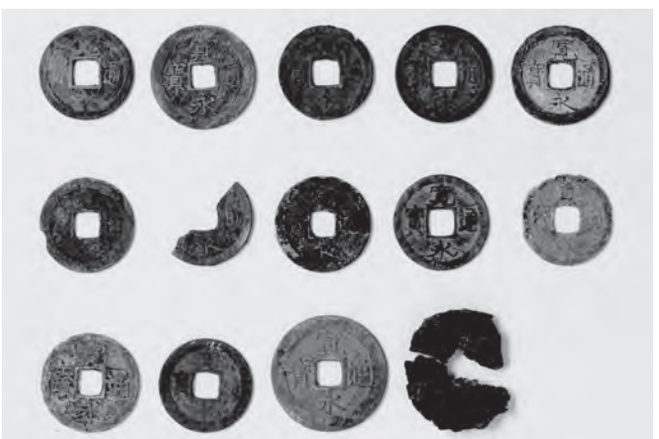
4　砥石（3）34～48

5　砥石（4）49～52･54　石臼53



6　銭貨（1）1～15

7　銭貨（2）16～30



8　銭貨（3）31～44

報告書抄録

ふりがな	ちばしもちがさきいせき
書名	千葉市餅ヶ崎遺跡－千葉市動物公園第Ⅰ期工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－
編著者名	西野雅人・尾崎沙羅
編集機関	千葉市教育委員会
所在地	〒260-8730　千葉市中央区問屋町1番35号　千葉ポートサイドタワー11･12階　　TEL.043-245-5960
発行年月日	2019年3月29日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査年次	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	(世界測地系)					
餅ヶ崎遺跡（もちがさきいせき）	千葉市若葉区（ちばしわかばく）源町（みなもとまち）280他	12104	3-002	35°64′02″	140°12′76″	昭和54	1979年7月2日～1979年11月30日	4,000㎡（確認）	千葉市動物公園第Ⅰ期工事に伴う確認調査・本調査
						昭和54	1979年12月3日～1980年3月31日	3,000㎡（本調査）	
						昭和55・56	1980年4月7日～1981年9月30日	17,000㎡（本調査）	
						昭和57	1982年4月1日～1982年9月30日	500㎡（確認）	
						昭和57・58	1982年4月1日～1984年3月31日	36,900㎡（本調査）	
						昭和59	1984年4月1日～1984年12月31日	9,890㎡（本調査）	
						昭和60	1986年1月6日～1986年3月3日	6,130㎡（本調査）	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
餅ヶ崎遺跡	包蔵地	旧石器時代	石器ブロック13	ナイフ形石器・尖頭器・掻器	縄文時代中期後葉～後期前葉の集落をほぼ全掘した。住居跡85軒・小竪穴110基、遺構内貝層56か所などを検出している。加曽利ＥⅣ式～称名寺式土器は県内有数の良好な資料である。中期大型貝塚の消滅後、後期大型貝塚の形成前の集落としては規模が大きく、各種石器や石鏃製作関連資料、石棒、貝層の分析成果などこの時期の生産活動や社会を検討するための資料も豊富である。
	貝塚・集落跡	縄文時代	早期後葉-炉穴37、中期～後期-住居跡85・小竪穴110・土坑185・遺構内貝層56	縄文土器（早期～晩期）、土製品（土偶･容器･ミニチュア土器･土器片円板・土器片錘）、石器・石製品（磨製石斧・打製石斧・磨石類・砥石・石皿台石・石鏃・錐・軽石製品・玉・石棒）、貝製品（貝刃）、貝・骨	
	墳墓	奈良時代	方形周溝状遺構1	土師器	
	集落跡	平安時代	住居跡33、土坑2	土師器・須恵器	
	包蔵地	中・近世	竪穴遺構1･地下式坑3･土坑9・溝7	土師器・須恵器	

要約	千葉市動物公園の造成工事に伴って、餅ヶ崎遺跡のほぼ全面を発掘調査した。遺構・遺物の主体を占めるのは縄文中期後葉～後期前葉で、住居跡85軒・小竪穴110基、遺構内貝層56か所を検出している。土器の主体を占める加曽利ＥⅣ式～称名寺式は、編年的な位置づけをめぐって調査当時から注目されており、今日においても県内有数の良好な資料である。東京湾東岸の貝塚集中地帯において、この時期は、中期の集中居住・定住型の集落群・社会が崩壊して、再び後期に復活するまでの間にあたる。分散居住・遊動型の集落が広域に点在することを特徴とするが、餅ヶ崎遺跡はその後半期では大規模である。貝層の形成は活発であり、後期大型貝塚の形成を考える上できわめて重要な資料となり得る。各種石器や石鏃製作関連資料、石棒も豊富であり、この時期の生産活動や社会を検討するための資料も多い。これ以外の時期では、旧石器時代の石器群、縄文早期前葉・撚糸文系土器、平安時代の集落、中・近世の集落に関わる資料を得ることができた。

千葉市餅ヶ崎遺跡

―千葉市動物公園第Ⅰ期工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―

平成 31 年 3 月 29 日発行

発　　行　千葉市教育委員会
千葉市中央区問屋町 1 番 35 号
千葉ポートサイドタワー 11・12 階
TEL：043-245-5962（文化財課）

編　　集　千葉市埋蔵文化財調査センター
千葉市中央区南生実町 1210
TEL：043-266-5433

印　　刷　株式会社　正文社
千葉市中央区都町 1-10-6